若松賤子集

巻三

名物目録

巻三

益軒全集卷之三

凡例

一此卷には初學訓五卷、大和俗訓八卷、和俗童子訓五卷、五常訓五卷、文訓四卷、武訓二卷、君子訓三卷、家道訓六卷、養生訓八卷、養生訓附錄一卷、樂訓三卷、神祇訓一卷、女大學一卷、益軒先生與宰臣書一卷、克明抄一卷、書學答書一卷、心畫規範一卷、諺草七卷、家訓一卷、都べて十八種六十四卷を收む。

一初學訓は初學者の爲に學問修身の道を說ける書なり。成るの年月は記錄を缺くも、他の諸教訓書と同じく晩年の著なるは疑ふべからず。竹田定直の序あり。

一大和俗訓は寶永五年七十九歲の時に成る。世俗漢字を解する力なく、自ら聖賢の書を讀む能はざる者、日常人倫の道を知ること無きを憂へて此著あり。竹田定直の序並に自序あり。

一和俗童子訓は寶永七年八十一歲の時に成る。兒童の教育法を說くこと最も親切周到、女子の教育法の如きも書中特に節目を設けて之を述ぶ。自序あり。

一五常訓は正德元年八十二歲の時に成る。人間五常の道を說くこと詳密なり。竹田定直の序あり。

一文訓は讀書講學の必要並に方法を說きて文藝の事に及べり。成るの年月は明ならず。竹田定直の序あり。

一武訓は武と云ふ意義より說き起して、凡そ武人に必要なる道を述べ、用兵陣法の事に及べり。成るの年月また明ならざるも、蓋し文訓と同じく晩年の著なり。或は文訓と武訓とを合せて文武訓といふ。

一君子訓は主として國君王侯たる人に關する敎訓にして、國を治め民に臨むの道を述べたる書なり。君子は即ち在上の義なり。元祿十六年七十四歲の時に成る。

一家道訓は日常家を治め財を理むるの道を述べたる書なり。正德元年八十一歲の時になる。

一養生訓は人間衞生の道を說くこと詳密にして醫業鍼灸の事に及ぶ。昔より汎く行はれたる著名の書なり。正德三年八十四歲の時に成る。

一養生訓附錄は後人杉本義篤の撰にして、養生訓を刊行するに方り、始めて加へたる所なるは、原書卷頭の言に依りて之を知るべし。たゞ刊本に附錄して世に行はるゝこと已に久しきを以て、强ひて除かず。別に一卷として姑く之を收む。

一樂訓は人生の樂むべき所以と之を樂むの方法とを述べたる書なり。寶永七年八十一歲の時に成る。

一神祇訓は我國古神道の淵源及特質を說いて、神祇崇敬の理由と崇敬の方法とに及び、傍ら神儒佛の關係をも述べたる書なり。成るの年月は明ならず。此書京都の柳枝軒に於て刊行のこと享保頃に刊行せられたる他書の奧付に記しありて、當時已に定本の存在せしは自ら知らるゝを以て、百方之を搜索したるも、今は全く泯滅せしものにや、終に獲る能はず。餘義なく不完全なる傳寫本に依れり。故に往々缺失あるを免れ難きは寔に遺憾と

す。たゞ数本を對照し、頗る力を考訂に用ひたれば、現存の神祇訓としては、或は比較的完全たるを得む歟。

一列擧したる十一種の教訓書の外、猶ほ五倫の一書あり。年譜の別本にも、元祿十六年七十四歳の時に成りたることを記し、福岡藩學制之梗概には、先生の著述目錄の下に註して、五倫は亡びて傳はらずと云へり。

昔は以上列擧したる十一種の教訓書に、五倫訓及び家訓を合せ稱して十三訓と唱へしが、近時は神祇訓五倫訓及び家訓の三書は除いて算へず。文訓と武訓とは合せて一書と爲し、乃ち總稱して十訓とす。

一女大學は名を先生に假托したる僞書なることは疑なきも、内容は必ずしも多く先生の說に異るを見ず。且つ汎く世に行はれて、感化を社會人心に及ぼしたる書なるが故に、參考の資として之を收む。此由は總凡例の中にも、曾て述べたり。

一益軒先生與宰臣書は、一に諫諍錄の名あり。立花重種、立花增弘兄弟に與へたる封事各〻一篇、黑田一貫、隅田重時に與へたる封事各〻一篇、都べて四を收む。重種、增弘の兄弟は、國主黑田光之の寵眷を蒙り、共に久しく藩政を執りたる家老にして、學問才幹あり。先生と情誼極めて深かりし人なり。一貫は黑田家第一の勳舊にして世々宰職の首班たり。重時は國主綱政に信愛せられ、久しく藩政を執りたる家老、此二人また並に善く先生を禮遇せり。

重種に與ふる封事の末段に缺失あり、諸本皆斯の如く完全なるもの無きを以て、姑く原本に從ふ。

一克明抄は天和二年五十三歳の時に成る。人君治國の道を述べて、國主黑田光之に獻じたる書なり。
一書學荅書は他人の問に荅へて、書法の事を說ける書牘なり。
一心畫規範は古人の作字書道の事に關する格言警語を收錄したるもの、正德二年、八十三歳の時に成る。
一諺草は貝原好古の編錄、自序及び例言あれども、干支を缺くを以て、何年頃に成りたる歟、之を詳にする能はざるも、蓋し元祿中の著なり。古來の諺を彙集して、由來の意義等を疏釋したるもの、卽ち一種の諺語字典なり。
此書は同卷の諸書とは頗る種類を異にするも、頁數の都合上、他の諸卷に載せ難きを以て乃ち玆に之を收む。
一家訓は子孫に留めて永く範を示したるものなり。聖學須勤、幼兒須敎、士業勿怠の三則を分つて、修身治家の道を述ぶ。貞享四年、五十八歳の時に成る。

益軒全集卷之三凡例終

益軒全集卷之三目次

目次終

初學訓序

初學訓も亦益軒先生の遺編也。今茲工人に命じて、これを棗梓に壽ふす。因て竊に序していはく、夫先生此編を著して、初學訓と名づけたまへるは、何の謂ぞや。其わづかに初學の人のたすけとなるべき事を撰述して、君子人の爲にするにはあらざるとの謙詞なるべし。然ども敬で此書を誦するに、其言簡要にして其旨ひろく、聖學の大なるといへども、其梗概こゝに備はらざる事なし。所謂諸訓の中にも、とりわけ親切著明の懿訓なりと言つべし。人として學をつとむる事かくのごとく、躬に行ふ事かくのごとくならば、古の聖賢君子にもおさ〳〵おとるべからず、何ぞ初學の謂ならんや。然はあれど聖學の蘊奥きはまりなく、其事業甚大なり。學問思辯の功熟し、學行のつとめ積るにあらずんば、豈一朝一夕の能得る所ならんや。いやしくも遠大の志なくして小成に安んぜば、わづかに小文字を讀て是にたれりとせむ事は、亦豈先生の望む所ならんや。是亦初學訓と名づけ給へる意なるべし。于時享保戊戌夏五月望日謹で書す。

竹田定直

初學訓卷之一

貝原篤信著

およそ人となれる者は、父母これをうめりといへども、其本をたづぬれば天地の生理をうけて生る。故に天下の人は皆天地のうみ給ふ子なれば、天地を以て大父母とす。尚書にも天地は萬物の父母といへり。父母はまことにわが父母なり。天地は天下萬民の大父母也。其上、むまれて後父母の養を得て生長し、君恩をうけて身を養ふも、其本をたづぬれば、皆天地の生ずる物を用ひて食とし、衣とし、家とし、器として身をやしなふ故に、およそ人となれる者は、はじめ天地の生理をうけて生るゝのみならず、むまれて後身をおはるまで、天地の養をうけて身をたもてり。然れば人は萬物にすぐれて、天地のきはまりなき大恩をうけたり。こゝを以て人のつとめてなすべきことわざは、わが父母につかへて力をつくすは云に及ばず、一生の間つねに天地につかへ奉りて、其大恩を報じ奉らん事を思ふべし。是なん人となりてつねにこゝろにかくべき事にぞあるべき。

人となるものは、つねに天地につかへて其大恩を報ぜん事をおもひ、父母につかへて孝を行ふがごとく、天地に仁をつくしてわするべからず。仁とは心にあはれみ有て、人物をめぐむをいふ。是天のめぐみにしたがひうけて、天地につかふる道也。是人の道とする本意にして、一生の間つとむべきわざなり。おこたるべからず。わするべからず。天につかへて仁なると、父母につかへて孝なるとは、同じ仁孝一理なり。人たる者の必しりて行ふべき理、これより大なるはなく、又是より急なるはなし。すべて人は父母の家に居ては、父母に專に孝を盡し、君に仕へては君に專に忠をつくすべきが如く、天地の中に有ては、天地に仕へ奉りて仁をつくすべし。人となる者若かゝる大事をしらで、いたづらに日をおくり世を過さば、一生をむなしくして、人となれるかひなかるべし。人となれる者是をしらざらんや。是則人の道とする所也。此外にもし道ありといはゞ、まことの道にはあらず。天につかへてをこたらずとは、人となる者只朝夕天

道の眼前に有て、遠からざる事を思ひ、つねに天道をおそれうやまひてあなどらず、かりにも天道をそむき、無道の事をなすべからず。天道にしたがひてそむかず、わが身をへりくだりて人をあなどりほこらず、欲をこらへてほしゐまゝにせず、天地のうみていつくしみ給ふ人倫をあつくあはれみて、あなどらずそこなはず、天地の人のためにつくり出し給ふ五穀とよろづのたからを、わが一人の欲のためにみだりについやさず、次に鳥獣蟲魚の生る物をみだりにころさず、草木をも時ならずしてみだりにきらず。是皆天地のうみ出しやしなひて、いつくしみ給ふ物なれば、これをあはれみ養ふは天地の御心にしたがひてそむかざるわざなり。かくのごとく萬物をあはれむを仁といふ。仁とはあはれみの心也。是天地の御心にしたがひて天地につかへ奉る道なり。人倫の内親をしたしみ、次に萬民をあはれみ、次に鳥獣、およそ生る物をそこなはず、是天地の御心にしたがひて仁を行ふ序なり。親を愛せずして他人を愛し、人を愛せずして鳥獣を愛するは不仁なり。

凡人は天地のめぐみをうけて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の養を得て身をやしなふ。かゝる天地の大恩をうけて、天地の内にすみながら、天地のあはれにあたへ給へる心の徳をすてゝ保たず、天地の道にそむきて行はず、其上天地の子としてあはれみ給へる人倫と、次には鳥獣をそこなひくるしめて不仁なるは、天地の御心にそむきて罪ふかし。是天地のにくみ給ふ所也。天道はおそるべし。あなどりてそむくべからず。

人として天をおそれず、人をあはれまず、悪これより大なるはなし。悪を行へば天のにくみ給ふ所、天のせめのがれがたし。即時にわざはひあると、後に禍來るとのかはりあれども、悪をなして禍なきの理なし。又天地の御心にしたがひてそむかざる人は、天地のめぐみありて必福あり。もしは其福早く來らざれども、後必福有て禍なし。もし我身に福なければ、必子孫にいたりて福あり。是必然の理なり。古の聖人の敎明か也。聖人の言おそるべし、信ずべし、うたがふべからず。古を引にも及ばず、近世にも此ためし多し。

天地の生ずる所人を貴とす。是仁義禮智信の五常の性をうけて人倫の道あり。是人の萬物にすぐれてたふとき所なり。此五常をうしなふべからず。これを失へば天地にそむきて人にあらず。そのうへ人は天地の生ずる五穀のよき味、鳥獸魚介のうまき肉をくらひて身を養ひ、布帛をあたゝかにき、家に居て風寒暑濕をふせぎて身をやすんず。衣食家居の養ひは、父母主君の恩によれりといへども、其本は皆天地の生じ出せるたまもの也。されば人はかくのごとく、天地のきはまりなき御めぐみをうくる事、萬物にすぐれたり。かゝる大恩をうけてしらざるは、むげにおろかなり。天恩を忘れて人とかく生れたる身の、貴き理をいたづらになすとは口おし。

およそ人は恩をしるべし。恩をしるを以て人とす。恩をしらざれば鳥獸に同じ。君に忠し親に孝するも、君父の恩を報ずる道なり。此故に恩をしれる人は、必親に孝あり、君に忠あり。恩をしらざる人は忠孝なし。忠孝なければ人たるの道を失ふ、いはんや人として天地の大恩をわするゝは、天地のために不孝の子也。人道の本意を失へり。

凡天地のうめる所の萬物、皆是天地の氣をうけたりといへども、其中につきて人ばかり貴きものなし。いかんとなれば人は仁義禮智信の五常の性あり、是天地の心をうけて本性とする也。此身五倫に交はり、生れつきたる五常の本性のまゝに順へば、五倫の道行はる。是まづ人の貴き大本也。其上目に五色をわかち、耳に五音をわきまへ、口に五味をしり、鼻に五臭をかぐ。書をよみ古を學んでは、天地人の道をさとり、萬物の理に通じ、古今天下の事をしる。是人の萬物にすぐれていと貴き處なり。故に尙書に人は萬物の靈といへり。靈とはすぐれてあきらかなるたましひあるを云。人は全く天地の御心をうけて心とせり。此故に其心、靈なり。天地の心とは、人と萬物をうみやしなひ給ふ御めぐみの道を云。其理天地ひらけしより後、萬世までにかはらず。一年につきていはゞ、年々に春は生じ、夏は長じ、秋はおさめ、冬はかくす。此四時にめぐり行はるゝ道を天道と云。是天地の萬物を生ずるめぐみの生理なり。此四時に行はるゝ道の名目

を元亨利貞と云。是四時の理なり。これを天地の道とす。天は地をかぬる故に、すべてこれを天道と云。仁とは天地の萬物を生じ養ひ給ふあはれみめぐみの理を、人の心にうけて生れつきたるを云。仁を行ふの道は、まづ天地のうみて、子として愛し給へる人倫をあつくいつくしむにあり。人倫をあつくするの道は、先父母に孝をつくすを本とし、主君につかへて忠を盡し、親戚をしたしみ、家人をあはれみ、民をめぐみ、朋友に信あり、次に萬民をあはれむ。是人倫をあつくする也。次には鳥獸蟲魚を愛し、次に草木を愛す。人倫はわが同類なり。天地のいとあつくあはれみ給ふ物なる故、我も亦天地の御心にしたがひて、人倫をあつくあはれむべし。次に鳥獸蟲魚草木も、皆天地のうみ給へる物なれば、わが同類にはあらざれども、すでに人倫を愛して後これをあはれむも、亦天地の御めぐみにしたがひて、天地につかへ奉る道なり。すべてかくの如く人倫と萬物に情ふかきを仁と云。仁とは人と物とをあはれみめぐむ善心をいへり。天地につかへ奉りて人の道とする理は、仁の外には出ず。仁は義禮智をかねて其内にあり。

およそ天地につかへ奉る道は、人倫と萬物とを愛するにあり。其故いかんぞや、天地其うめる所を愛し給ふ事、人の親の子をあはれむが如し。人倫と萬物は天地のうみて愛し給ふところなれば、是を愛するは即天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。故に天地の恩を報ぜんと思はゞ、先わが心に天地よりうけたる仁をたもちて、其心にしたがひて五倫をあつく愛し、次に萬物を愛すべし。是即天地につかへ奉りて、其恩を報ずる道なり。人の道の本意とする事、此外にさらに有べからず。人となれる者つとめてこれをしりて行ふべし。

易に天地の大徳を生と云といへり。生とは天地の萬物を生じてめぐみ給ふ理を云。さきにいへる天地の御心是なり。天地に有ては生と云。人の心に有ては仁と云。天にあり人にありて其名はかはれども、其理は一なり。

天地の大徳をうけて、人の心に生れつきたる徳を名

づけて仁と云。徳とは生れつきて我が物にし得たる善を云。仁は即人の心にそなはれる、あはれみめぐみの德なり。是人となれる者の天にうけたる性なり。此心を失なはずして、人をあはれみ物をめぐむを云。此理をむまれつきたるを性と云。此心を失はざるは、天地にしたがひてつかへ奉る道なり。もし此心を失へば、即天地の御心にそむきて人の道を失ふなり。

仁は心の德の總名にして、物をあはれむ理なり。仁をわかてば仁義となる。義は宜しきなり、宜とは萬事に相應して各よき程に行ふを云。すべて人倫萬物をあはれむは仁なり。是理一なり。親兄弟夫婦親戚家人等、其外萬民をあはれむに、其したしき、うとき、たかき、ひきゝにつきて輕重のわかちありて、各其人に相應して宜を義と云。かくの如く物によりて宜しき事かはれるは分殊なり。理一と分殊との分をしるべし。仁義のわかち、其字義かくのごとし。

天地に陰陽あり。春夏は陽也。秋冬は陰也。人心に仁義あるは、天地に陰陽あるが如し。天道は陰陽にて立つ、人道は仁義にて行はる。易にも天の道を立て陰と陽と云、人の道を立て仁と義と云といへり。孟子に、仁は人の心なり、義は人の路なりといへり。仁は人の生れ付たる心なり、仁なければ人の心を失ふ。義は人の行ふべき道なり、義なければ人の道を失ふ。

仁義を又こまかにわかてば、仁より禮いで、義より智わかれて、仁義禮智の四德となる。一年をわかてば陰陽となる。陰陽をわかてば春夏秋冬の四德となるが如し。禮とはうやまひの心、仁のあはれみよりおこる。智とは心明らかにしてよく善惡をしるを云、義の宜くするよりわかれたり。しかれば仁義を以て五常をかね、又仁を以て義をかねたり。

仁義禮智の眞實にして、僞なき理を信と云。信はまことなり。まことなければ仁義禮智も僞となり、萬の善も皆あだ事なり。仁義禮智の四德に信をくはへて五常とす。又五性と云。性とは心に生れつきたる理なり。此五性は萬世まで人にむまれ付てかはらざる理なれば、五常と云。百行萬善皆五常

より出づ。五常を以て萬善をかねたり。人の心とするは此五にあり。此外に心を求むるは天地聖人の道にあらず。

天道は元亨利貞の四徳なり。元ははじまるなり、春の徳なり。亨はとほるなり、夏の徳なり。利はとぐるなり、秋の徳なり。貞は正しきなり、冬の徳なり。是春夏秋冬の理なり。此道古今にかはらず。春はあたゝかに、夏はあつく、秋すゞしく、冬さむきも、春は草木生じ、夏はしげり、秋はおさまりみのり、冬はひそまりかくるゝも、古今年毎に常にしてかはらず、皆是天道の誠なり。誠なければつねなし。人の心に信あるは天道に誠あるが如し。信ありて仁義禮智の徳、實にしておこなはる。

天地につかへて仁を行ふを仁人と云。父母につかへて孝を行ふを孝子と云。父母につかへては孝子となるべし。天地につかへては仁人と成べし。不孝の子不仁の人となるべからず。不仁の人不孝の子、是天地の間の大なる罪人なり。もしわざはひなくして世にたてらば、是幸にして免れたる也。

凡人は天地のうめる人倫と、萬物とを愛して、そこなふべからず。中につきて人は我と一類にて、同じく天地の子なれば、人倫の内親疎ありといへども、其本をたづぬれば、天地の間の人は皆我が兄弟也。此故に萬物の内にて、とりわき人倫をあつくするは、天地のうめる子を愛して、天地に仕へ奉る道なり。天地のうみ給へる人を愛すれば、天地の御心よろこび給ふ事、人の子を愛すれば其父母よろこぶが如し。是天地につかふる孝の道也。其上、兄弟をしたしむ理なり。天地を父母とすれば、天下の人倫は皆わが兄弟なり。

人は天地の性をうけて、心に天理を生れつきたれば、其本性はもとより善なり。萬物にすぐれ、禽獸にかはれる處こゝにあり。しかれ共食にあき、衣をあたゝかにき、居所をやすくしたるまでにて、人の道をしらざれば禽獸にちかし。禽獸ものみくらひ、身をやすくする事は人にかはらず。人と禽獸のかはりは、只天地の性にしたがひて、道を行ふと行はざるとにあり。古の聖人、人のをしえなく、道をしらずして禽獸にちかき事をうれひ給ひて、

學問所をたて、師を立て、天下の人に人倫の道ををしへさせ給ふ。しかれば人となるものは、必聖人のをしへにしたがひて學問をつとめ、人の道をしりて行ふべし。人の道とは人倫をあつくする道なり。聖人のをしへは人倫の道を明らかにし給ふ敎なり。學者の學ぶ所も同じく人倫を明らかにせんため也。此外に人の心法なく、人の道なしとしるべし。

人倫に五あり。一には父子、二には君臣、三には夫婦、四には長幼、五には朋友なり。是を五倫と名づく。倫は類なり。天下に人多しといへども、皆此五倫にこもれり。おぢおばなどはおやにたぐひし、をいめいの輩は子に類し、貴人尊者は君に類し、萬民の我よりいやしきともがらは、すべて臣に類し、兄弟從兄弟は長幼の內にあり。等輩の人は朋友に類し、道を傳ふる師は君父にひとし、是五倫を以て天下の人をかねたり。五倫の道とは、孟子曰、父子有レ親君臣有レ義夫婦有レ別長幼有レ序朋友有レ信、これなり。父は子を愛するに義理の敎を以てし、子は孝を行ふに其力をつくし、君は臣をあはれみ、臣は身をわすれて忠をつくし、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひつかへ、長は幼を愛し、幼は長者にしたがひ、朋友はたがひにまことありて善をすゝめ、惡をいさめ、相たすけてたのもしげあるべし。是五倫の道なり。人の道として行ふべき事、此外にさらになし。此外に道を求るは天地聖人の道にあらず。

およそ人の道とする所は、天地より生れつきたる五常の性を失はず、其五性にしたがひて、五倫の道をあつく行ふにあり。五常をたもちて失はざるは、德をたもちて心をおさむる理也。五倫をいつくしみてあつくするは、行をつとめて身をおさむる道也。心の德をおさめ、身の行ひをあつくするは、是即人の道にして、天地につかへ奉る孝なり。

天道よりわが心に生れつきたる理を性と云。仁義禮智信の五性是也。これを五常と云。五倫にまじはる時、此五常のむまれつきの善なるまゝにしたがひて行ひ、少も人欲の私を以て妨ざるを道と云。道とは日々人のゆきかよふべきすぢある道路の如し。故に其名をかりて道と云。我が生れつきたる

自然の理の行ふべき大道をば行なはずして、人欲にしたがひて私を行ふは、たとへば定りてゆくべき大道をばゆかずして、ほりがけをとほり、いばらからたちの中をわけゆくが如し。中庸に性にしたがふを道と云とは、性とは人の心に生れつきたる五性を云。仁の性にしたがへば父子をしたしみ、臣民をいつくしみ、萬物を愛する、皆是仁の道なり。義の性にしたがへば、君につかへて忠を盡し、身をわすれ、老人をうやまひ、賢人をたうとび、利をこのまず、財をむさぼらず、行ふべきすぢめの宜をうしなはざるは、皆是義の道也。禮の性にしたがへば、長幼貴賤のまじはりに次第あり、貴人と老たるをうやまひ、いやしきとわかきをあなどらず、よろづのさほふ正しく、則を失はざるは皆是禮の道也。智の性にしたがへば、夫婦の別正しく、人の善惡と萬事の邪正をよくしりわきまふる類、皆是智の道也。信の性にしたがへば、朋友のまじはりいつはりなく、萬の事まことあり、はじめおはりありて、やくそくたがはざる、皆是信の道也。此五性にしたがひて、五倫を行ふを道と云。

中庸に性にしたがふを道といふはこれなり。

五倫の道は父母につかへて、孝を行ふを以て本とす。わが身は父母よりうけたれば、父母はわが身の本也。其上わが生れし初より、父母の養育によりて人となれり。生るゝと育はるゝと二の恩あり。其恩のふかく大にしてきはまりなき事、山よりもたかく海よりもふかくして、たとへをとるに物なし。天地のわれをうみ我を養へるにひとし。この故に孝を以て仁を行ふの本とし、人倫の道の初とす。聖人の道は、五倫の道をあつく行ふを以てむねとす。なかにつきて父母に孝をつくすを五倫の初とし、百行の本とす。故に古の君子は、孝におゐて尤あつく行へり。よろづ才行うるはしくとも、孝におろそかなれは、其餘は見るにたらず。故に人の子たる者は、まづ父母につかふる道を早くまなんで知るべし。孝の道にうときはおろかなる事の至り也。

父母につかふるに愛敬の二の心法あり、此二は孝子の心とする所なり、人の子たる者必是をしるべし。愛はいつくしむとよむ、親をいとをしむなり。敬

はうやまふとよむ、つゝしみて親をうやまひおそるゝを云。愛なければ父母にうとく、おろそかにして情うすし。敬なければ父母をあなどり、かろしめておこたる。愛のみにて敬なければ、犬馬を養ふに同じ。敬すぎて愛すくなければ、父子の間へだゝりうとくなりて他人のごとし、父母の心樂しまず。此故に愛敬二ながらいたらざれば孝にあらず。愛敬の心を以てよくおやを養ふを孝とす、二の者鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のことし、一をかくべからず。

初學訓巻之一終

初學訓巻之二

貝原篤信著

父母を養ふに養レ志と養レ體との二あり。養レ志とは父母の心にしたがひてさからはず、つねに父母の心をよろこばしめたのしましめ、うれへ苦みなからしむるを云。朝は早くおきて父母の安否をうかゞひ、夕は父母の寢所をやすくし、朝夕と晝と折々父母にまみえて、うとくおろそかならず、むつまじくして又うやまふべし。父母にまみゆるには、まづわが顏の色をやはらげ、言の辭をよろこばしくし、父母の氣體の安否をうかゞひ、其時日の要用を云のべ、尋ね問ひ、世の中のありし事どもをつまびらかに物がたりして、父母の心をなぐさめ、父母のをしへあらば、つゝしんできくべし。父母われをよび玉はゞ、はやく行べし。重くしておこたるべからず。父母われにをしへ命ずる事あらば、つゝしんできゝ、つとめてはやく行ふべし。ゆるやかにすべからず。わするべからず。もしわするべき事ならば、書つけおきてつとむべし。わすれ

ておこたるべからず。いとけなき時父母をしたへる心を失はず、年たけて後も父母を思ひしたひてわすれず、父母に對するになづ〱しく、愛敬二ながら心にありて、顔色言葉にこやかにのどやかにしてうや〱しく、父母の心にたがはず、父母の前に久しく在て、其をしへをきゝ、物がたりして親をなぐさめ樂しましめ、其志にそむかず、わが心にも父母に對して物がたりするを樂しみ、父母のよろこべるを悦ぶべし。もし老たる人をむづかしくおもひ、久しく相對するを、ものうく興なくおもひて、退屈し、うらめしくいとひ苦しむは、愛敬二ながらかけたる也。孟子に、大孝は身をおはるまで父母をしたふといへり。是いとけなき時父母をしたへる心を一生の間失はざる也。慕の字身をおはるまでわするべからず。又外へ出れば必父母にまうし、歸れば必先父母にまみえて後、わが所に退く。行てあそぶに常の處ありてみだりにゆかず。習ふにつねのわざありておこたらず。わが身の行をつゝしみつとめて、不義無禮の行なく、氣ずいにして放逸になるわざなく、悪友に変はらずして、父母にうれへ心づかひなからしむるは、是養ㇾ志なり。

養ㇾ體とは父母の口腹身體をやしなふを云。わが家の力になるべきほどは、飲食を味よくとゝのへ、父母の好み給ふ物をとひてすゝむべし。富貴の人の子もみづから飲食をあんばいし、其味のよしあしと、ひえたると、あたゝかなるとをこゝろむべし。又夏冬おり〱の身にかなへる衣服をこしらへて、これをすゝめ、居所寢所を安からしめ、冬は溫に夏は凉しくし、風寒暑濕をふせぎ、身にしたがへる調度、もろ〱のうつはもの、事かけざるやうにとゝのへすゝむべし。およそ父母の身を養ふには、飲食衣服居室器物を不足なくそなふるにあり。子たる者是を心にかけていとなむべし。おろそかなるべからず。年老ては脾胃よはく元氣ともしければ、飲食の養尤くはしかるべし。もし財あらば日々に味よき物をすゝめずんば有べからず。古人の詩に、人生有ㇾ親白頭。何能一日無二甘饌一。又曰古人一日養不ㇾ以二三公一換といへり。又老人は體氣よはきゆへ風寒暑濕にやぶられやすし、

其ふせぎをきびしくすべし。飲食と風寒暑濕にやぶられて、節にたがふ事すこしなりといへども、病となりて害をなす事は大なり。おこたりなく其初をふせぐべし。行立坐臥につねに心をつけてたすけたもつべし。是體をやしなふなり。父母に仕ふるに、志を養ふと體を養ふとの二なければ、孝の道行はれず。內には愛敬の二をたもち、外には養レ志養レ體の二を行ふべし。是愛敬の心を以て父母を養ふ孝の道なり。只體を養ふのみにて志をやしなはざれば孝にあらず。其身無禮不義を行ひ、父母をうれへしめば、たとひ日々にいかなる味よき口腹の養ひをすゝむとも不孝成べし。此內外二の事そなはらざれば、孝の道にあらず。是人の子となれる者の、必しりてつとめ行ふべき事なり。

もし父母の身に過あらば、子たる者わが顏を悅ばしめ、聲を和らぎ、言をゆるやかにして、やうやくいさむべし。父母いさめを用ひずして、かへつていからば、いさめを先やむべし。父母の心にそむくべからず。時過て父母のけしきよき時又いさむべし。はげしくいさめて父母のこゝろにさからふべからず。

およそ孝の道は、父母の存生の間よくつかふるのみならず。父母死して後おはりをつゝしみて、はうむりをあつくし、遠きをおひて時節の祭おこたるべからず。又わがみをおはるまで父母をとひしたひてわするべからず。わが一生の間身をつゝしみ行を正しくして、わが身をはづかしめず、父母の名をけがさゞる、是亦孝の道におゐておもんずる所なり。武士は武勇をむねとして君に忠するも、亦孝の道なり。もし戰場にていさみなくおくれをとり、或は變にのぞみて節義を失ふも、わが名をけがし親をはづかしめて、大なる不孝なり。婦人の夫にそむき不義なるも、大なる不孝也。

君は我をやしない給ひて、父母妻子奴婢ら皆君恩によりてはごくみ、衣服居室器物萬の財用まで、皆是君のたまものなり。其恩甚大なり。つねに其恩を思ひて忘るべからず。こゝを以て君につかふる人は、ひとへに君のために忠をのみ志して私をわすれ、わが身をかへりみる事なかれ。

君過あらば諫むべし。君の寵を失はん事をおそれて、わが身を利し私すべからず。君をいさむるに君の惡をいひあらはし、言をはげしくしていかりあらそふべからず。君の心の善なる所明らかなる所に本づきて、それを誉めてすゝめ、あしき所くらき所におし及すべし。如斯すれば其諫入やすし。是約をいるゝに、まどよりするの理なり。あしき所くらき所よりは、いさめ入がたし。故に君をいさめ親をいさむるには法あり。其法をまなんで知べし。

君臣父子は大倫なり。故に忠孝の二は殊にちからをつくすべし。よろづの事、學ばざれば誠の志ありても、其道をしらずして正理を行ひがたし。殊に忠孝の二に志はありとも、其道をしらざれば忠が不忠になり、孝も不孝になる。故に殊更忠孝の道をよく學び、其法をしり行ふべし。古人も學問は忠と孝とを行ふ所なりといへり。萬善ありといへ共、忠孝の道うすくば君子とすべからず。

夫婦は別を道とす。別とは内外貴賤のわかちありて混亂せざる也。夫婦は子孫の相つゞく故にして、人倫のはじめ也。夫は外をおさめ、婦は内をおさむ。夫は婦に禮義正しく、婦は夫に和順なるべし。然るに馴したしきにまかせて、敬と和とを失なへば其道たゝず。婦人は多くは愚なり。道にたがはゞをしへ正すべし。いかるべからず。いかれば和を失ふ。

兄弟は同胞のしたしみ、父母につぎたる天倫なり。三親の内父子夫婦よりも、まじはり久しきは兄弟なり。其したしみ久しきを樂しむべし。兄は弟に愛ふかく、弟は兄に敬あつくすべし。兄は弟あしとて、似せて愛をうすくすべからず。弟は兄惡しとて似せて不敬なるべからず。各わが道を盡すべし。兄は父につぎてたうとぶべし。弟は父母の子なれば我が子より愛すべし。

朋友は信をあつくし、たがひに善をすゝめ惡をいましむ。是朋友の道也。もし過惡をみながらいさめざるは信なき也。朋友の道にあらず。又朋友はたのもしげありて、難あれば相助け、患あれば相救ふべし。古の人は朋友の交あつく、たのもしげふかくして、今時の朋友の交うすきが如くならず。

是古今人情のかはれるなり。凡人倫の道、朋友のをしへいましめの助によりて立つ理なれば、朋友も亦おもき人倫也。道を敎ゆる師も、亦朋友の內にて尤おもし。君父と同じく養ふべし。技藝の師は道をおしへらるゝ師には及ばざれど、是又我に恩あり、厚くすべし。凡人倫は高下親疎あれども、皆わが一類なれば、仁愛ふかく情ありて、つとめてあつく行ふべし。聖人の敎ゆる所、學者の學ぶ所、人の道とする所、皆人倫にあり。人倫にうすきは情なき不仁の人なり。人道を失へる也。

人倫に交はるには、はじめおはりあつくすべし。うすくすべからず。或はじめにあつけれどおはりにうすくするは、人に交はる道を失へる也。君子の交は久しくしていよ〳〵あつし。凡人に交はるに四恩あり。又四本とす。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩也。天地は生の初なり。我をうみ我をやしなひ給ふ大本なり。父母は生の本也。主君は養の本也。聖人は敎の本也。天地にあらざれば生養のはじめなし。父母にあらざれば生れず。主君にあらざれば養はれず。聖人にあらざれば敎なくして人の道をしらず。書をよみ學問する人は、ことごとく聖人の恩あつし。書をよまざる人も、おやには孝すべく、君には忠すべき事をしり、兄弟の愛夫婦の別をしれるは、天性の良知なれど、又しかしながら聖人の敎あまねく、わが日の本まで傳はれる故なれば、無學の人も聖人の恩ふかき事を思ふべし。此四恩は人の本也。人たる者つねにたうとびてわすらべからず。身をおはるまでつとめて其恩を必報ずべき事也。四恩にかぎらず人倫には必恩をうくる人あり。わするべからず。

今の世に生るゝ人、亂世にあはず治世にすめるは大なる幸なり。是世を治め給ふ大君の御めぐみなり。大君はたとへば天地を大父母とするが如し。主君の上なる大主君なり。其御威德によりて世おさまり、わが身安樂に此世にすめれば、是亦四民ともに大恩をかうぶれり。其御めぐみをあふぎてわするべからず。

いにしへの亂世の時をきくに、力ある者はつねに干戈を事として、しば〳〵戰にのぞみ、力なき者は糧をつゝみて、時々山林ににげかくる。一日も安

堵の思ひなし。是を思ひて、今の太平の御代の安穩にして無事なるを樂しむべし。

農工商は君につかへずといへども、又其國郡をおさめ給ふ君恩をわするべからず。大君の御めぐみによりて、かゝる太平の樂をうくる事をよろこぶべし。

國土をおさめ給ふ君は、民をめぐみおさむる役人にて、民をいつくしみめぐむを以て職分とす。是民の父母なれば、其臣下と萬民を愛して、情ふかくあはれみあつかるべし。われ一人の樂を專にして、民をくるしましむるは不仁なり。上仁あれば民も亦其めぐみになつきて、君をあふぐ事父母の如くおもひてわすれず。上は下をあはれみて仁あり、下は上をたうとびて義あるべし。上仁あり下義あれば上下和合し、國土平安なり。一條内大臣の歌に、民やすく國ゆたかなる御代なれば君を千とせとたれかいのらぬ。といへるが如くなるべし。君を千とせと萬民のいのるは君の德也。まことにめでたくたうとぶべし。

凡人に義理あり利養あり。義理は天道にしたがひて仁義の心をたもち、五倫の道を行ふを云。利養は四民ともに各其家業をつとめ、衣食居所を求むるいとなみをなして身を養ふを云。義理は心を養ひ、財利は身を養ふ。凡人の日夜いとなむべき事、此二の外にこれなし。然るに義理の心を養ふは至りておもく、利養の身を養ふは義理にくらぶれば甚かろし。此二の輕重をしりて、義をたつとび利をいやしむべし。義を貴び利をいやしむは君子の心也。利を貴び義をわするゝは小人の心也。君子小人の別は義と利との間にあり。

およそ人のこのむ事多しといへども、其大なる事三あり。一には富貴をこのむ、二には長生をこのむ、三には義理をこのむ。此三の内輕重あり。富貴をこのむより長生をこのむはおもく、長生をこのむより義理をこのむはおもし。人の好む所の輕重をのづからかくの如くなるのみならず、このむべき道理の輕重も亦自かくの如し。

此三は天が下いきとしいける人、高きいやしき、さかしおろかなる、皆是をこのまざる人なし。まづ富貴をこのむより、長生をこのむ事おもしとは

いかんぞや。富貴とは祿多きを富と云、位高きを貴と云。富は國土をたもち、貴き事國王となるは、富貴の至極也。もし人ありてなんぢに國土をあたへ、王位をゆづるべし、しからばなんぢが命をうばふべしとならば、いかなる愚人もいのちを失ひて、國土と王位を得んと思ふ者はあらじ。是大富貴をすてゝ命をいきん事をねがふ事かくの如し。然れば富貴をこのむより、長生をこのむはおもきにあらずや。

長生をこのむより、義理をこのむ事おもしとはいかんぞや。君とおやとのため義を見て命をすつるは云に及ばず。かりそめに友につれだち道をゆくにもむかひより惡人來り、行あひて不慮に友と口論し、戰に及ぶ時、友を見捨てにげ去事は、士(さふらひ)ほどなる者はせず。是命より義理はおもき故にあらずや。又わづかなる祿を得て君につかふる下部も、主人のためいのちをすつるはめづらしからず。一言のはづかしめをうけても、義におゐて忍びがたく、命を捨るならひなり。國土と王位にもかへざるおもき命なれども、義理は命よりもはるかにおもき故に、いかなるいやしきおろかなる下部といへ共、命を捨て義理を行ふ。是を以て長生をこのむより義理をこのむ事はおもしとしるべし。たゞ賢人のみ此心あるにあらず。諸人皆此心あり。是人の本心なり。只賢人は常に此心を失はず。さきにいへる利養の身をやしなふはかろく、義理の心を養ふはおもしとは、是を云也。しかれば義理は至りておもく、利養は身のためせちなりといへども、義理にくらぶればいたりてかろし。こゝを以て程子も義に對(たい)なしといへり。無對とは義理の貴きにくらぶべきものなしといへるこゝろ也。天下に義ほどおもき物なければ也。しかるに愚者は利養のために道をわすれ、少の利欲にめでゝ大なる義理を失ふは、是私欲の迷にて、本心にはあらず。本心を失へば知もくらくなる。義理を捨て財利をとるは、たとへば十斤の金を捨て一斤の銅(あかがね)をとるが如し。輕重と貴賤をしらざる也。愚なりといふべし。愚人も義理をこのむ心はあれど、私欲にまよひて義理のおもき事をわする。是本心を失へばなり、かろき財利をむさぼりて、至りて貴き義理を捨る

は、たとへば雀をとらんとて、寶玉をつぶてにしてなげうつが如し。

人の身のわざは言行の二にあり。是をつゝしみて過すくなくするは、身をおさむる道なり。およそ人は言はつねにあまりあり、行はつねにたらず。言をまことにし、行をあつくつゝしむべし。言は過やすくあやまりやすし。つゝしみてみだりにいふべからず。行は常におこたりやすく、不足多し。おこたりなくするどにつとめ、あまりある程あつく行ふべし。

心を天官と云。身の主にて思を以て官とす。耳目口鼻形を五官と云。耳にきゝ、目に見、口に物いひ、物をくひ、鼻に香をかぎ、形はうごく。是五のつかさどり也。官とはつかさどる也。役をつとむるを云。心は五官の君なり。五官は心の使ふもの也。心によく思案して、五官のひが事を禁じ、五官の役をつとめしむる事、たとへば主人の臣下をつかふに、各其官をいひつけて、つとめしむるが如し。かくのごとくすれば理順にして事おさまる。もし心に思案なく、五官を制せざれば、五官ほしゐまゝにして、見まじき非禮を見、きゝまじき非禮をきゝ、いふまじき非禮をいひ、うごくまじき非禮をはたらく。是心に思案なく、五官にまかせて心の官をうしなへる也。たとへば愚なる主人は、下人を制するちからなく、かへつて下人より制せらるゝが如し。逆にして家おさまりがたし。

人の心は身の主なり。心の官は思ふ事をつかさどる。思案なければ心の官を失ひて職分空しくなり、家に主なく軍に大將なきが如し。耳目口體の欲にひかれ、惡にながれ、亂れておさまらず。毎日口にいふ事身に行ふ事を、事ごとに心に思案し、つつしみて言を出しわざを行へば、あやまりすくなく後悔すくなし。人のあやまりをなし惡を行ふは、皆思案せざればなり。よく思へば過惡なし。過惡なければ後悔なし、凡身の行ひは後悔なからん事を思ふべし。

ひろく書をよみ學問しても、くはしく思はざれば道理に通達せずして、明らかならず、心に得がたし。孔子も學んで思はざれば、くらしとのたまへり。古今書をよむ人は多けれど、道を知る人稀なるは、

書をよみたるのみにて思はざればなり。思へばよくふかき理に通ず、萬の藝能も只つとめたるばかりにて、思案の工夫なければ其藝進まざるが如し。思の工夫其益大なるかな。

およそ人となりては、つねに愛敬の心をたもちて、しかも失ふべからず。愛とは人をあはれむを云。人をにくみうとんぜざる也。其まじはりのしたしきうときによりて、愛の厚薄品はかはれども、すべてうときもしたしきも、愛せずといふ事なかるべし。敬とは人をうやまふを云、人をあなどりかろんぜざる也。其位のたかきひきゝ、品によりて敬の淺深はかはれども、すべてうやまひあなどるべからず。愛はしたしきより生ず、敬は貴きより生ずれども、うときをも愛しいやしきも敬するは、眞の愛敬也。親疎貴賤すべて愛敬するは仁也。親疎貴賤の品によりて厚薄淺深あるは義なり。愛敬の二は善心なり。善をおこなふとは愛敬を行ふ也。是人倫をしたしむの道、即天地につかへ奉る道也。

人をそしるは、わが同類をうとんじにくみてそこなふ也。是不仁にして愛なき也。同類をあなどりかろんじて、ないがしろにするは不敬なり、無禮也。不仁無禮は惡なり。尤いましむべし。人をそしりてたとひ理にあたるとも、厚き道にあらず。況實に過るをや。人をそしるは道理にそむくのみならず、必身の禍となる。人をそしれば人も亦我をそしる、天にむかひてつばきはくが如し。そしらるゝ人は一生の根となる。人をそしりて人しるまじきと思ふは愚也。惡事千里をゆく理あり、壁に耳ありと思ふべし。なかにつきて君上をそしるは、大不敬にして其つみ大なり。古語にも臣の惡は莫大於誹君といへり。もし人ありて君上をそしらば、わが身は口をつぐんでいふべからず。わが身政道にあづからずんば、國家の政事を議する事なかれ。君上のひがごとありとも、臣たる者はかくして云べからず。古語に、其國に居ては其大夫をもそしらずといへり。是忠厚の道なり。況君をそしるべからざる事いふに及ばず。

世にまじはるには勢をしるべし。勢つよきには我に理ありてもかちがたし。かちがたきをしらばあら

そひがたかるべし。されども時めける勢ある人にしたがひて屈するはへつらへる也。

初學訓卷之二終

初學訓卷之三

貝原篤信著

人となりては、いとけなき時より其父兄となる人は、其子弟に書をよませ、道を學ばしむべし。學問の道は他なし、只道をしりて善惡を明らかにわかち、善を行ひ惡を去にあり。故に君子の學問は仁心をたもち、つねに善を行ふを宗とす。善を行はざれば、博學にして經傳に明かなるも、無用の事なり。大人は善を行へば其ほどこしひろし。しかれどもきはめていやしき乞丐といへども、善を行ふに志あれば、其分に隨ひて其功多し。故に學問する人は、只つねに善をするに志ありて、日々善を行ふをつとめとすべし。

善を行ふ道は、まづ孝弟を本として、人倫をあつく行ふべし。ちからあらばひろくほどこし、衆をすくひ、貧賤にして下にありとも、其身にしたがひて善を行ふべし。人倫をあつくして、次には鳥獸蟲魚草木までもあはれみめぐむべし。是善を行ふ次第なり。

學問する人は、まづまことの心を本として、善を好みてつねにつとめ行ひ、惡をきらひてつとめ去べし。學問の道、善を行ひ惡を去をむねとす。學んで書をよめども、善を好まず、行はざれば用なし。わが身の過を改め、惡を去て善を行ひ、殊に孝弟を本として人倫をあはれみ、其分に應じて人にほどこしすくひ、其位に隨て人をうやまふべし。これ愛敬の二は、をよそ人にまじはる心法なり。善を行ふに愛敬の心を本とすべし。其人にしたがひて愛敬に厚薄有べし。

學問するに道をしらん事を以て心とし、善を行ひて人を愛したすくるを以て事とすべし。是學問の要とする處、本をつとむる也。其めあては君子とならん事を期するを以て志とすべし。しからずして才學のみに心を用ひ、是を以てみづからほこり、人をあなどる故、書をよまざる時より、心さまかへつて惡しくなりもてゆけり。是君子となる事をこのまずして、小人となる事をまなぶなり。書をよむによつて、かへつて小人となるは口おし。もし如斯ならば、學問すれば人品あしくなると、俗人のいへるもむべなり。かゝる學問はせざるにしかず。されどもそれによつて學問せざるは、たとへば噎によつて食せざるが如し。食は日用の物なり。むせたるは食する人の過なり。

學問の道は人倫を行ひ、人をあはれみめぐむを以てつとめとす。身をおさむるを以て根本とす。身おさまらざれば、人倫の道行はれず。天下國家の法なくしておさまらず。身をおさむるの道は、易に、所レ謂見レ善則遷、有レ過則改を以て要とし、わが身にかへりみて、人をせめざるをつとむ。人の善を見てもうつらず、わが過あれども改めず、是は一向道に志なき人なり。左傳曰。人非二聖人一誰無レ過、過而能改善莫レ大焉。論語曰、過則勿レ憚レ改。尙書曰、改レ過不レ吝。やぶさかとはおしむをいふ。過あらばおしまずして速に改むべし。學問の道他なし、只過をしりてよく改め、善にうつるをむねとすべし。學者此事を以て、つねに心にかけてつとむべし。過を改めんとならばまづわが過を知るべし。人の過はしりやすく、わが過はしりがたきは、人を見るには私なし、故に明かなり。我が身には

私して過悪をもしらず、わが身に過あれ共しらざるは愚なり。知りて改めざるは悪なり、其つみふかし。明鏡といへども其うらをてらさず。智者といへどもわが身をしるにはくらし。故に君子はまづわが身をかへりみて其過をしるべし。其上道ある人にまじはりて其いさめをきゝ、過を改めて善にうつる、是學問の益なり。子路は人其過を告きかすればよろこべり。こゝを以て程子の言に、子路も亦百世の師なりといへり。人わづかなる酒肴くだものなどの送物をうけてだに、めでよろこばぬものなし。いはんや過をつげ善言をすゝむるをや。これほど大なるめぐみあらんや。子路のよろこべる事むべなるかな。過をきく事をきらひ、いさめを云人にいかるは不善のいたりなり。わが身に過なきと思ふは、愚なる事是より甚きはなし。いかにとなれば、前にもいへるごとく、古人の言に、人聖人にあらずば誰か過なからん、過つてよく改むるは善これより大なるはなしといへり。およそ人の悪事多きなかに、いさめをいふ人をにくみきらひ、わが過をあらためざるほど大なる悪なし。

人の身のわざ五あり。貌言視聽思なり。貌とは身のかたちのうごきを云。貌と言と視と聽と心に思ふとすべて五のわざ也。思ふは其本也。善をこのみ悪をきらひて邪念をおこさゞるは、是思ひをつゝしみて意を誠にする也。凡此五事をつゝしみて正しくすれば、身おさまる。論語に、視と聽と言と動と禮にかなへは、即仁なる事を說玉へり。右にいへる五事と同じ。人の身のわざは視聽言動の四にすぎず。四のわざに皆天然の則ありて、行ふべき道理あり、是を禮といふ。此四のわざにつきて、すまじき事をするは、皆非禮なり。心と身との非禮をいましめて、非禮にして物を見、物をきゝ、物をいひ、非禮にしてかたちをうごかす事なかれ。かくのごとくすれば、事々皆禮にかなひて、人欲の私なく、天理行はれて、本心の徳かけず。是即仁なり。仁とは人の本心の徳也。

天命とは、天道より生れつきたる福と禍とあり。又時として不慮に福あり、禍あり。富貴貧賤壽夭皆生れつきたる天命ありて、分限定れる故、道な

くして神佛にへつらひ祈り、身を屈めて權臣にへつらひ求めても、生れつかざる福祿は得がたし。人の生れしはじめ、天の陰陽の氣をうくる時、厚薄ありて、其あつきをうけたるは富貴にして福あり、或はいのちながし。薄き氣をうけたる人は貧賤にして禍あり、又いのちみじかし。又時として不慮に出來る禍福あり。富貴なる人も時の禍あり。貧賤なる人も時の福あり。すべて人のちからにてなしがたき事は、皆天命也。故に諸の福と富貴とは人力を以て得がたし。諸の禍と貧賤とは人力を以て免れがたし。すべて人の富貴貧賤吉凶禍福壽命の長短、萬の事は皆陰陽の變化によつて、もとより生れつきて定れる天命あり。不幸なるとてみだりにうれへなげき、或富貴財祿をむさぼりて、へつらひ求むるは愚なりと云べし。富貴貧賤吉凶禍福皆生れつきたる天命なれば、天命に任せてむさぼり求むべからず。又うれふべからず。天命を安んせざるは愚なり。

人力を以て天命を得る道あり。士は君につかへてよくつとむれば、君の寵を得て祿あつし。農は田をつとめてよくつれは、秋のなりはひ多し。工商は其家業をよくつとむればとむ。およそ四民ともによくつとむれば家とむ。古語にも、人生はつとめにあり、つとむればともしからずといへり。又儉約を行ひてみだりに財をつゐやさゞれば、よく家をたもちて貧しからず。又養生をよくつゝしめば命ながし。是皆人力を以て天命を得る理あり。

天道は人の善に福し、惡に禍し給ふ。是人のしわざの善惡によりて、天より福と祿とをむくひ玉へる理也。是は天道の常理なり、うたがふべからず。又人の生質によりて富貴貧賤禍福壽夭あり。或は時によりて不意に吉凶あり。皆是陰陽の變化にして、人の生れつきにより、氣をうくる事厚薄あり。厚き氣をうけたる人は、富貴にして福あり、薄き氣をうけたる人は、貧賤にして禍あり。又長き氣をうけたるは壽く、短き氣をうけたるは夭し、天の陰陽の氣をうけて、如斯なればすべて天命といふ。

凡萬の事皆天命なれば、人の力及びがたし。不幸なるとも、天命をやすんじてうれふべからず。されども

人事をば盡すべし。人事を盡すとはわが身をつゝしみて行ふべきみちをつとめ行ひ、過をあらため善にうつりて、禍にあふべきつみとがなからん事を求むるを云。病ある者のつゝしみてよく保養するも、亦人力を盡す也。是人力のつとめによりて。天命を得る理あり。かくのごとくにして、其上は天命にまかせて樂しむべし。うれへて心をくるしむべからず。

學者讀書の樂、きはまりなし。此樂無學の人にしらしめがたし。わが輩の如き愚者といへども、書をよめば古の聖賢にまのあたりまみえて、其教をきくが如し。又書をよめば天地萬物の道理に通じ、からやまとの天下古今の事を知る。其樂大ならずや。

いまだ道をしらざる人は、酒にゑひて醒ず、ねふりてさめざるが如し。道をしれる人は酒にゑひて醒る如く、ねふりの覺たるがごとし。故に道をしれる人を先醒と云。此醉さむる人まれ也。吾も人も身を終るまで醉てねふりさめず。されどもよく學んでひさしく此道に志ある人は、おそくともさむる理あり。少學べば少の益あり。大に學べば大に益あり、益あらずといふ事なし。されども學びやうあしくして、善を行はず、人をあはれまず、我身にほこり人をそしりあなどり、人にかたんとする心甚しくなるは、學才長ずるにしたがひて、彌其人あしくなる。今の世にはかやうの學者多くなる。末世の學者のならひおそるべし。

學問の道は他にあらず、只善惡を明らかにしりて、善を行ひ惡を去にあり。およそ人は只心もわざも善に志し、善を行ひて人をあはれみめぐみ、人を樂しましめて人をくるしめず、人をよみして人をにくまず、人をうらみず、人の善をほめて人をそしらず。是即仁の理にして君子の道也。人となりては君子の道を學び行ふべし。善に志なく善を行はずして、人をくるしめて人をあはれまず、人をあなどりて人をうやまはず、人をうらみいかり人をそしる。是小人の道なり。人となりて小人の道を行ふべからず。

およそ一念惡をおもひ、一事惡を行へば、天道にそむく理なり。おそるべし。

朋友の間あしき事あらば、面前にいふべし。かげに

てそしるべからず。うしろめたく聞ゆ。面前に其過をせめ、かげにて其善をほむべし。

人をほめ過するもへつらひに近く、又人をしらざるの過あり、不智と云べし。およそ人を褒貶する事つゝしむべし。古語曰、一言妄に發すれば駟馬も難レ追、又曰、一言以て知とし一言以て不知とす。言愼まずんばあるべからず。

言をつゝしめば禍なし。のみくふ事をつゝしめば病なし。故に古語曰、病は口より入、禍は口よりいづ。

同官同列の人は私意の爭なく、人我の隔なくして和睦し、相愛すべし。是亦朋友の道にて君のためなり。家の亂れは多くは臣下の爭よりおこる。凡われ一人を立んとし、わが才を專に立んとすれば、必同列を妨ぐるゆへ、かへつてわが身の禍となる。又同藝の人にも相爭ふべからず、そしるべからず。同列をそしり同藝をそしるは、是小人のわざなり。才能善行は相たすけてすゝむべし。不能あらば誹るべからず。

謙と矜との二をしるべし。謙はへりくだるなり、卑下するを云、我に才智善行ありてもほこらざる也。へりくだりてわが身に自慢せず、ほこらざるは、是天道神明のたすけ給ふところ、人のよみする所也。學問する人はまづ謙を以て基とすべし。基とは家を作る土臺なり、土臺をつかざれば、家を作りがたし。謙ならざれば善にすゝむ下地なくして、學問の道立がたし。學問しても益なし。家を作らんとして基なきが如し。是を以て謙を學問の基とす。わが身をへりくだり、わが身をよしとせず、人の善言をきゝ、人の善を取用ひ、をのれを立ずして人の善にうつれば、善にすゝむ事きはまりなし、天下の善德也。矜はほこるとよむ、自慢する事也、謙のうら也。われにいかなる才能善行あり共、ほこりかゞやかすべからず。ほこれば其才能をも善行をもうしなひて、人にくまれそしられ、わざはひあり。わが身に自滿してみづからほこり人をそしれば、善にうつりがたし。故に惡日々に長じて、不善にすゝむ事かぎりなし。是天下の惡事也。學問せんと思はゞ、初より先此矜の字をいましめ去べし、是第一の事也。もし是を去

されば學問しても益なきのみならず、かへつて害あり。才力のすゝむにしたがひて己にほこるゆへ、悪癖長ず、學ざるにしかず。學問すれば人の心あしくなるとて、俗人の學問をきらふは此故也。師は是を以て弟子をいましめ、初よりほこる事あらばゆるすべからず。弟子は是を以て自いましめ、みづからゆるすべからず。故に學問する人は大根本あり、謙の字なり。大禁戒あり、矜の字也。故に學問する人は、はじめより必先此禁戒を守り、根本をたてゝ學問をつとむべし。かへすがへすわが身にほこり、人をそしるより大なる悪なし。みづからほこる人は必人をそしる。自是とすれば必人を非とす。是等のあしき事をすべて凶徳と云。心に銘じて自いましむべし。

わが善は大なりとも、かくしてみづからほむべからず。是身にほこらざる也。人の善をば小なりともあらはしてほむべし。是人の善を助くる也。わが過はかざらずしてあらはし、早く改むべし。是わが身の益也。人の過をばあらはすべからず。これ人を害せざる也、愛の道也。是君子の心也。

節義とは君親夫のために、義理を守りて命をかろんずるを云。武士の戦場にのぞみて、君のため命をおしまざるはいふに及はず、禄をおしみて君をいさめず、命をおしみて君にそむき、敵に降り、或は婦人の夫にそむき、死をおそれて敵にしたがふやうの類を、節義を失ふと云。是利欲にひかれ、命をおしみて義理をうしなふ也。凡男女ともに萬の才能うるはしくとも、節義かけては其餘のよきことは見るにたらず。

利口にして才力するどに、世變になれて小事にかしこき人に、大體にくらくてよき智恵なく、愚なる人あり。又辯才なく才力つたなき人に、かへりて其心明らかにして、大體にかしこき人有。人に交り人をつかふ人は、人を用るに外の貌のうるはしきと、言のかしこきにまよふ事なかれ。よく其心の内を察すべし。外明らかなれば内くらく、外くらければ内明らかなり。故に外はたらきて内おろかなる人あり。外くらくして内明らかなる人あり。たとへば水と火との如し。水は外くらくして物をてらす光なけれども、内見えすきて明らかなり。

火は外明らかにしてよく物をてらせども、その内くらくして見えすかず。人の内外かはりあるもこれにおなじ。必其貌によりて人を見あやまるべからず。

およそ善をこのまずして惡を行ひ、君に不忠に、親に不孝に、國法をおかしておそれず、人にそしられ、にくまれ、身をあやうくしてつゝしまず、甚(はなはだしく)しては家をやぶり、身をうしなふは、なにの故ぞや。おろかにして知なきが故也。知なきゆへ善の行ふべき事も、惡のなすべからざる事をもしらず。たとへば小兒の知なくして水火をおそれず、井におち入り、火にはひ入がごとし。又善の行ふべき事をしらざるは、たとへば三歲の小兒に、菓(このみ)と金とを前につらねおきてとらせんに、必菓子(くはし)をつかみて金をすつべし。是知なくして金のたからなる事をしらざればなり。

凡百行萬善皆知あるより行はれ、愚なるよりすたる。此故に知は人身の大寶也。たうとぶべし。人たる者は高きもいやしきも、わかきも老たるも只知を求むべし。知を求むるのてだてはいかんぞや、學問するにしくはなし。學問にあらざれば智を求むべきやうなし。

學問は古の聖賢を師として、五常を心にたもち、五倫を身に行ひ、次に天下萬物の理をきはめ、古今の事に通じて、わが心の知をひらく道なり。凡もろ〳〵のいやしき小藝すら皆師あり、稽古ありてつとめまなび、久しくして後に其わざをよくならひ得ることわり也。いはんやわが身をおさめ、人をおさむる、莫大の道理をしる事なれば、師なく學問なくしては、いかにむまれつきたる才ありとも、なんぞかゝる事をひとりしるべきや。是いはずして其是非を思ひしるべし。こゝをもつていにしへの聖人、むまれながらしるの人といへども、猶師を求めて道を問ひ學びたまふ。いはんや今の人の知は古人に及ばず、幸に聖賢の書多し、幼よりつとめてよみ、明師良友をもとめしたがひ、をしえをうけて道理をしり知をひらくべし。人間第一のつとむべきわざ、是よりさきなるはなし。いにしへの聖人天下の人の敎のため、學問所をたて、師を立て、學はしめ玉ふは此故也。

學問する人は先志を立べし。志を立ることは、君子とならん事をつねに心がけてわすれざるを云。たとへば都に行人一歩をふみ出すより、念を都に上る事をわすれざるが如くなるべし。君子とは德の至れる人を云。君子となる道は、善を好むに誠あるを以て本とす、善を好まざれば本たゝず。其上には書をよみよく學んで道をしりて、其しれる所をつとめ行ふにあり。凡學問するはまづ道をしり、善を行ひて、ついに君子とならん事を志てやまざるを、志を立るといふ。是君子の學問は、つねに善を行ふを以て心とすべし。善を行はざれば學問も無用の事なり、善を行ふ人は善人なり。其至りは君子となる故に、學問の道はつねに善を行ひて、君子にいたるを以て目あてとす、弓射る者の的に志すが如し。志を立るは、たとへば飢渴の時に飲食を思ふが如くせちなるべし。是學問の基也。善をこのむにおこたりあるは、志を立るにあらず。もし學をするに善を好む志なくんば、萬卷の書をよむとも藝能を習ふに同じ。只才能のみ進みて德行をつとめずんば、眞の學問にはあらず。眞の學問は德行をつとむる事、文學をつとむるより厚くすべし。

學問の道は善を好む志を立べし。且明師良友を求めて、學術のすぢをえらぶべし。師友の人品よからず、學術のすぢあしければ、學びても益なし。是第一えらぶべき事也。初よりわが志をへりくだりてわが身に才有とてほこるべからず。われを是とし人を非とすべからず。しれる事もしらざるがごとく、心得ざるさまに行ぬべし。君子の心さまを學ぶべし。かりにも小人のわざにならふべからず。學問は只善を行ふ道なりとしりて、常に善心をおこし、日々に善行をなすべし。其上道理を以てわが身をせむべし、道理を以て人をせむべからず。古法にかゝはりて人をせむべからず、古法になづみて國法にそむくべからず。

初學訓卷の三終

初學訓 卷之四

貝原篤信 著

名利の二は衆人の好む所なり。されども打まかせてこのめば道にそむき、かへつて身のわざはひとなる。身に才學あり德行あるはわが身の寶なり。これを以てわが名をむさぼり、人にほめられんことをこのむべからず。名を好めば實をうしなひ、みづからほめてかへつて名をうしなふ。人は只まことをつとむべし、誠だにあれば名はもとめざれどもをのづから來る。故に名は實の賓と古人もいへり。名を好めばみづからほむ、いやしむべし。利とは財寶利祿なり。つとむべき家業をよくつとめ行へば、利は求めずしてをのづから來る。こなたより求むべからず。實をつとめずして名と利とを好むはひけうなり、いやしむべし。

文學をこのみて義理をこのまざるを俗學と云。たとひ四書五經を專によみ、其文義に通じ、程朱の學をするとも、義理を好まざるは俗學なり、いやしむべし。

國土に四民あり、士農工商也。四民皆義理を行ふ事は一にして、利養を求ることわざ各かはれり。義理を行ふとは卽人倫の道を行ふを云。是四民ともに同じ。利養は世をわたるいとなみなり。是四民各かはれり。

士は王公大人より下士にいたるまでを云。いにしへ士を立し本意は、農工商をおさめやしなはしめんためなり。民にやしなはれんためには非ず。凡土地を多くれうする人は、我が身ひとりに私せず、儉約にして奢と私欲なく、民をやしなふを以て心とすれば、其家長久し、財寶みち〳〵て身の利養ゆたかなり。いにしへからやまとの賢君身に儉約を行ひ、おごりついえをなしたまはざりし故に、たび〳〵民のみつぎ物をゆるし給へども、後には倉にたからみち〳〵て、米くさり錢なははくちてきれたりとかや。又公卿より下つかた士庶人にいたるまで、身をおさめて君によくつかふれば、君のやしなひを得、財祿をたもちて、利養はもとめずしてをのづから其中にあり。しかれば士たる人はその

官職を専っとめて、利養は求むべからず。

凡士は萬民を教へ助けんためのつかさなり。むかしより其ために其職分を立たれば、士たる人は民をあはれみめぐむ志わするべからず。凡道に志ありて義を好み、心直にして情ふかく、いつはりなくてつゝしみあるは良士なり。

農は田をつくる民也。是人をやしなふものなれば、四民の本なり。暇ある時を以てわづかにつかひ、いとまあらしめて、耕作を専につとめしむべし。

農人は天の時にしたがひて、春夏秋冬のつとめおこたるべからず。又地の利によりて其土に宜しき五穀をうゑれば、田畠のなりはひよし。其上倹約にして財を妄に用ざれば、財多くして能く貢をそなへ、父母妻子をやしなふにともしからず。又身をつゝしみ法度をおかさず、賦役におこたらず、私用を後にし、主貢をはやくおさむれば、つみとがなくして父母のうれへなく、其心も亦安楽なり。是良農也。かやうの良農あれば、萬民の手本となる。

工は器物をつくる諸職人なり。各其職をつとめ、器物をねんごろによく作り、麁悪ならざれば求めかふ人多く、利を得る事多し。是良工也。

商は利をかろくして多くむさぼらず、いつはりなく人をあざむかざれば、人是をうたがはず、たのもしけありて其ことばを信じ、其あきものを多くかふ故に、あき物ひろくうられて、利を得る事多く、富を得る事やすし。是良賈なり。

およそ農工商の三民は、君につかへずして禄なし、みづから利養を求るを専とす。されど義理をすてて利養をもとむるは、天道にそむき、人事を妨げて、たとひ一旦の利を得るといへど、必天のとがめ人のにくみ有て、後のわざはひにあふ。おろかなるものは眼前の利をのみ見て、後のわざはひをしらず。不義を行ひて、利をむさぼる事小なれば、財をうしなふ。はなはだしければ、家をやぶり身をほろぼす。天のせめ人のにくみのがれがたし。おろかなるにあらずや。

誠は天の道也。これを誠にするは人の道なり。四時行はれ百物生る。善にさいはひし、悪にわざはひす。是天道のまこと也、いにしへ今たがはず。人

の道はこれを則として、つとめ一に誠にするにあり。こゝをもつて人の心はまことを主とす、誠あらざれば物なし。君父によくつかへ、いかなる善を行ひても、誠なければなす事皆ひが事なり。是を物なしと云。つとめて善を行ふも、まことなければみづからあざむき、人をあざむくにいたる、おしむべし。あざむくとはいつはるなり。故に萬事誠を本とすべし。孔子の主二忠信一とのたまふも、此意也。忠信は誠の心也。

敬とはおそるゝ意なり。つねに心を小にし、おそれいましめてほしゐまゝにせず、人をうやまひてあなどらず、事にのぞめば心を専一にして、他に心をうつさず、一すぢに念を入ておろそかならざるを云。されど又其事よりおもき事あらば、前の事をさし置て、おもく急なる事をなすべし。凡つゝしめば身おさまり、つゝしまざればみだる。萬の事つゝしめば行はれ、つゝしまざればすたる。つゝしめばわざはひなく、病なく、命ながし。つゝしまざればわざはひでき、病おこり、命みじかし。安樂なる時も必つゝしむべし。つゝしめば後のわざはひなく、後悔なし。凡毎事後悔なからん事を思ふべし、後悔なき道は敬にあり、敬は古の聖賢の心法なり、萬善是より行はる。是心のまもり萬事の根本なり、人生の必つとめ行ふべき事也。樂白天が詩に、禍と福とは愼しむと愼しまざるにありといへり。

勤は萬事の立ちて行はるゝ所也。つとめざればおこたりて何事もすたる。五倫の道も勤にあらざれば行はれず。中につきて忠孝の道をつとむるは、人道の大節也。四民ともにつとにはやくをき、よはにおそくいねて其家業をよくつとむれば、各其わざおさまる。士は君につかへて身をかへりみず、私なくして誠をつとむべし。かくのごとくなれば、祿は求めずして其中にあり。農工商は家のわざをよくつとめつゝしみて、いつはりなければ、財を得て貧しからず。古語に人生はつとめにあり、つとむれば則ともしからずといへるが如し。

天の道はうごきてやまず、一日に周く天をめぐる。人の勤は天道をのりとす。こゝを以て君子は、つとめておこたらず。地の道はしづかにしてうごかす。

人も亦これにのつとりて、敬みてしづかにして、妄に動かず。是人の敬は地の道を則とする也。

古語に、つとめは貧にかち、愼みはわざはひにかつといへり。いふこゝろは、つとむれば貧しからず、愼めばわざはひなしと也。人世は勤愼の二にてたてり、四民ともに勤と愼とをしばしもわするべからず。是道を行ふ工夫なり。且又貧と禍とをのがるゝ道なれば、是亦人身の至寶也。其上に儉約をくはへ、此三德を以て家をたもつべし。

儉約に二義あり、儉約の二字をつゝまやかにすとよむ。取ひろげずしてつゞめ行ふなり。一には身の行ひをつゝまやかにしてほしいまゝならざれば、過すくなし。二には財を用ゆるにつゝまやかにして、身の養ひにをごりとかぎりなく、無益の事に財をついやさゞるをいふ。行ひをほしいまゝにせざるは、身をたもつ工夫なり。財をみだりに用ひざるは、家をたもつ工夫なり。此二を儉約と云。心をほしいまゝにしてつゝまやかにせざれば、過多くしてわざはひあり。財はかぎりあるものなり、富る人も財をみだりに用て儉約ならざれば、財つき家ともしくなりて、父母をやしなひ、人にほどこし、禮義を行ひ、職分をつとむる事ならず。後は人の財をむさぼりて人のわづらひとなる、はてはわが家をやぶる。それ儉約はわが身の奉養をかろくする也、善德なり。財をおしみて人にほどこさゞるは吝嗇と云、しはき事也。しはきは仁義の道にそむきて惡事也。愚なる人は儉約と吝嗇とのわかちをしらずして、儉約をも吝嗇なりとてそしりわらふ。又吝嗇にしてみづから儉約なりとおもひあやまる人あり。二ながら非也。いにしへの聖賢、いづれも儉約ならざるはなし。是善德なり、儉約なれば俗人そしる。俗人のそしりをかへりみずつとめ行ふべし。そしりをかへりみおそれては、儉約は行はれず。されどもせはしく鄙細なるは儉約にあらず。人に對して寛恕なるべし。

家をたもつ道をうしなひて儉約を行はず、おごりて財をみだりについやし、財たらざる故、人にかりて其利息多く出で、わが家ともしくなりて、みづからやしなひ、家人をやしなふ事かたく、器物をとゝのへそなへ、人にほどこす事ならず、人の財をか

りて返さず、人の物をかひてつくのはず。みづからくるしみ、人をなやます、大なる悪事となる。かねて早くいましめつゝしむべし。

忍と云ふ事亦善行也、忍とはこらゆる也、堪忍するを云。忍に二事あり、一にはわが心にきらふ事をこらへて忿らず、又一にはわが心にこのむ物をこらへてむさぼらず。是忿と慾との二をこらふるなり。忿をしのぶは人のしわざ、吾が心にかなはざるをこらゆるなり。忿はわが心を亂し、人を妨ぐ。心は萬事の本也、いかりて心みだれては、いふ事行ふ事道理にかなはず、いかる時先物をいふべからず、いかる時物いへば必あやまる。是いかりをしのぶ一の手立なり。もしいはずしてかなはざる事ありとも、ことばにいかりをあらはすべからず。たとひ心の内にいかりとけずとも、ことばに出さずしていかりやみ、本心にかへるまでこらえぬれば、大なるあやまりなし。慾をこらゆるは、酒食好色など、およそわが心にかなひて、すきこのめる耳目口體の欲、財寶器物の欲、皆こらえてほしいまゝにむさぼらざる也。忿と慾との二をこらえざれば、義理にそむき心を亂し、病を生じ財をつひやし、恥辱をとり命を失ふ、其害大也。凡身のわざはひは、忿慾をこらえざるよりおこる。しばしの間怒をこらえずして、身をわするれば父母をうれへしむ、不孝是より大なるはなし。しばらく堪忍すれば、わざはひなくて喜あり。古人の詩にも忍過事堪喜といへり。堪忍しすまして後は、喜ありといへる意也。しばし堪忍せざれば莫大の禍と成。程子も貪慾を忍ぶと忍ばざるとに、便見有德無德といへり。

富貴の人は其ちからに隨ひて、ひろく人をめぐみ助くべし。人生の樂は人の苦を救ひて、人を樂しましむ事にあり。貧窮にして人を助くるちからなくとも、善をする志だにあらば其功あるべし。人に善をすゝめ惡をやめさせ、人の害をのぞき人の心を和らぐるは、必財を用ひずとも行はる。もし餘財あらば、無用のつひえをせずして、人の艱難を救ふべし。財をおしむべからず。程子の財をおしみては、善を行ふ事なりがたしといへるもまことにしかり。財は多けれど、おしみて人を救はざるは、不仁の人なり。善を行ふ事かたし。

道に志あらん人は、つねに仁を以て心にたもちて、毎日人に利益ある善事をなすべし。善を行ふは必財を用る事の多少によらず、たゞ人の難儀をすくへば、其功大なり。財を多くつひやしても、益なき事に用れば人の助とならず。およそ善を行ひて人をすくふ事、上は王公より下は乞丐にいたるまで、行はれずといふ事なし。善を行ふべき時にあたりて、心をつくすべし。貧賤なる人も仁に志して行へば、其身に應じ、日々人に利益ある事多し。飢たるものに一飯を與へ、渇ける者に湯水をあたへ、道路にいばら、からたち、はりある物、かどある石、人の足をそこなふ物を取すて、溝の内なるふみ石を一二置かへ、小なる溝に小橋をかくるほどの事は、いかなる貧乏の人もすべき事也。是亦人に益ある善行也。いはんや富貴の人、其志あれば人をすくふ事ひろく、其功大なり。高きもいやしきも、おこたりなく久しく行へば、善を積む事かぎりなし。あにたのしまざるべきや。

すべて世俗は耳目口腹の欲をほしいまゝにするを樂とす。しからざれば大富貴を得てもかひなしと云。是まことに小人の心なり。其志いやしむべし。かゝるいやしき樂を志とし、酒食色慾を恣にする人は、必財つきて貧窮に苦しみ、人を妨げ耻辱をとりて、名を失ひ元氣へり、病生じて命をうしなふ。いはんやわざはひとなり、富貴をうしなふ。かなしむべし。なんぞ樂とすべきや。道を行ひ人を救ひ、分をやすんじ、理にしたがふほどの樂、此世の中に何かあるべきや。たかきいやしき、只是を以て樂とすべし。道を行ひ人をすくふを樂とせずして、あだなる世俗の樂をねがふは、大富貴を得たりとも、誠に不幸成人といふべし。富貴の人は、ことさら身の欲をつゝしみ、ほしいまゝにせず、貧困なる者をあはれみほどこす事を樂しむべし。耳目口腹の欲をほしいまゝにすれば、道にそむきて樂を失ひ、かへつてわざはひとなる。大富貴の人といへども、財をつひやしつくして、困窮のうれへのがれがたし。いはんや欲をほしいまゝにすれば名をけがし、財禄と官位を失ひ、病を生じ身をくるしめて、命をうしなふ。わざはひ是より大なるはなし。

いとまある時は月花をめで、風景をかんじ、山水をのぞみ、園にあそび、詩歌を吟ずるも、よきほどにこのめば道に害なし。是亦風雅なる君子の樂也。古人名敎の內に、自樂地ありといへるは、聖人の道の敎の內に、世俗の樂にあらずして至れる樂あるを云。私欲の樂を好めばかへつて身の禍となる。おそるべし。このむべからず。

凡人をしる事はいたりてかたし。人の心はかくれてみえず、わが知くらければ人の善惡をしりかたし。其上私あれば、人を好みにくむ事公直ならずして、善人を惡み惡人を好む。人の善惡をしらず、わが心にかなへりとて、善人とすべからず、其人の善惡をゑらぶべし。君子は友とする人もめしつかふ人も、つとめて其人をゑらぶ。もしわが心にかなへりとて、ゑらばずしてあしき人を、友とし臣として近づくれば、其人に引そこなはれ、莫大の禍となる事、和漢古今ためし多し。能々人をゑらぶべし。人をゑらばざれば、大なる禍あり、愼むべし。

才智あり忠信ありて私すくなく、つゝしみ有て事をよくつとむる人は、才德そなはれる人なれば、今の世に有がたし。才少にぶく、物いひふるまひわが心に少かなはずとも、心おろかならず、忠實にてうらおもてなく、邪ならざる人をこのんで用ゆべし。才にぶき人も惡ならざれば世になれ、久しく事にたづさはれば、かへりてよきほどになり、要用にかなふ。辯舌利口にして立居ふるまひ快く、人の心によくかなへるもの、多くは其心いつはりかたましく、うしろめたき事多し。信じがたし。かやうの人を用れば必禍となり家をやぶる。たとひ家をくつがへすにいたらざれども、目に見えぬ所に大なる災あり。甚おそるべし。

友とする人は尤ゑらぶべし。智ありてわがあしきをたゞし、よきをすゝむる忠直なるたのもしき人あらば、したしみて友とすべし。直ならずやはらかにして、わが心にかなへる人は益なし。

わが子弟など、年わかき者の友だちのまじはり尤はやくゑらぶべし。友なふ人にうつりやすき事、古人麪に油のそみやすきにたとふ。わかき人の善惡は皆其友による。公儀の法をおそれず、親の命をきかず、酒色と淫樂博奕をこのみ、わが身のはぢを

しらず、わが家の業をつとめざる者を名づけて無頼の人と云。年わかき子弟を、無頼の人に一日も交はらしむべからず。必ひきそこなはれ、悪におち入やすし。一たびかゝる悪友にならへば、よきかたへ立かへりがたし。おそるべし。

善をこのみ、悪をきらふ事の誠なるは、誠意の事なり。是人の行の第一のつとめにて、行の初也。善をこのむ事はよき色のごとく、悪をきらふ事はあしき臭の如くすべし。是善を好み悪をきらふ事、誠ある也。もし善としれども實にこのまずして行はず、悪としれども實にきらはずしてさらざる、これをみづから欺と云。自欺とは、善を好み悪をきらふ事、眞實ならざるを云。自欺ことをいましめて、好悪の二に、眞實にして僞なかるべし。是第一の心法なり。

凡好む事きらふ事をはやくゑらぶべし。一たびあしき事をこのめば相つゞき、心のくせとなる。よき事もあしき事も、このめば後は本らいとなりて天性の如し。すでにあしき事に久しくそみぬれば、其ひが事しれどもやめがたし。はじめにゑらびてはやく改むべし。古語に、たがふ事もし毫釐なれば、あやまるに千里を以てすといへり。

官祿は我より下なる人を見て、わが身をやすんじ樂しむべし。上なる人をうらやむべからず。官祿の富貴と貧賤とは、天命にて生れ付たる分限あり。もとめがたし。才徳は我より上なる人を見て、かれをうらやみつとむべし。才徳は生れ付たれども、善にうつり過をあらためて、求めて得る道理あり。人の性本善なれば、學問し方行はゞなどかよき道にうつらざらん。

人をしるはいたりてかたけれど、己をしるは人をしるより猶かたしといへり。故に古人も知レ人謂ニ之知一、自知謂ニ之明一といへり。明は知よりまされり。人の心はかくれておもてより見えず、故に知がたき事むべなり。わが心は内にありてみづから知やすかるべくして、かへりてしりがたきはなんぞや。わが身には私ありて、おのれをひいきしてゆるす故に、あしき事もよしと思ふ也。人其子のあしきをしる事なしと、古語にいへるが如し。明鏡もそのうらをてらさず、われに智ありとおもへど、か

たつかたにはくらき所ありて、過悪あるをもしらざる事あるべし。能かへりみ、又人のいさめをきき、わがあやまちと悪とをしりて改むべし。われをしらざるは愚なりと云べし。外事をさし置て、まづわが悪き事を早くしりて改むべし。

人の不善ありとも、いかりてつよくにくみせむべからず。わが不善をしらばつよくせめ治むべし。つよく人をせめざれば人のうらみなし。わが不善をつよくせむればわが身に益あり。己をゆるして人をせむるは大なるひが事なり。人の恨ありてわが身に益なし。

凡人となりて、君のため父のため助とならず、世間の用をなさずして、天地の道に少の補なく、人をあはれむ徳もなく、人をすくふ功もなくして、天地の物をそこなひつひやすは、禽獸草木の民用を助くるにもしかずと古人いへり。わがともがらの世にある事かくの如し。みづからはづべし。天道おそるべし。

初學訓卷之四　終

初學訓卷之五

貝原篤信著

耳目口腹の欲をほしいまゝにして一時快しと思へど、其樂いまだはてざる内に早くうれへ來る。酒食色欲を過して樂しむと思へど、其樂の内に早くたゝりをなすが如きのたぐひ也。すでにはじめに快き事は、終には必わざはひとなる。後の禍をおそれば、前に快き事を求むべからず。又はじめに苦みてつとむれば、必後の喜樂となる。味よき酒食をすごせばたちまち病おこり、にがき藥をのみ、あつき灸をすれば、必後は病去て身の益となるが如し。

養生の道も亦よくつゝしみて、慾をこらゆるにあり。養生の要は飲食色慾をこらえて過さず、心を和らぎ、氣を平かにし、かなしみ、いかり、うれへ、思ひをすごさず、又風寒暑濕の外邪を防ぐべし。飲食色慾は内慾也。風寒暑濕は外邪也。つよき人も内慾を過し、外邪にやぶらるれば、病におかされて長生を得がたし。又生れつきよはけれど、よく

保養すれば天年をたもちて長壽也。わかき時より早く養生をつとむべし。わかく血氣さかんなれば、飲食色慾ほしいまゝ也。いましむべし。飲食色慾をほしいまゝにすれば、元氣つきて短命也。中年以後は色慾より飲食の慾猶こらえがたし。内慾にやぶられて元氣へれば、外邪もおかしやすく、病おこりやすし。人の天年をたもたずして早く死ぬるは、多くは飲食色慾の二にやぶらるればなり。凡養生の術其細なる事は、方書に多くのせたりといへども、其大要はかくのごとくなるに過ざるのみ。

心はしづかなるべし、さはがしかるべからず。しづかなれば明らか也。しづかならざれば、心くらくして道理をさとりがたし。流水はうごきてかげをうつさず、止水はしづかなるゆへ明らかなるがごとし。慮はふかゝるべし、淺かるべからず。慮とは思慮なり。慮ふかければ見る事遠く、聞く事つまびらかにして見聞にまよはず。慮淺ければ見る事闇く事に迷ひやすく、人に欺かれ身の禍人の憂をしらず、遠く久きを考へず、先見の明なし。心をしづかにして思案をこのみ、思慮をふかくして、事の是非と後の禍を考がふべし。

萬事を行ふに待といふ字を用ゆべし。待とは急ならざる事は、いそがずして心しづかに思案し、詳に行ふを云。かくの如くすれば過すくなし。事を行ふにいそがしく急なれば、かならずあやまりあり。程子も事以急而敗者十常に七八といへり。待とは急ならざる事は詳にしていそがず、よく思案するをいふ。おこたりいるがせにして、急なる事をいそがず、時におくるゝはあしゝ。

古の君子は、朝夕只天道の眼前にある事を思ひて、つねに心も事も、おそれつゝしみて天にそむかず。今の人は天道ははるかに遠き事にて、わが身にあづからざる事と思ひて、天をあざむきそむきておそれず。わが心に悪とおもひながら行ひてやめず。是天道をあざむきておそれざる也。凡の人天のあたへ給ふ處のあはれみの心をたもたずして不仁を行ひ、天のあはれみ給へる人物を愛せずして、くるしめあなどるは、天にそむくなり。天地の子としてつかへ奉る道にはあらず。是父母の命にそむきてつ

かへざるが如し。天道に不孝なる也、天道おそるべし。

尚書に善をすれば、天より百の祥をくだし、不善をすれば百の禍をくだし給ふといへり。又善悪のむくひ、影の形にしたがひ、響の音に應ずるが如く、必其しるし有事を聖人とき給ふ。又天道は善に福し、淫にわざはひすといへり。天より善人にはさいはひをあたへ、悪人にはわざはひし玉ふなり。易にも、積善の家には必餘慶あり、積不善の家には必餘殃ありといへり。久しく善をつめる家にはさいはひ多く、久しく悪をつめる家にはわざはひ多しといふ意也。是天道の常理なる事を説玉ふ。是皆聖人のをしえなれば、いつはりたがひあるべからず。必其しるしあり、うたがふべからず。又古語に天道は好還といへり。天道は善人にさいはひし、悪人にわざはひし給ふ道理にて、善悪ともに必其報をこのみ給ふを、かへす事を好むといへり。善人には福をあたへ、悪人には禍をたまふ。善悪共に天道より其返報をくだし給ふ。天道は廣大にして、にはかに其しるしなければど、後は必むくひあり。天道はおそるべし。おろかなる人は此理をしらずして、天道をおそれず、悪をさりて善を行ふ志はなくて、悪を行ひても只神佛にへつらひいのりて、さいはひを求めわざはひをのがれんとす。心あらん人はよく思案すべし。人間の内にても心明かに、私すくなき正直なる人は、人のへつらひ求むるをこのまず、理をまげて人に私せず。いはんや神は聰明正直にして私なければ、なんぞ人の平生善を行はずして、只へつらひ求むる者に私して、さいはひをあたへ、わざはひをゆるし給はんや。此理明らかにしてしりやすし。又古語に、神は非禮をうけずといへり。神は正直なれば、人の道理にかなはざる祭と祈禱とをばうけ給はずとなり。菅丞相の歌に、心だに誠の道にかなひなばいのらずとても神やまもらん。又曰、あやまりのあらば中々さもあらば心づくしに何いのるらんとよみ給へり。此二首の道理至極せり、たがふべからず。凡此理ははなはだ明らかにして、いかなる無學なる人も知やすし。されども凡夫は道理にくらく、利欲ふかき故、善を行ひ悪をせざれは、

天道にかなひさひはひありてわざはひなき理をしらず。只欲心と非禮のわざを以て神佛にへつらひいのり、又權勢ある人にへつらひ求めて財祿を得んとす。されど天道神明に私なければ、へつらへりとて福をあたへ給はず、とがあるをゆるし給はず、道にちがへる祈の其しるしなき事、今目のまへにあらはなり。又非禮を以て神にいのり、人にへつらひ求めて、福祿を得る者まれにあり。それは生れ付たるさひはひの内にて得たる也、へつらひ求めて得たるにはあらず。もし百人に一人もへつらひ求めて、其生れ付たるさひはひを得る者あれは、愚人はそれにまよひて、へつらへる故に得たりと心得そこなひて、へつらひもとむ。愚にして此理をしらざればなり。

古人の神にいのりしは、君父のためにいのり、又わがあやまりを改め、善にうつりて、心に誠あり敬あり、其上禮たゞしくてまつるべき正神にいのりし故、其福をうけたり。理もなく禮もなく、祈るまじき神にへつらひ祈りしにあらず。われにあづからずして、まつるまじき社を淫祠と云。淫祠は福なしといへり。家を守る神にあらざれば、祈りても利生なしとなり。わが君につかへずして他の君につかふるが如し。道にかなひていのるべき神にいのらば、其しるし有なん。道なくて祈らば、神は非禮をうけ玉はざれば、祈るともしるしあるべからず。

およそ人と生れては、たかきもひくきも、とめるもまどしきも、只ねがはくば心にふかく陰徳をたもち、身にあつく善事を行ひて、人のうれへをあはれみめぐみ、人のくるしみをたすけ救ふべし。つねに是を以て志とすべし。陰徳とは心の中に善をたもちて、人にしられん事を求めざるを云。凡善を行ふの道は、うゑこゞゆる人、病者、かたわなるもの、乞食、貧人をたすけ、鰥寡孤獨のたよりなき人をあはれみめぐむべし。老て妻なきを鰥と云。老て夫なきを寡と云。いとけなくして父なきを孤と云。老て子なきを獨と云。此四のものは養ふべき人なくて、飢寒するものなれば、困窮せる民なり。仁を行ひて人をすくふには、先此等の人をさきにすべし。これ又いやしといへども、わ

れと同じく天地の子なれば、わが同胞の內不幸なる人也。尤あはれむべし。すべて人のため利ある事をなして、害ある事をのぞくべし。人の害になる事を心によく思ひて、かりにもすべからず。わが身を樂しまんとて人をくるしむべからず。いにしへより道なき人は、わが一人の心を樂しまんとて多くの人民をくるしましむ。是大なる不仁なり。只われひとり樂しむべからず、民とゝもに樂しむべし。人のうれへをうれへ、人の樂しみをたのしむべし。

人と才能をあらそふべからず。人と威勢をあらそふべからず。人の才あるをそねむべからず。をのれ立んとして人をも立べし。我のみ立んとすべからず。心けはしく人を云おとすは、人をそこなひ物をやぶる也。不仁と云つべし。

富てはまづしき者をわすれず。貴くしていやしき者をあなどるべからず。又かりそめにも人をそしるべからず。人をそしりおとすは即惡を行ふ也。人の才あり善あらば、少なりともほめあげそだつべし、あざけりて云おとすべからず。人をそしり人を云おとすは不仁なり。人の才行あるをそねむは、わがみをたてんとするなり。不義也。鄙狭と云べし。いやしむべし。

凡心に仁をたもち、身に善を行ふ事眞實にして、人のしらん事を求めず、善を行ひしむくひのさひはひあらん事をねがはざる、これ陰德なり。陰德を行ふ事かくのごとくにして久しければ、善つもる事きはまりなし。豈たのしからざらんや。後漢の明帝、其弟東平王に問て、汝家に居ては何をか樂とするや、とのたまひしに、東平王答て、善をする事最樂しといへり。凡世間の樂に善をするほどいとおもしろく樂しむべき事、其外に又何かあらんや。匹夫のともがらも善をすれば樂あり。日々に善を行ひてやますんば、其つもれる樂限なかるべし。況富貴の人をや。東平王の答むべなり。善を行ふ事かくのごとくなれば、求めざれ共をのづから天道神明のめぐみありて、わざはひなくさひはひあり。其しるしの必たがはざる事聖人のをしえ明らかなり。又は古今天下のふみにのせたる所、及かたり傳ふる事かぎりなし。うたがふべからず。

小人は一事善を行ひて、其むくひなければしるしなしとてやめて行はず。凡善を行ふ事久しくつみかさなれば、必其しるしあり。人したがひ天よろこび給ふ。又小人は悪を行ひてわざはひなければ、害なしとてやめず。悪を行ふ事つみかさなれば、必其むくひあり。天道おそるべし。

されども又善をなしても、さひはひなき人あり。それはすぐれて命分うすく、さひはひすくなく生れ付たる人也。又悪をなしてもわざはひなき者あり。それはすぐれてあつき氣をうけて、さひはひを身にむまれ付たる者なり。共に定りたる道理の常とすべからず。されども其一代にむくはざれば、必子孫にむくふ。悪をなしても何の害あらんといふ事なかれ。天道はおそるべし。愚なる人は目の前に見えざる事は、福も禍もなしと思ひ、後の利害をしらず。善悪に必報ある事自然の天理也。うたがふべからず。又生付たる禍福あり。是天命也。此二すぢの理ある事をしるべし。たとへば生れ付つよき人は、酒色をほしいまゝにし、大食し、毒物をくらひて長命なる人あり。それはすぐれて元氣あつき人なり。常とすべからず。もし其人のわざはひなきを見て、常の理と思ひ、酒色をほしいまゝにし、大食し、毒物をくらはゞ必病をうけて短命なるべし。悪を行ひて禍をおそれざるは、此理に同じかるべし。

おや先祖に善人あれども、子孫悪なれば先祖の善のむくひなし。おや先祖悪人なれども、子孫善人なれば先祖の悪のむくひをまぬかる。子孫たる人善を行ひて、おや先祖の悪を補なひのぞくべし。

天地は萬物をうみてそだて給ふ父母なるゆへ、其うめる所の人倫は天地の子なれば、是をあはれみ給ふ事、人のおやの子を思ふが如し。こゝを以て其うみ給ふ所の人倫と萬物を愛すれば、天地の御心よろこんで、必さひはひを下し給ふ。これをくるしめそこなへば、天地の御心いかりて必わざはひを下し給ふ事、たとへば人のおやのわが子をいとおしむ者をよろこびて、其恩をむくひん事を思ひ、わが子をそこなふ者をいかりにくみて、其恨を報せん事を思ふが如し。天道はおそるべし。これをしらずして只神にへつらひいのりて、福を得禍を

のがれんとす。されども人倫を愛せず生物をそこなへば、天地神明のあはれみなくして、天罰のがれがたし。罪を天に獲れば禱る所なしと聖人ものたまへり。うたがふべからず。おそるべし。

善を行ひ人民を愛すれば、必天のめぐみありて益あり。善を行ひて必益を得る。愚者は益なき事を行ひてわざはひをのがれず。人は只智者のするわざをなすべし。愚者のわざをなすべからず。

天地の御心にしたがひて人をあはれみ、人の患をすくひ、飢をたすけ、なげきをやめ、善をつねに行ふ人は必天地のめぐみあり、神明の助あり。是人をすくへばわが身のさいはひとなる。しかれば是に及べる大なる祈禱なく、功德なし。世の人此理をしらず、神佛にあまねくへつらひ、又は功德をなすと思ひて、民に益なき事にそくばくの財をついやし用れども、不仁にして人倫をあはれまざれば、いかほど財と力とを用ていのれども、天道神明の助なくして、身にも子孫にもさいはひなし。是古の書にしるし、近代の語り傳ふる處、諸人のまのあたり見聞せる所あきらかなり。およそ福を得禍をのがれんと思はゞ、福を求めわざはひをのがるる道をしるべし。其道をしらずしてみだりに求めても其しるしなし。福を求め禍をのがるゝ道はいかんぞや。人の困窮をめぐみ人の害をのぞき、うれへをふせぎ、飢寒をたすけ、鰥寡孤獨の貧人をすくひ、諸の善を行ふに及べる祈禱はさらになし。此外には、そくばくのたからをつくして祈り求むとも、是に及ぶべからず。心あらん人は是を行ひて善をつみかさぬるをつとめとすべし。其めぐみをうくる事多くの人に益あり、わが身にも亦たのしみあり、つゐには身の福となる。同じく財をついやし用ひて功德と思へども、天道にかなはず、人民をすくはず、無益の事に用ゆれば世のたからをついやして、かへつて世のついゑとなる。おしむべし。やまともろこしの古の事をかんがふるにも、此道理たがはず、されども遠き事を引にも及ばず、わが日の本百年以來、このころにいたりて、まのあたりに見聞たる世間の諸人のなせる事を考へ見て、其益有と益なきとをしるべし。凡俗人は無學にして道理にくらきのみならず、利分の損得

をもしらず。故に善を行ひて、天道にかなへば、必天よろこび人よろこびてわざはひなし、さひはひあり、悪を行ひて天道にそむけば必天いかり、人うらみ、わざはひあり、さひはひなき事をしらず、つねに天道をおそれずして、かへつてあなどりそむき、慾をほしいまゝにし、ことさらに天の子としてあはれみ給へる人をめぐまずして、あなどりくるしめ、身のわざはひをまねき、身のほろぶる事をなして楽とす。つひに天道神明のとがめをかうぶりて、亡びざればやまず。かなしむべきかな。是道理にくらきのみならず、禍福をもしらざる也

およそ人はわかき時より老にいたるまで、あしき友に近づかず、益ある師友を求めならびてちかづくべし。人にまじはるにへりくだりて、わが才智を以て人にほこらず、古の聖人の道をまなび、わが心をおさめ、愚なる心のまよひをさりて知を明らかにひらき、仁心をふかくたもち、孝を先として人倫をあつく愛し、日々にわが力にしたがひて、善を行ひておこたらず、常に人に益ある事をなして人を妨げず、天道をおそれうやまひ、身をおはるまで天地の道にしたがひつかへ奉るべし。人となれる者一生の間つとむべき道、此外にさらにあるからず。老ては同じことするならひなれば、かへす〳〵申侍る。天道は必おそるべし。あなどるべからず。

享保三戊戌年陽月吉日

初學訓 大尾

大和俗訓序

古之教者必本於躬行。不則受教之人弗能化也。其躬行者必推而教人。不則體仁之分未能盡也。益軒先生學極該博。行致敦厚。其教人者皆出於躬行之餘。而孳々思人之爲善。然其秉心恭謙不敢以道學之名自處之也。先生著書也夥矣。蓋謂志聖學者。宜上遡洙泗之懿訓下讀濂洛之遺書而足焉。後輩妄尊隻言者所謂畫蛇足也。故其所著述只勤要爲民俗之益。而不敢好夸高耀人也。此先生之志也。先生嘗憂世俗不能讀聖賢之書者。無知日用彝倫之道。於此作爲喩俗之書。乃書以國字。名以大和俗訓。唯欲庸輩之易讀。而不厭其言之鄙近矣。先生愛人之誠意可謂厚也。定直竊謂。學者貴自得。苟不自會於心。則不能發於行。歷陳聖賢千言萬語。朝誦暮讀亦所謂雖多亦何爲。與其勞於博而不知要孰若得一言而行之於躬哉。此編也其言雖近。其爲教親切著明。可以起懦夫廉頑夫矣。卷帙雖不多。其爲用廣博周詳。自爲學之道心術之要。以至衣服言行應事接人之法。無不畢備矣。夫言近者誦之易。旨遠者用之不盡。學者其遜志務讀會之於心。實之於身。則其益亦不尠矣。孟子曰。服堯之服誦堯之言行堯之行。是堯而已矣。苟能讀此編實之於身。則所謂堯之徒而已。豈復憂不至君子之域耶。然則此編豈獨爲武人俗吏而已哉。讀者不可以其近而忽之也。

寶永丁亥初冬日

筑州後生竹田定直書

大和俗訓自序

あめつちのことはり、人の道は、古の聖人これを經典にしるし給ひ、其の明らかなること、日月の天にかゝれるが如くなれば、天下の目ある者は見ざることなし。いにしへの人、天もし仲尼を生せずんば、萬世長夜の如くならんといへりしも、むべなり。後世の諸賢又よく其の志をつぎ、其の事を註て、經義を傳へて、來者をさとし給ふ。かれこれまことに天下後世の大なる幸なるべし。よくよまん人は、其の理をしられんこと、たとへば日中に黑白をわかつが如くならん。あに世こぞりて、これをたふとび、身をおはるまで講せざるべけんや。うらむらくは、わが日の本の俗のならひ、文字にかたくなにて、さばかり聰明の人も、おほくは聖學にうとし。又窮鄕の晩進は、何讀をならひうべき師友にともしく、高貴の家の子弟は、たはふれあそびをたのしみ、安逸にならひて、學問などに身をくるしめんこと、いと遠ければ、稼穡の艱難をすべてしらざるのみならず、五帝三王をも、是何物ぞと思へる疑をまぬかれがたし。こゝを以て、わが國聖學の寥々たること、古よりすでに久し、うらみても猶うらめしきかな。しかれども、今まさに聖明の御世にあたりぬれば、人文やうやく開けて、聖學の世に明らかになりなんこととたのもし。今の世の俗をさとさんため、からの文字を作りて、聖の道をとかんことは、わが輩のちからになしうべからず。況もろこしのもろ〳〵の先正の說、すでに明らかに備はれるをや。漢字をしれる人は、よんでしるべければ、今更贅言を用ゆべからず。夫聖人の道の、至りて高大にして、ふかくおくまりたるは、此國のをんなもじを以て、其かたはしをもまなびて、說かんこともおほけなくて、管にて天をうかがひ、蠡にて海をはかるが如くなれば、つたなき筆にてしるさんこと、飛鳥川のふかき淵の變じてあさき瀨となり行きなんうれひに、猶まされりといへども、高きにのぼるには、必まづふもとよりし、遠きにゆくには、必近きよりはじむる理あれば、世の不幸にして漢字をしらざる人の爲に、いさゝかむかしきける所のことはりを、

とす。此心を名づけて仁と云。仁は人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は人をめぐみ物をあはれむを徳とす。此仁の徳をたもち失はずして、天地のうみ給へる人倫をあつく愛し、次に鳥獸草木をあはれみて、天地の人と萬物を愛し給ふ御心にしたがひ、天地の御めぐみのちからを助くるを以て、天地につかへ奉る道とす。これすなはち人の道とする所にして、仁なり。仁の理をわかてば仁義となり、仁義をわかてば禮智信となる。五の性をすべて五常といふ。たとへば一年をわかてば陰陽となり、又わかてば春夏秋冬の四時となるが如し。仁は五常をすべて其の總名なり。五常は人に生れつきたる理なれば五性といふ。性とは人の心に生れつきたる理をいふ。此五性は、いにしへ今天下の人高きいやしきも、さかしおろかなるも、おしなべて天地より生れつきて、萬世迄も相かはることなき故に五常といふ。常とはかはらざるなり。中につきて、仁はあはれみの心なり、是を以て四德をかねたり。義は宜しきなり、行ふ所各其の物に相應するを云。禮はうやまふ心、つつしみてあなどらざるを云。智はあきらかにさとる心、道理に通ずるなり。仁義禮も智なければ行ふすべをしらず。義禮智は、みな仁より出で、仁をたすくる理なり。信はまことなり、仁義禮智の心、信にしていつはりなきを云ふ。まことなければ、仁義禮智にあらず。凡この五常の性にしたがひて、人倫に對してなさけふかく、あつく行ふを人の道とす。人倫とは、君臣父子夫婦長幼朋友の五なり。是を五倫といふ。又五品ともいふ。天下に人多しといへど、その品をわかてば、この五品の外にはいでず。五倫にまじはる道は、君は臣をあはれみ、臣は君に忠をつくすべし。父は子をいつくしみ、子は親に孝をつくすべし。夫は婦に禮義あり、婦は夫をうやまひて和順なるべし。長者は幼をめぐみ、幼きは長者をうやまふべし。兄弟も長幼の内にあり。朋友はたがひにまことありて、たのもしく表裏なかるべし。此五倫の道は仁義禮智信の五常の性にしたがひて、人倫にまじはる時に行ひ出せるなり。わが本性の外に求むる道にあらず。

人となるものは天地を以て大父母とする故、父母の恩をうくるがごとく、きはまりなき天地の恩を受けたり。天地のめぐみにて生れたる恩のみならず、身を終るまで天地のやしなひをうくること、たとへば人の身の父母より生れて後も、父母のやしなひによりてひとゝなるがごとし。こゝを以て、この世に生れては、つねに天地につかへ奉り、いかにもして天地の恩をむくひんことを思ふべし。是天地につかふる孝なり。人たる者は、つねに是を心にかけてわするべからず。天地につかへ奉る道は別にあらず、天地の御心にしたがふを以て道とす。天地の御心にしたがふとは、我に天地より生れつきたる仁愛の徳をうしなはずして、天地の生める所の人倫をあつくあはれみうやまふをいふ。是則人の行ふべき所にして、人の道なり、人の道とする所、さらにこの外にある可らず。夫人は天地のめぐみによりて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の内にすみ、天地のやしなひをうけたり。かくのごとく、極りなき大恩をうけたれども、凡人はしらず。所謂百姓は日々に用ひてしらざるなり。然るに天地につかへ奉らずして、人欲にしたがひ、天理にしたがはざるは、天地の大恩をかうふりて、天地にそむく故、天地の子として大不孝なり。人の子としてその親を愛せずして、他人を愛し、父母にそむきて不孝を行ふがごとし。不孝の子はその身を天地の内に立てがたし。いはんや天地の子として、天地にそむき不孝なるをや。幸にしてわざはひなしといへども、天地にそむけるとがおそるべし。天地をたふとびつかへ奉るべきこと、前にもすでにいへれど、返すぐゝよく人につげんために、同じことをいくたびもくりかへしていふなり。猶此後にもいふべし。

およそ天は人の始なり。父母は人の本なり。人は天地を以て大父母とし、父母を以て小天地とす。天地父母その恩ひとし。故に天地につかへて仁を行ふこと、父母につかへて孝を行ふが如くすべし。こゝを以て、禮經にも仁人の天につかふるは、親につかふるが如くし、疎なるべからず、親につかふること、天につかふるが如くすべし、畏愼しむべしといへり。おろそかなるは愛なきなり。おそ

れざるは敬なきなり。天地につかへ奉るも、父母につかうまつるも、同じく愛敬をいたして、おろそかならず、あなどるべからず。天地によくつかふるは仁人なり、仁心をたもつ人なり、父母によくつかふるは孝子なり、孝養をよくつとむる子なり。天地につかへ父母につかふるの道同じ。しかれば、天地につかへ奉るは、人間の大事にて、しばしもわするべからず。常人はちかき父母につかふる道をだにしらずして、心を用ひず。況や天地は、きはまりなき大恩あることをわきまへずして、天地につかへ奉るは、身にあづからざることゝおもへり。夫天地の恩は父母の恩にひとし、こゝを以て身ををはるまで、常につゝしんでつかへ奉り、力をつくすべきこと、是人の職分にて、至りておもき大事なり。人たる者この理をしらずんばあるべからず。

天地の中に萬物あり。萬物の內、人ばかりたうとき物なし。かるがゆへに萬物の靈といふ。その靈たるゆへに、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色をわかち、口に五味をおぼえ、耳に五音をわきまへ、鼻に五臭をしる。鳥けだものには、このあまたのこと一もなし。人となりて、かゝるたふとき身を得たること、まことに天地の間の大なる幸を得たるなり。しかるに人となれる道をしらず、禽獸にちかくして、空しく此の世を過し、人と生れたる身をいたづらになすこと、くやしからずや。

顏子推は、人身得がたし、空しく過ることなかれといへり。萬物にすぐれて人とかく生れたるは、誠に幸の至りなれば、人身得がたしといへり。人たる者もしふたゝびこの世に生れば、たとひこのたび怠りて、人の道をしらずとも、かさねて又人とむまれこん時をたのむべきこともありなん。この身再び人となることを得ざれば、道を學びこの身をよくをさめ、人となりてをはるべし。むなしくこの世を過すべからず。もし人の道をしらで、空しくこの世を過しなば、人と生れたるかひなかるべし。をしむべきかな。

萬物の內、人と生るゝこと甚かたし。いかんとなれば、鳥獸虫魚は年々に多く生ることゝその數かぎり

なし。人の數は鳥獸蟲魚の萬が一もなくして、きはめてすくなし。その上人は萬物にすぐれて、天地のめぐみをうくることあつし。かく貴き人身なれば、萬物の內人と生るゝこと、きはめてかたきことなるを、幸に人と生れたるわが身を持ながら、學ばずして天地の道にそむき、人の道をしらずして行はず、人とかく生れぬるたのしみをわすれ、いたづらに一生をむなしく過して、鳥獸と同じくいき、身死して後は、よき名をのこすことなく、草木と同じくくちなんこと、あにうらみ多きことならずや。

人と生るゝは、きはめてかたきことなれば、わくらはに得がたき人の身を得たることをたのしみて、わするべからず。又人と生れて、人の道をしらで、むなしくこの世を過ぎなんことをうれふべし。この樂と憂との二を、身を終るまでわするべからず。

およそ、人となる者は、人の道をしらずんばあるべからず。人の道をしらんとならば、聖人の敎をたふとびてその道を學ぶべし。いかんとなれば、聖人は人の至極なり、天地の道にしたがひて、人の道をおしへ給へる萬世の師なり。後代にのこしおき給ふ四書五經の敎は萬世の鑑なり。その道理明らかなること、日月の天にかゝれるが如く、天下ひろしといへども、てらざる所なし。よくよまん人は、天下の道理をしらんこと、白日に黑白をわかつが如くなるべし。あに是を學ばざるべけんや。しかるに人となる者、人倫の道は天性に生れつきたれども、その道に志なくして、食にあき、衣をあたゝかにき、居所をやすくしたるまでにて、聖人の敎を學ばざれば、人の道なくして鳥けだものにちかし。かくの如くなれば、人と生れたるかひなし。萬物の靈とすべからず。このゆへに聖人是をうれひ、賢臣を以て萬民の師として、人倫の道を敎へさせ給ふ。是人となるものは、必道を學ばずんば有べからざればなり。愚おもへらく、人と生れて學びざれば生れざると同じ、まなんでも道をしらざれば學びざると同じ、道をしりても行はざれば、しらざるに同じ。その故いかんとなれば、人と生れてまなばざれば、人の道をしらずして、人と生れたるかひなし。是人とむまれて學びざれば、生れ

ざると同じきなり。學ぶは道をしらんがためなり。もし學びやうあしくて道をしらずんば、學びざると同じきなり。又道をしるは行はんがためなり。まなんで道をしりても、行はざればしらざるに同じ。故に人とむまれては、必學びずんばあるべからず。學ぶ者は必道をしらずんばあるべからず。道をしれらば必行はずんばあるべからず。道をしれば必よく行ふ。行はざるはいまだ道をしらざるなり。道をしらんと思はゞ、聖人の敎をあふぎ、賢人の説を階梯として、その法に隨ふべし。是道をしるべき學問のすぢなり。道に志なく、師傳あしく、學術のすぢちがへば、一生精力を用ひ、つとめ學んでもしるしなし。故に道を學ばんと思はゞ、初學より道にふかく志をたてゝ、明師にしたがひ、良友にまじはり、學術をえらぶをむねとすべし。學術とはまなびやうのすぢを云ふ。學のすぢあしければ、一生つとめても道をしらず。一たび迷ひぬれば、よき道に立ちかへりがたし。故にまづ學術をえらぶべし。

學問の道は、極めて廣大高妙にして深奥なり。しかれども其近き所は、孝弟忠信の日用常行にあり。故にいかなる愚なる者も、この道をまなびやすく、しりやすく、行ひやすし。高遠にしてあやしく異なる道にはあらず。

古の聖人すら、猶師にしたがひて學び給ふ。況や今時の凡人學ばずしては道をしりがたし。小藝だにも師なく習ひなくしてはなしがたし。況や人の道は即天地の道にて、極めて大なるをや。學んでもまなびやうあしければ道をしらず、學ばずして道を得んことは萬々此の理なし。

學問はまづ志を立つるを以て本とす。志とは心のゆく所なり。道を知り行ひて、君子に至らんと思ふ心つねにをこたりなく、念々やまざるを、志を立つると云ふ。志たゝざれば學ぶこと成就せず。故に古人も志ある者はその事つひに成るといひ、又志たつは學の半なりといへり。たとへば弓いる者の的に志し、道ゆく者の宿りに志すがごとし。よろづの事まづ本をつとむべし。志を立つるは學問の本なり。志を立つるには勇猛なるべし。柔弱にしてをこたるべからず。をこたれば、しるしな

くしてはかゆかず。道を求るにせちなる志は、たとへば飢ゑて食を求め、渇きて湯水を求るが如くなるべし。わづかに悠々としてをこたれば、志すたる。只此道に心を一すぢにすべし、外物に心をうばゝるべからず。物を翫べば志をうしなふと、尚書にもいへり。言ふ意は、耳目口體にこのむ所の外、欲に耽り外物をこのみ、或は無益の雜藝を一向にすきこのみて、心をかたぶくるの類は、皆是物をもてあそぶなり。かくのごとく外物に心をうつせば、道を學び君子となる志をうしなふ。萬の外物の翫び、このみ、皆志をそこなふものなり。程子曰、專一ならざれば直に遂ぐることあたはず。言ふこゝろは、一すぢになさゞれば行ひとぐることと成りがたし。專一とは、たとへば猫の鼠をねらふがごとく、鷄の卵をあたゝむるがごとく、他念なかるべし。心あなたこなたにわかるれば、學問道義の志はおとろへすたる。文藝武藝は誠に士たる者の習ふべきことなれば、つとめ學ぶべし。されども藝は末なり、道義の學は本なり。藝をひたすらこのめば必學の志をうばゝれて失ふものなり。いはんや私欲のなぐさみこのみにまかするをや。志を立つれば、たとへば西國の人のあづまへゆかんとおもひ立ちて、日々にゆくに、その間晝夜あづまへゆかんと思ふ心は、念々つねにやまず。是あづまへゆく志たつなり。かくのごとくなれば、つひにこゝろざす所に行きとゞかずといふことなし。道に志すも亦かくの如くなるべし。

凡學をするには、敎をうくる基を立て、又禁戒を守るべし。基とは家をつくる土臺なり。學問する人は謙を以て基とす。謙とはへりくだるなり。我が身にほこらず、人に高ぶらずして、心をむなしくし、人に問ふことをこのみ、わが才をたのまず、師友をうやまひ、我が身に才力有ても、なきが如くし、をしへをよくきゝ、人のいさめを悦び、すでにしれることもしらざるが如くにして、わが知を先だてず、すでによく行ふことも、いまだ行はざるが如く思ひ、人をせめずしてわが身をせむるを、へりくだると云ふ。是學問をつとめ、敎をうくる基なり。たとへば家を作るに、先基を立つる

が如し。この基あれば、日々に善言をきゝ、わが過をしりて、知明らかになり、善日々に長ず、學の進むこときはまりなし。又禁戒を守るべし。禁戒とは、いましめて行はざるを云ふ。學問する人は、まづ矜の字を禁戒とす。矜はほこるとよむ。ほこるとはわが身に自滿して、人にへりくだらざるを云ふ。いまだしらざるをすでにしれりとし、よからざるをよしとす。もはら我が知を用ひて、人にとはず、人のいさめを用ひず、身をせめずして人をせむ。かくのごとくなれば惡日々に長ず。初學の人は先この禁戒を守り、又此基を立つべし。然らざれば學んでも益なきのみにあらず、かへつて害あり。是書をよみ學問する人の第一心得べき事なり。

人の性は本善なれども、凡人は氣質と人欲に妨げられて善を失ふ。氣質とは生れつきを云ふ。人欲とは、人の身の耳目口體に好むことのよき程に過ぐるを云ふ。生れつきあしければ人欲行はれやすし。されば、すべて人たる者は、古のひじりのをしへを學んで、人となれる道をしり、氣質のあしきくせを改め、人欲の妨を去りて、本性の善にかへるべし。是學問の道なり。故にいにしへの聖人、をしへを立て、天下の人に學ばしめ給ふは、人の性皆善なる故、學んで善にかへる道あればなり。

人皆良知あり。をしへざれども、幼よりおやを愛し、少し長じては兄をうやまふ。人皆仁心あり、孺子の井におち入るを見てはあはれむ。人皆義理あり。節にあたつては、おろかなる下部も命をおしまず、乞食にも食をけちらしてあたふればくはず。是人の性の善なる證なり。聖人の教は天下の人の生れつかざることをしらしめ行はしめんとにはあらず。心生れつかざることは、をしへてなしがたし、その人にもとより生れつきたる善心あるを本として、みちびきひらきて是をおしひろめさせんとなり。天下の人その性皆善なり、その善なるに本づきて、その生れつきたる善を行なへとみちびき給へるなり。故にその教行はれやすし。たとへば山人が斧の柄をきるに、我が手に持ちたる斧の柄を以て、新しく作らんとする斧の柄になるべき木の枝に、おしならべくらぶれば、大小長短少

しもたがはず、まぢかき手本になること、是に過ぎたる事なし。しかれども我が手に書てる字も、新しく字に作らんとする本の體とは、別の物なれば猶以て遠しとす。聖人のをしへはしからず、即その人に生れつきたる善心を本として、是をそだて養ふ道なれば、教をつくりいだし、別の道をもち來りて、その人にをしふるにはあらず。然れば天下の人、おしなべて、この道を以ていざなひみちびかば、およそ血氣ある人類は、唐もやまとも西戎南蠻も、この道を尊信して、したがはずといふことなかるべし。

學問にすぢ多し。訓詁の學あり、記誦の學あり、詞章の學あり、儒者の學あり。訓詁の學とは、聖人の書の文義を、くはしくしることをつとむるを云ふ。記誦の學とは、廣く古今の書をよみ、故事事跡を覺ゆるを云ふ。詞章の學とは、詩文を作ることを學ぶを云ふ。儒者の學は、天地人の道に通じて、身ををさめ人ををさむる道を知るを云。學問をせば儒者の學をすべし。訓詁の學は四書六經等の文義に通じても、義理をしらざれば用ひがたし。いはんや記誦詞章の學は、いよ〳〵道に遠し、儒者の學とすべからず。儒者の學に專一ならば、訓詁記誦詞章の習も略其内にかねてよし。此外に又小說の學あり、是は經史文章の學をこのまず、ただもろ〳〵の雜細の事、又あやしき事などをしるせる書をめでゝ、多く見おぼえ、樂しみとする學なり。又小說の學は訓詁詞章記誦などにならべて、學術の條理を立つるにはたらず。しかれども末世には又この學あり。學術の最下品なり。

或人の曰、儒者の學は只人道をしらば可ならん、天地の道をしるに及ぶべからずと。予答へて曰く、天地の道は人道の本なり、天地の道をしらざれば道理のよつて出づる所の根本をしらず、根本をしらざれば、天理の人にそなはり、人の天地にうけたる天人合一のすぢめをしらずして、人道明らかならず、故にまづ日用人倫の道を學んで後、天地の道を學ぶべし。聖人の易を學び給ふも此の故ならずや。されども天地の道は容易(たやすく)知がたし。

志を立つることは大にして高くすべし。小にしてひきければ、小成に安んじて成就しがたし。天下第一

等の人とならんと平生志ざすべし。世俗と同じく、いやしくひきくすべからず。かく志をたてゝ、日日月々につとめ行はゞ、久しくしてその功つもりて、必人にまさるべし。上をまなべば中にいたり、中を學べば下にいたる、下を學べば功をなさず。又心は小にしてひきくすべし。人にへりくだり、日用常行のひきゝあしもとより行ふべし。心大なれば、をごりてつゝしみなく、細行をつとめず。高ければ人にたかぶりて謙德を失ふ。

學問の法は知行の二を要とす。この二をつとむるを致知力行とす。致知とは、しることをきはむるなり。力行とは、行ふことをつとむるなり。道をしること明らかならざれば行はれず。たとへば目なきものゝ足すくやかなれど、ゆくべき道をしらで、ゆきがたきがごとし。行ふことゝするどならざれば、知りても用なし。たとへば目明らかなりといへども、足たゝざれば、ゆくことかなはざるが如し。知と行とは目に見て足にてゆくがごとし。目くらければ行くべき道見えず。足立たざれば行くことかなはず。目足ともにそなはらざれば道をゆきがたきがごとし。知を先とし、行ひを後とす、萬のこと先しらざれば行ひがたし。故に前後をいへば知るを先とす、しるは行はんためなり、知ても行なはざれば用なし。故に輕重をいへば行ふをもおもしとす。知ると行ふとの二は、一をかぐべからざること、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。學問は知と行と並進むをよしとす。並進むとは、知れることは即必ず行ふを云ふ。知と行と少しの前後はあれど、さきだちおくれず、一度につれだちてゆくをならび進むといふ。しれるばかりにて行はざるは、ならびすゝむにあらず。

知行の二の工夫を、こまかにわかてば五あり。中庸に曰、博く學び、審に問ひ、愼んで思ひ、明かに辨へ、篤く行ふ。是道をしりて行ふの工夫にして、學問の法なり。

博く學ぶの道は、見ると聞くとの二をつとむ。聖賢の書をよみ、人に道をきゝて、古今を考へて道理を求るなり。人倫の道はのせて聖賢の書に有り、よくよまん人は、白日に黒白をわかつがごとくなるべし。天下の道理はきはまりなし、その道理を

しらざれば、行ふべきすべをしらでおやまり多し。

道理はわが一心にそなはり、その用は萬物の上にあるなれば、まづわが一心の道理をきはめ、次には萬事につきてひろき道理をもとめて、わが心中に自得すべし。是ひろく學ぶなり。博く學ぶの道多けれど、書をよむほど益あるはなし。古人も、人の知恵をますは、書にしくはなしといへり。されど文字をのみ好みて、義理を求めざるは、博く學ぶにはあらず。

審に問とは、すでに學べる事のわが心にうたがはしき事を、明師良友にちかづきて、つまびらかに問ふて其理を明らかにし、うたがひをとくべし。

愼んで思ふとは、すでに學び問ひたることのうたがはしきことは、心をしづかにし、つゝしんで思ひて、よくがてんすべし。まなび問ひても、よくがてんせざれば、わが物にならず。故にわが心に道理をもとめて、その理を會得すべし。是よく思案して道理に通ずるなり。愼しんで思ふにあらざれば、道理に通じがたし。學問は自得をたふとぶ。自得とは愼んでよく思ひて、心中に道理をがてんして、わが物にし得たるなり。

明に辨ふとは、すでに愼んで思案して、猶善惡のまぎらはしきことあらば、あきらかにその是非をきはめて、善惡をわかつを云ふ。以上の四は皆知の工夫にして、道をあきらかにするなり。

篤く行ふとは、すでにまなびとひ、思ひわきまへて、その道理をしらば、即吾身に其しれる道理をあつく行ふべし。行ふことあつからざれば道たちがたし。篤く行ふの道は、ことばを忠信にしていつはりなく、行をつゝしみてあやまちをすくなくす。人の身のわざ多けれど、言(コトバ)と行との二にはいでず。故に言をまことにし、行をつゝしめば、身をさまる。又心のおこる處の用七あり、七情と云ふ。喜怒哀樂愛惡慾なり。人の身のわざはこの七よりおこる。是をつゝしみて、過不及なくして道理に　なふべし。中につきて、七情の内いかりと慾との二、尤わが心を害し、身をそこなひ人をそこなふものなる故に、いかりをこらしやめ、慾をふさぎ去りて、其はじめておこる處のきざしにかつべし。又善にうつりて、我善より猶よき事あらば、おのれ

が善をすてゝ、まされる方にしたがふべし。身に過あらばはやく改むべし。わが身に執着して、改むるにはゞかるべからず。又人に對して行ふに、人われにしたがはざる事あらば、人をせめずしてわが身をかへりみとがむべし。是皆あつく行ふ道なり。學び問ふにあらざれば道明らかならず。思ひ辨ふるにあらざれば道をわが心に得がたし。篤く行ふにあらざれば知りても實なし。右五のものは中庸にしるせる所、學の工夫なり。程子もこの五のもの、一をかげば學にあらずといへり。

常に我が身をかへりみ、又人のいさめをきゝて、わが不善なると、我あやまちとをしりて、善にうつりあやまちをあらたむべし。知ありて忠直にして、我が過を正す良友を求めて、交りしたしみて、いさめをきゝ、をしへをもとむべし。學問は我が身のあしきをあらためて、よきにうつる道なれば、我を知ありとし、我をよしと思はゞ、學ぶとも益なくして、かへりて邪氣を長すべし。人聖人にあらず、なんぞ事ごとに善をつくさんや。自是とし自足れりとすべからず。聖人すら學問をこのみて、自是とし給はず。今の凡夫いかでかあやまちなかるべき。

凡致知の法は、五常五倫の道をしるを以て先とし、家をとゝのへて民ををさむる理にいたるべし。次に萬事萬物の道理をもしりきはむべし。天地の内にあらゆる萬事萬物は、皆我が心の分内のことなれば、その理をしらずんばあるべからず。天下の理をきはめしるの道は、本とちかきとを先とし、末と遠きとを後にして、前後緩急の次第を失ふべからず。・

學ぶ人は只我が知のくらく、わが徳のすゝまざることをうれふべし。われに學問才智技藝ありとも、我を知ありとし、我が才にほこる心あるべからず。人各知あり、又長ずる所あり、人をおろかにしあなどるべからず。いさめをふせぎ我を是とすべからず。おのれが不善をすてゝ人の善にしたがひ、人の善を用ひて我身に行ふべし。我を知ありとするものは惡德なり。いましむべし。その愚をしるものは大愚にあらず。其過をしるものは大なる過なし。故に高滿にしておのれをゆるすものは必愚人なり。いかんとなれば、自知の明なく、知をひらき

善にすゝむの基なくして、終に愚にてをはる。人をあなどる者は必天のとがめありて人のせめあり。人をそしる者は必人にそしらる。古の君子は聰明睿知なれども守るに之以て愚。いはんや末世の凡夫、わづかなる智恵才能にほこるは甚おろかなりといふべし。尚書にも、その善にほこれば其の善をうしなひ、その能にほこればその能を失ふといへり。わが身にほこれば、みづから是として吾に過惡あることをしらざる故に、過を改め善にうつることあたはず。惡日々に長じ、善日々に消え失ぬ。しかれば、たとひ聖人と同じく居て、朝夕をしへをうくとも益なかるべし。つとめて書をよみ學問すとも、其の身に益なきのみにあらず、却て邪智をまし、才能にほこりて害あり。こゝを以て矜は天下の惡德の由、古人のいましめ明らかなり。學問する者まづ第一これをいましむべし。文盲なる人のことばに、學問すれば人品あしくなる、益なくして害ありといふは、世上にかやうの人あるを見て、そのくひせを守り、その上その人もとより學問をきらふ故に、實にかくいふなるべし。もし己が身ををさめんために實にまなばゞ、なんぞ益なからんや。害なからんことはいふに及ばず。

理をきはむるも事をしるも、一重に物を思ふべからず。うちのはまゆふの百重なることを思ひて、幾重にも理をきはむべし。心あさき人は一重をしりて、はやことはり至極して、この上なしと思ふははかなきことなり。今日一重をさりて、明日又一重をさり、日々かくのごとくすべし。皮をつくして肉を見、肉をつくして骨を見、骨をつくして髓を見るべし。凡理をきはむる學問は、心あらくかろき人は、なしうべからず。心くはしく靜にすべし。

孔子曰。古之學者爲己。今之學者爲人。爲己とは我が身を修める爲にする實學なり。爲人とは、人にしられんがためにする名利の學なり。學問の本意は己が身ををさめんためなれば、人の知と不知とにかゝはらず。たとへば食する者のわが飢をやめ、身を養はんためにするがごとし。只わが腹にみちなんことをのみ思ひて、さらに我が食したるを人にしらせんと願ふ心なし。學問はたゞ我が身ををさめんためにすべし。聊人にしられん爲にす

べからず。又聖人の子夏に、女爲二君子儒一無レ爲二小人儒一との給へり。此意は、君子儒は只己が身ををさめんために學べり。實學なり。小人儒は只人にしられんためにまなべり。是名利をねがふ心のみにて、我が身ををさむるに志なし。僞學なり。こゝを以て君子の心は、日々に善にすゝみて上達し、小人の心は日々に惡におちいりて下達す。同じく力を用ひて學問せば、君子儒となるべし。小人儒となるべからず。つとめまなんで小人儒となるは口をし。學者まづ初より己が爲にする志を立つべし。是學問する人の第一に心得べきことなり。しからざれば博く書をよみ學問しても、益なくしてかへつて害あり。

書をよまばわが身に受用することを專一に志すべし。受用とは、書にしるせる聖人の敎をわが身にうけ用ひて、まもり行ひ用にたつるを云ふ。もし書をよみ義理をきゝても、身にうけ用ひずして行はざれば、何の益もなきいたづらごとなり。大學をよんで、如レ惡二惡臭一。如レ好二好色一。とあるを見ては、我が心にこれをうけ用ひて、實に惡をきらふこと惡臭の如く、善を好むこと好色のごとくすべし。論語をよんで、父母につかへてよく其力をつくし、君につかへて能くその身をゆだぬとあるを見ては、そのごとくおやにつかへて、わが身の力も財の力も、をしまずして孝をつくすべし。臣としては我が身をわがものにせずして、わがくしをわすれ、專ら君に忠をつくすべし。自餘も皆かくのごとくすべし。是を書をよんで受用すると云ふ。もし書を多くよんでも受用せざるは、口耳の學といひて、耳にきゝて頓て口に言ひたるまでにて、心にまもり身に行はざるは無用の學なり。

初學の人、書をよむにはまづ四書を熟讀し、又五經をよくよむべし。五經は上代の聖人の敎なり、文字の祖義理の宗と云ひて、文字のはじめ義理のをしへの本なり。四書は孔門のをしへなり。是をよむはまのあたり聖賢の敎をきくが如し。尊ぶべし。文義やうやく通ぜば、四書の註、大學中庸の或問を見て、後五經の註を見るべし。次に周程張朱四家の書を見るべし。中につきて程朱の書尤よくよむべし。殊に小學の書は身ををさむる大法をしる

せり。人倫の道はゞ備れり。はやくよんで其の義を習ひしるべし。又歴代の史、左傳史記朱子通鑑綱目を見るべし。是道をしり古今に通ずる學問の法なり。經傳及歴代の史に通せば、天下古今の事理明らかならずといふことなかるべし。聖人の書を經と云ふ、經とは常なり、聖人の書は萬世の常道なり。賢人の書を傳といふ、傳とは聖人の道を述べ、後代に傳ふるなり。四書五經は經なり。其註並周程張朱の書は傳なり。歴代の事をしるせる書を史と云ふ、記錄のことなり。子は荀子揚子淮南子說苑文中子等の諸子の書を云。是は程朱の書のごとく、道理精明なるにはあらざれども、經書の義理を助くる益あり。見るべし。集は諸家の文章等の書なり、是又義理を發明せり。この經史子集の四の書は本末輕重あれども、皆學問のため用ある書なり。道をしらんとならば、經學を專として一生つとむべし。次に史學是もその益大なり。次に諸子諸集を見るべし。朱子綱目尤好書なり。古代の治亂盛衰の事迹をしるのみにあらず、義理の學にも亦大に助あり。殊に國土をさむる人の明らかなる鏡なり。又軍の勝敗の道を記して、兵術を學ぶ人にも其益あり。古來要用の故事も亦この内に多し、彼是其益多し、つとめて數遍見るべし。誠に經世の大典とすべし。その外和漢の記錄ちからにまかせて見るべし。又いとまあらば諸子百家の書を見て經說を發明し、義理の趣をひろむべし。しかれども、もはら博覽をつとめて雜學にうつり、志をうしなふべからず。學問は博くして又約にすべし。博ければ義理詳にして、備らずといふことなし。約なれば義理精しくして、明かならずといふことなし。博く學ぶにいとまなく、又中年以後はじめて學ぶ人は約にすべし。古人も博くして雜なるは、約やかにしてくらきにしかずといへり。およそ書をよみ學問するは、道をしらんがためなり。道を知らざれば、廣く古今の書をよみ、詩文章をよく作りても要用なし。學問の本意にあらず。又四書五經等の文義に通じて、古今の書をひろく見ても、一生義理をしらざる人多し。道に志なければなり。又志ありてもまなびやうあしければ、一生道をしらず。或は聰明の足らざる故にもよれり。

知をひらくことを勤むべし。

心學に志す人は日新の工夫を用ゆべし。日に新にすとは、昨日のふるき惡をあらためて、今日あたらしく善にうつり、けふはきのふにまさりて新しくなるを日に新にすといふ。如レ此くなれば、今日は是にして、きのふは非なることを覺ふべし。かやうにつとめてやまざれば、日々に工夫進み、月々に異にして、年々に同じからず。一日は一日の功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の功あり、三年には千日の功ありて、德にすゝみ善にうつりゆかば、其樂極りなくして、手の舞ひ足の踏むことをしらざるべし。かくのごとくすすみゆかば、君子となること必期すべし。若けふはきのふにかはらず、今月は前月にことならず、ことしはこぞに同じくば、日に新にするちからなくして、いつまでも愚者にて世を終らんこと口をし。

文學をつとむるも亦同じ、日々につとめてやまざれば文學日々にすゝむ。數年の後は經傳の義理に通じて樂となる。十年の功は甚だ大なり。文學半は成就す。

萬の事はじめに苦勞せずしてをこたれば、後に功ならずして樂なし。たとへばわつき灸をこらへ苦き藥をのめば、後に無病の人となるが如し。學問において尤このしるしあり。わかき時辛勞する人は老て後樂多し。

書をよむには、まづ四書五經などを熟讀し、文字をおぼえて訓詁に通ずべし。訓詁とは字義をいふ。文字訓詁をしらざれば、書を見わけがたく、ちからなくして、書をよむにはかゆかず。文學のすゝまざるは、字をしらざればなり。されども文字訓詁にかゝはり止まりて、義理を自得せざるは君子の學にあらず。

學問は智惠をひらく道なれば、廣く聞き多く見て義理に通じ、我が心に智惠のおのづからひらくるを待つべし。聰明をたのみ、我が才智を先だて用ゆべからず。人の才智をおさへずして、人の善言を取りもちゆべし。位たかく年たけたる人、或は才學の名ある人も、其の位と年と才とにほこるべからず。只人にへりくだりて尋ねとふは、知者のま

すく＼智をます道なり。
凡幼ようりつとめまなふに、ひまををしむべし。いにしへの禹王は、聖人なりしだに、猶寸陰ををしみ給ふ。いはんや今の凡人をや。いたづらに悠々として、むなしく時日をつひやすべからず。光陰箭のごとく、時節は流るゝがごとくなれば、年わかきをたのんで時をうしなふべからず。人の世におるは、老幼の時とやまひする時は學びがたし。又四民ともにその家のことわざしげくして、もの學ぶひまはすくなし。そのすくなき隙ををしまず、怠りてむなしく過ぎ、或は無益の事をなして時を費し、一生をはかなくをはらんこと、いとおろかなりといふべし。今年の今日ふたゝび得がたきことを思ひて、かりにもいたづらに時をわたるべからず。是一生の間心を用ゆべきことなり。古人も常にしておかず、つねに行ひてやまざる者には及びがたしといへり。又いたづらになすことなく、常に隙多き人は、人にすぐるゝことはなきものなりといへり。たとへば農人商人のつとめていとまををしみ、朝夕田を作り、あきなふ者は必人にすぐれて、その家とみて衣食ともしからず。古人も人生はつとめにあり、つとむれば則ともしからずといへり。國家の政をくはしくつとむれば、其國家必をさまる。學問をくはしくつとむれば、必諸人にすぐれてその才すゝむ。萬の事皆しかり。隙ををしみて久しくつとむれば、成就せざることなし。それ人の寶はいとまに過ぎたるはなし。いかんとなれば、君子の學問をつとめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝をまなび、農の田を作り、商人のひさぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛をおりぬふも、皆いとまを用ひてなし出すわざなれば、人の尤おもんじをしむべきこと、いとまに過ぎたるはなし。故にそのをしむべきこと、金玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶといへり。隙ををしまざる人はまなぶことも、つとむることもなければ、必才智も徳行も藝能もなきものなり。いとまををしまざれば、君子は身ををさめ、家をとゝのふる事あたはず。農工商はその家事を失ひて、貧窮飢寒をまぬかれず。學者は必無學にして不才なり。[illegible]

しは必賤工なり。よろづの道々のたくみも、いとまをしまざれば、必つたなし。是いとまは人生の寶にしてをしむべき故なり。就㆑中年少の時は事すくなく、いとま多し、精力つよく記憶つよく、一たび見きゝて覺えしこと、身を終るまでわすれず。この時つとめまなべばその功多し。故に書をよむとは、少年の氣力つよくいとまある時、よくつとむれば大にすゝみて益あり。三十歳以後は、よろづつとめ多くなりて、いとますくなく、精力やうやうよわくなるにしたがひて、その覺えおとろへぬれば、力を多く用ひてもわすれやすく、勞すれども功すくなし。年少なる人はこれをよく心得て、わかき時隙をしみ、學問をつとむべし。誠に一生の寶となるべし。淵明が詩に曰。盛年不㆓重來㆒。一日難㆓再晨㆒。及㆑時當㆓勉勵㆒。歳月不㆑待㆑人。又古詩に。少壯不㆓努力㆒。老大徒傷悲。といへり。わかき時是をよく考へ、後悔なからんことを思ひて、時日をしみてつとむべし。又よくつとむれども、學問の術をえらばざれば一生益なきことにまよひ、心を用ひくるしみて、よき道をしらず。是又おろかなりといふべし。

凡君子の學問は知仁勇の三德を本とし、五倫をあつくするを道とす。知仁勇は五倫の道を行ふ心の德なり。知は五倫の道をしり、仁は五倫の道を身にたもちおこなひ、勇はつとめてしり、つとめて行ふ。しるも行ふも勇を以てつとむ。君子の學問をするに、その心法とするは三德なり。行ふべき道とするは五倫なり。三德と五常とは理同じ。五常はむまれつきたる性なり。三德は學問をする心法なり。五常をつゞめていへり。

孔子曰。學而不㆑止。闔㆑棺而止。人と生れては人の道をしり、この身をよくをさめて、君子となることをつとめとすべし。是人と生れたるかひあらんとなり。しかれば、人となるべき道を學ぶことをおこたるべからず。一息も猶のこれる內は學ぶことやむべからず。死して後やむべし。

大和俗訓卷一卷終

大和俗訓卷之二

貝原篤信著

爲學下

小學の教は小子のまなぶ所少なる學問なり。いにしへ八歳になれば、たかきいやしき、凡天下の人の子となり弟となれる者、師のをしへをうけてまなべり。これ小學なり。そのをしへは、父母に孝し、兄長をうやまひ、君上につかへ、賓客に對する道、或は座敷をはゝき、飲食をそなへ、尊者の前にすゝみしりぞき、いらへこたへをする禮をゝしへ、又日用の禮樂射御書數の六藝のわざをもをしへ、是を以ていとけなき時より、その心をやしなひ、年長じて、大學の道をまなぶもとゐとせり。凡小學はわざをゝしふるなり。

大學とは、十五歳以上成人のまなぶ所、身を治め人ををさむる大なる道理の學問なり。天下ひろしといへども、己と人より外なる物なし。己ををさめ人ををさむる道をまなぶは大なる學問なれは大學といふ。明德を明らかにするはおのれを治むるなり。民をあらたにするは人ををさむるなり。至善にとゞまるは、明德をあきらかにし、民をあらたにするに、皆至極の善にいたりてとゞまるべしとなり。故に明德新民の外に、至善にとゞまる道あるにはあらず。右の三綱領は大學の大要なり。此三にいたる工夫の條目八あり、八條目は三綱領の内のこまかなる工夫なり。格物致知は事物の理をきはめしりて、知を開く道なり。誠意より以下は、皆力行の道なり。就ゝ中誠意正心修身は、ともに身ををさむる道なり。齊家治國平天下は、人ををさむるの道なり。凡大學は理を教ゆるなり。

大學に、格物致知を以て、道理を明らかにするを、身ををさめ人ををさむるつとめのはじめとす。格物とは、萬事萬物の道理にきはめいたるを云ひ、致知とは、わが心の知をきはめて、明らかにするなり。格物の次第は、まづ五常五倫の道、身を治め家をとゝのふるちかきとよりして、次第を以てやうやく國天下ををさむる理にきはめ至る。是格物なり。かくのごとく萬事萬物につきて理をきはむ

れば、わが心の知おのづから明らかになる。是致知なり。故に格物の外に致知の工夫なし。是大學のつとめのはじめなり。その次は誠意にあり、意とは心のはじめておこる所の苗なり。心の體はしづかにして、善惡いまだあらはれず、その初めてうごく時、善も惡もあらはる。意のおこる時にこのむと惡むとの二あり。惡むとはきらふなり、この時善をこのみ惡をきらふこと、眞實にしていつはりなきを誠意といふ。たとへば善を好むことは好色を好むが如くにして、惡をにくむことは、惡臭をきらふがごとくに眞實なるべし。是つとめ行ふ初めなり。善をこのみ惡をきらふこと眞實ならざれば、本たゝずして萬の道行はれず。故にこの後正レ心修レ身齊レ家治レ國平ニ天下一の工夫も皆是を以て初とす。されば大學の八條目は格物と誠意を以て要とす。格物は知のはじめなり。誠意は行のはじめなり。格物なくして萬の理をきはめざれば智明らかならずして、善惡をわかちがたければ、まよひてさとらず、夢のいまださめざるがごとし。誠意なくして、善をこのみ惡をきらふ、意誠ならざれば道を行ふべき基なくして、いまだ善人とはいひがたし。故にこの二を以て、致知力行のはじめとすることとむべならずや。

凡人には必生れつきたる良智ありて、いかなる愚者も善惡をすこしはわきまへしれり。その上學問して理をきはめ、其智やうやくひらけぬれば、善を善とし、惡を惡とする心、いよ〳〵明らかになりぬ。されども善をこのみ惡をきらふに、誠なければ善行はれず。惡去らずして、生れつきたる良智のちからも、學問してしれる所も皆無用となりぬ。この故に學者道を行はんと思はゞ、まづ善を好み惡をきらふに誠あるべし。故に誠意の工夫尤大切なり。

學問の要二あり。いまだしらざる時は知らんことを求め、既にしれらば行ふべし、知らざれば行ひがたし。行はざればしらざるに同じく、無用の事となりぬ。こゝを以て學問の道は、只知と行との二にあり。又萬卷の書をよんでも、道をしらず行はざればよまざるに同じ。是道に志なければなり。こゝを以て大學の道まづ格物致知して、事物の理

をきはめ、わが知をひらき、さて知れる所の善をこのみ惡をきらふ心實にして、知れる所を行ふ、是誠意なり。知ることいたらざれば、萬事の善惡わきまへがたし。意誠ならざれば、善をなし惡をさること、實ならずして道行はれず。この二は大學の道の要にして、知行の工夫なり。

博學にして經書に通じ、義理をとく人も、その心術行迹あしくして俗人におとれるもあり。是道に志なくして、道を我が心に得ざればなり。口によみならひ、目に見おぼえても、その理を心に得ざれば益なし。たとへば美食芳樽前に多くつらなれども、これをのみくらはざれば、食にあくこともなく、酒にゑふこともなきが如し。書をよんで、行あしき人あるをうたがふ人あり。これを以てうたがひをはらすべし。書をよみても道に志なくば、文字をしれるのみにて、心において益なし。是無用の學なり。こゝを以て學をするにはまづ志を本とすべし。

朝は師にまなび、晝は朝まなびたることをつとめならひ、夕はこれをいよ／＼かさぬ。夜は一日の間のあやまりをかんがへて、あやまちなければ、夜をやすくいぬべし。もし過あらば、悔ひはなて來日のいましめとすべし。是國語にいへる所學問の法とすべし。

いまだ書をよまざる人のためにいはゞ、この道を行はんと志を立つることは、まことに第一なるべし。されど經書をはじめとして、ひろく古の書をよまざれば、聖人の教をしらで道にくらく、言ふこと行ふことひが事のみなるべき。又古來歷代の事をしらでは、今日のかゞみとすべきやうなし。ここを以て、つとめて朝夕書をよみ、いにしへをかんがふべし。いかに生れつきたる才ありとも、稽古なくては、おのれと道をしり、古今天下の變をしるべからず。もし又すでに書をよめる人のためにいはゞ、學問はたゞわが身のあやまりをあらため、善にうつりて、身ををさむる工夫を專一にすべし。書をひろくよみ、古今天下のことに通ずとも、もし我が身のあやまちをあらためず、善を行はずばいたづらことなり。しかれば、學問はまづ志を立て、身に行ふを第一とすべし。書をよむはこ

れ第二義なり。

學問の道は師をたつとぶにあり。師尊くして道尊ぶべし、道尊くして民道をうやまふ。故に君として位高しといへども、師をば臣としていやしめず。いにしへ大學にしては、天子にをしふるにも北面せず。師をたつとべばなり。

此道理の天下にある處は、まづ吾が心を本とす。人にまじはれば、君臣父子兄弟夫婦朋友の間行ふべき道あり。又我が身の萬のわざに皆一定の道理ありて、暫時も此の道をはなれがたし。凡夫といへど此行ふべき道理のそなはること聖賢とかはらず。又いかなる愚人も、善をこのみ惡をにくむ心あり、生れつきたる良智ありて、この道のかたはしを少しはしりて、日々用ひ行ふ。しからざれば一日も世にたつことかたし。君父にそむき、亂逆をなし、人とあらそひ、人ををかしかすめ、非法をおこなひては、しばらくも世に立つべからず。されども、凡夫はこの道を能くしり、能く行ふことかたし。故にいにしへの聖人世に出で給ひて、教をたてゝ道理を明にして、これを書にあらはし給ふ。天下の事大小精粗萬事の道理、一として聖賢の書に明らかに備はらざる事なし。たとへば日月の天に中して、萬物のかたち分明なるは、凡目あるもの是を見ざることなきが如し。其書をよむものは必その道をあきらめ、その理を我が心にたもち、身に行ひて、人倫にまじはり、萬事をつとめ、人民ををさむ。かくのごとくにして、人の職分をつくして、天地の間にたつべし。若如レ此ならざれば、人たるの道をうしなひ、人の職分かけ、天地の理にそむけり。凡物皆職分あり、天地は物を生じやしなふを心とし給ひ、天はおほひ地はのする、これ天地の職分なり。萬物の微細なるも皆各職分あり、雞の晨をつくり、犬の夜を守るの類、みなその物に生れ得たるわざをつとむるを以て、其物の職分を行ふとす。人は萬物の靈なり、其心本明らかに、萬理備はれり。若人として身に備りたる理を行はずば、人の職分をむなしうすといふべし。人を以て鳥獸にだもしかざるべけんや。

書をよむ人は、まづ其學問のすぢを正しくし、又心術を正しくすべし。學問も心法も、一すぢに天地

聖人の道にしたがひて、一點も邪をまじへずして純一なるべし。聖人の道をこのむとも、その間に又少しにても聖人の道に似ざる所あらば、純一なりといひがたし。學純一なれば、その心法も邪なくして正し。心法正しければ、行事にあらはし發するも皆正し。たとへば道をゆく人の、まづ道のすぢを尋ねしるが如し。道のすぢをしらずして、ただに行くことをのみつとめば、たとへば都にある人奥州にゆかんとて、まづ淀山崎へむかひ行くが如し。いよ／＼つとめ行くほど、いよ／＼奥州には遠ざかるべし。是只道をいそぐことをしりて、道をあやまることをしらざるなり。

孔子曰「幼成如二天性一習慣如二自然一」とは、幼少より習ひて成就したることは、天性にうまれつきたるが如くなり、又ひさしくならひなれてそみぬることは、よきもあしきもつとめずして、自然によくするが如しとなり。善惡ともに性に出でたるよりも、習より出づること多し。然れば習ひなるゝこと、善惡をえらびつゝしむべし。ならひてなれぬることは、生れつきたる自然の如し。學問をするも善にならひなるゝわざなり。人の惡をするも必生れつきてするのみにはあらず、惡人にならひてすること多し。故に孔子も、性は相近し習へば相遠しとのたまへり。

およそ人の不孝不忠、もろ／＼の惡を行ひ、慾をほしいまゝにし、身をほろぼし、家をほろぼすにいたるは、何にかよれるや。知なければなり。又善を行ひて家をおこし、身をたもち、ほまれを得るは、何の故ぞや。知あればなり。知あればよく善惡をしる。善のなすべきことをしりて行ひ、惡のなすまじきことをしりて行はず。この故に知は身の内の大なる寶なり。學者道に志さば知を求むるを第一とすべし。知をひらくことは、學問の功にあらずんば成りがたし。

程子の曰、人の不善をするは只知らずとす。言ふこころは、世人の惡をするは惡のすまじき理をしらざればなり。よくしれらばなどか人のためわがため、あしきひがことをば行ふべき。たとへば赤子のはらばひて井に入らんとするは、赤子のとがにあらず、いまだ知あらずして、井に入れば死ぬる

ことをしらざればなり。世の人の惡をするも亦かくのごとし。あはれむべし。故に學問して知をひらき、道をしることをつとむるは、人間の一大事なり。

學問はそのはじめをつゝしんで、その術をえらぶべし。もしそのはじめ、學術正しからず、一たびあやまりてあしき方にふみまよへば、其あやまりにならひて、改めてよき道に立ちかへりがたく、身を終るまで、ひがことにまよへることをしらず、かへりて正しき道をきらひそしる、天地の道にそむき人の道を失ひ、一生の間まよひてさとらず、かなしむべし。學問せんと思はゞ、必まづ明師良友にしたがひて學術をえらぶべし。是はじめをつつしむなり。易緯に、君子愼レ始、もしたがふこと毫釐なれば、あやまるに千里を以てすといへり。はじめのたがひは少なれど、後のあやまりは千里の遠さにいたる。そのはじめ學術をえらぶこと、あにつゝしまざらんや。

千里の道も一歩よりはじまる。たとへば遠き所に行くに、出でたつ足もとよりはじまりて、つとめゆきてやまざればとゞかざることなし。學んで道にいたるも亦かくのごとくなるべし。志を立てゝ道をまなび、つとめ行ひてやまず、久しく年をつまば、などかその功を成して遠大にいたらざらん。たとへば商人の一錢ををしみ、つみかさねて、久しく年ふれば大なる富人となるがごとし。

聞見の智あり、眞智あり。聞見の智は、書をよみ人に聞きてしるを云ふ。是しることあさし。眞智とは聞見の智によりて、わが心に道理を眞にしるをいふ。是しることふかし。學問はまづ聞見の智より入るべし。書をよみ道をきかざれば、眞にしるべきやうなし。聞見たるまでにとゞまりて、眞にしらざるは道をしるにあらず。眞にしればよく行ふ、しりても行はざるはいまだ眞にしらざるなり。故に學者は聞見の知を初として、後には眞智を求むべし。聞見の學にとゞまるべからず。

書をよみ學問すれば、聞見の智は日々にすゝむ。されども知れることをおこなはざれば、德行は日々におくれてすゝまず、行はざれば其しれる所眞智にあらず。故に今の學者は其まなぶ所とおこなふ

所と、大にそむけり。是己がためにせざればなり。學者まづ誠の志を本とし、聞見の智より入りて、知れることを行ひ、眞智にいたるべし。

學問の道は心をむなしくし、へりくだり、よくしれることをもしらざるが如くにし、能く行ふことをも行はざるが如くにし、我が才と行とにほこらず、わが智を先だてずして、人に問ひ、人のいさめを聞き用ひ、我が過を改めて善にうつるべし。かくのごとくすれば、學問の益あり、善にすゝむことき はまりなし。もし自ほこり、我を是とし、人を非とし、人の諫をふせぎ、我が過をきく事をきらはゞ、才學に長ずるにしたがひて、その心あしくなりて、學問の益なきのみにあらず、かへりて害となるべし。是己が爲にせずして人のためにする故、君子儒とならずして、小人儒となるなり。かくのごとくならんは學ばざるにおとれり。

學問に有用の學あり、無用の學あり。わが儒の學は、有用の學なり。有用の學とは、學問をすれば、わがため人のため益となるを云ふ。この故に學問の道は有用の學をすべし、無用の學をすべからず。有用の學は身ををさめて、人倫の道をあつく行ひ、ことに忠孝をつとめ、善をなして人を助けすくふにあり。貧賤なる者も善を行ふ志だにあれば、人を救ふこと多し。いはんや富貴の人は、そのちからによりて其のほどこしひろし。故に富貴の人の學は我が身を修むるのみならず、仁愛の心を本とし、人を助けすくふことを、專つとめ行ふべし。是皆有用の學なり。もし口に高きことをとき、心にいさぎよきことをこのみ、身に艱苦なることを行ふとも、仁義の心を求めず、人倫の道を行はず、善をなして人に益あることなくば、無用の學なるべし。又詩文を作り、心をくるしめ、多く暇をつひやし、たくみにかざりて、人にほめられんことを求めて、日用人倫の道に志なきは、益もなきいたづらごとなり。皆是無用の學なり。

楊子曰。學者所以求爲君子也。言ふこゝろは、學問をするは何の爲ぞや、君子とならんが爲なり。君子とは有徳人を云ふ。君子の字義は、易の正義に、人の君となりて萬民を子のごとくする德ある人といへり。いやしくして下にありても、その

德あれば君子と稱す。君子となるとは人となるなり。學ばざる人は云ふにたらず、學んでも君子とならずんば、學ばざるに同じくして人と生れたるかひなし。君子となること容易(タヤス)からず。しかれども、志を立ておこたらずんば、必その功あるべし。古語にも、志あるものはその事つひに成るといへり。學は終ㇾ身のことなり、一息もいまだのこれる内は、この志おこたるべからず。是れ人の一生の間のつとめなり。

およそ、人聖人にあらざれば、必あしき生れつきのくせあり。是氣質の偏なり。故に身をさむる道は他なし、たゞ我が氣質のあしき所をみづから察し、人にいはせてきゝ、其の偏なるあしき所にかちて改め去るべし。かくのごとくせずして、生れつきて偏なる所にまかせねれば、必正しからずして身をさまらず。書をよみ學問し、道を好み行ふと思ふも、皆我が氣質の偏なることを行ふ。故にいたづらごとゝなる。氣質の偏の害となること、たとへば田を作るに莠(ハグサ)あるがごとし。苗を植ゑて水をそゝぎ肥しても、莠を去らざれば苗長せず。水と肥しの養ひも、皆莠のためになりて、いたづらごとなり。故にわが氣質のあしき所を知りて改むること、これ學問する人の專つとむべきことなり。學者必こゝに常に心を用ふべし。およそ、人のあやまりあしきことは、皆その生れつきの偏なるくせよりおこる。こゝを以て、學者は必氣質を變化して過を改むべし。是學問の要なり。我が氣質の偏惡と、我が過をみづからしる人まれなり、かへりみて察し知るべし。正直にして過をつぐる益友を求め、忠臣を近づけて諫を聞き用ふべし。碁をうつ人は手見えず、傍より見る人は、眼よく見ゆるがごとし。

君子は氣質の偏惡なし、無病の人なり。衆人は皆氣質の偏なる病ある故、過のみ多し、皆病人なり。その病を去りて君子にいたるべし。病を其まゝおきて、其惡を長ずべからず。病を去らんと思はゞ、明師良友にあひて、その敎をうけ、其氣質の惡しきを改むべし。たとへば病人の良醫にあひて、其の病をいやすが如し。病人は醫を招きて藥を服せざれば、無病の人となりがたし。衆人に氣質の病あ

るも亦しかり。師友にあひ、又みづからせめて、其氣質の病を改め去らずんば、君子とはなりがたかるべし。朋友の我が過を正すをきらひ、臣下のいさめをふせぐは、病人の醫をきらひて藥を用ひず、病死すれどもさとらざるがごとし。かなしむべし。

古語曰。人生至樂。無レ如レ讀レ書。至要無レ如レ教レ子。又古人の詩曰。至哉天下樂。終日在二几案一。書をよむの樂、いたれるかな。富貴ならずしてその樂大なり。酒色ならずしてその樂ふかし。山林ならずしてその樂しづかなり。古語に、書をよむこと一卷なれば、一卷の益あり、書をよむこと一日なれば、一日の益ありといへり。又人の神智をますこと、書をよむにしくはなしといへり。富貴にして書を好む人はその樂ひろし。貧賤にして書をこのむ人はその樂ふかし。次に子ををしへて、我が志をつがしむべし。是肝要のことなり。子を教へずして、道をしらしめざるは、父のあやまりなり。不仁と云ふべし。

うたがひを人に問ふは、智を求むる道なり。みづから心に道理を思ふは、智をひらく本なり。問ふは智を人に求るなり。思ふは智をわれに求るなり。人に問はざれば、知ることせばくして心に迷ひとけず。みづから思はざれば、見きくことひろしといへども、道理をわが心にふかく自得せず。この故に、問ふと思ふとの二は、理をきはめ智を明らかにする道にして、學の要なり。

道に志なき人は、いふにたらず。たとひ道に志ありて、ひろく學ぶとも、學びやうあしければ一生道をしらず。或は道學をこのめども、文句にかゝはりて義理に通ぜず。是を訓詁の學と云ふ。その人はみづから道學をすと思ひ、自是とし人にほこれども、訓詁の學なることをしらず。又道學の名をむさぼりこのみて、その實なき人あり。只道學の實をこのむべし。道學の名を好むは、不實にして益なし。又古訓を學ばず、聖人の法にしたがはずして、ひとへに我が心に求る學あり。是無學にまされりといへども異學にあらずや。師傳ありといふとも私の學なり。眞の學問をせんと思はゞ、道に志し德をたつとびて、孔孟の教を本とし、程朱の說を階梯とすべし。是すなはち眞の學なり。未

世にいたりてあしき學術多し。ゑらぶべし、迷ふべからず。

學者、文學才術に求るつとめは常に多く、日用德行に心を用ふるつとめは常にすくなし。是學問の本意を失へり。もし德行をつとめずして文學を好むは、たとへば酒をすてゝ糟をくらふが如し。よき所をば取りて用ひずして、よからざる所をこのむなり。

道をしること至りてかたし。よのつねの俗學の習にては、身を終るまでつとめ學びても道を知りがたし。まづ學を好むに誠の志ありて、明師良友にしたがひ、いにしへの學のすぢをたづねもとめ、心を用ふること久しくば、その功あるべし。利口にして我が才にほこり、このんで我が智をたのみ用ふる人は、道に遠き生れつきなり。身ををはるまで、此道をしることかたかるべし。只生れつき質實にしてかざりなく、その心しづかに、義理にさとく、へりくだりて自是とせざる人あらば、これ道にちかき生質なり。かゝる人、志專一にしてよく學ばゞ、この道をやうやく晩年にしてしるべし。

世の人、多くは藝をこのみて學問をこのまず。藝は、たとへば木の枝葉なり、學問は、たとへば木の根本なり。根本をつとめずして枝葉をつとめ、本をすてゝ末に專なるはひがごとなり。道學なければ、藝多くしても根本たゝず。君子とすべからず。又技藝なければ、事に通ぜずして其德の助なし。野人といふべし。

わかき時は、經學を本として、ひろく群書に通じ、且又有用の諸藝を習ふべし。中年以後は、博覽をやめて經傳の要文をつゞまやかにあぢはひ、道理をくはしくし、心に自得せんことを求むべし。

いまだ道をしらざれば、ゆめ見てさめざるが如し。故に大學の致知を夢覺の關と云ふ。ゆめみると、さむるとのさかひなり。善をこのむこと誠ならざれば、惡人の境界をまぬがれず。故に大學の誠意を善惡の關と云ふ。善人と惡人といさかひなり。關とは內外のさかひなり。

聖人は人倫の至りなり。吾がともがらの口にかけまくは、いともかしこし。されど弓ゐる者は、はじ

めより的に志し、道ゆく者は初より家に志すがごとし。聖人をめあてとして、その志を立つることは高くすべし。然るに千里の道も、出でたつ足もとの一歩よりはじむる理なれば、道を行ふことは、まづ日用のちかくひきゝ所より行ひて、やうやくへのぼりて高きにいたるべし。はじめよりしなをこえて、高くいたらんとするは、つばさなくして、天に上らんとするに同じ。必この理なきことをしるべし。たとへば高山にのぼるにも、先ふもとの一足よりはじむるがごとし、一とびに山上には上りがたし。萬事は次第にしたがはざれば成就しがたし。ちか道なることは、口にいふところは快しといへども、道理のなきことは、ならざるものなれば、虚妄の説、無用の辯は、いたづらことなり。ふたゝび生れ來るべきたのみなき此世の間なるに、天地人のいたれる道をまなんで樂しまんこそ、いけるかひありて、身終る時もうらみなかるべけれ。我が身の私慾にくるしめられ、世俗のいやしきならはしにまよひて、人の道をしらずして一世を終らんこと、かへすがへす口をしと思ひ、かねて心を用ゆべし。

聖人の書をよみ、道をこのみて日を送る人は、誠に諸人にすぐれ、一生の間常に樂しみて、思いで多き世なるべし。かくのごとくならば、人とむまれたるかひありて、朝にすでに道をきゝなば、夕に死ぬともさらにうらみあるべからず。貧賤にして時にあはざるは憂ふるにたらざるべし。もし聖人の道をまなばずして、道をしらずんば、此世にいける時は禽獸と同じくして、人とむまれたるかひなく、死して後は草木とおなじくくちはてゝ、人のほむべき佳名を殘すこともなく、後世にいたりてしる人なかるべし。われも人も、皆かくのごとくなれど、人とかく生れし身を、とりけだもの草木に同しくせんこと、ほいなきことならずや。これを口をしと思はゞ、わにこのうれひをまぬかるべき道なかるべきや。人の身はふたゝび得がたし、むなしく此世を過すべからず。

書をよみ學問せんとする人あれば、彼のきらふ人、色々いひさまたげて、學問することをそしる。まことぞと心得て學問をやむる人多し。又我が子に

書をよませんとするに、かのきらふもの書をよめば、病者になり、氣へり、いのちみじかくなるなどといひておどせば、おやは子をいつくしむ心ふかくして、もし左もあるべきかと思ひて、書をよませざるゆへ、其子は一生文盲に、おろかにて身ををはる。あはれむべし。

書をよまざる人は、書をよむ人をきらひにくみて、書をよめば氣へり病者になり、心うつけてぬるくなり、出家長老のごとく、武道もよはくなるといひてそしる。書をよむ人、これをきゝて、いかりあらそひ、口論となり、たゝかひに及ぶことそのためしあり。凡人は、ひとの我に同じきをよろこび、我にことなるをにくみ、わがしらざるを以て人のしるをそしる。是凡人のつねの心なり。かゝるひがことをきゝて、いかりあらそふは、われも亦彼のおろかなる人と同じくなるは口をし。書をよみ學問するは、かゝるおろかなる人になるまじきがためなり。愚人の學問をそしり、我ををかすをば、不智なる故なりと思ひて、あはれみゆるすべし、いかるべき理にはあらず。又愚人のあだごとを云ふとて、我が心にかけてあづかるべからず。聖人は、かゝる頑なる人をあはれみて、いかりにくみ給はず。是を以て則とすべし。

俗人の學問をそしるは、學者書をよんでも、道を行はずして、かへりて高滿にしてみづからほこり、人をあなどりて、心ざまあしくなりゆき、學びたる益なきが故なり。學者つゝしみて身をかへりみるべし。書をよむによつて、かへつてかくのごとくなる小人となるはくちをし。

我が才にほこり、自是として人をあなどり、人の才智あるを取用ひず、只我が才智のみを用ゆ。古語にも自用ふれば即小なりといへり。諸人の智を用ゆるは大なり、われ一人の智を用ふるは小なり。我が學才にほこり、人をあなどるは是才學のためにわが德をそこなはるゝなり。かゝる悪德あらんよりは、才學なきがはるかにまされり。聖賢の書を多くよんでも、道に志なくして不德なるは、無學なる者の心あしく道にそむくよりも、其つみ猶ふかし。學者如此なれば、學をきらふ俗人の言に、學問は益なし、かへりて害ありと云。その證據に

なりて、學問の道の害となる。つゝしみて學をそしる俗人の口實にならんことをうれふべし。

學者只まづ孝弟忠信を先として、常に善を好み人を愛するを以て志として、日々につとめて善を行ふべし。書をよむをば第二義とすべし。第一善を好まざれば、書をよんでも道を行ふべき基なし、萬巻の書をよむとも無用の事なるべし。大學誠意の章をよく味はひて、善を好み惡を嫌ふに誠あるべし。

學者志を立つること、眞實なるを以て本とす。只道學の實をつとめて、道學の名を好むべからず。名聞のため、わづらはさるゝはいやし。天地の間に、我が身ほどしたしき物なし、學問せば只身のためにすべし、名の爲にすべからず。しかれども、からやまと、ともにしへ、今道學の名をむさぼる人多し。名を好む學者は、形は善人に似たれども、善を好むの誠すくなし、徳もなくして、我が身を自從くこと且高く、賢人君子の模樣をなし、其身に應せぬ言を出しふるまひをなせり。みづから其分量を知らずして、古今をそしり、人の小過をとがめ、不能をせめ、自讃すること無學の人より甚しく、人をあはれむ心うすし。不仁と云ふべし。人情時變をしらずして、古禮を當世に直に行はんとす、不智といふべし。もしかくのごとくならば、時俗の耳目をおどろかして、道學の名を得ても益なかるべし。無學なる人、かゝる學者を見ては、儒者は一向に偏にして、國俗と人情にそむき、時宜をしらざる無用の者と思へり。是道學のますく\すたれる所なり。明の陳繼儒が、儒は眞ならんことを要む、高からんことを要めずといへり。儒者も亦しかり。儒者は只道を信じて、眞實なるを貴しとす。人に高ぶりて、誠すくなきはいやしむべし。

○本朝の儒術、古來二千歳、寥々たりといへども、太平日久しければ、世の人文もいよく\やうやく開けぬべし。しからば、今より百年の後は、文字の習も拙からず、義理の學も大に明らかになるべし。文明の國となりて、誠に君子國の名にかなふべし。只今より後、學術の正しくしていやしからず、學者の志眞實にして、聖人の道をあつくたふとび信ぜむことをこひねがふのみ。

大和俗訓巻之二終

大和俗訓卷之三

心術上

貝原篤信著

心は身の主にて萬事の本根なり。この故に心正しからざれば、身をさまらずして、家をとゝのへ人ををさめがたし。たとへば、草木の根堅からざれば枝葉さかえず、家の主不德なれば家をさまらざるが如し。心を正しくする道は、まづ善をこのみ、惡を嫌ふことを、眞實なるを本とすべし。心の內に、善をこのむ誠なく、惡をきらふことまめやかならずんば、猶惡人の境界をまぬかれがたきゆへ、心を正しくすべきやうなかるべし。是大學の道、心を正しくせんとほつしては、先其の意を誠にするにあり。既に善をこのみ惡をきらふこと誠あらば、心を正しくすることやすかるべし。心を正しくすとは、心よりおこる所の喜怒哀樂愛惡慾の七情、よきほどに過不及なくして、かたおちざるを云ふ。喜ぶべくしてよろこび、その喜すごすべからず。いかるべくしていかり、その怒過すべからず。自餘も亦かくのごとくなるべし。七情過不及なくして、かたおちざれば、心の內とゞこほりなくして、常に和平なり、是心正しきなり。

尙書曰。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

是いにしへの大聖虞舜の帝の、天下を禹王と申せし聖人にゆづらせ給ふ時、天下を治め給ふ心法を傳へ給ふ御敎なり。人心とは、人の身の耳目口體の形氣の好む所によつておこるを云ふ。形氣の好む所とは、目に色をこのみ、耳に聲を好み、口に味を好み、形には安らかなることを好むを云ふ。又よろこび、いかり、かなしみ、たのしみ、このみ、にくみ、ねがふの七情も、是形氣よりおこる人心なり。うゑて食をこのみ、寒くして衣をもとめ、つかれて形をやすむるの類、又七情も、皆是人情のなくて叶はざることなれば、聖人といへども、人心なきことあたはず。然れども、衆人は耳目口體の好むにまかせ、七情のおこるにまかせぬれば、ほどよきことをわすれ、たちまちに、私欲にながれ惡におちいる。故に人心はこれ危しとの

たまふ。あやうしとは、たとへば、小兒が火のはたに置きたるが如く、酔へる人のがけほりにおち入らんとするが如し。道心とは、仁義禮智の本性よりおこる善心なり。道心惟微とは、微はすこしきにしてかくるゝなり。人心は形氣よりおこる故、外にあらはれうごきて、その勢さかんになりやすし。道心は心底にかくれ、かすかにしてあらはれがたし。故に道心は惟微とのたまふ。人心はさかんになりやすく、道心はかくれやすし。二の者、胸中に相まじりて、そのをさめやうをしらざれば、人心はいよ〳〵あやうくして、人欲にながれ、道心は彌かすかにして、つひに人心におほはれてほろぶ。こゝにおゐて、人心をおさへ、道心をたもつ道なくんばあるべからず。惟精とは、人心道心二の間をわかちて、明らかにくはしくしるなり。惟一とは、すでに、人心道心をわかちしれば、専一に道心を主として、人心のあやふき方にまかせざるを云ふ。かくの如くなれば、一心のしわざ皆道心より出で、人心は道心の下知にしたがふ。む。允執厥中とは、人心のなす所、耳目口體七情のわざ、皆過不及のあやまりなきを云ふ。是道理の至極にて、目あてにする所なり。惟精惟一なれば、萬の身のわざ、皆過不及のあやまりなくして、よきほどの中にかなふなり。飲食にたとへていはゞ、酒食をこのむは人心なり。酒食を過すべからずと思ふは道心なり。酒食を好む心にまかせぬれば、たちまち威儀を失ひ、脾胃をそこなふにいたらんとす。是人心は危きなり。酒食を過せば、身の害にならんことをおそるゝ道心はありといへども、人心さかんなれば、おそるゝ心はおのづからかすかにしてあらはれがたし。是道心惟微なるなり。かくの如くに、酒食を好む心にまかせ、おそるゝ心かすかなれば、たちまち、酒食をほしいまゝにすごし、おそるゝ心はなくなりて、つひに人欲にかたず。然るに人心のわがまゝなると、道心のつゝしみあるとの二を、明らかにしりてまじはざるは惟精なり。すでに酒食の過ぎて損あり、節にして益あることをくはしくしれらば、専一につゝしみて道心を主とし、人心のむさぼりこのむ欲をいましめおさへて、おのづから過不及のあやまりなから

しむべし。すべて論ずるに、人心惟危、道心惟微は、人心道心二の行さまなり。惟精惟一は、心をあきらめ、道心を主とする工夫なり。允執厥中は、中は過不及なき至極の道理なり。必惟精惟一の工夫ありて、過不及の過なき道理を失はざるべしとの意なり。是大聖人の天下をゆづり給ふ時、傳へ給へる大事の心法なれば、眞理至極せるなるべし。この十六字は、萬世心學の敎の根源なり、王公より以下庶人にいたるまで、皆たつとんでよく心得、受用あるべきこととなるべし。

天地の人をあはれみめぐみ給ふことかぎりなし。食物衣服居所器物、もろ／＼の人の、身を養ふ物を生じてあたへ給ふ。もろ／＼の人、是をとりて用ひ、我が身をやしなふ。天下の人、たかきもひきゝも、一人もそのめぐみをうけざる人なし。その恩のふかく高きこと、海山にもくらべがたく、言語にも述べがたし。又藥物を生じて生を救ふ。凡世にあらゆるよろづの物、人の身を養ひ助くる品々、多きことあげてかぞふべからず。是皆天地の人をあつくめぐみ給ふ所なり。天地の禽獸を養ふことは、人を養ひたまふ百分が一にもあらず。其上、禽獸は人にころされて食と成り、草木はきられて用となる。然れば人の萬物より貴くして、天地のあつきめぐみをうくることと思ひしるべし。かくのごとく、天地の恩をあつくかうふりても愚なる人はしらず、平生一の善事をもなさずして、天地につかへ奉り、恩を報ずる道を行はず。いはんや不仁にして、天地のうみやしなひ給ふ人物をそこなひなやまして、天地の生理を妨げ、天地の物をつひやし、天地の御心にそむくをや。是れ天地の恩をしらず、天地に不孝にして、人道を失へりと云ふべし。天道おそるべし。我輩愚にして、天地の大恩の萬一を報ずるほどのちからこそなくとも、せめて天地の道にそむかず、天地の生じ給ふ物をそこなはざるべし。古人は、天道の眼前にあることをしりて、朝夕おそれをなしてそむかず。今の世の人も、亦かくのごとくなるべし。詩曰、天の威をおぢて、こゝにこれをたもつといへり。學者は、つねに天道をおそるゝを以て心とすべし。人道はかならずかくの如くなるべし。

つねに心の内をかへりみて、一點の私欲邪念あらばはやく去るべし。私欲とは、名利色貨の欲とて、名聞を好み、色を好み、貨を好むの類、並に耳目口體の好む所の身に私する慾をいふ。邪念とは、人をしへたげ、人といかりあらそひ、我が身にほこり、人をあなどり、人をそねみそしり、人にへつらひ、人をあざむきいつはるのたぐひをいふ。皆是れ、邪惡の心なり。もし是等のことつゆばかりもあらば、すみやかに去るべし。心を害すること甚しければなり。又氣質の偏あらば勝つべし。氣質の偏とは、生れつきにかたおちたる所あるをいふ。氣のあらきとさわがしきと、又やはらかすぎてよわきと、或ははやすぎると、にぶくゆるすぎたるのたぐひ、或は生れつきて、いかりおほく、慾おほきのたぐひをいふ。是皆氣質の偏なり。心を害す。凡氣質のあしき所を變化すること、きはめてかたし、平生心を用ひて是に勝たずんばあるべからず。又あやまちあらばすみやかに改むべし。過とは、たくみて惡をするにはあらず、是非をしらずして、不意に道理にそむくをいふ。氣質の偏により私慾の妨によりて過をなすこと多し。人聖人にあらず、誰も過多し。過としらば速に改めて善にうつるべし、やぶさかなるべからず。吝なりとは、過ををしみて改めかぬるをいふ。凡私慾邪念と氣質の偏と過と、此三の者ありては心術を害す。心を正しくし、道を行はんとすれども、是等の過惡ありて去らざれば、徳にすゝむべきやうなし。たとへば田を作るに莠を去らざれば、水をそゝぎこやししても、莠のみしげりて苗に益なし、まづ莠をさりて水と肥しを用ゆるがごとし。又身の病を去りて後、補養するが如し。

人にまじはるに、愛敬の二を心法とす。是簡要のことなり、誰もしらずんばあるべからず。愛とは、人をあはれむをいふ、にくまざるなり。敬とは、人をうやまふをいふ、あなどらざるなり。人をあはれむは仁なり。人を敬ふは禮なり。仁禮を心の内にたもちて人をあはれみ、人をうやまふことわするべからず。是人に對して行ふべき善なり。父母をあはれみ主君をうやまふはいふに及ばず、うとき人いやしき人に對すとも、其位にしたがひて、よ

きほどに愛敬すべし、あなどりおろそかにすべからず。是人にまじはる道なり。

およそ人の心、必仁義禮智の性あるゆへに良心時におこる。其良心をむなしくせずして擴め充つべし。おしひろめみつとは、善心のわづかにおこるをそこなはずして、そだてやしなひさかんならしめ、其分量を十分にみてゝ、いづくにも行きわたらしむるをいふ。たとへば水のはじめて流れ出づるをせきとめずしてながし、火のはじめてもえ出づるを打消さずして、さかんにおこらしむるが如くすべし。この良心をおしひろめば、遠き四海ををさめて餘あり。おしひろめざればちかき父母につかふるにだにたらず。是孟子の說、殊に親切なる教なり。學者必服膺してつとめ行ふべし。

仁は人をあはれみ物をそだつる善心なり。是天地のめぐみの心をうけて人の心とする所なり。故に孟子に、仁は人の心なりといへり。人ごとに生れつきたる本心なり。君子はこの本心を失はず、おのれを愛する心を以て人を愛し、人我のへだてなし。小人はひとへに我が身を愛して人を愛せず、人我のへだてふかし、是利欲あればなり。是を不仁といふ。人たるものは仁を以て心とすべし。不仁の人は本心を失ひ、人道をほろぼし天道にそむく。この故に人の尤いましむべきは不仁より先なるはなし。不仁は天地人のにくむ所なり。故につひに天罰をかうふりてわざはひあり。その上子孫までもむくふものなり、天道おそるべし。この道理古今、からやまと、ためし多し。たがふことなし、うたがふべからず。

易に、天地の大徳を生といふ。この理よくあぢはひてしるべし。生とはいきて死なず、いかしてころさず、生々してやまず、この故に、天地は萬物をうみてそだて給ふ萬物の父母なり。物をあはれみていかすことをこのみ、ころすことをきらひ給ふ。是天地の大徳なり、生の理なり。人は天地の子なれば、其心に天地の大徳、生の理そなはりて、天地のめぐみの心を生れつきたり、是を仁と云。仁は人物をあはれみ愛するの心にして、是即天地の生物の心なり。萬物は皆天地のうめる所なり。その中に取分人倫は最天地のめぐみあつし、萬物

の内にていふと貴くして、天地の子とする所なり。この故に天地の御心にしたがひ、仁心を以て物を愛するには、人倫におゐてことさらあつくすべし。人倫をあつくするは、是天地の御心に順ふなり。人倫を愛するにも次第あり。まづ父母兄弟を愛するは、仁を行ふ本なり。主君は父母にひとし。次に親類臣下朋友、次に萬民を愛すべし。又その次に鳥けだもの蟲魚を愛してみだりに殺さず。次に草木を愛してみだりにきらず。是人をあはれみ物を愛する次第なり。されど又惡人をころすも、是義にして仁にかなへり。又樹木も時を以てきり、鳥獸も道理を以てころすは義なり。鳥獸草木なりとて、みだりにころしきるは不仁なり。仁者は萬物を一體とす。故に人倫はいふに及ばず、物として愛せざることなし。孔子も、一樹をきり、一獸をころすに、其時を以てせざるは、孝にあらずとのたまへり。されば禽獸も草木も、皆天地の生ずるものなれば、みだりに是をそこなふは、天地に對して不孝なりとしるべし。人物を愛するに、したしきよりうときに及び、重きよりかろきにいたるべし。輕重親疎の差別なく、平等に愛するは義にあらず。墨子が兼愛とて、天下の人を一樣に愛するは、父母をも路人と同じくするなり。是仁の道をしらずして、義にかなはざるなり。

人は天地の子なり、天地を法として行ふべし。天地は別に心なし、萬物をあはれむを以て心とせり。別にしわざなし、萬物をうみ出しやしなふを以てわざとせり。人も亦この心をうけて、常に人にめぐみあはれむを以て心とすべし、別の念あるべからず。人をたすけすくふを以てわざとすべし、別のわざあるべからず。故に天下の人、王公より以下庶人にいたる迄、日々行ふべき善事あり、善を行ふべき位にあり。時にあたらば、むなしくすぐべからず。是天につかへ奉りて、天職をつとむるなり。

仁者は人を愛す、人我のへだてなし。人を愛せずして、ひとへに我を愛するは、人我のへだてなり、是私なり。仁者は私なし、我を愛する心を以て人を愛し、わがきらふ事は人にはほどこさず、我が身を立てんとして、又人を立つ。かくの如く人我

をわすれてわかたざるを、公と云ふ。公とは、私なきなり。仁者の心つとめずして、おのづからかくの如し。學者はいまだ仁にいたらず、つとめて仁を行ふべし。我が心を以て、人の心をおしはかるに、人の心も亦わが心にかはらず、わがこのむことは人も好み、わが嫌ふことは人もきらふ。こゝを以て仁を人にほどこし行はんとせば、まづ我が心を以て人の心をおしはかり、我が好むことは人にほどこしあたへ、わがきらふことは人にほどこさず。かくの如くすれば、人の心にかなはざることなくして、人々各その所を得てやすんず。是仁の行はるゝなり。是を推レ己及レ人と云ふ、恕なり。恕は仁にいたらんとする人の行ふべき工夫なり。仁者はつとめずして、おのづから人を愛す。恕はつとめて仁を行ふ。是仁恕のわかちなり。恕の一字は人の身終る迄つとめ行ふべき道なりと、聖人のたまへり。

人となる者は天地の心に随ひ、仁愛を以て、心とし行ふべし。己を愛する心を以て人を愛す、是仁なり、人の心なり。禽獸は、おのが身を愛することのみしりて物を愛せず。人もし不仁にして、只わが身を愛して人を愛せずんば、人の心にあらず、禽獸と何ぞことならんや。不仁なれば人心を失ふ故、その餘の才能のよきことは見るにたらず。

我が身をへりくだり、人にたかぶらざるを謙と云ふ。謙なれば、我が身にほこらず、人にくだり、問ふことをこのみ、人のいさめを聞きて、我があやまちを改むる故、智をひらき善にうつることきはまりなし。この故に古人謙を以て天下の美德とす。謙のうらは矜なり、矜は、ほこるとよむ。ほこるとは、我が身を自滿するを云ふ。ほこれば、自是として人に求めず。かくのごとくなれば、惡にうつる事きはまりなし。この故に古人矜を以て天下の惡事とす。謙と矜との善惡のこと、前に既にとけりといへども、繰返して初學の人に知らしめんが爲なり。

敬はつゝしむと訓ず。つゝしむとは、心にいましめおそるゝを云ふ。和語の意はつゝむなり、しはやすめ字なり、内につゝんで、みだりに外に出さざるなり。敬めば本心をたもちて失はず、行ひな

すこと、理にかなひてあやまりなし。こゝを以て、敬は一心のまもり、萬善の根本なり。故に敬めば身修り、敬まざれば亂る、萬のこと敬まざることなかれ。萬善皆つゝしみによつて行はれ、萬惡皆不敬よりおこる。故に五常の德是によつて立ち、五倫の道是によつて行はる。こゝを以て、聖學は敬を以て要とす。故に聖學の始終、皆敬を以て宗とす。古來聖賢の心法、皆敬の一字を要とす。學者の尤つとむべき所なり。又よくつゝしめば福あり、つゝしまざれば禍あり。白樂天も、禍興福在愼與不愼といへり。身のわざはひは、皆つつしまざるによれり。故につゝしみは、禍にかつといへり。

古語に、人聖人にあらず、誰か過なからん、過まつてよく改む、善これより大なるはなしといへり。程子も學問の道他なし、その不善をしれば、速に改めて善にしたがふのみといへり。不善とは卽過なり。過をしりて改むるは學問の要なり。されども我が過をしる人すくなし。すべて凡人は我が身に私して、その身の過と惡とをしらず。よろづ外のことは、事ごとにしらずとも、さほどのうれひにあらず。我が身の惡と過を知ざるは、はなはだ愚なるかな。是何よりもうれふべきことならずや。身をかへりみ人の諫をきゝて、我が過を知るべし。

何事も、すきこのむことをつゝしむべし。このみてやまざれば道の志をうばゝれ、財をつひやし、ひまをつひやす。この故に、すぐれてすきこのむとは禍の基なり。その大なるをあげていへば、酒食と色慾と財利とをこのみてやまざれば、德を損ひて、後は身をうしなふ。その餘の事をこのむも亦しかり。凡このむことは、多きをいむ。すくなけれども、すぎてふかく好めば、又わざはひとなる。古人の言にこのむことを見て、その人の善惡を知るといへり。好むことをつゝしむべし。

方孝孺が、樂未旣而憂繼之者。人之欲也。といへる事、あにしからずや。酒食好色などをむさぼりたのしみて、その樂いまだつきざるに、はやそのわざはひうれひ忽出來て、酒食にやぶられ、色欲にそこなはる、皆是人欲よりおこる。欲をすくなくするの工夫は、欲をこらへて、好む所十分にいたる

べからず。只六七分或は七八分に至らば、はやくやむべし。十分にいたれば、必わざはひ出來て、後悔すれども益なし。古語に、酒は微醉に飲み、花は半開に見るといへるがごとくなるべし。善誘文にも、一時我が心に快きこと、過れば必身のわざはひとなるといへり。

民を司どる人は民の父母なれば、民をあはれむ心を本とすべし。民の心を以て心として、民の好むことをこのみてほどこし、民のきらふことをきらひてほどこさず、父母の子を思ふが如くする故、是を民の父母といふ。民の上に立つ人は、民をやしなふ職分を、天よりさづけ給ふことをしりて、天道にしたがひ、民をくるしましむべからず。我一人の樂をきはめんとて、おほくの人をくるしむるは、天道の御心にそむけり。天道おそるべし。すべて人は高きもひきゝも、同じ人なれば民の樂しみ苦しみも我と同じ。我が心を以て、民の心をおしはかるにちがはず、民のうれひ苦しみを思ひはかりて憐むべし。不仁なる人は民をあはれまずして、民を愛すれば、おごりて上をあなどるとて、民をあはれまず。是不仁の人のいふ詞なり。すべて民はすなほなる天性あり、上なる人誠を以て民を愛すれば、民も亦必感悦して、わだかまらず、誠を以て上につかふ。上より不仁にして、いつはりを行へば、民も亦必いつはる。この感應の理、からもやまとも古も今もかはらず、うたがふべからず。民をいつくしみ、その上に法を嚴にして、民のひがことを禁ずれば、上を侮らずおごるべきやうなし。

民の司となる人、我一人のたのしみを好むべからず、民と共に樂しむべし。是まことの樂なり。天下の人は、たかきもひきゝも皆我が兄弟の理ありて、本は一體なることを知り、我が心を以て人の心をおしはかり、聊人のうれひくるしむことをなすべからず。貧窮にして、うゑこゞゆるもの、病者かたわなる者、世をわたりかねて、うれひくるしめる鰥寡孤獨の類をば、我がちからを以てすくふべし。鰥寡孤獨とは、老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といひ、いとけなうして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ。この四の

者は世の中の困窮せる民にて、人のめぐみをうくべきたよりなく、うゑこゞえする人なり、いとあはれむべし。いにしへの聖人の政は、まづかやうのふびんなる民を、はやくめぐみ給ふ。かへす〴〵我が身ひとつを愛して人を愛せず、おほくの人をくるしむべからず。かりにも、人に妨なく害なからんことを思ふべし。人のうれひくるしみを救ひ、人のためにはかりて忠あるべし、疎略にすべからず。位ひきゝ人も我に財ありて、ほどこす力あらば貧窮をすくひ、鰥寡孤獨のたよりなく苦しめる人を、分限にしたがひてあはれみたすくべし。財ををしむべからず。次には禽獸蟲魚草木に至るまで。ひろくあはれむべし。是等は天地の内にて、我が兄弟の列にはあらざれども、同じく天地の内に生ずる物にして、もとは一氣なれば、同類の思ひをなして、みだりにそこなふべからず。但人に妨ある禽獸をば除くべし。是皆仁を行ふ工夫なり。下にあるいやしき匹夫のともがら、諸人の補ひにならんことは、もとより力に及ばざる所なり。されどもいやしくして下にある者も、仁愛の心だにあらば、その分に應じ、その力にしたがひて、心を用ひて人を救ふこと、日々に多かるべし。然れば仁愛は、いやしき人も、心にかけてつとめ行ふべきことなり。是即天地の御心うけしたがひて、天地につかへ奉る道なり。

陰德とは、善を行ひて人にしられんことを求めず、只心の内にひそかに仁愛をたもち行ふをいふ。古人の曰、陰德は耳のなるが如し。我ひとりしりて人しらず。およそ人の患ひをうれひ、人のよろこびをよろこび、人をあはれみめぐむに、鰥寡孤獨のたよりなき人を先にし、人の飢ゑたるをすくひ、こゞえたる人に衣をあたへ、つかれたるをたすけ、病者をすくひ、道橋を修理し、人に害あるをのぞき、人に利益あることをなし、人の中を和らげ、人の善あるを譽め、人の過を隱し、人の小過をゆるし、人の才藝を用ひすゝめ、みだりに人にいからず、人をうらみず、人のいかり爭ひをやめ、かりにも人をそしらず、人をあなどらず、人をうばはず、人を妨げず、人の善をすゝめ、人の惡をいさめ、禽獸蟲魚をくるしめず、妄にころさず、草

木をみだりに切らざる、皆是陰德なり。凡陰德は人しらざれども、天道にかなふ。故に後は必わが身のさいはひとなり、子孫の繁榮を得る道理あり。かるがゆへに、さいはひを求るに、是にまされる祈禱なし。天道の善にさいはひし、惡にわざはひし給ふ理は、古今和漢明白なりといへども、凡そ人は是をしらずして、善をこのまず、惡を行ひ、ひがことをなして、さいはひを求め、我が身の祭るまじき淫祠にへつらひいのる。いにしへを考るにちからなくば、せめて近き古と今の世の中を廣く考へ見て、善を行ひて益あると、みだりに神と人とにへつらひて、益なきをしるべし。されども君子の心は、福をもとめんために、陰德を行ふにはあらず。陰德をおこなへば、求めずして福は其中にあり。

よく後來のことをかねてしるを、先見の明といふ。是知者のしる所、たつとぶべし。我輩の愚者は、先見の明なくして、やゝもすればあやまち多く、後悔多し。愚なりとも心しづかに、よく思案せばこのうれひすくなかるべし。後悔すくなからんことを思はゞ、常に思案をこのみて、みだりに事を好まざるべし。事を好めば事多くなり、あやまち多く悔多し。

我が身の慾をほしいまゝにするより大なる禍なし、人の非をそしるより大なる惡なしと、古人いへり。この二は義理に乖くのみならず、身を亡す道なり。常に心にかけていましむべし。

凡平生の心法は眞實にして僞りなかるべし。中庸に、誠天之道也。誠レ之者。人之道也。といへり。誠天之道也とは、陰陽のしわざ、日月のめぐり、春夏秋冬の次第、いにしへ今かはらず、草木の、春生じ、夏長じ、秋みのり、冬をさまりて、年々にかはりなきも、皆是天道の誠なり。誠レ之とは人のちからにて、つとめて誠にするをいふ。人は天地の子なれば、天道の誠を法とし、したがひて行ふべし。是誠レ之は人之道なり。孔子も主ニ忠信一とのたまへり。この意は、誠を以て人の心の主とすべしとなり。忠信は即ち人の誠なり。誠といはずして、忠信とのたまへるは、心にいつはりなくするは忠なり、言と事とにいつはりなくするは信なり。誠は天

理の自然をいふ。忠信は人のつとめ行へる誠をいふ。理は一にしておのづからなると、つとむるとのわかちあり。程子も、人道は只忠信にあり、誠ならざれば物なしといへり。君父につかふるにも、誠なければ忠孝にあらず。萬の事誠なければ、さばかりの善事をなすといへど、僞りごとなれば實事にあらず。つとめ行ふも、あだごとなり。是無物なり。善事をつとめ行はゞ、名利のためにせずして、誠を以て行ふべし。是誠の善なり。

言と行ふと、心の言と、表裏なかるべし。よろづのこといみじくとも、誠なくんば玉の盃のそこなきが如くなるべし。吉田の兼好が、僞りても賢をまなばんを賢といふべしと云ふ。このことは甚敎に害あり。およそ人道は只忠信にあり。すでにいつはりあらば、その餘は見るにたらず。僞りて賢をまなぶ、是を小人と云ふ、なんぞ賢といはんや。漢の王莽宋の王荊公など、いつはりて賢を學びし故、はじめは君子の名を得るといへども、つゐに天下をうばひ天下を亂れり。是を賢といはんや。君子の道は純一にして僞りなかるべし、かりそめにも、いつはれる念を心にさしはさむべからず。たとひ外に善を行ふとも、内に誠なくば君子の道にあらず。故に身ををさむるは只一すぢに誠の道を行ふべし。もし凡夫のためにいはゞ僞りてするもまことにするも、力を用ふるその勞は同じければ、とてものことに只まことを行ふべし。僞りて善を行ふは、あらはれて惡をするにまされども、誠あらざれば、天道人道にそむきて、其つみふかし。誠いたれば天地をうごかし、鬼神を感ぜしめ、人心を和らぐ。

およそ、人の一念の不善も、かならず天に通ずる理あり。天は高きに居て、ひきゝにきくといへり。上天をあざむくべからず。おそるべし。人をあざむけば、つひに其僞りあらはる、内に誠あれば、必外にあらはるといへり。下人をあざむくべからず。恥づべし。天を欺き人をあざむくは、共にわが心をあざむくによれり。我が心に不善としりながらこれを行ふ、是自然なり、我が心あざむくべからず。およそ天と人と、我が心と、皆あざむくべからず。只一すぢに誠あるべし。こゝを以て君子の心は、

つねに青天白日の如くなり。小人の心は、常に陰暗してはかりがたし。

易に、懲レ忿窒レ慾。といへり。忿をこらすとはいかりをおさふるなり。怒は陽に屬して、火の物をやくが如し、おこりやすくして人を害し、我が心の徳をそこなふこと甚し。いかる時、先いかりをわすれ、心を和平にして、後理の是非を見るべし。又いかる時、言をいだすべからず。いかる時云出す詞は、必ひがごとありて後悔多し、つゝしみこらへて、いふべからず。人のいふこと、行ふこと、あしきことあらば、いからずして彌氣を平らかにし、心を和らかにして、その是非を詳にのぶべし。人隨はずとも、いかりて心を動かし、氣をあらくすべからず。心氣和平ならざれば、たとひそのいふこと理に當るとも、その心はまづ非なり。いはんやいかりて心をうごかせば、そのいふこと理にあたらざるをや。慾とは、只財寶をむさぼるのみにあらず、名利、酒食、好色、或は淫樂、器物、酒宴、佚遊を好みおぼれて、我が私をなすは皆慾なり。慾をふさぐとは、慾心おこらば、はやく其慾をおさゆるをいふ。すでに慾さかんになりぬれば、心まよひて慾にかちがたし。慾のはじめておこる時、はやくふさげば、ちからを用ふることすこしにて、そのしるし多し。慾は陰に屬す。たとへば水の人をおぼらすが如く、おぼれやすし。およそ萬の惡は、多くはいかりと慾よりおこる。七情の内の二の者尤害多し。我が身をそこなひ、人をそこなふ。おそるべし。又怒と慾との二は、養生の道に甚害あり。

七情は、皆是人情なれば、なくてかなはず、過不及なく、よき程なるは中なり。過ぎたるは尤害多し。不及も亦理に合はず。人をあはれむは誠に善なり。されど我が心にあへりとて、妻子從妾などを、ひたすらに愛し過し、あくまで恩をほどこすは、道より出でたる愛にあらず。是私の心の甚しきなり。愛におぼれては、その人の惡しきをしらず、愛すぐればその人必おごりて道にそむく故、かへつてその人のわざはひとなり、又わが禍となる。いかるべきを怒るは人の不善をいましむるの道なり。怒るまじきに怒り、或はいかるべきことにも、い

かり過ては人をそこなひ、我が心をそこなふ。にくむこと過ぬれば、その人の善あるを知らずして用ひず、小のあやまりを大にいひなして、せめたれば、その人うらみそむく。是皆情の過ぎたるなり。又あはれむべきをあはれまざるは不仁なり。是尤不善なり。哀しむべきをかなしまず、樂しむべきをたのしまざるは、ひたすら情なしといふべし。是等は皆情の不及なり。七情おこれども、過不及なくして、禮義にとゞまるべし。是古人の發二乎情一止二乎禮義一と云へるなり。およそ天下の道理は、過不及なき中にいたるが至善にして、是れ道のある所なり。食する一事を以ていはゞ、過不及なくよき程くらへば、身をやしふ。是中なり、是道のある所なり。過れば脾胃をやぶり、不及なれば、身の養たらず、是皆中にあらず。

人の血氣めぐらざれば病とす。人の心めぐらざれば愚なり。是古語なり。心めぐるとは、事に當りて心を用ゐ思案するを云。運動するなり。孟子に、心の官は則思ふといへるが如し。思案せざれば心めぐらずして、是非をわかつことなく愚なり。事に當りて心をめぐらし、よく思案すれば是非をわかつ故愚ならず。人善惡をわきまへずして、愚なるは思案せざればなり。

欲を忍ぶことつとむべし。忍ぶとはこらゆるなり。學者もし欲をこらふるに、力を用ひずんば、學べる甲斐なし、力なしといふべし。平生の學力、ここにおゐて用べし。

子弟及奴僕に對して、その過をたゞさば、教を本とすべし。いかりを先だつべからず。如レ斯なれば、子弟奴僕の心を得て、恨なくしたがひやすし。是子弟奴僕をいましむるの要法なり。

智はさとるとよむ。心の明らかなるなり。心あきらかにしてくもりなければ、萬の道理によく通じ、是非善惡をわきまへてまよはず、たとへば鏡明らかにして、よく物を照すが如し。智なければ善をこのめどもくらく、まよひて、行ふべき道をしらず、あやまりてひがこと多し。又智なければ人を知らず。君子をすてゝ、小人を用ふれば過多し。智あればよく道理の是非をわきまへ、非義を行はずして身をたもつ。よく人の善惡をしりて、君子

をちかづけ小人をしりぞく。是身ををさめ、人ををさむるに、益ありて害なし。この故に智は人身の大寶なり。心明らかなるは智なり。心明らかなれば、よく人の善惡を知る。樊遲問レ知。子曰知レ人。これ人を知るは、知の明らかなる所なり。

平生の氣象は、從容としづかに和樂なるべし。輕卒(カルヽシク)急迫(イソギセマル)べからず。和樂は人心の生れつきたる天機なり。つねに和樂を失ふべからず。又益なきことを思ひて、心をくるしめ、樂しみを失ふべからず。是不智といふべし。心のかろき速きをおさえ、又おこたりをいましめ、つねに心を定め、早からず遲からず、よきほどなるが心ををさむる法なり。心は身の主にて、萬事の本なれば、つねにしづかにやすらかにして、妄に動くべからず。心みだりに動けば、亂れて明らかならず、萬事に應じてあやまち多し。事いそがしき時は、手足のうごき、口の物いふことは、はやからざれば事に及ばず、心はいそがはしかるべからず。手足と、目口耳鼻は、たとへば下人のごとし。心は身の主にて、目口耳鼻手足の事のよしあしをたゞすやくなり。故に心はしづかならでは、思案はなしがたし。およそ事をなすに、ゆだんにならざることは、緩の字を用ひて、みだりにいそがず、よく思案して、詳に事の是非をわかちて行ふべし。古人これを待といふ。待とは事をいそがずして時をまち、詳に思案して道理を求め行ふことなり。ゆだんするにはあらず。みだりにはやく決定すれば、必その事をしそんじ、後悔あるものなり。

凡つとめにたいくつし、久しくつとめがたきは、おほかたは精力のよはきにはあらず。氣ずいにして、事をつとむるをきらひ、心いそがはしくてみじかき故、むつかしく思ひて、はやく退屈するものなり。心しづかにして事をきらはず、次第に隨ひて一ッづゝ漸につとむれば、久しく勤めてもつかれず。をこたりなくたゆみなければ、しづかにしてもはかゆくものなり。

色慾名利の念、皆是人情なれば、時としておこりやすし。其まゝおきては德を害ふ。其おこる時に、いましむるには克己の工夫を用ゆべし。己に克つこと尤かたし、十分のちからを用ゆべし、おろそ

かにすべからず。但はじめて慾のおこるきざしにかつこと、甚だやすし。是克己の要法なり。平生學問し道義を好む志ふかくば、おのづから名利色貨の念はうすくなるべし。天理すゝめば、人欲しりぞく。人欲すゝめば、天理しりぞく。凡物は二ながら一時に立たざる理なり。

心の中は灑落にして、青天白日のごとく明白なるべし。心の中に物をたくはへ、おほひくらますべからず。思慮はふかくくはしくすべし。あさくあらくすべからず。事をなすには、ふかく思案をこのみて、かるがるしくはやく決定すべからず。思案はしづかにして、いそがざるをよしとす。はやく決定すれば、必あやまりあり。

人の我に不義無禮なるをば、いかり恨むべからず。それは人のあやまりなれば、我が心にあづからず、是小人の常情なれば、せむるにたらず。なんぞいかりうらみて、かれとその是非をあらそふべけんや。只我が身をかへりみて、我が不義不禮なるを、みづからせむべし。人をとがむ可らず。我が身をかへりみをさむれば、人のうへをとがむるにいとまなし。

尚書曰、必有レ忍、其乃有レ濟。有レ容德乃大。忍ぶとは堪忍するなり。堪忍すれば、怒をおさへ事をやぶらずして禍なし、人我の間和平にして、萬事とゝのふ故に有レ濟と云ふ。古語に、忍過ぎて事堪レ喜といへり。堪忍しすませば、必よろこびありとなり。人のあしきを堪忍せざれば、怒起り人にあらそひて、人我の間和順ならず、世に立がたし。堪忍すればあらそひ出來ず、口論にも及ばずして恥辱なし、心中平らかにして樂み多し。有レ容とは、心廣くして人の善をば取て用ひ、人の過あるをばゆるすをいふ。容るゝことあればその德の器大なり。たとへば大なる器の、その量ひろければ、物を入ること多きが如し。古人の詩に、海濶從二魚躍一、天空任二鳥飛一。といへるがごとし。忍は力を用ひて堪ふるなり。容はその德ひろくして大なれば、忍ぶはいふに及ばず、まづ務めて忍びて、其工夫熟して後、有レ容にいたるべし。忍は生しきなり。有レ容は、熟するなり。されどはじめより、容の工夫もあるべし。人の善を取り、人の過をゆるすこと、はじ

めよりなくんばあるべからず。

むかし二人同じ船にのりてゆくに、一人は性急なり、日和あしく、舟のおそきをくるしみて、晝夜心をなやまし、形かじけたり。一人は性おだやかなり、舟のおそきをくるしまず、よく食し、やすくいねて顔色うるはし。其所につきしかば、二人一時に陸にあがる。此間船おそきとて、心をくるしめし者、何の益あるや。只みづからくるしましめるのみ。是心みじかき人のいましめとすべし。天下の事我が力になしがたきことは、只天に任せ置くべし。心をくるしむるは愚なり。

世に交るに言すくなく、わざをよくつとめ、へりくだりて、我が才にほこらず、人をうやまひてあなどらず、人をそしらず、人情をしりて人をうらみとがめず、世變をしりて時宜に應じ、信義をかたく守りて約を變ぜず、身をいさぎよくして財利のけがれなし。かくのごとくなれば、過すくなくして、いづくにても人のにくみそしるべきやうなし。詩曰、かしこにあつても、にくまるゝことなく、こゝにあつても、いとはるゝことなしとは、是を云ふなり。いとふはあくなり。

人のわれにうときをうらむるは人情をしらず、又は世になれぬ人といふべし。我が身はわがまゝなれど、それだに心にまかせざること多くして、わが道をつくしがたし。いかんぞ人の方より、我が心にかなふやうに、わがために道をつくさんや。又世にはいかなるさはりもありて、心にまかせざることも有りぬべし。何事もさだめて故あらんとおもひやりて、人をたやすくうらみとがむべからず。我が心にかなはざるとて、あやまりなき人をうらみそしるはいとつみ深し。かくのごとくおもひはかりて、人をうらみそしらざる人は、世變と人情をよくしれる人なるべし。詩經に曰。何其久也。必有レ以也。いふこゝろは、人のわがもとに、何しに久しく來らざるや、必ひまなきか、病あるか、ゆへありて、來らざるなるべしとなり。是人い久しくおとづれざるをうらみずして、いかさまにもさはりありて、來らざるなるべしと、思ひなだめしなり。朱子の詩傳にも、此詩は、人情をよくしれりとて、ほめ給ふ。心せばく智あさき人は、人

情事變をしらで、少しわが心にかなはざることあれば、はやく人をうらみいかりて、心をくるしむるは、心せばく世なれぬ人といふべし。

人われをそしらば、わが身のあしきをかへりみとがめて人をうらむべからず。もしわが身にあやまりなければ、謗ありても、我が德に害なし。もしわが身に過あらば、そしらるゝは、もとより其のことわりなればうらむべからず。いはんやそしりを聞きて、身のあやまちをあらたむれば、わが幸甚し。いかるべからず。孔子曰、丘幸あり、もし過あれば、人必知レ之。わが過を人にしられて、とがめらるゝは、わが幸なりとのたまへり。聖人の言、たふとぶべし。

ちかき頃の俗語に、用心は臆病にせよといふこと、まことに道理によくかなへり。是ほどの小事は、何のうれひかあらんと思ひて、けなげにしておそれざるは、あやまちのはじめ、わざはひの本なり。莫大のあやまちわざはひは、必しばしの間、少なることをおそれずして、つゝしまざるよりおこるゆへ、小事をおそれつゝしみて、けなげならざるが、わざはひなき道なり。武士の銘に、勿レ言何害。其禍將レ至。とのたまひしもこの意なり。

大和俗訓卷之三終

大和俗訓卷之四

心術下

貝原篤信著

心は天君と云ふ。身の主なり。思ふを以て職分とす。耳目口鼻形は五官といふ。官はつかさどるなり。役をつとむるをいふ。耳はきくことをつかさどり、目は見ることをつかさどり、口は物くひものいひ、鼻は香をかぎ、手足の形はうごくことをつかさどる。この五官は、各一づゝのやくありて、他事に通せず。心は天君なれば、五官をさしつかふ主なり。五官のしわざ、見ること、聴くこと、言ふこと、嗅ぐこと、動くことに付きて、心によく思案して、義理に當るか、あたらざるかをかんがへ行へば、五官のしわざあやまりなく、後悔なし。もし心その職分をうしなひて、思案もなく耳目鼻口形の欲にまかせて、義理の當否を察せざれば、人欲ほしいまゝにして天理ほろぶ。是心の官をうしなひて、よく思はざるによれり。人欲とは他にあらず、五官のしわざにまかせて、わがまゝなるをいふ。目に非禮をみていろにそみ、耳に非禮をきゝて聲淫にまよひ、口に非禮をいひ、飲食をほしいまゝにむさぼり、鼻は香をめで、かたちはをこたり、或はなすまじきしわざをなすは、皆是人欲なり。又天理といふも、他にあらず、五官のなすこと、よきほどの道理にあたるをいふ。心は天君なれば、耳目口鼻形の五官をつかふは、君として臣をつかふがごとく順なり。もし心のやくを失ひ、思案なくして五官にまかせしたがへば、かへりてかたちより心をつかふ。たとへば君として臣につかはるゝがごとし。是逆なり。

人のためにはかりて心をつくし、或はその才能を君相にすゝめ、人のため害をのぞき、貧困をめぐみ救ひ、人に恩をほどこすこと、只ひとすぢに、仁心より行ふべし。人の悦びてその返報せんことをのぞむべからず。我が名聞のためにすべからず。是陰德なり。若名聞のために善を行ひ、又人にほどこして、其報をのぞめば、仁心むなしくなる。如レ此すれば、ちからを用ひて善を行へども、其

事は是にして其心は非なること、をしむべし。誠の道にあらざればなり。

不知の人は義理をわきまへざるのみにあらず、又利害損得をもしらずして、わが身のわざはひとなることをかへりみず、ひがことをなして、身を立てんと思ひ、かへりて身をほろぼし、家をやぶるにいたる。かなしむべし。これわが身の惡をやめずして、天のせめをまつものなり。わが身を利せんとて惡しきことを行ひ、人をくるしめて身をたのしむ。是みなわが身の害となることをしらず。

道を主とせざれば、わが心のいかり、よろこび、このみ、にくむにまかせ、わが私欲にしたがひ、利欲損得にかゝはり、或は人のひがことにまよひて、惡を善とし善を惡とす。親類朋友に私し、或は人の請託をうけて私する故に、道にかなひ公にしたがふことなし。是無學にして、道をしらざる故、何をより所として、理非をわきまふべきやうなし。たゞわが身の私意を主として、わがまゝに行ふ。或は書をよめども、私多き人は道を主とせずして、欲にしたがふ故、まなべども益なし。

家の內、妻子家人の、われにつかふるつとめ、十分にわが心にあはざるとて、せめいかるべからず。人にまじはるには、恕を以て人の非をゆるすべし。又わが衣食家居器物財用など、事ごとにわが心に十分にたりなんことを求むべからず、常に不足の事あるがよし。十分心にかなへばわざはひあり。衣のゑりをかくも、家のいらかをふきて、三瓦をおほはず。この意なりと、古人いへり。

世は海なり、身は舟なり、志はかぢなり。かぢをあしくとれば、行くべきかたにゆかず、風波にあへば舟くつがへるが如し。志のもちやうかんようなり。あしく志をもてば、身をくつがへす。かぢのとりやうあしくして、舟をくつがへすがごとし。わが身に事たることをしれば、貧賤にしても亦たのしむ。たることをしらざれば、富貴なりといへどもたのしまず。

我が身の行ひ善惡は、世人のほめそしりを、あながちに氣にして、よろこび、おそるべからず。たゞ道理を以て法とすべし。わが行ひ道理にかなはゞ、世こぞりてそしるとも、おそるべからず。わが行

ひ道理にそむかば、世こぞりてほむるとも、よろこぶべからず。よき人にほめられ、あしき人にそしらるゝこそ、君子とはいふべけれ。人ごとにほむる者は、かへりてうたがはし。おほくはたくみにして、かざれる人なるべし。

わが身ををさむるには、ほめられんとすべからず。たゞあやまちなからんことを思ふべし。我が身だに道理にかなはゞ、人のそしりはまれは、さもあらばあれ、よろこびうれひとするにたらず。但士の節義武勇の道と、又利欲のけがれなく、廉潔にしてむさぼらざる、この二はなべて人のそしらざるやうに、心がけつとむべし。名ををしむも義におゐて害なし。この二のことかけなば、その餘は見るにたらず。

善をなすに、人の誹をおそれてやむるは、善をこのむこと誠あらざるなり。小人財と色とをこのむには、人のそしりをかへりみず。是好むこと誠あればなり。學者の善をなすことも、亦かくのごとくなるべし。

凡わが身にあることをたのめば、必身の禍となる。才をたのめば、人をないがしろにして、人にやぶらる。勇をたのめば、人をあなどりて、人にほろぼさる。氣力をたのめば、慾をほしいまゝにして、病おこり命をうしなふ。勢をたのめば、おごりてほろぶ。智をたのめば、身にほこりてあやまる。

心も事も、天理に専一にして、人欲をすこしもまじゆべからず。是を至善といふ。君子の心事、必かくのごとくなるべし。もし十分の天理に一分の人欲あひまじはらば、たとへば黒白のあひまじはり、香臭の一器にあるが如し。十分の白き物に、一分の黒き物まじはれば白きとはいひがたし。香ばしき物も、少し惡しき臭をくはふれば、にほひよからざるがごとし。

上代よりこのかた、誠は日々におとろへ、かざりは日々にさかんなり。おごりは彌まさり、倹約は彌すたる。質朴をばいやしみ、華美をばほむ。今の世に道を行はゞ、いつはりかざりをやめて、古風に立ちかへり、すなほにして、眞實なるをたつとびつとむべし。眞實なれば、人も感じてしたがひやすし。時俗にうつり行くべからず。

我が身不幸にて、災にあひ、讒言にあひ、或は主君父母兄弟朋友の不仁無禮にあふとも、古來和漢の内、なほそれよりも、甚しきわざはひにあへる人を思ひくらべて、みづから心をなぐさめやすんじて、うれふべからず。是古人の説なり。君子の天命をやすんずる工夫は、別に有るべし。されど是は一のやすき手だてなり。しるべし。

およそ世間のはからざる、不意のわざはひいできたるとも、是古今の人間にあるならひぞと思ひて、心をくるしめうれふべからず。兼好が歌に「ならひぞと思ひなしてやなぐさまむ、わが身ひとつのうきよならねば。」

人の我に對して無禮横逆あり、又事不順ありて、わが心にかなはざることあらば、是すなはち、善心をおこし私欲をこらゆる學問のつとめ、徳のすゝむ所なりと思ひ、人の不順なるを堪忍し、わが身をかへりみ、心をせめおさへて、いかりをこらし、欲をふさぎ、善にうつり、過を改むべし。かやうのわが心術をつとむべき折節を、あだに思ひて、いたづらにすごすべからず。かく心にかなはざる所を、よくこらへつとめてこそ、わが心の徳も學問もすゝむべき理なり。かゝることにあはざれば、心ををさめ、欲をしのぶ工夫すゝまず。

天道は、春は生じ、夏は長じ、秋はをさむ。三時は皆事あり。冬はたゞ生氣のかくれしづまるまでにて、しわざなし。夜ふけて人のねいりたる時、無事にしてやすむが如し。冬の氣閉藏するは、即是來春發生の本なり。冬寒氣はげしくして、陽氣をさまりかくるれば、來春の陽氣さかんなり。故に冬あたゝかに、雷なりて陽氣うごきもるれば、來春の發生の氣よわく、秋穀のみのりもうすし。人夜半ののちいねざれば、血氣しづまらずして、明日氣力よわし。人心も靜なる時に養ひて、動く時の本とすべし。心しづかならず、うごきさわげば、わざをつとむるにちからなく、まよひてあやまり多し。

劉行簡曰、天下の事下人心に合ひ、上天意に合ひ、中大道に合ふ、惟一言あり。曰、公のみ。公とは私なきを云ふ。私とはひたすらわが身を利せんことをこのみて、人のためをかへりみざるをいふ。是人我をへだつるなり。公とは人我のへだてなく、

我と人とともに同じく利するをいふなり。公にして私なければ道理にかなひ、天意にかなひ人心にかなふ。故にその心の誠おのづからあらはれて、人のほまれもよろこびもあつく、人のうたがひにくむことなく、もとめずして天道のめぐみも人の愛敬もこれあり。又一言にして、上天道にそむき、下人心にちがひ、中大道にかなはざることあり。私の一字なり。たとひ天下に聞ゆるほどの善事を行ふとも、心に私あらばまことの道にあらず。凡私を行ひて、たとひ一旦利を得て、わざはひなくとも、天のいかり、人のうらみにくみ、身にむくひて、かならずわざはひにあひ、身はづかしめられ、名をけがす。天道はまことにおそるべきかな。是たゞ道理をしらざるのみならず、おろかにしてわが身の損得をしらず、私を行ひて福祿を得、身をたてんと思へど、かへりてわざはひにあひ、身をほろぼすは、わが身の損得をもしらざるなり。いたりておろかなりといふべし。

人の心の内、道徳の至りてたふとく、至りてたのしむべき理あり。君子はこれをしりて、たふとびたのしみて外に求めず。小人はこれをしらず、徳をそこなひ道を失ひて、これをたふとびたのしまず、たゞ俗樂のいやしきわざをのみたのしみとし、利欲をもつぱらとし、長くうれひくるしみてたのしみを失ふ。人となるものはこの樂をしるを貴しとす。是をしらずんば、人となれるかひなかるべし。この樂をしらんとならば、まことの學問をよくつとめて、其理をしるべし。

後悔は前にこりて、後のあやまりをいましむる益あれば、誠にこれ善事なり。されば、賈誼も前事をわすれざるは、後事の師なりといへり。然れどもながく心の内にとゞめてくるしめば、滯りて必心の病となり、和樂をやぶる。一旦いましめて後、その事をすて、かさねて、しば〳〵後悔して、心を苦しむべからず。たゞ後日をいましめて、かかるあやまりなからんことを思ふべし。

人の心の内は、常に恭敬和樂なるべし。恭敬はつゝしみうやまふなり。恭敬ならざれば、心ほしいままにして、あしきかたにながれて、禮の本たゝず。和樂はやはらぎたのしむなり。和樂ならざれば、

心うれひくるしみ、道理にしたがはずして、樂のもとたゝず。此二は車の兩輪鳥の兩翼のごとし。ならび行はれて、そむかざるべし。いかなるあしき俗人に交るとも、ながれて恭敬をうしなふべからず。いかなる不幸なることにあふとも、心をくるしめて、和樂を失ふべからず。禮經に、禮樂はしばらくも身をはなるべからずといへり。

富貴をきはむといふとも、人欲だにあらば、そのねがひつくることなくて、貧賤にして慾すくなきにおとるべし。道義の樂は、位なくして貴く、祿なくして富めり。其樂みきはまりなし。いかんとなれば、內に樂ありて外にねがひなければなり。

我が愚をしらず、我があやまりをしらずして、自是とし自知とすると、吾が藝能のつたなきをしらずして、みづからほこるは、皆心明らかならざる故なり。人をしるはまことにかたし、人の胸中に、善惡かくれて見えざればなり。わが心中にある善惡は、わが身のことなれば、しりやすかるべくして、かへつて人をしるよりもかたし。いかんとなれば、わが身に私して、そのあしきをしらざればなり。故に古語に曰、知レ人之謂レ知。自知之謂レ明。人をしるは誠にかたしといへど、わが身をしるは、人をしるよりもかたければ、是を明といふ。明は知より猶まされり。わが心明なれば、わが身のあしきをしるものなり。故にわが身に自滿して、人にほこるものは、その心くらきゆへ、わがあしきをしらざるなり。

言を聞きて信ぜざるは、聞くことあきらかならざるなりと、易にいへり。人の善言といさめをきゝながら、その言を信ぜず、只益もなきあだごといやうに思ふは、その心くらくして、善言を聞きわけざればなり。心明らかなれば、よくその言の道理あることをきゝわけて信ず。又世俗の才辯ありて言たくみなるものゝいふことは、理もなきことをも聞きて信ず。その言貌ふつゝかなれば、その言に道理あれども信ぜず。是きく人のくらき故なり。

わが身の飲食色欲財利などの慾にかつには、たとへば強敵に對して、我が十分のちからをつくして、ふせぎ戰ふが如くすべし。かくのごとくせざれば、私慾にかちがたし。是欲にかつ良法なり。もしす

こしもよわげなれば、欲にかちがたく、つねに欲かちてふせぎがたし。人欲は人のため大敵なり。ゆだんすべからず、いかにもしてかつべし。

人のあやまちは、氣質の偏なる所よりおこる。我が氣質のあしきを變ずるみちは、己が過ぎたるをおさへて、たらざる所をつとむべし。つよすぎたる人はやはらかなるべし。よわき人はつとめてはげむべし。はや過ぎたる人はゆるやかなるべし。にぶき人はつとめてするどに行ふべし。その餘もみなかくのごとくすべし。むかし西門豹といひし人は性急なり、つねに韋（チシカハ）をおびていましめとす。韋はやはらかなるものなり。董安宇といひし人は性緩し、常に弓の弦をおびていましめとす。弦は急なるものなり。かやうにわがあしきを改むるに志あらば、いかに偏性なりとも、などか氣質を變せざるべき、學問は氣質のあしき所をしりてかつを要とす。是あやまりをすくなくする道なり。かくの如くならざれば學問の益なし。

事急にして多しといへども、心はせはらしくいそがはしかるべからず。心せまりいそがはしければ、和樂を失ひて心をくるしむるのみならず、思案もつまびらかならずして、あやまりおほし。

君子は人をせむる心つねにすくなく、おのれをせむる心常に多し。人をうらみにくむ心常にすくなく、人をゆるし堪忍する心つねに多し。小人はこのうらなり。この故に君子の心は、常にたひらかにして樂多し。小人の心は常にけはしくして憂おほし。

萬の事つら〳〵思案して、後のあやまりなく、悔なからんことをはかるべし。思案なくして、いかりと慾をさらざれば、後のわざはひとなる。是智者のしわざにあらず。事を思案せずして、かる〳〵しく行へば、必あやまりあり、後悔あり。もし急なることあらば、ことさらよく思案して詳に行ふべし。如此せば、後のあやまりなかるべし。いそぎて心さわがしく、しづかならざれば、思案なくして、必あやまりあり、悔あり。

怒と慾とによりて、少の間少の事を堪忍せずして、莫大のあやまりとなり、一生のわざはひとなる。はては身をうしなふにいたることあり。つゝし

むべし。すこしの間つゝしまずして、わざはひにいたるは、いたりて愚なり。

人の身のわざはひあること、多くは私欲よりおこる。私欲をほしいまゝにせざれば、わざはひなし。凡人のわざはひは、思はざるに不幸にして、天よりたま〳〵くだるはまれなり。もしあれども事によつてのがれやすし。私欲を行ひ、つみをおかして、みづからなせるわざはひは、天よりくだる禍より多くしてのがれがたし。それわが身を利せんとすれば、必人に妨あり。人を妨げたるむくひは、必わが身の害となる。人を妨げて、たとひ一旦幸にして利を得、人のせめをまぬかるゝといへども、必天のせめ身にむくひて、わざはひ来る。凡とがをおかして、公につみせらるゝは、目に見えて明らかなり。天のせめは目に見えずして、いつとなくくだれるゆへ、人しらず。其わざはひ来れば、只不意にふり来るやうに思ふは、ひがことなり。

利を求むれば必害あり。福を求むれば必禍あり。故に韓詩外傳に曰、利は害の本、福は禍の先とす。求めざるに自然に福来るはよし。われより求むべからず。我より求めたる福は、必禍となる。只わが身をつゝしみ、分をやすんじ、わが職分をつとめて、天命にまかすべし。利とは財利のみにあらず、一切わが身のために便よきことは皆利なり。我が為に便よきことをはからば、皆人に害あり。故にわが利は人の害なり、人の害は又わが害となる。たとへばたまきのはしなくして、めぐりて又かへるが如し。よくこの理をしりて、利をむさぼるべからず。

子曰。不レ患二人之不一レ己知一、患レ不レ知レ人也。人のわれをしらざるは、人のおろかなるなり。わがとがにはあらず、うれひとすべからず。人の善悪をしらざるは、わがおろかなるなり。みづからはづべし。又我がよきことを、人にしられんと求むるは小人の心なり。いやしむべし。

人のあやまちをそしり、不善あるをはなはだしくせめはづかしむべからず。必人のうらみとなる。或はとがある人をうちたゝきて、一旦心に快くすといへども、その人もし堪忍せずしてむくへば、大なるわざはひとなる。いかりをおさへて、後のわ

ざはひをよくかんがへ、わが心に十分快きを求むべからず。いやしき下部に對しても、この心づかひ有べし。

慾すくなくして、わが身の足ることをしるものは、分限をやすんじて、貧賤にしても亦樂しむ。たのしむ者は、常にあきたる。慾多くして足ることをしらざるものは、富貴にしても、分限をしらずしてあきたらず。あきたらざる者は、たのしむことをしらずして、外に求めてやまず。つゐにわざはひとなること又多し。

抱朴子といへる書に、玄蟬潔饑。不レ羨二蜣蜋(キヤウラウ)穢飽一といへり。言ふ心はせみはきよき露を飲み、うゑて腹空しけれど、蜣蜋(キヤウラウ)の糞土をくらひて、常に飽けるをうらやまずとなり。しかれば、廉潔にして貧賤ならんは、不義にして富貴なるにまされり。不義の富貴うらやむべからず。世にへつらひ、人をむさぼりて、富を得るは樂しむべき理にあらず。貧賤なるは、かへつて富貴にまさる道理もあり。よく思ひてしるべし。

萬の事正あり中あり。正とはよこしまならざるをいふ。是善なり。中とは過不及なくしてよきほどなるをいふ。是至善なり。のどかはく時湯水をのみ、うゑて食するは是正なり。よこしまにはあらず。かはくとてのみ過し、うゑたるとてくひ過すは、中にあらず。よきほどにのみくふは中なり。是を以て萬事をおしてしるべし。正なれども中ならざれば至善ならず。凡萬のわざ過不及なく、よき程なるは中なり。是即道のある所なり。過不及ありて、よきほどならざれば、善事なりとても道にかなはず。

我が身に才ありてもほこるべからず。才にほこれば必あやまる。其の上人心信服せず。小才ありとても、聖賢の書をあまねくよまず、歴代の史にひろく通ぜずんば、古今天下の是非をわきまへがたし。經書にくらくして道をしらず、古今に通ぜずしてふるきあとを考へず、小才をたのみ、あながちに世のことはりをわかたんとすればあやまり多し。たとへば星なき量(ハカリ)を以て、物の輕重をはかり、くもれる鏡を以て、物の姸媸をわかたんとするが如し。只へりくだりて人にとひ、古を考へて義理を

明らむべし。愚なるわが心を以て、人をはめそしり、わづかなる才をたのみて、みづから是非を決すべからず。

人生この日の再び得がきことをしりて、時々その事をつとめてをこたらず、日々この生を樂しみてうれへず、よくつとめ、よくたのしむ人は、一日を以て一月とし、一年を以て十年とし、十年を以て百年とす。つとめとたのしみを以て身を終る。智者のしわざ、かくのごとし。勤とたのしみをしらざる人は、たとひ百歳の長壽をたもつとも、常に怠りて、一生の間何のなし出せる善事なし。是つとめざればなり。常にうれひくるしみ多し。是樂しまざればなり。かくのごとくなれば、人となれるかひなし。いけるばかりを思ひ出にす、生を得たりといひがたし。欲食聲色を樂しむといへども、欲多く節なくしてかへりて身をそこなひ、たのしみいまだつきざる内に、憂はやく來る。愚者のしわざかくのごとし。禮記に、君子は道を得ることをたのしみ、小人は欲を得ることを樂しむ。道を以て欲を制すれば、たのしみて迷はず。欲を以て道を失へば、迷ひて樂しまずといへり。君子は常にたのしみて日をおくり、小人は常にうれひて日をおくる。衰老の身は殊に餘日すくなければ、一日を以て一月とし、一月を以て一年とする工夫をなすべし。一日一時も樂しまずして、あだに時日をおくるは愚なりといふべし。

樂みは人の心に生れつきたる天機にして、本自これあり。されども私欲あれば、耳目口體の欲にそこなはれ、喜怒哀懼の情におほはれて、この樂を失ふ。君子は情慾にやぶられずして、常にこの樂を失はず。いかなる患難の事にあひても、この天然自有の樂を改めず。又風花雪月の外境にふるれば、心の内にある本然の樂、外物と相和して彌樂しむ。是外物を以て、はじめて樂とするにはあらず。外物來りて本然の樂をたすくるなり。天地の道陰陽の化、四時のめぐりはつねに和氣あり。是天地の樂なり。この樂たゞ人にあるのみにあらず、鳶のとび、魚のをどるも、凡禽獸のさへづりなくも、草木のさかえ、花さき、實のるも、みな是天機の發生する所、萬物自然の樂なり。これを以て人の心に、

もとより樂あることをしるべし。もし欲にひかれて、この樂をうしなふは、天地の道にそむけり。いかなる横逆にあひ、不幸にあふとも、常に此の樂を失ふべからず。聖人やゝもすれば、此樂をとき給ふ。この樂の人に切なることをしるべし。仲尼顏子の樂は、我輩愚者のしるべきことにあらず。たゞ愚人にも、各生れつきたる樂あることをしりて、樂を失はざる工夫あるべし。われも人も人欲さかんなれば、この樂をしらず。樂と欲と兩立せず、樂しめば欲なし、欲あれば樂なし。この理をよく思ひて、わきまへしるべし。樂は常人の事にあらずといふべからず。

心は天君にて身の主なり。つねに樂しましむべし、くるしむべからず。わが身貧賤にして、或は不意の禍ありとも、これ天命なれば、うれふべからず、樂を失ふべからず。又人のわれにあしきをば、忍びてゆるすべし、うれふべからず。かくの如くすれば、心のくるしみなく樂多し。身のまどしきをうれひ、又みだりに人をいかりにくみて、わが心をくるしめそこなふべからず。人の無禮にして、我をおかしあなどるとも、おろかなる故と思ひ、いかりにくむべからず。子弟のともがら、われにおろそかなりとも、道をしらざる故と思ひ、いかるべからず。心をくるしめて益なし。下部などはことにならはしあしければ、おろかにしてさとしがたし。そのあしきをいましめをしふるはよし。いかりせめて、ことばと色とをはげしくすべからず。我が心の和樂をやぶり、人のうらみをとる。言と顏色とはげしからざれども、わが行正しく言にたはふれなければ、人おのづからおそれてあなどらず。

心にあるじなければ、事をつとむる時、はや過ぎてさわがしく、又おそ過ぎて怠りとなり、或は事に先だちてあやまち、或は事におくれてまにあはず。主あれば心つねに定りて、遲速なくよきほどなるゆへ、あやまちすくなし。

徐孝節といふ人、幼少より物をころすことをいましめ、蟻のあつまり居る處をも、ふみころさん事をおそれ、よきて道をゆけり。其心善なりといふべし。此の心をおしひろめて、まづ父母兄弟を愛し、人

倫に及ぼし、次に萬物に及ぼさば、仁愛の道ひろく行はるべし。善心をおしひろむる工夫、常にかくの如くすべし。夫いかすことをこのみ、ころすことをにくむは天の御心なり。天の物をあはれみ給へる御心をうけて、人の心とする所、即仁なり。不仁の人は人をめぐみ、物をあはれむに心なくして、ころすことをこのむ。かくのごとく不仁ならば、他の才多しといへども、天道にそむき人道かけて、見るにたらず。

利は天地より生じて、天下の人にあたへ養ひ給ふ理なれば、天下の公物なり。われ一人の私ものにすべからず。人とゝもに、同じく利を得れば、人々各その所を得て害なし。身に私して我一人利を得んとすれば、爭出來て、かへつて我が身の害となる。義を行ひて自來る利は眞の利なり、わが益となる。むさぼり求むる利は、眞の利にあらず、必身の禍となる。是利を求むるには非ず、害を求むるなり。

一指目をおほへば、太山も不レ見と古語にいへり。人の心はもと明らかなる物なりといへども、私欲のおほひありて心體をふさげば、くらくして道理に通ぜず。故に心を明らかにして、是非にまよはざらんことを思はゞ、私欲を去るべし。欲されば心明らかなり。木心如二日月一嗜欲食レ之既。と山谷が詩にも見えたり。

いにしへより、無道の人、その惡行、まことに一事にとゞまらず、その品多し。されども其内人のいさめをふせぎいかるより大なる惡なしと古人いへり。からやまと、むかしより人の行あしくて、身をうしなひ、家をほろぼすも、皆いさめをふせぐよりおこれり。ふかくいましむべし。

世にをるには、人をにくみせむる心かろかるべし、重くすべからず。いかんとなれば、およその人書をよみ古をまなんでも、道にそむく人おほし。況學ばざれば世のことはりの、よきもあしきもしらず、しらずしてなせるひがことなれば、にくむべからず、あはれむべし。頑なるをいかりにくむことなかれと、尚書に見えたり。

我が身すらわが心にかなはず、みづからせじと思ひしことをもあやまりてすること多し。いはんや人

のわざ、わが思ふごとくなるべきやうなし。其上人心の同じからざること、その面のごとく、人のわが心にかなはざるをうらむべからず。

人の心は時によりかはりやすし。人の心も、わが心も、皆たのむべからず。是後悔なき道なり。

樂をしる人は天をうらみず、人をとがめず、世に求めなくして、その分をやすんず。樂をしらざるものは是に反す。

人倫にまじはり、萬事を行ふに心平かに、氣和してしづかなるべし。しづかならざれば、氣さわがしくあらくして、道理明らかならず、道を行ふことかたし。故にまづ心氣ををさめ、和平にして靜なるべし。血氣さかんなる時は、氣さかのぼりて、心もともに定まらず。たとへば氣の上る病あれば、心氣をさまらず。酒にえひたる時は、氣のぼりて心みだる。家を新に作りて、棟(ムナギ)、杈首(サス)、梁(ハリ)、柱(ハシラ)などいまだおちつかざる時、大風にあへばたふれやすし。材木をりあひて後は、大風ふきてもたふれがたし。人も血氣をさまらざれば、人に對するにも、心さだかならず、浮氣にておちつかざれば、言も行も理にあたらず。戰場にて敵と戰ふにも、氣上りて心しづかならざれば、うごきさわぎて敵にかちがたく退きやすし。文字をかくにも、字ごとにその所におちつきて、ゆたかにみゆるは能書なり。文字おちつかざるは惡筆なり。萬の事皆氣の下にをりあひて、しづかなる時ならでは、道理にかなひがたし。

心氣和平にして人をとがめず、わが身にかへり求め、己をせめれば、身をさまりて樂多し。この工夫甚益あり。常にこれを以てわが心ををさむべし。もしこの工夫をわすれば、必道をうしなひ樂をうしなふ。古語に曰、君子は己にもとむ、小人は人に求むといへり。

心のうつはものせばき人は、わが智ひとつを用ひて、萬の事に通ずとおもひ、人の智を用ひず。古語に、自用ゆれば小なりといへり。わが智ひとつをたのみて、人の智を用ひざれば、世間の萬事わが一人にてしりがたし。しらざること多ければ、小智といふべし。心のうつはものひろき人は、わが一人の智を用ひず、ひろく人にとひてきゝ、そのよき

をとり用ゆる故、もろ人の知を合せてわが智とす。是大知とすべし。凡人は各得たる所あり、なれたることあり。十人には十人の知あり。百人には百人の知あり。各その人の長ぜる所を取用ゆべし。さばかり才ある人も、天下古今もろ〳〵のこと、われ一人の知にてはしりがたし。一人の智は限あり、衆人の智はきはまりなしといへり。

天命は天のくだす所、人のうくる所なり。命は猶令のごとしとて、下知の意なり。天よりくだる故に天命といふ。天命に常あり變あり。善を行へば福あり、惡をすれば禍あるは常なり。善人に禍あり惡人に福あるは變なり。人の吉凶禍福壽夭富貴貧賤、萬の幸不幸、皆天の命ずる所なり。人間の萬事天命にあらざることなし。或は生れつきて定まり、或は時により、不慮に命くだりて、偶然として福にあひ、わざはひにあふ。求めても命なければ得がたく、求めざれども命あれば得やすし。只人の法を行ひて、天命をまつべし。善を行ひて福來るは、常の理なれども、もし禍あるは是亦天命の變なれば、うれふべからず。およそ人天命をしりて命にまかせ、うれひなき工夫をなすべし。天命をしらざれば、命のさだまりありて福の求めがたく、禍の去りがたきことをしらず。利につき害をさけんとし、人にへつらひ神にへつらふは見ぐるし。愚なりといふべし。故に論語に、不レ知レ命無三以爲二君子一也といへり。

人の心平生無事なる時、つねに樂みおほければ、いかなるわざはひ出來てもくるしまず。たとへば富める人は、凶年にあひてもうゑず、血氣つよき人ははげしき寒暑にあたりても感ぜざるが如し。もし無事なるとき樂なければ、にはかに事いでき、わざはひ來るとき、うれひくるしみ、心をうごかし亂してとりうしなふ。つねの時よく工夫して、心を養ひて樂をふかくすべし。心は天君なり。つねにたのしましむべし、外事にわづらはされて、くるしむべからず。

不意なるわざはひにあひて、すべきやうなくとも、心をくるしめて、樂を失ふべからず。心しづかに思慮すれば、そのわざはひをのがるゝおもんばかりもいでくることあり。行つまり、心せはしかる

べからず。心ひろくしてよく思ひをのぶべし。

大和俗訓卷之四　終

大和俗訓卷之五

貝原篤信著

衣服

衣服は身のおもてなり、人に對すればまづみゆ。この故に古人身をつゝしむの名目をつらぬるに、まづ衣服、次に言語、次に行と、つゐでをなせり。言行と同じく相ならべるほどのことなれば、衣服をもつゝしみて、身に相應せる正しきをえらび用ふべし。相應せざるは、正しからざるなり。相應とは年と位と時と處とに似合たるを云ふ。染色繪樣、わかき人も、其年のほどよりは、すこしくすみて老いらかなるは、人の目にたゝずして宜し。かくのごとくなるは、わかきも老いたるも、たかきもいやしきも、むかしも今も似合はざることなし。年と位よりわかやかに、ざればみたるはいやし。大なるかた、大もん、大すぢ、すべて人の目にたちてけざやかに、又あやしくことやうなる染色の服きたるは、たれもその身に似げなくして、むげに

人に見おとさるゝものなり。かやうのきぬきたる人は、位高き人も、いやしく見ぐるしくして下部の如し。是を好むは何のためぞや。大かたは衣服にても、人の心はおしはからるゝものなり。位なくても、みづからおもんずる人は、下着にもすべからず。凡人の目たつべからざるは相應なるべし。目にたつは相應せざる故なり。おびもいにしへは、男女共にちいさかりしが、今やうはひろくして見ぐるし。何の益ありやしらず。

衣服は儉素に、かざりすくなく、よのつねにしていやしからざるがよし。又まどしき人も、つとめて潔くあかづきけがれざるを用ゆべし。富める人も美麗をこのみ、無用の服多くすべからず。又甚質朴に過ぎて、けがらはし、鄙野なるもあしゝ。染色は正色を用ゆべし。紫もえぎなどの間色、すべて女子の服にちかきを用ゆべからず。紅紫をば、褻の服・衾、褥にもすべからず。

身のかざりに心を用ひ過すべからず。ひまつひえて益なし。俗人奴婢のともがらにはめられんとて、衣服をかざれば、識者にいやしめらる。何の益もなくはかなきことなり。

左傳に、服の不レ衷身の災なりといへり。きる物のただしからずして、その身に似合はざるは、身のあざはひとなる。このためし世に多きことなり。いましむべし。國語曰、服心之文也。心のこのむことを身にも必服する故に、衣服は心の外にあらはるゝ文なり。正しからざる服きたるは、心の内見えてはづかし。つゝしんで、えらび用ゆべし。

衣服は常に用ひて、いつもよき製法染色あり。時の好みにしたがひ、世のあしき俗にうつるべからず。

言語

言は心の聲なりと古人いへり。人の心の内にあること、ことばによりて外にいづ。一言みだりに發すれば、駟馬も追ひがたし。よきこともあしきことも、皆口よりいづ。口をつゝしめば、あやまちすくなく、恥辱なくわざはひなし。故に人の身のつつしみは、口をつゝしむを第一のつとめとす。言おほければ、口のあやまち多く、人にくまれ、

わざはひおこる。つゝしみて多くいふべからず。殊に人をそしるは莫大の悪事なり、いましめて、人の非をいふべからず。

易に、心をやすんじて、後かたるといへり。人に物いはんと思はゞ、先わが心をやすくしづかにし、思案していひ出すべし。かくのごとくせば、言のあやまちとがめすくなかるべし。

人に對して、ことばを出すに、事によりて道理をいひつくさず、意を内にふくみ、ことばをのこせば、言に餘味ありて、人感服してしたがひやすし。人をいさむるにも、辭はげしからず、氣象和順にして、かすめなしていひて、その人の過惡をさしあらはさず。是かへつて人の心を感ぜしむ。

言をつゝしみて、一言を出すにも、よく思案して物をいへば、言語はおのづからすくなし。むりに口をとぢて、いはざるにはあらず。

ことばを、必信にすべし。かりそめのすこしなることにも、いつはるべからず。その事は少なりとも、心を害する咎は大なり。まことの道を失へばなり。故に萬のことうるはしくとも、いつはりをいふは人にあらず。我が心の神は則ち天地の神なり。おそるべし。心にいつはりとしらば、いふべからず。僞としりて、わが心をあざむくは罪ふかし。

人と約をなさば、必其信をかたく守るべし。一度約したる事をたがへば人にあらずと思ふべし。若その契約義にかなはざることか、又ちからの及びがたきことにて、後に約を守りがたからんと思はば、かねて約をなすべからず。かるぐ\しくうけあへば、その約たがふ。つゝしむべし。論語に、信近於義則言可復也。といへり。人と約束したること、首尾ちがはざるやうにせんと思はゞ、約すること義理にかなへば、うけ合ひたる言のごとく行ひとげられて、いつはりなくして、首尾相違せずとなり。

あやまちをはぢて、いつはりかざるべからず。是心をあざむき、人をあざむくなり。既にわが過あらんは、すべきやうなし。あやまらば直にいひあらはすべし。かくしていつはりかざるべからず。あやまりて又人をあざむくは、あやまりをかさぬ

るなり。いよ〳〵つみふかくなる。言を出すに、その言さわがしからず、おだやかなるは、その心のやしなひあるなり。もし言を出すに、さわがしくけはしきは、心のやしなひなしとしるべし。

人あやまちありて、もしいさむべき人ならば、目前にてそのあやまちをいさめ、かげにてはその過をいふべからず。目前にて諫めず、かげにてそしるは、うしろめたし。もれきこえては、その人のうらみもふかし。面前にてしたがひ、退きて後言するは、聖人の誡なり。晋の世の崔洪と云ひし人は、目前に人の過をいさめ、かげにてその人をそしらず。故に人これを重んじけるとかや。宋の劉貢父といひし人も、亦かくのごとくなりしなり。

一言のあやまちにて、莫大の禍となり、一事のあやまちにて、一生の憂となる。愼むべし。平生つゝしみある人も、事により時によりて、をこたりたゆみぬれば、一言一事のあやまちによりて、思ひの外に大なるわざはひとなることあり。一言一事もつゝしまずんばあるべからず。

古語に、病は口より入り、禍は口よりいづといへり。ことばをつゝしみて、みだりに口より出さゞればわざはひなし。飲食をつゝしみて、みだりに口に入れざれば病なし。病と災との出くることは、天より降るにあらず、皆口よりおこると古人いへり。口の出し入れ、つゝしむべし。

人のあしきことは、わが心の中にしりわきまへて、口には出すべからず。

人をそしり、人を言ひおとすこと不仁の甚しきなり。その上わが身におゐて、つゆばかりも益なし。その人もしきけば甚害あり。そのそしる所その實にたがはずとも、人をそしるは、厚くおとなしき道にあらず。況凡夫の人をそしるは、多くは理にあたらず。つゝしむべし。

人をそしれば、人また我をそしる。人をそしるは即我をそしるなり。たとへば天にむかひてつばき吐くが如し。そのむくひ甚はやし。言さかりて出づれば、又さかりて入る。我に出づるつみは、やがてわれにかへること、車の輪の如し。おそるべきかな。人を一分そしれば、人より三分そしりかへ

さる。その上人に見おとされ、いやしめらるゝ。益なくして損あり。愚なりといふべし。

人をそしるは是不仁なるのみならず、必身のわざはひとなることをしらず。是不智なり。人をそしる一事にして、仁智の大德を失ふ。殊に我が同官同藝の人をそしるは、人をおさへて、わが身をたてんとするなり。是不義不禮といふべし。卑狹の甚しきなり。是小人のわざなり。みづからはおぢて戒むべし。

人をそしるは、その人に對せず、かげにてひそかにいふことなれば、その人しるべからず、何の害かあらんと思ふは愚なり。そしりは必もれやすし。俗語に、惡事千里を行くといひ、又壁に耳ありといふが如し。人のしらんことをおそればいふべからず。孟子に、人の不善をいふは、後の患をいかんかすべきといへり。

言を出すにも、わが身をかへりみて、分に過ぎたることをばいふべからず。分に過ぎたることをいへば、人にそしりわらはる。恥づべし。また人きゝて信ずべからざることは、事實なりともいふべからず。この心づかひあるべきことなり。

わが善をばかくして、みづからほむべからず。人の善をばあらはして、ほむべし。わがあやまりをばかざるべからず、あらはして改むべし。人のあやまちをばあらはすべからず、おほひかくすべし。

わが身にいかなる才能善行ありとも、口に出してほこるべからず。その才能にほこれば、その才能をうしなひ、その善行にほこれば、その善行を失ふ。をしむべし。

我が身をほめざれども、わがよきもあしきも、人の心にしるものなり。たとひわが才行あらはれずして、人しらずとも、わが身の德に害なし。わが身の才能いみじくとも、みづからあらはしほむるは自媒すと云。いやしむべし。其不德のほどあらはれて、むげに人に見おとさるゝわざなり。

凡人のいみきらふこと、いふべからず。人の生れつき、不具かたわなる者あり。又その行さきに大なる過ありしものあり。或は親先祖いやしかりしものあり。此のたぐひ、いひいだせば、きく人きらひてうらみいかる。是世俗のいはゆるさしあひな

り。心を用ひていふべからず。

ことば多く無用の枝葉しげゝれば、相對する人つかる。同じことをくりかへせば、きく人あく。如レ此なれば、さし立ちたる用ある道理はきこえず。ことばすくなく、用あることを言ひて、道理明らかに詳なるべし。辭は簡要をたつとぶと古人もいへり。無用の言を出さず、有用のことをいふべしとなり。

人のしわざ、わが心にかなはずとも、なだめゆるして、左こそありなんと思ひて、いかり恨むべからず。もし心の中にいかり甚しくとも、いかりやみて本心になるまでは、こらへて言を口に出すべからず。いかりのさかんなる時、はやく口にいだせば、必過言いでゝ、後悔あり。心をやはらげ、氣を平らかにし、怒やみて後言ふべきことはいひ、なすべきことはなすべし。酒に醉ひたる時も、尤言をつゝしみて、いふべからず。酒さめて後ことばを出すべし。人にふみを送るも同じ。いかりやみ酒さめて後、文をかくべし。是皆後悔なき道なり。口よりも、げに文はあとにのこるものなり。ふみをかくに殊につゝしみて、いかりの内にかくべからず。

世俗のかたり傳ふること、そらごと多し。こと〴〵く信ずべからず。ことにあやしきこと、多くはいつはりなり。神佛の奇特も、俗人のかたり傳ふることはそらごと多し。凡正法には奇怪なし。きくわいあるは正法にあらず。奇怪なりとて貴ぶべからず。神佛をほめむとて、なきことをつくり出し、或似たることを、まことにいひなし、奇異なることを言ひつげて、かへつて神佛の徳をけがすことを知らず。鬼魅狐狸のしわざには、奇怪なることもあり。それも多くはそらごとあり、ことごとく信ずべからず。おろかなる人は、そゞろなるそらごとを信じてまよひやすし。そらごとをつくりて、かたりつたふること、世におほし、信ずべからず。妄に人のことばにまかせて、かたり傳ふべからず。人の胡亂なる言を信じて、又人にかたれば、我も亦虚言をいふの罪あり。つゝしんで人にかたるべからず。

あやしきことを耳にきくとも、目に見ざることの、

たしかならざるをば、口にいふべからず。必虚言多し。人のみだりにかたりつたふる神變奇怪なることを、我も亦かたれば、世につたはりて、人をまよはすこと多し。おろかなる人は、きくことにまよひて、いつはりを信じやすし。すべてあやしきことは、かたるべからず。たしかに見たることにも、心目の病によりて、あやしきことみゆ。又あやしとみゆることも、ゆへありて、あやしからざることおほし。

人のあやまちを正して、いひきかせ、改めんことををしへすゝむるは善事なり。既に過去りたる過をかへすがへす言出しとがむべからず。凡人のあやまりてしつることか、又しらずしてしそんじたることは、ちから及ばず。そのあやまりをばつげきかすべし。しばしば云出して、せむべからず。その人わが身をばせめずして、うらみいかりてそむく。

古語に、その國に居ては、その大夫をそしらずといへり。いはんや君をそしるは、大なるとがなり。古語に、臣の不忠、君をそしるより大なるはなしといへり。たとひ君にひがことありとも、臣たるものは、かくして語るべからず。又我が身その位にをらずんば、國政の是非を評議すべからず。下として上をそしるは不忠不敬なり。つゝしむべし。上をそしる人ありとて、それに雷同すべからず、口をとぢてかたることなかれ。上たる人は、わが行のあやまりを、下なるものにいはせそしらせて、ひろくきくべし。下のそしりをきくは、是上たる人の幸なり。人の口をとづるはあしく、口をとづればかへつてそしり多し。そしらすれば、後はそしりなし。このこと古人の教明白なり。川の水は、下をほり流せば、水のうれひなし。下をせきとむればふさがりて、横流のわざはひとなる。人の口をとむるも、亦かくのごとし。故に明君は人の口をとぢずして、人にいはせ、下のそしりをきくことをこのめり。帝堯は、諫の鼓を置きて、いさめをきゝ給ひ、殷の湯王は、誹謗の木を立てゝ、政のあやまりをそしらしめ給ひしとかや。

およそ、人を知ることは、いたりてかたきことなれば、人の口とわが目きゝにまかせて、みだりに人の善悪を決すべからず。然るゆへに、ほむるもそ

しるも、かるがるしく妄にすべからず、歳月を待つべし。即時にはやく人を譽め毀れば、必あやまりて後悔あり。われひとりあしきとおもへど、さもなくてかへつてよきことあり。よきとおもへど、又あしき人あり。人のほめそしりも、みだりに信じがたし。人の口と我が心を以て、善惡を定むべからず。人の口わが心二ながら慥としがたし。

面前に人をほむるは諂にちかし。もしほむべきことあらば、その人に對せずして、他人に對してほむべし。その人の疵も亦ふかし。面前に人の過を正すはよし。退きてかげにてそしるべからず。

凡ほめそしること、あやまりて理にたがへば、わが人をしらざる不智のほどあらはれて、はづかし。つゝしんで、みだりに人をほめそしるべからず。

人をほめそしること、つゝしんで過不及なかるべし。人の小惡を大惡にいひなし、小過を大過にいひなし、虛なることを實にいひなすは、讒言なり。又左程なきことを、甚しく人をほめ過すも、正直の道にあらず。へつらひてその人に私するなり。ほめそしること、かるがるしくすべからず。たとへば權量を以、物の輕重をはかるが如くなるべし。一毫もかろくし重くして、過不及あるべからず。ほむべからざる人をほめ、そしるべからざる人をそしり、或ほめ過し、そしり過すは、ともに不智なり。論語に、子貢曰、君子は一言以て智とし、一言以て不智とす、言つゝしまずんばあるべからずといへり。よき人は、許可をつゝしむとて、人をみだりにゆるしほめず。されども小善をもすてず、一藝をも用ふるは、君子のする所なり。人の善をはもてはやして稱譽すべし。惡をかくして、善をあぐるは、聖人の行なり。まなぶべし。

およそ人をいさむるには法あり。たとひわが子我が弟をいさむるにも、聲をあらゝげ、色をあらくして惡口し、はづかしむるはあしゝ。如此すれば、きく者はらだちうらみて、心に服せず、かへつて、そのいさめにそむきてしたがはず。こゝを以て、人をいさむるには、心を平和にし、ことばを順にし、道理を正しくいさむべし。まづ人のよきことをほめて、人の心をよろこばしむべし。いかりてよろこばざれば、いさめてもうけ用ひがたし。こ

れ人をいさむるてだてなり。およそ人をいさむるには、人の氣質によりて、直諫諷諫の二の法あり、しらずんばあるべからず。その心和順にて、義理明なる人ならば、直諫すべし。直諫とは、過を言ひあらはし、理をすぐにのべて、是非をまげず、つよくいさむるなり。かくの如くなれば、聞く人おそれてしたがふ。孔子の、法語の言とのたまふ、是なり。又氣質和順ならず、義理くらき人ならば、諷諫すべし。諷諫とは、すぐにその人の過惡をさしあらはしていはず、まづその人のよき所をあげてほめ、その人をよろこばしめ、その人の心にしたがひてさからはず、たゞその事の損あると、益あることをときて、得心せしむべし。或は他事によそへて、善惡得失をのぶべし。かくのごとくすれば、きく人はらたゝずして、よろこびていさめをきゝしたがふ。孔子の、巽與の言とのたまへる是なり。人をいさむる法は、この二なり。その人の氣質によりて、いさめの法かはるべし。直諫することこそ本意なれども、正直につよくいさめても、きく人の耳にさからひて、うけ用ひざれば益なし。明君賢者ならでは、直諫によろしき人は稀なり。よのつねの人ならば諷諫すべし。諷諫をよくして、人のよくきゝいれたるためし多し。是いさめのよき手立なり。いさめの道をしらで、ことばをあらくして人にさからひ、みだりにいへば、人いかりて必きいれず。人に益なくして、我身のわざはひとなる。ことに我が親に直諫してはらたゝしめ、親よろこびざれば、親子の中うとくなる。大なる不幸なり。おやをいさむるには法あり。

易曰、納レ約自レ牖。まどは明らかなる所なり。たとへば家の内にある人に、外より物をいひ入るゝに、かべごしにいへばきこえず、まどよりいへばきこゆ。いさめをいふも、またかくのごとし。いかなるおろかなる人も、必いづくにぞ片はしに道理開けて、明らかなる所あり。或は好む所の欲あり、その所をよく見つけて、言ひ入るれば、きゝ入れやすし。この諫めやうのよきこと、古もさるためし多し。ふさがりたる處をしらずして、いかに忠をつくしていさむとも、きゝ用ひざれば益なし。人の過をいさむるには、誠あまりありて、ことばた

らざるがよし。心を内にふくみて、言すくなく云發して、餘味ふかゝるべし。人のあしきことをいひつくさず、人の耳にさからはずして、人にひとりそのあやまりをさとらしむるをよしとす。人のあしきことを、こと〴〵くいひ顯し、はげしくあらそひぬれば、人いかりてうけ用ひず。是人をいさむる道にあらず。温厚にして理明らかなるが、還てよく人を感ぜしむ。是はげしくせむるにまされり。

徐偉長曰。君子非二其人一則弗三與レ之言一。其人にあらずとは、道理ををしへつげても、よくその理をききわかつべき智なく、聞きて信じ用ふべき誠なき人を云。かやうの人に、善言をつけても益なし。凡善言を聞きても、さとらず信ぜざるは、其人愚なればなり。

人のあしきをいさむるに、はじめよりうちつけに、其非をすぐにさしていへば、おほやうは聞入れず、かへりていかりをもよほす。只その事となくかすめなして、人の心にゝくからず感じて、聞入るゝこそよろしかるべけれ。

よろこぶ時の言は誠すくなし。いかる時の言は敬すくなし。喜び怒るとき、殊に言語をつゝしみて、喜怒のために心をやぶらるゝことなかれ。

末の世には風俗うすくなりて、からやまとの文をつくるにもへつらひかざりて、いつはり多し。政のよきをほむるとて、堯舜の御世にもこえつべしといひ、人の善をほむるとて、聖賢のごとく云なし、或は知仁勇の三德そなはれりなどいひ、武略をほめては、孫呉にもおとらずといひ、手跡をほむるとては、王羲之にも及ぶべしといひ、詩文をほむるとて李杜蘇黄に同じかるべしといひ、和歌は貫之躬恒にもおとらず、和文は紫式部清少納言が如しといふの類多し。さほどになきとは、心の内にしりながら、風俗のあしきにしたがひて、いつはりへつらひとなることをしらず。かゝるあしきならはしにしたがひて、正直の道理を失ふべからず。

君子は人の善をあげて、人の悪をかくし、人の長ずる所をとりて、短なる所をゆるす。厚しと云べし。小人は人の善あるをばほめずして、その過をあげてそしり、人の才の長じたる所をばあげずしてか

くし、その才の不得手にして短なる所をあらはしてそしる。薄きことの至なり。人の不得手なる所を云あらはせば恨をとる。

主君はいふに及ばず、父母兄夫のわれに物いひかけたるに、そのこたへ明らかに聞えざるはうらめし。甚無禮なり。父兄夫など我に問ふことあらば、ことわりの正しく聞ゆるやうに答ふべし。おや兄をつとは、いづれもしたしければ、そのしたしきをたのみて、答のなめげなるはあしゝ。よき人はわれより下ざまなる人に對してもあなどらず。故にこたへ明らかなり。いはんやわれより上なる人をや。

人のいふことばをば、きゝいれずして、たゞわが道理のみをいひたてんとするは甚無禮なり。人にも道理をいはせて、きゝて後わが思ふ處をのぶべし。

古語に、流丸は甌臾にとゞまり、流言は知者にとゞまるといへり。甌臾とはくぼき所なり、丸き玉をなぐれば轉じてやまず。されどもくぼき所にとゞまる。流言は根なしごとゝよむ。實もなきあだなる雜說なり。愚者は是を誠ぞと心得て、信じてかたり傳ふれば、世にあまねく流布してやまず、知者は不實なることを信ぜずして、耳に聞けども口にいはず。その耳にとゞまりて言ひちらさず。是流言は知者にとゞまるなり。

やむことを得ずんば、人をそしり、人をほむることなくんばあるべからず。されどもみだりに、このんで人をほめそしりて、口に是非おほき人は、古人のいましむる所なり。やむことを得ば、みだりに人をほめそしるべからず。あやまること多し。

大和俗訓卷之五終

大和俗訓卷之六

貝原篤信著

躬行上

善をこのみ、惡をきらふことの誠なるは、大學の誠意のことにて、身を修め道を行ふ初なり。善を好み惡をきらはざれば、道の行はるべきやうなし。學者の最初よりつとむべきこと、是より急なるはなし。善をこのむことは、たとへばよき色をこのむがごとく、惡をきらふことは、あしき臭をきらふがごとくすべし。是誠にこのみきらふなり。諸人のきらふこと多けれど、惡臭ほどいむべき物なし。このむこと多けれど、好色に過ぎたるものなし。是皆諸人の、眞實にこのみきらふものなれば、善をこのみ惡をきらふことも、亦如此眞實なるべしとなり。是誠によく人をさとすべきたとへなり。もし心の内に、すでに善惡をしれども、このみきらふこと眞實ならずして、善を行はず、惡を去らざるは、これを自欺と云ふ。自欺とは、わが心の内實ならざるをいふ。善を好み、惡をきらふこと誠ならざれば、萬の行みないつはりとなりて、道行はるべからず。たとへば草木の根なきが如く、家をつくるに基なきがごとし、行の本たゝず。こゝを以て、道を行はんと思はゞ、先この志を立つるを初とすべし。

力行の道は、その大綱は身ををさめて、五倫をあつくするにあり。身ををさむるは道を行ふ本なり。身ををさまらざれば、五倫の道行はれず。身ををさむる條目は、言を忠信にし、行をあつくつゝしみ、いかりを懲しおさへ、慾をこらへふさぎ、見きゝする所の善に、はやくうつりてつとめ行ひ、わがあやまちをしりて、すみやかにあらたむるにあり。その上人に對して道を行へども、人したがはずして、行はれざることあらば、人をせめずして自かへりみ求めて、わが善のいたらざることをせむべし。

およそ人の身のわざ多けれど、つゞめていへば、言と行との二にすぎず。言をつゝしみて信にし、行をつとめて篤くつゝしめば身ををさまる。故に言行を

つゝしみあつくするは、身ををさむるのみちなり。言行をわかてば、人の身のわざ四となる。視聽言動なり。この四のわざに、皆なすべき所の定れる法あり。是を禮といふ。禮にしたがひて、視聽言動をなすべし。四の事のなすまじきことをなすは、非禮なり。禮はたとへば工のすみかねの如し。すみかねを用ひざれば、材木あれども用にたゝず。禮を用ひざれば、視聽言動皆道にかなはず。およそ人の人たる所は禮なり。禮なければ禽獸にちかし。故に禮は身をおさめ、道を行ふ則なり。君子は常に禮を守り行ふ。小人はつねに禮にそむく。是君子と小人のわかるゝ所なり。

視聽言動は、人の身の四のわざなり。思は又心の動にしてその本なり。善を好み、惡をきらふことを誠にするは、思をつゝしむの道なり。

善を行ふに、その心に義と利とのわかちあり。義とは我が行ふべき公の理なり、私なくして我が爲にせざるなり。わが身のためにするは義にあらず。利とはわが身のためにする私の心なり、公ならざるをいふ。萬の事を行ふに、まづ義か不義かをかへりみて、義にしたがひ行ふべし。その行ふこと善なりとも、その心義にしたがはずして、わが身の利分のためにせば、是私なり。君に仕ふる一事を以ていはゞ、奉公をよくつとむるは善なり。眞實に忠をなして、わが身をわするゝは、義を正しくするなり。もし奉公をつとめて、つゆばかりも、君の恩寵を得んためにつとむる心あらば、是利をはかるなり、義にあらず。凡義とは、なすべきことをなして、わが身の利のためにする私なきをいふ。されども、義理にかなへば、人よろこびしたがひ、事とゝのひ行はるゝ故、利は求めずして自來る。自來る利は義に害なし、利を求むるは義に害あり。たとへば、天下にきこゆるほどの善を行ひても、身のためにするに志あるは利なり、義にあらず。義と利とをわかつこと、第一つとむべき心術なり。

善を行ふとは、天性に生れつきたる仁義禮智の本心にしたがひて、孝弟、忠信、慈愛、恭敬、温和、辭讓、剛勇、廉耻などを、時に隨ひ、事に隨つて行ふをいふ。さばかりの善を行ひても、名利をね

かふ心ありて行ふは誠の善にあらず。善を行ふには、たゞ一すぢに、義理に專にして名利の心なかるべし。

衆人の行、萬事につきて過と惡とあり。過とは心に惡なけれども、しらずして理にたがひ、或は心つかずして理にちがふをいふ。惡とは善惡は知りながら、慾にひかれて理にたがふをいふ。是自欺なり。身ををさむるには、過惡をあらためて、善にうつるをつとめとすべし。聖人は過なし。賢者以下は、過なきことなし。殊に凡人は過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人のいさめをきゝても用ひず、われに過あれどもしらずして、あやまちなきと思ふ人あり。是自修むるに志なきゆへなり。もし自修むる人は、過多きことをしるべし。自省みてわが過をしり、人の諫を聞きて、わが道をあらため善にうつるべし。

常に我が身をかへりみて先我が過をしるべし。すでに過をしりなば、速にあらたむべし。尚書に過を改めて吝ならずといへり。吝とはをしむなり、あやまちをしますして早く改むるを云ふ。孔子も、過つては則改むるにはゞかることなかれとのたまへり。わが身の過をしらざるは愚なり。過をしりて改めざるは即惡なり。しらずして過つより猶そのつみおもし。

過は必氣質の偏よりおこる。剛なる人は、心つよき所より過おこり、柔なる人は心よわき所より過おこる。氣質の偏なる所にかちて、過なからんことを求むべし。學者つねに、わが氣質の偏を察し、その過をかへりみて改むべし。かくのごとくせざれば、學問の益なし。是學者の專つとめ行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏にかつ道なり。氣質の偏なる所にはかちがたし。つねにつとめて十分の力を用ゆべし。

わが身、聖人にあらず、過多きはうべなりとて、過をしりながら、改めざる人は、無下に道に志なき人なり。自暴自棄といふべし。かやうの志なき人にならひて、わが過をゆるすべからず。

人の目は、百里の遠きを見れどもその背を見ず。明鏡といへどもそのうらをてらさず、離婁が明目なるも、そのまつげをみることなし。こゝを以て人

知ありといへども、わが身のあやまりをしりがたし。故に君子の學は、專わが身をかへりみ、人のいさめをきゝ用ひ、あやまちをしりて改むるをむねとす。子路は我過を人の告るをよろこべり。故に百世の師なりと程子もいへり。人をしること、まことにかたしといへど、わが身のあしきをしるは、又人をしるよりも猶かたし。こゝを以て、わが過をつげしらする人あらば、まことによろこぶべし。人わづかなる財をおくり、或は酒肴をおくるをも、うくる人これをよろこぶ。いはんや、いひがたき諫をいひ、みづからしりがたき過をきくをや。わが身におゐてかゝる大なる益なし。いさめをきくことあに幸ならずや。子路のよろこべることむべなるかな。過をきくことをきらひ、諫をふせぐはあしきことの至りなり。諫をきゝて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。もし過あれども、諫をふせぎて人の正すことをきらふは、病をそだてゝ醫をきらふが如し。その身をうしなへどもかへりみず、かなしむべし。

顔子は、あやまちをまたせず。いふこゝろは、一度あやまちとしれることは、ふたゝび行はず。又顔子は、不善あれば未ㇾ嘗不ㇾ知。知ㇾ之未ㇾ嘗復行。と易に見えたり。いふ意は、わが身に過あれば必しる。是知ることの明らかなるなり。過をしれば必行はず。是行ふことのつよきなり。

論語に、君子のあやまちは日月の食のごとし、あやまてば人皆是をみる、更むれば人皆仰ㇾ之といへり。君子の心は、青天白日のごとく、洒落にして一點のおほひなし。故にあやまちをおほひかくさずしてはやく改む。日食月食をば、天が下の人、たれもあふぎ見てかくれなし。しばし光かくれども、やがてもとのごとく明になれば、日月の光明に少もきずなし。君子の過かくの如し。又論語に、小人過也必文といへり。小人は過をはぢてかざり、その過をおほひかくせば、正直の道理をうしなふ、是非をいひまげ、いつはりてつひに過を改めず。甚見ぐるし。是小人の心ならひなり。いやしといふべし。尙書に、あやまちをはぢて、非をなすことなかれといへり。賢人すら過あり、況凡人をや。只過つてよく改むるを君子とすべし。

人の善を見ては、我も亦この善あらんことを思ひ、是をまなび行ふべし。人の不善を見ては、我も亦この不善ありやと、身をかへりみおそれて、もしあらば改むべし。如此すれば、見きゝする所の善悪、皆わが師となる。老子の善人は不善人の師、不善人は善人の資といへるもこの意なり。

いにしへの賢者は、わが過をきくことをこのみ、人のいさめをよろこべり。いさめをきゝて、過を改め善にうつれば、道にすゝむこときはまりなし。善なること、これより大なるはなし。又古の賢者は、人にほめらるゝをよろこばず、わが善をきくことをこのまず。わが善をきゝては、益なきのみならず。もしすこしもわが身にほこる心いできて、善をなすにをこたらば大なる害なり。今の人はわが過をきくこともこのまず、人の我をほむるを悦び、わが善をきくことをこのむ。世にへつらへる小人多き故ほむる者多し。それをまことぞと心得て身にほこり、善を行ふにをこたるはおろかなり。末の世の人は、からもやまとも、すべて人のいさめをこのまず。故に人を諫むるを、ひとへに世なれぬかたくななる人とおもへり。父として子をいさむれば、わが父は老耄せりといひ、また老人は今の風をしらずとてそしりうらむ。臣として君をいさむれば、おごれり無禮なりとていかり遠ざく。こゝを以て、人ごとに世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひていさめず。この風もし世に行はれ、風俗となりなば、善は日々にすたり、悪は日々にさかんになりて、道行はるべからず。かなしむべし。およそ諫をいふ人有りがたし。古来からもやまとも、諫をよろこぶ人は尤有りがたし、故にいさむる人もまれなり。

人に對して道を行ふに、人われにしたがはずば、人をせむべからず。たゞわが身に立かへりて求むべし。是を自反と云ふ。この工夫かんようなり。人を愛して、人われをしたしまずば、わが愛のいまだいたらざる故とおもふべし。人を禮して人われに無禮ならば、わが禮いまだいたらざるゆへと思ふべし。人をおさめてをさまらずんば、わが智の至らざる故とおもふべし。是人をせめずして、わが身にかへり求むる工夫なり。かくのごとくすれ

ば、人したがひやすし。したがはざるは、猶わが誠のいたらざるとおもひ、その實をつとむべし。われに誠あれど、人そむくは道理もなき妄人なり。禽獸にちかき人なれば、其人と是非をあらそふべからず。

中庸曰、言顧レ行、行顧レ言。いふ意は、言と行とは相違なかるべし。言を出すに、わが身の行をかへりみていふべし。事を行ふには、己が言をかへりみて行ふべし。言ふことはやすく、行ふことはかたし。故に言はひかへていひ、行は言より過すべし。如レ此すれば、言と行と相違なし。口にいふことあまり有りて、身に行ふことたらざるは、是言行のそむけるなり。はづべし。

善も惡も、かならず小をつみて大にいたる。故に善は小なりとてすつべからず。惡は小なりとて行ふべからず。

古語に、忠臣は二君につかへず、烈女は兩夫にあらためずといへり。君子の道、節義を守るをおもしとす。節義とは、臣の君につかへ、婦の夫につかふるに、一すぢに忠節義理ありて二心なく、二君につかへず兩夫にあらためず。もし不幸にしてわが身艱難にくるしむとも、君をすて夫にそむきて身命ををしむべからず。命を失ふとも、忠貞の志を改めざるを節義と云ふ。よろづのこと、いみじく才能ありて、うるはしき人も、節義をうしなひて、君にそむきて難をのがれ、夫をすてゝ人にしたがはゞ、その餘は見るにたらず。一たび節義をうしなひて、利ある方につき、害ある方をのがれ、或は死ぬべき時にしなざれば、一生の名をけがすのみならず、後代までもながき惡名をながす。およそ人生前の血肉をのみ、わが身と思ふべからず。死後の善惡の名も、亦わが身の内なることを思ふべし。生けるもの、必一たび死なずといふことなし。節義をうしなひて、かひなき命をいき、たとひ百年のよはひをたもち、富貴をきはむとも、人の道をうしなひて、世にいけるかひなくば、何のたのしみかあらんや。是人のつとめ行ふべき大節なり。

凡、人のつとめ行ふべきわざ三あり。願ふ所もまた三有り。一には務レ業、二には養レ生、三には行レ義

なり。務レ業とは、四民ともにその家のわざをつとむるなり。士は君につかへ、農工商は、各その家業をつとめて、その衣食を求むるをいふ。家業をつとめざれば、飢寒貧窮をまぬかれず、是諸民の先つとむべきことにて、財祿あらんことをねがふ所なり。業を務むれば、衣食と居處を得て、身をやしなふ生計は其内にあり。二には、養レ生は飲食色慾七情の内、慾をうすくし、起居動靜の形氣をつゝしみ、風寒暑濕の外邪をふせぎ、生命を養ひて、病なく長壽を得んことをねがふをいふ。生を養はざれば、必病生じて、身をくるしめ、又むまれつきたる天年をたもちがたし。是また人のよくつとむべきことなり。三には、行レ義は身をおさめて人倫の道をあつく行ひ、道理にかなはんことを願ふをいふ。義を行はざれば人道を失ふ。凡業を務めて富貴に居り、生を養ひて長生を得ても、人の道なくんば、禽獸にちかくしていけるかひなし。古の聖人、これをうれひて、師を立て學を立て人倫の道ををしへ、義理をしらしめ給ふ。この三の内、務レ業より養レ生はおもく、養レ生より行レ義はおもし。いかんとなれば、務レ業は富貴をきはむるを宗とす。國土を領し、高位にのぼるは、富貴のきはまりなり。されども、壽命なければ富貴も用なし。たとひ今人ありて、汝に國土をゆづり、高位をさづくべし。然らば汝が命をうばふべしとならば、至りて欲ふかき愚なる人も、命を失ひて國土と位を得んと思ふ者あるべからず。しかれば富貴より、いのちおもきにあらずや。故曰、務レ業より養レ生は重し。又君父のために命をすつるは云に及ばず、朋友とつれ立ちて道をゆくに、もしむかひより人來りて、朋友と口論し、たゝかはゞ、士ほどの者はその友を見すてゝ、にぐる人あるべからず、たゝかひて死すれどもかへりみず。又わづかなる祿を得て、君に仕ふる下部も、主人のため命をすつるはめづらしからず。是生命より義理はおもきにあらずや。凡この三は、天下の人むまれつきて、各その心にねがふ所にして、又行ふべき當然の道なり。つとめてをこたるべからず。その内に、輕重あることかくの如し。義理の生命よりも富貴よりも重く貴ぶべきことを、是を以てしるべし。然れば

命ををしみて、義理を失ふは輕重をしらざるなり。いはんや利欲によりて、大なる義理を失ふはいふにおよばず。

凡の人、財祿を得ることをこのまざるはなし。これをこのまば、家業をよくつとむべし。又長生を好まざるはなし。これをこのまば、養生の道をよくつとむべし。又義を好まざるはなし。これを好まば、學問をつとめて義理をしるべし。

恩を報ふこと、人道の大節なり。禽獸は恩をしらず、恩をしるを以て人とす。恩をしらざるは、禽獸にひとし。是人と禽獸とわかるゝ所なり。是を以て、恩を報ずるは、人道の大節なりといふことむべならずや。恩をしらば、必報ふべし。しりて報ぜざるは、しらざるに同じ。恩を報ずるには誠を以てすべし。

人に四恩あり。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩。この四恩、わするべからず。天地は人の大父母なり。父母の氣は、即天地の氣なり。人は天地の氣より生る。又むまれて後は、天地の養をうけて身をたつ。故に天地の恩は、廣大にしてきはまりなし。何を以てか、その恩をむくひんや。天地の御心にしたがひてそむかざる、是天地につかへ奉りて、孝をつくし、その恩の萬一を報ずる道なり。天地の御心にしたがふとはなんぞや。人たるものは、天地の萬物をうみやしなひ給ふ、その御心をうけて心とす。是仁なり。仁とは、あはれみの心なり。仁を失はざるは、天地の心にしたがふなり。仁を行ふ道いかん。天地は、そのうめる所の人をあつく愛し、次には萬物を愛し給ふ。その心にしたがひて、人倫を厚く愛し、次に鳥獸以下の萬物を愛してそこなはざる、是天地の御心にしたがふなり。即是仁なり。仁を行ふは、天につかへ奉りて、その大恩の萬一をむくふ道なり。天地は人の大父母なり、人は天地の子なれば、是天地につかへ奉る孝の道なり。人となる者の一生つとめ行ふべき道、是より大なるはなく、是より急なるはなし。人となる者、必しらずんばあるべからず。此こと前卷に既にいへり。初學の人にしらせんために、しば〳〵いふなり。

父母われをうめりといへども、その生をうけし初は、

天地の氣をとりて生ず。是天地は生の本なり。その上うまれて後、いとけなきより身ををはるまで天地の養をうけ、天地の生ずる物を食とし、衣とし、家とし、器として、身をやしなふ。天地の性をうけ、五常の德を心にむまれつきて、萬物の靈となり、天地の內にすみて、天地のあつきめぐみをうく。生をうけし初より身ををはるまで、天地の恩をうけしことかくのごとし。かゝる大恩あることをさとりて、身ををはるまで天地につかへ奉りて、孝を行ひ、そのきはまりなき德に報ひんことを思ふべし。是人間の一大事なり。故にたび〳〵くりかへしていふなり。

父母の恩、きはまりなきこと、天地にひとし。父母なくんば、何ぞ我あらん。その恩、海よりふかく山より高し。海山は限あり、父母のめぐみはかぎりなし。いかんしてか、その恩をむくひんや。たゞ孝を行ひて、その恩の萬一を報ずべし。父母につかへて、その力をつくして、をしむべからず。力とは身と財との力をいふ。身の力のかぎりをつくしてつかへ、財の力のかぎりをつくして養ひ、そのちからををしむべからず。わかき時は、われも人も、父母の恩を思はず、力をつくさずして、不孝を行ひ、父母をはりて、後悔すれど益なし。是一生のかぎりなき恨なり。人の子たる者、後悔なからんことを思ひ、父母のいける時、ちからをつくして孝を行ふべし。一日も孝を行はずしてあだに過すべからず。父母につかふる年は久しからず、孝子は日ををしむ。といへること心にかくべし。

父母われを生むといへど、君の養ひにあらざれば、我が身立たず。君の祿をうけて、わが身を養ふのみならず、父母妻子をやしなひ、奴婢をつかひ、衣服居宅器物、萬の用ともしからずして、安樂に世をわたること、ひとへに君のたまものなり。是又父母にならびて、その恩大なり。君につかふるには、我が身をわすれて、身をわが物とすべからず、君に奉りおくべし。是身をゆだぬるなり。論語に、子夏の曰、事二父母一能竭二其力一事レ君能致二其身一とは是なり。

父母に生れ、君にやしなはるゝといへども、聖人の教なければ人の道をしらず。道をしらざれば、食に

あき、衣をあたゝかに着、居り所をやすくしても、人の道なくして禽獣にちかければ、人にむまれたるかひなし。今をしへをうけたるいにしへの聖人の恩は、君父にひとし。聖人は萬世の師なり、萬世の後までいとたふとぶべし。聖人の恩をむくはんとならば、聖人の教にしたがひ、その道にそむかざるべし。是聖人の恩を報ずる道なり。

およそ、天地父母主君聖人の恩、相ならびて至りておもし。この四恩をわすれそむくは、人にあらずと思ふべし。むくいずんばあるべからず。これをむくいんと思はゞ、道をまなびて行ふにあり、他の道あるべからず。

今の世に、道を教ふる師は有りがたし、もしあらば貴びつかふべし。道の教をうけたる師は、その恩ふかきこと君父にひとし。又書をよみならひたる師を、句讀の師といふ、その勞はなはだし。藝術の師は又その次なり。是等は君父聖人の恩にはならべがたしといへども、その苦勞の恩わするべからず。この外、人の生涯には、恩をうくること多し。およそ、人の恩をうけば、心に銘してわするべからず。一言の情をも感し、一事の志をも心にかけて思ふべし。人の情あれども感ぜず、人の志をもむなしくするは、無下に心なきなり。

司馬温公の曰、人の恩をうけて、そむくに忍びざる者は、その人必忠孝ならんと。この言道理至極せり。然れば、恩をうけてわするゝものは、忠孝ともになかるべし。忠孝も君父の恩を忘れざる道なり。俗語に、恩を知らざれば木石にひとし。といへるも、恩をしらざるは人の心なきなり。君子の道、天地につかへて仁を行ひ、父母に孝を行ひ、君に忠をつくし、師をたつとび、故舊にあつくするは、皆恩をむくふる道なり。人の性によりて、無學なる俗人にも、恩をわすれずして、節義をつとめ、禮をかゝざるものあり。是その天性のすぐれたる所なり。その善行貴とぶべし。又よのつねのことは、才ありて惡人ならざれども、舊恩をわするゝ者あり。義なしといふべし。

古語曰。施レ恩勿レ念。受レ恵勿レ忘。人に恩をほどこさば、是わがなすべき當然の道とおもひて、かさねてそのほどこしたることをわするべし、思ひ出す

べからず。恩をほどこしたるとて、恩だらしくするは見ぐるし。又人のめぐみをうけば、その恩をわするべからず。必むくひんことを思ふべし。小人は人の恩をうけては必わすれ、人にめぐみをほどこしては、必わすれずして、そのむくひを求む。その人むくひざれば、うらみいかる。凡天地の人を生し育ない給ふは、其めぐみ廣大なれど、君子にあらざれば、其洪恩をしらず、天地につかへむと思ふ心なし。父母の恩をうけしことは、猶ちかくして、誰もしれることなれど、それだにわすれて不孝なるは、凡夫の生れつきならはしなり。いはんや、その餘の人倫の交の内にて、たとひそくばくの恩をほどこしたりとも、父母のめぐみにくらべば萬が一なるべし。人皆君子にあらざれば、恩をふかくうけながら、十人に九人は必わすれてむくはず。恩をうけてわするゝは、凡人のならひぞと思ひて、われより恩をほどこせりとて、ほこるべからず。ほどこしてむくひをのぞめば、人その恩をわすれたる時、うらみいかりてわが德をそこなふ。是人情をしらずといふべし。恩をうけてわするゝは、小人のくせなり、めづらしからずと思ひ、人をとがむべからず。是人情をしれるなり。たゞわが身は恩をわするべからず。

およそ人のほどこしをうけ、恩をかうふり、或は我を君にすゝめたる恩あらば、ながく忘るべからず。折節の禮義をつとむべし、久しくして、をこたるべからず。或は初めにつとむれども、誠すくなき人は、久しきをふれば、必舊恩をわすれて訪ひくることだになし。始終一の如くなるべし。凡恩をしらざるは世の凡人のならひなれば、せむるにたらず。我が身、かゝるうすき人情にならひて、恩をわするべからず。恩をわするゝは、人にあらずと思ふべし。犬はいやしき獸なれど、養をうけし主人をしたひてさらず。他の富める家に引きよせつなぎ置きて、食にあかしむれども、まどしきもとの主人の家ににげ歸る。或は數十里の道をもかへり、はるかなる海をおよぎてもかへることあり。されば恩をしらざるは、人を以て犬にもしかずといふべし。

人倫をあつく愛し、四恩を感じむくひて、又神をた

うとぶべし。古人の曰、民は神之主也。是を以聖王は、先民を養ひて後神に力を用ひ給へ。人事をつとめずして、神に助を求むべからず。神に三あり、天神、地祇、人鬼なり。天神は天の神靈をいふ、日月星も其の內にあり。地祇は地に在る神靈なり、名山大川の神、社稷の神もその內にあり。社稷とは國土と五穀とを守る神なり。人鬼とは人死して神にいはへるをいふ。わが家の父母先祖の神あり、是祭るべし。王公の先祖宗廟の神あり、たうとぶべし。これを祭るは恐多し、無禮なり。又先祖にあらざれども、人民に功德ありし人あり、これ皆人鬼なり、是亦たつとぶべし。およそわが身に應じたる神を祭るべし、身に應ぜざるは祭るべからず。天神地祇人鬼ともに、人の位によりて、わが身にあづかりて祭るべき神あり。身にあづからずして祭るまじき神あり。わが祭るべき神にあらざれば祭らず。是を祭るは諂なり、非禮なり。神は非禮をうけ給はず、わが身にあづからずして、祭るべき神にあらざれば、正しき神にても淫祀といふ。淫祀は無レ福とて、わが祭るまじき神を祭りて、いのりへつらひつかへても、非禮なればうけ給はず、利生なし。利生なきを無レ福と云。わが祭るべき神と、祭るまじき神とをよくわきまふべし。祭るまじき神を祭るは、非禮にして神慮にかなはず。利生なくて、神罰はかりがたし。天子諸侯の祭り給へる所の及びなき天地神明を、いやしき者けがしあなどりて祭るは、大なる非禮なり。天道神明は公にして、人間のごとく、即時にその非禮をとがめ、罰を行ひ給はざれども、久しきをつみて、必わざはひをかうふるは必然の道理なり。いやしき者の日月を祭り、又祭るまじき神を祭り、久しくして大なる禍にあへる人多し。わがしば〱見る所なり。おそるべし。鬼神を敬ひて遠レ之、聖人のたまへり。いふ心は、神はおそれうやまふべし。ちかづきあなどるべからず。たとへば、王公大人などに、おそれてちかづかざるが如し。是遠レ之なり。神のやしろに入るにも、此心得ありて、みだりにちかづきあなどるべからず、おそれて遠ざかるべし。

よく人の言を用ひ、人の諫をきく人は、必過すくな

く、行正しく、よき譽あり。人の言を用ひざる者は、ひがこと多くそしり多し。もろこしに、岳飛といへる忠臣あり、すぐれたる良將なりしが、この人、大將として出陣する度ごとに、まづかねてその下にしたがへる諸司をよび集め、詳聽して、この度の戰、敵にかちぬべき手立をたづね、人々にいはせ、まけぬべきあしきすぢをもいはせてきゝ、その内にて、よきを撰び用ひて、かねてよくはかりごとを定めて、十分にかちぬべきと議定して後、出陣せしかば、戰ふたびごとに、かち軍のみして敗軍せず、向ふ所敵なかりしとなり。是軍のみにかぎらず、大事小事、皆此ごとく、衆て人とよくはかりて事を行はゞ、過なかるべし。孔子の、三軍を行ふに、つねの時事にのぞんでおそれ、謀をこのんでなさん者にくみせんと、のたまひしも、此意なり。

人の性、もと善なれば、惡をする心もとよりなしといへども、利害喜怒愛憎の私欲にひかれて、惡心生じ惡事を行ふ。故に善をする人常にすくなく、惡をするものつねに多し。わが心の中をかへりみて、その惡のおこる所をもとめ去うて、善心の生ずるをそだて、おしひろめ行ふべし。

孟子の曰、志士は、溝壑にあるにわすれず。勇士はその元(かうべ)をうしなふに忘れず。いふ心は義理に志ある士は、たとひわが身不幸にして、うゑて溝壑にふしまろびて死ぬるとも、その時までは義理を忘れず。又義理にいさむ士は、たとひ人と戰つて、我がかうべをうしなふ時にいたるといへども、義理を忘れずとなり。士たる者は、必この語を常に心にたもちて失ふべからずと古人もいへり。人の命はおもき物なれど、義理は又命より甚おもし。故に生死の大事にのぞんでも、義理を忘るべからざることかくのごとし。いはんや名利好色財寶は、皆外物の輕き物なれば、なんぞ是をむさぼりて、おもき道義を失はんや。およそ人の慾は富貴をきはむるにあり。然れどもいたれる富貴にも換へがたきは命なり。命なくては富貴も用なし。命はかほど重きものなれども、義理にあたりては、命をもかろくすつることを、君子はいふに及ばず、凡夫も能くするは、是人の本心なり。然れば義理ほどおもき

ものはなしとしるべし。かほどに一命より甚重き義理をすてゝ、きはめて輕き私欲にしたがふは、本心を失へるなり。誠におろかなりといふべし。

怒はつよく慾はふかき故、是にかちがたし。力をつくして堪忍すべし。ちからよわければ、怒と慾にかちがたし。忍の字は、心の上に刄を書く。怒と慾の心おこるをたちきること、刄を以て切りたつが如くなるべし。是吳臨川が、忍の卦をつくりし說なり。又敵にむかひて戰ふが如く、十分のちからを用ゆべし。如此せざれば、怒と慾とにまけやすし。堪忍の工夫なく、怒と慾とにかたざれば、平生の學文も用にたゝず、いたづらごとなり。

人と生れては、道に志ざして、つねに仁を心にたもちて、毎日人に利益ある善事を行ふべし。主君父母舅姑兄長などによくつかへ、家人を愛するは、皆善なり。又人をめぐみ救ふことも亦善なり。是皆心をつくして行ふべし。人をめぐみ救ふことは、必財を用ゆることの多少によらず、只人の難儀をすくへばその功大なり。富める者には、財を多くあたへても益なし。貧しき者にほどこせば、少しあたへてもその利益大なり。たとへば食にあきたる者に、又食をあたふるは、益なくして、かへつて病となる。うゑたる者には、少し食をあたへても利益ふかきが如し。財を多くついやしても、無益のことに用ゆれば人の助とならず。たとへば萬燈をともしても、あたら油をついやしたるのみにて利益なし。その費を以て、貧人をやしなはゞ、大なる利益なるべし。善を行ふとは、たゞ人の利益になることを行ふにあり。人を利益すれば、天地神明の御心にかなひて、つひにそのむくひありて、さいはひを得る理、古來そのためし多し。およそ善を行ひて人をすくふこと、上は王公より、下は乞丐にいたるまで行ふべき道あり。富貴貧賤によらず、たゞ善を行ふ志だにあらば、善行はれずといふことなし。善を行ふべき時にあたりて心をつくすべし、をこたるべからず。まづしくいやしき人も、仁に志ざして行へば、その身に應じ、日々に人に利益あること多し。いはんや富貴の人、その志あれば、人をすくふことひろく、その功大なり。たかきもいやしきも、をこたりなく、久しく行へ

ば、善をつむことかぎりなし。あにたのしまざるべきや。かく心の内に陰徳をたもち、善を行ふてと久しければ、天道のむくひありて、あはれみをかふむり、そのさいはひ子孫にいたる。この理は古今からやせと、そのためし多し、うたがふべからず。されども、君子の善を行ふは、そのむくひをのぞむにはあらず、自然のしるしをいふのみ。

世俗は、耳目口腹の欲をほしゐまゝにするを樂とす。しからざれば、わが身人と生れ、富貴なるかひなしといふ。是まことに世俗のいやしき志なり。人の道をしり、善を行ひ、道にしたがひ、人をすくふほどの樂、この世の中に何かあるべきや。たかきいやしき、たゞ善を行ひ、みちにしたがふを以て樂とすべし。天理にしたがひ、人道を行ひて、人をあはれむを以て、樂とせずして、そゞろなる俗樂をねがふは、富貴の人といへども、誠に不幸なる人といふべし。ことさら、富貴の人は、貧困なるものをあはれみ、ほどこすことを樂むべし。是富貴を得たる福徳なり。然らざれば、富貴を得たるかひなし。耳目口腹の欲も、よき程なるは、道にそむかずして樂となる。よきほどに過ぎて、欲をほしゐまゝにするは、身のわざはひとなり、人に害ありて樂にあらず、かへりてうれひとなる。

後漢明帝の弟東平王、その國より都に參勤ありし時、明帝問うて曰、家に居て何か樂しきや。東平王答へて申さく、爲レ善最樂といへり。いふ心は、われ國にありて、臣を愛し、民の貧窮飢寒をすくひ、鰥寡孤獨を養ひて、善をするは尤たのしきとなり。およそ人間の樂は、善をするほどの面白きことなし。いやしき匹夫も、善を行ふ志あれば、善をすること多く、其樂多し。日々善を行ひてやまずば、その樂きはまりなかるべし。況富貴の人、善を行はゞ、その功大きに廣くして、その樂も亦甚しかるべし。東平王の答むべなるかな。凡善をすれば、我が心快く、人も亦よろこび隨ふ。またたのしからずや。

尚書に有レ備無レ患といへり。いふ心は、萬のことかねて早く用意をすれば、にはかなることにあひても、うれひなしとなり。つねに善を心がくる人は、無事の時の用意ある故、俄に兵亂ありても行きあた

りてうれひなし。常に儉約して財のたくはへあれば、にはかなる變にあひても困窮せず。その養の諸事皆かくの如し。當時のつひえをはぶき、私欲をこらへて後の用意をしおくべし。常の時に、變にあへる時の覺悟なければ、不意に變にあひてつまづく。明日のことは、今日より心を用ゆ。來年のことは、今年より心を用ゆ。一生の事は、只今よりつとむべし。すべて萬の事、後悔なきやうに、かねて思ひはかるべし。人遠き慮なければ、必近きうれひありと、聖人のたまへり。

大和俗訓卷之六終

大和俗訓卷之七

貝原篤信著

躬行下

人の身に氣質のあしき所と、あやまちとあるは、身に病あるが如し。病ある人、醫をまねき藥を服し、針灸をして、病をせめざればいえず、身にあやまちある人、その過をせめざれば、たとへば病ある人の藥を用ひ、針灸をして、病をせめざれば病いえざるが如し。氣質を變じ改むるはきはめて難し、つねに心を用ふべし。故に前にもいへれども、又くりかへして人につぐるのみ。

天は常にめぐりうごきてやまず、人これにのつとりて、つねにつとめてやまざるべし。地は常にとゞまりしづかにしてうごかず。人是にのつとりて、つねにつゝしみ、しづかにして、心をうごかさゞるべし。つとむるにあらざれば人の道行はれず。つつしむにあらざれば人の道たゝず。つとむるとつつしむとは、即天地の道にして、人の法として行

ふべき道なり。

人の身になすわざ、何事にも道あらずといふことなし。坐するには坐するの道あり。臥すには臥すの道あり。行くには行くの道あり。飲食には飲食の道あり。言ふには言ふの道あり。動くには動くの道あり。視るには視るの道あり。聽くには聽くの道あり。道を行はんと思はゞ、事ごとに道あることを思ひて、謹をいたして、しばらくも道をはなるべからず。是身を修むる道なり。

不仁にして、吝嗇なれば、財多くもちても、人をすくひめぐむことなし。吝嗇ならざる人も、仁愛に心を用ひざれば、その施なくして、かへりて無益の事に財をつひやす。一兩事をあげていはゞ、門內に纔に及べる乞食貧人來りて食をこへども、心を用ひて是をめぐまざれば、家のやつこも食をあたへず。又寒夜に客來りて語るに、客にしたがひ來れる下部などを、屋の內寒からざる所に入れ置き、こゞえざるやうにするは、いとやすきことなるに、客に對するに專にしてまぎらはしく、從者の寒氣にくるしむべきを心にかけざれば、彼がうゑこゞえをしらずして、いたはることなし、是心を用ひざればなり。善を行ふに志あらん人は、萬の事、折ふしにつけて、心を用ひて、人のくるしみなからんことを思ひはかりて、人をすくふべし。

程子曰、財ををしみては、よく善を行ふことなりがたし、誠なくしては、善をなすことはなりがたしと。この言むべなるかな。財を用ひずして、たゞ言を以て人をかたらふとも、人をすくひがたし。人も亦よろこばずして、その人のために、忠をつくさゞれば、功をなすこと成りがたし。項羽を婦人の仁といひしも是なり。又凡の事、いつはりを以て善を行へば、中心よりいでざる故、善を行ふに專一ならずして、その事成就せず。誠の善とすべからず。人も亦信とせず、感通の理なし。

禮義廉耻の正しくいさぎよき道を以て、わが身を正すべし。かくのごとくすれば、あやまちすくなし。これを以て、人をせむべからず。人のうへを、事ごとにせめたゞして、わが思ふごとくに、よくせんとすれば、人とあらそひ、人のうらみ多くして世に交りがたし。人の善をばほめすゝむべし。人

の不能をばあはれみて、みだりにそしりとがむべからず。

聖人を以てわが身を正すべし。聖人を以て人を正すべからず。凡人を以て人をゆるすべし。凡人を以て我が身をゆるすべからず。

人のあしきをばゆるすべし。わがあしきを人にゆるさるべからず。人のあしきをゆるさゞるは、心の量せばし。わがあしきを、ひとにゆるされんことを思ふ人は、鄙狹の至りなり。

わが身は、十分に善ならんことを求むべし。人の身には十分に善ならんことをせむべからず。人に一の善あらば、又一の善を求むべからず。是一を得ば、二を求むべからざるなり。

君子は己をせむ。小人は人をせむ。己をせむれば身をさまる。人をせめざれば、人のうらみなし。小人はこのうらなり。人をせむる心を以て、わが身をせむれば過すくなし。己をゆるす心を以て、人をゆるせば、人のうらみなくして交を全くす。

德行はわれより上なる人を見てうらやみ、かれに及ばんことをおもふべし。ひきゝにのぞみて、わが身を高しとおもふべからず。財祿はわれにおとれる人を見て、みづからたのしむべし。世には身の福祿、我ほどもなき人多し。人各その分をやすんずれば、世にうらみなく、もとめなくしてたのしみ多し。上を見てわが身をあきたらず思へば、大富貴なる人も、願多く、その欲かぎりなくして樂なし。下をみれば、分をやすんじて樂多し。或人の歌に、上見ればはてしもあらぬ世の中にわれほどもなき人もこそあれ。とよめるが如し。

酒食をすごすは、病を生ずるの本なり。言をつゝしまざるは、わざはひの本なり。思案せざるは、あやまちの本なり。怒をこらへざるは、身をころすの本なり。私欲ふかきは、爭の本なり。儉約ならざるは、困窮の本なり。この六本さらざれば、身と家とをたもちがたし。つとめてこれを去るべし。

善をすることはやすく、善を行ひてその名聞をもとめざることはかたし。是まことの善なり。人を犯さゞることはやすく、人の我を犯せども、その返報をせざるはかたし。

心には、古の道を守り行ひ、身の作法は、今の世の風俗にそむくべからず。今の世に生れ、古の法にかゝはりて、必行はんとするはひがことなり、道に害あり。古法の内、當世にも行はるべきことは行ふべし、當世の時宜にそむくべからず。又當世の風俗にながれて、古の道にそむくは甚わるし。是道に志なきなり。道は五常五倫といふ。法は禮なり、作法をいふ。

世にまじはるには、和してながれざるをよしとす。和すれば人にそむかず。ながれざれば道をうしなはず。是世にまじはるよき程の中道なり。

五常五倫の道は、古今和漢同じ。若時により所によりてかはらば、誠の道にあらず。法は時により所によりて、よろしきと宜しからざることあるゆへに、古今和漢異なり。その國の禮法にそむくべからず。國法にそむきて、古の禮法を行ふは道にそむけり。但古の禮法の中に、國法に背かずして、今の世に行ひて宜しきことは行ふべし。もろこしの古の禮法ありとて、今の世の時宜にかなはずば行ふべからず。

忠信を主としていつはりなく、仁愛ふかくして人をあはれみ、義理をかたく守りて行ふべき節を失はず、父母兄弟に孝友をあつくし、主君につかへて身をわすれ、親戚をしたしみてうとからず、朋友に信實にしてたのもしく、家にありては嚴にして内行正しく、儉約にして吝なく、貧窮をめぐみ、艱難をすくひ、利欲すくなく、權勢にへつらはず、舊恩を忘れず、武をたしなみ、軍用をかゝず、一度約諾したることを、後までそむかざるを、良士とすべし。

古語曰、人のきかんことをおそれば、いふべからず。人のしらんことをおそれば、行ふべからず。是過すくなく、悔すくなく、また禍なき道なり。

善は必日々行ひ、久しく積みかさねて後、その功なりぬ。たとへば、補藥を用ひて元氣を補ふが如し。そのしるしおそし、久しく服してその驗あり。悪は少なりともおそるべし。たとへば、毒をくへばたちまち害あるが如し、其しるしはやし。悪を去ることは、つよき藥を用ひて、病を去るが如くすべし。たちまちにせめざれば身に害あり。

古語に、人生在レ勤、勤則不レ匱。といへり。つとめは利の本なり。よくつとめておのづから得るは、眞の利なり。利を專むさぼれば必害あり。農の田をつくりて五穀を多く得るも、工のたくみをいとなみ、商のあきなひて利を得るも、皆つとめよりなし出す利なり。士は佞巧を以てへつらはざれども、ただ忠勤をだに專一にすれば、求めざれども君の寵ありて、祿を得さいはひを得る。農は歳の凶にあひても、をこたらず耕作に專一なれば、自なりはひを得る。工は器を精しく作りて粗糙ならざれば、必其利を得る。商人は、いつはりなく正直にして、利分をすくなくとれば、諸人の信愛あつく、たのもしげありて、必あきもの多くうるゝ故利を得ること多し。是皆本をつとめて、おのづから來る所のまことの利なり。もし工は器をそざうに作りていつはり、商はあきものをいつはりて、利を多くむさぼれば、人信ぜずして、かれが器、うりものをかふ人すらなくなり。かへりて利を得ることすくなし。漢書に、貪賈三レ之。廉賈五レ之。といへるもこの意なり。いふ心は、欲ふかき商人は三分の利を得、欲すくなき商人は五分の利を得る。欲ふかき者は利を得ることすくなく、欲すくなき商人はかへりて利を多く得るとなり。

終日つとめ〳〵て、ゆふべにいたりても、おそれつつしむは易の教なり。天道は日夜めぐりてやまず。これを手本としてつとむべし。古人はつとに起き、よはにいねて、日夜つとめし故そのしるしあり。

古語に一生のはかりごとは、つとめにありといへり。つとめざれば、萬の事行はれず、身を立つることかたし。又一生のつとめはわかき時にあり。人の身をたつるはかりごとは、三十歳の内に覺悟すれば、一生の家業成立つ。その内覺悟なく怠れば、一生立ちがたし。一年のはかりごとは春にあり、春の間怠たりぬれば、一年のこと成りがたし。一月のはかりごとは上旬にあり、朔日より十日までの内につとむれば、一月の事成りやすし。十日の間に、すゑ二旬の日數をたのみてをこたれば。其事成就しがたし。一日のはかりごとは朝にあり、朝に一日の間の事をよく考へ定め、早くつとむればはかゆく。若朝の間をこたれば、一日のつとめは

かゆかず。又明日のはかりごとは、今夕にあるべし。明日のことを、明日はからんとて、今日さだめざれば、つまづきてはかゆかず。

古人は人の朝早くおくると、おそくおくるとを以て、家の興廢を知るといへり。朝早くおくるは、家のさかふるしるしなり。おそくおくるは、家のおとろふるもとゐなり。朝つとにおきて、事をつとむるを以て、身のならはしとし、家のつとめの則とし、見ならはしむべし。凡の人を見るに、朝ゐしては學ぶことならず。家業をこたりて、富めるものまれなり。朝居するは、おこたりのはじめ、貧窮のもとゐなり。よく事をつとむるものは、一日を以て十日とす。つとめてをこたりなくするどなれば、はかゆく故なり。をこたるものは、十日を以て一日とす。日數多くふるといへどはかゆかず。凡善をつとめて、をこたらざるを良士とす。必家をおこす。家業をつとめて、をこたらざるを良民とす。必とむ。

知れば行ひやすく、行へば知りやすし。二の者たがひに相助けて、道明らかにして行はる。たとへは道路をゆくが如し。道をしらざれば行きがたく、行かざれば行路をしりがたきが如し。

わが身の過すくなく、悔すくなからんことを思はゞ、事にさき立ちてはやく思案し、その事の是非をかんがへはかり、その事にのぞみて、又義か不義かをかへりみて、その理にかなはんことを思ひはかるべし。かねて思案なくして、その時にいたりて、にはかにまどひつまづくべからず。たとひいそがはしき事にのぞむとも、思ひめぐらして理の當否をえらび行ふべし。あはたゞしく、思案なくして行へば、必義理にちがひあやまること多し。すでに一たびよく思ひさだめても、又一ぺんに心得そこなふこと多し。その事の外に、心をめぐらし、其變をかんがへて、二たび思ふべし。孔子曰、人遠き慮なければ、必ちかき憂あり。さしあたりたることを思ふは、いふに及ばず、後の事を思ひはかり、あやまりなく、悔なからんことを思ふべし。たとへば、古語に、早に蓑笠を備ふべしといへる如く、たゞいまやどりを出でゝ、他所に行くに、天はれ日和よくして、雨ふるまじき景色なりとも、遠

き所にゆかば、天氣はかりがたければ、簑笠を持ちゆくべし。たとひ天氣よく雨ふらずとも、簑笠もたるいたづがはしきのみにて、さほどの妨にあらず。若思はざるに雨ふりなば、ぬれそぼちて、衣ぬらすのみかは、心をいたましめ、身をくるしましめ、折節人にも用あるべき簑かさを乞ひかりて、又もたせかへすも、われ人のためいたづがはし。よろづのこと、かねて心を用ひ、おそれつゝしみ、ふかく思ひ遠く慮りて事を行へば、あやまちすくなく悔すくなし。やつこ下部などの心ならひは、さしあたりて、わが身のたよりよきことのみを思ひて、後のわざはひをしらず。たとへばやがて雨ふりなんと見ゆるそらにも、雨衣の用意もなく出づる時、主人もてゆかんことを命ずれども、雨ふるまじきよしをあらがふ。やがて雨にぬれてくるしめどもこりず、いくたびも亦かくの如し。かく用意なくて、後のうれひをかへりみざるは、いやしきものゝくせなれば、よからぬことゝしるべし。すべて人の惡を行ふも、あやまちをするも、皆事にのぞみて、思慮せざるよりおこる。酒食をほしゐまゝに過して、病をおこすも、その時にのぞみ、思案なくして、只欲にまかせてのみくらふゆへに、病を生じ、はては身を失ふにいたる。よく思案してつゝしむは、欲にかち、禍をまぬかるゝみちなり。

わが身のあやまちを改めんため、人の諫を好むこと眞實ならば、いさむるもの多からん。酒食は人の好む物なれば、人辭退してふせげども、しゐて飮ませくらはしむるは、世のならひなり。是人の眞實に酒食を好むことをしれればなり。酒食をこのむごとく、諫をこのみ、わが過をあらためば、諫をいふ人多くして、我が身の過なかるべし。

子曰、躬自厚くして、人をせむるに薄ければ、うらみに遠かる。いふ心は、わが身の行をあつくし、十分によくせんことを求めて、常に我が身の行ひのたらざることを思ひて、つとめ行ふべし。人のたらざるをゆるしてせむべからず、かくの如くすれば人のうらみなし。

能く詩文を作る人は、妄に輕々しく文字を下さず。久しく沈思して、一字一句に心を用ふること精し

くして後、好き詩文を作り出せり。和歌をよむも同じ。如レ此ならざれば、詩聖歌仙といへども、好き詩文和歌を作ることかたかるべし。碁をよくうつ人の、碁子(ゴイシ)を下すをみるに、久しく思ひて後に下す、一子もみだりにはやく下さず。これを以て、碁子をくだせば、その所にかなひてよく人にかつ。是を以て思ふに、賢者の言行も亦如レ此。よく思案して後、ことばを出し事を行ふべし。この故に、賢者の言行は、あやまちすくなし。もしはやく決定して、かるがるしく行はゞ、賢者といへども過多かるべし。孔子の、必也臨レ事而懼。好レ謀而成者也。とのたまふを以てみつべし。當世の愚人より、聖賢のなす所を見ば、はかゆかずにぶくしてもどかしかるべし。常人も思案をこのめば、わが心をつくすゆへ、事をはやく決定せず、にぶきやうにみゆれど、あやまちすくなく道理に當ること多し。決斷早き人は、はかゆけども、必過多く後悔多し。

順境とは、思のまゝなる境界を云。逆境とは思ふやうにならざる境界をいふ。世間の事、順境に居るはやすく、逆境に居るはかたし。故に逆境に居れば敬畏出來て、身の過すくなくして、かへつて福となる。順境に居れば、驕怠の心出來て、身の過多くして身の禍となる。たとへば高に登るものはたふれがたし、勢逆にしてかたければなり。ひききに下るものはたふれやすし、勢順にしてやすければなり。孟子の、憂患に生きて安樂に死ぬる。とのたまふもこの意なり。うれひおそれあれば生命をたもつ。安樂にして放逸なれば、死をまぬかれがたし。敵ある國は長久し、敵なき國は、かへつて亡びやすきが如し。

周武王席銘曰。安樂必敬。無レ行可レ悔。この銘の意は、艱難にうれひある時は、おそれつゝしみて、あやまちすくなきゆへ禍なし。心やすくたのしむときは、必おこたりゆだんして、あやまちでき、わざはひおこる。かゝる心やすき時殊につゝしむべし。つゝしめば、あやまちすくなく、行ふことごとに後悔なし。のぼり坂は、なやめる故につまづかず、くだり坂は、なやみなくしてまろびやすきが如し。

日々行ふことごとに、過なからんことを思ふべし。

過あれば必後悔あり。後悔はあやまりよりおこる。いかりと欲とをこらゆれば、過すくなく後悔すくなくして後の禍なし。又事ごとに、早く行はずして、しづかによく思案して、是非のうたがはしきことは、みづから決定せず、人に問ひてわが善惡を考ふべし。いそぎて、にはかに事を決斷すべからず。早く決斷すれば過多し。諺に悔はさきだゝずとはいへれど、事に先立ちて、よく思ひつゝしみて、しづかに行はゞ、あやまちすくなくして後悔なかるべし。あくまで思案し、十分にはかりて後あやまちあらんは、わが心の分量をつくしたれば、ちからに及ばず。その上は天命に任せて、うれふべからず。

君子は、朝夕つとめて善を行ふ。小人は朝夕つとめて利を行ふ。君子小人、ともにつとめ行ふといへども、その志は利と善とかはれり。善に志すは、聖人の徒なり、利に志すは盜蹠が徒なりと、孟子のたまへり。利とは、財利をむさぼるのみにあらず、われひとり勝手よきやうに、便利をはかるも利心なり、是私なり。私を行へば必人に害あり。人に害あれば、必わが身の禍となる。善を行はん人は、必先づ利心を去るべし。利を心にさしはさんでする善は、誠の善にあらず。

君子の道は、すべきことを行ひ、すまじきことをせず。これ義なり。このむべきことをのみ、このむまじきことをこのまず。是善なり。君子の道は、かくの如きのみ、是孟子の語意なり。

人の知は目のごとし。人の目はよく百里の外を見れども、わが睫を見がたし。人の知よく、他人の惡をしれども、わが身の惡をしらず。人をみることは常に明なり、私なければなり。自見ることは常にくらし、私あればなり。こゝを以て、人の過をせむることはきびしく、わが惡をゆるすことはゆるやかなり。

富貴の人、善をこのめば、富貴の力によつて人をすくひ、善を行ふこと廣し。是まことに樂多かるべし。富貴にして、善をこのまざれば、富貴のちからによつて、おごりて人をくるしめ、惡を行ふこと廣し。かくの如くなれば、富貴なるも、かへつてわざはひとなり、貧賤におとる。何の樂かあら

ん。貧賤なる人、もし艱難によりて、よく身をつつしみて過をあらため、善をつとめ行はゞ、禍なくして樂多かるべし。かくのごとくなれば、貧賤なるも、かへつて福となり、富貴にまさる。

敏レ事とは、行ふべきことを、ゆだんなく、するどにつとめて行ふをいふ。何事もつとめずして、をこたれば事行はれず。行へどもはかゆかずしてなすこと成就せず。よく事をつとむる者は、事をいそがざれどもをこたりなき故、一日に十日の事をなす。をこたる者は十日に、たゞ一日の事をなす。をこたるとつとむるとは、その功はるかにかはれり。

自信とは、わが行ふ所理に當れりと、あきらかに思へば、人のそしりをかへりみずして、心をうごかさゞるをいふ。古詩に、禮義不レ愆。何憂二人言一。といへるが如し。小人非義を行ひて人の誹をかへりみざるとは別なり。君子善を行はゞ、人のそしりをおそれざるべし。小人不善を行ひて、人のそしりをおそれずんば、その惡きはまりなかるべし。

耐レ煩とは、むつかしきことをきらはずして、堪忍してつとめ行をいふ。もし孝弟忠信など、諸のつとめを、むつかしとてをこたり、人の附託をうけて、いたつがはしとて、おろそかにするものは、善を行ひとげず。是善をこのまざればなり。わがこのむことは、日夜つとめても勞せず、何事もつとめをむつかしとて、苦しむ者は氣むすぼれて、必病おこる。

今日は明日の計をなし、今月は來月の計をなし、今年は明年の計をなし、平生は一生の計をなし、生前に早く死後の計をなすべし。をこたるべからず。

明日行ふべきことあらば、必今日よりその事を思ひはかりて定むべし。明朝使をつかはし、文をおくらんと思はゞ、今夕よりかきとゝのへて使を命ずべし。その日の事をその日はじめて思案し、いとなめばはかゆかず。事にのぞみて、或はさまたげ出來、まぎらはしくて過多し。

中庸に、凡事豫則立。不レ豫則廢。言前定則不レ跲。事前定則不レ困。といへり。豫とはかねてと云意、事を前に定むるなり。萬事かねて思案して定むれば、

事立ちて行はる。さなければ事すたりて行はれず。物いふにも、かねて先思案していへば、言つまづかず。事を行ふにも、かねて思案して定むれば、事にのぞみて行きあたりくるしまず。

世に住むこと一日なれば、一日の善人となるべし。一日も善を行はずして、日を送るべからず。公儀の官職にあづかりて、官に居ること一日ならば、一日の善事をなすべし。一日も善を行はずして、官をむなしくすべからず。世に久しく住みて善行なきは、一生を空しくするなり。官職に居て善行なきは、官職を空しくするなり。この二は大なるはぢなり。

衆人の行ふわざは、かねて思案なく、又事にのぞみては、慮もなくはやく決定するゆへに、毎事あやまり多くして、後悔すれども、それにもこりず、つねに事ごとにかくの如し。一事あるごとに、必後のあやまり悔あらんことをおそれ、しづかに思慮して行ふべし。何の害かあるべきと思ひ、思慮もなく其まゝ決定すべからず。もし即時にきはめがたくば、かさねてよく思案して行ふべし。事にあたりて、十分に道理にかなひ、此上は思案に及ばずと思ふとも、又いかなるあしきこともあらんかと猶豫して、俄に決斷すべからず。是あやまちすくなく、悔すくなくする道なり。

思慮して、善悪をよく明らめたらば、必決斷して猶豫なく行ふべし。思慮して理明らかになりても、決斷つよからざれば行はれず、悠々としてむなしく時を過すはあしゝ。所謂見レ義而不レ爲無レ勇也。思慮と決斷との二そなはりてよし。思慮なくして、みだりに早く決斷すればあやまる。是不智なり。思慮して、道理はわかれぬれど、悠々として時を失ふは、をこたりなり。是無レ勇也。二の者はいづれも悔あり。

凡あやまりは、おほくは初一時の快きを求むるよりいでゝ、後はながきうれひくるしみとなる。はじめ少し心を用ひ、少し慾をこらゆれば、其ちからを用ゆることはすこしなれど、しるしを得てさいはひとなることは大なり。少しの間少しの事をこらへずして、大なるわざはひとなること多し。

夜にして後、けふのわが身のなせるわざを、よくか

へりみて、ひがことあらば、後日のかゞみとして、改めんことを思ふべし。毎夜かくのごとくすべし。

人の身の上、さしあたりてなすべきこと多し。よく思ひてゆだんなく、はやくつとむべし。ゆだんあれば、急なることとは、さしおきていそがず、急ならざることを、いそぎてつとむ。緩急をかんがへて、前後の次第を失ふべからず。さして用なきことをつとめ、いたづら事をこのみて、日をおくるははかなしといふべし。わかき時は、ことにすべきわざにも、心を用ひずしてむなしくすごすこと多し。よく〳〵心をつくべし。

人のしらんことをうれふることならば、悪事なるべし。心にきざすべからず。ことさら身に行ふべからず。

人のあしきをそしる人は多し。わが身のあしきをかへりみて、改むる人すくなし。わが身をわすれて、人の上をそしることおろかなり。

わが身の上を、つねにかへりみをさむべし。人のほめそしりは、あながちにうれひよろこびとするにたらず。いかんとなれば、ほむる人そしる人必皆賢者ならざればなり。

人われをそしらば、たゞわが身のあやまちをかへりみるべし。もしわが身に過あらば、そしる人は即わが師なりと思ひ、うらむべからず。わが身に、少しもあやまりなきをそしらば、彼人は妄人なり。かれとあらそひにくむにたらず。

人の悪をすること三の故あり。氣質の偏より悪をなすあり、又あやまりとはしれども、人欲の私によりてなすあり、又ならはしの誘によりてなすことあり。この三の内、氣質の偏なるは悪の本なり、人欲の私は悪の幹なり、俗習の誘は悪の末なり。身の禍となることは共に同じ。氣質のあしきをば變化して改むべし。人欲をば忍びて、ほしゐまゝにすべからず。俗習をばその非をしりてうつるべからず。

よき人は、心を用ふること多き故、事ごとによくをさまりて過すくなし。よからざる人は、心を用ひずして過多し。下部などの智慮なくして用にたゝざるは、皆心を用ひざればなり。心を用ゆるとは、なにごとぞや、思案するを云なり。

古語に、つとむれば貧にかち、愼めばわざはひにかつといへり。いふこゝろは、つとむる人は必富む、つゝしむ人は必わざはひなし。

過ぎにしことをおもへば、あやまり多くして、くやしきこと多けれど、一たびあやまりて、かへらざることは、悔のやちたびかなしめども益なし。今より後をつゝしみて、過なく悔なからんことを思ふべし。又あやまりて後、はやく改むれば過なくなること多し。易に所謂、遠からずしてかへる、悔にいたることとなきなり。萬のことはじめによくつゝしみおもむばかりて、後悔なからんことを思ふべし。はじめに思慮なければ、あやまりて悔あり。愼レ終于レ始と尚書にいへり。

身の禍福は天命に任すべし、人に求むべからず。身の德行はわが心に求むべし、人をせむべからず。君子は人道の行ふべき法を行ひて、身の上の吉凶は天命を待つ。是則とすべし。

人のために益ある善事を毎日多く行ふべし。その善事とは、富貴なる人は、ひとにほどこしすくふこと自由にしてひろく行ひやすし。心にかけて行はば、その功大にその樂も亦大なるべし。貧賤なる者も、志だにあれば、所にしたがひ時にしたがひて、人の利益となること多し。わが家の内、または外なる道に、人の往來に足にさはりとなる物あれば、これをのけて他所へうつし、のんどかはく人には、一盃の水をあたへ、つかれたる者に、一椀の食をあたふる、かやうのたぐひ、少なることながら、人の益になることきはまりなし。上は王公より、下は庶人乞丐にいたるまで皆行ふべし。年久しく積行はゞ、其善大にしてきはまりなかるべし。常に善を行ふを以て樂とすべし。

天地父母は、わが生れし本にして、わが身のよつて來れる初なり。わするべからず。天地の恩をしらずして、仁にそむき、父母の恩を思はずして、孝を行はざるは、わが身の生れ來れる本初を忘れたるなり。人と生れたるかひなしといふべし。われ人のはぢておそるべきこと、是より大なるはなし。

善をするは、のぼり坂をのぼるが如し、つとめざればなしがたし。惡をするは下り坂をくだるが如し、つとめざれどもなしやすし。しかれば、善はこの

みて力を用ひつとめ行ふべし、悪はにくみてつゝしみおそるべし。

大和俗訓卷之七終

大和俗訓卷之八

貝原篤信著

應接 事に應じ人にまじはる道をしるす

人にまじはるには、つねに禮義を正しくすべし。禮義のはじめは、先威儀をとゝのふべし。威儀とは身の形儀をいふ。衣服を正しくし、顔色をとゝのへ、形を嚴にし、ことばを順にするを威儀といふ。ことさら、ことばづかひうやまひて無禮なかるべからず。言のなめげなるは下部の交なり。言語容貌は、内心の外に見ゆる符なり。ことばとかたちを見きゝて、その内心の善惡はしれやすし、つゝしむべし。又ことばのうやまひ過ぎたるも、禮にあらず、へつらへるなり。過不及なかるべし。

人にまじはるには、貴賤と親疎によらず、愛敬をむねとすべし。愛とは、人をいとをしみてにくまざるなり、仁の用なり。敬とは、人をうやまひてあなどらざるなり、禮の用なり。人に交はるに愛敬なければ、人我の間へだゝりて、人倫の道行はれず。

父母につかへ、兄弟夫婦に對し、賓客に交るも、皆愛敬を以て心法とす。おやには、愛を主として、敬を行ふべし。おやを愛するのみにて、敬はざれば、犬馬をやしなふに同じ。君には、敬を主として、愛を行ふべし。君をうやまひおそれたるのみにて、心まことに愛せざれば忠にあらず、臣たるの道たたず。

したしき人を愛し、貴き人をうやまふはいふに及ばず、うとき路人に對し、いやしき乞丐に對するとも、皆これ天地のうめる人なれば、その分にしたがひて愛敬すべし。にくみあなどるべからず。うときしたしきにより、貴きいやしきにしたがひて、愛敬する厚薄はあるべけれど、愛敬せざることなかるべし。

凡愛敬を行ふには、信を本とすべし。信とは、愛敬を行ふに、その心眞實にして僞なきなり。信なければ、眞の愛敬にあらず。信は人にまじはる道なり。信なくては人と我との心感通せず。いかに言と貌に愛敬をあらはすとも、信なければ、人まことゝせずして、愛敬の道行はれず。

人に對するに、溫和にして謙り、おのれにほこらず、人をあなどらず、ことばすくなく、信實に愛敬ありて、むかひよからんこそ、善人とはいふべけれ。我身かろ〴〵しからずして正しければ、溫和なれども人あなどらず。

朱子曰、平レ心和レ氣は、是學問の根本なり。この語よくおもふべし。人の萬事は心氣を本とす。心氣和平ならざれば、萬事の本たゝずして、道理行はれず。人に交るに尤和平なるべし。父母につかふるには、かならず氣を下し、色を怡ばしめ、聲をやはらぐる、是心氣の和平なるなり。たゞ父母につかふるに、かくのごとくにすべきのみならず、すべて人に交はるに、皆かくのごとくなるべし。人一言わが心にそむけば、たちまち心にいかり、色にあらはれ、目をいからし、ことばをはげしくする。これ心氣の和平ならざるなり、また器のせばきなり。心氣すでにうごきみだれては、本みだれて末をさまらず。なんぞその言行よろしかるべきや。

人にまじはるに、恕を以てすべし。恕とは己をおし

て人に及ぼすなり。いふ意は、わが心を以て、人の心にくらぶるに、たがふことなし。わが好むことは、必人もこのめり。わがきらふことは、必人もきらへり。故にわが心を以て、人の心をおしはかり、わがきらふことを、人にほどこすべからず。わが好むことは、人にほどこすべし。是仁を行ふ道なり。又人あやまちあらば、凡夫はかくこそあらめと思ひてゆるすべし、とがむべからず。人の得ざる所は、せむべからず。おろかなるをば、いかるべからず。人の我に無禮を行はゞ、理しらぬ故と思ひて、うらむべからず。聖人頑なるをいかりにくむことなかれとのたまふ。頑とは、心愚にして道理に通ぜざるなり。頑愚に生れつきたれば、すべきやうなし。赤子の井におち入るがごとし。おろかにして、道理をしらざる故に、ひがことを行ふはあはれむべし。是皆恕の道なり。

わが身に善を行ひて、人に善をすゝむべし。我が身に悪をさりて、人の善をいましむべし。かくのごとくなれば、人したがひやすし。是己をおして人に施すなり。是も亦恕の道なり。

人にまじはるには、自反をむねとすべし。自反とは、みづからにかへるなり。人をとがめずして、わが身に立ちかへりて、善をおのれに求むるをいふ。人われにしたがはず、我にそむかは、わが過をせめて、人をとがむべからず。人に求めずしてわが身に求むべし。わが身をかへりみて過なくとも、わが行のいまだいたらざる故と思ひ、人をせむべからず、いかりそしるべからず。是自反なり。自反は身をせめ、人にまじはり、世にをる要道なり。自反のこと、前にもすでにいへり、又くりかへしていふなり。

凡人に交るには、言もかたちも禮をあつくすべし。人のことばをとがむべからず。もしやむ事を得ずして、人のあやまちをたゞさば、禮義を以てその道理を眞實にのぶべし。いかりて言を過し、無禮をなすべからず。

古人の言に、天下皆非なるの理なしといへり。この言よく體認すべし。世の中の人のしわざ、わが心にかなはずとも、皆ひがことにてはあらじ。何事ぞ、故ありてかくあるべしと思ひ、みだりに人をと

かむべからず。わが心におしゝと思へど、又さなきことあり。故ありてなせる事には、過ならざることあり。又かへつて道理にかなへる事あり。わが心かならず、道理の寸尺のかねになるべからず。わが心におしきと思ふとも、みだりに人をせめそしるべからず。愚なる人は、人情事變をしらず、人のなすわざ、心に叶はざれば、故ありと故なきとをかへりみず、みだりに人をそしりうらむる故に、うらむるもそしるも、義理にかなはざること多し。

人われをそしらば、そしるものをとがむべからず。わが身にかへりみて求むべし。わが身に一分の過あり、人われをそしること十分なりとも、わがあやまりより、おこりしことなれば、恨むべからず。わが過をせむべし。これそしりをやむる道なり。左もなくて、たゞ人をとがめ、人をうらみて、我に求めざれば、人のそしりはやむべからず。

朋友の間、禮あつければ、あらそひなし。喧嘩口論は、必無禮よりおこる。人に交るに禮義正しく慇懃なれば、人と我との間、滯なくして和らぎむつまじ。人に交るに無禮なるは、これいやしき俗人下部の風俗なり、士の交にあらず。いましむべし。晏子が人にまじはるに、久しくして敬ひしことを聖人もほめ給へり。久しく交りて、たがひに心やすくなりゆくまゝに、無禮をなすべからず。

人われに無禮なりとて、わが恥辱にならざることは、とがむべからず。人の無禮をなだめゆるして堪忍すれば、わが心和平にして樂をうしなはず、人にあらそはずして無事なり、われに恥辱なし。古語に、忍過ぎて事よろこぶにたへたり。といへるがごとく、堪忍して後よろこびとなる。もし人の無禮をとがめて、われよりもまた惡言を出し、無禮を行へば、人も亦いかりて堪忍せず。わがとがめしより、猶すぎて甚しく無禮をわれにほどこせば、堪忍なりがたくして、即時にたゝかひに及ぶ。このときにいたりて、はじめてそのわざはひをおそれて、堪忍するも見ぐるし。たゞはじめより、禮義正しくして、人もし無禮を行ふとも、わが恥辱にならざる程は、堪忍して我より又人を惡口すべからず。かれが愚なるに對して、いかりをおこし、無禮をほどこせば、われも亦愚なり。

古語に、和なればかたきなし、忍べば辱なしといへり。いふ意は、温和にして人とあらそはざれば、かたき出來ず。人の無禮をゆるして、いかりをこらゆれば、人のいかりもおこらずして、我身に耻辱なしとなり。しばしの間、いかりをこらへずして、人とあらそひたゝかひ、人をころし身を失ふ。一朝の怒に、その身をわすれて、その親に及ぼして、父母をうれへしむ、不孝の至なり。君父の大事に死ぬべきあたら命を、かゝるよしなきことにすつるは、至りておろかなり。忠孝の道しらざるのみならず、武勇を心にかけざればなり。死ぬることはやすく、死して道理にかなふことはかたし。

臍下三寸を丹田といふ。人の一身の氣を、つねに丹田にをさめて、胸にあつむべからず。是氣をさむる良法なり。人に交り、事に應じ、物をいふに、まづ心をしづかにして、父氣を丹田にをさめて、物をいひ、事をなすべし。是氣の本を立つるなり。本たてばちからありて道生ず。しからずして、氣のぼりて、むねにあつまれば、心うごきさわぎてをさまらず。この時ものいひ、ことをなしいだせば、ちからなくて、必あやまり多し。學者身ををさめんと思はゞ、心を平にし、氣を和らかにすべし。氣をむねにあつめずして吐出し、丹田にをさむること、術者の言に似たりといへども、よく習ひなせば、甚そのしるしを得ることあり。物をいひわざをつとむるに、氣ををさむる良法なり。

人われに無禮なりとて咎むべからず。おろかなる人か、或は酒にゑひたる人は、狂人と同じければ、堪忍したりとて、いさゝか耻辱にはあらず。かれに對して、いかりあらそふは、我も亦おろかなりといふべし。敵對すべからず。

小人の我に對して、ひがことをいひ行ひて、さとしがたきはすべきやうなし。もし小人にたてあひて、我が顔色と言語をはげしくし、いかりあらそひて、その是非をいひきかせても、かれもとよりかしこからざればきゝわけず、かへりていよ〳〵いかりあらそふ。かくのごとく、かれといかりあらそへば我も亦小人なり。いよ〳〵わが身をつゝしみををさめ、顔色を和らげ、ことばを順にして道理をいひきかせ、事はこれは、彼もしすこし人心地あらば、

みづからその非をさとるべし。かれさとらずとも、わが心法に害なし。

人に交るに、小人としらば、其人をゆるして、彼と善惡を爭そふべからず。又小人としれども、はなはだへだてなくとがめざれば、小人我を害せず。

およそ、人に善ををしへて行はしむるに、その人の生れつきたる所につきて、すゝめ行はしむべし。もし生れつかず、その人の不得手にて、心になきことを、しゐてせめすゝめても、つゐに從がはざれば益なし。必我が心のごとくにせんとおもふべからず。

凡夫の心はたのもしげなし。親しみあつけれども、變じやすし。今親しむといへど、後を保ちがたし。人の心を賴みて、あやまつことなかれ。

およそ、人の心の同じからざるは、その面のごとし。世間の人ごとに、各心かはれるゆへに、人のなすわざ、わが思ふごとくならざるは、人の心のありさまかくのごとしと思ひ、我が心にかなはざるとて、人をとがむべからず。これを堪忍していからず、ことばに出さゞれば、無事にしてわが心やすく、人にさはりなし。是世にまじはる道なり。

君子はみづからせめて人をせめず、故に善を己に求む。小人は人をせめて、みづからせめず、故に善を人にもとむ。小人は人をせむることおもく、我が身をせむることかろし。人を愛することうすく、わが身を愛することあつし。君子はしからず。人をせむる心を以て、わが身をせむれば過すくなし。わが身を愛する心を以て、人を愛すれば仁をつくす。

人に交る道は厚きをむねとす。厚しとは、人をせめずして我をせむるをいふ。如此すれば、我が心和樂にして人をうらみず。人もまた我をうらみずしてしたがひやすし。うすければそのうらなり。人のあやまりをきびしくせむれば、子弟の輩も、うらみふかくそむきやすし。况他人をや。

世には愚なる人多し。世にまじはるに、わが道理を專に立てんと思ふべからず。我に道理あり、人に非ありとも、人とあらそふべからず。人に十分のあやまりありとも、人にも少しは道理をつけ、少しは人にまけて、人にかたんことをこのむべから

ず。かやうにすれば、人とあらそはず、われと人との間和して、人の心をうしなはず、無事にしてさはりなし。

明月の玉にも、きずなきことあたはず。過なき人、なんぞ今の世にあらんや。今の人、ひとの小過あるをみて、その人をいやしみ、すこし短なる所あれば、長ずる所あれど、言ひおとし、すてゝ取用ひず。おろかなるかな。聖人は過なし、聖人を以て人をのぞまば、世に人なかるべし。人のあやまちをせめて、わがあやまちをしらざるは、おろかなるかな。是わが身をかへり見ざればなり。もしわれをかへりみば、我が身にも過おほかるべし。わが身をかへりみて、我が過をせめば、人の過をとがむるには、いとまなかるべし。我が田の草のおほきをば、其まゝおきてとらず、人の田をくさぎるに、古人もたとへたり。

君子は、禮儀を尊にして爭なし。爭は小人のことなり。小人は人に交れば、わが才智藝能など、凡我が身に能あるを以て、人にほこりあらそふ。是禮儀の道にあらず。獸の角と牙とを以て爭ふが如し。爭はざるは人に交るの道なり。凡節義をまもり、武勇を行ふは、進んで人に先だつべし。その外のことは、人に先だゝず、少し人におくれ、少し人にまけたるが、爭なくして禮にかなひ、その上禍なき道なり。

善人に交れば、日々に善言をきゝ、善事を見ならひて益あり。惡人に交れば、日々惡言をきゝ、惡行を見ならひて損あり。交る人えらぶべし。ふるきことわざに、朱にまじはればあかし、墨にちかづけば黑し。といへるがごとし。正直なる人にまじはれば、わが心につゝしみ出來、我があやまりをききて益あり。われにへつらふ人に交れば、いさめをきかず、わが心にしたがひほむる故、わが心をこたりて損あり。たとへば、味よき酒食を、多くのみくらへば病おこり、苦きくすりをのみ、あつき灸をすれば、やまひいゆるがごとし。

おろかなる人は、情こはくしてさとしがたく、義に移りがたし。かゝる人に對して爭ふべからず。我が身のふるまひだに、わが心にかなはざること多し。なんぞ他人のしわざ、わが心にかなはんや。人

のしわざの、我が心にかなはぬは、ゆるすべし。とがむべからず。たゞ我が身をかへりみ、わが過をしりて改むべし。

人の生れつきは、各同じからず、得たる所あり、得ざる所あり。これに得たりといへども、彼に得ざる所あり。何事も一人の身に、よきことをそなはれる人なし。その人の得たる所を用ひて、得ざる所をせむべからず。一事よきことあらば、取用ひてその餘のよからざるをとがむべからず。わが身をかへりみば、得ざること亦多かるべし。もし人の得ざる所をせめて、得たる所をすてば、天下に用ゆべき人なく、交るべき人なかるべし。得たる所を取用ひ、得ざる所をゆるして、せめざれば、天下にすたれる人なかるべし。人に交はるにもかくのごとくすれば、人のうらみなし。

人の得たる所を以て、得ざる所を信ずべからず。一事得たりといへども、他事には得ざることあり。又得ざる所を以て、得たる所をうたがふべからず。一事えずといへども、他事に得たることあり。我が得たる所を以て、人の得ざる所をそしるべからず。是恨をとるみちなり。

不智不才の人といへども、必すぐれて得たる所あり。智者はその得たる所をとりて、得ざる所をゆるす。故に天下にすたる人なし。たとへば良醫の藥を用ゆるがごとし。いかなるいやしき草にも、よき能あればとり用ゆ。大匠の材を用ゆるがごとし。すぐなるを柱とし、それるをうつばりとして、材をすてず。

古語に、善をよみして、不能をあはれむといへり。人の善事は賞翫し、得ざることをばあはれみて、せむべからず。是君子の心なり。

高位の人に對すとも、その勢に屈しへつらふべからず。又品くだれる人に對すとも、あなどりかろしむべからず。孔子の大人をおそれ給ふは、その位をうやまひ給ふなり。孟子の大人をかろんじ給ふは、その勢に屈せざるなり。聖賢の道、ならび行はれて相そむかず、共に萬世の師なり。

人にまじはるに、おくり物を以てするはなんぞや。是心の愛敬を外にあらはし行ふ禮なり。送物をもちひざれば、心にある愛敬の誠を外にあらはすべ

きやうなし。おくり物を用ゆるはこの故なり、是人に交はるの道なり。いにしへ、神につかふるに、蘋藻のすゝめ物あり、是いさぎよき水草を以て神にそなふるなり。はじめて師にまみゆるに、束脩の禮あり、是贄を持參して、師をうやまふなり。神に事へ、人に交るに、かくのごとくならざれば、その誠あらはれず。されど貧しき者は、貨財を以て禮とせず、ちからに及ばざる送物を、つとめて行ふにはあらず。老いたるもの、筋力を以て禮とせざるがごとし。又よからざる物を人に送るは、おくらざるにおとる。おくり物によりて、その人の志の實不實あらはる。送物にも心を用ひて、愛敬の誠を行ふべし。下人にまかせて、濫惡なる物を人におくるべからず。

人に對して物いふに、我が位と年とのほどをかへりみ、又對する人の位と年との品をしりて、其宜にかなふは禮なり。若いまだ物なれざる人は、すこしは人をうやまひ過すは、筋にあたらざれども、大なるあやまりにあらず。わが位よりおごれるは、無禮にして大なる過なり、見にくし。座につくにも、我が身に宜しきよきほどの所につくべきを、ゐなか人か、又禮しらぬ人は、ひとの請せざるに、高座に上りすぎて、見ぐるしくわらふべし。わが位より下座につくは、禮にあたらざれども、大なる誤にあらず。

我が身を卑下して、人にたかぶらざるは誠によし。されど、あまり卑屈にして、へりくだり過し、つくべき座敷などにも、たやすくつかず。道ゆくにも、我がさきへ行べき位なれど、辭してゆかず。我が前にめぐり來れる盃をも呑ずして、人のことばを多くつひやさしむるも、かへりて無禮なり。たゞわが當然なるべき程をば、あながちにつよく辭退すべからず。位ある人、老いたる人、下座にありては、いやしくわかき人の居るべき座なくして、各その處を得ざることあり。しかれば、卑下するにも過不及なかるべし。

人のほめそしりを聞くことよく察すべし。譽むる人、そしる人、智なくして、人の善惡と事の是非をしらず。その上私ありて、わが氣にあへるをほめ、氣にあはざるをそしれば、善惡亂れて人をそまは

す。かゝる人のほめそしりは、必信すべからず。これを信すれば、あやまりて、是を非とし、非を善とし、咎なき人をうらみ、善人を遠ざけ、惡人をちかづくれば、そのわざはひ甚し。人のほめそしりにまよふべからず。

心あへば、千里も相したしみ、心あはざれば隣家も往來せず。或は日々に對談してもその心をしらず。或は千里をへだてゝも、その人を相したふ。是心の合ふと合はざるとによれり。心の合へる人まれなり。思ふことといはでたゞにややみぬべき我にひとしき人しなければ。とよみけんこととむべなり。世に相しれる人多けれど、同心の人まれなり。その上人をしること至りてかたし。兄弟にても相しらざること世に多し。人の我をしらざるをうらむべからず。

賓客を久しくまたしめざるは、主人の禮なれば、古人のよしとすることなり。客來らば、我が位よりいやしき人なりとも、はやく出て對すべし、久しく待たしむべからず。客を久しく待たしむるは、無禮の至りなり。富貴權勢の家に、必此あやまりあり。もしゆへありて、はやく出であふことならずば、人をしてその由をつげやるべし。周公は文王の子、武王の弟にて、その位貴かりしかど、客來れる折ふし、髮洗ひ給へば、かみをにぎりて客にあひ、飯をくひ給へば、口中なる食をはきて客にあひたまふ、人の心をうしなはんことをおそれ給ひてなり。又家に敎なければ、そのやつこ、必客に對して無禮なり。ことに權勢の家のやつこ、主人の戒なければ、必主人の權勢にほこり、賓客におごりて無禮を行ふ。是諸人のいかりにくむ所なり。そのやつこはせむるにたらず、そのとがは皆主人に歸す。主人たる人、是をしらざるべけんや。

陸宣公曰。寧人負(ソムク)レ我。我勿レ負レ人。是忠厚の道なり。忠厚とは、人を愛することの眞實にして厚きなり。人のよきにめでゝ、我をよくするは厚といふべからず。人の我にそむき、われをそしるをいかり恨みず、我より人にそむかずして、いからず、恨みそしらず、人の我にしたがふと、したがはざるを心にかけざる、是厚といふべし。もし如レ此ならば

彼亦人なれば感じてしたがふべし。したがはずとも、わが心法に害なし。

瘖は口物いはず。聾は耳きこえず。口耳に聲音の通せざるのみにあらず、心にも亦生れつきて、瘖のいはざるが如く、聾のきかざるがごとくに理の通せざる人あり。その人と是非をあらそふべからず。是とあらそへば、我も亦人をしらざるなり。愚といふべし。

わがもとに來るべき人、ひさしく來らずとも、故あるらんとおもひうらむべからず。こなたよりは、したしき人には、したしみを失ふべからず。これあつき道なり。

人われに對して過あらば、心を廣くしてゆるすべし。我が身に過あらば、心を小にしてせむべし。

對しがたき人に對せば、彌厚なるべし。なしがたきことをなさば、彌緩なるべし。急なることに對せば、彌靜なるべし。是古人の言なり。或人、能書にふみをかゝするに、急用のことなり、靜に書くべしといへり。又俗語に、急がばまはれといへるも其意同し。

人の善言を聞きて、うつりやすきは誠によし。人の不善なることばを聞きて、うつりやすき人あり。まよへりといふべし。是知なければなり。よく心の内に思案し、その言の是非をわきまへて、あしき言にまよふべからず。

古人のことばに、衆人を以て人を望めば、人したがひやすしといへり。衆人とは、凡夫のことなり。人の我に對し不義なるをば、凡夫なれば、かくこそあらめと思ひ、なだめゆるしてとがめざれば、人われにしたがひやすく、人そむかずとなり。君子の道を以てかねにして、凡夫を一々たゞせば一もかねにあはず、一人も全き人なかるべし。かくのごとくすれば、人われにしたがはず、そむきやすし。ひがごと多きは、うき世のならひぞとおもひさとりて、人をとがめ世をうらみざること、君子の心なり。

喜によつて、人に物をあたへ賞を行ひ、いかりによつて、人をせめ罰を行へば、必理にあたらずしてあやまる。喜怒の時、こらへて事を行ふべからず。よろこびもやみ、いかりもやみ、常の心になりて

後事を行ふべし。くじをきく人、訟ふる者のことばによりて、いかりを起し、悦をなすべからず。怒れば必非分のせめを行ひ、悦べば罪あるをゆるす。愼しむべし。人をさむるには、まづわが心をさむべし。我が心をさまらずしては、理非を分ちがたかるべし。いかりによつて理をまげ、是を非とし、罪を重くするは、賄賂にふけりて、理をまげて罪をかろくするに同じ。

事に處るには、よく思案し、しづかに行ふべし。よく思案すれば理にそむかず。しづかに行へば、あやまちすくなし。

下に對するに、わが心にひいき偏頗の私なかるべし。我が心に合ひたるものをば、ひとへに愛し、氣に不レ合者をば、偏に惡むは是愛憎の私なり。如レ此すれば、人に施すに過不及ありて公ならず。衆人は愛すぐればおごる、愛せざればうらむ。是偏愛偏憎の私よりおこる。人に對し下に施すに私なくして、その人の貴賤親疎功罪賢愚にしたがひて、與ふべきほどあたへ、與へまじきにはあたへず。かくのごとくなれば、幸不幸なく、過不及なくして諸人のいきどほりなし。人々その處を得て、不足のうらみなし、是たひらかにするなり。

いとまある人、さびしさのあまりに、いとまなく時ををしむ人のもとに來り、心のどけくよしなき長ものがたりし、あるじにいとはるゝこそ、むげに心なきわざなれ。されど、かゝる人に對せんとき、わが心にかなはずとも、ひたすらに面のけしきあしく、詞づかひ不順なるべからず。

人われに對して、不慮に無道なることをしかけ、云かけして、はなはだわが心にそむくことあり。是横逆の人なり。かやうの處を逆境と云ふ。世にまじはるには、必かくのごとくなる横逆の人あり。かゝる逆境にあひたる時ごとに、必堪忍の工夫をなして、いかりうらむべからず。色にあらはし、言にあらはすべからず。是動レ心忍レ性て、氣質を變化し、心をみがきて學に進む時なり。空しく過ぐべからず。かやうの時、つねに心にかけて、忍べる工夫をなすべし。

人のするわざ、その善惡十分にしれて、明白なること有り。又その事の有りさま、その人の心の中、

よきもあしきも、あきらかにしらざること多し。わが心にあしゝと思ふことも、その實をよくたづぬれば道理あることあり。よしとおもふことにもよからざることあり。かやうのこと、からもやまとも古今多し。天下皆非なるの理なしと古人もいへり。何事も人のしわざに故あらんと思ひ、みだりに人をにくみそしるべからず。又みだりにほむべからず。

友をとるには、人をえらび、人の心をしりて後交りを定むべし。しらずして交れば、後悔することあり。人心はかくれてしりがたし。同じ官職をつとめ、事に出合ひ、旅宿をともにするやうのことにて、其人に馴るれば人の心みゆ。

人と共に、同じ官職をつとめ、同じ技藝をとる者、われのみひとり身を立て、名を得んとすべからず。かくすれば、人もまたあらそひて我をたてじとす。是かへつて、身のわざはひとなる。おのれたゝんとせば、まづ人をたつべし。かくすれば、人も亦あらそはず。才あるもの、わが才にほこり、同官をないがしろにすれば、必同官ににくまれて、わざはひにあへる人古今多し。愼しむべし。我一人にて事をとらんとするは甚あしゝ、よきことは同官にゆづり、我一人の才名をあらはさんとすべからず。

世に居るには、人情をしり、時變を考へて、天命にやすんずべし。或老人のいへるは、としのつもりに、世の中のありさまを、とかく思ひしりゆくままに、わがうめる子、わが祿をあたふるやつこだに、わが心のまゝになりがたし。いはんや世の人の心、さま〳〵にかはれれば、わが思ふまゝにしたがひがたし。畢竟たゞわが身ををさめて、人をせめざるべし。是世にをるの道なり。

およそ、人にまじはるに、その人よく物いひ、才はたらきて、我が心にかなへりとも、その眸子正しからず、心術うたがはしくば、まじはりをふかくすべからず。後に必我が身の害となることあり、悔ゆれども益なし。是久しく世をへて、おほく人に交りてしる人のいふ所なれば、たがふべからず。若後まで害なきは是幸なり。家臣をつかふに、殊更この目きゝ心得あるべし。唐の張九齡が、安

山に叛相あることを兼て知りたるは、先見の明といふべし。才にぶくとも、邪なく忠實なる人を用ゆべし。眼前は快からざれども、後のうれひなく、且わがしらざる所にも益多し、小人を用ひ、小人に交はれば必後の害となる。

さばかりよき所ある人をば、一のくせ、一事のあやまりにより、すこし心にあはずとも、なだめてこそは有べきに、一向にすつること、をしむべし。

人のあしきのみをとがめて、わが身にかへり求めず、みづからをさめざれば、いかりうらみおほくして、わが心和せず。人と爭ふことしげゝれば、世に立ちがたし。わが心におゐても、くるしみ多く樂なかるべし。身にかへり求むる工夫を專一になすべし。かくのごとくすれば、人我相和して、人と爭なく世に立ちやすくして、其樂を失はず。是ひとに交るの道なり。

我よりは、善をほどこすべし。彼よりも、亦善を以てむくふることを望むべからず。かれは彼、我はわれ、我はたゞわが道を行ふべし。かれが善不善は、わが心にあづかるべからず。

朋友親戚の間は、たゞ誠を以てまじはるべし。若かれより久しく音問をおろそかにせば、只わが情のうすくして、疎略なることを謝すべし。餘事にことをよせて、いつはりてわが罪を謝すべからず。是小事といへど、誠の道にあらざれば、心術を害することは大なり。

易に、君子以遠二小人一不レ惡而嚴いへる意は、君子の小人に對して遠ざからんとするは、顔色とことばをあしくせず、只わが身を嚴にすれば、かれおのづから遠ざかる。

およそ人に交はるに、其人をよくえらぶべし。その人の善惡見しりがたくば、先このんで交るべからず。かれよりしたしむとも、只こたへの禮をばつとめて、われよりはうとかるべし。その人小人なれば、したしみて後必悔あり。すでにしたしく成るぬれば、小人としれども、にはかにうとんじがたし、うとんずれば害あり。初その小人なることをしらず、しるといへども、かれよりしたしむゆへに、ふせぎがたくて、とき〲交ることあり。小人に交りては、必後に何事ぞにつきて、大事か

小事かわが身の害となる。古語曰、いふことなかれ、何の害かあらんと。その禍まさに至らんといへるが如し。古人の言、たがふべからず。小人としらば、わが方よりうとんずべし。しかれば、かれおのづからうとくなる。

一人をしること、きはめてかたし。古人といへども、人を知ることいとかたきことなりといへり。況今の人をや。もしいつはりて忠言をあらはし、謹厚なるやうにして、われに和順に善柔なりとも、その心信じがたし。剛直なる人は、和順ならざれども、かへつて忠實なり。わが子をたのみ、わが家をたのみ、わが身後のことをたのむ、その人に非ざれば、かへつて害あり。臣下朋友、すべて人を用ゐ、人をたのまば、知ありて忠信ある人をえらぶべし。かやうの人、世に有りがたし。もしなくんば、その次には才力にぶくとも、忠實なるを用ゆべし。忠實ならずば、才ありとて用ふべからず。才ありて忠信なき人は、かならず害となる。おそるべし。

凡人倫に交りて、そのまじはる所の人、われに對し、ほどこし行へること、もし禮義にあたらずして、わが心にかなはずとも、人聖賢にあらざれば、事ごとに禮義にあたるべからず。是即凡人の常にして、古今天下の世のならはしぞと思ひなだめて、心にかくべからず。いはんや、うらみいかるべけんや。わが身さへ、我が思ふごとくに行ひがたし。なんぞ人われにほどこす所、わが心のごとくならんや。わが身さへ、道にちがはずば、人のわれに施すこと、道にかなはざるは、わが身にあづからざることなれば、心にかくべからず、我がうれふべきことにあらず。人倫の内、われより位たかき君父と兄夫のわれに無禮なるはいふに及ばず、わが子弟臣僕のともがら、われよりいやしき者、我に禮義なくとも、禮ををしへ、その罪をいましむるはしかるべし、心にかけてふかくいかりうらむべからず。是わが身をそこぬ人に交るに、みづから心をやすくし、樂を失はずして、よく世にをるの道なり。

大禹謨に曰、滿招㆑損。謙受㆑益。わが才徳を滿てりとするは、禍ありてわが損となる。謙れば、かへつ

て身の益となる。易曰。天道虧レ盈而益レ謙。といへるも同理なり。

天下皆非なるの理なし。人の行をあしゝとのみ思ふべからず。わが身をかへりみおさへて、おのれをせむべし。人の非をのみ見て、わが身をかへりみざるは、是滿は損をまねくなり。

人つねにわが身をかへりみて、わが身に道を求むべし。實をつとめて、外をねがふ心あるべからず。人をせめ外に求むるは、實をつとむるにあらず。論語の內、孔子の言に、人の己をしらざることをうれへざれ、人をしらざることをうれふ。かやうの語、數章あり、その語意大抵相似たり。聖人しば〳〵のたまふは、皆人に實をつとむることを敎へ給ふなるべし。學者のつねに心にかけて行ふべきことなり。

大和俗訓巻之八 大尾

和俗童子訓序

君子愼始。差若毫釐繆以千里。是以古人生子能食能言而教之。聖人立小學之法。而養蒙以正者誠有以也。蓋嬰孩之歳人生之始也。是性相近而未有習之時。雖知思未發。其爲善爲惡之岐從此而分矣。辨其毫釐之邪正。而導之以善者宜於此焉。是所以愼始也。苟諭教之不早。年稍長則内爲嗜好所陷溺。外爲流俗所誘惑。人欲肆而天理滅矣。貿貿焉莫知所之。欲不歸小人之趣不可得已。此非繆以千里乎。故教人之法。以豫爲急。後世民間小兒之養蒙不正。其平日所見聞習熟。皆是戕賊德性蔑棄禮法之事而已。予於此乎。不自揣僭率。取古人訓子弟之意。書以國字。欲使窮鄉村童之無師無學者之玩讀也。顧拙毛之嗇不能爲文理。恐不足曉諭童蒙而已矣。有志之君子改作惟幸。

寶永七庚寅初夏日　益軒　貝原篤信書

和俗童子訓卷之一

貝原篤信編録

總論上

わかき時は、はかなくてすぎ、今老てしなざれば、ぬす人とする、ひじりの御いましめ、のがれがたけれど、こととしすでに八そじにいたりて、つみをくはへざるとしにもなりぬれば、かゝるふようなるよしなしごと云いだせるつみをも、ねがはくは世の人これをゆるし給へ。としのつもりに、世の中のありさまおほく見きゝして、とかく思ひしりゆくにつけてかんがへみるに、およそ人はよき事もあしき事も、いざしらざるいとけなき時より、ならひなれぬれば、まづ入し事内にあるじとして、すでに其性となりては、後に又よき事わしき事を見きゝしても、うつはかたければ、いとけなき時より、早

くよき人にちかづけ、よき道ををしゆべき事にこそあれ。墨子が白き糸のそまるをかなしみけるもむべなるかな。此ゆへに鄕里の兒童の輩をはやくさとさんため、いさゝかむかしきける所を、つたなき筆にまかせてしるしける。かゝるいやしきふみつくりひが事きこゑんは、いとはづべけれど、高きにのぼるには、必ひきくよりすることはりあれば、もしくはいまだ學ばざる幼稚の小補にもなるなんかといふ事しかり。およそ人となれるものは、皆天地の德をうけ、心に仁義禮智信の五性をむまれつきたれば、其性のまゝにしたがへば、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫の道行はる。是人の萬物にすぐれてたうとき處なり。こゝを以人は萬物の靈と云へるなるべし。靈とは萬物にすぐれて明らかなる智あるを云へり。されども食にあき、衣をあたゝかにき、をりどころをやすくするのみにて、人倫のをしえなければ、人の道をしらず、禽獸にちかくして、萬物の靈と云へるしるしなし。いにしへの聖人これをうれひ、師をたて學び所をたてて、天下の人に、いとけなき時より道ををしえ給ひしかは、人の道たちて禽獸にちかき事をまぬかる。およそ人の小なるわざも、皆師なくをしえなくしては、みづからはなしがたし。いはんや人の大なる道は、いにしへのさばかり賢き人といへど、まなばずしてみづからはしりがたくて、皆聖人を師としてまなべり。今の人いかでかをしえなくしてひとりしるべきや。聖人は人の至り萬世の師なり。されば人は聖人のをしえなくては、人の道をしりがたし。こゝを以、人となる者は必聖人の道を學ばずんばあるべからず、其をしえは豫するを先とす。豫とはかねてよりといふ意、小兒のいまだ惡にうつらざる先に、かねてはやくをしゆるを云。はやくをしえずして、あしき事にそみならひて後は、をしえても善にうつらず。いましめても惡をやめが

たし。古人は小兒のはじめてよく食し、よく言(ものいふ)時よりはやくをしえしと也。

富貴の家には、よき人をゑらびて早く其子につくべし。あしき人になれそむべからず。貴家の子も早やくよき友にまじはらしめ、あしき事にならはしむべからず。凡小兒ははやくをしゆると、左右の人をゑらぶと、是古人の子をそだつる良法なり。必是を法とすべし。

およそ小兒をそだつるには、はじめて生れたる時、乳母(めのと)を求むるに、必温和(おんくは)にしてつゝしみ、まめやかにことばすくなき者をゑらぶべし。乳母の外つきしたがふ者をゑらぶも、大やうかくの如くなるべし。はじめていひをくひ、ものをいひ、人のおもてを見て、よろこびいかるいろをしる時より、常に其事にしたがひて時々をしゆれば、やゝおとなしくなりて、いましむる事やすし。ゆへにいとけなき時より、はやくをしゆべし。もしをしえいましむる事おそくして、あしき事をおほく見ならひ、きゝならひ、くせになり、ひが事いできて後、をしえいましむれども、はじめより心にそみ入たるあしき事、心の内にはやくあるじとなりぬれば、あらためて善にうつる事かたし。たとへば小兒の手習するに、はじめ風體あしき手本をならへば、後によき手をならひてもうつりがたく、一生改まりがたきが如し。第一いつはれる事、次にきづいにてほしいまゝなる事を、はやくいましめて、かならずいつはりほしいまゝなる事をゆるすべからず。やんごとなき大家の子は、ことにはやくいましめをしえざれば、年長じては、いきおひつよくくらひ高くして、いさめがたし。凡小兒のあしくなりぬるは、父母乳母かしづきなるゝ人のをしえの道しらずして、其あしき事をゆるし、したがひほめて、其子の本性をそこなふゆへなり。あるひはしばらくなくこえをやめんとて、あざむきすか

して、姑息の愛をなす。其事まことならざれば、すなはち是偽をしゆるなり。又たはふれにおそろしき事どもを云きかせ、より〳〵おどしいるれば、後におく病のくせとなる。武士の子はことに是をいましむべし。ゆうれい、ばけもの、あやしく、まことなき物がたり、必いましめてきかしむべからず。或小兒の氣にさかひたる者をば、理をまげて小兒の非をそだて、そらうちなどすれば、驕慢の心いでくるものなり。小兒をもてあそびて、我心をなぐさめんがために、樣々のことばにて、そびやかしくるしめ、いかりあらそはしめて、ひがみまがれる心をつけ、むさぼりねたむ心ざしをひきいだす。しかのみならず、父母の愛すぐる故、あまえて父母をおそれず。兄をないがしろにし、家人をくるしめ、よろづほしきまゝにして、人をあなどる。いましむべき事をかへつてすゝめ、とがむべき事をかへつてわらひよろこび、いろ〳〵あしき事どもを見きかせ、いひならはせ、しならはせて、やうやく年長じ、ちゑいでくる時にいたりて、にはかにはじめていましむれども、其あしきならはし年と共に長じ、ひさしくならひそみて、本性とひとしくなりにたれば、いさめを用ひず。いとけなき時にをしえなく、年長じてにはかにいさむれども、したがはざれば、本性あしくうまれつきたるとのみ思ふ事、いとおろかにまどひのふかき事ならずや。

凡小兒をそだつるに、初生より愛を過すべからず。愛すぐればかへりて兒をそこなふ。衣服をあつくし、乳食にあかしむれば必病多し。衣をうすくし、食をすくなくすれば病すくなし。富貴の家の子は病おほくして身よはく、貧賤の家の子は、病すくなくして身つよきを以、其故をしるべし。小兒の初生には、父母のふるき衣を改めぬひて、きせしむべし。きぬの新しくして温なるは、熱を生じて病

となる。古語に、凡小兒をやすからしむるには、三分の飢と寒とをおぶべしといへり。三分とは十の内三分を云。此こゝろは、少しはうやし、少はひやすがよしとなり。是古人小兒をたもつの良法なり。世俗これをしらず、小兒に乳食をおほくあたへてあかしめ、甘き物、くだ物を多くくはしむる故に、氣ふさがりて必脾胃をやぶり、病を生ず。小兒の不慮に死する者は、多くはこれによれり。又衣をあつくしてあたゝめ過ぜば、熱を生じ、元氣をもらすゆへ、筋骨ゆるまりて身よはし。皆是病を生ずるの本なり。からもやまとも、古より童子の衣のわきをあくるは、童子は氣さかんにして熱おほきゆへ、熱をもらさんがためなり。是を以、小兒はあたゝめすごすがあしき事をしるべし。天氣よき時は、おり／＼外にいだして、風日にあたらしむべし。かくのごとくすれば、はだえ堅く血氣つよく成て風寒に感ぜず。風日にあたらざれば、はだへもろくして、風寒に感じやすく、わづらひおほし。小兒のやしなひの法を、かしづきそだつるものに、よく云きかせ、をしえて心得しむべし。

小兒をそだつるには、さきにも聞えつるやうに、先乳母かしづきしたがふ者をゑらぶべし。心おだやかに、邪なく、つゝしみて言すくなきをよしとす。わるがしこくちきゝ、いつはりをいひ、ことばおほく、心邪にしてひがみ、氣たけくほしいまゝにふるまひ、酩酊をこのむをあしゝとす。凡小兒は智なし、心もことばも、萬のふるまひも、皆其かしづきしたがふ者を見ならひ、聞ならひて、かれに似するものなり。乳母かしづきしたがふ人あしければ、そだつる子それに似て、あしくなる故に、其人をよくゑらぶべし。貧賤なる家には人をゑらぶ事かたしといへど、此心得あるべし。いはんや位たかく祿とめる家をや。

凡小兒をそだつるには、もはら義方のをしえをな

すべし。姑息の愛をなすべからず。義方のをしえとは、義理のたゞしき事を以、小兒のあしき事をいましむるを云。是必後の福となる。姑息とは、婦人の小兒をそだつるは、愛にすぎて小兒の心にしたがひ、氣にあふを云。是必後のわざはひとなる。いとけなき時より、はやく氣ずいをおさへて、私欲をゆるすべからず。愛をすごせば驕出來、其子のためわざはひとなる。

凡子ををしゆるには、父母嚴にきびしければ、子たる者、おそれつゝしみて、おやの教を聞てそむかず。こゝを以、孝の道行はる。父母やはらかにして、嚴ならず、愛すぐれば、子たる者父母をおそれずして、教行れず、いましめを守らず、こゝを以、父母をあなどりて孝の道たゝず。婦人又はおろかなる人は、子をそだつる道をしらで、つねに子をおごらしめ、きずいなるをいましめざる故、其おごり、年の長ずるにしたがひていよ／＼ます。

凡夫は心くらくして子にまよひ、愛におぼれて其子のあしき事をしらず。古歌に、人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな。とよめり。もろこしの諺に、人其子のあしきをしる事なし。といへるが如し。姑息の愛すぐれば、たとひあしき事を見つけても、ゆるしていましめず。およそ人のおやとなる者は、わが子にまさるたからなしとおもへど、其子のあしき方にうつりてのちは、身をうしなふ事をもかねてわきまへず、居ながら其子の惡におち入を見れども、わがをしえなくしてあしくなりたる事をばしらで、只子の幸なきとのみ思へり。又其母は子のあしき事を父にしらさず、常に子のあやまちをおほひかくすゆへ、父は其子のあしきをしらで、いましめざれば、惡つゐに長じて一生不肖の子となり、或家と身とをたもたず。あさましき事ならずや。程子の母の曰、子の不肖なるゆへは、母其あやまちをおほひて、父

しらざるによれり。といへるもむべなり。

小兒の時より早く父母兄長につかへ、賓客に對して禮をつとめ、讀書手習藝能をつとめまなびて、あじき方にうつるべきいとまなく、苦勞さすべし。はかなきあそびにひまをついやさしめて、ならはしあしくすべからず。衣服、飲食、着物、居處、僕從にいたるまで、其家のくらゐよりまどしく、ばうそくにして、もてなしうすく、心まゝならざるがよし。いとけなき時艱難にならへば、年たけて難苦にたへやすく、忠孝のつとめをくるしまず、病すくなく、おごりなくして放逸ならず、よく家をたもちて一生の間のさいはひとなり、後の樂多し。もしは不意の變にあひ、貧窮にいたり、或戰場に出ても身の苦みなし。かくの如く、子をそだつるは、誠によく子を愛するなり。又幼少より養ひ豐にして、もてなしあつく、心のまゝにして安樂なれば、おごりにならひ、私欲多くして、病多く、艱難に堪へず。父母に事へ君に仕ふるに、勤を苦しみて、忠孝も行ひ難く、學問藝能の勤成り難し、もし變にあへば苦たたへず。陣中に久しく居ては。艱苦をこらへ難くして病を受け、戰場に臨みては、心に武勇ありとも其身やはらかにして、攻め戰ひのはげしき働成り難く、人に後れて功名をもなし難し。又男子只一人あれば、極めて愛重すべし。愛重するの道は、敎へいましめて、其子に苦勞をさせて、後のためよく、無病にてわざはひなきやうに計るべし。姑息の愛をなして其子を損ふは、誠に愛をしらざるなり。およそ人は、若き時艱難苦勞をして、忠孝を勤め、學問を勵まし、藝能を學ぶべし。斯の如くすれば、必人にまさりて、名をあげ身を立て後の樂多し。わかき時安樂にて、なす事なく、艱苦をへざれば、後年にいたりて人に及ばず、又後の樂なし。

幼なき時より心ことばに忠信を主として、僞りなか

らしむべし。もし人をあざむき、僞りをいはゞ、きびしくいましむべし。こなたよりも、幼子をあざむきて、いつはりを敎ゆべからず。こなたよりいつはれば、小兒是にならふものなり。かりそめにもいつはりを云は、人にあらずと思ふべし。心にいつはりとしりながら、心をあざむくは其罪いよ／＼ふかし。又人と約したる事あらば、必其約をたがへざるべし。約をたがへては、いつはりとなり、信を失なへば人にあらず。もし後に信を守りがたき事は、はじめより約すべからず。又小兒には利欲ををしえしらしむべからず。よろづにさとくとも、僞りて只欲ふかく人の物をむさぼるは、小人のわざなれば、幼時よりはやく是を戒むべし。ゆるすべからず。

小兒の時より心もちやはらかに、人をいつくしみ、なさけありて、人をくるしめあなどらず、つねに善をこのみ人を愛し、仁を行なふを以、志とすべし。人わが心にかなはざるとて、顔をはげしくし、ことばをあらくして、人をいかりのるべからず。小兒もし不仁にして、人をくるしめあなどりて情なくば、はやくいましむべし。人に對して温和なれども、其身正しければ、幼きとて人あなどらず。

凡小兒のおしえははやくすべし。しかるに凡俗の知なき人は、小兒をはやくおしゆれば、氣くじけてあしく、只其心にまかせてをくべし、後に知恵出くれば、ひとりよくなるといふ。是必おろかなる人のいふ事なり。此言大なる妨なり。古人は、小兒のはじめてよく食し、ものいふ時よりはやくおしゆ。おそくおしゆれば、あしき事を久しく見きゝて、先入の言、心の内にはやく主となりては、後によき事をしゆれども、うつらず。故にはやくをしゆれば入やすし。つねによき事を見せしめ、聞かしめ、善事にそみならはしむべし。をのづから善にすゝみやすし。あしき事もすこしなる時、はやくい

ましむれば去やすし、悪長じては去がたし。古語に、兩葉不レ去將レ用二斧柯一といへるがごとし。婦人及無學の俗人は、小兒を愛する道をしらず、姑息のみにして、たゞうまき物を多くくはせ、よききぬをあたゝかにきせ、ほしいまゝにそだつるをのみ其子を愛するとおもへり。是人の子をそこなふわざなる事をしらず。今の世にも其父禮をこのみて、其子のいとけなき時よりしつけををしえ、和禮をならはする人の子は、必其子の作法よく、立居ふるまひ、人のまじはり、ふつゝかならず、老にいたるまで、威儀よし。是其父早くをしえしちからなり。善を早くをしえ行はしむるも、其しるし又かくの如くなるべし。

いとけなき時より、必まづ其好むわざをゑらぶべし。このむ所尤大事也。婬欲のたはふれをこのみ、淫樂などをこのむ事、又ついえ多きあそびを、まづはやくいましむべし。これをこのめば、其心必放逸になる。いとけなきよりこのめば、そのこゝろぐせとなり、一生其このみやまざるものなり。いかにいとけなくして、いまだ心にわきまへなくとも、又富貴の家にむまれ、萬の事心にかなへりとも、道にそむき、人に害あり、物をくるしめ、財をついやすたはふれあそびの、はかなきわざをばせざる理なりと、云きかせさとらしめて、なれしむべからず。又わが身に用なき無益の藝を習はしむべからず。たとひ用ある藝能といへども、一向にこのみ過して、其事にのみ心かたぶきて、萬事に通ぜず。其このむ所につきて、ひが事多く害多し。いはんや、益なき事をすきこのむをや。凡幼より、このむ所ならふ事を、はやくゑらぶべし。

小兒の時より、年長ずるにいたるまで、父となりかしづきとなる者、子のすきこのむ事ごとに心をつけてゑらびて、このみにまかすべからず。このむ所

に打まかせて、よしあしをゑらはざれば、多くは悪さすぢに入て、後はくせとなる。一たびあしき方にうつりては、とりかへしてよき方にうつらず、いましめてもあらたまらず、一生の間やみがたし。ゆだんして、其子のこのむ所にまかすべからず。ことに高家の子は、物ごとゆたかに、自由なるゆへに、このむかたに心はやくうつりやすくして、おぼれやすし。はやくいましめざれば、後にそみ入ては、いさめがたく、立かへりがたし。又あしからざる事も、すぐれてふかくこのむ事は、必害となる。故に子をそだつるには、ゆだんして其このみにまかすべからず、早くいましむべし。おろそかにすべからず。豫するを先とするは此故なり。

小兒の時、紙鳶をあげ、破魔弓を射、狛をまはし、毬打の玉をうち、てまりをつき、端午に旗人形をたつる。女兒の羽子をつき、あまがつをいだき、ひいなをてあそぶの類は、只いとけなき時、このめるはかなきたはふれにて、年やうやく長じて後は、必すたるものなれば、心術におゐて害なし。大やう其このみにまかすべし。されど、ついゑ多く、かざりすごし、このみ過さば、いましむべし。ばくちににたるあそびはなさしむべからず。小兒のあそびをこのむは、つねの情なり。道に害なきわざならば、あながちにおさえかゞめて、其氣を屈せしむべからず。只後にすたらざるあそびこのみは打まかせがたし。

禮は天地のつねにして、人の則也。即人の作法をいへり。禮なければ、人間の作法にあらず。禽獸に同じ。故に幼より禮をつゝしみて守るべし。人のわざ、事ごとに皆禮あり。よろづの事禮あれば、すぢめよくして行はれやすく、心も亦さだまりてやすし。禮なければすぢめたがひ、亂れて行はれず。心も亦やすからず。故に禮は行なはずんばあるべ

からず。小兒の時より和禮の法にしたがひて、立居ふるまひ、飲食、酒茶の禮、拜禮などおしゆべし。志は虚邪なく、言は忠信にして僞なく、又非禮の事いやしき事をいはず、かたちの威儀をたゞしくつゝしむ事をおしゆべし。又諸人に交るに、温恭ならしむべし。温恭はやはらかにうやまふ也。是善を行なふ初也。心あらきは温にあらず。無禮なるは恭にあらず。己を是とし、人を非として、あなどる事、かたく戒むべし。高位なりとて我をたかぶる事なかれ。高き人は人にへりくだるを以、道とする事をおしゆべし。きずいにして、わがまゝなる事をはやくいましむべし。かりそめにも人をそしり、わが身におごらしむる事なかれ。常にかやうの事をはやく教戒むべし。

およそ人の悪徳は矜なり。矜とはほこるとよむ、高滿の事也。矜なれば、自是として、其悪をしらず、過を聞ても改めず。故に悪を改て善に進む事かたし。たとひすぐれたる才能ありとも、高滿にしてわが才にほこり、人をあなどらば、是凶悪の人と云べし。凡小兒の善行あると、才能あるをほむべからず。ほむれば高慢になりて心術をそこなひ、わが愚なるも不徳なるをもしらず、われに知ありと思ひ、わが才智にて事たりぬと思ひ、學問をこのまず、人のをしえをもとめず。もし父として愛におぼれて、子のあしきをしらず、性行よからざれども、君子のごとくほめ、才藝つたなけれども、すぐれたりとほむるは、愚にせよといふ也。其善をほむれば、其善をうしなひ、其藝をほむれば、其藝をうしなふ。必其子をほむる事なかれ。其子の害となるのみならず、人にも愚なりと思はれて、いと口をし。をやのほむる子は、多くはあしくなり、學も藝もつたなきもの也。篤信かつていへり、人に三愚あり。我をほめ、子をほめ、妻をほむる、皆是愛におぼるゝ也。

小兒に學問をおしゆるに、はじめより人品よき師を求むべし。才學ありとも、あしき師にしたがはしむべからず。師は小兒の見ならふ所の手本なればなり。凡學問は其學術をえらぶ事をむねとすべし。學のすぢあしければ、かへりて性をそこなふ、一生つとめてもよき道にすゝまず。一たびあしきすぢをまなべば、後によき術をきゝてもうつらず。又才力ありて高慢なる人、すぢわるき學問をすれば、善にうつらざるのみならず、必邪智を長じて人品彌あしくなるもの也。かやうの人には、只ふ學の法、謙譲にして自是とせざるを以、敎をうくるの基となさしめて、溫和慈愛を心法とし、孝弟、忠信、禮義、廉恥の行をおしえて、高慢の氣をくじくべし。其外人によりて、多才はかへりて其心をそこなひ、凶惡をますものなり。まづ謙譲をおしえて、後に才學をならはしむべし。

子弟をおしゆるには、先其まじはる所の友をえらぶを要とすべし。其子のむまれつきよく、父のをしえ正しくとも、放逸なる無賴の小人にまじはりて、それと往來すれば、必かれに引そこなはれてあしくなる。いはんや、其子の生質よからざるをや。古人のことばに、年わかき子弟、たとひ年をおはるまで書をよまずとも、一日小人にまじはるべからずといへり。一年書をよまざるは、甚あしけれど、猶それよりも一日小人にまじはるはあしきことなり。是惡友の甚害ある事をいへり。人の善惡は、皆友によれり。古語曰、麻の中なるよもぎは、たすけざれどもおのづから直し。又曰、朱にまじはれば赤し、墨に近づけば黑といふ事、まことにしかり。わかき時は血氣いまだ定まらず、見る事、きく事にうつりやすきゆへ、友あしければ惡にうつる事はやし。もろこしにて、公儀の法度をおそれず、わが家業をつとめざるものを無賴と云。是放逸にして、父兄のおしえにしたがはざるいたづ

らもの也。無頼の小人は、必酒色と淫樂をこのみ、又博奕をこのみて、いさめをふせぎ、はぢをしらず、友をひきそこなふもの也。必其子をいましめて、かれにまじはらしむべからず。一たび是とまじはりて、其風にうつりぬれば、親のいましめ、世のそしりをもおそれず、とがをおかし、わざはひにあへどもかへり見ず。もし幸にしてわざはひをまぬかるといへども、大不孝の罪にをち入て惡名をながす。わざはひをまぬかれざる者は、一生の身をうしなひ、家をやぶる。かなしむべきかな。

四民ともに、其子のいとけなきより、父兄君長につかふる禮儀、作法をおしえ、聖經をよましめ、仁義の道理をやうやくさとさしむべし。是根本をつとむる也。次に、ものかき、算數を習はしむべし。武士の子には、學問のひまに弓馬、劍戟、拳法などならはしむべし。但一向に藝をこのみすごすべからず。必一事に心うつりぬれば、其事にをぼれて害となる。學問に志ある人も、藝をこのみ過せば、其方に心かたぶきて、學問すたる。學問は專一ならざればすゝみがたし。藝は學問をつとめて、そのいとまある時の餘事なり。學問と藝術を同じたぐひにおもへる人あり。本末輕重をしらず、おろかなりと云べし。學問は本なり。藝能は末なり。本はおもくして末はかろし。本末を同じくすべからず。後世の人此理をしらず、かなしむべし。誠に大人は、身をおさめ、人をおさむる稽古だにあらば、藝能は其下たる道司にゆだねても事かけず。されど六藝は、大人といへど其大略をば學ぶべし。又軍學武藝のみありて、學問なく、義理をしらざれば、ならふ所の武事かへりて不忠不義の助となる。然れば義理の學問を本とし、おもんずべし。藝術はまことに末なり。六藝のうち、物かき、算數をしる事は、誠に貴賤四民ともにならはしむべし。物よくいひ、世になれたる人も、物をかく事達者な

らず、文字をしらざれば、かたことといひ、ふつゝかにいやしくて人に見おとされ、あなどりわらはるるは口をし。それのみならず、文字をしらざれば、世間の事と、ことばに通ぜず、もろ／＼のつとめに應じがたくて、世事とゞこをる事のみ多し。又日本にては、算數はいやしきわざなりとて、大家の子にはおしえず。是國俗のあやまり、世人の心得ちがへるなり。もろこしにて、いにしへは天子より庶人まで、幼少より皆算數をならはしむ。大人も國郡にあらゆる民數をはかり、其年の土貢の入をはかりて、來年出し用ゆる分量をさだめざれば、かぎりなき欲にしたがひて、かぎりある財つきぬれば困窮にいたる。是算をしらざればなり。又國土の人民の數をはかり、米穀金銀の多少と、軍陣に人馬の數と糧食とをかんがへ、道里の遠近と運送の勞費をはかり、人數をたて、軍をやるも、皆算數をしらざれば行なひがたし。臣下にまかせてはおろそかにして事たがふ。故に大人の子は、ことにみづから算數をしらでは、つとめにうとく、事かくる事多し。是日用の切要なる事にして、かならずならひしるべきわざなり。近世或君の仰に、大人の子のまなびてよろしき藝は、何事ぞと問給ひしに、其臣こたへて、算數をならひ給ひてよろしかるべしと申されける。いとよろしきこたへなりけるとかたりつたふ。凡たかきもひきゝも、算數をしらずしてわが財祿のかぎりを考がへず、みだりに財を用ひつくして、困窮にいたるも、又事にのぞみて算をしらで、利害を考る事もなりがたきは、いとはかなき事也。又音樂をもすこぶるまなび、其心をやはらげ、樂しむべし。されど、もはらこのめば、心すさむ。幼少よりあそびたはふれの事に、心をうつさしむべからず、必制すべし。もろこしの音樂だにも、このみ過せば、心をとらかす。いはんや日本の俗に玩ぶ散樂は、其章歌いやしく、道理なく

して、人のをしえとならざるをや。藝能其外、あそびたはふれの方に、心うつりぬれば、道の志は必すたるもの也。專一ならざれば、直に遂る事あたはずとて、學問し道をまなぶには、專一につとめざれば、多岐の迷とて、あなたこなたに心うつりて、よき方にゆきとゞかざるもの也。專一にするは、人丸の歌に、とにかくに物は思はず飛騨たくみうつ墨なはの只一すぢに。とよめるが如くなるべし。

富貴の家の子にむまれては、いとけなき時より世のもてなし、人のうやまひあつくして、よろづゆたかに心のまゝにて、世界の榮花にのみふけるならはしなれば、おそれつゝしむ心なく、おごり日々に長じやすく、たはふれあそびをこのみ、人のいさめをきらひにくむ。いはんや學問などに身をくるしめん事は、いとたへがたくて、富貴の人のするわざにあらずと思ひ、むづかしくいたづかはしとて、うとんじきらふ。かゝる故に、おごりをおさへて身をへりくだり、心をひそめ、師をたうとび、古をかうがへずんば、いかにしてか、心智をひらきて身をおさめ、人をおさむる道をしるべきや。いやしき者、わが身ひとつおさむるだに、學問なくてみづからのたくみにはなりがたし。いはんや富貴の人は、おほくの民をおさむる職分大きにひろければ、幼き時より師に近づき、聖人の書をよみ、古の道を學んで、身をおさめ、人を治むる理をしらずんばあるべからず。いかに才力を生れ付たりとも、いにしへのひじりの道をまなばずして、わが生れ付の心を以、みだりに人をつかひ、民をつかさどれば、人民をおさむる心法をも、其道其法をもしらで、あやまり多くして、人をそこなひて道にそむき、天官をむなしくして職分をうしなふ。しかれば、位高く祿おもき人の子は、ことさら少年よりはやく心をへりくだり、師をたつとびて、學ばずんばあるべからず。

およそたかき家の子は、いとけなきより、下なる者へつらひ、したがひて、ひが事を云、ひが事を行なひても尤なりとかんじ、つたなき藝をも、はやく上手なりとほむれば、きく人みづから、よしあしをわきまへず、へつらひいつはりて、ほむるとはしらず、わが云事もなす事も、まことによきとおもひ、わが身に自滿して、人にとひまなぶ事なければ、智惠才徳のいでき、すゝむべきやうなくて、一生をおはる。こゝを以、高家の子には、いとけなき時より、正直にて知ある人を師とし友とし、そばにつかふる人をもゑらびて、あしき事をいましめ、善をすゝむべし。へつらひほむる人をば、いましめしりぞくべし。富貴の人の子は、とりわき、はやくおしえいましめざれば、年長じて後、世の中さかりにおごりならひぬれば、いきおひつよくなりて、家臣としていさめがたし。位たかく身ゆたかなれば、民のくるしみ、人のうれひをしらず、人のついえわがついえをもいとはず、をごりにならひては、人をあはれむ心もうすくなる。又さほど高きしなにのぼらざれども、時にあひ、いきほひにのりては、つねの心をうしなひ、人に無禮を行なひ、物のあはれをしらず、人の情(なさけ)をもわすれて、云まじき事をもいひ、なすまじき事をもなす事こそあさましけれ。いとけなき時より、いにしへの事をしれる、おとなしく正しき人をゑらび用て、師とし友とし、はやく學問をつとめさせ、身をおさめ、人をおさむる古の道をおしえて、善を行はしめ、惡をいましむべし。よき人をゑらびて、もし其人にあらずんば、師とすべからず。すでに師とせば、是をたうとびうやまひ、其をしえをうけしむべし。又身の養(やしなひ)飲食などのつゝしみをもおしゆべし。左右近習(じゆ)の人をよくゑらびて、質朴(しつぼく)(すなを)にて忠信なる人をなれ近づかしむべし。必邪佞(ねい)利口の人をちかづくべからず。かやうの人、はなはだ人の子をそこなふもの

なり。又邪惡の人にあらざれども、文盲にして學問をきらふ人は、よき事をしらで、幼少なる子の志をそこなふ。左右の人正しからざれば、父のいさめ、師のをしえ行はれず、心にかなひたるとて、子の害になる人を近づくべからず。賈誼がことばに、太子をよくするは、はやくをしゆると、左右をゑらぶにありといへり。是古今の名言なり。

和俗童子訓卷之一終

和俗童子訓卷之二

總論下

いとけなき時より、孝弟の道をもつぱらにをしゆべし。孝弟を行ふには、愛敬の心法をしるべし。愛とは、人をいつくしみ、いとをしみて、おろそかならざる也。敬とは、人をうやまひて、あなどらざる也。父母をいつくしみうやまふは孝也。是愛敬の第一の事也。次に兄をいつくしみ、うやまふは弟なり。又をぢ、をばなど、およそ年長ぜる人をいつくしみうやまふも弟なり。次にわが弟、いとこ、おひなど、又めしつかふ下部など、其ほどにしたがひていつくしむべし。いやしき者をも、あなどり、おろそかにすべからず。各其位にしたがひて、愛敬すべし。およそ愛敬二の心は、人倫に對する道なり。人にまじはるに、わが心と顏色をやはらげ、人をあなどらざるは、是善を行なふはじめなり。わが氣

にまかせて、位におごり、才にほこり、人をあなどり、無禮をなすべからず。

少年にて師におひて物をならふに、朝は師にまなび、晝は朝まなびたる事をつとめ、夕べはいよ〳〵かさねならひ、夜ふして、一日の中に、口にいひ、身に行なひたる事をかへり見て、あやまちあらば、くひて後のいましめとすべし。

人の弟子となり、師につかへては、わが位たかしといへ共たかぶらず。師をたつとび、うやまひて、おもんずべし。師をたつとばざれば、學問の道たゝず。師たる人、敎を弟子にほどこさば、弟子これにのつとりならひ、師に對して、心も顏色もやはらかに、うやまひつゝしみ、わが心を虛しくして自滿なく、すでにしれる事をもしらざるごとくし、又よく行なふ事をもよくせざるごとくにして、へりくだるべし。師よりうけたるをしえをば、心をつくしてきはめならふべし。是弟子たる者の、師にあひてをしえをうくる法なり。

論語の子曰、弟子入則孝するの一章は、人の子となり、弟となる者の法を、聖人のをしえ給へるなり。わが家に在ては、先親に孝をなすべし。孝とは善く父母につかふるを云。よくつかふるとは、孝の道をしりてちからをつくすを云。ちからをつくすとは、わが身のちからをつくして、よく父母につかへ、財のちからをつくして、よく養なふを云。父母につかふるには、ちからををしむべからず。次におやの前を退き出でゝは、弟を行なふべし。弟は善く兄長につかふるを云。兄は子のかみにて、親にちかければ、うやまひしたがふべし。もし兄より弟を愛せずとも、弟は弟の道をうしなふべからず。兄の不友をにせて、不弟なるべからず。其外親戚傍輩の内にても、年老たる長者をばうやまひて、あなどる事なかれ。是弟の道なり。凡孝弟の二は、人の子弟の行ひの根本也。尤つとむべし。謹とは、心に

おそれありて、事のあやまりなからんやうにする也。萬の事はつゝしみより行はる。つゝしみなければ、萬事みだれて善き道行なはれず、萬のあやまちもわざはひも、皆つゝしみなきよりをこる。つゝしめば心におこたりなく、身のわざにあやまりすくなし。謹の一字、尤大せつの事也。わかき子弟のともがら、ことさら是を守るべし。信とは言にいつはりなくて、まことあるを云。身には行なはずして、口にいふは信なきなり。又人と約して、其事を變ずるも信なきなり。人の身のわざおほけれど、口に言と身に行との二より外にはなし。行をつゝしみて、言に信あるは身ををさむるの道也。汎愛衆とは、我がまじはり對する所の諸人になさけありて、ねんごろにあはれむを云。下人をつかふに、なさけふかきも亦衆を愛する也。親仁とは、善人にしたしみ近づくを云。ひろく諸人を愛して、其内にて取わき善人をばしたしむべし。善人をしたしめば、よき事を見ならひ、聞ならひ、又其いさめをうけ、我過を聞て改るの益あり。此六事は人の子となり、弟となる者の身をおさめ、人にまじはる道なり。つとめ行なふべし。行つて餘力あれば即用ひて學レ文とは、餘力はひま也。上に見えたる孝弟以下六事をつとめ行て、其ひまには又いにしへの聖人の書をよんで、人の道をまなぶべし。いかに聰明なりとも、聖人の敎をまなばざれば、道理に通ぜず、身をおさめ、人に交る道をしらずして、過多し。故に必いにしへのふみをまなんで其道をしるべし。是則身をおさめ、道を行なふ助なり。次には日用に助ある六藝をも學ぶべし。聖人の經書をよみ、藝を學ぶは、すべて是文をまなぶ也。文を學ぶ内にも本末あり。經傳をよんで學問するは本也。諸藝をまなぶは末也。藝はさまざま多し。其内にて人の日に用るわざをえらびて學ぶべし。無用の藝は、まなばずとも有なん。藝

も亦道理ある事にて、學問の助となる。これをしらでは、日用の事かけぬ藝を學ばざれば、たとへば木の本あれども枝葉なきが如し。故に聖人の書をまなんで、其ひまには文武の藝をまなぶべし。此章只二十五字にて、人の子となり、弟となる者の行ふべき道、これにつくせり。聖人の語、ことばすくなくして、義そなはれりと云べし。

凡子弟年わかきともがら、あしき友にまじはりて、心うつりゆけば、酒色にふけり、淫樂をこのみ、放逸にながれ、淫行をおこなひ、一かたに惡しき道におもむきて、よき事をこのまず。孝弟を行ひ、家業をつとめ、書をよみ、藝術をならふ事をきらひ、少のつとめをもむつかしがりて、かしらいたく、氣なやむなどいひ、よろづのつとむべきわざをば、皆氣つまるとてつとめず。父母は愛におぼれて、只其氣ずいにまかせて、放逸をゆるしぬれば、いよいよ其心ほしいまゝになりて、ならひて性となりぬれば、よき事をきらひ、むつかしがりて、氣つまり病をこるといひてつとめず、なかにも書をよむ事をふかくきらふ。凡氣のつまるといふ事、皆よき事をきらひ、むつかしく思へるきずいよりおこれるやまひなり。わがすきこのめる事には、ひねもす、よもすがら、心をつくし、力を用ても氣つまらず、圍碁をこのむもの、夜をうちあかしても、氣つまらざるを以しるべし。又蒔繪師、彫物師、縫物師など、いとこまかなるむつかしき事に、日夜心力と眼力をつくす。かやうのわざは、面白からざれども、家業なればつとめてすれども、いまだ氣つまり、病者となると云事をきかず。むつかしきをきらひて、氣つまると云は、孝弟の道、家業のしはざなどの、よき事をきらふ氣ずいよりをこれり。是孝弟人倫のつとめ行はれずして、學問諸藝の稽古のならざる本なり。書をよまざる人は、學問の事不案内なる白徒なれば、讀書學問すれば、氣つ

まり氣へりて、病者となり、命もちゞまるとおもへり。是其ことはりをしらざる愚癡なる世俗のまよひ也。凡學問してをやに孝し、君に忠し、家業をつとめ、身をたて、道を行なひ、よろづの功業をなすも、皆むつかしき事をきらはず、苦勞をこらへて、其わざをよくつとむるより成就せり。むつかしき事しげきわざに、心おだやかにくるしまずして、一すぢにしづかになしもてゆけば、後は其事になれておもしろくなり、心をくるしむる事もなくて、其事つゐに成就す。又むつかしとて、事をきらへば、心から事をくるしみて、つとむべき事をむづかしとするは、心のひが事なり。心のひが事をし其まゝをきて、事の多きをきらふはあやまり也。又耐レ煩とは、むつかしきをこらゆるを云。此二字を守れば、天下の事何事もなすべしと古人いへり。是わかき子弟のともがらの守るべき事なり。

小兒の時は、必あしきくせ、あしきならはしなどあるを、みづからあしき事としらば、あらためて行なふべからず。又かゝるあしき事を、人のいさめにあひ、いましめらるれば、よろこんではやくあらため、後年までながくその事をなすべからず。一たび人のいさめたる事は、ながく心にとゞめてわするべからず。人のいさめをうけながら、あらためず、やがてわするゝは守なしと云べし。守なき人は、よき人となりがたし。いはんや人のいさめをきらひ、いかりうらむる人はさらなり。人のいさめをきかば、よろこんでうくべし。必いかりそむくべからず。いさめをきゝて、もしよろこんでうくる人は善人也。よく家をたもつ。いさめをきらひふせぐ人は、必家をやぶる。是善惡のわかるる所なり。いさむる事、理たがひたりとも、そむきてあらそふべからず。いさめをきゝていかれは、かさねて其人いさめをいはず。凡いさめをきくは大

に身の益なり。いさめをきゝて、よろこんでうけ、わが過を改むるは、善これより大なるはなし。人の悪事多ければ、いさめをきらふは悪のいと大なる也。わが身のあしき事をしらせ、あやまちをいさむる人は、たうとみしたしむべし。わづかなるくひものなどおくるをだによろこぶならひなり。いはんや、いさめを云人は甚悦びたうとぶべし。

いとけなき時より、善をこのんで行なひ、悪をきらひて去る、此志専一なるべし。此志なければ、學問しても、益をなさず。小兒の輩、第一にこゝに志あるべし。此事まへにもすでに云つれども、幼年の人々のために、又かへすぐ丁寧につぐるなり。人の善を見ては、我も行なはんと思ひ、人の不善を見ては、わが身をかへりみて、其ごとくなる不善あらば改むべし。かくの如くすれば、人の善悪を見て、皆わが益となる。もし人の善を見ても、わが身に取て用ひず、人の不善を見ても、わが身をかへり見ざるは、志なしと云べし。愚なるの至りなり。

父母の恩はたかくあつき事、天地に同じ。父母なければ、わが身なし、其恩ほうじがたし。孝をつとめて、せめて萬一の恩をむくふべし。身のちから、財のちからをつくすべし、おしむべからず。是父母につかへて、其ちからをつくすなり。父母死して後は、孝をつくす事なりがたきを、かねてよくかんがへ、後悔なからん事をおもふべし。

年わかき人、書をよまんとすれば、無學なる人、これを云さまたげて、書をよめば心ぬるく、病者になりて氣よはく、いのちみじかくなると云ておどせば、父母おろかなれば、まことゝ心得て、書をよましめず、其子は一生おろかにておはる。不幸と云べし。

人の善悪は、多くならひなるゝによれり。善にならひなるれば善人となり、悪にならひなるれば悪人

となる。然ればいとけなき時より、ならひなるゝ事をつゝしむべし。かりにもあしき友にまじはれば、ならひてあしき方に早くうつりやすし。おそるべし。

師の敎をうけ、學問する法は、善をこのみ、行なふを以、常に志とすべし。學問するは、善を行はんがため也。人の善を見ては、わが身に取て行ない、人の義ある事をきかば、心にむべなりと思ひかんじて行なふべし。善を見、義をきゝても、わが心に感ぜず、身に取用て行なはずば、むげに志なくちからなしと云べし。わが學問と才力とすぐれたりとも、人にほこりて自滿すべからず。言にあらはしてほこるは云に及ばず、心にもきざすべからず。志は、いつはり邪なく、まことありてたゞしかるべし。心の内は、おほひくもりなく、うらおもてなく、純一にて、青天白日の如くなるべし。一點も心の内に邪惡をかくして、うらおもてあるべからず。志正しきは萬事の本なり。身に行なふ事は正直にして道をまげず、邪にゆがめる事を行なふべからず。外に出てあそび居るには、必つねのしかるべき親戚朋友の所をさだめて、みだりにあなたこなた用なき所にゆかず、其友としてまじはる所の人をゑらびて、善人につねにちかづき、良友にまじはるべし。善人に交れば、其善を見ならひ、善言をきき、わが過をきゝて益おほし。惡友にまじはれば、はやく惡にうつりやすし、必友をゑらびて、かりそめにも惡友に交はるべからず。おそるべし。朝にはやくおきておやにつかへ、事をつとむべし。朝ねしておこたるべからず。およそ、人のつとめはあしたをはじめとす。朝居する人は、必おこたりて萬事行なはれず。夜にいたりても事をつとむべし。はやくいねて事をおこたるも、用なきに夜ふくるまでいねずして、時をあやまるも、ともに子弟の法にそむけり。衣服をき、帯をしたるかた

ちもとゝのひて、威儀正しかるべし。放逸なるべからず。朝ごとに、きのふいまだしらざるさきを師にまなびそへ、暮ごとに、朝まなべる事をかさねがさねつとめておこたるべからず。心をあらく、おほやうにせず、つゞまやかにすこしにすべし。かくの如くに、日々につとめておこたらざるを、學の法とす。

子弟孫姪など幼き者には、禮義を正しくせん事を教ゆべし。淫亂色欲の事、たはぶれのことば、非禮のわざをいましめてなさしむべからず。又道理なき正しからざるふだまぶり、祈禱などを、みだりに信じて迷へる事禁ずべし。いとけなく若き時より、かやうの事に心まどひぬれば、其心くせになりて、一生其まよひとけざるものなり。神祇をばおそれたうとびうやまひて、遠ざかるべし。なれ近づきてけがしあなどるべからず。わが身に道なく、私ありて、神にへつらひいのりても、神は正直聰明なれば、非禮をうけ玉はず。へつらひをよろこび給はずして、利益なき事をしるべし。

いにしへもろこしにて、小兒十歳なれば、外に出して晝夜師に隨ひ　學問所にをかしめ、常に父母の家にをかず。古人此　深き（ふか）意あり。いかんとなれば、小兒つねに父母のそばに居て、恩愛（おん）にならへば、愛をたのみ　恩になれて、日々にわがまゝ、きずいになり、艱苦（かんく）のつとめなくして、いたづらに時日をすごし、教（をしへ）行はれず、且孝弟の道を父兄いをしゆるは、わが身によくつかへよとのすゝめなれば、同じくは師より教えて行はしむるがよろし。故に父母のそばをはなれ、晝夜外に出てをしえを師にうけしめ、學友に交はらしむれば、おごりおこたりなく、知慧日々に明らかに、行義日々に正しくなる。是古人の子をそだつるに、内におらしめずして外にいたせし意なり。

子孫年わかき者、父祖兄長のとがめをうけ、いかりにあはゞ、父祖の言の是非をゑらばず、おそれつ

つしみてきくべし。いかにはげしき惡言をきくとも、ちりばかりも、いかりうらみたる心なく、顏色にもあらはすべからず。わが理ある事を云たてて、父兄の心にそむくべからず。只ことばなくして、其せめをうくべし。是子弟の父兄につかふる禮なり。父兄たる人、もし人のことばをきゝ損じて、無理なる事を以て、子弟をしゑたげせむともいかるべからず。うらみそむける色をあらはすべからず。云わけする事あらば、時すぎて後謝すべし。或別人を頼みていはしむべし。十分にわれに道理あらば、云わけをすべからず。

子弟をおしゆるに、いかに愚不肖にして、わかくいやしきとも、甚しく忿りて、顏色とことばをあらゝかにし、惡口してはづかしむべからず。かくの如くすれば、子弟わが非分なる事をわすれて、父兄のいましめをいかり、うらみそむきて、したがはず、かへつて父子兄弟の間も不和になり、相やぶれて恩をそこなふにいたる。只從容として嚴正にをしえ、いくたびもくりかへし、やうやくつげ戒むべし。是子弟をおしえ、人材をやしなひ來す法なり。父兄となれる人は、此心得あるべし。子弟となる者は、父兄のいかり甚しく、惡口してせめはづかしめらるゝとも、いよ／＼おそれつゝしみて、つゆばかりもいかりうらむべからず。

小兒の時は、知いまだひらけず、心に是非をわきまへがたき故に、小人のいふことばにまよひやすし。世俗の口のきゝたる者、學問をきらひて善人の行義かたく、正しきをそしり、風雅なるをにくみて、今やうの風にあはずとてそしり、只放逸なる事をいざなひすゝむるをきかば、いかにいとけなく、智なくとも、心を付て其是非をわかつべし。かくの如くなる小人のことばにまよひて、うつるべからず。

いかりをおさえてしのぶべし。忍ぶとは、こらゆる

也。ことに、父母兄長に對し、少も心にいかりうらむべからず。いはんや、顔色と眼目にあらはすべけんや。父兄に對していかるは、是大なる無禮なり。いましむべし。内に和氣あれば、顔色も目つきも和平なり。内に怒氣あれば、顔色眼目あしく、父母に對して、惡眼をあらはすべきや、はづべし。孝子の深愛ある者は、必和氣あり。和氣ある者は、必愉色あり。子たる者は、父母に對して和氣を失なふべからず。

人のほめそしりには、道理ちがへる事多し。こと〴〵く信ずべからず。おろかなる人は、きくにまかせて信ず。人のいふ事、わが思ふ事、必理にたがふ事おほし。ことに少年の人は、智慧くらし。人のいへる事をこと〴〵く信じ、わが見る事をことごとく正しとして、みだりに人をほめそしるべからず。

いとけなき時より、年老ておとなしき人、才學ある人、古今世變をしれる人になれちかづきて、其物がたりをきゝおぼえ、物にかきつけをきて、わするべからず。又うたがはしき事をば、しれる人にたづねとふべし。ふるき事をしれる老人のものがたりをきく事をこのみて、きらふべからず。かやうにふるき事をこのみきゝてきらはず、物ごとに志ある人は、後に必人にすぐるゝものなり。又老人をばむづかしとてきらひ、ふるき道々しき事、いにしへの物がたりをきゝては、うらめしく思ひ、其席にこらへず、かげにてそしりわらふ。是凡俗のいやしき心なり。かやうの人は、おひさきよからず、人に及ぶ事かたし。古人のいはゆる、下士は道をきいて大にわらふといへる是也。かやうの人には、まじはりちかづくべからず。必あしきかたにながる。蒲生氏郷いとけなき時、佐々木氏より人質として信長卿に來りつかへられし時、信長の前にて、老人の軍物語するを、耳をかたふけてきかれける。或人

是を見て、此童たゞ人にあらず、後は必名士ならんと云しが、はたして英雄にてぞ有ける。およそわかき人は、老人のふるき物語をこのみきゝて、おぼえおくべし。わかき時は、おほくは老人のふるき物語をきく事をきらふ。いましむべし。又わかき時、わが先祖の事をしれる人あらば、よくとひたづねてしるしおくべし。もしかくの如にせず、うかときゝてはおぼえず。年たけて後、先祖の事をしりたく思へども、しれる人すでになくなりにければ、とひてきくべきやうなし。後悔にたへず。子孫たる人、わがおや先祖の事しらざるは、むげにおろそかなり。いはんや、父祖の善行、武功などあるを、其子孫しらず、しれどもしるしてあらはさゞるは、おろかなり。大不孝とすべし。

父母やはらかにして、子を愛し過せば、子おごりて、父母をあなどり、つゝしまずして、行義あしく、きずいにして、身の行ひあしく、道にそむく。父たる者威ありておそるべく、行義ありて手本になるべければ、子たる者、をそれつゝしみて、行義正しく、孝をつとむる故に、父子和睦す。子の賢不肖、多くは父母のしはざなり、父母いるかせにして、子のあしきをゆるせば、悪を長せしめ、不義にをちいる。これ子を愛するに非ずして、かへりて子をそこなふなり。子をそだつるに、幼よりよくをしえいましめても、あしきは、まことに天性のあしきなり。世人多くは愛にすぎてをごらしめ、悪をいましめざる故、習ひて性となり、つゐに不肖の子となる者多し。世に上智と下愚とはまれなり。上智は、をしえずしてよし、下愚は、をしえても改めがたしといへども、悪を制すれば面は改まる。世に多きは中人なり。中人の性は、教ゆれば善人となり、をしえざれば不善人となる。故にをしえなくんばあるべからず。

小児の衣服は、はなやかなるも、くるしからずといへ

ども、大もやう、大じま、紅紫などの、ざればみたるはきるべからず。小兒も、ちとくすみ過たるは、あでやかにしていやしからず、はなやか過て目にたつは、いやしくして下部の服のごとし。大かた衣服のもやうにても、人の心はおしはからるゝものなれば、心を用ゆべし。又身のかざりに、ひまを用ひつくすべからず。ひまつひえて益なし。只身ど衣服にけがれなくすべし。

農工商の子には、いとけなき時より、只物かき算數をのみをしえて、其家業を專にしらしむべし。必樂府淫樂、其外いたづらなる無用の雜藝をしらしむべからず。これにふけり、おぼれて、家業をつとめずして、財をうしなひ、家を亡ぜしもの、世に其ためし多し。富人の子は、立居ふるまひ、飮食の禮などをばならふべし。必いましめて、無賴放逸にして、酒色淫樂をこのむ惡友に、まじはらしむべからず。是にまじはれば、必身の行あしく、不孝になり、財をうしなひ、家をやぶる。甚おそるべし。

小兒は十歲より内にて、はやくおしえ戒しむべし。性惡くとも、能おしえ習はさば、必よくなるべし。いかに美質の人なりとも、惡くもてなさば、必惡しきにうつるべし。年少の人の惡くなるは、教の道なきがゆへなり。習をあしくするは、たとへば馬にくせを乘付るがごとし。いかに曲馬にても、能乘手ののれば、よくなるもの也。又うぐひすのひなをかふに、はじめてなく時より、別によくさゑづるうぐひすを其かたはらにをきて、其音をきゝならはしむれば、必よくさえづりて、後までかはらず。是はじめより、よき音をきゝてならへばなり。禽獸といへど、はやくおしえぬれば、善にうつりやすき事かくの如し。況人は萬物の靈にて、本性は善なれば、いとけなき時より、よく教訓したらんに、すぐれたる惡性の人ならずば、などかあしくならん。人を教訓せずしてあしくなり、其性を損ず

ことはおしむべき事ならずや。

子孫幼き時よりかたくいましめて、酒を多くのましむべからず。のみならへば、下戸も上戸となりて、後年にいたりてはいよ／＼多くのみ、ほしいまゝになりやすし。くせとなりては、一生あらたまらず。禮記にも、酒者所二以養一老也。所二以養一病也。といへり。尚書には、神を祭るにのみ酒を用ゆべき由をいへり。しかれば酒は、老人病者の身をやしなひ、又神前にそなへんれうにつくれるものなれば、年少の人のほしゐまゝにのむべき理にあらず。酒をむさぼる者は、人のよそ目も見ぐるしく、威儀をうしなひ、口のあやまち、身のあやまりありて、徳行をそこなひ、時日をついやし、財寶をうしなひ、名をけがし、家をやぶり、身をほろぼすも、多くは酒の失よりおこる。又酒をこのむ人は、必血氣をそこなひ、脾胃をそこなひ、病を生じて、命みじかし。故に長命なる人、多くは下戸也。たとひ生れつきて酒をこのむとも、わかき時よりつゝしみて、多く飲むべからず。凡上戸の過失は甚多し。酔に入りては、謹厚なる人も狂人となり、云まじき事を云、なすまじき事をなし。ことばすくなき者も、言多くなる。いましむべし。酒後のことば、つゝしみて多くすべからず。又酔中のいかりをつゝしみ、酔中に書状を人にをくるべからず。むべ也、昔の人は、酒を名けて狂藥とは云へりけん。貧賤なる人は、酒をこのめば、必財をうしなひ、家をたもたず。富貴なる人も、酒にふければ、徳行みだれて家をやぶる。たかきいやしき、其わざはひはのがれず。いましむべし。

小兒のともがら、たはぶれおほく云べからず。人のいかりをおこす。又人のきらふ事云べからず、人にいかりそしられて益なし。世の人おほくいやしきことをいふとも、それをならひて、いやしき事云べからず。小兒のことばいやしきは、ことにきゝ

にくし。

和俗童子訓卷之二終

和俗童子訓卷之三

隨レ年ニ教法

六歳の正月、始て一二三四五六七八九十百千萬億の數の名と、東西南北の方の名とをおしえ、其生れ付の利鈍をはかりて、六七歳より和字をよませ、書ならはしむべし。はじめて和字をしゆるに、あいうゑを五十韻を平がなに書て、たてよこによませ、書ならはしむ。又世間往來のかなの文の手本をならはしむべし。此年ごろより、尊長をうやまふ事をおしえ、尊卑長幼のわかちをもしらしめ、ことばづかひをもをしゆべし。

七歳、是より男女席を同してならび坐せず、食を共にせず。此ころの小兒の少知いでき、云事をきゝしるほどならば、其知をはかり、年に宜しきほど、やうやく禮法をおしゆべし。又和字のよみかきをもならはしむべし。

八歳、古人小學に入し歳也。はじめて幼者に相應の禮義をおしえ、無禮をいましむべし。此ころよりたち居ふるまひの禮。尊長の前に出てつかふると退くと、尊長に對し、客に對し、物をいひ、いらへこたふる法。饌具を尊長の前にすえ、又取て退く法。盃を出し、銚子を取て酒をすゝめ、肴を出す法。茶をすゝむる禮をもならはしむべし。又みづから食する法。尊長の賜はる盃と肴をいたゞき、客の盃をいたゞきのむ法。尊者に對し、拜禮をなす法をおしえしらしむべし。又茶禮をもおしゆべし。かしづきしたがふ人より、まづ孝弟の道を敎ゆべし。よく父母につかふるを孝とし、よく兄長につかふるを弟とす。父母をたうとびてよくつかふる、是人たる者の第一につとめ行なふべき道なる事、かしづきて師となる人はやくおしゆべし。次に兄長を敬まひ、したがひてあなどるべからざる事ををしゆべし。兄長とは、兄、あね、をぢ、をば、又いとこの内、其外にも、としたけてうやまふべき人をいふ。およそ孝弟の二は、人間の道を行なふ本なり。萬事の善は皆これよりはじまれる事ををしゆべし。父母兄長におそれつゝしみて、其をしえいましめをよくきゝて、そむかざる事をおしゆべし。をしえをそむきてはむげの事なり。父母をおそれず、兄長をあなどらば、いましめてゆるすべからず。もし人をあなどる事をゆるし、かへりてわらひよろこべば、小兒は善惡をわきまへずして、あしからざる事と思ひ、長じて後此くせやまず、子となり弟となる法をしらず、無禮にして不孝不弟となる。是父母おろかにして、子の惡をすゝめなせるなり。やうやく年をかさねば、弟を愛し、臣僕をあはれみ、師を尊び、友にまじはる道、賓客に對して坐立進退、ことばづかひの法、各其品にしたがひて、いつくしみうやまふべき道をおしえしらしむべし。是よりやうやく孝弟、忠信、禮義、廉恥の道

をおしえ行はしむ。人の財物をもとめ、飲食をむさぼりて、いやしげなる心をいましめ、恥をしるべき事をおしゆべし。七歳より前は、猶いとけなければ、早くいね、をそくおき、食するに時をさだめず、大やう其心にまかすべし。禮法を以、一一にせめがたし。八歳より門戸の出入し、又は座席につき、飲食するに、必年長ぜる人におくれて、先だつべがらず、はじめてへりくだり、ゆづる事ををしゆべし。小兒の心まかせにせず、きずいなる事をかたくいましむべし。是かんようの事なり。○ことしの春より、眞と草との文字を書ならはしむ。はじめより風體正しき能書を學ばしむべし。手跡つたなく、風體あしきを手本としてならへば、あしき事くせとなり、後に風體よき能書をならへどもうつらず。はじめは眞草ともに大字を書ならはしむべし。はじめより小字をかけば、手すくみてはたらかず。又此年よりはやく文字をよみならはせしらしむべし。孝經、小學、四書などの類の文句長きむつかしきものは、はじめよりよみがたく、おぼえがたく、たいくつし、學問をきらふ心いできてあしく、まづ文句みじかくして、よみやすく、おぼえやすきものをよませ、そらにおぼえさすべし。十歳、此年より師にしたがはしめ、先五常の理、五倫の道あら／＼云きかせ、聖賢の書をよみ、學問せしむべし。よむ所の書の內、まづ義理のきこえやすく、さとしやすき切要なる所をとき聞すべし。是より後、やうやく小學、四書、五經をよむべし。又其ひまに、文武の藝術をもならはしむべし。世俗は、十一歳の頃、やう／＼はじめて、手習などをしゆ、おそしと云べし。をしえは、早からざれば、心すさみ氣あれて、をしえをきらひ、おこたりにならひて、つとめまなぶ事かたし。○小兒に、はやく心もかはばせも温和にして、人を愛しうやまひ、善を行なふ事を敎ゆべし。又心も身のたち居ふるまひ

もしづかにして、みだりにうごかず、さはがしからざらん事をしゆべし。

十五歳、古人大學に入て學問せし歳也。是より專義理をまなび、身をおさめ、人をおさむる道をしるべし。是大學の道也。殊更、高家の子年長じては、諸人の上に立て、おほくの民を預り、人を治むる職分おもし。必小兒の時より師をえらび、書をよませ、古の道ををしえ、身を修め、人を治むる道をしらしむ。もし人をおさむる道をしらざれば、天道よりあづけ給へるおほくの人をそこなふ事、おそるべし。凡の人も、其分限に應じて人をおさむるわざあり、其道をまなばずんばあるべからず。生質遅鈍なりとも、これより二十歳までの間に、小學、四書等の大義に通ずべし。若聰明ならば、博く學び、多くしるべし。

二十歳、いにしへ、もろこしには、二十にしてかむりをきるを元服をくはふと云。元服とは、かうべのきるものとよむ、冠の事也。日本にても、むかしは公家武家共に、二十歳の内にてかうぶりゑぼしをきたり。其時加冠、理髪などの役ありき。今も官家に此事あり、今も武家に前髪を去を元服と云も、むかしのかふりをきるになぞらへていへり。元服を加へざる内は、猶わらんべ也。元服すれば、成人の道これより備はる。これより幼少なる時の心をすてゝ、成人の徳にしたがひ、ひろくまなび、あつく行ふべし。其年に應じて、徳行そなはらん事を思ひてつとむべし。もし元服しても、成人の徳なきは、猶童心ありとて、むかしもこれをそしれり。

讀書法

聖人の書を經と云。經とは常也。聖人のをしえは、萬世かはらざる萬民の則なれば、つねと云。四書五經等を經と云。賢人の書を傳と云。傳とは聖人のをしえをのべて、天下後代につたふる也。四書五

經の註、又は周程、張朱、其外歷代の賢人のつくれる書を、いづれも傳と云。經傳は是古の聖賢の述作り給ふ所なり。其所レ載は、天地の理にしたがひて人の道をゝしえ給ふ也。其理至極し、天下萬世のをしえとなれる鑑なり。天地人と萬物との道理、これにもるゝ事なき故、天地の間、是にまされる寶更になし。是を神明のごとくにたうとびうやまふべし。おろそかにし、けがすべからず。

凡書をよむには、必先手を清め、心につゝしみ、容を正しくし、几案のほこりを拂ひ、書冊を正しく几上におき、ひざまづきてよむべし。師に書をよみ習ふ時は、高き几案の上におくべからず。帙の上、或文匣、矮案の上にのせてよむべし。必人のふむ席にをくべからず。書をけがす事なかれ。書をよみおはらば、もとのごとくにおほひおさむべし。若急速の事ありてたち去とも、必おさむべし。又書をなげ、書の上をこゆべからず。書を枕とする事なかれ。書の腦を卷きて、折返す事なかれ。唾を以、幅を揭る事なかれ。故紙に經傳の詞義、聖賢の姓名あらば、つゝしみて他事に用ゆべからず。又君上の御名、父母の姓名ある故紙をもけがすべからず。

小兒の記性をはかつて、七歲より以上入學せしむ。初は早晨に書をよませ、食後にはよましめず、其精神をくるしむる事なかれ。半歲の後は、食後にも亦令レ讀べし。

凡書をよむには、いそがはしくはやくよむべからず。詳緩に讀レ之て、字々句々分明なるべし。一字をも誤るべからず。必心到、眼到、口到るべし。此三到の中、心到を先とす。心不レ在レ此見れどもみへず。心到らずして、みだりに口によめどもおぼえず。又俄にしゐて暗によみおぼえても、久しきを歷ればわする。只心をとめて多く遍數を誦すれば、自然に覺えて、久しく忘れず。遍數を計へて、熟

讀すべし。一書熟して後、又一書をよむべし。聖經賢傳の有益書の外、雜書を見るべからず。心を正しくし、行義をつゝしみ、妄にいはず、わらはす、妄に外に出入せず、みだりに動作せず、志を學に專一にすべし。つねに暇ををしみて、用もなきに、いたづらに隙をつひやすべからず。

小兒の文學のおしえは、事しげくすべからず。事しげく、文句おほくしてむつかしければ、學問をくるしみて、うとんじきらふ心出來る事あり。故に簡要をゑらび、事すくなく敎ゆべし。すこしづゝをしえ、よみならふ事をきらはずして、すきこのむやうにをしゆべし。むつかしく、辛勞にして、其氣を屈せしむべからず。日々のつとめの課程を、よきほどにみじかくさだめて、日々をこたりなくすすむべし。凡小兒をおしゆるには、必師あるべし。書外の師なくば、其父兄みづから日々の課程を定めてよましむべし。父兄辛勞せざれば、をしえおこなはれず。

初て書を讀には、まづ文句みじかくして、よみやすく覺へやすき事を敎ゆべし。初より文句長き事ををしゆれば、たいくつしやすし。やすきを先にし、難きを後にすべし。まづ孝弟、忠信、禮義、廉恥の字義をおしえ、五常、五倫、五教、三綱、三德、三事、四端、七情、四勿、五事、六藝、兩義、二氣、三辰、四時、四方、四德、四民、五行、十干、十二支、五味、五色、五靑、二十四氣、十二月の異名、和名、四書、五經、三史の名目、本朝の六國史の名目、日本六十六州の名、其住せる國の郡の名、本朝の古の帝王の御諱、百官の名、もろこしの三皇、五帝、三王の御名、歷代の國號等を和漢名數の書にかきあつめをけるを、そらによみおぼえつくすべし。又鳥獸、蟲魚、貝の類、草木の名を多く書集めて、よみ覺えしむべし。此外にもおぼえてよき事多し。そらに覺えざる事は、用にたゝず。

又周南、召南の詩、蒙求の本文五百九十八句、性理字訓の本編、三字經、千字類合、千家詩などの句、みじかくおぼえやすき物ををしゆべし。右の名目に、編などを多くよみおぼえて後、經書ををしゆべし。初より文句長きよみがたき經書を教えて、其氣を屈せしむべからず。經書ををしゆるには、先孝經の首章、次に論語學而篇をよましめ、皆熟讀して後、其要義をもあらくときかすべし。小學、四書は、最初よりよみにくし。故に先右に云所の文句のみじかきものを多くよませて、次に小學をよませ、後に四書五經をよましむべし。

凡書をよむには、はやく先をよむべからず。毎日返りよみを專つとむべし。返りよみを數十遍つとめをはりて、其先をよむべし。しからずして、只はかゆかん事をこのみて、かへりよみすくなければ、必わすれて、わがならひし功も、師の教へし功もすたりて、ひろく數十卷の書をよんでも益なし。一卷にてもよくおぼゆれば、學力となりて功用をなす。必よくおぼふべし。書をよんでも學すゝまざるは、熟讀せずしておぼえざれば也。才性あれば、八歲より十四歲まで七年の間に、小學、四書、五經等皆讀をはる。四書五經熟讀すれば、才力いでき、學問の本たつ。其ちからを以、やうやく年長じて、ひろく群書を見るべし。

小兒に初て書を授くるには、文句を長くおしゆべからず。一句二句をしゆ。又一度に多く授くべからず。多ければおぼえがたく、おぼえても堅固ならず。其上厭倦んで學をきらふ、必たいくつせざるやうに、少づつ授くべし。其をしえやうは、はじめは只一字二字三字づゝ字をしらしむべし。其後一句づつをしゆべし。既に字をしり、句をおぼへば、小兒をして自讀しむべし。兩句をおしゆるには、先一句をよみおぼえさせ、熟讀せば、次の句を以右のごとくによましめ、既熟讀して、前句と後句と通讀

せしめてやむべし。如レ此する事數日にして、後又一兩句づゝ漸に從て授くべし。其教授くるに、漸字多ければ、分つて二三次となして授け讀しめ、其二三次各熟讀して、合せて通讀せしむ。若其中おぼえがたき所あらば、其所ばかり、又數遍よましむ。又甚よみやすき所をばわかちよむ時は、よむべからず、是省レ功の法なり。

書を讀には、必句讀を明にし、よみごゑを詳にし、淸濁を分ち、訓點にあやまりなく、てにはを精しくすべし。世俗の疎なる謬にしたがふべからず。

書をよむに、當時略熟誦しても、久しくよまざれば必忘る。故に書をよみおはつて後、すでによみたる書を時々かへりよむべし。又毎日前の三四五度に授かりたる所を、今日よみ習ふ所に通してあとをよむべし。如此すれば忘れず。

毎日一の善事を知り、一の善事を行なひて、小を積みてやまざれば、かならず大にいたる。日々の功をおこたり缺べからず。はじめは毎日、日記、故事、蒙求の故事などの嘉言、善行を一兩事づゝ記すべし。又毎日數目ある事を二三條記すべし。一日に一事記すれば、一年には三百六十條なり。詩歌をよみおぼゆるも此法なり。一日に一首おぼゆれば、一年に三百六十首也。毎日誦して、日々をこたるべからず、久きをつみては其功大なり。

小兒に初て書を說きかするに、文句みじかく、文義あさく、分明にきこえやすく云きかすべし。小兒に相應せざる、高く、ふかく、まはり遠く、むづかしく、きゝにくき事をおしゆべからず。又ことば多く長くすべからず。言すくなくして、さとしやすくすべし。まづ孝經の首章、論語の學而篇を早く說きかすべし。是本をつとむるなり。小學の書をとくには、義理をあさくかろくとくべし、深く重く說べからず、是小兒にをしゆる法也。

小兒讀書の内に、はやく文義を所々教べし。孝經に

ていはい、仲尼とは孔子の字なり、字とは成人して名づくるかへ名也。子は師の事を云。曾子は孔子の弟子なり、參は曾子の名。先王は古の聖王の事。不敏は鈍なる事。又論語の首章をよむ時は、學ぶとは學問するを云。習とは學びたる事を身につとめならふなり。悅ぶとは、をもしろきといふ意。樂とは大きにおもしろき意也。かやうに讀書のついでに文義をおしゆれば、自然に書を曉し得るものなり。

古語に、光陰箭の如く、時節流るゝが如し。又曰、光陰惜むべし、これを流水にたとふ。といへり。月日のはやき事、としどしにまさる。一たびゆきてかへらざる事、流水の如し。今年の今日の今時、再かへらず。なす事なくてなをざりに時日をおくるは、身をいたづらになすなり。をしむべし。大禹は聖人なりしだに、なを寸陰をおしみ給へり。いはんや末世の凡人をや。聖人は尺璧をたうとばずして、寸陰をおしむともいへり。少年の時は記性つよくして、中年以後數日におぼゆる事を、只一日半日にもおぼえて、身をおはるまでわすれず、一生の寶となる。年老て後悔なからん事を思ひ、小兒の時、時日をおしみて、いさみつとむべし。かやうにせば、後悔なかるべし。

書をよみ、學問する法、年わかく記憶つよき時、四書五經をつねに熟讀し、遍數をいか程も多くかさねて記誦すべし。小兒の時にかぎらず、老年にいたりても、つねに循環してよむべし。是義理の學問の根本となるのみならず、又文章を學ぶ法則となる。次に左傳を數十遍看讀すべし、其益多し。是學問の要訣なり。しらずんばあるべからず。

小兒の時、經書の內、とりわき孟子をよく熟誦すべし。是義理の學に益あるのみならず、文章を作る料なり。此書文章の法則となり、筆力を助く。朱子も、孟子を熟誦して文法をさとれりといへり。又

文章を作るためには、禮記の檀弓、周禮の考工記を熟誦すべし。是等は皆古人の說なり。又漢文の內數篇、韓柳歐蘇曾南豐等の文の內にて、心に叶へるを擇びて、三十篇熟誦し、そらに書て忘れざるべし。作文の學、必如此すべし。

四書を、每日百字づゝ百へん熟誦して、そらによみ、そらにかくべし。字のおき所、助字のあり所、ありしにたがはず、おぼえよむべし。是ほどの事、老らくのとしといへど、つとめてなしやすし。況少年の人をや。四書をそらんぜば、其ちからにて義理に通じ、もろ／＼の書をよむ事やすからん。又文章のつゞき、文字のおきやう、助字のあり處をも、よくおぼえてしれらば、文章をかくにも又助となりなん。かくの如く、四書をならひ覺えば、初學のつとめ、過半はすでに成れりと云べし。論語は一萬二千七百字、孟子は三萬四千六百八十五字、大學は經傳を合せて千八百五十一字、中庸は三千五百六十八字あり。四書すべて五萬二千八百四字なり。一日に百字をよんでそらに記ゆれば、日かず五百廿八日におはる。十七月十八日なれば、一年半にはたらずして其功おはりぬ。はやく思ひ立て、かくの如くすべし。これにまされる學問のよき法なし。其つとめやすくして、其功は甚大なり。わかともがら、わかき時此良法をしらずして、むなしく過し、今八そぢになりて、年のつもりに、やうやう學びやうの道すこし心に思ひしれる故、今更悔甚し。又尙書の內、純粹なる數篇、詩經・周易の全文、禮記九萬九千字の內、其精要なる文字をゑらんで三萬字、左傳の最要用なる文を數萬言是も亦日課を定めて百遍熟讀せば、文學におゐて、恐らくは世に類なかるべし。是學問の良法なり。

史は古をしるせるよみ也、記錄の事なり。史書は、往古の迹をかんがへて、今日の鑑とする事なれば、是亦經につぎて必よむべし。經書を學ぶいとまに

和漢の史をよみ、古今に通ずべし。古書に通せざるは、くらくして用に達せず。日本の史は、日本紀以下六國史より、近代の野史に至るべし。野史も亦多し、ひろく見るべし。中夏の史は、左傳、史記、漢書以下なるべし。朱子綱目の書は、歷代を通貫し、世教をたすけて、天下萬世に益あり。經傳の外、これに及べる好書は有べからず。此一書を出すして、古の事に通じ、善惡を辯じ、天下國家をおさむる道理明かなり。まことに世の寶なり。學者是をこのんで玩覽すべし。殊に國家をおさむる人のかゞみなり。又通鑑前編續編をも見るべし。前編伏犧より周まで、朱子綱目以前の事をしるせり。續編は宋元の事を記す。朱子綱目以後の事也。これにつゞきて、皇明通記、皇明實記などを見れば、古今に貫通す。

小兒の時より學問のひまをおしみ、あだなるあそびをすべからず。手ならひ、書をよみ、藝をまなぶを以あそびとすべし。かやうのつとめ、はじめはおもしろからざれども、やうやくならひなれぬれば、のちはなぐさみとなりて、いたづがはしからず、およそよろづの事は、皆いとまを用ひて出くるものなれば、いとまほどの身のたからなし。四民ともに同じ。かほどのおしむべき大せつなるいとまを、むなしくして、時日をつひやし、又は用にもたたざる益なきわざをなし、無賴の小人にまじはり、ひまをおしまずして、いたづらになす事なくて月日をおくる人は、ついに才智もなく、藝能もなくして、何事も人におよばず、人にいやしめらる。少年の時は、氣力も記憶もつよければ、ひまをおしみ、書をよみおくべし。如レ此すれば、身おはるまでわすれず、一代のたからとなる。年たけよはひふけぬれば、事おほくしてひまなく、氣力へりて記憶よはくなり、學問に苦勞してもしるしすくなし。少年の時、此ことはりをよく心得て、ひまをおし

み、つとむべし。わかき時、おこたりて、年おいて後悔すべからず。此事まへにもすでに云つれば、老のくせにて同じことするは、きく人いとふべけれど、年わかき人によく心得させんため、かへすがへすつぐるなり。およその事、後のためよき事を專につとむべし。はじめつとめざれば、必後の樂なし。又後の悔なからん事をはかるべし。はじめにつゝしまず、おこたりぬれば、必後の悔あり。小兒の書をよむに、文字を多くおぼえざれば、書をよむにちからなくして、學問すゝます。又文字をしらざれば、すべて世間の事に通せず。藝などならふにも、文字をしらざれば、其理にくらくして、ひが事おほし。文字をしれらば、又其文義を心にかけて通じしるべし。

和俗童子訓卷之三終

和俗童子訓卷之四

手習法

古人、書は心畫なりといへり。心畫とは、心中にある事を、外にかき出す繪なり。故に手蹟の邪正にて、心の邪正あらはる。其筆蹟にて心の内も見ゆれば、つゝしみて正しくすべし。むかし柳公權も、心正しければ筆正しといへり。凡書は言をうつして言語にかへ用ひ、行事をしるして當世にほどこし、後代につたふる證迹なり。正しからずんばあるべからず。故に書の本意は、只平正にして、よみやすきを宗とす。是第一に心を用ゆべき事也。あながちに巧にして、筆蹟のうるはしく見所あるをむねとせず。もし正しからずしてよみがたく、世用に通せずんば、巧なりといへども用なし。然れども、又いやしく拙きは、用にかなはず。

凡字を書ならふに、眞草共に先手本を三、四、其

體を正しく定むべし。風體あしくば、筆跡よしといへども、ならはしむべからず。初學より、必風體すなをに、筆法正しき、古人の能書の手跡をゑらんで手本とすべし。惡筆と惡き風體をならひ、一度あしきくせつきては、一生なをらず。後能書をならひても改まらず。日本人のよき手跡をならひ、世間通用に達せば、中華の書を學ばしむべし。しからざれば、手跡すゝまず。唐筆をならふには、先草訣百韻、王羲之が十七帖、王獻之が鵝群帖、淳化法帖、王寵が千字文、文徴明が千字文、黃庭經などを學ばしむべし。又懷素が自叙帖、米元章が天馬賦などを學べば、筆力自由にはたらきてよし。和流から流共に、古代の能書の上筆を求めてならふべし。今時の俗筆をばならふべからず。手本あしければ、生れ付たる器用ありて、日々つとめまなびても、見ならふべき法なくして手跡進まず。器用もつとめもむなしくなりて、一生惡筆にてをはる。

わが國の人、近世手跡つたなきは、手習い法をしらざると、古代のよき手本をならはざる故也。本朝にも、古代は能書多し、皆唐筆をまなべり。唐人も日本人の手法をほめたり。中世以後、からの筆法をうしなへり。故に能書すくなし。あれども上代に及ばず。近代は彌俗流になりし故、時を逐て拙なくなる。凡文字は中華よりいで、眞行草もからよりはじまる。日本流とてべつにあるべからず、から流の筆法にちがへるは俗筆なり。同じくは、からの正流を、はじめよりならふべし。但近世の正しからざる唐筆をならへば、手跡ひがみ、よこしまにして、よみがたし。文盲なる人は、から流はよみがたしと云、それはあしき風をならひたるを見ていへり。からの書は、眞字を先ならひて、それにしたがひて行草をかく、故に筆跡正し。日本流は、眞字にしたがはず、字形をかざる故、多くは字畫ちがひ、無理なる事多し。

眞字は、ことに唐筆の正しき能書を初より學ぶべし。和字も、いにしへの能書を始より學ぶべし。和字には中華流あるべからず。眞字には和流あるべからず。和流に眞をかくと、から流に和字を書とは、皆ひが事也。此理をしらずして、今時から流にかなを書人あり。しかるべからず。草書には和流もあれども、から流にもとづかざるは俗流なり、正流にあらず。本朝上代の能書、三筆、三跡など、皆から流に本づけり。其後、世尊寺、清水谷など、能書の流を家流と云。是又中華の筆法あるは、俗流にあらず。俗流をば學ぶべからず。まことの筆法なし。近代の和流の内、尊圓親王の眞跡は、からの筆法あり。よのつねの俗流にまされり。眞跡にあらざるは、からの筆法なし。習ふべからず。眞跡まれなり。其外古の筆法をしらで、器用にまかせて書たる名筆近世多し。世俗は賞翫すれども、古法をしらざるは、皆俗筆なり。學ぶべからず。

小兒初て手習するには、先一二三四五六七八九十百千萬億、次に天地、父母、五倫、五常、四端、七情、四民、陰陽五行、四時、四方、五穀、五味、五色などの名目の手本を、眞字に書て、大に書習はしむべし。

あいうゑを五十字は、和音に通ずるに益あり。横縦によみ覺ふべし。かなづかひ、てには、などもこれをしるべし。いろはの益なきにまされり。國字も皆是にそなはれり。片かなは、をそくをしゑしらしむべし

凡文字を書ならふに、高く墨をとり、端正にすりて、すり口をゆがむべからず。手をけがす事なかれ。高く筆をとり、双鉤し、端正に字を書べし。双鉤とは、筆のとりやうなり。凡字を書に、一筆一畫、正分明にして、老草に書べからず、老草とは不正ならず、わがまゝにそさうにかくを云。手本を能見て、ちがはざるやうに、しづかに學ぶべし。才にま

かせ、達者ぶりして、老草にかけば、手跡あがらず。書を寫しならふにも、平正にかくべし。常の書札などかくにも、手習と思ひて、つゝしみて正しくかくべし。かくのごとくすれば、手跡進みやすし。

手を習ふには、まづ筆の取やうをしるべし。

雙鈎とは、筆のもちやう也。大指と食指中指の二指と對してはさむを云。食指一をかけてはさむをば單鈎と云。單鈎は手かたまらずして、筆に力なし。故に双鈎をよしとす。日本流は、多くは單鈎を用ゆ。双鈎の法は、まづ筆を大指と食指にてはさむに、大指のはらと食指の中節のはぎに筆をあつべし、此二指はちからを主どる。次に中指をかゞめて、筆を指のとがりにつけ、筆をおさえ、次に無名指の外、爪と肉とのきはに筆をあて、上におさえあげて、中指と相對してさしはさみ、中指は外より内におさえ、無名指は内より外へをす、此二指は運動を主どる。大指と食指にて、上にてはさみたる筆を、又中指と無名指を以て下にてはさみ、渾圓にする也。次に小指は、無名指の下かどにつらねて、無名指の力をたすく。筆の左にゆき右にゆく時、無名指をたすけて導き送る。筆をとる事、五指ともにあさきをよしとす。あさければ力つよくして、はたらき自由なり。

虚圓正緊は、筆をとる四法也。しらずんばあるべからず。虚とは指を掌にちかづけずして、掌の内を空しくひろくするを云。あぶみの形の如くなるをよしとす。圓とは、掌の外、手の甲をまるくして、かどなきを云。虚圓の二は掌の形なり。正とは、筆をすぐにして、前後左右にかたよらざるを云。かくの如くならざれば、筆の鋒あらはれ、よこあたりあり。緊とは、筆をきびしくかたくとりて、やはらかならざるを云。上よりぬきとられざるやうに取てよし。かくのごとくならざれば、筆に力なくしてよはし。正緊の二は筆の形なり。此四法は筆

をとるならひ也。日本流の筆の取やうは、是にことなれり。單鈎にとりて、筆鋒をさきへ出し、やはらかにして、上よりぬき取をよしとす。

小兒の時より大字を多く書習へば、手くつろぎはたらきてよし。小字を書て、大字をかゝざれば、手すくみてはたらかず。字を習に、紙をおしまず、大に書べし。大に書ならへば、手はたらきて自由になり、又年長じて後大字を書によし。若小字のみを書習へば、手腕すくみて、長じて後大字をかく事成がたし。手ならふには、あしき筆にてかくべし。後に筆をゑらばずしてよし。もしよき筆にて書習へば、後あしき筆にて書く時、筆蹟あしく、時々よき紙にかくべし。あしき紙にのみ書ならへば、よき紙にかく時、手すくみてはたらかず。

眞字をかく法、大字はつゞめて小ならしめ、小字はのべて大ならしめ、短字は長く、長字は短くすべし。横の筆書はほそきがよし。竪の筆書はあらきがよし。よこに二字合せて、一とする字はひろくすべからず。上下二字合て一字とする字は、長くすべからず。疏は密に、密は疏なるべし。骨多きに宜し。肉多によろしからず。皆是筆法のならひなり。

指を以て筆をうごかす事なかれ。大字は肘をうごかし、小字は腕をうごかす。筆のはたらき自由なるべし。指は取事を主どり、肘腕はうごく事を主どる。指はうごかすべからず。

筆の取やう正しくして、筆さきの横にあたらざるやうに、筆鋒を正しく直にすべし。筆直に正しければ、筆の鋒あらはれずしてよし。筆かたぶけば鋒あらはる。筆鋒のあたる所を、あらはれざるやうにかくすべし。左の筆をおこす所、ことにあらはれざるがよし。鳥のくちはしの如くとがれるはあしし。又右のかどに肩をあらはすべからず。鋒はつねに畫中にあらしむべし、是を藏鋒と云。藏鋒をよしとす。

筆鋒は紙につよくあたるべし、入木と云も此事也。

手をならふに、筆のはたらきの神彩を先とし、字の形を次とす。字のかたちよくとも、神彩なければよしとせず。

はじめは一流を、もはら習ふべし。後には諸流のよきを取て則とすべし。もはら一流を以すべからず。古人の一流に全く似たるをば、書奴と云ていやしむ。

筆ひたし過すべからず、又かはかすべからず。硯は時々あらひ、新水をかへ用ひ、ほこりを去べし。墨をばやはらかにすり、筆をばつよくとるべし。故墨は病夫にすらせ、筆は壯夫にとらしむと云。和流は、これにことなり、筆をやはらかにとる也。

手習の後は、物をかくに硯池の水をそめず、新水を墨する所に入て墨をすり、時にのぞみてそむべし。

筆に墨をそむる事、大字をかくにも三分に過ぐべからず。ふかくひたせば、筆よはくして力なし。細字は、猶もみじかくそむべし。

筆をとるに、眞書はおくをひきて、草は高くとる、行は其間なり。眞一、行二、草三と云。

腕法三あり、枕腕あり、提腕あり、懸腕あり。枕腕は、左の手を右の手の下に枕にさする也。是小字をかく法也。提腕は肘はつくゑにつれて、腕をあげてかく也。是中字をかく法也。懸腕は腕をあげて中にかく也。是大字をかく法也。うでを下にさぐればはたらかず。是小字、中字、大字を書く三法なり。

字を學ぶには、必まづ眞書を大文字に習ふべし。內閣字府の七十二筆を先うつすべし。次に行草を習ふべし。凡字を書習ふには、眞行草共に古人の能書を法とすべし。東坡が曰、眞は行を生じ、行は草を生ず。眞は人の立がごとく、行は人のゆくがごとく、草は人の走るがごとし。いまだ不レ立して、能行、能走るものはあらずといへり。是を以見る

に、眞は本也、草は末也。もろこしには先眞書より學ばしむる故に、字畫正してあやまりなし。倭俗は眞字を學ばざる故に、文字をしらず、筆畫に誤多し。眞書を學ばざれば、草書にもあやまり多し。本邦近代の先輩、さばかり能書の名を得たる人おほけれど、眞書を不ㇾ學ゆへ、其筆跡眞草共に多くは誤字あり、證とするにたらず。世俗文盲なる人、眞書を早く學べば、手腕すくむといふは誤也。是書法をしらざる人の云事也。初學より眞書をよく書習ふべし。初學の時、眞草ともに小字のみ書て大字を書ざれば、手すくみてはたらかず。故に初て手ならふには、眞草共に大に書べし。其後には、次第に細字をも書習ふべし。手のすくむと、はたらくとは、習ㇾ字の大小によれり。眞草によらず。

文字をかき書を寫すには、筆畫を能辨しりて誤なかるべし。世俗の字をかくは、筆畫に甚誤多し。心を用ひて筆畫をしるべし。字畫をしるには、說文を宗とし、玉篇の首卷、字彙の末卷、及續字彙の內、字體辨徵、黃元立が字考を以て誤を辨ずべし。字學にも、亦心を用ゆべし。

書狀を書には、本邦の書札の習あり。必書禮を學んで、其法に順ふべし。書禮を學ばざれば、文字をしる人も、誤る事多し。

唐流には筆法のならひ、猶もこれあり。予かつて諸書の內をかんがへ、からの筆法の諸說をあつめて一書をあらはせり。心畫軌範と名づく一冊あり。和流には、筆法の傳授とて、字ごとに各々むつかしきならひあり。唐流には、すべての筆法の習はあれど、和流の如く、かゝはりたる法はこれなし。

世間通用の文字をしるべし。書跡よくしても、文字をしらざれば用をなさず。天地、人物、人事、制度、器財、本朝、故實、鳥獸、蟲魚、草木等の名、凡世間通用の文字をしるべし。世俗は通用の文字をしるに、順和名抄、節用集、下學集などを用ゆ。

順和名抄は用ゆべき事多し。又あやまり多し。功過相半なり。節用集、下學集は誤多し。用ゆべからず。世俗是等の書を用ゆる故、誤多し。近年印行せし訓蒙圖彙、和爾雅、倭字通例書などをゑらび用ゆべし。今世俗の通用する漢名和名あやまり甚多し。能ゑらんで書べし。

國字をかくに、かなづかひと、てにはをしるべし。かなづかひとは、音をかくに開合あり、開合とは字をとなふるに、口のひらくと合となり。和音五十字の內、あかさたな、はまやらわは開く音也。江肴豪陽唐庚耕淸靑の韻の字は皆開くなり。をこそとの、ほもよろおは合ふ音なり。東冬蕭霄蒸登尤侯幽の韻の字は皆合へる也。又和訓の詞の字のかなづかひは、いゐ、をお、えゑ、の三音は、各二字づゝ同音なれど、字により所によりて、いの字を用、ゐの字を用ゆるかはりあり。をお、と、えゑも亦同じ。又はひふへほ、とかきて、わいうゑを、とよむは、和訓の詞の字中にあり、下にある時のかきやうよみやうなり。是も和音五十字にて通ずる理あり、是皆かなづかひのならひ也。五十字によく通ずれば、其相通をしるなり。又てにはとは漢字にも和語にもあり、漢字和語の本訓の外、つけ字をてにはと云。てにはと云は本訓の外、つけ字に、ての字、にの字、はの字、多き故に名づく。又てにをはとも云は、をの字も多ければなり。和字四十八字を、いろはと云が如し。學んで時にこれを習ふとよめば、ての字、にの字、をの字は皆てには也。やまと歌は人の心をたねとしてよめば、はの字、をの字、ての字、皆てには也。又和語のてには、上下相對するならひあり。ぞける、こそけれ、にけり、てけれ。是上をぞといへば、下はけると云、花ぞちりけると云べし。花ぞちりけりとは云べからず。上にてこそといへば、下はけれと云べし。上にてこそといはゞ、下にてけりと云べ

からず」にけり、てけれも、これを以しるべし。又わし、ぞき、と云は、上をはといへば下はしと云、上をぞといへば下はきと云。たとへばかねのねはうし、かねのねぞうき、此類を云、是皆てにはのならひなり、かなづかひ開合と、てにはをしらで、和文和歌をかけばひが事おほくしてわらふべし。

和俗童子訓巻之四 終

和俗童子訓巻之五

教女子法

男子は外に出て師にしたがひ、物をまなび、朋友にまじはり、世上の禮法を見聞するものなれば、おやのをしえのみにあらず、外にて見きゝする事多し。女子はつねに内に居て外にいでざれば、師友にしたがひて道をまなび、世上の禮義を見ならふべきやうなし。ひとへにおやのをしえを以、身をたつるものなれば、父母のをしえをこたるべからず。おやのをしえなくてそだてぬる女は、禮義をしらず。女の道にうとく、女徳をつゝします、且女功のまなびなし。是皆父母の子を愛するみちをしらざればなり。

女子をそだつるも、はじめは大やう男子とことなる事なし。女子は他家にゆきて、他人につかふるものなれば、ことごら不徳にては、しうとをつとの心

にかなひがたし。いとけなくて、おひさきこもれるまでの内より、よくをしゆべき事にこそ侍べれ。不德なる事あらば、はやくいましむべし。子をおもふ道にまよひ、愛におぼれ、姑息して、其惡き事をゆるし、其性をそこなふべからず。年にしたがひて、まづはやく女德をおしゆべし。女德とは女の心ざまの正しくして善なるを云。およそ女はかたちより、心のまされるこそめでたかるべけれ。女德をゑらばず、かたちを本としてかしづくは、いにしへ今の世のあしきならはしなり。いにしへのかしこき人は、かたちのすぐれて見にくきをもきらはで、心ざまのすぐれたるをこそ后妃にもかしづきそなへさせ給ひけれ。黃帝の妃嫫母、齊宣王の夫人無鹽は、いづれも其かたちきはめてみにくかりしかど、女德ありし故にかしづき給ひ、君のたすけとなれりける。周の幽王の后褒姒、漢の成帝の后趙飛燕、其妹趙婕妤、唐玄宗の楊貴妃など、其かたちはすぐれたれど、女德なかりしかば、皆天下のわざはひとなり、其身をもたもたず。諸葛孔明は、このんで醜婦をめとれりしが、色欲のまよひなくて、智も志もいよ／＼精明なりしとかや。こゝを以、婦人は心だによからんには、かたち見にくゝとも、かしづきもてなすべきことはりなれば、心ざまをひとへにつゝしみまもるべし。其上かたちは生れ付たれば、いかに見にくしとても變じがたし。心はあしきをあらためてよきにうつさば、などかうつらん。いにしへ張華か女史の箴とて、女のいましめになれる文を作りしにも、人みな其かたちをかざる事をしりて、其性をかざる事をしる事なしといへり。性をかざるとは、むまれつきのあしきをあらためて、よくせよとなり。かざるとは、いつはりかざるにはあらず。人の本性はもと善なれば、いとけなきよりよき道にならはゞ、などかよき道にうつり、よき人とならざらんや。こ

こを以、いにしへ女子には女徳をもはらにをしえしなり。女の徳は和順の二をまもるべし。和ぐとは心を本として、かたちことばもにこやかにうらゝかなるを云。順とは人にしたがひて、そむかざるを云。女徳のなくて和順ならざるは、はらきたなく、人をいかりのりて、心たけく、けしきけうとく、面はげしく、まなこおそろしく見いだし、人をながしめにみ、ことばあらゝかに、物いひさがなく、口きゝて、人にさきだちてさかしらし、人をうらみかこち、わが身にほこり、人をそしりわらひ、われ人にまさりがほなるは、すべておぞましくにくし。是皆女徳にそむけり。こゝを以、女はたゞ和順にして貞信に、なさけふかく、かいひそめて、しづかなる心のおもむきならんこそあらまほしけれ。

婦人は人につかふるもの也。家に居ては父母につかへ、人に嫁しては舅姑夫につかふるゆへに、つゝしみてそむかざるを道とす。もろこしの曾大家がことばにも、敬順の道は婦人の大禮なりといへり。然れば女は敬順の二をつねに守るべし。敬とはつつしむ也。順はしたがふ也。つゝしむとはをそれてほしいまゝならざるを云。つゝしみにあらざれば、和順の道も行なひがたし。およそ女の道は順をたつとぶ、順のおこなはるゝは、ひとへにつゝしむよりをこれり。詩経に、戰々とつゝしみ、兢々とをそれて、深き淵にのぞむが如く、薄き氷をふむが如し。といへるは、をそれつゝしむ心をかたどりていへり。つゝしみておそるゝ心もち、かくのごとくなるべし。

女は人につかふるものなれば、父の家富貴なりとても、夫の家にゆきては、其おやの家にありし時より身をひきくして、舅姑にへりくだり、つゝしみつかへて、朝夕のつとめおこたるべからず。舅姑のために衣をぬひ、食をとゝのへ、わが家にては夫につかへてたかぶらず。みづからきぬをたゝみ、

席をはゝき、食をとゝのへ、うみつむぎ、ぬい物し、子をそだてゝ、けがれをあらひ、婢おほくとも萬の事にみづから辛勞をこらへてつとむる、是婦人の職分なれば、わが位と身におうせぬほど引さがりつとむべし。かくの如くすれば、しうと、夫の心にかなひ、家人の心を得て、よく家をたもつ。又わが身にたかぶりて、人をさしつかひ、つとむべき事におこたりて、身を安樂におくは、しうとににくまれ、下人にそしられて、人の道をうしなひ、其家をよくおさむる事なし。かゝる人は、婦人の職分を失ひ、後のさいわひなし。つゝしむべし。いにしへ、天子より以下、男は外をおさめ、女は内をおさむ。王后以下、皆内政をつとめ行なひて、婦人の職分あり。今の世のならひ、富貴の家の婦女は、内をおさむるつとめうとく、おりぬひのわざにおろそかなり。いにしへ、わが日の本にては、かけまくもかしこき天照大神も、みづから神衣をおりたまひ、齋服殿にましましける。其御妹稚日女尊も亦しかり。是日本紀にしるせり。もろこしにて、王后みづから玄紞をおり給ふ。公侯の夫人位貴しといへ共、皆みづからきぬをおれり。今の士大夫の妻、安逸にほこりて、女功をつとめざるは古法にはあらず。

女に四行あり。一に婦徳、二に婦言、三に婦容、四に婦功、此四は女のつとめ行なふべきわざ也。婦徳とは、心だてよきを云。心貞しく、いさぎよく、和順なるを徳とす。婦言とは、ことばのよきを云。いつはれる事をいはず、ことばをゑらびていひ、にげなき悪言をいたさず。いふべき時いひて、不用なる事をいはず。人其いふ事をきらはざる也。婦容とは、かたちのよきを云。あながちに、かざりをもはらにせざれども、女はかたちなよゝかにて、おゝしからず、よそほひのあてはかに、身もちきれいに、いさぎよく、衣服もあかづきけがれなき、

是婦容なり。婦功とは、女のつとむべきわざなり。ぬひ物をし、うみつむぎをし、衣服をとゝのへて、もはらつとむべきわざを事とし、たはぶれあそびわらふ事をこのまず、食物、飲物をいさぎよくして、しうと、おつと、賓客にすゝむる、是皆婦功なり。此四は女人の職分也。つとめずんばあるべからず。心を用ひてつとめなば、たれもなるべきわざ也。おこたりすさみて、其職分をむなしくすべからず。

七歳より和字をならはしめ、又おとこもじをもならはしむべし。淫思なき古歌を多くよましめて、風雅の道をしらしむべし。是また男子のごとく、はじめは、數目ある句、みじかき事どもあまたよみおぼえさせて後、孝經の首章、論語の學而篇、曹大家が女誡などをよましめ、孝順貞潔の道をおしゆべし。十歳より外にいださず、閨門の内にのみ居て、おりぬひ、うみつむぐわざをならはしむべし。かりにも淫泆なる事をきかせしらしむべからず。小歌、淨瑠璃、三線の類、淫聲をこのめば心をそこなふ。かやうのいやしきたぶれたる事を以て、女子の心をなぐさむるはあしゝ。風雅なるよき事をならはしめて、心をなぐさむべし。此比の婦人は、淫聲をこのんで女子にをしゆ。是甚風俗心術をそこなふ。いとけなき時、悪き事を見聞習ては、早くうつりやすし。女子に見せしむる草紙もえらぶべし。いにしへの事しるせるふみの類は害なし。聖賢の正しき道をおしえずして、ざればみたる小うた、淨瑠璃本など見せしむる事なかれ。又伊勢物語、源氏物語など、其詞は風雅なれど、かやうの淫俗の事をしるせるふみを、はやく見せしむべからず。又女子も物を正しくかき、算數をならふべし。物かき算をしらざれば、家の事をしるし、財をはかる事あたはず。必これをおしゆべし。

婦人には三從の道あり。凡婦人は柔和にして、人にし

たがふを道とす。わが心にまかせて行なふべからず。故に三從の道と云事あり。是亦女子にをしゆべし。父の家にありては父にしたがひ、夫の家にゆきては夫にしたがひ、夫死しては子にしたがふを三從といふ。三のしたがふ也。いとけなきより、身をおはるまで、わがまゝに事を行なふべからず。必人にしたがひてなすべし。父の家にありても、夫の家にゆきても、つねに閨門の内に居て外にいでず。嫁して後は、父の家にゆく事もまれなるべし。いはんや、他の家には、やむ事を得ざるにあらずんば、かるがるしくゆくべからず。只使をつかはして、音聞をかよはし、したしみをなすべし。其つとむる所は、しうと、夫につかへ、衣服をこしらへ、飲食をとゝのへ、内をおさめて、家をよくたもつを以わざとす。わが身にほこり、かしこだてにて外事にあづかる事、ゆめゆめあるべからず。夫をしのぎて物をいひ、事をほしいまゝにふるまふべからず。是皆女のいましむべき事なり。詩經の詩に、彼にあつても惡まるゝ事なく、こゝにあつてもいとはるゝ事なしといへり。婦人の身をたもつは、つねにつゝしみてかくの如くなるべし。

婦人に七去とて、あしき事七あり。一にてもあれば、夫より逐去るゝ理なり。故に是を七去と云。是古の法なり。女子にをしえきかすべし。一には父母にしたがはざるは去。二に子なければさる。三に淫なればさる。四に妬めばさる。五に惡疾あればさる。六に多言なればさる。七に竊盜すればさる。此七の内、子なきは生れ付なり。惡疾はやまひなり。此二は天命にて、ちからに及ばざる事なれば、婦のとがにあらず。其餘の五は、皆わが心よりいづるとがなれば、つゝしみて其惡をやめ、善にうつりて、夫に去れざるやうに用心すべし。およそ人のかたちは、むまれ付たれば、あらためがたかるべけれ。心は變ずる理あれば、わが心だに用ひなば、

などか、おろかなるより、かしこきにもうつさばうつらざらん。然れば、わがあしきむまれ付をしりて、ちからを用ひ、あしきをあらためて、よきにうつるべし。此五の内、まづ父母に順がはざると、夫の家にありて、しうと、しうとめにしたがはざるは、婦人第一の悪なり。しかれば夫の去はことはりなり。次に妻をめとるは、子孫相續のためなれば、子なければさるもむべ也。されど其婦の心和かに行ひ正しくて、嫉妬の心なく、婦の道にそむかずして、夫しうとの心にかなひなば、夫の家族同姓の子を養ひ、家をつがしめて、婦を出すに及ばず。或又妾に子あらば、妻に子なくとも去に及ぶべからず。次に淫亂なるは、わが夫にそむき、他の男に心をかよはす也。婦女は萬の事いみじくとも、此濁行だにあらば、何事のよきも見るにたらず。是女のかたく心にいましめつゝしむべき事なり。妬めば夫をうらみ、妾をいかり、家の内みだれてをさまらず。又高家には婢妾多くして、よつぎをひろむる道もあれば、ねためば子孫繁昌の妨となりて、家の大なる害なれば、これをさるもむべ也。多言は、口がましきなり。ことば多く物いひさがなければ、父子、兄弟、親戚の間も云さまたげ、不和になりて、家みだるゝもの也。古き文にも、婦に長舌あるは、是亂の階なりといへり。女の口のきゝたるは、國家のみだるゝ基となるといふ意なり。又尙書に、牝鷄の晨するは、家の索也と云へり。鷄のめどりの時うたふは、家のおとろふるわざはいとなるがごとく、女の男子の如く物いふ事を用るは、家のみだれとなる。凡家の亂は、多くは婦人よりをこる。婦人の禍は、必口よりいづ。戒むべし。竊盜とは物ぬすみする也。夫の財をぬすみてみづから用ひ、或わが父母兄弟他人にあたふる也。もし用ゆべく、あたふべき事あらば、しうと夫にとひ、命をうけて用ゆべし。しかるに夫の財

をひめてわが身に私し、人にあたへば、其家の賊なれば、これをさるもむべなり。女は此七去の內、五をおそれつゝしみて、其家を出ざらんこそ、女の道もたち、身のさいはひともなるべけれ。一たび嫁して其家を出され、たとひ他の富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひぬれば、本意にあらず。幸とは云がたし。もし夫不德にして、家貧賤なりとも、夫の幸なきは、婦の幸なきなれば、天命のさだまれるにこそと思ひて、うれふべからず。

凡女子を愛し過して、ほしゐまゝにそだてぬれば、おつとの家にゆきて、必おごりおこたりて、他人の氣にあはず、つゐには、しうとにうとまれ、夫にすゝめられ、夫婦不和になり、おひ出され、はぢをさらすものおほし。女子の父母、わがをしえなき事をはぢずして、しうと、をつとのあしきとのみ思ふ事おろか也。父母のをしえなかりし女子は、おつとの家にゆき、しうとのをしえ正しければ、せはらしくたえがたくおもひて、しうとをうらみそしり、中あしくなる。おやの家にておしえなければ、かくの如し。

女子には、はやく女功をおしゆべし。女功とは、をりぬひ、うみつむぎ、すゝぎあらひ、又は食をとゝのふるわざを云。女人は外事なし。かやうの女功をつとむるを以、しわざとす。ことにぬひものするわざを、よくならはしむべし。はやく女のわざをおしえざれば、おつとの家に行て、わざをつとむる事ならず、人にそしられ、わらはるゝもの也。父母となれる者、心を用ゆべし。

凡女子は、家にありては、父母につかへ、夫に嫁しては、しうとおつとに、したしくなれちかづきて、つかふるものなれば、其身をきよくして、けがらはしくすべからず。是又女子のつとむべきわざなり。父母となる者、女子のいとけなきより、男女の別を正しくし、行義をかたくいましめをしゆべし。父母

のをしへなく、たはれたる行あれば、一生の身をいたづらにすて、名をけがし、父母兄弟にはぢをあたへ、見きく人につまはじきをせられん事こそ、口をしくあさましきわざなれ。よろづいみじくとも、ちりばかりもかゝる事あらば、玉の盃のそこなきにもをとりなん。俗のことわざに、萬能一心といへるもかゝる事なり。こゝを以て、女は心ひとつを貞しく潔くして、いかなる變にあひて、たとひいのちを失ふとも、節義をかたく守るこそ、此生後の世までのめいぼくならめ。つねに心づかひをして、身をまもる事かたきにすぎたらんほどはよかるべし。人にむかひ、やはらかにざればみて、かろらかなるは、必節義をうしなひ、あやまちの出くるもといなり。和順を女徳とすると、たはれの心のわらかにして、まもりなく、かろびたると、其すぢかはれる事、云に及ばず。古人は兄弟といへども、幼より男女席を同じくせず、夫の衣桁に妻の衣服をかけず、衣服も夫婦同じ器にをさめず、衣裳をも通用せず、ゆあみする所もことなり、是夫婦すら別を正しくする也。いはんや、夫婦ならざる男女は、云に及ばず、男女の分、内外の別を正しくするは、古の道なり。

いにしへ女子の嫁する時、其母中門まで送りて、いましめて曰、なんぢが家にゆきて、必つゝしみ、必戒めて、夫の心にそむく事なかれといへり。是古の女子の嫁する時、をやのをしゆる禮法なり。女子の父母よく此理を云きかせ、いましむべし。女子も又よく此理を心得て、まもり行なふべし。

又女子の嫁する時、かねてより父母のをしゆべき事第十三條あり。一に曰、わが家にありては、わが父母にもはら孝を行なふ理なれども夫の家にゆきては、もはらしうとしうとめを、吾二をやよりも猶おもんじて、あつく愛み敬ひ、孝行をつくすべし。をやの方をおもんじ、しうとの方をか

ろんずる事なかれ。しうとのかたに朝夕の見まひをかくべからず。しうとのかたの、つとむべきわざをこたるべからず。若しうとの命あらば、つゝしみ行なひて、そむくべからず。凡の事、しうとしうとめにとひて、そのをしえにまかすべし。しうとしうとめ、もし我を愛せずして、そしりにくむとも、いかりうらむる事なかれ。孝をつくして、誠を以感せしむれば、彼も亦人心あれば、後は必心やわらぎて、いつくしみある理なり。二に曰、婦人は別に主君なし、夫をまことに主君と思ひて、うやまひつゝしみてつかふべし。かろしめ、あなどるべからず。やはらぎしたがひて、其心にたがふべからず。凡婦人の道は、人にしたがふにあり。夫に對するに、顔色ことばづかひ、ゐんぎんにへりくだり、和順なるべし。いぶりにして不順なるべからず、おごりて無禮なるべからず、是女子第一のつとめなり。夫のおしえいましめあらば、其命にそむくべからず。うたがはしき事は、夫にとひて其命をうくべし。夫とふ事あらば、たゞしくこたふべし。其いらへおろそかにすべからず。こたへの正しからず、其理きこえざるは無禮なり。夫もしいかりせむる事あらば、をそれてしたがふべし。いかりあらそひて、其心にさかふべからず。それ婦人は夫を以天とす。夫をあなどる事かへす〴〵あるべからず。夫をあなどりそむきて、夫よりいかりせめらるゝにいたるは、是婦人の不徳のはなはだしきにて、大なるはぢ也。故に女はつねに夫をうやまひ、おそれて、つゝしみつかふべし。夫にいやしめられ、せめらるゝは、わが心より出たるはぢ也。三に曰、こじうと、こじうとめは、夫の兄弟なれば、なさけふかくすべし。又こじうとこじうとめに、そしられにくまるれば、しうとの心にそむきて、わが身のためにもよからず。むつましく和睦すれば、しうとの心にかなふ。しかれば

こじうとの心も亦失なふべからず。又あひよめをしたしみ、むつまじくすべし。ことさら夫の兄、兄よめはわつくうやまふべし。わによめをば、わがあねと同じくすべし。座につくも道をゆくも、へりくだり、をくれてゆくべし。四曰、嫉妬(しつと)の心ゆくゆくをこすべからず。夫姪行(をつといんかう)あらばいさむべし、いかりうらむべからず。嫉妬はなはだしければ、其けしきことばもおそろしく、すさまじくして、かへりて夫にうとまれ、すさめらるゝものなり。業平の妻の、夜半にや君がひとり行らんとよみしこそ、誠に女の道にかなひて、やさしく聞ゆめれ。およそ、婦人の心たけくいかり多きは、しうとをつとにうとまれ、家人にそしられて、家をみだし、人をそこなふ。女の道におゐて大にそむけり。はらたつ事あらは、おさへてしのぶべし、色にあらはすべからず。女は物ねんじして、心のどかなる人こそ、さいはいも日ばつる理(ことはり)なれ。五に曰、夫(をつと)もし不義あり。あやまちあらば、わが過をやはらげ、聲をよろこばしめ、氣をへり下りていさむべし。いさめをきかずしていからば、先しばらくやめて、後におつとの心やはらぎたる時、又いさむべし。夫(をつと)不義なりとも、顔色をはげしくし、聲をいらゝげ、心氣をあらくして、夫にさからひ、そむく事なかれ。是又婦女の敬順の道にそむくのみならず、夫にうとまるゝわざなり。六に曰、ことばをつゝしみて、多くすべからず。かりにも人をそしり、いつはりを云べからず。人のそしりをきく事あらば、心にをさめて、人につたへかたるべからず。そしりを云つたふるより、父子、兄弟、夫婦一家の間も不和になり、家内をさまらず。七に曰、女はつねに心づかひして、その身をかたくつゝしみまもるべし。つとにをき、夜わにいね、ひるはいねずして、家事に心を用ひ、おこたりなくつとめて、家をおさめ、をりぬひ、うみつむぎをこたるべから

ず。又酒茶など多くこのみて、くせとすべからず。淫聲をきく事をこのみて、淫樂をならふべからず。是女子の心をとらかすものなり。たはぶれあそびをこのむべからず。宮寺など、すべて人の多くあそぶ所に、四十歳より内はみだりにゆくべからず。八に曰、巫覡などのわざにまよひて、神佛をけがし、ちかづき、みだりにいのりへつらふべからず。只人間のつとめをもはらになすべし。目に見えぬ鬼神のかたに、心をまよはすべからず。九に曰、人の妻となりては、其家をよくたもつべし。妻の行あしく、放逸なれば、家をやぶる。財を用るに、儉約にして、ついえをなすべからず。をごりをいましむべし。衣服、飲食、器物など、其分にしたがひて、あひにあひたるを用ゆべし。みだりに、かざりをなし、分限にすぎたるをこのむべからず。妻をごりて財をついやせば、其家必貧窮にくるしめり。夫たるもの、是にうちまかせて、其是非を察せざるはおろかなりと云べし。十に曰、わかき時は、夫の兄弟、親戚、朋友、或下部などのわかき男來らんに、なづさひちかづきて、まつはれ、打とけ物がたりすべからず。つゝしみて、男女のへだてをかたくすべし。いかなるとみの用ありとも、わかき男にふみなどかよはする事は、必あるべからず。しもべを閨門の内に入べからず。凡男女のへだてかる〴〵しからず、身をかたくつゝしむべし。十一に曰、身のかざりも、衣服のそめいろ、もやうも、目にたゝざるをよしとす。身と衣服とのけがれずして、きよげなるはよし。衣服と身のかざりに、すぐれてきよらをこのみ、人の目にたつほどなるはあしゝ。衣服のもやうは、其年よりはくすみて、をいらかなるが、じんじやうにして、らうたく見ゆ。すぐれてはなやかに大なるもやうは、目にたちていやし。わが家の分限にすぎて、衣服にきよらをこのみ、身をかざるべからず。只わが身にか

なひ、似合たる衣服をきるべし。心は身の主也、たうとぶべし。衣服は身の外にある物なり、かろし。衣服をかざりて、人にほこるは、衣服よりたうとぶべき其心をうしなへるなり。凡そ人は其心さま身のふるまひをこそ、よくいさぎよくせまほしけれ。身のかざりは外の事なれば、只身に應じたる衣服を用ひて、あながちにかざりて外にかゝやかし、人にほこるべからず。おろかなる俗人、又いやしきしもべ、しづの女などに、衣服のはなやかなるをほめられたりとも益なし。よき人は、かへりてそしりいやしむべきわざにこそあれ。十二に曰、わが里のをやの方にわたくしゝ、わがしうと、しうとめ、をつとの方をつぎにすべからず。正月佳節などにも、まづおつとのかたの客をつとめて、をやの里にはつぎの日ゆきてまみゆべし。夫のかたをすてゝ、佳節にわがをやの里にゆくべからず。しうとをつとのゆるさゞるに、父母兄弟のかたにゆくべからず。わたくしに、をやの方にをくり物すべからず。又わが里のよき事をほこりて、ほめかたるべからず。十三に曰、下女をつかふに、心を用ゆべし。いふかひなきものは、ならはしあしくて、ちゑなく、心かだましく、其上ものいふ事さがなし。夫の事、しうと、しうとめ、こじうとの事など、わが心にあはぬ事あれば、みだりに其主にそしりきかせて、それをかへりて忠とおもへり。婦人もしちゑなくして、それを信じては、かならずうらみ出來やすし。もとより夫の家は皆他人なれば、うらみそむき、恩愛をすつる事やすし。つゝしんで、下女のことばを信じ、大せつなる、しうと、小じうとの、したしみをうすくすべからず。もし下女すぐれてかだましく、口がましくて、あしきものならば、はやくおひやるべし。かやうのものは、かならず家道をみだし、親戚の中をもいひ妨ぐるもの也、をそるべし。又下女などの人

をそしるを、きゝ用ゆる事なかれ。殊に夫のかたの一類の事を、かりそめにもそしらしむべからず、下女の口を信じては、しうと、しうとめ、夫、こじうとなどに和睦なくして、うらみそむくにいたる、つつしんで讒を信ずべからず、甚をそるべし。又いやしきものをつかふには、我が思ふにかなはぬ事のみ多し。それをいかりのりてやまざれば、せはしくはらだつ事おほくて、家の内しづかならず。あしき事は時々いひをしえて、あやまりを正すべし、いかりのるべからず。すこしのあやまちは、こらえていかるべからず。心の内には、あはれみふかくして、外には行義かたく、いましめてをこたらざるやうにつかふべし。いるかせなれば、必行義みだれ、をこたりがちにて、禮義をそむき、とがをおかすにいたる。あたへめぐむべき事あらば、財をおしむべからず。但わが氣に入たるとて、忠なきものに、みだりに財物をあたふべからず。○凡此十三條を女子のいまだ嫁せざるまへに、よくをしゆべし。又かきつけてあたへ、おり〳〵よましめ、わするゝ事なく、是を守らしむべし。凡世人の女子を嫁せしむるに、必其家の分限にすぎて、甚をごり、花美をなし、おほくの財をつひやし用ひ、衣服器物などを、いくらもかひとゝのへ、其餘の饗應贈答のつひえも又おびたゞし、是世のならはし也。されど女子をいましめをしえて、其身をつゝしみおさめしむる事、衣服器物をかざれるより、女子のため、甚利益ある事をしらず、いとけなき時より、嫁して後にいたるまで、何の教もなくて、只其むまれつきにまかせぬれば、身をつゝしみ、家をおさむる道をしらず。おつとの家にゆきて、をごりをこたり、しうと、をつとにしたがはずして、人にうとまれ、夫婦和順ならず、或不義淫行もありて、おひ出さるゝ事、世に多し。是をやのをしえなきがゆへなり。古語に、人よく百萬錢

を出して、女を嫁せしむる事をしりて、十萬錢を出して、子をおしゆる事をしらずといへるがごとし。婚嫁の營に、心をつくす十分が一の心つかひを以て、女子をおしえいましめば、女子の身をあしく持なし、わざはひにいたらざるべきに、かくの如くなるは、子を愛する道をしらざるが故也。

婦人は夫の家を以、家とする故に、嫁するを歸るといふ。云意はわが家にかへる也。夫の家をわが家として歸る故、一たびゆきてかへらざるは、さだまれる理なり。されど不德にして、しうと、をつとにそむき、和順ならざれば、夫にすさめられ、しうとにくまれ、父の家におひかへさるゝのわざはひあり。婦人のはづべき事、是に過たるはなし。もしくは、夫柔和にして、婦の不順をこらへて、かへさゞれども、かへさるべきことがあり。されば人をゆるすべくして、人のためにゆるさるゝは本意にあらず。

をよそ婦人の心ざまのあしき病は、和順ならざると、いかりうらむると、人をそしると、物ねたむと、不智なるとにあり。凡此五の病は、婦人に十人に七八は必あり。是婦人の男子に及ばざる所也。みづからかへり見、いましめて、あらため去べし。此五の病の內にて、ことさら不知をおもしとす。不知なる故に、五の病をこる。婦女は陰性なり、陰は夜に屬してくらし。故に女子は男子にくらぶるに、智すくなくして、目の前なるしかるべき理をもしらず、又人のそしるべき事をわきまへず、わが身、わが夫、わが子のわざはひとなるべき事をしらず、つみもなき人をうらみいかり、あるは、のろひとこひ、人をにくみて、わが身ひとりたてんと思へど、人ににくまれうとまれて、皆わが身のあだとなる事をしらず。いとはかなくあさまし。子を愛すといへど、姑息し、義方のおしえをしらず、私愛ふかくして、かへりて子をそこなふ。かくお

ろかなるゆへ、年すでに長じて後は、よき道を以、をしえさとらしめがたし。只其はなはだしきをおさへいましむべし。事ごとに道理を以、せめがたし。故に女子は、いとけなき時より、はやくよき道をおしえ、あしきわざをいましめ、ならはしむべからず。

寳永七庚寅年初夏日

筑前州　益軒貝原篤信撰

和俗童子訓卷之五 大尾

五常訓序

聖門之學以性爲本。五常其目也。五典其發也。循五常之性。而行五典之道。斯而已矣。若夫衆人則不知性靈之爲貴。禽獸同群。草木與凋。豈不哀哉。益軒先生自善其身。推以及人。其志在於愛斯人以報答天地生育之洪恩。晩年所著尤多。專以導俗喩愚爲務。如俗訓童子訓等書。平易切實。未嘗用巧文麗辭爲工。且書以假字。令夫不識漢字者亦能讀之易通曉矣。頃又[illegible]摭聖賢之遺言。發揮平日自得之緒餘。以作爲五常之義訓。亦從俗語以述之。用俗字而說之。雖庸劣昧愚之輩。讀之則庶乎知良心之根秉彝而得復初之階梯。嗚呼性豈易言哉。如子貢之穎悟。尙所難聞也。如斯書其言則俗間之假字。而其編則不過數策。似不可以盡聖學之極處。然洙泗之淵源尋其流。濂洛之微言撮其要。天人之精微無不具備。至其日用行事切近工夫。亦無不深切著明。可謂言近而旨遠矣。正是終身用之不能盡者也。其有補於世教亦大矣。先生之齡已超八帙。愛物之志倍厚。而不倦著述之勞。繾綣之仁意孰敢不嘉尙哉。夫著書以示人者不尋浮誇。讀書以自爲者必貴切實。苟所謂樂春藻之繁華而忘秋實之甘口者。非君子爲己之學也。吾恐覽斯編者以其近而忽之。茲不自揣。敢申鄙懷以爲之序云。

寶永庚寅冬至日

竹田定直拜書

五常訓目次

五常訓卷之一

貝原篤信編錄

總論

およそ人となれる者は、天の大德をうけて生れ、その心に生れつきたるものあり。名づけて性といふ。是即天地の萬物を生じ給ふ大德の生理なる故に、性の字心にしたがひ生にしたがふ。此の性の內おのづから五の德あり。名づけて五常といふ。古今天下の人、たかき、いやしき、さかし、おろかなる、皆おしなべて此五の德を生れつきて、心にそなはれること、古今かはることなし。こゝを以て五の常といふ。常とは、かはらざるをいふ。此五常の性は、人の人となれる理にして、人の萬物にすぐれて貴く、禽獸にかはれる所こゝにあり。この五の性にしたがへば、五倫の道是より行はれて、人道是によりてたつ。故に天下の道理是より出て、

道の本根とす。故におよそ人たる者、この理をしらずんばあるべからず。五常の性は體なり、その理ときがたし。用にあらはれて、見えやすきを以、その字義をいはゞ、愛を仁といふ。愛はあはれみなり。宜を義といふ。宜とは、事物に相應するをいふ。各その事につきて理に當るなり。理を禮といふ、理とは人をうやまひ、事に則ありて、正しくすなほなるをいふ。通ずるを智といふ、道理に通じ是非をしるをいふ。守るを信といふ。いつはりなくして、道をかたく守りて變ぜざるをいふ。この字義は周子の說なり。韓子曰、人之所レ性者五。曰仁義禮智信。是人の性に此五の者そなはれることをいへり。故に又五性ともいふ。この五性をすべていへばなり。故に孔子は、只仁の一字を以、をしへとし給ふ。是易に、天地之大德曰レ生といへる意に本づけり。天地の萬物をうみ給ふあはれみの理、人の心に生れつきたるを仁といふ。仁は人心の全德なり。故に仁の一理を以、義禮智信をかね、又萬の善をすべたり。春の氣を以、夏冬秋を兼ぬるがごとし。されども、易においては、人の道をたてゝ仁と義といふと、仁義の二をつらねて說き給へり。是經書に、仁義をつらね說ける初なり。孟子に至りて、孔子の道をひろめて、仁義をもはら說き給ふ。仁義の二にて萬善行はれ、人道たつこと、天に陰陽ありて天道行はるゝがごとし。されども、孔子の說き給ふ仁の外には出ず。只仁の一理をわかちて、仁義といへるなり。たとへば、一年の內元氣の流行は一すぢなれど、動靜の分あるを以て、わかちて陰陽といへるがごとし。又孟子はじめて仁義禮智の四德をつらねて說き給へり。是又仁義の外禮智あるにあらず。禮は仁よりいで、智は義の內にあり。朱子の、禮は仁の著はるゝなり、智は義の藏るゝなりといへるがごとし。仁義をわかちて四德をとくは、陰陽をわかてば、春

夏秋冬の四時となるに本づけり。前漢の董仲舒曰。仁義禮智信五常之道。王者所レ當ニ修飾一也。といへり。是四徳に信をくはへて、五常をとける始めなり。四徳の外別に信あるにあらず。四徳のまことありて、いつはりなきは即信なり。信なければ仁義禮智にあらず。たとへば四時の内に土用ありて、木火金水の氣行はるゝがごとし。木火金水も土なければ生せず。是董仲舒の、はじめて説き出せるにもあらず。上代より、すでに此の説あればなり。

人心の徳は、本只仁の一理なり。又分れて仁義禮智となる。又信を加へて五常とす。たとへば一年は只一氣のめぐりなり。二にわかてば陰陽となる。春夏は陽なり。秋冬は陰なり。陽陰を又わかてば、春夏秋冬の四時となり、土用を加へて五氣となるが如し。一日の内をも、二にわかてば晝夜となり、又わかてば、朝晝暮夜の四となるがごとし。

人の心にそなはれる仁義禮智の四徳、その根本いづくにあり、いづくよりうけたるや。曰、是その根本天にあり。天より出でゝ人の心にうむまれつきたり。その根本天にあり、天より出でたるとは、いかんぞや。曰、易に、天地の大徳曰レ生。大徳とは大なるめぐみなり。生とは萬物をうみいかすを云ふ。天地別に心なし、人と萬物をうみいかすことを以て、心とし給ひ、これを以て、いにしへ今、かぎりなき人物を生じ給ふ。この心を生と云ふ、即、生理なり。又元と云ふ。是天地のめぐみ、物をあはれみ給ふ大徳なり。その生理、一年の内春夏秋冬にめぐり行はれて、元亨利貞の四徳となる。天にこの四徳ありて、天道常に行はるゝがごとく、人に仁義禮智ありて人道行はる。人は天地の子にて、天地の物をあはれみ給へる御心をうけて心とす、是を名づけて仁といふ。仁は即あはれみの心なり。此仁の理をわかてば、仁義禮智の四徳となる。天の元氣の生理をわかちて、元亨利貞といふ

がごとし。是人の仁義禮智の四德の根本は、天道い元亨利貞より出でたり。天にあり人にあり、其の理は一なり。董子のいはゆる、道の大原は、天に出でたりといふは是なり。

仁義、二理あるにあらず。仁の節あるは、義なり。仁義の二を以て、禮智をかぬ。故に仁をいへば、義はその内にこもる。仁義をいへば、禮智はその內にこもる。仁は禮をかね、義は智をかぬ。春は夏をかね、秋は冬をかぬるがごとし。夏は春氣の長ずるなり。冬は秋氣のかくるゝなり。仁義を以て禮智をかぬるは、禮は仁のあらはるゝなり。禮儀三百、威儀三千は、皆仁の發せるなり。是仁禮一理なり。智は義のかくれたるなり。義の善惡をたちわかつこと、利刀の物をたつがごとくなるは、智の是非することの明らかなるよりいづ。是義智一理なることを見つべし。仁禮は陽に屬し、義智は陰に屬す。仁義の二をいへば、春生じ夏長ずるは仁なり。秋收め冬藏るゝは義なり。四德にわかちていへば、春は仁なり。夏は禮なり。秋は義なり。冬は智なり。

人に仁義あるは、天に陰陽あるがごとし。天に陰陽なければ、造化の理ほろびて四の時行はれず。萬物生ぜずして、天地の道たゝず。人に仁義なければ心の德ほろび、五倫の道行はれずして人道たらず。禽獸と何ぞ異ならんや。故に易に曰、天の道をたてゝ陰と陽といふ。人の道をたてゝ仁と義といふ。

仁義禮智の四德、古今天下の人の心に、皆生れつきてそなはれること、何を以てかしるや。四端あるを以てしれり。四端とは、惻隱羞惡辭讓是非をいふ。是仁義禮智の四德心の内にありて、物にふれて、おのづから心上におこりて、外にあらはるゝを云。故に四端と名づく。端とは、物内にありて見えざるといへども、そのはし、すこし外にあらは

れ出づるを以て、その物の内にあることをしるがごとし。仁義禮智の性心の内にありて、いまだおこらざる時は、その有無見るべからずといへども、物に感じておこり、用となるにいたりて、仁は惻隱となり、義は羞惡となり、禮は恭敬となり、智は是非となる。もし内に、仁義禮智の四徳なくんば、必此四端あらはるべからず。内にある故に、外に四端あらはる。是を以て人心に四徳ある證とすべし。惻隱は、いたみいたむとよむ。人のうれひ苦しむを見ては、あはれみいたむをいふ。是仁の心のあらはるゝ端なり。もし人のうれひくるしみを見ながら、あはれむ心なくんば仁なきなり。羞惡とは、はぢにくむとよむ。にくむとは、きらふなり。わが不義なるをはぢ、人の不義なるをきらふ。是義の端なり。もし人の不義をきらはず、わが不義をはぢずんば義なきなり。辭讓は、我身にとるを辭退して、うけざるは辭なり。人にゆづりて、あたふるは讓なり。飮食するを以ていはゞ、飮食を辭して、まづ人にゆづりあたふるをいふ。是禮の端なり。もしゆづらずして、あらそひうばゝば、是禽獸のわざにして禮にあらず。是非とは、事の善なるをば善としりて是とし、不善なるをば不善としりて非とす。是智の端なり。もし是非をわきまへずんば智なきなり。この四端は、人となれるものは必あり。この四端あるを以て、仁義禮智内にあることをしるべし。又いかなるおろかなる人も、おやを愛し、君をたうとび、兄をうやまひ、弟をあはれみ、善をほめ、惡をにくまざるものなし。是仁義あればなり。飢寒する人を見ては、あはれむ心おこるは、仁あればなり。又小人といへども、わがいつはりあらはれ、不義を人にしらるれば、赤面し汗をながす。是義あればなり。凡かやうの類、物にふれて善心おこること多し。みづから心見てしるべし。皆是仁義禮智の四徳を

生れつきたるにあらずや。こゝを以て、孟子は、人の性は善なりとのたまふ。もし五常の德なくんば、なんぞ性は善なりといはんや。猶もせちなることをいはゞ、孟子の書に見えしごとく、只今三四歲なる小兒が、井のはたにありて、智なくして、たちまち井の內に、おちいらんとするを見ては、いかなる至愚極惡の人も、おどろきかなしみて、すくはざるはなし。是其子の父母にしたしみあるにあらず、人の子を救ひたるとて、ほまれを求むるにあらず、又見すてたりと、人にいはるゝ惡名をおそるゝにもあらず、只天性にうまれつきたる仁愛の、まことの心より出づるなり。これによりて見れば、人皆此善心うまれつきて、心にそなはれることを知るべし。君子の道を行ふ工夫は、わが心の內にある四端の善心の、すこしきざしたるをやしなひそだてゝ、外におしひろめ十分に行ふにあり。たとへば、火のはじめてもえ出でたるを打けさずしてふきおこし、さかんならしむれば、ひろき原、大なる山をもやくがごとし。昔もろこしの齊の宣王は、一牛をころすをなさけなくおもひ、たすけられしは、誠に惻隱の心、善心の發なり。されども、わが國の多くの人民の飢寒をすくはず。是牛を愛する仁心はありながら、その仁心をおしひろめて、萬民に及ぼす工夫なくして、民を飢寒せしむ。火のはじめてもえ出でたるを、打けしたるがごとし、物をやくことあたはず。およそ人の善を行はずして、不善をするは、皆その善心あるをおしひろめざるなり。善をするは、皆善心の內にあるを外におしひろむるなり。親につかふるに、親を愛する一念あるは善なり。これをおしひろむれば、大孝にいたる。もしこれをすてゝ、おしひろめざれば、不孝となる。自餘も皆この類なり。故に善と惡とは、この心をおしひろむると、おしひろめざるとにあり。心にはこの善端ありといへど、お

しひろめ行はざれば、生れつきたる天性をそこなひすてゝ行はざるなり。是いはゆる自暴自棄なり。おしひろむれば、天下四海をもおさむるにたれり。もしおしひろめずして打すつれば、至りてちかきわが父母につかへて、孝をなすことも成がたし。いはんや萬民を治むるをや。堯舜の仁、湯武の義は、至りて大なれども、此善心をおしひろめ給へるなり。桀紂が惡は此心をおしひろめざるなり。然れば四端をおしひろむると、おしひろめざるとは、善惡と君子小人と、國家の治亂とのわかるゝ所なり。

天地のめぐみをうけて、わが身に生れつきたる四德なれば、人の人となれる道理こゝにあり。しかるにこの道理をしらず、且人欲にくらまされ、是をすてゝ行はず、天地の德にそむき、人の道をうしなふこと、かなしむべし。この四德をうしなへば、人とかく生れたるしるしなく、鳥けだものに同じくして、草木の天地のめぐみのまゝに生長し、枯しぼみて人のやしなひとなり、妨とならざるには、はるかにおとれるぞあさましき。人は萬物の靈とて、天地の内にていと貴き物なれど、天地の性にそむき、人の道をうしなはゞ、禽獸に近くて、たうとぶにたらず。是みづからわが身をいやしくもちくだすなり。豈いやしむべきことならずや。

仁義の道は、わが心の外に求めず。幼穉なる童も、その親を愛することをしらざるはなし。其の長ずるに及んでは、その兄をうやまふことをしらざるはなし。親を愛するは仁なり。兄をうやまふは義なり。こゝを以て仁義はわが心に、もとより生れつきたることをしるべし。且親を愛し、兄をうやまふは、たれもしりやすく行ひやすし。甚高くして、しりがたく行ひがたきことにはあらず。この二にもとづきて、その心をおしひろめ萬事に行ひ及ぼさば、仁義行れて人道たちぬべし。

人の性とする所、只仁義禮智信の五字なり。天下の道理、この外に出ずして、こと〴〵くこの內にあり。是萬善の出づる所の根源なり。五常の性にしたがひて、五倫の道を行ふ。聖賢のをしふるところ、學者のまなぶ所、此外にこれなし。

五常の性にしたがひて、私欲のわづらひなく、只その自然に打まかすれば、人倫にまじはりて、その性の善あらはれ、人倫の道行はる。中庸に、性にしたがふを道といふ是なり。此性にしたがひ行へば、親には孝し、君には忠し、夫婦正しく、兄弟むつまじく、朋友に信あり、萬の善、皆これよりいづ。國家を治め、天下を平らかにするも、皆是五常の性にしたがひて、行ひ出せるなり。こゝを以て人道たつ。聖人の聖人たるも、亦五常の性にしたがへばかり。天下の道理は五常の外にいでず。およそ人となるものは、萬物にすぐれ、五常の性を生れつき、道あるものなれども、食をあくまでくらひ、衣をあたゝかにき、家をかまへて身をやすくしたるまでにて、道のをしへなければ、かたちは人なりといへども、その心その行ひは、禽獸にちかきこそうらめしけれ。古の聖人、是をうれへ玉ひて、學校をたて師をたてゝ、人たるの道ををしへ學ばしめ給ふ。されば、事の急ならざるやうにて、いたりて大せつなることは、學問よりおもきはなし。いかんとなれば、道はしばらくもはなるべからず。人學問なく道をしらざれば、人の道たゝず、人とかく生れつきたるかひなし。人生ふたゝび得がたし、道をまなばずして、むなしく過すべからず。こゝを以て朝に道を聞きては、夕に死すとも可なりと、聖人ものたまへり。學問はまづこの道に志をたて、明らかなる師をえらびて。その教へをうけ、よき友にまじはりて、其助をかるべし。志を立つることは我にありといへども、道を學ぶことは師友のちからを用ふべし。たとへば、

いとさゝやかなる藝能、又民のつとむるいやしきことわざといへども、師なく、法なく、をしへなくて、只わが心ひとつにまかせたらんには、いかに才力ありても、そのわざをよくしがたし。いはんや、人の道はすなはち天地の道にて、きはめて大なること、諸藝にくらべがたきをや。いかでか古の聖人の法をまなばずして、わが心ひとつにて其道行はるべき。然れば人となる者は、必いにしへの聖賢を師とし、そのをしへをたふとび、その書をよみ學問して、人の道をしらずんばあるべからず。おろかなる人は、學問は人のつとめの外のことのやうに思ひ、學ばずしても、くるしからざることとのみ思へり。人となりて、人の道をまなばずしてしらざるは、農人の田つくることをしらざるが如し。いにしへより、もろこしにて、さばかり明らかにさとれる賢人君子、世に多かりしかど、我意をたてず、わが才智にほこらず、皆聖人の敎をたうとびしたがひ、いとけなきより、老にいたりて道をまなびやめず。その智明らかにして、聖人の敎をまなばずんばあるべからざることを、よくしれる故なり。いはんや、今の時、末世の凡人、いかにその才力人にすぐれたればとて、古の賢者には及ぶべからず。然れば聖人を師として、學ぶべきこと、いふに及ばず。

元亨利貞の四德は、天道の物を生じ給ふ生理の、春夏秋冬の四時に行はるゝ次第にて、その始終なり。天道の行はるゝ序、その時を以ていへば、春夏秋冬とし、その理を以ていへば元亨利貞とし、其の氣は生長收藏とす。元は、はぢめとよむ、生理の始なり。時においては春とす。春は元氣始めて行はれて萬物生ず。是天道の萬物を生ずる德の初なり。人にうけては仁とす。亨は、とほるとよむ、生理の通るなり。時においては夏とす。夏は萬物さかんに長ず。人にうけては禮とす。利は、遂ぐる

なり、生理のとぐるなり。時においては秋とす。秋は萬物の生理をさまりて、草木みのる。是利なり。人にうけては義となる。貞は、正しとよむ。生理の正しく成れるなり。時においては冬とす。冬は萬物の生理成就し、堅固に正しくなる。その生氣根にかへりかくれをさまりて、一年の功成る。人にうけては智とす。此四時に行はるゝ序は、萬世に年はふとも、かはらざる天道の常理なり。人は天の元亨利貞の四徳をうけて、仁義禮智の性として、心にそなはれり。天の四徳は、天の萬物を生ずる生理なり。人の四徳は、人の五倫をあはれむ生理なり。人の四徳其源をたづぬれば、本は天の四徳よりいでゝ、其理同じく其本一にして、天人合一なり。

天の生理四時に行はる。その中につきて、取わき元を始として、亨利貞をすぶ。此の故に春生の元氣を以て、四時をつらぬく。その次第は四にわかるれども、理は一なり。人の心の生理も仁を始として、義禮智をつらぬくこと、天の元氣の春を始として、四時をつらぬくがごとし。これによりて、仁の一字は四徳をかねたり。孔子の、もつぱら仁の一字をとき給へるは、此故なるべし。

天の道萬古よりこのかた、つねに行はれてやまず。春夏秋冬の序、日月のめぐり、寒暑温涼のおしうつる皆其時たがはず。萬物の生ずる、年々に各その形色をあらためず。桃は紅に、李は白くして、萬世までもかはらず。是則天道の誠なり。人の性に仁義禮智の四徳ありて、その中におのづから信あるは、天道の元亨利貞の内に誠あるがごとし。天地の運行、人物の性、萬世にいたりてかはらず。是即天道の誠なり。

凡、人たるもの、必この四徳あるは、たとへば身に頭身手足の四體あるがごとし。この四徳ありながら、道を行ふことならずといふは、たとへば手足

はありながら、物をとり地をふむことならずといふがごとし。是を自暴自棄といふ。自暴とは、みづからそこなふとよむ。我身にこの天性あることをしらで、禮義をそしりて行はず。是天性をみづからそこなふなり。剛惡の人なり。自棄とは、みづからすつるとよむ。仁義の道をよきとはおもひながら、行ふことならずとて行はず。是われにある天性をみづからすつるなり。柔惡の人なり。この二種の人は、わが天性を、みづからやぶりすつる故に道に入りがたし。もし自暴自棄の惡なくんば、學んでこの道を得ずといふことなし。いかんとなれば、人の性本善なり。學問の道は。外に求めずして我に求むる故、得ざることなし。

五常の性は、只人のみこれあるにあらず。禽獸にも、亦其一性はこれあり。虎狼にも父子の道あり。慈鳥の巣立して、母に餌をふくめかへす、猫の他の子に乳をのませてそだつる、是皆仁の一端を得たり。犬の主人をしたひ、蜂蟻に君臣の法あるは義なり。豺獺の祭をして本にむくひ、鴻雁の兄弟の行列をみだらざるは禮なり。鴛鴦の雌雄相愛すると、雎鳩（ミサゴ）の雌雄別あるは智なり。鴻雁の去來するに、春秋の期をたがへず、鷄のなく時節をたがへざるは信なり。是皆むまれつきたる一偏の性のよき所なり。もし人として此性を失はゞ、禽獸にしかずと云つべし。

孝弟忠順愛敬などは、皆仁義禮智の性より行ひ出せる道理にして、その理は、五常の性の内にあり、性の條目にはあらず。人の性は只仁なり、わかてば五常となる。

人たるもの、必五常の性を生れつきたれば、事物にふれて、必四端おこる。たとへば、物の中にありて、其はしの少し外に見ゆるがごとし。性は見えがたしといへども、外にあらはるゝ四端を以て、内に實にこの性あることの證とすべし。孟子の、性

は善なりとゝき給へるも、五常の性あればなり。人の性善なる故、人もし學問し道をしりて行はゞ、堯舜の聖にもいたるべしとなり。この故に、程子曰、孟子有㆑功㆓萬世㆒者、性善の一言なり。

孔子の教は、常にことなる道にあらず。即天地の道なり。天地の道を則として、人に示しをしへ給ふ故に、古人の言に、孔子は天の通事なりといへり。天地の道は易簡とて、むつかしからずしてしりやすく、事多からずして行ひやすし。天地の御心は、只萬物をめぐみやしなひ給ふより外に心なければなり。人にありては仁なり。是人の道なり。仁の道も亦人をあはれみやしなふより外になければ、人の道も亦しりやすく行ひやすし。仁をわかちて五常となる。五常の性は人の心に生れつきたる理なれば、外に求めずして、われに求む。凡外にある物は、求むれども得がたし。我にある物は求むれば必得やすし。聖人その人の心に各生れつきて具足せる道を以て、をしへ給へば、いかにおろかなるしづのを、しづのめも、しりやすく行ひやすし。しりがたきは、よく學びざればなり。行ひがたきは人欲にほださるればなり。是道のしりがたく行ひがたき故なり。人欲にしたがひ、邪曲を行ふは、たとへばやみの夜に道もなきいばら、からたちの中をわけゆき、みぞほりをこえて行くがごとし。あやふくして行ひがたし。聖人の道を行ふは、たとへば白晝に大道をゆくが如し。明らかにして行ひやすし。

孔子の時は猶も天下に道理明らかに、邪說なかりしかば、仁の一字をとき給ひて、義禮智の條目をそなへ說き給ふに及ばず。孟子の時は世に異說おこり、道理まぎれやすく、人心まよひて明らかなりがたし。若仁の一字のみを說き給はゞ、無星の秤(ハカリ)、無寸の尺のごとくにて、天下の人さとり得がたからんことをおそれて、仁義をとき、四德をとき、

性善をときたまふ、凡聖賢のをしへは、時によりて宜にしたがへり。たとへば良醫の時の運氣により、地の風土にしたがひて、治療をほどこすが如し。

我が儒の道は經濟の道とて、世ををさめ、人をすくふ大道なり。其の學は有用の學とて、まづわが身ををさめて、人ををさめ、人倫の道を行ひ、天下國家のため、天地萬物のため、用をなす學問なり。無用の空言にはあらず。こゝを以て、道理は人の心に生れつきて、知りやすく行ひやすしといへども、その道の功用のいたりて大なること言ふに及ばず。かく大なる道なれば、などかその師なく、をしへなく、學ばずして、その道明らかなるべきや。世間の、いやしき小藝小技すら、師なく學びなくしては、そのわざをなしがたし。いはんや大道をや。故に人たるもの、たかきいやしき、さかしおろかなる、ともに聖人の道をたふとびて、明師をもとめ、良友にちかづき、そのをしへにしたがひ、その道をまなばざらんや。

人の心は、たゞ仁義禮智の性なり。人の道は、只君臣父子夫婦長幼朋友の人倫の行なり。五常の外に心なく、五倫の外に道なしとしるべし。これをしるは知なり。是を行ふは行なり。この外に、さらに心と道とを求むべからず。いかんとなれば、天の心、天の道にそむけばなり。人となるものは、天地の内に生れ、天地のめぐみをうけて、身をはるものなれば、とにかくに天地の道をたふとび、したがひ行ふべし。

もろこしは天地の中央にありて、風氣の正しき國なれば、いにしへよりさばかりの聖人賢人世に多く出でゝ、天下ををさめ、道を行ひ、人倫の法を立て、天地の道をつぎ給ふ。中について、孔子は、六經を作り、堯舜以來古の聖人の道をのべ、人倫の敎を立て、天下萬世にのこし給ふ。是天下萬世

の師とし、たふとびて行ふべき則なり。故にもろこしも外國も、そのをしへをうけてしたがへり。しかればそのをしへのいたりてたふときこと、いへばおろかなりや。おもひやるべし。こゝを以て、いにしへの帝王も、孔子を師としたつとび、其教をおもんじ、時々の祭を行ひ、その廟にまうでゝ拜禮をなし給ふ。わが日の本にも、むかしは都の大學寮に、聖人及び十哲の像を安置し、釋奠とて聖人をまつり給ふ禮ありき。又太宰府及諸州にも、孔廟學校ありて、祭禮をなせり。しかれば天下の人たかきいやしき、あまねくそのをしへにしたがひて、師とすべきこと言ふに及ばず。されど世界の內、聖人の教をしらで、たがはざる國もあり。それは孟子のいはゆる、をしへなければ禽獸にちかきなり。是夷狄の中華に及ばざる所なり。

わが日の本は、天地の內において、南北の中央にあること中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざること、四夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる善國なり。五穀ゆたかに衣食器財ともしからず。まことに豐秋津洲といへるも、品物の多くしてゆたかなること、外國にまさればなり。その風氣正しき故に風俗和順にして、慈愛ふかく、節義を守りて勇武なり。禮法正しく、威嚴行はれ、仁義にちかし。一たび變せば、道にいたりやすかるべし。この故に中土の書にも、この國を名づけて、君子國と云ふこと亦うべなるかな。わが國の人は、日の本の外國にまさりてよきことをしらず、うらむべし。わが國にたらざる所は、只學問の一事のみ中土に及ばず。今太平の化久しく、萬民その德に浴せり。只つとめて、いにしへのひじりの道をまなび、五常の德ををさめ、五倫の道を行ひて、國家の恩德をあふぎ、その化にしたがはざらめやは。

許愼が說文に、四夷をときて曰、南方は蠻と云蟲に從

がふ。北方を狄と云犬にしたがふ。西方を羌と云羊に從がふ。たゞ東夷は大にしたがふ。大は人也。東夷の風俗は仁也。仁者壽し。君子不死の國あり。孔子曰。道不レ行欲下之二九夷一乘レ桴浮中於海上。有レ以也。といへり是南蠻、西戎、北狄は、皆文字も蟲と獸に從がふ。只東夷のみ人にしたがへり。日本は東夷なり。九夷の内也。孔子も中國にて道行はれざる故、九夷におらんとのたまふ。是我國の他國にまさりて、人の道ある國なれば也。又日本を不死の國と云も故あり。日本の人は、もろこし、又其餘の國より長命なればなり。

五常の和訓、仁はいつくしみ、義はよろし、禮はうやまふ、智はさとる、信はまことゝよむ。

五常訓巻之一終

五常訓巻之二

仁之上

貝原篤信編錄

人の禽獸にことなるは、仁あるを以てなり。五常五倫百行萬善、皆仁よりいづ。故に仁の理、至りて尊く至りて大なり。わがともがら、凡愚のしりがたきことなれば、たやすくいはんこと、いとかたはらいたくこそきこゆべけれ。されど、まなびがてらに古人の說をあつめ、不幸にして書をよまざる人のために、いさゝかこゝろみに、大義の萬一をいはん。たゞあやまりおほからんことをおそるゝのみ。中庸に曰、仁者人也。親レ親爲レ大。孟子も亦曰、仁也者人也。又曰、仁人之心也と。言ふ意は、天地の惠み大にして、よく萬物を生じ給ふ。其の理を生理といふ。生理とは天理の生生して、よく物を生ずるをいふ。この生理を人の身に生れつき

たる故に、人の身に恵みの心胸中にみち〳〵て、よく物をあはれむ。こゝを以て、人の身、即是仁なり。故に仁者人也と說きたまへり。仁は人也といへるは、たとへば生ずるは種なりといひ、又あつきは火なりといはんが如し。人の心に必仁あること、種の必生じ、火の必熱きが如し。禽獸も同じく天地のめぐみによりて生ずれども、仁をば生れつかず。この故に、仁は禽獸也とは云ひ難し。萬物の內、人ばかり仁なるはなし。こゝを以て、人たるものは必仁あり。仁なくんば人とすべからず。故に仁は人也といへり。天地の人を生み給へる道理を、人の身に得て、心の德とするゆゑに、おのづから物をあはれむ道理あり。是即仁なり。又仁は人の身に生れつきたる心なれば、仁人心也といへり。然れば仁は、天地の心をうけて心として、あはれみの理をその內にふくめり。故に人にまじはりては、あはれみの心おのづからやむことなし。されどもその中につきて、まづ父母を愛し、次に兄弟一族を愛するが、仁愛の內にていと大なる理なり。故に親をしたしむを大なりとすといへり。親とは親類なり。先親類をしたしみて後他人を愛す。是仁を行ふ次第なり。人なりととき、人の心也ととける字訓、尤親切にして、仁の理によくかなへるなるべし。周子は德愛を仁といふといへり。愛はあはれむなり。仁は心の德にて、人をあはれむを云ふ。愛を以て仁をとくは、是仁の大用をとけり。仁の用をなすは、あはれみを人にほどこすにあり。故に愛を仁といふ。夫仁は性なり。性は心に生れつきたる理なり。體なり。愛は情なり。情とは性の外物に感じて、うごきあらはれたるをいふ。用なり。愛は仁の性の用にあらはれたるなり。體は見えがたければ、あらはれたる用を以てとけり。愛を以て仁をとくは、是用につきて體を示すなり。程子は天地の生意を以て仁をとけり。生意とは天

地の理生生して物を生ずる意をいふ。その生意の人に生れつきたるを仁といふ。天にありては生といひ、又元といふ。人にうけては仁といふ。天にあり人にありて、その名はかはれども、其理は一なり。この心に生れつきたる生理内にありて、いまだ外にあらはれざるを仁とす。すでにあらはれて情となりて、物にほどこすを愛といふ。愛のはじめておこれる、そのきざしのはしを惻隱の心といふ。仁と愛と一理なれど、性情體用の別あり。用をさして體とすべからず。情をさして性とすべからず。然れば仁と愛と體用のわかちあり。たとへば仁は扇なり體なり。愛は扇を以て人をあふぐが如し。あふがずんば、扇も用なし。あはれみなくんば、仁なんぞ用あらんや。すべていへば、愛するも仁なり。たとへばあふぐも扇なるがごとし。性情體用も皆仁なり。體用をわかちて見、又合せて見るべし。程子又曰、仁主二於愛一。是仁は愛の理をふくめるゆへ、うごきて人におよばれば、專愛することをつかさどれり。義の宜をつかさどり、禮の敬をつかさどるがごとし。天地の萬物を生ずる心は、即是天地の物を愛するの理なり。その理を人にうけて性とするは、即仁なれば、仁は人物を愛するを主とせり。朱子曰、仁心之德、愛之理。心の德とは、德は得るなり。天地の人物を生じ給ふ心を我が心に得て、わが物となれる道理を德といふ。義禮智も、皆心の德なれど、仁は義禮智をかねたれば、仁において、もつぱら心の德といふ。たとへば一家の中、兄弟四人あれども、嫡子一人を以てその弟をかぬるが如し。愛の理とは、心の德のいまだ外にあらはれざる内に、おのづから物をあはれむ理をふくめるをいふ。仁に愛の理あるは、飴の甘きが如く、醋のすきがごとし。その內の味なり。たとへば俗語に、ひらかねど扇は風のつぼみかな。といへるがごとし。すべていへば、仁は心

の德なり。わかちていへば愛の理なり。心之德、愛之理の六字、朱子はじめて發明せる所、後の學者に功あり。是周子の、德愛を曰レ仁に本づけり。或曰、愛之理は發用をさせりと。この說非也。朱子曰、愛之理者、是乃指二其體性一而言。この說の證とすべし。愛は用なれども、愛の理は內にふくめるを以て、いへば、あらはれたる用に非ず。朱子又曰、仁は溫和慈愛の道理。溫和とは、其の心のどけくやはらかなるをいふ。慈愛とは、人と萬物をいつくしみあはれむをいふ。溫和は仁の氣象をいひ、慈愛は仁の道理をいふ。たとへていはゞ、春のけしきのどかなるは溫和なり。春の陽氣よく、草木萬物を發生するは慈愛なり。朱子の此の二說にて、仁の字義大むねそなはれり。

○韓退之の博愛謂レ仁と說けるは、仁の天下萬民に行きわたりたる大用なり。物として愛せざることとなきなり。仁者はまことに博く愛すれども、それは末なり、根本にあらず。程朱は、仁の根源よりときて全體をすべたり。韓子の言全く理なきにあらず。されど仁は性なれば、其の本よりときて大用をかぬべし。

四書六經の內に、只仁の一字をいへるは、義禮智をかねたり。仁義の二字をときて、禮智をいはざるは、仁は禮をかね、義は智をかねたり。百行萬善は皆五常よりいづ。五常は又仁の一字を以てかねたり。此の故に、孔孟は、もはら仁をもとむる工夫を以てをしへ給ふ。其の說は、論語孟子の書に見えたり。

程子曰、醫書に、手足のなえしびるゝを名づけて不仁とす。此のことば、尤よくなづけかたどれり。仁者は天地萬物を以て一體とす。己に非らずといふことなし云々。人の身病なくして、血氣ゆきわたりてよくめぐれば、手足のさき針にてさしてもいたむ。もし風濕氣虛などの病によりて、血氣ふさがりめぐらざる所は、刀にてさし、火にてやきて

もいたまず、なえしびれて我身とも覺えず。是を醫書に名づけて不仁といふ。不仁者の心、外物を一體とせず、物と我との隔ありて、仁心その物に行きいたらざれば、人のうれひくるしみをも、我が心に何ともなくいたまず、かへりて、なさけなく人をくるしめしえたぐ。手足に血氣めぐらずして、なえしびれ、いたきこともかゆきこともおぼえざるが如し。故に手足のなえしびるゝを名づけて、不仁といふこと、尤しかるべし。仁者の心はわが身ひとつを利せず。萬物とわが身と、へだてなく一體として愛せざるものなし。是私欲のへだてなくして公なる故に、我が心よく萬物に通じ、人のうれひくるしみを見ては、わがうれひくるしみの如くいたみかなしむ。鳥獸草木までもあはれみめぐみて、そこなはず。鳥獸のころされ、草木のみだりにきらるゝを見ても、いたむ心あるは、皆我と一體なればなり。凡天地の内に、あらゆる萬物は、皆我が身にあらざるはなし。是を天地萬物を以て一體とすといふ。是仁者の心なり。凡人倫も禽獸草木も、同じく天地のうめる所にて、同氣なれば、もとわが身と一體のものなれども、私欲あれば物我のへだてありて、わが身の外は心通ぜずして、人のうれへくるしみを見聞すといへども、我が心にあづからず、たゞ、わが身にさへ便よければ、人のくるしみは何ともおもはず、是不仁者の心なり。人の身血氣ふさがりめぐらずして、なえしびれて、わが身とも覺えざるが如し。

桃の實杏の實を、桃仁杏仁といふことも、亦よく名づけしなり。仁は人の心の生理なり。桃杏の實植うれば必生ず。これその内に生理あればなり。もし生理なくんば死物なり。うゑても生ずべからず。桃杏の實、生理内にありて、いまだ發生せずといへど、發生の理を内にふくめり。是を以て桃仁杏仁といふ。仁の内にありて、いまだ發せざるも亦

かくのごとし。發せずといへども、愛の理は内にふくめり。程子曰、心はたとへば五穀のたねの如し。たねの生意あるは仁なり。其たねをまきて、陽氣發して苗生出づるは愛の情なりと。苗はじめてきざすは惻隱の心なり。是等の說を以て仁の理をしるべし。

天地の惠みは至りて大にして、人と萬物をうみて、又やしなひいかし給ふ。この故に尙書に、天地は萬物の父母といへり。天地の理生生してやまざる故に、其生生たる德を以、よく萬物を生じ給ふ。易に、天地の大德を生といふ是なり。夫、天地に別につかさどりなし。物を生ずるを以てつかさどりとす。程子の曰、天は只是以生爲道。朱子曰、天地以生物爲心。人は天地の物を生じ給ふ心をうけて心とす。これ仁なり。故に仁の理の根本は、天より出づ。天の生理人の仁同じ理なり。尙書に、人は萬物の靈といへり。靈とは、たましひとよむ。人は萬物にすぐれて、あきらかなるたましひあるをいふ。天地は萬物の父母なれば、萬物は天地の子なり。されど萬物の内、人は陰陽の正しく委しき氣をうけて生るゝ故に、鳥けだもの蟲魚、凡萬物にすぐれて、とりわき天地の大德を生れつきたり。こゝを以て萬物の靈といへり。また孝經に、天地の性、人を貴しとすとのたまへり。天地の内に性をうけたる物、人ばかり貴きはなし。いかんとなれば、天地の德をたがへずして、そのまゝ心に生れつきたればなり。されば人は、すなはち天地の萬物をうみ給ふ生理を以て心とせり。この心を名づけて仁と云ふ。およそ人たるものは、いにしへ今、此仁あらずといふことなし。是人たるものゝ心なり。故に孟子にも、仁は人の心なりといへり。若人この仁をうしなはば、かたちは人なりといへど、心は禽獸に近かるべし。然れば人と生れたるしるしなく、萬物の靈とするにたらず。

而又貴しとすべからず。故に人となるものは、仁を心にたもち、身に行はずんばあるべからず。いかんとなれば、仁は天地よりうけて、人となれる理なればなり。

孔子曰、仁者は己たゝんとほつして、人をたつ。己達せんとほつして、人を達すと。この意は、仁者は心に私なくして公なる故、人我の隔なし。我身をたてんと思へば、人をも共にたつ。我が身を達せんと思へば、人をもともに達す。人と我とのへだてなし。人を思ふことわが身と同じ。是仁者萬物を以て一體とするの心なり。もしわが身を専に愛して人を愛せざるは、人我の私にへだてられて、公の心なし。是不仁なり。仁にいたらんとほつせば、ちかくわが身の上にて、人の心をたとへ、わがこのむことを人にほどこし、我がきらふことは、人もきらふものなれば、わが心にて人の心をおしはかりて、人にほどこさず。是おのれをおす恕の道にして、仁にいたる工夫なり。

賢者以下は、私なきことあたはず。私あれば人我のへだてありて、仁にいたらず。仁にいたらんと思はゞ、人我をへだつる私の心をさるべし。私をさりて仁にいたる工夫あり。推レ己を恕といふ。おのれをおすに二すぢあり。一には、わが心に人をあはれむ惻隠の一念生ぜば、その心を外におしひろめて、人に及ぼして、人において愛せずと云ふことなかるべし。子を愛するを以ていはゞ、わが子をあはれむ心をおしひろめて、人の子をあはれむ。是おのれをおすといふ。わが子のみ愛して、人の子を愛せざるは、人我の私なり。凡わが心に四端の善あるをば、皆外におしひろめ行ひて、十分に至らしむべし。内にありても、外におしひろめて行はざれば、用をなさず。是は内にある仁を外におし出して、ひろめ行ふなり。是己をおす恕なり。又一には、仁を人にほどこすの道、わが心を以て人

の心をおしはかるに、人も我も同じ心なれば、わがこのむことは、人も亦必このむものなり。わが心にきらふことは、人も亦必きらふものなり。かくのごとく、わが心を以て人の心にくらぶるに、つゆたがふことなし。不仁無禮を人のわれにほどこすは、わがきらふ所なり。是を以て、人の心をおしはかるに、人もまた不仁無禮をきらふ故に、人に不仁無禮をほどこさず。是恕なり。民をおさむる道を以ていはゞ、わが身もし下にありて困窮し、うへこゞえ、妻をうり子をうりて、親子はなれ、兄弟妻子離散するにいたらば、わがはなはだきらふことなるべし。その心を以て民の心をおしはかるに、わがきらふ如く、民も亦きらふべきことをしりて、民のうゑず、こゞえず、困窮せず、妻子をうらざるやうに、あはれみてほどこすべし。是をおのれが欲せざる所を人にほどこすことなかれといふ。又孔子の、よくちかく取りてたとふるを仁の方（ミチ）といふ、とのたまふも此意なり。わが心に近く取りてたとへくらぶれば、人の心も同じ心なれば、わが心にたがはず。わが心を以て、人の心をおしはかりて、人にほどこすは則恕なり。是亦己をおす恕なり。恕にこの二義ありとしるべし。いづれも、おのれをおすといふ義なり。

仁は徳の名なり。恕は仁を行ふ工夫なり。徳の名にはあらず。工夫とは、つとめのしわざをいふ。世俗に、思案するを工夫といへど、左にはあらず。思案もその内の一なり。仁に至らんとならば、恕を行ふにあり。仁は愛の理なり。恕は人我の私を去りて、愛を人にほどこす工夫なり。仁はたとへば筆なり。愛はたとへば筆より書出す文字なり。恕は筆を手にとりて物かくがごとし。仁は體なり。愛は用なり。恕は仁を行ふつとめなり。恕なれば私なく公にして、仁の理行はれて、愛のほどこしひろし。恕なければ仁心あれども、愛の理行はれ

ず。故に仁愛を行はんとならば、恕をもつぱらつとむべし。夫つとめずして、愛の理行はるゝは仁者のことなり。賢人以下は人我の私あるゆへ、恕を以て私をさりて仁を行ふべし。故に恕はつとめて仁にいたる道なり。熟するは仁なり。生しきは恕なり。自然にかなふは仁なり。つとめて理にかなふは恕なり。私なくして公なれば仁なり。仁なれば愛す。子貢の孔子に一言にして、身をおはるまで、行ふべき者ありやと問れしに、孔子曰、其恕乎おのれが欲せざる所を、人にほどこすことなかれとこたへ給へり。一言とは一字なり。恕の一字は仁にいたる道なり。是一生の間守り行ふべき道なり。

恕を行ふには、公私の二をわきまふべし。公とは私なきをいふ。わが身を愛する心を以て人を愛し、われ人のへだてなく、われひとりをたてんとおもふ私なきは公なり。是仁者の心なり。私とはおほやけならざるをいふ。われと人とのへだてありて、たゞわが身ひとつを利せんとおもふは私なり。又わが親しみ愛する人をひいきして、ひとへに利益せんとするも私なり。皆是小人の心なり。凡天下萬事の善惡のおこる所は、皆公と私との二よりいづ。又君子小人のわかちもこゝにあり。私あれば、まぢかき恩をうけたるわが親と君をわすれ、たゞわが身の利欲をのみつとむ。いはんや他人をや。私なければ、身をすてゝも君父のために忠孝をつくす。いはんや利欲などにひかれて、君父をおろそかにすべけんや。

仁恕公私の別をいはゞ、人我をへだてず、私なきは公なり。公にして、愛の理行はるゝは仁なり。私ありて人我をへだて、愛の理行はれざるは不仁なり。人我の私をさりて、公にする工夫は恕なり。恕は私さり、公にして愛の理行はる。是仁なり。公を即仁とはいふべからず。恕すれば人我のへだ

てなくして公なり。公なれば愛行はる。是仁なり。恕は仁を行ふ工夫なり。愛は仁のほどこしなり。たとへば、仁は河川の流れ行きて、とゞこほらざるがごとし。私は土石の河水をふさぐが如し。不仁は河水の土石にへだてられて、ふさがりてながれざるが如し。恕を以て人我の私をさるは、たとへば、川に土石のふさがれるを、すきくはなどを以て、ほりとほすがごとし。ほり通せば水とゞこほらずして流れゆく。公は土石のふさがりなきが如し。愛は水のながれゆきて、よく物をうるほすがごとし。私あれば不仁なり。恕すれば公なり。公なれば愛行はれて仁の道たつ。このたとへを以て、仁愛と公私の別をしるべし。

樊遲問仁。子曰、愛人。仁は愛をつかさどる、故に仁を行ふの道は人を愛するにあり。この人の字は、天下をさして見るべし。人を愛するは四海人倫を愛するなり。人の道は仁を行ふにあり。仁を行ふの道は人を愛するにあり。人を愛せんとならば、まづ心の私をさり、人我のへだてなくして、あはれみの心をおしひろむるにあり。愛レ人を以て仁を說き給ふ、誠に切實にして近きをしへなり。

人は父母より生ずといへど、その根本をたづぬれば、皆天地の恩によりてむまる。むまれて後一生の間も、亦天地のめぐみによりて、身をたつる事、猶おやの氣をうけて、むまれて後もおやのやしなひによりて人となるがごとし。是誠にきはまりなき大恩ならずや。この故に天地を以て大父母とす。天をば父と稱し、地をば母と稱す。人は天地の子なり。まことに天地の恩のきはまりなきこと、海山を以てもたとへがたし。天地の恩のむくゐがたきこと、子として父母にむくゐがたきと同じ。人は萬物の靈なれば、ことに天地の恩の大なることをしらですぎぬべきや。故に人の道は、只天地の恩をしりてつかへ奉るにあり。天地につかへ奉る道は、

べちにあらず。天道にしたがひてそむかざるにあり。天地にしたがうとは、いかにぞや。わが心に生れつきたる仁の德は、是天地よりわれにさづけ給へるなり。こゝを以て、仁を行ふは即天地の御心にしたがひてそむかざるなり。たとへば主君よりさづけ給へる官職をよくつとむるを以て、君につかふる忠義とするが如し。仁を行ひて、天地のうみて子とし愛し給へる人倫を愛するが、天地につかへ奉る道なり。人倫は五あり、五倫といふ。五倫はわが父子君臣夫婦兄弟朋友の五品をいふ。倫は輩なり。類なり。天下の萬民かぎりなしといへど。その類をわかてばこの五に出でず。五倫を愛するは萬民を愛するなり。萬民は天地の子にて愛し給ふ所なれば、われ是を愛するは卽天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。仁の性にしたがへば、五倫を愛する道おのづから行はる。中庸に、性にしたがふを道といふ。是なり。仁は性なり。五倫を愛するは道なり。天地より生れつきたる仁の性にしたがひて、五倫の道を行ふが天地につかへ奉る孝にて、人の道なり。是即仁なり。人の道とする所、さらにこの外にあるべからず。次に禽獸草木を愛するも、亦仁の內のことなり。天地は萬物の父母なれば、人倫を愛し、次に萬物を愛するも、亦天地につかふる道なり。

およそ人は、かりそめの一飯の恩、一物のめぐみをうけてだに、その心に銘じてわすれざるべきことわりなるに、かほどきはまりなき天地の大恩をうけながら、それをさとらずして、はかなき世のならひにまよひて、天道にそむき人道を行はず。その大恩の萬一をも報せずして、身ををはりなんこといと口をし。たとひ不幸にして、聖賢の書をよまずとも、天をいたゞき地をふみ、その中にむまれながら、かほどのことはその是非をわきまふべきことにこそ侍べれ。いはんやすこしばかりに

ても、いにしへの聖賢のふみをよみたる人、このことわりをわきまへざらんは、いとはかなくこそ聞ゆめれ。さればわれも人も天地のめぐみによりて生れ、天地の内に身をよせ、天地のやしなひをうけ、天地の心をうけながら、天地の心にそむき、天地の道をしらず、天地の財をつひやし、天地の物をそこなひて、日々に、天地にそむけるわざをのみ行ひ、天地につかへ奉ることをしらで、一生の間夢見るが如く、酒にゑへるが如く、まよひてさとらず、この身おはりて、草木禽獣と同じくくちなんことは、人と生れたるかひなし。いたりて不仁にして、又おろかなりと云ふべし。人の子として、おやにつかへずして、おやの用にたゝず、かへりておやにそむき、不孝にしておやをくるしむるがごとし。さればおやによくつかふるを孝とし、おやにそむくを不孝とす。天地によくつかふるを仁とし、天地にそむくを不仁とす。仁と孝とは一理なり。天地の恩と父母の恩とは同じ。父母につかふる心を以て、天地につかふるは仁なり。天地につかふる心を以て、父母につかふるは孝なり。又天理にそむきて人欲を行ふは、わが父母に不孝にして、他人の父母をしたしむが如し。かへす〴〵たゞ人はあだなる世のまよひをさとりて、大恩をうけて人と生れ、身をよせたる所の、いたりてたうとき天地の道にあけくれしたがひ、身をおはるまで、天道をおそれつゝしみて、天につかへ奉るべきことにこそあれ。是則仁の心にして人の道なり。人となるもの、天地の恩をしらずんばあるべからず。恩をしるを以て人とす。恩をしらざるは禽獣と同じ。恩をしるとしらざるは、人と禽獣とのわかるゝ所なり。禽獣に、恩をしらざるは木石に同じと云へるがごとし。されど木石は天地と人の妨とならず。わが輩のおろかに私多き者は、かへりて妨となり、木石にだにおとれるが多し。

身にかへりみるべきことにこそあれ。かへすぐ\天地の中に生れたる人。天地の恩をしらでつかへ奉らざるはいかんぞや。

仁は天地の物を生ずるを以て心とし給へる理を、わが身にうけて心とする德なり。故に仁は萬善をすべてその中にあれど、只ひとへに人をあはれみ、物をめぐむを以て仁とす。天地の人物をうみそだて、めぐみ給へる御心にしたがひて、天地のうみ出しいつくしみ給ふ人と萬物を、われよりも又天の御心をうけてあはれみめぐむ。是すなはち仁の心にして、天地につかへ奉る道なりとしるべし。この仁心より百行萬善は行はれ出づるなり。天地を父母として、わが身は天地の子なり。天下の民はわれと同じく、天地の子なるゆへに、即是わが兄弟なり。その內に王公大人あり。是わが兄弟の內にて位高き人なり。鰥寡孤獨病者かたわ乞食貧人あるは、皆わが兄弟の內にて不幸なる人なり。有位をうやまひ、不幸なるをあはれむは、皆是わが兄弟をあつくしたしむの道にして、即是天地につかうまつる道なり。たとへば人の子として、おやに孝をおこなふ道は、おやの命にそむかず、おやのうめるわが兄弟にむつまじく、又おやのしたしめる親戚朋友、おやの愛するしもべまで、その程にしたがひて、なさけふかきを以て孝とす。いかにおやのひざもとにて、あけくれつかふるとも。おやのうめる所のわが兄弟になさけなくば、おやの心にそむきて、至りて不孝といふべし。天地のうめる所は人と萬物なり。天地のうめる人と物をあはれむを以て、天地につかへ奉る道とす。天下に人多けれど、五倫の外にこれなし。君子の道は五倫にまじはりて、なさけふかくめぐみあつきを人の道とするは、人倫は皆天地の子なり。人倫をあつくするは、即天地につかへ奉る道なり。人倫を愛するとて、わけもなく一やうに人を愛するは道

理にそむけり。墨子と云ひし人、仁をまなびそこなひて、天下の人を一やうに兼愛する道を立てたり。是ひがことなり。人を愛するに、したしきうときと、貴賤とによりて自然のしなあり。品なければ、おやをも路人をも一に見るなり。人倫の中にとりわき、おやにつかへ孝を行ふを專一とするは、人倫の本をあつくするなり。次に兄弟夫婦朋友なり。君臣の義は又父子の親と同じく尤おもし。おやを愛するを本とするは、是わが生つきたる仁愛の先おこる所、自然の道なり。しひて次第を立つるにはあらず。人倫を愛して、その次には鳥獸蟲魚草木まで愛するは、是又天地のあはれみ給へる御心にしたがひて、我もあはれむなり。天地の萬物をうみ給へる内に、取わき人民を尤あつくしたまふは、人は萬物の靈なれば、禽獸草木に同じからず。天地の性人を貴しとす。こゝを以て天地の御心をうけて、まづ專ら人倫をあつくあはれみ、次には鳥獸草木をも愛すべし。君子の道は、只一すぢに天地の御心にしたがひてそむかざるにあり。是天につかへて孝を行ふなり。是を仁といふ。もし人倫を愛せずして、不仁なるは天地の不孝の子なり。孟子に、親をしたしみて民を仁し、民を仁して物を愛すといへり。君子の仁愛を行ふ、その次第斯くなるは、その品にしたがひて、心を用ゆるに厚薄あり。これ自然の理にしたがへり。まづ父母兄弟をしたしみ、次に親戚をしたしむは、皆是親を親む。次に民を仁す。民とは萬民なり。其内にも貴賤親疎の次第あり。次に物を愛す。物とは、とりけだもの草木をいふ。とりけだもの草木を愛するも亦次第あり。先鳥獸を愛し、次に草木に及ぶべし。親を親しみ、民を仁し、物を愛するは、輕重の次第あり。親を親しむは、尤あつく民を仁するは、是につぎ、物を愛するは、民を仁するよりかろし。この三は、すべていへば皆仁なり。そ

の厚薄の次第みだるべからず。是自然の理にして、しひて次第をわかつにはあらず。

仁は義禮智信をかねて、その中にあれども、五の者をならべ云時は各一理ありて、仁を相たすくべし。仁の理義を得ざれば宜しく行はれず。禮を得ざれば節文なくして立たず。智を得ざれば、善惡を明らかに知らず。信を得ざれば、いつはりて守りがたし。四の者そなはりて、仁の道行はる。然れば義禮智信は、もと仁より出で丶仁をたすくる理なり。

仁は天地にありては、物を生ずるの心なり。人にありては温和にして、人を愛し、物を利する心なり。仁はたゞ愛の理を以ていふべし。天の道、人の道、皆此の愛を以て本とせり。愛をすて丶仁をいふは非なり。

子曰、剛毅木訥者近レ仁。又曰、巧レ言令レ色鮮矣仁。

剛毅は心つよくして、柔弱ならざるなり。木は容貌質朴にして、かざりなきをいふ。訥は言のたくみならずにぶきをいふ。剛毅にして物慾にかゞめられず、容貌質朴にしてかざりなく、言たくみならざるは、その氣象を以て云ふ。仁とは云ひがたし。されど外をつとめずして、内に實あれば、その質仁の理にちかし。巧言はことばよくして、仁者の言に似たり。令色は顏色をよくして、仁者の容貌に似たり。顏色言語は、みごとにき丶ごとなれど、かざりて外をつとめ、内に實なければ仁にあらず。この二章を以て、仁の理をしるべし。又曰、仁者必有レ勇とは、仁者は心私にわづらはざる故、義を見ては必行ふ。內にかへりみるに疚しからず。故に事にのぞみて、うれへず、おそれず、節義をかたく守りて、身に私せず。この故に、仁者は必勇あり。血氣の勇者は、けなげにて、身をすつれども、仁義なければ、道理にあたらず。すててがひなし。勢により、節にのぞみては、身に私

して道理にそむき、節義をうしなふ。故に必仁あらず、その勇もたのみなし。子曰、志士仁人、無ニ求レ生以害レ仁、有ニ殺レ身以成レ仁。仁に志ある人、仁ある人は、義の死すべき時節に、わが身に私せず。命いきんことをもとめて、わが心の道理を害せず。身をころしても、道理にかなへばその心やすし。こゝを以て、身をすてゝ仁の徳をなすとなり。不義にして命いきても、わが心の道理をうしなへは、いけるかひなし。是仁者の勇ある所なり。こゝを以て、程子も人必有ニ仁義之心一而後有ニ仁義之氣一といへり。志は氣之師とて、心だにつよければ、氣はそれにつれられてつよし。仁義の氣あれば、即勇武行はる。

天によくつかふる道を仁とし、よくつかふる人を仁人と云ふ。おやによくつかふる道を孝とし、よくつかふる人を孝子と云ふ。仁人の天によくつかふるは仁なり。孝子のおやによくつかふるは孝なり。禮記に、仁人の親につかふるは、天につかふるが如く、天につかふるは、おやにつかふるが如し。是故に孝子は路を成すといへり。おやにつかふるには愛をおもくし、天につかふるには敬をおもくす。愛敬をつくして天につかへ、親につかふるは、其身の徳行の成就する道なれば、これを身を成すと云ふ。天は地をすぶ。地は天の内にあり。故に天道をいへば、地道は其の内[illegible]あり。天につかふるもその内にあり。

孔子のをしへは只仁の一字をもつはらとし給ふは、仁は四徳をすべ、萬善百行の本とする理なればなり。しかれば、人道は唯ひとへに仁を以て本とせり。仁義禮智は人の性の條目なれど、皆仁より出づる所にして、仁わかれて四となれり。是を以て、五常は仁を本とす。仁を以て義禮智をかぬ。仁は仁の本體なり。禮は仁の節文なり。義は仁の斷制なり。智は仁の分別なり。是四徳は皆仁にこもれ

り。たとへば春は生氣の初なり。夏は生氣の長ずるなり。秋は生氣のをさまるなり。冬は生氣のかくるゝなり。是春を以て、夏秋冬をかぬ。仁の義禮智をかぬるも亦かくの如し。故に明道の曰、義禮智皆仁也と。されど仁義禮智とわかてるは何ぞや。仁の内おのづからこの四德あり。これをわかてば、仁の理いよ〳〵明らかなり。四にわかつは、仁の理を明らかにせんがためなり。四時をわかてば、一年の元氣の運行明白にして知りやすきがごとし。

四德四端いづれも四の者をならべ說くといへども、そのはじめ、まづ仁心なければ必義禮智なし。惻隱の心なくては生理ほろび、心かたくなに愚にして、羞惡辭讓是非の端もおこらず。たとへば石の頑にして、生氣もなく心もなきが如し。俗語に、物のあはれをしらざるは、木石のごとしといへるが如し。又身のなえしびれたる所は、刀にてつき、火にてやけども、いたみをおぼえざるが如し。仁は、生理なり。あはれみなり。あはれみなくて、物のあはれをしらざる人は、義理もなく、禮もなく、知慧もなきものなり。是惻隱なければ四端なし。惻隱の四端をかねたる所なり。

仁は人の性にして、人々に皆そなはれり。孔子仁を行ふの道をばつねに說き給ふといへど、その理のふかきことは、聞き得る人すくなければ、まれにとき給へり。又一事の善も仁心よりいづといへども、仁の全體は至りて大にして、少しもきずなきを以て、名づくる理なれば、仁を以て人にゆるし給ふことまれなり。顏子の亞聖も三月仁にたがはずとのたまひ、三月ののちは仁あることをゆるし給はず。仲弓、子路、冉求、子貢、公西華などは皆孔門の歷々の高弟なり。されど皆仁をばゆるし給はず。陳文子、令尹子文はその行高しといへど、夫子各その長ずる所をばゆるして、仁をゆるし給

はず。是仁は至て精粹にして、廣大なる道理なればなり。李延平曰、當レ理而無二私心一則仁矣。いふ意は、行ふわざ道理にかなひて、心中に私なきは仁なりとなり。行ふ所理にかなへども、心に私あるは仁にあらず。心に私なきとても、行ふ所理にあたらざれば仁にあらず。内外共にきずなき人は、孔門の賢者といへど得がたければ、孔子の、かるがるしく仁を人にゆるし給はざるゆへ、是なるべし。伯夷叔齊をば、仁を求めて仁を得たりとの給ひ。微子箕子比干をば、既に三仁ありとのたまひて、皆仁をゆるし給ふは其の心私なく、その行ひ理にかなへるゆへなり。

五常訓卷之二終

五常訓卷之三

仁之下

貝原篤信編錄

孔子の弟子顏淵、仁を問ひ給ふ。孔子答へて曰、克レ己復レ禮爲レ仁。己とは身の私欲なり。禮とは身の行ふこと、理にかなひてほどよきをいふ。仁を害するものは身の私欲なり。身の私欲にかちて、身の行ふ所理にかなひて、ほどよきに立ちかへりぬれば、本心の德に害なくして全くなる。全しとはきずなきをいふ。是仁をなす工夫なり。凡私欲はおのが身より出づるものなる故に、己が身にかつは、即私欲にかつなり。禮は元來吾が身に生れつきたる理なれど、私欲にうばゝれてとり失へるを、もとのごとくとりかへして、立ちかへるべしとなり。顏子又、己に克ち禮に復るべき條目を問へり。孔子こたへ給ふ意は、凡人の身に耳目口體あり。

目は見、耳はきゝ、口はいひ、體はうごく。人のわざ多しといへども、この四の事の外にこれなし。この四の事につきて、その心に私欲なくして、禮を以て物を見、物をきゝ、禮を以て口にいひ、體にうごくべし。非禮とは、上にいへる己が身より出づる私欲なり。淫聲邪色などの、外物の非禮にはあらず。非レ禮勿レ視とは身に禮なくして、私欲を以て物を見ることをいましむべしとなり。外の邪なる色見ざるは云ふに及ばず。禮に非ずして勿レ聽とは、身に禮なくして、私欲を以て物をきくことをいましむべしとなり。外の淫聲をきかざるは云ふに及ばず。禮に非ずしていはず、禮に非ずして動かず、この四の者は身の私欲にかちて、天理にかへる工夫の條目にて、即仁をするのことなり。克レ己は人欲にかつなり。復レ禮は天理を存するなり。人欲にかちて、又天理にかへる二の工夫なり。一をかぐべからず。人欲にかちたるのみにて、天理を存せざるは異學のことなり。この問答は孔顔傳授の心法なり。ゆるかせに思ふべからず。學者のつとめ行ふべき所なり。

身の私にかちて、道理に立ちかへるは仁の體なり。人を愛し物を利益するは仁の用なり。禮ありて後、用行はる。故にまづわが身の私にかち、禮にかへるべし。人欲さらず、天理行はれずしては、仁愛の道、人にほどこしがたし。

孟子は仁人心也と說き、學問之道無レ他、求二其放心一而已矣と說き給ふ。求二放心一とは、仁心の外物の欲にひかれて、取失へるをもとめて、もとめ得べしとなり。學問の要は、わが仁心のはなれたるを求め得るより外にこれなし。放心を求むるの工夫は敬にあり。敬とはおそれつゝしみて、この心をまもりたもつ工夫なり、內にある仁心をば、外におしひろめ行ふべし。外物にひかれて、仁心を放ち失へるをば、をさめて內に入るべし。

程子曰、觀㆓天地生㆒物氣象㆒。是、天地の生理のやまざる所、眼前に見えたるをいへり。その氣象は即温和慈愛なり。人にありては、仁なり。又曰、萬物之生意最可㆑觀。言ふ意は、萬物皆生氣なり、是仁なり。中につきて、物のはじめて生ずるは、生意さかんにして、見えやすし。竹の子など、はじめ生ずる時、日夜に長ずること、さかんなるを以て見るべし。枝葉しげれる時は、生意見えがたし。仁の理はじめて惻隱にあらはるゝ時は、この心尤さかんにして見えやすし。ひろく政をおこし、仁をほどこす時にいたりては、その理廣大にして、かへつて見えがたし。又曰、觀㆓鷄雛㆒、此可㆑觀㆑仁。鷄のひよこのはじめて生じて、うごきやまざるも、生意のはじめてさかんなる時、この理よければなり。又曰、切㆑脈最可㆑觀㆑仁。この意は、人の脈の常に發してやまざるは、生意のつねにやまざるなり。又曰、滿腔子是惻隱之心。言ふ意は、人の胸中にみち〳〵たる者は惻隱の心なり。中にみち〳〵てある故に、物にふるれば即仁心おこる。子思孟子の仁は、人なりとのたまふもこの意なり。人の身に、仁の理みち〳〵てこれあるゆへ、仁は人なりといへり。たとへば、人の身には生氣みち〳〵てある故、針にてさしてもいたむが如し。人の心に仁愛の理みち〳〵てあるゆへ、孺子の井に入らんとするを見て、たちまち惻隱の心生ずるは、この故なり。是れを眞心と云ふ。人の本心なり。人欲の私より出づる心は、眞心にあらず、本心をとり失へるなり。

程子又曰、天地生物之理可㆑觀、而不㆑可㆑言、言㆑之者便知㆑道也。天地の物を生ずる理は、眼前にみちて見ゆる所なれば、見るべしといへど、その理はことばにのべがかし。若これをしれる人あらば、即道をしれる人ならんとなり。右の數説は程子のよく仁をしれることばなり。仁をしらずしては、如此言ひかたかるべし。學者心をつけて、此等の説をし

づかに玩味して、天地生物の理を自得すべし。もしこの理を自得せば、仁をしれる人なるべし。しからばその樂、手のまひ、足のふむことをしらざるべし。この理をしらずんば、四書六經詁の文字訓を詳にしり、其上博學多識にして古今に通ずとも、道しらぬ人なるべし。

程子曰、四德之元、猶二五常之仁一、偏言則一事、專言則包二四者一。いふ意は、天の元亨利貞の四德は、元を以てかねたり。元は天の物を生ずる理なり。これを以て亨利貞をつらぬけり。春の生氣を以て夏秋冬をつらぬくが如し。五常の仁も亦たかくの如し。仁を以て義禮智をつらぬけり。天の四德も人の四德も、ひとつ〳〵ならべ、平らかにしていへば、各一事なり。專にとは、すべて云ふなり。すべていへば、元を以て亨利貞をかね、仁を以て義禮智をかぬ。

天地の萬物を生ずるめぐみの心を、わが身に體認して心とし、その善心のはじめておこる所をやしなひそだて、これを害する所の私欲をさりて、火のはじめてもえ出づるをふきおこすがごとく、泉のはじめて流れ出づるをみちびきて、流すが如くにせば、一念の惻隱をおしひろめて、萬民をすくふべし。一念の羞惡をおしひろめて、萬民を正すべし。是をおしひろめみつれば、四海をおさむ。おしひろめざれば、まぢかき父母につかふるにたらず。

程子の言に、聖賢の仁をいへる所をあつめて見ば、仁をしり得んといへり。今の學者仁をしらんとならば、孔孟程朱の仁を說き給へる言を、數年の間心をひそめて、求め味ふべし。急迫にすべからず。誠つみ力久しくば、自然にその理をしるべし。若、しからずば、聰明博學の人といへども、仁をばしりがたかるべし。

虞書に好レ生之德と云ひ、安レ民則惠といへるも、皆

仁なれども未仁の名なし。仁の字書經に見ゆることは、尚書の仲虺之誥にはじめて出づ。曰、克寛に仁克にといへり。その次に伊尹の語に民罔ニ常懐一、懐ニ于有レ仁といへり。孔子にいたりて、專に仁の一字を以て教とし給ふ。孟子も亦孔子の教を發明して、專仁をとき、又仁義をとき給へり。凡仁を專として教へ、仁義をそなへて説き給へるは、是孔孟の家法なり。

いにしへ國家の長久せしは、その君仁なればなり。亡ぼしは、その君不仁なればなり。桀紂以下、歷代不仁の君ほろびざるはなし。堯舜湯武は申すに及ばず、漢の高祖文帝、後漢光武、唐太宗、その餘、歷代の賢君は、皆仁愛ありし故、國家長久せり。凡、國家の興亡身の安危、皆仁と不仁とによれり。貴きも賤しきも仁の道豈つとめざるべけんや。禹湯は己が身をせむ故にさかえたまふ。桀紂は人をせむ、故に亡びたり。己をせむるは仁なり。人をせむるは不仁なり。左傳に、國のおこるは、民を見ることやぶるが如し。其の亡ぶるは民を見ること土芥の如しといへるも、仁不仁のことなるなり。

とりけだものむし魚を、すべて物と云ふ。物をいかすことをこのみ、ころすことをきらふは人の本心なり。されども口腹の欲を以て、物をころすことをこのむは、本心を失へるなり。いのちをおしみ、死をおそるゝこと、物も人と同じ。ころさるゝ時いたみくるしむこと、物も人と同じ。子を愛することも、物も人と同じ。たゞ、物は智なく力なく物いはず。是人とかはれり。こゝを以て人にころされてくらはる。肉食をこのむ者は、小鳥は一食におほきこと十にいたる。はまぐり小えび小魚の類は、一食に數十百にいたる。或はいきながら、やき煮てくらひ、或はいきながらきりわりて食ふ。不仁なりといふべし。仁に志あらん人は物のかなしみをかへりみて、あはれむべし。ころすことを

このむべからず。

禽獸蟲魚は知なし、草木は情なしといへども人と同じく、天地の氣をうけて生ず。禽獸蟲魚の、いのちををしみ、草木のその生をとげんとする理は人と同じ。いかんぞ、みだりに、これをころし、からをきり、根をたつべき。されど五穀をさまたげ、人に害あるをば、ころしきるべき道理なれば、是非に及ばず。又俸養のため人の利益となり、民用を助くれば、やむことを得ずしてこれを用ふ。是義なり。しからずして人間に妨なくば、其生育をとげしむべし。是物を愛するの仁なり。不仁なる人は、わが身の外は、すべて心をかよはさずして情なく、物のあはれをしらず、物をくるしめいたましめ、命をたつことをこのむ、あさまし。

儒者の道、鳥けだものをころすは、不仁なりといふ人あれど、それは道をしらざる人の言なり。君子は故なければ禽獸をころさず。故なくしてみだりにころすは儒者の道にあらず。末世の人のわざなり。是を儒者の道といふべからず。ころすべき理あれば、人をもころして義にあたる。いはんや鳥けだものをや。ころすまじき理あれば、草木をもきらず。禽獸はさらなり。曾子曰、樹木時を以てきり、禽獸時を以てころす。孔子曰、一樹をきり一獸をころすも、その時を以てせざれば不孝なり。是みだりに木をきり物をころすは天地の物をそこなふなり。不孝といふべし。いにしへの人、田はたけに作れる五穀をそこなふ鳥獸をころして、民のために害をのぞき、是を用ひて、宗廟社稷の神をまつり、老をやしなひ、賓客にそなふるため、民の隙を用ひて武事をならはしめ、軍法ををしへんがため、四時の狩をして鳥獸をころせしは理なり。君子の道は只理にしたがふのみ。理にしたがはざれば、おやをすてゝ、他人を愛し、人を愛せずして鳥けだものを愛し、ちかきをすてゝ、遠きをし

たしむは、理にそむきて仁にあらず。君子の人物を愛するは、理一にして分殊なり。君子の心はすべて人倫を愛し、萬物を愛せずと云ふことなし。是理一なり。理一とは、すべて萬物を愛する理は一なり。愛せずと云ふことなきなり。理一は是仁なり。人を愛する内にも、親兄弟妻子親戚朋友臣僕の品あり。是分殊なり。分殊とは、愛する内に其の親しきうとき、高きいやしき、大と小との分によりて、その愛する品に厚薄のかはりあるをいふ。分殊は是義なり。禽獸は愛すべしといへども、時により事により殺すべき義あり。是又分殊なり。されども、是を用ふるに時あり禮ありて、みだりに殺さず。草木をきるにも、時ありてみだりにきらず。いにしへは春夏に草木をきらず。成長する時なればなり。山林に入りて木をきるにも、鳥獸をころすにも時あり。獸の子をとらず、鳥の卵をとらず、胎あるも殺さず、巣をくつがへさず。皆是天道にしたがひ物をあはれむ仁なり。ころすべくしてころすは義にして、仁その中にあり。ころすべくしてころさゞるは、仁に似て義にそむく。まことの仁にあらず。今の人聖學をまなばず、聖道をしらずして、みだりに聖人の法を議すべからず。

此の世にむまれては、高きもいやしきも、皆同じく天地の子にして、同じ人なるに、なかにつきて不幸なる人は、家まどしく、財なくして、つねに衣食ともしく、朝夕うれひくるしめり。且年あしく衣食ともしく、やしなひたらずして、世をわたるよすがなき人多し。わが身幸にしてかゝるくるしみなく、かれは不幸にしてかゝるうれひにしづめり。彼の貧民たとひ疏遠の人なりとも、其のもとをたづぬれば、同じく皆わが兄弟のわびしき人なれば、あにかなしまざらんや。我がともがら、幸に天地の德により、主君のめぐみをうけ、父祖の

恩によりて、たとひ富貴ならねど、世わたること、さほどくるしまざる身ならは、その分にしたがひて、彼のわれにしたしき人、わがしれる人の、世をわたりかねて、うれへにしづめる人をすくはざらんや。もしこれをかなしと思はず、すくふ志なくば、われながら不仁にして、天地の御心にそむきぬること、おそるべきと思ひ、みづからその身をせむべし。わが身のやしなひは、いかなる富貴の人といへど、日に一升の穀をくひ、年に一襲の衣をきるにすぎず。さればわが身の俸養は、さほどゆたかにあづからずして、おほくのつひえをなさずとも、身ひとつを過し、且父母妻子從者をやしなふことも、たりやすかるべし。その餘の財は、さほど多くつみかさねずともありなん。多くをさむれば、必あつくうしなふと、古人のいへるごとく、財を多くつみかさぬれば、かへりてわざはひ出でくる理あり。天のにくみ給ふ所なればなり。

かの世をわたりかねて、うれへくるしめる人に、わがちからにしたがひて、ほどこしたすけば、おに心よからざらんや。是われに天地より生れつきし所の仁を行ひて、天地につかうまつる道なれば、わが職分をつとむるなり。

天地の我に財祿をおほくあたへて、富貴にし給ふは、必我一人のためにあつくめぐみ給ふにはあらず。わが力を以て貧なる者に財をほどこしめぐませんために、われにおほく財祿をあたへ給ふ理なれば、人にほどこさゞるは、天の御心にそむく理なれば、おそるべし。わが財をゝしむべからず。もし天心にそむき、財多くして人に施さゞれば、わざはひ出來るものなり。易に、天道はみつるをかぐといへり。又物みつればかゞともいへり。古語にも、あつまれば散ずとも云ふ。財おほくて人の貧窮をめぐまざれば、みちてかぐるのわざはひあり。おそるべし。又我が采地の民は、我が養ふべきもの

なれば、年凶にして饑饉に及ばゞ、わが身の俸養を倹約にし、費やさずして力にしたがつてすくふべし。一人も餓死せしむることなかれ。民の妻子下人を賣らしめ、父母兄弟離散し、貧窮飢寒にいたらしむること、わが身にかへりみるべし。心をいたましむる至極なり。あはれむべし。凡吝嗇にしては、仁義禮智共に行はれず。殊に仁の道かくるものなり。又吝嗇ならねども、不仁なる人は、人をめぐむことをこのまず、無用の事には財を多くつひやすものなり。

道橋のとほりがたきあやふき所は、ちからあらば修理して、道行く人を心やすく自由に通らしむべし。又途中に人の足をそこなふべきくひいばらなどあらば、除くべし。其の外、かやうの心づかひをすべし。是陰徳にして仁愛の道なり。

人もし富貴にして、いたづらにたからをたくはへ、人にほどこさゞらんは、富貴なる益もなく、思ひ出もなきこととなるべし。古人これを守錢虜といふ。親戚朋友又わが家に出入する者、釆地の農人、わがかどにくる乞丐など、貧窮にくるしめる者あらば、わがちからに随ひて救ふべし。是富貴なるかひありて、たのしみとすべきことなり。

人の世にをるは陰徳をつみ行ふべし。陰徳は、かげのめぐみとよむ。慈愛を心の内にひそかにたもちて、人をすくひたすくるを云ふ。世俗にこれを慈愛といふ。古人の曰、陰徳は耳のなるがごとし。われのみしりて、人しらずといへり。又古語に陰徳ある者は必陽報ありといへり。いふ意は、陰徳ある者は、かげにて善を行へども、必天道に通じて、あらはに天のむくいありて福を得るとなり。

陰徳は富貴なる人のみ行ふべきにあらず。貧賤の人といへど、其の志あれば行はれずといふことなし。いかんとなれば、金銀米錢を多くみだりに人にあたへ、無益の事をなして、たからを多くつひやすを

陰德といふにあらず。たゞわが分限にしたがひ、力の及ぶほど、ほどこしめぐむべし。仁愛に心を用ふれば、たれも成りやすし。せめて、わが身のおごりと欲とに、財と心を用ふる十分が一のちからをつひやさば、そのすくひほどこすことひろかるべし。仁愛ふかくして、久しく陰德をつみ行へる人は、其めぐみをうくる人の、よろこぶのみにあらず。天地神明の御心にかなひ、よろこび給ふ理なれば、必天道のむくいあつく、目に見えぬ鬼神のまもりありて、たび〳〵わざはひをのがれ、子孫もながくさかえたのしむこと、其の理明らかにして、古今和漢ためしすくなからず。何のさいはひか是にしかん。何の祈禱祭祀か是にしかんや。人をすくふ道は多し。うへこゞえする人をたすけ、鰥寡孤獨のより所なき者をめぐみ、乞丐の人にほどこし、人の困窮をたすけ、もし位あらば善人をすゝめ、惡人をしりぞけ、才能を取あげ、人の害を除き、人の利をおこし、ひろく民をすくひたすくべし。位なくとも、人をあはれむ心は同じかるべし。人の財をつひやさず。人に苦勞をなさしめず。人の財をかりては、わが身を儉約にして、必早く返して人をくるしめず。老人病人をいたはり、かたわなる人をあはれみ、人の才能をねたまず、ほめすゝめみだりに人をそしらず。人に善をすゝめ、惡をいましめ、人ををしへてうまず。下部をあはれみ、風雨寒暑に人をくるしめず。人のしへたげられたるをことわり、人のうらみいきどほりをとき、力あらば道橋を修理して、往來のなやみなからしめ、又は禽獸蟲魚をみだりにころさず。草木をも、時ならざれば、みだりにきらず。凡かやうのことを陰德と云ふ。是人をあはれみ、物をめぐみて、天道につかへ奉る道なり。陰德を行ひ、久しきをつめは、必其のむくいを求めざれども、後日に必天道のめぐみありて、しば〳〵わざはひをのがれ、福

善をまし、その家をさかんにして子孫にさいはひあり。是亦天道の善にさいはひし給ふ常理にして、古今和漢のしるし多きこと、あげてかぞへがたし、うたがふ可らず。貧賤の人すら、陰徳を行へば、そのむくいかくのごとし。いはんや一郡一郷を領し、或はつかさくらゐ高き人は、下をやすんじ民を養ふを以て職分とすること、是天より命じ給ふ所なり。常に心を用ひて天意にしたがひ、民をあはれみ、困苦をすくひ、政をおこし、仁をほどこさば、その功大にして天道のむくいも亦限りなかるべし。富貴の人多くは陰徳の行ふべきことをしらず、勢に乘じて下のくるしみをかへり見ず、人のつひえをいとはず、わが身ひとつの榮花をきはむれば、陰徳なくして、天地のいかり、人民のうらみ、つもりて後は、わざはひ出來、子孫にもむくゆるものなり。天道はまことにおそるべきかな。又陰徳をば行はずして、鬼神にへつらひいのりて、さいはひをもとめ、わざはひをのがれんとして、無益のことをなし、民をくるしめて、財をつひやす、是をたのんで、わざはひを免かれんとせば、天地神明の御心にそむきて、かへりてわざはひあり。佛家にて是を業福といふ。佛道においても甚きらふ所なり。佛道よりいはゞ、佛は慈悲を專にすといへば、かゝる民のくるしみとなることは佛意にかなふべからず。故に羅祕が路史と云ふ書に、佛專さかんなれば天譴を招くといへり。いふ意は、佛事結構すぎて過分の財をつひやしてやまざれば、民のわざはひとなりて、必天のせめありといへり。古もそのためし多し。梁の武帝、伽藍を多くたて佛事を盛にせられしを達磨に問はれしに、無功徳とこたふ。武帝は、つひに臣下のために臺城におしこめられ餓死せらる。かゝることを以て、佛事さかんに過ぐるは天の譴あり。又、佛意にもかなはずと云ふことをしるべし。又むくいにあはれ

ため、さいはひを求めて善を行ふは、是利欲の心よりいでたり、陰徳にあらず。悪を行ふよりまされりといへども、誠の善にあらず。同じくちからを用ふることなるに、誠の心より善を行ふべし。いつはりを以てするも、苦労は同じことにて、いたづらごとなり。

人は、たかきいやしき、只つねに仁心を存して、日日に人に利益あることを行ふべし。忿をこらへ、慾をおさへて、日々善行をなすべし。いかりと慾をこらへざれば、善を行ひがたし。只、いかりをおさへ、慾をこらふる人、善をよく行ふ。わが身を利して、人に損あることを行ふべからず。我ちからにしたがひて人をすくふべし。仁心をだにたもちなば、日々に善行多かるべし。少しは財をつひやし、少しは心をつかひ、少しはひまをつひやしても、人の利益になることを行ふべし。人のために益あることをせずして、わが身に利あることのみするは小人の心なり。日々善にならへば、善心日々にさかんになる。日々悪にならへば、悪心日々にさかんになる。善にならへば、日々にたのしみ、悪にならへば、日々に苦しむ。善悪共にならひによれり。されども悪にはおもむきやすし、故におそるべし。善にはすゝみがたし、故につとむべし。

およそ人精力をつひやす者、時にあたりてはその損をしらざれども、時ありて盡きぬ。精力をやしなふものは、時にあたりてはその益を見ざれども、時ありてさかんなり。人の善悪を行ふも亦かくの如し。徳をつみ行をかさぬれば、當時はその福をしらざれども、時ありて世に用ひらる。義をすて理にそむくは、當時はその禍をしらざれども、時ありて亡ぶ。易に積善の家には必餘慶あり。積不善の家には必餘殃ありといへるは、この意なり。善は積みかさねて後來るゆへ、善を行ふ志はをこたるべ

からず。小善なりとも行ふべし。悪はつもれば必わざはひとなる。故に小悪なりとも行ふべからず。おそるべし。

尚書曰、天道は善にさいはひし、淫にわざはひす。又曰、善をなせばこれに百の祥をくだし、不善をなせばこれに百の殃をくだす。又老子曰、天道好還、是皆天道の善をこのみ、悪をにくみ給ひて、善人にさいはひし、悪人にわざはひして、善悪のむくゐをかへし給ふ理をいへり。この理古今和漢その證多ければ、必うたがふべからず。愚者はこの理をしらで天道をおそれず、只眼前の利をむさぼりて、後のわざはひをしらず。豈たゞ義理にくらきのみならんや。わが身の禍福損得をもわきまへず、かなしむべし。不仁の至りなり。

孟子曰、不仁者はともにいふべからず。いふ心は、不仁者は道理をしへ、いさめがたしとなり。又曰、そのあやふきことをやすんじ、そのほろぶるゆゑんをたのしむ。いふ意は、不仁者はわが身のあやふきことをおそれずしてやすんじ、其身のほろぶることを行ひてたのしみとす。おろかなりと云ふべし。

孟子曰、人皆有不忍人之心。忍ぶとは、こらふるをいふ。かんにんするなり。人たる者、必皆人に對して堪忍ならざる心あり。いふ意は、人のうれへくるしめることを見ては、わが心かなしみて、こらへがたくして、せうしがり、うれひかなしむ、是人に忍びざるの心なり。即仁心なり。この心人皆これあり。孺子の井に入んとするを見て、おどろきかなしむ心是なり。この心をおしひろめ行ふは仁をする道なり。人のきらひいやがることを、このかたよりしかけて、何とも思はずしてかんにんし、とがなき人をしへたげくるしめて、何とも思はずしてかんにんする、是皆人に忍ぶるの心なり。とにかくに心つよくして、人のうれへをかなしま

ざるをいふ。是人の本心にあらず。うれへくるしみを見て、忍びがたきは人にかぎらず、とりけだもの草木まで、そこなひくるしむるに、こらへがたきは、即仁心なり。しかるに只人にしのびざるの心ありとのたまへるは、萬物皆わが一體にして愛すべけれど、中について人においては、同胞なればそのあはれみ尤せつなる故に、とりわき人に忍びざるの心ありとのたまふ。人のうれへくるしみを見ながら、何とも思はで忍ぶは、心つよき人と云ふべし。その心のつよきといふは、即人に忍ぶる心なり。是不仁の別名なり。

仁者は人我のへだてなし。我身を立つるを半とし、人を立つるを半とす。他人すらへだつ可らず。いはんや一家の親戚をや。況父母兄弟をや。この心をもて人倫にまじはらば、人我の私すくなくなりて、克伐怨欲の人を害し、我を利せんとする心やうやくうすく成りて、仁愛の道行はれなん。人もしこの心において、人我の偏執ふかく、只己を利して人をめぐむに心なきは、たとひ無學の人といふとも、そのむまれつきたる天性の良智にも、かほどの理は知りぬべければ、などその本心にそむきて、かゝるさがなきことわざをばしぬるや。況學者は猶そのつみ、ことさらおもきことにこそあれ。

子曰、仁遠乎哉、我欲レ仁斯仁至矣。仁は人の心なり。なんぞ遠きにあらんや。われにある故に、このんで求むれば、即得やすし。是仁至るなり。

張子の西銘の意は、仁人の天につかふまつる道をいへり。天を父と稱し、地を母と稱し、人は其めぐみによりて生る。天地の氣をとりて、わが身體とし、天地の理をうけて、わが本性とす。故に人は天地の子なり。天下にあらゆる民は、われと同しく天地の子なれば、皆我が兄弟なれば、尤愛すべきこと云ふに及ばず。鳥獸草木などの萬物は、わが

類にはあらざれども、同じく天地の氣をうけたればわがともがらなり。是亦あはれむべし。みだりにそこなふべからず。大君はわが嫡兄なり。大臣は嫡兄の家相なり。老人をうやまふはわが兄をうやまふなり。いとけなきをいつくしむはわが弟を愛するなり。凡天下の病者、かたわ、子なき老人、父なきみなし子、やもめなどの貧窮にしてたよりなきものは、皆わが兄弟の内にて不幸なる人なり。とりわきあはれむべし。人たる者は、天の子にして、天下の人は皆わが兄弟なるとかくのごとし。故におよそ人となる者は天地につかへて、おそれつゝしみ、天地の道にしたがひ行はずんばあるべからず。人の子として親に孝するがごとくなるべし。天理にそむくは、子として父母にそむく悖徳の子の如し。仁を害するは天のため賊子なり。賊子とは親のあだかたきとなる子を云ふ。天につかふる道をつくして、天心にかなへる人は、子として舜のごとき大孝の人なり。天災にあひて難儀に及ぶといへども、つゝしみて天命をおそれしたがひ、天をうらみざるは、人の子としては、申生が繼母の讒にあひて、父獻公より殺されしかど、父母をうらみざるが如し。天よりうけたる所の五常の性を、全くたもち行ひてかゝざるは、たとへば曾子の父母にうけたる身體を、そこなひやぶらざるが如し。天よりわれを富貴にし給ふは、父母の我を愛するが如し。天恩をよろこんでわするべからず。天より我を貧賤にして憂あらしむるは、天の我をにくみ給ふにはあらず。わが身に艱難を見せしめて、わが徳行を成就せしめんためなれば、天をうらむべからず。おやにつかふる孝子は、その身いける間は、親にそむかずしたがひつかふ。死ぬれば心やすんじて、おやにはづることなきがごとく、天につかふる人も、いける間は天道にしたがひてつかへ奉るが人となれる道なり。死ぬれば

心やすくして、天にはづる所なかるべし。是いはゆる朝に道をきいて、夕に死すとも可なりの意なり。凡西の銘の意は、はじめより半まで、人は天の子にして、天地萬物皆わが一體なることをとけり。半より後は天地につかへて、仁を行ふ道をいへり。尤よく見てその理を自得すべし。

同じ事をかさねてしば〳〵いふこと、老のくりことのやうにて、見きく人いとひきらひ給ふべけれと、仁の理いたりて大なれば、わが愚にして、一たびにたやすく理のきこゆるほどときがたければ、いかにもして、この書を見る人に古人のいたれる敎をさとらしめんために、愚忠をつくして、かへすかへすいふのみ。

五常訓卷之三終

五常訓卷之四

貝原篤信編錄

義

中庸曰、義者宜也。尊レ賢爲レ大。朱子章句云、宜者分ニ別事理一各有レ所レ宜也。周子も、宜曰レ義。釋名曰、義者宜也。裁ニ制事物一使レ合レ宜也。諸說皆宜しきを以て義とす。宜しきとは萬事萬物の品にしたがひ、その理をわきまへて相應するを云ふ。朱子は、義者心之制、事之宜といへり。制とはたちわかつ意、裁判するなり。心の制とは心中に善惡をわかつ所の理あるを云ふ。義の心にあるは利刀の如し。物來れば刀を以てたてば二つとなる。善惡を決斷することかくの如し。是心の制なり。義の體とす。事之宜とは、諸事に相應して、その理の宜しきにしたがふを云ふ。是義の用とす。事之宜は心の制ありて、後のこと

なり。人を愛するは仁なり。父母兄弟妻子親戚朋友賓客の親疎貴賤の品にしたがひ、その相應に愛するは宜なり。是を義といふ。人を愛するは仁なりとて、おやも他人も一やうに愛するは宜にあらず。是墨子が兼愛なり。宜とはその物、その事に相應するをいふ。たとへば夏はかたびらをき、冬はわた入の小袖をきるが如し。宜しきに品多し。人の位により、わが位により、時により、處により、年の老幼により、その外萬事萬物に付きて相應あり。是宜なり。宜にかなふは即義なり。朱子、又義者斷制裁制之道理といへり。斷制裁制は、たちわかつの意。是仁の温和慈愛に對していへり。事物にのぞめば、その善惡をたちわかつこと、たとへば利刀を以て物を二にさくが如し。仁は春夏の氣ののどけく、やはらかにして萬物を生長せしむるが如し。義は秋冬の氣のひやゝかにはげしくして、物をからし、しぼむるがごとし。中庸に、義者宜也。尊レ賢爲レ大。とは、上に、仁者人也。親レ親爲レ大。といへるに對せり。仁はあまねく人を愛する理なり。義は愛すべき人を各その品にしたがひて愛し、又敬ふべき人をうやまふ理なり。その中につきて賢人を尊とぶは、尤義の大なるなり。いかんとなれば、多くの人の内にて人をえらびわきまへて、賢人をたつとぶは、その人に相應したることなり。是宜なり。賢をたつとびて大賢は師とし、小賢は友とすれば、その教へいさめをうけ、わが智ひらけ、萬の道理明らかになり。わが身のわざ道理にかなふ故に、賢をたつとぶほど大に宜しきことはなきなり。孟子も、仁は人の心なり。義は人の路なりとのたまへり。仁は人の心とする所生理なり。義は人の行べき路とする所、道理なり。仁なければ人心をうしなへるなり。義なければ人道をうしなへるなり。凡義はつねに居ては理にしたがひ、欲にしたがはず。變に居ては節を守りて利に走ら

ず。艱難にのぞみては、君上のため身をすてゝ忠を行ふ義なければ、常に居ては理の宜しきをすてて、只利のためにし、變にのぞみては恩をわすれ徳にそむき、利につき、害をのがれ、命ををしみ死をおそれ、君父をすてゝ、敵にくだり、つたなきふるまひしてもはぢず、禽獸にひとしきわざなり。皆是義を失ふなり。

仁は温和慈愛なるを云ひ、義は斷制なれば、善惡を二にわかちて、善をこのみ、惡をにくむを云ふ。ひろく衆を愛するは仁なり。小人を遠ざけ、君子に近づくは義なり。財を人にほどこすは仁なり。あたふべきか、あたへまじきかをはかりて、あたふべきものにあたふるは義なり。こゝを以て仁は理一なり。義は分殊なり。仁はひろく人を愛す。是理一なり。義は人を愛するに親疎貴賤貧富をわかちて、その宜しきにしたがひて、各その分にかなふは分殊なり。

尙書に、以レ禮制レ心。以レ義制レ事。といへり。禮は敬のみ。敬して、心の私曲を制するなり。義を以て事を制すとは、萬事を行ふにその事に宜しく制するなり。制すとは、たとへば長きをたちてよきほどにし、多きをへらしてよき程にするが如し。物を裁判してよきやうにするを云ふ。是仁をたすくるなり。一年の功も春夏生長するは仁なり。秋冬收藏するは義なり。收藏とは、草木零落し、生氣おさまりて根にかへるを云ふ。仁ありて義なければ、たとへば春夏の生長するばかりにて、秋冬の收藏なければ、萬物成就せざるが如し。子をそだつる一事を以ていはゞ、子を愛するは仁なり。子の惡を戒しむるは義なり。愛せざれば、恩なくして他人のごとし。愛のみにていましめざれば、その子不義にながれ、惡におち入りて、わざはひとなる故、姑息して愛するが、かへりてあだとなりて、眞の愛にあらず。君を愛するは仁なり。君にあやまちあ

れば、いさめ、君のために身をわするゝは義なり。君として、下を愛するは仁なり。臣の惡をいましめ、臣下の才德の高下と、貴賤の位にしたがひて各相應につかふは義なり。又人民を愛し養ふは仁なり。法をたて罪あるを刑して、いましむるは義なり。愛せざれば人民安すからずして、生養をとげず。いましめざれば惡人こりず人を妨ぐる故、仁愛の道行はれず。惡人をいましむるも人をたすけんとの心なれば、義も仁よりいづ。人を愛するは仁なり。善人を愛し、惡人を罰するは義なり。文道を以て、人民を愛しなづくるは仁なり。武道を以て、人をおどし、敵をうち、亂をしづむるは義なり。文武の道も卽仁義より出づ。凡此等の理を以て、おして仁義のわかちをしるべし。仁義は、もと一理にしてわかれたり。一をかぐべからず。人道は只仁義の二にあり。故に聖人易において、人の道をたてゝ、仁義と云ふとのたまへり。二の者そなはりて人道たつ。人の禽獸にかはれるは、只仁義あるによれり。人は萬物の靈と稱し、天地の性は人を貴しとし、萬物にすぐれたれば、わが身ながらもたふときは、是仁義の性ある故なり。もし仁義をすてゝ行はずんば、なんぞ貴ぶにたらんや。孟子の梁惠王に對して　利をおさへて、仁義を說き給ふは、仁なれば心に私欲なくして、人を愛する故に、人をそこなひてわが身を利することはせず。義なれば人にとると、人にあたふると、必宜しきにかなふ故、とるまじき物をとりて、わが身ひとりを利することをばせず。利は仁義のうらなり。わが身に私して人をかへりみず、わが身を利すれば必人を害す。そのはては、必わが身のわざはひとなる。義を行へば利を求めずして、利おのづからあり。故に利を以て利とせず、義を以て利とせざれども、利を得んために義を行ふは眞の義にあらず。

董仲舒曰、仁人正㆓其義㆒不㆑謀㆓其利㆒明㆓其道㆒不㆑計㆓其功㆒。利とは義を行ふ自然のしるしなり。故に利者義之和也といへり。君につかふるを以ていはゞ、朝夕つゝしんで君によくつかふれば、君もよろこびて我を愛し給ふ。是義の和する所、利なり。君子の君につかへて義を行ふは、只一すぢに君のためにして、私のためにせず、君の寵愛をねがふ心あるべからず。是義を正して利をはからざるなり。君につかふるにかぎらず、萬のこと皆かくのごとし。すこしも、わがためにする心あるは利なり。義にあらず。この利はみだりに財祿をむさぼるごとくなる利欲にはあらず。仁人のことなれば利欲は云ふに及ばず、義を行ひておのづから來る自然のしるしを云ふ。その自然のしるしを得んと思ふは利なり。張南軒、義と利とをといて曰、義は爲にする所なくして爲るなり。利は有㆑所㆑爲而爲㆑之也。いふ意は、義は只我がすべき道なればするなり。

名聞利養か何ぞわが身の爲にするにはあらず。もし名聞利祿私愛のためにするは義にあらず。是利なり。董子の言、まことに至れるかな。張南軒の說も亦道理分明なり。共に諸子にすぐれたり。君子の道は萬事の行皆義理に志して、我が身のためにはからず。是君子の心とする所、小人のことなる所なり。たとひ天下に公なる善事を行ふとも、心にわが爲にする私あらば、是義に非ず利なり。小人の身に善行なくして、心ひとへに利をむさぼりて、義をすつるは言ふにあたらず。たとひ人ありて身に行ふこと善なれど、その心に露ほどもわが利をはかりねがふ所ありて行はゞ、鄕里のほまれある人といへども義にあらず。この所は君子の心術の上にてくはしき論なり。小人の上の沙汰にはあらず。たとへば潔白なる物に一點の墨を付くれば、白と云ひがたきがごとし。天理人欲同㆑行異㆑情と、胡五峯いへり。天理は義なり。人欲は利なり。

義も利も身の行ひは善なれば、同じことなれど、心底に公と私とのかはりあり。是同レ行異レ情なり。是亦義利の分ちなり。又覇王の辨もこゝにあり。いにしへの聖人、仁義を行ひて民をなづけ給へば、國天下の民自よろこんでまことに歸服す。是誠の道を以て民ををさむるなり。是を王道と云ふ。堯舜禹湯文武などの行ひ給ひし道是なり。又仁義の德はなけれど、仁義の名をかりて善を行ひ、民を服し、亂をしづめて、國天下を得んと思ふ。是行ふ所は善にして王道に似たれども、內心には國土を得んと思へる利欲ありて、僞りて仁義を行へるなり。是を覇道と云ふ。齊の桓公、晉の文公などの行へるわざなり。是亦義と利とのわかちなり。學者のなす所も是に同じ。孔子曰、古之學者爲レ己。是ひとへに身ををさめん爲にせし學問にて義なり。又曰、今之學者爲レ人。是人にほめられ、名を得んためにする學問なれば利なり。しかれば王伯のわかちも、君子小人の分も、學問の實否も、皆義と利との二つよりわかる。

子路問へり。君子は勇をたふとぶやと。子路は勇をこのむ人なれば、かくは問へり。孔子こたへて曰、君子は義をたふとぶ。位ある君子、もし勇のみありて義なければ、その力にまかせて反逆をなし、亂をおこす。位なくいやしき小人、もし勇のみにして義なければ、その力あるをたのみて盜賊をなす。凡勇は氣にちからありて、人をおそれざるを云ふ。力をたのみて義なければ、かくのごとし。義は事の主なり。義を以て事を行へばその事正し。義なくして事を行へばその事皆邪なり。勇はまことに善をなすべき力なり。義を以て勇を行へばその勇貴ぶべし。治世にはその力を以て善をなし、亂世にはその力を以て武を行ひ、敵をうち亂をしづむ。是皆義を以て勇を行ふ德なり。まことに貴ぶべし。もし義なくして勇を用ふれば、かへりて道にそむ

き物を害す。たとへば刀を以て敵をきり、悪人をころすは義なり。刀を以てつみなき人をきるは暴悪と狂亂となり。

見レ善則遷。有レ過則改。この二句、易の益の卦の文なり。わが行ふ處あしからざれども、人のいふこと、人の行ふ所、わが行ふ所よりまさりて善なるを見ば、即わが行へることをばすてゝ、すこしなりともまされるかたにうつるべし。是を善を見て則うつると云ふ。いまだよきことゝしらずば、すべきやうなし。すでにすべき義として行はざるは、ちからもなきことなり。是義を見てせざるは勇なきなり。過あれば則改むとは、わが行あやまりあらば即時に早く改むべし。猶豫してわがひがことをかざり、改むるにはゞかることなかれ。義を見てうつるはその工夫かろくしてやすし。過を改むるはその工夫おもくしてかたし。十分にちからを用ふべし。たとへばうす白き物を潔白にするはやすし。黒き物を白くすることはかたきがごとし。この二は即義にうつる道なり。是學問の道のつとむべき所、力行の要なり。

見レ利思レ義。利は一切のわが身のたよりよきことなり。財祿にかぎらず。財祿を得るも亦その中にあり。わが身のためたよりよく、或はたからを得、祿を得ることありとも、得べきか得べからざるか、只義のある所をおもふべし。利をむさぼりて義をわするべからず。義と利とは、善と惡と君子と小人とのわかるゝ所なり。義とは天理の公なり。利は人欲の私なり。專らわが身のためよきやうにするは利なり。わが身を利せんとすれば必人に害あり。是惡なり。人に害あれば必わがわざはいとなる。人を利するは是義なり。義あれば道理と和する故、利を求めずして自利はその內にあり。されども利を得んため義を行ふは私意なり。君子のする所にあらず。

子曰、君子之於二天下一也。無レ適也。無レ莫也。義之與比。君子は天下一切のことにおいて、專に主としてすべきこともなく、又すべからざることもなし。是萬のこと善惡一定せず、只時の宜しき道にしたがふべし。一事を以ていはゞ、世に出でゝ必仕ふるを專にせず。是、無レ適なり。つかへまじき時はつかへずして世をのがるべし。又必仕へざるを以てむねとせず。是無レ莫なり。つかふべき時はつかへて、道を行ふべし。然ればつかふるもつかへざるも、只義とゝもにしたがふべし。つかへてよろしき時はつかへ、つかふまじき時はつかへず。是義にしたがふなり。たとへば道をゆくにはやきがよしといふは適なり。はやきをあしゝとするは莫なり。はやく行きてよき時ははやく、しづかに行きてよき時はしづかなるは、義とゝもにしたがふなり。人に物をあたへんと定むるは適なり。あたへまじきと定むるは莫なり。あたふべき時はあたへ、あたふまじき時はあたへず。是義とともにしたがふなり。萬のこと皆是を以ておしてしるべし。義は事の主なり。萬事の善惡一定せず、只義にまかせて行ふべし。是善なり。

禮運曰、何をか人義と云ふ。父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者これを人義と云ふ。仁は人を愛する德なり。人を愛する中について、各その人によりて相宜しき道あり。是義なり。父は子をいつくしみ、子はおやに孝を行ひ、兄は弟によく、弟は兄にしたがひ、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひ、君は臣に仁あり、臣は君に忠ある、この十の者は人の義なり。義は各々その人に相應して宜しきなり。是人倫の道にして、宜しく行ふべき道なり。故に人義と云ふ。

見レ危致レ命。見レ得思レ義。論語子張之語也。人の危難なるを見てはわが命ををしまず、君父のためには身

をすつるは言ふに及ばず、朋友といへども時宜によるべし。或は朋友と相ともなひて道をゆく時、不意に敵する者ありて朋友を殺さんとす、たとひわが老父母ありとも、その所を退き去りて身をのがるべき義にあらず。身をすて敵をふせぎて友を助くべし。是危きを見て命を致すなり。この時もし、われ父母ありといひてにげさらば義にあらず。いまだ事なきつねの時に、かねて朋友にわが身をゆるしあたふるは義にあらず。不孝と云ふべし。時にあたり危きを見て、命をすつるは義なり。不孝にあらず。凡義をすてゝ行はざれば、死ぬべき節義にあたりても身をのがれ、かひなき命いきてはぢを世々につたふ。かくあらんよりは、義を行ひて死して榮名を世にのこさんこそ、なきあとまでの面目ならめ。見レ得思レ義とは、財と祿とを得るに、みだりに利をむさぼりて得まじき物をとるは義にあらず。この物わが得べき義か、得べからざる義かと、みづから思案して義にあたらば得べし。義に害あらば得べからず。もし得べからざる義ならば、萬鍾の祿は云ふに及ばず、一介といへども人にとるべからず。もしとるべき義にあらば、舜の堯の天下を得たまふも不義なりとすべからず。得べからざる義にあたりても、わが得るかたに心ひかれて、得ても義に害なしと思ふは、私欲にひかれて是非の心まよひくらきなり。

義は天理の公なり。利は人欲の私なり。二の者は各別のことにて、雪と墨との如し。然れども義を專にして、わが身に私せず、人のため宜しくすれば利を求めざれども、おのづからわがためよからずと云ふことなし。故に易にも、利者義之和也と云ふ。大學に、國は利を以て利とせず、義を以て利とすといへり。利慾をほしいまゝにして、わが身ひとつを利せんとすれば、必人に害ありてわが身のわざはひとなる。古語にも、さいはひは禍のか

くるゝ所といへり。愚者はこの理にくらくして、只われ一人のためによからんことをはかれども、是即わが身の害となる。眼前の利をはかりて、後來のわざはひをしらず。

子曰、君子義以爲レ質。禮以行レ之。遜以出レ之。信以成レ之君子哉。いふ意は、君子の事を行ふ具、義を以て、した地とすべし。義は事を制する本なればなり。萬のことを行ふに、まづ、義か不義かをかへりみるべし。義にあらずんば、行ふべからず。義に合はゞ、行ふべし。その上は、禮を以て、すべよく行ひ、これ義を以て、したぢとするなり。その上は、禮を以て、すべよく行ひ、遜を以て、へりくだりて、人にたかぶらず。信を以て、始終眞實に行ふべし。これ君子の行なり。これども義なければ、その事の主なし。故に、禮遜信の三つそなはりても、非義なれば、見るにたらず。尙書に、以レ義制レ事、といへるも、この意なり。

禮

禮は心につゝしみありて人をうらやまふを本とし、萬事を行ふに則にしたがひて正しく理あるを文とす。則とは作法なり。孝經に、禮敬而已矣。言ふ意は、禮は敬を專とす而已とは、この外にはなしと云ふ詞なり。朱子曰、禮の本は在二于敬一レ人。人をうやまふは心のつゝしみよりおこる。人をうやまふもその人をあはれむ心より出づる故、朱子も、禮は仁のあらはれたるなりといへり。禮記曰、禮は理也。周子曰、理曰禮。理はすぢめなり。すぢめとは萬事を行ふに各正しき則ありて、その則にちがはざるは即理なり。理にしたがへば萬事正しくしてをさまる。理にしたがはざれば萬事邪にして、みだれて行はれず。朱子曰、禮は天理の節文、人事の儀則なり。天理は自然に定まりて、かくのごとくなるべき道理なり。節文は過不及なきよき

ほどなるを言ふ。節は過ぎざるなり。文は不及なきなり。うやまひ過ぎは節にあらず。うやまひたらざるは文にあらず。かざり過るは節にあらず。いやしくしてふつゝかなるは文にあらず。是皆理にたがひて禮にあらず。萬事の節文皆かくのごとし。人事の儀則とは、人の行ふわざの行儀にあらはられたる作法なり。視聽言動の四の身のわざも萬事の制行も、よきほどなる自然の法あり。是人事の儀則なり。中庸には、親ㇾ親之殺、尊ㇾ賢之等、禮所ㇾ生也といへり。言ふ意は、親類をしたしむは仁なり。その內に父子兄弟諸父從兄弟などの品あり。その親疎尊卑の次第同じからざる是親ㇾ之之殺也。賢を尊ぶは義なり。人に大賢あり小賢あり、才能ある人あり舊識恩德ある人あり。その內に大小高下の品あり。是尊ㇾ賢之等也。親類の品に應じてしたしみ、大賢小賢の品によりてうやまふは是即禮の生ずる所なり。しかれば禮は仁義を行ふに、各その品にしたがひて、程よきをいへり。

威儀をつゝしみ、衣冠を正しくし、視ることと聽くことと言ふことと動くこととの四事につきて、各過不及なくよき程の法あり。又おやにつかへ君につかふるに各さだまれる法あり。兄弟夫婦に對し、賓客にまじはり、臣下に對し、民をつかひ、先祖鬼神をまつるも法あり。是禮は皆天理のよきほどなる節文にして、人事の定まれる作法なり。仁義皆理なりといへども、とりわき禮を理といへるに子細あり。理とは行ふべきすぢめなり。萬事を行ふに皆定まりたる作法あり。是人の行ふべきすぢめなり。是即禮なり。こゝを以て、聖人のとき給へる禮の字は理の字にあたれり。されども理といはずして禮といへるに子細あり。理といへば、かたちとわざにあらはれたる迹なくして虛なり。故に取守しがたし。禮は理の品節文章とて、人のわざにしな〴〵あり、よきほどありて、その理あらはれ見え、形

をなして實なり。故に取守るべし。是を以ての故に禮といひて、理といひ給はず。釋名曰、禮は體也。言レ得二事之體一也。この意は、禮とはかたちなり。禮は心に本づけども、あらはるゝ所は事の上に見えたるかたちを云ふ。人の行義作法の正しく、三千三百のわざにあらはれて、法の正しきが禮なり。是皆かたちありて目に見ゆる所なれば、禮なりといふ。ことにあらはれずして、かたちなくんば禮にあらず。しかれども又かたちの上にかゝはりて、心上に誠敬なくば文のみにて本なし。禮にあらず。只敬を本として、外に行ふに文あるは禮なり。

人に血氣あり。身に耳目口體の欲あり。心に喜怒哀の情あり。もし禮を以てこれを節せざれば、人欲にしたがひ、天理をうしなひて、人事亂れ人道すたる。こゝを以て聖人禮を以て教とし、彼の血氣よりおこる情慾をふせぎたまふ。

曲禮曰毋レ不レ敬。凡人事の視聽言動より出づる所、萬事敬しまざることなかるべし。敬とは心に道にたがはんことをおそれて、ほしいまゝならざるを云ふ。是心をたもち、身をおさめ、事を行ふ則なり。是禮の本なり。いにしへより聖人賢人の心法は、敬を以て要とし給ふ。凡身の行儀作法なく、道を失ひ禍おこるも、皆敬しまざるによれり。古語にも、敬しめば禍にかつといへり。つゝしめばわざはひなし。白樂天が言に、福與レ禍在二乎愼與一レ不レ愼といへり。

凡禮あるを以て人とす。若禮なければ人の法すたり、鳥獸に同じくなりて人道たゝず。禮なきの至をいはゞ父にあひていかりのり、母に帚をとらせて立ちて誶語し、君の過惡をそしりあらはし、兄と財をあらそひうばひ、東家のかきをこえて處女をひくの類、皆是禽獸の行なり。人倫の法にあらず。禮の初は聖人の心になきことを作り出して、おしへ

給ふにあらず。生れつきたる人情に本づきて、過不及なきよきほどなる理をおしへ給ふなり。人の身に飢渇内に生じ、寒暑外にふるゝ故、飲食衣服せざることあたはず。飲食をよきほどにし、衣服を正しくするは禮なり。うゑかつえするとて、みだりにおほくのみくひ、人にゆづりなく、あらそひ食ふは禽獸の行ひなり。わが身に應ぜざる衣服をきるは、上ををかし、下にせまり、或はみだりなる服食を用ふれば身に相應せず。又男女の色も心にまかせぬれば、淫亂にいたるゆへに、夫婦の別、男女の間を正しくす。君臣父子凡人倫の交、その理にかなひて、よきほどに愛しうやまふ法あり。これ皆禮なり。禮なければ君臣上下尊卑貴賤長幼男女のわかちなく、師弟子朋友賓客のまじはりうすし。葬祭の禮なければ、死を送り神に仕ふるの道なし。故に禮は聖人人情に本づきて、敎を立て給ふ。人の身禮あればやすく禮なければあやふし。人の身にさしあたり用ふべきこと、是より急なるはなし。故に古語に、禮は人之急なりといへる、誠なるかな。人たる者禮を行はずんばあるべからず。

禮儀三百威儀三千とて、およそ人の行ふべき大禮三百條、小禮三千條あり。是はその大概をあげていへり。必三百三千に限るべからず。皆是つゝしみうやまふ心よりいで、天理の程よき所にして、人事のしかるべき作法なり。つゝしみうやまふ心は、禮の本なり。三百三千の品は禮の文なり。文とは外のあやなり。本なければ禮たゝず。文なければ禮おこなはれず。故に禮は本をおもんず。文も亦そなはらずんばあるべからず。

君子は耳に非禮の音樂淫聲をきかず。目に非禮なる見物を見ず。口に非禮の事をいはず。身に非禮のうごきをなさず。飲食を愼しみ節にして過さず。皆是禮の制する所なり。

口の過なきより身の過なきはかたく、身の過なきより心の過なきことはかたし。三のもの、ともに禮を以て正さずんばあるべからず。

威儀を正しくすとは、身の形儀をつゝしむなり。是禮のおもんずる所なり。外の形儀みだりなれば、内心もともに不敬になる。敬は心にあるのみならず、内外ともに正しくすべし。坐する時、立つ時、行く時、臥す時、皆禮ありてをこたるべからず。耳をかたぶけて人の密事をきくことなかれ。ながしめに人を見ることなかれ。其勞するにあらずんば、我家にありても、をこたりてみだりに臥すことなかれ。立つにかたし立すべからず。坐して兩足をのぶべからず。かたぬぐことなかれ。人の密事をうかゞはず。たはぶれの顔色をすべからず。

朝ははやくおきて事をつとむべし。古語に、一日の計は朝にありといへり。朝よりをこたれば一日のつとめはかゆかず。故に朝おくることの遲速を見て、その人の家の興ると衰ふるとをしるべしと、古人もいへり。夜も學問家業をつとむべし。夜は氣靜なる故、事功尤はかゆくものなり。つとめてやまず、君子の人にまさるゆゑんなり。をこたりてつとめず、衆人の、君子に及ばざるゆゑんなり。士のみならず、農工商も同じ。よくつとめてをこたらざれば必家をおこす。或人うたがふ、君子如此につとにおき夜半にいねて、をこたらずんば、おそらくは精力つかれて養生の道にあらじといふ。答へて曰、しからず。禮記曰、君子莊敬なれば日につよく、安肆なれば日にをこたる。いふ意は、行正しく、つゝしみありてつとむれば、精力日々につよくなる。是血氣めぐりて、陽氣發生する故病生ぜず。身をやすくわがまゝにして、つとめざれば、日々にをこたりてよわくなる。是血氣がさがりてとゞこほり、元氣めぐらずして、養生の道にたがへばなり。

禮記云、禮樂不レ可二斯須去一レ身。君子の道、禮樂の二を以て身ををさめ人を教ふ。禮は心の恭敬を本として、萬事身の行の上に節文あるをいふ。樂とは心の和樂を本として、昔聖人の作りたまへる歌舞八音の音樂の文あるをいふ。音樂は心の和をみちびくそなへなり。後代の淫樂の心をとらかすとは、大に同じからず。禮を以て身をつゝしみをさめ、樂を以て、心をやはらげ樂しむ。この二の事、しばらくも身をはなるべからずとなり。是古の教の法なり。後代に、禮樂のをしへ傳はらず。されど心のつゝしみと樂みとは、今とてもしばらくわするべからず。つゝしみ樂しみの二は、たがひにならび行はれて、相そむかざるべし。禮勝てば、かたすぎて人と我との間和せず。樂勝てば、和過ぎて禮儀をうしなひてあしきかたにながる。禮樂二ながらそなはりて、よきほどの中道行はる。故に論語に、禮の用は和を貴しとすといふ。又曰、有レ所レ不レ行禮以節レ之といふ。是禮樂の二を以て身ををさめ、事を行ふよきほどの道あるをいふ。

聖人禮樂を作りて人に教へたまふは、本なきことを作り出したまふにあらず。凡禮は天地の序なり。序とは次第あるをいふ。陰陽の氣、時節にしたがひて次第あるは、天地の禮なり。樂は天地の和なり。和とは、陰陽の氣時にしたがひて和同するをいふ。是天地の樂なり。聖人天地の序と和とに本づきて、禮樂を作り給ふ。故に禮記に曰、天高地下。萬物散殊。而禮制行矣。流而不レ息。合同化而樂興焉。是は、禮樂の根源をいへり。禮の本源をいはゞ、天高く地ひきくして各その位あり。日月星辰より風雨霜雪草木禽獸等の萬物にいたるまで、各その形色をあらはし、各其分限かはり、各時節の序あり。是天地萬物の上に、自然に各高下次第品節わかれたり。即是天地の禮なり。聖人これに法とりて禮を作り給へり。禮は序を以て主とすればなり。序

あれば、上下貴賤親疎長幼の位正しくして亂れず、樂の本源をいはゞ、天地の間陰陽五行の氣、古今四時にめぐり行はれて、しばらくやまず。その氣和合して萬物化生す。是即天地の樂なり。聖人これに法とりて樂を作り給ふ。樂は和を主とす。和らげば、人我一同にしてそむかず、道理にしたがひて萬事行はる。是禮樂の根源なり。凡聖人のをしへは皆是天地の道を本とし、これを法としてしめし給ふ。天理の外に別の教なし。こゝを以て程子も、儒者は天に本づくといへり。聖人の道は即天地の道なり。聖人の教は即天地の教なり。

君子は天地をおそれうやまふ。故に大風大雨迅雷などの時は、かたちをあらためて、夜はおきて衣服をきて坐す。是天のいかりをうやまふ禮なり。是亦天につかうまつる道の一端なり。

○禮曰、虚を執れども、盈をとるが如く、虚に入れども、人あるが如くにす。いふ意は、内に物なき器をとるにも、みちてこぼれやすき器をとるが如く、おそれつゝしむべし。人の居らざる家に入るにも、人あるが如くつゝしむべし。是は敬の心常にあるをいふ。禮の本なり。

衣服は身の表なり。人にまじはるに、先かたちを見る。次に言をきゝ、次に行ひを見る。故に孝經孟子などに、衣服と言語と德行をつらぬるに、衣服を先にせり。衣服はかたちをおほふ表のかざりなれば、えらぶべし。わが位に應じ、年に應じ、處に應じ、時に應ずべし。紫、萌黄、紅などの間色は禁じて著るべからず。又大なる繪がた、大なるしま、目にたつ染物おり物などは、ひなびていやし。このむべからず。わが年よりくすみ過ぎたるは、おいらかにして目にたゝず。みやびやかにして、わかきも、おいたるも、身によく相應して似あへり。凡衣服のやうにても、人の心の邪正はおしはからるゝものなれば、えらぶべし。

飲食は身をやしなふものなり、然るに飲食をほしいまゝにして、却て身をそこなふは、禮なければなり。飲食のつゝしみは、禮を以て慾を制するにあり。飲食の禮多し。中について放飯流歠をいましむべし。放飯とは、ほしいまゝに飯を多くくらふなり。何にかぎらず、一切の食を多くくらふは、放にして非禮なり。ことに飯を多くくらふは見ぐるしく、腸胃をそこなふ。流歠とは、ながるゝがごとくに、あつもの酒など多くのむを云。この二は、とりわきいましむべし。凡禮のはじめは飲食にはじまると、禮記にいへり。禮なければ、飲食をほしいまゝにして見ぐるしく、禽獸の行にちかし。こゝを以て飲食の節をつゝしむは禮の始なり。孟子にも、飲食の人は、則人これをいやしむ、其小をやしなひて、以て大をうしなふがためなりと、いへり。

禮は、未發にいましむ。人の情慾のいまだおこらざる先に、早くいましむれば邪惡にいたらず。故に禮の敎は、目に見えぬ所に大に益ありて、日々に善にうつり、罪に遠ざかりて自らしらず。是禮のたふとぶべき所なり。法は既に惡事いで來て後に禁ず。そのしるし目に見えて、其益少しなり。男女の別ありて、禮法正しければ淫亂にいたらず。凡淫亂は必初に禮法なきよりおこる。わかき子弟のともがら、早く禮を敎へ、内外の別きびしければ、かゝる惡事におもむかず。朋友の交、禮ありてうやまへば、あらそひたゝかひに至らず。凡闘諍、必無禮よりおこる。君は臣をつかふに禮あれば、そむきはなるゝにいたらず。禮の人に益あることかくの如し。故に禮の敎は本なり。法のいましめは末なり。たとへば無病の時、身をつゝしめば病おこらず。病おこりて藥をのみ、灸をするは末なり。邵子の詩に、病後能く藥を服せんより、病前よくみづから防がんにはしかじ、といへるが如し。又

人家に火災出來たる時、ちからをつくしてふせがんよりは、かねて火用心きびしければ、火災なきが如し。

禮記に、子曰、敬ひて禮にあらざる、これを野と云。うやまふは、まことによけれど、禮にかなはざれば、これ野しきなり。うやまひに、よきほどの法あり。過不及ありて、其法にかなはざるは、是禮にあたらざるなり。いはんや、をごりて理にかなはざるは、ことに禮にそむけり。野しきよりその害甚し。

飮食と男女と財寶とは、人の大欲の生ずる所なり。故におよそ人の過惡の出來るは、多く此三よりおこる。心のこのむに打まかせては、あやふし。道理にそむき、わざはひ生ずる本なり。此三をこのむは、人情にして、なくんばあるべからず。されど禮を以て節せざれば、これを用ふる理を失ひて必大惡生じ、惡にながる。故に禮なければ、人道不ㇾ立して禽獸の行に同じ。

周子、陰陽は理あつて後に和らぐといへり。二氣の流行正しければ、四時の和行はる。人の道も亦同し。禮正しく次第みだれざれば、各其理を得て和順行はる。故曰、禮者天地之序也、樂者天地之和也。禮は先にして、樂は後なり。人倫の交、先、禮法正しく、次第亂れざれば、人と我と和合す。君臣父子夫婦兄弟の間、其禮正しければ、おのづから和順なり。若禮なくして、臣下のうときが親しきをこえ、賤きが貴きをこえ、庶子が嫡子をこえ、妾に妻をこえて、次第亂るれば、必うらみそむきて和合せず。朋友の交も禮正しければ、和睦してあらそひなく、うらみなし。又喧嘩口論などする事も皆無禮よりおこる。若禮儀正しくば、和順行はれて、鬪爭何ぞおこらんや。故に人の鬪諍をやむるの道も、禮を正しくするにあり。

朱子曰、禮は天理の節文なり。いふ意は、萬の行、

道理にかなひて、過不及なく程よきを云。飲食の一事をいはゞ、うゑかわく時に飲み食ふは理なり。されども、のみくふべき理なりとて、みだりに多くのみくへば、放逸にしてみだりがはしく、又必病を生ず。のみくふべき理にあたりて、過不及なく、よきほどなるが理の節文なり。萬の事是を以てしるべし。

林放といひし人、世上の禮を行ふ者、かざり多く、ことわざしげくして、末をもはらつとむるを、禮の本意にあらじと思ひて、禮の本を孔子にとふ。凡萬の事、まづ其本を得れば、其末おのづから出來るものなり。たとへば、樹木の根本堅固なれば、千枝萬葉皆これより出づるが如し。本をうしなひて、末のみをつとむれば、其實を失ふ。故にそのつとむることしげくして、そのなすわざ小なり。しかるに時の人のまよへるをさとり、禮の本に志あるを大いなる問なりとて、先ほめ給ふ。さて、こたへてのたまふ意は、萬の禮は中を得るを貴ぶ。中は過不及なきなり。是禮の當然にて、至極せる道理なり。されども中におこなふことならずば、其本をつとむべし。萬の事かざりいみにて、外の儀文華美にして、おごらんよりは、只ねがはくば儉を行ふべし。儉とは其心眞實にして、かざりいつはりなきをいふ。是禮の本なり。此の如く儉にして眞實にかざりなければ、本たちて末おのづから生ず。又禮の内にて、取わき父母兄弟などの死せる時、喪に居るは、尤せつなる時にて、つゝしんで心を用ふべきことなり。喪に居るに其死をいたみかなしむは、喪の禮の本なり。しかるに外のかざりさかんにして、作法はそなはれども、心にかなしみの誠なきは、是本なきなり。かくあらんより、只いたみかなしみあつくして、外の法はおろそかならんこそまさるべけれ。凡禮は先心の誠實なるを本とすれば、本なくして末のみをさまらん

より、しかじ、本立ちて末おろそかなるには。是本末そなはらずして、偏なれども、外のかざりのみ多くして、内心に本とすべき誠なきには、はるかにまされり。本立てば、末は是より出づることわりなり。末のみをさまりて本なきは、誠なくして禮の道たゝず。喪の禮は、ことさら眞實ならでは行はれざるものなれば、すでに禮の本をときて、又その內より、喪の禮の本をかゝげ出してとき給ふ。

禮器云、先王の禮を立つる、本あり文あり。忠信は禮の本なり。義理は禮の文なり。本なければたゝず。文なければ行はれず。いふ心は、禮に本あり。忠信を本とす。忠信はまことなり。禮に文あり。義理を文とす。義理とは、外に行ふ所のあらはれたるしわざのすぢめよきを云ふ。本なければ禮の道たゝず。萬の事皆誠よりいづ。誠なければ物なし。されど又外のわざ理にかなはざれば、文なくして禮の道行はれず。必本末二ながらそなはりて禮の道全し。されど先本をつとむるを要とすべし。忠信を本として禮文行はるゝは、たとへば味甘き物は五味の和をうけ、色白きものは五色の采をうくるがごとし。忠信ある人は禮を學ぶべし。質よき故に、外の禮文そなはりやすし。

禮は中を得るをたつとぶ。中とは過不及なきを云ふ。管仲、晏子、此兩人皆才力すぐれたりしかども、聖人の道をしらず。管仲は身上よりをごりて禮をうしなひ、晏子は儉約に過ぎて禮を失ふ。今の人儉約なれば吝嗇にして、なすべき禮法をも行はず。是を下に偪ると云ふ。下にせまるとは、わが身上より下なる人の行ひをするを云ふ。奢れば法制にそむきて禮をうしなふ。是を上を僭すと云ふ。上を僭すとは、わが身上の分に過ぎて、上なる人のふるまひをするをいふ。故に禮は過不及なき工夫をなすべし。

禮は謙遜をたつとぶ。謙はへりくだるなり。ほこる

と、うらおもてなり。ほこるは、わが才力權位功名にほこるの類なり。謙は自滿せざるをいふ。わが身に才德權位功業あれどもほこらず。是天下の美德なり。遜はゆづるなり。善事を君父にゆづり、人にゆづりて、自居らざるを云ふ。

禮記に、禮至れば、不ㇾ爭といへり。爭は君子の道にあらず。禮あれば爭なし。いかんとなれば、禮は讓をたつとぶ。讓は爭のうらなり。夫子も、君子は無ㇾ所ㇾ爭とのたまへり。爭ふとは、人に對してわが才能威勢智力權位財利をあらそふの類なり。われにあるちからを以てあらそふは、たとへば、鳥獸の牙を以てし、爪を以て、角を以て、あらそふがごとし。人倫の法にあらず。是皆小人のわざなり。禮讓の道にあらず。且又禍をとるの道なり。

五常訓卷之四終

五常訓卷之五

貝原篤信編錄

智

知は、增韻、心有ㇾ所ㇾ知也といへり。知は心の明なり。和訓には、さとるとよむ。是非をてらす心の光なり。心明らかにして、人倫事物の道理に通じ、是非善惡をわきまへしりて、まよはざる德なり。仁義禮も智によりて、その理明らかにして行はる。智なければ道理くらくして、善心あれども行ふすべをしらず、あやまりてひがごとのみ多し。周子は、通ずるを知といふといへり。萬理に通ずるなり。朱子は、智は分別是非の理といへり。分別とはわかちわかつなり。心中に善惡をわかちわきまふるを云。是非とは、事にのぞみては是を是とし。非を非とするをいふ。智は性なれば、あながちに、外にむかひてとくべからずといへども、用につき

てとかざれば智の體も明らかならず。孟子は、智之實知二斯二者一弗レ去是也と說きたまふ。智の眞切なる所は、孝弟の道を知りて、すてずしてかたく守るをいふ。道理をしりて、又よくその道理を守りて失はざるなり。しりても守らざれば眞にしれるにあらず。智は五行においては水に屬す。水は淸く明らかにしてかゞみとすべし。智のあきらかなるに似たり。又萬物は、皆水のうるほひ通して生ずるごとく、萬事智にあらざれば、道理通ぜずして行はれず。朱子、四書の註の中、仁義禮に皆明解あり。智の字に註なし。故に朱子の後、智の字をとく者多しといへども、その說分明ならず。大學或問曰、知則心之神明。妙二衆理一而宰二萬物一者也。心の神明とは、人の心虛靈にして不レ昧をいふ。妙二衆理一とは、もろ〳〵の理を發明してしるを云ふ。宰二萬物一とは、萬物をつかさどりて、善惡を裁判するをいふ。是致知の知をときて、四德の智を說き給へるにはあらずといへども、知の體用をよくとけること分明なり。この外に智の註を求むべからず。愚、ひそかに朱子の兩說に本づきて、知を說きて曰、智者、心之明、事之別也。心の明とは、くらからざるをいふ。燈火明らかにして物をてらすが如し。是智の體なり。事の別とは事にのぞみて是非をわかつをいふ。是智の用なり。その事にのぞみて是非をわかつは何ぞや。內に明あるを以てなり。此の說いまだ當否をしらず。しばらくこゝにしるして、識者の是正をまつのみ。

智なければ、心に善あれども、行ふべき道をしらずして、みだりに行へば、あやまりてひがことのみ多し、父母に能くつかへんと思へど、孝の道をしらざれば不孝に歸す。君につかふるに、心に忠あれども、智なければ、忠を行ふすべをしらで不忠にいたる。萬の事、皆しかり。すべて智なくしては、道を行ふことあたはず。人の惡をなすは、皆不知

よりいづ。智あれば、善のこのむべく、惡のきらふべきことをよくしりて、道おのづから行はる。故に學をするには、智を求むるを第一のつとめとすべし。

論語に、智者不レ惑。仁者不レ憂。勇者不レ懼。又、知及仁守るといへり。中庸には知仁勇を三德とす。皆知を先として說き給ふ。大學には格物致知を先として、萬の道理をきはめしりて、わが智を開くことをつとめしむ。君子の學つとめ行ふをたつとぶといへど、先しらざれば行ふことあたはず。いかんとなれば、智なくして心くらく、善惡是非をわきまへざれば、道を行ふべきすべをしらず。たとへば、めしひの杖をうしなひて、ひとり道をゆくが如し。足すくやかなれど、道を見ざればまよひてゆきがたし。智なければ、才力あれども每事道理をしらず、あやまり多くして道行はれず。仁義禮も智にあらざれば、道理明らかならずして行ひがたし。人を愛するは仁なれども、理くらければ、姑息するを仁とし、とがあるをゆるすの類、是智なければ仁行はれず。宜しくするは義なり。智なければ、その宜しきほどをしらず。うやまふは禮なり。智なければ、そのよき程をしらで、うやまひ過し、或はうやまひたらざるは非禮なり。かやうの類、皆是智なければ、仁義禮共に行はれざるなり。

智の字、又、知の字となして通用す。故に、四書には多くは知の字を用ふ。只四德五常には智の字を用ふべし。

人の身に一の大寶あり。これを名づけて智といふ。心の光明なるは、萬の善惡是非邪正をわきまへしるのかゞみなり。若人の身に智なければ、天地に日月なく、人に耳目なく、暗夜に燈なきがごとく、又家に主なく、軍に大將なきがごとし。いかに生れつきたる力量あり、忠信あれども、心くらく智なければ、行ふべき道をしらずして、みだりに行

へば道にかなはず、ひがこと多し。よろづにつきて、よきあしきをわきまへざれば、わが身ひとつをだにをさむることあたはず。いはんや民をなづけ、土地ををさめんことは、いとかたきことなるべし。故に人身の大寶は知なり。その大寶をもとむるの道あり。よき師友を求めて、その敎をうけてよきすぢの學問し、書をよみ、ひろく見、多く聞き、よく思慮して、わが心に道理をもとめ、是を以て心をひらき、智を明らかにすべし。師友に求むるの道は、わが身をへりくだりて自是とせず。このんで人にとひて、ひろくきくべし。わが智に自滿して慢こることなかれ。我に慢これば、必我智をうしなふ。凡聞見をひろくすると、わが心に思案すると、是智をもとむる道なり。

中庸の、博く學び、審にとひ、愼しんで思ひ、明かに辨ふるは、皆是知をもとむる道なり。かくの如く知を明にして後篤く行ふ。古人も此、學もし眞にしれば、行ふこともその中にありといへり。よくこの道をしれば必よく行ふ。行はざるはしらざる故なり。附子砒霜には毒ありとしりてはくらはず。水火をば、人を害する事をよくしれる故に、おそれて水におぼれ火にやけず。病を治することをしれば、良藥の苦きをも服し、熱きをこらへて、もぐさにて身をやく。是よくしれる故なり。又博學多識なれど、道理をきはむる學問をせざれば、道をしらざる人古來多し。經書の文句をときわけたるまでにて、聖賢の敎の道理をしらざるをば、訓詁の學と名づく。又故事出處を覺え、ひろく古今の事に通じて、道をしらざるをば、記誦の學といふ。詩文章を巧につくりて、道理にうときをば、詞章の學といふ。この三は、共に儒者の學にあらず。古人いやしめり。儒者の學は、理をきはめ知を致して、道をしるを以てつとめとするをいふ。書をよんで道をしらざるは、儒者の學にはあらず。

智に大小あり。是亦しらずんばあるべからず。たとひ微細なる末の事にはうとけれども、身をおさめ人をおさむる道に明らかなる人あり。是を小事にくらくして、大體に明らかなりといふ。君子の大智なり。たふとぶべし。又小事にかしこく、技藝にさとけれども、學問道理くらくして、身をおさめ人をおさむるにうとき人あり。是小人の小智なり。萬事にかしこきやうに見えて眞智なきなり。是を小事にあきらかにして、大體にくらしといふ。微細なる用にはかなへども、たつとぶにたらず。

樊遲問レ知。子曰。務二民之義一。敬二鬼神一而遠レ之。可レ謂レ知矣。雍也 是知者のまよはざることを以てこたへ給ふ。知者は心あきらかに、事理の是非をしる故に、凡孝弟忠信などの、人道の行ふべき事をもはらつとめて、目に見えぬ鬼神の事にまよはず、祭るまじき淫祀をまつりへつらふはいふにたらず、祭るべき正神なりとも、只うやまひたうとぶべし。近づきけがして、へつらひもとむべからず。ちかづきなるゝは、神をけがしてうやまはざるなり。たとへば主君貴人などに、此方より馴々しくしたしみちかづきて、祿をこひ、たからを給はら　ことをのぞむがごとし。無禮と云ひつべし。神は非禮をうけず。無禮にしてちかづきいのるとも、利生あるべからず。神もし靈あらば、かへりてとがめあるべし。又いのるべき道理なくて、わが利欲を以てへつらひ求めて、さいはひをいのるとも、神は正直公明にて私なければ、かゝるひが〳〵しきいのりをうけ、賽錢奉財などにめでゝ、私を行ひ利生あるべからず。此の理甚明らかにしてさとりやすし。然れども、愚者は此の理をしらずして、神にちかづき、けがしへつらひて、さいはひをいのるはまよひの甚しきなり。人道の行ふへきをつとめ、神をうやまひて、ちかづきへつらはざるは、是知者のまどはざるなり。故に知といふべしとのたま

へり。神にいのるに誠に正理なり。君父などのためにいのるべき理ありて、誠と敬をつくして、天にいのり、正神にいのるはそのさいはひあり。又わが過をあらため、罪を悔いて、神のとがめをわびことするも、是亦いのる理あり。かやうのいのるべき理なくして、いかにいのるとも、さいはひを得がたし。其のためし古今はなはだ多し。その理をしるべし。

韓非子曰、知如レ目也。能見二百歩之外一而不レ能レ自見二其睫一。故に知の難きは、人を見るにあらず、自見るにあり。又古人の語に、知レ人謂二之知一。自知謂二之明一といへり。知レ人は、まことにかたし。只知ある人よく人をしる故に、これを知といふ。自わが身の善惡をしるは、人をしるよりかたし。いかにとなれば、我身には私ありて、みづから是としやすし。其心あきらかに、わが身に私せずして、公なる心なくては、わが身はしりがたし。こゝを以て、自知を明と云ふ。是知レ人よりは、自知るは猶明らかなり。ここを以て明と云ふ。夫わが子を見るには私ある故に、人子の惡しきをしらず。他人の子を見ることは、明らかなるは、私なければなり。人をしることは、われをしるよりやすきは、私せざればなり。われを見ることは、人を見るよりくらきは私あればなり。知を明らかにせんとならば、學んで理をきはめ、又私を去りて、本心をくらますべからず。愚人はくらくしてわが身をしらず。我に才徳なきをもしらで、わが身にほこる。又我に大なる過惡あれどもしらず。此の故に人のいさめをふせぎて用ひず。かへりていかりうらむ。それ人聖人にあらず。誰か過なからん。しかるにわが身に過なしと思へるは、智なきなり。又あやまちをしれども、おほひかくして改めず。是をあやまちをはぢて非をなすといふ。皆是愚者のしわざなり。智ある人は、わが身をしれること明らかなる故に、わが身の過をしり、

又人のいさめをよろこびてきゝ用ひ、いさむる人をたふとび、わが過をあらたむるにはゞからず。故に過なきにいたる。日月の蝕すれども、やがてもとの如くになれば、光明少しもかげざるが如し。凡人の諫をこのんできゝ用ひ、わが過を改むるは、善これより大なるはなし。天下の美德なり。知と云ふべし。いにしへより、たかきいやしき、いさめをこのんで用ふる人は、國家をおこし、身をおこす。いさめをふせぐは、惡これより大なるはなし。天下の惡德なり。愚と云ふべし。いにしへよりいさめをふせぐものは、貴も賤も多くはほろぶ。古來其の證據明らかなり。夫明鏡といへども、そのうらをてらさず。君子といへども、みづから見るにくらし。故に賢人君子はつとめて人の諫をもとむ。堯に諫の鼓あり。いさめんとする人は此の皷をうつ。舜に誹謗の木あり。木をけづりて路頭に立て置きて、其の身の行と政のあしきことをそしらしむ。湯王には司過の士ありて、湯王に過あれば、必いさむることをつかさどる。武王には戒愼之銘ありて、武王を戒しめいさめんとする者は、その鞀をうごかしてならす。漢より以後、君をいさむる官あり。歷代の聖人すら、その身の過をしらんことをおそれて、人に求め給ふことかくの如し。いはんや末世の凡夫をや。

生れつきて知るは良知なり。二三歲の小兒も、親を愛する事をしらざるはなく、年すこし長じては、兄をうやまふことをしらざるはなし。是まなばずして、人々生れつきてよくしる故、良知と云ふ。是仁義禮智の智と同し。天性なり。まなんで知るも亦是良知あるが故なり。むまれつきたる知なくんば、なんぞまなんでもしることを得んや。學問の道は智をひらく工夫なり。學問の要二あり。いまだしらざる所をしる一なり。すでにしる所をかたく守りて行ふ一なり。しるにあらざれは行ひがたく、行

ふにあらざれば、實なくしてしらざるに同じく、無用の事となる。

不知の人は、義理をわきまへざるのみならず、又利害損得をもしらずして、わが身のわざはひとなることをかへりみず、利をむさぼり、ひがことをなして、家を利し身を立てんとして、かへりて身をほろぼし、家をやぶるにいたる。かなしむべし。是わが身の惡をやめずして、天のせめをまつといふべし。わが身を利せんとて、惡しき事を行ひ、人をくるしめて、わが身一人をたのしむ。これみなわが身の害となることをしらず。おろかなるのいたりなり。智者は心あきらかにして、人のうれへ苦しみをよく知る。愚者は心くらくして、わが身の外、人のうれへ苦しみをしらず。いたりて愚なれば、わが身の外、父母兄弟のうれへくるしみをだにしらで、不孝不弟を行ふ。

淮南子に、四方上下を宇と云ふ。是天地の間のことなり往古來今を宙と云ふ。是上古より今までのことなり。古今のことを云道と事とその間にありて、きはまりなしといへり。今案ずるに、道と事とは、天地人の道と事なり。人となる者は、凡天地の内、古今の間の事をしらずんばあるべからず。故にひろく天下古今の事に通ずべし。是智の功用にして、智者の工夫なり。

仁の物をあはれみ、義の惡をはぢにくみ、禮のつゝしみうやまふは、皆なせるわざあり。只智のみ、心の明らかなるのみにて、しづかにして何のしわざもなし。されども仁義禮も、智の明らかなるを以て、是非をしりわかつにあらざれば、其道行はれず。仁義禮これによりて行はれ、是によりて成就す。故に智は四德のはじめをなし、終をなす。四德の末にあるは終を成すなり。仁義禮を行ひ出すは、初を生ずるなり。たとへば一年の内春は生じ、夏は長じ、秋はをさむ。この三時は皆氣うごきてなすことあり。只冬は四時の末にありて、しづかにして

何のしわざもなし。陽氣のかくれひそまれるのみ。されど一年の功こゝにいたりて成就す。是冬は一年の功の終をなすなり。又天地の元氣、冬の間しづまりやすまざれば、來春大に發生して、功用をなしがたし。冬の内天地の氣をさまりて、内にふくみあつまるを以て、來春の陽氣是より出づる故、發生の本とす。是一年の功の初を生すなり。故に冬は一年のをはりをなして、又一年のはじめを生ず。人の身も、あしたよりゆふべにいたりて、うごきはたらけども、夜にいたりてねいりしづまる。是一日のをはりをなすなり。又夜中ねむらざれば、明日ちからなし。夜中によくねいりやすめば、明日のはたらきにちからあり。是明日の初を生ずるなり。智の四德の初を生じ、終をなすも亦かくの如し。禮はさかんにあらはる。智はかくれて見えず。禮と智とはうらおもてなり。夏は萬物さかんに、陽氣あらはる。冬は萬物ひそまりて、陽氣かくる。冬と夏とはうらおもてなるが如し。

學は自得を貴ぶ。自得とは、わが心にひとり道をしり、其味を得たるなり。わが物になるを云ふ。わが心に得ずしては、道をしれりといひがたし。古來文學ひろく經義に通じて、道理を口に說くといへども、心に道をしらざる人多し。是自得せざるなり。眞知にあらず。たとへば、すぐれたる美味あれども、わが口に食はざれば、其味のうまきことをしらず。學んで道をしらざるも亦かくの如し。たゞ眞つみつとめ久しくして後自得すべし。つとめなくして、にはかに自得せんとせば、是を頓悟と云ふ。わが儒の自得にあらず。

知ある人は、いかに言をたくみにし、利口を以て是非善惡をみだし、或は邪說をすゝむれども、其の心明かなる故、その言の是非をよく分別して信ぜず。知なき人は、是非をわきまへずして、人の言のたくみなるにまよひやすし。

古語に、毀譽亂ニ於善惡一といへり。人のほめそしりはよく善惡を云ひみだす。凡人は人をしらずして、みだりにほめそしり、或はわがひいきなる者は、惡人をも善人と云、わが心に合はざる者をば、善人をも惡人と云。愚なる人は、かゝる讒言にまよひ、其言を信じて善惡をきゝあやまり、人のほめそしりを明らかに察せざれば、讒人のためにたぶらかされて、そのはかりごとにおつることあり。あさましきことなり。古來英武の人といへども、知者にあらざれば此あやまり多し。おそるべきことなり。孔子曰、巧言亂レ德。ことばたくみなれば必迷ひやすくして德をみだる。よく心を用ひてきゝあやまることなかれ。

衆人は、目前にすでに見え來れることにさへくらし。いはんや後來のことをしらんや。かねて事に先だちて、よく後來の事の理由と成行をしるを、先見の明と云ふ。是知者のしる所、たふとぶべし。

言を聞きて信ぜざるは、きくことあきらかならざればなりと、易にいへり。人の善言といさめをきゝながら、その言を信ぜず。只あだなる事のやうに思ふは、其心くらければなり。明らかなれば、よく其言の道理あることをしりて信ず。故に人の善言を聞きて信ぜざるは、不明なる故なり。古語曰、惟善人よく盡言を受く、その聞きて能改レ之をいふなりと。又才辯ありて言たくみなる者のことばをば、理もなきことをも、たふとび信ず。その言たくみならず、そのかたちいやしければ、その言に至理あれども信ぜず。是きく人の不明なるなり。

論語に、浸潤之譖。膚受之愬。不レ行焉。可レ謂レ明也已矣。人を讒する者は、にはかにせず、やうやくにすること、たとへば水の物をうるほすに、急にうるほさず、つけ置きて自然にやうやくうるほすが如し。かやうにすれば必心にそみて、迷ひやすし。こゝを以て、にはかに人をそしらず、やうやく

讒すれば人信じやすし。又にはかに人をおびやかして、即時にわざはひ出來るやうにおどせば、人亦おどろきて信じやすし。この二者は讒人のたくみなる所なり。故に人まよひやすし。かやうの讒をきゝて信ぜざるは心の明なり。心の明は即智なり。古來かやうの讒を信じて、賢人をうしなひしためしも多し。かなしむべく、おそるべし。孔子曰、佞人は殆しと、豈まことならずや。

熟思審處は智のすることにして、後悔なき道なり。かねてその事あるべきとしりたることは、先其事を行ふべきやうを、おもひはかりて、きはめおくべし。事にのぞみて、とやせんかくやせんとはかるは、おそくして事に及ばず。すべて思慮は、かねてより定むべし。又かねてはからざる不慮に出來たる事も亦多し。この時にのぞみても、つくづくと思ひ、つまびらかにはかるべし。或は智ある人、その事をしれる人にとふべし。あわてゝ、わが心ひとつにて、にはかに其事を決定すれば、必過多し。後悔すとも益なし。いそがはしく決定すれば必あやまる。古人の言に、凡事只怕レ待。待者詳處之謂也。といへるが如し。待とは急に決定せずして、つまびらかに思案して行ふなり。

子曰、學而不レ思則罔。まなぶとは、書をよみ人に問ふなり。まなびたるのみにて、わが心に其道理を求めて思案せざれば、道理をみづから得がたし。故にくらし。思の工夫は學ぶに相對しておもきことなり。人の博學にして道をしらざるは、思の工夫なければなり。思は致知の工夫において尤益あり。思ふに非ざれば、自得することなりがたし。

孔子の舜の大智なることを稱し給へり。舜は大智なりし故に、わが智を用ひ給はず、天下の人の智をあつめてわが智とし給ふ。是大智なり。この故に人に問ふことをこのみ給ひて、淺く近き言をきゝても、その言の善惡を察して、惡しきをばかくし

て人にかたり給はず、善をばあげ用ひて、その人のことばなる山あらはし給ふ。かくありし故に、人善を舜につげ申すことを好めり。さありて人のいふ言の中にてえらびて、その中の過不及なき道理の至極ぜるを取りて用ひ給ふ。是舜の大智なる所なり。古人は詢于芻蕘とて、我智を自満せずして、草かり木こりなどの、いやしくおろかなる者にも、しるべきことはとひて、其言を用ふ。是諸人の知を聚めて廣くとりて、我知とするなり。聖賢は言ふに及ばず、いにしへの英雄漢の高祖、唐の太宗などの如くなる英明の君は、人の諫を好みて、これにしたがひ、蕭何、張良、陳平、王珪、魏徴などが如き、智力のすぐれたる者を用ひて、其言を取用ひ給へる故、天下を草創し太平を開きて、大なる功業をなし給へり。昏弱の君は人の諫をきかず、或は諫臣を殺せるも多し。かゝる人は必國家を失へり。

天命を知るとは、人の吉凶禍福死生は皆定まれる天命あり。生れつきたる分限あり。分外のさいはひを人にへつらひ求めても、神にへつらひいのりても、必得べからざることをしるをいふ。然るに小人は天命をしらず、わざはひあれば手立を以てのがれんとし、利をねがひては人に諂らひて、富貴福祿を得んとす。こゝを以て義理をすて、利欲にしたがひてはぢず。又いのるまじき理をしらで、神にへらつひて福を求め、禍をのがれんとす。君子は義理をたつとんで天命をしる故に、義に背けることは、大なる利を得るといへど行はず。害ありといへどもさけず。天命の求むべからざるをしりて、義に害なしといへども求めず。しかるにもしみだりに利を求め、害をのがれんとして、其益なきことをせば、天命をしらずして愚なりと云ふべし。何ぞ君子とすべけんや。

魏徴曰、兼聽則明。偏信則暗。いふ意は、ひろく人に

問ひて、諸人の言をきけば、一偏の言にまよはずして、きゝ損ずることなく、其きくこといつはりまぎれなくして明らかなり。只一人の言を信ずれば、その人のいふ所、多くは一偏の私ありて我心をまよはす。管子曰、天下の目を以て見れば見ざる事なし。天下の耳を以てきけばきかざることなし。天下の心を以て慮ればしらざることなしと。是わが知慧を用ずして、博く諸人の知を用ふるなり。知者のわが知を用ひずして、人の智を用ふること、かくの如し。これまづわが心の智慧正しくして、胸中に善惡を量る權度ありて、ひろく見、ひろく聞きて、人のいふ所の善惡是非をえらびて用ふるなり。

智の要は知ㇾ人にあり。尙書に、知ㇾ人則哲。能官ㇾ人。といへり。哲とは、心の明らかなるをいふ。人をしるは、その心明らかなる也。能官ㇾ人とは、人をしれば臣下の才德をはかりて、その長じたる所を取りて、各その才の宜しき官をさづくるゆゑに、過なくしてその職よくをさまる。樊遲問ㇾ知。子曰、知ㇾ人。是人をしるは心の明らかなる所卽知なり。明は知の體なり。知ㇾ人は知の用なり。用をいへば體その內にあり。故に人を知るを以て知をとき給ふ。愚者は人を知らずして、交る所、用ふる所、その人にあらず、たゞ人の毀譽にしたがひ、わが喜怒にまかせ、あひ口、ふあひ口により、又したしきうときによりて人を進退すれば、人を用ふる道理に中らず。人をしらざれば、善惡邪正、君子小人皆所を失ふ。人をしるとしらざるとは、わが身の禍福安危と、國家の治亂存亡に係れり。心を用ひて能く人をしるべし。人をしらずしてあしき人を用ふれば、身のわざはひとなり、家のやぶれとなる。おそれざるべけんや。知は人をしるよりかたきはなしと、古人いへり。人の心ほどしりがたきものなし。よく其の心を察してしるべし。口のきゝた

ると、かたちのよきことを以て人をとるべからず。その心の賢否とその行の善悪とを以て、人を進退すべし。又一言一行を以て、かろく人の賢否をさだむべからず。小人にあざむかれて、その人を信じてすゝめ用ひ、君子を見しらずして、うたがひ退ぞくるはまよへるなり。愚なりといふべし。よくわきまへざれば必あやまりて、善悪所をかふるものなり。

人を知るの道は明と公とにあり。まなんで道理をしるは明なり。心明かならざれば、人の是非をわきまへがたし。又心に愛憎喜怒の私なきは公なり。心公に私なくして、人の善悪是非を分つこと正し。愛憎喜怒の私あれば、まよひて人をしること正しからず。善人を悪人とし、悪人を善人とす。又心かろくして、一旦の善悪を以て、にはかに人を是非すべからず。歳月をまつべし。言語の才ありて利口なるを以て、人をとるべからず。必心と口とちがふ者多し。心公ならず、私心を以て人を用ひすつれば、わが氣に入り、あひ口なる者をば、悪人をもよき人と思ひて用ひ、善人をも氣にあはざれば用ひず。かくの如くなれば、人を知る事かたくして、人を用ふること理にあたらず。官職その人にあらずして民治まらず。

論語曰、不レ知レ言。無三以知二人一。是人を知るの法なり。人の邪正は言にあらはる。言は心の聲なりと、古人もいへり。言の理にかなふとかなはざるとによりて、その人の邪正をしるべし。もし言の是非をわきまへずば、人の邪正は知りがたし。然れば人をしらんとならば、言をきゝて、その言の理にあたると、當らざるとを察すべし。

人の心、深くかくれて外より見えがたければ、その内心をしりがたし。外にあらはるゝ言語容貌を以て、其心を信ずべからず。言語よく、容貌うるはしく、君子に似たりといへども、内心は奸曲なる

者あり。言ふつゝかに、容いやしけれども、内に忠信才智ある者あり。外くらくして内明らかなる人あり。外明らかにして内くらき人あり。火は外明らかにして内くらし。水は外くらくして内明らかなり。人の性も亦かくのごとくなるあり。言と貌を以て人をとるべからずと、古人もいへり。

子曰、不レ患三人之不二己知一、患レ不レ知レ人也。君子の道は外に求めず、只わが身に求む。故に人のわが善をしらざるは人の不明なり。わがうれひにあらず。わが善を行ふは、もとわがなすべき所なり。人にしらせんためにあらず。たとへば、飯を食つて、わが腹にみちて、飢をたすくれば、人のしらんことを求めざるが如し。人をしらざれば人の善悪邪正をわきまへず。是わが不明なり。故にうれふべし。もし人をしらざればその人にあらざるを友として、身をうしなひ、邪人を用ひて、家を破り人をそこなふ。或は善人をすてゝ用ひず。凡小人は我身を人のしらざるを憂へて、わが人をしらざるをうれへず。すべて、さかさまに工夫をなせり。

孟子の、眸子を見るも知レ人の術なり。眸子とは人の目のひとみなり。ひとみは人の悪をおほひ難し。人の胸中正しければ眸子明らかなり。胸中正しからざれば眸子くらし。人の言の邪正をきゝ、又人の眸子を見れば、其人の心中の邪正かくれなし。言は、猶も偽を以てよくすべし。眸子はかくすこと難ければ、是人をしるの術なり。人の知愚邪正貪廉才不才壽夭貴賤も、皆眼目にあらはる。眼は是五臓精華のあつまる所、心性の先あらはるゝ所なればなり。

人を知れば、はじめて一たび會面しても、其人の賢をしりて交ふかくなる。或は數千里をへだてゝもその情を通はす。數千年の久しきといへど其人を思ひしたふ。人をしらざれば朝夕膝をならべて、白頭に至るまで、久しく交りてもしらず。人を知

るとしらざると、その大にかはれることかくの如し。故に士は知己のために死すといへることあるにあらずや。

人各長ずる所あり。短なる所あり。長ずる所とは得たる所なり。短なる所とは得ざる所なり。知者といへども其得ざる所は、愚者の得たる所には及ばず。もし得ざる所を以て知者をしらば、堯舜も今日の凡夫におとるべし。人をしらずといふべし。君子の人を用ふるは、良醫の藥を用ふるが如し。各其性をよくしりて用ふること、其病に應ず。又大匠の材を用ふるが如し。ゆがめるをうつばりとし、直なるを柱として、材すたらず。人を用ふるに、各得たる所をしりて用ふれば、天下に棄れる人なし。皆用をなせり。

信

信は、說文曰、誠也。从レ人从レ言。會意。徐曰、於レ文。人言爲レ信。言而不レ信非レ爲レ人也。信の字、人偏に言の字をかくは、六書においては會意に屬す。偏旁の意を以て作りし字なり。いふ意は、人の言に誠あらざるは人にあらず。故に人の言は必信あるべしといふ意なり。五常においては心にまことあるを云。口にいつはりをいはざるも其内にあり。仁義禮智の、いつはりなき眞實なるを信と云。信なければ仁禮智にあらず。仁義禮智四德の外に又信あるにあらず。親によくつかふるは孝なれど、名聞の爲につとめ、又親の寵愛をねがひて、つとむるは孝にあらず。君によく仕ふるは忠なれど、君の寵をねがひ官祿をむさぼりて、奉公をつとむるは忠にあらず。是皆まことの道にあらず。忠孝にかぎらず、萬事皆斯のごとし。中庸に不レ誠無レ物といへり。物なしとは僞りて實なきなり。親につかへ君につかふるに、まことなくして、右にいへる如くなれば忠孝にあらず。是物なきなり。萬

の事皆まことなければ物なし。凡名と利とを求めてすることは、たとひ天下にきこゆるほどの善なりとも、その心眞實ならざれば私とす。善にあらず。是物なきなり。四德にまことなければ、仁義禮智にあらず。いつはりなり。是物なきなり。人の天より生れつきたる性は、只仁義禮智の四德なり。此四德にて人道行はる。この故に孟子はたゞ仁義禮智をときて、信を說き給はず。程子曰、四端不レ言レ信者。既有二誠心一爲二四端一則信在二其中一矣。是を以て仁義禮智の外に信なきことをしるべし。信は天道にていはゞ誠なり。眞實無レ妄を誠といふ。天道に春夏秋冬の四時あり。その內に土用あり。四時に元亨利貞の四德あり。四德の實にして萬世までたがはざるは誠なり。人に仁義禮智ありて、其內に信あるも亦かくのごとし。元亨利貞、四時のめぐりの序、ちがはざるは卽誠なり。天道の春生じ、夏長じ、秋をさめ、冬かくすこと、年年同じく、日月のめぐり、四時の温熱涼寒、人物のかたちも性も、萬古より今に至りてかはらず。桃花は年々紅に、李花は年々白きも、皆是天道のまことたがはざるなり。天道にありては誠といひ、人に生れつきては、信といふ。天にあり、人にある理は一なり。

仁義禮智の四德は、春夏秋冬の四時になずらへ、信は土用になずらふ。信なければ、四德たゝず。一年の功も、春夏秋冬にてそなはりぬれど、土用によりて、四時行はるゝが如し。木火金水も、土にあらざれば生せず。天道誠なければ、元亨利貞の四德たゝず。人道も信なければ、仁義禮智の四德行はれず。誠ならざれば、物なしといへるは、是なり。

信は身をおさむるのみならず、人々をさめ國をたもつの要なり。信なければ人したがはず。むかし子貢、孔子に國の政をとふ。孔子曰、食を足し、兵を

足し、民信レ之。この意は、國ををさむるに、第一には食のやしなひなければ民命つゞかず。第二、武のそなへなければ國土の守なく、敵に侮りせめられて、民を安んじ國を守ることあたはず。第三、上の心に信なければ民たる者上を信ぜず。下知法度をいだしても、信なければ法やぶれて行はれず。民上を信ぜざれば上につかふるに眞實の道なし。凡此食と兵と信と三の者は、一もなくてかなはず。子貢、又問うて曰、必やむことを得ずして、此三の内一をすてば、何をか先にすつべきや。孔子こたへて曰、兵をすつべし。いかんとなれば食と信と有レ之、兵粮たくさんにて、士卒萬民上に思ひつかば、兵なくとも國を守ること堅固なるべし。子貢又問へり。食と信との二の内やむことを得ずして、一をすては何をか先にすつべき。答へて曰、食をすつべし。食なければ民死す。然れども信なくていきんよりは、城を枕にして餓死し、打死したらんこそ、本意なるべけれ。いにへより死は人の常なれば、うゑて死すとも力およばず。人もし信を失へば人道たたず。かひなきいのちをいきたりとも、人となるの理亡びなば、はづべきの甚しきなれば、道ありて死したるには、はるかにおとるべし。もし信なくて、士卒萬民上にしたがはず、思ひつかずば、兵粮たくさんにして、莫大の軍勢ありとも、用にたつべからず。是子貢にこたへ給へる意なるべし。又司馬温公の曰、信者人君の大寶なり。國は民に保ち、民は信にたもつ。信にあらざれは、民をつかふことなく、民にあらざれば、國を守ることなし。故に古の王者は、四海を欺かずといへり。夫れ國は民を以てたもつ。民したがはざれば、國ありてもたもちがたし。民は信を以てたもつ。上より民をあざむきいつはりて、信なければ、民上を信ぜずして、思ひつかず、民の心をたもちがたし。

賞罰は必信にすといふは、功ある人をば必恩賞をあたへ、罪ある者をば必刑罰に行はんと、兼ねて人に示すは法なり。賞罰は人君の權なり。是なければ善すゝまず、惡こりず。君の權威を失へるなり。功あれども賞せず、罪あれども罰せざれば、是民に信なきなり。如此なれば法やぶれて民信せず。善をするに、をこたりてつとめず、惡をすることを恐れずして、罰を犯す者多し。かく法たゝざれば國あやふし。又尙書に、令出ては、これ行はしめ、そむかしめざれといへり。いふ意は、法を出さば、初よく思案し僉議して、後までやぶれなき法を立つべし。一たび下知を出して法をたてば、後まで其法を行はしめて、そむかしむることなかれ。そむく者は必つみに行ふべし。如ㇾ此なれば、いつまでも法立ちてやぶれず。一たび下知を出して、後まで變せざるは是信なり。もし後まで立らがたき法ならば、初によく議論して法を立つべからず。是始を愼しむなり。若下知して後變せば、是上に信なくして民信せず。君に權なくして法たゝず。

有子曰、信近二於義一言可ㇾ復也。いふ意は、人に約してその言をたがへじと思はゞ、初約せんとする時、その人のいへること、義か不義かをかへりみるべし。義にかなはゞ約すべし。義にそむかば約すべからず。かくの如くすれば、其約違はずして言ふむべし。言をふむとは、約したる言をふまへて、首尾ちがはざるなり。是信を失はざる道なり。老子曰、輕諾者必寡ㇾ信。いふ意は、かろ〲しく背へば、後にその事なしがたくて、約にたがふことあり。故に信すくなしとなり。はじめ約せんとする時、つゝしみ思案して後をはかるべし。故に古人は然諾を愼しむとて、人の言ひかけたることをかろ〲しくうけあはずして、約をおもくす。その事義にあたりて行ふべく、又後日にその約ちがふまじきことならば、うけごひて約し、必約を變

ずべからず。もしかろ〴〵しくうけ合ひて、後日に其義にあたらざれば約を守りがたくして、前言いつはりとなり、信をうしなふ。一たび云ひかはし、約束したることをちがへて、其首尾あはず、いつはりとなるは、是はづべきこと甚し。人にあらずと思ふべし。若あやまりて、義に合はざることをうけあはゞ、其不義と不信との輕重を考へて、宜にしたがふべし。いにしへ尾生と云ふ者、人と約して其所にまつに、大水出來たれども、約したる所をさらで、遂におぼれ死す。是小信にかゝはりて身を失ふ。愚といふべし。又身をすてゝも信を守るべきこともあり。時宜によるべし。孟子曰、大人者言不レ必レ信。惟義所レ在。大人は大徳ある人なり。言に信を期せず、只義をかんがへ行ひて、自信を失はずとなり。

はじめにうけ合はざるは、しばらく人の心によろこばずといへども、信に害なし。心よわく、又氣かろがろしくして、たやすくうけあひ、後に其約違ひぬれば甚信に害あり。されど人のためにはかつて忠あるは、人にまじはる道なれば、なるべきことありだにあらば、うけ合ひて心を盡すべし。是忠厚の道なり。

誠は實理なり。こゝを以て、眞實无妄之謂レ誠。と程子もいへり。中庸に、誠者天之道也といへるは、天道の實理自然に行はるゝを云。聖人の誠も亦同じつとめずして自實なるなり。又曰、誠レ人者人之道也。といへるは、人のちからを用ひて、つとめなすを誠レ之と云。是即忠信なり。つとめずして自然なるは誠なり。つとめて實なるは忠信なり。誠は理なり。忠信は心なり。賢人以下は天道聖人のごとくならざれども、つとめて此誠を行ふは、是人のちからを用ひて行ふ理なれば、人の道なりといへり。誠にあらざれば天道人道共にたゝず。故に孔子も、主二忠信一とのたまふ。忠信は人の誠、

誠レ之者人の道といへる、是なり。程子も、人道は、只忠信にあり。誠ならざれば、物なしといへり。又古語に、五常百行非レ誠非也。その實なければこの名なし。忠信は即人の誠なり。程子も、盡レ己之謂レ忠。以レ實之謂レ信。といへり。心をつくしてのこさゞるを忠とし、言と行とに實を用ひて、いつはらざるを信といふ。心にある誠を忠とし、言行にあらはれたる誠を信といふ。

人をいさむるに、誠あまりあつて言たらざれば、感通しやすくして人に益あり。人の心にいかりおこらずして、我にわざはひなし。人をいさむる言は婉順なるべし。若誠たらずして、言切直にすぎぬるは、人いかりて、わがいさめをうけず、人に益なくして我に害あり。誠を以て感ずれば、人も亦信じて、したがひやすし。

朱子曰、人の誠ならざる所、多くは言の上にありと。信をまもるに、言語の上に心を用ひて、實を以てすべし。

朋友に交るには、もとより愛敬を用ふべし。然れども信なければ、愛敬も僞より出でゝ、誠の愛敬にあらず。顔色をやはらげ、容貌をうや〳〵しくするも、いつはりかざれるは、愛敬とすべからず。子曰、人而無レ信。不レ知二其可一也。人の心信實なるは萬事の基にして、人にまじはるの道なり。若信なければ、萬事すべていつはりなれば、人にまじはりていかんぞ善なるべき。たとへば大車の荷車に輗なければ、牛の首に車をかくることならず。小車の乘ぐるまに、軏なければ、車を馬にかくることならず。車と牛馬とは別の物なれど、輗と軏とあれば、是を以て牛馬に車をかけて引かしむべし。若このものなくんば、何を以てか車をやるべきや。人にまじはるに信ならざるも亦かくの如し。人と我とは二物なり。信實を以て交はれば、互に感通して道行はる。若信なくして人と交らば、我、人

にまことなく、人我を信ぜず。彼と我と感通せず。何を以てか道行はれんや。

子路無宿諾とは、一たび行はんと心にうけごひたることは延引せず、すみやかに行はれしとなり。是信ある所なり。

信は心に誠あるなり。心にまことあれば言行の上にあらはる。言は行ひをかへりみていひ、行は言をかへりみて行ふ。是言行共に信あるなり。もし身に行はざることを口にいひ、口に言ふことを身に行はざるは、是言行共に信なきなり。言ふ事はやすく、行ふことはかたし。故に言をばひかへ、行をば過すべし。是信を行ふ道なり。

むかし魏の文侯といひし君、明日獵に出でんと下知せらる。然るに明日雨ふる。されども前言をたがへじとて、路まで出でやがて歸られける。是信を民に失はじとなり。周の幽王は無道の君なり。褒似と云ふ美女を寵す。この女笑ふことをこのまず。或時隣國に變ありとて烽火をあぐ。烽火は相圖の火をあげて、兵を招きよせんがためなり。褒似烽火を見て大にわらふ。是より褒似を笑はせんとて烽火をあぐ。兵ども變ありと思ひてあつまれども、其事なし。それより後は、しばしば烽火すれども、相圖の火にあらざることをしりて、兵あつまらず。或時他方より敵せめ來りしに、兵をまねかんため、烽火をしきりにあぐれども、兵ども褒似がための烽火なりと思ひてあつまらず。幽王つひに敵のためにころされぬ。是民に信を失へるなり。

孔子曰、信則人任。信實にして言に僞なければ、一たび約したることその首尾たがはず。故に人たのもしく思ひて、打まかせてうたがはず。是人任ずるなり。もし信ならざれば、約ちがひてそのいへること朝夕にかはりて、たのもしげなし。なんぞ任せんや。

凡君の臣にまじはり、國人にまじはり、朋友の相ま

じはる、吏人の民に對する、皆信あるべし。信なければ、人の交の道たえて行はれず。たのみなければなり。

道を信ずる志は專一にしてあつかるべし。厚からざれば、あなたこなたに志うつりて、道を守ること堅固ならず。得ることあれども必失ふ。然れば、信なければ初道をこのむといへども、終をたもちがたく、巧言におよび邪道におち入りやすし。誠レ之者人之道也。誠レ之の道は、道を信ずること篤きにあり。道を信ずること篤ければ、之を行ふこと果す。果すとは行ひとぐるなり。之を行ふこと果せば之を守ること固しとは、道を守ること堅固にして失はざるなり。道を信ずること篤からざれば道行はれず。利欲にひかれ、外物にうつりて、道を守ること堅固ならず。道を信ぜずして、守ること堅固ならずば、萬の才能ありとも見るにたらず。是學者のおもんずべき所たり。

自信とは、みづから道を信ずることあつくして、其守ること堅固なるをいふ。たとひ世の人こぞりこれをほむるとも、我に善なくんば、よろこぶべからず。世の人こぞりてそしるとも、我にあやまりなくんば、うれふべからず。故に淮南子に、自信する者は、誹譽を以て遷るべからずといへり。いにしへの聖賢も、小人の誹をまぬかれ給はず。今の人、衆人の誹をおそれうれふべからず。然れども小人の忌憚ることなき者は、又世人のそしりをかへりみず。是君子の自信とは同日の談にあらず。

五常訓卷之五 大尾

文訓序

益軒先生平生の著述すべて百餘種に及べり。其坊間に出て、世に行はるゝはそが一のみ。況晩年に著はし給へるたぐひは、猶草本のまゝにて蔵めて篋笥にあるも亦多し。正德甲午の秋、先生世を謝し給ひし後、同門の輩、其令嗣令姪と共に先生の舊堂に會集し、遺編を檢閲して、こと／＼く梓に壽せむ事を議す。爾後定直東行して江府に淹留し、ふたゝび裘葛を更て猶いまだ西に歸る事を得ず、郷邑の同志も他の塵務に暇なく、荏苒として其宿志を果さず。此ごろ同志のもとより、わづかに文訓武訓各一部を淨謄し、便に附て寄せこせぬ。定直歡喜にたへず、すなはち京師に送りつかはし、書肆柳枝軒に授けて刊布せしむ。そもそも先生少壯の頃までは、程朱の書いまだ世にあまねく行はれず。小學近思錄のごときも、是を讀者猶すくなかりしを、當初先生京師に寓居し、二書を講說して學徒を導き、又備考を編輯して世に廣め給ふ。是先生著述の始にして、又吾邦において二書の註釋出たるも是を始とす。先生の功大なりと云へし。其後も相繼で著述多く、經義を發明し給ふ。然ども晩年に至りては、ひたすら民俗兒童の曉りやすく、日用の資となるべき事を俗話にて述作し給ふ、大和俗訓其始なり。相繼で家道訓、樂訓等をあらはし、其他亦訓を以名とせる書猶若干部を出し給へり。今此文訓武訓も其一なり。凡先生著述を好み給ふ事、ひとへに人を愛し、俗をあはれむの仁心より出で、一念も名に近き給ふ意なし。先生常に門人に語りて曰、天人を生じ、其才によりて、人に益ある事をなさしめ給ふ。上たる人の世を經濟し給ふより、下一村一藝ある者に至るまで、その程々につけて人に益ある事をなすは各その天職なり。皇天我を生たまふ其恩德尤大なり。我を生たまひて後又飮食、衣服、居室、財用に至るまで、我身を奉養する具あまねく備りて、

足ざる事なきも、皆是天の賜なれば、其恩徳亦廣大なり。人として此世に生長して。天の恩徳を享る其萬一にも報じがたし、只天の人をあはれみ給ふ心にしたがひて、人に益ある事をなすのみ其萬一に報ずべし。もし嘉穀を食ひ、白日を度り、空に一生を過さんは、いと恐多き事なり。みづから他の材藝なし。幸に古人の書を讀て、すこしの文字を作る事をしり得ぬれば、是を以庸俗を曉喩すべきばかり人に補あるべし。性命道徳の精微なるは、晩學の及ぶ所にあらず。況先賢の遺言既に著明にして、且詳悉なれば、是を論して餘あるべし。なんぞ末學の贅言をもちゐんや。只些少の文字を著はして、童蒙民俗の一助とすべき事、みづからの任にあたれりとて、一生の間著述に筆をとゞめず、八十五歳にして簀を易給ふ迄、孜々として倦給はず。先生の志仁にして且謙なる事、誠にかくのごとし。其謙遜かくのごとくにして、且其著述し給ふ所は、俗話のあさはかなるやうなれども、其旨至て遠く、其意尤深し。所謂道徳の實內に積で、榮華の文外にあらはるゝものなるべし。世儒或は內に道學の實なくして、外に君子の容を飾る類と、何ぞ天淵のみならんや。或は其鄙事を記し、名物を明せる書のごときも、事實の正しく辯論の確なる事、博洽精約の筆に出たれば、世間の用に補ある事、誠に大なりとすべし。就中文武の二は、仁義を行ふの要道なれば、上一人より下庶士に至るまで、其ことわりを知り、其道を行かずんばあるべからず。今此編を熟讀せば、庸俗兒輩といふとも、大槩をさとるべく、老師宿儒といふとも、志を起すの資益すくなからんや。凡先生の著し給へる書、俗をさとすの志深切にして、詞のいやしきもかへりみず、或は事の重複をもいとはず、諄々として唯其理の明ならん事を要とし給ふ。故に此編においても、重複に似たる事も處々に見え侍る。是亦先生人を導くにあつきの深志なれば、今更重複を刪らんも其本意にあらざる故に、舊に依

て隻言半句をも刊のぞかず、是を見る人其詞の或は鄙俚に似たる處をも、又其事の重複あるをもいとはずして、其理を玩味し、其說を受用し給はゞ幸甚からん。かくいひもてゆけば、あまりに事なが〳〵しく、観る人の倦労もいかゞと憚りおもへど、此度先生の遺編を、はじめて世に出し侍るついでに、其仁意の誠切なるかたはしをも、世の人にしらせまほしくて、拙き筆をさしおきかね侍るにこそ、猶其餘の遺編を世に公にせむ事は、他日を待のみ。

享保丙申冬至日　竹田定直書

文訓序終

文訓上之本

貝原篤信著

士は農工商の上に居て、民ををさむる位あれば、一心を以萬事に通ぜずんばあるべからず。故に古人字を作るに、士の字下は一に从ひ、上は十に从ふ。一は一心なり。十は數の極なり。萬事萬物をすべていへり。しかれば農工商の一事一藝にかゝはりては、萬事の用にかなはず。故に本を先にし末を後にし、先後の次第にしたがひて、廣く事をまなび知るべし。讀書學問するは本をつとむるなり。藝術をまなぶは末に達する也。たとへば草木の本幹立て、枝葉しげるがごとし。本を本とし末を末として、本末かね備はるべし。學問は四書六經を專とし、史學と諸子に及ぶべし。藝術は六藝文武の法を學ぶべし。六藝は貴賤ともにしらずしてかなはざる日用のわざ也。中につきて幼より禮を早くならふ

べし。禮をしらざれば、よろづのわざ法にかなはずして人道たゝず。古禮はもろこしの古書にしるせり。わが國にも今用ひて宜しき事多し。又宜しからざる事も多し。考へて用捨すべし。小兒の時より父母につかへ、兄をうやまひ、孝弟を行なひ、君をたうとびつかへ、賓客朋友に交はり、飮食言語立居ふるまひの法をまづ學ばしむべし。中につきて飮食の禮つゝしむべし。禮は飮食にはじまると古人いへり。飮食ほしいまゝにむさぼり、無禮なれば、いやしくして人間の法にあらず。禽獸に似たり。今世に傳はる和禮は足利氏の時におこれり。すこぶるわが國土の宜にかなひ、古禮にそむかざる事多し。小兒の輩まづ其要用をまなぶべし。次に書狀をかくに禮法あり。年やうやく長ぜば、是をならふべし。是亦日用の要事なり。手跡よくしても、書禮をしらざれば法にあはず、ひが事多し。音樂は、古よりもはら朝廷に傳はりて、衆人のまなぶ事成がたし。俗樂も淫聲にあらずんば、忠孝義理の道、其ふる事など、風雅なる詞を以つくりて、歌章として、小兒の時より習はしめば、をしへとなり義理をたすくべし。今の俗樂の章歌は敎とならず。又其ほど拍子のいそがはしきも、心をさはがしくして害あり。弓馬はいにしへより、わが國のくはしき敎あり。幼より學ぶべし。書法はからやまとの古筆をまなぶべし。能書を學ばざれば書學すすまず。風體よき書をゑらびてならふべし。風體あしければ書法にかなはず。近世國俗の書其風も習も甚いやしく、拙なし。本邦の書も古はよし。もろこしの人もほめたり。只其風體は中華に及ばず。凡手跡は、筆法正しくしてよみやすきをよしとす。用あるふみなどよみがたければ、巧なれども用ひがたし。よみやすき書もいやしければ、本法にかなはず。國字は別にわが國の法あり。ならふべし。眞字はもろこしの書を學ぶべし。日本流の眞字、

から流の假字、いづれも有まじき事也。中華の書は淳化法帖、殊王羲之以下諸名家の法帖など法とすべし。一書によく通ずれば、諸家もまなびやすし。算法は日用に切用なり。たかきいやしき、必ならふべし。わが國の風俗にて、高位の人は算をならはず、是古の法にあらず。大名高家にむまるゝ人は、貧賤なる人より、殊更算法をしらずんば有べからず。其故は士卒の數、領内の民數、國郡の廣狹、田數、年貢、所納の多少をかんがへ、國家の用分を制し、分限をはかり、人をはかりて出す事をさだめ、軍法において敵味方の人數をはかり、土地の遠近廣狹をかんがふるにも、皆算數を用ひざれば、其詳なる事しりがたし。是を以算をしらざれば、萬の事をはかるに、おろそかにして拙し。

經學は四書五經など、聖賢の書を幼より早くよんで義理をしり、古の道に通ずべし。

史學は左傳・史記、漢書・通鑑などをよんで古の事をしる也。六藝の内禮樂は文藝なり。射御は武藝なり。書數は文藝なりといへども、武事にも此二事なくては行はれず。

經術義理の學問をつとめて、本とすべし。又經學のいとまに、左傳、史記、通鑑などの史學をすべし、是末なり。經學は古の道をしり、史學は古の事をしる。經傳をよんで、其間には史學をすべし。學問は經史に專なるべし。

和學は、まづ日本紀以下六國史を見、それより後の東鑑以下の野史、近世までの記錄をも考へ見て、わが國歷代の事をしるべし。又律令格式などの本朝の古法を考へ知るべし。もろこしの傳記のみを見て、わが國の事にうときは、近きをすてゝ遠きをつとむるなり。緩急の次第を失なへりと云べし。しかれば日の本に生れたる人は、皆和學に通ずべし。もはらもろこしの事のみまなんで、やまとの事しらざる人、今の世にも多し。かゝる人は世に

にまじはりても、わが國をしらで事かけぬべし。日本紀、萬葉集の二書、わが國上代の事をしり、和語に通ずる益多し。和學をする人は先必よむべし。日本紀を見、次に六國史など、次に東鑑以下の野史を見るべし。

學問の要二あり。道を明らかにすると、事に達するとなり。道を明らかにするには經學をすべし。經は四書五經なり。是學問の本也。事に達するには史學をすべし。史は左傳、史記、漢書以下の記史及通鑑なり。經學のみにて史に通ぜざれば、古今にくらくして用に達せず。經學なく史學に偏なれば、道理にくらし。

わかき時は書をよむに三のよき事あり。氣つよくして、書を多くよんでもつかれず。是一なり。いとま多く妨なくて、書を多くよみやすし。是二なり。わかく氣さかんなれば、記憶つよくしておぼえやすし。是三なり。此三の事書をよむによし。又年たけて後書をよむにあしき事三あり。一には、すでに君につかうまつりて、つかさどる事あり。人のまじはりしげくなり、家の事又おほくしては、書をよむにいとまなし。二には、としやうやくたけぬれば、氣よわくなりて、つとめて書を多くよむ事かたし。三には、三十より後はとし〴〵におぼえよわくなりもてゆけば、少年の時一たびよんでおぼゆるほどの事を、年たけぬれば十たびよんでもおぼえず。こゝを以いとけなく、わかき年早く書をよむべし。もろ〳〵の藝は年たけてもならひやすし。只書をよむ事は、年たけてはおぼえよわく、氣力すくなくひますくなし。このゆへいとけなき時より、まづ藝などのことわざはおろそかにしても、もはらつとめて書をよみならふべし。是一生の身のたからとなるなり。書をよまざれば道にくらきのみならず、萬の事にくらし。書をよまざる人は、わがくらき事をしらず、はかなしと云べし。弓馬藝を

ならひても、文字なければ、藝の理にくらくして、其藝いやし。次に六藝をならふべし。ものゝふはつるぎ、ほこ、拳法などの術ならひしるべし。文學は本なり。文武の藝は末なり。本なければ人の道立ず、末なければ人のわざ行なはれず。文學をつとめずして。時をうしなふ人は、一生をむなしく過して身ををはる。をしむべし。藝なければ人事にうとし。一生の間事かくる事多し。わかき時つとめてしるべし。凡はじめにつとむれば、後に樂多し。わかき時まなばざれば、老てくゆれども益なし。

智ある人は、一紙のふみをよんでも益あり。やがて用にかなふ。愚なれば百千巻をよんでも益なし。用にたゝずしてをはる。こゝを以わがごとき輩は、寶の山に入ても手を空くしてかへりぬ。書をみる人も崑山に入らば、たからをもとめ得てかへるはかり事をなすべし。是書をよむ人の必心得べき事なり。しかれども近年は又四書五經をよまずして、假名がきわづかなる書をよみ、文盲なる師のわづかなる敎をきゝて、道を得たりとて人にたかぶりほこりて、數十年經傳を見たる學者をもないがしろにす。是井蛙の大海をしらざるにたとふべし。孔孟のをしへ、皆博學を以さきとし給ふを以其非をしるべし。聖人の道は廣大精微也。今の人の食物の料理本、なぞ〳〵の本などのやうなる事にては、其道理知がたかるべし。

詩を作り文をよむ事をきらふは、人々の生れ付によりて、其このみきらふ事、各かはれる事、たとへば上戸下戸の、酒をこのみきらふ事かはれるが如くなれば、左もあらばあれ、只學問をきらふ事は、心にもいみ、口にもはゞかるべし。いかんとなれば學問とはなに事ぞや。おやに孝を行なひ、君に忠をなし、凡人倫にまじはりて、義理を行はんがためなり。此道を古の聖人のをしえ置たまへるをまな

ぶを云にあらずや。されば詩文つくる事をきらふにはかはるべし。人となりて忠孝以下の人の道をきらはゞ、不孝の子不忠の臣となりて、天地の間の大なるとが人にあらずや。かゝる人は世に立がたし。しかれば學問をきらひて世にたゝんとするは、狼藉の人なるべし。

孔孟また生れ給ふとも、論孟の二書のをしえにかはる事なかるべし。しかれば今論孟を見る人は、即孔孟にまのあたり教をうくると同じかるべし。此おもひをなしてよく心を用ゆべし。其上孔門の顔子のきける所は、子路きかず、子路のきける所子貢きかず。論語の一書に皆あつめて記せり。しかればまのあたり教をうけたるにもまさり、大なる幸にあらずや。

むかしは和歌は好色の媒にかぎらず、人倫の交に、たかきもいやしきも、折ふしにつけてやまとうたをよみ、おくり返して情をかよはし、志をあらはせし事、後代の及ばざる處なり。今の人我身のよむまでこそかなはずとも、和歌はわが國の風俗にて其ことばしりやすく、其ことはりもさとしやすければ、すこし心にかけてまなばゞ、などかしりがたからん。萬葉集、古今集を先として諸集をよみ、其内の秀歌を誦しおぼえて、折ふしにかなひたる古歌を詠じて、こゝろをなぐさめば、わがよからざる歌を、心をつくしてよむにはまさりなん。

もろこしのひじりのとき給へる、四書五經のをしえは、わが日本の人、其文字もことばも目なれず、きゝなれず。いはんや其道理いたりてふかくして通じがたけれど、それだにわが輩のつたなき才にても、つとめならひて後は、すこぶる其理のかたはしに通ず。いはんややまと歌はわが國のことばなれば、そのことばよみやすく、其こゝろしりやすし。是をまなばゞ、心をやはらげたのしましめて、性情をやしなふ助とも成なん。わが國いにし

へより、和歌を以好色のなかだちとせし風俗あり。わが國のならはしなりとて、あしき事はまなぶべからず。歌は心をやしなふ道也。心をやしなふ道を以、好色の媒として心をそこなふ事なかれ。戀とは人をおもひしたふを云。おやをしたひ子をおもふをはじめて、情ふかければ思ふ事せちなり。是戀にあらずや。

もの丶ふも和歌の道しらぬは、他の才藝ありても風雅なる心なくて、むげにいやしく人に見おとさるる、口をし。千載集の序にも、和歌の事をさして、是をまなびたづさはらざるは、面をかきにしてたてらんがごとしといへり。學問のいとまあらば、少の力を用ひて是をならふべし。

和歌はわが國俗の宜しきわざにて、ことばさとしやすく、心も通じやすし。此故に古人の歌きはめてすぐれてよき事、もろこしのすぐれたる唐詩におとらず。いにしへ婦人といへども、歌をよくよみたるともがら多し。もろこしの才女といへど及ぶべからず。これわが國俗によくかなへる故なり。

詩はわが國の風俗にそむけり。國土に宜しからず。こゝろ、ことば同じからざる故に、かよひがたくしりがたし。中夏のことば意に通じがたし。故にいにしへ本朝の才士名家といへども、詩ははなはだ歌におとりてつたなくして、中夏の作には大におとれり。中華の詩に及ばざるのみならず、やまと歌にも大におとれり。もろこしの詩にも和歌にも及ばざる事かくの如し。わが國に宜しからざる事を作るは、土宜にかなはず。古今の序にかける詩賦の作、日本に行はれしより、和歌の道おとろへしよし、げにもわが國俗にあらざれば、歌をよまずして詩を作るは本末たがへる也。博學多識にして詩才あらば、作るも可也。しからずんば、わが心にかなひがたくつたなきを、人に見せてわらはれんもはづかし。和歌をよまば情をのぶるに事

足ぬべし。古はいやしき人まで和歌をよみて、たがひに其なさけをかよはしけるこそ、うるはしき事に聞え侍べれ、風體を正しくせば、好色の媒(なかだち)とせずして、人倫のまじはりに心をあつくし、なさけをふかくするたすけともなりなん。されど今は世〻だり心こと葉もいやしくなりにたれば、其才なき人、あながちによまんとせば、これになづみて學問のさはりともなりなん。其上和歌は官家のをしへをうけざるゐなか人は、みだりによみがたし。たゞ萬葉、古今集以下ふるき歌書を見おぼえて、をりにふれたる古歌をうちずせんこそ、わがつたなき歌をよまんより、心のなやみなく、いたつかはしからで、かへりていとおもしろかるべけれ。

詩も又風雅の道なれども、わが國の俗(ならはし)にあらず。わが國の作者は、いにしへよりさばかりの名家といへど、多くは風體正しからず、其詞も意も、おそらくはから人の下品なるにもくらぶべうも見えず。書生にあらずんばつくらずともありなん。わがともがら、詩學なく、其才器(さいき)なくして、拙き詩文を作るは、良工(りやうこう)の目より見ば、かたはらいたき事なるべし。鄙俚(ひり)なる詩文をつくり、わが才のつたなきを世にあらはして、人にそしらるゝはおろかなりと云べし。顏之推(がんしすゐ)がいへる詅癡符(れいちふ)のそしりもはづかし。わが拙き詩をつくらんよりは、古人の詩の其興(けう)にかなひたるを誦(ず)せば、かへつて面白からん。拙き詩を一首作らんいとまには、好書一卷をばよむべし。しからばよからざる詩を作るは、讀書のひまつひえて、無益なるいたづら事なるべし。只天性詩才すぐれたらば、其心にまかすべきか。それも五箇の字を吟じ盡して、一生の心を用やぶるは益なし。

からの詩、三百篇をはじめ、風體よき詩の秀(ひいで)たるをばよみならひ、吟詠して性情をやしなふべし。拙き

詩をみづから作るは無用の閑勞擾なるべし。三百篇の後は楚辭の賦、文選の古詩と、取分淵明が詩・唐詩の風體よきを見るべし。すゑのいやしき風を見ならふべからず。ことに我國の詩文は、古今ともに風體も詞藻もいやしく、ひが事多く、拙くして中華に及ばず。是を見ならふはあしきくせとなる。凡詩文もあしきくせつきては、後に改めがたし。はじめより風體をゑらびてまなぶべし。

我が國の俗、和歌にて情をかよはし志をのべば、事たりぬべし。詩はわが國俗にあらざれば、おのがち作らずしもありなん。義理を論じ行事をしるすにいたりては、國字を用ひてはそのことはり思ふやうにかきつくしがたし。必中夏の文字を用ゆべし。博く書をよみし人も、かねて中夏の文章を學びざれば、時にのぞみ筆をとりて、文を作るべきすべをしらず。みだりに作れば法にあはず。文字のおきやう、つゞけやう、布置成語連續助字の法をしらずしてひが事多く、文字顛倒して置やうちがひ、文理をなさず。識者の謗免かれがたし。殊中夏の人の見て誹笑せんもはづかし。故に學士は必文章を學ぶべし。是を學ぶの法、まづ六經語孟を本とし、左傳、史記、漢書、文選、韓柳、歐蘇等の文を學ぶべし。其中について、心にかなへる文をゑらびて、三十篇ばかりそらんじ、書をぼえて熟誦すべし。如斯すればをのづから文法をさとり、文字の書やうをしるべし。經史をみるいとまには、少の力を用ひて、作文を學ぶべし。本邦の古文、淫靡、柔軟の風をば見習ふべからず。麗飾を事とし奇巧をこのむは、儒者の文にそむけるのみならず、文人の文におゐても貴ぶ所にあらず。凡わが國の詩文は、國俗にあらざれば、和歌和文の絶妙なるにはいさゝかくらぶべらもなく、おとれりと云べし。本朝いにしへの名家、詩文にたくみなりといはれし人の作も、近代もろこしの名もなき末の

世の作に及ばず。文字を業とする人にあらずんば、詩は作らずともありぬべし。されど今時は、世に詩をよく作る人多きといへば、古にもまされるなるべし。かく天才あらばつくりてもはぢなかるべし。

文訓上之本終

文訓上之末

貝原篤信著

和歌はいにしへ賤者といへど、これをよんで心をかよはしける。今は世くだりぬれば、只堂上のもてあそびとなりて、地下人殊にかたゐなかには、此風をつたへがたし。都の人だに堂上の傳をうる事かたし。いなかの人は彌遠くして及がたし。故にわが日の本の内にても、堂上は遠くして和歌をつたへてしりがたし。況詩ははるかなるもろこしの風俗にて、わが國のことばにあらざれば、和歌の道堂上にあるよりもいよ〳〵遠くして、其道に通じがたし。地下の人又遠きゐなかの人の歌をよむは、堂上の詠に及ばずといへども、其こゝろことば、かなへる事多し。是わが國のことばなればなり。わがくにの詩は身ををはるまで、もはら是に心を用る人にあらずんば、もろこしの下賤にも及がた

かるべし。是わが國の風にあらざればなり。しかればわが國に生れたる人は、只わが國の名にしおへる和歌をこのんで、其志をいふべし。詩は學識にある書生の外は、やむ事を得ざるにあらず、天才なくんばつくるべからず。此ことはりをしれる人は、詩をこのんで作らず。作れどもつゝみて人にあらはさず。詩をしれる人にあらはれんも口をし。古人詩の才なくしてこのんであらはすをば、顏之推が家訓に詅癡符と云。わがおろかなる事を人にほこり、わがはぢをあらはすふだなりといふ意なり。詩をしらざらん人に見せば、さもいふべからず、詩をしれる人是を見ば、此そしりをまぬかれがたかるべし。況もろこしの作者にわが國の詩を見せば、おほくは詅癡符なるべし。はづべし。

詩文章を作るに故事を引用る事、用意あるべし。其所にひかでかなはざる所に用ゆべし。さなき所に用るは、是廣才にほこりかゝやかさんためなれば、かへつてつたなくして見ぐるし。和文も又如斯なるべし。

其才器ありて詩歌を作らんは誠によし。そのうつはものにあらずば、しひて詩歌をつくりて人にあらはるべからず。もし詩歌を作らば、詩歌をよくしれる人を師として、其人に見せて其あしきを改むべし。もし明師にあはずんば、略詩歌をしれる正直なる友にみせて、其評論をうけて改正し、其後人に示すべし。わが作れる事はわが心の私にひかれ、そのほどよりよく見えて、ほこる心もあれど、人はさも思はず、かへりてあざけりわらはるゝ事多し。

なまじひのつたなき詩歌を作り出して、心をくるしめ人にあらはれんよりは、古人のつくれるよき詩歌の、其時とその事にかなへるを吟せば、心をつくしてあしき詩歌を作らんよりは、はるかにまさりてたのしみふかゝるべし。俊頼も折ふしにかな

ひたる歌を詠ずるは、よむにまされりといへり。俊成も折ふし面白き所からなどに、なまじひの歌よまんよりは、時におひたる古歌を吟じたる、面白しといへり。

はかなき筆のすさみにて、人の心の內も見ゆることはりなれば、詩文をつくりものかく事も、つねに心にかけてつゝしまざらんや。

書狀のことばこそ誠に心を用ゆべき事なれ。本邦先代定められし書禮の法、今に至て世にこれを用ゆ。もろこしの賢哲の定められし禮法にはあらざれども、世俗の宜にかなひて、すでに國法となれり。書禮しらぬ人はわが身の分をわすれ、おごりて人をいやしめ、或うやまひすごしてへつらひとなる。二ながら無禮と云べし。書禮をしらばおごりなく、へつらひなくして、過不及のあやまりすくなかるべし。されどふみにはつねのことばよりは、すこし人をうやまひ過したるが、書禮の法なりとぞ。等輩にも啓上・恐惶などかくを以しるべし。此意得ありてかくべし。おごれる文言かくべからず。文字しれる人も、書禮をしらざれば、日用のちかき事にうとく、ひが事ありて無禮なる故、人にわらはるゝ事あり。少心を用ひてこれをしるべし。もろこしの書簡をまなぶにくらべば、まことにいとやすき事なるべし。

文字しらぬ人は、つねの言語にもあやまり多く、かたことありて聞にくし。又書狀の詞もつたなくして、理もきこえず。かくの如くなれば、つねの才行よりもはるかに人に見くだされ、人にわらはれて、辯の人にすぐれたるも、貌のうるはしきも、むなしくなるこそあさましけれ。又世に行はるゝ通用の文字、言語の字、諸物の名の文字をしらざれば、世事にうとく、事ゆかざる事多し。世間通用の文字をもつとめてしるべし。經史の文字をしるにくらぶれば、きはめてたやすき事なり。少心に

かくべし。それだにしらざるはむげにいやしむべし。

およそ世俗の書狀などにかく文字に、ひが事多し。察すべし。又そら字多し。是亦其あやまりを知るべし。但あやまり來りて改めがたき事もあり。それをしひてあらため、ことやうなるは、時宜にそむきてあしゝ。

われ文字しりたりとて、しらぬ人に對せるふみに、ことさらにむづかしく、ふるびたるからの文字をこのんでかくは、わが才學あるをあらはさんとにや。其心おしはかられていとみぐるし。只其人のよく心得べき文字を、さすがつたなからずかきたらんこそ、目やすかるべけれ。

わが名をあらはさんとて、わがともがらいやしき詩文を作り、人に見せ世に傳へんとする事、無益の事なり。われら文學ともしければ、つくれる文字つたなく、其上ひが事多し。わがひが事はみづから見えず、人もいはず、かげにて人にわらはれ、後人にそしられんも口をし。名を得んとて名をうしなひ、ほまれを得んとてそしりを得る事、おろかなる事なるべし。されど天才ありてたくみなる人は、其心にまかせ玉ふべきにや。わがかゝるあさはかなるつたなき書を作るは、只小兒の輩にしらしめんため、又わが志す所あれば、やむ事を得がたくして、わが拙きを忘るゝ也。

人の文字を見ば、よき事はほめ、さほどなきはかげにてもそしるべからず。人のつとめて作れる文字を、一言にたやすくそしりおとさんもなさけなし。作れる人そしりをきかば、ほゐなく思ひ、うらみいかるべし。是をそしるは不仁無禮にて、道理にそむくのみならず、人のうらみをうけてあしゝ。又あしき文詩をほむるも、いつはりにてほいにあらず。只其よしあしをいはざらんにはしかじ。

今時の人の作れる文字にも、所々にはよき事あり。

是古人の書をよりてしるせる故、又凡人もまれまれにはよき事をいひ出す事もありなん。しかる故に人の作れる文字を見ば、よきはほめあしきはかくす。是人の文字をみる法なるべし。人の作れる文字をそしる事を好むくせある人あり。是不仁無禮戒むべし。古人の作れる文字すらよきあしきあり。況今時の人の作れる文字などが、よき事のみ有べきや。それをとがめてよき事をばすてゝ、あしき事のみいひあらはすは不仁也。是文字を見る法をしらざる也。わが作れる文字は、よきもあしきも自負してほこり、人の作れる文字は、よきもあしきもいひおとすはあさまし。

わが日の本の人、義理の學をせんには、四書六經などの書をよまずしては道を知りがたし。國字にて書くは其理くはしからず。風雅の樂はからの詩を用ざれども、ふるきやまと歌をよんで心をたのしましめ、才あらばみづから歌をつくりて、其情を通ずべし。詩を作るよりやすくして心かよひやすし。しかれば義理の學をするには、からの書をよまざれば通ぜず。風雅の樂志をいはむには、からの詩を用ひず、やまと歌を用ゆべし。わが國の風俗をすてゝ、からのことばの通じがたきを用るはなんぞ。

わが日の本の人、いにしへはやまとうたにはたくみなれど、詩文章はわが國のことばにあらざれば、久しく心を用ひて作れる人も、中夏の作には及ばず。法にかなはずしてひが事亦多し。いはんやわがともがらいやしきことばを人にあらはし、みづからいみしとおもへど、人のわらはん事はづかし。

詩歌は只おりにあひたる古人の作を吟じたらんこそ心をくるしめてつたなき詞をつくらんには、はるかにまさりてなさけふかゝるべし。もはら詩をこのめる人は、古人の五ヶの字を吟じなして、もつて一生の心をやぶるといへるがごとし。いとふよ

らなり。益なし。やまとうたも、ひろくいにしへの歌集をしらずして、みだりによむ人はひが事多く、わらふべし。しらずしてみだりに詩をつくり、うたをよむべからず。しれる人の見るめはづべし。

眞字の文章をつくるに、文字の置處をあやまり、助字をあやまり、連字をあやまり、俗語を用ゆる。まづ此四の誤を去べし。

和文を作るに、文をあやまり、字をあやまり、かなづかひをあやまり、てにはをあやまる。まづ此四の誤を去べし。

詩はもろこしの詞なれば、文學せざる人の作れるはひが事多し。和歌はわが國の詞なれば、たやすかるべけれど、これ又いにしへの世々にゑらばれし萬葉集、古今集よ下に通じ、伊勢源氏などいふるきふみを多くよまずして、心もひが事多くして、歌とはいひがたし。すべて詩も歌もいにしへをかうがへず、みだりに作るべからず。しかるに詩歌をしらざる人は、わが作れるつたなき詞に誇らしくいひさはぐもをこがまし。すべて詩も歌も其道しらでたやすくは作り難し。

わがともがら、詩歌の才力なきもの、詩歌のつくりがたき事をしらで、みだりにこのんで作れば、さこそ見ぐるしくいやしきことは、人にわらはるべけれ、人つげざればあしき事をしらず、かへつてみづからはよきと思ひて、ほこりて人にかゞやかす。

わが詩文和歌などのひが事あり、つたなき事をしらで、人にあらはすはいとおろかなり。ひろく人に見せざる内に、わが師友にひそかに見せて、其非をたゞさるゝは尤よし。それもわが作にほこりて、師友にみするはあしゝ。詩文のあしき事、師友といへど正直の人にあらざれば、其あしき事はつげがたし。

文學なき人の漢字の文をかくは、文理ちがひてことはりきこえず。又つゞかざる字をみだりにつゞけ、

字の置所ちがひ、文字筆書もあやまり多し。故に文字なき人、事を記さんとせば、ふつゝかなりとも只國字(かな)を以てかくべし、或世間通用の俗文を以かくもよし。かなと俗文はあさはかなりとて、漢文を以かくべからず。文學なき人の漢字をつらねかくは、ひが事のみ多くしてよみがたく、理きこえず。人のわらひぐさとなるもはづかし。漢字をしらざる人は、自そのひが〳〵しき事をしらずしてはぢず。又かなにて事をしるすも、同じふるき和文をしらざれば、ひが事多くして文理ちがひ、かなづかひ、てには皆あやまり多くして、わらふべし。必しらずしてみだりにかくべからず。事をしるすに、かざりて拙き文を以しるさんよりは、俗語を以かざらずして書たるはいやしけれど、かへつて文理明らかにして見やすし。凡文字を作るには、人の見やすく心得よきをよしとすべし。

もろこしにて、むかし人に對し、其時にかなひ、其席にあへる事を、古き詩をうたひて其情(じやう)をのべし事、左傳など古書に多し。上代の才たかき人、其時にのぞみて詩をつくる事かたからず。しかるに古詩を引たるは、今新しく作らんより其情ふかくして、よく人の心を感(かん)じうごかす事、今あたらしく作れるにまさるによれり。今の人もなまじひのわがつたなき詩歌をつくらんより、古人の詩歌の其をりにかなへるをとり出して吟せば、われも人も感をおこす事ふかゝるべし。

天才なき人、みづからつたなき詩歌をこのんでつくらんより、古人のたくみにつくれるよき詩歌を吟ぜむこそ、わが心をくるしめずして樂しかるべけれ。詩はことにわが國の風俗にあらず。つたなくしてみづからつくるは、心も勞しいとまもおほくついゆ。其ちからを以書をよみたらんには、樂しみも益もおほかるべし。もし天才あらばみづから詩をつくるもよし。およそ學問の道、六藝なども

道しれる人にまなぶべし。其外萬の事は、その事をよくする人のわざを取用れば、わが身いたつかはしからずして、其わざつたなからず。たとへば身い病をれうするに、良醫にゆだねたらばわざはひなかるべし。しかるにわが少まなべるつたなき醫術をよしとおもひ、みづから藥を用ひてあやまらんは、むげにおろかなりと云べし。

何事もしらぬさましたるぞよき。みづからはわたくしにひかれて、よくしれりと思へど、いまだよくしらぬ事多ければ、わが心にゆるしがたし。よくしらでしれりとするかはつきなるもにくし。子路のしらざるをしれりとするは、いつはりてしれりとするにはあらず。わが心にはまことにしれりとおもへど、わが氣あらく心くはしからずして、あやまりてすでにしれりと思へる也。ひとへにおもへば、まだしらぬ事をすでによくしれりと思ひあやまる事多し。うらのはまゆふの百重なる事を思ふべし。

義理の學、文字の學ある人、又文學なく其一村一藝に長ずる人にあはゞ、わが才學と藝能にほこらず、みづからはもだしていはず、只其人のしれる事を尋ねて、其言語をつゝしんで聞べし。必益あるべし。わが智を先だてゝ才學にほこり、わが少しれる事をよくしりがほにかたれば、われに益なし。みづからは才智をあらはさんと思へど、識者のいやしむ所なり。學藝ある人のいへる事を聞てこそ、益あるべけれ。人にいはせずして、我ひとりいはば益あるべからず。又藝ある人にかぎらず、其人の居る處の國土の名所、舊跡、土産などの事、又其人の家業の事に付ても、尋問てよくきかば必益あるべし。凡人に問は智を求る道也。

われに學ありて、われにしたがひきく人あらば、心をつくしてをしへさとすべし。しからずはとくべからず。又わが心に自得せる事あらずとも、其理ふか

くして、其人きゝ得がたき事ならば、人にかたるべからず。遠識の人に非ればさとしがたし。孔子も、共に云べからずしてともにいふは、言を失ふとのたまへり。

世に文學なくして、みだりに道をとく人あり。孝弟忠信などの道を行ふ事は、一文不通の愚夫愚婦も。其はしをばしりやすく、行やすし。是を以學なき人にときかするはよし。かなの書をよみ人の物語をきゝ覺えても、淺近なる事はしりやすし。草醫の、近世の名醫の作れるかな書の方書をよみても、輕き病をばいやすが如し。しかるに義理の學は、天地人の大道をしる事なれば、まづ文字をしり、四書五經以下歴代の聖賢の書に通じ、三史通鑑など古今の事にもひろく通じて、やうやくしるべし。かくの如く博く書を見ても、道をしらざる人は多し。聖賢の書に通せず、文學つたなくしては、大道に通じがたし。文學なくして道をしりがたき事、たとへば通事なくして異國の人の言語に通じがたきが如く、又小刀にて大厦を作らんとするが如し。文學つたなく經傳にくらくしては、大道はしりがたかるべし。

一師五友は、學者の閑居して、師友なき人のしひて名づけしなり。されど理なきにあらず。一師は書也。聖賢の書は師としてたふとぶべし。次に筆硯紙墨案の五は、わが學をたすくる物也。つねになれて友とすべし。學者のまじはる所此外にいでずして、其樂きはまりなし。貧家には一師を求め得る事誠にかたし。其次は、五友のよきをゑらび用る事もたやすからず。もし是を得ば其樂多かるべし。

人は只わが身をかへり見て、わが身のさかしおろかなると、さえあるとつたなきとのほどをしりて、つねに人にへりくだり、わが身にほこるべからず。才智ありてもなくしても、わが身にほこりたかぶり、人をこのんで見くだし、又そしるはつみふか

し。いとおろかなりと云べし。

朝ゆふ古いふみを見れば、わがともがら愚なる者も、かけまくもかしこき、ひじりの御をしへを、まのわたりうくるがごとく、次には古のもろ〳〵の賢者にまみゆる如くにて、心より外にたうときまじらひかなと思ひ、わが身をかへり見れば、ひが事おほかりしありさまを思ひ出るもはづかし。

凡詩文章をつくらば、ことば平賨(へいこつ)にしてたくみにかざらず、ことなるあやしき事をいはず、やすくすなほにして、さすがにいやしく拙からず、ふるめかしかるべし。こゝろはあたらしくして、わが志を云のべんこそよろしかるべけれ。

今の人詩を作るは、其人わが身に私して、みづからいみしとおもひて作るも多かり。又みづからつたなき事をしりて、わが作にほこらざれども、其人おもへらく、古人の如くうるはしくはならずとも、只時々の意氣をこゝがめ情(じやう)をのべて、心をなぐさめんれうなれば、つたなくとも害(がい)なしとおもひて、詩を作る事を好めるなるべし。今時の人の作れる詩、つたなくしても大やう詩の法にかなひて、ひが事すくなくば、其人に應じ情をのぶる助ともなりなん。わがともがらの、文學つたなく、詩を知らざる者の作れる詩は、文字のつゞき、字の置所、意を用る事皆法にかなはず。かゝる詩は拙きと巧(たくみ)なるとを論ずるにもいまだ及ばず。ひが事多く、法にそむきて、詩とはいひがたし。たとへば和歌をよむに歌學なく、久しく心を用ひず、又官家の傳を得ずして、みだりによめば、詞のつゞきも古のことばにあらず。てにはも法にちがひ、一首の心きこえざれば、和歌とはいひがたし。かゝる歌をよんでは、わが心をなぐさむべきやうなくして、必人にわらはる。しかれば和歌をしらずんばよむべからず。和歌はわが國のわざなれど、それだにかくの如し。況遠きもろこしの詩を學ばん事、わが

國俗のことばにあらず。文學つたなく詩をしらずんば、いかにして法にかなはんや。文學すぐれ、詩に久しく心を用ゆるにあらざれば、惡詩も作りがたし。わが輩の作れる詩は、詩をしれる人のそしりわらはん事はづかし。才學すぐれ、詩に巧なる生れつきならずんば、詩を作るべからず。才學ありても天性詩につたなき人あり。曾南豐は詩のよからざるがごとし。わが得ざる事は好むべからず。わが國にては、さいはひに和歌をよんで、情を述るにあまりありて事たりぬ。たとひ文學ありて詩を作るだに、わが國の歌をすてゝ異國の風俗の詩を好み作る事、近きをすてゝ遠きにはしるあやまりあり。況文學つたなくして詩をつくり、かへつてわが國俗の和歌をすつるはつみあり。

和歌は日本の風俗なれど、天性歌よむにつたなき人あり。歌學ありてもよみがたし。いはんや和歌の道しらずしてよめば、ひが事多く、必人にわらはる。勞苦してはぢを求むるは、益なくして損あり。歌學して後、人の教をうけて歌をよむべし。

文訓上之末終

文訓下之本

貝原篤信著

父兄たる人は、其子弟のいとけなき時より、はやく師をもとめて、書をよませ、道を學ばしむべし。又いとけなき人も、みづからわが身をかへりみて、はやく書をよみ、文字をおぼえ、道をまなぶべし。わかき時おこたりてつとめざれば、年長じ、老て後悔すれどもかひなし。およその事はやく後の事をはかりて、悔なからん事をおもふべし。

富貴長命にて福多き人も、學問なければ人の道を知らざるのみならず、古今の事に通せず、萬物の理にくらし。只草木と同じくくち、禽獸とおなじくいけるはかりを思ひ出にして、人となりていける樂なし。むげにあさましといふべし。

かたちうるはしく、ものよくいひ、よききぬきて、賓客に對し、すがたことばはすぐれて、人のもてなしよく、其ふるまひうるはしく、目だつほどなれど、文字をしらず、古今の事にうとく、かたこといひて、人の耳にたてば、すがたことの葉のうるはしきもむなしくなり、人にみおとされ、あさましく下ざまにみゆるはくちをし。

世の中に、生れ付すなをなれども、書をよまず、又書はよめど道に志なき人あり。をしむべし。つとめて書をよみ、道に志あれども、正學のすぢをしらずして、身ををはるまで、大道にうとき人あり。是亦をしむべし。是皆聰明の至らざる故なり。

常人はわが身をしるにくらし。是私の一字まぬかれがたければ也。わが身に才智なけれどありとし、小なるは大にありとす。學問藝能つたなけれど、すぐれたりと思ひて人に對してほこるは、わが身をしらざる也。是愚なるなり。又わが詩歌、文章のつたなきをよしとおもひて、人にしめす事世に多し。ことに詩文はわが國のことばにあらず。作

りがたし。其上文學ひろく、文字を多くしらざれば作りがたく、作ればひが事多し。文學つたなく、このんで詩文を作れば、意も詞もふつゝかに、法に合ざる事のみ多きをしらず、わが身に私して、かへつてよしとおもひてみづからほこり、わが美をあらはさんとて人にしめす。是亦わが身をしらざれば也。不智なる事甚し。詩も歌も古人の作わが心にかなへるもの多し。其境地の風景と、其時節の情懐(じやうくわい)に合へる詩歌亦多し。是を吟せば、勞せずしてわが悪き詩歌を作るにまさりなん。是を吟詠して興をやるべし。

凡、吾邦の人詩文を作るに、只奇異なる文字を多くつらね、故事を處々に引出したるのみにて、まことの志をあらはし、情をふくめる事なく、義理なく、質實ならずして、奇異をこのむは、文章の本意を失へり。詩は志を云を本とす。文は理を論ずると事をしるすを本とす。たくみをこのみ、かざりを專にし、無用のことばをつらぬるは益なし。詩文を作る本意にあらず。

よく書をみる人は、一句をみても其理を得て用れば、用をなして益あり。よく書をよまざる人は、千萬卷のふみをよんでも、其よき事を取用ゆる事をしらず。益なし。たとへば石をわりて、玉をとる人あり。是よく玉をしればなり。寶の山に入ても、手を空くして歸る人あり。是玉をしらざればなり。書をみる人、益あると益なきとも亦かくのごとし。

かなづかひと云は、國字四十七字の内い、ゐ、を、お、え、ゑ、此三は同音也。上中下の有所につきて、用る字かはる也。はひふへほの五字、置訓の下にある時は、わゐうゑをとよむ也。是は同音に非ず。上のい、ゐ、を、お、え、ゑは同音也。上のつゞきによりて、轉じて同音として、字を書かゆる也。はひふへほと、わゐうゑをは同字にあらず。同音にあら

ざれども、下にある時は同音としてよむ也。又漢字の音も、韻の開合にしたがひて、文字づかひかはる、又てには、字によりてかなづかひかはる。

不學なる人、或書をよみても、粗學なる人は、人の言行の善惡を評論し、又人の作れる詩文章のよしあしを評論する事、多くは理にあたらず。學問なく不智にして、人の是非を評する事なかれ。おろかなる人は事の善惡をしらず、只人の云事を信じてまよひ、みだりにほめそしる事多し。是非をしらざる人の云事を信じて迷ひ、みだりにほめそしるべからず。凡不知にして人の是非を云事は、理にあたらずひが事多し。又少書をよみて、みづから是としてわが才智にほこり、人のよしあしをほめそしる事をこのむは、知なきが故也。

凡わかき人、智なき人、無學なる人、此三品の人は、つゝしんで人をほめそしるべからず。必理にかなはず、ほめそしり、理にちがへば、其過なる事あらはれてはづべし。

詩文章をしらずして、人の作れる詩文の善惡をほめそしるべからず。手跡をほめそしるも同じ。手紙をしらずして、人の手跡の善惡をほめそしるべからず。

儒とは學者の稱といへは、本邦近世の書生をも儒者と稱すべきか。其儒者の內其性と習により、學術の品各かはれり。詩文章を專つとめとし、奇異の文字をこのみ、詞をかざれる學あり。もし心を用る事くはしからず、其學びやうよからざれば、其好むでつとむる事久しけれど、其文詞つたなきあり。又近世の儒に、文學つたなく、いやしく、疎異學をまじへて正道をしらざれども、其守約に、其素行篤よくして、俗學にまされるあり。されど聖賢の書多くよまざれは、道理にくらくして學術よからず、正理をしらで自ほこる固有。又程朱の書を信じて、學術麤ならず。其制行も圓謹て正なれ

と、聰明たらず。義理にくらくして通ぜず。訓詁になづみてかへつてみづからほこり、人にたかぶりて、人に對するに刻薄にして善をこのまず、仁愛すくなく、古禮にかゝはりて、當世の時宜をしらざる儒あり。かゝる人はみづからは道學と思へれど、是即訓詁の學なり。終身つとめ學べども自得のしるしなし。又頗聰明にして義理に通じやすかれど、文學たらずして廣博ならず。窮理の功すくなく、其趣せばきあり。或雜書小說を多くよみて、義理をこのまず。經史にうとく、佛老をまじへたる雜學あり。是各其才の長ずる所、性のこのむ所によりてしかり。只聖學に志ふかくして、經傳に明かに、よく思ひ功ありて、義理に精しく、且史書にひろくして、古今に通じ、子集にわたり、文章詩賦をしり、字學に精しき通儒、もしあらばたうとぶべし。

わが輩の作り出せるつたなきふみは、漢字も國字もあさはかなれば、人のみるめもはづかしけれど、もとより天地の御めぐみことにふかくかうぶりぬれば、其萬一をむくひ奉らんとするもおほけなくして、そらおそろしけれど、字をしらぬ人と、小兒のともがらのために、かゝるよしなしことをかきつゞけ侍べる。凡人と生れては、官位の高下、財祿の多少によらず、諸人のために益となる事をつとめなすべし。もしわが名をとらんとて、人に益なき事をすゝむるは、世のたからをつゐやし、人の補とならず。わが輩はづべし。もし民用の助にだにならば、鄙事小說をしるしあらはすとも、いやしみて益なしとすべからず。道學の名を立る君子のそしりもはづべからず。中華の文字よみ、義理の學のため書を作らん事、中華の先正の說、すでに明らかにして備はれり。わが輩愚不肖のつくれる書は、かへつて無用の贅言なるべし。

文學ひろく、聖賢の書をあまねくよんでも、道をしらざる人古今多し。かくひろく書をよんでは、道

をしるべくしてしらざるは、志なく聰明なきゆへなり。文學に通せず、聖賢の書を多くよまずして、道をしれる人は、古今これなし。是道理のなき所なり。舟橋なくして海河をわたり、梯なくして高きに登らんとするが如し。近世一種の學問文學をせずして、聖學をせんとするも、文學して義理をしらざるも同じ。たとへば歌學をせずして和歌のあしき人はあり。歌學なくしてうたよくよむ人はなきが如し。但學問なく、すこし師の口傳をきゝて、頓心をさめんとする人あり。是亦きかざるにはるかにまされり。稊稗の熟するは、五穀の熟せざるにまされるが如し。

四時につきて、いつともわかずふるきふみ見る事を樂しみ、つねにしてやむべからず。これを只三餘の時にかぎるべきや。春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜のながきをよろこぶ。折を得てたのしむべし。日ながけれど事しげく、客おほければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ日ひとひ夜ひとよふみ見る益は、いかなる富貴の樂にもかへがたし。經傳をよめば、見るたびに聖賢のをしへをまのあたりきくが如し。たうとぶべき事かぎりなく、むなしく過ぬる隙をしむべし。狄仁傑の、名教の內、至れる樂あり。なんぞ俗人とかたる事をこのまんやといへるもむべなり。古語に曰、讀レ書一日在二一日益一。讀レ書一卷有二一卷益一。又曰、人の神智をますは書にしくはなしといへり。智をまして且樂あるは大なる益にあらずや。歐陽子は、至哉天下樂、終日在二几案一といへり。無學なる人は、學問の樂かくのごとく、いたりて大なる事をしらず、をしむべし。たとへはわが國にむまれて、富士のたけ吉野の花見ざらん人だに、いとうらみ多かるべし。かゝる人に見せまくほしくぞおぼゆる。いはんや人となりて人の道をしらず、古今の事萬物の理にくらき人は、さいはひなくうら

みあるべし。しらせまくほしき事、なんぞ富士吉野にくらぶべきや。只さいはひありてよく學ばん人は、此うらみなかるべし。

凡世の中の事、すべてわが心にまかせがたく、我まゝならぬ事のみぞおほかる。只讀書の一事のみわがなさんと思ふ志だにあれば、つとめて思ふやうにせんも我心のまゝ也。それだにおこたりてなさず。いたづらに月日をついやせば、ゆいかひなくてまことにをしむべし。

君父につかうまつりて、いとまあらば經史をよむべし。經をみて道に通じ、史をよんで古をしる。其樂きはまりなし。其間少のいとまを用ひて、古の文章を見るも亦樂しむべし。古文は左傳、楚詞、文選をはじめ、漢、唐、宋より明にいたりて諸大家の文集多し。只詞のうるはしきをのみ好むべからず。義理を發明し、知識を開くべし。又いとまありて閑なる折々は、からやまとの詩歌をもてあそぶも、心をなぐさむるわざなり。

和歌は萬葉集をはじめとして、古今集より下つかた、世々にゑりあつめられし二十一代の歌集、次に家々の集あり。いとまあらば見るべし。又歌物語などの和文を見るも、いにしへのわが國のことばにて風雅なれば、情をもよほしやすくして、興をやるべし。和語を見るには伊勢、貫之、紫式部、清少納言が作れる和文の類、只ふるきことばの、いやしからずえんなるをもてあそぶべし。此等の書には、淫靡なる事多し。只其詞をとりて不經なるをばすつべし。ことはりたがへりとてせむべからず。いかんとなれば、聖學のいたれる道を以、かゝる道しらぬおろかなる婦人などのつくれるあさはかなる書の、ひが事を正さんとする人は、かへつて愚にこそきこゆめれ。ことに其時の風俗、彼物語にかけるごとく、たぶれたるならはしなれば、取わきてせむるにたらず。莠の苗をみだるをにくむは、其

似て非なるゆゑ也。是は似て非なる類にはあらず。たとへば大なる岩を以、鳥の卵にくらぶるが如し。似るべくもあらざる事を云けさん事、いはほをもて鳥の子をおすが如し。なさけなしといふべし。又今の人、彼物語の其ことばのえんなるにめでゝ、道理のたがはざるとて、みだりに道理をつけておもねるも、いとおろかにひがくしくきこゆ。およそよきをとり、あしきをすつるこそ、廣く書をみる人のしるべきことはりなれ。しかればかゝるわさはかなるふみの内にも、しかるべき事あらば取て用べし。全體を用べき書は、聖賢の書の外には、もろこしの書にだにすくなし。

詩は三百篇をはじめ、文選の古詩よりしもつかた明朝にいたるまで、巧なる作者多し。されど中唐より以上、とりわき古雅なるをゑらび玩ぶべし。わが國の詩文は古代の名家といへど、其習艶麗を專として、古雅ならず拙し。其ちからもろこしにおとりて軟弱なり。學べからず。

韓柳、歐蘇、曾南豐などが文の内、心にかなへるを三四十篇ゑらび出し、別本にうつし、そらによみ、そらに書おぼゆるは、文章を作る事をまなぶ良法なり。朱子の言にも、此意みえたり。如斯すれば文字の置處、助字の用樣を自しりて、顚倒の誤なく、連續せざる字、又俗語を不用してよし。本朝古人の文に、字の置やう顚倒多く、連續せざる文字と俗語とを用たる誤多し。殊風體軟媚にして、奇巧をこのんでいやし。巧をこのめば彌拙しと、古人のいひしもむべ也。

凡日本の人、古より經書をときて義理を講じ、詩文を作る。皆粗にやぶる。精密の工夫なし。是學の中華に及ばざる所なり。秀たる作者數輩の外は、皆拙俗にちかければ、和歌和文のみやびやかにしてよきにはくらべがたし。これにならはゞ、おそらくはなづみて作文に妨あるべし。

暇ある時は、もろこしのふるき法帖にのぞみてうつすも、みな其閒中のたのしみ、几上の清玩なり。手跡も六藝の一にて、日用に益あるわざなれば、古人のよきすぢを學ぶべし。いやしき俗にならふべからず。古書を見るも亦めでたし。わが國の人のかける文字も、いにしへのははるかに今にまさり、もろこしの筆法にかなひていやしからず。中華の人もほめたり。凡古人のなせる文章、詩歌、書畫などのわざの、其道をきはめたるを見るも、わが心を樂しましめ、理をきはめしる助とすべし。かかるわざにも皆物のことはりありて、これを玩べば樂となり、又世俗のはかなきあそびにかはりて、益を得る事多し。學者も讀書のいとまに、をり〳〵はかゝるわざをまなぶも亦心をなぐさむる助なるべし。是また藝にあそぶの樂ならし。

往事を記すの文はつたなくとも、誠實にして虛飾なかるべし。是實錄にして後の證となれり。世實とすべし。もし誠實ならずしてかざりを專とし、詞をたくみにせば、其記す處僞あるべくして、信じがたし。實錄とすべからず。もし如斯ならば、文章たくみなり共、事をしるすに實なくして、かへつて人をまよはし、益なくして害あるべし。司馬遷、班固、韓退之、歐陽永叔などは、古來文章の大家なるが、其文質實にして奇巧ならず、飾なし。奇巧をこのむは鄙拙也。

富貴の家の子として、つかさかうぶり心にかなひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、うき世のはかなきたはぶれあそびにのみ心をうつし、學問などのしづかなるつとめに、まめやかに心をよせん事はいとかたくして、身をはるまで人の道をしらず、驕樂にふけりて人のうれひをわきまへず。文字をしらでふみ見るにちからなければ、ひじりのをしへをしらざるのみならず、からやまとの古の世々の史にうとくして、今のかゞみにすべきやう

なし。此頃ありし事のみしりて、わが日の本の百年の内、近き者をだにしらざれば、況中夏の唐虞夏殷周秦漢晋唐宋元はいつの時やらん。五帝三王は是何物といふ事をしらず。かくはかなくて年月を過ぬれば、いにしへのいたれる道にくらく、天地萬物の理をしらず、富貴の勢にまかせて、人をなやましくるしめ、不仁にしてあはれみなく、不智にして人の苦みをしらず、むなしく一生をすぎもていき、とりけだものと同じくいき、草木と共にくちなば、人と生れしかひなくして、何の樂かあらん。かくの如くならば、家とめるともまことにさいはひなき人なるべし。貧賤なる人も此樂をしりて樂まば、さいはひあつき人なるべし。又よはひを久しくたもつとも、はかなくて命長くば樂なかるべし。たとひ神武天皇の御時より、今の世までいきたりとも、只長き夢見たる心地して、長生の樂なかるべし。夫富貴は人のねがふ所、貧賤は人のきらふ所也。されども右にいひし如く、富貴によりて道をうしなひ、貧賤にして道を得やすくば、貧賤なるはかへりて富貴にまさるべし。是胡氏が知言の説なり。もし富貴にして道を行はゞ、其めぐみひろく、其樂も亦大なるべし。しからば富貴をねがふもむべなり。

もろこしの王抑菴と云し人は、わが意にかなはざる事あれば、其事に相似たる古人の詩をよんで、わが心をなぐさめしとなり。和歌は猶わが國の詞なれば、わが心にかなはざる事あらば、古歌を吟じて其こゝろをなぐさむべし。是又心を樂ましめ、うれひをさる一の術なるべし。

古詩三百篇をよく吟玩して、わが心を養ない、詩の教の道をしるべし。詩のをしへは溫厚和平にして、心を内にふくみてあらはさず。是風雅の道、詩の本意なるべし。後の詩も此風あるはまことによし。ことばをたくみにしかざり、ことやうなる文句を

つくりて、人にほめられんとするは、詩の本意にあらず。故に詩を作る人、學のひまをつひやし、心をくるしむるは、物をもてあそんで、志をうしなふ也。かくの如くにして詩を作るは、益なく害ありて無用のいたづら也。風雅の道をうしなへり。歌を作るも又同じ。才なく學なき人は詩歌を作るべからず。わが國の人はもろこしの韻語に通せず。詩を作るは、わが國の土宜にかなはず。

貧賤なる人も、もしよく書をよんで古の道をしり、古の事に通せば、はるかに富貴にまさるべし。何ぞ貧賤をくるしみて富貴をうらやまんや。

文章和歌のざえともしくば、只ふみをよんで道をしり、事をひろくしりたらんこそ、樂おほかるべけれ。又いにしへの人のつくれるよき詩をよむは、たやすくして其樂わが作るにまされり。つとめて筆をとりて、みづからはいみじき事云出すと思へど、つたなき事を世にひろむる事、われも人もしかり。

和歌はわが國のことばにて、あさはかなるやうにきこゆれども、ことば風雅にして古にちかく、心和平にして情ふかし。しかればもろこしの名家の詩にも、其品格をさ〳〵おとるべからず。只日本の人の作れる詩文は、わが國のことばにあらず。其上習わしくて、いにしへの名家の作といへど、もろこしの下等の作にも及がたし。よくつとめ學ばずんば、中夏の下品にも及びがたかるべし。身をはるまで、詩を作るにもはらにせば、詩は大かたよかるべけれど、左あらば歴史にうとく、其餘の事にも通ずるにいとまなかるべし。

日本の人、むかし今、佛をたうとびて佛を念じ、佛經をよみて、成佛せん事を實心に好む人多し。世間に聖人の書をよみて、聖人のたうとぶべき事をしれる人、また古今に多し。しかれども聖人の道を實心にこのみて、わが身のひが事をあらため、聖人にならんとおもへる人一人もなし。成佛をねがふ人

に及ばず。是いかにしてかくの如くなるや。學者みづからはづべし。

およそ事を記す文は後世に傳はる故、おもき大事也。わが記す事、後代の證となれり。つゝしんでみだりにしるすべからず。質實にしていつはりかざりなかるべし。もし實ならずして詞を巧にし、飾を專にすれば、其記す處誠としがたし。實錄とすべからず。益なきのみならずして、僞をつたふれば、後の害となる。故に事を記す文は、むしろいやしくつたなくとも、すなはに實なるべし。かざりて實を失ふべからず。其上かざり多ければ、無用の贅言ありて簡要ならず、人に益なし。事なくして見る人うめり。いにしへ文章に名ある人の作れるは、事を記すにいつはりかざりなく、質實にして無用のことばなく、言約に事詳にして、理明なり。其文のうるはしく精巧なる事は、かざらずしておのづから其中にあり。かざり多き文は、其作者の心に實なき事思ひやられ侍べる。益なき事を作りて、我心の僞飾をかきあらはすは愚なり。われ人のため益なくして害あり。人のよきをあやまりてあしゝとし、あしき事をよしとして、いつはりをしるす事、天道のせめのがれがたし。おそるべし。およそかゝる事につきても、天道にそむきぬれば、當時のせめ目に見えねども、後のわざはひのがれがたし。かへすがへす天道をばおそるべし。又めづらしくあやしき文字を用るは、必淺才のわざなり。

すこし才ありと見えて、物かき、藝ある人も、其心中質にして、わが才をかくしてほこらざる人は、おくゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人も、わが才をほかにかゞやかしてほこる人は、多くは人をそしる。おのれにほこり、人をそしるは、其不德なるくせのはしあらはれてあさまし。かゝらざりせばよからましとおもひて、かたち才學あるもほ

の歪のそこなきが如く、思ひくだされて其こきうらめし。

文訓下之本終

文訓下之末

貝原篤信著

もろこしの聖人、いにしへの詩をえらびて、教を立給ふ。詩をまなべば、おのづからよき事、あしき事、きくにしたがひて、感をおこして、よきことをこのみ、あしきことをきらふ。是人の心をみちびきて、しらずおぼえずして、正しくよきかたにうつりゆかしむるをしへなり。いにしへの詩三百篇の内にも、賢人君子の作れるはまれなり。國風などは、里巷歌謠とて、其國其時いやしき民俗男女のうたへる村里のいやしき歌多し。ことごとくに道理の至れる詩はまれ也。されどもそれを以教とし給ふは、愚なる民俗のいひし事も、皆人情をのべて理あり。これを見きゝすれば、人の心を感ぜしめて、善にうつり惡をいましむる助となれり。和歌も亦かくの如し。いにしへ和歌をよくよめる人、必賢人君

子にもあらざれども、其内に人情をよくいひかなへたる事多し。是亦其歌に感じて善心をおこし、情をもよほす助となれり。この意を以歌をこのみもてあそばゝ、もろこしの詩の敎と同じく、善にうつる益多かるべし。されど和歌には好色の歌多し。是は詩にていはゞ、鄭衞の風なれば敎とならず、かへつて淫風をみちびく媒となりぬべし。わしきをばいましめとすべしといふ說あれど、それは君子のみさほある人はさも有べし。かゝる人はされなれば、あしきにうつる助とならん事おそるべし。詩三百篇は聖人のゑらび定め玉へり。和歌もかゝる明哲の人ありて、よきあしきをゑりとゝのへば皆敎となるべし。されど今いにしへの和歌を見ん人、此理をもてゑらばゝ敎となるべし。和歌をよくゑらび用ひば、其益などかなかるべき。近き世の和歌は只ことばをたくみにして、かざれるをこのみて其志を云事はすくなし。詩も和歌も志をいふをむねとすべし。ことばは只ふるきを用ひ、いやしからざるを以よしとすべし。ことばたくみにせんとすれば、和歌の本意をうしなふ。わが身和歌をつくる事かなはずとも、古人の歌をゑらび用ひば、かへつてわがよむにはまさりなん。

學問などの道理を人にとくに、其人の識見いまだ至らず、或學力よわき人に對して、高く深き事とくべからず。博學なる人も或聰明ならず、其學術あしく、又蔽固にして敎にかゝはれる人に、高深なる事をとけば、わが說を心得ず信せずして、そしりあざける。凡かやうの事其事をへざれば、其禍ある事をしらず。

富貴の家に生れて道に志なければ、人にあはれみなく、物に情なく、萬の理をしらず。おこたりて書をよます、よき道を學ばずして、知慧ひらけず、人の道しるべきやうなし。財多く勢ありて、善を行なふにちからあれども、善をこのまざれば行は

す、是貧賤にして道をこのむ人におとれり。もし智ありて、幸にして富貴に生れたる人は、善をこのみてひろく人をすくひたすけば、富貴なるかひありて甚樂しむべし。

古の學を好みし人財祿の養なく、貧賤にしてみづから田をつくり、薪をとりて身を養ひ、艱苦して書をよむ。或貧しくて燈なく、雪に映じ螢をあつめて書をよみ、又かべをうがちて、となりのともし火を用て書をよみし人あり。或貧家によむべき書なくして、書ある家にやとはれ、ちからのはたらきして、其かはりに書をかりてよみし人あり。かかる艱苦をなめて書をよみし人おほかりき。其志たふとぶべく、其艱苦あはれむべし。かくの如くくるしみてつとめし人は、其功業を成して道をしり、世に用ひられたり。

日の本も、近き世まで都に板行の書なく、いなかには書をしふる師なく、寫本だになくてもとめかねて、他國に遠く行て師をたづね、書をかりもとめ、夜を日につぎてよみならひ、書を寫して歸りぬ。其艱苦甚し。今も家貧しき人は、書をよむ事をこのめども、書なく師なく、筆硯紙墨もともしく、書をよむべきやどもなく、明窓淨几なく、夜は燈なければ書をよむ事かなはず、田をつくり薪をとるひまにも、すこしばかり書をかりもとめてよむ者あり。あはれむべし。しかるに今とめる人の子は、衣をあたゝかにき、食にあきぬ。家居よくして書をよむに師あり。財多ければ五車の書も求めやすく、明窓淨几あり。筆硯紙墨精良をきはめて、不足なる事なし。又賢父兄あれども其いましめをふせぎ、良師あれども其敎をうけず。書をよむことをこのまざれば、いたずらに日をむなしくするのみならず、無賴の惡少年を友とし、酒色をこのみ、暴食をむさぼり、博奕し、淫樂をこのみ、非禮を行ひて學問をきらひそしり、道義をこのまず、一

生おろかにして身ををはる。わが身のさいはひも富貴も、一も用にたゝず。をしむべし。むかしもろこし張德武といひし人、十一乃可レ惜説をつくりて、昔貧しき人の書をよむ事をこのみし事、今の人家とみ、師あれども書をよむ事をこのまざるは、をしむべき事なりといへり。

わが國の書生、詩人、多くはもろこしの歷代の故事をば記すれども、わが國の日本紀以下の國史にくらし、又律令格式をしらず。萬葉以下の歌集を見ず。故にわが國の古今歷代の事、本朝の典故にくらく、和語に通ぜず。和漢の文をかき、わが國の事をしるせばあやまる。ちかきわが國の事をすてゝしらず、遠きもろこしの事を専にするはあやまれる也。

わが日の本、上古の言は、もとより風雅にして、中臣祓の詞の如く、又歌のことばに似て、今の俗の俚語に大にかはりて、卑しからざるべし。神功皇后新羅を征し給ひしよりこのかた、ひとの國とわが國、やうやく交り通じて、漢字傳はり來り、太子以下、聖經をよみならひ給ふ。其後漢字の音は、わが國の人の口にかなはずして、和音五十字の相通を以、五音を相かなへて、別に和音をつけて漢音を改めて和音とす。今の漢字の音是也。こゝを以、文字は中華の字にして、音は唐音にあらず和音なり。和音なれども五音相通ずる道ありてしかり。其后又佛書傳はり來り、是を誦する者多し。是より後は、上古の和語はやうやくすたり、佛書の連續せる文字を以、俗語とする事多し。又佛書にあらざれども、漢字を以て妄に續けて作り出せる俗語多し。儒書は佛書より早くわたりしかど、よむ人多からざりしにや、これを用ひて俗語とせしはすくなし。時俗の語と漢字の音と相まじへて、和語を作る言語の字をつらぬる事、多くは文理いやしくつたなくして、且字義そなはざる事多し。近

世の俗語は又いよ／＼いやし。文理義にあたらざる事多し。もろこしの俗語だにも、後世はいやしき事多し。況わが國文字のつたなきをや。

凡世俗いなす處、習つて察せず、むかしよりあやまり來りしに、打まかせて改めざる事多し。本朝の官職の名は、わが國の古制なれば、頗正しくして鄙俚ならず。文章を作るにも、わが國古昔朝廷の法制にしたがひ、本朝の官名を用るも我國の規模なるべきに、奇異を好む書生は、わが國の古制の官名をば用ひずして、からのめづらしき官名を書かへて用ゆるこそほいなけれ。しひて異名を用ゆるゆゑ、和漢合ざる事多し。國の名も陽の字をつけて河陽、丹陽、播陽、藝陽、紫陽など云。又州名にかぎらず伏見を伏陽と云ふ。華人も其あやまりにならつて、長崎を崎陽と稱す、わらふべし。およそもろこしにて、陽の字を名とする事。山の南河の北にある所には某陽と稱す。所謂咸陽、漢陽、丹陽の數の如き是なり。左もなき所におしなべて陽の字をばつけず。本邦にてみだりに陽の字を付る事、叢林の徒よりはじまりて、其後は老師宿儒といへども、其とがにならつて皆因循せり。習而不レ察と云べし。

書をよめば、千歳の後より千歳の前の人にあひまみゆ。わが如き愚者といへども、いにしへの聖賢にみづから對して、まのあたり其教をうくるが如し。其理高くして大なる事天の如く、ふかくして廣き事海のごとし。學問の道の大なる事、天と海との外にはたとふべき物なし。此故に天下の樂是に似たるはなし。世人此樂をしらず、大なる不幸なり。たとへば人は日本に居て、富士のたけ吉野の花を見ざる人だにみせまくほしう。況世の人に此書を見せまくほしく、此道をしらせまくほしし。人となりて書をよまずして、此道を窺はざる人は、きはめて不幸の人にて、人となれる樂なし。あは

れむべし。

世間人の好むわざ皆友に對し、或従者をまちて行なはる。われひとりなしがたし。棊をかこみ、連歌し、太刀をつかひ、矛をふり、弓を射、馬にのり、音樂を奏し、遊獵するの類しかり。只讀書のみ獨なして友を用ひず、古人に尙友する樂ふかし。いまだみざる書をよむは良友にあへるが如し。すでに見る書をよむは故人にあへるが如し。

わが輩のごとき才なく愚なる身は、老きはまりても才德を成がたし。されどもおよそ人の才德をなし、學にすゝむ事は、長壽をたもたざればなしうべからず。學をつとめて長壽なる人は其幸甚し。長壽をたもつ人きはめてまれなり。長壽ならん人は學に進んで自得すべき計をなすべし。無益の事をなして、をしむべき月日をむなしくすぐすべからず。わかき時よしとする事、老て後おもへばひが事多し。義理の精明なる事は、年わかく氣わらければはなし得がたし。老ての後の事なり。わかき時は只おほくよんで、そらんじおぼゆる事をつとむべし。書をよんでそらにおぼえ、ひろく書を見る事、年老い氣おとろへてはなりがたし。

巫祝のともがら、其家に秘して上古の和字と稱して、符まもりにかく所の字有。これ漢字を以作れる也。遵生八牋不求人等にのせたる符章の僞字と頗同じ。是其もともろこしより來れる僞字なる事をしらで、上古の和字とおもへるはひが事也。

學問も藝能も、人に難ぜられそしられてこそ、わがあしき事をしりて、よき道にすゝむべけれ。みづからよしとおもひ人に譽められては、わがあしき事をきゝて、よき道に進むべきやうなし。わがする事はよきと思ひてほこり、人の事はあしゝとおもふは、よのつねの人のならひなり。かくありてはよき道にすゝむべきやうなし。

わが日の本は、神武天皇よりこのかた、今にいたる

まで二千餘年、もろこしは堯舜より以來、今まで凡三千五百年、其間天下の事變、世々の治亂盛衰、其世にありし人の、ありさまのふるき迹、からやまとのむかしを記せし歷史、通鑑等の書にのせて詳なり。もしよく其書を考へ見る人は、其事は久しくふりにたれど、吾が身はながらへて、其間の世々を久しく歷て、まのあたり其時のありさまを見たるやうに覺ゆ。しかれば日本のいにしへ二千年、中夏の三千五百年のよはひをたもてるに同じかるべし。豈たのしまざるべきや。

和漢の人古今書を著はせる多し。豪傑の作れる書は、まことにわが如き愚者は間然しがたし。才俊の士といへども、若其あらはす所聖賢の筆にあらず、有用の言にあらずんば、文章ことにうるはしくとも、民用の資とならず、無用の書なるべし。民用の助とならば、居家必用、農政全書、濟民要術の類といへども、有用の書とすべし。今の時わが菲才學つたなき者の作にて、いはゞ、以かゝ、そひしほの製法をしるせる書も、民用の助とならば有益の書也。もし宋儒に阿諛ひて雷同し、發明する事なく、同じ事いはゞ、高く道德性命を談ずとも無用の學なるべし。

小學の書註おほし。朱子本註は去べからず。諸註に是を去るは何ぞや。陳選が句讀、王雲鳳の章句を可とす。されども句讀には小學の本旨にそむける事多し。王雲鳳が章句猶まされり。所謂後出のもの巧なれば也。近年はもはら句讀を世こぞりて用ゆ。陳選はまことに賢儒なれども、其のあやまりには從ひがたし。立敎の初に朱子中庸の卷首を引用られしは、聖人敎を立るの本意をしらしめんとなり。しかれば只其字義を淺く說たらは、小子のためさとしやすかるべし。然るに句讀に中庸の章句をそのまゝもち來りて、說て高深をきはむ。かかる高深なることをときかせば、初學の兒童に宜

しからず。閒にうみて學をうとんずべし。其餘にも陳選が註、宜しからざる事多し。およそ小學は小兒の學ぶ所なり。其をしへ淺近にしてさとしやすく、易簡にして行やすきが宜しかるべし。

日本には中世以後正史なし。野史もまれにして詳ならず、此故天下の大事だに正しくしるしたるふみなければ、野史に少しるしたるにては其事詳ならず、質否うたがはし。況國々の事、其國に文字をしれる者なければしるさず。後年に他方よりそのありしを、聞傳へにまかせて記せるは、多くはそらごとあるべし。正史なく國記なきことうらめし。日本は諸國にまさりたる上國なるに、此事かけたる事、異國人のきくもあさまし。

道理なき事を見きゝして信ずるは愚なり。理なきいつはり事をまことゝ心得て、みだりに信ずるは知なきが故也。又理ある事をしらずして信ぜざるは尤愚なり。理あるすぢを以て、いつはりて人をあざむくは、智者も欺かるゝ事あり。

書をよみ學をする人は、同じ學のすぢを學術と云。く聖賢の書をよめども、世の中の學術正なると偏なると、さまざまあり。はじめて書をよむより、此心得ありてよくえらびて、あしき學術をば學ぶべからず。同じく聖賢の書をよんで、おのれはよしとおもへど、かへつて道にそむけるあしき學術あり。みづからあやまるのみならず、おほく人をあやまるはうれふべし。聖人の言及人情と時宜にそむけるは、學術あしき也。よくえらぶし。

學者無用の事をば多くしりて、有用の事をしらざる事多し。有用の事をはなさずして、無用の事をなす事多し。おやにうとくして他人の交したしきあり。急なる事にさし置て、不急なる事をつとむ。聖賢の書はつねによまず、雜書を多くよむ。日本の書にうとく、中夏の古事を專にしる。皆是本末緩急を失なへり。

いとまある人詩歌の才ありて、詠作を好みて心を樂しましむるはよし。家業いとまなき人の、心をくるしめて、つたなき詩歌を多くつくるは益なし。

天地の道、人倫の敎、萬物の理、數千年の人、數千年の事、まことに天地古今人物、極りなき廣大の理、廣大の事也。しかるに書をよみ學問する力を以、坐ながらよく知る。其樂大なるかな。豈つとめて書をよみ學ばざるべけんや。是を以見れば、書をよまざる人は、富貴なりといへども不幸なり。書を多くよむ人は、貧賤なりといへども幸大なり。

湯桶文字と云は、和俗文學にうとき故に音と訓とを一にあはせて、物の名にもことばにもかきつゞくるを云。湯は訓なり、桶は音なり。訓と音とを合せて、ゆをけに名づけたり。猶もかくのごとき、あやまりて名づけしものおほし。

書をよまば玩味すべし。只一とほりよみたるのみにては、其こゝろを自得しがたし。よくしづかに心におちはひて、其理をしるべし。くはしく熟すべし。多くむさぼり見るべからず。益なし。

書をよんで、つゞまやかに其要を守はまことによし。廣くして守なきにまされり。されども義理は廣大なり。ひろく學ばざれば義理詳ならず、熟せずして要約をも失ふ。たとへばあみを以て鳥をとるに、鳥のかゝる所は只一目なれど、あみ廣からざれば鳥かゝらざるが如し。學ひろからざれば要をしりて守りがたし。

君子と名づけたるは何ぞや。君の位に居て、下民を子の如くいつくしむゆゑに名づく。是孝經正義の說なり。又聖人或は賢人をも善人をも君子といふ。其位なしといへども其德あればなり。小人とは何ぞ、耳目口鼻の欲にしたがひて、心志の大體を失へる者をいへり。是孟子の言に出たり。位につきていへば、下にある細民を小人と云。

書生は書を多くよみたるまでにて道理をしらず、文士は詩文を飾りて、たくみに作りたるまでにて實用なし。是を學問とするは非なり。かくのごとくなる用なき人を學者とおもはゞ、すべて經史の學の實用あるをもすてゝ、無用の學と同じく意得て、貴とはざるは無學の人の不智なり。

やまとうたは其意温雅にして其詞やさし。精巧なる事唐詩におとらず。婦人の作る所といへども亦しかり。國字の文、貫之、伊勢、紫式部、清少納言などの作れるも亦精巧なり。わが國の詩と文とにくらぶれば、大にまされりといふべし。是わが國のよろしき詞なる故なり。しかればわが國のかなはざる、つたなき詩文を作らんよりは、國俗にかなへる和歌を作るべし。日本の詩を作るは、年長じて唐音を學ぶがごとし。

朱子曰、如ニ孝弟忠信人倫日用事ヲ播ニ於樂章ニ使ニ人ヲシテ歌ハ一レ之、倣ニ周禮讀法ニ遍示ニ鄉村里落ニ亦可ニ代ニ今粉壁所ノ書條禁ニ簡信訓、今世もし人有て國字を以て樂章を作り、古雅にして諷誦しやすからしめ、孝弟忠信人倫日用の事をいひ、是にまじふるに古人の嘉言善行を以して、うたひ物とし人に教て詠歌せしめば、世教に補あるにちかゝらん。今俗のうたひ物の中に、頗音節の淫哇ならざるもあれども、其詞妄誕多く、其曲節も急迫にして聴は、し、情を亂るに足れり。夫樂は風を移し俗を易ふ、人をして善に遷し惡を化するの具なれば、其聲音、歌章ともに正しくせずんばあるべからず。

青箱雜記曰、張司業作ル詩自警ミ遺ニ子孫ニ。雖ニ詞俗質朴ナリト而事理切當ナリ。足レ爲ルニ規戒ト。本邦中古頼和歌百首を作りて規戒とし、蜷川親當も亦和歌二百首をつくりて箴誡とす。しかれども此二人皆學識なき故に、其詞鄙俚にして其意も亦可なる者すくなし。世教に志ある人、古歌の意義可なる者をえらび、或は別に和歌を作りて、幼稚の徒をして讀さば、亦人

に益あるにちかゝらん。

いにしへの歴史通鑑などを通じてよめば、天下の廣き、古今の久しき事、ことごとく見て、胸中に明らかなり。いにしへのあとを考へて、今來の鑑とすべし。是聖經をたすけ、義理をひろく考ふべし。是大なる益なり。又古來の事をひろくしるも大なる樂なり。

近世の學者は、理學に執滯して今世の時宜をしらず。日本の風俗にそむき、もろこしの古禮を用捨なく今の世に行はんとするは、ひが事なり。

後世の儒者いまだ見識なくして、みだりに佛をそしり、人と爭ふはひが事なり。只わがしるべき事をしり、行なふべき事を行なふべし。人と爭ふは害ありて益なし。深く戒むべし。只わが身をあつくして人をそしるべからず。朱子みだりに佛をそしり人と爭ふ事を、甚にくみいやしめらる。

仁義は道の體なり。文武は仁義の發用なり。文武其事同じからず。其道理は一なり。文は仁の發なり。武は義の發なり。文は人を愛し衆を和ぐるの道也。文にあらざれば民をなつけ、衆を安んずる事なし。武は人を戒め、衆を嚴にするの道なり。

學問は日々に進むをむねとす。日ごとに一事をしらば、一月に三十事、一年に三百六十事をしる。十年に三千六百事をしらば、大に學問すゝむべし。

程子の父大中と云人、其作れる詩を編錄せられしが、人に見せず、たゞわれひとりみてたのしめり。是わが才にほこらず。法とすべし。今の人わが作れる詩を、人に見する事をこのむは、わが才にほこる也。いやしむべし。

詩を多く作りても學問に益なし。詩をよく作る人も心をくるしめ、思案せざれば出來ず、かくの如くせざれば、杜子美といへどもよき詩を作らず。いはんや此國今俗の詩をや、拙き事むべなり。日本人唐詩を作るは、ことばも心もかなはず、志をのべ

がたし。わが國の風土に合ざる故也。和歌を詠ずるには甚及ばず。しかれば詩は作らず、只和歌を詠ずるは、是風俗土宜にかなひて宜しかるべし。

詩と文章を作るに、奇怪の文字を好むと淺俗なる詞を用ると、此二をいむべし。是その法也。今時の人、詩文を作るにめづらしき奇き文字をこのむ。或又いやしき俗語を用ふ。二ながら不可也。奇異なる文詞をなすを以巧とする事、風俗あやしき習也。文詩ともに平易にしていやしからざるをよしとす。

薛少蘊が曰、文章世の敎にあづからざれば、巧なれども益なし。古今の文章世の敎になるべきはまれなり。しからば今文を作る人も、世敎の助となる文を作るべし。

謝疊山が文章軌範、文章の學に助あり。文章を學ばば先論語孟子を熟讀し、次に文章軌範を以て則とすべし。近年末世のいやしき文を見習ふべからず。

本邦の和歌と和文とを詩文とをくらべば、和歌和文はもろこしの詩文に及ぶべし。わが國の詩文は大におとりて同日にもかたるべからず。國俗と土宜にかなはず。されど文章は其事をしるし、其理を述べんために作らでは事かけぬべし。

日の本はもと温和慈愛の國なる故に、和歌も温雅にして情ふかし。其上精しく巧なる事、もろこしの詩にもおとるべからず。和文も亦しかり。然らば學者もなるべきほどは和歌を學び、和文を作るべし。是わが國の風俗土宜にかなひて。國風にそむかざる也。わが國に生れて、和歌和文をすてゝもろこしの風を專につくる事、わが國にそむけり。其つみふかし。わがともがらは、才つたなくて、やまともろこしの才なければ、からやまとの詩文歌詞をつくる事かなはず。其道理をいはゞ、おそらくはかくの如くなるべし。

小學の書の文義に通せば、其力を以順をおして、

四書を見るべし。四書を見て其文義に通ぜば、六經に通すべし。しからば小學を以身を修るの大法とするのみならず。又經學の基とすべし。

初學の人、朝には經傳を見、朝飯後には經書をよみ、晝は史漢の書を見、或は諸子諸集を見、文字を書ならひ、法帖をうつし、飯後には頭面腹をなで、園圃を歩行する事、數百歩逍遥して、精神を舒暢すべし。晩飯の後は弓を射、其餘の武藝をも習ふべし。夜は又經傳をよみ、或經史子集の要語をよみ、唐詩を誦し、和歌をよむべし。故事古語をよみ覺ゆべし。夜臥にのぞんでは、一日の中の言行を點檢して、あやまりすくなくんば必安くいぬべし。毎日如斯すべし。

書をよみ書を見るには一書に專なるべし。或經を見、史を見て、二書をかぬるも亦よし。一時に書を數多みるべからず。專一ならざればまぎれてくはしからず、工夫分れては精熟せずして、功をなしがたし。

册子をこしらへ、諸書の要語を抄寫して、時々記誦すべし。要語を覺ゆれば、功を用る事少にしても其益多し。故に要用なる事は必記誦すべし。記誦せざれば用をなしがたし。

史書は朱子の綱目をしばらく見て熟玩すべし。古今をつらぬき義理に通じて、其益多き事六經四書につげり。古にひろく通ずるのみならず、かねて義理に通する益あり。

白樂天、詩を作りて心を苦しむるものをそしりて、詩魔のためにくるしめらるゝといへり。その言むべなり。しかれども樂天も又此病をまぬかれず。凡詩を作る人は此おもんばかりあるべし。わが身にいたりてはまよひやすし。

文訓下之末　大尾

武訓序

文といひ武といふ。分て是をいへば其用大に同じからず。故に車の兩輪鳥の兩翼にたとへて、其一を闕く事あたはざる事をいへるも、おなじからざるあとにつきて、文武の二を對しいへるのみ。合せて是をいへば、文武只一德にして、文の中に武あり、武の中に文ある事、猶陰陽のたがひに根ざすがごとし。故に文なき武はまことの武にあらず。わが國中頃、保元平治より天正文祿の間にいたるまで、爭亂相踵で暗日まれなりしかば、士人戎事に暇なく、文學をしるものすくなく、其武とする所、血氣の勇のみにして、眞の武道をしらず。遊俠劍客しわざのごときを尙ぶ事風俗となり、其餘習猶近世に及べり。今太平の化あまねく行はれ、四の海波しづかにして、人文日々に盛なれば、聖賢の遺訓家々に傳はり、戶々に誦す。しかれども猶無學の輩は文武のことはりを辨へず、習俗にひかれてひが心得も有べし。或は生質柔懦にして、治平に武を忘れざるの誠を、おもはぬ輩も有べし。先生俗士のために文武の二訓を著はし、其ことはりを辯明し給へり。其詞は假字にして讀やすく、其意は聖賢の正しきすぢを述給ふ事、親切著明にして、且目今の時宜にかなはざる事なし。世敎に補ある事豈小ならんや。先生世を謝し給へる後、若干の遺編皆筐笥の裏に藏れて、いまだ世に行はれず。定直比年江府に在て、是を惜く事久し。しば／＼鄕邑の同志にせうそこし、先生の遺書を廣めんことをすゝむ。幸に近比同志のもとより此編を淨寫し、文訓とおなじく寄來りぬ。仍て京師に送り梓に鋟せて、是を四方と共にするものなり。かくする中に初學訓亦來れり。繼て出すべし。

享保丙申季冬

竹田定直書

武訓上

貝原篤信著

武に本末あり。忠孝義勇は兵法の本也。武德也。節制謀略は兵法也。節制とは人數をくばり兵を行ふ道、是いはゆる軍法也。弓矢劍戟等の兵器の術は兵法の末也。武藝なり。本末共にそなはるをよしとす。武藝は兵法を本とし、兵法は仁義を本とす。此三の品ある事をしりて、其序をわかち其輕重を知べし。三の者かぬる事を得ずんば、忠孝義理の武德をはげむべし。武藝をしらざる人も、忠孝義理の勇あれば、戰功を立、武名を得る人多し。武藝に達すとも忠義なき臆病人ならば、戰功を立武名をとる事かたかるべし。君子は本をつとむ。本立て道生るとは是也。武藝はまことに學ぶべくして、すつべからずといへど、必武德を本としてつとめはげますべし。輕重本末ある事をしるべし。又忠義と剛勇にも本末あり。程子曰。人必有仁義之心而後有仁義之氣。仁義の心は本なり。剛勇は仁義之氣也。末也。仁義之心あれば勇氣はおのづから出づる也。仁義なくして武勇を好めば、大人は亂をおこし、小人は盜賊となる。

凡武士となる者は、忠孝義理の志なくしては武勇おろそかに、節義闕て奉公の道たゝず、又武士の家に生れ、兵術武藝をしらず、武具をそなへず、軍用乏しくしてはたとひ心猛くとも、武勇のつとめおろそかなるべし。故に武士の道内には忠孝義理を以本として兵法をしり、外には武藝をならひ、武備ともしからざるを以て助とす。武士として忠孝義理の道をしらず、兵法武藝にうとく、武備なくんば武士の業を失へりと云べし。武藝は匹夫の勇のはたらき也。其位に應じて學ぶべし。大人は武藝に專一に心を用ゆべからず。藝になづめは道行はれず。武備はかねて定め置べし。平生無事の

時、心を用ひ、其分限に應じて、人馬、武具、家人の兵器、馬具、金銀、米錢等までかねてそなへ置き、籍にしるし、不足なく用意すべし。出陣の時にのぞみては、兼て定めし制法にしたがひ、何の用意もなく、何時も即時に打立樣にすべし。凡事豫則立とは是なり。何事もかねて用意なくしては俄の時につまづくものなり。

武士たる人は武藝をしらずんばあるべからず。弓馬、刀劍、鎗、長刀、鳥銃、拳法なども、其法をならはずしては、戰にのぞみて功をなしがたし。中について弓馬を尤まなぶべし。弓馬の二はことさら學はずしては、ちからつよしとても妄に其術行はれず。他の武藝はよく習ひても、治世に生れては一生の間一度も其わざ用に立ざる事あり。弓馬は治世にては日用の事なり。殊に馬は日々のる物なればよく學ぶべし。

士たる人は高きいやしき、弓馬劍戟の法をまなぶべし。武藝をしらざれば戰にのぞみ敵に對しがたし。されど大將たる人はまづ兵法を習ひて、次に武藝をならふべし。武藝に專なるべからず。武藝はたゞ其大略をならふべし。武藝は末也。兵法は本なり。有司も兵法をならふべし。將たる人、武藝のみしりて兵法をしらざるは、本をすてゝ末をとる也。小身の士は武藝を大やうは、あまねくまなぶべし。弓馬、劍術、鎗、長刀、拔刀、擊劍、拳法、砲、水練など皆ならひしるべし。一事もしらざれば變に應じがたき事あり。小身の士も一藝をすぐれて精しくまなぶは、一事になづみて他藝に通じがたし。故に一藝に專一なるべからず。しかれどももし士の子弟など、一藝を以て身をたてんと思ふものは、藝を專にしてくはしくまなぶべし。これ人の師となるにたれり。かやうの人もしあまねく多藝にしては一藝にくはしからず。くはしからざれば人の師となりがたし。

軍器三十六あり。弓を上首とす。武藝十八あり。射を第一とす。是兵鈐に見えたり。中華の書なり。日本にても射を重んじて、武士を弓とりといふ。中華にて武藝には騎射を重しとし、日本にても弓馬を武藝の宗とす。太刀鎗の類は其術しらざる人も、みだりにたゝかふ人多し。弓馬はならはざれば、かりにも弓を射、馬に騎事かなはず。しかれば武藝多き内にも、弓馬はことにしらずんばあるべからず。

もろこしに武藝十八事あり。日本にも武藝の數多し。射騎を先として大將もしるべし。刀術鎗術も亦知べし。其外に拔刀の法、刀をなげうつ法、眉尖刀の法あり。又鎌と棒とを用るにも法あり。法をしれば皆用をなし、敵をうつ。又捕縛の法あり。拳あり。拳は近年元贇といふ中華人、來化して此土にて死す。此者此法を習ひしにはあらざれども、此法中華にある事を語る。きく人是を以其術をはじめてつくり出せり。

兵鈐にいはく、士をしらぶる法に曰、用ゆべからざる者五あり。一には市中に居てあそびたはぶれて、ゆるやかにそだちたる者、二には花鎗、花刀とて、鎗太刀をつかふに、花やかにうつくしきを專にして、敵にかつ事を專にせざる藝は用なし。三には年四十をこえてちからよはき人、四には好んで大言をなして僞をいひ、あだこと多くいふ人は實なるはたらきなし。五には面白く膽よはき人は強きはたらきなりがたし。

勇怯とは、勇はけなげなり、怯はつたなきなり。怯とはおく病なるを云。勇怯は生れ付たる性により、又ならはしによる。むまれ付もならはしによりて變じて、勇にも怯にもなる。武士の子は武藝をまなび、武勇なる人にまじはり、その物語をきゝ、むかしの戰記をよみ、勇をはげまし、武をたしむべし。武士の子も商人となればならはしとなりて、

武道にうとく勇氣よわくなる。ならはしをえらびつゝしむべし。少成(せうせい)は天性のごとく、習慣(しふくわん)は自然のごとしと聖人ものたまへり。いとけなき時よりつとめ學べば、天性生れ付たるごとくになる。ならひなれたる事は、じねんにつとめずしてよくするが如しとなり。からもやまとも、軍には農人は用ふれども、商人は武士には用ひず。商人は其習專利をはかりて、武士にとほければなり。農人は其心他の求なく、一筋なれば士に近し。

生れ付に勇怯あり。勇に血氣の勇あり。義理の勇あり。血氣の勇はつよきをやぶり、かたきをくだく事すぐれたり。されど氣つよきのみにて、義なければ節を守らず、たのもしげなし。義理の勇は節義を守りて、大節にのぞみて義を變せず、たのもし。たとへば犬にも勇犬あり。義犬あり。勇犬はむかふ所はたらきつよし。され共あら野猪(ゐのしし)出て、いかれば身を引てのがる。義犬はつねの時は惡性ならず、ぬすみせず、人をおそる。けものにむかひて、はたらきは勇犬に及ばざれど、たけくいかれるしゝにあひてもにげず。人の主君のために節を守るの如し。

將をえらぶには智を先とし、勇を後とす。智なければ勇ありても謀なく、思案なくして兵の道にくらし。勇あるをたのんで過(あやまち)多し。かくのごとくなる將はやぶれやすし。良將にあらず。良將は智ふかく、又勇もありて敵をはかり、身方をかへりみ、事にのぞんでおそれ、謀を好んで事をなす。敵に敗れがたし。

古人の曰、いにしへは兵を農に寓(ぐう)す。事あれば戰はしめ、事なければ武をならはしむといふ事、大將の必しるべき事也。いふこゝろは古の軍法を以國を守る君將は、つねに無用なる士をば多くはめしつかはず、無用の武士多ければ、國土は限あるものなれば、財祿たらずして國用ともしく、臣民困窮

す。故に平生用なき武士は多くは養はず、農人の内勇氣あらんものをえらんで、少の祿をあたへ、扶養し置べし。農人は商工にかはりて、其志いやしからず。養をうけ恩をかうむれば、戰にのぞんで其勇氣をはげまして、つたなからず。平生の扶持をあたへ、その身を養ふの費は、無用の武士をかゝへ置たる十分一の費なり。無事なる時は、耕作してみづから養ふ。多く祿をあたへざれども飢寒せず。平治の時は、四時のひまには狩をして軍法をまなぶ。戰にのぞんで軍法ありて兵つよし。

金鼓とはかね太鼓なり。是陣にのぞんで士卒の耳を一にする器なり。旌旗ははたのぼり也。士卒の目を一にするため也。軍にのぞむには、進むも退くも度ありて一様なるべし。勇者も獨進まず、怯者も獨退かず。三軍力を同くすれば、其勢力つよくして敵にかちやすし。

士たる者、戰にのぞんで身をすつる事はかたからず、血氣の勇は盜賊もよくするものなり。只身をすてゝ義にかなふ事かたし。故に死ぬべからずして死ぬるは、是其身をかろんず。父母よりうけし身をいたづらにするは不幸なり。死ぬべくして死なざるは、是其死をおそれ、命ををしみて君の爲にせず、不忠なり。是李太白が言なり。年わかく血氣さかんなる人勇をこのまば、忠孝の道をしりて生死只義にかなふべし。學問なければ忠孝の道をしらず、死ぬべくして死なず、いやしむべし。死ぬべからずして死ぬ、かなしむべし。勇怯ことなれども、義理にそむける事は一なり。武士は學問して義理をしれば、死生する理にかなふ。

兵術は將と士と、貴賤の位によりて大小の用ことなり。其位に切なる事を先まなぶべし。主將たる人は、いふに及ばず、士卒の長となる者も、兵術をしらざれば節制に應じがたし。大夫以上の人は兵術をしるべし。兵術は武藝の本也。兵術をしらずし

て、弓馬、劍戟の藝をのみ學ぶを武學と心得るは、本をすてゝ末をとる也。主將たる人兵術をしらずして、只武藝のみを學ぶは、武學にはあらず。藝術のみを好みて本をしらざるは、物をもてあそべは志を喪なふの類也。武藝は一人に敵する術也。兵法は萬人に敵する術也。

甲冑の着やう、旗指物の制法、馬上にて刀をぬき、鎗をつかひ、敵とくみ合の法、或不意に敵に出合たる時、敵にきられず敵にかつの法、凡匹夫の勇のはたらき、刀劍及馬藝につきてのわざ、又は戰場にあらずして時の變に應ずる術も、士たる人習ひしるべし、かやうの術を教ふる師あり。書あり。ならふべし。

張南軒曰。君子不ㇾ避ㇾ難。亦不ㇾ預二於難一。此意は不意にのがれがたき難にのぞみて、其場をはづして身をのがるゝは拙なし。義にあらず。是難をさらざる也。難にあふとも難をさけて身をのがるべからず。又我身にあづからざる事にわざと出合て、難にあづかるは愚なり。此二は共に理にあたらず。勇にあらず。されば身をすつる事やすけれど、すてゝつかひありて理にあたる事はかたし。道理にそむきて死ぬまじき時に死し、あたら命をすつるは愚なりと云ふべし。死ぬべき時にしなざるは不義と云。故に死ぬべからざる時に死して身を失なひ、死ぬべき時に死なずして義を失ども、共に勇にあらず、理にそむけり。

日本の兵術を學んで文學なき人は、道理にうとし。人に教ふるに、日本の武道は儒者のごとく、仁義忠信の道を用ふ可らず。僞りたばからざれば勝利を得がたしといふ。又曰、夫兵は功を立るにあり。もろこしにては魏の曹操のごとく、日本にては足利尊氏のごとき人は、仁義にそむきて人の國をうばひたれども、武將の本意也。もろこしの諸葛孔明のごとく、日本の楠正成のごときは、忠義あれ

ども功を立る事ならず。是武將の本意にあらず。兵は詭道なり。時の勢によりては、わが身方に對してもいつはりて表裏を行ひ、人の功をうばひ、或國をみだして逆にしてとるも、兵術においては害なし。是日本の武道也。もろこしの道を以ては、日本の武道は行がたし。日本は武國なれば、もろこしの正直にして手ぬるき風俗にては功を成しがたくして、日本の風俗にあはず。ひすかしくすゝどくて、人のなしたる功名をもうばひてわが功名とし、人の取たる首をもうばひてわが勇とするか、日本の武道也などいひて、秘密して人にをしふ。是をきく人無學にして不智なれば、其非をしらずして是を信じ、げにもとおもひ、常の時も兵術の謀を用ひていつはりを行なひ、利を得るを以心とする者多し。兵をまなぶ人、多くは是にまよへり。あさましきひが事は辯するにもたらず、又辯じて人とあらそはんも、いたづかはしく口をし。されど天下の民は皆わが同胞なれば、わが兄弟のおろかにまよへる人の、あしき方にいざなはるゝは、いとかなしむべき事なり。もだしていはざらんも、むげに仁をうしなひてなさけなければ、ほいにあらず。われ愚なれども幼よりひじりの書をよみ、其道をたふとべる故、管見をこゝにのべ侍る。天地の間ひろしといへど、道はたゞ一のみ。やまとの道もろこしの道とて、さらに二あるべからず。つはものゝ道儒者の道とて二道なし。もろこしの武道日本の武道、またなんぞ二あらんや。古の道今の道是又かはるべからず。易に曰、天の道を立て陰と陽といひ、人の道を立て仁と義といふ。陰陽にあらざれば天の道行はれず。仁義にあらざれば人の道たゝず。人に仁義の道あるは、天に陰陽あるが如し。仁は陽德なり。義は陰德なり。仁義の外別に人の道とすべきものなし。易は聖人の至れる教也。萬世の鏡也。信ずべし。うたがふべからず。兵術

も亦仁義の道の内の一事也。文を以て人をあはれみ、民をなづくるは仁なり。武を以て敵をうち、亂をしづむるは義也。文武の二はたとへば車の兩輪のごとく、鳥の兩翼のごとし。一かけては身ををさめ國天下を治めがたし。仁義は道の本にて體なり。文武は仁義を行ふ用なり。用とはたとへば火を以物をあたゝめ、水を以て物をうるほすが如し。故に仁義の道の外に文武なく、文武の外に治法なく兵術なし。敵に對して計謀を用るは、たとへば西を攻んとしては其東を襲ふの類也。かくのごとく事にのぞみ時に當りて敵をはかり、權謀を行ふ事はさも有なん。前にいへる兵術者の數の如きは、仁義の道をすて文武の法に背き、君臣朋友およそ人倫に對し僞を行ない、人の功名をうばひてわが物とし、利を得るを以日本の武道とす。しかれどもまことの文武の道よりいはゞ、是を名づけて盜賊と云。利欲を專にして義理をすつるは、是國を

亂すのわざにして、亂をしづむる武の道にはあらず。上を犯し亂をおこす、亂臣賊子のしわざなり。日本の武道を以て、盜賊のしわざと同じく心得る事むげにあさまし。少心あらん人は其非をしるべし。詳に辯ずるにたらず、夫仁義の道正直にしていつはりなき、是信なり。信なければ、からもやまとも古も今も人道たゝず。人道たゝざれば武道も行はれず。士將たる人信なければ士卒萬民の心を得がたし。もし表裏多くして人を欺き、いつはりを行なひて、士卒そむきうらみば、百萬の兵ありとも、戰ひかつ事かたかるべし。故に兵の道は仁義を本とし、信を以諸人の心を服するにあり。孫子が權謀を專とせしも、將の道は智信仁勇嚴也といへり。もし將となる人仁義忠信をすてゝ、あはれみなくなさけなく、表裏を行なひてまことなく、只わが身を利せんとし、士卒皆これに見ならひ、化してはおなくば、なんぞ戰にのぞみて信を

守り、君のため忠義を行なひ、命をすて節に死する者あらんや。是を日本の武道といふべからざる事、辯せずして其非をしるべし。

人中にて我に無禮を行なひ、惡口する者あらば、恥辱にならざる事は、聞ざるふりして堪忍すべし。彼愚　に對し、いかりあらそふも本意ならず。されども彼者それをわきまへず、我をはづかしめたりとて、ほこりがほにてわれをあなどり、後日又われをはづかしむべきうれひを思はゞ、人なき所にまねきてとがむべし。もし人中にて惡口する事、二度に及ぶともいかるべからず。道理を云きかすべし。道理に服せずば、聲をはげましてとがむべし。此方よりは惡口すべからず。かやうに遠慮なく、人をあなどりて惡口する者はおろかにして、後のわざはひをおもんぱからず、必臆病なるうつゝなきしれ者なれば、此方よりつよくとがむれば、必閉口して止めるものなり。されどもわが方よりは、人をあなどりて惡口すべからず。惡口すればいかなる臆病者も、又いかりをおこして、たゝかひに及ぶ事あり。妄人とたゝかひ、かちても我も亦自殺せずんばあるべからず。是一朝のいかりに其身をわすれて、其親に及ぼすなり。不孝不智の至り、もとより武勇にあらず。犬死と云べし。君父のため、忠孝を行ふべきあたら身を、かゝる妄人に對してすつるは、いとをしむべし。彼愚人は人にせめられざればこりず、少しこらして大にいましむるは、小人の福也と易にも見えたり。凡朋友の交はたがひに、禮をあつくうやまふべし。如斯なればあらそひ出來ず、あらそひは必無禮よりおこる。闘論なからん事を議する事、甲陽軍鑑にしるせし內藤修理が說むべ也。

人を切て刀をさやにをさめず、手にもちてにげ去者に、途中にて行あひたる時、彼者我に手むかひせずば、其切たる理をしらずして、妄に彼と切合ふべ

からず、遠よりよぎて通すべし。おとよりおひ來る人其者をうちとめよと、遠ながら言をかけたりとも、其切たる子細をしらで、みだりにたゝかふべからず。其人を切れる故をたづねて、其者妄に人をころせしとがあらば、追來る者と共におひかけ行べし。追來る者にきらせ是を助くべし。或わが切らんも亦其時宜によるべし。もしは父兄主君などの敵をうちてのく者ならば、追行くべからず。君父のかたき打たる忠孝の道あれば、人を切たるとてきる事なかれ。うつ事なかれ。およその事用心は臆病にせよ、心は剛にもつべしと、義貞軍記にいへる俗語のごとくにすべし。

少壯の時人の一言をとがめて口論し、小なる義をはげみ、勇だてをして道理なき事に身をわすれ、父母をすてゝ闘ひ死す。不仁不孝のいたり也。是學問せずして仁義忠孝の道をしらず、あたら命をすてゝ道理にそむく事、愚なるかな。孟子曰、以て死すべし。以死する事なかるべし。死すれば勇をやぶるといへり。死ぬまじき事に死ぬるは、勇を失ふ。古人の曰、生を捨る事豈やすからざらんや。死に處事誠にひとりかたしとは、これをいふなり。いふ意は、死ぬる事はやすし。死して道理にかなふ事かたしと也。死ぬべき道理に當りて死ぬるは、死に處る道を得たる也。もし死ぬべからずして死ぬるは、愚なる故なり。是犬死なり。

勇士は命をすつる事かたからず。すてゝ道にあたる事かたし。道にかなはずして死するは犬死なり。たとへは狂愚なる者の、我に無禮なるをとがめて口論して、一朝の怒によつて人と闘ひて身をすつ。是其身をかろんず。是不孝なり。武にあらず。死ぬべくして死なざるは、是命ををしむ、勇なきなり。義にあらず。戰にのぞみ、君のために節に死なず、是不忠也。君父のために忠孝を行て、一かどの用に立べきあたら身を、よしなき少の事をいかりて、

狂人愚人のために命を捨る事おろかなり、をしむべし。

勇にあやまる人は死すべからずして死す。是仁にそむきて生をかろんず。孝にあらず。勇なき人は死すべくして死なず。是義にそむきて生をゝしみ、恥をしらず。忠にあらず。

もろこしの風俗、昔より君をいさめて殺さるゝ事をしれども、いさむる人多きはなんぞや。其國の人むまれつき忠義ありて、風俗も亦氣節をたつとぶ。其上文字ありて諫の道をしればなり。是もろこしの長ずる所なるべし。日本の武士は、古より戰場にて君のためたゝかひ、死して命をゝしまざる人多きはなんぞや。此國の人は天性武勇つよく、其上昔より國の風俗にて名をおもんずればなり。是和漢の人の各長ずる處なり。士氣ありて死をおそれざる事は、和漢同じけれども、其志す所かはれるは國のならはしにて、文を好み武を尚ぶの道異なるべし。故にわが日の本は、世界の内にてすぐれたる武國と云べし。只中夏に比するに、文學甚おとれるのみ。

いにしへの良將は、只勇猛計略のみすぐれたるにあらず。文武兼用ひ、寛猛相用ひ、仁愛ありて小過をゆるし、舊惡をわすれ、諫をよく聽用ひて、おのれにほこらず、財をゝしまずして功を賞す。故に士卒和同じてよく其功をなせり。

忠臣義士の身をすてゝ君をいさめ、節に死し、取まじき財祿をすて、朋友の過を切々に正す。かやうに忠直にして柔弱ならざるを士氣と云、又氣節と云。是君子の事なり。一朝のいかりに人とあらそひて、其身を亡ぼすは士氣にあらず。客氣と云。浮氣ともいふ。是小人の事也。

勇をこのむ者、其中を得れば正氣とす。君子の勇なり。士氣也。中に過れば客氣なり。うは氣なるは士氣にあらず。是小人の勇なり。正氣はよく事を

成就す。客氣は必事をしそんずるもの也。

外は勇あるやうに見えて、内心つたなき人あり。外面はつたなく、俄の事にあひて臆したるやうに見ゆる人あり。心定りて後に勇いでくるものなり。是氣よわく心つよきなり。外愚に見えて内明なる人あり。外明にして内くらき人あり。人の生れ付には色々くせあり。其心をしらで、くせを以其人を見あやまる事なかれ。

呂氏春秋曰。亡國之主必自驕。必自智必輕物といへり。織田信長公は武勇は古今にすぐれ、其功をたて敵を亡し給ふも、多くは不義にあらず。只うらむらくは、みづからおごりて士をあなどり給ひし故、明智がうらみおこる。自智ありとしてわれひとりの智を用ひ、いさめをふせぎ給ひし故、平手中務いさめかねて自殺す。物をかろんじ給ひし故、敵をあなどりておそれず、用心なくして、京都本能寺の要害なき所に、小勢にて留り給ひし故、明智其備なきをうかゞひしりて、不意によせ來りしかば、ふせぎがたくて弑せられ給ふ。理にあたれる古人のことば、かならずちがはず。

國語といへる古書に、三時は農をつとめ、一時は武をならふといへり。云意は、田をつくる農人は、春夏秋三時は、田圃をつとめてつくる故隙なし。冬は田作をはる故閑にして隙あり、山野にいでゝ狩をして軍陣の法をまなぶ。是一時は武をならふ也。士も三時は民のひまをうばはず。農は春は耕、夏はくさとり、秋は田畠に出來たる穀をかりをさむ。此三時のひまを、をしみてつかふべからず。古人は治世にも武をわすれず、農隙にはとしごとに武をならふ。浮世は亂世にあらざれば武の學びなし。抑弓馬劍戟は、まことにまなんで其術をしるべし。是藝なれば、しらずんばあるべからず。然れども是をならふを以、武の學とするは末也。

事の行なひて宜しききはを思ひきり、いさみてよくつとむれば、義行はれてあやまりなく、後悔なし。かゝる事のさかひのきはを、必おこたりゆるびてつとめざれば、不義となり、おくれとなり、後悔すれどもかひなし。是義を見てせざるは勇なき也。

武訓上終

武訓下

貝原篤信著

兵を司る人は大將も有司も兵法をしるべし。兵法は武藝をいふにはあらず。軍の道をしるを云。士卒をつらねわかち、進め退ぞけ、命令を下す。是節制なり。是を正兵とす。又智謀を用ひて敵をはかり、軍をやる。是を權謀と云。奇兵なり。此二は兵法也。これ大將有司の必しるべき事也。又陣法の中に奇正あり。獨權謀のみを奇兵といふにあらず。

五倫に對してわが心畏るゝを以其道行る。畏れざれば心ゆるまりおこたりて、道行れず。或人の曰、吾子の云所おそるゝを以、人倫の道行はるとは左も有べし。しかるに兵の道戰にのぞみておそれなば、兵よわくして敵にかつ事かたかるべし。いかんぞや。答て曰、戰におそれざれば敵にかつ事な

し。古の良將は戰さるさきにおそれて、敵の兵の多少と强弱をかんがへしり、身方の强弱をかんがへしる。兵の道をしへ、兵具、兵粮をとゝのへ、諸司と評定し、敵にかつべき計をきはめ、まくべき理なくして出陣し、戰にのぞんではおそれつゝしんで計を出し、士卒の心を一にして敵をくじきやぶる。是敵にかつの道はおそるゝを以專とす。されば孔子も子路をいましめて、三軍を行ふ道は、暴虎馮河のおそれざるわざをきらひ給ひ、事に臨でおそれ、謀を好くなさん人に、與し給はんよしを告たまふ。しかれば軍法は、ことにおそるゝを以本とすべし。畏るゝとは、つゝしんで用心するをいへり。勇氣なく臆病にておそるゝにあらず。

武に本末あり。知仁勇の德は本也。武德なければ武の道立ず、弓馬刀鎗の類のわざは藝なり。末なり。武藝なければ敵と戰ひがたし。夫知仁勇の三德は、大將士卒皆たつといふべし。知なくしては兵を用がたし。仁なければ士卒そむきてしたがはず。忠孝を行はず、義理にそむき、敵をたひらげて民をやすんずることなし。利欲によつて亂をおこし、かへつて害となる。勇なければ仁義忠孝のはげみなく、敵をうちたひらぐるにちからなし。故に知仁の道も勇なければ行はれず、凡此三の者は武の德なれば、一もかけぬれば武の道立ず。又弓馬刀鎗の藝をしらざれば、德ありても戰にのぞみて敵にかつ事かたし。故に兵を用るには、大將も士卒も武藝をしらずんばあるべからず。但大將は藝に專なるべからず。本を本とし、末を末とすべし。

義貞軍記曰、曾我五郎時宗が親の敵を打し事、後輩これを學べからず。若成人の後かくのごとく年を送りて、いかなる橫死にも逢なば、永く本意を空しくして家の疵なるべし。只親の敵をばのがすべからず。機嫌をも計べからず。即時に押寄て勝負を決すべし。敵運あらば我命を捨ずらん事違し難し

すつ篤信謂、此說近世の儒又是を嘉とする者あり。我おもふにしからず、父の讐ある者は本意をとぐるを主とす。兵法に謀を事として勝事をとるにおなじ。敵のちから士卒の多少、たとひ我とひとしき者なりとも、必用意をなし、謀をこのんで事をなしとげん事こそ君子の本意ならめ。敵と我との強弱をはからず、只即時に押よせて、なまじひに卒爾のはたらきして、しそんじたらば、本意をとげずして、人の物わらひとぞなるべき。聖人も子路を戒めて、暴虎馮河して死して悔なかるらん者には我くみせじ。必事にのぞんでおそれ、謀を好んでなさんものなりとのたまへり。伍子胥が父兄の仇を報せしも、身を全して吳王につかへ、吳國の力をかりしなり。若伍子胥も敵身方の勢をはからずして、押よせて父兄の仇を報せんとせば、などか本意をとげんや。張良が韓の仇を報せしも、高祖の勢をかりてこそ、秦楚をば亡ぼしけれ。うつべき時ありてうたずんば、まことにおこたりと云べし。工藤祐經は家富み郎徒多くして、用心をなす。祐成時宗單身にて即時に押寄たらば、などか敵を打すますべき、只犬死をこそせめ。されば義貞軍記の編と、近世の先輩それに雷同せし說、さらに理にかなへりともおもほえず。われかつて曾我記の序において、此事を詳に論せり。

小を以大につかふる事、是理の當然にして天にしたがふ道也。時の勢をしりて大にしたがふは智者のする所なり。小を以大にしたるがさるは、禮義にそむき時勢をしらず、はては國家と身とを失ない、敵身方おほくの命をころす。是天にそむけるなり。無學にしておろかなる人、武道をしらずして小を以大にしたがひ、弱にして強にしたがふを耻辱とおもひ、血氣の勇にほこり、大敵をあなどりて敵の勢のさかんにして、我が力の敵しがたき事をしらず。是孫子が所謂我をしらず、彼をしらざる也。

小を以大にしたがはずして兵をおこし、下として上ををかして、亂をおこし義理にそむくは、是血氣の勇にして武にあらず、武を黷すといふ。からもやまともかくのごとくにして、國家をうしなひ身をほろぼして、天下後世のあざけりとなれる人多し。愚なりと云べし。近世にていはゞ江州の淺井、越前の朝倉が信長にしたがはず、小田原の北條氏が秀吉にしたがはざる、これ小を以大につかふる道をしらざる也。皆義のある所にあらず、つひに其家を亡ぼし、身を亡ぼして義にそむき、おほくの身方と敵とを殺せし事、仁にそむく。是等の人の行ひし事、皆不仁不智無禮無義といふべし。安藝にありし小早川隆景は、毛利輝元八ヶ國の主として大なりしかども、輝元をすゝめてはやく秀吉に屬せしめ、人質を出し、信長薨じ給ひし後も、和義を變ぜずして秀吉に屬し、つひに其父元就の領せし八州の地を失なはず。智ありと云べし。又信長秀吉の功臣に國を給りしは、其國にいまだ服せざる者多しといへども、たひらげよとて國をさづけ給ひしに、其國さぶらひ一國に五人十人もありて、小身ながら皆小城をもちて、その國主にしたがはず、國主にそむくのみならず、天下の主にそむくは、是小を以大につかふる禮義をしらず、其上國主と天下の主にそむきては、小身の城主、身をたつべきやうなき時勢をしらず、不智と云べし。禮義にそむき、時勢をしらずして、つひに家と身とを失なふ。愚の至り也。時勢をしりて早く降參したる者は、皆災なくして家をたもてり。或は君に對し謀反をおこし、亂臣にくみし、亂逆を助けて其君を亡ぼしても、幸にわが身を立し者あれども、是不義の至り、にくむべし。家をおこせしも榮とすべからず、恥とすべし。況かくのごとき者は家をやぶり、身を亡せるともがら多し。

天下太平なれども武をわするればあやふし。故に治

世にも亂を忘れず、武事を備なふべし。無事なる時武をならはゞ後悔なかるべし。遠き慮なければ必近きうれへあり。亂にのぞみて兵をならふは、渇にのぞんで井をほるがごとし。

敵に對し勝負をあらそふ時、はやり過て勇むを貴とばず、しづまりてこらふるを貴とぶ。是敵にかつ道なり。只忍ぶをかたしとす。忍ぶはこらふるなり。敵に對してしづまりてよくこらへ、はやく手を出してまづうごくべからず。勇み過てこらへず、はやり過てまづ動けば、敵わが非を見てうつゆゑに、わがまけとなる。兩人相戰て勝負いまだわかれず、敵の動きを見て其すきまをうてば、かちやすし。此故に先動く者はまけ、後起るものはかつ。忍はまことに一字千金の兵法なり。おろそかにおもふべからず。是古人の說也。三略にも變動は常なし。敵によつて轉化す。事の先とならず、動て則したがふといへるが如し。はやり過てこなたより早く動けばまけやすし。よくこらへてうごかざるはかたし。故によく忍をたつとぶ。かろ〲しく動くべからず。利を見ずして妄に動けば敗れやすし。君子は重をもつて輕を制し、靜を以て動をまつ。神全く氣定りて心うごかざるをたつとぶ。

或武人、敵と我兩人戰ふ時の心をよめる拙き歌有。

　身はすてつ心ばかりはふらさじ
　　人のうごきをまちてぞうつべき。

いふ心は敵と戰ふにのぞまば、身はすつべし。身をのがれんとおもへば心みだれ、おそれひるみて、敵にかつべきちからなし。されど心ひとつは失なふべからず。敵とたゝかふ時に、つねのごとくにして心をうごかすべからず。わがかたよりみだりにかゝらず、こらへて早くうつべからず。人のうごきをまちて、其すきまを見て早く打べし。是敵にかつの道也といへり。

士となる者平生は溫厚和平にして、いかりをおさへ

色をはげしくすべからず。みづから樂しみ人を愛すべし。されどもつねに志をたもち、氣を養なひて義理にいさむべし。變にあひては平生の志を守りて、勇剛を失なふべからず。いかなる大事にのぞんでも、かたく此道を守り、心を動かすべからず。勇氣をふるひおこして、强敵に俄にあひてたたかふとも、心をしづかにしてうごかすべからず。勇者は其かうべをうしなふとも、此道をわすれずして、心にかなしみうれふべからず。死にのぞんでもおそるまじき理をあきらめ、平生勇氣をやしなふべし。義ありて性剛强なる人は此志をたもちやすし。柔弱なる人も常に義をたつとび、此志をたもちて失はざるべし。士の子もわかき時より武勇に志なければ、節にのぞんで心つたなくしておそる。四民ともに常に氣を養ひて、心をうごかさゞる工夫をわするべからず。氣の强弱は人の生れ付によれども、勇にして節義を守る志は忘るべからず。勇者はおそれず、又勇士は其かうべをうしなふにわすれずとは、死にのぞむまで、此義を守る志をわすれずと也。

勇者は外をあらくせず。荀子が能定つて後、能應ずといへるが如くなるべし。いふ意は敵にむかひては、心をしづかに定めてうごかさずして、よく敵にかつ。外に氣をうごかして、かるがるしくさわがしきは、內に敵に應ずべき根なし。人にかちがたし。いにしへの勇猛人にすぐれたる將、よく武功を立て、草創の業をなすといへども、智なければ守文の功を成して、長くたもちて子孫に傳る事かたし。故に武將は智を先とす。勇は其次也。

師の克ことは和にあり、衆にあらずと古人いへり。いふ意は、軍にかつには士卒將に和順にして、其下知にそむかず。一同にちからを合せて、身をゝしまずして戰ふにあり。大軍なりとてたのむべからず。若士卒の心將に思ひつかず、そむき離なれて、其

力を同じくせずして一に和せずんば、百萬の衆ありても軍にかちかたし。和とは和合なり。天地和合すれば萬物生ず。九族和合すれば家道行はる。君臣和合すれば國家平か也。

兵を用るはまことに武威を貴とぶ。しかれども仁義の道なければ諸人の心從がはず、武を用ひがたし。良將のいくさははかりごとよく、おもんばかりくはしくして、かちやすきにかつ。故に士卒おほくはうち死なし、愚將暗主は此理をしらずして、敵身方士卒の多く死するを悦ぶは、不仁なるのみならず、軍の道におろかなる故也。上兵は戰かはずしてかつをよしとす。若やむ事を得ずして戰ふとても、いくさの道よく、はかり事あるゆゑに、良將は敵をも身方をも多くころさず。古人の曰、將となる事三世なれば子孫なし。いふ意は、天道は不仁をにくみ、ころす事をこのみ給はず、凡天が下の人は皆天の子なれば、其子をころす事をにくみ給ふ故、人を殺す事を好めば、其子孫たゆるとなり。仁者は將となりても人を多くころさず。しからば將たる事數代なりとも、何ぞ害あらんや。若不仁にして人を多くころしたる人は、三世にかぎらず、一代將となりても、其子孫斷絶せし人、古今其ためし多し。天道不仁をにくみ給ふ事、これを以てしるべし。其理たがはずうたがふべからず。天道おそるべし。あきらかなり。

漢高祖の父太公を、項羽虜にせしに、高祖の求め切ならざる故、項羽つひに太公をかへす。明の英宗を北狄にいけどり行しを、其子宣宗はじめ郕王と稱せしが、父とらはれとなり給ひし後帝位につきて、其父をはるかに尊んで太皇帝と稱す。宣宗北狄に父を乞はず、父とらはれと成給ひし事、何ともなげ成しかば、北土に英宗をとらへ置ても益なき故、北虜終に英宗をおくりかへせり。是高祖宣宗の心は不孝によれるか、知べからず。其計はよ

し。父を敗いけどり行しを追かけ、父も敵も打亡したる事ありとなん。後世の人評して、或ほめ或そしる。其時父をきらず、只父のあとを堅固に領し、兵勢をつよくふるひなば、敵はおのづから其威に服し、其父を生どりて、とぢこめ置ても益なき事をしりて、其父を此方より求めずして、送りかへすべきに、年わかき人は、俄の事にて其思慮なく、又古のふみをみず、高祖宣宗の行ひし事をしらず、しかれば、武將も古の記錄を多くよんで、ふるき事を知るべし。文盲にては古の事をしらず、鑑とすべきやうなし。われひとりの才智をたのみては必あやまり多し。よき道をしらざれば、才勇ありて善を好む人も、まことの理にあたらずして、あやまりおほし。

弓をみだらしと云、太刀をみはかしといふ事、子細あり。

三代の將道家の忌所、將はおほく人を殺す故、父子孫三代つゞきて將となれば、人をころす事多し。天道のにくみ給ふ所なる故、必子孫ほろぶ。天道おそるべし。もし良將人を殺す事を好まずして、戰はずしてかち、謀を以敵を降らしめ、戰にのぞんでも、陣をおしくづして敵にかてば、敵身方人は多く亡びず。故に良將の戰は、敵も身方も人多は殺さず。暗將は兵の道をしらず、敵を多くころすを手がらとおもふ、愚なり。人を殺す事を好まずんば、將たる事幾代つゞきても、家の亡ぶるにはいたらじ。

敵と戰ふに、かち過しては、敵取て返してつよく戰ふものなれば、必はじめのかちにて早くやめて、少し手ぬるきやうなるが後の禍なし。匹夫の寄合、口論するも惡口をしすごし、人にかち過ぜば、其人堪忍せずしてつよくしかへせば、おくれを取事あり。古の良將の兵法大にかたず、又大にまくる事なし。是良將の兵法也。兵をしらざる將は、幸に

して大にかつ事あり。又大にまくる事多し。是良將の兵を用る法にあらず。さきがけをするも此心得あるべし。我一人ふか入すれば、幸にして手がらをする事あり。又やみ〳〵と敵にうたるゝ事多し。

將たる人號令明かにしてあやまらず。賞罰信ありてちがはず。士卒と苦樂を同くし、われひとり樂しまず。寒暑をも士卒と同じくし、士卒をいたはりてくるしめず。かくのごとくすれば、士卒上におもひ付て死力をつくす。

君のため生をおしまずして戰かひ、死をかろんずるは士卒の事なり。死をかろんぜず、かる〳〵しく戰はず。生をおもんじ命を保つて、敵にかち、わが軍を敗らざるは、大將の事也。故に將の道と士卒の法と同しからず。大將も士卒も、敵をあなどりて、深入するは不覺と云へし。眞の勇にあらず。長逐すれば弱敵も窮鼠却て猫をかむのうれへあり。弱敵には誠におそるべし。勝過せばおくれをとる事あり。

一時の口論によりて鬪諍に及ぶは、必あらそひよりおこる。あらそひは、人の過言無禮をとがめて、堪忍せざるなり。忍人はあらそひなく敵なし。又はぢなし。人に對するには、言にも身のふるまひにも、禮をあつくして、無禮なるべからず。

神功皇后の新羅をせめに行給ひし時の軍令、日本紀に出たり。もろこしの良將の軍令にもまさりて貴ぶべし。

挑戰と云事はいかん、兵を合せ戰はんとするに、まづ勇士をさきに出して、敵をうたしむるを云。本邦にて、近古豐臣秀吉の柴田勝家と戰はんとて、先近江の賤が嶽に陣せられしに、兩陣よりたがひに兵を出して戰はしむ。秀吉の勇士七人先がけして敵を退けたり。かくのごとくするを挑戰といふ。

武士を物の部といふ事、神武天皇の御時、宇麻志麻治命と、道臣命と、軍兵を具して內裏を守る。道

臣命の司れる軍兵をば兵(つはもの)といふ。宇麻志麻治命の司れるを物部といひし故なり。

戰陣に川を渡すに、河邊にのぞんでのり入所と、向ひのあがり處をよく見定むべし。むかひあがり場あしければ、あがりにくゝ敵にかたれ、身方に越さる。川ほりなどありて、馬にて飛こすべきとおもふ所は、かねて馬をのるに馬の足をはやめ、其勢ひを以飛こさすべし。かち立にてはしり越ゆるも同意なり。

敵川を越來るを待て戰ふに、古法に半渡るをうつと云。半渡とは、敵川半まで渡り來るといふ事にはあらず。身方は、川ばたより二三町ほど引退いて陣をなし、敵の川をこし來るをうつ。敵兵半ば岸よりあがりて、備(そなへ)いまだ定まらず、半はいまだ川中にありて渡る時、此方よりさそひかゝりて、敵の備なきを急にうつて、敵を川に追はめ、うつを云。是必利ある謀なり。

大將の旗を立るに、春夏は將の左に立、秋冬は將の右に立、是陰陽にしたがへるなり。

使番は敵陣をうかゞひ、大將の心を身方の士卒に云渡す役なり。軍の道をしれる、少しなりとも智仁勇ある功者を用ふべし。士卒をはげまし、士卒をよわめ、士卒をころし、士卒の心大將に和し、大將にそむくも、使番のしわざおほし。必其人をえらぶべし。自餘の有司より其職おもし。

古人の出陣は、喪(も)の禮を以是を行(おこ)なふ。軍の命下る日は、士皆なきて涙を流す。父母兄弟にわかれん事をかなしめばなり。戰をなす事必死(ひつし)の道なれば、かくのごとくする事むべならずや。

良將の兵を用て戰ふには、士卒の心を同じくし、力を一にして、一同に進み、一同に退ぞかしむ。勇者も一人すゝます、一同に下知にしたがひて進ましむ。怯(つたな)き者も獨退かしめず、退くべき時は下知にしたがひて一同に退かしむ。一人ぬけがけし、さ

きがけすれば、陣法みだれて軍の勢わかれ、よわくなる。呉子がぬけがけして首を取たる勇士を切たるも此意也。

左傳に、晋の隨武子が曰、見レ可而進、知レ難而退、軍之善政也。凡兵を用るに進も退も度あり。度を失へばやぶる。進むべからずして進み、退くべからずして退くは、度を失ふなり。進むべくして進まず、退ぞくべくして退ぞかず、是亦度をうしなふなり。敵陣にむかつては、進むべくして進み、退くべくして退ぞく、是和語にかへるも、引もおりによるといふがごとし。戰の道進退によりて節あり。勇者は進むべからずして進み、退くべくして退ぞかず。是軍法の禁ずる所なり。大過とす。進むべくして進まず、退くべからずして退くは、是怯者のしわざなり。不及とす。これ亦軍法の禁ずる所なり。進むべからずして進み、退くべくして退かず、進むべくして進まず、退くべからずして退く、此四の者は勇怯同じからざれども、ともに軍法に害あり。軍法にしたがひては、勇者もひとり進まず、怯者もひとり退かず、皆力を一にするは良將の兵なり。

かゝるには、さきにすゝむを勇とし、引にはあとにおくるゝを勇とす。されども、進むに先にあるは猶もやすし。退くにあとにあるは甚かたし。

凡大將として、兵を用て戰をする道は、義と術と勇と知との四そなはるべし。第一義を質とすべし。戰をおこすに、義か不義かをかへりみるべし。軍法調り、兵つよくして、敵にかつ事必定なり。うつべき敵にあらずして、戰をおこすは不義なり。戰をおこすべからず。是義を質とする也。次に戰をなすには必術あるべし。術とは、陣を備へ敵にかつてだての法なり。戰の術をしらざれば敵にかちがたし。萬の事皆術を量てなすべし。殊に戰は死生存亡のわかるゝ所、尤其術をしるべし。術なくして戰へば必敗る。次に戰をなすには勇あるべし。勇なけ

れば敵をやぶるに力なくして勢なし。又知以成べし。知なければ始終軍の道成就せず。故に兵の道は、知を以始をなし終をなす也。凡君子の兵を用るには、此四の者備らずんばあるべからず。

五兵の内、義兵、應兵は君子の用る所なり。忿兵、驕兵、貪兵の三は君子の用ざる所、小人の用る所なり。

范文正公の曰、將の古今の事をしらざるは、匹夫の勇なり。大將はひろく學問して、古今の事に通じて知るべし。一人の勇をたのむべからず。それは匹夫の事なり。

兵を用ひ軍をおこすは、仁義によつて行ふべし。是文武を用る也。もし文武によらずして兵を用るは、盜賊とすることをまぬかれがたし。凡兵を用るは、天地の物を生ずる仁心にそむく。聖人はやむ事を得ずして兵を用ひ給ふ。是天道を行ひ給ふなり。

聖人の兵は其義を行ひ玉ふ。仁其中にあり。程子蝎の頌に、殺レ之則害レ仁。放レ之則傷レ義。是聖人の兵を用ひ給ふ心なり。

武訓下大尾

君子訓序

昔の人、太平の世に生るゝを以て樂とせり。もし亂世に生れなば、憂ひにしづみて身を終りなん。豈不幸にあらずや。上世の事は遠ければ、治亂の跡もさだかならず。中頃より或は治まり、或は亂れ、終に足利氏の世となり、十三世の間兵亂止まず。天下の人民、手足をおくところなくして、久しく愁ひ苦しめり。其の後英武の君、一人二人相繼ぎて興りたまひしかど、德足らずして、久しく生を保つことあたはざりき。今此の御世となりて、筑波山のしげき御惠により、飛鳥川の淵瀨になるうらみなく、四つの海波靜かに、七つの道おだやかなり。かゝる太平の時に生れあへること、昔の人の樂とする所にして、今の人の幸はなはだし。いかなれば、昔の民亂世に苦しみたる彼が如く、今の民治世に樂しめることこの如くなるや。此の大なる御惠を報い奉らんことは、誠に昊天のきはまりなきが如くなるべし。凡そ民を治むるには、古の聖の道を法とすることは、いふもさらなれど、今の世の人多くは經史に昧く、又官職に居る人は學ぶに暇なくして、古の經濟の道にうとし。爰に我が愚昧をわすれて、かつて聞ける所を述べて、いさゝか古の道の片はしをあらはす。ひたすら無學の人のため、國字をもてしるし侍る。僭卒の罪のがれ難しと雖も、公侯大人の見聞に富める人のために記すにはあらず。只一村を治むる小吏、一郡を預る代官のうちに、古の道に志ありて、經史を見聞するに便なき人のため、もしくは小補にもなりぬべく思ひてなり。是わがこの治まれる世の樂をうけたる大なる御惠を、報い奉るかたはしになんありける。

君子訓上

貝原篤信著

天地は萬物の父母なり。その德廣大にして限りなく、萬物を生育してやむ事なし。人は殊に天地の正氣をうけて生れ、仁義の性をそなへたれば、萬物の靈にして、貴き賤しき、みな天地の御子なり。なかについて、國土を治め給ふ君子は、天より專らこの人を厚くかしづきて、人民のつかさとし、下を治めしめ給ふ。そのゆゑは、天地は、人を生じ出し養ひ惠むを以て、心とし給へども、天もの言ざれば、自から命令を下して、人を治むることあたはず。君子を取立て、官祿をあたへ、其の地の人民を預け給ふなり。然れば、凡國土人民を司り治むる人は、各その主君より命を受くれども、その實は、天より立て給へる代官なり。故に天職といふ。君子と稱するは、國に君として民を子とすといふ義なり。天職とは、天に代りて民を治むることを司るなり。凡國天下の君、その宰臣および一郡一鄕の司まで、その任大小異なれども、皆君子にして、天職を分ち任ずる人なり。夫國郡の君は、天よりその人に私して、富貴にし給ふにはあらず。その人に威權を假して、治めやすくせしめんためなれば、天道に受け從ひて、民を子の如くする事その職分なり。

古語に、君を立つるは民の爲にすと云へり。凡國君を立つるは、其の民を治めしめんためなり。國民を以て、其の君一人を養ひて、富貴ならしめん爲にはあらず。然れば國郡の主となる人は、我一人の樂を好まずして、民を安くし國を治むること、わが職分なる理を辨へ知りて、日夜朝暮、偏に仁愛の心を先とすべし。この理を知る時は、その職分を勤めて、民を安くし國を治むるを樂とし、世俗の好む淫樂酒聽男女の慾等は、自からうすくな

るべし。昔漢の東平王、京都に參覲せられしに、其の時の天子明帝、汝國に在るに、何を以て樂とするやと問ひ給ひしに、東平王、善をすること最樂しと答へられき。されば善政を行ひ、國民を安くする程の樂はなかるべし。凡國郡以下小郷邑を治むる人も　その德、聖賢に及ばずとも、古の道を學び、人を治むる古法を手本として行はゞ、などか民安く國治まらざる事なかるべき。然らば、その身尊榮して、世の譽れ後の名まで、いみじき面目なるべし。豈眞の樂にあらずや。

生を好み死をおそるゝこと、人と我と同じ。身の艱難をきらひ安樂を願ふこと、人と我と同じ。父母妻子一所に在るを悦ぶこと、人と我と同じ。飢寒を苦しみ温飽を樂しむこと、人と我と同じ。然らば我が悦び苦しむ心を以て、人の心を推しはかりて、人にも悦び樂しましむべし。是を恕といふ。是仁を行ふ術なり。されば人に悦び樂しましめてこそ、わが心も樂しむべけれ。人の憂を顧みずして、我獨樂しむことは有るべからず。譬へば一座にみち〳〵たる數十人、みな酒を飮みて樂しむ中に、只一人隅に向ひて泣くものあらば、一座の人みな興さめぬべし。孟子にも、古之人與レ民偕樂故能樂也といへり。人の司となる人は、この道理を能くさとり給ふべし。

智者は心明らかにして、民の憂へ苦しみをよく知りて施す。民の樂しみ願ふ事を能く知りて施す。愚者は心昧くして、民の憂へ苦しみを知らず。我一人の私のみに徇ひて、民をめぐむ事を好まず。是を以て智者は必仁あり、愚者はかならず不仁なり。故によく學問し、道理に明らかならば、などか仁心もおこらざるべき。

學問は、身を修め人を治むるを有用の學とす。是眞の學問なり。もし左もなくて、文字を知るを以て學問とおもひ、多く聞き多く見るに、博學多識

なりとも、何の益もなき無用の學なるべし。故に只有用の學を務むべし。無用の學をなすべからず。

眞西山曰、人の君たるもの、大學を知らずんばあるべからず。人の臣たるもの、大學を知らずんばあるべからずといへり。君も臣も、身を修め、國家天下を治むる道、大學の書にそなはれり。是を讀みて、受用せずんばあるべからず。又中庸の九經に、身を修め、人を治むる道備はれり。考ふべし。此の二書を能く讀みて、受用し行はゞ、外に求めずとも、その要は、このうちにあるべし。

世を治むるに、大道二あり。文と武となり。文は徳を專らとし、武は威を專らとす。威と徳と二ながら備はりて、治道なれり。徳なければ人なづかず。威なければ人恐れず。人恐れざれば、怨み背きあなどりをかして、世治まらず。仁にして人を愛するは文徳なり。義ありて人を正しくするは武徳なり。もし古事を覺え詩歌を作るを以て文とし、騎射を習ひ劍戟をふるを以て武とするは、甚小にして末なり。

人の上たる人の學問は、詩を作り文を書き、大和もろこしの故事來歷を多く覺え知る事にはあらず。たゞ古聖賢の教をうけて、身を修め人を治むる道を知る、是則君子の學なり。まづ大學を以て道に入るの門とす。次に論語孟子尚書及大學衍義を考へ知り給ふべし。是、身を修め人を治むるに益あり。又通鑑は漢土歷代の記錄にして、古人の行ひし善惡の跡を記し、評論を載せたれば、尤政治の道倫理綱常の教に益あること、四書六經に次げり。古人のなせる善惡の跡を考へて、今日行ふ所の是非を辨ふべし。聖人の經は萬世の則なり。通鑑は萬世の鏡なり。聖人の書は、譬へば醫書の病論のごとし。病の因縁を知り、療治の法を知り、通鑑は、古人の療治せし醫案を考へ、その療法を知るが如し。古人のなせる跡を考へ、今の病人に對して

療治するは、今日に於て甚切要なり。通鑑を考へて今の鏡とするは、端的にして切なる事なり。政事を執行ふ人は、是を考へずんばあるべからず。

上天道にかなひ、下人心にかなひ、中義理にかなふ道一あり。その名いかん。公といふ。公とは、私なきをいふ。又上天道に背き、下人心に背き、中義理に背く道一あり。その名いかん。私といふ。私とは公ならざるなり。人我を忘れて、身に私せざるを公といふ。人我を立て、人の事をすてゝ、專我が私身の爲のみをするをといふ。君に事ふる道を以ていはゞ、わが身を忘れて、ひとへに君に忠するは公なり。專我を利して、君をわするゝは私なり。私心深ければ、いかなる非義をもなすものなり。故に人の善惡は、公私の二を以て分ち知るべし。君に私あれば、民を愛する心眞實ならずして、人民信服せず。臣下に私あれば、君に忠なく民に愛なし。才能も見るに足らず。その餘は、皆是にならへ。

身を修むるには、天理と人欲との勝負を試むべし。身を養ふも亦然り。民を治むるには、君子と小人の進むと退くとを以て、治亂を知るべし。

上より利欲を行ひて下に見せしむれば、臣下も民も皆小人となる。上より禮を好みて下に交れば、臣下も民も君子となる。凡風俗は皆上よりおこる。上の好む事は、必下にも好んで風俗となる。風とは導き行ふなり。俗とは下に習ひて行ふ所なり。

古の聖人、國を治め民を安ずるの道、其の要三あり、政敎刑なり。士には、祿食を與へて、義を守り利欲に遠ざからしむ。農には、公役を省きて、年貢を輕くし、力を耕作に盡さしむ。桑麻をうゑ、布帛を織らしむ。工人を惠みて、その利用を賞し、無用の華美の物を作ることを禁ず。商賈を通じて、運上を輕くし、市の價を平らかにして、奇巧無益の物を賣り、姦利をなす事をいましむ。此の上に、

游惰を警め、奢侈を禁じ、儉約を行はしめて、四民ともにその分を安んじ、その業を勤め、衣食足りて困窮に到らしめず。是民を養ふの政なり。上徳行を勤めて、下の手本となり、學校を建て師を立て、士民に人倫の道を敎へて、士は禮儀を知り、庶民ともに善に遷り、罪に遠ざからしむ。是敎なり。斯の如くして、民政に從はず、敎に入らず、人の害となる者あれば、その罪を正して是を懲す。是刑なり。この三の考へは、國を治むるの要なり。後世にも、この事なきにはあらず。只その法古に及ばず、且、行ふものその人にあらざれば、その具ありといへども、その道行はれずして、國治まらず。

人の身のはたらきは、一心を主とし、兩手兩足を使ひものとす。身の内少しにても痛む所、かゆき所あれば、手行きて是をさすりかく。是わが心、わが身を愛すること切にして、心と身と一體にして通ずる故なり。君の心に仁愛厚くして、萬民を惜む心深ければ、民の愁ひ苦しみを知りて、惠み施さゞる事なかるべし。

孟子に、仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民その澤を被らずといへり。國を治むる人、何程慈愛の心ありても、善政を行ふ道を知らざれば、只目前の小惠を行ふまでにて、國民の心を心服する程のことは是なし。昔齊の桓公、老人の飢ゑたるを見て、食を賜はる。老人辭して云く、願はくは、國中の飢ゑたる者に食を給はらには、我も飢ゑまじきとて受けず。又或國の宰臣、貧人に物を施すことを好みて、外に出づる毎に、必錢袋を持たせ行けるに、乞丐、その惠を得んとて、いつ街にみてり。或者諫めて曰、賢人を舉げ用ひて、貧民を救はしめば、萬人その所を得て、飢寒に及ぶまじ、何ぞ小惠をなすやといへり。仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民を救ふ功なくして、

國の治に益なし。

孟子曰、親レ親而仁レ民、仁レ民而愛レ物といへり。君子の道は、仁を專として、人を慈しみ物を憐むなり。その內に天然の次第あり、まづ親を親しむとは、父母兄弟親類縁者を厚くするをいへり。次には民を仁す。民を仁すとは、臣下萬民を廣く慈しみ、各その所を得せしむるをいふ。もし一人も其所を得ざれば、仁するにあらず。その餘は物を愛するにあり。物を愛すとは、禽獸蟲魚草木を亂りに殺さず、亂りに伐らざるをいふ。その內親疎貴賤有情無情大小の次第によりて、仁を施すに厚薄の替りあれば、かく三つの品をわけ、教を立て給へり。すべていへば、親しむも愛するも皆仁なり。

仁政を行はんとならば、まづ儉約を守るべし。儉約は奢縱ならざるなり。衣服居宅よろづ內の事につきて、華美を好まず、亂りに費さゞる是なり、國大なりといへども、土地より生ずる米穀、その外の財は限りあるなれば、上の物ずきにまかせて、無用の費をなせば、財を用ひ盡して、年々に足らず。況や歲の豐凶ひとしからざれば、財用の積りも同じからず。上の財乏しければ、禮義を行ひ、變に備へ、貧窮を惠むこともならず、果は下を虐げ取り、債を負ひて、儉約を失ひ、國危亡に至る。何ぞ仁政を行ふに暇あらんや。古より明君賢主みな儉約ならぬはなし。儉は誠に君の美德なり。

古の法は、三年耕して一年の食あり。農を以て立てば、田を四丁作る者は年、貢の外、其の得分を四つに分ち、三丁の穀を其の一年につかひ用ひて、一丁の稻は、其の儲殘しおく。毎年かくの如くすれば、三年には三丁分の穀を餘す。是を三年耕して、一年の食ありといふ。君と臣はわが祿を四に割りて、その三を一年の用とし、其一を餘して貯とす。三年積れば一年の祿をあます。九年にして三年の貯あり。三十年にして十年の貯あり。昔帝堯の時、

九年の洪水あり。殷の湯王の時。七年の旱ありしかども、民の飢餓なかりしは、常に倹約行はれて、上下共に、その備ありつればなり。後世は華美の風俗盛になり、費用歳々に廣くして、常年にも財穀足らず、僅に一年穀熟せざれば、上下共に困窮す。倹約行はれずして、その備なき故なり。

君一人の私欲を恣にし、わが身一人を樂しまんために、多くの人民を苦しむること、わが本心に省み求めば、誰とてもこゝろよからざるべし。人の君として民を憐むは、誰もあるべき所の本心なり。君たる人は、この本心を保ちて、心よからんことを求むべし。人を苦しめしへたげて、我獨慰み樂しむこと、誰も心よからざる事なれど、私欲に迷ひてその快からざる事を知て心樂とする、是民を憐むの本心を失ひて斯の如し。譬へば傷寒を煩ふ、大熱病をうけては、平生食する所の飯も味噌も魚鳥の肉も、味あしく苦くして喰はれず。喉かわきて、平生の好める旨き味をきらひ、冷水を頻に飲めば、却て快きが如し。國土あれば、米穀金銀の財は、おのづから生ずるゆゑ、上より倹約を行へば、土貢を輕く取り、運上をもとめざれども、國の財豐にして缺くる事なし。昔漢の文帝、天下の民貧しとて、一年或は半年の貢を度々免し給ひ、運上など求めざりしかば、天下の藏入の財少く、國用たらずして、困究し給ふべき事なれども、在位二十三年の間、國豐に民富みて天下太平なり。天子の倉には米多くして腐り、錢繩朽ちてきれぎれになりぬるよし、漢史に記し置けり。是倹約を行ひ、諸の費を省き給ひし故なり。帝の倹徳を史に記し侍べるは、身に皂綈を着給ひ、幸する所の寵夫人衣裳を地にひかず、殿上の帷帳文繍の飾なし。嘗て露臺を作らんとて、工人に命じてその費を積らせたまひしに、百金を用ふべきよし奏せしかば、百金は中人十家の産なりとて、その作事を

止め給ひしとなり。上一人かくのごとく、少しの費を惜みて聊の奢なく、下を厚く惠み給ひしかば、群臣以下其の徳に化して、儉を守り富み足らする事宜なるかな。

君子の財を費して、貧を救ひ人をたすけ善を行ふは、その財を惜まざるにはあらず。その財を惜むこと甚しくて、善事に財を用ふるなり。故に人を救ひ惠む事を好む人の、常の財の用ひやうは、儉約にして妄りに費さず、愚なる人の目には、財を惜めると思へり。又常に奢り、財を亂りにし惜まざる人は、必人に施し救ふ事は、惜みてせざるものなり。凡わが身の爲に財を惜みて、人に施すに惜まざるは、君子の財を用ふる道なり。わが身のため、小財を惜まずして、人に施す事を惜むは、小人の財を用ふるなり。

匹夫立針の地を持たず、衣薄く食足らざる者多し。されど是亦天地の子なり。國郡の主も亦天地の子なり。國を保つ人は、其の財祿の多きこと、匹夫と幾萬倍といふことをしらず。同じく天地の子にして、その財祿の多少、天地懸隔なること斯のごとし。然るに國郡を保つ人は、その國郡の貢を用ひ、身を養ひて足らず。下にある匹夫の常にさへ衣服たらずして、飢寒を免れ難き者の財を貪るは、天道の萬民を養ひ惠み給ふ心に叶ふべからず。國郡の主といへど、その喰ふ所は、匹夫より多きこと能はず。着る所も匹夫より長きこと能はず。居る所は一疊に過ぎず。然れば國郡の主といへども、財多きことを求むべからず。その領地に生ずる財を用ひて餘あり。然るにもし、その領地の財用にてたらざるは、是侈をなし費多くして、その財を失ひ、儉約を行はざればなり。

國土に一年生ずる所の五穀の惣數をかぞへ、國土の人民、一年の間食する所の粮の數をかぞへくらぶるに、一年生ずる所の五穀にては、一年の糧足ら

す。是貧民は、雜穀菜根を食して、飢を助くる故なり。商人の酒を造り、菓子を拵へ、士の奢侈をなして、朝夕定まれる食の外に、饗食を費すは、皆是民の食を奪ひてなせるなり。

貧賤なる人、富貴なる人の財を貪るにすら、猶いやしむべし。少しく義理を知れる者は、是を恥とす。況や富貴にして郡邑を領する程の人、貧民の財を貪り取ること、いと不仁にして、その心尤惡むべし。人の財を貪らざれども、わが財を亂りに費さず奢らず、我が欲を忍びて、人に借らざれば、財のびて不足なし。

世俗の、廻り遠しとて行はざる事に、却てその驗近くして、その益大なる事あり。その驗するどにして近きと思へる事に、却て驗なくして、害になることあり。道を行ひ儉約を守り、與ふべきを與へ、取るまじきを取らず、廉直なれば富む。儉約ならず、與ふべき物をも與へず、財を用ふべきにも用ひざれば、道に背きて財たらず。國郡を治むるに、民の年貢工役を輕くして、民を愛すれば、國郡の財滿ちて餘あり、君の國用も不足なく、凶年もなれなり。もしかくあれば、廻り遠くて、今の世には用ひ難しといひて、法をするどにして、民をきびしく使ひ、年貢を過分に取れば、民貧しく力盡きて、國の財足らず。然れば、廻り遠きが、するどなるより、その益大なり。

士民に、常に奢らず高ぶらず、儉約すべしと教ふれども、從はざるは上を信ぜぬ故なり。上より儉約を行ひ、禮義を重んじて、下に示せば、臣民おのづから謙りて、儉約を守りて奢らず。是身を以てをしふるなり。下は上の詞に從はずして、行に從ふものなり。桀紂の惡王といへども、その臣に惡せよとは教へず。只その好む所行ふ事惡しき故、天下の惡人、その朝に集り、善人は日々に遠ざかりぬ。是をその言に從はずして、その行に從ふとい

ふ。

古人の曰、天下の患は、在位の人學なきより甚しきはなし。在位の人學を知らざれば、君大道を聞くことを得ずして、世俗のいやしき論に從ひ易くして、義理の言入り難し。然れば、學は君臣の要法ならずや。

君子訓上終

君子訓中

貝原篤信著

伊訓に、爲君克明、爲臣克忠といへり。此の意は、君の德は明らかなるを主とす。明らかなれば、人を能く知りて、善き人を用ひ、惡しき人を退けて用ひず。故に國能く治まる。臣下の德は忠を主とす。忠とは君の爲に心を盡して、誠あるなり。忠なれば官職を勤め、善人を擧げ進め、君の過を諫めて、善にうつらしめ、わが身の利害を顧みず、只偏に君の爲に心を盡すゆゑに、忠臣は國の至寶とすべし。不忠なれば、君の惡しき事を知れども諫めず。君の爲よき事あれどもいはず。只君の寵を願ひ、官祿をのみ心に懸くるゆゑ、その實は盜賊に異ならず。

堯舜の聖といへども、一人にて衆事を治むること能はず。賢者を撰みて職を分ち、是に任じて疑はず。

賢者職にありといへども、一時に功を立てず。久しくその職を勤め、その事に熟して後、その功成就す。政を爲すに、小利を見て速ならんことを好むは聖人の戒なり。

古の聖主賢君は、必賢者を求めて職に任じ、政を佐けしむ。故に國よく治まりて、その功大なり。君たる人は、先我が心を正し、知を明らかにして、人を能く知り、宰臣を撰び、次に諸有司を撰ぶべし。宰臣は家老なり、諸有司は諸役人なり。今時の取次役、目附役、郡町の奉行、勘定の司の如きは、政事に係りて重き有司なり。宰臣有司其の人にあらざれば、政亂れて國治まらず。宰臣は、才德有りて、大量なる人を擇び用ふべし。取次は、上の詞を下に通じ、下の言を上に達す。その人惡しければ、上の惠下にくだらず、下の苦上に聞えず、上下の情通せずして、君德暗くなる。目附役は、臣民の善惡を糺して、直言する職なれば、君の耳目なり。郡町の司は、殊に仁愛深き人を用ふべし。君と宰臣と賢なれども、その役人不仁なれば、民を安んずること能はず。勘定の司は、廉直にして算數に達したる人を擇び用ふべし。その餘は、是を推して、その職に宜しき材を選みて任ずべし。此の如くなれば、官その人を得て、國治まり、民安し。尚書に、政在㆑知㆑人。在㆑安㆑民といへり。

君子と小人とは、譬へば水と火との如く、香と臭とのごとし。一時に相並びては用ひがたし。小人用ひらるれば、君子の道は行はれずして、君子は、終に小人の爲に讒せられて退くに至る。人を知ること、古人も是を難しといへり、人の言語容貌を見て、その心底を知ることは、至明の人といへども必としがたし。孔子も、その言を聞きて、その行を觀ると宣へり。觀とは、心を用ひて察するなり。古人は人のすき好むことゝ、その人の親しき友の善惡を以て察し、又その平生行ふ所の善惡を見て

その人の賢不肖を知り、事を問ひ業を試みて、その材能の長短を知る。是古人々を知るの法なり。人を知り、時を以て君に告げて擧げ用ふるは、宰臣の職なり。

凡の人は、忠信ありて後、才力を用ふべし。忠信は眞實にして僞なきなり。不實にして材能あるは盗人なり、近づくべからず。忠信ならば、才力少し鈍くとも、學問し、物馴れたらんは、世用に達すべし。才能ありとても、忠信ならぬ者を用ひて、後悔したる君、古今に多し。

古は才德ある人なれば、家筋にもかゝはらず、賤しき者にても、擧げ用ひて職を授く。材能なき人は、貴族にても、その父祖の祿ばかりを、その儘あたへて官職に任せず。政に益なきゆゑなり。

凡、人に能あり不能あり。賢者といへども亦然り。一人に備はらんことを求むれば、天下に取るべき人なし。人々の得たる所を知りて、その人の能くすべき職に居らしめば、果してその職を能く勤めて、功ある時は賞を與へて、久しく其の職に任すべし。その職に久しく居れば、その事に熟して功多し。堯舜の時、賢臣皐陶稷契の如き、皆一生官を遷し給はずして、功庸多かりしなり。後世の君は、臣下の微勞を賞して、たやすく官を遷すゆゑ、皆その職に熟せず。或は、不得手なる事にかゝりて迷惑し、國政に益なく、害多し。但人を用ふる始めに、官に任じその能を試みて、後擧げ用ふるは左もあるべし。その得たる所を知らずして、官を遷すは、人を用ふる道にあらず。

萬の事は、勤むるによりて成り、惰るによりてすたる。各その位にありては、その職分を愼しむべし。一念愼しまざれば、衆人の患となり、一口愼しまざれば、永き患となるなり。

位は座席なり。祿は食邑なり。官は職事なり。古は職を勤めて功あれば、位を進め祿を增し、金帛な

と賜はず。官を以て賞とせず。官は能に授くるものなり、褒美の具にあらず。周の世の法は、士の子、その才徳なければ、父の官を繼がず、是を世々にせずといふ。大臣の子といへども、必その才智勝れざれば、その父の祿を與へ繼がしめて、その父の官職をば繼がしめず。大臣の子なればとて、その人のその職にかなはずば、君のため民のため惡しく、萬事治まらず、是災の本なり。然るに、後代は事しげくして、官職年々に增し、その祿を世々にし、後は君の倉入の財盡き匱しくなる。是を以て、唐虞の世に官に勤むれば、その官につきたる祿を與へ、その官に任せざれば、その祿を與へず。是今の役料といふものなり。是萬世に行はれて害なき良法なるべし。官職を授かりし人、其の人老死して、その子の才なき者に、其の祿を其の儘與ふれば、君の財祿盡きて國用足らず。

賢者といへども、過失なきこと能はず。小過を赦さざれば、其の功を成しがたし。

凡そ人の譽め誹り、必みだりに信ずべからず。善人にも、人を知ると昧き人ありて、譽め誹りに誤あり。又小人婦女奴婢は、知なく私ありて、人の善惡邪正を知らず。我が心に合へば惡人をも譽めあげ、心に合はざれば善人をも誹りおとす。善行をも惡しといひ、惡行をもよしといふ。小なる事を大に言ひなし、大なるひが事をも咎めず。時の勢に徇ひて、ほめそしること定まらず。道理に違ひ、正直ならず。愚なる人は、かゝるひがことを信じて、君子を退け、小人を親しみて、小人にたぶらかされ、名を汚し、身を亡ぼすに至る。つゝしむべし。

宰臣の職は、君を輔佐して、其の過失を正し救ひ、政の善惡を論じ、賞罰を正し、諸有司をすべて、其の成功を責め、廣く人才を求めて、他日の用に備ふ。細務を自からせず、有司に打まかせ置きて、年限を以て、その功過を察し、君に告げて是を進退す

べし。有司の務を一々上より指圖すれば、いかなる良有司にても、その才能を盡す事を得ず。上の意をうかゞひ、上にかゝりて、身がまへし、その職にはまることなし。斯の如くなれば、事立たずして功ならず、初に精しく人を擇び、是に職を授けて後は、打任せ置きて小過をゆるし、年限を以て考察すれば、その能不能明らかに知らるゝなり。

凡、國を亡ぼす君も、その君一人の仕業にあらず。一人不德なれば、その臣下諂ひて、惡を勸め導くゆゑ、國亡ぶるにいたる。上より下をうたがへば、下も亦上を疑ひて、その心を盡さず。上誠を以て下を使へば、下も亦誠を以て上に應ず。自然のことはりなり。或は人を信じて欺かるゝ事あるは、上の心不明にして、佞諛を好み、偏愛に溺るゝ故なり。

晉の平公、その臣叔向に、國家の患何れか大なるやと問はれしに、叔向對へて曰、大臣は祿を失はん事を恐れて、君の過ちを諫めず。小臣は、罪を恐れて、敢て言はず。此の如くなれば、下情塞り通せず。是國の大なる患なりと。上下の情通せざれば、上の人、身の行ひ、國の仕置も、惡しき事を聞かず。其の心、日々に驕りて、過惡增長するゆゑ、國の危き事、是より甚しきはなしといへり。

君たる人、我は諫を好めども、人我を諫めずといふは僻事なり。譬へば酒食は人の好むものなり。故に辭すれども、人必しひて進む。然れば忠言の出でざるは、聽く事を好まざればなり。

管仲曰、明君は我が智を用ひずして、衆人の智に任す。我が力を用ひずして、諸人の力を用ふ。衆人の智を用ひて思慮すれば、明らかにして知らざる所なし。諸人の力を用ふれば、成就せざる事なし。人の目は天際の遠き所を見れども、我が背を見る事能はず。心も亦然り。いかに聰明の人も、我か過失を知る事は明らかならず。故に人の諫と世の

謗を聞きて、我が過を改むべし。昔堯の時、進善の旗あり、善事を君に奏せんと思ふ者は、その下に立つ。又誹謗の木あり、大なる木を削り、都門の外に建て置き、何者にても、政の誤を思ひ寄りたるまゝに書かしめて、善言あれば取りて用ひ給ふ。舜の時、欲諫の鼓あり。君を諫めんと思ふ者、その鼓を打てば、官人出で合ひて、是を聞きて帝に奏聞す。この事、大戴禮に見えたり。殷の湯王は聖人なり。然るにその賢臣仲虺と言ひし人、湯王の徳を譽めて、過を改めて吝ならずといへり。仲虺湯王を戒しめて、自用ふれば、少しきなりといへり。自用ふるとは、我が才を自慢して、人の言を用ひざるをいふ。古の聖王すら、過を改め、人の諫を聞き用ひ給ふ事かくの如し。況や聖人ならざる人、諫を受けて、過を改めずんばあるべからず。諫を聞くに、たとひ人、我が過を告げたるに、その言當らずとも、皆受け入るべし。斯の如くなれば、人諫を言ひ易くして、我が過を聞くこと多し。もし我が過なきを言ひ立て、逆らひ爭へば、重ねて告げ聞かする人なし。

臣下としてその職分に當らば、君の過惡を諫めずんばあるべからず。漢土の忠臣は、身を捨てゝ君を諫め、殺さるゝことを知れども顧みず。凡君の爲に身を捨つること、戰陣に限るべからず。身をかばひ、命を惜みて、君の惡を知れども諫めざるは不忠なり。況や官祿を惜みて默すは、言ふもさらなり。我邦の人は、戰場に出でゝは勇なれども、諫爭の一事は、漢土の人に及ばず。是國の習はしなるか。無學にして諫の術を知らざるか。

諫の術二あり。直諫と諷諫となり。直諫は明君に施す。明君はいかなる強き諫をも用ひて怒らず。諷諫は貞直に嚴しく諫めず、よそへごとにて、氣に障らぬやうに和らかに諫め、自からさとらしむることなり。張良が四皓を呼び出して、太子を易へ

しめず、頴考叔が莊公をさとして、母と和睦せしめ、魏文公の臣、任座が文侯を諫めて、翟璜が直臣なることをさとらしめ、狄仁傑が武后を諫めて、唐を亡ぼさゞるの類なり。只諫を聞く人は、直諫を好むべし。諷諫を好むべからず。孔子の言く、良藥は口に苦けれども病に利あり、忠言耳に逆へども、行に利あり。湯武は諫を用ひて、天下を保ち、桀紂は諫を拒ぎて身を失ふ。凡歷代の君の善惡と、國の治亂興亡は、ひとへに諫を用ふると拒むとの二にあり。

東坡が曰、治亂は、下情の通塞に出づ。凡國家の治亂は、譬へば人身の無病なると、病あるが如し。血氣流通すれば無病の人となり、血氣めぐらざれば病人となる。下の言ふ所上に通じ、下の諫を上に用ふれば治まる。是を言路通ずといふ。言路通ずれば、國家治まること、血氣通りて無病なるが如し。言路塞がれば、國家亂るゝこと、血氣通らずして病起るが如し。古語に、上たる人、下の諫をきき入れざれば、譬へば聾の如し。斯の如くなれば、臣下たる者は、上を恐れて、口を閉づ。譬へば瘖のごとし。君は聾となり、臣は瘖となりては、國家の治まらんことを願ふとも、得べからず。

家を治め民を治むるには、嚴なるを善とす。嚴とは、まづ我が身を正しくし、輕々しからず、法を立つるにゆるがせならず、民の僻事を制して、赦さざるをいふ。嚴なれば、人恐るゝ故に、法立ちて破れず、民惡をなさず、罪に陷るもの稀なり。嚴ならずしてゆるがせなれば、初は民も家人も悅んで與むれども、後には怠りておそれず、法ゆるまりて立たず、罪を犯す者多し。始嚴なれば後に事なし。始緩なれば後に事多くなる。嚴はきびしきなり、不仁なるにあらず。民を惡に入れぬため、きびしくするなり。譬へば水は柔らかなるゆゑ、人侮りて溺死する者多し。火は嚴なるゆゑ、人恐

れて近づかず、焼死する者少し。法も亦如斯。

人君の臣下を治め、萬民を服せしむるは威なり。威とは、怒を起し、氣を烈しくするにはあらず。其の威權を下に假さずして、臣下萬民の奢を抑へ、惡を咎しむるをいふ。もし權臣に威を奪はるれば、上の威輕くなりて、律制立たず、諸臣萬民法を畏れずして、下知行はれず。故に、威は只上にあるべし。下に移すべからず。

文王は臣を視ること傷むが如しとて、臣を治めて既に安けれども、猶も傷み苦しめる事あらんかと憂ひ給ふ。是仁者のこゝろ、國家を治むる第一の用心なり。左傳にも、國の興るは民を視ること傷むが如し、其の亡ぶるは民を見る事、土芥の如しといへり。是國の治亂興亡の分るゝ所なり。

凡民は素直なるものなれども、上より下を欺けば、下も上にならひて詐多くなる。是上より下に僞を敎ふるなり。民の性もと僞多きにあらず。上下の勢異なるゆゑ、上より下を欺きても、民すべきやうなくして、暫しは上に從ふものなれば、上より下を欺くこと多し。

幼くして父なきを孤といひ、老て子なきを獨といひ、老て妻なきを鰥といひ、老て夫なきを寡といふ。是を四窮民といふ。天下の内にて、いと不幸にして、便なき者なり。此の四の者世に多けれども、其の親類の財力ありて養ふ者は飢寒に及ばず。其餘の飢寒に及ぶものは、大村といふとも、二三人に過ぐべからず。是を養ふに其の費多からず。其所の奉行司より、常に扶助をなして、飢寒せしむべからず。是奉行たる人の職分なり。民の飢寒するは、其の所の政苛ければなり。故に乞人の多きは司の恥なり。

我朝にても、上代の帝王の政には、老人を惜み給ひ、年八十以上の民には、位一階を授け、絁綿布粟をたまはり、孝子順孫義夫節婦をば、その門閭に表

して、終身事なからしめ、鰥寡孤獨疾病ありて、自から有難き者をば惠み救ひたまひし事、舊記に多く見えたり。又大風に逢ひて、百姓の廬舍破壞したるは、其の年の田租を免されし事あり。

農は國の本なり。一年の間、隙なく耕作を務め、米穀を作り出して、上に貢し、萬民を養ふものなり。最憐みて、飢寒の憂なからしむべし。農の時を奪はざるは、農の爲のみにあらず、國の爲なり。農民は日夜勤勞すれども、やゝもすれば、水旱風蟲の災ありて、その利少し。歳凶して上貢を納むることを缺けば、妻子をうり、身を賣るに至る。年豐なれば、米穀價やすくして、困究をまぬかれず。利少き故なり。工人はその勤、農に及ばざれども、その利多し。商人の利は工に倍す。故に農人漸々に減じ、工商は年々に增す。田を作る者は少くして。器を造り、貨物を商ふ者多し。布を織るもの少くして、綾錦を製し、繡染を事とする者多きは、世間困究の本なり。是を以て、古の明王は農を重んじて工商を抑へ、五穀を貴んで、金玉を賤しみ給へり。儉約を行ひて華美を禁ずるは、本を重んじ、末を抑ふるの道にして、國を治め、民を安んずるの政なり。

農の田を頼むは、魚の水に住み、木の土に生ずるが如し。魚水なければ死し、木は土なければ枯る。民に田なければ業を失ふ故、農の田をはなるゝは憐むべし。

聖人、民の力は國の基なる事を知り給へり。故に公役をば省き、民の隙を惜み給ふ。周禮には民を使ふこと、豐年には一夫三日、中年には二日、凶年には一日、至りて年惡しく、民痛めば、一日も使はずといへり。

民豐なれば、奢りて法に背くといふ人あり。是政を爲る道を知らざるなり。民貧しければ、盗む心を生ず。民を憐みて衣食乏しからず、困究せしめざるは、盗を止むる基なり。法度を明らかにして、民

に分限を守らしむれば、貧なれども奪る事なし。斯の如くにして、民その分を踰えて奪り窃り、或は盗する者あらば、罪に行ひて免すべからず。民は愚なる者なれば、まかせ置きては治まるべきやうなし。衣食不足なきやうにして、奢怠を戒しめ、罪に陥らしめぬは政をするの道なり。

君子訓中終

君子訓下

貝原篤信著

君子は、國土の利を取り盡さずして民に與へ、運上課役をかけて民を苦しめず。然れども、民の利を恣にする事を禁ず。且仕へて君の祿を得る者は、商をなし、利を求むべからず。故に、古語にも大を受くる者は小を取らずといへり。天道の物を生ずる、二ながら全き事なし。牙ある獸には角なし。角ある獸には上歯なし。翼あるものには手なし。花よきものは實あしく、實よきものは花あしく。士として君の祿を得る者、民と利を爭ひ、民の財を奪ふは、天道に背けり。

世間に多く人を殺すこと四あり。刑兵饑病なり。一には刑を誤まりて、科なき者と、科輕き者とを殺す。二にはわが身、亂をおこして、科なき敵味方を多く殺し、又我が不仁無禮なるによりて、人に兵亂を

起さしむるなり。三には水旱風蟲の災にあひ、民多く饑死す。四には、民諸の病にかゝり、殊に疫病はやりて、人多く死するなり。この四の物は、皆よく人を殺す。この內刑と兵とは人に係り、歲と病とは天にかゝる。されど四のもの倶に人民を殺すに至らずして、活す道あり。まづ刑を以て云はゞ、民を惠んで衣食を足らしむれば、民盜をせず。科人少し。その上に訴を能く聞分け、理非直曲を明らかにすれば、罪なき人を殺さず。兵を以て云はゞ、仁義を行へば人怨み背く者なくして、兵亂起らず。我が身兵亂を起さゞるは言ふに及ばず。歲を以ていはゞ、民の土貢を輕く取り、民を多く使はず、三年耕して一年の食あらしめ、飢へる者を助け救へば、凶年に逢ひても、餓死の愁なし。病を以ていはゞ、民に情ありて、死寒の愁なからしめ、病の本を防ぎ醫藥を施して、病ある者を救へば、病死の災少し。是人に優るものゝ憂を去るのみならず、天に係るものといへども、人力を以てうれへを防ぐなり。

民の飢を救ふに、早く救へば費少くして施廣し。遲ければ費多くして施狹し。又飢人を救ふに、朝夕兩食の內、一食を與ふれば死なず。その飢の甚しきと、甚しからざるを撰びなくして、妄に多く與ふべからず。一日に一食を與ふれば、米多からずして人を救ふ事多し。一處には飢ゑ疲れて弱き者には、わきて朝夕薄き粥を與ふべし。食に飽かしむれば死す。氣力出來て後は食を與ふべし。一所には未だ疲れざる者を集めて、一日に一度食をあたふべし。

貧賤なる者、或は獨身なる者、老人小兒など、人にいひかすめられ、或は飢ゑ凍えて苦しむを、上に訟ふれども、奉行人取擧げざれば、その奉行人を罪に行ふ。是周禮の法なり。

五穀と木の實と、未だ實のらざるを取らず。又市に

賣らず。小なる木を伐らず。小さき魚を取らず。萬物の成就せざるをそこなはざるは仁愛の一なり。其の上、物の長大になりて取用ふれば、民用國用のためになるなり。

漢の宣帝、諸國に倉を建て、米やすき時は、價を増して高く買ひて入れ置き、米貴き時には、價を減じて賤く賣る。名づけて常平倉といふ。夫米甚やすければ士農の窮わしく、甚貴ければ工商くるしむ。常平倉貴きも賤きも其の價同じ。このゆゑに、常平倉の法を行へば、この害なくして、四民とも困窮に至らず。我が邦にも、古へは是に効ひて常平倉あり、義倉あり。義倉は、水旱等の災ある時、飢民を救はんために設く。これ良法なり。但しこの法、上に財乏しくては行はれず。

和漢世末になりては、虚文多くして忠實少し。誠は日々に衰へ、僞は月々に盛なり。道を行はんとならば、當世の飾りて、奢りたる風俗を改め、古人の質素淳朴の風俗に立歸るべし。唐の太宗、天下を治むるに、奢を去り、費を省き、公役を輕くし、年貢を少くし、正直にして無欲なる者を民のつかさとす。數年の後、民衣食餘ありて、路に落ちたるを拾はず。商人野に宿しても、盜の患なし。奢靡の俗をひるがへして、淳朴の風に歸せしは、只上の政、其の道を得たればなり。

君子たる人、領内にある大社名山大川などは祭るべし。名分正しき神にても、祭るまじきを祭るを淫祀といふ。淫祀は福なし。是を祭るは諂へるなり。惑といふべし。富貴の人、我が身の榮華を祈らんとて、神社佛堂を建て、萬僧を供養し、常灯をともす事あり。その費は多けれども、民のためには露程も補なし。その財の費を以て、貧苦なるものを救ひ助けなば、いかばかりか功德となりて、天の惠もふかゝるべきに、我一人の心を慰めんとて、多くの人をなやまし、かゝるはかなきことをする

は愚なりといふべし。昔梁の武帝、堂塔伽藍を多く立て、大功德なるべしとおもひ、達摩に問ひしに。達摩無功德といへり。武帝仁政を行はずして下を苦しめ、民の貨をしへたげ取りて、無用の營作をなし、終には人怨み、天怒りて、身も國も亡びたり。達摩無功德と答へたること宜なるかな。達摩は佛法中の人なれども、其の言斯のごとし。後世の多欲なる僧と、天地懸隔といふべし。

風俗の惡しきわざを世の成行にまかせぬれば、諸人のわざはひとなる。其の所を司る人、是を戒しめて行はしむべからず。女子を嫁せしむるに、衣服器物など分限にすぎ、甚奢りて費多し。是世のならはしとなれり。斯の如くなれば、其の産をうしなひ、人のたからを借りてつくのはず。是只人の目を輝かしたるのみにて、益なくして害多し。男子は又學問すれば、氣へり、病氣となるなどいひて、人の親をおどしいましめ、我が子にもいましめ防ぎて、學問せしめず、一生其の子を愚にす。是皆愚俗の惡しく心得たるが、風俗となれるなり。又前の年、妻を娶りし者あれば、睦月の始に其の友となる者つどひて、其の人をとらへ水をかけて、くみあひ戲れ、酒を飲み肴を喰ひ、醉ひくるひて後は、いさかひ罵り、禍を生ずること多し。又正月十日など、女子の道を行くを、童ども松の枝にて打ち、衣に墨などをぬりつくることあり。凡かやうのいやしくて、人を害する戯の習はしは、其所の長となるもの、堅くいましめて、その風俗を改むべし。その風俗に任せて禁ぜざれば、長となる職を虛しくして、智なく力なしといふべし。

凡たはれたる音樂を作り出して、人心を蕩かし、怪しく珍らしき衣服器玩、又はからくりなどにて、人を惑はし、鬼神左道を以て人を誑かし、錢財を貪り取るは皆姦民の所爲なり。右の明君、政をするに、此等の事を堅く禁じて、背く者あれば重刑に

行ひ給へり。

公事訴訟を聞くに、まづ我が心を平らかにし氣を和らげ、各その心底を思やうに言に盡させ、口安などをも思ふやうに書かせて、その心を察し、證人を立てさせ、證文を出させ、我が私の贔負の偏頗なく、親戚朋友の贊譽頼み助けを聞入れず、扨兩方いふ所の理のつゞまりたる所をくらべて、其の曲直是非を決すべし。もし片口を聞き、或は傍より助け譽むる者の言を信じ、夫に惑ひ移りなば聞き誤まる事多かるべし。凡訴を聽くに、先入の言を主とすべからず。先入の言とは、先早く云ひ入れたる方の詞なり。夫を信とし善と思へば、後に聞く方の言理あれども、皆僻事に聞きなすものなり。訴訟する者、正直なるは我に理あるを頼み、奉行に賂を送らず。故に奉行の助なし。不直なる者は、我が非を掩はんとて奉行に賂ひ、手立を廻らすにより、是を助くる者多し。斯の如くなれば理は僻事になり、僻事は理となりて刑罰あたらず。訟を聞くに、その言の無禮なるを怒り惡むべからず。その言のうやまへるに悦ぶべからず。訟を聞くに、喜怒起れば、それにより私出來るものなり。又人の頼むによりて、その方に喜を移すべからず。我が事しげく鬧はしとて、夫によりて訟の事をあらく決斷して、過ぐべからず。

賞罰は、君子その臣民を御する大權なり。賞罰妄なれば、臣下の心服せずして、上の威輕くなる。功ある者を賞し、罪ある者を罰せんと、下知を立つるは法令なり。もし功あれども賞せず、罪あれども罰せざる時は、是賞罰信なきなり。斯の如くなれば、法立たずして民信せず。善をするに惰りてつとめず、惡をする事を恐れずして、輕く犯す者多し。尙書に、令出づれば惟行はしめ、反かざれといへり。この意は、法令を出さば初よく思案し僉議して、後まで破れざるやうに法を立つべし。一度下

知を出しては、後まで其の法を用ひ、背くものあらば罪に行ふべし。斯の如くなれば、法立ちて破れず。民信じて能く守る。後まで立ちがたき法ならば、始に能く評議して、是を止むべし。是始を愼しむなり。もし朝に令して、夕に改むる時は、民惑ひて上を輕んず。

人を殺し、家に火をつけ、公の財を盜む大罪なれば、かならず刑に行はるゝこと、いかなる愚民もしれり。父母尊長をないがしろにし、人を打擲し、いつはりを行ひ、人の財を盜み、人の妻を犯すたぐひも、亦國の大禁なり。されど、右の三ヶ條の如くには民恐れず。國郡を治むる人は、兼ねてかやうの禁制を嚴しく立て、月々に讀みきかせ、民をして深く法令を恐れしむべし。法令ゆるかせなれば、惰りて罪を犯す者多し。民の父母として、我が國郡に死罪多きは、豈心に快からんや。是不仁にして、民を愛するに心を用ひざればなり。

年八十以上七歳以下、死罪あれども刑せず。是古法なり。八十に至れば、老いて智昏くなる。七歳以下は、智未だ開けず。故に是を刑せず。

一人禁獄せられては、其の家の父母兄弟妻子一族憂ひ苦しみ、家業を止めて勤めず。且獄中一日の苦いはんやうなし。政をする人は、其の人の苦、其の家の患をも思ふべし。

凡罪を犯して、未だ顯はれざる內に白狀する者は赦す。これ古法なり。又知らずして科を犯す者は赦すべし。再びに至るとも、大惡にあらずば懲さしめて赦すべし。三度に至らば赦すべからず。是齊の桓公の言なり。

官ある人、公の法度を假りて私の恩に報ゆべからず。

漢土唐の世に、律令格式の四法を立てたり。我國にも、古朝廷に律令格式の書を作りて、その法備はれり。是を官人に敎へ學ばしむるを、明法の學といふ。その師を、明法博士といふ。亂世に及んで

兵火にかゝり、律と格とは亡び失せて、今少し殘れり。令と式とは今も全本あり。律とは罪を正す定法なり。いかやうの科は、いかやうに行ふといふ定法を記せり。この定に從ひて行へは刑罰に誤なし。後代はこの定法なくして、其所々の奉行職の人、我が心にまかせて行ふことになり候。もろこしには、唐の代に限らず、昔より律の書あり。近代も、明律あり、清律あり。本朝にも、古律亡びて後、法曹至要抄と云ふ書あり。貞永の式目も律の類なり。令は下知をなす法なり。本朝に淡海公の作り給へる令あり。清原夏野是を注せり。義解といふ。又令の集解といふ書あり。格は古來行はれし政を書きつけたり。今の留書となふものなり。某の年いかなる事ありしを、いかやうに行ひしといふ記錄なり。式は式法なり。延喜式今もあり。この律令格式の四書は、古朝廷政務の軌範なり。昔の明法の學者は、この四書を習ひしとかや。今も古の道に本づきて、時宜に從ひ、律令の書を作りて、明法の學を講ずべきことなり。

後漢の崔寔が言に、刑罰者治亂之藥石也。德教者興平之粱肉也。といへり。言ふこゝろは、政をするに刑罰を用ゆるは、病おこりて後、藥を用ふるが如し。五常五倫の教は、平生無病の時、米肉を食して身を養ふが如し。故に上たる人、德を修め教を立て、民を導くべし。その上に罰を犯す者は、已むことを得ずして、刑を用ゆ。教へずして人を罪にいるゝは、仁にあらず。古の聖王は、一人を刑して、千萬人恐れ愼しむ。故に、刑は刑なきを期すといへり。

儀禮曰、父者子之天也。夫者妻之天也。是を以て推すに、君は臣の天なり。凡君父と共に背くは、則天に背くなり。其咎大なり。この三は、天下の大倫にて、五倫の内にて尤重し。故に君と夫父とは、我に對して無道なる事ありとも、恐れて背くべか

らず。もし背く者あらば罪に行ひて赦すべからず。然らざれば、天地の間人倫の道立たず、法度紀綱敗る。

或處に頑民あり、しばしば其の父を打つ。奉行聞きて、その罪を糺し、君に告げて是を刑戮す。頑民殺さるゝ時まで、尚その罪に服せずしていふ、我もし他人の父を打ち候はゞこそ罪せらるべけれ。我が父をこそ打ち候へ、左程罪とは覺え候はず。かゝる無理なる刑にあふ事、不幸の至りなりとて、上を怨みけるとなん。或士、是を聞きて、彼の民のいひしも一理ありといへり。この士不學にして、孝の道の重きを知らず、五刑の屬三千にして、罪不孝より大なるはなしといふことを聞かずして、かくはいひけるならし。然れば、四民ともに人倫の敎へなくんばあるべからず。村里に佛堂を建て、僧法師の輩、朝暮佛法を勸むる程にこそなるまじけれ、せめて、其所の司、時々來りて耕作を勸め、父母を養ひ、君長をうやまひ、法令を守り廉潔をはげまし、正直にして僞なく、人と爭ふことなきやうに敎へ戒しめば、風俗正しく、萬民和順にして使ひ易かるべし。殊に農人は世事になれず、惡習に染まず、その心朴なり。道理を以て敎へ導かば、善に遷り易くして、古の淳朴なる風にも立ち歸るべし。士の節義あるを上より賞美すれば、士の風俗強くして忠臣勇士多く出づ。もし柔惰にして從ひやすき者を悦び、剛直なる士をきらへば、士の風俗弱くなりて耻を知らず、佞諛の人多く出づ。故に忠信を重んじ、節義を貴ぶは、士の敎ふるの道なり。

天に怪異あらはれ、地に妖祥起るは、皆天の人に變を示し告げ戒しめ給ふなり。譬へば親の子を憐みて、その惡を止め善をなさしめんとて、せつかんするが如し。國家の主は、天の警を恐れ愼しんで我が身を顧み、その政を正しくして國家を保つべし。

若是自然に出來たることゝ思へるは、大なる不敬なり。天變恐るゝに足らずといへる事は、國家を亡ぼす基なり。人の君となり奉行職となる人は、いやしき人恐れて、上下の間遠く隔りて、下の心上に通ぜずして、下の憂ひ苦しみを知らず。故に顔色を和らげて、下の情を盡さしめ、物の言ひよきやうにすべし。唐の太宗と延喜の帝の、我が威の強くして、下の物言ひ難きを恐れて、顔色を和らげて、その臣下に對し給ふはこの故なり。凡政をするには、下情に通ずるをよしとす。王公大人といへども、自聞かず自見ざれば、萬事昧くして明かならず。人民の愁ひ悦び、苦しみ樂しみ、姦惡私曲をしる事なり難し。善惡利害をしらず、國の豐饒凶荒、家の費侈りを知らず、祿位の高く多きにほこりて、下情に通ぜず。如斯にしては、臣民いかやうの惡を行ひても知らず。自聞かず見ざれば、下情に通じ知るべきやうなし。味しといふべし。

人を讒言する人は、人の小さき過をかざりて、大に言ひなすものなり。或は過なき人をもあやまりありと云ひ、君たる人能く察せずして、その言を信ずるは迷ひの甚しきなり。讒を聞きて善人を退くるは、その善人の災のみにあらず、萬民の災なり。鄒の穆公といふ君、下に命じて鳧と雁を飼ふに、米を飼はず、只粃を以て餌とす。或時倉に粃なし。民に買へば、折節粃少くして米の直より高し。依てその司米をはましめんといふ。君用ひずして曰、汝小利を知りて大損をしらず。百姓朝夕寒暑を厭はずして、稻を作り出すは鳥獸の爲に非ず。且米は人の上食なり。何ぞ是を以て鳥を養はんや。藏の米を出して、價高くとも、臣の粃を買ひて鳥に飼ふべし。藏の米を臣に與ふるは、則我か倉に在ると同じと言へり。

大公望曰、以二不仁一得レ之。以二不仁一守レ之。必及二其亡一也。言ふこゝろは、不仁にして國を得たる人、

不仁を以てその國を守れば、かならずその一代にて亡ぶ。大和唐土そのためし多し。國の長久するは、その君仁なればなり。亡ぶるは、不仁なればなり。桀紂以下歴代不仁の君、亡びざるはなし。堯舜湯武はいふも更なり、漢の高祖文帝、後漢の光武、唐太宗、その餘歴代の賢君は、皆仁心ありし故、國長久せり。凡國家の興亡、身の安危、皆仁と不仁とによれり。禹湯は己が身をせむ、故に榮え給ふ。桀紂は人をせむ、故に亡びたり。己を責むるは仁なり。人を責むるは不仁なり。仁の道豈勤めざるべけんや。

唐の李昉といひし人、宰相となれり。客來れば、必三事を問ふ。一には、民間に何の憂苦かある。二には、今の世、政を行はんに、いかなる善道かあるべき。三には、今の政にいかなる惡しき過やある。この三の事聞きたしと言はれしなり。是世間諸人の公論を聞きたく思ひ、又下情の上に達せざらんことを歎きてなり。宰臣の法とすべし。

秦始皇の子二世皇帝の曰、凡天下を有つを貴しとするは、只意を恣にし、慾を極めて樂しむ故なり。下を治むるには、只法度を嚴しくして、下を制すれば、民上を犯さずして、亂起らずと言へり。是秦の天下を失へるゆゑんなり。秦より以下、天下を治むること能はずして、天下を失ひ、身を亡ぼせる人多きは、皆このゆゑなり。天下を有ちては只善を行ひて、廣く民を憐み惠みて、萬民各その所を得るを以て樂とすべし。

臣下に祿を與へ過して、富貴になるれば、奢りて使ひ難く、用に立たず。臣下貧窮に迫れば、必恥を知らず、僞り邪になりて忠なし。

凡高官の前にありては、いかなる小人も愼しみ隱す。故に、姦惡ありといへどもしれず。民に臨みて愼しまざる故に、その行ふ所善惡まぎれなし。故に吏の善惡は、下より告ぐる所を聞きて、その上にて

その善惡を糺すべし。訟ふる者を咎めず、民の口を塞ぐべからず。

或明君の言にいふ、神の罰君の罰誠に恐るべし。然れども、我が臣下の罰百姓の罰尤恐るべし。如何となれば、神の罰はいのりて免るべし。君の罰はわびごとを以て遁るべし。只民と臣との心を失ひて背かれぬれば、その禍遁るべきやうなし。

漢土も大和も、王公の國土を得給ふことは、その始は極めて難き事なり。中にも、戰國の時に生れて、家を興し國を得たまふ人は、安樂なる暇なし。風に櫛り雨に沐ひ、朝夕戰鬪を事とし、自から敵に臨みて鋒鏑を冒し、萬死を出でゝ一生を得、常に心を勞し身を苦しめ、大艱難大辛勞を經て、終に大國を得大祿を受け給へり。只時の幸にて、故もなくたやすく國を得給ふにはあらず。又既に國を得ては、城郭を築き、法制を定め給ふ辛勞も亦はかりなし。その勤勞をなし給ふことは、固より忠義の心に出で、只我が一代の榮華を受けん爲にはあらず。代々賢子孫おはしまして、能くその志を繼ぎ、その法を守りて、人民を保ち國土を失はず、長久にして榮え樂しまんことを願ひたまふ。是始めて國を得給ふ先公の心にて、君子創業垂統爲レ可レ繼の意なり。その子孫たる人は、その先祖の大なる勤勞を以て、國を得給ふことの難きをおもひ、その先祖を尊び、その志を繼ぎ、その法を守りて、永く國土を保ち、人民を治め給はゞ、是その先祖の志にかなひて、諸侯の孝行是より大なるはなし。もし先祖の國を得給ふことの難きことを思はず、我が身何の辛勞もなく、居ながら國を領して、その富貴安樂を受け、恣に驕り、酒色遊興を事とし、剰へ我が才智に誇り、先祖を侮り、その定め置き給ひし家法を破り、又國民を苦しめ、政法を猥にして、終に其臣民に背かれ、國土を失ふに至るは、諸侯の不孝是より大なるはなし。この

思ふと思はざるとの二は、國家の治亂存亡の機なり。諸侯の子孫たる人、この二の機を察して、常に愼しみて、德を修め孝を行ひ給はゞ、其後榮永く傳はりて、令名限りなかるべし。

君子訓下大尾

家道訓巻之一

貝原篤信編

人の世にある。たかきいやしき、皆身ををさめて、家をとゝのふるを以つとめとす。家の本は身にあり。故に家ををさむる主人は、先わが身を正しくして、家をとゝのふべし。身をさまらざれば、家とゝのひがたし。家とゝのはざれば、身を安くしがたし。君子はつねに身をつゝしみて、後の患をおもんぱかる。こゝを以、身やすくして、家たもつべし。家の主人正しければ、家人を教へみちびくべし。主人正しからざれば、家人の則なく、善をすゝめ悪をいましめがたくして、家法行はれず。故に主人の身の行は、家人の見ならへる手本となれり。慎むべし。凡身ををさめ、家をとゝのふに禮を以すべし。禮とは人倫の作法也。心につゝしみあり、身に則行を禮と云。つゝしみなく、則なければ、人の心を失ひ、身のわざあしく、人にまじはれば人倫の道たゝず。それ人の禽獣にかはれるは、禮あればなり。禮なければ、とりけだものに同じ。禮を行なふはむつかしく、くるしき事にあらず。事ごとに行なふべきさだめにしたがひて行ふ故に、心安くして身の行おだやかなり、正路なる平地をゆくがごとし。故に人禮あればやすし。禮なければあやうし。こゝを以、人たる者は、禮を行はずすんばあるべからず。常に禮を守りて内行を正しくすべし。内行正しからざれば、外に善を行ふも、皆いつはりとなる。是禮を行なふ初也。内行を正しくするとは、父子兄弟夫婦の間むつまじくうやまひあり、家人をあはれみて恩あり、人をつかふにせはしからず、いるかせならず、財を用るによきほどにして、おごらずやぶさかならず、色慾をつゝしみ、恥を知て淫行なかるべし。是内行の正きなり。

父母につかへて常に力を盡し、時々の見まひ、膝下

のつかへおこたらず。古語に、夕にさだめて朝にかへりみるといへるがごとくすべし。ひまなき人も、朝夕の間、時々つとめて父母の前に侍べりつかふべし。つねに養をかへりみ、飲食の味よくして、みづから寒温の節をこゝろみてすゝめ、冬は父母をあたゝかにし、夏は涼しくすべし。外に出れば必父母に對面し、內にかへれば必父母をかへり見る。父母に對しては顏色を溫和にして、言をあらくすべからず、父母の心をよろこばしめ、父母の身を養なふ、二のつとめ闕べからず。是皆人の子たる者の定りたる法也。此法にそむくべからず。父母の事をつねに思ひ慕ひて、心にかけてわすれざるを孝とす。

兄弟にむつまじく、夫婦和して別あり。妻をみちびくに禮を以てし、子弟ををしへいましめて、愛を過さず。彼是につきて愛憎の私なく、子弟をみちびき、禮をつとめ書をよみ、藝をならふにおこたりなからしむべし。凡子弟の教は必嚴正なるべし。

凡家の主として家ををさむる人は、まづ父母によくつかふるを第一のつとめとし、次に妻をみちびき、子弟ををしふるを以要とし、其次に下部をつかふに心を用ひて、禮法を正しくすべし。くるしめあなどりてしへたぐべからず。

子をそだつるには、おごりとほしいまゝなるをはやくいましむべし。衣服器用以下萬の供養、わが身の財祿より、かろくうすくばうそくなるべし。愛を過して、ものごとにゆたかに華美なるは、是子におごりを教ゆるなり。いとけなき時よりおごれば、年長じてます〱甚し。はじめゆたかにして、後におさゆる法あしゝ。はじめかゞみて、後にやうやくゆぶるはよし。いとけなきよりいましめて、僞なくして誠を本とす。よろづの事質朴にすべし。又おこたりわがまゝなるをはやくいましめて、へりくだりゆづる事ををしふべし。子をそだつるには、や

くをしふると、左右の人をえらぶとにありといへるは、賈誼が名言なり。此二に心を用ふべし。はやくをしえざれば悪にうつりやすし。付したがふ人あしければ、あしき事を見聞て、一生のわざはひとなる。幼よりあしき事を見聞しては、先入の言主となり、後に善事を見きゝてもうつらず。あしきくせつきては、後にならひとなりて改りがたし。

先祖をたふとび、時節の祭禮おこたるべからず。親戚をあつくしたしむべし。親戚にうとくして、外人にしたしきは逆なり。國法をおそれ守り、上たる人の行ひ、國家の政をそしるべからず。上をそしり、國政をそしるは、是大なる不忠、不敬のいたりなり。つゝしむべし。そしる人ありとも雷同せず、口をつぐんで云べからず。およそわが身をかへりみをさめて、つねにわが過をせむべし。人をせめ人の不善をいふをいましめとすべし。

凡家ををさむるに、先父子兄弟夫婦の三親をあつくすべし。古語に、父子したしみ、兄弟和し、夫婦正しきは、家の肥たる也といへり。若三親和せずんば、富といへども家のやせたるなり。

凡家にありて家人にまじはるには、善を行なひて悪をいましむる、是を要とす。善を行はざれば人の道たゝず。善を行ふには愛敬を本とすべし。愛とは、人をあはれみて、おろそかにせざる也。敬とは、人をうやまひてあなどらざるなり。此二はすべて人倫にまじはりて、善を行なふ心法也。善をするは、愛敬の外になし。父母を愛敬するを本として、兄弟夫婦親戚下人に對するも皆しかるべし。各其人の品によりて愛敬すべし。うとけれどもおろそかにすべからず、是愛なり。いやしけれどもあなどるべからず、是敬なり。

毎日つとにおきて、手と面をあらひ、先父母の氣色をうかゞひ、飲食のこのみをとひて、とゝのへすゝめ、其もとめあるを聞て、つとめ行なひて、父母

の心にかなふべし。子弟に其日のつとむべき課程をさづけをしえ、奴婢に其日の所作を云つけ、おこたりなからしめ、外事あらば使を命じ、人の附託あらば滞なくとゝのふべし。朝は早くおき、門戸を早く開かせ、家内の塵をはらひ、門の内外庭中を掃除して、皆いさぎよくすべし。朝おそくおくるは、家のおとろへとなる。いましむべし。古人家の盛衰は、朝おくる事の遲速を以試むべしといひし。むべなるかな。

凡家内の平日の用心は、かねてより早くすべし。第一に來年の秋までの糧米をそなへ、次に醯醬をたくはへ、脯臘をつくり、薪炭油をかねてよりあつむべし。右の貯なければ家の計たらず。奴婢をあはれみ、其衣食居處を察して飢寒せしめず、其所を得せしむべし。男女内外の別を正しくし、武士は鎗長刀弓矢鐵炮杖棒等を、常に便よき所にかくべし。常に用る器をとゝのへそなへ、器のそこなへるをば修補し、屋宅倉庫牆壁の破損せるをはやく修理し、材木竹茅土石を求め貯へ、馬をよく飼ひ、其外家にかふべき畜類をやしなひ、菜蔬草木、時に順ってうゑやしなふべし。藏のあけたて出し入れを察し、盜賊と火災との用心、つねにきびしくして、おこたるべからず。火をふせぐ器なども、平日備ふべし。凡家内の事、つねに心を用ておこたるべからず。

四民ともに、常に家業をつとめておこたらず、其上儉約にして、諸事つゞまやかにし、家事におろそかなるべからず。勤ると儉なるとの二は、是家ををさむる要法なり。勤儉の二をつねに行なふべし。

家に居ては陰徳を行ふべし。心に仁をたもち、身に善を行ひて、其善を人のしらん事をもとめざるを陰徳といふ。まどしき人も、其力に應じて善を行ふべし。うゑたる者に食をあたへ、こゞえたる者をあたゝかにし、かわける者に湯水をあたへ、老た

る者をたすけ、幼をいつくしみ、病人をいたはり、人の子弟に孝弟をすゝめて行はしめ、人の善と才能をほめすゝめ、人のあやまりをそしらず、人の惡をかくしてあらはさず、人の過惡をいさめ、道にあるいばら、からたち、くひなど、人を害する者をさり、道におちたる物をひろひて、其ぬしをたづねてかへし、いける物を少なりとも、故なくしてみだりに殺さず。つねにかくの如くにして、陰德を行なふべし。年をへて久しく行なへば、其善つもりて大なり、樂しむべし。貧しき人すらかくの如くなるべし。況富める人をや。富て財あまりある人は、天道みてるをかく理なれば、人にほどこさずして、財を多くあつめおけるは、後に必わざはひ出來て、財をうしなひ、子孫に其財をのこしがたし。財多き人は先父母にあつくし、親戚朋友の乏しきをにぎはし、貧しき人をたすけ、飢寒をすくひて、廣く人を愛し、善を行なふべし。夫人をすくひたすくるは、天の好み及ぶ處、天道は善にさいはひし玉ふ理なれば、かくの如くひろく人を愛する事久しくば、天のよろこび玉ふ事ふかくして、福をうくる事うたがひなかるべし。天道は還す事をこのむといへり。善を行なへば、天よりさいはひを下し、惡を行なへば、天よりわざはひを下し玉ふ。善惡につきて、むくひあるをかへす事をこのむといへり。此理かならずたがはず。是天道のまことなり。こゝを以善を行ひて久しければ、彼道なくして神佛にへつらひいのり、其さいはひをうけ、わざはひをのがれんとするよりも、百ばいのしるしあるべし。愚なる人は天道の善にさいはひし、惡にわざはひし玉ふ理をしらざる故、天道をおそれずして、天道をうたがふ。天道の善にさいはひし、惡にわざはひし玉ふ理、古今からやまと其ためし多し。其理あきらけし。即時に其しるしなけれど、後必むくいあり。うたがふべからず。

惡を行ふと、財多くして人にほどこし、すくはざるとは、天のにくみ玉ふことはりのがれがたし。天道おそるべし。

武士たらん人は武備に心を用ひて、兵具をとゝのへそなへ、そんじたるをば修補し、常に帯佩せる大小刀、其外の刀弓矢鎗長刀など、時々ぬぐひ、みがき、ちりをはらひ、きよらかにすべし。又金銀米錢なども、武備のため別にたくはへ置べし。若常の時財用不足して、急用ありとも、武備のためにたくはへ置しを取て用ゆべからず。凡武具は他の器よりきよらかにし、にはかに事有時、事かけ、つまづかざるやうに、無事の時かねて調置べし、おこたるべからず。にはかの時に陣用意に及ばずして、事にのぞんでいそがはしからず。心しづかなるべし。武具も無用の華美なる飾をなすべからず。

家の主はつねに仁愛にして、善を行ふを以樂しみとし、つとむべし。餘財あらば兄弟親戚の貧窮をにぎはし、朋友の乏きを助け、わが采地の農人の貧窶をすくひ、わが家に久しく來れる貧困なる者にはほどこし、窮民のより所なき者あらば、わがちからに隨ひてすくふべし。乞人の内にて老人病者跛人、殊に盲躄、瘖、老て子なく、幼して父なき者、養なはるべき親族なくて、みづから食を求めかねせんかたなくて乞人となる者あり。是皆窮民のより所なき人也。あはれむべし。かゝる急難なる者あらば、ちからの及ぶほどはすくひめぐむべし。うゑたる者はやしなひやすし。かくのごとく人をすくひ善をする事は、人間世の最樂しむべき事也。心を用ふべし。漢の明帝の弟東平王の都に來朝せられしに、明帝の、汝國にありて何事か樂しきと問給へば、東平王、國にありて善をする事尤樂しと答へられし事、むべなるかな。凡富貴なるも貧賤なるも、其位に應じて善をなすべし。志だにあれば、貧賤にしても日々善行はる。善をする程樂しき事

なし。つとめて善を行ひて、此樂をしるべし。財をしみては善を行ひがたしと、古人いへるもむべなり。又無益の事に財をついやすは愚なり。是善を行なひ人を救ふに志なければなり。

家ををさむるにも忍の字を用ゆべし。忍とはこらゆる也。堪忍するを云。おごりをおさへて慾をほしいまゝにせざるも、こらゆる也。又わが家の貧なるをこらへて、人をむさぼらざるべし。凡の人君子にあらざれば、わが心にかなはざる事多し。堪忍せざれば人の交は和がず。然るに父兄は子弟のわれにつかへやう不足して、心にかなはざれば子弟をせむ。子弟は父兄のめぐみうすくして、あきたらざれば、父兄をうらむ。其餘夫婦親戚も亦しかり。たがひに堪忍せざればいかりうらみ出來て、父子兄弟夫婦親戚の間むつましからず。此ゆゑに人の行ひのわが心にかなはざる事を、たがひに堪忍してうらみいからざれば、一家の内やはらぎしたしむ。是家をとゝのふる道なり。又人のあしきをばゆるして堪忍し、わが身には道をつくして、人に堪忍せらるゝ行をなすべからず。

凡家人をつかふには、人の心をおしはかり、うれひくるしみをしりて、人のくるしみなきやうにほどこすべし。奴婢は主人をたのんで、身をやしなふ者也。心を用ひて情あるべし。刻薄にして情なく、かれをくるしむべからず。およそ人をつかふ者は、下人のうれひくるしみをよくおもひはかりて、かんがへしるべし。

家ををさむるに四の教あり。一には家業を勤めて生業ををさむ。二には儉約にして財用を足す。三にはつゝしみてわが身をたもつ。四には恕にして人を愛す。是王凝が語也。恕は、わが心にて人の心をおしはかりて、人のこのむ事はほどこし、きらふ事はほどこさず。およそ家ををさむる人は、皆此四を守るべし。

子弟のいとけなき年より、よき師をえらび求めて、はやく聖賢の書をよませ、善をおしへ、惡をいましめ、孝弟忠信禮義廉恥の道をしらしめ行はしむべし。かりそめにも惡しき友に交はらしむべからず。是第一にいましむべし。あしき事見きかしむべからず。いとけなき時は、ことに惡き事に早くうつりやすし。よき事もあしき事も、先入の言、はやく主となる。よき友を求めてまじはらしめ、よき事を見きかしむべし。善惡皆習馴るよりうつりやすし。習馴る事つゝしむべし。

身をおさめ家をたもつに、約の字を守るべし。約にすとはつゝまやかなる也。ほしいまゝならず、取ひろげざるを云。是を以情慾をふせぎ、財用を節にするは、身をおさめ家をたもつ道なり。論語に、約を以失なふものすくなしとのたまへり。約なればあやまりすくなしとなり。

家の主となりては、三族をしたしむべし。三族は、第一に父族。第二に母族。第三に妻族なり。父方の一族は本族と云、先祖より傳はれる血脈同じ。親疎のかはりあれど、われと同氣なるゆゑあつくしたしむべし。父族をあつくしたしむは、是又先祖へつかふる道なり。次には母方の一族は是父族につぎてしたしむべし。次に妻の一族は母の族につげり。三族をしたしむ。其次第輕重かくの如し。是古の法也。今の人は妻族をもはらしたしみて、父族母族にうとし。輕重ある事をしらず。父母への不孝なり。おろかなりと云べし。妻族をしたしむべからずと云にはあらず。輕重の次第あるべし。

わが身朝夕飲食の俸養はかろくして、身をば勞動すべし。おごりて酒食の美をこのみ、おこたりて身を安逸にすべからず。おごらずおこたらず。かくの如くすれば、第一德を養ひ、次に身をやしなひ、次に財をやしなふ、三の益あり。飮食淡薄にして身を勞動すれば、食氣滯らず氣血めぐり、脾胃や

ぶれずして、生を養ふによろし。又身を勞すれば、艱難勞苦にたへて、忠孝の行、學問藝術を習ふにつとめよし。もし身體を勞動せずして安逸にならへば、艱難に不ㇾ堪して、忠孝のつとめをくるしみ、學問技藝におこたり、ことに士は武勇のたしなみなく、軍陣にて艱苦にたへず、病おこり身よはりて用にたゝず、武勇をはげみがたし。およそ心は安靜にし、身は勞動せしむべし。

家道訓卷之一終

家道訓卷之二

貝原篤信編

家のわざをよくつとむれば、利養は求めずして其内にあり。士は奉公をよくつとめてへつらはず。農は田畠をよく作りて、公をおそれて公役をよくつとめ、工は器物に心を用てよく作り出し、そさうなる物をつくりて人を欺かず。商は交易をつとめて僞らず。高利をとらず。四民共にかくのごとくなれば、あながちに利をむさぼらざれども、福祿はおのづから來たる。つとむべきわざを正路につとめずして、ひが事をして利をむさぼる者は、一旦は人により幸ありといへども、天道のにくみ給ふ理なれば、後は必禍あり。愚人は常時早く利を得んとして、後の禍をしらず。四民共に只正直にわが家のわざをよくつとめ、天道をおそれて僞なかるべし。是わざはひをのがれ、福を得る道なり。

人の家の禍は、多くは利を求るよりおこる。利をむさぼればかへつて財を失なひ、わざはひ來る事多し。利を求めんよりは只家業をおこたりなくつとめ、家財を妄に費やさずして、分外の利をむさぼらざれば、禍なく、財を失なはず。凡利をむさぼるは禍の本也。いましむべし。

古語に、つとむれば貧にかち、愼しめばわざはひにかつといへり。此語甚人に益あり。家のわざをよくつとむる人は必富む。身の事をよく愼めば必わざはひなし。勤愼の二字つねに守り行ふべし。みづから行ひて家人にも行はしむべし。勤るは天の道也、天はめぐりてやまず。愼むは地の道也、地はしづかにしてうごかず。つとむるとつゝしむとは、天地の道にしたがひて則とす。是人の行なふべき道なり。此事ふかき理あり。

わかき子弟のともがら父母の家にありて、いまだ君につかへざる者は、父母につかへていとまなきをよしとす。又家事をよくつとめて怠らず、父兄の勞にかはるべし。かくつとめ行ひて少もひまあらば、書をよみ學問し、或文藝武藝をならひつとむべし。如此つとむれば、いとまなくして妄念おこらず。ひが事を行なふべきひまなし。子弟わかき者のひが事あるは、ひま多くしてすべきわざなきゆゑ、無頼の惡少年にまじはり、妄念おこり、妄行をなす。たとへば人をふむ馬も、はせゆく中にはふまず、つい立て居る時は足にいとまある故に、人をふむがごとし。

客をまねきて饗せば、只眞實に客の心にかなふをむねとすべし。かざるべからず。食品すぐれていさぎよくし、味をよくしてすゝむべし。酒をすゝむるに心得あるべし。多少はのむ人の分量にしたがふべし。少しひるはよし。しゐても猶辭さば其心に任すべし。酒をこのんでのむ人にも分量の多少あり。其量をしらずしてたらざるは害なし。みだ

りにしゐ過して人をくるしむべからず。大に醉ぬれば禮義を失ひ亂に及ぶ。放言を發し病を生ず。古人酒を狂藥と名付し事むべなり。酒をこのむ人はあながちに醉せず。大かたは其人の心にまかせたらんこそ、客の心にかなひて宜しかるべけれ。酒は以てよろこびを合すといへば、只人の心をよろこばしめ、興をやるほどにすゝむべし。古人も酒は微醉にのみ、花は半開にみるといへり。主も客も少たらざるほどにのむべし。十分によふは必後のうれひとなる。殊に下部はほしいまゝにのめば、狂してわざはひとなる。吉田兼好がいへる事むべなり。およそ酒をほしいまゝにすれば、たかきいやしき、家をやぶり身を失なふ。いましむべし。人の家をやぶり命をうしなふは、多くは酒の禍なり。

親戚をば時々まねぎて饗應すべし。しからざれば情意うとくなる。食品はうすくし、情意は厚かるべし。

家ををさむるに、法なくいるがせにして、家道みだりなれば、其家の奴婢もおこたり、無禮にしてわがまゝになるゆゑに、身のならはし惡くなる事をばしらで、其家風のいるがせなるをよろこぶ。又主人儉約ならざれば、奴婢のためゆたかなるやうに思ひてよろこぶ。此二は無道にして、かへつていやしき愚なる者のほまれを得るもの也。故に奴婢のほまれを得る人は、かへつて其家法みだりなる事多し。しかればいやしき者と、愚人とのほまれをよろこぶべからず。そしりをくるしむべからず。又いやしきものと愚なる者のほめそしりをきかば、信ずべからず。是を信ずれば、あやまりひが事あり。

家ををさむるに、奴婢尤をさめがたし。これをつかふに九道あるべし。遠ざけてきびしければ、うらみそむく。近づきているがせなれば、おこりおご

たゞ恩愛を以なづけ、禮法を以正すべし。如此すればうらみなくおごりなし。仁愛と禮法と二の者ならひ行ふべし。

奴婢は才力ありて、質實なることそねがはしけれど、かゝる者はまれなり。才辯にして利口なる者は、多くはまことすくなくして、主をあざむき、かだましき事を行なふ。家主たる人、もし是をよろこびて、家事をまかせては必大なる禍となる。才徳二ながら得がたければ、才にぶくとも質實なるを好むべし。にぶくしてはかゆかざれども、質實なれば主人の教にしたがひやすく、後の禍なし。

いにしへの諺に曰、不レ癡不レ聾不レ爲二家翁一。と云心は、家の主となる者は、家人の過あるを堪忍して、おろかなるやうにあるべし。かしこだてして明察にすぐれば、家人くるしみて家をさまらず。又家人の人の惡をつぐる事をとりあげて、聞用ゆべからず。耳きかざるがごとくなるべし。かくのごとくならざれば、家の主人と成がたし。此ことわざよく心得べし。大かたはしらずがほにてすぐすは、わざはひなし。是智者のする事なり。ことに小人婦人の云ことを信ずれば、必あやまる。是を聞て信ずるは愚なり。かゝる知なき者にたぶらかさるるは、まことにあさまし。よく心を用ゆべし。

下人利口にして、わが心にかなひたり共、愛し過すべからず。愛すぐれば必おごりおこたりて、家法をみだし、私を行ひて主人の禍となり、其身もほろぶ。凡利口なる者は必佞奸なるゆゑ、かへつて主人の心にかなひやすし。是を愛すればわざはひとなる。おそるべし。このむべからず。

奴婢に罪ありとも、いかりにくむ事を過すべからず。にくみ過すは必うらみそむきて禍となる。愛するもにくむも、よきほど有べし。

凡物各職分あり。犬の夜を守り、鷄の晨をつかさどるも亦職分なり。禽獸猶かくの如し。況人をや。

人各職分あり。家の主となりては、其家人をあはれみ、其ひがごとをいましむ。是職分なり。民のつかさとなりては、其民をあはれむを以職分とす。其職分をつくして其位に居るべし。其位に居て其職分をつとめざるは、名ありて實なしといふべし。

家の主となりて、初につとめて苦しまざれば、後に樂なし。父のゆづりをうけしはじめ、又祿を初て得たる時より、家をおさむるに約にしておごらず、慾をこらへてほしいまゝならず、家財を用るに儉にして費やさず、家業をつとめておこたらざる、是皆初にくるしむなり。如此すれば財ゆたかにして、一生の間身をはるまでともしからず。是後に樂むなり。かくの如くはじめにつとめて苦しむは、是家をたもつ要道也。凡の事はじめにつとめざれば後の樂なし。わかき時くるしんでつとめまなべば、一生の間、老までの樂となる。わかき時いたづらに日を過さば、一生の間愚にして身ををはる。

婦人と小人の言、奴婢の讒言閒言を聞べからず、父子兄弟夫婦のいたれるしたしみも、此等の人の閒言を信ずれば、必不和になり。婦人と小人との讒を信じて、とがもなき子をころし、妻をころし、臣をころしたるためし、和漢古今すくなからず。おろかなる事のいたり也。凡讒言おそるべし。かりそめの事にも片口をきゝて信ずれば、必あやまる。つゝしむべし。周子曰、家人の離るゝ事必婦人におこる。

家の主人たる人は、讒を信ずべからず。凡讒言は小過を大過に云なし、小惡を大惡に云なし、似たるを實に云なし、無きを有るに云なし、或其人のきらふ所をしりて、いからしむる、皆讒者のたくみなる言なり。きく人明らかに察すべし。まよふべからず。才力ある人といへども、讒者には迷やすし。かなしむべし。只智者はまどはず。

富貴の家に貧賤なる親戚の出入するは、主人の仁愛のあつき事あらはれて、其家の面目とすべし。かかる人の來るをはづべからず。

わが身の大事ありて、思慮決しがたき事あり。又おほやけに中事、皆思慮ある人にとひはかり、其人の評論にしたがふべし。わが身の事は私欲ある故、才ある人も心くらくなりて、善惡の理見えがたし。わが思慮する所、十分によしとおもへど、傍よりみればあしき事多し。人の上のよきもあしきも、われよりはあきらかに見えやすし。碁をかこむものはまよひて手みえず、かたはらよりみる者は眼あるが如し。すべて人は一世の内大事ありて、我思案にていかゞせんと、ひとり決定しがたき事多し。知慮ありて能是非を分別する朋友を、平生もとめて常にしたしく交り、大事ある時、其人の思慮をかり用ゆべし。わが身又は子弟などの身に大事あらば、われひとりはからひて決定する事なかれ。知慮ありて、其事を能心得たらん人に、とひはかるべし。

人家の內、子弟婦女のそしりを言つたへしむる事なかれ。人の心の同じからざる事、其面の如し。人のなす事、わが氣にあはざる事多くして、かげにては人の事をそしりかたる事あり。それをかたりつたふれば、きく者必いかりうらみ、間隙是より生じて不和になる。智ある人はかやうの言をきゝいれず、耳にきゝたるまでにて、心にかけずして、うらみいかりをおこすべからず。およそ小人婦女しもべの云ことは、道理にちがへる事多し。わが心にかなへばほめ、かなはざればそしるは、かゝる人のならひ也。必みだりに取あげて聞入べからず。信ずべからず。是を信ずれば、父子兄弟夫婦も必不和になる。おそるべし。

妾を求るには、其性行のよきと、良家の女とをえらぶべし。良家とは族姓いやしからずして、風俗そ

だちよきを云。其人品のよしあしと、家法のよしあしをえらぶべし。人の子は父よりも母によく似る理あり。故に其心の賢愚も勇怯も、多は母に似るためしあり。勇者の女子のうめる子は勇あり。養父母となり、養子となる者、人ごとに賢者にあらず。養父母となりては、わがうめる所にあらざれば、養子にまことの愛なし。養子となりては、我をうめるおやにあらざれば、まことの孝なし。父愛なく、子孝なくして、養父養子心にかなはざる事を、たがひにうらみいかりて後、義絶し、あだかたきとなる者世に多し。子なくんば其同姓の内にて、年長じて後、よき生質の人をえらびて養なふべし。同姓の子弟によき人品なくんば、遠慮あるべし。又はじめは養子を愛すれども、實子をうんでのち私意おこり、養子をうとんじにくむ者多し。是又はなはだみにくし。心かろくして、みだりにはやく、他の子を養ひて後悔すべからず。故に養子をするには、よくえらんでおそきに宜し。

家ををさむるに男女の別正しく、内外の防をきびしくすべし。混亂ならしむべからず。男女の別なく、家法正しからざれば、子弟のともがら禮儀なく、風俗みだりにして、淫行おほく、家風をけがし、罪におち入る。子弟をゆるして淫邪におもむかしむべからず。

婦人女子のしば／＼外に出て、禮節をつとめ、遊観をこのむはいまし／＼し。婦人は内に居て、家を治るを職とす。外に出る事しげきはよろしからず。親戚の間も、只使を以音信を通ずべし。

婦女はむまれ付陰柔にして智なく、多くは姦邪なる正道にしたがひがたし。奴僕はならはしいやしくして、義理にうつりがたし。ともに愚にして道をさとしがたし。故に道理を以、其過を一々にたゞさんとせば、うらみそむき、不順にして家道和睦しがたかるべし。只つねに家法を正しくし、禮を以

相對せば、おのづからひが事すくなかるべし。

家人はかねて禮義を正しくして、惡事をふせぎいましむべし。惡事出來てのちいましむるはおそし。禮は未然をふせぐ、法は已然にいましむといへり。未然はいまだ事出來ざる前也。已然はすでに事出來て後也。禮はたとへば無病の時、よく養生するが如し。病なき時よく養生すれば病おこらず。法は病おこりて後藥をのむがごとし。病おこりて藥を服さんより、無病の時より養生すれば病なし。

家のさかえ衰は。家法の正しくなるを盛とし。家法のすたるを衰とす。富貴なるとて盛とすべからず。貧賤なりとて衰とすべからず。家の盛衰は禮義の行はるゝと、行はれざるとによれり。是古人のいへる言也。この世の人も亦かくの如く心得べし。

奴婢をつかふに、心はめぐみふかくして、禮法はきびしく立べし。法いるがせなれば、あなどりて罪をおかし、とがにおち入る。いやしき者は法いるがせなれば、おこたりて惡におち入り、とがをおかしやすし。あはれむべし。およそしもべなどをつかふにも、心を用ひてあなどらず、又しもべにあなどられず、法をおかされず、おこたらしめざるがよろし。又不慈にしてかれをくるしめ、所をうしなはしむべからず。陶淵明が一僕を子にあたふるふみに、これも亦人の子也、よく遇すべしといへり。法とすべし。

もし惡性なるしもべありて不忠をなさば、うちたゝき、せめはたるべからず。事なくしてはやくおひ出すべし。

子孫のあらそひを慮りて。年いまだ老ざるに、はやく書置をする人あり。又書置をいつはりて作り出す者あり。是又遠慮すべし。人の父祖となる者は、死後まで子孫のためを思慮すべし。

葬祭の禮は、をはりをつゝしみ、遠きをおふ道なれば、心を用ひてあつくすべし。おろそかにすべから

ず。然れども國法にそむくべからず。時宜にしたがふべし。國法と風俗にそむかざるかぎりは、其心をつくすべし。先祖は子孫の根本なり、年數へたゝり遠しといへども、思ひしたひてわするべからず。時節の祭つゝしみあつくし、本に報ずるの心おこたるべからず。木の根につちかひ養へば、枝葉しげる。先祖にあつくすれば、子孫さかふる理あり。しかれども君子の先祖にあつきは、さかえを求るためにあらず。

もろこしの諺に、かねて後の用心なき事をそしりて曰、三月に桑をうゑん事をおもひ、六月に塘をほらん事をおもふ。いふ意は、三月蠶をかふ時にいたりて、はじめて桑をうゑん事をおもひ出し、六月旱する時にいたりて、はじめて塘をほらん事をおもひ出すは、かねて後の用心をせざる人のゆだんなる事をいへり。遠き慮なければ、必遠き憂あり。家ををさむるは、萬の事後を慮りて、かねてはやく其用意をすべし。如此すれば、時にのぞみてにはかに行あたりくるしまず。中庸にも、凡事前に定むれば不レ跲といへり。初にうれへざればをはりに樂なし。

わが身、事たる事をしらずして、人をむさぼる者は、身とめりといへど心はまどし、わが身、事足る事を知りて、むさぼりなき人は、身貧しけれど心はとめり。

訟をば俗にくじと云、くじは人に理非をあらそふなり。凡初において證人を多くむすび、證文を詳に取おき、初をよくつゝしめば終に訟なし。初おろそかなれば、人よりひが事を云かけられて、後に悔あり。後に悔なからんことをおもはゞ、初に心を用ひてつゝしむべし。をよそわが身正直にして人に邪曲ありとも、なるべきほどは堪忍すべし、わがとるべき財を人にかすめらるゝとも、わが家の亡びにならざるほどは、損失を堪忍すべし。小

人とあらそひて、奉行に訟へ對決し、人をとがにおとしいるゝも快からず。其上われに十分理ありとおもへど、又彼に理ある事あり。われのみ理ありとおもふべからず。我身には私ある故、非をも理と思ひあやまる事あり。一偏に思ふべからず。もし彼に理あるをしらで訟ふるは、わが恥なり。又訟をきく人、ひとごとに必賢明ならず。きゝあやまりて是を非とし。非を是とし、或かた口を聞て信じ、聞あやまる事多し。又親類權貴の人に賴まれ、或賄賂にふけりて私する事、古來其例すくなからず。されば、いかなる正直の人、道理明白にして、證據分明なれども、終に其理を得ずして本意をとげず。返つてとがにおち入事多し。われに理あるをたのむべからず、やむ事を得ば訟をなすべからず。十分に我に理ありとも堪忍すべし。もしやむ事を得ざる事ありて訟へば、只其一事のみ云ことわりて、其人の他の惡事をことばにあらはすべからず。

人に五計あり、一生の間十歳より六十まで、時につけてなすべきいとなみある事をいへり。まづ十歳の頃は、ひとへに父母の養によりて成立てり、父母いをしへにそむくべからず。是を生計と云。二十歳はもとより身をつゝしみ學問し、藝をならひ、家學をつとめて、身を立る計をなすべし。是を身計と云。三十歳より四十歳にいたりては、家事をいとなみて、家をたもつ計をなすべし。是を家計と云。五十にしては子孫のためにはかる、子孫は年わかく世事になれず、父まづ其ために計をなすべし。是を老計と云。六十より以上は、わが死後の事をいとなみはかるべし。死後の事を早くいとなまざれば、死にのぞんでくやしけれどかひなし。此五計はもろこしの人、朱新仲が語なり。是よのつねの人も及ぶべき計なり。もし此年に應じて計をな

さすれば、おこたれる也。ちからなしといふべし。

家道訓卷之二終

家道訓卷之三

貝原篤信編

人の子孫たる者は、其家の先祖の家法をよく守りて失なはざれば、たとひ其子孫才力なしといへども、よく其家をたもちて、いつまでも長久なり。其故は其家をはじめて持立たる先祖は、それほどの才智あり。其上わかき時より事に多くなれ、艱難をへて萬事に熟し、世のありさま、人の心の善惡、人のうれへ苦をよくしれり。此故に其人の立たる家法は、必堅固にしてやぶれなし。子孫よく其法を守れば、やぶれなくわざはひなし。其子孫才力聰明すぐれたる人ありとも、はじめて家を持立たる先祖には及がたし。もしその子孫利口にして、先祖のさだめ置たる法は、むかしの事にて、今の世にあはざるとして、其先祖をないがしろにして、其法をやぶり、新法をたつれば、必其家亡ぶ。先祖の法

を手本にして守り行はゞ、其家いつまでも長久なるべし。

家人に對するに、嚴正にして厚重なれば、おのづから威ありて人あなどらず。かくの如くなれば、いかりてはげしく、惡言を出さゞれども人おそる。

子弟はいふに及ばず、下部に對すとも、其罪あるをいかり、惡言を出していやしむべからず。又うちたゝき、はじゝめて、犬馬の如くいやしむべからず。下部も又人の子にして人倫なり。人倫の交かくのごとく情なかるべからず。いやしくとも、人倫の道を以つかふべし。いはんや天地のうみて、子としてあはれみ玉ふ人なれば、いやしめにくむべからず。又人の過惡をせめて、人のためにわが心を亂して、怒りにやぶらるべからず。是己をせめ、人をさむる道を失なへりといふべし。怒甚しければ、必目をいらゝげ、ことばをあらくして、人をいやしむるにいたる。君子のしわざ、かくの如く心をとりみだして、見ぐるしかるべからず。又せめらるゝ者はわが惡きをわすれ。耻辱にあひたるを本意なくおもひ、いかりうらみて心服せず。下部にあやまりあらば、只從容として、誠を以いましめ正さば、彼もし人心あらば感通すべし。

家ををさむるにも、下情上に通ずるをよしとす。下情上に通ずとは、下つかたの人のうれひくるしみ、善惡曲直のありさまを聞て、明らかに知るを云。下たる者のうれひくるしみ、よきあしきをしらざるはおろか也。

權勢ある家の賓客を司るやつこは、必主人の權勢にほこり、無禮にして賓客をあなどる。主人より時時心をつけて、無禮を戒むべし。其やつこにまかせおくべからず。やつこの無禮ならば、せむるにたらず。只其主人をそしる。主人是をしらざるべけんや。

人のいましめは防のごとし。大水をふせがんため、

かねて日てりの時、つゝみをつきおけば。洪水のわざはひなし。人もかねての防なければ、うれひの來る事はかりがたし。人家の內、年わかき子弟婦女奴婢のともがらは、いまだ惡事出來ざる時、かねて禮法を正しく、內外上下のへだてありて、家法をきびしくすべし。ことさら酒色のつゝしみをきびしくすべし。又無賴の惡友にまじはる事をかたく禁ずべし。打まかせ置て、放逸をゆるし、姑息の愛を專にすれば、不意なるわざはひ出くるもの也。惡事出來て後は、おさへがたし。きびしくせむればうらみそむく。顏之推が婦を初來にをしへ、子を嬰孩にをしふと云しも此意なり。はじめにはやくふせげば、ちからを用ひずしてしるし多し。末をすくはんとすればちから及はず。

古語に、一物われは一累をそふといへり。草木鳥獸器物など、何にても一向にこのみ過さば、必其物に心をうばゝれ、心に一のわづらひをそふる也。其上事をこのめば、ひまと財とをつひやし、下人をなやます。このまざれば事すくなくしてよし。君につかへていとまなき人、父の家にありて孝行にひまなき人、官職をあづかる人、藝術の家業ある人、此四等の人は心を清くし、事をはぶくを宗として、さし當りたる職分をつとむべし。事を好み物を玩ぶべからず。事をこのみて隙をつひやせば、わが身にさしあたりたる職分のつとめには、必うとくなる。

小兒をいましめて、もろ〳〵の蟲魚など、およそ人の害にならざるいき物をころさしむべからず。又生類をくるしむべからず。犬猫鷄雛などをなやますべからず。不仁にしてみだりに物のいのちをたつは、天道にそむく事を、幼少の時よりはやくをしへいましむべし。

常に居る處は。陽に向ひ陰に背くべし。如此なれば、日の光明らかに、月にむかひ夏すゞしく、冬

あたゝかにして身を養ふに宜し。又居室も庭中も、つねに掃除していさぎよくすべし。かくの如くすれば、氣を養ひ心をいさぎよくす。くらくけがらはしければ、心氣の養とならず。又居る處くらければ元氣をふさぐ。甚明らか過れば、精神をやぶる。居る處かざりをこのめば慾を生ず。

人の家居は貧富によらず、身の分より少せばきがよし。せばければつひえすくなく、事すくなくして住よし。富貴なりとも、無用の屋作をひろくすべからず。ひろ過ては通行なやみ有。掃除に家人のつとめしげく、修理もむつかしく、財の費多し。されど又無用の用とて、常に用なき所少ありてよし。事有時のためなり。家居は只堅くいさぎよくして、かざりなきが、心をやしなひ目を養なふによし。

財を多くたくはへてとめる人、もし生れ付て仁心なくとも、わが身のため子孫のためをおもひて、善を行なひ人をたすくべし。財寶を多く子孫に殘さんよりは、財をすてゝ廣く善を行なひ、父母兄弟親戚にあつくし、其餘の人の貧をすくひ、飢寒を助くべし。是後のさいはひ子孫のため、財をのこすに甚まされり。

子孫弟姪のともから、生れ付て愚不肖なれば、いかに敎へいましめても、其不德改らず。いさめをふせぎてうけ用ひず、いさむればかへつて心にさからひ、うらみそむき不和にいたる。時々いさめてきかずんば、いはずして和を失はざるにしかず。かくあしく生れ付たるは、聖賢といへどもいかんともすべからず。堯舜の子の不肖なるを以しるべし。聖人頑なるをいかりにくむ事なかれとのたまふ。赤子の井におち入ごとし。あはれむべし。にくむべからず。

およその人、各其心に生れ付たる偏性あり。わが子しもべにくせあらば、時々つげをしふべし。あ

らためぬればよし。もし其性つたなくして、あらためがたきをしりなば、堪忍してしばしばせめとがむべからず。人の生れ付かるくせ、おほかたなはらず、とがめても益なし。されどをしへにはおこたるべからず。只心ながくいさめ教ふべし。にはかにさとさんとすべからず。

衆人上下都は、人の恩をわかくうけてもわすれやすし。是其人のつねなれば、いかりとがむべからず。かくのごとき人は、必かくの如く恩をわするゝものぞとしるべし。うらみとがむるは、わがおろかなるなり。われ年のつもりに、世の人を多く見るに、恩をうけてわすれざる人は、きはめてまれなり。十人に一人も有がたし。是衆人のつねのならひぞと思ふべし。もし恩をわすれざる人あらば、善人なるべし。人の恩をうけば、長くわするべからず。必むくふべし。恩をほどこしてはわするべし。恩をたのむべからず。

吉事をいはひ、凶事をいむは人情なり。正月五節供の俗節と、元服、婚姻をいはひ、死亡を忌む事むべなり。然れども愚人は吉凶につきて、はなはだかゝはり、いはひ過し、いみ過して、事に害あり。天命をしらずして、福を求め、禍をのがれんとする私心よりおこれり。是禍福の理をしらずして、おろかに迷へるなり。神佛にみだりにへつらひいのりて、さいはひをもとむるも又同じ。

年わかくてはいまだ世變をしらず。又知慮なき人は、老人の言はまはり遠く、今時の風俗にかはりて、時にあはずとおもひて、きく事をきらひて、父祖をないがしろにしやすし。年わかき者は、たとひ才力ありても世變をしらず、知慮熟せざれば、老人のおろかなるにも及ばず。わかき時は其理をしらず、久しく事になれ、年老て後、父祖の言理ある事をしる。

凡家の主は、四民ともに其身をおさめて、家をおこ

さんことを志すべし。古への親先祖より傳はれる祿と財とを失はずして、よくたもつを孝とすべし。つみなけれど禍ありて、失なふはちからに及ばず。不德にしてみづから財祿を失なひ、或財祿をへらすは大なる不孝なり。家業をよくつとめて、おこたらず、儉約にしておごらず、萬の事つゝしみてあやまりすくなくし、家をよくをさめて、おこたらざるは善士なり。其志ある者は、其事つひに成といへり。其志かくの如くなり。善士は必家をおこす。

居る處の室の內にある器物衣服調度をば、年老たりとも、猶も立居くるしからずは、十たびの內、五六度はみづから立て用事をとゝのふべし。奴婢を用ゆべからず。是まづわが身をうごかし勞して、生を養なふ道なり。其上奴婢も又しば〳〵立うごかず、勞せずしてよし。富貴にして奴婢多くともかくの如くすべし。況貧家ならば、おほからぬ奴婢を、しば〳〵よびて勞せしめんより、みづから立て心のまゝに事を調ふるが、心のなやみなくして快し。又奴婢をよんで一事を云つけなさしめば、其時になほつかふべき事あらば思ひ出して、退かざる內に其ついでを以、二も三も事をなさしむべし。奴婢のわが前にある時は、心を用ひずしてあだに過し、なさしむべき事を云つけずして、退きて後おもひ出し、しば〳〵よんで事を命ずれば、わが身も奴婢も事しげく、いたつがはしくしてひまなし。是人をつかふ道に、心を用ひざるなり。奴婢も又主人の前にいでゝ、一事をつとめおはらば、又何事ぞあらばつとめんとおもひ、用なく共まづそこについゐて、主人の命をうかゞひ、しばしまちて後、用なくんば立てしりぞくべし。

もろこしの古き諺に、萬事從レ寛其福自厚といへり。寛とはせはしからず急ならず、心ひろくゆたかにして、人の過をゆるすを云。かくの如き人は福あつし。急にしてせは〳〵しき人は、福すくな

し。おきてひろき器にはさいはひあり。心ゆるやかになだらかなる人は、さいはひながきためし多し。

家に居ても国にありても、善を行ひ、道にしたがふほど楽しむべき事なし。はじめはつとめならひて、善を行なふべし。久しく行ひてならひなれぬれば、賢哲にいたらざれども、善を行なふ事楽しくなりぬ、孝悌は[illegible]事なり。初は面白からざれども、久しく習馴ぬれば、後はおもしろし。いはんやよき道を行ひ、熟せば、あに楽しからずや。おろかなれば人をうらみやすし。故に史記曰、知あれば能く人をうらみず。此言むべなるかな。知ある人は、人のわが心にかなはざる事あるをば、故あるらんとおもひ、人をとがめず。或人のしわざの道にたがひたるは、生れ付てをろかなる故と思ひて人をうらみず。たとへば赤子の井に入らんとするの如くなればなり。又人の生付偏なれば、其行正しからず。智者は其偏なる病、あはれむべき事をしりていからず。家の主となる人は此心得あるべし。

親戚家人わが心に叶はざるを、うらみいかりて、堪忍せざれば家道和睦せず。

園に草木をうゑて愛するも、又心を養なふ一助なり、いとまあるとき少心を用て、あるにまかせて求めやすき物をうゝべし。得がたき物をしひて得んとし、みだりに人にこひもとめ、あたひ多くつひやし、其品の多きと花のすぐれたるにほこり、花のよきをあらそひたゝかはしむるは、事多くなり、心のわづらひとなり、心術をそこなふ。是楽みにはあらず、苦みを求るなり。

園にうゝる、草木異なるを好むべからず。又しげきはむつかし。作木すべからず。只ひろきそのには、果樹花木薬樹品々植て、四時の推移るを観るべし。又菓を数品うゑて祭祀にそなへ、賓客をもてなし、人にもあたへて用多し。草は菊其外雅花草を少うゑて、

その名をしり、其花を玩ぶべし。居室の小園には、しげらざる常葉なる小樹を少ばかり植て。石に伴なはしむべし。小園の内は草木多ければむつかし。又庭に草木しげれば陰氣ふかく。夏は豹脚多くして人をさす。

家園をゝさめ、草木をうゝるは、もとより氣を養ひ、心を樂しまんためなるに、心を用過して心を勞し、功を費やし、家僕を勞せしむるは、心を養ふ物を以、かへつて心をくるしめ、隙を費やすは、損ありて益なし。

花草などをうつしうゝるは、勞なく活やすし、されども初うゝるに、うゝべき所をえらんてうゝべし。如此すれば、後日にうつしうゑずしてよし。草木もうつしうゝるは、事多くむつかしく、功をつひやす、木をうゝる事、尤はじめにうゝべき所をえらんで、其上長して後までよき所に、作木との間遠くうゝべし。はじめに所をえらばずして、みだりにうゝれば、後に長じて處を得ず、處をえさせんとて他所にうつさば、多くは枯る。枯ざるもかじけてさかえず。所を得ずとも年久くして、さかえ長じたる木をば、やむ事を得ば、うつすべからず。所を得させんとして、事を好むべからず。もし小木をはじめうゑて、所を得ざるをば長茂せざる時、早くうつすべし。小木はうつしても活やすし。

宅にはじめてうつらば、先はやく果木をうゝべし。次に作木に及ぶべし。十年の計は木をうゝるにあり。樹木をうゝるには菓を先とし、花を次とし、薬樹を又其次とす。果は尤人に益あり、多くうべし。取わき橘柑、柚を多くうゝべし。みのりて熟したるは、うるはしき事、花におとらず。柿、梨、栗、椒など好品をもとめうゝべし。花木は梅を先とす。紅梅もよし櫻亦よし。早くちるうらめし。つばき花久しくさきて薬うるはし。挿ば活やすく、花早くひらく。海棠、躑躅、杜鵑花もよし。

葉樹は杉、檜、樅、金松、羅漢松、冬青、樹などよし。竹を北方に多くうゝべし。火と風をふせぎ、又きりて時用に備ふ。前庭には柳、櫻、松、楠などうゝべし。しげきをいむ。陰氣ふかく、夏は蚊多くしてうるさし。又菓は日用の助となり、宅中にうゝるは新しくて市にかふにまさり、其葉さかえてうるはしきは、目をよろこばしむる事、花草におとらず。

家道訓巻之三終

家道訓巻之四

貝原篤信編

用財

萬の事皆法あり。法にしたがへば其道立て、其事成る。法を守らずして、只わが心にまかせ行へば、必其事やぶる。家をさむるに尤法あるべし。法なければ必財用つき、困窮して家をたもちがたし。

凡家を治むるに、財を用る法を知りて、かたくつゝしみ守るを要とす。是を知りて守ると、しらずして守らざるとは、家の盛衰存亡の本にて、其かゝる所いとおもき事なれば、つねに心を用ひ、よく其法をしりて守るべし、おろそかなるべからず。其法をしらず、おろそかにして、心を用ざれば、必困窮にいたりて家をやぶる。今の人、家の主となりて、多くは家をたもつ道におろそかにして、財

を用る法をしらず。故に貧窮にいたる。貧窮なればみづから苦しむのみならず。親を養なふ事うすく、君につかふるにつとめがたく、人にほどこしめぐまず、禮義を行なひがたし。人に乞かり、かひおぎのりて、おひめをつくのひがたし。百行かけて行はれず。武士は武備なくして戰陣をつとめがたし。不意なる變にあへば、困苦していかんともすべからず。貧苦のわざはひ、子孫にいたりてやまず。或一代にて家をやぶる。かなしむべし。諸の細事雜藝をば、さほどしらずともありなん。まづ家をたもつ道をはやく知りて守るべし。是人生至要の事也。おろそかなるべからず。

家ををさむる主人は、日夜家事をよくつとめて、おこたらず、おろそかならず、財を用るにおごらず、つひやさず、もはら儉約を行なふべし。勤と儉との二は、家をおさむるの要道なり。此二の道行はるれば、貧窮にいたらず、財用にともしからず。勤と儉と二の道を行なふに、心を小にして、おこそかならざるをよしとす。是勤儉を行ふ心法なり。勤儉なれば必貧窮にいたらず、わが財祿にて家をたもち、財を人にもとめ、からずして事足りぬ。人の貧窮をすくひ、音信贈答の禮義をとゝのへ、其上儲蓄ありて、不意のわざはひにあへる時の變に備へ、武具をとゝのへ、武事に備へあるは、是よく財を用るなり。

家を保つの道は、勤と儉との二にあり。四民共に勤むれば、家業よくをさまり、財祿を得、家の基となり、又家事よくとゝのほり、家をさまる。勤むるは、是財祿を得るの本なり。本はつとむべし。儉約なれば財を失なはずして、よく家をたもつ。儉約は財をたもちて失はざる道なり。二の者ならび行はれて、家道立つ。一もかくべからず。四民皆同じく是を行ふべし。又勤と儉との工夫は忍にあり。忍はこらふるなり。苦勞をこらへて、よくつとめ、

私欲をこらへて、儉約を行なふべし。

飮食、衣服、家居、器物など、わが身の分よりかろくするがよきほどなるべし。身上に相かなへりとおもふは、分に過たるなるべし。只おやをやしなふは、本に報ずる道なれば、わが身をわすれて、財ををしむべからず。又禮義を行ない、人をすくひ助くる事は、分にしたがひ力を出すべし。財ををしむべからず。是人をあはれみ、人にまじはる道なれば也。

家の破れたる所は、はやく修理し、武具をとゝのへ備へ、ふるくして損じたるは改め補ひ、父よりゆづれる器などの、かけ損したるははやく修復すべし。凡小破の時修理をくはへざれば、大破にいたりてはむつかし。

仕る者は、君より給はる祿あり。農工商は、父より得たる田地あり、家財あり。士も庶人も其財祿の多少によらず、其分内にて儉約を行ひ、家人を養ひ、家をたもつべし。是君父よりうけたるのみならず、天より給はる所の定分の財祿なれば、大身小身、貧富ともに、其家の財祿を用ひて、事足らぬべし。是天命を安んじて、外を願はざる也。やむ事を得ば、外の財を借用ゆべからず、若家祿の分限に過てつひやせば、必財不足して、外に借用るにいたる。是財を用るに法なくして、天命をやすんぜざる也。よく財を用る人は、財祿の多少によらず、其家に得たる所の財祿の分量にて事足りぬ。家の困窮する事をせざるは、家祿の多少によらず。又時の風俗の奢れると、儉なるにもよらず。又わが幸不幸にもよらず。只わが一心の儉なると、怠り奢れるによれり。以レ約失レ之者寡矣と、聖人ののたまへる事信ずべし。是家をたもつ法なり。

古人の財を用るは、其財祿の分限に應じて、過分の事なかりしかば、困窮する人すくなし。後の人は分限に過て、下士は上士のまねをし、上士は大夫

のまねをし、大夫は諸侯のまねをす。事によりて士たるもの、甚分をこえて。諸侯のまねをする事又多し。かくのごとくならば、なんぞ困窮せざるべきや。事により上より下にひとしくかろくするは害なし。下より上を借して、貴き人のまねをするは大なるとがなり。

財を用るに、小をつんで大にいたる故、少の費をもをしむべし。然れども、もしやむ事を得ずして、少の費はなすとも大なる害なし。一時に大に財を用んとおもはゞ、必猶豫してよくはかるべし。やむことを得ばこらへて費すべからず。小の費をつんで百にいたりても、猶大なる費一事はそれより甚しく、財をやぶる。つゝしむべし。

家ををさめ財を用るに、事ごとに心を用ひて精しくし、こまやかにして、疎略なるべからず。おごらず、やぶさかならず、過不及なくよき程にすべし。用ひ過すはおごれり。不及なるはやぶさかなり。心あらくして、大やうにをろそかなれば、財の用やう過不及にして、或おごり、或やぶさかなり。あたふべきものを與へず、あたふまじきものにあたへ、多く與ふべき者にすくなくし、すくなかるべきにおほくする事、そむきて理にあたらず。是心を用ひず。用ひても精しからざる也。

君より祿と位とを得るは、まことにかたき事なり。されど得る事かたきよりも、たもちて失なはざる事尤かたし。祿位を得る事は、幸にしても得る人あり。財祿をたもつてうしなはざる事は、德なければ成がたし。幸ありて得れども、德なくして失なふ人おほく、故に財祿ある人は、德行をつゝしんで、其財祿をたもつべし。又財祿をむさぼり、分外の富を求めて、子孫にのこさんとせんより。家法を正しくし、子孫に道のをしへをのこすにはしかじ。子孫無道なれば、財祿をのこせども必失なふ。臣民皆かくの如し。わが財祿をたもちて失な

はず、子孫長久ならしめん事をねがはゞ、只仁心を以、人をあはれみめぐみ、善を行ふをつねの樂とし、子孫に善をおしへすゝむべし。是天道にかなふ理なれば、當時目に見えたるさいはひなくとも、後に必天のめぐみをうくべし。是萬金をすてゝ、神佛にへつらひいのるに百倍せる祈禱なり。是わが私意にあらず。いにしへのかしこき人のをしへ、古今のためし明らかなり。うたがふべからず。

財を用る法を、禮記の王制にいへり。曰、財用を制するに、入ることをはかりて、出す事をなす。云意は、年の暮に今年得る所の財の分限をかぞへて、其分限の多少にしたがひ、其年の豐凶によりて、それに應じて、來年までつかひ用る分限を定めて、時々にかへりみてつかひ用る事を節にすべし。得る處の財の分量よりすくなく用るはよし。得る所より過て、多ければ、財不足して困窮となる。いましむべし。是を入をはかつて出すことをするといふ。其上費をはぶき、おごりをいましめて、成べきほど餘財を多くたくはへ、凶年、火災、盜賊、疾病、死亡、軍用に備ふべし。是萬世財を用るの良法也。

いにしへは三年耕して、必一年の食ありといへり。此意は、農人は三年田をつくれば、一年の食の餘計あり。たとへば四町の田地をつくれば、三町のふるまひをなし、一町のなりはひを殘して用ひず。三年過れば三町のなりはひの餘計出くるゆゑに、たとひ水旱風蟲の凶年にあひて、五穀みのらざれ共、飢饉の患なく、財用事かけず。士と工商の家も、此計をもつてしるべし。是をもつてはかるに、いにしへの法は、士は君より給はる所の祿を、毎年四にわかち、三分を用ひて一分をばたくはへ置て用ひず。一分を三年かさぬれば三分となる故、もしは凶年にあひ、變にあひても、困害のうれひなし。三分の一をたくはへ置くは凶年のため、或

水火・盗賊、不意の變をたすけ、又軍用にそなへ、人の困窮をすくはんがためなり。是いにしへ財を用ゆるの法也。此法を行なへば、四民ともに財ゆたかにして、貧窮のうれひなし。是古今通用すべき良法也。

凡太平の世の勢は、年々に萬の事必華美におもむきて、おごりつひえおほくなりもてゆくものなれば、儉約をむねとして行なはずして、只其まゝにて世の成行にまかせぬれば、人々困窮して家をたもちがたし。俗にながれ、時にうつりゆかば、儉約の道立ずして、後には必家をやぶるにいたるべし。家主となる人は早くはかり、遠くおもんぱかるべし。萬の事は遠き後の事を早くおもんぱからざれば、必ちかきうれひあり。はじめ憂勤すれば、後は必安樂なり。初におこたりて心を用ざれば、後は必うれひくるしみとなる。此理をよくおもんぱかるべし。

財の用やうよきとあしきとは、たとへば今兄弟二人あり。其家の財祿の分限も人の口數も同じく、父のゆづれる財も同じく、父の借物のおひめのなきも同じ。然れば家の貧富も又同じかるべきに、一人は家とみゆたかに萬不足なし。一人はまどしくせは〳〵しく、つねにたからをかりて、利に利を加へて、人にわたへ、うばゝれて財をつひやしつくし、後には其かれるものをつくのはず、年々にやうやう貧困にいたる。是なに故ぞや。財の用やうよきとあしきとによれり。よきとは後をおもんぱかりて、今をつゝしむ也。あしきは此うらなり。

天地の氣滞れば必變をなして、風雷、水旱、地震などの災となる。世間の物久しくあつまれば必藏る。人の氣血飲食めぐらずして滞れば必病となる。財寳もおほくあつめて、人に施しめぐらざれば、滞りて後日のわざはひとなる。老子も多くあつむれば、必あつくうしなふといへり。是必然の

道理也。財多くあつまらば、貧窮なる人にほどこすべし。財を多くあつめて、人にほどこさず、永く子孫につたへんとすれども、火災盗賊など不意の災難にあひて、財をうしなひ、或子孫の不徳によりて、財をうしなふ事、古今世上に其ためし多し。財をあつめて、さいはいとせんとすれど、財をあつめたるまでにて、人にほどこさゞれば、必わざはひとなり。鹿臺の財、鉅橋の粟、おごりてはたもちがたし。鄧通が銅山の財、石崇が金谷の富も不徳なればつひに失なへり。又官祿をむさぼり、財寶をあつめて子孫にのこせども、わが身に仁愛を行なはずして、陰徳なければ、天道にそむきて、後の餘慶なし。其上子孫不肖にしては、其官祿と財寶をたもちがたし。只陰徳を行ひて、つねに善をなし、ひろく人をすくひ、子孫に其餘福をのこし、又義方の教をなして、子孫の行を正しくせんこそ、子孫のさいはいとはなるべけれ。わが身一人にて福祿を多くうけ過さば、天道みてるをかきて、子孫には福のこらず。わが身みづからさいはいのみてるをかきて、わがため子孫のため禍をのがるべし。是日福をうけ過さずして、子孫に福をのこしあたふる道なり。是智者のする所也。

財を多くたくはへて餘りあらば、人に益ある事につかひ用ゆべし。無益のいとなみをなして、財をつひやすは、いたづら事なり、をしむべし。君の子財をみだりに用ひずしてをしむは、人に益ある事に財を用ひんが為なり。たとへば百萬錢をつひやして、萬燈をともさんよりは、十萬錢を出して飢たる者、万人を養はんは益多し。又百萬錢を出して女子を嫁せしむれ共、十萬錢を出して子を救ふる人なしと、古人いへり。又大富の人は、一日の内にも千金をつひやして、無益の遊樂をなせども、百金を出して飢たる人をすくふ人なきはなんぞや。

わがみの養をうすくして、父母の奉養をあつくすべし。次に兄弟、親戚、朋友の貧窮なるをすくふべし。其外飢寒窮苦する者をたすくるを以樂とすべし。親戚のむすめ嫁すべき時にいたれども、貧窮にして嫁する力なき者あり。われもしちからあらば、財をたすけて嫁せしむべし。凡財あらばかくのごとく、有益の事をなすべし。財ををしむべからず。わがちからにしたがひてほどこすべし。かく善を行なひて人をたすけば、家とみ財おほくもてるかひあり。善をする事かくのごとくならば、わにたのしからずや。道理をしらざる人は、多くの財をつひやし、無益の事をなして義理にそむく事多し。財寶を多くつひやして、道理にそむくはむげに愚なり。よくわきまへて、無益の事に財をつひやさず、益ある事に財を用ゆべし。かくのごとく善を行なひて人をすくふ人は、必天道の御めぐみ深くして、わざはひなく福長し。無益の祈禱をして、みだりに神佛にへつらふには、はるかにまさりてしるし大なり。無智の人は此理をしらず、道なくて神佛にへつらふは、神佛を愚かにし、私ありとしてあざむきあなどる也。是神佛の心にそむけり。なんぞかゝる人に利生あらんや。

凡財ををしみては、善を行なふ事成がたく、功を立る事も成がたし。又人の心を得ずして人思ひつかず、人の和なき故事を成しがたく、なす事はかゆかず。軍にも賞をよく行なへば、士卒身をすて、勇戰をはげます。三略にも、香餌の下には懸魚ありといへり。賞うすければ、士卒はげみなく、軍功も立がたし。是皆吝嗇のわざはひなり。俗語に小欲大損と云是なり。

人もし富貴にして、たからを多くたくはへもたば、是天より我一人にあつくし玉ふにあらず。多く人をすくはしめんために、われにさづけたまふとおもひて、天命にしたがひて、つねに仁愛の心をも

ちて、貧苦なる人をめぐみ、飢饉する者をすくひて、善を行なふを以て樂みとすべし。是天の御心にそむかざる也。かくのごとくならば、富貴なるかひありて大なる樂なるべし。財を多くもちても、わが身ひとりの俸養におごり、人にほどこさずして善を行はざるは無用の物なり。石瓦を多くもてるに同じ。かゝる人を守錢虜と、古人の云けんもむべなり。財をもてるかひなくして、貧賤の人と同じ。

財を用る道をしらで貧窮なれば、父母をやしなふにうすく、人にあたふべき物をあたへず、人をめぐむ事なりがたく、人のおひめをかへさず、廉恥の道行はれがたく、人のめぐみをうけてむくひず、官となりても、貧なれば民をむさぼりやすく、忠義をつとめがたし。禮義にそむき、心術に害ある事、皆是困窮よりおこる。困窮は儉約ならざるよりおこれり。しかる故に、儉約は家ををさむる要道なり。

およそ人家になくてかなはざる物の外、無用の物をもとめたくはへざれば、心のわづらひなく、財のつひえなし。

器物は朝夕用ある物を寶とすべし。無用の奇物を寶とするは、價は多く費えて、わが用にたつ事はまれなり。常に用ある器は價の費はすくなくて、用にたつ事多し。得がたき寶をたふとぶは古人のいましめ也。

士として財利をむさぼり、吝嗇にして廉恥の志なく、親戚故舊の貧窮をめぐまず、われにしたしき人、わが釆地の農人などの飢饉をみても、心つよくしてすくはず、親戚朋友の禮義をつとめず、或あたふべき者にあたへず、とるまじき物をとり、人の財を用ひてつくのはず、若此事わが身に一もあらば、是をいましむべし。人のよきあしきをみるも、皆わが身のかゞみなり。善をみては是を學び、惡を

みてはわが身にも是ありやとかへりみるべし。如此すれば人の善惡をみて、皆わが身の益となる。人のあしきをそしらずして、我身をかへりみるべし。およそ鰥寡孤獨貧窮にして、たよりなき者をわが分にしたがひ、力の及ぶほどはすくふべし。これをすくふに財ををしむべからず。いかんとなれば、わが身彼をすくふほど財あるは、天よりひとへにわが身にさいはひし玉ふにあらず。貧苦なる者をすくはしめんとて、われにたからをあたへ、富しめ玉ふ理なれば、天の御心にしたがひて、貧人をすくひほどこすべし。もし是をすくはざれば、天の御心にそむきて、其わざはひおそるべし。天道にそむきしわざはひ、たちまち口にみえ來らず。其むくひおそけれどものがれがたし。此理必たがはずうたがふべからず。天道おそるべし。易に天道はみてるをかくといへり。又物みつればかくともいへり。又古語に、多く藏れば、あつく失ふともいへり。財多くあつめたるまでにて、人の貧窮をめぐまざれば、みちては必かくるわざはひあり。天道おそるべし。

人の器物をかる事をこのむべからず。人を妨ぐる事遠慮すべし。又用ありとも、なるべきほどは不自由をこらへて、人の器かるべからず。若やむことを得ずして器をからば、そこなふべからず。用ひをはらばはやく返すべし。久しくとゞめ置てかせるぬしに事をかゝせ、こひ使をうけて、おそくかへすべからず。若かれるもの損せばよくおぎなひて、其過を謝し返すべし。およそわが家に人の財貨・器物・書籍等をかりて、かへさゞる物ありやと、時々みづからかへりみるべし。もしかれる物あらばすみやかに返すべし。是又家ををさむる道の内の一事なり。おろそかにすべからず。

物を買て、かひたるおひめをわすれ、或おこたりて、おひめを返さゞる事あらば、かへりみて早くかへ

すべし。是又心を用ゆべき事也。

商人は日々月々に財をめぐらし用ひて、其利を得るを以世わたるたつきとす。若商人の物をかひて其あたひをおそくつくのへば、商人其財をめぐらさずして利を得がたし。たとひ後日に殘りなく返しあたふるとも、其つくのはざる間は日々月々に得べき利を得ず。其商人のうれひ思ひやるべし。大やうはかはりの財なくば不自由をこらへて、物をかはざるべし。凡かれる物を返さず、かへる物のあたひをつくのはざれば、其財主のうらみおしはかるべし。人のうらみいのりつもりての天禍おそるべし。

人の書をからば。わが書をさし置て、まづ人の書を專一にみて早く返すべし。人の書をかりて見ずして、久しくとゞめ置はおこたりなり。大冊なる書も二日に一冊は見やすし。中冊の書は、五冊からば五日にみて早く返すべし。十冊からば十日にみて返すべし。久しくとゞめ置べからず。早く返せば人も又よくかしてをしまず。是學者の心を用ゆべき事なり。

人の書をからば、損汚すべからず。屋漏、水けぶり、猫、鼠、水、火、油垢、小兒のふせぎをすべし。かれる書は器に入置て、みる時取出すべし。もしそこなひけがさば、おぎなひて、其あやまりを謝して返すべし。是又百行の一也。

およそ人に書をかせば、わが用ある時事かけぬ。人にかす事をしむべし。是を以書をかれる人おもんぱかりて早く返すべし。かす人はかれる人の貧にして、書なきをあはれみてかすべし。をしむべからず。富める人、もし書を見る事をこのめとも、書をかはざれば學すゝまず。我が書にあらざれば、用ある時考へがたし。財多き人は書を買事をしむべからず。

わが身の俸養におごる人は、必財ををしみて人には

どこさず。財多けれど人にほどこさゞるは、只吝嗇なるのみならず、不仁と云べし。財ををしみては善は行ひがたしと、程子のいへるまことにしかり。

家道訓巻之四終

家道訓巻之五

貝原篤信編

用財

わが家の生業をつとめて、財を生ずるの本とし、又儉約を行なひて財をたもつの道とす。もし然らずして、家業におこたりてつとめず。財をみだりにつひやして、儉約ならざるは、是困窮の基にて家をやぶる。故に家を豐にし、財を足すの道は、四民ともによく家業を勤むるにあり。又財をたもちて失はざる道は、儉約を行なふにあり。凡士農工商皆其家職をよくつとめておこたらず。是財を生ずるの本也。又儉約にしてみだりにつひやさゞるは、財をたもつの道也。此つとむると儉約との二は、よく家をたもつみちなり。利養を得る事は、あながちにむさぼり求めざれども、家業をよくつとむる中におのずからあり。此上に儉約を行なふ

べし。大富貴の人家財祿米多しといへども、財はかぎりある物なれば、儉約ならざれば、後は必財つきてまどしくなる。わが家にある所の財をかへり見て、つかひ用ゆべし。家財の有無を考へしらずして、妄に用るは困窮の基也。

家をおさむるは國をおさむるに同じ。財を用ひ人を用ゆ、此二事をつゝしむべし。質直にしてぬすまざるやつこをえらびてつかひ、財をつかさどらしむべし。財をつかさどるやつこかだましければ、我が利欲のみいとなみて、主君をあざむきて、主人の家をやぶる。財を用ると人を用るとの二は、家をおさむるの要なり。心を用ゆべし。

およそ人家の必貧しくする事、天の災にもあらず。人の不徳によれり。まづ後のうれひをおもんぱからずして、堪忍の心なく、只今の口腹耳目の欲をほしいまゝにし、儉約をきらひ、分限よりおごりてついえをいとはず。このんで人の財をかり、おひめ多けれどもうれへず。かへる物のあたひをつくのはず。それをこひもとむれば、いかりていよいよあたへず。日夜出遊びてわが家に居る事まれにしてわが家事をつとめず、家の破損を修理せず、器物の損失をしらず、内に居ては夜もふすべき時ふさずして、時を失なひ、朝はおそくおき、家業をつとめず、つねにおこたりて時をつひやす。財の出入をしるさず、くらの内の財の多少をしらず、家事を家僕にまかせてみづからはからず、酒をこのみてほしいまゝにし、放逸なる無賴の友にまじはり、遊宴を事とし、器物をこのみ、さまざまの物すきして、からのやまとの無用の物を多くかひあつむ。色をこのみてやまず。もろもろのすきこのむ事多し。無益の藝をこのみ、淫樂をこのみ、衣服のかざりをこのみ、美味をこのみ、[illegible]をこのみ、營作をこのみ、無用の器をこのむ。かくのごとくこのみ多きは、すなはち是わざはひをこのむ

なり。かくのごとくなる人は、必人のいさめをきらひて聞入ず。是皆困窮の基なり。

人家の富む事も又必故あり。其品多し。只天の福にもよらず、其主人の行によれり。先家をゝさむるに、よろづの事はしいまゝならず、口腹耳目の欲をすごさず、私慾をこらへ、後日のうれへをおもんばかり、倹約にみだりにつひやさず、分外のおごりをせず、家事をみづからつとめて、下人にまかせず、家財の多少有無をはかり、家業をつとめておこたりなく、朝ははやくおき、夜はおそくいね、おきふしに其時を失なはず。酒食をむさぼらず。買へるものゝあたひをはやくつくのひ。人の財をかる事をきらひ、わが財祿の分内にて、事足りて外に求めず。財を用る事、わが家祿の分限に應じて過ざる故に、財不足せずして人に求めず。もし故ありて財不足し、やむ事を得ずして人の財をからば、必期にかけて早くかへし、初の約をちがへず、衣食家居器物の美をこのまず、物ずきをこのまず、家に合はざるとてかる〳〵しく改め作らず、造作をこのまず、無用の器物をこのまず、無益の藝能をこのまず、およそこのむ事すくなし。このむ事すくなきは、則是わざはひをこのまざるなり。かくのごとくなる人は、必人のいさめをよくきゝ用てふせがず。

家をよく保つとよく保たざるとは、夫の德不德のみにあらず。又妻の行の善惡によれり。古人家貧して良妻を思ふといひけんもむべなり。夫は外ををさめ、妻は内ををさむるが職分なり。夫よく勤儉なれども、妻もし放逸におこたりてつとめず、驕りて儉約ならざれば、家をたもちがたし。殊に貧賤なる家は、ひとへに妻のちからによつて、盛えおとろふ。夫はつねに内に居ずして、妻のしわざをしらず、只妻にまかせ置ぬ。しかるに妻不德なれば、財をうしなひて必家をやぶる。故に上士以下

婦人の家をほろぼすは、多くは妻のとがなり。いましむべし。妻の徳はつゝしみておごらず、夫としうとにうけしたがひて、わがまゝならず。もはら家事に心を用ひて身をへりくだり、女工をよくつとめて、おこたらざる、是婦人の徳なり。かくのごとくにして、よく家をたもつべし。夫となれる者は妻におぼれず、必禮に從ひて家を治めしむべし。

儉約を行て家を治ん事、最早くおもんばかりて行なふべし。行きつまりては及んでせんかたなし。たとへばわかき時より中年まで奢りをきはめ、口腹好色の慾をほしいまゝにして、晩年にいたりて、にはかに養生をつゝしまんとするが如し。つゝしまざるにまされども、おとろへてのちは益すくなきがごとし。

財を用るに人々身上に相應の分量あり。是を節と云。節とはよきほどなり。節に過れば奢となり、節に及ばざれば吝嗇となる。節を守るは中にかなふ道なり。

つひえをはぶき、おごりをおさへて、家財の分限に應じて用ゆべし。分限の外にこえて用ゆべからず。おごりつひえをおさへて、私慾をこらふるにはつとめて力を用ざればなしかたし。心よはくしては、欲にひかれて行はれず。又世俗のそしりをおそれては儉約は行なひがたし。ちからを用ひて行なひとぐべし。欲にひかれ、そしりをおそるゝは力量なし。欲にかつには剛を以す。おそれざるは勇者のわざなり。

儉約にして財をつひやさゞるは尤良法なり。然共儉約を行ふに事よりて、財ををしみて義理をかき、仁愛をほどこさゞるは鄙吝と云べし。儉約にあらず、是吝嗇なり。不仁なり。義理をつとめて、財を用ゆべく、めぐむべき時ならば、財ををしまずしていさぎよかるべし。又貧窮をすくふにおいては、財ををしむべからず。わが身には儉約にして

人に施すには、財ををしまざるは、是善なり。わが身にはおごりをなやして、禮義をかき、人にはどこしめぐまざるは不德なり。財ををしみては善を行ひがたしと、古人いへり。むべなるかな。又無益の事に財をつひやして、をしまざる人あり。愚なりと云べし。無益の事に財を用るは淵にすつるに同じ。是善を行ない人を救ふ道をしらず。其志なき故也。むげの事なり。およそ一とせの衣食の費は多からず。やどりは茅屋一間におきふしてたりぬ。しもべはわが勞にかはる人の外はなくても事かけず。うつはものは只飮食の器、日用の調度のみ助となる。其外の器皆用なし。人の身をやしなふには、此あまたの物にすぎず。是をそなふるは、さほどつひえおほからず。然れば財祿ある人、儉約をだに行はゞ自俸するに餘あるべし。不足して人に乞かるに及ぶべからず。然るに財用を多くつひやし過し、人にこひかり、みづから困窮にいたり、一生身をくるしめ人を苦しめ、子孫まで困窮せしむるは、かなしむべし。是用財の良法をしらざればなり。

わが身の私慾をすくなくすれば、身をやしなひ、自樂しむに多くの財をつひやさずして、ことたりぬべし。大富貴の人といへど、人にかはりて大にのみくふ事ならず、多くきぬをかさねきせず、大なる屋宅にをらずして身を安くす。しかれば身の養は分外をねがはずとも事たりぬべし。

古の賢王は時々民に土貢をゆるし、人のともしきをすくひ、人に多くほどこし王ひしだに、其藏に財穀みち〳〵て、後は穀くさり、錢繩くさりしとかや。今の卑賤の士、小祿の家も儉約にして財をよく用る人は、財餘ありて、不足の憂なくして、人に乞かるず。然れば人の貧窮すると富饒なるとは、財を用るに法あるとなきによれり。財の用ひやうよければ、貧もとむにいたる。用やうあしければ、

とめるも貧しくなる。財を用るに心を用ゆべし。倹約を行ない、おごりつゐえをせず。華美をこのまずして、餘財をたくはへ置く。或凶年にあひ、もしは長病死亡の變、又婚嫁のつゐえ、水火盗賊のわざはひ、臨時用をかねて備へ、すべて不慮の時の變、又は人の貧苦窮餓をすくふに備ふべし。餘財なければ不虞の變に應ずる事かたく、人の困窮をすくひがたし。

借の一字は家を敗るの基也。此一字をかたく禁ずべし。財祿の多少大身小身に随つて、其分限の内にて、不足なきやうに財を用ゆべし。ともしきをこらへず、人に借るべからず。分限の外に用ひ過ごば、必財たらずして人に借る。財を借れば年々に利息を出し、其利息に又利加はり、後につもりては其おひめおほがたくなり、必家産をやぶる。借りて利息を人にあたふれば、後はわが財は我が用にはたゝず、昔人にうばゝれ、人の物となる。をしむべし。故に家をたもつの道は分限の外に財をつひやさずして、分内にて事足るをよしとす。いかに貧困にして自由ならずとも、力量を用ひこらへて分外の事をなすべからず。如此さば人にもとめずしてたりぬべし。故に財ををさめて家をたもつの道は、借事を禁ずべし。少かれば多くかるにいたる。多くかれば家をたもちがたし。借る事しばしばにいたれば、後は必家を破る。然ども故ありて財ともしき時、やむ事を得ずして人の財をかり用ゐば、なるべきほどは我身と妻子の俸養を薄くして、饑寒をこらへ、財をたくはへあつめて、借れる物をはやくつくのふべし。かれる物いまだつくのはずんば、高の俸養を甚かろくして、饑寒をこらへ、身をくるしめて、財をあつめ、返さんと約せし期をたがへず。約にそむくべからず。さきのり買ふ物のあたひをはやくつくのふべし。人に損失をなさしむべからず。是信義の道を失はざ

あのみならず、家をたもつ良法なり。かくのごとく艱難をこらゆる事堅固ならざれば、必貧窮をまぬがれずして、家を保ちがたし。

わが家をたもつ道に、富貴の人もみづから心を用ひ、微細の事もよくはかりしりて、つゞまやかに行なふべし。むかしの人は大名高家も、家事をみづからつとめ、微細の事にもよく心を用ひて、おろそかならざりし故、貧困にいたらざるのみならず、餘財多かりし也。今の人大家にあらざれども、わが家事をむづかしとて、財用をみづからはからず、入る事も出す事も、多少をしらず。只家のやつこにまかせて、みづからしらざれば、家の計おろそかにして、分外の費多く、且やつこにかすめとらるゝ事多し。如此なれば家産たらずして、終に貧困にいたる。小身の人にもかやうの家事にをろそかなるもの多し。一生貧窮にくるしむといへども、わが家計にうとく、をろそかなる故なる事をしらず、只世の成行あしきと、我不幸とのみ思へるはあやまり也。わが身困窮にくるしむのみならず、人の妨となり、はては子孫の累となるかなしむべし。

貧窮の時、艱苦を堪忍する事つとめて守るべし。世の人多くは家をたもつに法なく、儉約の道をしらずして、貧窮を堪忍する事なく、後日のわざはひをはからず、當時の欲にまかせて、分に過て財を多く用ゆるゆゑに財たらず。古の人わが身を儉約にし、萬不自由をこらへ、財をみだりにつひやさず、人の財をかる事きらひて、ふかき恥辱とす。故に財をかる人まれ也。もしやむ事を得ずして、人にかれば、はぢていはず。かくしてあらはさず。今の人は人の財をかる事をこのみ、人にかる事をはぢず、かへつて借る事多きを以、めいぼくとす。財をかりてみだりに用る人を無欲なり、心いさぎよきとてほむ。又儉約にしてみだりにつひやさず、

人の財をからざる人をば、かへりて吝嗇なりとてそしる。世こぞりてかくのごとき風俗となれり。習ひて風をなせり。一人のとがにはあらず。されど人々わがとがぞと思ひて、身にかへり見て、道を行なふべし。是儉約と吝嗇との善悪をわきまへざる事、雪と墨とを見分ざるが如し。愚なりと云べし。

わが身に俸ずる事はうすくして、人にほどこし、禮義を行なふ事をあつくする。是用財の良法なり。今の人はわが身に俸ずるにはおごり、人にほどこし、禮義を行なふにはうすくす。是用財の道をうしなへり。

わが財祿の分限をわすれ、後の困窮を考へずして、常時の嗜慾にまかせ、分に過て財を用ふれば、必財たらず。財不足するによりて、廉恥の心なく、つとむべき禮義を行なひがたく、父母のやしなひうすくなり、人の貧窮をすくふ事かたく、人の困苦をめぐまず、あたふべき物をあたへず、本然をつとむべきちからなく、軍用にともし。是家をたもち、財を用る道を知らざればなり。然れば貴賤ともに、家ををさむるには、必財の用やうをしるべし。是人世の尤切要なる急務也。

家道訓卷之五終

家道訓卷之六

貝原篤信編

用財

親戚朋友に對し、財をやり取する時、わが財を損せざるやうに、我利運のごとくせんとすれば、快からざる事あり。とるにもやるにも、わが財を少損失するをいとはざれば、何事なく、我も人もたがひに心よし。我得分にする道理ながら、其理非を論じ、少の財のためにあらそひて、人をとがめて人の心をうしなふ事多し。人に財をかして、其おひめをとるも、全くわが損失なからんとすれば、事ゆかずして行はれがたし。少わが財をすつれば、無事にしていたづかはしからず。是わづかのつひえ、家のため少も害なし。

人と交るに遠慮ふかくして、人の財を費さしむべからず。人のつひえをいとはずして、おのれにつひえなからんとし、人のつひえを以、わが身の樂しするはいやしむべし。およそかやうの事は、わが心術の害となれり。かへり見ていましむべし。萬の事うるはしくとも、財をやりとるに廉直ならず、むさぼりあれば、むげに人におもひくださるゝものなり。

親戚故舊朋友のまどしき者、わが財物をからば、わがちからにしたがひて財を與ふべし。借すべからず。與ふれば我仁愛の道行はれて、わが心に快し、彼もわが恩に感ず。およそかるものは貧しく、財なき故にかる。かりて返さば、いよ／＼まどしくなる故に、きはめて廉直の人にあらざれば、かへす事まれなり。初かさゞるうらみは少にして、かりて後かへさゞるを、こなたより乞時、かれるもののうらみいかりは甚ふかし。したしき人には、ことさら財をかすべからず。成べきほどはあたふべし。財をかすは、わざはひをもとむる也。後にはたがひに

うらみ出き、中うとくなる事多し。いやしき俗のうたに、しる人に物はしかすなたゞやりね、かさぬうらみはこふほどはなし、といへり。貧窮なるものは、かれる財を償事ならず、後にかへさんとおもへども、其時過ぬれば、忘やすくしてつぐのはん事を思はず。いやしき歌に、うき事もうれしき事も過ぬれば、其時ほどはおもはざりけり、とよめるが如し。わが身の難儀なる時、人のめぐみをうけて、後までわすれざる人はまれなり。然るに其かれる財のおひめをつぐのはざる時、此方よりこひ求れば、財をかりたる者うらみいきどほりて、中絶るにいたる。或うらみふかくて、あだがたきとなるにいたるもあり。こなたよりせめこはざれども、かりて返さゞるものゝ方にひが事あるゆゑ、親戚といへども必われにそむきて、うとくなる。いはんや朋友他人はさら也。是財をつひやして、かたきを求むるなり。かねてよくおもんばかるべし。

親戚朋友に、やむ事を得ずして物をかさば、初よりわたふると心得てかすべし。かれる時はよろこべとも、時過ぬればめぐみをわすれて返さず、其時かねてあたへたると心得ぬれば、うらみなし。かせる物を必得んと思ひて、せめはたれどもかへさざれば、いかりて中絶るは世に多きならひ也。かねて其心得ありて、かしたる物を必得んとおもふべからず。かせるものを必得んと思ふは、人情をしらざる也。かりて返さゞるは、世俗のならひなりと心得べし。いかるべからず。

衆人は儉約の善なる事をしらず、儉約なれば吝嗇なりとて、そしりわらふは世俗のならひ也。愚なる人は、世俗のそしりを誠と心得て雷同す。世俗のそしり信ずべからず。世俗のそしりをおそれて儉約を行なはざるは、力量なし。されども儉約の道をしらで、心鄙細にして、財を惜む事過れば、心せはしく、わたふべき物をあたへず、用ふべき財

を用ずして、仁愛をうしなひ、禮義にそむくゆゑ、人の和を失なひて、人おもひつかず、何事を行ふにも、はかゆかず。

凡財を用るには心を用ひて、よき程の節にかなひて、過不及のあやまりなかるべし。用ふべき時は用ひ、あたふべき時はあたふべし。をしむべからず。君子の儉約を行なふは、用ふべき時用ひんがため也。費をゝしむ事過て、中をうしなひ、心せはしくして、わが樂み、人の和をうしなふべからず。

儉約は人の美德なり。いにしへより、いみじき聖賢明王、皆儉約を行なひ給へり。よき人の儉約ならざるはなし。俗人は皆儉約をきらひて、鄙吝なりとす。儉約はわが身に俸養する事をうすくして、おごらざるを云。是善德なり。吝嗇とはをしむとも、やぶさかともよむ。財を惜みて、あたふべき人にあたへず、用ふべき事にも用ざるを云。是は悪事なり。此わかちをしるべし。愚人と下部は儉約を吝嗇とおもへり。

君子はみだりに財をつひやさゞる故、餘財ありて人をすくひめぐみ、財を用ふべき事にはをしまず、小人はおごりてみだりに財をつひやせども、人をすくひめぐむ事には、財をゝしみてほどこさず。故におごりて、みだりに財をつひやす者は、必財ををしみて人をすくひめぐまず。

農商の家、父のゆづりをうけて、田地と財寶とを得て、よくたもちて、失なはずして、子孫にゆづるも孝也。家業をよくつとめておこたらず、儉約にしてみだりに財をつひやさゞれば、永く父のゆづりをたもちて、子孫に傳ふ。孝と云べし。是を良民と云。もしおこたりてつとめず、財をつひやしうしなへば、田をうり財を失ひ、家をやぶりて困窮にいたる者多し。不孝の甚しき也。是を頑民と云。

管子が曰、人惰リテ而侈レバ則貧、力メテ而儉ナレバ則富。およ

せ人家の貧きは、惰てり侈るによれり。富るは勤めて倹なるによれり。此理をよく心得べし。故に家をたもつには、勤倹の二を行ふべし。是要道なり。

家をたもち財を用るに、人の生付によりて、此道を得たると得ざるとあり。心あらくして精細ならざる人は、此道につたなし。かゝる人みづからかへりみて、わが得ざる處をあらため正すべし。生れ付にまかせ置て行なへば、必困窮にいたる。

大に富る人も、財を用る道をしらざれば、後は必貧窮に苦しみ、[illegible]の[illegible]財を用るに道あれば、貧苦なし。貧き人は國天下をだによくたもつ。況小なる家をたもつ事成がたきはつたなし。然れば家をもてる人は、財を治めて家をよくたもつ計をむねとして心にかくべし。今の人多くは、家をたもつ計をしらず。貧困にいたりぬれば、世のならはしと、わが不幸をことわめて、わが過をかへりみず。世をとがめて、わが身をゆるす人は、此道は行がたし。家の困窮するは、ひとへにわがとがぞと心得て、みづからかへりみ、身ををさむべし。

財[illegible]は、かぎりあり。私欲はかぎりなし。かぎりある財をもちて、かぎりなき欲にまかせては、必財つきて困窮す。富める人も貧しき人も、倹約にて物ごとに嗜慾をこらへ、酒食衣服家居など、よろづの用、わが身上よりかろく、うすくすると見ゆるが、理にかなひてよきほどなるべし。殊に貧家はかくのごとくにして、やう〳〵わが得る處の財祿を用ひつくして、あまりなく不足なし。不足なければ小祿の家も、人にかり求むるに及ばず。然るに高の身の[illegible]、分限に過て心にまかせぬれば、富家といへども後は財不足し、みづからくるしむのみならず、人の妨となり、一生の苦しみ子孫の不幸となる。貧家は人にほどこし、貧窮をすくふほどこそなくとも、せめて人の妨とならざるべし。

貧窮にして、そのうれひたへがたしといへども、よく貧をこらへて習ひ、熟すればくるしみなし。凡の事なるゝと、なれざるによりて、苦しみ樂しみあり。堯の時九年の洪水あり。湯王の時七年の旱ありて、野に青草なかりしかども民うゑず。道に乞人なかりしは、かねて蓄あればなり。士庶人のいやしき家、たくはへなくんばあるべからず。人家には不意の變あり。財のたくはへなければ、俄に變にあひては、すべきやうなし。かねてよりはやく、變に備るはかりごとをなすべし。

後の事遠慮なき人は、當時身のやしなひにおごり、酒食をゆたかにし、家居をよくし、衣服をかざり、欲をほしいまゝにして、費をしまず。財つきぬれば、人にかる事をうれへず。財をかす人だにあれば、幸にしておほくかる事をこのむ。是眼前を快くして、後の禍をかへりみず。然るに只今さへわが財なくして、人に借り求るほどなるに、借れる財に年々利息くはゝりゆけば、いよ〳〵財つきて、かれる物をつぐのふべきちからなくて、必家をやぶる。初に早く後の事をおもんばかり、後の憂なき計をなすべし。

はじめ貧く、後富る人、はじめのまどしき時をわすれずして、おごらざれば、ながく其富をたもちて失はず。はじめいやしく、後貴くなりたる人、はじめのいやしき時をわすれずしておごらざれば、ながくその貴をたもちて失はず。

わが父、人の財をかりてかへさず、又買たる物の價をかへざる、是父のひが事也。その子たる者、わがかへすべきちからだにあらば、年久しくへだゝりぬとも、そのかし主と、うれる主をたづね求めて、わが財を以、父のかれるおひめと、買へる物のあたひを滯なくつぐのひ返すべし。是を父の過を補ふと云。孝の道也。父の時人の財をかへさず、あたひをかへざるは、わが心に快からず。又かし主うり

主ゟ財を失なへるうらみふかし。然るに是をかへさば、おやの過を補なひ、わが心を快くし、かし主うり主のうらみなくする、此三の益あり。必わが身の費をはぶき、つひえをやめて、父のおひめをつぐのひかへすべし。かくのごとく孝を行なひ、道を直くしてわけはゐある人は、その徳は眞目に見えざれども、必後に天のむくいありて、ひそかにめぐみたすけ給ふ理あり。君子は其むくいを心にかけて、善を行はざれども、そのじねんのしるしは必ある理なり。にはかに目に見えざるとて、此道理なるをうたがふべからず。

財を用るに、心を用ると用ひざるとによりて、財の費の多少甚ことなり。よく心を用ひて無用の費をはぶき、つゝしみて約なるべし。おろそかにして多く用ふべからず。たとへば養生の道は、物ごとにすくなくするをよしとす。酒食をすくなくし、色慾をすくなくし、言と慾をすくなくするの類也。財を用るも又如此なるべし。物ごとに多く用過すべからず。然れども費ををしむ事、あまり緊密にすぐれば、わが心を苦しめ、人に害あり。緊密なる内にゆるやかなるがよし。人をつかふも又かくの如し。日々少のいとまなきやうにつかへば、人くるしみて其所を得がたし。少いとまあるやうに人をつかふべし。

おごりてほしいまゝなる人は、三年に用ふる財を一年につひやしつくす。たとへば無養生なる人、慾をほしいまゝにすれば、百年の元氣を一年にへらして身を失なふが如し。

山谷が詩曰、深念二頃一、富里忍二窮禁一、貧賤一。此詩の意は、人の財をかり、人の物をおきのりかひて、返さざれば、わが郷里人のわづらひとなるをふかく思案して、身の艱難をこらへて、人の財をからず。人の物をおきのらずといへる意也。家を治むるの道、かくの如くすべし。財をかしたる者、物をうり

し者のうれひ、うらみをおもひはかるべし。むかしの人は家まどしけれど、艱難をこらへて、わがもてる家財を以、家をすぐして、人の財をからず。故に今時の如く人ごとにまどしきうれひなし。或小祿の人も財のたくはへありて、不慮の時の變にそなへしなり。今の人はおごりつひやして、必家財不足す。時の風俗にならひて、當時の慾をほしいまゝにして、後のうれひをおもんぱからざる也。

人心はかりがたし。士といへど忠信なき人にて、いふ事うけがふ事信じがたし。いはんや庶人はならはしあしくして信義なし。わが心のごとく信あらんと思ひて、ゆだんして人をゆるさば、おほくは約ちがひて人に欺むかれ、後悔する事あり。殊に財をあづけさづくる事、はじめにつまびらかにして、おろそかにすべからず。小人は必人をあざむき、財をうばふ事をこのむ。其はかり事におつべからず。萬の事はじめにつゝしまざれば、かならずのちに悔あり。

貧家に男子多くは、かねて早く産業を立る計をなすべし。貧家に女子生れば、早く心つかひして、嫁する時の裝具をとゝのふるはかり事をなすべし。女子生れし時、杉を萬株うゑて、其長する時、ひさきて嫁する助とせしためしも有。桐を多くうゑて、女子の裝を助くる者今もあり。後の事をかねて早く計りて、にはかにつまづかざる謀をなすべし。家まどしくて、かねて用意なければ、女子の嫁する時にのぞんで、にはかに其つひえの財を求得る事かたし。

老人は早く棺をこしらへ、葬具をそなへ置くべし。富貴の家も其時に及んで、俄に調がたき物あり。ことに貧家は早くそなへざれば、時にのぞみ器物を沽却し、錢財をかり求めて用脚とすれども、俄に禮そなはらずして、事とゝのひがたし。かねて早く心にかけてそなふべし。

貧しき人は貨財を以禮とせず、老たる人は筋力を以禮とせざるが如し。もし貧賤ならざる人は、送物を以その誠をあらはす。是古人のなさざる處、禮の道なり。父母兄弟親戚朋友、或恩をうけし人には贈り物を以、其誠をあらはし、其情を通ずべし。古人貧しきは束脩をおくり、富めるは玉帛をおくる。吝なる人は財をおしみて禮なし。おくるべき人におくらず。是吝嗇なるは、不仁にして、誠なきによれり。いかんとなれば、わが子には多く財をついやせどもをしまず。是愛ふかければなり。しかれば財ををしみて、贈答の禮なきは不仁よりおこる。いはんや、おくる物にはさほど財のつひえなし。人におくり物するは、心を用ゆべき事也。すべてあしき物を送るは、送らざるにおとりてはづかし。魚のあざれ、肉のやぶれ、餅、饌、醢、醯などのつくりなせる物、味變じ色あしく臭あしき、又菓などいまだ熟せざる物の、時ならずして人に害ある物、皆人に送るべからず。送り物によりて、人の心のうすきあつきあらはる。下部にまかせては、うしろめたし。みづからえらふべし。

家人をつかふに、只ことばの情ばかりにて賞祿を與へざれば、家人の心服せず。財祿をあたふれば、悦んでよくつとむ。一時に多くあたへんよりは、少づゝ時々あたふればおこたらず。多くあたへて久しくあたへざれば、めぐみをわすれておこたる。ことばの情のみにて物を與へざれば、婦人の仁とて、實事なければ、人まことをつくさず。功をなしがたし。軍をするにも、言の情ばかりにて祿を與へざれば、士卒の戰功なし。然れども財祿を與ふるにも法あり。みだりに功なきに與ふれば、千金を與へても人よろこばず。又一言の情も千金にまさる事あり。

儉約にして、わが身におごりなきをば術と云。人これをよろこぶ。もし人に對して財ををしみて、人

にほどこさず、人にうすくして、禮にあたらざるをば、人皆いやしみそしる。是不德なり。吝嗇と云。儉約をあしく心得て、吝嗇とする者あり。儉約に事よせて、吝嗇なるもあり。皆不德なり。

東坡がいへる疏食の三養あり。疏食とは味の淡薄なる物を食するを云。一には分を安すんじて以て、福をやしなふ。是はおごらざる也。二には胃をゆるくして、以て氣をやしなふ。是は肥濃なる美味を多くくらへば、胃の氣をやぶる故なり。三には費を省きて、以て財を養ふ。是淡薄なる物は、財の費なき也。是又家をたもつに益ある法なり。

ひろき家に居ては、むかしの穴にすみ、野にをりし時と、今のまどしき人の、はにふのこやのいぶせきをおもひやりて樂しむべし。穀肉を食しては、むかしの人の、木の葉草の根を食とせしと、今の饑になやめる人をあはれむべし。きぬをきて、あたゝかにしては、むかしの木の葉をつゞりてきたると、今の衣なくして、こゞゆる者をあはれむべし。わがめしつかふ奴婢あらば、貧き人の水くみ、みづからかしぐ苦をおもふべし。かくの如くならば、樂み多くして、上をねがふ外の求なかるべし。

凡家をたもつ道は儉約を行ふにあり。儉約とはおごりと費なき也。驕とは何ぞや、わが分外を行なふを云。費とは何ぞや、無用の財を用るを云。又家をたもつには、豫するを先とすべし。かねてするとは後の事を早くおもんぱかりて、用心するをいふ。かねての計なくしては、行あたりて、いかんともすべからず。遠き慮なければ、必ちかき憂あり。聖人の言たがふべからず。

家道訓卷之六　大尾

右家道訓六卷者、益軒貝原先生之所著也。先生今年八十有三歳。而孜々讀書、諄々授徒。可謂老而益壯者矣。予以販書出入先生之門有年。仍乞此書再四。遂壽梓以公于世焉。豈啻家道之訓哉。自家術家。庶幾於國家治教之方亦未必無小補云

正德二壬辰年孟陬穀日

書舖柳枝軒茨城信清謹書

養生訓

益軒西筑古名臣。捐館方過一百春。原識門生傳學久。且聞藩主采蘋新。立言本貴修成德。居業網羅裨益人。著作雖多最堪仰。養生遺訓濟斯民。

筑前益軒貝原先生今茲一百年忌。尾張侯命重臣展其墓。一藩榮之。日者友人月形君蹀寄書爲言之。因賦一律聊寓欽仰之意。

文化癸酉秋日　　頼惟完拜

養生訓卷之一

貝原篤信編錄

總論上

人の身は父母を本とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生れ、又養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの、父母の殘せる身なれば、つゝしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年を長くたもつべし。是天地父母につかへ奉る孝の本也。身を失ひては、仕ふべきやうなし。わが身の內、少なる皮はだへ、髪の毛だにも、父母にうけたれば、みだりにそこなひやぶるは不孝なり。況大なる身命を、わが私の物として愼まず、飮食色慾を恣にし、元氣をそこなひ病を求め、生付たる天年を短くして、早く身命を失ふ事、天地父母へ不孝のいたり、愚なる哉。人となりて此世に生きては、ひとへに天地父母に孝をつくし、人

倫の道を行ひ、義理にしたがひて、なるべき程は壽福をうけ、久しく世にながらへて、喜び樂みをなさん事、誠に人の各願ふ處ならずや。如此ならむ事をねがはゞ、先古の道をかうがへ、養生の術をまなんで、よくわが身をたもつべし。是人生第一の大事なり。人身は至りて貴くおもくして、天下四海にもかへがたき物にあらずや。然るにこれを養なふ術をしらず、慾を恣にして、身を亡ぼし命をうしなふ事、愚なる至り也。身命と私慾との輕重をよくおもんぱかりて、日々に一日を愼しみ、私欲の危をおそるゝ事、深き淵にのぞむが如く、薄き氷をふむが如くならば、命ながくして、つひに殃なかるべし。豈樂まざるべけんや。命みじかければ、天下四海の富を得ても益なし。財の山を前につんでも用なし。然れば道にしたがひ身をたもちて、長命なるほど大なる福なし。故に壽きは、尙書に、五福の第一とす。是萬福の根本なり。

萬の事つとめてやまざれば、必しるしあり。たとへば、春たねをまきて夏よく養へば、必秋に至りて、なりはひ多きが如し。もし養生の術を力めまなんで、久しく行はゞ、身つよく病なくして、天年をたもち、長生を得て、久しく樂まん事、必然のしるしあるべし。此理うたがふべからず。

園に草木をうゑて愛する人は、朝夕心にかけて、水をそゝぎ土をかひ、肥をし、蟲を去て、よく養ひ、其さかえを悅び、衰へをうれふ。草木は至りて輕し。わが身は至りて重し。豈我身を愛する事草木にもしかざるべきや。思はざる事甚し。夫養生の術をしりて行ふ事、天地父母につかへて孝をなし、次にはわが身長生安樂のためなれば、不急なるつとめは先さし置て、わかき時より、はやく此術をまなぶべし。身を愼み生を養ふは、是人間第一のおもくすべき事の至也。

養生の術は、先わが身をそこなふ物を去べし。身を

そこなふ物は、内慾と外邪となり。内慾とは飲食の慾、好色の慾、睡の慾、言語をほしいまゝにするの慾と、喜怒憂思悲恐驚の七情の慾を云。外邪とは天の四氣なり。風寒暑濕を云。内慾をこらへて、すくなくし、外邪をおそれてふせぐ、是を以元氣をそこなはず、病なくして天年を永くたもつべし。

凡養生の道は、内慾をこらふるを以本とす。本をつとむれば、元氣つよくして外邪おかさず。内慾をつつしまずして、元氣よはければ、外邪にやぶれやすくして、大病となりて命をたもたず。内慾をこらふるに、其大なる條目は、飲食をよき程にして過さず。脾胃をやぶり病を發する物をくらはず。色慾をつゝしみて精氣ををしみ、時ならずして臥さず。久しく睡る事をいましめ、久しく安坐せず、時々身をうごかして、氣をめぐらすべし。ことに食後には、必數百步行すべし。もし久しく安坐し、又食後に穩坐し、ひるいね、食氣いまだ消化せざるに、早くふしねぶれば、滯りて病を生じ、久しきをつめば、元氣發生せずして、よわくなる。常に元氣をへらす事ををしみて、言語をすくなくし、七情をよきほどにし、七情の内にて取わき、いかり、かなしみ、うれひ思ひをすくなくすべし。欲をおさへ、心を平にし、氣を和にしてあらくせず、しづかにしてさわがしからず、心はつねに和樂なるべし。憂ひ苦むべからず。皆内慾をこらへて元氣を養ふ道也。又風寒暑濕の外邪をふせぎてやぶられず、此内外の數の愼は、養生の大なる條目なり。是をよく愼しみ守るべし。

凡の人、生れ付たる天年はおほくは長し。天年をみじかく生れ付たる人はまれなり。生れ付て元氣さかんにして、身つよき人も、養生の術をしらず、朝夕元氣をそこなひ、日夜精力をへらせば、生れ付たる其年をたもたずして、早世する人世に多し。又天性は甚虛弱にして多病なれど、多病なる故に、つ

つしみおそれて保養すれば、かへつて長生する人是又世にあり。此二つは、世間眼前に多く見る所なれば、うたがふべからず。慾を恣にして身をうしなふは、たとへば刀を以て自害するに同じ。早きとおそきとのかはりはあれど、身を害する事は同じ。

人の命は我にあり、天にあらずと老子いへり。人の命は、もとより天にうけて生れ付たれども、養生よくすれば長し、養生せざれば短かし。然れば長命ならんも、短命ならんも、我心のまゝなり。身つよく長命に生れ付たる人も、養生の術なければ早世す。虚弱にて短命なるべきと見ゆる人も、保養よくすれば命長し。是皆人のしわざなれば、天にあらずといへり。もしすぐれて天年みじかく生れ付たる事、顔子などの如くなる人にあらずんば、わづかに養のちからによりて、長生する理也。たとへば、火をうづみて爐中に養へば久しくきえず。風吹く所にあらはしおけば、たちまちきゆ。蜜橘をあらはにおけば、としの内をもたず、もしふかくかくしよく養なへば、夏までたもつがごとし。

人の元氣は、もと是天地の萬物を生ずる氣なり。是人身の根本なり。人此氣にあらざれば生ぜず。生じて後は、飲食、衣服、居處の外物の助によりて、元氣養はれて命をたもつ。飲食、衣服、居處の類も、亦天地の生ずる所なり。生るゝも養はるゝも、皆天地父母の恩なり。外物を用て、元氣の養とする所の飲食などを、かろく用ひて過さゞれば、生付たる内の元氣を養ひて、いのちながくして天年をたもつ。もし外物の養をおもくし過せば、内の元氣、外の養にまけて病となる。病おもくして元氣つくれば死す。たとへば草木に水と肥との養を過せば、かじけて枯るゝがごとし。故に人たゞその内の樂を求めて、飲食などの外の養をかろくすべし。外の養おもければ、内の元氣損す。

養生の術は先心氣を養ふべし。心を和にし、氣を平らかにし、いかりと慾とをおさへ、うれひ思ひをすくなくし、心をくるしめず、氣をそこなはず、是心氣を養ふ要道なり。又臥す事をこのむべからず。久しく睡り臥せば、氣滯りてめぐらず。飲食いまだ消化せざるに、早く臥しねぶれば、食氣ふさがりて甚元氣をそこなふ。いましむべし。酒は微醉にのみ、半酣をかぎりとすべし。食は半飽に食ひて、十分にみつべからず。酒食ともに限を定めて、節にこゆべからず。又わかき時より色慾をつゝしみ、精氣を惜むべし。精氣を多くつひやせば、下部の氣よわくなり、元氣の根本たえて必命短かし。もし飲食色慾の愼みなくば、日々補藥を服し、朝夕食補をなすとも、益なかるべし。又風寒暑濕の外邪をおそれふせぎ、起居動靜を節にし、つゝしみ、食後には歩行して身を動かし、時々導引して腰腹をなですり、手足をうごかし、勞動して血氣をめぐらし、飲食を消化せしむべし。一所に久しく安坐すべからず。是皆養生の要なり。養生の道は、病なき時つゝしむにあり。病發りて後藥を用ひ、針灸を以病をせむるは養生の末なり。本をつとむべし。

人の耳目口體の見る事、きく事、飲食ふ事、好色をこのむ事、各其このめる慾あり、これを嗜慾と云。嗜慾とは、このめる慾なり。慾はむさぼる也。飲食色慾などをこらへずして、むさぼりてほしいまゝにすれば、節に過て、身をそこなひ禮義にそむく。萬の惡は、皆慾を恣にするよりおこる。耳目口體の慾を忍んで、ほしいまゝにせざるは、慾にかつの道なり。もろ／＼の善は、皆慾をこらへて、ほしいまゝにせざるよりおこる。故に忍ぶと、恣にするとは、善と惡とのおこる本なり。養生の人は、こゝにおいて、專心を用ひて、恣なる事をおさへて慾をこらふるを要とすべし。恣の一字をさりて、忍

の一字を守るべし。

風寒暑濕は外邪なり。是にあたりて病となり死ぬるは天命也。聖賢といへど免れがたし。されども、内氣實してよくつゝしみ防がば、外邪のおかす事も亦まれなるべし。飲食色慾によりて病生ずるは、全くわが身より出る過也。是天命にあらず、わが身のとがなり。萬の事、天より出るは、ちからに及ばず。わが身に出る事は、ちからを用てなしやすし。風寒暑濕の外邪をふせがざるは怠なり。飲食好色の内慾を忍ばざるは過なり。怠と過とは、皆慎しまざるよりおこる。

身をたもち生を養ふに、一字の至れる要訣あり。是を行へば生命を長くたもちて病なし。おやに孝あり、君に忠あり、家をたもち、身をたもつ、行なふとしてよろしからざる事なし。其一字なんぞや。畏の字是なり。畏るゝとは身を守る心法なり。事ごとに心を小にして氣にまかせず、過なからん事を求め、つねに天道をおそれてつゝしみしたがひ、人慾を畏れてつゝしみ忍ぶにあり。是畏るゝは、慎しみにおもむく初なり。畏るれば、つゝしみ生ず。畏れざれば、つゝしみなし。故に朱子晩年に、敬の字をときて曰、敬は畏の字これに近し。

養生の害二あり。元氣をへらす一なり。元氣を滯らしむる二也。飲食、色慾、勞動を過せば、元氣やぶれてへる。飲食、安逸、睡眠を過せば、滯りてふさがる。耗(へる)と滯ると、皆元氣をそこなふ。

心は身の主也、しづかにして安からしむべし。身は心のやつこなり、うごかして勞せしむべし。心やすくしづかなれば、天君ゆたかに、くるしみなくして樂しむ。身うごきて勞すれば飲食滯らず、血氣めぐりて病なし。

凡薬と鍼灸を用るは、やむ事を得ざる下策なり。飲食、色慾を慎しみ、起臥を時にして、養生をよくすれば病なし。腹中の痞滿して食氣つかふる人も、

朝夕歩行し身を勞動して、久坐久臥を禁せば、藥と針灸とを用ひずして、痞塞のうれひなかるべし。是上策とす。藥は皆氣の偏なり。參芪朮甘の上藥といへども、其病に應ぜざれば害あり。況中下の藥は、元氣を損じ他病を生ず。鍼は瀉ありて補なし。病に應ぜざれば元氣をへらす。灸もその病に應ぜざるに妄に灸すれば、元氣をへらし氣を上す。藥と針灸と、損益ある事かくのごとし。やむ事を得ざるに非ずんば、鍼灸藥を用ふべからず。只保生の術を頼むべし。

古の君子は、禮樂をこのんで行なひ、射御を學び、力を勞動し、詠歌舞蹈して血脈を養ひ、嗜慾を節にし心氣を定め、外邪を愼しみ防て、かくのごとくつねに行なへば、鍼灸藥を用ずして病なし。是君子の行ふ處、本をつとむるの法上策なり。病多きは皆養生の術なきよりおこる。病おこりて藥を服し、いたき鍼、あつき灸をして、父母よりうけし遺體にきずつけ、火をつけて熱痛をこらへて身をせめ病を療すは、甚末の事、下策なり。たとへば國ををさむるに、德を以すれば民おのづから服して亂おこらず、攻め打事を用ひず。又保養を用ひずして、只藥と針灸を用ひて病をせむるは、たとへば國を治むるに德を用ひず、下を治むる道なく、臣民うらみそむきて、亂をおこすをしづめんとて、兵を用ひてたゝかふが如し。百たび戰つて百たびかつとも、たふとぶにたらず。養生をよくせずして、藥と針灸とを頼んで病を治するも、又かくの如し。

身體は日々少づゝ勞動すべし。久しく安坐すべからず。毎日飯後に、必ず庭圃の内數百足しづかに歩行すべし。雨中には室屋の内を、幾度も徐行すべし。如レ此日々朝晩運動すれば、針灸を用ひずして、飲食氣血の滯なくして病なし。針灸をして熱痛甚しき身の苦しみをこらへんより、かくの如くせば痛

なくして安楽なるべし。

人の身は百年を以期とす。上壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十なり。六十以上は長生なり。世上の人を見るに、下壽をたもつ人すくなく、五十以下短命なる人多し。人生七十古来まれなり、といへるは虚語にあらず。長命なる人すくなし。五十なれば不夭と云て、わか死にあらず。人の命なんぞ如此みじかきや。是皆養生の術なければなり。短命なるは生れ付て短きにはあらず。十人に九人は皆みづからそこなへるなり。こゝを以、人皆養生の術なくんばあるべからず。

人生五十にいたらざれば、血氣いまだ定らず。知恵いまだ開けず、古今にうとくして、世變になれず。云あやまり多く、行悔多し。人生の理も楽もいまだしらず、五十にいたらずして死するを夭と云。是又不幸短命と云べし。長生すれば、楽多く益多し。日々にいまだ知らざる事をしり、月々にいまだ能せざる事をよくす。この故に學問の長進する事も、知識の明達なる事も、長生せざれば得がたし。こゝを以養生の術を行なひ、いかにもして年をたもち、五十歳をこえ、成べきほどは彌長生して、六十以上の壽域に登るべし。古人長生の術ある事をいへり。又人の命は我にあり。天にあらずともいへれば、此術に志だにふかくば、長生を保つ事、人力を以いかにもなし得べき理あり。うたがふべからず。只氣あらくして、慾をほしいまゝにして、こらへず、慎なき人は、長生を得べからず。

およそ人の身は、しかくもろくして、あだなる事風前の燈火のきえやすきが如し。あやふきかな。つねにつゝしみて身をたもつべし。いはんや、内外より身をせむる敵多きをや。先飲食の欲、好色の欲、睡臥の欲、或怒、悲、憂を以身をせむ。是等は皆我身の内よりおこりて、身をせむる欲なれば、内敵なり。中について飲食好色は、内欲より外敵を

引入る。尤おそるべし。風寒暑濕は、身の外より入て我を攻る物なれば外敵なり。人の身は金石に非ず。やぶれやすし。況內外に大敵をうくる事、かくの如にして、內の愼、外の防なくしては、多くの敵にかちがたし。至りてあやふきかな。此故に人々長命をたもちがたし。用心きびしくして、つねに內外の敵をふせぐ計策なくむばあるべからず。敵にかたざれば、必せめ亡されて身を失ふ。內外の敵にかちて、身をたもつも、其術をしりて能ふせぐによれり。生れ付たる氣つよけれど、術をしらざれば身を守りがたし。たとへば武將の勇あれども、知なくして兵の道をしらざれば、敵にかちがたきがごとし。內敵にかつには、心つよくして、忍の字を用ふべし。忍はこらふる也。飲食好色などの欲は、心つよくこらへて、ほしいまゝにすべからず。心よわくしては內欲にかちがたし。內欲にかつ事は、猛將の敵をとりひしぐが如くすべし。是內敵にかつ兵法なり。外敵にかつには、畏の字を用て早くふせぐべし。たとへば城中にこもり、四面に敵をうけて、油だんなく敵をふせぎ、城をかたく保が如くなるべし。風寒暑濕にあはゞ、おそれて早くふせぎしりぞくべし。忍の字を禁じて、外邪をこらへて久しくあたるべからず。古語に風を防ぐ事、箭を防ぐが如くす、といへり。四氣の風寒、尤おそるべし。久しく風寒にあたるべからず。凡是外敵をふせぐ兵法なり。內敵にかつには、けなげにして、つよくかつべし。外敵をふせぐは、おそれて早くしりぞくべし。けなげなるはあしゝ。

生を養ふ道は、元氣を保つを本とす。元氣をたもつ道二あり。まづ元氣を害する物を去り、又元氣を養ふべし。元氣を害する物は內慾と外邪となり。すでに元氣を害するものをさらば、飲食動靜に心を用て、元氣を養ふべし。たとへば田をつくるが

如し。まづ苗を害する莠を去て後、苗に水をそゝぎ、肥をして養ふ。養生も亦かくの如し。まづ害を去て後、よく養ふべし。たとへば悪を去て善を行ふがごとくなるべし。氣をそこなふ事なくして、養ふ事を多くす。是養生の要なり。つとめ行なふべし。

およそ人の樂しむべき事三あり。一には身に道を行ひ、ひが事なくして善を樂しむにあり。二には身に病なくして、快く樂むにあり。三には命ながくして、久しくたのしむにあり。富貴にしても此三の樂なければ、眞の樂なし。故に富貴は此三樂の内にあらず。もし心に善を樂まず、又養生の道をしらずして、身に病多く、其はては短命なる人は、此三樂を得ず。人となりて此三樂を得る計なくんばあるべからず。此三樂なくんば、いかなる大富貴をきはむとも、益なかるべし。

天地のよはひは、邵堯夫の說に、十二萬九千六百年を一元とし、今の世はすでに其半に過たりとなん。前に六萬年あり。後に六萬年あり。人は萬物の靈なり。天地とならび立て、三才と稱すれども、人の命は百年にもみたず。天地の命長きにくらぶるに、千分の一にもたらず。天長く地久きを思ひ、人の命のみじかきをおもへば、ひとり愴然としてなんだ下れり。かゝるみじかき命を持ながら、養生の道を行はずして、みじかき天年を猶みじかくするはなんぞや。人の命は至りて重し。道にそむきて短くすべからず。

養生の術は、つとむべき事をよくつとめて、身をうごかし、氣をめぐらすをよしとす。つとむべき事をつとめずして、臥す事をこのみ、身をやすめ、おこたりて動かざるは、甚養生に害あり。久しく安坐し、身をうごかさゞれば、元氣めぐらず、食氣とゞこほりて、病おこる。ことにふす事をこのみ、ねぶり多きをいむ。食後には必數百步步行

して、氣をめぐらし、食を消すべし。ねぶりふすべからず。父母につかへて力をつくし、君につかへてまめやかにつとめ、朝は早くおき、夕はおそくいね、四民ともに我が家事をよくつとめておこたらず。士となれる人は、いとけなき時より書をよみ、手を習ひ、禮樂をまなび、弓を射、馬にのり、武藝をならひて身をうごかすべし。農工商は、各其家のことわざをおこたらずして、朝夕よくつとむべし。婦女はことに内に居て、氣鬱滯しやすく、病生じやすければ、わざをつとめて、身を勞動すべし。富貴の女も、おや、しうと、夫によくつかへてやしなひ、おりぬひ、うみつむぎ、食品をよく調るを以、職分として、子をよくそだて、つねに安坐すべからず。かけまくもかたじけなき天照皇大神も、みづから神の御服をおらせたまひ、その御妹稚日女尊も、齋機殿にまし〳〵て、神の御服をおらせ給ふ事、日本紀に見えたれば、今の婦女も皆かゝる女のわざをつとむべき事にこそ侍べれ。四民ともに家業をよくつとむるは、皆是養生の道なり。つとむべき事をつとめず、久しく安坐し、ねぶり臥す事をこのむ、是大に養生に害あり。かくの如くなれば、病おほくして短命なり。戒むべし。

人の身のわざ多し。その事をつとむるみちを術と云。萬のわざつとめならふべき術あり。その術をしらざれば、その事をなしがたし。その内いたりて小にて、いやしき藝能も皆その術をまなばず、そのわざをならはざれば、その事をなし得がたし。たとへば蓑をつくり、笠をはるは至りてやすく、いやしき小なるわざ也といへども、その術をならはざれば、つくりがたし。況んや、人の身は天地とならんで三才とす。かく貴とき身を養ひ、いのちをたもつて長生するは、至りて大事なり。その術なくんばあるべからず。その術をまなばず、その事をならはずしては、などかなし得んや。然るにい

やしき小藝には必師をもとめ、をしへをうけて、その術をならふ。いかんとなれば、その器用あれども其術をまなばずしては、なしがたければなり。人の身はいたりて貴とく、是をやしなひてたもつは、至りて大なる術なるを、師なく、敎なく、學ばず、習はず、これを養ふ術をしらで、わが心の慾にまかせば、豈その道を得て生れ付たる天年をよくたもたんや。故に生を養ない、命をたもたんと思はゞ、その術を習はずんばあるべからず。夫養生の術は、そくばくの大道にして、小藝にあらず。心にかけて、其術をつとめまなばずんば、その道を得べからず。その術をしれる人ありて習得ば、千金にも替がたし。天地父母よりうけたる、いたりておもき身をもちて、これをたもつ道をしらで、みだりに身をもちて大病をうけ、身を失ない、世をみじかくする事、いたりて愚なるかな。天地父母に對し大不孝と云べし。其上病なく命ながくしてこそ、人となれる樂おほかるべけれ。病多く命みじかくしては、大富貴をきはめても用なし。貧賤にして命ながきにおとれり。わが鄕里の年若き人を見るに、養生の術をしらで、放蕩にして短命なる人多し。又わが里の老人を多く見るに、養生の道なくして多病にくるしみ、元氣おとろへて、はやく老耄す。如此にては、たとひ百年のよはひをたもつとも、樂なくして苦み多し。長生も益なし。生るばかりを思ひてぞ、壽ともいひがたし。

或人の曰、養生の術、隱居せし老人又年わかくしても世をのがれて、安閑無事なる人は宜しかるべし。士として君につかへて忠孝をつとめ、武藝をならひて身をはたらかし、農工商の夜晝家業をつとめていとまなく、身閑ならざる者は養生成がたかるべし。かゝる人もし養生の術をもつぱら行はゞ、その身やはらかに、そのわざゆるやかにして、事の用にたつべからずと云。是養生の術をしらざる人

の養ひ、むべなるかな。養生の術は、安閑無事なるを專とせず。心を靜にし、身をうごかすをよしとす。身を安閑にするは、かへつて元氣とゞこほりふさがりて病を生ず。たとへば流水はくさらず、戸樞はくちざるが如し。是うごく者は長久なり、うごかざる物はかへつて命みじかし。是を以、四民ともに事をよくつとむべし。安逸なるべからず。是すなはち養生の術なり。

或人うたがひて曰、養生をこのむ人は、ひとへに我身をおもんじて、命をたもつを專にす。されども君子は義をおもしとす。故に義にあたりては、身をすて命をおしまず、危を見ては命をさづけ、難にのぞんでは節に死す。もしわが身をひとへにおもんじて、少なる疾病まで、そこなひやぶらざらんとせば、大節にのぞんで命をおしみ、義をうしなふべしと云。答て曰、およその事、常あり、變あり。常に居ては常を行なひ、變にのぞみては變を行なふ。その時にあたりて義にしたがふべし。無事の時、身をおもんじて命をたもつは、常に居るの道なり。大節にのぞんで、命をすてゝかへり見ざるは、變に居るの義なり。常に居るの道と、變に居るの義と、同じからざる事をわきまへば、此うたがひなかるべし。君子の道は時宜にかなひ、事變に隨ふをよしとす。たとへば夏はかたびらを着、冬はかさねぎするが如し。一時をつねとして、一偏にかゝはるべからず。誠に常の時身を養ひて、堅固にたもたずんば、大節にのぞんでつよく、戰ひをはげみて命をすつる事、身よわくしては成がたかるべし。故に常の時よく氣を養なはゞ、變にのぞんで勇あるべし。

いにしへの人。三慾を忍ぶ事をいへり。三慾とは、飲食の欲、色の欲、睡の欲なり。飲食を節にし、色慾をつゝしみ、睡をすくなくするは、皆慾をこらふるなり。飲食、色慾をつゝしむ事は人しれり。只睡の慾をこらへて、いぬる事をすくなくするが

養生の道なる事は人しらず、ねぶりをすくなくすれば、無病になるは、元氣めぐりやすきが故也。ねぶり多ければ、元氣めぐらずして病となる。夜ふけて臥しねぶるはよし。晝いねるは尤害あり。宵にはやくいぬれば、食氣とゞこほりて害あり。ことに朝夕飮食のいまだ消化せず、その氣いまだめぐらざるに、早くいぬれば、飮食とゞこほりて、元氣をそこなふ。古人睡慾を以、飮食、色慾にならべて三慾とする事、むべなるかな。おこたりて、ねぶりを好めば、くせになりて、睡多くして、こらへがたし。ねぶりこらへがたき事も、又飮食色慾と同じ。初はつよくこらへざれば、ふせぎがたし。つとめてねぶりをすくなくし、ならひてなれぬれば、おのづからねぶりすくなし。ならひて睡をすくなくすべし。

言語をつゝしみて、無用の言をはぶき、言をすくなくすべし。多く言語すれば、必氣へりて又氣のぼる。甚元氣をそこなふ。言語をつゝしむも、亦德をやしなひ、身をやしなふ道なり。

古語曰、莫大之禍は起二于須臾不一レ忍。須臾とはしばしの間を云。大なる禍は、暫しの間慾をこらへざるよりおこる。酒食色慾など、しばしの間少の慾をこらへずして大病となり、一生の災となる。一盃の酒、半椀の食をこらへずして、病となる事あり。欲をほしいまゝにする事少なれども、やぶらるゝ事は大なり。たとへば螢火程の火、家につきても、さかんに盛て、大なる禍となるがごとし。古語曰、犯時微若二秋毫一、成病重二泰山一。此言むべなるかな。凡小の事大なる災となる事多し。小なる過より大なるわざはひとなるは、病のならひ也。愼しまざるべけんや。常に右の二語を、心にかけてわするべからず。

養生の道なければ、生れ付つよく、わかく、さかんなる人も、天年をたもたずして早世する人多し。

是天のなせる禍にあらず、みづからなせる禍也。天年とは云がたし。つよき人は、つよきをたのみてつゝしまざる故に、よわき人よりかへつて早く死す。又體氣よわく、飮食すくなく、常に病多くして、短命ならんと思ふ人、かへつて長生する人多し。是よわきをおそれて、つゝしむによれり。この故に命の長短は身の強弱によらず、愼と不レ愼とによれり。白樂天が語に、福と禍とは、愼と愼しまざるにあり。といへるが如し。

世に富貴財祿をむさぼりて、人にへつらひ、佛神にいのり求むる人多し。されども、其しるしなし。無病長生を求めて、養生をつゝしみ、身をたもたんとする人はまれなり。富貴財祿は外にあり。求めても天命なければ得がたし。無病長生は我にあり、もとむれば得やすし。得がたき事を求めて、得やすき事を求めざるはなんぞや。愚なるかな。たとひ財祿を求め得ても、多病にして短命なれば、用なし。

陰陽の氣天にあつて、流行して滯らざれば、四時よく行はれ、百物よく生る。偏にして滯れば、流行の道ふさがり、冬あたゝかに夏さむく、大風大雨の變ありて、凶害をなせり。人身にあつても亦しかり。氣血よく流行して滯らざれば、氣つよくして病なし。氣血流行せざれば、病となる。その氣上に滯れば、頭疼眩暈となり、中に滯れば亦腹痛となり、痞滿となり、下に滯れば腰痛脚氣となり、淋疝痔漏となる。此故によく生を養ふ人は、つとめて元氣の滯なからしむ。

養生に志あらん人は、心につねに主あるべし。主あれば、思慮して是非をわきまへ、忿をおさへ、慾をふさぎて、あやまりすくなし。心に主なければ、思慮なくして忿と慾をこらへず、ほしいまゝにして、あやまり多し。

萬の事一事心に快き事は、必後に殃となる。酒食

をほしいまゝにすれば快けれど、やがて病となるの類なり。はじめにこらゆれば必後のよろこびとなる。灸治をしてあつきをこらゆれば、後に病なきが如し。杜牧が詩に忍過事堪喜といへるは、欲をこらへすまして、後はよろこびとなる也。

聖人は未病を治すとは、病いまだおこらざる時、かねてつゝしめば病なく、もし飲食色慾などの内慾をこらへず、風寒暑湿の外邪をふせがざれば、其おかす事はすこしなれども、後に病をなす事は大にして久し。内慾と外邪をつゝしまざるによりて、大病となりて、思ひの外にふかきうれひにしづみ、久しく苦しむは病のならひなり。病をうくれば、病苦のみならず、いたき針にて身をさし、あつき灸にて身をやき、苦き薬にて身をせめ、くひたき物をくはず、のみたきものをのまずして、身をくるしめ、心をいたましむ。病なき時かねて養生よくすれば病おこらずして、目に見えぬ大なるさいはいとなる。孫子が曰、よく兵を用る者は赫々の功なし。云意は兵を用る上手はあらはれたるてがらなし、いかんとなれば、兵のおこらぬさきに戦はずして勝ばなり。又曰、古之善勝者勝於易勝者也。養生の道も心かくの如くすべし。心の内わづかに一念の上に力を用て、病のいまだおこらざる時、かちやすき慾にかてば病おこらず。良将の戦はずして勝やすきにかつが如し。是上策なり。是未病を治するの道なり。

養生の道は、恣なるを戒とし、慎を専とす。恣なるとは慾にまけてつゝしまざる也。慎は是恣なるのうら也。つゝしみは畏を以て本とす。畏るゝとは大事にするを云。俗のことわざに、用心は臆病にせよと云がごとし。孫真人も、養生は畏るゝを以本とすといへり。是養生の要也。養生の道においては、けなげなる事はわろし、おそれつゝしむ事、つねにちいさき一はしをわたるが如くなるべし。是

畏るなり。わかき時は血氣さかんにして、つよきにまかせて病をおそれず、慾をほしいまゝにする故に、病おこりやすし。すべて病は慾なくてむなしくはおこらず、必慎まざるよりおこる。殊に老年は身よわし、尤おそるべし。おそれざれば老若ともに多病にして、天年をたもちがたし。

人の身をたもつには、養生の道をたのむべし。針灸と藥力とをたのむべからず。人の身には口腹耳目の欲ありて、身をせむるもの多し。古人のをしへに、養生のいたれる法あり。孟子にいはゆる寡レ慾これなり。宋の王昭素も、身を養ふ事は慾を寡するにしくはなしと云。省心錄にも、多レ慾則傷レ生といへり。およそ人のやまひは、皆わが身の慾をほしいまゝにして、つゝしまざるよりおこる。養生の士はつねにこれを戒とすべし。

氣は一身體の內にあまねく行わたるべし。むねの中一所にあつむべからず。いかり、かなしみ、うれひ、思ひあれば、胸中一所に氣とゞこほりてあつまる。七情の過て滯るは病の生る基なり。

俗人は慾をほしいまゝにして、禮義にそむき、氣を養はずして、天年をたもたず。理氣二つながら失へり。仙術の士は養氣に偏にして、道理を好まず。故に禮義をすてゝつとめず。陋儒は理に偏して氣を養はず。修養の道をしらずして天年をたもたず。此二つはともに君子の行ふ道にあらず。

養生訓卷之一終

養生訓卷之二

總論下

凡朝は早くおきて、手と面を洗ひ、髮をゆひ、事をつとめ、食後にはまづ腹を多くなで下し、食氣をめぐらすべし。又京門のあたりを手の食指のかたはらにて、すぢかひにしば〳〵なづべし。腰をもなで下して、後下にてしづかにうつべし。あらくすべからず。もし食氣滯らば、面を仰ぎて三四度食毒の氣を吐くべし。朝夕の食後に久しく安坐すべからず。必ねぶり臥すべからず。久しく坐し、ねぶり臥せば、氣ふさがりて病となり、久しきをつめば命みじかし。食後に每度步行する事三百步すべし。をり〳〵五六町步行するは尤よし。

家に居て、時々わが體力の辛苦せざる程の勞動をなすべし。吾起居のいたつがはしきをいとふべからず。室中の事奴婢をつかはずして、しば〳〵みづから立ちて我身を運用すべし。わが身を動用すれば、おもひのまゝにして速に事調ひ、下部をつかふに心を勞せず。是清心省事の益あり。かくのごとくにして、常に身勞動すれば氣血めぐり、食氣とゞこほらず、是養生の要術也。身をつねにやすめおこたるべからず。我に相應せる事をつとめて、手足をはたらかすべし。時にうごき、時に靜なれば、氣めぐりて滯らず。靜に過ればふさがる。動に過ればつかる。動にも靜にも久しかるべからず。

華佗が言に、人の身は勞動すべし、勞動すれば穀氣きえて、血脈流通すといへり。およそ人の身、慾をすくなくし、時々身をうごかし、手足をはたらかし、步行して久しく一所に安坐せざれば、血氣めぐりて滯らず。養生の要務なり。日々かくのごとくすべし。呂氏春秋曰、流水不腐、戶樞不蠹、動也。形氣亦然。いふこゝろは、流水はくさらず、たまり水はくさる。かい戶のぢくの下のくるゝは虫

くちず。此二のものはつねにうごくゆゑ、わざはひなし、人の身も亦かくのごとし。一所に久しく安坐してうごかざれば、飲食とゞこほり、氣血めぐらずして病を生ず。食後にふすと、晝臥すと、尤禁ずべし。夜ふかく飲食の消化せざる內に早くふせば、氣をふさぎ病を生ず。是養生の道において尤いむべし。

千金方曰、養生の道、久行久坐久臥久視ことなかれ。酒食の氣いまだ消化せざる內に臥してねぶれば、必酒食とゞこほり、氣ふさがりて病となる。いましむべし。晝は必臥すべからず。大に元氣をそこなふ。もし大につかれたらば、うしろによりかゝりてねぶるべし。もし臥さばかたはらに人をおきて、少ねぶるべし。久しくねぶらば人によびさまさしむべし。

日長き時も晝臥すべからず。日永き故夜に入て、人により、もし體力つかれて早くねぶることをうれへば、晚食の後身を導動し、歩行し、日入の時より臥して體氣をやすめてよし。臥しても必ねぶるべからず。ねぶれば甚害あり。久しく臥べからず。秉燭の比おきて坐すべし。かくのごとくすれば夜間體に力ありて、ねぶり早く生ぜず。もし日入の時よりふさゞるは尤よし。

養生の道はたのむを戒しむ。わが身のつよきをたのみ、わかきをたのみ、病の少いゆるをたのむ。是皆わざはひの本也。刄のときをたのんで、かたき物をきれば、刄折る。氣のつよきをたのんで、みだりに氣をつかへば、氣へる。脾腎のつよきをたのんで、飲食色慾を過さば、病となる。

奚に人ありて、寶玉を以てつぶてとし、雀をうたば、愚なりとて、人必わらはん。至りて、おもき物をすてゝ、至りてかろき物を得んとすればなり。人の身は至りておもし。然るに至りてかろき小なる欲をむさぼりて身をそこなふは、輕重をしらずといふ

べし。寶玉を以て雀をうつがごとし。

心は樂しむべし、苦しむべからず。身は勞すべし、やすめ過すべからず。凡わが身を愛し過すべからず。美味をくひ過し、芳醴をのみ過し、色をこのみ、身を安逸にして、おこたり臥す事を好む。皆是わが身を愛し過す故に、かへつてわが身の害となる。又無病の人、補藥を妄に多くのんで病となるも、身を愛し過すなり。子を愛し過して子のわざはひとなるが如し。

一時の慾をこらへずして病を生じ、百年の身をあやまる。愚なるかな。長命をたもちて久しく安樂ならん事を願はゞ、慾をほしいまゝにすべからず。慾をこらゆるは長命の基也。慾をほしいまゝにするは短命の基也。恣なると忍ぶとは、是壽と夭とのわかるゝ所也。

易に曰、思患豫防之。いふ意は後の患をおもひ、かねてわざはひをふせぐべし。論語にも、人遠き慮なければ、必近きうれひありとの玉へり。是皆初に愼んで、終をたもつの意なり。

人慾をほしいまゝにして樂しむは、其樂しみいまだつきざる内に、はやくうれひ生ず。酒食色慾をほしいまゝにして樂しむ内に、はやくたゝりをなして苦しみ生ずるの類也。

人毎日晝夜の間、元氣を養ふ事と元氣をそこなふ事との、二の多少を比べ見るべし。衆人は一日の内、氣を養ふ事は常にすくなく、氣をそこなふ事は常に多し。養生の道は元氣を養ふ事のみにて、元氣をそこなふ事なかるべし。もし養ふ事はすくなく、そこなふ事多く、日々つもりて久しければ、元氣へりて病生じ、死にいたる。この故に衆人は病多くして短命なり。かぎりある元氣をもちて、かぎりなき慾をほしいまゝにするは、あやふし。

古語曰、日愼一日。壽終無殃。言は一日々々をあらためて、朝より夕まで毎日つゝしめば、身にあやまち

なく、身をそこなひやぶる事なくして、壽（いのちながく）して、天年をはるまでわざはひなしと也。是身をたもつ要道なり。

飲食色慾をほしいまゝにして、其はじめ少の間わが心に快き事は、後に必身をそこなひ、ながきわざはひとなる。後にわざはひなからん事を求めば、初わが心に快からん事をこのむべからず、萬の事はじめ快くすれば、必後の禍となる。はじめつとめてこらゆれば、必後の樂となる。

養生の道、多くいふ事を用ひず。只飲食をすくなくし、病をたすくる物をくらはず、色慾をつゝしみ、精氣ををしみ、怒哀憂思を過さず。心を平にして氣を和らげ、言をすくなくして無用の事をはぶき、風寒暑濕の外邪をふせぎ、又時々身をうごかし、歩行し、時ならずしてねぶり臥す事なく、食氣をめぐらすべし。是養生の要なり。

飲食は身を養ひ、ねぶり臥すは氣を養なふ。しかれども飲食節に過れば、脾胃をそこなふ。ねぶり臥する時ならざれば、元氣をそこなふ。此二は身を養はんとして、かへつて身をそこなふ。よく生を養ふ人は、つとにおき、よはにいねて、晝いねず、常にわざをつとめておこたらず、ねぶりふす事をすくなくして、神氣をいさぎよくし、飲食をすくなくして、腹中を清虛にす。かくのごとくなれば、元氣よくめぐりふさがらずして、病生ぜず。發生の氣其養を得て、血氣おのづからさかんにして病なし。是寢食（しんしょく）の二の節に當れるは、また養生の要也。

貧賤なる人も、道を樂しんで日をわたらば、大なる幸なり。しからば一日を過す間も、その時刻永くして樂多かるべし。いはんや一とせをすぐる間、四の時、おり〱の樂、日々にきはまりなきをや。如レ此にして年を多くかさねば、其樂長久にして、其しるしは壽（いのちなが）かるべし。知者の樂、仁者の壽（いのちながき）は、

わが罷及がたしといへども、藥より壽にいたれる次序は相似たるなるべし。

心を平らかにし、氣を和かにし、言をすくなくし、しづかにす。是徳を養ひ身をやしなふ。其道一なり。多言なると、心さはがしく氣あらきとは、徳をそこなひ、身をそこなふ。其害一なり。

山中の人は多くはいのちながし。古書にも山氣は壽多しと云、又寒氣は壽ともいへり。山中はさむくして、人身の元氣をとぢかためて、内にたもちてもらさず。故に命ながし。暖なる地は元氣もれて、内にたもつ事すくなくして、命みじかし。又山中の人は人のまじはりすくなく、しづかにして元氣をへらさず、萬ともしく不自由なる故、おのづから欲すくなし。殊に魚類まれにして肉にあかず。是山中の人、命ながき故なり。市中にありて人のまじはり多く、事しげければ氣へる。海邊の人魚肉をつねに多くくらふゆゑ、病おほくして命みじかし。市中にをり海邊に居ても、慾をすくなくし、肉食をすくなくせば害なかるべし。

ひとり家に居て、閑に日を送り、古書をよみ、古人の詩歌を吟じ、香をたき、古法帖を玩び、山水をのぞみ、月花をめで、草木を愛し、四時の好景を玩び、酒を微醉にのみ、園菜を煮るも、皆是心を樂ましめ、氣を養ふ助なり。貧賤の人も此樂つねに得やすし。もしよく此樂をしれらば、富貴にして樂をしらざる人にまさるべし。

古語に、忍は身の寶也といへり。忍べば殃なく、不忍殃あり。忍ぶはこらゆるなり。恣ならざるを云。忿と慾とはしのぶべし。およそ養生の道は忿慾をこらゆるにあり。忍の一字守るべし。武王銘に曰、忍之須臾全汝軀。書曰、必有忍其乃有濟。古語云、莫大之過起須臾不忍。是忍の一字は身を養ひ徳を養ふ道なり。

胃の氣とは元氣の別名なり。沖和の氣也。病甚しく

しても、胃の氣ある人は生く。胃の氣なきは死す。胃の氣の脈とは、長からず、短からず、遲ならず、數ならず、大ならず、小ならず、年に應ずる事中和にしてうるはし。此脈名づけて言がたし。ひとり、心に得べし。元氣衰へざる無病の人の脈かくの如し。是古人の說なり。養生の人、つねに此脈あらんことをねがふべし。養生なく氣へりたる人は、わかくしても此脈ともし。是病人なり。病脈のみ有て、胃の氣の脈なき人は死す。又目に精神ある人は壽し。精神なき人は夭し、病人をみるにも此術を用ゆべし、

養生の術、莊子が所謂庖丁が牛をときしが如くなるべし。牛の骨節のつがひは間あり。刀の刃はうすし。うすき刃をもつて、ひろき骨節の間に入れば、刃のはたらくに餘地ありてさはらず。こゝを以て十九年牛をときしに、刀新にとぎたてたるが如しとなん。人の世にをる、心ゆたけくして物とあらそはず、理に隨ひて行へば、世にさはりなくして天地ひろし。かくのごとくなる人は命長し。

人に對して、喜び樂しみ甚ければ、氣ひらけ過てへる。我ひとり居て、憂悲み多ければ、氣むすぼほれてふさがる。へるとふさがるとは、元氣の害なり。

心をしづかにしてさわがしくせず、ゆるやかにしてせまらず、氣を和にしてあらくせず、言をすくなくして聲を高くせず、高くわらはず、つねに心をよろこばしめて、みだりにいからず、悲をすくなくし、かへらざる事をくやまず、過あらば一たびはわが身をせめて二度悔ず、只天命をやすんじてうれへず、是心氣をやしなふ道なり。養生の士、かくのごとくなるべし。

津液は一身のうるほひ也。化して精血となる。草木に精液なければ枯る。大せつの物也。津液は臟腑より口中に出づ。をしみて吐べからず。ことに

遠くつばき吐べからず、氣へる。

津液をばのむべし。吐べからず。痰をば吐べし。のむべからず。痰あらば紙にて取べし、遠くはくべからず。水飲津液すでに滞りて、痰となりて内にありては、再び津液とはならず。痰内にあれば、氣をふさぎて、かへつて害あり。此理をしらざる人、痰を吐ずしてのむはひが事也。痰を吐く時、氣をもらすべからず。酒多くのめば痰を生じ、氣を上せ、津液をへらす。

何事もあまりよくせんとしていそげば、必あしくなる。病を治するも亦しかり。病あれば、醫をゑらばず、みだりに醫を求め、藥を服し、又鍼灸をみだりに用ひ、たゝりをなす事多し。導引、按摩も亦しかり。わが病に當否をしらで、妄に治を求むべからず。湯治も亦しかり。病に應ずると應ぜざるをゑらばず、みだりに湯治して病をまし、死にいたる。およそ藥治、鍼、灸、導引、按摩、湯治。此六の事、その病とその治との當否をよくゑらんで用ゆべし。其當否をしらで、みだりに用ゆれば、あやまりて禍をなす事多し。是よくせんとして、かへつてあしくする也。

凡よき事あしき事、皆ならひよりおこる。養生のつゝしみつとめも亦しかり。つとめ行ひておこたらざるも、慾をつゝしみこらゆる事も、つとめて習へば、後にはよき事になれて、つねとなり、くるしからず。又つゝしまずしてあしき事になれ、習ひくせとなりては、つゝしみつとめんとすれども、くるしみてこらへがたし。

萬の事、皆わがちからをはかるべし。ちからの及ばざるをしひて其わざをなせば、氣へりて病を生ず。分外をつとむべからず。

わかき時より、老にいたるまで、元氣を惜むべし。年わかく康健なる時よりはやく養ふべし。つよきを頼みて、元氣を用過すべからず。わかき時元氣

をしまずして、老て衰へ、身よはくなりて、初めて保養するは、たとへば財多く富める時、おごりて財をついやし、貧窮になりて財とぼしき故、初めて倹約を行ふが如し。行はざるにまされども、おそくして其しるしすくなし。

氣を養ふに嗇の字を用ゆべし。老子此意をいへり。嗇はをしむ也。元氣ををしみて費やさゞる也。たとへば吝嗇なる人の、財多く餘あれども、をしみて人にあたへざるが如くなるべし。氣ををしめば元氣へらずして長命なり。

養生の要は、自欺ことをいましめて、よく忍ぶにあり。自欺とはわが心にすでにあしきとしれる事を、きらはずしてするを云。あしきとしりてするは、悪をきらふ事眞實ならず、是自欺なり。欺くとは眞實ならざる也。食の一事を以ていはゞ、多くくらふがあしきとしれども、あしきをきらふ心實ならざれば、多くくらふ。是自欺也。其餘事も皆これを以しるべし。

世の人を多くみるに、生れ付て短命なる形相ある人はまれなり。長壽を生れ付たる人も、養生の術をしらで行はざれば、生れ付たる天年をたもたず。たとへば彭祖といへど、刀にてのどぶえをたゝば、などか死なざるべきや。今の人の欲をほしいまゝにして生をそこなふは、たとへばみづからのどぶえをたつが如し。のどぶえをたちて死ぬると、養生せず、欲をほしいまゝにして死ぬると、おそきと早きとのかはりはあれど、自害する事は同じ。氣つよく長命なるべき人も、氣を養はざれば必命みじかくして、天年をたもたず。是自害する也。

凡の事十分によからんことを求むれば、わが心のわづらひとなりて樂なし。禍も是よりおこる。又人の我に十分によからん事を求めて、人のたらざるをいかりとがむれば、心のわづらひとなる。又日用の飲食、衣服、器物、家居、草木の品々も、皆

またこのむべからず。いさゝかよければ事たりぬ。十分によからん事を好むべからず。是皆わが氣を養ふ工夫なり。

或人の曰、養生の道、飲食色慾をつゝしむの類、われ皆しれり。然れどもつゝしみがたく、ほしいまゝになりやすき故、養生なりがたしといふ。我おもふに、是いまだ養生の術をよくしらざるなり。よくしれらば、などか養生の道を行なはざるべき。水に入ればおぼれて死ぬ。火に入ればやけて死ぬ、砒霜をくらへば毒にあてられて死ぬる事をば、たれもよくしれる故、水火に入り、砒霜をくらひて死ぬる人なし。多慾のよく生をやぶる事、刀を以自害するに同じき理をしれらば、などか慾を忍ばざるべき。すべて其理を明らかにしらざる事は、まよひやすくあやまりやすし。人のあやまりてわざはひとなれる事は、皆不知よりおこる。赤子のはらばひて井におちて死ぬるが如し。灸をして身の病をさる事をしれる故、身に火をつけ、熱く、いたむるをこらへて多きをもいとはず。是灸のわが身に益ある事をよくしれる故なり。不仁にして人をそこなひくるしむれば、天のせめ人のとがめありて、必わが身のわざはひとなる事は、其理明らかなれども、愚者はしらず。あやうき事を行ひ、わざはひをもとむるは不知よりおこる。盜は只たからをむさぼりて、身のとがにおち入事をしらざるが如し。養生の術をよくしれらば、などか慾にしたがひてつゝしまずやは有るべき。

聖人やゝもすれば樂(たのしみ)をとき玉ふ。わが愚を以て聖心おしはかりがたしといへども、樂しみは是人のむまれ付たる天地の生理なり。樂しまずして天地の道理にそむくべからず。つねに道を以て欲を制して樂を失ふべからず。樂を失なはざるは養生の本也。

長生の術は食色の慾をすくなくし、心氣を和平にし、

中に臨んで常に畏愼あれば、物にやぶられず、血氣おのづから調ひて、自然に病なし。如斯なれば長生す。是長生の術也。此術を信じ用ひば、此術の貴とぶべき事、あたかも萬金を得たるよりも重かるべし。

萬の事十分に滿て、其上にくはへがたきはうれひの本なり。古人の曰、酒は微醉にのみ、花は半開に見る。此言むべなるかな。酒十分にのめばやぶらる。少のんで不足なるは、樂みて後のうれひなし。花十分に開けば、盛過て精神なく、やがてちりやすし。花のいまだひらかざるが盛なりと古人いへり。

一時の浮氣をほしいまゝにすれば、一生の持病となり、或即時に命あやうき事あり。莫大の禍はしばしの間こらへざるにおこる。おそるべし。

養生の爲には中を守るべし。中を守るとは過不及なきを云。食物はうゑを助くるまでにてやむべし。過てほしいまゝなるべからず。是中を守るなり。物ごとにかくの如くなるべし。

心をつねに從容としづかにせわしからず、和平なるべし。言語はことにしづかにしてすくなくし。無用の事いふべからず。是尤氣を養ふ良法也。

人の身は、氣を以生の源、命の主とす、故養生をよくする人は、常に元氣を惜みてへらさず。靜にしては元氣をたもち、動いては元氣をめぐらす。たもつとめぐらすと、二の者そなはらざれば、氣を養ひがたし。動靜其時を失はず、是氣を養ふの道なり。

もし大風雨と雷はなはだしくば、天の威をおそれて、夜といへどもかならずおき、衣服をあらためて坐すべし。臥すべからず。

客となつて晝より他席にあらば、薄暮より前に歸るべし。夜までかたれば主客ともに勞す。久しく滯座すべからず。

素問に怒れば氣上る、喜べば氣緩まる。悲めば氣消

ゆ。恐るれば氣めぐらず。寒ければ氣とづ。暑ければ氣泄る。驚けば氣亂る。勞すれば氣へる。思へば氣結るといへり。百病は皆氣より生ず。病とは氣やむ也。故に養生の道は氣を調るにあり。調ふるは氣を和らぎ、平にする也。凡氣を養ふの道は、氣をへらさゞると、ふさがざるにあり。氣を和らげ、平にすれば、此二のうれひなし。

臍下三寸を丹田と云。腎間の動氣こゝにあり。難經に、臍下腎間動氣者人之生命也。十二經の根本也といへり。是人身の命根のある所也。養氣の術つねに腰を正しくすゑ、眞氣を丹田におさめあつめ、呼吸をしづめてあらくせず、事にあたつては、胸中より微氣をしば〳〵口に吐き出して、胸中に氣をあつめずして丹田に氣をあつむべし。如此すれば氣のぼらず、むねさわがずして身に力あり。貴人に對して物をいふにも、大事の變にのぞみいそがはしき時も如此すべし。もしやむ事を得ずして、人と是非を論ずるとも、怒氣にやぶられず。浮氣ならずしてあやまりなし。武藝術をつとめ、武人の槍太刀をつかひ、敵と戰ふにも、皆此法を主とすべし。是事をつとめ、氣を養ふに益ある術なり。凡技術を行ふ者、殊に武人は此法をしらずんばあるべからず。又道士の氣を養ひ、比丘の坐禪するも、皆眞氣を臍下におさむる法なり。是主靜の工夫、術者の秘訣なり。

七情は喜怒哀樂愛惡慾也。醫家にては喜怒憂思悲恐驚と云。又六慾あり。耳目口鼻身意の慾也。七情の内、怒と慾との二、尤徳をやぶり、生をそこなふ。怒を懲し、慾を塞ぐは易の戒なり。怒は陽に屬す。火のもゆるが如し。人の心を亂し、元氣をそこなふは怒なり。おさへて忍ぶべし。慾は陰に屬す。水の深きが如し。人の心をおぼらし、元氣をへらすは慾也。思ひてふさぐべし。

養生の要訣一あり。要訣とはかんえうなる口傳也。

養生に志あらん人は、是をしりて守るべし。その要訣は少の一字なり。少とは萬の事皆すくなくして多くせざるを云。すべてつゞまやかにいはゞ、慾をすくなくするを云。慾とは耳目口體のむさぼりこのむを云。酒食をこのみ、好色をこのむの類也。およそ慾多きのつもりは、身をそこなひ命を失ふ。慾をすくなくすれば、身をやしなひ命をのぶ。慾をすくなくするに、その目錄十二あり。十二少と名づく。必是を守るべし。食を少くし、飲ものを少くし、五味の偏を少くし、色慾を少くし、言語を少くし、事を少くし、怒を少くし、憂を少くし、悲を少くし、思を少くし、臥事を少くすべし。かやうに事ごとに少すれば、元氣へらず、脾腎損せず。是壽をたもつの道なり。十二にかぎらず、何事も身のわざと欲とをすくなくすべし。一時に氣を多く用ひ過し、心を多く用ひ過さば、元氣へり、病となりて命みじかし。物ごとに數多くはゞ廣く用ゆべからず。數すくなくはゞせばきがよし。孫思邈が千金方にも、養生の十二少をいへり。其意同じ。目錄は是と同じからず。右にいへる十二少は、今の時宜にかなへるなり。

內慾をすくなくし、外邪をふせぎ、身を時々勞動し、ねぶりをすくなくす。此四は養生の大要なり。

氣を和平にし、あらくすべからず。しづかにしてみだりにうごかすべからず。ゆるやかにして急なるべからず。言語をすくなくして、氣をうごかすべからず。つねに氣を臍の下にをさめて、むねにのぼらしむべからず。是氣を養ふ法なり。

古人は詠歌舞踏して血脈を養ふ。詠歌はうたふ也。舞踏は手のまひ足のふむ也。皆心を和らげ、身をうごかし、氣をめぐらし、體をやしなふ。養生の道なり。今導引按摩して氣をめぐらすがごとし。

おもひをすくなくして神を養ひ、慾をすくなくして精を養ひ、飲食をすくなくして胃を養ひ、言をす

くなくして氣を養ふべし。是養生の四寡なり。

攝生の七養あり。是を守るべし。一には言をすくなくして内氣を養ふ。二には色慾を戒めて精氣を養ふ。三には滋味を薄くして血氣を養ふ。四には津液をのんで臓氣を養ふ。五には怒をおさへて肝氣を養ふ。六には飲食を節にして胃氣を養ふ。七には思慮をすくなくして心氣を養ふ。是壽親養老書に出たり。

孫眞人が曰、修養の五宜あり。髪は多くけづるに宜し。手は面にあるに宜し。歯はしばしばたゝくに宜し。津は常にのむに宜し。氣は常に練るに宜し。練るとは、さわがしからずしてしづかなる也。

久しく行き、久しく坐し、久しく立、久しく臥し、久しく語るべからず。是勞働ひさしければ氣へる。又安逸ひさしければ氣ふさがる。氣へるとふさがるとは、ともに身の害となる。

養生の四要は、暴怒をさり、思慮をすくなくし、言語をすくなくし、嗜慾をすくなくすべし。

病源集に唐椿が曰、四損は、遠くつばきすれば氣を損ず。多くねぶれば神を損ず。多く汗すれば血を損ず。疾行けば筋を損ず。

老人はつよく瘀を去薬を用べからず。瘀をことごとく去んとすれば、元氣へる。是古人の説也。

呼吸は人の鼻よりつねに出入る息也。呼は出る息也。内氣をはく也。吸は入る息なり。外氣をすふ也。

呼吸は人の生氣也。呼吸なければ死す。人の腹の氣は天地の氣と同くして、内外相通ず。人の天地の氣の中にあるは、魚の水中にあるが如し。魚の腹中の水も外の水と出入して、同じ。人の腹中にある氣も天地の氣と同じ。されども腹中の氣は臓腑にありて、ふるくけがる。天地の氣は新くして清し。時々鼻より外氣を多く吸入べし。吸入ところの氣、腹中に多くたまりたるとき、口中より少づつしづかに吐き出すべし。あらく早くはき出すべ

からず。是ふるくけがれたる氣をはき出して、新しき清き氣を吸入る也。新とふるきとかふる也。是を行ふ時、身を正しく仰ぎ、足をのべふし、目をふさぎ、手をにぎりかため、兩足の間去事五寸、兩ひぢと體との間も、相去事おの／＼五寸なるべし。一日一夜の間一兩度行ふべし。久してしるしを見るべし。氣を安和にして行ふべし。

千金方に、常に鼻より清氣を引入れ、口より濁氣を吐出す。入る事多く出す事すくなくす。出す時は口をほそくひらきて少吐べし。

常の呼吸のいきは、ゆるやかにして、深く丹田に入べし。急なるべからず。

調息の法、呼吸をとゝのへ、しづかにすれば息やうやく微也。彌久しければ、後は鼻中に全く氣息なきが如し。只臍の上より微息往來する事をおぼゆ。如レ此すれば神氣定まる。是氣を養ふ術なり。呼吸は一身の氣の出入する道路也。あらくすべからず。

養生の術、まづ心法をよくつゝしみ守らざれば、行はれがたし。心を靜にしてさわがしからず、いかりをおさへ慾をすくなくして、つねに樂んでうれへず。是養生の術にて、心を守る道なり。心法を守らざれば、養生の術行はれず。故に心を養ひ身を養ふの工夫二なし。一術なり。

夜書をよみ、人とかたるに三更をかぎりとすべし。一夜を五更にわかつに、三更は國俗の時皷の四半過九の間なるべし。深更までねぶらざれば、精神しづまらず。

外境いさぎよければ、中心も亦是にふれて清くなる。外より内を養ふ理あり。故に居室は常に塵埃をはらひ、前庭も家僕に命じて、日々いさぎよく掃はしむべし。みづからも時々几上の埃をはらひ、庭に下りて、箒をとりて塵をはらふべし。心をきよくし身をうごかす、皆養生の助なり。

天地の理、陽は一、陰は二也。水は多く火は少し。水

はかわきがたく、火は消えやすし。人は陽類にて少く、禽獸蟲魚は陰類にて多し。此故に陽はすくなく陰は多き事、自然の理なり。すくなきは貴とく多きはいやし。君子は陽類にて少く、小人は陰類にて多し。易道は陽を善として貴とび、陰を惡としていやしみ、君子を貴とび、小人をいやしむ。水は陰類なり。暑月はへるべくしてますゝ多く生ず。寒月はますべくしてかへつてへれてすくなし。春夏は陽氣盛なる故に水多く生ず。秋冬は陽氣衰ふる故水すくなし。血は多くへれども死なず。氣多くへれば忽死す。吐血金瘡產後など、陰血大に失する者は、血を補へば、陽氣いよいよつきて死す。氣を補へば、生命をたもちて血も自生ず。古人も血脫して氣を補ふは、古聖人の法なりといへり。人身は陽常にすくなくして貴とく、陰つねに多くしていやし。故に陽を貴とんでさかんにすべし。陰をいやしんで抑ふべし。元氣生々すれば眞陰も亦生ず。陽盛なれば陰自長ず。陽氣を補へば陰血自生ず。もし陰不足を補はんとて、地黃知母黃栢等、苦寒の藥を久しく服すれば、元陽をそこなひ、胃氣衰て、血を滋生せずして、陰血も亦消ぬ。又陽不足を補はんとて、烏附等の毒藥を用ふれば、邪火を助けて陽氣も亦亡ぶ。是は陽を補ふにはあらず。丹溪陽有餘陰不足論は何の經に本づけるや、其本據を見ず。もし丹溪一人の私言ならば、無稽の言信じがたし。易道の陽を貴とび、陰を賤しむの理にそむけり。もし陰陽の分數を以その多少をいはゞ、陰有餘陽不足とは云べし。陽有餘陰不足とは云がたし。後人其偏見にしたがひてくみするは何ぞや。凡識見なければ其才博める說に迷ひて、偏執に泥む。丹溪はまことに振古の名醫なり。醫道に功あり。彼補陰に專なるも、定めて其時の氣運に宜しかりしならん。然れども醫の聖にあらず、偏僻の論此外にも猶多し。打まかせて

悉くには信じがたし。一切過相半せり。其才學は貴ぶべし。その偏論は信ずべからず。王道は偏なく黨なくして平々なり。丹溪は補陰に偏にして平々ならず。醫の王道とすべからず。近世は人の元氣漸衰ろふ。丹溪が法にしたがひ、補陰に專ならば、脾胃をやぶり、元氣をそこなはん。只東垣が脾胃を調理する溫補の法、醫中の王道なるべし。明の醫の作れる軒岐救生論類經等の書に、丹溪を甚誹れり。その說頗理あり。然れども是亦一偏に僻して、丹溪が長ずる所をおはせて蔑にす。枉れるをためて直に過ぐと云べし。凡古來術者の言、往々偏僻多し。近世明季の醫、殊に此病あり。選んで取捨すべし。只李中梓が說は頗平正にちかし。

養生訓卷之二終

養生訓卷之三

飲食上　食の字しとよむは誤なり

人の身は元氣を天地にうけて生ずれ共、飲食の養なければ、元氣うゑて命をたもちがたし。元氣は生命の本也。飲食は生命の養也。此故に飲食の養は人生日用專一の補にて、半日もかきがたし。然れ共飲食は人の大欲にして、口腹の好む處也。そのこのめるにまかせ、ほしいまゝにすれば、節に過て必ず脾胃をやぶり、諸病を生じ、命を失ふ。五臟の初て生ずるは、腎を以本とす。生じて後は脾胃を以五臟の本とす。飲食すれば脾胃まづ是をうけて消化し、其精液を臟腑におくる。臟腑の脾胃の養をうくる事、草木の土氣によりて生長するが如し。是を以養生の道は、先脾胃を調るを要とす。脾胃を調るは、人身第一の保養也。古人も飲食を節にして、その身を養ふといへり。

人生日々に飲食せざる事なし。常につゝしみて欲をこらへざれば、過やすくして病を生ず。古人禍は口よりいで、病は口より入といへり。口の出しいれ常に慎むべし。

論語郷黨篇に記せし聖人の飲食の法、是養生の要なり。聖人の疾を慎み給ふ事かくの如し。法とすべし。

飯はよく熟して、中心まで和らかなるべし。こはくねばきをいむ。煖なるに宜し。羹は熱きに宜し。酒は夏月も温なるべし。冷飲は脾胃をやぶる。冬月も熱飲すべからず。氣を上せ・血液をへらす。

飯を炊ぐに法多し。たきぼしは壯實なる人に宜し。湯取飯は脾胃虚弱の人に宜し。粘りて糊の如くなるは滯塞す。硬きは消化しがたし。新穀の飯は性つよくして虚人はあしゝ。殊に早稲は氣を動かす。病人にいむ。晩稲は性かろくしてよし。

凡の食淡薄なる物を好むべし。肥濃油膩の物多く食ふべからず。生冷堅硬なる物を禁ずべし。あつ物只一によろし肉も一品なるべし。飣は一二品に止まるべし。肉を二かさぬべからず。又肉多くくらふべからず。生肉をつゞけて食ふべからず。滯りやすし。羹に肉あらば、飣には肉なきが宜し。

飲食は飢渇をやめんためなれば、飢渇だにやみなば其上にむさぼらず、ほしいまゝにすべからず。飲食の欲を恣にする人は義理をわする。是を口腹の人と云いやしむべし。食過たるとて藥を用ひて消化すれば、胃氣藥力のつよきにうたれて、生發の和氣をそこなふ。をしむべし。食飲する時思案し、こらへて節にすべし。心に好み口に快き物にあはゞ、先心に戒めて節に過ん事をおそれて、恣にすべからず。心のちからを用ひざれば、欲にかちがたし。欲にかつには剛を以すべし。病を畏るゝには怯なるべし。つたなきとは臆病するをいへり。

珍美の食に對すとも、八九分にてやむべし。十分に飽き満るは後の禍あり。少の間欲をこらふれば後の禍なし。少のみくひて味のよきをしれば、多くのみくひてあきみちたるに其樂同じく、且後の災なし。萬の事十分にいたれば、必わざはひとなる。飲食尤満意をいむべし。又初に慎めば必後の禍なし。

五味偏勝とは一味を多く食過すを云。甘き物多ければ、腹はりいたむ。辛き物過れば、氣上りて氣へり、瘡を生じ眼あしゝ。鹹き物多ければ血かわき、のんどかわき、湯水多くのめば濕を生じ、脾胃をやぶる。苦き物多ければ脾胃の生氣を損す。酸き物多ければ氣ちゞまる。五味をそなへて、少づゝ食へば病生せず。諸肉も諸菜も同じ物をつゞけて食すれば、滞りて害あり。

食は身をやしなふ物なり。身を養ふ物を以、かへつて身をそこなふべからず。故に凡食物は性よくして、身をやしなふに益ある物をつねにえらんで食ふべし。益なくして損ある物、味よくともくらふべからず。温補して氣をふさがざる物は益あり。生冷にして瀉下し、氣をふさぎ、腹はる物、辛くして熱ある物、皆損あり。

飯はよく人をやしなひ、又よく人を害す。故に飯はことに多食すべからず。常に食して宜しき分量を定むべし。飯を多くくらへば、脾胃をやぶり、元氣をふさぐ。他の食の過たるより、飯の過たるは消化しがたくして大に害あり。客となりて、あるじ心を用ひてまうけたる品味を、箸を下さゞれば、主人の盛意を空しくするも快からずと思はゞ、飯を常の時より半減して、飣の品味を少づゝ食すべし。如此すればさい多けれど食にやぶられず。飯を常の如く食して、又魚鳥などの飣數品多くくらへば必やぶらる。飯後に又菓子とて餅餌などくらひ、或後段とて麪類など食すれば、飽滿して氣

をふさぎ、食にやぶらる。是常の分量に過れば也。菓子後段は分外の食なり。少食して可也。過すべからず。もし食後に小食せんとおもはゞ、かねて飯を減ずべし。

飲食の人は、人これをいやしむ。其小を養つて大をわするゝがためなりと、孟子ののたまへるごとく、口腹の欲にひかれて道理をわすれ、只のみくひ、あきみちん事をこのみて、腹はりいたみ、病となり、酒にゑひて亂に及ぶは、むげにいやしむべし。

夜食する人は、暮て後早く食すべし。深更にいたりて食すべからず。酒食の氣よくめぐり、消化して後ふすべし。消化せざる内に早くふせば病となる。夜食せざる人も、晩食の後早くふすべからず。早くふせば食氣とゞこほり、病となる。凡夜は身をうごかす時にあらず、飲食の養を用ひず、少うゑても害なし。もしやむ事を得ずして夜食すとも、早くして少きに宜し。夜酒はのむべからず。若のむとも、早くして少のむべし。

俗のことばに食をひかへすごせば、養たらずしてやせおとろふと云。是養生不知人の言也。欲多きは人のむまれ付なれば、ひかへ過すと思ふがよきほどなるべし。

すける物にあひ、うゑたる時にあたり、味すぐれて珍美なる食にあひ、其品おほく前につらなるとも、よきほどのかぎりの外は、かたくつゝしみて其節にすぐすべからず。

飲食ものにむかへば、むさぼりの心すゝみて、多きにすぐる事をおぼえざるは、つねの人のならひ也。酒食茶湯、ともによきほどゝ思ふよりも、ひかへて七八分にて猶も不足と思ふ時、早くやむべし。飲食して後には必十分にみつるもの也。食する時十分と思へば、必あきみちて分に過て病となる。

酒食を過し、たゝりをなすに、酒食を消すつよき藥を用ひざれば、酒食を消化しがたし。たとへば敵

わが領内に亂入し、あだをなして城郭を攻破らんとす、こなたよりも强兵を出して防戰せしめ、わが士卒多く打死せざれば敵にかちがたし。藥を用て食を消化するは、是わが腹中を以敵身方の戰場とする也。飮食する所の酒食敵となりて、わが腹中をせめやぶるのみならず、吾が用る所のつよき藥も、皆病を攻れば元氣もへる。敵兵も身方の兵も、我腹中に入亂れ戰つて元氣を損じやぶる事甚し。敵をわが領内に引入て戰はんより、外にふせぎて内に入ざらんにはしかじ。酒食を過さずしてひかへば、敵とはなるべからず。つよき藥を用てわが腹中を敵身方の合戰場とするは、胃の氣をそこなひて、うらめし。

食する時五思あり。一には、此食の來る所を思ひやるべし。幼くしては父の養をうけ、年長じては君恩によれり。是を思て忘るべからず。或君父ならずして、兄弟親族他人の養をうくる事あり。是又其食の來る所を思ひて、其めぐみ忘るべからず。農工商のわがちからにはむ者も、其國恩を思ふべし。二には、此食も農夫勤勞して作り出せし苦みを思ひやるべし。わするべからず。みづから耕さず、安樂にて居ながら、其養をうく、其樂を樂しむべし。三には、われ才徳行義なく、君を助け、民を治むる功なくして、此美味の養をうくる事幸甚し。四には、世にわれより貧しき人多し。糟糠の食にもあく事なし。或うゑて死する者あり。われは嘉穀をあくまでくらひ、飢餓の憂なし。是大なる幸にあらずや。五には、上古の時を思ふべし。上古には五穀なくして、草木の實と根葉を食して飢をまぬがる。其後五穀出來ても、いまだ火食をしらず。釜甑なくして烹食せず、生にてかみ食はゞ、味なく腸胃をそこなふべし。今白飯をやはらかに烹て、ほしいまゝに食し、又あつものあり、飣ありて、朝夕食にあけり。且酒醴ありて心を樂しま

しめ、氣血を助く。されば朝夕食することに、此五思の内、一二なりとも、かはる〴〵思ひめぐらし忘るべからず。然らば日々に樂も亦その中に有べし。是愚が臆説なり。妄にこゝに記す。儒家には食時の五觀あり。是に同じからず。

夕食は朝食より滯やすく消化しがたし。晩食は少きがよし。かろく淡き物をくらふべし。晩食に飣の數多きは宜しからず。飣多く食ふべからず。魚鳥などの味の濃く、あぶら有て重き物夕食にあしゝ。菜類も薯蕷、胡蘿蔔、菘菜、芋根、慈姑などの如き、滯りやすく、氣をふさぐ物、晩食に多く食ふべからず。食はざるは尤よし。

飯のすゑり、魚のあざれ、肉のやふれたる、色あしき物、臭のあしき物、にえばなをうしなへる物くらはず。朝夕の食時にあらずんばくらふべからず。又早くしていまだ熟せず、或いまだ生ぜざる物、根をほりとりてめだちをくらふの類、又時過てさかりを失へる物、皆時ならざる物也。くらふべからず。是論語にのする處、聖人の食し給はざる物なり。聖人身を愼み給ふ、養生の一事なり。法とすべし。又肉は多けれども、飯の氣にかたしめずといへり、肉を多く食ふべからず。食は飯を本とす。何の食も飯より多かるべからず。

飲食の内、飯は飽ざれば飢を助けず。あつものは飯に和せんためなり。肉はあかずしても不足なし。少くらつて食をすゝめ、氣を養ふべし。菜は穀肉の足らざるを助けて消化しやすし。皆その食すべき理あり。然共多くふべからず。

人身は元氣を本とす。穀の養によりて、元氣生々としてやまず。穀肉を以元氣を助くべし。穀肉を過して元氣をそこなふべからず。元氣穀肉にかてば壽し。穀肉元氣に勝てば夭し。又古人の言に穀は肉にかつべし。肉は穀にかたしむべからずといへり。

脾胃虚弱の人、殊老人は飲食にやぶられやすし。味よき飲食にむかはゞ忍ぶべし。節に過べからず。心よはきは慾にかちがたし。心つよくして慾にかつべし。

交友と同じく食する時、美饌にむかへば食過やすし。

飲食十分に滿足するは禍の基なり。花は半開に見、酒は微醉にのむといへるが如くすべし。興に乘じて戒を忘るべからず。慾を恣にすれば禍となる。樂の極まれるは悲の基なり。

一切の宿疾を發する物をば、しるし置てくらふべからず。宿疾とは持病也。即時に害ある物あり。時をへて害ある物あり。即時に傷なしとて食ふべからず。

傷食の病あらば、飲食をたつべし。或食をつねの半減じ、三分の二減ずべし。食傷の時はやく溫湯に浴すべし。魚鳥の肉、魚鳥のひしは、生菜、油膩の物、ねばき物、こはき物、もちだんご、つくり菓子、生果子などくらふべからず。朝食いまだ消化せずんば、晝食すべからず。點心などくらふべからず。晝食いまだ消せずんば、夜食すべからず。前夜の宿食猶滯らば、翌朝食すべからず。或半減し、酒肉をたつべし。およそ食傷を治する事、飲食をせざるにしくはなし。飲食をたてば輕症は藥を用ずしていゆ。養生の道しらぬ人、殊婦人は智なくして食滯の病にも早く食をすゝむる故、病おもくなる。みだりにすゝむべからず。ねばき米湯など殊に害となる。病症により、殊に食傷の病人は、一兩日食せずしても害なし。邪氣とゞこほりて腹みつる故なり。

煑過して飪を失なへる物と、いまだ煑熟せざる物くらふべからず。魚を煑るに煑ゑざるはあしゝ、煑過して飪を失なへるは味なく、つかへやすし。よき程の節あり。魚を蒸たるは久しくむしても、飪を失なはず。魚をにるに水多きは味なし。此事李

笠翁が閑情寓寄にいへり。聖人其醬を得ざればくひ給はず。是養生の道也。醬とはひしほにあらず、其物にくはふべきあはせ物なり。今こゝにていはゞ、煎酒、醬油、醋、蓼、生薑、わさび、胡椒、芥子、山椒など各其食物に宜しき加へ物あり。これをくはふるは其毒を制する也。只其味のそなはりてよからん事をこのむにあらず。

飲食の慾は朝夕におこる故、貧賤なる人もあやまり多し。況富貴の人は美味多き故、やぶられやすし。殊に愼むべし。中年以後元氣へりて、男女の色欲はやうやく衰ふれども、飲食の慾はやまず。老人は脾氣よはし、故に飲食にやぶられやすし。老人のにはかに病をうけて死するは、多くは食傷也。つゝしむべし。

諸の食物皆あたらしき生氣ある物をくらふべし。ふるくして臭あしく、色も味もかはりたる物皆氣をふさぎて、とゞこほりやすし。くらふべからず。

すける物は脾胃のこのむ所なれば補となる。李笠翁も本性甚すける物は、薬にあつべしといへり。尤此理あり。されどすけるまゝに多食すれば、必やぶられ、好まざる物を少くらふにおとる。好む物を少食はゞ益あるべし。

清き物、かうばしき物、もろく和かなる物、味かろき物、性よき物、此五の物をこのんで食ふべし。益ありて損なし。是に反する物食ふべからず。此事もろこしの書にも見えたり。

衰病虚弱の人は、つねに魚鳥の肉を味よくして、少づゝ食ふべし。参芪の補にまされり。性よき生魚を煮熟よくすべし。鹽つけて一兩日過たるもよし。久しければ味よからず。且滞りやすし。生魚の肉豉につけたるを煮て食ふもよし。夏月は久しくたもたず。

脾虚の人は生魚をあぶりて食するに宜し。煮たるよ

りつかへず。小魚は煮て食するに宜し。大なる生魚はあぶりて食ひ、或煎酒を熱くして、生薑わさびなど加へ、浸し食すれば害なし。

大魚は小魚より油多くつかへやすし。脾虛の人は多食すべからず。薄く切て食へばつかへず。大なる鯉鮒大に切、或全身を煮たるは、氣をふさぐ。うすく切べし。蘿蔔、胡蘿蔔、南瓜、菘根なども、大に厚く切て煮たるは、つかへやすく、薄く切て煮るべし。

生魚味をよく調へて食すれば、生氣ある故早く消化しやすくしてつかへず。煮過し、又はほして油多き肉、或鹽につけて久しき肉は、皆生氣なき陰物なり。滯やすし。此理をしらで生魚より鹽藏をよしとすべからず。

甚腥く脂多き魚食ふべからず。魚のわたは油多し。食べからず。鱁鮧ことにつかへやすし。痰を生ず。さし身、鱠は人により斟酌すべし。酢過たるをいむ。虛冷の人はあたゝめ食ふべし。鮓は老人病人食ふべからず、消化しがたし。殊に未熟の時、又熟し過て日をへたる、食ふべからず。ゑびの鮓毒あり。うなぎの鮓消化しがたし。皆食ふべからず。大なる鳥の皮、魚の皮のあつきは、かたくして油多し。食ふべからず。消しがたし。

諸獸の肉は日本の人、腸胃薄弱なる故に宜しからず、多く食ふべからず。烏賊章魚など多く食べからず。消化しがたし。鷄子鴨子丸ながら煮たるは氣をふさぐ。ふは〳〵と俗の稱するはよし。肉に菜も大に切たる物、又丸ながら煮たるは皆氣をふさぎてつかへやすし。

生魚あざらけきに鹽を淡くつけ、日にほし、一兩日過て少あぶり、うすく切て酒にひたし食ふ。脾に妨なし。久しきは滯りやすし。

味噌性和にして腸胃を補なふ。たまりと醬油はみそより性するどなり。泄瀉する人に宜しからず。酢

は多く食ふべからず。脾胃に宜しからず。然ども積聚ある人は少食してよし。鹹醋を多く食ふべからず。

脾胃虚して生菜をいむ人は、乾菜を煮食ふべし。冬月蘿蔔をうすく切て、生ながら日に乾す。蓮根、牛蒡、薯蕷、うどの根、いづれもうすく切て煮てほす。椎蕈、松露、石茸も乾たるよし。松蕈鹽漬よし。壺盧切て鹽に一夜つけ、おしをかけ置てほしたるがよし。干瓢もよし。白芋の莖熱湯をかけ日にほす。是皆虚人の食するに宜し。枸杞、五加、莧、菊、蘿藦、鼓子花葉など、わか葉をむし、煮てほしたるをあつ物とし、味噌にてあへ物とす。菊花は生にてほす。皆虚人に宜し。老葉はこわし。海菜は冷性也。老人虚人に宜からず。昆布多く食へば氣をふさぐ。

食物の氣味わが心にかなはざる物は、養とならず。かへつて害となる。たとひ我がためにむつかしくこしらへたる食なりとも、心にかなはずして、害となるべき物は食ふべからず。又其味は心にかなへり共、前食いまだ消化せずして、食ふ事を好まずば食すべからず。わざとゝのへて出來たる物をくらはざるも、快からずとて食ふはあし。別に使令する家僕などにあたへて食はしむれば、我が食せずしても快し。他人の饗席にありても、心にかなはざる物くらふべからず。又味心にかなへりとて、多く食ふは尤あしゝ。

凡食飲をひかへこらゆる事久き間にあらず。飲食する時須臾の間欲を忍ぶにあり。又分量は多きにあらず。飯は只二三口、餌は只一二片、少の欲をこらへて食せざれば害なし。酒も亦しかり。多飲の人も少こらへて、酔過さゞれば害なし。

脾胃のこのむと、きらふ物をしりて、好む物を食し、きらふ物を食すべからず。脾胃の好む物は何ぞや。あたゝかなる物、やはらかなる物、よく熟したる物、

ねばりなき物、味淡くかろき物、にえばなの新に熟したる物、きよき物、新しき物、香よき物、性平和なる物、五味の偏ならざる物、是皆脾胃の好む物なり。是脾胃の養となる。くらふべし。

脾胃のきらふ物は生しき物、冷なる物、こはき物、ねばる物、けがらはしく清からざる物、くさき物、煮ていまだ熟せざる物、煮過して飪を失へる物、煮て久しくなるもの、菓のいまだ熟せざる物、ふるくして正味を失なへる物、五味の偏なる物、あぶら多くして味おもきもの、是皆脾胃のきらふ物也。是をくらへば脾胃を損す。食ふべからず。

酒食を過し、或は時ならずして飲食し、生冷の物、性あしく病をおこす物をくひて、しばしば泄瀉すれば、必胃の氣へる。久しくかさなりては元氣衰へて短命なり。つゝしむべし。

鹽と酢と辛き物と、此三味を多く食ふべからず。此三味を多くくらひ、渇きて湯を多くのめば、濕を生じ脾をやぶる。湯茶羹多くのむべからず。右の三味をくらつて大にかはかば、葛の粉か天花粉を熱湯にたてゝ、のんで渇をとゞむべし。多く湯をのむ事をやめんがためなり。葛などのねば湯は氣をふさぐ。

酒食の後、醉飽せば天を仰で酒食の氣をはくべし。手を以面及腹腰をなで、身氣をめぐらすべし。

わかき人は食後に弓を射、鎗太刀を習ひ、身をうごかし、歩行すべし。勞動を過すべからず。老人も其氣體に應じ、少勞動すべし。案によりかゝり、一處に久しく安坐すべからず。氣血を滯らしめ、飲食消化しがたし。

脾胃虚弱の人、老人などは、餅、饅頭などの類、堅くして冷たる物くらふべからず。消化しがたし。つくりたる菓子、生菓子の類くらふ事斟酌すべし。をりにより、人によりて甚害あり。晩食の後殊にいむべし。

古人寒月朝ごとに、性平和なる美酒を少のむべし。立春以後はやむべしといへり。人により宜かるべし。燒酒にてかもしたる藥酒は用ゆべからず。

肉は一臠を食し、菓は一彩を食しても、味をしる事は肉十臠を食し、菓百顆を食したると同じ。多くくひて胃をやぶらんより、少くひて其味をしり、身に害なきにまされり。

水は清く甘きを好むべし。清からざると味あしきとは用ゆべからず。郷土の水の味によつて、人の性かはる理なれば、水は尤えらぶべし。又悪水のもり入たる水のむべからず、茶と菜を煎ずる水、尤よきをえらぶべし。

天よりすぐに下る雨水は性よし、毒なし。器にうけて茶と菜を煎ずるによし。雪水は尤よし。屋漏水大毒あり。たまり水はのむべからず。たまり水の地をもり來る水ものむべからず。井のあたりに、汚溝のたまり水あらしむべからず。地をもり通りて井に入る甚いむべし。

湯は熱きをさまして、よき比の時のむはよし。半沸の湯をのめば腹はる。

食すくなければ、脾胃の中に空處ありて、元氣めぐりやすく、消化しやすくして、飲食する物皆身の養となる。是を以病すくなくして身つよくなる。もし食多くして腹中にみつれば、元氣めぐるべき道をふさぎ、すき間なくして食消せず。是を以のみくふ物身の養とならず。滯りて元氣の道をふさぎ、めぐらずして病となる。甚しければもだえて死す。是食過て腹にみち、氣ふさがりて、めぐらざる故也。食傷に病おこり、或頓死するは此故也。

凡大酒大食する人は、必短命なり。早くやむべし。かへすがへす老人は腸胃よはき故に、飲食にやぶられやすし。多く飲食すべからず。おそるべし。

およそ人の食後に俄にわずらひて死ぬるは、多くは飲食の過て、飽滿し氣をふさげばなり。初まづ生

湯に鹽を少加へてせんじ、多く飲しめて多く吐しむべし。其後食滯を消し、氣をめぐらす藥を與ふべし。卒中風として蘇合圓延齡丹など與ふべからず。あしゝ。又少にても食物を早く與ふべからず。殊ねばき米湯など與ふべからず、氣彌塞りて死す。一兩日は食をあたへずしてよし。此病は食傷なり。世人多くはあやまつて卒中風とす、その治應せず。

うゑて食し、かはきて飲むに、飢渴にまかせて、一時に多く飲食すれば、飽滿して脾胃をやぶり、元氣をそこなふ。飢渴の時愼むべし。又飲食いまだ消化せざるに、又いやかさねに早く飲食すれば、滯りて害となる。よく消化して後、飲食を好む時のみ食ふべし。如此すれば飲食皆養となる。

四時老幼ともにあたゝかなる物くらふべし。殊に夏月は伏陰内にあり。わかく盛なる人も、あたゝかなる物くらふべし。生冷を食すべからず。滯やすく泄瀉しやすし。冷水多く飲べからず。

夏月瓜菓生菜多く食ひ、冷麪をしばしば食し、冷水を多く飲めば、秋必瘧痢を病む。凡病は故なくしてはおこらず。かねてつゝしむべし。

食後に湯茶を以口を數度すゝぐべし。口中清く牙齒にはさまれる物脱し去る。牙杖にてさす事を用ひず。夜は温なる鹽茶を以口をすゝぐべし。牙齒堅固になる。口をすゝぐには中下の茶を用ゆべし。是東坡が説なり。

人他鄕にゆきて水かはりて水土に服せず、わづらふ事あり。先豆腐を食すれば脾胃調やすし。是時珍が食物本草の注に見えたり。

山中の人は肉食ともしくて病すくなく命長し。海邊魚肉多き里にすむ人は、病多くして命短しと千金方にいへり。

朝早く粥を温にやはらかにして食へば、腸胃をやしなひ、身をあたゝめ、津液を生ず。寒月尤よし。是張耒が説也。

生薑、胡椒、山椒、蓼、紫蘇、生蘿蔔、生葱などの香氣を助け、悪臭を去り、魚毒を去り、食氣をめぐらすために、其食品に相宜しきからき物を少づゝ加へて毒を殺すべし。多く食すべからず。辛き物多ければ氣をへらし、上升し、血液をかはかす。

朝夕飯を食するごとに、初一椀は羹ばかり食して飣を食せざれば、飯の正味をよく知りて飯の味よし。後に五味の飣を食して氣を養なふべし。初より飣をまじへ食へば、飯の正味を失なふ。後に飣を食へば飣多くくはずしてたやすし、是身を養ふによろしくて、又貧に處るによろし。魚鳥蔬菜の飣も多く食はずして、飯の味のよき事を知るべし、菜肉多くくらへば飯のよき味はしらず。貧民は飣肉ともしくして飯と羹ばかり食ふ、故に飯の味よく食滞の害なし。

臥にのぞんで食滞り、痰ふさがらば、少消導の藥をのむべし。夜臥して痰のんどにふさがるはおそるべし。

日短き時、晝の間點心食ふべからず。日永き時も晝は多食はざるが宜し。

晩食は朝食より少くすべし。飣肉も少きに宜し。

一切の羹たる物よく熟して柔なるを食ふべし。こはき物、未熟物、煮過して飪を失へる物、心口にかなはざる物、食ふべからず。

我が家にては飲食の節慎みやすし、他の饗席にありては烹調生熟の節我心にかなはず。飣品多く過やすし。客となりては殊に飲食の節つゝしむべし。

飯後に力わざをすべからず。急に道を行べからず。又馬をはせ、高きにのぼり、険路に上るべからず。

養生訓巻之三終

養生訓卷之四

飲食下

東坡曰、早晩の飲食一爵一肉に過ず。尊客あれば三レ之へらすべくしてますべからず。我をよぶ者あれば是を以つぐ。一に曰、分を安んじて以福を養なふ。二に曰、胃を寛くして以氣を養なふ。三に曰、費をはぶきて以財を養なふ。東坡が此法、儉約養生のためともにしかるべし。

朝夕一菜を用ゆべし。其上に醤か肉醢か或菹か一品を加ふるもよし。あつものは富める人も常に只一なるべし。客に饗するに二用るは、本汁もし心に叶はずば、二の汁を用させん爲也。常には無用の物也。唐の高侍郎と云し人、兄弟あつものと肉を二にせず、朝夕一品のみ用ゆ。晩食には只蔔匏をくらふ。大根と夕がほとを云。范忠宣と云し富貴の人、平生肉をかさねず。其儉約養生二ながら則とすべし。

松蕈、竹筍、豆腐など味すぐれたる野菜は、只一種煮食すべし。他物と兩種合せ煮れば味おとる。李笠翁が閑情寓寄にかくいへり。味あしければ脾胃に相應せずして養とならず。

餅の新に成て再煮す。あぶらずして即食するは消化しがたし。むしたるより煮たるがやはらかにして消化しやすし。餅は數日の後燒煮て食ふに宜し。

朝食肥濃の物ならば、晩食は必淡薄に宜し。晩食豐腴ならば、明朝の食はかろくすべし。

諸の食物陽氣の生理ある新きを食ふべし。毒なし。日久しく歴たる陰氣鬱滯せる物食ふべからず。害あり。煮過して飪を失へるも同し。

一切の食陰氣の鬱滯せる物は毒あり。食ふべからず。鄕黨篇にいへる、聖人の食し給はざる物、皆陽氣を失て陰物となれるなり。穀肉などふたをして時をへるは、陰鬱の氣にて味を變ず。魚鳥の肉など久し

く時をへたる、又鹽につけて久しくして、色臭味變ず。是皆陽氣を失へる也。菜蔬など久しければ、生氣を失ひて味變ず。如此なるは皆陰物なり。腸胃に害あり。又害なきも補養をなさず。水など新に汲むは陽氣さかんにて、生氣あり。久しきを經れば陰物となり、生氣を失なふ。一切の飲食生氣を失ひて、味と臭と色と少にてもかはりたるは食ふべからず。ほして色かはりたると、鹽に浸して不損とは、陰物にあらず食ふに害なし。然ば乾物の氣のぬけたると、鹽藏の久しくて、色臭味變じたるも皆陰物也。食ふべからず。

夏月、器中に入ふたをして久しくありて、熱氣に蒸、敗し、氣味惡しくなりたる物くらふべからず。冬月霜に打れたる菜、又のきの下に生じたる菜、皆食ふべからず。是皆陰物なり。

瓜は夏涼日及秋月清涼の日不可食、極暑の時食ふべし。

炙餅炙肉すでに炙りて、又熱湯に少ひたし、火毒を去りて食ふべし。不然は津液をかはかす。又能噎膈を發す。

茄子、本草等の書に、性不好と云。生なるは毒あり、食ふべからず。煮たるも瀉痢傷寒などには忌むべし。他病には皮を去切て米泔に浸し、一夜か半日を經てやはらかに煮て食す。害なし。葛粉水に溲て切て線條とし、水にて煮、又味噌汁に鰹魚の末を加へ、再煮て食す。瀉を止、胃を補ふ。保養に益あり。

胃虚弱の人は蘿蔔、胡蘿蔔、芋、薯蕷、牛蒡などうすく切てよく煮たる、食ふべし。大にあつくきりたるは、煮ていまだ熟せざると、皆脾胃をやぶる。一度うすみそか、うすじやうゆにて煮、その汁にひたし置、半日か一夜か間置て、再前の汁にて煮れば、大に切たるも害なし、味よし。鷄肉、野猪肉なども如此すべし。

蘿蔔は菜中の上品也。つねに食ふべし。葉のこはきをさり、やはらかなる葉と根と豆豉にて煮熟して食ふ。脾を補ひ痰を去り、氣をめぐらす。大根の生しく辛きを食すれば、氣へる。然ども食滯ある時、少食して害なし。

菘は京都のはたけ菜水菜いなかの京菜也。蕪の類也。世俗あやまりてはりいりなと訓ず。味よけれども性よからず。仲景曰、藥中に甘草ありて、菘を食へば病除かず。根は九十月の頃食へば味淡くして可也、うすく切てくらふべし、あつく切たるは氣をふさぐ。十一月以後胃虚の人くらへば滯塞す。

諸菓寒具など、炙食へば害なし。味も可也。甜瓜は核を去て蒸食す。味よくして胃をやぶらず。熟柿も木練も皮共に、熱湯にてあたゝめ食すべし。乾柿はあぶり食ふべし。皆脾胃虚の人に害なし。梨子は大寒なり。蒸煮て食すれば性やはらぐ、胃虚寒の人は食ふべからず。

人の病症によりて禁宜の食物各かはれり。よくその物の性を考へ、その病に隨ひて精しく禁宜を定むべし。又婦人懷胎の間、禁物多し。かたく守らしむべし。

豆腐には毒あり。氣をふさぐ。されども新しきを煮て飪を失はざる時、早く取あげ、生蘿蔔のおろしたるを加へ食すれば害なし。

前食未㆓消化㆒ば後食相つぐべからず。

服ㇾ藥時あまき物、油膩の物、獸肉、諸菓、餻餌、生冷の物、一切氣を塞ぐ物不ㇾ可ㇾ食。服藥の時多食へば藥力とゞこほりて力なし。酒は只一盞に止るべし。補藥を服する日、ことさら此類いむべし。凡藥を服する日は、淡き物を食して藥力をたすくべし、味なき物を食して藥力を損ずべからず。

萊菔、菘、蕪菁、芋、慈姑、胡蘿蔔、南瓜、大葱白等の甘き菜は、大に切て煮食すれば、つかへて氣をふさぎ腹痛す。薄く切べし。或辛き物をくはへ、

又物によりて酢を少加るもよし。再煑る事を右に記せり。又如此の物一時に二三品くらふべからず。又甘き菓の類、およそつかへやすき物つゞけ食ふべからず。生魚、鳥肉、厚味の物つゞけ食ふべからず。胡麻を八九月食へば来春眼をうれふ。

豆腐、蒟蒻、蕃薯、芋、蕪菁、蓮根などの類、豆油にて煑たる物、既に冷て温ならざるは食ふべからず。

暁の比腹中飢渇し、食つかへて腹中不快ば、朝食を減すべし。氣をふさぐ物、肉、菓など食ふべからず。酒を飲べからず。

飲酒の後酒氣残らば、麵類諸餅食、寒具、諸菓、醴、濁醪、油膩の物、甘き物、氣をふさぐ物、飲食すべからず。酒氣めぐりつきて後飲食すべし。

鳥獣のこはき肉、前日より豆油及酒汁を以て煑て、その汁を用ひ翌日再煑れば、大に切たるもやはらかになりて味よし。つかへず。蘿蔔も亦同じ。

[illegible]は鯉魚をうすく切て山椒などくはへ、味噌にて久しく煑たるを云。脾胃を補ふ。脾虚の人、下血する病人などに宜し。大に切たるは氣をふさぐ、あしゝ。

凡諸菓の核いまだ成ざるをくらふべからず、菓に双仁ある物毒あり。山椒口をとぢて開かざるは毒あり。

怒の後早く食すべからず。食後怒るべからず。憂ひて食すべからず。食して憂ふべからず。

腹中の食いまだ消化せざるに又食すれば、性よき物も毒となる。腹中空虚になりて食すべし。

永夜寝ざる時、もし夜飲食して寒を防ぐに宜しくば、晩食の酒飯を減口調すべし。又やむ事を得ずして人の宿に寝し、夜話に人の許にゆきて食客とならば、晩食の酒食をかねて減すべし。如此にして夜少飲食すればやぶれなし。夜食は朝晩より進みやすし。心に任せて恣にすべからず。

朝夕の食、塩味をくらふ事すくなければ、のんどか

はかず、湯茶を多くのまず。脾に濕を生せずして、胃氣發生しやすし。

中華朝鮮の人は、脾胃つよし。飯多く食し、六畜の肉を多く食つても害なし。日本の人は是にことなり、多く穀肉を食すればやぶられやすし。是日本の異國の人より穀氣よわき故也。

寒夜に生菓食ふべからず。つくり菓子多く食ふべからず。脾胃の陽氣を損ず。

勞倦して多く食すれば、必睡り臥す事をこのむ。食して即臥し、ねむれば、食氣塞りてめぐらず、消化しがたくして病となる。故に勞倦したる時はくらふべからず。勞をやめて後食ふべし。食してねむらざるがため也。

古今醫統に、百病の橫夭は多く飲食による。飲食の患は色慾に過たりといへり。色慾は猶も絶べし。飲食は半日もたつべからず。故飲食のためにやぶらるゝ事多し。食多ければ積聚となり、飲多ければ痰癖となる。

病人の禁食せん事をねがふ物あり。くらひて害に成食物、又冷水などは願に任せがたし。然共病人のきはめてねがふ物を、のんどにのみ入ずして、口舌に味はゝしめて其願を遂するも、志を養ふ養生の一術也。およそ飲食を味はひてしるは舌なり。のんどにあらず。口中にかみてしばしふくみ、舌に味はひて後はのんどにのみこむも、口に吐出すも味をしる事は同し。穀肉羹酒は腹に入て臓腑を養なふ。此外の食は養のためにあらず。のんどにのまず腹に入らずとも有なん。食して身に害ある食物といへど、のんどに入ずして口に吐出せば害なし。冷水も同じ。久しく口にふくみて舌にこゝろみ吐出せば害なし。水をふくめば口中の熱を去り、牙齒を堅くす。然共むさぼり多くしてつゝしまざる人には此法は用がたし。

多く不レ可レ食物、諸■餅、粽、寒具、冷麪、麪類、

饅頭、河漏(そばきり)、索麺、醴(あまざけ)、燒酒、赤小豆(あづき)、醋、豆油(しやういう)、鯔魚(いな)、泥鰌(どぢやう)、蛤蜊(はまぐり)、鰻鱺魚、蝦、章魚(たこ)、烏賊(いか)、鯖魚、生膾鹽魚、鰤魚(ぶり)、鹽辛(しほから)、海鼠腸(このわた)、生萊菔、葫蒜(にんにく)、韮、菘根、蕪菁(かぶら)、油膩の物、肥濃の物。

老人虚人不可食物、一切生冷の物、堅硬の物、稠粘の物、油膩の物、冷麪、冷てこはき餅、餌(ちご)、粽、冷饅頭皮、糯飯(こはいひ)、生味噌、鮓(すし)の製法不好と冷なると。海鰌、海鯽、鮪(しび)、梭魚(かます)、諸生菓、皆脾胃の養生の氣をそこなふ。

凡の人不可食物、生冷の物、堅硬の物、未熟物、ねばき物、ふるくして氣味の變じたる物、製法心に不叶物、甚からき物、酢の過たる物、飪を失へる物、臭惡き物、色惡き物、味變じたる物、魚餒(あざれ)肉敗(くさり)たる、豆腐の日をへたると、冷たると、索麪に油あると、味あしきと、飪を失へると、諸品煮て未熟と、有灰酒、酸味ある酒、いまだ時ならずして熟せざる物、すでに時過たる物食ふべからず。夏月雉不可食。魚鳥の皮こはき物、脂多き物、甚なまぐさき物、諸魚二目同じからざる物、腹下に丹の字ある物、諸鳥みづから死して足伸ざる物、諸獸毒箭にあたりたる物、諸鳥毒をくらつて死したる物、肉の脯屋漏(あまだり)水にぬれたる物、米器の内に入置たる肉、肉汁を器に入置て、氣をとぢたる物、皆毒あり。肉脯並鹽につけたる肉夏をへて臭味あしき、皆食ふべからず。

いにしへもろこしに食醫の官あり。食養によつて百病を治すと云。今とても食養なくんばあるべからず。殊老人は脾胃よわし、尤食養宜しかるべし。藥を用るはやむ事を得ざる時の事也。

同食の禁忌多し、其要なるをこゝに記す○豬肉に生薑(しやうが)、蕎麥、胡荽(こにし)、炒豆、梅、牛肉、鹿肉、鼈(すつぽん)、鶴、鶉をいむ○牛肉に黍、韮、生薑、栗子をいむ○兎肉に生薑、橘皮、芥子(からし)、鷄、鹿、獺○鹿に生菜、鷄、雉、蝦をいむ○鷄肉と鷄子(たまご)に芥子、蒜、生葱、

糯米、李子、魚汁、鯉魚、兎、蝦、鼈、雉を忌○雉肉に蕎麥、木耳、胡桃、鯽魚。鮎魚をいむ○野鴨に胡桃、木耳をいむ○鶩子に李子、鼈肉○雀肉に李子、醬○鯽魚に芥子、蒜、餳、鹿、芹、雞、雉○魚酢に麥、醬、蒜、綠豆○鼈肉に莧、菜、芥菜、桃子、鴨肉○蟹に柿、橘、棗○李子に蜜を忌○橙橘に獺肉○栗に葱○枇杷に熱麪○楊梅に生葱○銀杏に鰻鱺○諸瓜に油餅○黍米に蜜○綠豆に榧子を食し合すれば殺レ人○莧に蕨○乾筍に砂糖○紫蘇莖葉と鯉魚○黃石蠶と諸魚○魚鮓と瓜、冷水○菜瓜と魚膾と一にすべからず○酢肉に有レ髮害レ人○麥醬蜂蜜と同食すべからず○越瓜と酢肉○酒後に茶を飮べからず腎をやぶる○酒後芥子及辛き物を食へば筋骨を緩くす○茶と榧と同時に食へば身重し○和俗の云蕨粉を餻とし綠豆を餡にして食へば殺レ人。又曰、鰶魚を木棉子の火にて、やきて食すれば殺レ人又曰、胡椒と沙糖米と同食すれば殺レ人。又胡椒と桃李、楊梅同食すべからず。又曰、松脂を米を貯る器中に入おけるを食ふべからず。又曰、南瓜を魚膾に合せ食すべからず。

黃蓍を服する人は酒を多くのむべからず。甘草を服する人は松菜を食ふべからず。地黃を服するには蘿蔔蒜葱の三白をいむ松は忌ず。荊芥を服するには生魚をいむ。土茯苓を服するには茶をいむ。凡如此類はかたく忌むべし。藥と食物とのおそれいむは自然の理なり。富木鼈の鳥を殺し、磁石の針を吸付るも、皆天然の性也。此理疑ふべからず。

一切の食類の内園菜極て穢はし、其根葉に久しくそみ入たる糞汚にはかに去がたし、水桶を定め置水を多入て菜をひたし、上におもりをおき、一夜か一日かつけ置取出し、刷子を以その根葉莖をすり洗ひ、淸くして食すべし。此事近年、李笠翁が書に見たり。もろこしには神を祭ふに園菜を用ひずして、山菜水菜を用ふ。園菜も瓜茄子壺盧冬瓜などはけ

がれなし

飲酒

酒は天の美祿なり。少のめば陽氣を助け、血氣をやはらげ、食氣をめぐらし、愁を去り、興を發して、甚人に益あり。多くのめば又よく人を害する事、酒に過たる物なし。水火の人をたすけて、又よく人に災あるが如し。邵堯夫の詩に、美酒飲教微醉後。といへるは、酒を飲の妙を得たりと時珍いへり。少のみ少醉へるは、酒の禍なく、酒中の趣を得て樂多し。人の病酒によつて得るもの多し。酒を多くのんで飯をすくなく食ふ人は、命短し。かくのごとく多くのめば、天の美祿を以、却て身をほろぼす也。かなしむべし。

酒を飲には、各人によつてよき程の節あり。少のめば益多く、多くのめば損多し。性謹厚なる人も、多飲を好めば、貪りてみぐるしく、平生の心を失ひ、亂に及ぶ。言行ともに狂せるがごとし。その平生とは似ず、身をかへりみ愼むべし。若き時より早くかへりみて、みづから戒しめ、父兄もはやく子弟を戒むべし。久しくならへば性となる。くせになりては一生改まりがたし。生れ付て飲量すくなき人は、一二盞のめば醉て氣快く樂あり。多飲人とその樂同じ。多飲するは害多し。白樂天が詩に、一飲一石者、徒以多爲貴。及其酩酊時、與我亦無異。笑謝多飲者。酒錢徒自費。といへるはむべ也。

凡酒はたゞ朝夕の飯後にのむべし。晝と夜との空腹に飲べからず。皆害あり。朝間空腹にのむは、殊更脾胃をやぶる。

凡酒は夏冬ともに、冷飲熱飲に宜しからず。温酒をのむべし。熱飲は氣升る。冷飲は痰をあつめ、胃をそこなふ。丹溪は酒は冷飲に宜しといへり。然れども多くのむ人、冷飲すれば脾胃を損ず。少飲む人も、冷飲すれば食氣を滯らしむ。凡酒をのむは、

その温氣をかりて、陽氣を助け、食滯をめぐらさんがため也。冷飲すれば二の益なし。溫酒の陽を助け、氣をめぐらすにしかず。

酒をあたゝめ過して飪を失へると、或温めて時過冷たると、二たびあたゝめて味の變じたると、脾胃をそこなふ。のむべからず。

酒を人にすゝむるに、すぐれて多く飲む人も、よき程の節をすぐせばくるしむ。若その人の酒量をしらずんば、すこししひて飲しむべし。その人辭してのまずんば、その人にまかせて、みだりにしひずして早くやむべし。量にみたず、すくなくて無興なるは害なし。すぎては必人に害あり。客に美饌を饗しても、みだりに酒をしひて苦ましむるは情なし。大に醉しむべからず。客は、主人しひずとも、つねよりは少多くのんで醉べし。主人は酒を妄にしひず。客は酒を辭せず。よき程にのみ醉て、よろこびを合せて樂しめるこそ、是宜しかるべけれ。

市にかふ酒に、灰を入たるは毒あり。酸味あるも飲べからず。酒久しくなりて味變じたるは毒あり。のむべからず。濁酒のこきは脾胃に滯り、氣をふさぐ。のむべからず。醇酒の美なるを、朝夕飯後に少のんで微醉すべし。醴酒は製法精きを少熱飲すれば、脾胃を厚くす、あしきを冷飲すべからず。

五湖漫聞といへる書に、多く長壽の人の姓名と年數を載て、其人皆至レ老不レ衰。問レ之皆不レ飲レ酒といへり。今わが里の人を試みるに、すぐれて長命の人十人に九人は皆不レ飲レ酒人なり。酒を多く飲む人の長命なるはまれなり。酒は半醉にのめば長生の藥となる。

酒をのむに甘き物をいむ。又酒後辛き物をいむ。人の筋骨をゆるくす。酒後燒酒をのむべからず。或一時に合のめば、筋骨をゆるくし煩悶す。

燒酒は大毒あり、多く飲べからず。火を付てもえやすきを見て、大熱なる事を知るべし。夏月は伏陰

内にあり、又表ひらきて酒毒肌に早くもれやすき故、少のんでは害なし。他月はのむべからず。焼酒にて造れる薬物多く呑べからず、毒にあてらる。薩摩のあはもり、肥前の火の酒、猶辛熱甚し。異國より來る酒のむべからず、性しれず、いぶかし。焼酒をのむ時も、のんで後にも熱物を食すべからず。辛き物焼味噌など食ふべからず。熱湯のむべからず。大寒の時も焼酒をあたゝめ飲べからず。大に害あり。京都の南蠻酒も焼酒にて作る。焼酒の禁と同じ。焼酒の毒にあたらば、菉豆粉、砂糖、葛粉、鹽、紫雪など、皆冷水にてのむべし。温湯をいむ。

飲茶　附煙草

茶、上代はなし。中世もろこしよりわたる。其後玩賞して日用かくべからざる物とす。性冷にして氣を下し、眠をさます。陳藏器は、久しくのめば痩てあぶらをもらすといへり。母炅、東坡、李時珍など、その性よからざる事をそしれり。然ども今の世、朝より夕まで、日々茶を多くのむ人多し。のみ習へばやぶれなきにや。冷物なれば一時に多くのむべからず。抹茶は用る時にのぞんでは、炒らず煮ず、故につよし。煎茶は用る時炒て煮る故、やはらかなり。故につねには煎茶を服すべし。飯後に熱茶少のんで食を消し、渇をやむべし。鹽を入てのむべからず。腎をやぶる。空腹に茶を飲べからず。脾胃を損ず。濃茶は多く呑べからず。發生の氣を損ず。唐茶は性つよし。製する時煮ざればなり。病人は當年の新茶のむべからず。眼病、上氣、下血、泄瀉などの患あり。正月よりのむべし。人により當年九十月よりのむも害なし。新茶の毒にあたらば、香蘇散、不換金、正氣散、症によりて用ゆ。或白梅、甘草、砂糖、黒豆、生薑など用ゆべし。

茶は冷也。酒は温也。酒は氣をのぼせ、茶は氣を下す。酒に醉へばねむり、茶をのめばねむりさむ。

その性うらおもて也。

あつものも湯茶も、多くのむべからず。多くのめば脾胃に濕を生ず。脾胃は濕をきらふ。湯茶あつものを飲む事すくなければ、脾胃の陽氣さかんに生發して、面色光りうるはし。

薬と茶を煎ずるに、水をえらぶべし。清く味甘きをよしとす。雨水を用るも味よし。雨中に淨器を庭に置てとる。地水にまさる。然共是は久しくたもたず。雪水を尤よしとす。

茶を煎ずる法、よはき火にて炒り、つよき火にて煎ず。煎ずるに、堅き炭のよくもゆるを、さかんにたきて煎ず。たぎりあがる時冷水をさす。如此すれば茶の味よし。つよき火にて炒るべからず。ぬるくやはらかなる火にて煎ずべからず。右は皆もろこしの書に出たり。湯わく時、薏苡の生葉を加へて煎ずれば、香味尤よし。性よし。本草に、暑月煎じのめば、胃を暖め氣血をます。

大和國中は、凡て奈良茶を毎日食す。飯に煎茶をそゝぎたる也。赤豆、豇豆、蠶豆、緑豆、陳皮、栗子、零餘子など加へ、點じ用ゆ。食を進め、むねを開く。

たばこは近年天正慶長の比、異國よりわたる。淡婆姑は和語にあらず。蠻語也。近世の中華の書に多くのせたり。又煙草と云。朝鮮にては南草と云。和語これを莨菪とするは誤れり。莨菪は別物なり。煙草は性毒あり。煙をふくみて眩ひ倒るゝ事あり。習へば大なる害なく、少は益ありといへ共、損多し。病をなす事あり。又火災のうれひあり。習へばくせになり、むさぼりて後には止めがたし。事多くなり、いたつがはしく家僕を労す。初よりふくまざるにしかず。貧民は費多し。

愼色慾

素問に、腎者五臟の本といへり。然らば養生の道、腎を養ふ事をおもんずべし。腎を養ふ事、薬補をたの

むべからず。只精氣を保つてへらさず、腎氣をおさめて動かすべからず。論語に曰、わかき時は血氣方に壯なり。戒レ之在レ色。聖人の戒守るべし。血氣さかんなるにまかせ、色慾をほしいまゝにすれば、必先禮法をそむき、法外を行ひ、恥辱を取て面目をうしなふ事あり。時過て後悔すれどもかひなし。かねて後悔なからん事を思ひ、禮法をかたく愼むべし。況精氣をつひやし、元氣をへらすは、壽命をみじかくする本なり。おそるべし。年若き時より、男女の欲ふかくして、精氣を多くへらしたる人は、生付さかんなれ共、下部の元氣すくなくなり、五臟の根本よはくして、必短命なり。つゝしむべし。飲食男女は人の大欲なり。恣になりやすき故、此二事尤かたく愼むべし。是をつゝしまざれば脾腎の眞氣へりて、藥補食補のしるしなし。老人はことに脾腎の眞氣を保養すべし。補藥のちからをたのむべからず。

男女交接の期は、孫思邈が千金方曰、人年二十者は四日に一たび泄す。三十者は八日に一たび泄す。四十者は十六日に一泄す。五十者二十日に一泄す。六十者精をとぢてもらさず。もし體力さかんならば、一月に一たび泄す。氣力すぐれて盛なる人、慾念をおさへこらへて、久しく泄さゞれば、腫物を生ず。六十を過て慾念おこらずは、とぢてもらすべからず。わかくさかんなる人も、もしよく忍んで一月に二度もらして、慾念おこらずは長生なるべし。○今案ずるに、千金方にいへるは、平人の大法なり。もし性虛弱の人、食すくなく力よはき人は、此期にかゝはらず、精氣をおしみて交接まれなるべし。色慾の方に心うつれば、あしき事くせになりてやまず。法外のありさまはづべし。つひに身を失ふにいたる。つゝしむべし。右千金方に、二十歳以前をいはざるに意あるべし。二十以前血氣生發して、いまだ堅固ならず、此時しば〳〵もらせ

ば、發生の氣を損じて、一生の根本よはくなる。わかく盛なる人は、殊に男女の情慾かたく愼しんで、過すくなかるべし。慾念をおこさずして腎氣をうごかすべからず。房事を快くせんために、烏頭附子等の熱藥のむべからず。

達生録曰、男子年いまだ二十ならざる者、精氣いまだたらずして慾火うごきやすし。たしかに交接を愼むべし。

孫眞人が千金方に、房中補益説あり。年四十に至らば房中の術を行ふべしとて、その説頗詳なり。その大意は、四十以後血氣やうやく衰ふる故、精氣をもらさずして、只しば〱交接すべし。如ㇾ此すれば元氣へらず、血氣めぐりて、補益となるといへる意なり。ひそかに孫思邈がいへる意をおもんみるに、四十以上の人、血氣いまだ大に衰へずして、槁木死灰の如くならず、情慾忍びがたし。然るに精氣をしば〱もらせば、大に元氣をついやす故、老年の人に宜しからず。こゝを以四十以上の人は、交接のみしば〱にして、精氣をば泄すべからず、四十以後は腎氣やうやく衰ふる故、泄さゞれども、壯年のごとく、精氣動かずして滯らず。此法行ひやすし。この法を行へば、泄さずして情慾はとげやすし。然れば、是氣をめぐらし、精氣をたもつ良法なるべし。四十歳以上も血氣甚衰へざれば、情慾をたつ事は忍びがたかるべし。忍べば抑て害あり。もし年老てしば〱もらせば、大に害あり。故に時にしたがつて此法を行なひて、情慾をやめ、精氣をたもつべしとや。是によつて精氣をついやさずんば、しば〱交接すとも、精も氣も少ももれずして、當時の情慾はやみぬべし。是古人の敎、情慾のたちがたきをおさへずして、精氣を保つ良法なるべし。人身は脾胃の養を本とすれども、腎氣堅固にしてさかんなれば、丹田の火蒸上げて、脾土の氣も亦温和にして盛になる故、古人の曰、

精、補下不如補腎。若年より精氣ををしみ、四十以後精氣をたもちてもらさず、是命の根源を養ふ道也。此法孫思邈後世に教へし秘訣にて、明らかに千金方にあらはせ共、後人其意の保養に益ありて害なき事をしらず。丹溪が如き大醫すら、偏見にして孫眞人が教を立し本意を失ひて信ぜず、此良術をそしりて曰、聖賢の心、神仙の骨なくんば、未易、爲。もし房中を以補とせば、人を殺す事多からんと、格致餘論にいへり。聖賢神仙は世に難有ければ、丹溪が説の如くば、此法は行ひがたし。丹溪が説うたがふべき事猶多し。才學高博にして識見偏僻なりと云べし。

情慾をおこさずして、腎氣動かざれば害なし。若情慾をおこし、腎氣うごきて、精氣を忍んでもらさゞれば、下部に氣滯りて、瘍腫を生ず。はやく温湯に浴し、下部をよくあたゝむれば、滯れる氣めぐりて、瘍腫なし、腫物なとのうれひなし。此術又知るべし。

房室の戒多し。殊に天變の時をおそれいましむべし。日蝕、月蝕、雷電、大風、大雨、大暑、大寒、虹蜺、地震、此時房事をいましむべし。春月雷初て聲を發する時、夫婦の事をいむ。又土地につきては、凡神明の前をおそるべし。日月星の下、神祠の前、わが父祖の神主の前、聖賢の像の前、是皆おそるべし。且我が身の上につきて時の禁あり。病中病後、元氣いまだ本復せざる時、殊傷寒、時疫、瘧疾の後、腫物、瘡瘍いまだいえざる時、氣虚、勞損の後、飢渇の時、大酔大飽の時、身勞動し遠路行歩につかれたる時、怒悲、うれひ、驚きたる時、交接をいむ。冬至の前五日、冬至の後十日、靜養して精氣を泄すべからず。又女子の經水いまだ盡ざる時、皆交合を禁ず。是天神地祇に對して、おそれつゝしむと、わが身において病を愼しむ也。若是を愼しまざれば、神祇のとがめおそるべし。男

女共に病を生じ、壽を損ず。生るゝ子も、亦形も心も正しからず、或かたはとなる。禍ありて福なし。古人は胎敎とて、婦人懷妊の時より愼める法あり。房室の戒は胎敎の前にあり。是天地神明の照臨し給ふ所尤おそるべし。わが身及妻子の禍も、亦おそるべし。胎敎の前此戒なくんばあるべからず。

小便を忍んで房事を行ふべからず。龍腦麝香を服して房に入べからず。

入門曰、婦人懷胎の後、交合して慾火を動かすべからず。

腎は五臟の本、脾は滋養の源也。こゝを以、人身は脾腎を本源とす、草木の根本あるが如し。保ち養つて堅固にすべし。本固ければ身安し。

養生訓卷之四終

養生訓卷之五

五官

心は人身の主君也。故天君と云。思ふ事をつかさどる。耳目口鼻形(形は頭身手足也)此五は、きゝと、見ると、かぐと、物いひ、物くふと、うごくと、各其事をつかさどる職分ある故に、五官と云。心のつかひ物なり。心は内にありて五官をつかさどる。よく思ひて五官の是非を正すべし。天君を以て五官をつかふは明なり。五官を以天君をつかふは迷なり。心は身の主なれば、安樂ならしめて苦しむべからず。五官は天君の命をうけ、各官職をよくつとめて恣(ほしいまゝ)なるべからず。

つねに居る處は、南に向ひ戸に近く、明なるべし。陰鬱にしてくらき處に常に居るべからず。氣をふさぐ。又かゞやき過たる陽明の處も、つねに居ては精神をうばふ。陰陽の中にかなひ、明暗相半す

べし。晝明ければ簾をおろし、くらければ簾をかかぐべし。

臥には必東首して生氣をうくべし。北首して死氣をうくべからず。もし君父近きにあらば、あとにすべからず。

坐するには正坐すべし。かたよるべからず。燕居には安坐すべし。膝をかゞむべからず。又よりよりは牀几にこしかけ居れば、氣めぐりてよし。中夏の人は、つねにかくのごとくす。

常に居る室も常に用る器も、かざりなく質朴にしてけがれなく、いさぎよかるべし。居室は風寒をふせぎ、身をおゝふに安からしむべし。器は用をかなへて、事かけざれば事たりぬ。華美を好めばくせとなり、おごりむさぼりの心おこりて、心を苦しめ、事多くなる。養生の道に害あり。坐する處臥す處、少もすき間あらばふさぐべし。すき間の風と、ふき通す風は、人のはだへに通りやすくして、病おこる。おそるべし。夜臥して耳邊に風の來る穴あらば、ふさぐべし。

夜ふすには必側にそばだち、わきを下にしてふすべし。仰のきふすべからず。仰のきふせば氣ふさがりて、おそはるゝ事あり。むねの上に手をおくべからず。寢入て氣ふさがりて、おそはれやすし。此二いましむべし。

夜ふして、いまだね入らざる間は、兩足をのべてふすべし。ねいらんとする前に、兩足をかゞめ、わきを下にして、そばだちふすべし。是を獅子眠と云。一夜に五度ねかへるべし。胸腹の内に氣滯らば、足をのべ、むね腹を手を以しきりになで下し、氣上る人は、足の大指をしきりに多くうごかすべし。人によりて、かくのごとくすれば、あくびをしばしばして、滯りたる邪氣を吐出す事あり。大に吐出すをいむ。ね入らんとする時、口を下にかたぶけてふすべからず。ねふりて涎よだれ出てあし。

あふのきてふすべからず。おそはれやすし。手の兩の大指をかゞめ、殘る四の指にて、にぎりてふせば、手むねの上をふさがずして、おそはれず。後には習となりて、ねぶりの内にもひらかず。此法病源候論と云醫書に見えたり。夜臥す時に、のどに痰あらば必はくべし。痰あればねぶりて後、おそはれくるしむ。老人は夜臥時痰を去る藥をのむべしと醫書にいへるも、此ゆゑなるべし。晩食夜食に、氣をふさぎ痰をあつむる物食ふべからず。おそはれん事をおそれてなり。

夜臥に衣を以面をおほふべからず。氣をふさぎ、氣上る。夜臥に燈をともすべからず。魂魄定まらず。もしともさば、燈をかすかにしてかくすべし。ねむるに口をとづべし。口をひらきてねむれば、眞氣を失なひ、又牙齒早くおつ。

凡一日に一度、わが首より足に至るまで、惣身のこらず、殊につがひの節ある所、悉く人になでさすりおさしむる事、各所十遍ならしむべし。先百會の穴、次に頭の四方のめぐり、次に兩眉の外、次に眉じり、又鼻ばしらのわき、耳の内、耳のうしろを皆おすべし、次に風池、次に項の左右をもむ。左には右手、右には左手を用ふ。次に兩の肩、次に臂骨のつがひ、次に腕、次に手の十指をひねらしむ。次に背をおさへ、うちうごかすべし。次に腰及腎堂をなでする。次にむね、兩乳、次に腹を多くなづる。次に兩股、次に兩膝、次に脛の表裏、次に足の踝、足の甲、次に足の十指、次に足の心、皆兩手にてなでひねらしむ。是壽養叢書の說也。我手にてみづからするもよし。

入門曰、導引の法は保養中の一事なり。人の心はつねに靜なるべし。身はつねに動かすべし。終日安坐すれば病生じやすし。久立、久行より、久臥、久坐は、尤人に害あり。

導引の法を毎日行へば、氣をめぐらし、食を消して、

滯氣を生ぜず。朝いまだおきざる時兩足をのべ、濁氣をはき出し、おきて坐し、頭を仰て、兩手をくみ、向へ張出し、上に向ふべし。齒をしば〳〵たゝき、左右の手にて項をかはる〳〵おす。其次に兩肩をあげ、くびを縮め目をふさぎて、俄に肩を下へさぐる事、三度。次に面を兩手にて度々なで下し、目を目がしらより目じりにしば〳〵なで、鼻を兩手の中指にて六七度なで、耳輪を兩手の兩指にて挾み、なで下す事六七度、兩手の中指を兩耳に入、さぐり、しばしふさぎて兩へひらき、兩手をくみ、左へ引ときは、かうべ右をかへり見、右へ引ときは、左へかへりみる。如此する事各三度。次に手の背にて左右の腰の上、京門のあたりをすぢかひに下に十餘度なで下し、次に兩手を以腰を按す。兩手の掌にて、腰の上下をしば〳〵なで下す。是食氣をめぐらし、氣を下す。次に手を以、臀の上をすぢかひに打事十餘度。次に股膝をなでくだし、兩手をくんで三里の邊をかゝへ、足を先へふみ出し、左右の手を前へ引、左右の足ともに、如此する事しば〳〵すべし。次に左右の手を以、左右の脛の表裏をなで下ろす事數度。次に足の心を湧泉の穴と云。片足の五指を片手にてにぎり、湧泉の穴を左手にて右をなで、右手にて左をなづる事、各數十度。又兩足の大指をよく引、殘る指をもひねる。是術者のする導引の術なり。閑暇ある人は日々かくの如す。又奴婢兒童にをしへて脚をなでさせ、足心をしきりにすらせ、熱生じてやむ。又足の指を引しむ。朝夕如此すれば、氣下り、氣めぐり、足の痛を治す。甚益あり。遠方へ歩行せんとする時、又は歩行して後、足心を右のごとく按すべし。膝より下のはぎのおもてうらを、人をして手を以、しば〳〵なでくださせ、足の甲をなで、其後足のうらをしきりに多くなで、足の十指を引すれば、氣を下しめぐらす。みづからするは尤よし。是良

法なり。

氣のよくめぐりて快き時に、導引按摩すべからず。又冬月按摩をいむ事、內經に見えたり。身を勞動して氣上る病には、導引、按摩ともにあしゝ。只身をしづかに動かし、步行する事は四時ともによし。尤飯後によろし。湧泉の穴をなづる事も、四時ともによし。

髮はおほくけづるべし。氣をめぐらし、上氣をくだす。櫛の齒しげきは、髮ぬけやすくしてあしゝ。牙齒はしば〳〵たゝくべし。齒をかたくし蟲はます。時々兩の手を合せすりてあたゝめ、兩眼をあたゝめのすべし。目を明らかにし、風をさり、よつて髮きはより、下額と面を上より下になづる事二七遍、古人、兩手はつねに面に在べしと云へるは、時々兩手にて面をなづべしとなり。如此すれば、氣をめぐらし、上氣をくだし、面色をうるはしくす。左右の中指を以、鼻の兩わきを多くなで、兩耳の根を多くなづべし。

五更におきて坐し、一手にて足の五指をにぎり、一手にて足の心をなでさする事、久しくすべし。如此して足心熱せば、兩手を用ひて、兩足の指をうごかすべし。右の法奴婢にも命じて、かくのごとくせしむ。或云、五更にかぎらず、每夜おきて坐し、如此する事久しければ、足の病なし。上氣を下し、足よわく、立がたきを治す久しくしておこたらざれば、脚のよわきをつよくし、足の立かぬるをよくいやす。甚しるしある事を古人いへり。養老壽親書及東坡が說にも見えたり。

臥す時童子に手を以合せすらせ、熱せしめて、わが腎堂を久しく摩しめ、足心をひさしく摩しむべし。みづから如此するもよし。又腎堂の下、臀の上をしづかにうたしむべし。

每夜ふさんとするとき、櫛にて髮をしきりにけづり、湯にて足を洗ふべし。是よく氣をめぐらす。又臥

にのぞんて、熱茶に鹽を加へ、口をすゝぐべし。口中を滑くし、牙歯を堅くす。下茶よし。

入門に曰、年四十以上は、事なき時はつねに目をひしぎて宜し。要事なくんば開くべからず。

衾爐は爐上に櫓をまうけ、衾をかけて火を入、身をあたゝむ。俗に、こたつと云。是にあたれば、身をあたゝめ過し、氣ゆるまり、身おこたり、氣を上げ、目をうれふ。只中年以上の人は火をぬるくしてあたり、寒をふせぐべし。足を出して箕踞すべからず。わかき人は用る事なかれ。わかき人は嚴寒の時、只爐火に對し、又たき火にあたるべし。身をあたゝめ過すべからず。

凡衣をあつくき、あつき火にあたり、あつき湯に浴し、久しく浴し、熱物を食して身をあたゝめ過せば、氣外にもれて、氣へり、氣のぼる。是皆人の身に大害あり、いましむべし。

貴人の前に久しく侍べり、或公廨に久しく坐して足しびれ、にはかに立事ならずして、たふれふす事あり。立んとする前より、かねてみづから足の左右の大指を、しば／＼動し、のべかゞめすべし。かやうにすれば、しびれなえずして、立がたきのうれひなし。平日時々両足の大指を、のべかゞめきびしくして、ならひとなれば、轉筋のうれひなし。又轉筋したる時も、足の大指をしば／＼動かせばやむ。是急を治するの法なり。しるべし。上氣する人も、両足をのべて、大指をしば／＼動すべし。氣下る。此法又人に益あり。

頭邊に火爐をおくべからず。氣上る。

東垣が曰、にはかに風寒にあひて、衣うすくば、一身の氣をはりて、風寒をふせぎ、肌に入らしむべからず。

めがねを靉靆と云。留青日札と云書に見えたり。又眼鏡と云。四十歳以後は早くめがねをかけて、眼力を養ふべし。和水晶よし。ぬぐふにきぬを以て、

両指にてさしはさみて拭ぐふべし。或羅紗を以拭ぐふ。硝子はくだけやすし。水晶におとれり。硝子は、用心にてぬぐふべし。

牙齒をみがき目を洗ふ法　朝ごとにまづ熱湯にて目を洗ひあたゝめ、鼻中をきよめ、次に温湯にて口をすゝぎ、昨日よりの牙齒の滞を吐すて、ほしてかはける塩を用ひて、上下の牙齒と、はぐきをすりみがき、温湯をふくみ、口中をすゝぐ事二三十度、其間にまづ別の碗に温湯を、あら布の小篩を以こして入れ置、次に手と面をあらひをはりて、口にふくめる塩湯を、右のあら布の小ふるひにはき出し、こして碗に入、其塩湯を以口を洗ふ事、左右各十五度、其後べちに入置たる碗の湯にて目を洗ひ、口をすゝぐべし。是にてをはる。毎朝かくのごとくにして、おこたりなければ、久しくして牙齒うごかず。老てもおちず。蟲くはず。目あきらかにして、老にいたりても目の病なく、夜細字をよみ書く。是目と齒とをたもつ良法なり。こゝろみて其しるしを得たる人多し。予も亦此法によりて、久しく行なふゆゑ、そのしるしに今八十三歳にいたりて、猶夜細字をかきよみ、牙齒固くして一もおちず。目と齒に病なし。毎朝かくのごとくすれば、久しくして後は、ならひてむづかしからず、牙杖にて牙齒をみがく事を用ひず。

古人の曰、齒の病は胃火ののぼる也。毎日時々牙をたゝく事三十六度すべし。齒かたくなり、蟲くはず。齒の病なし。

わかき時齒のつよきをたのみて、堅き物を食ふべからず。梅楊梅の核などかみわるべからず。後年に齒早くおつ。細字を多くかけば、目と齒とを損ず。

牙杖にて牙根をふかくさすべからず。根うきてうごきやすし。

寒月はおそくおき、暑月は早くおくべし。暑月も風にあたり臥すべからず。ねぶりの内に風にあたる

べからず。ねぶりの内に、扇にてあふがしむべからず。

熱湯にて口をすゝぐべからず。歯を損ず。

千金方曰、食しをはるごとに、手を以、面をすり、腹をなで、津液を通流すべし。行歩する事数百歩すべし。飲食して即臥せば百病生ず。飲食して仰きに臥せば氣痞となる。

醫説曰、食して後體倦むとも、即寝る事なかれ。身を運動し、二三百歩しづかに歩行して後、帯をとき、衣をくつろぎ、腰をのべて端坐し、兩手にて心腹を按摩して、たて横に往来する事、二十遍、又兩手を以、わき腹の間よりおさへなでゝ下る事。數十遍ばかりにして、心腹の氣ふさがらしめず。食氣手に随って消化す。

目鼻口は面上の五竅にて、氣の出入する處、氣もれやすし。多くもらすべからず。尾閭は精氣の出る所なり。過てもらすべからず。肛門は糞氣の出る所、通利ありて清泄をいむ。凡此七竅皆とぢかためて、多く氣をもらすべからず。只耳は氣の出入なし。然ども久しくきけば神をそこなふ。

瓦火桶と云物京都に多し。桐火桶の製に似て大なり。瓦にて作る。高さ五寸四分、足は此外也。縦のわたり八寸三分、横のわたり七寸、縦横少長短あるべし。式形まるくして、縦横なきもよし。上の形まるき事桐火桶のごとし。めぐりにすかしまどありて火氣をもらすべし。上に口あり。ふたあり。ふたの廣さよこ三寸、たて三寸餘なるべし。まるきもよし。ふたに取手あり。ふた二三の内、一は取手なきがよし。やはらかなる灰を入置、用ひんとする時、宵より小なる炭火を二三入て、臥さむとする前より、早く衾の下に置、ふして後足をのべてあたゝむべし。上氣する人は早く遠ざくべし。足あたゝまらば火桶を足にてふみ遠ざけ、足を引てかゞめふすべし。翌朝おきんとする時、又足をのべてあ

たゝむべし。又ふたの熱きを木綿袋に入て、腹と腰をあたゝむ。ふた二三こしらへ置、とりかへて後腰をあたゝむべし。取手なきふたを以ては、こしをあたゝむ。こしの下にしくべし。温石より速に熱くなりて自由なり。急用に備ふべし。腹中の食滯氣滯をめぐらして、消化しやすき事、温石並藥力よりはやし。甚要用の物なり。此事しれる人すくなし。

二便

うゑては坐して小便し、飽ては立て小便すべし。

二便は早く通じて去べし。こらふるは害あり。もしは不意にいそがしき事出來ては、二便を去べきいとまなし。小便を久しく忍べば、たちまち小便ふさがりて、通せざる病となる事あり。是を轉脬と云。又淋となる。大便をしば〳〵忍べば氣痔となる。又大便をつとめて努力すべからず。氣もり、目あしく、心さわぐ。害多し。自然に任すべし。只津液を生じ、身體をうるほし、腸胃の氣をめぐらす藥をのむべし。麻仁、胡麻、杏仁、桃仁など食ふべし。秘結する食物、糯、柿、芥子など禁じてくらふべからず。大便秘するは大なる害なし。小便久しく秘するは危し。

常に大便秘結する人は、毎日厠にのぼり、努力せずして、成べきほどは少づゝ通利すべし。如此すれば久しく秘結せず。

日月星辰北極神廟に向つて、大小便すべからず。又日月のてらす地に小便すべからず。凡天神地祇人鬼おそるべし。あなどるべからず。

洗浴

湯浴はしば〳〵すべからず。温氣過て肌開け、汗出で氣へる。古人十日に一たび浴す。むべなるかな。ふかき盤に温湯少し入て、しばし浴すべし。湯あ

さければ温過ずして氣をへらさず。盤ふかければ風寒にあたらず。深き温湯に久しく浴して、身をあたゝめ過すべからず。身熱し、氣上り、汗出、氣へる。甚害あり。又甚温なる湯を肩背に多くそゝぐべからず。

湯に浴するは害あり。冷熱はみづから試みて沐浴すべし。快にまかせて熱湯に浴すべからず。氣上りてへる。殊に目をうれふる人、こらへたる人、熱湯に浴すべからず。

暑月の外、五日に一度沐ひ、十日に一度浴す。是古法なり。夏月に非ずして、しば〳〵浴すべからず。氣快といへども氣へる。

あつからざる温湯を少盥に入て、別の温湯を肩背より少しづゝそゝぎ、早くやむれば氣よくめぐり、食を消す。寒月は身にあたゝまり、陽氣を助く。汗を發せず。如此すれば、しば〳〵浴するも害なし。しば〳〵浴するには肩背は湯をそゝぎたるのみにて、垢を洗はず、只下部を洗ひて早くやむべし。久しく浴し、身を温め過すべからず。飽ては沐ふべからず。うゑては浴すべからず。

浴湯の盤の寸尺の法、曲尺にて竪の長二尺九寸、横のわたり二尺。右何もめぐりの板より内の寸なり。ふかさ一尺三寸四分、めぐりの板あつさ六分、底は猶あつきがよし。ふたありてよし。皆杉の板を用ゆ。寒月は上とめぐりに風をふせぐかこみすべし。盤淺ければ風に感じやすく、冬はさむし。夏も盤淺ければ、湯あふれ出てあしゝ。湯は冬もふかさ六寸にすぐべからず。夏はいよ〳〵あさかるべし。世俗に水風爐とて、大桶の傍に銅爐をくりはめて、桶に水ふかく入て、火をたき湯をわかして浴す。水ふかく湯熱きは身を温め過し、汗を發し、氣を上せへらす。大に害有。別の大釜にて湯をわかして入れ、湯あさくして熱からざるに入り、早く浴しやめて、あたゝめ過さゞれば害なし。桶を

出んとする時、もし湯ぬるくして身あたゝまらずば、くりはめたる爐に火を少したきてよし。湯あつくならんとせば、早く火を去べし。如レ此すれば害なし。

泄痢し、及食滯腹痛に、温湯に浴し、身體をあたゝむれば、氣めぐりて病いゆ。甚しるしあり。初發の病には、藥を服するにまされり。

身に小瘡ありて熱湯に浴し、浴後風にあたれば肌をとぢ、熱内にこもりて小瘡も肌の中に入て熱生じ、小便通せず腫る。此症甚危し。おほくは死す。つゝしんで熱湯に浴して後風にあたるべからず。俗に熱湯にて小瘡を内にたでこむると云。左にはあらず。熱湯に浴し、肌表開きたる故に、風に感じやすし。涼風にて熱を内にとづる故、小瘡も共に内に入るなり。

沐浴して風にあたるべからず。風にあはゞはやく手を以、皮膚をなでるべし。

女人經水來る時、頭を洗ふべからず。

温泉は諸州に多し。入浴して宜しき症あり。あしき症あり。よくもなくあしくもなき症有。凡此三症有。よくゑらんで浴すべし。湯治してよき病症は外症なり。打身の症、落馬したる病、高き所より落て痛める症、疥癬など皮膚の病、金瘡、はれ物の久しく癒がたき症、およそ外病には神效あり。又中風、筋引つり、しゞまり、手足しびれ、なえたる症によし。内症には相應せず。されども氣鬱、不食、積滯、氣血不順など、凡虛寒の病症は湯にあたゝめて、氣めぐりて宜しき事あり。外症の速に效あるにはしかず、かろく浴すべし。又入浴して益もなく害もなき症多し。是は入浴すべからず。又入浴して大に害ある病症あり。ことに汗症、虛勞、熱症に尤いむ。妄に入浴すべからず。湯治して相應せず、他病おこり死せし人多し。愼しむべし。此理をしらざる人、湯治は一切の病によしとおも

ゝは大なるあやまり也。本草の陳藏器の說考みるべし。湯治の事をよくとけり。凡入浴せば實症の病者も一日に三度より多きをいむ。虛人は一兩度なるべし。日の長短にもよるべし。しげく浴する事甚いむ。つよき人も湯中に入て、身をあたゝめ過すべからず。はたにこしかけて湯を杓にてそゝぐべし。久しからずして早くやむべし。あたゝめ過し、汗を出すべからず。大にいむ。毎日かろく浴し、早くやむべし。日數は七日二七日なるべし。是を俗に一廻二廻と云。溫泉をのむべからず。毒あり。金瘡の治のため、湯浴して瘡癒んとす。然るに溫泉の相應せるを悅んで飮まば、いよ〳〵早くいえんとおもひてのんだりしが、瘡大にやぶれて死せり。

湯治の間、熱性の物を食ふべからず。大酒大食すべからず。時々步行し身をうごかし、食氣をめぐらすべし。湯治の內、房事をおかす事大にいむ。湯よりあがりても十餘日いむ。灸治も同じ。湯治の間、又湯治の後十日ばかり補藥をのむべし。其間性よき魚鳥の肉を少づゝ食して、藥力をたすけ、脾胃を養ふべし。生冷性あしき物食すべからず。又大酒大食をいむ。湯治しても後の保養なければ益なし。

海水を汲んで浴するには、井水か河水を半入て、等分にして浴すべし。然らざれば熱を生ず。

溫泉ある處にいたりがたき人は、遠所に汲よせて浴す。汲湯と云。寒月は水の性損せずして、是を浴せば少益あらんか。しかれども溫泉の地よりわき出たる溫熱の氣を失ひて、陽氣きえつきて、くさりたる水なれば、淸水の新に汲めるよりは性おとるべきかといふ人あり。

養生訓卷之五終

養生訓巻之六

愼レ病

病は生死のかゝる所人身の大事也聖人の愼給ふ事むべなるかな

古語に豈作ニ病思一云意は、無病の時、病ある日のくるしみを常に思ひやりて、風寒暑濕の外邪をふせぎ、酒食好色の内欲を節にし、身體の起臥動靜をつゝしめば病なし。又古詩曰ニ、安閑常思ニ病苦時一云意は、病なくて安閑なる時に、初病に苦しめる時を常に思ひ出してわするべからずと也。無病の時愼ありて、恣ならざれば病生ぜず。若病おこりて良薬を服し、鍼灸をするにまされり。邵康節の詩に、その病後能く薬を服せむより、病前能自防ぐにしかずといへるがごとし。

病なき時、かねてつゝしめば病なし。病おこりて後薬を服しても、病癒がたく、癒る事おそし。小慾をつゝしまざれば大病となる。小慾をつゝしむ事はやすし。大病となりては苦しみ多し。かねて病苦を思ひやり、後の禍をおそるべし。

古語に、病は少癒るに加はるといへり。病少いゆればが快きをたのんでおこたりてつゝしまず。少快しとて飲食、色慾など恣にすれば、病かへつておもくなる。少いえたる時彌かたくおそれつゝしみて、少のやぶれなくおこたらざれば、病早くいえて再發のわざはひなし。此時かたくつゝしまざれば後悔すとも益なし。

千金方曰ニ、冬温なる事を極めず、夏涼き事をきはめず、凡一時快き事は必後の災となる。

病生じては心のうれひ身の苦み甚し。其上醫をまねき、薬をのみ、灸をし、針をさし、酒をたち、食をへらし、さま〴〵に心をなやまし、身をせめて、病を治せんとせんよりは、初に内欲をこらへ、外邪をふせげば、病おこらず。薬を服せず、針灸せずして、身のなやみ、心の苦みなし。初しばしの間つゝしみしのぶは、少の心づかひなれど、後の患

なきは大なるしるしなり。後に薬と針灸を用ひ、酒食をこらへつゝしむは、その苦み甚しけれど、益少なし。古語に終をつゝしむ事は、始においてせよといへり。萬の事始によくつゝしめば、後に悔なし。養生の道ことさらかくのごとし。

飲食色慾の内欲をほしいまゝにせずして、かたく愼み、風寒暑濕の外邪をおそれ防がば、病なくして薬を用ひずともうれひなかるべし。もし慾をほしいまゝにしてつゝしまず、只脾腎を補ふ。薬治と食治とを頼まば、必しるしなかるべし。

病あらん、養生の道をば、かたく愼しみて、病をばうれひ苦しむべからず。憂ひ苦しめば、氣ふさがりて病くはゝり、病おもくてもよく養ひて久しければ、おもひしより、病いえやすし。病をうれひて益なし。只愼むに益あり。もし必死の症は天命の定れる所、うれひても益なし。人をくるしむるはおろかなり。

病を早く治せんとしていそげば、かへつてあやまりて病をます。保養はおこたりなくつとめて、いゆる事はいそがず、その自然にまかすべし。萬の事あまりよくせんとすれば返つてあしくなる。

居所、寝室はつねに風寒暑濕の邪氣をふせぐべし。

風寒暑は人の身をやぶる事はげしくして早し。濕は人の身をやぶる事おそくして深し。故に風寒暑は人おそれやすし。濕氣は人おそれず。人にあたる事ふかし。故に久しくしていえず。濕ある所を早く遠ざかるべし。山の岸近き所を遠ざかるべし。又土あさく、水近く、床ひきゝ處に坐臥すべからず。床を高くし、床の下の壁にまどを開きて、氣を通ずべし。新にぬりたる壁に近付て坐臥すべからず。濕にあたりて病となりていえがたし。或疫病をうれふ。おそるべし。文祿の朝鮮軍に、戰死の人はすくなく、疫死多かりしは、陣屋ひきくまばらにして、士卒寒濕にあたりし故也とぞ。居處

も寢屋も高くかはける所よし。是皆外濕をふせぐなり。一たび濕にあたればいえがたし。おそるべし。又酒茶湯水を多くのまず、瓜菓冷麪を多く食はざるは、是皆內濕をふせぐなり。夏月冷水を多くのみ、冷麪をしば〳〵食すれば、必內濕にやぶられ、痰瘧泄痢をうれふ。つゝしむべし。

傷寒を大病と云。諸病の內尤おもし。わかくさかんなる人も、傷寒、疫癘をわずらひ死ぬる人多し。おそるべし。かねて風寒暑濕をよくふせぐべし。初發のかろき時、早くつゝしむべし。

中風は外の風にあたりたる病には非ず、內より生ずる風にあたれる也。肥白にして氣すくなき人、年四十を過て氣衰ふる時、七情のなやみ、酒食のやぶれによつて、此病生ず。つねに酒を多くのみて腸胃やぶれ、元氣へり、內熱生ずる故、內より風生じて手足ふるひ、しびれなえてかなはず。口ゆがみて物いふ事ならず。是皆元氣不足する所なり。故にわかく氣つよき時は、此病なし。もしわかき人にもまれにあるは、必肥滿して氣すくなき也。酒多くのみ、內かはき熱して、風生ずるは、たとへば七八月に殘暑甚しくて、雨久しくふらざれば、地氣さめずして大風ふくが如し。此病下戸にはまれ也。もし下戸にあるは肥滿したる人か、或氣すくなきなり。手足なえしびれて不仁なるは、くち木の性なきが如し。氣血不足してちからなく、なえしびるゝ也。肥白の人、酒を好む人、かねて愼あるべし。

春は陽氣發生し、冬の閉藏にかはり、人の肌膚和して、表氣やうやく開く。然るに餘寒猶烈しくして、風寒に感じやすし。つゝしんで風寒にあたるべからず、感冒咳嗽の患なからしむべし。草木の發生するも、餘寒にいたみやすし。是を以て人も餘寒をおそるべし。時にしたがひ、身を運動し、陽氣を助けめぐらして發生せしむべし。

夏は發生の氣いよ／＼さかんにして、汗もれ、人の肌膚大に開く故、外邪入やすし。涼風に久しくあたるべからず。沐浴の後風に當るべからず。且夏は伏陰とて陰氣かくれて腹中にある故、食物の消化する事おそし。多く飲食すべからず。温なる物を食ひて脾胃をあたゝむべし。冷水を飲べからず。すべて生冷の物をいむ。冷麪多く食ふべからず。虚人は瀉泄のうれひおそるべし。冷水に浴すべからず。暑甚き時も冷水を以面目を洗へば、眼を損す。冷水にて手足洗ふべからず。睡中に扇にて人にあふがしむべからず。風にあたり臥べからず。夜外に臥べからず。夜外に久しく坐して露氣にあたるべからず。極暑の時も極て涼しくすべからず。日に久しくさらせる熱物の上に坐すべからず。

四月は純陽の月也。尤色慾を禁ずべし。雞雉など温熱の物食ふべからず。

四時の内、夏月尤保養すべし。霍亂中暑傷食泄瀉瘧痢の病、おこりやすし。生冷の飲食を禁じて愼んで保養すべし。夏月此病おこれば、元氣へりて大に勞す。

六七月酷暑の時は、極寒の時より元氣へりやすし、よく保養すべし。和味生脈散補氣湯醫學六要の新製清暑益氣湯など、久しく服して元氣の發泄するを收斂すべし。一年の内時令のために薬を服して、保養すべきは此時なり。東垣が清暑益氣湯は濕熱を消殺する方也。純補の劑にあらず、其病なくば服すべからず。

夏月古き井、深き穴の中に人を入べからず。毒氣多し。古井には先鷄の毛を入て、毛舞ひ下りがたきは是毒あり、入べからず。火をもやして入れて後入べし。又醋を熱くわかして多く井に入て後人入べし。夏至に井をさらえ水を改むべし。

秋は夏の間肌膚開け、七八月は殘暑も猶烈しければ、腠理いまだとぢず。表氣いまだ堅からざるに、秋

風すでにいたりぬれば、感じてやぶられやすし。愼んで風凉にあたり過すべからず。病ある人は八月殘暑退きて後、所々に灸して風邪をふせぎ、陽を助けて痰咳のうれひをまぬがるべし。

冬は天地の陽氣とぢかくれ、人の血氣をさまる時也。心氣を閑にし、をさめて保つべし。あたゝめ過して陽氣を發し、泄すべからず。上氣せしむべからず。衣服をあぶるに少あたゝめてよし。熱きをいむ。衣を多くかさね、又は火氣を以身をあたゝめ過すべからず。熱湯に浴すべからず。勞力して汗を發し、陽氣を泄すべからず。

冬至には一陽初て生ず。陽氣の微少なるを靜養すべし。勞動すべからず。此日公事にあらずんば外に出べからず。冬至の前五日後十日、房事を忌む。又灸すべからず。續漢書に曰、夏至水を改め冬至に火を改むるは瘟疫を去なり。

冬月は急病にあらずんば、針灸をすべからず。尤十二月を忌む。又冬月按摩をいむ。自身しづかに導引するは害なし。あらくすべからず。

除日には父祖の神前を掃除し、家內殊に臥室のちりをはらひ、夕は燈をともして明朝にいたり、家內光明ならしめ、香を所々にたき、かどにて爆竹し、火をたきて陽氣を助くべし。家族と爐をかこみ、和氣津々として、人とあらそはず、家人をいかりのゝしるべからず。父母尊長を拜祝し、家內上下打酒をのんで歌ひ樂しみ、終夜いねずして舊き歲をおくり、新き年をむかへて朝にいたる。是を守レ歲と云。

熱食して汗いでば、風に當るべからず。

凡人の身高き處よりおち、木石におされなどして、損傷したる處に灸をする事なかれ。灸をすれば藥を服してもしるしなし。又兵器にやぶられて血おほく出たる者は、必のんどかはくもの也。水をあたふべからず。甚あしゝ。又粥をのましむべか

ら ず、粥をのめば、血わき出で、必死ぬ。是等の事、かねてしらざればあるべからず。又金瘡打傷口開きたる瘡風にあたるべからず。扇にてもあふぐべからず。重症となり、或破傷風となる。

冬朝に出て遠くゆかば、酒をのんで寒をふせぐべし。空腹にして寒にあたるべからず。酒をのまざる人は粥を食ふべし。生薑をも食ふべし。陰霧の中遠く行べからず。やむ事を得ずして遠くゆかば、酒食を以防ぐべし。

雪中に跣にて行て、甚寒えたるに、熱湯にて足を洗ふべからず。火に早くあたるべからず。大寒にあたりて、卽熱物を食飲すべからず。

頓死の症多し。卒中風、中氣、中惡、中毒、中暑、凍死、湯火、食傷、乾霍亂、破傷風、喉痺、痰厥、失血、打撲、小兒の馬脾風等の症皆卒死す。此外又五絶とて五種の頓死あり。一には自くびる。二には打しにうたる。三には水におぼる。四には夜厭はる。五には婦人難産。是皆暴死する症なり。常の時方書を考へ、又其治法を良醫にたづねてしり置べし。かねて用意なくして、俄に所置を失ふべからず。

神怪奇異なる事、たとひ目前に見るとも、必鬼神の所爲とは云がたし。人に心病あり。眼病あり。此病あれば、實になき物目に見ゆる事多し。信じてまよふべからず。

擇醫

保養の道はみづから病を愼しむのみならず、又醫をよくえらぶべし。天下にもかへがたき父母の身、わが身を以、庸醫の手にゆだぬるはあやふし。醫の良拙をしらずして、父母子孫病する時に、庸醫にゆだぬるは、不孝不慈に比す。おやにつかふる者も、亦醫をしらざればあるべからずといへる程子の言むべなり。醫をえらぶには、わが身醫療に

達せずとも醫術の大意をしれらば、醫の好否(よしあし)をしるべし。たとへば書畫を能(よく)せざる人も、筆法をならひしれば、書畫の巧拙(こうせつ)をしるが如し。

醫は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救ふを以志とすべし。わが身の利養を專に志すべからず。天地のうみそだて給へる人をすくひたすけ、萬民の生死をつかさどる術なれば、醫を民の司命と云、きはめて大事の職分なり。他術はつたなしといへども、人の生命には害なし。醫術の良拙は人の命の生死にかゝれり、人を助くる術を以、人をそこなふべからず。學問にさときと才性ある人をえらんで醫とすべし。醫を學ぶ者、もし生れ付鈍(どん)にして、その才なくんば、みづからしりて、早くやめて醫となるべからず。不才なれば醫道に通せずして、天のあはれみ給ふ人を、おほくあやまりそこなふ事つみふかし。天道おそるべし。他の生業多ければ、何ぞ得手なるわざあるべし。それをつとめならふべし。醫生その術におろそかなれば、天道にそむき、人をそこなふのみならず。我が身の福(さいはひ)なく、人にいやしめらる。その術にくらくしてしらざれば、いつはりをいひ、みづからわが術をてらひ、他醫をそしり、人のあはれみをもとめ、へつらへるはいやしむべし。醫は三世をよしとする事、禮記に見えたり。醫の子孫相つゞきて其才を生れ付たらば、世々家業をつぎたるがよかるべし。如レ此なるはまれなり。三世とは父子孫にかゝはらず、師弟子相傳へて三世なれば、其業くはし、此說然るべし。もしその才なくば、醫の子なりとも醫とすべからず。他の業を習はしむべし。不得手(えて)なるわざを以て、家業とすべからず。

凡醫となる者は、先儒書を見、文義に通ずべし。文義通せざれば、醫書をよむちからなくして、醫學なりがたし。又經傳の義理に通ずれば、醫術の義理を知りやすし。故孫思邈(そんしばく)曰、凡爲二大醫一先須レ通二儒

書云、文曰、不ㇾ知ㇾ易不ㇾ可ㇾ以爲ㇾ醫。此言信すべし。諸藝をまなぶに、皆文學を本とすべし、文學なければ、わざ熟しても理にくらく、術ひきし。ひが事多けれど、無學にしてはわがあやまりをしらず。醫を學ぶに、殊に文學を基とすべし。文學なければ醫書をよみがたし、醫道は陰陽五行の理なる故、儒學のちから、易の理を以、醫道を明らむべし。しからざれば、醫書をよむちからなくして、醫道をしりがたし。

文學ありて醫學にくはしく、醫術に心をふかく用ひ、多く病になれて其變をしれるは良醫也。醫となりて醫學をこのまず、醫道に志なく、又醫書を多くよまず、多くよんでも、精思の工夫なくして理に通ぜず、或醫書をよんでも、舊說になづみて、時の變をしらざるは賤工也。俗醫利口にして、醫學と醫道とは別の事にて、學問は病を治するに用なしと云て、わが無學をかざり、人情になれ、世事に熟し、權貴の家にへつらひちかづき、虛名を得て、幸にして世に用ひらるゝ者多し。是をなづけて福醫と云、又時醫と云。是醫道にはうときけれど、時の幸ありて、祿位ある人を一兩人療して偶中すれば、其故に名を得て世に用らるゝ事あり。才德なき人の、時にあひ、富貴になるに同じ。およそ醫の世に用らるゝと用られざるとは、良醫のえらんで定むる所爲にはあらず。醫道をしらざる白徒のする事なれば、幸にして時にあひて、はやり行はるとて、良醫とすべからず。其術を信じがたし。

古人、醫也者意也といへり。云意は、意精しければ、醫道をしりてよく病を治す。醫書多くよんでも、醫道に志なく、意粗く工夫くはしからざれば、醫道をしらず、病を治するに拙きは醫學せざるに同じ。醫の良拙は醫術の精しきと、あらきとによれり。されども醫書をひろく見ざれば、醫道をくはしくしるべきやうなし。

醫とならば君子醫と成るべし、小人醫となるべからず。君子醫は人のためにす。人を救ふに志專一なる也。小人醫はわが爲にす、わが身の利養のみ志し、人をすくふに志專ならず。醫は仁術也。人を救ふを以志とすべし。是人のためにする君子醫也。人を救ふ志なくして、只身の利養を以志とするは、是わがためにする小人醫なり。醫は病者を救はんための術なれば、病家の貴賤貧富の別なく、心を盡して病を治すべし。病家よりまねかば、貴賤をわかたず、はやく行べし。遲々すべからず。人の命は至りておもし、病人をおろそかにすべからず。是醫となれる職分をつとむる也。小人醫は、醫術流行すれば我身にほこりたかぶりて、貧賤なる病家をあなどる。是醫の本意を失へり。

或人の曰、君子醫となり、人を救はんが爲にするは、まことに然るべし。もし醫となりて仲景東垣などの如き富貴の人ならば、利養のためにせずしても、貧窮のうれひなからん。貧家の子わが利養の爲にせずして、只人を救ふに專一ならば、飢寒のうれひまぬがれがたかるべし。答て曰、わが利養の爲に醫となる事、たとへば貧賤なる者、祿のため君につかふるが如し。まことに利祿のためにすといへども、一たび君につかへては、わが身をわすれて、ひとへに君のためにすべし。節義にあたりては、恩祿の多少によらず、一命をもすつべし。是人の臣たる道なり。よく君につかふれば、君恩によりて、祿は求めずして其內にあり。一たび醫となりては、ひとへに人の病をいやし、命を助くるに心專一なるべき事、君につかへてわが身をわすれ、專一に忠義をつとむる如くなるべし。わが身の利養をはかるべからず。然ればよく病をいやし、人をすくはゞ、利養を得る事は、求めずしてその內にあるべし。只專一に醫術をつとめて、利養をばむさぼるべからず。

醫となる者、家にある時は、つねに醫書を見て其理をあきらめ、病人を見ては、又其病をしるせる方書をかんがへ合せ、精しく心を用ひて藥方を定むべし。病人を引うけては、他事に心を用ひずして、只醫書を考へ、思慮を精しくすべし。凡醫は醫道に專一なるべし。他の珍好あるべからず。專一ならざれば業精しからず。

醫師にあらざれども、藥をしれば身をやしなひ、人をすくふに益あり。されども醫療に妙を得る事は、醫生にあらざれば、道に專一ならずして成がたし。みづから醫藥を用ひんより、良醫をえらんでゆだぬべし、醫生にあらずして、みだりにみづから藥を用ふべからず。只略醫術に通じて、醫の良拙をわきまへ、本草をかんがへ、藥性と食物の良毒をしり、方書をよんで、日用急切の藥を調和し、醫の來らざる時急病を治し、醫の遠き里に居、或旅行して小疾をいやすは、身をやしなひ、人をすくふの益あれば、いとまある人は、すこし心を用ふべし。醫術をしらずしては、醫の良術をもわきまへず、只世に用ひらるゝを良工とし、用ひられざるを賤工とする故に、醫説に、明醫は時勢にしかずといへり。醫の良術をしらずして、庸醫に父母の命をゆだね、わが身をまかせて、醫にあやまられて、死したるためし世に多し。おそるべし。

士庶人の子弟いとけなき者、醫となるべき才あらば、早く儒書をよみ、其力を以醫書に通じ、明師にしたがひ、十年の功を用て、内經、本草以下歷代の明醫の書をよみ學問し、やうやく醫道に通じ、又十年の功を用ひて、病者に對して、病症を久しく歷見して習熟し、近代の日本の先輩の名醫の療術をも考しり、病人に久しくなれて時變を知り、日本の風土にかなひ、其術ますます精しくなり、醫學と病功と、前後凡二十年の久きをつみなば、必良醫となり、病を治する事驗ありて、人をすくふ事多か

らん。然らばおのづから名もたかくなりて、高家大人の招請あり、士庶人の敬信もあつくば、財祿を得る事多くして、一生の受用ゆたかなるべし。此ノ如質によくつとめて、わが身に學功そなはらば、名利を得ん事、たとへば俯して地にあるあくたをひろふが如く、たやすかるべし。是士庶の子弟、貧賤なる者の名利を得る好計なるべし。如レ此なる良工は是國士の寶なり。公侯は早くかゝる良醫をしたて給ふべし。醫となる人、もし庸醫のしわざをまなび、愚俗の言を信じ、醫學をせずして俗師にしたがひ、もろこしの醫書をよまず、病源と脈とをしらず、本草に通せず、藥性をしらず、醫術にくらくして、只近世の日本の醫の作れる國字の醫書を二三卷考がへ、藥方の功能を少覺え、よききぬきて、我が身のかたちふるまひをかざり、辯説を巧にし、人のもてなしをつくろひ、富貴の家にへつらひしたしみ、時の幸を求めて、福醫のしわざをうらやみならはゞ、身ををはるまで草醫なるべし。かゝる草醫は醫學すれば、かへつて療治に拙しと云まはりて、學問ある醫をそしる。醫となりて、天道の子としてあはれみ給ふ萬民の、至りておもき生命をうけとり、世間きはまりなき病を治せんとして、如レ此なる卑狹なる術を行ふは云かひなし。

俗醫は、醫學をきらひてせず。近代名醫の作れる和字の醫書を見て、藥方を四五十つかひ覺ゆれば、醫道をばしらざれども、病人に馴て、尋常の病を治する事、醫書をよんで病になれざる者にまされり。たとへば弟稗の熱したるは、五穀の熱せざるにまされるが如し。されど醫學なき草醫は、やゝもすれば虚實寒熱を取ちがへ、實々虚々のあやまり、目に見えぬわざはひ多し。寒に似たる熱症あり。熱に似たる寒症あり。虚に似たる實症あり。實に似たる虚症あり。內傷外感甚相似たり。如レ此まぎらは

しき病多し。根ふかく見知がたきむづかしき病、又つねならざるめづらしき病あり。かやうの病を治する事は、ことさらなりがたし。

醫となる人は、まづ志を立て、ひろく人をすくひ助くるに、まことの心をむねとし、病人の貴賤によらず、治をほどこすべし。是醫となる人の本意也。其道明らかに、術くはしくなれば、われよりしひて人にてらひ、世に求めざれども、おのづから人にかしづき用られて、さいはひを得る事かぎりなかるべし。もし只わが利養を求るがためのみにて、人をすくふに志なくば、仁術の本意をうしなひて、天道神明の冥加あるべからず。

貧民は醫なき故に死し、愚民は庸醫にあやまられて、死ぬる者多しと、古人いへり。あはれむべし。

醫術はひろく書を考へざれば、事をしらず。精しく理をきはめざれば、道を明らめがたし。博と精とは醫を學ぶの要なり。醫を學ぶ人は初より大に志ざし、博くして又精しかるべし。二ながら備はらずんばあるべからず。志小さきに心やすくすべからず。

日本の醫、中華に及ばざるは、まづ學問のつとめ、中華の人に及ばざれば也。ことに近世は國字の方書多く世に刊行せり。古學を好まざる醫生は、からの書はむつかしければ、きらひてよまず。かな書の書をよんで、醫の道是にて事足りぬと思ひ、古の道をまなばず。是日本の醫の醫道にくらくして、つたなきゆゑなり。むかし伊路波の國字いできて、世俗すべて文盲になれるが如し。

歌をよむに、ひろく歌書をよんで、歌學ありても歌の下手はあるもの也。歌學なくして上手は有まじきなりと、心敬法師いへり。醫術も亦かくの如し。醫書を多くよんでも、つたなき醫はあり。それは醫道に心を用ずして、くはしからざればなり。醫書をよまずして、上手はあるまじき也。からやまとに博學多識にして、道しらぬ儒士は多し。博く學は

ずして、道しれる人はなきが如し。

醫は仁心を以て行ふべし。名利を求むべからず。病おもくして、藥にて救ひがたしといへども、病家より藥を求むる事切ならば、多く藥をあたへて、其心をなぐさむべし。わがよく病を見付て、生死をしる名を得んとて、病人に藥をあたへずして、すてころすは情なし。醫の藥をあたへざれば、病人いよいよちからをおとす理なり。あはれむべし。

醫を學ぶに、ふるき法をたづねて、ひろく學び、古方を多く考ふべし。又今世の時運を考へ、人の強弱をはかり、日本の土宜と民俗の風氣を知り、近古わが國先輩の名醫の治せし迹をも考へて、治療を行ふべし。いにしへに本づき、今に宜しくば、あやまりすくなかるべし、古法をしらずして、今の宜に合せんとするを鑿と云。古法にかゝはりて今の宜に合ざるを泥と云。其あやまり同じ。古にくらく、今に通せずしては、醫道行はるべからず。

聖人も温故知新以て師とすべしと、のたまへり。醫師も亦かくの如くなるべし。

藥の病に應ずるに適中あり、偶中あり。適中は良醫の藥必應ずる也。偶中は庸醫の藥病に相應する有り。是其人に幸ある故に、術はつたなけれども、幸にして病に應じたる也。もとより庸醫なれば、相應せざる事多し。良醫の適中の藥を用ふべし。庸醫は、たのもしげなし。偶中の藥はあやふし。適中は能射る者の的にあたるが如し。偶中は拙き者の不慮に的に射あつるが如し。

醫となる者、時の幸を得て、富貴の家に用らるゝ福醫をうらやみて、醫學をつとめず、只權門につねに出入し、へつらひ求めて、名利を得る者多し。醫術のすたりて拙くなり、庸醫の多くなるは此故なり。諸藝には日用のため無益なる事多し。只醫術は有用の事也。醫生にあらずとも少學ぶべし。凡儒者は天下の事皆しるべし。故に古人醫も儒者は一事と

いへり。ことに醫術は、わが身をやしなひ、父母につかへ、人を救ふに益あれば、もろ〳〵の雜藝よりも最益多し。しらずんばあるべからず。然ども醫生に非ず、醫術に習はずして、妄に藥を用ふべからず。

醫書は、内經本草を本とす。内經を考へざれば、醫術の理、病の本源をしりがたし。本草に通ぜざれば、藥性をしらずして方を立がたし。且食性をしらずして宜禁を定がたく、又食治の法をしらず。此二書を以醫學の基とす。二書の後、秦越人が難經、張仲景が金匱要略、皇甫謐が甲乙經、巣元方が病源候論、孫思邈が千金方、王燾が外臺秘要、羅謙甫が衛生寶鑑、陳無擇が三因方、惠民局の和劑局方、證類、本草序例、錢仲陽が書、劉河間が書、朱丹溪が書、李東垣が書、楊珣が丹溪心法、劉宗厚が醫經小學、玉機、微義、熊宗立が醫書大全、周憲王の袖珍方、周良采が醫方選要、薛立齋が醫案、王綸が醫林集要、樓英が醫學綱目、虞天民が醫學正傳、李挺が醫學入門、江篁南が名醫類案、呉崑が名醫方考、龔廷賢が書數種、汪石山が醫學原理、高武が鍼灸聚英、李中梓が醫宗必讀、頤生微論、藥性解、内經知要あり。又薛立齋が十六種あり。醫統正脈は四十三種あり。歴代名醫の書をあつめて一部とせり。是皆醫生のよむべき書也。年わかき時先儒書を記誦し、其力を以右の醫書をよんで能記すべし。

張仲景は百世の醫祖也。其後歴代の明醫すくなからず。各發明する處多しといへ共、各其説に偏僻の失あり。取捨すべし。孫思邈は又養生の祖なり。千金方をあらはす。養生の術も醫方も皆宗とすべし。老莊を好んで異術の人なれど、長ずる所多し。醫生にすゝむるに、儒書に通じ、易を知るを以す。盧照鄰に答へし數語皆至理あり。此人後世に益あり。醫術に功ある事、皇甫謐、葛洪、陶弘景等の

諸子に越たり。壽百餘歳なりしは、よく保養の術に長せし効なるべし。

むかし日本に方書の來りし初は、千金方なり。近世醫書板行せし初は醫書大全なり。此書は明の正統十一年に熊宗立編む。日本に大永の初來りて、同八年和泉國の醫阿佐井野宗瑞刊行す。活板也。正德元年まで百八十四年也。其後活字の醫書やうやく板行す。寛永六年已後扁板鏤刻の醫書漸多し。

凡諸醫の方書偏說多し。專一人を宗とし、一書を用ひては治を爲しがたし。學者多く方書をあつめ、ひろく異同を考へ、其長ずるを取て其短なるをすて、醫療をなすべし。此後才識ある人世を助るに志あらば、廣く方書をゑらび、其重復をけづり、其繁雜なるを除き、其粹美なるをあつめて一書と成さば、純正なる全書となりて大なる世寶なるべし。此事は其人を待て行はるべし。凡近代の方書醫論脈法藥方同じき事甚多し。殊龔廷賢が方書數部同じ事多くして、重出しげく煩はし。無用の雜書亦多し。凡病にのぞんでは多く方書を檢する事煩勞なり。急病に對しにはかに廣く考へて、其相應せる良方をゑらびがたし。同事多く、相似たる書を多くあつめ考るも、いたづかはし。才學ある人は無益の事をなして暇をつひやさんより、かゝる有益の事をなして世を助け給ふべし。世に其才ある人豈になかるべきや。

局方發揮出て局方すたる。局方に古方多し。古を考ふるに用べし。廢つべからず。只烏頭附子等の燥劑を多くのせたるは用ふべからず。近古日本に醫書大全を用ふ。龔廷賢が方書流布して、東垣が書及醫書大全、其外の諸方を諸醫用ずして醫術せばくあらくなる。三因方、袖珍方、醫書大全、醫方選要、醫林集要、醫學正傳、醫學綱目、入門、方考、原理、奇効良方、證治準繩等、其外方書を多く考へ用ふべし。入門は醫術の大略備れる好書也。

龔廷賢が書のみ偏に用ふべからず。龔氏が醫療は明季の風氣衰弱の時宜に頗かなひて、其術世に行はれし也。日本にても亦しかり。しかるべき事は、えらんで所々取用ふべし。悉くは信ずべからず。其故いかんとなれば、雲林が醫術其見識ひきし。他人の作れる書を竊ひてわが作とし、他醫の治せし病功を奪てわが功とす。不經の書を作りて、人に淫ををしへ、紅鉛など云穢惡の物をくらふ事を人にすゝめて良藥とす。わが醫術をみづから衒ひ、自ほむ。是皆人の穢行なり。いやしむべし。

我よりまへに其病人に藥を與へし醫の治法、たとひあやまるとも、前醫をそしるべからず。他醫をそしり、わが術にほこるは小人のくせなり。醫の本意にあらず。其心ざまいやし。きく人に思ひ下さるゝもあさまし。

本草の内古人の説まち／＼にして、一やうならず。異同多し。其内にて考へ合せ、擇び用ゆべし。又藥物も食品も人の性によりて、病症によりて、宜不宜あり。一概に好否を定めがたし。

醫術も亦其道多端なりといへど、其要三あり。一には病論、二には脉法、三には藥方、此三の事をよく知べし。運氣經絡などもしるべしといへども、三要の次也。病論は内經を本とし、諸名醫の説を考ふべし。脉法は脉書數家を考ふべし。藥方は本草を本として、ひろく諸方書を見るべし。藥性にくはしからずんば、藥方を立がたくして、病に應ずべからず。又食物の良否をしらずんば、無病有病共に保養にあやまり有べし。藥性食性皆本草に精からずんば知がたし。

或曰、病あつて治せず、常に中醫を得るといへる、道理誠にしかるべし。然らば病あらば只上醫の藥を服すべし。中下の醫の藥は服すべからず。今時上醫は有がたし、多くは中下醫なるべし。藥をのまずんば醫は無用の物なるべしと云。答曰、しか

らず、病ありてすべて治せず。藥をのむべからずと云は、寒熱虛實など、凡病の相似てまぎらはしくうたがはしき、むづかしき病をいへり。淺薄なる治しやすき症は、下醫といへどもよく治す。或は傷咳嗽に參蘇飲、風邪發散するに香蘇散、敗毒散、藿香、正氣散、食滯に平胃散、香砂平胃散、かやうの類は、まぎれなくうたがはしからざる病なれば、下醫も治しやすし。藥を服して害なかるべし。右の症も藥しるしなき、むづかしき病ならば、藥を用ずして可也。

養生訓巻之六終

養生訓巻之七

用藥

人身病なき事あたはず。病あれば醫をまねきて治を求む。醫に上中下の三品あり。上醫は病を知り、脈を知り、藥を知る。此三知を以病を治して十全の功あり。まことに世の寶にしてその功良相につげる事古人の言のごとし。下醫は三知の力なし。妄に藥を投じて人をあやまる事多し。夫藥は補瀉、寒熱の良毒の氣偏なり。その氣の偏を用て病をせむる故に、人參の上藥をも妄に用ふべからず。その病に應ずれば良藥とす。必ずそのしるしあり。その病に應ぜざれば毒藥とす。たゞ益なきのみならず、また人に害あり。又中醫あり、病と脈と藥をしる事上醫に及ばずといへ共、藥は皆氣の偏にして妄に用ふべからざる事をしる。故にその病に應ぜざる藥を與へず。前漢書に班固が曰、有レ病不レ治常得二中醫一。

云意は、病あれども、もしその病を明らかにわきまへず、その脈を詳に察せず、その薬方を精しく定めがたければ、慎んでみだりに薬を施さず。こゝを以病あれども治せざるは中品の醫なり。下醫の妄に薬を用て人をあやまるにまされり。故に病ある時もし良醫なくば、庸醫の薬を服して身をそこなふべからず。只保養をよくし慎み薬を用ひずして、病のおのづから癒るを待べし。如此すれば薬毒にあたらずしてはやくいゆる病多し。死病は薬を用ひてもいきず。下醫は病の脈と薬をしらざれども、病家の求にまかせて、みだりに薬を用ひて多く人をそこなふ。人をたちまちにそこなはざれども、病を助けていゆる事おそし。中醫は上醫に及ばずといへども、しらざるを知らずとして、病を慎んで妄に治せず。こゝを以、病あれども治せざるは中品の醫なりといへるを、古来名言とす。病人も亦此説を信じ、したがつて應ぜざる薬を服すべからず。

世俗は病あれば急にいえん事を求て、醫の良賤を えらばず、庸醫の薬をしきりにのんで、かへつて身をそこなふ。是身を愛すといへども、實は身を害する也。古語に曰、病傷猶可療、薬傷最難醫。然らば薬をのむ事、つゝしみておそるべし。孔子も季康子が薬を贈れるをいまだ達せずとてなめ給はざるは、是疾をつゝしみ給へばなり。聖人の至教則とすべし。今其病源を審にせず、脈を精しく察せず、病に當否を知らずして薬を投ず。薬は皆偏毒あればおそるべし。

孫思邈曰、人故なくんば薬を餌ふべからず。偏に助くれば藏氣不平にして病生ず。

劉仲達が鴻書に、疾あつてもし明醫なくば薬をのまず、只病のいゆるをしづかにまつべし。身を愛し過し、醫の良否をえらばずして、みだりに早く薬を用る事なかれ。古人病あれども治せざるは中醫を得ると云、此言至論也といへり。庸醫の薬は、病に應

する事はすくなく、應せざる事多し。藥は皆偏性ある物なれば、その病に應せざれば必毒となる。此故に一切の病にみだりに藥を服すべからず。病の災より藥の災多し。藥を不ㇾ用して養生を愼みてよくせば、藥の害なくして癒やすかるべし。

良醫の藥を用るは臨機應變とて、病人の寒熱虛實の機にのぞみ、其時の變に應じて宜に從ふ。必一法に拘はらず。たとへば善く戰ふ良將の、敵に臨んで變に應ずるが如し。かねてよりその法を定めがたし。時にのぞんで宜にしたがふべし。されども古法をひろくしりて、その力を以今の時宜にしたがひて變に應ずべし。古をしらずして只今の時宜に從がはんとせば、本なくして時宜に應ずべからず。故を溫ねて新をしるは良醫なり。

脾胃を養ふには、只穀肉を食するに相宜し。藥は皆氣の偏なり。參蓍、朮甘は上藥にて毒なしといへども、病に應せざれば胃の氣を滯らしめ、かへつて病を生じ、食を妨げて毒となる。いはんや攻擊のあらくつよき藥は、病に應せざれば大に元氣をへらす。此故に病なき時は只穀肉を以やしなふべし。穀肉の脾胃をやしなふによろしき事參蓍の補にまされり。故に古人の言に藥補は食補にしかずといへり。老人は殊に食補すべし、藥補はやむ事を得ざる時用ふべし。

藥をのまずしておのづからいゆる病多し。是をしらでみだりに藥を用て、藥にあてられて病をまし、食をさまたげ、久しくいえずして死にいたるも亦多し。藥を用ふる事つゝしむべし。

病の初發の時、症を明に見付ずんば、みだりに早く藥を用ふべからず。よく病症を詳にして後藥を用ふべし。諸病の甚しくなるは、多くは初發の時藥ちがへるによれり。おやまつて病症にそむける藥を用ふれば治しがたし。故に療治の要は初發にあり。病おこらば早く良醫をまねきて治すべし。症に

より、おそく治すれば、病ふかくなりて治しがたし。扁鵲が齊侯に告たるが如し。

丘處機が衛生の道ありて長生の藥なしといへるは、養生の道はあれど、むまれ付ざるいのちを長くする藥はなし。養生は只むまれ付たる天年をたもつ道なり。古の人も術者にたぶらかされて、長生の藥とて用ひし人多かりしかど、そのしるしなく、かへつて藥毒にそこなはれし人あり。是長生の藥なき也。ぬしく苦勞して長生の藥とて用ふれども益なし。信ずべからず。內慾を節にし、外邪をふせぎ、起居をつゝしみ、動靜を時にせば、生れ付たる天年をたもつべし。是養生の道あるなり。丘處機が說は千古の迷をやぶれり。此說信ずべし。凡うたがふべきをうたがひ、信ずべきを信ずるは迷をとく道なり。

藥肆の藥に眞僞あり。心を用ひてえらぶべし。性あしきと僞藥とを用ふべからず。僞藥とは眞ならざる似せ藥也。枸橘を枳殼とし、鷄腿兒を柴胡とするの類なり。又藥の良否に心を用ふべし。その病に宜しき良方といへども、藥性あしければ功なし。又藥の製法に心を用ふべし。藥性よけれ共修治法に背けば能なし。たとへば食物もその土地により、時節につきて味のよしあしあり。又よき品物も料理あしければ、味なくしてくはれざるが如し。こゝを以その藥性のよきをえらび用ひ、その製法をくはしくすべし。

いかなる珍味も、これを煮る法ちがひてあしければ味あしゝ。良藥も煎法ちがへば驗なし。此故藥を煎ずる法によく心を用ふべし。文火とはやはらかなる火也。武火とはつよき火なり。文武火とはつよからずやはらかならざるよきかげんの火なり。風寒を發散し、食滯を消導する類の瀉藥を利藥と云。利藥は武火にてせんじ、はやくにあげ、いまだ熟せざる時、生氣のつよきを服すべし。如此すれ

ば藥力つよくして邪氣にかちやすし。久しく煎じて熟すれば藥に生氣の力なくしてよわし。邪氣にかちがたし。補湯はやはらかなる文火にて、ゆるやかに久しく煎じつめてよく熟すべし。如此ならざれば純補しがたし。こゝを以利藥は生に宜しく、熟に宜しからず。補藥は熟に宜しくして、生に宜しからず。しるべし藥を煎ずるに此二法あり。

藥劑一服大小の分量、中夏の古法を考がへ、本邦の土宜にかなひて過不及なかるべし。近古仲井家には日本の土地民俗の風氣に宜しとて、藥の重さ八分を一服とす。醫家によりて一匁を一服とす。今の世、醫の藥劑は一服の重さ六七分より一匁に至る。一匁より多きは稀なり。中夏の藥劑は醫書を考ふるに、一服三匁より十匁に至。東垣は三匁を用ひて一服とせし事あり。中夏の人煎湯の水を用るは少く、藥一服は大なれば煎汁甚濃して藥力つよく病を治する事早しと云。然るに日本の藥如此小服なるは何ぞや。曰、日本の醫の藥劑小服なる故三あり。一には中華の人は日本人より生質堅に腸胃つよき故、飮食多く肉を多く食ふ。日本人は生つき薄弱にして腸胃よわく食すくなく、牛鳥犬羊の肉を食ふに宜しからず。かろき物をくらふに宜し。此故に藥劑も昔より小服に調合すと云。是一說なり。されども中夏の人、日本の人同じく是人なり。大小強弱少かはる共、日本人さほど大におとる事、今の醫の用る藥劑の大小の如く、三分の一、五分の一にはいたるべからず。然れば日本の藥小服なる事、如此なるべからずと云人あり。一說に或人の曰、日本は藥種ともし。わが國になき物多し、はるかなるもろこし、蠻國の異域に求め來るを買て價貴とし。大服なれば費多し。こゝを以藥劑を大服に合せがたし。ことに貧醫は藥種をゝしみて多く用ひず。然る故小服にせしを、古來習ひ來りて富貴の人の藥といへども小服にすと云。是一說也。又

曰、日本の醫は中華の醫に及ばず、故に藥方を用る事多くはその病に適當せざらん事を畏る。此故に決定して一方を大服にして用ひがたし。若大服にして其病に應ぜざれば、かへつて甚害をなさん事おそるべければ、小服を用ゆ。藥その病に應ぜざれども、小服なれば大なる害なし。若應ずれば小服にても日をかさねて小益は有ぬべし。こゝを以古來小服を用ゆと云。是又一說也。此三說によりて日本の藥古來小服なりと云。

日本人は中夏の人の腸胃のつよきに及はずして、藥を小服にするが宜しくとも、その形體大小相似たれば、その強弱の分量半にも及ぶべからざらんや。然れば藥劑を今少大にするが宜しかるべし。たとひ昔よりあやまり來りて小服なりとも、過つては則改るにはゞかる事なかれ。今の時醫の藥劑を見るに、一服劑此かにしては。補湯といへども接養の力なかるべし。況利湯を用る病は、外風寒暑濕をやぶり、大熱を生じ、內飲食腸胃に塞り、積滯の重き、鬱結の甚しき、內外の邪氣甚つよき病をや。小なる藥力を以大なる病邪にかちがたき事、たとへば一盃の水を以一車薪の火を救ふが如し。又小兵を以大敵にかちがたきが如し。藥方その病によく應ずともかくのごとく小服にては、藥に力なくて驗あるべからず。砒毒といへども、人服する事一匁許に至りて死すと古人いへり。一匁よりすくなくしては、砒霜をのんでも死なず、河豚を多くくらはざれば死なず。つよき大毒すらかくの如し。況ちからよわき小服の藥いかでか大病にかつべきや。此理を能思ひて小服の藥効なき事をしるべし。今時の醫の用る藥方、その病に應ずるも多かるべし。しかれども早く効を得ずして驗なきは、小服にて藥力たらざる故に非ずや。

今ひそかにおもんばかるに、利湯は一服の分量一匁

五分より、以上二匁に至るべし。その間の輕重は人の大小强弱によりて增減すべし。

補薬一服の分量は、一匁より一匁五分に至るべし。補薬つかへやすき人は、一服一匁或一匁二分なるべし。是又人の大小强弱によりて增減すべし。又投補氣用る薬方あり、一服一匁二三分より一匁七八分にいたるべし。

婦人の薬は男子より小服に宜し。利湯は一服一匁二分より一匁八分に至り、補湯は一匁より一匁五分にいたるべし。氣體强大ならば是より大服に宜し。

小兒の薬一服は五分より一匁に至るべし。是又兒の大小をはかつて增減すべし。

大人の利薬を煎ずるに、水をはかる盞は一盞に水を入るゝ事、大抵五十五匁より六十匁に至るべし。是盞の重さを除きて水の重さなり。一服の大小に從つて水を增減すべし。利薬は一服に水一盞半入て薪をたき、或かたき炭を多くたきて、武火を以一盞にせんじ、一盞を二度にわかち、一度に半盞服すべし。滓(かす)はすつべし。二度煎ずべからず。病つよくば、一日一盞に二服、猶その上にいたるべし。大熱ありて渇する病には、その宜に隨つて多く用ふべし。補薬を煎ずるには、一盞に水を入る事盞の重さを除き、水の重さ五十匁より五十五匁に至る。是又一服の大小に隨て水を增減すべし。虚人の薬小服なるには、水五十匁入る盞を用ふべし。壯人の薬大服なるには水五十五匁入る盞を用ふべし。一服に水二盞入て、けし炭を用ひ、文火にてゆるやかにせんじつめて一盞とし、かすには水一盞入て半盞にせんじ、前後合せて一盞半となるを、少づゝつかへざるやうに、空腹に三四度に熱服す。補湯は一日に一服、若つかえやすき人は、人により朝夕はのみがたし。晝間二度のむ。短日は二度はつかえて服しがたき人あり、病人によるべし。つかえざる人には朝夕晝間一日に一服、猶その上も

服すべし。食滞あらば補湯のむべからず、食滞めぐりて後のむべし。

補薬は滞塞しやすし。滞塞すれば害ありて益なし。利薬を服するより心を用ふべし。もし大剤にして気塞がらば小剤にすべし。或棗を去り生姜を増すべし。補中益気湯などのつかえて用がたきに、乾姜肉桂を加ふべき由、薛立斎が醫案にいへり。又症により附子肉桂を少加へ、升麻柴胡を用るに、二薬ともに火を忌めども、酒にて炒用ふ。是正傳或問の説也。又升麻柴胡を去て桂姜を加ふる事あり。李時珍も、補薬に少附子を加ふればその功するどなりといへり。虚人の熱なき症に薬力をめぐらさん爲ならば、一服に五釐か一分加ふべし。然れども病症によるべし。壮人にはいむべし。

身體短小にして腸胃小なる人、虚弱なる人は、薬を服するに小服に宜し。されども一匁より少なるべからず。身體長大にして腸胃ひろき人、つよき人は、

薬大服に宜し。

小兒の薬に水をはかる盞は一服の大小によりて、是も水五十匁より、五十五匁入ほどなる盞を用ふ。是又盞の重を除きて、水の重さなり。利湯は一服に水一盞入、七分に煎じ、二三度に用ふ。かすはすつべし。補湯には水一盞半を用て七分に煎じ、度々に熱服す。是又かすはすつべし。或かすにも水一盞入、半盞に煎じつめて用ふべし。

中華の法、父母の喪は必三年、是天下古人の通法なり。日本の人は體氣腸胃薄弱なり。此故に古法に朝廷より期の喪を定め給ふ。三年の喪は二十七月也。期の喪は十二月なり。是日本の人の稟賦の薄弱なるにより、其宜を考へて性にしたがへる中道なるべし。然るに近世の儒者、日本の土宜をしらず、古法にかゝはりて、三年の喪を行へる人、多くは病して死せり。喪にたへざるは古人是を不孝とす。是によつて思ふに薬を用るも亦同じ。國民

の宜をはかり考へて、中夏の藥劑の事を、一服と定めば宜しかるべし。然らば一服は一匁より二匁に至りて、其内人の強弱、病の輕重によりて多少あるべし。凡時宜をしらず、法にかゝはるは愚人のする事なり。俗流にしたがひて道理を忘るゝは小人のわざなり。

右藥一服の分量の大小用水の多少を定むる事、予醫生にあらずして好事の謗、僭率の罪のがれがたしといへども、今時本邦の人の禀賦をはかるに、おそらくはかくの如にして宜かるべし。願くば有識の人博く古今を考へ、日本の人の生れ付に應じ、時宜にかなひて過不及の差なく、輕重大小を定め給ふべし。

煎藥に加ふる四味あり。甘草は藥毒をけし、脾胃を補なふ。生薑は藥力をめぐらし、胃を開く。棗は元氣を補ひ胃をます。葱白は風寒を發散す。其入門にいへり。又燈心草は小便を通じ、經氣を消す。

今世醫家に泡藥の法あり。藥劑を煎せずして沸湯にひたすなり。世俗に用る振藥にはあらず。此法振藥にまされり。其法藥劑を細にきざみ、細なる竹篩にてふるひ、もれざるを、又細にきざみ粗末とすべし。布の藥袋をひろくして藥を入れ、まづ碗を熱湯にてあたゝめ、その湯はすて、やがて藥袋を碗に入、其上より沸湯を少そゝぎ、藥袋を打返して又其上より沸湯を少そゝぐ。兩度に合せて半盞ほど熱湯をそゝぐべし。藥液の自然に出るに任せて振出すべからず。早く蓋をしてしばし置べし。久しくふたをしおけば藥汁出過てちからなし。藥汁出で、熱湯の少さめて、温になりたるよきかんの時飲べし。かくの如くして二度泡し、二度のみて後其かすはすつべし。袋のかすをしぼるべからず。藥汁濁て惡し。此法藥力つよし。劑藥には此煎法も宜し。外邪、食傷、腹痛、霍亂などの病には煎湯よりも此法の功するどなり、用ふべし。振藥

は用ふべからず。此法薬汁早く出て薬力つよし。たとへば茶を沸湯に浸して、そのにえばなをのめば、その氣つよく味もよし。久しく煎じ過せば、茶の味も氣もあしくなるが如し。

世俗には振薬とて、薬を袋に入て熱湯につけて箸にてはさみ、しきりにふりうごかし薬汁を出して服す。是は自然に薬汁出るにあらず。しきりにふり出す故、薬湯にごりて、薬力滯りやすし。補薬は常の煎法の如く煎じ熟すべし。泡薬に宜からず。凡煎薬を入る袋はあらき布はあしゝ。薬末もりて薬汁にごれば滯りやすし。もろこしの書にて泡薬の事いまだ見ずといへども、今時宜によりて用るも可也。古法にあらずしても、時宜よくかなはゞ用ふべし。

頤生微論曰、大抵散利之劑宜生、補養之劑宜熟。入門曰、補湯須用熟、利薬不嫌生。此法薬を煎ずる要訣なり。補湯は久しく煎じて熟すればやはらかにして能補ふ。利薬は生氣のつよきを用てはげしく病邪をうつべし。

補湯は煎湯熱き時少づゝのめばつかえず。少づゝのんでゆるやかに驗を得べし。一時に多く服すべからず。補湯を服する間、酒色を過さず、一切の停滯する物くらふべからず。酒食滯塞し、或薬を服し過し、薬力めぐらざれば氣をふさぎ、腹中滯り、食を妨げて病をます、しるしなくして害あり。故に補薬を用る事その節制むづかし。良醫は用やう能してなづまず。庸醫は用やうあしくして滯る。古人は補薬を用るその間に、邪をさる薬を兼用ゆ。邪氣されば補薬にちからあり。補に専一なればなづみて益なく、かへつて害あり。是古人の說なり。

利薬は大服にして武火にて早く煎じ、多くのみて速に效をとるべし。然らざれば邪去がたし。局方曰、補薬は水を多くして煎じ、熟服して効をとる。

凡丸薬は性尤やはらかにて、其功にぶくしてするどならず。下部に達する薬、又腸胃の積滯をやぶるによ

し。散薬は細末せる粉薬也。丸薬よりするどなり。經絡にはめぐりがたし。上部の病、又腸胃の間の病によし。煎湯は散薬より其功するどなり。上中下、腸胃、經絡にめぐる。泡薬は煎湯より猶するどなり。外邪、霍亂、食傷、腹痛に用べし。其功早し。

入門にいへるは、薬を服するに病上部にあるには食後に少づゝ服す。一時に多くのむべからず。病中部に在には食遠に服す。病下部にあるには空心にしきりに多く服して下に達すべし。病四肢、血脈にあるには、食にうゑて日中に宜し。病骨髄に在には食後夜に宜し。吐逆して薬を納がたきには、只一すくひ少づゝしづかにのむべし。急に多くのむべからず。是薬を飲法也。しらずんば有べからず。

又曰、薬を煎ずるに砂礶を用ふべし。やきものなべ也。又曰、人をえらぶべし。云意は心謹信なる人に煎じさせてよしと也。粗率なる者に任すべからず。

薬を服するに五臓四肢に達するには湯を用ひ、胃中にとゞめんとせば散を用ふ。下部の病には丸に宜し。急速の病ならば湯を用ふ。緩々なるには散を用ふ。甚緩き症には丸薬に宜し。食傷腹痛などの急病には煎湯を用ふ。散薬も可也。丸薬はにぶし。もし用ひばこまかにかみくだきて用ふべし。

中華の書に、薬剤の量數をしるせるを見るに、八解散など毎服二匁、水一盞、生薑三片、棗一枚煎じて七分にいたる。是は一日夜に二三服も用ふべし。或方によりて毎服三匁、水一盞半、生薑五片、棗一枚、一盞に煎じて滓を去る。香蘇散などは日に三服といへり。まれには滓を一服として煎ずと云。多くは滓を去といへり。人參養胃湯などは、毎服四匁、水一盞半、薑七片、烏梅一箇、煎じて七分にいたり、滓を去。參蘇飲は毎服四匁、水一盞生薑七片、棗一箇六分に煎ず。藿香正氣散、敗毒

散は、毎服二匁、水一盞、生薑三片、棗一枚、七分に煎ず。寒多きは熱服し、熱多きは温服すといへり。是皆薬剤一服の分量は多く水を用る事すくなし。然れば煎湯甚濃なるべし。日本の煎法の小服にして水多きに甚異れり。局方に、小児に或半銭を用ゆ、児の大小をはかつて加減すといへり。又小児の薬方毎服一匁、水八分煎じて六分にいたるといへるもあり。醫書大全四君子湯方後曰、右㕮咀如二麻豆大一毎服一匁、水三盞、生薑五片、煎至二一盞一、是一服を十度に合せたる也。水は甚少し。

中夏の煎法右の如し。朝鮮人に尋ねしにも、中夏の煎法と同じと云。

宋の沈存中が筆談と云書に曰、近世は湯を用ずして煮散を用ゆといへり。然れば中夏には此法を用るなるべし。煮散の事筆談に其法詳ならず。煮散は薬を麄末とし、細布の薬袋のひろきに入、熱湯の沸上る時薬袋を入、しばらく煮て薬汁出たる時早く取あげ用るなるべし。麄末の散薬を煎ずる故、煮散と名づけしにや。薬汁早く出、早く取上げ、にえばなを服する故薬力つよし。煎じ過せば薬力よはく成てしるしなし。此法利湯を煎じて薬力つよかるべし。補薬には此法用がたし。煮散の法他書においてはいまだ見ず。

甘草を、今の俗醫、中夏の十分一用ふるは、あまり少して他薬の助となりがたかるべし。せめて方書に用たる分量の五分一可用と云人あり。此言むべなるかな。人の稟賦をはかり、病症を考へて、加へ用ふべし。日本の人は中華の人より體氣薄弱にして、峻補をうけがたし。甘草、棗など膩滞すべし。李中梓が曰、甘草性緩なり。多く用ゆべからず。一は甘きはよく脹をなすをおそる。一は薬餌功なきをおそる。是甘草多ければ、一は氣をふさぎてつかえやすく、一は薬力よわくなる故なり。

生薑は薬一服に一片　若風寒發散の剤、或去レ痰薬には二片を用ふべし。皮を去べからず。かわきたるとほしたるは用ふべからず。或曰、生薑補湯には二分、利湯には三分、嘔吐の症には四分加ふべしと云。是生なる分量なり。

棗は大なるをえらび用ひてたねを去、一服に半分入用ふべし。つかえやすき症には去べし。利湯には棗を用べからず。中夏の書には利湯にも方により て棗を用ふ。日本の人には泥みやすし、加ふべからず。加ふれば薬力ぬるくなる。中滿、食滯の症及薬のつかえやすき人には棗を加ふべからず。龍眼肉もつかえやすき症には去べし。

中夏の書、居家必用、居家必備、齊民要術、農政全書、月令廣義等に料理の法を多くのせたり。其のする所日本の料理に大にかはり、皆肥濃膏腴、油膩の具、甘美の饌なり。其食味甚おもし。中土の人は腸胃厚く、稟賦つよき故にかゝる重味を食しても滯塞せず。今世長崎に來る中夏人も亦如此と云。日本の人は壯盛にても、かやうの饌食をくらはゞ飽滿し、滯塞して病おこるべし。日本の人の饌食は淡くしてかろきをよしとす。肥濃甘美の味を多く用ず。庖人の術も味かろきをよしとし良工とす。これからやまと風氣の大に異る處なり。然れば補薬を小服にし、甘草を減じ、棗を少用る事むべなり。

凡薬を煎ずるに水をえらぶべし。清くして味よきを用ふ。新に汲む水を用ふべし。早天に汲む水を井華水と云。薬を煎ずべし。又茶と羮をにるべし。新汲水は平旦ならでも新に汲んでいまだ器に入ざるを云。是亦用ふべし。汲で器に入久しくなるは用ふべからず。

今世の俗は、利湯をも煎じたるかすに水一盞入て半分に煎じ、別にせんじたると合せ服す。利湯はかくの如くかすまで熟し過しては、薬力よはくし

て、病をせむるにちからなし。一度煎じて其かすはすつべし。

生薑を片とするは、生薑根には肢多し。其内一肢をたてに長くはるに、大小にしたがひて、三片或四片とすべし。たてにはるべし。或問、生薑醫書に其おもさ幾分と云ずして、幾片と云は何ぞや。答曰、新にほり出せるは生にしておもく、ほり出して日をへたるはかはきてかろければ、其重さ幾分と定がたし。故に幾分と云ずして幾片と云。

棗は樹頭に在てよく熟し、色の青きが白くなり、少紅まじる時とるべし。青きはいまだ熟せず、皆紅なるは熟し過て肉たゞれてあしゝ。色少あかくなり熟し過ざる時とり、日に久しくほし、よくかはきたる時むしてほすべし。生にてむすべからず。なまびもあしゝ。當時市鄽にうるは未熟なるをほしてうる故に性あしゝ。用ふべからず。或樹上にて熟し過るもたゞれてあしゝ。用ゆべからず。棗樹はわが宅に必植べし。熟してよき比の時とるべし。

凡薬を服して後久しく飲食すべからず。又薬力のいまだめぐらざる内に酒食をいむ。又薬をのみてねむり臥すべからず。ねむれば薬力めぐらず、滯りて害となる。必戒むべし。

凡薬を服する時は、朝夕の食常よりも殊につゝしみえらぶべし。あぶら多き魚、鳥、獣、なます、さしみ、すし、肉ひしほ、なし物、なまぐさき物、ねばき物、かたき物、一切の生冷の物、生菜の熟せざる物、ふるくけがらはしき物、色あしく臭あしく味變じたる物、生なる菓、つくりたる菓子、あめ、砂糖、もち、だんご、氣をふさぐ物、消化しがたき物、くらふべからず。又薬をのむ日は、酒を多くのむべからず。のまざるは尤よし。酒力薬にかてばしるしなし。茶ものむべからず。日長き時も、晝の間菓子點心などくらふべからず。薬

力のめぐる間は食をいむべし。點心をくらへば氣をふさぎて其の間藥力めぐらず。又死人産婦など、けがれいむべき物を見れば氣をふさぐ故、藥力めぐりがたく、滯やすくして藥のしるしなし。いましめてみるべからず。

補藥を煎ずるには、かたき炭などのつよき火を用ふべからず。かれたる蘆の火、枯竹、桑、柴の火、或けし炭など一切のやはらかなる火よし。はげしくもゆる火を用ふれば藥力を損ず。利藥を煎ずるにはかたき木、かたき炭などのさかんなるつよき火を用べし。是炭力をたすくるなり。

藥一服の大小輕重は、病症により、人の大小强弱によつて增減すべし。補湯は小劑にして少づゝ服し、おそく效をとるべし。多く用ひ過せば滯りふさがる。發散、瀉下、疏通の利湯は、大劑にしてつよきに宜し、早く效をとるべし。

藥を煎ずるは磁器よし。陶器也。又砂罐と云。銅をいまざる藥は、ふるき銅器もよし。新しきは銅氣多くしてあしゝ。世俗に藥鍋と云は、銅厚くして銅氣多し。藥罐と云は、銅うすくして銅氣すくなし。形小なるがよし。

利藥を久しく煎じつめては、消導發散すべき生氣の力なし。煎じつめずして飪を失はざる、生氣あるを服して病をせむべし。たとへば茶をせんじ、生魚を煮、豆腐を煮るが如し。生熟の間よき程に飪を失はざれば、味よくしてつかえず。飪を失へば味あしくしてつかえやすきが如し。

毒にあたりて藥を用るに、必熱湯を用べからず。熱湯を用れば毒彌甚し。冷水を用ふべし。これ事林廣記の説なり。しらずんばあるべからず。

食物の毒、一切の毒にあたりたるに、黒豆甘草をこく煎じ、冷になりたる時しきりにのむべし。溫熱なるをのむべからず。はちく竹の葉を加ふるもよし。もし毒をけす藥なくば、冷水を多く飮べし。

多く吐瀉すればよし。是古人急に備ふる法なり。知べし。

酒を煎湯に加ふるには、藥を煎じて後わけんとする時加ふべし。早く加ふるはあしゝ。

腎は水を主どる、五臟六腑の精をうけてをさむ故、五臟盛なれば腎水盛なり。腎の臟ひとつに精あるに非ず。然れば腎を補はんとて專腎藥を用べからず。腎は下部にあつて五臟六腑の根とす。腎氣虛すれば一身の根本衰ろふ。故に養生の道は腎氣をよく保つべし。腎氣亡びては生命を保ちがたし。精氣ををしまずして、藥治と食治とを以、腎を補はんとするは末なり。しるしなかるべし。

東垣曰、細末の藥は經絡にめぐらず。只胃中臟腑の積を去る。下部の病には大丸を用ふ。中焦の病は次之。上焦を治するには極て小丸にす。うすき糊にて丸ずるは化しやすきに取る。こき糊にて丸ずるは、おそく化して中下焦に至る。丸藥、上焦の病には細にしてやはらかに早く化しやすきがよし。中焦の藥は小丸にして堅かるべし。

下焦の藥は大丸にして堅きがよし。是頤生微論の說也。又湯は久き病に用ふ。散は急なる病に用ゆ。

丸はゆるやかなる病に用る事、東垣が珍珠囊に見えたり。

中夏の秤も日本の秤と同じ。藥を合するには、かねて一服の分量を定め、各品の分量をきはめ、釐等を用ひてかけ合すべし。藥により輕重甚かはれり、多少を以分量を定めがたし。

諸香の鼻を養ふ事、五味の口を養ふがごとし。諸香は是をかげば正氣をたすけ、邪氣をはらひ、惡臭をけし、けがれをさり、神明に通ず。いとまありて、靜室に坐して香をたきて默坐するは、雅趣をたすけて心を養ふべし。是亦養生の一端なり。香に四品あり。たき香あり、掛香あり、食香あり、貼香あり。たき香とは、あはせたきものゝ事也。からの

書に百和香と云。日本にも古今和歌集の物の名に百和香をよめり。かけ香とは、かほり袋、にほひの玉などを云。貼香とは、花の露、兵部卿など云類の身につくる香也。食香とは食して香よき物、透頂香、香茶餅、團茶など云物の事也。

惡氣をさるに、蒼朮をたくべし。胡荽の實をたけば邪氣をはらふ。又瘡疥のけがれをさる。蘿摩の葉をほしてたけば、糞小便の惡氣をはらふ。手のけがれたるにも、蘿摩の生葉をもんでぬるべし。腥き臭、あしき物を食したるに、胡荽をくらへば惡臭さる。蘿摩のわか葉を煮て食すれば、味よく性よし。

大便瀉しやすきは大にあしゝ。少秘するはよし。老人の秘結するは壽のしるし也、尤よし。然共其秘結するはあしく。およそ人の脾胃につかえ、食滞り、或腹痛し、不食し、氣塞る病する人世に多し。是多くは大便通じがたくして滞る故しかり。つかゆるは大便つかゆる也。大便滞らざるやうに治すべし。麻仁、杏仁、胡麻などつねに食すれば、腸胃うるほひて便結せず。

上中部の丸藥は早く消化するをよしとす。故に小丸を用ふ。早く消化する故也。今新なる一法あり。用ふべし。末藥をのりに和してつねの如くに丸せず、線香の如く長さ七八寸に手にてもみて引のべ、線香より少大にして日にほし、なまびの時長さ一分餘にみじかく切て、丸せず其まゝ日にほすべし。是一づゝ丸したるより消化しやすし。上中部を治するに此法宜し。下部に達する丸藥には此法宜からず。此法一粒づゝ丸するよりはか行きて早く成る。

養生訓巻之七終

養生訓卷之八

養レ老

人の子となりては其おやを養ふ道をしらずんばあるべからず。其心を樂しましめ、其心にそむかず、いからしめず、うれへしめず。其時の寒暑にしたがひ、其居室と其寝所をやすくし、其飲食を味よくしてまことを以て養ふべし。

老人は體氣おとろへ、腸胃よはし。つねに小兒を養ふごとく心を用ふべし。飲食のこのみきらひをたづね、其寒温の宜きをこゝろみ、居室をいさぎよくし、風雨をふせぎ、冬あたゝかに夏涼くし、風寒暑濕の邪氣をよく防ぎてをかさしめず、つねに心を安樂ならしむべし。盗賊水火の不意なる變災あらば、先兩親を驚かしめず、早く介保し出すべし。變にあひて病おこらざるやうに心づかひ有べし。老人は驚けば病おこる。おそるべし。

老の身は餘命久しからざる事を思ひ、心を用る事わかき時にかはるべし。心しづかに事すくなくて、人に交はる事もまれならんこそ、あひにあひてよろしかるべけれ、是も亦老人の氣を養ふ道なり。

老後はわかき時より月日の早き事十ばいなれば、一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年とし、喜樂してあだに日をくらすべからず。つねに時日をおしむべし。心しづかに從容として餘日を樂み、いかりなく慾すくなくして、殘軀をやしなふべし。

老後一日も樂まずして、空しく過すはをしむべし。

老後の一日千金にあたるべし。人の子たる者是を心にかけて思はざるべけんや。

今の世老て子に養はるゝ人、わかき時よりかへつていかり多く慾ふかくなりて、子をせめ人をとがめて晩節をたもたず、心をみだす人多し。つゝしみていかりと慾とをこらへ、晩節をたもち、物ごとに堪忍ふかく、子の不孝をせめず、つねに樂みて

殘年をおくるべし。是老後の境界に相應してよし。孔子年老、血氣衰へては得るを戒しめ給ふ。聖人の言おそるべし。世俗わかき時は頗つゝしむ人あり。老後はかへつて多慾にしていかりうらみ多く、晩節をうしなふ人多し。つゝしむべし。子としては是を思ひ、父母のいかりおこらざるやうに、かねて思ひはかり、おそれつゝしむべし。父母をいからしむるは子の大不孝也。又子としてわが身の不孝なるをおやにとがめられ、かへつておやの老耄したる由を人につぐ。是大不孝也。不孝にして父母をうらむるは惡人のならひ也。

老人の保養は、常に元氣ををしみてへらすべからず。氣息を靜にしてあらくすべからず。言語をゆるやかにして早くせず。言すくなくし、起居行歩をもしづかにすべし。言語あらゝかに、口ばやく聲高く、颺言すべからず。怒なくうれひなく、過ぎ去たる人の過をとがむべからず。我が過をしきりに悔ゆべからず。人の無禮なる横逆をいかりうらむべからず。是皆老人養生の道なり。又老人の德行のつゝしみなり。

老ては氣すくなし、氣をへらす事をいむべし。第一いかるべからず。うれひ、かなしみ、なき、なげくべからず。喪葬の事にわづからしむべからず。死をとぶらふべからず。思ひを過すべからず。尤多言をいむ。口はやく物云べからず。高く物いひ、高くわらひ、高くうたふべからず。道を遠く行べからず。道をはやく行べからず。重き物をあぐべからず。是皆氣をへらさずして、氣ををしむなり。

老人は體氣よわし。是を養ふは大事なり。子たる者つゝしんで心を用ひ、おろそかにすべからず。第一心にそむかず、心を樂しましむべし。是志を養ふ也。又口腹の養におろそかなるべからず。酒食精しく味よき物をすゝむべし。食の精しからざる、あらき物、味あしき物、性あしき物をすゝむべから

す。老人は腸胃よわし、わらき物にやぶられやすし

衰老の人は脾胃よわし。夏月は尤慎んで保養すべし。暑熱によつて生冷の物をくらへば泄瀉しやすし。瘧痢もおそるべし。一たび病すれば、大にやぶれて元氣へる。殘暑の時殊におそるべし。又寒月は、老人は陽氣すくなくして、寒邪にやぶれやすし。心を用てふせぐべし。

老人はことに生冷、こはき物、あぶらけねばく、滯りやすき物、こがれてかはける物、ふるき物、くさき物をいむ。五味偏なる物、味よしとても多く食ふべからず。夜食を殊に心を用てつゝしむべし。

年老てはさびしきをきらふ。子たる者時々侍べり、古今の事しづかに物がたりして、親の心をなぐさむべし。もし朋友妻子には和順にして、久しく對談する事をよろこび、父母に對する事をむづかしく思ひて、たえ〴〵にしてうとくするは、是其親を愛せずして他人を愛する也。悖徳と云べし。不孝の至也。おろかなるかな。

天氣和暖の日は、園圃に出、高き所に上り、心をひろく遊ばしめ、鬱滯を開くべし。時々草木を愛し、遊賞せしめて其意を快くすべし。されども老人みづからは、園囿、花木に心を用ひ過して、心を勞すべからず。

老人は氣よわし。萬の事用心ふかくすべし。すでに其事にのぞみても、わが身をかへり見て、氣力の及びがたき事はなすべからず。

下壽をこえ、七そぢにいたりては、一とせをこゆることいとかたき事になん。此ころにいたりては、一とせの間にも、氣體のおとろへ、時々に變りゆく事、わかき時數年を過るよりも猶はなはだけぢめあらはなり。かくおとろへゆく老の身なれば、よくやしなはずんばよはひを久しくたもちがたかるべし。又此としごろにいたりては、一とせをふ

る事、わかき時一二月を過るよりはやし。おしからぬ餘命をもちて、かく年月早くたちぬれば、此後のよはひいく程もなからん事を思ふべし。人の子たらん者、此時心を用ひずして孝をつくさず、むなしく過なん事おろかなるかな。

老ての後は、一日を以十日として日々に樂しむべし。常に日ををしみて一日もあだにくらすべからず。世のなかの人のありさま、わが心にかなはずとも、凡人なれば、さこそあらめと思ひて、わが子弟をはじめ人の過惡をなだめ、ゆるしてとがむべからず。いかりうらむべからず。又わが身不幸にして福うすく、人われに對して横逆なるも、うき世のならひかくこそあらめと思ひ、天命をやすんじてうれふべからず。つねに樂しみて日を送るべし。人をうらみいかり、身をうれひなげきて、心をくるしめ樂しまずして、はかなく年月を過なん事をしむべし。かくをしむべき月日なるを、一日もたのしまずしてむなしく過ぬれば、愚なりと云べし。たとひ家まづしく、幸なくしてうへて死ぬとも、死ぬる時までは樂しみて過すべし。貧しきとて人にむさぼりもとめ、不義にして命ををしむべからず。

年老ては、やうやく事をはぶきてすくなくすべし。事をこのみておほくすべからず。このむ事しげゝれば事多し。事多ければ心氣つかれて樂をうしなふ。

朱子六十八歲、其子に與ふる書に、衰病の人多くは飮食過度によりて病くはゝる、殊に肉多く食するは害あり。朝夕肉は只一種少食すべし。多く食ふべからず。あつものに肉あらば飯に肉なきがよし。晩食には肉なきが尤よし。肉の數多く重ぬるは滯りて害あり。肉をすくなくするは、一には胃を寛くして氣を養ひ、一には用を節にして財を養ふといへり。朱子の此言養生にせつなり。わかき人も如此すべし。

老人は大風雨、大寒暑、大陰霧の時外に出べからず。かゝる時は内に居て、外邪をさけて靜養すべし。

老ては脾胃の氣衰へよわくなる。食すくなきに宜し。多食するは危し。老人の頓死するは十に九は皆食傷なり。わかくして脾胃つよき時にならひて、食過れば消化しがたく、元氣ふさがり、病おこりて死す。つゝしみて食を過すべからず。ねばき飯、こはき飯、もちだんご、麪類、蕎麥切、獸の肉、凡消化しがたき物を多くくらふべからず。

衰老の人、あらき物多くくらふべからず。精しき物を少くらふべしと、元の許衡いへり。脾胃よはき故也。老人の食如此なるべし。

老人病あらば先食治すべし。食治應ぜずして後藥を用ゆべし。是古人の說也。人參、黃芪は上藥也。虛損の病ある時は用ゆべし。病なき時は穀肉の養の全なる事、參芪の補に甚まされり。故に老人はつねに味美く、性よき食物を少づゝ用て補養すべし。病なきに偏なる藥を用ゆべからず。かへつて害あり。

朝夕の飯、常の如く食して、其上に又麪類、餅類など、わかき時の如く多くくらふべからず。やぶられやすし。只朝夕二時の食味よくして進むべし。晝間夜中不時の食このむべからず。やぶられやすし。殊酒をのむ時不時に食すべからず。

年老てはわが心の樂の外、萬端心にさしはさむべからず。時にしたがひ自樂しむべし。自樂むは世俗の樂に非ず。只心にもとよりある樂を樂しみ、胸中に一物一事のわづらひなく、天地四時山川の好景、草木の欣榮、是又樂しむべし。

老後官職なき人は、つねに只わが心と身を養ふ工夫を專にすべし。老境に無益のつとめのわざと、藝術に心を勞し、氣力をついやすべからず。

朝は靜室に安坐し、香をたきて聖經を少讀誦し、心をいさぎよくし、俗慮をやむべし。道かわき風な

くば庭園に出て、從容として緩歩し、草木を愛玩し、時景を感賞すべし。室に歸りても閑人を以樂事をなすべし。より〳〵几案硯中のほこりをはらひ、席上階下の塵を掃除すべし。しば〳〵兀坐して睡臥すべからず。又世俗に廣く交るべからず。老人に宜しからず。

つねに靜養すべし。あらき所作をなすべからず。老人は少の勞動により、少のやぶれ、つかれ、うれひによりて、たちまち大病おこり死にいたる事あり。つねに心を用ふべし。

老人はつねに端坐して、凭几をうしろにおきてよりかゝり坐すべし。平臥を好むべからず。

育レ幼

小兒をそだつるは、三分の飢と寒とを存すべしと古人いへり。いふ意は小兒はすこしうやし、少ひやすべしとなり。小兒にかぎらず、大人も亦かくの如くすべし。小兒に味よき食にあかしめ、きぬ多くきせてあたゝめ過すは大にわざはひとなる。俗人と婦人は理にくらくして子を養ふ道をしらず、只あくまでうまき物をくはせ、きぬあつくきせて、あたゝめ過すゆゑ、必病多く或命短し。貧家の子は衣食ともしき故、無病にしていのち長し。

小兒は脾胃もろくしてせばし。故に食にやぶられやすし。つねに病人をたもつごとくにすべし。小兒は陽さかんにして熱多し。つねに熱をおそれて熱をもらすべし。あたゝめ過せば筋骨よわし。天氣よき時は外に出して。風日にあたらしむべし。如レ此すれば、身堅固にして病なし。はだにきする服はふるき布を用ふ。新しききぬ、新しきわたは、あたゝめ過してあしゝ。用ふべからず。

小兒を保養する法は、香月牛山醫士のあらはせる育草に詳に記せり。考みるべし。故に今こゝに略せり。

鍼

鍼をさす事はいかん。曰、鍼をさすは氣血の滯をめぐらし、腹中の積をちらし、手足の頑痺をのぞく。外に氣をもらし、内に氣をめぐらし、上下左右に氣を導く。積滯、腹痛などの急症に用て、消導する事、藥と灸より速なり。積滯なきにさせば元氣をへらす。故に正傳或問に鍼に瀉あつて補なしといへり。然れども鍼をさして滯を瀉し、氣めぐりて塞らざれば、其あとは食補も藥補もなしやすし。内經に、熇々の熱を刺ことなかれ。渾々の脈を刺事なかれ。漉々の汗を刺事なかれ。大勞の人を刺事なかれ。大飢の人をさす事なかれ。大渇の人、新に飽る人、大驚の人を刺事なかれ。といへり。又曰、形氣不足、病氣不足の人を刺事なかれ、是内經の戒なり。是皆有瀉而無補を謂也。と正傳にいへり。又浴して後即時に鍼すべからず。酒に醉へる人に鍼すべからず。食に飽て即時に鍼さすべからず。針醫も、病人も、右内經の禁をしりて守るべし。鍼を用て利ある事も、害する事も、藥・灸より速なり。よく其利害をえらぶべし。つよく刺て痛み甚しきはあしゝ。又右にいへる禁戒を犯せば、氣へり、氣のぼり、氣うごく、はやく病を去んとして、かへつて病くはゝる。是よくせんとしてあしくなる也。つゝしむべし。

衰老の人は藥治、鍼灸、導引、按摩を行ふにも、にはかにいやさんとて、あらくすべからず。あらくするは是即効を求むる也。たちまち禍となる事あり。若當時快しとても後の害となる。

灸法

人の身に灸をするはいかなる故ぞや。曰、人の身のいけるは、天地の元氣をうけて本とす。元氣は陽氣なり。陽氣はあたゝかにして火に屬す。陽氣はよ

く萬物を生ず。陰血も亦元氣より生ず。元氣不足し、鬱滯してめぐらざれば、氣へりて病生ず。血も亦へる。然る故火氣をかりて、陽をたすけ、元氣を補へば、陽氣發生してつよくなり、脾胃調ひ、食すくみ、氣血めぐり、飲食滯塞せずして陰邪の氣さる。是灸のちからにて、陽をたすけ、氣血をさかんにして病をいやすの理なるべし。

艾葉とはもえくさの略語也。三月三日、五月五日にとる。然共長きはあしき故に、三月三日尤よし。うるはしきをえらび、一葉づゝつみとりてひろき器に入、一日日にほして、後ひろくあさき器に入、ひろげ、かげぼしにすべし。數日の後よく乾きたる時、又しばし日にほして早く取入れ、あたゝかなる內に、臼にてよくつきて、葉のくだけてくづとなれるをふるひにてふるひすて、白くなりたるを壺か箱に入、或袋に入をさめ置て用べし。又かはきたる葉を袋に入置用る時、臼にてつくもよし。くきともにあみてのきにつり置べからず。性よわくなる。用ふべからず。三年以上久しきを用ふべし。用て灸する時あぶりかはかすべし。灸にちからありて火もえやすし。しめりたるは功なし。

昔より近江の膽吹山、下野の標茅が原を艾葉の名產とし、今も多く切てうる。古歌にも此兩處のもぐさをよめり。名所の產なりとも、取時過て、のび過たるは用ひがたし。他所の產も地よくして葉うるはしくば用ふべし。

艾炷の大小は各其人の强弱によるべし。壯なる人は大なるがよし、壯數もさかんなる人は多きによろし。虛弱にてやせたる人は小にしてこらへやすくすべし。多少は所によるべし。熱痛をこらえがたき人は多くすべからず。大にしてこらへがたきは氣血をへらし、氣をのぼせて甚害あり。やせて虛怯なる人、灸のはじめ熱痛をこらへがたきには、艾炷の下に鹽水を多く付、或鹽のりをつけて五七壯

灸し、その後常の如くすべし。如此すればこらへやすし。頗もこらへがたきは、前五六壯は艾を早く去べし。如此すれば後の灸こらへやすし。氣升る人は一時に多くすべからず。明堂灸經に、頭と四肢とに多く灸すべからずといへり、肌肉うすき故也。又頭と面上と四肢に灸せば、小きなるに宜し。

灸に用る火は、水晶を天日にかゞやかし、艾を以下にうけて火を取べし。又燧を以白石或水晶を打て火を出すべし。火を取て後香油を燈に點じて、艾炷にその燈の火をつくべし。或香油にて紙燭をともして、灸炷を先身につけ置てしそくの火を付べし。松、柏、枳、橘、楡、棗、桑、竹、此八木の火を忌べし。用ふべからず。

坐して點せば坐して灸す。臥して點せば臥して灸す。上を先に灸し、下を後に灸す。少を先にし、多きを後にすべし。

灸する時、風寒にあたるべからず。大風、大雨、大雪、陰霧、大暑、大寒、雷電、虹蜺にあはゞ、やめて灸すべからず。天氣晴て後灸すべし。急病はかゝはらず。灸せんとする時、もし大に飽、大に飢、酒に醉、大に怒り、憂ひ悲み、すべて不祥の時灸すべからず。房事は灸前三日、灸後七日いむべし。冬至の前五日、後十日灸すべからず。

灸後淡食して血氣和平に流行しやすからしむ。厚味を食過すべからず。大食すべからず。酒に大に醉べからず。熱麪、生冷、冷酒、動風の物、肉の化しがたき物くらふべからず。

灸法古書には、其大さ根下三分ならざれば、火氣達せずといへり。今世も元氣つよく肉厚くして熱痛をよくこらふる人は、大にして壯數も多かるべし。もし元氣虚弱、肌肉淺薄の人は、艾炷を小にしてこらへよくすべし。壯數を半減すべし。甚熱痛して堪へがたきをこらふれば、元氣へり、氣升り、血氣錯亂す。其人の氣力に應じ、宜に隨ふべし。灸

の數を幾壯と云は、壯年の人を以て定めていへる也。然れば灸經にいへる壯數も、人の强弱によつて、病の輕重によりて多少を斟酌すべし。古法にかゝはるべからず。虛弱の人は灸炷小にしてすくなかるべし。虛人は一日に一穴、二日に一穴、灸するもよし。一時に多くすべからず。

灸して後灸瘡發せざれば其病癒がたし。自然にまかせ、そのまゝにては、人により灸瘡發せず。しかる時は人事をもつくすべし。虛弱の人は灸瘡發しがたし。古人灸瘡を發する法多し。赤皮の葱を三五莖靑き所を去て、糠のあつき灰中にて煨しわりて灸のあとをしばしば熨すべし。又生麻油をしきりにつけて發するもあり。又灸のあとに一二壯灸して發するあり。又燒鳥、燒魚、熱物を食して發する事あり。今試るに、熱湯を以しきりに灸のあとをあたゝむるもよし。

阿是穴は、身の中いづれの處にても灸穴にかゝはらず。おして見るにつよく痛む所あり。是その灸すべき穴なり。是を阿是の穴と云。人の居る處の地によりて、深山幽谷の内、山嵐の瘴氣、或海邊陰濕ふかき處ありて、地氣にあてられ病おこり、もしは死にいたる。或疫病、温瘧流行する時、かねて此穴を數壯灸して寒濕をふせぎ、時氣に感ずべからず。灸瘡たえざる程に、時々少づゝ灸すれば外邪をかさず。但禁灸の穴をばさくべし。一處に多く灸すべからず。

今の世に、天樞脾兪など、一時に多く灸すれば、氣上りて痛忍へがたきとて、一日に一二壯、毎日灸して百壯にいたる人あり。又三里を毎日一壯づゝ百日つゞけ灸する人あり。是亦時氣をふせぎ、風を退け、上氣を下し、衄をとめ、眼を明にし、胃氣をひらき、食をすゝむ。尤益ありと云。醫書においていまだ此法を見ず。されども試みてその効を得たる人多しと云。

方術の書に禁灸の日多し。その日その穴をいむと云道理分明ならず。内經に鍼灸の事を多くいへども、禁鍼、禁灸の日をあらはさず。針灸聚英に、人神、尻神の說、後世術家の言なり。素問難經にいはざる所何ぞ信ずるに足らんやといへり。又曰、諸の禁忌、たゞ四季の忌む所、素問に合へるに似たり。春は左の脇、夏は右の脇、秋は臍、冬は腰、是也。聚英に所云かくの如し。まことに禁灸の日多き事信じがたし。今の人只血忌日と、男子は除の日、女子は破の日をいむ。是亦いまだ信ずべからずといへ共、しばらく衆說と時俗にしたがふのみ。凡術者の言逐一に信じがたし。

●予按ずるに、小兒初生に病なきに、かねて針灸すべからず。もし灸すれば癇をなすといへり。癇は驚風なり。小兒もし病ありて身柱天樞など灸せば、甚いためる時は除去て又灸すべし。若熱痛の甚きをそのまゝにてこらへしむれば、五臟をうごかして驚癇をうれふ。熱痛甚きをこらへしむべからず。小兒には小麥の大さにして灸すべし。老人氣のぼりて、項のあたり上部に灸すべからず。氣のぼりては、くせになりてやまず。脾胃虚弱にして食滯りやすく、泄瀉しやすき人は、是陽氣不足なり。殊に灸治に宜し。火氣を以土氣を補へば、脾胃の陽氣發生し、よくめぐりてさかんになり、食滯らず、食すゝみ、元氣ます。每年二八月に天樞、水分、脾兪、腰眼三里を灸すべし。京門、章門もかはる〳〵灸すべし。脾の兪、胃の兪もかはる〳〵灸すべし。天樞は尤しるしあり。脾胃虚し、食滯りやすき人は、每年二八月灸すべし。脊中より兩旁各二寸、又一寸五分もよし、かはる〳〵灸すべし。灸炷の多少と大小は、その氣力に隨ふべし。虚弱の人若年の人は、灸炷小にして壯數もすくなかるべし。天樞などに灸するに、氣虚弱の人は一日に一穴、二日に一穴、四日に兩穴灸すべく、

し。一時に多くして熱痛を忍ぶべからず。日數をへて灸してもよし。

灸すべき所をえらんで、要穴に灸すべし。みだりに處多く灸せば、氣血をへらさん。

一切の頓死、或夜厭死したるにも、足の大指の爪の甲の內、爪を去事韭葉ほど前に、五壯か七壯灸すべし。

衰老の人は下部に氣すくなく、根本よはくして氣昇りやすし。多く灸すれば、氣上りて、下部彌空虛になり、腰脚よわし。おそるべし。多く灸すべからず。殊に上部と脚に多く灸すべからず。中部に灸すとも、小にして一日に只一穴、或二穴、一穴に十壯ばかり灸すべし。毎日灸して、壯數をかさねて、數十壯にいたるべし。一時に多く灸すべからず。一たび氣のぼりては、老人は下部のひかえよはくしてくせになり、氣升る事やみがたし。老人にも灸にいたまざる人あり。一槪に定めがたし。但かねて用心すべし。

病者氣よはくして、つねのひねりたる灸炷をこらへがたき人あり。切艾を用ゆべし。紙をはゞ一寸八分ばかりにたてにきりて、もぐさを、おもさ各三分に秤にかけて長くのべ、右の紙にてまき、其はしをのりにてつけ、日にほし、一炷ごとに長さ各三分に切て、一方はすぐに、一方はかたそぎにし、すぐなる方の下にあつき紙を切てつけ、日にほして灸炷とし、灸する時鹽のりをその下に付て灸すれば、熱痛甚しからずしてこらへやすし。灸炷の下にのりを付るに、艾の下にはつけず、まはりの紙の切口に付る。もぐさの下にのりをつくれば、火下までもえず。此きりもぐさは、にはかに熱痛甚しからずして、ひねりもぐさよりこらへやすし。然れ共ひねり艾より熱する事久しく、きゆる事おそし。そこに徹すべし。

癰疽及諸瘡腫物の初發に、早く灸すれば腫あがらず

して消散す。うむといへ共、毒かろくして早く癒やすし。項より上に發したるには、直に灸すべからず。三里氣海灸すべし。凡腫物出て後、七日を過ぎは灸すべからず。此灸法三因方以下諸方書に出たり。醫に問て灸すべし。事林廣紀に午後に、灸すべしと云へり。

養生訓卷之八 大尾

養生訓附錄

石見醫生　杉本義篤　著

貝原益軒先生は近世の大儒にして、博學多識世人みな知ところなり。そのあらはし給ふ書數百卷世に行はる。中にも養生訓は、もつとも愚蒙ををしふるの意に切にして、先生日夜の起居、坐立動止、語默身みづから行ひ、試み給ふところの實事を述給ふもの故に、かりにも浮華説はなし。實に世の珍寶と稱して可なり。何を以てその實效をしるとならば、身みづからこれを行うて、終に百歳に近き上壽を保給ふ。これその養生の術の然らしむるところにして、先生の書の人を欺ざるを見つべし。壽夭は天命の長短にかゝるといへども、養生惡ければ壽なるべきも夭し、養生よろしければ夭すべきも壽を保べし。命を知るもの巖牆のもとに立ざるも、蓋この故にやあらん。而して人情の誘れ易

く過がたきは、飲食の慾と色慾より甚しきはなし。養生の道、この二慾を節にするを本とす。養生訓既に、飲食を愼のをしへ、上下篇をあらはして、深切に述示し給ふ。色慾のをしへはその大概をば擧示し給へども、條目の細微を盡さず。惜べきなり。このころ書肆定學堂の主人、予にその條目の詳なるを書せんことを乞ふ。予は斗筲の庸才にして、無學不文、おそらくは龍頭蛇尾の譏あらんと固辭すれども、あながちに乞てやまず。予やむことを得ずして、古語の戒となるべきを拾採て、これを和語に譯し、間又古老に聞ところの所見を書て、一冊子となして養生訓の後に附す。

一陰一陽これを道といふ。偏陰偏陽これを疾といふ。陰陽和せざるときは、天地萬物を生ずる事あたはず。陰陽和合して天地の化育成る。人も小天地なり、乾道男となり、坤道女となり、配して夫婦となる。夫婦室に居るは人の大倫にして、上は祖先を祀り、次に家業を修め、次に子孫をひろむ。これによつて、古の聖人男女相合の道を絶ず。男女配合して子を生育するは、天地自然の妙道にして、廢すべからざるものなり。今、宴遊娛樂のために設けし道にはあらず。しかうして後世の人、薄弱の身をもつて情に狗ひ、慾をほしいまゝにして身を損ひ、天年を短うし、甚しきものは放蕩淫泆にして家を喪ひ、宗を覆す、哀むべきなり。古人も飲食男女は、人の大慾の存するところと戒給ふ。およそ人の身體髮膚は、父母より受あづかりしものなれば、わたくしの物にあらず。父母全して生ず。子全うしてかへすべきなり。一時の情慾をたへ忍ぶことあたはずして、父母の賜ものをそこなひ傷るは不孝なり。父母幸に許すとも。天奚れぞ罪せざるべけんや。

遵生八牋曰、養生の道、まづ色慾を節にするをはじめとす。夫元氣は限りありて、人慾は窮りなし。慾

心一たび起れば、熾なること炎火のごとし。能く慾念はじめて萌す時において、即ちしひてこれをおさへ制し、虎豹のすみかに至り、陷穽の道を過るが如き思ひをなして、懼るゝ心一たびおこらば、慾火おのづから消べし。

凡男子年二十以前は、生發の氣の盛なること、火のはじめて燃、泉のはじめて達するがごとし。その勃浡然として、慾念とゞめ難しといへども、精氣未滿ず、體力のいまだ完からず。假令壯實の人たりとも、交接を愼み精液を泄さゞるべし。此時を愼ざれば、眞元を損じて、發生の本弱くなる。當時その害を覺えざれども、晩に天年を短うす。况虛弱の人にして愼を加へざれば、奚夭札の患を免れんや。故に聖人法を立て、男子二十に滿ざれば婚娶を許さず。女子十五より以前に、男色に近づけば、陰氣早く泄れて血脈を傷り、終身經調はず、その害男子とおなじ。譬ていはゞ筍の始て土中より發し出るいきほひ、壁をうがち墻を衝き、日々に長ずること數尺なり。その勢ひの盛なること禦べからず。然ども體の力やはらかにして、風雨に挫かれ、兒童に捕れて、終に成ことを得るは少し。竹と成得るに至りては、霜雪も侵すことあたはず、力士も折ことあたはず。これその體氣充ればなり。人も何ぞこれと異ならんや。生發の氣の盛なるを恃んで、妄りにいまだ滿ざるの精氣を泄せば、本よわく根枯て、後に名狀難き病を發す。愼み戒べし。孔子も、若ときは血氣未だ定まらず、これを戒ること色にありとの給へり。宜なる哉。

男子年六十四歲にして眞精閉。六十を過る人は、かたく精を閉て泄すべからず。若愼を加へざれば、飲食起居の保護宜といへども、根本の氣よわくなりて益なし。若數旬の間、しひて交接を禁じ、情慾をおさへ忍ときは、意の中自然に平になるを覺て、慾念長く發せざるものなり。稟受厚く、飲食多く

して、精力健なること壯年のごときは、少しく泄すとも害なし。これを井に譬るに、水の源深ければ流れも又長し。汲に從ふて又滿るが如し。しかれども、しひて汲ときは、竭んことを思うて、その節を愼み守るべし。

病有て藥を服する人、必交接すべからず。藥効少うして、病癒ることおそし。大病新に癒て後、氣力を養ふこと久しからざれば、交接すべからず。病後早く交接して病再び發し、或は命を失ふもの世に甚多し。愼むべし。凡人身の大病を受るは、一朝一夕の故にあらず。漸を積で病毒內に根基し、終に發して諸症をあらはす。而してこれを治するものは、みな偏性の毒藥にして、發汗にあらざれば下劑、下劑にあらざれば湧吐の劑なり。都て醫の病を治するは、病毒を攻るの道にして、常人の身には益あるものにあらず。針灸もまたしかり。かゝる病患醫治の苦楚を受て、幸に病癒る人は、長く藥を服して餘毒を除き、帷幙を密にして外邪を禦ぎ、飮食を節にして精氣を養ひ、房事を禁止して氣力を保こと、日久しからざれば、心身の疲勞容易に常に復らず。このとき一時の娛樂のために、醫家の大禁を犯して入房すれば、病再び發し、諸症蜂の如く起りて、再び藥を服するも、更に効あることなし。身情慾のために死し、笑を死後に殘す。恐れざるべけんや。古語曰、莫大の禍は須臾の忍びざるに起るといへり。好生の士は深く思ふべきなり。

凡人精力常人に逾て、少年より老年に至るまで、情にまかせ慾を恣にして、やぶれを受ざる人あり。質よわく精力衰る人、身の分限を量らずして、强てこれにならはゞ、たちまちその害をうくべし。又氣を受ること尤薄くして、交接も數次ならずして、陰虛の候をあらはす者あり。みづからいふ、交接甚少し、陰虛の症をあらはすの理なしとて、醫の敎誡をも聞信せず。かへつて醫をしひ譏る人あり。

これ大なる違なり。夫天性薄くよわきひとは、一度の交接、強人の十度にもあたるべし。度数の多少を以て、一概に違にあらずといふことなかれ。かみにいふ所の精力人に過て、多房の害を覺ざる人、若養生をくはへば、その齡百歳に過ゐもまた知るべからず。其情にまかせ、慾を行ふがために、わづかに中下の壽に死して、天年を盡すことあたはず、惜いかな。夫薄弱の人の如きも、亦調護宜ければ、中下の壽をたもちて、夭札のわざはひを免るべし。

世に滋補の劑と稱して、種々の丸散煉藥を常に服して、腎を補益し、精氣をたすくれば、虚損の患なしと心得て、それをたのみにして、婬佚を專にする人あり。又男根よわく、擧て慾をとぐることあたはず。因て種々燥熱の劑を服して、慾火を助けしめて、情を快とげんと欲る人あり。甚誤れり。夫藥はみな性の偏なる物にして、病なき人の服すべき物にあらず。晉唐以後、道家の説、醫家に混じて、不經の説世に行はれ、偏氣の藥物をもつて平人常用の物とし、終に婬犯の媒となるに至る。假令、補腎の劑効ありとも、藥力は限あり、人慾は窮なし。限ある藥力を恃みて、きはまりなき情慾を恣にするはあやふい哉。鼈肉、鰻、鰌魚、雞肉、雞卵、鹿肉、自然生の類を藥餌と號して常食し、婬慾を恣にする人あり。これまた誤なり。なぎやうには陽を益すといへども、しひて食すれば徒に腸胃を損じて、他の害を生ず。食餌も亦補も恃べからず。只情を忍んで慾を節にするを要とす。

世に艶本あり、枕双紙となづく。これを翫弄して弄ぶ人多し。艶本の物たる婬火を動して、人の慾念を發せしむるを以て益の効とす。さなきだに誘はれ易く、發し易きは慾の常なるに、かゝる不祥の物を弄びて、婬佚の媒とする事は、我々信ぜざるなり。好生の士は決て一室にも置べからざるなり。かかる不祥の物を弄ばむよりは、其人の才と不才と

に應して、力の及ぶだけの書を見て、身を保ち、家を治むるの教をさとり、心を樂ましめて、天年を全うし、父母の遺體をそこなふことなくして可ならん。艶本を弄んで身命を誤ると、聖賢の書を見て身をたもち、德を養ふと、得失いづれにあるや。孔夫子も德を好む事、色を好むがごとくするものを見ずと、嘆じ給へり。

放蕩、婬逸の少年、遊戲の餘り、閨房の趣味をたすけんとて、辛溫香竄の丹藥を、陽物淫器に施して交接する者あり。男女ともに病を受るのみにあらず、若この時妊娠すれば、生るゝ子かならず惡瘡を病む。愼てかゝる戲をなすべからず。

參贊書曰、一たび精液を閉て泄さゞれば、一たび火滅ゆ。一たび火消るは、一度油をそふるなり。譬ば人の淫慾は火の如し。精液は油の如し。慾火をおさへ制することあたはずして、妄りに精氣の油を泄せば、その身たちまち倒る。日々に補藥を服し、朝夕に摩擦をなし、吐納導引の術をつとむといへども、益なし。自餘の保養をつとむるは、燈火のたえんとするとき、風をふせぐが如し。たとひ風なくとも、根本の油盡て、火光明らかなるの理あらんや。

千金方に、房中補益の說あり。養生訓に擧る所の如く、其大意は男子四十以後は血氣ようやく衰る故、精氣をばもらさずして、只しば／＼交接すべし。かくのごとくする時は、元氣へらず、血氣めぐりて、補益となるといへる意なり。年四十を過る人は、血氣いまだ大に衰されども、壯年のごとく氣動かぬゆゑ、精液をもらさゞることもなしやすし。又精を泄さざれども、氣欝滯せず。よつて四十以後の人を目的にして、此說を立し物なり。つく／＼千金方の意を按るに、少年も老人も、この術を行うて可なり。夫人情の堪へ忍び難きは、色情の慾より切なるはなし。而してこの編往々云述るごとく、

生命に害あることし、亦色慾より甚しきはなし。然らばいかゞして可ならんや。千金方の術を行ふより外に術なし。忍び難き情慾は遂て、生命に害なき良法なり。この術を行ふに法あり。凡交接の道、氣いまだ盛と動かずして、陽氣滿ずんば、必先しづしづと陽氣を充しめ、神和し意感じて、初めて陰氣に配合すべし。陽氣微弱にして氣十分にみたずんば、いまだ配合すべからざるべし。交接のあはひ、陰陽を和合することを主とし、ゆるうとく、靜なるを妙とす。一身の力をきはめて、あらくせはしく、陰陽を戰はすべからず。必精液をかたく閉て施し泄すべからず。交接の間、常に鼻を以て氣を内に入れて、口よりすこしづゝ靜に氣を吐出すべし。ものいふべからず。大息すべからず。しかるときは一身の血氣調和して、その益甚多し。房事終て後、たゞちに小便をすべし。鬱滯の氣もれて腫物を生せず。淋疾等の患を受ず。しかれども精液を一向に泄さゞれば、又害あり。年二十の者は四日に一度泄らせ、三十のものは八日に一度泄らせ、四十の者は十六日に一度泄らせ、五十の者は二十日に一度泄らせ、六十を過る人は精を閉て泄すべからずといへども、やむことなき時は、身の強弱をはかりて、一月に一度もらせ。老少ともに、此日數は常人に立るところにして、性虛弱の人は日數に拘らず、精氣を惜みて交接を稀なるべし。丹溪先生房中補益の論を評して曰、聖賢の心神仙の骨なくんば、なし易からず。房中を以て補とせば、人を殺すこと多からずと云々。嗚呼これ何の謂ぞや。樓中の娼婦を見るに、日夜數十人と交接して、かつて虛損をうけず。如何となれば、固く精氣を守りてもらさゞればなり。娼婦豈聖賢の心、神仙の骨あるといはんや。淫心深き女子さへ、つとめ忍ぶときは、精氣を守て泄さずして止ぬ。况究竟の備ある男子、奚ぞつとめてなすことあたはざるの理あらんや。

丹溪の論偏僻なりといふべし。當時浪華に淨瑠璃の名匠あり。名海内に普し。此人性色情を愛して、妻妾數人をたくはへ、八旬に近き今年に至る迄、時時青樓に遊んで多淫を興す。然るに美音壯年に異ならず、起居また衰へずと。予竊にうたがふ。多房の生命に害あること、水火より甚し。然るに身傷をうけず、上壽を保て美音むかしに異ならず、起居またすこやかなることは、如何なる故たるをしらず。因て其生平の所行を問に、性好んで多淫を事とすといへども、唯交接するのみにして、精液をば閉て泄さずといへり。宜なる哉。その壽して身衰へざる事、この人暗に千金方の秘訣を得たりと謂べし。これによつて見るときは、千金方の論奇怪に似たりといへども、その人を欺ざること據とするにたれり。

男女交會の道は、子孫を廣うし、後嗣を得るを本とす。古人曰、不孝に三ツあり。後なきを大なりとすといへり。然して人の子あると子なきと、みな天の命する處にして、人爲にあらず。人如何に子孫を生せんと欲すとも、天これをゆるさゞれば得べからざるは、嗣の有無果して天にあつて、人にあらざればなり。然れども惣て天命にゆだぬるは、人事を仕盡したる上の事也。人の力のおよぶだけの事をつとめてしつくすを、人事を盡すといふ。人事を盡さずして、天にゆだぬるは、天を誣る也。人の業を盡して後は、天のはからひにまかすべきなり。譬ば醫家の病を治するも人事なり、天にあらず。藥用の誤もなく、保護の至らぬところもなくして死するは天命なり。或は醫家の誤治に死し、保養の宜しからざるに死するは、人事の盡ざる處にして非命也。未天命に歸すべからざるが如し。然らば嗣を得るの命は天にありて、嗣を求るの道は人にあり。廣嗣紀要古庵曰、婦人子なきの因四ツあり。或は經候調はず、或は血不足し、或は病毒あり、

或は交接節に過ぐ。この四つは、みな子なきの因なり。四つのうち最多房は求嗣に害あり。いかんとなれば、柳巷花街の妓女娼婦妊娠するもの甚稀なり。假令たま／＼生育するも、生るゝ子多病短命なるを以て、多房の生育に害あるを見つべし。凡人嗣を得んと欲せば、その經候を調へ、その血の不足を補ひ、其痛毒を去、その情慾を節にすべし。山に草木あらざるはなし。人豈生育せざらんや。嗣の有無は天命にかゝるといへども、人事を盡さゞる人、其心を究めざるべけんや。

嗣を求るの道、本を固うするを主とす。時をしるを要す。本とは何ぞや、男子交接を節にして、妄りに精液を泄さゞるなり。交接を節にして、妄りにもらさゞれば、精氣盛なり。婦人も交接を節にして精氣をもらさゞれば、經血調ふ。男精壯に、女經調ふは、子あるの基なり。時とは何ぞや、交會のおはひ、女の情しきりに動き、心もだえわくかれて、快美忍ぶべからざるの美時あり。絪縕樂育の氣これに觸るを以てなり。これ子宮開け、男子の精を受て、胎を結ぶ。妙合大和の佳期なり。この時にあたつて、男子氣をたひらかにして、精を施しもらせば、たゞちに子宮に藏て胎かならず成る。若夫強く壯なる男婦いまだ兒を得ず、羸弱の士女すでに子ある者あり。これ一時の虚實にして然るのみ。定理と爲すべからず。凡天地の物を生ずるも、必絪縕の時あつて萬物化生す。鷄犬の至微なるも、雌を受んとするときは、その雄必狂ひ奔りて雌を呼びさけぶ。絪縕の氣これに屬るを以て、自やむことあたはざるなり。これ天然の節候、生化の眞機なり。人は萬物の靈にして、鷄犬と類をおなじうせずといへども、其氣の感じ動くこと異なることなし。

廣嗣紀要曰、婦人經水まさに絶て金水始に生ずる此時子宮開けて、すなはち精をうけて胎を結ぶ

の時なり。この佳期を過れば、子宮閉て胎を受ずと云々。予が今本文に舉る所は、袁了凡の説に本づくものにして、この説とたがへり。何れが是なることをしらず。二説ともに舉示して、來哲の成説をまつといふ。

妊娠の兆既にあらはれば交接を愼べし。近世傷產の婦人甚多し。而して多房を以て誤るもの、十にして七八なり。多房にして胎墮るに兩道あり。月いまだ滿ざるときは、胎氣いまだ堅からず。この時しばしば交接して精氣を動かせば、胎氣養を失ふ故、保事あたはずしておつ。亦月滿て後は胎形堅實にして、心下より小腹にわだかまる。此時しば〳〵交接して、胎を推すごときは、胎そこなひ傷れて保ち難くしておつ。凡妊娠一度胎墮れば、其次も大槩その日時にわたつて、おつるものなり。かゝる人は藥を服して氣血を調へ、情慾を愼んで精氣を養ひ、墮胎のうれひを免るべし。今の子なしといふもの、大半これ一二月にして胎おつるなり。こと〴〵く娠を受ざるにはあらず。故に初交の後もつとも將息して可なり。交接を恣にして其子宮をみだることなかれ。妊娠して後怒らすべからず。勞せしむべからず。遠行せしむべからず。重き物を舉しむべからず。しば〳〵洗浴せしむべからず。

產後病なくすこやかなれども、百日よりうちに夫婦室をおなじうすべからず。婦人新產脫血の後、經血いまだ調はずして交接すれば、血氣動搖して崩漏の急症を發し、或は頭痛、頭眩、耳聾、耳鳴、驚狂、痿躄等の、終身治し難き病を生ず。或は乳汁乏しくなる。愼を加ふべき事なり。產後病ある婦人は禁戒百日に限らず。經血能調ひ、諸病癒るを度とす。又交接の間は勿論、交接の前後小兒に乳汁をあたふべからず。小兒婬火を受て、驚風、疳疾等の病を發す。しらずんばあるべからず。

男女精氣の虛耗に因て、出見る病症甚多端にして枚

舉べかたすといへども、其大略を謂んに、先瞳子散大して眼中見はりよわく、兩目黯黒ありて物を見守る事あたはず。時として目前に黒花を生じ、或頭眩、目暝、髮落、耳中虚鳴、或吐血、衂血する人。或面色及肢體色青白、或黄て光澤少なく、肌膚甲錯しく和潤ならず、咽乾、唇燥、舌紅滑にして渴を發し、或は兩頰赤く、頭面燥熱て酒に醉るが如く、風雲のうちに坐るが如く、或煩熱とて、手掌足心常に熱し、冷水にひたしたく、氷石を握りたき思ひをなす人。肢體怠惰、唾痰で、四肢及腰膝寒冷。或指先麻痺、或肩背常に惡寒ありて外邪に感じ易く、寒氣に逢ることを蛇蝎の如く、亦暑氣をも堪忍ぶことあたはざる人。左の乳下および臍傍動悸強く、物に驚き易く、心中煩悸、怔忡心胸恍惚として夢多く、睡中おそはれやすく、さしてもなき事も深く心に懸り、懊憹して安眠する事を得ざる人。腹形上ぼりにして、小腹及腰脚力なく、臍下を按て見るに虚濡、或拘急、或不仁人、脊背强痛、時に氣腹より胸に上衝、胸肋脇腹虚脹し、水飲溜り易うして噯氣を發し、或心下痞、飲食味ひなく、少し食しても大に飽滿、しばし時過れば忽ち饑に臨み、或腹の二行より、攣急て痛み、行動倦怠、夜行する時は大に喘滿、氣急する人。陰頭寒、小便頻數にして餘瀝たえず、或小水色清白或赤濁あり、或夢交とて夢中に交接して精を泄し、失精とて時ならず精おのづから泄るゝ人。情慾動き易うして陰根勢ひ弱く、事にのぞみて精液忽泄て、陰根早く萎しぼみ、或一夕數會しても陰莖盛にして、慾火消ず、或精液に血統ある人。骨蒸潮熱とて日晡所寒熱往來を發し、自汗、盜汗出、心中煩悶日々に羸痩、喘急短氣、腰脚力なく、四肢沈重、臍下より勞汗出、咳嗽聲啞、常に口に痰沫多く、或時は痰に血線あり、或頭重うしてあがらず、臥ことを好んで起ことを惡む等の症は、みな是虚耗の癥候にし

て恐るべき大凶の兆なり。是故ある人は、房中の愼を專にして早く保護を加へ、二豎子膏肓にかくるるの大患を免かるべし。

養生訓附錄終

樂訓卷之上

惣論

貝原篤信著

あめつちのめぐみをうけて、いきとしいけるもろもろきはまりなき内に、人ばかりたふとき物なし。いかんとなれば、人は萬物の靈なればなり。されば人とかく生れきぬる事、いたりて得がたき幸なり。しかるにわが輩おろかにして、人の道をしらざれば、天地より生れ得たる人の心をうしなひ、人のゆくべき道をばゆかで、ゆくまじき道にまよひ、あさゆふ心をくるしめ、其上わが身に私して人に情なく、おもんばかりなくて、人のうれひをしらず、いたりてちかき父母につかへてだに、其心にかなはず、およその人倫にまじはりて道をうしなひ、人と生れたるたふとき身をいたづらになし、鳥獸と同じくいき、草木と共にくちなんこそはいなけれ。顔之推が人身は得がたし。空しく過す事なかれといひけん事、心にとゞむべし。この故に人はいとけなきより、いにしへのひじりの道をまなび、我が心にあめつちより生れ得たる仁を行ひてみづから樂しみ、人に仁をほどこして樂しましむべし。仁とは何ぞや、あはれみの心を本として、行ひ出せるもろ／＼の善をすべて仁と云。仁とは善の惣名也。仁を行ふは是天地の御心にしたがへる也。是すなはちいにしへの聖人のをしへ給ふ人の道なり。此道にしたがひてみづから樂しみ、人を樂しましめて、人の道を行はんこそ、人と生れたるかひ有て、顔之推が云けん空しく過すのうらみなかるべけれ。

およそ人の心に、天地よりうけ得たる太和の元氣あり。是人のいける理なり。草木の發生してやまざるが如く、つねにわが心の内にて、機のいきてやはらぎ、よろこべるいきほひのやまざるものあり。

是を名づけて樂と云。是人の心の生理なれば、即是仁の理なり。只賢者のみ此樂あるにあらず、なべての人も皆これあり。されどまなばざれば此樂をしらず。易に百姓日々に用てしらずといへるが如し。又私慾にわづらはされて此樂をうしなふ。ひとり賢者は此樂をしり、又私慾のわづらひなくして樂を失はず、只人のみこの樂あるにあらず。鳥獸草木にも此樂あり。草木のおひしげり、花さき、實のり、鳥のさへづり、獸のたはぶれあそび、鳶の飛んで天にいたり、魚のふちにをどるも、皆此樂を得たるなり。されども衆人すら此樂をしらずして失へり。いはんや鳥獸は云に及ばず。

人の心の内にもとより此樂あり。私慾行はれざれば、時となく所として樂しからずと云事なし。是本性より流れ出たる樂なり。外に求るにあらず。又わが耳、目、口、鼻、形の五官、外物にまじはりて色を見、こゑを聞き、物くひ、香をかぎ、うごき、しづかなる五のわざ、欲少くよきほどに過ず。されば、あふさきるさ、こと〴〵に樂しからざる事なし。是外物を以、樂の本とするにあらず。又外物にふれて其よろこばしきちからを得て、樂はじめていでくるにもあらず、もとより人の心の内に生れ付たる樂あるゆゑ、外物にふれて其助を得て、内なる樂さかんになれる也。たとへば人にもとより生れ付たる元氣あり。是生命の本なり。されど飮食衣服などの外よりの養なければ、うゑこゞえて元氣を保ちがたし。外物の養を以て、内の樂を助くるは、外にある飮食衣服の養を以、内なる元氣を助くるが如し。又心の内に此樂あれば、飮食などの外のやしなひも皆樂の助となる。しかのみならず、朝ゆふべ目の前にみちたる天地の大なるしわざ、月日の明らけき光、四時のめぐりゆく序にしたがへる、折々の景氣のうるはしきありさま、雲烟のたなびける朝夕の變態、山のたゝずまひ、川の

ながれ、風のそよぎ、雨露のうるほひ、雪のきよき、花のよそほひ、芳草のさかえ、嘉木のしげれる、鳥獸蟲魚のしわざまで、すべて萬物の生意のやまざる、是をもてあそべば、きはまりなき樂なり。是に對すれば其心を開き、其情を清くし、道心を感じ興し、鄙吝をあらひ盡すべし。是を天機に觸發すと云。觸發とは外物にふれて善心をおこすをいへり。是外物の養をかりて內の樂をたすくる也。

學ばざる人は、內にある樂をしらず。又外なる樂をむなしくす。內外二ながら失へり。

聖人やゝもすれば樂の字を說給へり。其故をいかんと思ひ、樂の身にせつなる事をしるべし。禮經にも、心中しばしも和せず樂しまざれば、いやしき心生ずといへり。此樂を失はざれば、きたなき心おこらず。此故におよその人さかしおろかなる、皆この樂を求むべし。只賢者にゆづるべからず。此樂內にあれば、德の身をうるほして、心ひろく體ゆたかなる事、あたかも富の家をうるほすが如くなるべし。

天地の御めぐみをうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御心にしたがひ、わが仁心をたもちて、つねに樂しみ、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみめぐみ、善を行ふを以て樂とすべし。人の惡をいましめんため、怒り罰するは、やむ事を得ざればなり。つねには和樂にして其氣を養ふべし。されど又和に專一にして禮なければ一偏にながれ、亂れて樂をうしなふ。

人のうれひ苦みをおもんばかりて、人の妨となる事をほどこすべからず。常に心にあはれみありて、人をすくひめぐみ、かりにも人を妨げくるしむべからず。我ひとりたのしみて人をくるしむるは、天のにくみ給ふ所おそるべし。人と共に樂むは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂なり。

此故に天の道にしたがひ、人の道を行ひて、みづから樂しみ、人をたのしましめん事は、つねに善を行ひ惡を去を以てわざとすべし。かくの如くにせん事は、べちのつとめなし、只ひじりの道をまなんで其理をしるべし。

人をうらみ、いかり、自ほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人のことばをとがめ、無禮をいかるは、其器小なり。是皆樂をうしなへるわざなり。怒と慾とをこらへ、心を廣くして人をせめとがめざるは器大なる也。是和氣をたもちて樂を失はざる道也。

世の人のひが事多きは、うき世の習なれば、いかんともしがたし。をしへてもしたがはざるは愚人なり。聖人といへどちからに及ばず。人の愚なるによりて、いかりてわが心をなやますべからず。人のあしく生れ付たるは其人の不幸なり。あはれむべし。わが心にあづかりてうらみとがめ、みづからくるしむべからず。人のあしき故、わが心の樂を失ふは愚なり。

小人のわれに思ひがけぬあしきしわざをなして、情なくひが事をほどこせる横逆のものあるも、又むかしよりおほき世のならひなれば、衆人はさこそあるべけれと思ひやりて、うらみいかるべからず。堯舜の聖も、わが子の不肖なるをいかんともしがたし。わが子弟親戚など、をしへてもしたがはずんば、せめとがめて和をうしなふべからず。人の生れ付て不肖なるも、わが身のかゝる人にあひて不幸なるも、皆天命なれば、みづからくるしみ、人をいかりて、樂を失ふべからず。

心こゝにあらざれば見れども見えず。目のまへにみち／＼て、樂しむべきありさまあるをもしらず。春秋にあひても感ぜず。月花を見ても情なし。聖賢の書にむかひてもこのまず。只私慾にふけりて身をくるしめ、不仁にして人をくるしめ、さがな

くいやしきわざをのみ行ひて、わづかなるいのちの内を、はかなく月日をおくる事をしむべし。

心あきらかにして世の理をよく思ひしり、物に情あらん人はわが心にある樂をしつて本とし、身の外四の時をり〳〵につきて、天地陰陽の道の行はるるをもてあそび、天地の内なる萬のありさまを見きくにしたがひて、耳目をよろこばしめ心を快くし、其樂極りなくして、手のまひ足のふむ事をしらざるべし。

世の人まどしくしてはうれひくるしみ、富貴をうらやみて樂なく、富貴にしてはおごりおこたりて、欲をほしいまゝにし、財をつひやして樂をもとむれど、欲にやぶられてかへりて自くるしみ、人をくるしましむ。すべて富貴も貧賤も其ねがひ外にありて、内に道を得ざればくるしみのみにて樂なし。

内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得て、助として、其欲にながされず、天地萬物の景氣のうるはしきを賞すれば、其樂かぎりなし。此樂朝夕つねに目のまへにみち〳〵てあまりあり。これをたのしめる人は、すなはち山水月花の主となりて、人にこひ求むるに及ばず。たからもてかふにあらざれば一錢をつひやさず、心にまかせてほしいまゝにとりて用れどもつきず。つねにわが物としてりやうすれども人いさはず。いかんとなれば、山水風月の佳景はもとより定れる主なければ也。かく天地の内きはまりなき樂をしりて、たのしめる人は富貴の淫樂をうらやまず。其樂富貴にまされればなり。此樂をしらざる人は、樂むべき事目のまへにつねにみち〳〵ておほけれど、其樂をしらざれば樂まず。世俗の樂は、其樂いまだやまざるに、はやくわが身のくるしみとぞなれる。たとへば味よき物をむさぼりて ほしいまゝにのみくへば、はじめは快しといへど、やがて病おこり身の苦しみとなれ

るがし如し。凡世俗の樂は心を迷はし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂はまよひなくして心をやしなふ。外物を以いはゞ、月花をめで山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、其樂淡ければひねもす樂しめども身にわざはひなく。人のとがめ神のいさむるわざにあらず。此樂貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は其おごりおこたりにすさみて此樂をしらず。貧賤の人は此二の失すくなし。志だにあれば此樂を得やすし。

君子は足る事をしり、むさぼりなければ、身貧しけれども心富めり。古語に知レ足者は心富りといへるが如し。小人は身富めれども心まどし。むさぼり多くしてあきたらざればなり。然れば只此樂をしりて貧賤をやすんじ、富貴をねがはざるはかり事をなすべし。老てはいよいよむさぼらず、足る事をしりて貧賤を甘んずべし。

君子小人ともに樂みをこのむは人情なり。されども君子小人の樂みとする所同じからず。禮記に、君子は道にしたがふ事をたのしみ、小人は欲にしたがふ事を樂む。道を以欲を制すれば樂んでみだれず、欲を以道をわするればみだれて樂しまずといへり。こゝを以小人の樂は眞の樂にあらず。はては必苦みとなる。

天地に風雷の變あれども和氣を失はず。人に患難ありとも和樂をうしなふべからず。人もし身はしづみ位みじかくなり、時世うつろひぬとも天命をやすんじ、心を自寛くすべし。土御門院の御歌に、うき世にはかゝれとてこそ生れけめ理しらぬわがなみだかな。又古歌に、うきことは世をふるほどのならひぞとおもひもしらで何なげくらん。又曰、ならひぞと思ひなしてやなぐさまん我身ひとつのうき世ならねばとよめるが如し。うき世にすめば心にかなはざる事多し。是世のならひなり。いか

なる大富貴なる幸あつき人も、身に病なく、いのち長く、親戚にうれひなく、五福そなはり、思ふ事心にかなへる人はまれなり。かゝる世のためしをしらで、世變のために心をくるしむるは愚なるかな。

もし此理をしれらば、身の上につきて樂しみ、外を願ふべからず。貧賤にしても患難にあひても、時となく所として樂あらずと云事なかるべし。坐るには坐の樂あり。立には立の樂あり。行にも、臥にも飮食にも、見るにも、きくにも、ものいふにも樂あらずと云事なし。樂はもとより心に生れ付て身にそへるものなればなり。されど此樂をしりて樂しむ人すくなし。理くらければ樂をしらず。欲ふかければ樂をうしなふ。

人もしいとまあらば心のどけく閑にし、日を永くしていそぎはしかるべからず。ことに老ては殘れるよはひやうやくすくなく、時節のすぐること殊に早ければ、時刻をしみて一日を以十日とし、一月を以一年とし、一年を以十年として樂しむべし。樂まずしてあだに月日をくらして後にくゆべからず。

梓弓はる立しより年のくれ行まで、いるがごとくにおもほゆれば、時日のはやく過ゆくはとゞめあへず、むべもとしと名づけ、又時といへるならん。されば光陰箭のごとく、時節流るゝが如しといへるも、うけることにあらず。老にむかへば猶更に年月のはやく過る事、あだかもとぶが如し。あとをかへり見ればいそぢのよはひをすぎこしも、さのみ久しからず。たとひいそぢの後、又いそぢのよはひをへて、百年にいたるとも、猶ゆくさきの月日いよ〳〵はやくして、ほどなく盡なん事思ひやられ侍べる。いくほどなき殘れる齡をたのしみてこそ、すぐさまほしけれ。うれひくるしみて、むなしく過なんはいとおろかなりや。とし〴〵に花

は相似たれど、としぐ〱に人は同じからず。老かさなれば、一とせの内にもやうやくおとろへゆきて今の昔にしかず、後の今にしかざる事をしりて、かねてより悔なからん事をおもひ、時日ををしみ一日もいたづらにすぐすべからず。けふくれて明日もありとてたのむべからず。けふの日の内を日日にをしむべし。

わが身の足る事をしりて、分をやすんずる人まれなり。これ分外をねがふによりて樂を失へり。知足の理をよく思ひてつねに忘るべからず。足る事をしれば貧賤にしても樂しむ。足る事をしらざれば富貴をきはむれども、猶あきたらずして樂まず。かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足れる事をしれるにははるかにおとれり。富貴貧賤は賢愚によらず、只生れ付たる分あり。古人の詩に、耕牛宿食なし。藏鼠餘糧ありといへるが如し。賢者も貧しく、不肖者も富める人多し。是生れ付たる分なり。分をやすんじて分外をうらやみねがふべからず。外をねがふ人は樂しみなくしてうれひ多し、わざはひも亦これよりおこる、愚なりと云べし。世にはさいはひわれほどもなき人多し。われより下なる人を見て足る事をしり、分をやすんじ、外をねがはざればうれひなく、樂多くしてわざはひなし。又極めて貧しき人も、人各生れ付たる分ある事をしりて、分をやすんじて天をうらみ、人をとがむべからず。

世の中に同じく人とうまれて、飢こゞゆる人亦多し。其不幸あはれむべし。わが身餘財あらばかゝる貧人にほどこしすくひて、みづから樂み、人を樂しましむべし。人間世の樂はみづから善を樂しみ、人をすくひて善をするにこえたる樂しみはなし。おごりて益なき事に財を多くつひやすは、浮氣のなすわざ、甚をしむべし。よく思ひて樂みにはあらざる事をしるべし。富める人のおごりて、一日一事

につひやせる財を用ひなば、千萬人の飢を助くるにも猶餘あるべし。然れば百人のうゑをすくふは、財おほくつひやさずしても、すくひやすくして其益大なり。こゝを以大富人ならざれども、仁心だにあらば眼前に人のうゑこゞえぬるを助くるほどのめぐみは行ひやすかるべし。いはんや富貴厚祿の人は、多くの人の飢をたすくる事、いとやすき事になん侍べる。只志のなきをはぢて、財のたらざるにことをよすべからず。

富貴なればおごりおこたりやすくして此樂を得がたし。貧賤の人はおごりおこたりすくなくしてさとしやすし。富貴の人は世のはかなきわざ多きにまよひて、書をよんで道を樂しむ事をしらず。然れば富貴なるは、かへつて不幸と云べし。此大なる樂を得がたければ也。古語に貧しきは富るにまされりといふ。又讀書は貧者の樂といへるもむべなり。わがともがら愚にして又いやしければ、ちりひぢのかずにもあらぬ身なれど、書をよみ道をたふとぶ樂は、いかなる富貴にもかへがたし。

人のいのちはかぎりあり。ひいて長くしがたし。かぎりある命の内の光陰をゝしみ樂しみて、月日を送るべし。しばしの間も益なき事をなし、ひが事を行ひ、樂まずしてむなしくすぐすべからず。いはんやうれひ、苦み、いかり、かなしみて樂を失ふはおろかなり。なす事なく樂まずして月日をむなしく過さば、千年をふともかひなかるべし。

いとけなきよりさかんになり、老にいたり、おとろへて死にいたるまで、百とせのよはひも亦いくほどなし。人の世にある事、かりにやどれる旅人のごとし。東坡が詩に、「一年如一夢百歳真過客」といへるもむべなり。かくみじかき此世なれば、無用の事をなして時日をうしなひ。或いたづらになす事なくて、此世くれなん事をしむべし。つねに時日ををしみ益ある事をなし、善をする事を樂しみて

すぐさんこそ、世にいけらんかひあるべけれ。

心にあはれみふかく、善をこのみて、心氣和平ならば、物になさけありて人倫にしたしきはいふに及ばず、草木までも皆われとへだてなく、なづ〳〵しくなりぬる心ちぞすべき。

つねの氣象は從容として不ㇾ迫、此四字を守るべし。從容とはおもむろにしてしづかなるをいふ。すみやかにいそがはしき時も、心平かに氣和にして樂を失ふべからず。こと多くとも心はしづかなるべし。しづかならざればあやまる事多し。人のわれに對していかになさけなく無禮なりとも、いかりて言をはげしくし、目をいからげきたなきけしきをあらはして樂を失ふべからず。つねに其氣象從容不迫なるべし。

白樂天の詩に曰、自延年の術あり。心閑なれば歳月長し。又曰、閑中日月長し。東坡の詩に、無事にして此靜坐すれば一日是兩日、人若活ること七十ならば便是百四十といへるも、心しづかなれば日長き事をいへり。凡閑中つねに樂多し。いとまなき人もをり〳〵閑を求めて心をやしなふべし。心閑ならざれば樂は得がたし。されど閑靜に專にして、動作をきらふは正道にあらず。

心安く身閑にして獨坐するも、亦貧居の樂なり。世俗の宴遊をこのみ、さはがしき友多きにまされり。學このまざる人のとひこぬは、かへつて情あり。心なき人のおのがつれ〴〵と、いとまあるまゝにとひ來りて長居するはわびし。されどかゝる人を白眼にして見るはなさけなし。禮をうしなふべからず。

清福といふ事あり。樂みをこのめる人必これをしるべし。是識者の樂む所にして俗人はしらず。この故にわが身に清福を得て大なる幸あれども、是を知りて樂しめる人まれなり。たとへば寶の山に入ても、寶をしらざれば手を空くして歸るが如し。清

福は富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも其身安く、靜にして心にうれひなき是なん清福とぞ云める。いとまありて閑に書をよみ、古の道を樂しむは、是清福のいと大なる樂也。又其心風雅にして、古書をよみ詩歌を吟じ、月花をめで、山水をこのみ、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはる〲さかえうるはしきをみて樂しみ、貧けれど飢寒のうれひなく、蔬食口になれぬれば、味ありて肥濃なる美味をうらやまず、淡薄なるはかへつて身をやしなふに宜し。布のころも紙のふすま、いさゝか寒をふせぐにたれり。むぐらおひてあれたる宿におきふしても、風雨のうれひなかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさし置きぬれば、貧とすべからず。是眞の寶なれば滿藏の金にまされり。又良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境にあそびて、其地のことなる形勝をもてあそぶ。是皆清福を得たるなり。いかなるえにしありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて幸甚し。

清福はいとまありて身やすく、貧賤にしてもうれひなきを云。書をよんで古の道にたど〳〵しからず。また山水月花の樂あり。是財利の富饒なる福にまされり。或靜室に安坐し、書をよみ道を樂しみ、又良友に對して道を論じ、同じく風月を賞する、是清福のいとすぐれたる樂なり。

凡いける物、しづかにいとまあるはまれなり。富貴の人は古より世ごとにおほけれど、心安くして憂苦なく、身閑にいとまありて、つねに樂しむ人は世にまれなり。こゝを以清福の樂富貴にまされる事はるかにこえたる事をしるべし。おろかなる人は、清福を得てもしらずして樂まず。又清福をしりても、身に清福なければ此樂なし。此清福を得る人世にすくなきは、天のをしみ給ふ所なれば、尤得がたしといへり。もし此清福の樂をしりて、清福を

得たらん人は、世に類すくなき福なり。天の物を生ずる、二ながら全からず。花よきものは實よからざるが如し。すでに清福を得たる人は、さらに富貴をねがふべからず。二ながら得んとするは欲ふかくして天命にそむけり。かゝる樂を得ても猶外をねがひ、富貴をうらやみて、みづから足る事をしらざるは、分をしらずして樂をわするゝなり。愚なるかな。

旅行して他郷にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をわらひすゝぐ助となれり。是も亦わが徳をすゝめ、知をひろむるよすがなるべし。又いひしらぬ異境にゆきて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其里人にあひて其所の風土をとひ、あるはおくまりたる山ふところに、いはねふみてたづねいり、もとより山水の癖ありて、青山夢に入事しきりなる人は、心をとめて歸る事をわすれぬ。あるは海べた山遠き眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもまされり。又其里におひ出たる名産のことなる品を見て、其味をこゝろむるもいとめづらしく、心なぐさむわざなり。すべて勝地にあそびて見きゝせし事、只一時の耳目を悦ばしむるのみならず。いく年へぬれど其時見聞せし有さま、老の後までをり〳〵おもひ出られて、あだかも其時見聞せし思ひをなして樂しむべし。こゝを以世にめでたき事を、思ひでといふもむべなるかな。

忍はしのぶともこらふるともよめり。俗にいはゆる堪忍する事也。忍ぶべき事多し。大やう忿と欲との二にいでず。わが身のこのめる酒食聲色、財利などの私慾をこらへて、ほしいまゝにせざると身のやつ〳〵しく、ゆたかならざるをこらへて、貧をあまんじ、くるしまざるは慾をしのぶなり。人のわれに情なく無禮なるをば、凡人はかくこそ有らめと思ひてこらへて、いかりうらみざるは忿を忍

るなり。凡忿と慾とを忍べば、心平らかに氣和らぎ、身やすく、人にさはりなくしてはぢなく、苦しみなく、後のうれひなく、わざはひなし。忍の一字より萬の善き事いづ。忍ばざれば萬のあしき事是よりいづ。故に古語に忍は是衆妙の門と云へり。忍のことわり樂を得るにおいて其益大なるかな。

酒は天の美祿なり。少のめば心を寛くし、憂をけし、興をやり、元氣を補ひ、血氣をめぐらし、人と歡を合せ、樂を助けて其益多し。もし多くのんで酩酊すれば、人の見る目も見ぐるしく、言おほくみだりにかたり、すがたもつねにかはりてつゝしみなく、心あらくして狂するが如し。古人是を狂藥といへるもむべなり。其上病を生じてくすしがたし。大なるわざはひとなる。わかき時より多飮をいましめざれば、ならひてくせとなるもうらめし。こゝを以古語に、酒は微醉にのみ、花は半開に見るといへり。酒をのまば微醉を限として、樂みを失はざるべし。ほしいまゝにのんで苦みを求むべからず。天の美祿として、樂を生ずるめでたき物なるを以、かへつて狂藥とし、大なる禍をなして憂を生ずるはむげの事なり。

いにしへの郢曲早歌の類聲をかしく、氤氳としてつづしりうたふも、いさゝか心ゆくばかりなるは、湮鬱をひらきて氣をやしなふ助と成ぬべし。古人は詠歌舞蹈して其血脈をやしなへり。是心を樂しましめ、氣をやしなふ術なるべし。

武士は勇を專にすべし。勇を外にあらはさずして内にふくむなり。つねの時は和樂にして、人に對するに温厚なるべし。勇天下におほへども、これを守るに怯を以てすと、家語にいへるごとくなるべし。怯とはおくべやうの事なり。又大勇は怯きが如しといへり。是外に勇をあらはさゞる也。和順にして禮あれば人あなどらず。人にあなどられまじきとて、言語氣象をあらゝかにすべからず。是和樂

を失へるなり。眞の勇者はかはかたちあらゝかならず。かへつて柔和なり。張良は其形婦人の如くにして、其氣象從容とおもむろなりしは、眞の大勇なり。欲をよくこらへ、義を見て必行ひ、節義をかたく守る。是眞の勇なり。眞の勇者はつねには和樂なり。

樂訓卷之上終

樂訓卷之中

節序

一とせの内あめつちのみちつねにめぐり、四時に行はれて、萬古よりこのかたやまず。其間かすみたつより雪のつもれるまで、其けしきをり〳〵にことなり、又あさゆふのけしき、日々にことなれる、變態きはまりなきながめなり。天にありて象をなせるは、日月のかゞやき、風雨のうるほひ、霜雪のきよらかなる、雲烟のたなびけるは天の文也。地にありて形をなせるは、山河のそばだち流れ、江海のふかくひろき、鳥獸の鳴き動き、草木のおひしげれるは地の文也。かくの如くあめつちの内四時の行はれ、百物のなれるありさま、目のまへにみち〳〵て、人の見る事をよろこばしめ、心を感ぜしむる事、大なる樂なるかな。これを樂まん人は眼力を以境界とし、四時を以良辰として、其樂何

ぞ只人間三公の貴き萬戸侯の富にくらべんや。よく心をとめて玩ばん人は、其樂きはまりなかるべし。

いでや天地の内にみちたる四時のけしきのきはまりなき樂をいはゞ、春はまづ一夜のほどにあらたまの年立かへる朝の空の光、心づからにやふるとしにかはりてのどけし。睦月はことたつとて、貧しき家にも春靈などいふものをまうく。又かはらけとりいでおほみきすゝめて、まづつとめて父母にことぶきし、みづから祝し、賓客にもゝてなすさまなど、つねにかはりていとなんいみじうめづらかなり。時は今は四の始なれば、そらのけしきやう／＼引かへ、こち風ゆるく吹てこほりとけ、遠き山邊にかすみのうすくたなびける、さま／＼に物けざやかに見えて、冬のそらに立かはれるよそほひ、まづ春のきたれるしるしあらはなり。かきねがくれにふゆよりのこれる雪の、ところ／＼はだれに見ゆるも、こぞの名ごりをしむべし。ちわびし梅のにほひ百花に先だち、春の消息を得てよろこぶべし。谷をいで高きにうつるうぐひすの、春をむかへて物わかき聲、はつ春のはつねのけふにあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむものならし。花をめで鳥をうらやむは、是まづ春のたまものなり。是をはじめとして、猶ゆくさきはるかにさかゆく春の、ゆたかなるめぐみたのもし。千年をふべきみどりの松も、今一入のいろをまして、つねに見なれしもいやめづらしくなづさはれぬ。韓文公が、最是一年春好處といへりしは、早春のけしき、一年の内にてことにめづらかにすぐれたる故なるべし。きさらぎのほどよりよろづ皆冬のこゝろつきて、雲のいろうらゝかに氣しきたちて、四方山もかすみにめたるよそほひ、ことにわけほのゝけしきたとふべき物なく、わはれむべし。いにしへの人春は曙と云けんもむべな

るかな。日の光やふしわかねばかずならぬ垣ねの内も冬にかはりてかゝやぎいで、草木おひて皆顔色を生じ、花まちかはになごやかなるけはひうれし。日かげもやうやくのどかになりもてゆけば、人のわざも、ふるとしよりいとまありて、いそがはしからず、日ながくして少年のごとく、心しづかにゆたけし。海の面日和よく、うしろ山もうらゝかにかすみわたりたるけしきいとはるけし。夕つげて日はすでに入ぬれど、殘れる光猶久しきは日の長きしるしなるべし。此頃は陽氣ののぼれる、げにやわらはべども紙鳶(しえん)と云ふものつくり、ながきいとつけ、風にまかせて、はなてば高くあがり、雲の上まではるけくたなびくをたはぶれとすれは。おいみいはけみ、そらをあふぎ見るもをかし。野には又陽烟と云もの、かすみのごとく地より立のぼれり。又かけろふともいふ。莊周はこれを野馬と云。老杜が詩に、落花遊絲白日靜なりといへるも是ならし。是みなつねにはなき物なるが、春めきていとめづらし。又かきねの草はやくもえ出るを見るにつけても、春の氣は下よりのぼる。けおめいと明らけし。花もやう〳〵とさきつゞきて、梅花すでにうつろひて後新なるは、わが國ならぬからもゝの花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲のおもかげのたつ心地す。李白きはきえかての雪の、こずゑにのこれるかと見えていとうるはし。櫻のほころびたるこそ、花に心はなけれど、人の心をうごかして、えならぬながめなれ。是わが日の本にて四時の花のおほきなかにも、第一の見ものなれば、梅ちりて後この頃のこと、花は皆けおされぬ。されど日ごろまたせまたせてやう〳〵さけるが、あくまで見る程もなくとくちるは、又うらめし。よしさらばちるまでも見し山櫻花のさかりを面かげにして、と古の人のよみけんも、後のおもひ出にせんとにや、情ふかし。此折から春雨のしき〳〵

ふれば、わがやどの園の櫻は、いかに有らんとうしろめたし。柳みどりに花紅にして、春のいろをゑがき出せるは、いとうるはしきながめなり。春やうや〳〵ふかくなれば、風和かに日わたゝかに、百草芳をあらそひ、群花艶をきそふをりなれば、いづれの處か春のなからんや。かゝるけしきにふれては、人の心もうき立て、思ふどちかいつらね、春をたづねてあくがれありき、ひねもす花をながめくらすこそ、目をほしいまゝにし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじくうれしき事のあるがなかなる其一なるべし。わが心の樂をしらざる人は、綺羅の少年の闌をぬすみて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀て、好花風裏に香しきも此をりなり。杜の詩に鶯の啾あたゝかにして、正にしげしと云。陳希夷が野花啼鳥一般の春と詠せしも、皆此時なり。花のゆふばえを、すこしえひにのりて見るも、ことに色さされる心地ぞすなる。花に坐し月にえひて、二ながらかねたる樂、春宵一刻直千金、花有清香月有陰と云詩を思ひ出られぬ。又惜花春起早。愛月夜眠遲。といへり。古人はかくこそ月花をめでしに、今の人のわたらしむべし。又夜の間の風のうしろめたきをもしらで、朝おくる事おそきは、花をしまざるなり。此頃夕ぐれは遠き山邊のやけぬるも、目だつべき見ものなり。されば作人燒痕青と云、又野火燒不盡。春風吹後生といへるも、やけ野の草を詠せしなり。古詩に池塘春草生といへりしは、此頃の眼前のけしきを、只ありのまゝにいへるなるべし。いやよひも半なる頃、八重山吹の風にひるがへるは、井手のわたりも見る心地して、にぎはしければ、めかれせずながめがちなり。春の花のおほかる中に、只山茶のみこと花にかはり、さかり久し。ことさらつらをなしてうゑたる、つら〳〵つばき、つ

ら〳〵に見れどもあかず。はしのもとのさうびも、夏をまちかはなり。すべて春は草木の花、先立おくれていやをちにいとましく、おそくとくさきつづき、酴醾にいたりて花の事をはりぬるは、などりをしと見ゆ。春の花はいづれとなく、ひらけ出る色ごとに目おどろかれぬるに、ゑみじかくて、はやくちりぬるはうらめし。九十の春光はいとながけれど、何くれとまぎらはしく、風雨も亦しげければ、なす事なく、はかなくすぎて、とゞめあへぬ春のかぎりの、けふの日の夕ぐれにさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名ごりいとをしむべし。蘇子瞻が青春還一夢といへる、むべなるかな。わがともがら、うき世のちりも、わが心のきたなきも、花見るほどはわすられしに、今より後はいかゞせん。かゝるをりにふれては、ことさら時のはやく過て、失ひやすき事思ひしられぬ。老ぬれば、今いくとせか花もあひ見んと思へば、春のをしさは、いやまさりぬ。いとせめて惜春餞春を樂しみて、この憂をわするべし。すべて春のけしきは、一とせの内すぐれていとえんなり。其うるはしきありさま、云つくすべくもあらねば、かゝるつたなき詞には、このかたはしだにかたはらいたし。雨風に花はあとなくなりはてゝ、むなしき枝をのみかたみと見ぬれど、猶春の色はそらにのこりて、おもかげさらぬも情ふかし。藤は又春にひとり立おくれ、夏にさきかゝりて、かたはらにならぶ花なければにや、ひとへにけうあるさまに見えて、春にわかれし物思ひも、すこしわすらるゝこゝちぞし侍べる。

をしめどもとまらぬ春すでに去ぬれば、よばぬにきたる夏衣のうらめづらしく、今めかしうあらたまれる頃ほひ、大かたのそらのをしき心ちよげなるに、青葉の木ずゑわかやかに、物ごとに春に立かはりて、又世ことなるありさまなるも、いとなん

めでたし。緑陰晝寂を生ずれどもわびしからず。閑談にふける人は、繁花にもまされりとす。をりまち得たるほとゝぎすの、はつねまづなづかしくて、鶯のなく音すでに老にたるに、かはれる心地ぞする。もろこし人は、杜鵑の聲きく事をにくめども、わが日の本にては、昔よりこれをあはれみて、歌にも多くよめり。夜もすがらそらもとゞろになきわたれども、きく人みなあなかまとは思はず。おほからぬ所は、今一聲だにきかまほし、又なきゆく方の人もまちなんと思へば、すぎゆくもさらにうらむべからず。卯の花のかき根の雪にまがへるも、ひとり此月の名をおひて、美をもはらにすと云ふべし。およそ卯月のけしきは、清く和かにして、そらはれ、雨久しくふらず、餘寒つき、日彌永くして、いとまおほければ、出て遊ぶによし。朝まだきおきて園をうかゞふにも、風わたゝかにして、なやみなければ、日々にわたりて見どころ多く、草も木も皆みどりの色をあらはして、各其趣をなせるは、あめつちのめぐみをうけしまに〳〵、いける類よりさらに私なくして、いぶかしみなく、なづさはれぬ。韓渥が詩に、四時最好は是三月といへる、まことにしかり。されど年たかくなりぬれば、あつささむさをわびて、一とせの內いと心にかなへる時は、卯月にしくはなし。さればにや明の李夢陽が、四時の景初夏にしくはなしといへるも、先輩にかはりていみじくむべなるかな。卯月はかくそらはれやかなれど、やがて五月になりぬれば、おほそらのけしきさいつごろに引かへて、さみだれ久しくつゞき、をり〳〵はなるかみおどろ〳〵しくて、ふらぬ時だにくもらはしく、物のあやめもしらず。園をうかゞふべきひままれにして、つねにたれこめて日數をふるもわびし。

夏もやう〳〵ふかくなりぬれば、木としてしげらさるはなく、草としてさかえざるはなく、日々に物を

引のぶるやうに見えて、ひたすらに綠のいろふかき夏木立こそ、花にもをさ〳〵おとるまじけれ。春の花はところ〴〵にさきてまれなり。夏は山も里も、あるとしある草木ことに打はへて、皆綠のいろなれば、春にことなるながめなり。やちぐさにうゑあつめてなつさびし。前栽の草木ども雨をおびて各其梢をあらはし、所得がほに心にまかせて、おひしげれるもうれしと見ゆ。むかしおぼゆる花たち花のかほれる夜は、おひかせもいとなつかし。早苗とる頃、田家は雨をまち得て、いそがはしくにぎはし。此ごろやり水のほとりにとぶ螢の、おともせですたぐを見れば、なく蟲よりいとあはれむべし。夏山のけしき靑みわたりたる、たかき峯おほぞらにつらなりて、雲の外にそびえたるを、あくまで見るこそ、ことにすぐれて心を快するながめなれ。白樂天が眼を放にして、靑山を見るといへるがごとし。

みな月の頃になりぬれば、はし居の風したしく、あふぎふたしきてをるも心よし。池の心ふかく蓮葉のにごりにしまずして、花ならで夕かぜににほひわたるだにも、こと草にすぐれたり。ことに花のえみのくちびるひらけたるは、所せきまでかほりみちて、世ににたるものなくきよらなり。凉を逐て木陰にやすらひ、木々の下風のなづかしきに、淸き泉をむすび、夏をわするゝ心地するもいさぎよし。光明らけき夜半の月を、淸き水にやどして、見るはさらなり、やり水のおとなどきくもいみじう心ゆくばかりなり。日ごろへてあつさたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、などりすゞしきも、いと心よし。淸少納言は夏は夜といひつれど、ゆふべは蚊と云蟲人をさして、年老ては、ことさらいみじうたへがたければ、只このねぬる朝けの風のすゞしきけしきこそ、きよくして心にかなひ侍つれ。志士は惜ム二日ノ短キチ一と傅玄いへり。然れば人は皆苦二炎

熱。我愛二夏日長一。と柳公權がいへるもむべなるかな。くれがたき夏の日は、ものまなびわざをつとむる人のために、まことに愛すべし。されども炎暑のさかんなる時は、萬國紅爐の中にある如く、すゞろに汗あゆるばかりにて、身のちからよはりていとたへがたければ、夏のすぎゆくは、春秋の盡る日、冬のをはりなど、名殘をしむにはかはりて、みな月はらひする頃になれば心よし、只年の半すでにすぎゆくこそ、いとをしむべけれ。

秋來ぬればはつ風涼しくうちふきて、草木のそよぎ、秋の聲のいづくにも打なびきて、きこゆるこそ、はつ春の風にかはり、心をいたましめ、身にしみて、金氣の至れるしるべとおぼゆれ。きりぎりすのきざはしのもとにすだくも、をりしりがほにきこえ侍す。杜甫が懷を詠ぜし詩に、開秋兆二涼氣一蟋蟀近二牀帷一と云しも、此比の景氣をいへる也。大暑やうやく退き、新涼すでにきたりぬれば、あだかも酷吏の去りて、故人のこゝに來れる心地ぞすなる。この比は人の形氣ちからを得て、燈もしたしくなりぬれば、ふるきふみどもまきのぶるに時を得て、萬の樂にまさり、こよなう面白し。をぎのうは風、はぎの下つゆ、さまざまの蟲の音、皆秋のあはれをもよほして、身にしむ事かぎりなし。門田の稻葉朝露にうるほひ、夕の風おとづれてそよぐけしき、ことさらわせおしねのさきだちおくれて、穗に出たるありさま皆見るにたへたるながめなり。秋のもなかになりぬれば、一年をへて待得たる月あきらけきは、凡あめつちの間にならびなき、ついてひとつの見ものなれば、よろづのうるはしき景物は、皆其下なるべし。このゆふべ此景にあへるこそ、うき世の中の面白さも、あはれさも、殘らぬ折なれ。年のはに一とせの內、月ごとに上の弓はりよりゐまちの比まで、そらはれぬれば、夜毎に心を樂しましめ、目を悅ばしむる事、

さらにかずなし。ことさら三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに心にまかせて見る事、まことにさいはひおほき此世なり。およそ天の下の君は八すみをしろしめして、天地は皆其れうし給へるくにの内なれど、いやしきわが輩まで、あまつみそらに只ひとつ、かゝれる月をおのがものとして、ほしいまゝにあふぎ見るもいともかしこく、身にしあまりていみじき幸なり。やどりわかずいやしきちまたをも同くてらせる、いとめでたし。年々に月と花とをあくまで見るは、まことに思ひでおほき此世なりと云べし。あたら夜の月なれば、同しくは心しれらん人と共に見んこそほいなれと、同じ心に見る人まれなれば、西行が、ひとりぞ月は見るべかりける。とよめるもむべなり。もろこしの人も、秋月は俗士と見るべからずといへり。李白は、今人は古時の月を見ずといへれど、むかし世々の人のながめこしも此月なれば、古人のかた見となれるも、むかしおぼえてしのばし。古今の人の世をさりゆくは、流水の行てかへらざるが如し。只月の光のみいにしへ今かはる事なきこそ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳の邊に來るは、心を洗ひ興をもよほして、えもいはぬ快き折ふし也。四時ともに思ひ出おほき此世なれど、取わき秋の月は、見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍べる。秋も半すぎゆけば、おほそらにはつ雁がねのつらなりて、なきわたるも亦めづらし。花は春とこそいへれど、秋もまた花おほかめる。ことさら野べにたてる秋草の、名もしらぬ花ども、おほく草むらにひもとき、錦をさらすがごとく見ゆれば、秋の野いとましめづらし。秋の花の久しきにたへてちりがちなるは、春の花のみるほどもなくて、はやくちりぬるにまされり。およそ花のいとけやけきは、春は梅、櫻、桃李、海棠など、木々の花多きは、陽氣

は先そらにのぼれる故にや、秋ははぎ、をみなべし、尾花、葛花、なでしこ、ふぢばかま　あさがほ、此七種の外きちかう、りんだうなど、くさぐさの花猶も多かり、秋はまづ陰氣下へくだれる故ならずや。なでしこ、春は只ひとつ草とのみ見ゆれど、夏よりさきそめて、秋のいろをあらはせるは、からのやまとのいろ〳〵い、花ざさくめる長月の比は、秋の花もすぎ、もみぢもまだしきをりなるに、菊は百花におくれて、ひとり晩節をたもち、霜にほこりてみさをのいろをあらはし、なべての花に時をことにするのみならず、いろかたちにほひ、ともにことにすぐれてあでやかなれば、此時もし花多くとも、わきてあはれむべきに、秋の末にひとりさかりなれば、をりにあひていとめでたし。元稹が菊を詠じて不是花中偏愛菊。此花開盡更無花。といへりしは、菊をめでし心猶うすし。此花萬葉集にのらず、古今集には詠じたれば、奈良の御時まで、いまだもろこしよりきたらざりし事、今さら古を思ひやるにも猶ことたらず、うらみ多し。屈子が離騷に梅を忘れし類なるべし。老杜が海棠を詠ぜざりしは、禮にかなへればうらみなし。菊は品たかくて世ばなれたる花なればにや、これをこのむ人すくなし。牡丹は富貴なる物なれば、近俗のます〳〵ふける事むべなり。歐陽子が、人の心は其このむところを以しるべしといへる、げにさることぞかし。

凡一とせの內、梅のさきそめしより菊にうつるまで、いくいろの花のさかりにあひきつゝ、なれて見しやかずしらず、此をり〳〵の樂も亦思ひ出すくなからず。

秋は陰氣のなれるはじめなれば、そらさようすみわたり、高くはがらかにして、日月の光明らけく、よもにかへり見るに、茫々としてひろく、風いとはだすゞしくふき、其けしき人の心にしみて感せ

しむる事ふかし。春は只花のひとへにさくばかり、物のあはれは秋ぞまされる。とよみしも、時にしたがひては、ことわりにこそ聞ゆめれ。

陳眉公が、世の人は皆秋の月をめでゝ、秋の日の妙なるをしらずといへり。此事世の人も心つきなかりしに、まづわが心の同しく然る事を得て、げにもとぞ聞ゆめる。心をつけて秋の日の光草木にかがやき、いさぎよく妙なる事をしるべし。ひつじくだるほどより、其けしきいやましなり、ことに夕陽の西にかたぶき、山にいり、海にしづまんとするこそ、世に又たぐひなくえもいはぬながめなり。日と月はおほそらにふたつかけならべたる光なれば、萬物にすぐれたるはむべなるかな。

秋は又ゆふぐれのけしきこそ、たゞならず見ゆれ。うすぎりのまがきに立のぼるよそほひ、風のおと、むしのね、いづれもなく人の心にしみて、春にもまさりあはれふかし。秋はゆふべとたれかいはざるべきや。夜長ければ曉のかねに人おどろかしやすく、ねざめがちなり。ことさら老のねぶりはやくさめて、常に夜をのこせば、いもねられぬまゝに、懷古の心殘夜に生じて、きしかたゆくすゑの事思ひつゞけらる。老てはつねに昔の事のみぞしのばしき。

もろこしの人は、一とせの內ことに春をめでゝ、ふみにも春を賞せし詞多し。わがくにの人は、昔より秋に心をそめける。此あらそひ、いにしへわが國の人、ふみにもおほくあらはせり。春秋のことわり、陰陽ことなれど、其けしきはいづれもすぐれてめでたければ、此あらそひはいみじき賢者といふとも、わかちがたかるべし。いはんや人の心同じからざる事、其面の如くなれば、其本しやうの好みによつて、春秋のおとりまさりありぬべし。わが輩の心は、時につけつゝ移りゆけば、いづれをまされりとさだめがたし。花もみぢのちれ

もいづれまさりてをしと云がたし。

長月の末になりぬれば、秋の花みなおとろへ、蟲の音もなきかれて、もみぢやう〳〵いろつきぬれば、秋のくれ行思ひも亦ふかし。秋は只けふばかりぞとながむるも、名ごりいとをしむべし。春のつくるにくらぶれば、草も木もやう〳〵かれはてゝ、行末のけしきまで、おもひやられてさびし。冬も來ぬれば、けさよりなるゝうづみ火のもと、やうやう立はなれがたし。露と霜とおきかはし、もみぢいろこく木々のこずゑ、淺茅が原も冬がれのけしきとなり、おもがはりするも、秋にことなるながめなり。神無月の時雨もすぎて、日あたゝかなれば、すこし春ある心地す。むべ此月を小春とぞいへる。されど一の日二の日、やうやくかさなれば、風氣いよ〳〵はげしく、木の葉ふりて山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春夏秋のゑんなるけしき、よそほしかりつるありさま、皆此時にいたりてつきぬれば、ことの外にもかはれるそらかなと、目おどろかれぬる。ひごろ雪いみじうふりていかめしうつもりたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはりけしきことなるありさまなり。冬こもりせし梢のかれたるも、ふたゝび花さけるが如し。ことさら冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ見る人なく、ひとり身にしみてあはれもふかけれ、そらはれて後まで友まつばかり、ところ〳〵にきえ殘りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時するわざなく、只袖くゝみしていらゝき居る人は、いとわびしげに見ゆ。或うづみ火にむかひ、文をまきひろぐるを以わざとする人は、たのしみふかくぞ有ぬべき。凡の事年に先立て早くはかるべし。わかき時つとめて文をよみならはゞ、かゝる時もわびしかるまじ。

冬の末つかたにもいたりぬれば、ことしの日かず殘

りすくなく、こよみのぢくあらはるゝばかりにて、春のとなりすでにちかし。としのをはるはをしむべく、よはひのかさなるはうれはしけれど、あたらしき事をむかふるは、めづらかにてよろこぶべし。此ごろは世の中の人、何くれといそがはしくせきあへず、おほくのゝしりてはしりまどふを、ひとりしづかに見る人はたのしむべし。一とせははかなき夢の心地して過ぬれば、あとをかへりみて、せちになごりをしむべし。老の身は月日もいとゞ立やすく、何ほどもなき一とせなるを、かぞへそふるもうらめし。されど人の世をふるは、思はずも變多き事なるを、一とせの内わざはひなくて、すぎぬる人はまたたのしからずや、春秋のくれ行だに名ごりをしむべし。まいて一年のをはりの、けふの日の夕暮に成ぬるをや、もろこしの人は守ルレ歳ヲといひて、こよひはよもすがらいねずとかや、是ふるきをおくり、新しきをむかふるこゝろなるべし。おくりむかへにつきて、うれひよろこび一かたならず、凡四の時のおしうつる折々につきて、感をおこす人は情ふかし。愁人は是によつて悲しみ、達士は是によりて樂しむ。景氣は同じけれど、只見る人からえんにもすごくもおもほゆるなるべし。

一とせの内をすべて思ふに、春は陽氣はじめてのぼり、萬物生ず。そらのけしきのどかに、人の心もうらゝかにしてにぎはし。夏は陽氣こと〴〵く上り、宇内にあまねくみち、天地まじはりて、草木しげく萬物長ず。秋は陽氣はじめてくだり、陰氣のぼり、萬物をさまりて、けしきいさぎよく人の心にしみて、感ずる事ふかし。春に對してはたうらおもてとなれり。冬は陽氣こと〴〵くゝだり、陰氣もはらにして萬物かくる。夏に對して又うらをもてとなれり。およそ一年のめぐり、冬にいたりて天地まじはらず、とぢふさがりて、品物かく

れぬれば、春生じ夏長じ。秋をさむるごとくなるしわざはなくて、月日おほくうつろひゆけど、何のうるはしき景氣も見えず、四時の内にてなす事なくていたづらなる時ぞと見ゆれど、春夏秋のうるはしきけしきとなしいだせるしわざと、此時にいたりとゞまり、一とせの大なる功をなしをはりて、そこばくの元氣を、ふかくたくはへかくして來たれる春の本となることわりをふくめるは、此時にぞあんなる、されば冬の氣の一かたにとぢかくれてなす事なきは、一とせの功成事遂てをはりをなせるのみならず、又くるとしの發生のめぐみをふくみたえめれば、はじめをなせりといふべし。人の夜々ねいり、氣しづまれるは、ひねもすのいたはりをやすめ、あすのうごきなせるしわざのちからの本となれり。もし夜よくいねざれば、今日のいたはりをやすめがたく、明日のはたらきちからなきがごとし。冬にあたりて人も亦天の時にしたがひて、しづかに精神をやしなふべし。すべて一とせの内、月日のめぐり、四時の行はれ、百物のなれる、ついで年ごとにたがはず、萬古より末世までかはらざる事、天道の誠いたりてたふとぶべし。しづかにしてこれを感ずる人は、其樂ふかゝるべし。もしよく此理をしれらん人は、即道をしれる人なるべし。

時節は目に見えて、はやく立としもなけれど、日數かさなりゆけば、一とせの過るはほどなし。人の一生をふるも亦年やうやくかさなれば、老死にいたる事遠からず、況人のいのちは、いたりてあやうくして、あした夕をしらず。少壯といへど老大に先だつ人多ければ賴なし。久しからざるうき世に、時のうつりゆく事早ければ、あたら時日をむなしく過すべからず。

樂訓卷之中終

樂訓卷之下

讀書

凡そ讀書の樂は、いろをこのまずして悦びふかく、山林にいらずして心閑に、富貴ならずして心ゆたけし。此故に人間の樂是にかふるものなし。天地陰陽を以道の法とし、古今天下を以心を遊ばしむる境界として、其おもむき至りて大に、ひろき事きはまりなし。一日書をよむの樂至れるかな。聖賢のふみを見て、其こゝろを得て樂むは樂しき事の至也。其次にいにしへの事をしるせる史には、わが國は神武天皇よりことしまで、二千三百七十年、もろこしは黄帝より今まで、四千四百年の間の事をのせたり。此故にからやまとの史を見れば、遠きいにしへのあと、目のあたりに明らかに見えて、わが身わだかも其世にあへる心地して、數千年のよはひをたもてるが如し。此樂も亦大なるかな。今日のまへなる事のみを見て。古のふみをしらざるはきはめてかたくなし。人不レ通二古今一馬牛而襟裾すと、韓退之もいへり。ふるき書を見ず、古の道をしらざる人は、萬の理にくらく、もろもろの事をしらず、夢見てさめざるが如く、まよひて一生を過す。是大なる不幸なるかな。およそ古今の書に通じて、理をきはめ事をしれらば、わが心の内、萬物の理見る事きく事にうたがひなくして、大なる樂なるべし。古のふみをしらざれば、からやまと、古今天地の内にみち〳〵たる、理も事もみな通せずしてくらしと云べし。

わがともがら、經史にちぎりをむすべるゑにしふかければにや。ふみに對すれば、いつとなく、又なく樂しくおもほゆるは、天よりさいはひをあつくくだし給へるなり。およそ天の物を生じ給ふ事二ながら全からず、かれこれたらひぬるはまれなり。故にこなたを得れば、必ずかなたを失ふ。たとへ

ば、花うるはしければ實よからず、實よければ花うるはしからざるが如し。又千葉の花には實なし。此故に才學ある人は多くはまどし。才學ありて又富貴ならば、二ながらたらへるさいはひなり。是得がたき理なれば、かゝる人は世にありがたかるべし。才學ある人の富み貴くして、さいはひならびぬるは、天のをしみ給ふ所にして、いとかたき事になん。又天のかゝる人を貧賤にしてくるしめ給へるは、其人によりて其德を玉にせんとし給へる理も有ぬべし。才學において幸あらば、貧賤にして時にあはざる事をうれふべからず。わが道かゝる顯なる心もて、もし富貴にしてさかんにおごり、おこたりにならひなば、文學をきらひ、道に志なくして樂なかるべし。しかればみづから貧をあまんじて、富貴をうらやむべからず。

書をよみ字をうつすに、あきらけきまど、いさぎよきつくゑ、筆硯紙墨の精良なるを得て用るも、亦人生の一の幸なり。此樂を得る者すくなしと、蘇子美がいへるも、書生はまどしき人多ければ、かくいへるなるべし。又貧しき人は難なし。古には雪に映し、螢をあつめ、壁をうがちて書をよみし人だにあれば、今此六の助を得て、又燈火をやゝしたしむ人は、幸ありと思ひ、つとめて書をよむべし。

或人のいへるは、聖賢の書を以一の師とし、筆硯紙墨と案とを以五の友とし、あけくれ是にまじはるは、益ありて樂多し。又燈火のくらきをてらして晝につぐも大なる寶なり。

ふみ見るには時ををしむべし。これとあかねさすひるは、事しげくて功すくなし。ぬば玉のよるはしづけく、いにしへをかんがふる樂多し。此時をうしなひ、いたづらに寢てあかすはをしむべし。

四時にしたがひ、月花をもてあそび、をりをりの景物をめでて、其をりふしにかなひたる、からのやま

とのふるきうたをすして、心に樂しまんこそ、みづから作る勞なく、たはやすくしていとおもしろきわざなるべけれ。もろこしのいにしへ、其才あまりありし人も、賓主に對し、其をりにかなへる古き詩を彼是引て、其情をのべしためし、左氏が書などに多くのせたり。是わが作らんより、ふるめかしく理まさりて、人を感ぜしむる事ふかゝりしにや。いにしへの事、のりとすべし。我輩つたなきことばを以、なまじひにふようなる事云出すは、みづからはいみじと思へど、詩歌をしれる人の見る目もはづかしく、顏之推がいへる詅癡符のそしりまぬかれがたかるべし。わがごときともがら、才つたなくて、ことばをたくみにせんとするくるしみ、いといたづがはしく覺ゆ。もし天才ある人たはやすく作りいださんは興あるべし。されどそも五字の句を吟じ成して、一生の心を用やぶるは益なし。

およその事、友を得ざれば、なしうべからず。只讀書の一事は、友なくてひとり樂しむべし。一室の内に居て天下四海の内を見、天地萬物のことわりをしる。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて古の人に對す。わが身おろかにして聖賢にまじはる。是皆讀書の樂なり。凡よろづのことわざの内、讀書の益にしく事なし。然るに世の人これをこのまず。其不幸甚し。これを好む人は天下の至樂を得たりと云べし。

後論

つら〳〵世の中の人のいのちをかんがふるに、長生の人すくなし。いとけなき時よりよそぢにいたる間に、世を早くする人多し。五十を不夭とす。不夭とすとは、わが死に非ずと云意なり。六十を下壽とし、七十を古稀といへるはむべなるかな。わかき時よりなれむつまじき人々のかず〳〵、其おもかげ目の前なりしも、おほくはなく成行て、年

のへぬるはまことにかなしむべし。花の春ごとにひらくを見ても、昔の人のかへり來たらざるをうらむ。是を思ひて、わがよはひ久しきを悦ぶべし。白髮の新にして又新なるをなげくべからず。

同じく人とうまれて富貴なる人あり。貧賤なる人あり。其高下の品誠に多し。富貴なる人は、おごらずして人をめぐむを樂とすべし、乞丐も生れ付たる分ありて、定りたる事をさとり、分をやすんじて樂しむべし。たとへば松は高き事數十尺にいたり、平地木はひきゝ事數寸に過ぎ。同じく樹木となれど、長短各ことなれるは、むまれつき定まればなり。きはめて貧しき人も、わが分のひきゝをやすんじてうれふべからず。生れつかざる富貴をうらやむべからず。又世には我ほどもなき人多し。われより下なる人を見て、わが分を樂しむべし。上をうらやむべからず。又同じく人とうまれたれども、長壽なる人あり。短命なる人あり。長き短きその品多くして、あげてかぞへがたし。富貴をきはめて、萬の事心のまゝなる人も、只いのちのさいはひのみ心にかなはず。されども是又うまれつきて、天命の定まれる所なれば、みじかしとてかなしむべき理にあらず。此理に達し天命を樂んで身ををはるべし。死ぬる時もしくるしみかなしまば、平生樂しめりともかひなかるべし。をはりをつゝしむべし。たとへば松は千年をたもち、槿花は只一日のみ。長短各ことなり、是生れ付て定まれる分あれば、みじかきは長きをうらやむべからず。各其分をやすんずべし。

此世にありては此世の樂をしらず。富貴にしてはわがちからあるを以、善を行ひ人をたすけてたのしむ道をしらず、清福を得ては清福の樂をしらず。病なき時は病なき樂をしらず。たとへばいねたる人の夢、是夢なる事をしらざるが如し。

榮啓期が三の樂は、人となり、男子となり、いのち長

かりしをいへりしは、まことにさる事なり。今の世の人は、此上に又大に樂しむべき事ひとつあり。これをしりて人ごとに樂しむべし。其可樂法なんぞ、大君の御めぐみによりて、かゝる太平の御世に生れ、堯舜の仁にあひて、白頭まで干戈を見ず、是大なる樂にあらずや。康節の世を謝せし詞に、太平の世にうまれ、太平の世に老い、太平の世に死ぬるといへりしは、誠に大なる幸なり。今の世の人皆しかり。亂世に生れては朝夕兵革を事とし、或難をのがれさけて、身のおき所もなく、山にも海にも白波の立田山、夜はにひとり行がたきのみならず。白日といへど同じきともがら多くともなはざれば、ちかき所にもゆきかへる事やすからざりしとなん。老ては身の死なざる事をきらふと云しは、古の人亂世の苦みをいへるなり。かかる世に生れし人の苦、今よりおもひやるにもかなしむべし。昔より亂世は多く治世はすくなし。今の人はいにしへ兵亂の世久しくつゞきて、不幸にうれひにしづめる事を思ひやりて、わが大君の御めぐみと、今の世の太平の樂とわするべからず。蓼蟲はからき事をしらず。今の世に生れては今の世の樂をしれる人すくなし。いにしへを思ひやりて今の世を樂しむべし。

わがともがら、才もなく德もなく、君を助け民をたすくるわざなけれども、一歩の田をつくらず、一本の麻をうゑずして、食にあき、衣をあたゝかにき、家に居て風雨にをかされず。是大なる幸也。農夫は又日夜耕作に苦しめども、うゑこゞえをまぬかれず。あはれむべし。是を思ひてわが身まどしくとも、うれひなく樂しむべし。外を求め上をねがふは、おごりて分をしらざるなり。古語に曰、上にたくらぶればたらざれども、下にくらぶれば餘りあり。是を以わが身を樂しむべし。

萬の事そのはじめ、事のいまだそなはらざりし時を

おもひ、今にくらべなば、苦なく樂多かるべし。上古の時は野に居り穴にすむ。五穀のはむべきなく、きぬ布のきるべきなし。もろ〳〵の器なく、火食をしらず。其苦み思ひやるべし。今の世の人は上古にくらぶるに、事毎にそなはりて樂しむべし。又わがはじめ貧賤なる苦を思ひて、今の時にくらぶべし。戰國の時のうき事を思ひて、今の太平を樂しむべし。

人ごとに生れ付たる樂あれども、まなばざればおのが物なりながらしらず。衆人の樂はみな外欲にあり、是をほしいまゝにすれば、かへつてわが身のわざはひも是よりおこる。君子は學んで道を樂しみ、命をやすんじて貧をうれへず。樂を得ては書をよみ、時節を感じ、風景を玩び、月花をめで、詩歌を吟じ、草木を愛する。此わきまたの事かはる〳〵たのしまば、朝夕の樂きはまりなかるべし。老ては心やすく、身樂にして貧賤を甘んずるこそ、折にかなひてよろしかるべけれ。かゝる時樂しまずんば、日月ゆきてとゞまらず。をしむべし。かくの如く世にきはまりなき樂あるをしらで、なにとなくうれひくるしみてすぐさんは、まことに不幸の人、一生をむなしくすといふべし。

人の樂は善を行ふよりたのしきはなし。漢の東平王の善をするはいと樂しといへり。むべなるかな。富貴の人はひろく人を愛し、もろ〳〵をすくひて、其樂ひろし。貧賤の人も其分に應じて、人をすくふ志だにあらば、其善をする功多かるべし。

老ては殊、人をむさぼらず、物ごとにおもんぱかりふかくして、人をみだりにそしらず、いからず、人の妨とならず、人の我に無禮不仁なるをこらへて、いかりうらみず、人ごとに君子ならざれば、かくこそ有べけれと思ひて、心にかけてくるしみうれへず。貧賤をあまんじて、身やすく心閑にして樂しむべし。

天長く地久しくして極りなし。人は天地と參(みつ)となりながら、いのちのみじかき事、たとへば朝顏の如く、一生の過やすき事過客の如し。歲月は行きて止まらず、時節は去て流るゝが如し。李白が詩に、人生大夢の如し。胡爲此生(ナンスレゾ)をくるしむと云へり。およそ人のいのち上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十といへり。下壽をたもつ人も亦多からず。七十なるは稀なり。かゝる短きよはひの內を、一日も善を行はず、たのしまずして、あだにくらすべからず。古歌に、世の中をかくいひ〳〵てはてはては、いかにやいかにならんとすらん。といへるは、今更おどろくべきにあらざれども、およそ人は皆あだにして、定めなき身を持ながら、死期の近き事をしらずして、平生あやまつて百年のはかり事をなせり。老の身はことに殘生のいくほどなくて、死期の近きにあらん事わするべからず。

もしわが身にわざはひあらば、いにしへ今はなはだしき時にあへる人多し。それにわが不幸をくらべて見ば、わが禍(わざはひ)はさほどなくてうらみなかるべし。是つたなき計(はかりこと)のやうに聞ゆれど、古の賢者のをしへなり。これを試(こゝろみ)るにしるしを得る事多し。此計すてがたし。

もし不幸にしてうれひおほからば、わが身はもとよりかゝれとてこそ生れけめと思ひ、天命にまかせてしぬるまではたのしみ、うれひなくしてすぐさまほし。達人は命をしりて憂なし。

世には白髮を見ずして死する人多し。道をしらずして死ぬるはことにうらみ多し。此世のありさまをだにしらで、世を早くする事をしむべし。我がともがら白髮を見る事久し。幸とすべし。東坡が詩に、人は白髮を見てうれひ、我は白髮を見てよろこぶといひしもむべなり。

年老て夕日のかたぶけるごとく、死ぬべき時ちかくいたりぬれば、命をやすんじてかなしむまじきこ

とわりをしるべし。易の離にはとぎをたゝきてうたはずんば、つひに大耋(てつ)のなげきあらんといへり。ほときは人のかたはらにある日用の器なり。これをたゝきうたふとは、かなしみなく樂んで日をおくる也。大耋のなげきは、夕日の天にかたぶくをなげくを云。人の老にいたり死の近き事、夕日のかたぶくごとくなるは、是かく有べき常の理なれば、なげくべからず。なげくは常の理をしらず、愚なり。故に凶しといへり。是常に樂しみて、老にいたるをなげくべからずとなり。人のわかきより老にいたり、死に近きは、四時の行はるゝが如く、定まりたるつねの理なり。然るに老をなげき死をくるしむは、理にくらしと云べし。命をしらざればなり。易にこれをいましめてしかいへり。淵明が、いさゝか化に乘じて、盡(つくる)にかへらん、彼天命を樂しんで又何をかうたがはんと云、謂くは便(すなはち)盡べし。また獨善なる事なからんと云。又朝聞ニ仁義ニ生(イキハニ)夕死(ヌトモ)復何求(チカ)めんといへりし。まことに達人のことばなるかな。曹子建が詩にも、先民誰か死なざる命を知りて、また何をか憂へんといへり。まことにいにしへより死なざる人なし。命をしらで天運にまかせざらんは、うれひおほかるべし。平生よき人もをはりをよくせざらん時、一生のつとめ空しくなれる事をしむべし。晩節をたもつ事心にかくべし。

つくづくと思へば、樂おほき此世なるを、道をしらざればわれと心をくるしめ、天をうらみ人をとがむ。かく道をしらでうれひおほき人は、くれまどふ心のやみこそ、むげにおろかなりと云べけれ。人の身金石にあらず。いけるもののつひにしなざるはなし。又二たび生れくる身にしあらざれば、此世なる間はたのしみてこそ有ぬべけれ。くやしくすぎしむかしの事はすべきやうなし。いくばくならぬよはひなれば、今よりのち一日も早く、日月をを

しみ先のひが事をくひて、飛彈たくみうつ墨なはにあらねども、只一すぢに善をこのみ、道を樂てすぐさんこそ、此世にいけるかひあるべけれ。年老ては同じことするならひなれば、あまのたくなはくりかへし、かくいひ〳〵てたまくしげ、あけくれみづから心をいましめ、又人に樂しみをすゝむるなかだちとするならし。かへす〴〵われも人もかく生れつる樂をしらで、身をいたづらになし、さてもかひなく世にくちなん事、うらむべし。もし朝に道をきけらば、人となれるかひありて、夕にしぬともまた何をかうらみんや。

寶永七年臘月　　益軒貝原篤信書
時年八十有一

樂訓卷之下終

神祇訓

貝原篤信著

天津神國津御神を祀ひてぞ、我日の本の國は治まれり。人は神の主也。神は人の敬によりて威をまし、人は神の助けによりて災なし。故に古の明王は、まづ人をたすけ養ひて、神を尊ぶ。人をさし置て、神に諂ひ、力を盡し、財を費し、民を苦しめて祭るは、古の道に非ず。諂ひ也。道に背けり。

我日の本は、上古より神のなり出給ひ、神の治めし國なれば、昔より此國を名付て神國と稱す。たとへば、唐土を聖人國と稱すべきがごとし。然ば日本に生れて人となり、日本にすめる人は、人毎に神道をしらずんば有べからず。神とは何ぞ。上なり。人物の上に有て、たふとぶべし。是神の正訓なり。鏡の中略と云說用ふべからず。鏡のはじまりし前より、既に神の名あり。神とは、たつとぶべければ上と云。

あきつしまは、神のをさむる國なれば、君靜にて民もやすけし。日本は神國なれば、此土に生るゝ人は、神の道をたふとび知べし。神道をしらんとならば、神の御心を通ずべし。神の御心は、誠を主として清淨正直なれば、古より今に至り、君も是に隨ひ給ひ、民も又上の德化に隨ひて、まめやかに、すなほに、いさぎよきを以て心とすべし。夫神道は、即天道にして、高大深妙の理なれ共、天人一理にして、民生日用常行に顯はるゝ道なれば、その近所は至て小に淺く、いやしき愚夫愚婦といへども、しりやすき易簡の道、淺近の理なり。其至れるに及ては、高大深妙にして、聖人にあらずんば能知がたし。知安く行安き易簡の道也。此故に、ことばのをしへなけれど、上の意正しければ、おのづから民の心智となりて、敎へざれ共行はる。古の聖人、其身正しければ、令せざれども行はる、

其身正しからざれば、令すといへど隨はずと、宣ふがごとし。是を以て神道は、易簡の理、不言の教也。舊事紀、古事記、日本紀、此三部の本書などに上古の事をしるせしを、世俗は、神道に易簡の理、不言の教有て、道を記せし經典なき事をしらで、三部の書を、神の道を記せし經典のやうに心得て、其書に本よりなき道理を、みだりにとりつけて、神の教の樣に、さまざま云なして、道理を新しく云立るは、易簡の道、不言の教にそむきて、神道の誠を本とする正直の理にあらず。神の御心にも、などかはかなふべきや。しらざるは其とが輕く、僞りてなせるは、その罪なほ重し。恐るべし。神道は、誠の心を本として、清くすなほに、事すくなき道にて、只心に僞なく、誠を本とし、けがれをはらひきよむるを、むねとすれば、かくばかりむづかしくこしらへて、ときなすは、憚り有。三部の書は、上古の事を記せし史書なれば、道を解たる經にも非ず。和漢史書の中にも、おのづから道のをしへになれる事は有りとも、專ら道理を說る書には非ず。禮法は、やまと、もろこし、古へ今かはれど、心にそなはれる誠の惠の心、身に行へる人倫の道は、古今和漢かはらざれど、神道は不言の教なれば、仁義禮智信の五常の性と、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の五倫の道との名目は、古よりこれなし。故に言葉と書とを以て、道を教ふるには、中夏聖人の、至極の道理を記せし四書五經にしく事なかるべし。是天下萬世の神道の教なり。書にあらはせし教の道は、日本の中夏に及びがたきのみならず、天地の間、萬國限りなしといへども、中夏の聖人の教に及ばざる所、天地懸隔也。易に曰、天の神道を見るに、四時たがはず。聖人神道を以て教を設て、天下服す。是天道自然の神道、天地の間二なき理なれば、からもやまとも皆同じ理にして、中につきて、日

本を專ら神國とする事、東方は天氣、陽氣、生理のはじめにて、造化神秀のあつまれる所なれば、神國とは名付し也。聖經は、天地、神明、人倫の道を敎へ給ふ書なれば、是中夏の書なれども、我國の神道の經ともなりぬべし。聖道神道かはりなし。天地の間、道は唯一のみなればなり。唐土の聖經にて敎ふとも、我國の俗にしたがひて、易簡なるべし。易簡はたやすく、事すくなき也。事多く、むづかしき事は、我國人には宜しからず。禮記にも、敎と政とは其俗にしたがひて、其宜をかへざる事をいへり。是國の政を行ひ、民の敎を立る法也。後世の神道をとく者、怪誕を至極と心得ぬる事、ならはしとなれり。是大なる謬り也。陰陽造化の常理は、眼前に見えて四時の行はれ、春溫にして萬物發生し、夏熱して盛長し、秋冷しくして收斂し、冬寒くして閉藏す。是神道の行はるゝ所、則目に見えぬ鬼神の行はるゝ道なり。其内に、又神怪なる事も是あり。是常理にあらず。變也。神道に常有り。變あり。常理は右にいへる四時行はれ、百物生るゝ所也。變は神怪の理、常に非ず。神道には常と變との理有。二を相兼て見れば、疑なく迷ひなし。其常理を以ていへば、水の流出で、火のもえ出づるも神怪なり。疑ふべし。其變を以ていはゞ、草木のものいひ、石のものいふも、又理の外にて、神靈のやどせる故なれば、あやしとするにたらず。

或人予に問ふ事有て曰、日の本は神道を宗とする事、もろこしに、聖人の道を宗とするが如し。神道は聖道と同じきや、異なるやと。予是に答へていふ、天地の間、道は只一のみ。こゝを以て、聖道神道二なるべからず。夫聖道は、則天地に本づきて、人の道を敎へ給ふ。神道も亦天地自然の道にしたがへり。もし神道は、聖人の道と同じからずといはゞ、是天地人の道には非ず。異端なるべし。さ

れば神道にも、誠を本とし、朝夕つゝしみて、直に清きを宗とし、空無を宗とせず。人倫を厚くいつくしみて、五倫をはなれず。是神道聖道と同じきにあらずや。只禮法と土地の宜、古今の習、風土の點に依て、からやまとおなじからず。聖人の法なりとて、昔の唐土の法を、今の日本に悉く用ひ難し。古の唐土の法を、今ことしく日本に行はんとせば、時宜に背き、國俗にあはず。愚なりと云ふべし。たとへば、夏は帷子を着て宜しけれど、冬に至りては用ひ難し。水には船を用ひて宜しけれど、陸には乘難し。都て禮法も又然り。三代聖王の法さへ、もろこしにても時に隨ひて、損益沿革有て、悉く用ひ難し。況や今數千年の後、數千里遠き日本におけるをや。五倫の道、五常の理は、からやまと古今同じ。若五常に背き、人倫をはなれては、天地人の道にあらず。凡天下古今の間、道有。法有。道は五常の性に隨ひて、五倫を厚くする、是道なり。此道は天下古今からやまとおなじ。法は冠婚葬祭の禮、進退坐立の則也。是古今の時宜により、土地の俗に隨ひて、おなじからず。からの法を日本に行ふを、聖人の道と思ふは愚なり。道は聖人の道を行ひ、法は國土に隨ひ、時宜にかなふべし。若唐土の古法を、今日本において悉く行はんとせば、車を水にやり、船を陸におすがごとし。是ひが事なり。愚なりと云べし。

又問て曰、聖人の敎には經書あり。神道には、何を以て敎を立べきや。答て曰、神道の敎は、經書によらずして、別に敎有。是天地自然の道、至極深秘の理なり。我輩庸愚の容易く說得ん事かたし。聞人も又恐くは、是其理に通達して、心に融會し給はん事かたかるべし。然れ共試に、そのかたはしをとかん。凡の人、ひとの言を聞て、其理有とならば、是を信じてうたがはざるべし。疑ひて信せざれば、道に入事かたし。又理なき事を信ずるは

想也。理あるを信ぜざるは誠なし。天地の生理に本づき、四時の行はれ、百物の生るを以て、天道の至教とし、天道の至誠やむ事なく、天に神道有り、四時行はる。聖人神道を以て、教を設けて天下服す。聖門の神道の教は、則是天道の四時行はれ、百物生るを以て示し給ふ。是天下の人、眼前に見る所、天地の行ひ、日月のめぐり、風雨雷霆、をしへにあらざる事なし。書にあらはし、書を見るはやむ事を得ざる也。聖門の本教にはあらず。凡神道は不言の教、易簡の道なり。易とは、しり安く、行ひ安きを云、簡とは、事すくなきを云。されば神道は只常に愼みて、心を正直清潔にするを要とす。此理もろ〳〵の人知安く、行ひ安し。是をよくしり、よく行ふを、神道を學ぶと云。此理をおしひろめて、審にいへば、愼んで怠りなく、誠にして僞なく、正直にして邪曲ならず。清潔にしてけがれず。無欲にして貪らず。あはれみ深くして薄からず。是神の御心也。諸の人此心をたもつべし。約にしていはゞ、常に愼みて、正直清潔なるを要すべし。是古へもろこし舜のみかど、伯夷に天神、地祇、人鬼の三神に仕ふる道ををしへ給ひて、夙夜にこれ寅みて直なれや。惟淸くせよとのたまひしは、和漢同じ神道也。又其身に行ふべき道は、父子したしく、君臣義あり、夫婦和ぐに有。是上古の聖人の行ひ給ふ處、萬民日用のわざにして、朝夕に行ふべき神道也。是又人々の本性に生れ付たる道なり。されば其道の大むねは、人皆天然の良知、良能有て、學ばずして、生れ付て能知り能行ふ所なれば、いかなる愚なる賤の男、賤の女も、其理りをしり安く、其道を行ひ安し。是神道の宗とする所、易簡の意なり。又神道は不言の教なりと、いふ心は神道に、書典にあらはして、言の敎をたてず。五常五倫の名目なし。是太上尙德の敎也。いにしへ我國に生れし人は、君も神の

御心をうけ行ひて、下の見習ふかゝみとなり給ひ、下民、君上の德化を見習ひ、風俗の直なるに隨ひて、おのづから此道を行へる故に、あながちに言の敎を立て、書をつくりあらはさゞれども、易簡の道世に行はる。是不言の敎也。堯の時の康衢の歌に、不識不知順帝則といへるがごとし。是上の德化に隨ひ、敎なけれ共、おのづから道に隨ひし也。易にも易簡にして、天下の理行矣といへり。又古語に、身を以て敎ふる者は隨ひ、言を以て敎ふる者は訟ふといへり。いにしへ、神の道を說し經書のなきは此故なり。舊事紀、古事記、日本紀などは、只上代の事を記せし史なり。神道を敎へし經書には非ず。唐土の史記、漢書などのごとし。中夏にも上代には、只其時の事を記せし史のみにて、敎を立し經書は是なし。尙書なども、其時の事を史臣の記せしなり。是上代は、唐土も不言の敎なり。孔子六經を作り給ひて、始て書によりて敎を立給ふ。日本にも人代に及て、孔子の如き聖人出給はゞ、敎を立給ふべきか。され共孔子だも我欲無言とのたまへり。天道不言して四時行はれ、百物生る。春秋、冬夏、風雨、霜露も、敎に非ずといふ事なし。地道も不言にして、萬物生長して、其形をなす事時を失はず。是地道の至敎なり。唐土の古の聖人、身に行ひて不言の敎を設給ふ。日の本の神道は、又易簡の道、此國土に宜しければ、尙以て不言の敎宜しきなるべし。かくのごとくなれば、あながちに書を作り、言を以て敎へざれども、君は上に有て、身に行て見せしめ給ふ故、下民おのづから上を見習ひて、手本とし、隨ひ安し。是を以、不言の敎おのづから行はる。然れ共末の世には、民の心直ならず。上の化に從ひがたければ、もし今道知れる人、神道を記せる書を作りて下民に敎へ給はゞ、豈宜しからざらんや。神道は易簡のみちなれば、諸の人の書によらずして、只不

言の教をしりて、愼みて直にして、清き誠の道を行ふべし。夫學ぶ所を是とするは、凡の人の習ひなれば、今神祇の家にあらざる遊民抔、神道を專らにとかんとて、日本紀などの文句に、もとよりなき事を、師よりうけ、みづからも、さま〴〵つくりて說出し、新しく作出して、神道の經とし、或道理なき事を飾りて、神變を言立て、人を迷はし、いにしへより傳なき事を多く見出して、人をたぶらかさば誠の道に非ず。神道の誠を本とせる易簡の道、不言の敎にたがひ、神の御心に背き、冥罰も恐るべし。夫道の敎は、口にとき書に顯はす事、もとよりしるべし。されども神道は深秘の理有て、口に說、書にあらはす事を專にせずして、只心に知り、身に行ふべし。もし口に說、書を以て敎へば、唐土の聖人の書は、其理精詳にして、道理至りぬれば、四書六經以下、聖賢の書を以て、敎を立べし。殊に中夏の聖人は、神道を以て敎を設け給ふ。是易の道なり。神道易道はおなじ。凡天地の間、道は只一なり。天道神道聖道といへる事三有べからず。人の道は、則天地の道に從ひ行ふなり。然れば神道もし聖人の道と別なりといはゞ、是異端なりと云べし。法はからやまといにしへ今、其宜同じからざれば、からの法を悉く日本に用ひ難し。道はやまとの道、からの道とて、かはるべからず。道は五常五倫を捨て、別に神道を立ば、是眞の道には非ず。事しげくして、いたつがはしく、むづかしき道に非ず。其道平生にして知安く、安樂にして行ひ安し。險難にして知りがたく、艱苦にして行ひがたき道にあらず。

神道は易簡の理、不言の敎なり。其道明かにして知り安く、其事平生にして行ひ安し。親をいつくしみ、兄に從ひ、君をうやまひ、臣をあはれみ、夫婦相和して、正直は、その道明かにして知り安く、其わざよのつねにして行ひ安し。高遠にして知が

たく、艱苦にして行ひ難き道に非ず。是人々の天性にして生れ付たる故、言の教なくしても、おのづからしれる處なり。仁義禮智信の五常の目、五倫の名なしといへ共、人に對していつくしみあり、物に情ある是仁なり。高下により、年の長幼により、親疎によりて、其相應に宜しく、あつくするは義なり。人を敬ひ、善惡を知りわきまふるは智なり。すべて誠あるは信なり。是生れ付たる性なれば、人毎にしるべし。又父子したしく、兄弟むつまじく、夫婦和らぎて正しく、朋友誠にたのもしきは、皆生れ付てしれる處なり。かくのごとくならざれば、法に背き、刑に近し。是を行はずしては、世に立難し。殊に皆生れ付て、行ひつ、知り安き道なれば、是則不言の教、易簡のをしへなり。只上たる人、身に行ひて、萬民に示し給へば、いはずして行れ安きゆゑ、我日の本の神道は、易簡の道、不言の教なる事を知るべし。

天道不言にして四時行はれ、百物生る。是陰陽の道正しければなり。聖人不言にして、萬民したしみ、天下平かなり。是仁愛の道普くほどこして、私なければなり。神道も又しかり。君たる人天道を恐れ、神明をたふとみて、身に私なく、民をあはれみ給へば、萬民その德化に隨ひて、不ㇾ敎して道行はる。君上は天道を恐れて、其道に隨ひ行ひ給へば、其道たがはず。萬民は君上に恐れて隨へば、其道行はる。不ㇾ識不ㇾ知して、帝の則にしたがふといへるも是なり。孔子も其身正しければ、令せざれども行はる、その身正しからざれば、令すといへどもしたがはずと、のたまへり。是不言の敎なり。萬民天道に隨ひ、君上を則として、不ㇾ識不ㇾ知帝の則に順ふ。帝とは堯の法をいへり。又天道とも云。堯舜の聖世もかくのごとし。

神明は、眞實、无妄、慈愛、正直、聰明、清潔の德有。若人心を淸く正しくして、誠の心を以て、祈

るべき正神を敬ひ、もだしていのらば、などかは感通なからんや。神に祈りてかなはざるは、いのるまじき神に祈り、非禮にして、へつらひ、我心清潔正直ならず、誠敬のいたらざるなり。誠敬の心なければ、神うけ給はず。道なく禮なくんば、神に祈るべからず。必しるしなかるべし。又必死の病と、貧賤に生れ付たる人は、縦ひ神に正禮を以て祈るとも、生れ付たる天命有。生れ付かざる命と富貴は、祈るとも得べからず。唯養生を能せば、命をたもち得べし。行ひ正しければ、福あるべし。其上に正神に誠をもつて祈べき事を祈らば、彌福有、災ひなかるべし。

神道は人情に本づきて、異を立てず。人倫を行ひて、常にたがはず。此故に易簡の道、知安く行ひ安し。事すくなくして、むづかしからず。是を以て、いはずして其教立つ。故に不言のをしへなり。

神道に、みそぎ祓するは、其意いかんぞや。いはく、みそぎとは、身をすゝぐなり。はらひは、邪をはらふなり。是上古の風にして、神道の宗とする處なり。神道は清を要とす。人心はもと直なれど、七情のけがれ、殊に貪欲の惡多し。然るにみそぎして身を清くするは、則是外より内を清くするなり。程子の外に制するは、其内を養ふ處なりといへるがごとし。只専ら外を清くするにはあらず。みそぎして、こゝろいさぎよければ、人心は本清き故に、本の心を失はず。是も又易簡の理、不言の教なり。言多くして、教ひろけれど、此道に志なき人は、見きく事をとひて行はず。聞事見る事のみ多く、耳目はひろけれど、心に得ざれば用なし。故に神道は、不言の教を本として、もだして心にしり、身に行ふを宗とすべし。多く聞、廣く見て行はざれば、虚妄なり。是無用の學也。内外齋戒するは神に交はるの道なり。常に内外に齋戒し、みそぎ祓して、神明に對するがごとく、愼みて清

くする、これ神道の要なり。

神道は天の道、則人の道なり。我日の本を神國と云は、世界の東方海中にありて、神靈の氣盛にして、其なりいづる人、多く神靈の德ある事、外夷のかたくなにして、禽獸に同じきにことなれる國なれば、かくいへり。その實は、日本にのみ專神道あるべき理にあらず。唐土の聖人の道、則これ神道なり。我國上世の書、神代卷、舊事紀、古事記などは、上古の事をしるせし史書なり。然れば我國の神道をしらんと思はゞ、もろこしの聖人の道に求むべし。日本の神道は、不言の教なれば其書なし。もろこしの聖經、則神經なり。いかんとなれば、天地の間、道は一のみ。

日の本は東方にありて、陽氣盛なる故、造化の神秀をあつめて、氣あつし。こゝを以て神國と稱す。神人とは、奇恠なる異人には非ず。只よの常の人にて、正直清潔におはしますを、神とは名づけしなり。

日本紀神武紀に、大孝の二字を、親にしたがふと訓ず。上古より日本に孝弟の訓なし。是を以て、神道に敎の名目なき事を知るべし。是太古の風なり。

凡國のたひらけく、民のやすくして、わざはひなきは、誠にをさむる人のちからによれり。されど又天地の神のもだして、ひそかにまもりたすけ給へるわざなり。此理を能しりて、神祇を尊むべし。又宗廟社稷の神をたふとべるも、まづその深きめぐみをむくひ、又わが願をいのるなり。此理又よくしるべし。又神は人の本なりと、古人いへれば、天が下なる蒼生は、たかきいやしき、なべてたゞしきたふとぶべき神祇を、敬ひつかうまつるべし。然ば神につかふる道をしらずんばあるべからず。神につかふる道は、只神の御心にうけ隨ふに有り。神の御心は、深妙にして、愚なる我がともがら、たやすくはかりがたしといへども、むかしより神の道のかたはしを、少し計り見もし聞もせしてとわ

りを試にいはゞ、神の御心はひとへに誠を本とし、直にして清きを宗とし給へり。夫神につかふる道はやまともろこしのふみにしるせり。いにしへ、やまと姫の命、神の御心をのべてのたまはく、それ天を尊び、地につかへ、神を尊び、とほつおや（とほつおやとは、先祖の事也。）をうやまふ時は、宗廟をたゞす。天業を經給む。（帝王の御世のながく、たえざる也。）又のたまはく、黒心なくして、丹心をもつて、清潔よく齋慎め、（いもはりとは、潔齋するを云。）左の物を右に移さず。右の物を左にうつさずして、（是心を専一にしてあなたこなたへうつさゞるをいふ。）左を左とし、右を右とし、（道理にそむかざるなり。）左にかへり、右にめぐる事も、（時の宜にかなひて、道を失はざる也。）萬事たがふ事なくして、（すべて道理にたがはざるを云へり。）大神につかふまつれ。元ゝ元本ゝ本する故なり。（元とは、天地を云。本とは、宗廟を云。天神地祇をたつと云也。[illegible]）倭姫のをしへ、是神につかへ奉る道なり。ひとの國にも、などか神につかふる法なからん。昔舜のみかどは、（[illegible]）伯夷といへる臣を、（伯夷は舜の臣也。）まつりつかさどれる秩宗といへる官にをらしめ、天神人鬼地祇（天神とは、日月星辰陰陽の靈を云。地祇とは、山川社稷の神を云。人鬼とは、先祖の神也。）をまつる三禮（天地人の神を祭る禮をいふ。）をつかさどらしめ給ひ、神につかふる道を敎へて曰、つとよはに、これつゝしみ、直にして、これいさぎよくせよとおほせけるは、倭姫の、黒なき心なくして、丹き心をもちて、清潔よく、齋慎めとのたまふに同じ。殷の湯王も、（是も尙書にしるせるなり。）天の明命を（天道の敎の道也。）かへり見給ひて、以て上下の神祇社稷（社は、土地の神、稷は、五穀の神也。）宗廟（先祖の神也。）に事へて、愼みつゝしまざる事なしと見えたり。是やまと姫の、天をたふとび、地につかへ、神をあがめ、祖をうやまふと、のたまひしに同じ。やまともろこし其地遠く隔り、古今時はるかにことなりといへ共、神につかへ奉る敎の道の、かはらざる事は、たとへば割符を合せたるがごとし。神のすぐなる御心にうけ隨ひて、つとよはに、つゝしみ、心をすなほにして、いさぎよくして、神の道を行ふは、

神につかふる道なり。凡人の善惡の行ひあるにつきて、天道神明の善人に福し、惡人に禍し給ふ事、たとへば影の形に應じ、ひゞきの聲に應ずるがごとし。是天地神明の道、いにしへ今かはらざる理なれば、疑ふべからず。其しるし違はざる事恐るべし。惡を行て、人しらざるとて、おこたるべからず。明に是を早くしろしめさるゝ事、日月の物を照らし給ふがごとく也。愚なる人は、人を欺きて、われひとりのみしれりと思へど、一念の惡も、早く神明に通ずる事をしらず。しかはあれど、天地神明は御惠ひろくして、惡つもらざれば、ゆるしてつみなひ給はず。つもりぬれば深きとがにしづみて、家を破り、身を失ふ事、いにしへも今も、からもやまとも、常に多きためしなり。然れば一念一事も惡をなして、神明にそむきにくまれ奉る事なかれ。天地のめぐり養ひも、春夏秋冬のついで、日月の光も、むかしより今に至る迄、皆常にしてかはらざるは、是則神道也。かくの如く、萬ことわりのたがはざるを誠と云。此誠の道のかはらざるを以て、神道の常に天地の間に有りて、昔今のかはりなき事を思ひしるべし。然れば古に遠くなり行末の世なりとて、おこたりて道に違ひ、天地神明にそむくべからず。人は則天が下のみたまものにて、心は則神のみあらか也。みたまものとは、人の心に神靈あるを云みあらかとは、神のやどり給ふ家なり。我心をけがし、道に背くべからず。神の道いまだ地におちずして、人にある事をしり、只今の一念の善を初として、日々月々に心をあらたにして、一日より十日に至り、百日に至り、一年に至り、一年より十年に至り、日々に善に移る事を、つとめてやまずんば、塵つもりて山となることわりなれば、久しくして後は、善をつむ事大にして、限りなかるべし。積善の家には、必餘慶あり。積惡の家には、必餘殃有り。此理いにしへ今からやまと、常にかはらず。疑ふべからず。此理

をよくさとるべし。殊更神明の我心にある事をさとりて、あしき心を改め、いさぎよく、直ならん事を思ふべし。又道なくして、神にへつらひつかへて、さいはひをもとむる共、神は非禮を請給はざれば、祈る共その印なかるべし。明かなる神の御心は、などか其人にあざむかれて、無道を悦て是にさいはひし給はんや。非禮にして神に福を祈らん事、いたりて愚なる事にこそ侍べれ。凡神につかへまつる人は、穢き心をすて、清き心を以て、神明をいとまめやかにつゝしみ恐れて、神の御心にかなふべし。神の御心に叶はん事を求めば、先わが心識に、善を行ひ人をあはれみめぐみ、第一父母によくつかへてたのしましめ、うれひ苦みなからしめ、君を恐れたふとみて、其法にしたがはす。兄弟妻子和ぎ、朋友に情深くして、僞なく、すべて人倫をあはれみ敬ひ、中につきて、鰥寡孤獨のよる處なき者をあはれみ、假りそめにも人倫にまじはりて、不仁なる心少しもなく、次には、天地のうみ給へるいけるものをそだて、そこなはず。天地神明のつくり出して、人に與へ給ふ財用を、みだりに費す事なかれ。財用たらざれば、禮義をかくのみならず。親をやしなひ、人を惠む事なり難きに至り、人をむさぼり僞る心出來安し。我身を愼み、用をつゞまやかにして、おごらず、やぶさかならず。朝夕我家のことわざをよくつとめ、おこたらずして、愼んでつかへ奉らば、必神の御心に叶ひて、萬の災ひなく、百の福を下し給はん事、疑ふべからず。又此道に違ひ、神明の法に背きなば、百の禍殃に來るべし。易に所謂、積善の家には餘慶あり。積惡の家には餘殃ある也。是わが私の僻說には非ず。古より傳はりし神聖の御敎なり。

古は巫覡を用ふるに、其人を選みて其官をたて、神につかへしめ、祭禮祈禱をつかさどらしめ、幽明

人鬼の道に通ぜしむ。故に其官職を專らにして、常に其心を專一にせしめて、神につかへ、祭禮と祈禱を司らしむ。其義理ふかし。日本にて、卜部の家を立給ふも、其意なるべし。もろこしも、舜の天地人の三神につかふる官を立給ふ則是也。巫祝とて、いやしき人に非ず。やうやく古を去る事遠くなり行けば、淫邪妖妄の說おこりて、經陀羅尼などは、もとより神事にあらず。札守などの類、皆後代のる士のなせるわざなり。その輩の神にまじはりつかふる禮、正道に非ず。只人を迷はすのみ。世の害と成る事深し。正禮に非ず。道なくては、禍をはらひ、福を致すべからず。漢書解詁曰。太常掌社稷郊畤事。重職尊。故在九卿之首。

中臣祓は、是上古の神代の言只一篇のみ。舊事紀、古事紀、日本紀の神代卷等は、皆是中華より文字來て後作る所也。上古日本の言に非ず。其餘は、延喜式等に載する處の祓は、皆是後代に所作の文字なり。上古の倭語に非ず。古語拾遺も、又是舊事紀、古事記、日本紀に相つゞきて、上古の事を記せり。證とすべし。然れども皆上古の語にはあらず。

社稷は、社は土神、稷は穀神也。社と稷とは一所に祭れり。およそ人は土にあらざれば生ぜず。穀にあらざれば養はれず。故に土神穀神を祭る事、むべ也。春の祭は、其歲穀を求め祈る也。秋の祭は、その年穀のなりはひを報るなり。今世諸州の農人、十一月の初丑の日田神を祭るは、古よりの俗なり。日本の田祖を祭るべし。或曰、神農を祭るとも云。今誤て天滿天神と云。

宗廟とは、唐土に、天子の廟を諸侯の國に立るを云。胡致堂管見には、後世の褻禮なり。古人の正禮に非ずといへり。然ば古の神社は、只一所に有べし。諸州所々に有べからず。伊勢の內外の宗廟も、只一所にあるべしと。國々にあるをば、ゐなかの民

俗のけがせるを、祭主はきらひ給ふと云。只社稷は、土穀の神なれば、諸州に有べし。

伊勢の齋宮に、垂仁の帝の御時立つ、豐鋤入姫命始め給ふ。天子の御代宮なりとかや。光嚴の御時より其事やみぬ。今も齋宮の跡、山田の前に有り。齋宮と云町のかたはらより參れば、左の方に其築地殘れり。方四十間許の宅地なり。今も牛馬を禁がす。月事ある婦人、其内にいらず。

左傳に、山川の神は、水旱疫病の災を祈る。日月星の神には雪霜、風雨の時ならざるを祈る。是天神地祇に祈るに、各其祈るべき事を祈るべき神に祈るなり。祈るまじき事を祈るは、しるしなきなり雨を祈り、晴を祈るも、山川の神祇、鎮守の神にいのらば、しるしあるべし。たとへば、今、市の事は市の司に賴み、縣の事は縣の司に賴むが如し。もし縣の事を、市の司に賴み、市の事を縣の司に賴めば、益なきがごとし。正法に奇特なし。鬼神に横道なし。神は正直の頭にやどる。神は非禮をうけず。

韓退之曰。淸心默禱者有應。豈非正直能感通焉。禹氏曰、萬物之所以成者、神有以相功於其幽。民有以致力於其明。神有功以相其幽則報之。民有力以致其明則勞之。所謂百日之蜡一日得是也。

左傳。桓公二年臧哀伯諫桓公曰。淸廟茅屋大路越席（結草爲席）大羹不致（肉汁不用五味調和）粢食不鑿昭其儉也。天地に神祇有。日月、星辰、山川、江海も其内にあり。天神地祇は云ふに不及。人鬼の事は幽微の理也。和字を以て、たやすくしるし難し。格致の學問に久しく功を用ひてしるべし。人鬼とは、父母先祖の宗廟の神、凡古人を祭るをいふ。

不知不識順帝之則。神道易簡の理、不言の教、かくの如くなるべし。天何言哉。四時行云々。其身正不令行云々。

神につかへ、祠官となりながら、家業を專にせず。

兵革を事として、威を振ひ、謀反の人に與みし、亂逆をおこす輩あり。是公命に背きて、亂を起すのみならず。正直清廉ならずして、神慮にそむける罪深し。かゝる輩、皆子孫絶えて其家亡びたり。天道神明の罪おそるべし。祠官となる人、もし勢力ありとも、かゝるわざをなして、神道に背くべからず。

中夏、朝鮮、天竺の上古、民俗すなほにして知なし。一人神恠なる事を云出せば、世こぞつて是を誠とし、たふとみ信じ、其上にいろ／＼あるまじき奇異なる事を取添て、ほめかゞやかし、神恠奇特をいふ事おびたゞし。後世に至り、國史を作る人、聖學なく、見識くらくして、上代より空言をかたり傳へたるを、誠ぞと心得、えらびもなく、言傳へしまゝに、文に書のせたれば、後に至りて、世々の人是を信じ、今の世にあるまじき事なれど、あやしき事とは思ひながら。古の人しるし置たれば、上古は今の世と異なれば、左こそありつらめと思ふは、まよへるなり。或は又其文につきて、わが私意を以て、道理なき事を書つけ、其書になき事を作り出し、しひて道理を附會する事、いつはりて神をあざむき、人を欺きて罪ふかし。日本の上世も又かくの如くなるべし。もろこしは、聖人ありて、其僞を正し給へば、そのうれひなし。それだにも、上代の書は却て僞り有て、用ひがたし。いはんや、外國の書は聖人なくて、改正し給はざれば、信じがたし。

人の家に珍しき變恠の事あり。是その主人の過惡によりて、天より凶事をしめして、惡をあらため、善にうつらしめんとのいましめ教也。是天道の仁なり。家主恐れて身をつゝしみ、過惡をあらためれば禍なし。是天に祈る祈禱なり。無道にして、神佛に諂ひ祈りては、まぬかれがたし。凡天變は惡事なきにむなしくおこらず。人をいましめて善

にうつらしめんとの、天のつげなり。もし恐れずして、悪を改めざれば、必禍おこる。天道恐るべし。士庶人の家すらかくの如し。況國家の爲に、天變、地災、人禍あるは、天のいましめなる事明らけし。天變むなしくおこらず。君上より庶人までも、天道恐るべし。王荊公が、天變畏るゝにたらずといひしは、一言にして國をほろぼすべし。大なる罪なり。天のせめ多かるべし。

内に敬齋するは、心を清くし、慾と怒をやむるを云。是内清淨也。外に敬齋するは、物いみし、沐浴しみそぎはらひして、物いみするなり。是外清淨なり。

神社寺院などに、もとよりふるき文書なきを、此頃の人の僞りて、作れる緣起文書など有て、人をあざむく事あり。彼いつはりて、古筆を似せ、紙を煤にそめ、ふるめかしく拵へ、所々に火をつけ燒なとして、いにしへより傳はれる樣に見せて、僞りこしらへて、人をあざむきて、利を得んとおもふは愚なり。人を欺くのみならず。天道神明を欺く、冥罰恐るべし。諺に神殃及三世と、古人のいひけんことわりたがふべからず。邪なる小人神に託して、僞を作り出す事多し。これ一旦のわずかなる利をはかりて、大なる神罰のがれ難し。畏るべし。人をあざむき、いつはりて迷はする事、神慮に甚背けり。天地神明の罰、などかなからん。道しらぬ若年の輩、かゝる僞れるひが事を、假にもまなぶべからず。天道神明恐るべし。かくの如く僞りこしらへたる文書の、眞僞を分つ法三あり。知るべし。一には紙、二には手跡、三には文章也。此三つにつきて古今を分つべし。口傳あり。よく見分かてば古今の替りいちじるし。此三つを以て分てば、其眞僞わかちやすし。是より外に、又一の口訣有り。文字に水を少しつけて置、しばし有て、指を以て擂りておちざるは、是古よりの文字

也。若墨よく落るは、いつはりて新しく拵へたる也。此法たがはず。いかにいつはりても、右あまたの驗別にはのがれがたし。

神に祈れば福あるは、もとより定れる理あり。但し祈るに正禮有。非禮あり。祈べき正神有て、誠の心を以て、祈べき正神にいのらば、其事によりて其感應有べし。若誠の心なくて、祈るまじき神にいのる間敷事を祈らば、感應なかるべし。邪神は人に福する事なし。祈りても益なし。正神に祈るとも、禮なくていのらば神は非禮を請けず。應驗有べからず。

服忌の事、服とは喪服也。忌とは死穢を忌みて、神事と公事とをつとめざるなり。中夏の法は、父母主君のため、三年の喪服を着て、酒肉をたつ。祖父母、兄弟、伯叔父母、從兄弟は、次第にかろし。外戚は彌かろし。是死穢をいむに非ず。憂をわすれざるなり。日本の古の禮は、父母に斯の喪を服す。其服は藤衣とて、葛布なり。五十日を暇とす。暇は即忌也。公職をつとめず。服の中には神事にあづからず。日本の法、死穢をいむ。故に暇を忌といふ。

神道は誠を本とす。心にもことばにも、只誠を專に主とすべし。誠の道は人を感ぜしめ神を感ぜしむ。近世の俗、わが説を立て丶、わが云所は神の授と名付、家の秘傳と稱して、僞て人を迷し、我説を信ぜしめんとす。是誠の道に非ず。神道を以て人をさとさんとならば、先我心に僞なくして、誠の道を以て人にす丶むべし。誠だにあらば、人おのづから感服してしたがふべし。人の隨ふと隨はざるとは、こなたより期すべからず、彼に任すべし。わが誠だにあれば、愚なる者も後はしたがふしるしあり。しひて我言事を必人に信ぜられんと僞を云心詞、理に違ひやすし。我身すら僞を行なひて、人に誠をす丶む共、感通の理なくして、人したが

ふべからず。

三光北極に向ひて大小便すべからず。又指さすべからず。月中を久しく見るべからず。虹霓に指さすべからず。風雨をうらみのるべからず。雷はげしく、大風吹かば正座して恐をなすべし。夜といへども必起べし。雷鳴する時仰臥べからず。（松下見林が諸公事紀聞の内にみえたり。）

日本紀神代上下巻、漢字を以て先書て、後に和語を以て其かたはらに訓じたるを、其事しらぬ人は、先和語有て後に漢字にて書たりと云。文理をしらざる人は、是を見わけがたきにや、固陋にして見識なしと云べし。和語にあらず、かゝる類猶多し不レ可レ用。

鰹木、神殿の棟木の上ならならべたる木を云。鰹をわめるが如くならべる故に名づく。勝男木と云、加棟木と云説有。およそかゝる附合の説、用ゆべからず。似たる事を以て取合て、推量に云出すべからず。證なき事云べからず。

注連は、日神の入給ひし石窟の前に縄をはりて、還入給はぬ様にせしなり。

本居、所生の地の土地神也。又生れし所をも云。或は本居れる地をも云。氏神とは、わが先祖の神社を云。藤原氏の人、春日明神を氏神とするが如し。土地神を氏神と稱するは、世俗のあやまり也。およそ文學なければ、かゝるあやまり多けれど、みづからしらず。

散齋は、祭の前の潔齋也。致齋は、正當の日の潔齋なり。心を清くするを戒と云、身を清くするを洗といふ。

陰陽鬼神のしわざには、誠にあやしき事も稀に有。されど世に語り傳ふる神佛の奇特は、そらごと多し。神佛をたふとくいはんとて、却て神佛の徳をいひさまたぐる事多し。凡民は愚にして、又愚人かし。愚なる故に、誑偽をわきまへずして、僞を

信じて迷ひ安し。慾深き故に福をねがひて、ひが事を行ふ。愚なると慾深きとの二は、是民の迷へるの本なり。世に云傳へて、神佛のあやしき福となすと云事をり〳〵あり。俄に出きたるあやしき神佛のしわざにまどへるは、輙て其いきほひやみて、いつはりひが事なる事をしれどもこりず。かかる事またいでくれば、前非をかへり見ずして、いくたびもまよふは、愚と慾との二のもの民の心に有てはなれざるなり。

天道は公にして私なし。廣大にして急ならず。善人に福し、悪人に禍し給ふにも、ゆるやかにいそがはしからず。され共善に福し、悪に禍し給ふ理、必誠有て違はず。ゆゑに人の悪を行ひ無道なるは其むくひ速かならずとも、必後には天のいかり、禍のがれ難し。故に天道はまはり遠けれど、誠有て違はず。纔を以て人の善悪のむくひおそきことはあれど其しるしあり。天道は恐るべし。

人の見る處同じからず、好む處も又異なり。見る處好む處おなじからず共、よき道を好まば、其少しづゝのかはりたる所は、其人の心に任せたらなんこそ、あらそひなくて宜しかるべけれ。日本にも神道あり、儒道あり、佛道あり、各其道を守る人は、好く他道をそしりあらそふは宜しからず。儒の佛をそしり、佛の儒者をそしり、神者の儒をそしる、其見識かはりて、わが道にことなるを爭ふ。心よりそしらばしかるべからず。さきに云し如く、もろこしに佛をきらひ、老子の道をきらひて僧衣をはぎ束髪させ、佛經をやき、寺をこぼちし王有しか共、其子の時はやがて元にかへりぬ。日本にも神儒佛は萬世迄立て亡ぶべからず、只各其道を明かにして正敷行なふべし。

人各好事あり。きらふ事あり。厩戸の王子は佛をこのみ、神道を好み給はず。守屋大臣は神道を好み、佛をきらひ給ひし故、佛を好まずとて科なき人を

逆臣と稱して、厩戸王子軍をおこして、守屋を攻殺し給ふ。人の好む事、惡む事、各變れる事かくの如し。各の好むべき事をこのみて、人の好む事をいかりにくむべからず。神と佛とかはれり。みだりに一とすべからず。神道をたつとぶべくば、佛說をまぜ合すべからず。佛道を好む人は、神道をまぜ合すべからず。もし神道に佛道をまぜ、佛道に神道をまぜては、佛道にも非ず、神道にもあらず、何れにもつかざるこしらへもの也。人各好む處異なり。酒を好む人有り、きらふ人あるが如し。酒を好む人は、甘糖をきらふ。糖を好む人は酒をいむ。酒と砂糖と一とはしがたし。神道佛道は似たる所なし。引合せて一とするはひが事也。佛者と神道をかりて、わが說を人に信ぜしめんとし、神道者は文學なくして、其道に同じからざるをさとらずして、佛の眞の法をしらず。只虛妄の說に迷ひて、ひが事のみ多く書出せば、後代の人いよ／＼知なくして、其まよひます／＼深し。神佛をたつとぶ人、是をうやまひて拜するは、左もありなん。若福祿利生を貪りて福を得んが爲に、神佛にしきりに詣で、紙の幣、土佛木佛を、一日に百座千度拜して祈り求めたり共、何ぞ益あるべきや。かくの如くして、若益あらんと思はゞ、至りて愚なりといふべし。能その是非を思案すべし。かく神佛にへつらひ求る人、古今世に多けれど、福なく、財寶を得がたく、命ものびず、禍ものがれがたし。祈らざる人も、罪科を犯さず、養生を愼めば、災ひなく、命ながし。是を以て、吉凶禍福は、人の本より生れ付たる天命にて、人力にて神佛にへつらひもとめても、しるしなき事をしるべし。但一向に祈るべからずといふにもあらず。祈べき神あり。祈るべき道あり。祈るべき禮あり。道なくて神に祈りては、しるしなし。佛者はまた祈るべき佛にいのりて、驗を得る理あらば祈るべ

し。

古人の曰、祈禱は德を修むるにしく事なしといへるは、神に福をいのり、禍をはらふは、ひとへに神に求めて、わが身の道を行ふ事をつとめざるは愚なり。かくの如く我身の善行を勤めずして、只神に諂ひ求めていのりはらはんより、わが身の德ををさめて善を行ひて、人をたすけ救ふが、天道神明の御心にかなひて、大なる祈禱になりて、祈りはらふには遙かにまされりとなり。此理甚明にしてしるしあり。信ずべし。うたがふべからず。

水のはじめて流れ出る源は清けれど、流の末になりては、泥土糞滓のけがれ有てにごる。萬の事皆斯の如し。一を以て萬をしるべし。佛老の道、神道も、儒の道も、かくのごとし。佛の敎は、貪慾、瞋恚、愚癡をいましめ、慈悲を宗とし、草衣木食をいとはず、宮室を飾らず、男女の色を遠ざけ、諸惡莫作衆善奉行の如き、四十二章經等にとける所、是佛の眞實の本意なるに、後代伎倆ありて狎獰なる僧、みだりに高大なる事を說出して、佛の本意を失ひて、心にさとれば、いか成放逸なるわざを行ひても苦しからず。さとるとさとらざるは、身の行の善惡にかゝはらずとす。又功德とは、人の飢寒を救ひ、病をたすけ、廣く施し諸を救ひて、善をなさんこそ然るべきに、國土に過きて大伽藍を多くたて、數千人の僧を供養し、萬燈をともし、國家を費し、人民を妨ぐることを功德とす。是皆佛の本意にあらず。其上僧となれば、身に高ぶり人を侮り、貴人をもうやまはず、梵網經に、沙門は國王大臣を敬はず、父母を拜せずといへればとて、夫を必佛の正說とは定がたし。末世愚癡卑凡の僧は、それを行ふべからず。古人の言に、僧は只貞實なるべし、高ぶるべからず、といへるを信じて行ふべし。是なん佛の本意なるべし。僧と成りては、眞實にして善心ふかく、身をへりくだり

人に愛敬有て貧賤をくるしますゝ身を養ふ事輕く薄くして、國家の費とならざらんこそ、佛の本意にかなひてよろしかるべけれ。

梁の武帝佛を好みて、達磨に問て曰、われ位につきてより以來、寺を多くたて、經を寫し、僧を多く養へる事擧てしるすべからず。いか程の功德ぞ。達磨答て曰、幷に無功德といへり。武帝は莫大の功德なるべしと思ひ給ひしに、思ひの外のこたへなれば、又問て曰、何を以てか功德なきや。達磨答て曰、これ只人天の小果。有漏の因、影の形に隨ふが如し。有といへ共實に然らずと云り。又宗果人に答る書に、經をよみ佛に念じ、佛前に禮拜して、地獄に入る事をまぬかれんとす。これ愚人のなす處といへり。達磨は天竺の人、中夏に來て禪家の初祖となる。宗果は達磨以後六世の祖、高僧顯昧に冠たり。此兩人の言佛法においては信ずべし。然ども昔よりからやまと、世俗のする所は、達磨宗果の益なしといへる所なり。佛法の眞理にはあらず、背違ひてなせる所なり。又貪瞋癡の三は、佛氏の深く戒むるところ也。是を三毒と云。凡世俗の寺を建て佛に供し、僧を養ひ、念佛看經するは、今のわが身の福をいのり、來世になり安樂ならんとの利欲より起る。これ道の爲にはあらず。貪なり。其益なき事をしらずして是をするは癡也。我貪ると癡なるとを、人咎むればいかり爭ふ。是瞋也。此三毒身に有て解脫をすれんは、佛意に入るべからざる事をしるべし。我心我身、道にかなはずば、日夜土佛木佛に諂ひつかへて祈りねがふ共、萬が一の益あるべからざる事をしるべし。是をしらざるは愚の至なり。好むとにくむとの二をやめ、いかりと慾とをやめ、心を和平にし、よく思ひて其非をさとるべし。

老子の道も又かくのごとし。道士とはもろこしにて老子を祖とする者なり。しからは淸淨虛無を貴び、

修養して長生久視をねがふべきに、左もなくて神に祈り祭り、符守を人にあたふる事、巫祝のわざのごとし。是日本の山伏の業とするにおなじ。老子の道は失へり。

神道も又しかり。神道は誠を本とし、正直清淨を本とするを以て道とす。然るに後世の神道者は、僞りていにしへより傳來のなき事をいひたて、心ひが〳〵しく、神怪なる奇特を立て人をまよはす、神の御心にかなふべからず。神の道あにかくの如くならんや。本源は正しけれど、末流のみだれてたがふ事皆おなじ。儒者も亦しかり。堯舜孔子の道にしたがひて、誠を主とし、人をあはれみ、忠孝をつとめ、人倫をあつくし、おのれをへりくだり、人をうやまひて善をおこなはゞ、堯舜孔子の道の本源にたがはざるべし。後代の儒者はしからず。おのれにおごり、人に高ぶり、聖人の教にそむけり。其上儒者は人倫の道に明かにして、天地の理、古今天下の事に通じ、道理をあきらむるこそ貴ぶべきに、後世の儒者は左はなくて、天地人の道に通せず、古今天下の事理にくらく、只五字七字の詩句に專ら心を用ひ、詞を巧にし、かざるを好みてつとめとし、一生のちからをつひやせ共、其身ををさめ人を敎ふる天道にくらくして、われ人のうへ、天下の事に無用のつとめをなし、有用の學なくして、一生の巧をつひやす。是聖人の敎の本源にそむきて、末流の小なるわざをつとむ。今の神道者のいへるには、我が日の本にては、神道を專にたつとぶべし。しからば儒道を打破りすてて、神道を專一にすべしと云。わが道を專一に守る志はいと殊勝に過たれど、左樣にはなり難かるべし。唐土にても佛をきらへる王は、佛法を破却し、寺をこぼち、僧を還俗させ、佛經を燒きし事度々なり。また老子の流、道士を禁じて、皆俗人となしたる王も有り。秦の始皇は無道にして、聖

人の經をやき、儒を穴にうづめて殺されしが、終に天下を失ひて、子の時に至りて亡びたり。其後古より今に至るまで、儒を禁じたる王はこれなし。若儒道をやぶらば、君臣父子夫婦の道をやめ、天道より人にうみ付給ひたる本心の性たる所の、仁義禮智をすてば行はれんか。然らば性をやぶり儒をすてゝ天道に背き、禽獸とおなしかるべし。佛を破り道士を禁ぜしも、一旦の事にて、やがて後には又もとのごとく盛になりしなり。

天地の内に、麒麟鳳凰もとび、よくふくろふも、虎狼も猪鹿も、蛇蝎も魚鼈も有、梅櫻も松柳も、いばらからたちも有、各其所を得たり。儒も佛も神道も老莊も、皆是古よりある所なれば、たとひ其道をきらふ王公有て、その道を破り給ふ共、其一世こそ在もあらめ、其子の時、其後の人はしかるべからず。然ば何れを破り、いづれをそしるも、無益のいたづら事となるべし。只其道の本源を立て、其本に背かざるべし。國家人民の補となり、つひえわづらひとならざるべし。しかればいづれの道も、天地の間に長く立べし。其法甚きかえ過て、其道につきて國家を費し、人民のわづらひとならば、却て其道の災となるべし。各其道によりて、世の害なくんば天下後代迄道ならび行はれて、相もどらざるべし。人の尊びおもんずる所の靈神の祠には、人の吉凶を卜ひて其しるし有。或天下の吉凶其國の凶事、郡主の凶事などを、かねて怪異をあらはしてつげ示し給ふ事あり。其しるし違はず。是諸人の常に尊ぶ所に、神氣のあつまれるにや。かゝる靈多くは、名山靈秀のすぐれたる境地の神祠に有。これ神靈のあつまれる所なれば也。佛堂も人の尊ぶ所なれ共、神祠の如くには罰も利生もなし。こゝを以て佛は天竺の神にて、日本においてその神靈の有無をしるべし。

女巫の神祠につかへずして、人の求めにより、弓を

たゝき神號を多く唱へて亡者の靈鬼を招き、そのけしきかはり、みづから靈鬼の語をなし、亡者の恨み悦び其情狀をのべて、求る人に聞しむ。其死者の家の事をしらされ共、其實事に當れる事多し。然れども悉く信じがたし。死せる者皆かくのごとく靈鬼ありて來るべからず。其術は狐妖をかりて怪異をなせる也。凡老狐精よく神怪をなす。此女巫所々に有、廣邑にはことに多し。

佛道も神道も、各他の力をからずして自ら立べし。

佛は天竺の一法なり。神道は日本の一法なり。其立る所各かはれり。混じて一とすべからず。又佛は神道の助をからず、神道も又佛道をからずとも立べし。若佛と神と互に助をかりて一にまじり、兩說を混じ合せては、佛にもあらず、神にもあらず虛誕妖妄の說と成るべし。誠の道に非ず。たとへゝば油に水をまじへ、酒に砂糖をくはへたるが如し。二共に敗れてすたれる無用の物、飮食し難く雖其清水共すべからず。只各わが道を學びて行ふべし。かはれる他道をかるべからず。又そしるべからず。道おなじければ互に助る理あり。道同じからざれば謀をなしがたく、助を得がたし。佛者の神道は佛理と同じなどいへるは、日本は神國なれば、人にわが法を信ぜられん爲の手立也。およそ正道には手だてなし。人の用捨は天に任すべし。これよりこしらへてもとむべからず。是僞なり。佛道も神道も、只誠の道を本として行ふべし。誠あらば手立なく共、人の尊信する事ふかかるべし。

心氣虛しく熱邪の病あれば、あやしき鬼怪を見る。

是誠の鬼にあらず、其人の身に邪氣あればなり。病によりて見るを眞の鬼と思ふべからず。夢に奇怪を見るが如し。もろこしの書に、神道は右をたつとぶといへるはなんぞ。賈氏が曰、生ける人は陽なり、故に左をたつとぶ。鬼神は陰なり、故

に右をたつとぶ。天神地祇人鬼なり。愚なれば、邪道を信じ、正道を疑ふ。これ智なき故也。淺間敷と云べし。善惡邪正を辨へざるは、むげに愚なり。よき道を學んで知をひらき、愚を去べし。神道にも正道あり、邪法有り。おしなべて信ずべからず。邪法尤よく人を迷はす。恐るべし。邪輩の邪法の如き、道理大にちがひたる道にも、愚俗はまよひて、身をすて公禁にもそむく。

中臣祓たちぐさのことやめて、抱朴子曰、山中樹能語者非樹語也。其精名曰雲陽。

劉向が傳に云、神を誣る者は殃三世に及ぶ。誣るとは、なき事を僞りて云出すを云。言意は僞りて神になき事を言つけ、神の教などと言て、昔よりなき事を言出し、神の妙理などと言て、つくり事をいひ出して人を迷はす。昔より神書になき事を作り出して人を欺くは、皆是神を誣ると云。かくの如き人は、神明の罰を蒙りて、我身子孫まで殃ひ有となり、恐るべし。

神は正直の頭にやどり給ふ。夫神道は誠を本とす、心も行ひも僞なかるべし。神書は誠の道を教る理也。神書を作らば、誠に純一にして、民に正直質實ならん事をすゝむべし。誠の道をとかんとて、先みづから僞を行ひて、人を欺事、益なきのみならず、神慮に背き、人に害ある事なるべし。誠を宗とすべき教なるに、他家の書より却て僞書多きはなんぞや。近年大部の僞作の神書一部刊行せり。是を作らんとては、そこばくの勤勞なるべし。其書古書を學んで、筆力は頗巧なれども、古書には似ずして今めかし。前後首尾きこえやすくして、古めかしからず。古書はかくの如くならず。識者の目には、其僞作なる事明かに見やすからん。かゝる大部の書を作れる筆力ならば、其力を用ひて、眞實の理をときて、神道を人にしめさば、萬民の教となり、世の寶ともなりぬべし。其功の力をし

むべし。此書其後公命有て禁じ給ふ。此書のみならず、近世の神書と稱する物、刊本寫本に僞作多しときこゆ。然らば悉く信じがたし。僞作して人を欺き迷す事、其罪かろからず。天道神明のとがめおそるべし。誠なければ其本たえぬ、その末なんぞ見るにたらんや。敎を立る事は、凡人の力にはなし難し。後の人あたらしく云出すべからず。只いにしへの敎を其儘にて能守るべし。日本の神道を上古のまゝにて行へば、其道たちて害なく、國治り民すなほなるべし。いよ／＼後代に至り、眞傳を得ずして人々神道を言たてゝ、さま／＼昔なき事を、上古の神道なりとて言出し、怪しく異なる說を立、僞りて人をまよはす人あらば、つみ深かるべし。かゝる誠なき事は、先神の御心にそむけり。凡わが身にすこし才あれば、人に信ぜられんとて、昔よりなき事を新しく言出すは必世に害あり。

わが日の本は、上古より神國にて、神の始めし國なれば、その生れ付、身の行ひ風俗、もろ／＼の異國に勝れたり。爰を以てもろこしよりも君子國と稱し、人民豐樂にして、禮義敦行なる事を稱して諸國に異なりとす。今に至りても、いにしへ神國の餘風つきず。人皆神孫なれば、天下の人たかきいやしき、心に皆神理そなはれり。末世なればとて、もはら神の理、君子の道を守りて我身をけがしあなどるべからず。財を求めむさぼり、義に背きて、志をくだし、身をはづかしむべからず。身をはづかしめ、いやしき行をして、我が國人の神國といへる名と、もろこしの人の君子國といへる名に背くべからず。昔唐土の人、字をつけて、名に顧て義をおもふが如くなるべし。名をけがすべからず。日の本の人は、國土のならはし有て、公家は生れながら温雅にして、いやしからず。其樣式たゞし。武家は義を守りてつたなからず。

風操古今一類有ていやしめがたし。

日本の人、死して神佛にいはゝれ祭られん事を願ひて、みづから八幡と稱し、天神と稱し、不動明王と稱し、阿彌陀佛と稱す。神佛の名ををかし、みづから尊くせんとするは、無禮の至なり。殊に八幡は天子の御神靈なり。たとひ大臣たり共、潜號するは罪深し。又佛號を潜するも、わが身を尊くし、人にあがめられん爲なれば、無禮僞妄佛意にも背きなん。天を欺き人を欺き神佛を侮る也。心あらん人は、是神に非ず佛に非ず、賤むべし。又其人の本分をも失へり。死して後までつみにおち入る、人の尊ふと尊ばざるは、我あづからず。只誠を以て神とうやまひ人を欺かず、いつはらずんば、又死期に至りて、わがみづから號して神と稱せし人もあれど、後人は是を神と稱せず。みづから貴くせんとして、却てはづかしめをとれる也。たとへ凶人醜にして、わが死後に神にいはゝれ、百世廟食す共、君子の願ふ處に非ず。僞妄にして、百世の後を欺く事はづべし。

神道は不言の教、易簡の道なれば、ひとりたちなは立べし。然に神道には昔より佛をかる。神と佛とは、陰陽生死の道ちがへり。神道古より儒をからず。神儒は一理なれ共、昔より用ひず。誠の神道ならば、他道をからずしても、上古の如く行はるべし。され共、聖人の教は委敷詳なり。儒の教を用るはかるには非ず、道同じければ、其精しく詳なるを用ふる也。若道同じくば借用ひてよし。唐の金も日本の金も同じといへるが如し。異國の鉛を以て日本にて金とせばあしかりなん。今日の淺近なる事も、我一人の智にて心得がたき事をば、智ある者に云せてきけば、愚は變れど道理增れるがごとし。況や、聖人の道を用ふるをや。

普詞に、事のゆかずして、至極つまりたる時、人にも我にも用ふべし。大かたなる事には、普詞は用

ふべからず。此人此事は、多分相違有べし。されども誓詞をさせたらば、若は守る事も有べきかと疑はしき程ならば、神明をかろしむる道理なれば、誓詞をなさしむべからず。我誓詞をするも、猶以て其心得すべし。後の事たがふ間敷かと、わが心うたがはしくおもはゝ、其誓詞をすべからず。神明恐るべし。誓詞には猶秘訣あり。

人病中にあやしき者を眼前に見、或は神佛の奇怪を見、又平生われよりあだをなせる者の亡靈の來る様に見ゆる事有。是皆誠に其神靈の來り見ゆるには非ず。病邪にをかされ、平日心にかゝる事有、疑ひまどへる故に、實にはなき物なれど、まのあたりにまさしく見ゆる也。かうやうの事につきて、愚者は實にある事のやうに思ふは迷へる也。又靈鬼の來るにあらざれ共、心の病、眼の病によりて、なき物のあるが如くに見ゆる事あり。是は實にあるに非ず。心と目との病なり。

天地の形勢、東を初とし、西を終とす。東は陽氣の初なれば、春の如し。春は陽氣の生ずる初なり。日本は世界の東に有て、陽の初なり、故に天地の氣を受る事、清潔にして温和なり。且陽氣發生の初なれば、其氣強し。清潔なる故にむさぼらず。廉直なり。温和なる故仁慈有て情深し。氣強き故に武勇有て怯ならず、宇宙の形勢、東を初とする故、日本は世界第一の最上の國なり。たとへば東より西へ流るゝ川の如し。世界の上流なり。もろこしは天地の中央に有て、文明の國いにしへ聖人の世々に出給ふ世界第一の地にて、萬事萬物備はれり。上國なれども、東方偏土の日本に及ばざる事多し。日本は偏地なれ共、天地の陽氣發生の初なれば、中華に勝れる事多し。陽氣發生の初なれば、其氣清潔にして温和に、且其氣盛んにして強く、清潔なる故に貪らず、けがらはしからずして廉直なり。異國の俗の如く、假にも盗みするもの

なく、温和なる故に、仁慈有て情深し。武人も、もろこしの如く人を殺す事を好む者すくなし。異國の如く人を食はず。又其氣さかんに強き故、武勇有て人と戰ふに怯からず。異國の人にすぐれて節に臨ては命を惜まず。又温和にして謙厚なる故に、君臣父子に對する上下の禮義有。人倫に交はるに禮有り。奴僕も、小節を愼みて、法外なる者すくなし。是皆日本の人の性と習との神道に近き所なり。神道の正直清潔の理を以ていざなはゞ、一變して道にいたる事速ならん。

人の性各かはれり。仁者は仁を好み、勇者は勇を好み、上戸は酒を好み、下戸は酒をきらふ。厩戸の皇子は佛を好み、神道を嫌ひ給ふ。守屋の大臣は神道を好み、佛を嫌ひ給ふ。太子と守屋と、其性同じからず、故に其好む所惡む所異なり。太子は聰明叡達の賢人なる由傳へきけば、定て守屋の佛を惡み神を尊ぶるを、大惡なり正道の妨とおもひてこそ別に科なき人を逆臣と號し、兵を催して攻殺し給へるならん。是其心は、定て善を行はんとの事なるべし。され共、人各このみにくめる性あり。佛の道を至りて善なりと思ひ給はゞ、守屋と和睦し、神道を宗として尊とび、佛をすゝめて見給はば、守屋もなどか太子の命なれば隨ひ給はでやはあるべき。守屋大臣の神を尊び、佛のわたるを嫌ひて、異國の神をたふとばゞ、わが國神の神慮に背かん事を恐れ給へるも、又道理なきにあらず。されば神道をたふとびて、又佛道の善なる事をしめして和睦し給はゞ、守屋も又心和して隨ひ給ふべきに、守屋の不幸にして科なきに、逆臣の惡名を後の世まで蒙り給ふのみならず、是より佛法のみさかえて、神道はあれ共なきが如く、今に至りてしかり。是天下後世の大不幸にあらずや。され其太子はひとへに佛を好みて、至りて能道と思ひ給はゞ、其心にまかせ、佛をもたて行ひ尊み給ふ

べきに、神道を捨て用ひ給はず。また太子は儒道を尊び給ふとはいへ共、われ大聖釋尊の弟子たり、豈小賢孔子の徒ならんやとのたまふは、儒を尊み給ふとは云難し。わが好みに任せて、大聖とし小賢とし給ふは、天地の道理は、天下の人心の好惡には本づかずして、われ一人の私言より出たる詞なれば、人每に理至極とはおもふべからず、是さきにいはゆる上戶の酒を好み、下戶の酒を嫌ふが如し。好みにくむ所に任せていひたるほめそしりにて、道理に任せざる也。亦儒敎は佛よりさき日本にわたれ共、その道をしれる人は來らず、書のみ來りて敎は傳はらず、其上厩戶皇子の佛を尊び給ふが如くに、聖人の道を尊み給ふ人なかりしかば、聖人の經の文字言句だにも日本に明かに通せずしてたつとぶ人なし。その後に、遣唐使しば〳〵渡りしか共、吉備公を先として、もろこしの禮は頗傳へ來れ共、聖道は傳へ來り給はざれば、聖人の書は傳りて、道は傳はらず。日本の儒者も名位多かりしかど、漢唐の儒の訓詁の學のみ有て、道理明らかならず、日本は佛には幸あり。神道と儒道には幸なし。神道は元より我國の道なれど、厩戶皇子佛を專一に尊び給ひしより後は、神道明かならず、その道を建立する人なし。只神代の事をしるせる三部の本書のみ有て、其後は書をあらはして神道を說出る人なければ、其道くらくなる。堯舜の道は、孔子を得て明かなり。孔子の道は、孟子是を發明せらる。孔孟の道は、程朱を得て、彌明なるが如し。神道も聖德太子の佛を好み給ふ如く尊とぶ人有て、其後相續ぎ尊んで、發明して建立する人あらば、天下後世に明かならん事、日月の天にかゝれるが如くなるべきか。日本の道は神道なれど、今に至りては有るか無きかの如くなる事、憾むべし。然共天地の道の明かなる事は、大空の日月を仰ぎ見るが如く、人の性の善にして、正直

清潔の心に誠の道ある事、わが掌を見るが如く明らかなるは、則是人の行ふべき神道なれば、神道のいまだ地に落ずして、人にある事としりて幸とし、天が下の人々高きもいやしきも、此道を尊み専に行はゞ、などか末の世なりとて、いにしへにかへらざらめやも。

天地の間に人の行ふべき道あり。則天の萬物をうみそだて、あはれみ養ひ給ふ理を、人のうけて性とする所は、則是仁義禮智信の心なり。又行ふべき道は、仁義禮智信に隨ひて、父子君臣夫婦長幼朋友の五倫の道となる。五性を以て五倫を行ふは善なり。佛も神も儒も同じく善なり。

神道は上古より行はれ、易簡の理、不言の教なれば、仁義禮智孝弟忠信五倫などの名目はいまだなし。わが國のみに非ず、中夏の上世も又然り。堯舜陽武、古今の大聖にて、至治の世なれど、いまだ仁義禮智孝弟忠信等の教の名目なし。況や、三皇五帝の時をや。堯舜の時、只五品の名有。然に其下に皐、陶、稷、契あり、伊傅、周公ありて、聖人の道を輔佐し給ふ。其後孔孟世に出て、下位に居給ひしかど、堯舜の道を發明し給ひて、其道大に明にして、萬世に傳はる。道の大なるこいはんなり。わが國の神道も、後世に輔佐の人あらば、神聖の道明かなるべきに、上古より後代に至るまで、不幸にして神道を輔翼し、是を發明する人なし。是道の不幸なり。剰へ厩戸皇子神道を嫌ひ給ひ、守屋大臣の神を尊び給ひしをにくみて、科なき人を逆臣と稱して攻殺し給ひしより、神道くらくなれり。あゝいたましきかな。道の大なる不幸なる事なり。

天神地祇人鬼を祭るを三禮と云。日月星辰天神の内にあり。山川社稷は地祇の内に有り。先祖父母は人鬼の内に有り。又父母先祖の外に祭れる神あり。國語に曰、古に聖王の神に祭り給ひし人に品々あり。民の則となりし人、身を捨て民の事をつとめ

し人、辛勞して國を定めたりし人、大なる災ふせぎし人、是等の人は、國と民とに功ある人なれば、神といはひ祭り給ふ。か〻の如き人にあらざれば祭らず。祭るまじき神を祭るは淫祀なり。淫祀は人に幸なし。まつらず。神道は直清を要とす、故に神につかふる道は、內外の清淨をむねとす。故に祓除をさきとす。祓除は、みそぎとは、身をあらひすゝぐ也。はらひとは、不淨をはらふなり。是祓除するは、心身を清淨にする也。易に、齊戒して以て其德を神明にすといへるも此意なり。神は誠を以て心とす。正直は誠なり。神につかふるは、神の御心に受したがふべし。誠を以て心とし、敬を以て工夫とす。敬より誠にいたるべし。

異國は、皆畜を食す。聖人の制禮にも、大牢を用ゆ、是國人の嗜食により、聖人不レ得レ已用レ之ならん。日本は神代より、六畜を殺す事を禁じ、食する者に神社の參詣を堅く禁ぜらる。是神德禽獸に至り、人をして功を賞し、德に報ずるの禮を行はしめ給ふ。特に汚穢のみの故には非ず。是國神道の通禮なり。此外禽獸を禁ぜらるゝ事あるは、一社々々の制禁なり。伊勢春日に鹿を禁じ、伊勢三島に鷄を禁じ、比叡山に猿を禁じ、愛宕山に鳶を禁じ、八幡に鳩を禁じ給ふの類なり。是通禮にあらず。

わが國は、神の道よりをさまりぬ。遠き昔の風を傳へて、今に其道ほろびず、すなはにして、いさぎよきは、正直清淨の道にて則神の道也。人の心に皆上古の風傳はれり。人欲盛に、習俗あしければ此道すたる。

正神に祈るは、本是正禮なり。其驗有べし。祈るべき理有り。然に我位の祈るべき神に非ず。又神人に惠み有べき正神に非ず。其上祈るに正禮なく、非禮にして祈らば、神に諂ひ、神を褻し侮りて、其咎めは有りぬべし。其感應は有べからず。神に祈る事、よくその道をしるべし。みだりにいのるべ

からず。

夫木
もろこしの代々はうつれど敷島や
やまと島根はひさしかりけり
土御門内大臣

神を拜するに、合掌すべからず。合掌して三拜するは、天竺の人佛を拜する禮なり。中華の禮は、拜するに左手を上にして再拜す。本朝の禮も、又再拜す。中華に後世四拜するは、再拜を二度する也。日本の拜、兩手を以て相うつ。之を拍手と云。今神前にて神職の行ふ拜これなり。周禮、春官宗伯九拜。有振動拜。注、鄭太夫云、兩手相擊也。疏云、今倭人拜以兩手相擊。蓋古之遺法。鵜信謂、是本朝所謂拍手也。君子は迅雷鳴り、風はげしく雨甚しければ、必常の容を變じて、夜臥せる時も起て衣冠して坐せり。是天の怒をおそれ敬へる也。三光及北辰の有方に向ひて、大小便すべからず。日月の照す所、神廟の前も又しかるべし。是天地を恐れ神を敬ふ也。又みだりに神祠の中へ入べからず。是猶神を恐れうやまふなり。

古人の語に、祈禱は修德にしかずといへるは、神に祈て福を求め、禍をはらふは、誠を以て行へば、其驗有るの理あり。祈りはらふは、ひが事とは云ひ難し。されど其我心と身に德行なくして、神に祈りて福を求め、禍を拂はんとせば、更にその驗有べからず。心に善をたもち、身に善を行ふ事、全く天道にかなふ道なれば、善を行ひ心に德あらば、おのづから天道に叶ひて、祈らずして福有り、拂はずして禍をのがるべし。此道うたがふべからず。

天照大神の婦人なる事、人多く疑ふ。それ中夏は氣偏ならず、其所生の人物皆偏長なし。然其聖賢多きは其地偏ならずして純正なる故なり。日本は東方の偏僻の地なる故、其所生の人物偏長有り。古より婦人に英才の人多し。又歌人才人婦女に多し。又婦女に、勇猛にして戰功すぐれたる人多し。こ

れ文武の才婦人に多さなり。牡丹の花など洛陽中土に宜しからずして、僻地には却てまされり。是土地偏なる故、却て造化の神秀の氣あつまり盛んなれば也。歐陽永叔が所謂有二偏美一者因二於氣之偏一耶といへるが如し。大日女尊の日本に生れさせ給ふも、又此理あるに非ずや。

後漢の明帝の后は、馬皇后といひ、勝れたる賢女なりしが、病中にみこかんなぎと小醫を信ぜず、しばしば勅命して祈禱をなさしめず、然るに明帝の寵愛も敬ひも日々に盛んにして、終身おとろへず、幸あつし、其外嘉言善行多し。後世迄后妃の手本となり、女中の賢人也。神佛に諂ひ、祈禱を好み、金銀を多く費せし人、禍有て身をたもたざる人、昔より多し。道に叶ひて神祇をうやまひ、其善を積重ぬれば、必福ありて禍をまぬがる。

中夏及東夷、南蠻、西戎、北狄の人、各其土地の偏に依て、其風氣民俗同じからず。もろこしは天下の中央に有て、その土地四季にかたよらず。四時備はり、風氣和正して偏ならず。此故に上代氣盛にあつき時、世に聖人生れ給ふ。後代に至り、風氣おとろへ薄くなりて、聖人出給はざるのみならず、大賢も又なし。聖人は人倫の至りなれば、四方偏僻の地には出給はず、東西南北のもろ〳〵の夷狄は、土地偏なる故、其土の人の性もまた正からずして、其生ずる人禽獸に似たる國多し。諸蕃國の人の有樣を聞くに、更に人道有とは見えず。中夏聖人の國だに、末々無學の人長崎に來るを見るに、日本人にはるかにおとりて、禮義なし。朝鮮及外夷の人は、中夏の人より猶人倫の法なし。西域は西に偏なれど、日道南北の中に有て、南北の外夷には少し増れり。故に彼國には佛出生す。され共西域の偏土なれば、風氣正しからず。たとへば西方に夕陽の傾き入つて、やうやくくらくなるが如し。陰氣の國也。其俗は信あれども智くらし。

故に國俗怪異を信じ安し。
日本は東に偏なりといへ共、東方は四方のはじめにして、陽氣の生ずる初、萬物の生ずる本也。故に其生ずる人、陽氣の盛なる氣を受けて、神人多く生れ給ふ。是日本の風土人物の、諸夷にまされる所なれば也。陽氣の始を受る故、其國土の人心温和にして、はげしからず。順正にして、道を以て制御しやすく、故に安し。神代は世すなほに、人あつし。神ありて國を守り給ふゆゑ、下民も見習て教へざれ共道に近し。刑罰なけれ共、とがにおちいる事稀也。民の心すなほなれば、上代より己が身に仁義禮智信の性の五常の名なく、君臣父子夫婦長幼朋友の五倫の教なし。五常五倫の教なきは夷狄の風俗なれど、倫常の教なくして道行はれし事は、諸夷にまされり。東方は陽の始なれば、其陽氣さかんに明かなり。故に民の心に仁有て、人をあはれみ、人を殺す事を好まず。義ありて節を守る故、其志怯からず。武勇有て、中夏諸狄にまさり。禮有て、諸國の人にも、人倫にまじはるに禮法正し。陽氣盛に、其心清き故、尤明らかにして、外夷の人の如く愚昧ならず。信有て、僞りすくなし。人を欺くことを好まず。約したる事を多くは違へず。是五常の性あつき所也。外夷の五常の性うすきにくらぶれば、大にまされり。儒の道も、またしかり。いにしへ忠臣孝子節婦など多くして、朝廷より是を賞し給ふ事、歴史に見えたり。然れば古より道ある國なり。然るに五常五倫の教なきは、人代に至りて孔孟如きの聖賢なければ也。況んや、我國は神道に幸なくして、厩戸皇子はひとへに佛を深く信じ給ひ、守屋大臣の、我が國の神を尊び、神道を立て、異國の神を尊み給はざるをうとみ給ひ、こゝにおいて守屋世にあらば、佛行はるべからずとて、科なき守屋を、みだりに兵を用ひて攻殺し給ふ。

天に神道あり、神道は則天道なり。天道人道二つ有べからず。天地の間道一のみ。神道は誠敬を本とし、清潔正直を宗とし、易簡なる道也。易簡とは知り易く、行ひやすくして、事すくなきを云。孝悌忠臣の理は、いかなる愚人も知り安く、行ひ安し。され共教悪しく學びやうあしければ、心にあしきくせ出來、私を立て正道を害す。或巫覡の流となる。口をし。

凡正しき神明を恐れうやまふべし、馴れ近付きてけがしあなどるべからず。神に諂ひけがして、みだりに福を祈ることなかれ。神は非禮を受給はねば、道なくて福を祈るに、必しるしなし。人倫の道を勤ずして神に求むるは、神の御心にちがひ、利生なくして却てせめあり。是まよへる也。日月神明をかろ〴〵しく思ひ、道なくしてみだりにまつり祈りて、へつらひけがし、福を得んとおもへるは愚なり。斯の如くにして神をけがす人は、利生はなくして、久しく積りぬれば、神罰を蒙りて、はからざる禍多し。此ためし世間にまゝあり。わが私言に非ず。疑ふべからず。又淫祀は福することなしと云へり。淫祀とは、いのるまじきわが身にあづからざる神を祭るを云。是を祭りいのれ共、利生なしと也。人の吉凶禍福は、皆天の命ずる所にして、元より定れる事也。道なくしてみだりに神佛に祈り諂ひて、福を得禍をのがるべき理なし。此理甚明かにして知り安し。よくわきまへ知りて、妖妄を信ずる事なかれ。

菅亟相の歌

心だに誠の道にかなひなば
　祈らずとても神や守らん

又曰、

いつはりのあらば中々さもあらば
　心づくしになに祈るらん

此二首の歌、道理至極なり。たがふべからず。又

婦人女子は、愚にして邪妄を信ずるものなれども、能此理を常に敎へさとすべし。身に行ひて、妻子に行はしめざれば、家を正しくするにあらず。

天に事ふるには敬を以てし、民を憐るには仁を以てし、鬼神を祭るには誠を以てす。是伊尹の言也。誠は神の心なり。故に神に事ふるには、誠の心を以て祭れば、神是を受給ふ。此三道は人の行ふべき要道也。凡神廟に馴近付て、みだりに社内に入るべからず。神社に對しては恐れ敬ひて、たとへば嚴君に對するが如くなるべし。おろそかに思ひ、馴馴しく近づきて、あなどるべからず。孔子も鬼神を敬ひて、これに遠ざかるとのたまへり。遠ざかるとは、是をおろそかにするに非ずして、おそれて近付べからずと也。又輕々しくみだりに神を祈りまつりをすべからず。鬼神を侮りけがすのみぞ、不敬の至也。但し祭るべき神は、祭らずんば有べからず。祭るべからざる神を祭るは、諂ひなり。神は明に正直にして、私なし。故に古語に、神は非禮を受ずと云へり。祭るべからざる神を、へつらひ祭りたりとて、其諂へる人に私して、福有べからず。納受なき道理決然たり。

わが國は神國なりと昔より稱す。誠に神靈の多くあれませる國なり。尊ぶべき神あり。第一には天地の陰陽、鬼神、造化、日月、山川の神、是天地神祇なり。第二に、我國の宗廟の神、社稷の神、第三にわが先祖の神、此二は人鬼なり。以上の三神は祭るべき正神にて、仕へ奉るはむべ也。誠を盡すべし。但天神地祇宗廟の神も、位によりて祭る也。わが祭るまじき神、或は異國の神に諂ひつかへて現世の福を求め、或死して後の冥福を求めても、天道に背き、善をなさず、惡をやめずんば、福を得べき道理なし。凡天下の人となるもの、皆天地の性を受て生る。其恩極りなし。故に人たる者は一生の間、萬事皆天道を本とし、隨て背くべか

らず。然るに天道にしたがはずして、みこかんなぎに欺きたぶらかされて、其鬼にあらざる、我所まじき神佛に諂り、わがまつるまじき神佛を祭るは、天道に背きて、他方に志をかよはすなり。いかんとなれば、天道はまことを道とし給ふ、人も又誠の心を以て天につかへ奉るべし。善をなせば天より福を下し、不善をなせば、天より禍を下し給ふは、必然の理、古今和漢おなじ道にて、是天道の誠也。古今天下の内、その誠の約束違はず、然に善をなすに誠を盡さずして、天道をすてゝ、わが先祖にあらず、わが國の宗廟に非ず、只神佛に諂ひて、きたなく賤しきわざをなして、利生を求めても、天道に背きては福なく、禍をまぬかれがたき事、いにしへ今其ためし多し。然れども愚なる人は、善をなし惡をさるつとめはなくして、つかへまじきに諂ひ、ひけふなるわざをするは、主君に背きて、よその國に内通するが如し。天道は公にひろくして至りて仁なれば、かゝるひけふなるひが事をなして、天道にそむけども、大なる惡事をだにせざれば、ゆるし給ふ事多く、即時に罸を行ひて、せめ咎め玉はず。然れどもあしき事多くつもりぬれば、後はかならず自らわざはひの來る事、世にためし多し。又善をなしても、即時に福來るにはあらず。され共善積りぬれば、天心にかなひて、必後の福有り。惡をしても、即時に災あるはまれなり。され共惡つもりぬれば、天のせめのがれ難し。かゝるためし又多し。縱ば稻は五穀の長にて、人を養ふ佳穀也。春より種を蒔、夏苗をうゑ。草ぎり、秋は九月にやうやくみのる。三時を經ざればみのらず。麥は舊穀の既につき、新穀のいまだみのらずともしき時熟して、民の飢を助く。稻につぎて良穀也。秋植て冬春こやし、草切りて長し、夏に至りて熟す。是秋冬春夏の四時を經て、やうやくみのる。善を行ひて、即時に福あるに

は非ず。つとめ行ひて久しくして後必福あり。天道の報ひは、善悪共におそくしつされ共むくひは必有り。恐るべし。悪事を行ひて天の責に逢ひし事、からやまと古今其ためし多き事、あげてかぞへがたし。天道恐るべし。疑ふべからず。愚人は即時にさいはひなきを以て、益なしとて善を行はず。即時に罪なきを以て、悪をしてやまず。善をなしても、福早く来らざれば益なしとて、善をおこなはず。天道にしたがはず恐れずして、みだりに邪なる事を信じて、善を行はず悪をすてず、只手だて願ひを以て福をもとめ、身を立てんとす。是古今のまよへる愚民のしわざ也。只陰徳を行ひ、常に善をなして、人を恵み憐む心深くして、怠りなく久しきを積めば、求めざれ共さいはひおのづから来る事、道なくて祈り諂ふに其しるし百倍せり。愚人は是をしらず、益なき事をのみなせるは、古今のあしき習ひ、おろかなるまよひなり。世に古今かゝる事をなして、益なきためし多きを見て、少しは悟るべし。古の聖人、神につかふる道を示して、夙夜に慎みて直なるかな。是清かれとのたまふ。是神につかふる敎なり。神につかふるに晝夜常に慎み、其心を正直にして、又清淨にして邪なく、けがれ有べからず。斯の如くなれは神明の御心に靈通し、神と人との隔てなければ、感應有て福を下し給へり。此故に神明の感應は、人に依て行はる。善をなせば百の祥を下し、不善をなせば百の禍を下したまふ。是神は人の善悪の行に依て、福をなし禍をなし給へり。天地をうごかし鬼神を感せしむるも、慎て誠行によれり。民安く國ゆたかなるも、人事のよくをさまれる故に、天地神明のさいはひを下し給へるなり。人事豈慎まざるべけんや。いにしへもろこしの天子の日を拜し玉ふに、禁中は人間のすみかなれば、けがらはしとて、東の野に壇を築きて拜し、月をば西の野に壇を築

きて拜し給ふ。日本にても、嵯峨天皇の御時、意味丸に命じて、東山如意が嶽の上に、あらたに壇を築きて日を拜し給ふ。天子もわが家にて祭り給ふはけがらはしく、天をあなどりて、天につかへ給ふ道に非ずといへり。帝闕はいたりて淸らかなれど、人のすみかはけがらはしとて、禁裏にて日月を祭り拜し給はず。況や賤き者のけがれ多き家にて、日月を祭りて拜する事、天をあなどりけがす罪かろからず。極て恐るべき事なり。天道のひろく公なれば、俄に天罰を行ひ給はず。然れ共久敷天を侮る罪積りては、天の責おのづから來る。われ世の人の久しく日月をまちて祭り拜するを見るに、其身其家必後に樣々の災多く、我身も子孫も、不意に大なる災變有て早く死して、其家亡びたるも數人有しを、彼これたび／＼見たり。少しのさいはひもなくして、大なる禍有。是天をあなどる罪久しく重なる故にや。天道恐るべし。か樣の事、年のつもりに、まのあたり度々見て知ながら、人に告ざるも、天地神明と心の神を欺く罪深く、恐べし。今迄人のなし來れる事をかくいふは、人の心にたがひて、そしる人も有ぬべけれど、是は天道に背き奉る事の重き所なれば、もだしがたくして告ぐるのみ。

人間のいのちの長き短き、位の高きひくき、財祿の富めると貧しきと、凡福と禍とは、皆是天命の定まる所、天道のちから也。わが身の行ひ惡しく、無道にして天道に背きなば、いかに百萬神佛に祈りねがふ共、しるし有べからず。罪を天に得れば、祈るに所なし。是を以て、道なくして、みだりに祈るはその益なき事を知べし。然れども、我心天道にかなひ、禮義に隨ひて、祭るべき正神を祭り、祈るべき正神をうやまひいのるは、道のある所也。

南無と云事、宋葉縣云、南無とは、南方より拜すと

云意、うやまふ義也。無の字は、本漢の字也。天竺の人拝す禮と云を、あやまつて無と云。天竺の人、佛を拝することば也。今も長崎へ來る唐僧は、南無をなもと云。佛菩薩の名號に、南無をかぶるは、天竺の詞なれば、さも有べし。我國の神號の上に南無を加へ、南無天照皇大神、南無八幡などいへるは、名にしおはざる事なれば、笑ふべし。南無の字の心を、いかなる事共しらざればにや。

左傳曰、民神之主也。是以聖王先成民。而後致力於神。

いにしへ、巫祝の官を立て、神につかへしめ、專ら神事をつかさどらしむ。巫祝とは、神祇につかふるばかりなり。いやしむべきには非ず。此官は、常に神に仕へて、祭りを勤め、國家と民人の幸を祈り、災を禳ふ官職と定め、專ら誠敬をつとめて心を淸淨にし、一筋に神にまじはる故、其心に叶り神人事、神明の心に通じやすくして、神の納受も、凡人に異也。故に神のたすけさいはひし給ふもしるしある理なり。日本にも、朝廷に、昔より神祇の官をたてさせ給ひ、今に至りて斯の如し。此事もろこしに、周禮などに記せる事明白なり。中夏にても古遠くなりゆけば、秦漢の比より此事絶えたり。其官職に、常に專一なれば、その心も又專一にして、其業精し。こゝを以て神明の御心に通じ安し。是古の帝王の深き御心なるべし。もろこしにも、後世には正理をうしなひて、不正のまつり祈り多し。只怪誕の怪しく僞りのみいひて人をまよはす。神明の御心にかなはざるべし。

橘の小戸の祓をはじめにて
　今も淸むる我身なりけり　　金邦

易の觀卦の彖に曰、觀天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教。而天下服矣。天之神道とは、則天道を宣へり。天道は至りて神妙なり、此故に天道を神道と

す。天の道神妙にして、春夏秋冬の四時行はれて、萬物生じて養はる。此道古今年々たがはず。道の誠也。聖人天の神道に隨ひて身に行ひ、これを以て天下に敎を立て給ふ。聖人の敎は、則神道也。其至れる敎を受る天下の人、信にして服せずといふ事なきは、天道の誠を示し給ふ事、其理至極せるゆゑなり。

身をかへりみ、惡をやめ、天をおそれ、善をなさば、神佛に祈らずといへども、禍をのがれ、福を得る理あり。凡國土には、鎭守となれる山あり。是を鎭山といふ。神靈有て、其國を鎭め守り給へり。山城近江に、愛宕比叡伊吹あり。武藏の秩父山、甲斐の白峯、信濃の淺間嶽、加賀の白山、越中の立山、伯耆の大山、日向の霧島、肥後の阿蘇、豐前の彥山、豐後の油布山の類の如し。かゝる大山には、必神靈有て、自餘に異なれり。然ば國の福を祈り禍を拂ひ、年の豐を願ひ、凶を除き、或は旱に雨を乞、淫雨に晴を祈るも、皆鎭山に於て行ふべし。其精誠をいたさば、必應驗あらん事、疑ふべからず。

祓の字は、字彙に敷勿切、音拂、除惡祭なり。廣韻除災求福也。潔也除也。

松下見林云、かしはでは、開手の意、手をひらいて是をうつ、其平らなる事、柏の葉の如し。

豐後風土記に曰、速見郡柚富鄕在西郡此郡の中、楮樹多生、常取以木綿、因曰柚富鄕。

或問、諸社の由來を書たるを緣起と云ふ如何。答て曰く、社記と云べし。緣起の字は、佛家より出でたり。法華經方便品に云、佛　從緣楞伽經に云。佛說緣起　と有を考へしるべし。神書及脫簡を取集め、國史實錄を閱し、經傳をうかゞひ、元より神人合一なれば、その理ひとしきをば文義を取て、神書の闕たるを補ふ有り。是神道を儒道にまじふるには非ず、儒敎を以て神道の羽翼となす也。舍人親王の日本紀を記されし時、淮南子の文、神代卷

し。

或問、土民等邑毎に天神とて祭る祠多し。みな菅丞相か。答て曰、天満宮をあまねく民間に祭るべき義なし。おもふに、天神は田神なるべし。天田音同じき故にあやまれるか。是社稷の神なるべし。風俗通に、社は土地の主なり。土地廣くして、普く敬ひ難き故、土を封じ社とし、祭りて功を報ずる也。(以下缺)

神訓祇終

女大學

一 夫、女子は成長して他人の家へ行、舅姑に仕ふるものなれば、男子よりも親の教ゆるかせにすべからず。父母寵愛して恣に育てぬれば、夫の家に行て必氣隨にて夫に疎まれ、又は舅の誨正しければ堪難思ひ、舅を恨誹り中惡くなりて、終には追出され恥を曝す。女子の父母、我訓なき事を謂ずして、舅夫の惡きとのみ思ふは誤なり。是皆女子の親のをしへなき故なり。

一 女は容よりも心の勝れるを善とすべし。心緒無レ美女は心騷しく、眼恐しく見出して人を怒り、言葉あらゝかに、物いひさがなく口きゝて、人に先立人を恨嫉み、我身に誇り人を謗笑ひ、われ人に勝りがほなるは、みな女の道に違へるなり。女は唯和ぎ順ひて貞信に、情深く靜なるを淑とす。

一 女子は稚時より男女の別を正しくして、假初にも戲たることを見きかしむべからず。古の禮に男女は席を同じくせず、衣裳をも同じ處に置かず、おなじ處にて浴せず、物を請取わたすことも手より手へ直にせず、夜行ときは必燭を燈て行べし。他人はいふに及ばず、夫婦兄弟にても別を正くすべしとなり。今時の民家は此樣の法を知らずして行規を亂にして名を穢し、親兄弟に恥辱をあたへ、一生身を空にするものあり。口惜き事にあらずや。女は父母の命と媒妁とに非ざれば交らず親ずと、小學にも見えたり。假令命を失ふとも、心を金石のごとく堅くして義を守るべし。

一 婦人は夫の家をわが家とする故に、唐土には嫁を歸るといふ。我家にかへるといふ事なり。假令夫の家貧賤なりとも、夫を怨むべからず。天より我にあたへ給へる家の貧は、我仕合の凶故な

りとおもひ、一度嫁しては其家を出でざるを女の道とすること、古聖人の訓なり。若女の道にそむき、去るゝ時は一生の耻なり。されば婦人に七去とて惡しきこと七つあり。一には、しうとしうとめにあり。舅姑に順はざる女は去るべし。二には、子なき女は去るべし。是妻を娶は子孫相續の爲なれば也。然れ共婦人の心正しく、行儀よくして妬むこゝろなくば、さらずとも同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば、妻に子なく共、去に及ばず。三には、淫亂なればさる。四には、悋氣ふかければさる。五に、癩病などの惡しき疾有ばさる。六に多言にて愼なく、物いひ過すは親類とも中惡しくなり、家みだるゝものなればさるべし。七には、物を盜む心あるはさる。此七去は皆聖人の教なり。女は一度嫁して其家を出されては、假令ふたたび富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひて大なる辱なり。

一女子は我家にありては、わが父母に專孝を行ふ理なり。されども夫の家に行きては、專舅姑をわが親よりも重んじて、厚く愛しみ敬ひ孝行を盡すべし。親の方を重んじ、舅の方を輕んずることなかれ。舅姑の方の朝夕の見まひを闕べからず。舅姑の方の勤むべき業を怠るべからず。若舅姑の命あらば愼み行ひて背くべからず。萬のこと舅姑に問て其教に任すべし。舅姑もし我を憎み誹り給ふとも、怒り恨ることなかれ。孝を盡して誠をもつてつかふれば、後はかならず中好なるもの也。

一婦人は別に主君なし。夫を主人と思ひ敬ひ愼みて事べし。輕しめ侮るべからず。總じて婦人の道は人に從ふにあり。夫に對するに顏色言葉づかひ慇懃に謙り和順なるべし。不忍にして不順なるべからず。奢て無禮なるべからず。これ女子第一の勤なり。夫の教訓あらば其仰を背くべからず。疑はしきことは夫に問うて、その下知に從ふべし。夫

問こと有らば正しく答ふべし。其返答疎なるは無禮なり。夫若腹立怒るときは恐れて順ふべし。怒り諍ひてその心に逆ふべからず。女は夫をもつて天とす。返す〴〵も夫に逆らひて天の罰を受くべからず。

一兄公女公は夫の兄弟なれば敬ふべし。夫の親類に謗られ憎まるれば、舅姑の心に背戻て我身の爲には宜しからず。睦じくすれば舅姑の心にも協ふ。又嫂を親しみ睦敷すべし。殊更夫の兄、嫂は厚くうやまふべし。我兄姉と同じくすべし。

一嫉妬の心努々發すべからず。男淫亂ならば諫むべし。怒り怨むべからず。妬み甚しければ、其氣色言葉も恐敷冷じくして、却て夫に疎まれ、見限らるゝものなり。若夫不義過有らば、わが色を和らげ聲を雅にして諫むべし。諫を聽ずして怒らば先暫く止て、後に夫の心和ぎたる時復諫むべし。必氣色を暴くし、こゑをいらゝげて、夫に逆ひ叛くことなかれ。

一言語を愼みて多くすべからず。假にも人を誹り、僞を云べからず。人の誹を聞くことあらば、心に收めて人に傳へ語るべからず。そしりを云つたふるより、親類共間惡くなり、家の內をさまらず。

一女は常に心遣して、其身を堅く謹み護るべし。朝は早く起、夜は遲く寢、晝はいねずして、いへの內の事に心を用ひ、織縫績紡怠るべからず。又茶酒など、多く呑むべからず。歌舞伎、小歌、淨るりなどの淫れたる事を見聽くべからず。宮寺など、都て、人のおほくあつまる處へ、四十歳より內は、餘り行べからず。

一巫覡などのことに迷ひて、神佛を汚し近付、猥に祈るべからず。只人間の勤をよくする時は、禱らずとても神佛は守給ふべし。

一人の妻と成ては、その家をよく保つべし。妻の行ひ惡しく放埒なれば家を破る。萬事儉にして、費

を作べからず。衣服飲食なども、身の分限にしたがひ用ひて、奢ることなかれ。

一若き時は、夫の親類、友達、下部等の若き男には打解たる物語、近付べからず。男女の隔を固くすべし。如何なる用有とも、若き男に文など通はすべからず。

一身の飾も、衣裳の染いろ模様なども、目にたゝぬやうにすべし。身と衣服との穢ずして潔なるはよし。勝て清を盡し、人の目に立ほどなるは悪し。只わが身に應じたるを用ふべし。

一我郷の親の方に私し、夫の方の親類を次にすべからず。正月節句なども、先づ夫の方を勤て、次に我親の方をつとむべし。夫の許さゞるには何方へも行べからず。私に人におくりものすべからず。

一女は我親の家をば繼がず、舅姑の跡を繼ぐゆゑに、我親よりも舅姑を大切に思ひ孝行を爲べし。嫁して後は、わが親の家に行く事も稀なるべし。況て他の家へは、大形は使を遣して音問をなすべし。又我親郷のよきことを誇りて讃かたるべからず。

一下部數多めしつかふとも、萬の事自ら辛勞を忍て勤ること女の作法なり。舅姑の爲に衣を縫ひ、食を調へ、夫に仕へて、衣を疊み、席を掃き、子を育て、汚を洗ひ、常に家の内に居て猥に外に出づべからず。

一下女をつかふに心を用ふべし。云甲斐なき下﨟は習はし悪しくて智恵なく、心奸敷物いふこと祥なし。夫のこと舅姑小姑の事など我心に合はぬ事あれば、猥に譏り聞かせて、それを却て君の爲と思へり。婦人若し智恵なくしてこれを信じては、必恨み出來易し。元來夫の家はみな他人なれば、恨み背き恩愛を捨つる事易し。構へて下女の詞を信じて、大切なる舅姑小姑の親み薄くすべからず。若し下女勝れて多言くて、悪しき者ならば、早く追出すべし。かやうの者は、必ず親類の中をも云さまた

げ、家を亂す基となるもの也。恐るべし。又卑き者を使ふに我氣に合はざること多し。それを怒り罵りて止まざれば、約々敷腹立こと多くして、家の內靜ならず。惡しき事あらば、折々云敎へて、誤を直すべし。少の過は忍へて怒るべからず。心の內にはあはれみて、外には行規を固訓て、怠らぬ樣につかふべし。與へ惠むべき事あらば、財を惜むべからず。但我氣に入たるとて、用にも立たぬ者に猥に與ふべからず。

一凡婦人の心樣の惡しき病は、和らぎ順はざると、怒り恨むると、人を謗ると、物妬むと、智惠淺きとなり。此五疾は、十人に七八は必あり。是婦人の男に及ばざる所なり。自顧戒めて改め去べし。中にも智惠の淺き故に、五の疾も發る。女は陰性なり。陰は夜にて暗し。所以に女は男に比ぶるに、愚にて目前なる可然ことをも知らず。又人の誹るべきことをも辨へず。わが夫、我が子の災と成べき事をも知らず。科もなき人を怨み、怒りのろひ、或は人を妬み憎みて、わが身獨立んと思へど、人に憎まれ疎まれて、みな我身の仇となることを知らず、最はかなく淺猿し。子を育つれ共、愛に溺れて習はせ惡し。斯愚なる故に、何事も我身を謙りて、夫に從ふべし。古の法に女子を產めば、三日床の下に臥せしむるといへり。是も男は天に假、女は地に象るゆゑに、萬のことにつきても、夫を先立、我身を後にし、我なせる事に能こととありとても、誇心なく、亦惡しきことありて人に云はるゝ迚も、諍はずして、はやくあやまちをあらため、重ねて人に謂れざるやうに我身を敬、又人に侮られても、はらだち憤ることなく、能堪へて物を恐れ愼むべし。如レ斯心得なば、夫婦の中おのづから和らぎ、行すゑながく連れそひて、家のうち穩なるべし。

右の條々稚き時よりよく訓ふべし。又書付けて折

折讀ましめ、忘るゝことなからしめよ。今代の人、女子に衣服道具などおほく與へて、婚姻せしむるよりも、此條々を能くをしふること、一生身を保つ寶なるべし。

古語に、人よく百萬錢を出して、女子を嫁せしむることを知つて、十萬錢を出して、子をしふることを知らずといへり。誠なるかな、女子の親たる人、此理を知らずんばあるべからず。

益軒先生與宰臣書

延寶七年八月六日立花勘左

衞門へ贈書

乍恐申上候。如私の者かやうの儀申上候事、位をこえ、分に過たる莫大の罪、多憚儀にては御座候得共、殿樣の御厚恩、次に各樣御恩深く蒙り申たる拙者にて御座候。殊御影を以、古の書をも考、道理の萬一をもうかゞひ申候に、只今諸人の沙汰を承りて、わだかまり居申候半は、上を欺候て、不忠の至りと奉存候故、承候處の是非をば不存候得共、承たるまゝ申上候。勿論此内理に不當事のみ多可有御座候。夫は御捨可被成候。若一事にても道理に當りたる儀も御座候はゞ、御心得とも成可申事かと奉存候間申上候。是世上の沙汰にて、愚意の存寄にては無御座候。但其内に所々愚說を加へ申候處は、是又私の愚見にては無御座、皆古人の說にて御座候。但是程の儀は定て各樣御僉議の上にて、早く御思召寄たる事にて可有御座候得共、古人の芹を献じたる意にて、愚衷を述申迄に御座候。

一殿樣御仁心深く、諸事御眞實にて、御堪忍つよく、御德義厚く被成御座候事、當代於日本に而第一の賢君にて可有御座由、少々事の道理をも辨たる者は申候。次に各樣道理はよく御通じ被成候故、上の御心を御請遊、萬御仕置に被入御念、諸士下々萬民に至迄、迷惑不仕樣にとの御政道不淺儀奉存候。就夫御國の樣成心安儀は、他所には有御座間敷候。其子細は小罪をば御免被成候故、大罪をこへ不仕候得ば、何の氣遣も無御座、大なる過をも品により候ては御免被成候。少々は道理の難立私成由を申上候ても、各樣御執成を以、願の如くに被仰付。其上困窮の者には、拜借被仰付、火災に逢候得ば、大分の財を被下、病人をば深く御いたはり

被成、數年御奉公不勤者にも、祿を其儘被下置候。又不才にて御用に不立者にも、父の祿を被下候。凡不仁の御政無御座故、親にかゝりたる様御座候。恐らくは堯舜の仁政にても、是上にはあまりかはりては難成可御座ある間敷候。然ども近年御國中の諸士、大身、小身、百姓、町人に至迄、御國政を何癖と評議仕者多御座候。殊他國にて猶以右の通に御座候由申候。何程に御恵を厚く被成候ても、夫程に忝不奉存と相聞申候。是は至って愚の心にて、殿様次各様の御心の十が一も不存者の申事にて可有御座候。總て父母の恩の深き事をば子は不存候て、不孝なる子は却て親を恨み申候如く、君恩の重を愚成者は不存候て、却て誹申事、凡夫の常にて御座候故。愚人之誹は憂に不成事にては御座候。然れ共諸人の申事には、公なる論も御座候て、理に當り申事も可有御座候間、末々の沙汰をも御聞被成、御自身の上を御顧、みづから御うたがひ被成、善惡を御吟味被成候はゞ、是又御政道の御工夫の一端にて可有御座候。末々の申上候事悉御請被成候ても、我意に御任被成ても、御高満の様に可有御座候。古堯舜禹湯の聖王さへ、猶御身の上に過も可有之かと被思召、進善の旗、誹謗の木、諫の鼓なと申候て、廣く諸人の誹をも御取あげ、賤き者の諫も御用被成候事、慥成記錄に見申候。當御代江戸の御老中様、所々の宮寺、辻堂などの樂書、落書、諸人の誹をも御聞たがり被成候も、定てかやうのためしを御存被成候ての御事にても可有御座候。古の聖人さへ猶如此御座候。然ば各様いかに御賢才御座候て、御心にはたとひ無私とも、かたおちたる御過も必可有御座とは思召、御自身を御うたがひ、御自分の御智慧を御立不被成、諸人之申所を御取上、惡を捨てゝ、善を御用被成候様に可有御座候事之様に乍憚奉存候。古語にも、聖人にあらず誰か過なからん、只過て好改む莫大

焉と御座候得ば、賢人位にては猶過りて多物と見申候。然るに我身を善なりとしてうたがはず、過なきとのみ心得、下の說をも不用候人は、如何に聰明才力人に勝れ候ても、古よりよき例には引不申候。總て少々道理をも議論仕候者、各樣御才智御勝被成たる所が、却て大なる御病の樣に申候。譬ば器に一ぱい物入候て、又他の物入不申候如く、人にも才力御座候て、夫を賴み一ぱいにまし候得ば、人も存寄を不申聞候とも他の善言入兼申候。孔子の語にも、聰明睿智なるも、是を聞には愚を以てすと御座候。心を虛にして人の申所を能聞受、其上にて善惡をば我心の中にてえらび、善を用ひ惡を捨るが大智と見申候。賢者といへども、我一人の智は際有ものにて御座候故、廣く諸人の申處を聞て、其智を取用、一つに合候が大智とか申候。又古語に、寒をふせぐには裘を重るにしくはなし、誹をやむるには、自ら修るにしくはなしと御座候。然ば誹をやめ申道は、申者の口をとぢ候てもやみ不申候。又誹り不申樣にとて、外の見分を繕候ては、勿論財と力を費したる迄にて、却て誹はまし申候。只身分を能修め、過なき樣にさへ仕候得ば、おのづから誹はやみ申由に御座候。其上にて猶も誹申候はゞ、苦にも成申間敷候。古書にも、民の口をふせぐ事は、水をふせぐよりも甚し。水ふさがつて潰れば、人をそこなふ事必多し。此故に水を治る者は是をひらいて導き、民を治る者は是をのべて云はしむと御座候。臣之惡は君を誹るより深きはなしと、古人も申候得ば、勿論下たる者は、毛頭も上を誹申は大不義にて可有御座候。然れ共上より下の誹をおさへずして、却て取上候得ば、自ら修る助にも成、下の誹はやめずしてやみ申由に御座候。

一只今御國用大分不足仕候に付、御簡略の御僉議御座候由、末々にて沙汰仕候。先以御國用の不足は、甚御國の大なる御幸と奉存候。其子細は御財用不

是化其事は、別の儀にて道有御座間敷候。江戸の御公儀を能御尊敬被為成候か、或は御國の諸士を能恵み被成、萬民を能御救被成候か、又は百姓の年貢をかろく御取被成候か、諸人の願の如く、財を御施し被成候か、かやうの仁政にて御財用不足仕たるにて可有御座候。其善事は畢竟御爲によき御政にて御座候得ば、一段目出度御事と奉存候。其上天道は滿るをかくと、易にも見申候。滿ては必かけ申道理と見え申候。末々の賤しき者さへ、米銀に事かき不申者は子孫無御座て、何ぞ大なる禍御座候。況大國を御保ち被成候御富貴は、御幸の大に滿たる御事にて御座候故、必かけ申御氣遣も可有御座候。御財用の不足は即其かけ申たる所にて、他事の御わざはひ出來申間敷候間、御吉事にて可有御座候。但是によつて若し諸士、百姓、町人を御むさぼり被成、彼に不足を御足し可被成候樣にては「此上の御禍與可奉存候。古より君の爲とて民の財をかすめとり、下を苦め申たる聚斂の臣は、悉滅亡仕たる事備に記録に多く見え申候。若幸にて其身亡不申候得ば、必子孫にて亡申候。稀に子孫亡不申も御座候得共、有か無かの仕合にて御座候。是必然の事にて御座候。御國の昔の御家老衆も、其子孫三代迄つゞき申たるは稀に御座候。戰國の風にて百姓をかすめ取、人民を多く苦め、諸人の迷惑仕樣なる不仁の行跡多御座候故、子孫長久不仕にて可有御座候。總て人は皆天の子にて御座候故、天の子をそこなひ申候得ば、天道の御にくみ御座候。又天の子をあはれみ申候得ば、必天道の御惠み御座候。皆是必然の道理にて、天道の善に福し、惡に禍し給ふ道理甚明にして、恐るべき御事に御座候。如何に當分其主君の爲とても、我子孫の亡び申程の不仁を行ひ申候ては、必其主君の爲にも以後の禍に成可申候。當國の昔の御家老衆、右の如く前車の覆を御覽被成候て、只今御

財用不足に付て、民の苦み恨み不申樣の御心得、必可有御座事かと乍憚奉存候。此所末々にて沙汰仕候は、只今御財用不足に付、御家中諸士知行の內より、上り米御取可成哉と御僉議御座候由に御座候。御財用不足にては、以後御つゞき不被成候事にて御座候得は、諸士の祿の內たとひ半分三歩二被召上候とても、猶御無理とは不奉存候。上り米被召上候て、士は人馬をへらし、今迄の奢をやめ、儉約を專に可仕候間、却て銘々勝手に成申事可有御座候。かやうの難儀成事に逢候ては、せめて華美をやめ、風俗改り申事可有御座候間、諸の爲には不苦儀にて可有御座候。然れ共若し上り米御取被成候て、後の御遠慮可有御座事にて御座候。其故は忠之公御代にも、上り米被召上候。又他所にても上り米御取被成候處多御座候。夫は諸士の勝手、只今の御家中困窮程に無御座候故、數年被召上候ても、指て痛不申、下人を多くは放し不申候故、下々にも浪人多無御座候。浪人仕候ても下々渡世仕やすき時節にて、飢に及不申候間、只今は其時にかはり、御家中貧窮故上り米被召上候て、諸士より暇を出し申下人凡數千人も可有御座候。只今さへ困窮故下人を減少仕候に付、下々の浪人多御座候に、上り米被召上、數千人の浪人加り候て、大勢の者他國へ出事は、路錢をもつゝみをも持不申候間難成、御國中に集り居申候ては渡世難成、必定飢に及び迷惑の餘に火付盜賊、其外如何の惡事を仕出し、亂暴にも及可申哉、其禍難斗奉存候間、かやうの者難儀不仕候樣、兼ての御詮議可有御座事にて御座候。誠に諸士人馬を多く放しては、不慮に長崎等へ異國船參り候て、被向御人數候樣成時は、各難儀可仕候。しかし御財用不足仕候て、兎角不被召上候ては、不被爲成儀に御座候。幸先年より平均に被仰付置候て、諸士知行本高の外に上り申候新高を悉く被召上候て、無高下にて□□成儀にて可有御座

候。左樣御座候ては、他國のならはしの如くに三ツにても三ツ五歩にても、平等に無高下拜領被仰付、其上の物成を皆々被召上候て、此二ツの内何れにても御取被成候はゞ、五歩の上り米被召上候よりは、上り中分量も多く、其上上り米御免被成候と申、御名も立不申、諸士の知行物成拜領仕、處も、甲乙有御座間敷候。若知行よき者も悪敷者も同樣に、五歩にても六歩にても被召上候はゞ、知行悪敷もの彌逼迫可仕候。上り米被召上候はんより、わはゞ一樣にも被仰付候へかしと沙汰仕候。又御財用不足仕候に付て、四民の内、士は常の祿を被下置、身命をつゞけ申事に御座候得ば、上り米被召上候事、當前の御事にて、不苦事に奉存候。常に御扶持をも召上不仕、百姓町人等より運上を御取、免を御上ヶ被成候樣の儀は、甚以無謂儀にて、世間のとなへも不可然、第一萬民困窮仕候て、御爲にも不宜候此上有御座間敷、今程町中は運上可被召上かと氣遣騷動仕、商賣に精出し仕者も處々に御座候由、是は頃日の說にて御座候。

一此頃俄に御欠略きびしく成申候に付、世上にて申には、か樣に御國用不足の事、如何に一國の大歲御事にて御座候とも、委細こそ知れ不申とても、大體は如斯可有御座事、數年前より見可申事にて御座候。早く知れ申候はゞ、前廣く御儉約に成候て、俄に如此御行當被成たる樣に御難儀には有御座間敷に、各樣は御財用を御つかさどり被成候事にて御座候得ば、此事始末を御存不被成も御尤に御座候。左樣の事をつかさどる人々、早く其覺悟無御座候事殘念奉存候。定て何ぞ故こそ可有御座候得共、未々よりは合點不參事と申候。又惣て當御代に成申候て以來、財を御つかひ被成候事、忠之公御代にくらべ候得ば、事に寄て五倍も十倍も多く可有御座候。其内江戸の御公義は、御ふせぎ難被成との事にて可有御座候。夫も御はぶき被成も不苦事可

有御座候。其餘は皆御心ましなる御事にて御座候得共。此様次各様御結構にて財を御惜不被成候て、下より申來次第に多く御道用御施與へ被成候。御借なとはへ被成候御事は、御施與へ被成よりは少々御座候故、御國用不足仕るにて可有御座候。是は善事にて、右の如くに御座候得ば、譬ひ御過に仕候ても、君子の過と申物にて可有御座候。然共財用の節を制し、入る事をはかりて出す事をするが、尤用財の當前の道にて可有御座候。御財寶御用被成候内にて、委細に御吟味被遊候て、御つかひ不被成候ても不苦儀多く可有御座候。又被下間敷事にも、御結構にて、多被下こと時々御座候。此類の事委細御吟味被成候て、御堪忍不被成候ては、御財用不足可仕候。小なる儀には諸人の目に立申事をも御簡略被成、つまらしき様に諸人奉存候。大成御费には差立、御用にも不立事に大分の御銀子を御用ひ、御費を御いとひ不被成儀多

御座候。去年御二ノ丸島の入候處出來仕候にさへ、御銀子八貫目入申候。此一事を以萬を推量仕候へと申候。又役人銘々我かゝり者の贔負仕候て、御費をも不顧拜領被仰付候て、難叶道理の様に申成候趣、各様御結構にて、何も願ひ通御惠被成候。勿論其内道理に當る事多可有御座候得共、餘り結構過候てかたおち申程に御座候ては、又一方には役人についでをも持不申、殊手立なき者は御惠を受不申候て、恨申者も可有御座候。又被下候者も、役人の申儀によつて被下たると存候得ば、差てみ心も不奉存と聞申候。又百姓町人にも役人に能つでを持申たる者、能取入頼申候得は、役人の取成を以て、無故に大分の米銀を御借被成、或難叶訴訟も、孫明難遁罪科ものがれ候事も御座候。役人につでを持不申、手立を不仕ものは、左様の幸を得不申、困窮仕候ても不預御恩澤由申候。孟子にも、可ニ以與ハ可ニ以無レ與、與傷レ惠。と御座候。此意は人に物

を與は勿論善事にて御座候得共、與へ間敷者に妄に與へ候得ば、可ㇾ與者にわたへ申財不足仕候故、後は與ふべき者にも與へる事不成候て、惠をかき申候故與ふれば惠をやぶり候。

一此比沙汰仕候は、札遣の儀最寄御吟味被成候得ば、不可然由申上候衆多く御座候て、やみ申候由承候。札遣の害に成申儀は、買申者百分一の利足を出し申ばかりにて御座候。是は僅か事にて御座候。又似せ札可仕かとの氣遣の儀承候。惣て札と申事は昔より所々行れ候て、只今世間二十五ヶ所行れ候由承候。自信長公御代以來于今行すたり不申所も御座候。是を考申候得ばよき事は究申候。惡敷儀に御座候て者永行れ不申、札遣と申名も有御座間敷候得共、昔より所々行れ、于今すたり不申が能と申證據にて御座候。又札遣に成候て、若長崎尊へ、此度御人數被向候時、俄に札を銀に易へさせ候事難成、第一軍用の妨に成申哉、又財貨富申たる

町人共に、銀を悉し札に替置候得ば、紙同前の物に銀を仕置候事迷惑に可存の由。又後は御國の金銀他國へ多出可申由、又越前長門など札遣故難儀仕候。兎角札遣邪法の樣に申人も有御座候由、夫は皆札遣の儀、曾て不案内の人合點不參候て、左樣に存る人御座候共、一旦は尤にて御座候。札遣と申物は聊左樣の事にては無御座、國中の士民毎日の遣用、肴、野菜、紙、たばこ、萬當町にて買申日々の遣用に仕程札を買置遣申候。大分一度に銀を出し札を買候て、銀を無用の紙札に仕、ひつの底にたくはへ置、手前に銀を殘し不申と申事にては無御座候。一度に札を多く下へ出し不申事、札遣の一ツの秘事にて、唐の書にも見え申候。如右少宛銀を當時々々に出し買申候得ば、廣き事故に積り候ては、大分公義銀上り申候。殊に他國の者迄も入込居申、札を買申に付、大分の銀子上り候得ば、十年にても廿年にても札遣の間は、利なしに大分の

御借銀を御用役成と同事にて、御勝手に成可申儀に御座候。又似せ札不仕候よき手立も可有御座候。又役人多人可申かと申人も御座候由、皆是不案内成人の說にて御座候。但仕樣悪敷御座候て、大勢役人もかゝり候ても行れ兼可申候。仕樣に依て只一兩人にて其事を司り、其上に足輕位の付の者少少御付置被成候て探明申、役人多人申事にて無御座候。又似せ札の日付には、御國中の人皆成る樣に成行も可有御座候。一人も目付入申事にて無御座候。總て萬の事に利斗にて害なき事は無御座候。札遣などの如く、利多くて害少きはよき事に究り可申候。たとへば水と火と申物は、民生を利する物にて、一日も無御座候ては不成物にて御座候得共、用樣悪敷御座候得ば、大成害にも成申候。害斗を立候て利を用ひ不申上候。世間何物か害なきもの御座候哉。食物も同樣悪敷候得ば、忽に害にも成候。害を恐れ利をすてゝは、食物、水火、刀、脇指、其外世にすたり物多可有御座候。法委御座候て似せ申者出來兼可申候。他處の仕樣の善惡を能御考合被成候はゞ、いかにも行能似せ申者出來申間敷候。たとひ少々似せ申候とても、一年にわづか五貫目か十貫目かの儀に候。其公私にて極て少成事にて御座候。百分一の利足を被召上候さへ、年中積候得ば中々右の損失の樣なる纔の利にて有御座間敷候。又札を似せ申程の大悪人は、少々御刑罰被仰付候ても、御仁政に非とは申間敷、少成害を恐れ、大成利を失ひ申は、水火は人の害に成候とて不用程の事にて御座候。御國用不足不仕候はゞ、好事不レ如レ無にて、札遣も不入儀にて可有御座候得共、御國用不足故、上より御好不被成上ヶ米をさへ可被思召上との御僉議の時節にて御座候に、萬民の害に成不申て、大分御國用の助に成申良法を御やめに成事、扨々殘念に奉存候。只今より不被思召立候ては、先に寄彌御財用御事缺被成候時、

假に札遣に可被成と被仰付候ても、假に行れ申物にて無御座候。又札遣はせばき所にても行れ申候。御國の樣なる廣き所にては、猶以行やすく、御國境の近所他國迄も、御國の札用申樣に成候て、御國中他國迄の銀上り申事にて御座候。但行樣惡敷候はゞ、害も可有御座候。是又水火のたとへの如くにて御座候。紙商人などに若害出來候はゞ、夫は行樣のよからぬにて可有御座候。又札遣の御座候處に、米穀の商賣錢主より被成候處御座候由申候。是は唐にては常平倉と申に似申候。常平倉と申は民の飢を助け、君の財用にも足し申候て、君民共に有益事にて良法にて御座候。其法は米穀世上に多候て、下直に御座候時は買申者少く、賣申者迷惑仕候。其時公儀より銀を出し、當時の直段より少高直に大分買取候て藏に入置、米穀買申者無御座、世上につまへ居申たる時、高く賣申故賣者勝手に能御座候。扨又米穀世上に乏く成、高直の時は賣申者少く、賣申者も迷惑仕候。其時公儀より彼下直に買置候米穀を多取出し、當時の直段より少し下直に賣申候へば、買申者助に成申、公儀にも又下直の時買置、高直成時賣候故、有益儀にて行樣に無私候得ば、君民共に便に成申候。

一御國中在々差て御用にも不立事に、百姓の費申事多、公儀の御爲、國民の爲、何より大事の耕作に精を出し申事難成、百姓の痛に成、夫に付公儀の御損に成申候。又在々より上り申小物成は稗糠之利米と、又高一石に付三合夫米二合夫米、此三色を合せ勘定仕候得ば、纔一分程に當申候。扨て百姓と申者は公役少く候て、隙をこへ得させ候へば、耕作に精を出し、五穀たくさんに作出し有付申候故、先少々上り候ても、痛み不申候。小物成と申事御座候へば、百姓事多に苦み、手數多く出し不申候てもいやがり申事にて御座候、又小事成御取立成候とは、御取不被成候節於

道理も、他所の風聞も、可然儀にて可有御座候。然共只今御財用不足の時節にて御座候得ば、長政公以來被召上候を、至于今御捨難被成儀に御座候間、毎年免少宛高く御取被成、小物成三色共に御捨被成、諸公役の内を能々御吟味被仰付、肝要ならざる雜事、百姓の隙費申儀をすきと御免被成候て、在々殊外くつろぎ候て、諸人は御尤奉感、他所の風聞迄能御座候て、被召上候處、却て小物成御取被成候時分御得分多く可有御座候。惣て他所にて國郡の仕置のせわしくからきと申候は、小物成運上の多く出候所を、仕置惡敷と申候。左樣に御座候ては、必民痛み申候。却て公儀の損失に成申候。江州膳所なども先年小物成多く出候時は、百姓痛み免もひきく御座候。今程小物成出し不申、諸役減少故、免は八分上り候得共、百姓殊外有付候て、悅申と承る由申候。

一近年は、諸役人の風儀先年にかはり申たる由沙汰候。其子細は、近年は各樣被仰出候事は、諸役の心中に御爲、又は民の爲に惡敷儀とも乍存達て不申上、何事も皆各樣御氣にさかひ不申樣に仕りたるが、御首尾も好六ヶ敷も無之候て勤能候、道理を申立候得ば、各樣御氣に合不申候て、御首尾惡敷と(以下原本之を缺く)

庚申封延寶八年三月

四日重種贈書 元平左衛門殿之事

乍憚申上候。先年世上の沙汰、各樣御身の上の批判共承り、可申上候へと被仰付事、於于今失念不仕候。拙者事は尊公御厚恩を蒙り、其萬一をも報申事難成奉存候得ば、責て左樣の儀を承りて申上候はで不叶儀に御座候。殊に御影を以古書をも廣考、道理の萬一をも伺ひ申候得ば、不顧是非愚意をも可申上事には御座候得共、私式各樣か樣の事申上事、しなを越分に過たる儀にて、其上尊公御才智の百

分一にも及不申仏の儀に御座候得は、無二圖謀二儀を申上候ても、御爲に成申間敷と奉存、終に不申上候。然共頃世上の沙汰共頻に御座候を、乍承彌わだかまり居申事、不忠の至難默止奉存候に付、承候沙汰並所々古人の説をも加呈上仕候。愚意の存寄にては無御座候。返々拙者式か様の分に過たる儀申上候事、莫大の罪多恐御座候。其上定て申上候事一も理に不當、狂妄なる事のみにて可有御座候得共、私の過に御赦免被成、雜說の惡事は御捨被成、若此内一事にても不苦事御座候て、他山の石玉をみがくと可被思召上候。又是程の儀は定てとく御聞被成、心中にも、早く被思召寄たるにて可有御座候得共、古人の芹を献じたる愚忠迄にて、遼東の豕なる事をも不顧申上候。

一貴公御才德御勝れ被成、其上正學を御好被成、常々道理の上に御心を被用候故、たとへ御過ち御座候共、さ迄讒口心有御座間敷と奉存候、然に近年御國中の諸士庶人に至迄、各様御政道不宜様に評議仕候事毎々承候。就分貴公御事何かと誹謗仕候事、不大方諸人の口くせの様に申由に御座候。又御國政も逐年次第に衰へ、就夫諸士の風俗も賤く成行申由沙汰仕候。惣て世の人の口と申物は、誰が申出る共なく、ひが事のみ多く御座候。下愚の人の習にて、上の御恵み深き御心の十分が一をも不存、譬ば不孝にて父母を怨み申如くにて可有御座候。其國に居ては其太夫をそしらすと申、忠厚の道をば夢にも不存、下として上を誹り申事莫大の罪、天の責をも恐れざる事にて御座候。拙者至愚に御座候得共、御影を以聖賢の書を多見、道理のかたはしを考申候故、世俗の迷ひ虚說を信じ申事にては聊無御座候。古語に民の口をふさぐは水をふせぐより甚し。水ふさがつてやぶるれば人をそこなふ事必多し。民も又如此故に水を治る者はひらいてながさす、民を治る者は申て云しむると是

古のかしこき謀にて、民の口をふさいで云しめざるは、却て誹をなしてつたなき計と見え申候へば、民の誹をばとがめ可被成儀にては無御座候。只塞をふせぐは褒を重るにしくはなく、誹を止るは自ら修るにしくはなしと申す、古語の如くに御工夫被成事、乍憚可然奉存候。堯舜湯文の大聖人すら、猶道に於て未至らざる事をうれへ、過多からん事を思召て、進善の旗、誹謗の木、諫の鼓など申事も御座候て、廣く萬民の誹をもうれへをも取上げ聞しめされ、草かり木こりにも事を御尋問被成候事、慥成書に見え申候。聖人すら猶如此。況人聖人にあらず、誰か過なからんや。賢人位にては猶過も多き物と見申候得ば、過を知て能改るが可貴事にて御座候。我意を立自ら是とし、我を賢成として、過無と存候事は、あやまりの上の大きなる過にて可有御座候。尊公如何に御賢才御座候ても、定て御知行の上に御過多く可有御座候。然ば世間の誹謗は信ずるに足ず候得共、衆人の申事は又公道も有之物にて御座候間、其内に若は理に當りたる儀も可有御座候間　誹レ我而當者ハ吾師也と被思召、人の誹の善惡をば御とがめ不被成、一筋に御身の上に御過を御うたがひ、省察克治の御工夫を御用ひ被成候事、諸事の御かため可然事と奉存候。若少にても御身の上に道理を御付被成御心出來候はゞ、是則誹を御受被成御病根と可被思召候。惣て拙者は世間の交無調法故、廣く人交不仕候。稀に人に出合申候てさへ、如此の誹謗を度々承り、耳痛き樣に御座候間、定て世間にあまねく申儀にて可有御座候。

一易曰、君子以虚而受人、此意は心を虚にし毛頭も滿心無くして、人の言を受用る事に御座候。若少にても滿心御座候ては、既に心中に私意滿塞り候故、善の入可申よけい無御座候。器に一ばい物を入ては他の物入不申如く、我才力を賴て自ら是と

し、人を非として自滿し候へば、人の言難レ入、人も又諫を申兼候。孔子曰、聰明にして智なるも是を守に愚を以す。我一人の智はかぎり有て、天下の理は極りなき故に、聖人といへども廣く見聞して惡を捨て善を取り、衆人の知を合て我智となし給ふ故に、是を大智と申候。道理は我にあるも人に有も、へだてなし。我に有といへども惡きをば捨て、人に有と雖も善をば取べし。鏡は明なりと雖も其裏を照さず。君子は知ありと雖も自知る事あたはず。必人の諫を用ひて我過を改む。離婁が明目能く遠處を見ると雖も、其面を見る事あたはず。必明鏡を用ふるが如し。凡聰明なる人は必我見にまかせ、才智を賴て自是とし候故、必見違に過多く、一偏にかたおち、不覺して私の心に成申候病御座候。尊公の御病根は、御才力諸人に御勝可被成候故、夫を御自慢被成御滿心御座候故、人の上をしばしば御とがめ、自御ゆるし被成候。然ば聰明御才智御勝被成候處に、却て御病根御座候と被思召御工夫可有御座候事本存候。此御病根を御ぬき去不被成候はゞ、いかに實に御學問を御好被成候共、御得才の方に斗り御長じ被成、益有御座間敷由申者も御座候。學問の大益は氣質を變化するに有。凡氣質を治るの道は、其餘りある處を押て足ざる處を勤に有。若不レ如レ此ば有レ餘處は彌長じて大過し、不レ足處は其儘にて不及に御座候ては、氣質も變化かたく、學問の益無御座と見え申候。譬酒食は人の實に好む物なる故に、辭退すれども人必しゆる物也。過を聞事を好む實ならば、酒食をしゆる如く人必告しらすべしと古人も云り。虛心非理の御工夫無御座候ては、何程御過を御聞被成度と被仰候ても、存寄を正直に申上る人稀に可有御座候。右酒食のたとへを以御考可被成候。

一世上の沙汰に尊公御私心御座候て、諸事御心儘に御座候。又權臣をはしいまゝに被成、御私愛を以

人を御贔屓被成事多御座候。御心にしたがひ申事は、道理に背候ても御悦、從ひ不申事は、道理に合候ても御同心不被成候故、かた落たる事多く、諸役人の心持も不一成行候。又近くは御政事を脇へ御讓り被成候て、悉く御勤不被成、御一分の御安樂を專に被成、人の誹を御のがれ可被成、御用心被成候由申候。殊に近頃上り米の儀被仰出候程の大成御仕置被仰出候得共、未だ被召上候員數の御詮議も定不申內、はや各樣時々御遊興にも御出被成候。又指直たる大役大義を御改被成、被仰付候ても、御老中樣御一同の御僉議も無御座、一方には當て御存不被成樣成事にて御座候。かやうに御國政を不被懸御心、委御相談も無御座候ては、たとひいか樣に御智惠御座候ても、道理に當り申間敷候。就其近年各樣に被仰出候事、先後相違仕候事多御座候由申候。大國の御仕置にて、殊に御財用不足諸人困窮故、日夜無御懈怠、御治被成候御工夫專一とぞ可被成に、かりそめにも御安樂に御座候事合點不參由、是等は近き頃承たる說にて御座候。又學問專に被成候道理の御吟味をば被成候得共、近年の樣に諸事猥に成行候ては、學問も不入ものにて候など申由承及候。又諸人の誹に因て、世間の聲を御求被成候御手立も御座候樣惡口を申、又各樣近年御加祿御拜領被成候て後、頓て御簡略きびしく被仰出候事も、前後相違に罷成、合點不參由申候。又近年は尊公御事世上の誹謗も多御座候。殊御同位の間にも御不和御座候間、一入御愼可被成時節にて御座候に、却て近年は彌御心儘なる事多御座候由申候。夫明月の玉にも少の疵御座候得ば人用不申、人にも衆善悉く備り候ても、只一の疵を以て衆善をおほひ申事御座候。尊公才德衆人の及處に非ず候得ば、善事を稱述仕候者何程も多可有御座候得共、其善所をばあげ不申、虛說にては可有御座候へども、惡事斗りを申立候、是は御氣質の偏にて、

とこそ御過失御座候故、人の誹も御座候哉、何卒御心持を以、諸人の誹も止み可申樣に奉存候。若御權勢御座候故、諸人のそねみ御座候て、誹を御受被成候哉とばかり被思召候はゞ、御工夫の益に成申間敷候。惣て俗の誹は僻事多くして、要とするに不足候得共、是又君子の身を顧て愼み戒むべき處にて御座候。曾子の三省を朱子註して曰、有時は是を改、無時は益勤と御座候。人の誹を以身を顧み申も同意にて可有御座候。若人の誹申樣成過御座候はゞ、改て善に移り可申事に御座候。幸にして人の誹申樣成過無御座候はゞ、彌勤て過なく仕り候が、省察克治の法にて可有御座候。

一凡高位に御座候人は、人の和を得て諸人心服し、思付申が第一の善と見え申候。勿論道をまげ、人の譽を求申にては無御座、只公平寬容にして無私候得ば、不求して人心服仕ると見え申候。孔子の仲弓の仁を問へるに答給ふ曰、我身を守るに我を主とし、人に施すには恕を行て、其上國家の民の怨無を考へ試みて、我恕の至れる證據に仕候得と御教へ被成候。兎角諸人の怨御座候はゞ、善事にても人情に不合候得ば、不可然事と見え申候。

一世の人の沙汰に、各樣人の諛を御好み被成、理に當りたる事も、御心に不合事は御用不被成候に付、近年諸役人の心立次第に惡敷成行、我身がまゝへ寻りを仕、存寄をも有體に不申上候。有體に申上候得ば御氣に背候て、首尾惡敷と寻心得ての由申候、其事の實否は不奉存候。尚書に、有言逆于汝心、必求諸道。有言遜于汝心、必求諸非道と御座候。又古人の語に、國の治亂は、言路の開くるとふさがるとによれり。言路開くれば治り、言路塞れば亂ると御座候。言路開と申は、下の人の存寄を有體に能申させ、上にも能く聞届用申事にて御座候。人の身も元氣能めぐり候て、無滯候得ば無病に御座

候。血氣ふさがれば病に成申如く、國家も言路のふさがらずして、上下の心通じ候得ば、治り申由に御座候。下の人々存寄所を上達不申樣に仕なし候得ば、下の人は漸く口をとぢて、直言せず、瘖の如くに成、上の人は下の直言を不聞して、譬ば聾の如くになれり。聾と瘖とあつまり合て、國家を治めん事を求とも不可得、古人の語に御座候。

一世上の沙汰に、近年節々被仰出候御法度、每度頽てやぶれ候て、一つも立不申候。御法度を被仰出候は、後迄堅く立申樣に肝要なる儀を被仰出、諸人も御尤と申樣に可有御座候事のかやうにやぶれ安く、人々非難を入申樣なる御法度を被仰出候得ば、次第に上の御威光も輕成申樣に有之と申　多御座候。每度御法度書の觸狀廻り候得ば、何かと評判仕候。定て是も世俗の悪口にて、理に不當批判にて可有御座候。然れ共天下有道時は庶人不議と御座候へば、末々の者何かと上を議論仕候事は、未だ心服不仕故にても可有御座候。此處も御工夫可有御座候事かと奉存候。但法制禁令と申事は國家の大事にて、妄に發し不申事不及申上候。古の法は法度を出す事を愼み、天理人情に叶候て、守り安き肝要なる儀を條數少く約に立申候て、法を背犯し、再三つげいましめ、其上にて背申者は、其品により刑罪を以てこらしめ、上の威を恐れ、下として法をかろしめ、あなどらざる樣に、堅固に守せ申樣と見え申候。尙書にも、愼乃出令、令出惟行弗惟反。と御座候。又古書に、令多則不行、とも御座候。守り安く條數少く立申候て、人情に叶ひ背ざる樣に被行候。詳過候得ば必其法立兼申と見え申候　又近年の御政は諸人の擧を御求被成、姑息の御勤御行被成候故、莫大の御慈悲をも忝とも不奉存候由申候。殊に法度背く者も御こらしめ不被成候。私曲を行大分公儀を欺き財をかすめたくはへ申樣なる者も、其儘にて被差置御吟味無御座候故、

共第に上を恐れ不申、わだかまり候て、中庸儀の事斗に成申候て、賞罰不被行候由申候。賞罰と申は國の大權にて、毛頭も過不及御座候て、用捨理に不當候ては、善に進み惡を止め申定規に成不申候と見え申候。又近年御國用不足故、諸役人聚斂利欲を御爲の樣に存、士民の苦をも御外聞をも不顧、非道成事多御座候。如何に御欠略被成候共、非道成事共被成間敷事と、常に沙汰仕候。若義をえらばずして、偏に利を御爲と斗心得候ては、此上の御爲にあしき害は有御座間敷候。是は吾樣の儀を差當請り申にては無御座候。

一頃東ニ近所に赤氣立申由諸人申候。世俗には火柱と申候て、大火事の出來申前兆と申候。先年京都所々に大火事の前も、かやうの怪異御座候由申候。諸人の雜說計處にて可有御座候。然共或士の說に、四三町程隔候ニ、慥に見申候由申候。其外にも慥に見申たりと申士夛々御座候由承候。春の半、氣の登り申にて可有之と申者御座候得共、然ば每年何の處にも立可申事にて御座候得共、稀なる事に御座候得ば、左樣にては有御座間敷候。惣て國家の政道道理に違ひ申たる過御座候得ば、天より怪異を出して御戒め、其過を改申樣に御告被成候。此度火柱の立申は、大なる怪異にて御座候得共、天の御告にて御國政を御改被成候樣にとの御惠みにて御座候得ば、天の未だ捨不給處、目出度御告にて可有御座候。若又天の告を御恐れ愼み被成、御改被成儀無御座候はゞ、恐らくは御國の大なる災難出來可申も難測儀奉存候。古へ王荊公が如き、高才御座候ても、天災恐るゝに足ず、祖宗を法とするに不足、人の誹り憂るに足ずと申候。其大の罪にて終に天下を過り申たる例も御座候間、天道は恐るべき事にて御座候。漢書に、董仲舒曰、國家將有失道之敗、而天迺先出災害以譴告之、不知自省、又出怪異以警懼之と御座候。此外にもかやうの古語

故事多御座候。今度上り米召上候事、御國用不足に付、別て可被成御手立無御座候趣、不被得止して被仰出候上は、諸士大小共一人も御無理と申者は有御座間敷、諸士は上米仕候ても御影にてつゞき可申候。只下々浪人仕るが難儀成由申候。上り米多御取被成候共、下々流浪不仕樣に被仰付候はゞ、盗賊火災其の外何の變も出來仕間敷候。今度下々浪人多出來仕候間、後々必飢に及申候者、其時如何樣なる事仕出し。變災起り可申哉難斗奉存候。是に依て火柱も立申候て、天より御告いましめ被成候にて、可有御座候。是は何卒御工夫を以下々流浪迷惑不仕樣可有御座御事と乍恐奉存候。此御工夫は何より御急務と奉存候。近年町人百姓痛申上に、連年御家中簡略故浪人多御座候に、又富春浪人千人に餘り出來仕候故、其者共商賣ども仕候に付、前々より商賣仕來りし商人も彌商賣も無御座、迷惑仕由申候。土佐國先年上り米御取被成候家中の知行皆々被召上、人數に應じ迷惑不仕樣に扶持方を被下、下人一人も暇出し不申樣に被仰付、浪人少も出來不申、一兩年の內に手前御仕置被成、御借銀御返辨、銀の餘りを家中に御返被成候、百姓町人等窮民御救ひ、又手前よき者には自分救ひ申候樣に被仰付候に付、一人も乞食飢人無御座候由申、惣て民は皆天の子にて御座候得ば、天の子を惠み不申候ては、天の御怒り御座候て、國の禍出來仕事、古書にも見え申候。

一尊公諸事の御議論をもとより御存被成候が、被思召寄たる事をば、善き事も惡敷事も一筋によきと被思召、强て御立被成候。未だ御存不被成、兼て御聞入不被成事をば、よき事の樣に被思召候樣に申、餘の儀は不奉存、御學問の上に於ては、少々かやうの御偏僻も御座候かと愚見にも奉存候。惣て我已に知る處斗りを是とし、未レ知を非と仕りては、聞見の知識ひろまり不申候。御聽明に御座候得ば、世

の人の沙汰の如に是非を御取違へ被成義は　必有御座間敷候。但我等如の愚を以考見候得ば、義理は無レ窮知識の事に御座候得ば、只今迄十分に是と存候事も非に御座候。又非と存候事にも是成事御座候故、廣く見聞仕候て我知識を開き不申、是非慎重を考へ不申候ては、必得損斗り多御座候と覺え申候。

一人各長短御座候。長短とは得手不得手の事にて御座候。古人の語に、おのが長ずる處を以、人の短なる處をせむるは、恨を取るの道なりと御座候。明公には人に御勝れ被成、御得手なる處多御座候。若夫を以て人に備はらぬ事を御求被成候はゞ、人の恨多可有御座候。若人の短なる處を以、長ずる處を推候はゞ、堯舜の才も奴僕におとり可申と古語にも見え申候。人の氣質樣々にかはり申候故、一樣に世人をよとゝのへ度と存候ては、心に不叶事のみ多可有御座候。古語にも備レ身知レ不レ及、與レ人不求レ備ことと御座候。我身をせめ申には、少々過も無御座樣に、人に交り候には過をゆるし、さこそはあらめと見ゆるして、いましめそしり不申、人の短をゆるし、我長を忘れ申候得ば、人の和も自出來、怨も無御座と見え申候。但大姦の法を犯し申者を少にてもゆるし候得ば、惡人こり不申候故、惡をゆるし法をまげて姑息仕候と、小過をゆるし申とは、天地懸隔の違ひたるべく候。

一尊公人の過惡を其者の面前にては不被仰聞、影にて御誹被成候を必もれ聞怨み怒り申者、御心易出入仕る人にも御座候由承候。面前にては人の惡事を如何樣にも御咎め被成候ても不苦、影にて御沙汰不被成候はゝ、人の恨有御座間敷由申候。譬へば拙者如き者は、面前にていか樣に惡しき儀を強く御しかり被成候ても忝可奉存候。若面前にては不被御聞、影にて御誹被成候はゝ、勿論拙者不才に御座候ての儀に付、殊に御恩深く蒙りたる者の儀に

御座候へば、毛頭も恨みに本存儀には無御座候へども、面前にて被仰聞候樣に忝くは奉存間敷候。昔晉の祁洪と申す人は、好んで人の過を面前にておさへ、退きて後は其人を誹不申候故、人是を感じ、其人を重んじ申候。又面前にて其過を告げ、退いて其善を稱す所る人をもおなじき長者とて譽申候。凡影にて誹申す事は人必傳承り候。世話にも壁に耳ありと申す。所謂十目の所視十指の所指にて御座候。

一世上の沙汰に、尊公には御氣に應じたる者、又は御贔屓の者をば御私愛被成、御公儀の御首尾よき樣に被成候由。又才のたくみに佞口なる者を御好み被成、心術の善惡を御吟味不被成候由申候、其上尊公には人の出入仕る事をば御好み被成候て、へつらひ不申てよき者をも御取用不被成、節々伺候仕出入を勤め申す者をば、よき者の樣に被思召候由申候。其沙汰の是非は不及論候。人を知ぬ事の難き、堯舜も猶うれへとし給ふ。況んや我愛憎の私ふせぎ難く、人の眞僞わきまへ難く候故、佞口にあざむかれ、しらず不覺して迷ひ候事、古人の恐れ愼たる處にて御座候。若上にある人々を愛し用ひ、事理に不當候へば、是非を變亂し、其上人の好む所を惡み、惡む所を好んで、人の恨をも取り、人の誹謗を得申すのみならず。是に依て人心も諂佞し、風俗も賤しく、私欲深く成申すと見え申候。又剛直なる者は人に諂ひ不申候故、權貴の門には出入を勤不申。柔弱にて利欲深く諂ひ申す者は、權貴の人に求め願ふと見え申候。司馬温公の天下の大臣の時、君を諫め申す官に置き申すよき人を御吟味候て、平生我が處に出入通路不仕者の内にて御取上候て、權貴ある人にへつらひ求め不申、剛直なる者にて無御座候へば、君に諫を申すやうなる強き事の用に不立由の心持にて御座候。又少しの事に御喜怒起りやすく、理もなき事にても、口

よき者巧に申候時は、其徒御称被成、御めで被成候由申候。古人喜怒のたやすくあらはれず、愛憎の私なき事をよき事に仕候。一旦の事につき、たやすく人を賞罰仕候へは、必過失に成申候。

一天道は盈虧と申ては、易の戒にて、古来其道理事迹分明なる事にて御座候。全盛なる時自らおさへ、驕奢を去て満るたるをかき申候へは、其禍を免れ、満つれどもかけ不申候。未々の貧賤なる者わづかの幸に逢ひ申候てさへ、妻子に付て災出来申候か、何ぞ禍御座候。凡貴賤によらず、其例古今多く御座候事不及候。尊公御官禄高く、御兄弟御子孫御繁昌被成、御幸十分に満盛に御座候て、思召すままの御事ばかりにて、少しもかけ申す事無御座候事、天意に御叶ひ被成候御幸にて、満ちては必かけ、盛にては必衰へ申す道理の外にて御座候へは、凡夫の例にては無御座候。然し萬歳と奉出度奉存候。然れども天意難測御事に御座候へは、此後いかなる御禍も可有御座候哉難斗奉存候。我身一代は幸を多く受過し候へは、後々つゞき申す事、うすく成申事、天理の自然にて、古のためし多く御座候。乍憚此御意持にて御慎み被成候はゞ、御福禄久敷御保被成、御子孫永々御繁昌可被成候。

右の趣は數年の間承り、又近比承り、世上の沙汰如此御座候。御身の上斗りにても無御座、御國政の事迄書付て、かやうに下として上を批判仕候。むさと仕たる世間の流言は承り候ても、申上げざるが禮儀にても可有御座候へども、尊公御學問を實に御好み、道理を御正し被成候に付、とかく善事も悪事も多く御聞被成候か、萬一の御心得にも成可申かと奉存、不顧慮外作恐申上候。勿論此一冊の事他人は不及申上、兄弟親族にも沙汰仕る儀にて無御座候。出船前急に調申候に付所々わけ聞え兼可申候。去秋勘左衛門様へも世間の沙法を委しく書き付け致進

上候。どなたへも御他見必不被成樣に申上候間、尊公へも未御覽不被成事可有御座候。委細は其冊に書上申候。

庚申三月四日

元祿三年黑田一貫に贈る書

（三左衛門殿法名無法居士）

覺　書

凡國家の治亂は必政事の善惡により、政事の善惡は三綱五常の道の行はるゝと、行はれざるとによれる事、和漢古今の通義にて、其往跡明白なる事論ずるに不レ及、倫常の道は民心に備はれる天性なる故、教學明かなれば、民是に從ひ易し。若教學なければ、人々只食に飽き、衣を暖にし、居を逸したるまでにて、人倫の道をしらず、昏く迷ひて瞽者の相(たすけ)なきが如く、闇夜に燭なくして獨行くが如し。況んや、氣稟人欲の私蔽によりて、三綱しづみ五常やぶるゝをや。夫三綱五常の道立たずば、人心風俗うすく、義に背き利にしたがひ、日々に惡に移り、罪におもむきて、其弊すくふべからず。人道すたり禽獸に落ちて、國家危亂に及ぶ事、古今眼前の道理也。教學は人に三綱五常の道をしらしめ、人道を立てゝ、國家をして平治に歸し、兆民惣べて安樂ならしめんが爲也。故に教學明かなれば、豈只禽獸に近き事を免るゝのみならんや。人倫の道正しく、國家の紀綱立ちて、萬民日々に善に移り、罪に遠かりて自しらず。然らば則ち國家は治めずして自ら安らかなり。豈小補ならんや。故に禮記曰、古の君子建レ國養レ民教學を爲レ先。又曰、君子如欲レ化レ民成レ俗、其必由レ學乎。凡人生學ばずして能くするは只乳哺のみなり、其餘の萬事は皆學んで後、是をよくすと云へり。されば小藝事といへども、必學んで是を知る。況んや、人倫の大なる道、豈不學して能く知り能く行ふ事を得んや。且天子より庶人に至る迄、各守るべき道理有

り。勤むべき職分有、是豈不學して能しらんや。故に經學の治國平天下の助として、人の身に益ある事、猶衣食の體に助あるが如し。君臣是をかけば、人の世をなす事あたはず。人生是をかけば、好人となる事あたはず。人心をすなほにし、風俗を正しくし、敎化を助けて、天下國家の治平を改めん事、講學にあらずして、いかんぞ其功をなしてんや。是古今不易の理、和漢同前の道なれば、末世なりとて、聖道理に背くべからず。和國なればとて何ぞ學問をすてんや。萬事の初は今日を以て本とし、衆人の敎は我身を以て本とする理あり。何ぞ世を恨み人をうらみ、我道をすて、我學を廢せんや。神農の法に、一夫耕さゞれば天下に飢る者多く、一婦織らざれば天下に寒る者多しと云へり。我學も又如此、一人學ばざれば天下其害を受くる者多し。故に天子より庶人に至る迄講學なくんばあるべからず。かへすゞゝも學問の人心改事に補有事、たとへば食の飢をやめ、藥の病をいやすが如し。是自然の理也。然れども食の節を愼まざると、藥の病に適せざるとは、却てよく人を傷ふ。豈是に依て食と藥とを廢せんや。何ぞ食を節にして身を養ひ、症に適する藥を用ひて病治する事を求めざらんや。學問も又然り。何ぞ書を讀むによつて、我身に害有事をふせぎ、己に益有事を求めざらんや。今の學をする者、初より己が身を治めんとして學ばざれば、書を讀むによつて或は高慢になり、又は邪智をまし、人品あしくなるものあり。是を以て道學人に益なくして、損ありと思へるは非なり。初より道義に志なくして、只名聞利用の爲に志してする讀書なれば、人品惡敷成る事又むべならずや。然れば書を讀むに依て人品惡敷なるは、其人の志をとがむべし。豈學問をとがめんや。今無學の人此理を知らず、學問は人に益なくして却て害有りと云へり。是古人の所謂因噎而廢食もの也。豈のみまたずや。夫學問に本有り、學をする人是をしらずんば有るべか

らず。第一先づ己が爲にすべし。己が爲にするは實に是を己に得んと思ふ志を立つる也。此志なければ眞の學問にあらず。たとへば農人の田を作るに種をまくが如く、種をまかざればたがやし、草きる功も無益の事也。是學問の主意也。次には師友をえらぶべし。明師良友にあらざれば、志有りと雖も其法たがひて正學を得難く、徒に書を多く讀むと雖も、己を修め人ををさむるの正學にあらずして、世の教に補なき俗學となり、或は異端偏僻に流れて、却て世教に妨有故に、師友をえらぶは是學問の補佐なり。次に心を虚にし、志を遜るべし、高慢なれば必自是として、人の教へ戒むるを用ひず。故に賢者といへども其過を正し難し。明師良友にあひても益なし。志を遜るは、其過を改め善に移るの道にして、學問の基也。此三の者を學問の本として、此後は用レ力の勤惰と性質と善惡とによりて、學の至る處の高下淺深はあるべし。此三なくしては學の本不立して、たとひ博く多識になりても、必心身に於て益なく、只藝能を學たる如し。たとへば食は人身を養ふものなり。飢て後食すれば養となり、飽滿し食すれば却てやぶれとなる。學問も又如レ此本ありて、學は飢て食するが如し。必身の益となる。本なくば却て身の害となる。故に食する者は必飢る時に於てすべし。學ぶ者は必其本を立べし。何ぞ飢て食せずして徒に食を廢せんや。夫人となりては、人の道を知らずんばあるべからざる事云に及ばず。人の道を知らんとならば、學問にあらずして何を以か知る事を得んや。就中國家の政に從ふ人、其下の諸の司々まで古の道を考へ、其法に隨はずんばあるべからず。萬の事は皆其法則有。是を學で後よくす。細事小藝に至るまで猶しかり。況國家を治るの道に於てをや。然れば國家に長たる人は、古を考へて廣く學び、深く思ひて其道を求め、且下に有る人を導て講學をなさしめずんばあるべからず。講學は是則政事の法、教化の施にして、

國家の平治君臣上下安樂の基なり。

一竊に以往を考見るに、先年御城下に諸大夫士庶人まで、略備術を好み、經書を讀む人多御座候間は、御家中風俗正しく、禮義も廉恥有て、人心いやしからず。僞貪を行ふ人少く、其職分を勤るに心を用る輩も少々有之、且又武藝を好み武備をたしなむ人多御座候。如此なる故、他邦よりも御家風をしたひ申たる由に御座候。其後いつの頃よりか講學年を逐てすたり、たまたま經書を讀み義理を論ずる人御座候へば、衆人こぞつて是を惡む。其人誹を、恐れ、たとへば草木の萌蘖初て生ずる時、たやすく折取るが如くにして、忽に其志やみぬ。故に世の人聊義理を好み、忠義を存じ、是非を論ずる輩なく、今に至つては人心風俗日を追て衰へ、只利欲是を貪て廉恥なく、貪欲深くして禮義をかへりみず。仁愛なくて民をむさぼり、人を苦しめ、物のあはれみを知らず。或時勢に乘じ己が才にほこり、人のうれへをしらず。邪智切にし、罪をのがれ、刑法を恐れず。且又近年は諸人文學を不好のみならず、弓馬をならひ、劍戟を學ぶ人なく、武藝を捨、武備を忘れて、武學も又廢せり。儉約の命令しばしば下るといへども、只達人の說經の如くにして、曾て其旨に不從。然る故近年諸士及困窮といへども、華美を好み奢侈をほしいまゝにする風俗、年を逐て盛也。氣質淳美なる者も、元來學問も力なければ、俗習にひかれて天性をそこなひ、是非に迷ひて惡俗にながるゝ。君臣義理を正し、忠義を存する人有れば、俗人羣つて是をそねみ、其過失をいつはり、强いて無意の惡名を蒙らしむ。まゝに今の人の風俗やうやくいやしく成り行き、只時勢に從ひ、又義理を好まず、忠義を忘れ、學問[illegible]して地を掃へり。此以前も近年も上の御[illegible]しき事は、かはりは有御座間敷候得共　御家中の風俗年々に衰へ申候事は、大に變じたることと見え

申候。是偏に下々に義理を好申風おこたり、講學をも不仕候故、年々に風俗衰へゆき候。凡此風俗になり行き申事は、其近き頃よりの事にて、其初未遠候。若今の風俗此儘にて止不申候はゞ、恐らくは國家の御政道も逐年衰へ、薄く成行き、御法制も行はれ不申、各様御下知をも用不申候て、御國法も亂れ、御武威もやうやく微弱になり、後年には、危亂にも及可申道理に御座候へば、私式迄、乍憚なげきても餘有る事の様に奉存候。是偏に有位の御人御心に懸られ、國家の盛衰、後々の安否を兼てより御憂被成、時々成行に不被任、御工夫可有御座事かと奉存候。明公御事は歷世の國の御元老にて御座候へば、たとへ當時御權勢を專らに御振ひ不被成候とても、諸人の奉仰御位にて御座候。殊に御聰明御才方御勝被成、御學識御座候へば、明公道學御好被成候はゞ、諸人の感化も早く御國中に流行し易く、且自餘の人の學を好み申すに違ひ、諸人おのづからに誹謗仕る事も成申間敷候。たとひ誹謗仕り候も、勿論御害に不被成事に御座候。時勢により御政道の儀は、御一人の御力難被及儀も多可有御座候へども、學問興起の儀は、明公の御力に叶ひたる儀にて可有御座候。明公只御一人の御奮起により、次第を以て、諸大夫及び諸有司にも忠義の志起り、各職分の道を被學候て、御國政も是に依て漸く正しく成行き、士民の悪敷風俗も、逐年改り申し候はゞ、爲レ君爲レ國大なる御忠義にて、且御名譽も是に依つて彌增可レ申候。古人も下士は道を聞て大に笑之と申如く、善き道は古來凡夫は却つて誹り申すものにて、且我が知らざることは、善き事をも誹り惡み申候は、常人の習にて御座候。孟子曰、有二不レ虞之譽一。有二求レ全之毀一。凡衆人は無學無智にして、是非善惡をわきまへず。故に誹るべからざるを誹り、譽むべからざる事を譽る事多く御座候。其上喜怒愛憎の私にまかせて、

妄りに人を毀譽し、或は一犬形に吠ゆれば、萬犬聲聲吠るが如く、我見識なくして他人の言に雷同し、從ひて毀譽仕候。凡公論は百年而後定まると古より申候へば、當世の毀譽は私にして公ならず候。然らば衆人の毀譽十の八九は道理難當候へば、毀も不足憂、譽も不足喜、又人の毀譽を妄に信用して、人を進退するにも不足候。爰を以て、孔聖も衆の惡も必察し、衆の好をも必察と被仰候。西文淸も、世人謂不然而有然者、世人謂然有不然者。不可不察と云へり。只自反自修の工夫、公正辨の見識のみ可賴事に御座候。凡世俗の毀譽に從候ては、義理難立事にて御座候。不及申上候へども、衆人の毀譽には御拘不被成、道理と時宜に於て妨に不成儀と被思召候はゞ、此儀は御力の及申事にて御座候間、御興起被成可然奉存候。學校を立、生員を集申事社、本朝近代其例無之に御座候へば、難成時勢にて可有御座候。儒學講習の儀を家康公にも御好被成、道春並足利の三要などに被仰付、常に書を讀せ御聞被成候。儒書を別て御好被成多く御求被成候。其後御代々儒術を御きらひ不被成、殊に當公方樣にも、近年は度々上野の聖廟に御參詣御禮拜被成、儒術を御尊崇被成候由御座候。長政公にも、道春に論孟を御聞被成、其節限ある御家臣、皆學問被仰付候由、勿論、大殿樣當殿樣にも、學問を惡敷と被思召候事にて無御座候。且何の國にも必少々は儒術興行仕事にて御座候間、何の指相にも成申儀にても無御座候。無御憚事かと奉存候。古語に云、衆人不可與慮始而可與樂成。此意は衆人の蒙昧不學なるは、初に於ては事により相談も難成御座候。其成就を樂まれ候由御座候。講學の興起も又如斯、此御興行は只御一人の御心に御決定被成候儀と奉存候。凡善を行ひ正を守申事、初より諸人の譽を願申候ては、成就難仕候。只志を一筋に堅固に立て、毀譽不顧の行以、勿論其事の

無敗樣に愼實に仕候て、其事の成就を傳申候へば、德不レ孤必有レ鄰と有之如く、又は其志ある者は其事終に成申候。古語の如く初存たるより、はか參り天の助も人の助も出來、其事成就仕候ては、諸人の誹も自らやみ、後には大なる功名も立申ものと見え申候。今時は治世にて御座候へば、明公御先祖以來御武名の御家ながら、御武功を被立儀は難成御事に御座候。然れば今忠義仁愛の御志を以て、學術を御興起被成、依之やうやく義理を尊び、忠義を存申輩も出來、諸士の風俗も改り、次第には御國政にも其道行れ候はゞ、上には大なる御忠節にて、下には深き御仁愛に成、其御行積りて人望も天報も空しかる間數と奉存候。然らば神佛に何樣の御祈禱を被成たるより、御福祉を助申道理にても御座候。凡人は天地の子、天地は人の父母にて御座候得ば、人を救ひ助申程天地の心に叶申事無御座候。たとへば人の子をあはれみ申候得ば、其父母よろこび、人の子をそこなひ申候へは、其父母怒り申如く、天地の心に叶ひ申たる程、大なるよき祈禱無御座候。罪を天に得奉れば祈るに處なしと御座候如く、人の吉凶禍福皆天の命ずる處にて御座候得ば、其恩にあらずして妄に祈候ても、祈助を得申道理無御座候。只天地の心に叶申が、福を得る道理にて御座候由相見え申候。古語にも在レ世一日則做二一日好人一、在レ官一日則做二一日好事一と見え申候。學をおこし善を進め申程の事有御座間敷候。且何れの道にても御功名を被得候事は、願はしき儀に奉存候。返々當地の人心風俗近年衰へ惡敷成行申儀、驚入申事にて御座候。爲レ君爲レ民世上の風聞旁以其儘成行に不被任置、御職分に御座候得ば、何卒御工夫も可有御座儀かと重々乍憚奉存候。此人心風俗を御改被成候は、各樣正學を御好み被成、人にも御すゝめ被成より外に、好御工夫は有御座間敷と奉存候。世上には小國或は郡主の

城下にさへ必少々學問流行仕候。當國程廣き處に、儒術稽古の沙汰少しも無之處、世上には無御座候由承候。御國政の事は拙者式のかゝりにも議論可仕儀にて無御座候。御影にて少々學問を仕候得ば、儒術を人にすゝめ申儀は、御奉公の一分の樣に奉存候。至愚極陋の愚見にて申上候は如何と奉存候へども、愚者も千慮すれば必一德ありと見え申候。又は愚を以て知を助くる事も古今多き儀に御座候。古語にも又物誠に賤を以貴をさむる事有。故に玉を治るに石を以てして、布をわらふに灰を以てすと、明公御聰明御學識御勝被成御座候へは、若申上候處自に一も道理の事にさへ御座候はゞ、定て御取上被成にて可有御座奉存候。殊明公元來被懸御目候事を幸に奉存、愚昧をわすれ、道理の當否、世の時宜をも不顧、乍憚申上る儀に御座候。且又學問に志す輩にも、此儀は明公思召立に寄り、かなふ事其效可有御座事の由、歎申仁も御座候に付、旁難默止奉存申上候已上。

元祿三年五月朔日

黑田重時へ送書

御國政の御事は、各樣御取行被成候得ば、末々の者可申上樣も無御座候。殊に恐多く奉存候世の成行に付、御國用御不足仕候て、御仁政被思召樣に難取行事と、近年御家中末々風俗、又は此比世上の沙汰等、微細の事委しく承り及び候通、乍憚申上候。

一御家中小身の諸士末々迄、近年困窮の由は、御推量も御聞及も可被遊候へば、不及申上候。只近年風俗悪敷、奢年々に增申候て、後難の遠慮曾て無御座、上方米不仕時より諸人寄りて、諸事華美に成行、殊更酒食飲食につき、好み甚敷なり、かりそめの寄合にも種々美を盡し、大身衆よりも勝手不能仕候に付、一度の饗應にも過分の費多く御座候。衣服家居諸道具同敷右を好み申候。たとへば如

行三百石被下候者は、上ヶ米仕、三分一百石分を上申候故、諸事不自由をこらへ儉約仕り、殘分二百石の振廻に仕候て、不足無御座候。一ぱいに仕廻、借銀出來可申道理無御座候へども、其儘にて如昔三百石の振廻を止不申、其上に上ヶ米不仕時より、物毎に奢にて、事々により大身衆同事に過分の事ども御座候。勝手能成候て、如此奢候と申にては聊無御座候。近年如何仕たる事にて御座候哉、御家中諸人の風俗、殊に小身なる者浮氣になり、如何に貧窮なる者も、後々の難儀をば考不申、只當事の自由を快く仕、酒食の費第一多く御座候と見え申候。艱難をこらへ、借物を不仕心掛は毛頭無御座と見え申候。其上風俗賤敷なり、左程困窮不仕者も、買掛の銀を拂不申風俗に成り候に付、町人も殊の外難儀仕ると聞え申候。前かど借物自由に御座候以來、年々に小身に不相應なる大分の借物出來候て、借申事を少しも苦に不仕、後難を顧不申候。借申者さへ御座候へば、何程も多く借申心持と聞え申候。京都は天下の都にて、殊に富みたる町人多く御座候間、御國に替り料理など殊の外手をきれいに仕候と存居申得共、只今御當地末々小身の諸侍の仕候料理は、昔に替り京都にても及不申程に功者に成り候て、珍敷結構なる料理仕候。酒も京都には先年まで花橘、蘭菊など申名酒二三種より外は無御座候。然るに近年當地の名酒何十種御座候哉、無限有之由に御座候。是偏に饗應に美を盡し奢を極申候故、天下の都にも增る事過分の成行にて御座候。夫れに就き親類朋友心安き間、假初の饗應にも、高直なる名物を出し不申候へば、難成成行と聞申候。此事を以て諸事の奢り知れ申たる事にて御座候。上ヶ米故人馬をへらし候へども、食物等其外の奢は、却て上ヶ米不仕時に增申と相見え申候。御家中諸士末々まで、此後彌困窮仕、御奉公成兼申候ても、御國用御不足故、御救

被成候事難被爲成御座候ては、乍憚後年の御爲、次に諸人の爲、不可然と奉存候。今の風俗にて、公儀より御制禁不被成候はゞ、たとひ諸士の內に後の事を考へ、只今より堅く儉約行可申と存候ても、世上の成行に隨不申、一人立にては儉約難成、若一人立儉約を行ひ候ては、脇より悪敷申立、傍輩に背き人交りも難成、御奉公も勤にくき樣に成行申由に御座候。然ば此後公儀より近年の如く御家中奢不申、儉約を專仕候樣御條目を御立被成、稠敷被仰付、若御法式に背申者有之候はゞ、曲事被仰付、後々迄永く御法式破れ不申樣に、堅固に被仰出候はゞ、今の風俗改り、奢止て、諸人の困窮逐年直り申にて可有御座候。今の風俗成行にては、稠敷御制禁無御座候はゞ、四民ともに困窮年々に增、近年の間に身上亡申人多可有御座候と、乍恐奉存申上候。

一忠之外御には、御家中惣て諸事質朴に、かざり奢無御座、饗應など只今にくらべ候へば、殊の外輕く麁相なる事に御座候へども、參會は繁く仕候。家居器物など別て輕く御座候。小身の士の家々、只今の如く玄關と申物無御座候。女子の婣嫁の道具など、只今の十分一程輕く御座候。光之公御代初迄は大抵同事に御座候。御代中比より京銀年々御借被成候に付、御家中奢出來候て、其後追年諸人彌困窮仕候。年々御借置被成候京銀都合五千貫目不殘御捨被成候はゞ、誠に難有廣大なる御恩にて御座候へども、御家中困窮は止不申、奢費の御制禁、其後左程稠敷無御座候。右之趣却て彌奢增候て、ならはし悪敷奢強成、猶々困窮增申候。其節斯樣に大分の銀御捨被成候て以來、公儀必御不將に可被爲成候。其上御家中奢を御防不被成候て、御家中も不勝手に成、旁御爲不可然由申たる者も御座候得共、人々勝手能事に御座候得へば、取上申者も無御座候。

一只今御家中の成行にては、定て借用不仕候ては、當時續ニ申間敷候得共、惣ての道理は借物を以諸人の困窮を救申は、却て困窮を增申候。其故は借申候得ば、よけい御座候て後を考不申、無用の奢仕必遣過し、其上利に利加り後に必困窮仕候。只儉約を稠敷致、法度を強立、借不申候樣に仕候か、諸人之困窮を止め申手立之由に見え申候。

一宗英公御代小身之士など、從類多有之者極貧に相見え、食物家居等一向麁相に見え、身の廻りなど甚備り不申、今時成行にくらべ申候へば、極て見苦しく見え申候。然れ共其時の風俗は、私用を不仕、苦敷共不存、身持を隨分質朴に艱難に仕候て、拜領仕候祿一ぱいにて暮候趣故、借銀仕候者多は無御座候。若し稀に借銀仕候ても、如今の身上不相應の過分の借物は不仕。少々之儀にて、頓て元利返辨仕候。今時は借申事を苦に不仕と見え申。惣て借銀と申物は利に利加り候故、久敷返辨不仕程、身上困窮增申事不及申上候。殊借出候へば後々の難儀をば不顧申、有に任せ奢費し申候故、借申程の身上之輩は無御座候と見え申候。御家中今の風俗にて、費を御禁制不被成候はゞ、縱ば宗眞樣如御代之大分の御救銀を被下候ても、彌奢增候て困窮は止申間敷候。

一御先代御法度被仰出候ても難立御座候はゞ、御城內より破れ申候故、下々も御法度立不申由、其節沙汰仕候。近年直方秋月などは、衣服饗應等の御制禁は、質朴に罷在候由承候。

一他國にも上ヶ米御取被成候處多く御座候。內歩行之者傍御同位などより以下、上ヶ米段を御替被成、輕く被成御取候所御座候。秋月小倉抔も左樣に被成候由。知行多取候者は、身上よけい御座候故、たとひ困窮にても飢に及申程之事は無御座候。御足輕御小人水主抔輕き身上の者、父母妻子從類々養申者多御座候はゞ、上ヶ米不仕時さへ養兼申候に、

僅なる身上の者、大身衆と同じく三分の上ケ米仕、其餘分を以て、父母妻子を養申事難成、此後は飢に及可申者多御座候として、難儀仕候由相聞え申候。末々之者御小人水主等、二千人の上ケ米、今の半分御返し被成候て、夫を集候ても漸大身衆一人之上ケ米に當り申程之事にて御座候へば、右抱は大勢、御慈悲は大分の御恵、御損は大分にても無御座候。たとへば琵琶、箏の糸をしらべ申法は、大絃は強くしめ、小絃はゆるくしらべ申候。若し大絃小絃同じく強くしめ候得ば、大絃は切れ不申候得共、小絃は切れ申と同事にて御座候。

一古語に曰、令雖行不合背、此意は總て法度を立申候に、後々迄立候可申被存候。道理なき法度は立不申、若道理薄く候て、道理の分立申ても不叶、法度を出し候はゞ、諸人後々迄永く背き不申様に堅く行はしめ申候。法度を頻に立候て破れ申候へば、上の威も輕く成行恐不申、若背き申候へば、罰も前罪に行申候由に御座候。如此無御座候ては、法度は必破れ申候由に御座候。

一凡上に立申人は下情に通じ、下の心下のことば能上に達候様に有之候を、古來善事に仕候。下の事は上成人如何に才智御座候ても知兼申候。下萬民の憂苦み悅び、末々の理非曲直中途にてさゝきれ候事、有之儀上に能聞達候が善事の由。國家の事はたとへば人の身の如く、人身の血氣、食氣能廻り候て、無滯候へば、無病の人にて御座候。若血氣食氣めぐり不申候へば、病となり申候如く、國家の下民の事も無滯上に能通じ知れ候へば、上よりの施申處遺なく、諸人處を得、逆意不仕候て治り候ゆ。若し下情上に通じ不申、憂苦も善も惡も上へ通じ兼、中途にてふさがり滯候へば、上の施下に行れ不申、君と相とは慈仁に御座候ても、其恩下に被行不申由見え申候。然ば君相と下の間の物頭、殊に民を治め司る役人は才力計りにては難行、民をあ

はれみ申仁愛善心無御座候ては、私多く公の爲民のため不宜敷候故、君相は仁愛深く御座候ても、其惠下に行れ不申候由に御座候。

一國家の治亂は、諸役人の善惡による事勿論の事の由聞え申候。

一天地は萬民を出生被成候根本にて、大父母にて御座候故、人民をあはれみ申候が、天地の御心に叶、人民を苦しめ候へば、必後の禍出來申事難計御座候。たとへば人の子を愛候へば、其父母悦び、人の子を苦め候へば、其父母怒申と同じ理にて御座候。其故人民を愛し救候が何よりよき祈禱にて御座候。罪を天に得れば祈るに所なしと見え申候。國家の長久、御子孫御繁榮、無災難萬福來候事、皆天道に叶申候報應にて御座候。善を行候ても、當時は其效無御座、惡を行候ても同敷禍無御座候得共、天道好還と申候て、遲速御座候得共、必後日に其報應御座候事は天道の常理にて、古今和漢相違無御座候。可畏事にて御座候。世の成行に付御國用御不足御仁愛を御行被成候事、御心儘には難成候事たるべきと奉存候得共、此御心持は常に御たもち不被成候ては、不叶御事と乍憚奉存候事。

一國家の治法、第一君相之仁心、第二用人、是は役人を撰申事、第三治財、是は米銀を用ゐる事にて、民の施濟と自用の儉約との事にて御座候。乍憚申上候。只今申上候處は、私の愚意を專に申上候にて無御座候。只今世上の沙汰を承、又古人の說をも少々加へ候て申上候。私儀は先年以來尊公御執成を以、御厚恩を奉蒙、其上預御慈意に者の儀御座候へば、責て、かやうの承たる事を有體に申上候て、御恩の萬一を爲奉報と奉存候事。

一公儀御國用御不足御不勝手の御事は、當御代に出來たる儀にては無御座候。先々御代よりの御成行にて、殊に近年は世上の風俗に付ての御事に御座候へば、今更各樣御力に不被及御事にて可有御座

候。然共此上何とぞ御國家御幸有之、禍出來不申、御家中在々萬民困窮不仕候樣成御工夫は有御座間敷候哉、爲君爲國の御忠節御志之儀は、拙者式不及申上候。何卒御平世の御心掛を以、後年に至り御一人の力を以、萬民安堵仕候儀は、御家門も彌御榮、御子孫までも御繁昌の御計ひと奉存候。兎角國家の禍福は天道に叶申と、背申との二つにより申事の由に御座候。萬民を御あはれみ被成、御仁愛を以天道に御叶被成候はゞ、自然に御吉事來り、災難は出來申間敷候。凡て國家の吉凶は眼前に見え不申處より出來申儀感應の道理にて御座候。感應と申候は、善を多く行ひ候て、諸民を愛し候へば、其積りは必天道の御冥加御座候て、吉事多く出來申候。又不善を多く行ひ人を苦め候へば、其積必天の御怒出來、天の御咎にて禍出來候。其故は、天地は萬民の父母にて御座候。たとへば人の子を愛し候へば其父母悦候て、能返報を仕候。人の子を苦め候へば其父母怒候て、必惡敷返報を仕候。萬民もあはれみ、或は苦め候へば、天道より其善惡の報應御座候事、人間の子を愛すると惡み候には、其父母の喜怒有之、其返報仕候と同事の儀、古人の說分明にて御座候、是は皆眼前の事損得にては無御座候。即時にはしるし見え不申候得共、善惡積候ては、必しるし御座候事、古今和漢必然の道理にて、相違無御座候。人間の善惡により、天道の返報、當時には夫と知れ不申候へども、積り候ては、夫となしに必其報御座候事に御座候。末々の者僅の善惡を行ふへ、其報のしるし御座候。況高位の人は猶も其施行廣く御座候故、善も惡も其返報大に御座候。古語に一日世に有ば一日の好人となり、一日在官一日の好事を行と見え申候。一日の善人と成、每日を積りて、後には賢人君子とも可成、一日に一善を行候へば、一年には三百六十の善事を行申候。數年の後は積善極りなかるべく候。一

人の愁を止め、萬人の悅申樣、若不申樣志候へば可爲善事候。善を行ふ程可樂事無御座候由。善も惡もならはしにて御座候へば、心に好み身に習候てさも可有御座候。善積り候へば天道の福來り、惡積り候へば天道の禍下り候事、聖人の教數々多く御座候。其上古今のためし多く御座候へば、非可疑候。然れば善を行ひ申程の大成祈禱は無御座候。たとへば人は萬燈をともして功德と心得申候へども、是は少く御座候。功德は大に御座候。一人を救候が大成功德にて御座候。古人は天道を眼前に見し樣に常に恐れ申。今人は天道は遠き事の樣に存不恐申、只眼前の損得をのみ存申候。眼前の得分は輕く候て、大なる身の禍と成候由、古書に見え申候。只今御國用御不足の時節、金銀米錢多く御出し被成、御家中次に萬民を御救被成、御仁政を御行ひ被成候事は、不被爲成候事にて御座候得共、御財寶を御出し不被成候ても、御仁心を以て萬民悅び忝がり申候樣なる御工夫も可有御座候か。殿樣御慈悲に被成御座、各樣も御同意の御事にて被成御座候間、難被爲成御事にては有御座間敷く候。御財寶御出し不被成候ても、御心持御仁直を行ひ被成、天道に御叶被成候はゞ、自然に御吉事多く、御災難も出來間敷候。國家の祈禱と申は、あながちに佛神に賴み申たる迄にては無之、善も惡も能く上に達し候て、國家和合し、治まり申由に御座候。上に被爲立候御人は、如何に御才智御座候ても、上の事は見え安く、下の事微細の儀は、難見候道理の由、然らば今時御家中末々の成行も、委細は上に達し兼可申かと、乍憚奉存候。

一君として人を惠み民をあはれみ、國家を治め給ふ事、甚心を苦め、大に財寶と領地を費し給ふ事ならば、難成事も有ぬべし。君として道を行ふ事、皆日用の近事にて、力の可及事なれば、小心を用ひ少財を用ひてなし安く、行ひ安き事をし、能此事

事をなし出れば、我心安く樂み、民悦びやすんじ、諸人の譽を得て、後代にも名を得る樂み大ならずや。

一君の好事は、諫を悦て善に移るよりよきはなし。人君の惡しき事、人の諫を惡み、我身にはこるより惡しきはなし。

一六百石より以上は、上ヶ米小身程はさして痛に不被成候由、其故は千石にて馬二疋持つ者一疋持、七百石の振廻し、下人をへらし、祭儀の勤に物不入、表面を儉約にして、内證の奢大方ならず、上ヶ米にかこつけ、身持仕る由、大身小身の女子、近年琴三味線不習ものすくなし。ゆるしを取ては、いかなる小身者も銀一枚遣す。ごせ、ざとう[illegible]間所多に居る者一日も隙なし。内證の奢は、此外上ヶ米なき時に一倍せり。六七月は夜々の慰船多くして、ご[illegible]町頭の不乘船なし。今年六月十四日の夜、博多の川内に入る所の慰船百五十艘なり。今度箱崎のすまふ、銀四十貫目取らざれば、雇者にあたへ、自分にも得分なし。見物に行く者、芝居賃、莚賃、辨當日用の費、下人の養ひ、商人、諸職人、隱の費を積ては、四十貫目の三倍より積費多し。先百二十貫目の御國の費なり。内證に琴三味線引く者多き故、下々の小女小歌をうたひ習て、奉公に出候。

一前に上ヶ米御取不被成候時さへ、御家中大身小身下々まで、儉約の御定め堅く被仰付候。近年上ヶ米以後何の御禁制も無御座候て、御家中心次第被仰付候故、御家中下々まで奢不少候。

一昔東海の太守、孝婦を一人、くじを聞あやまりて殺し候へは、三年大旱にて御座候。

一民は昔我同胞の人、一夫もその處を得ざる者我憂なり。況國家の政を執る人、我力を盡して人を救はざるべけんや。政あらく賦斂重ければ民其つゞのひにたへず。親は子を責め、夫は婦をうり、奴

婢を使ふ者は奴婢をうり、老たるものは自ら勞にたへず。凡如此者國中幾千人と云ふ事を不知、あはれむべき事ならずや。今の政は理の當否と事の利害とを不撰、只當時上の利を專にして、臣民の憂を不顧、たとへば、作事を御營み、十貫目にて出來る事を、役人の奸行にて、七貫目にて出來れば忠となり、其後の役人は五六貫目にて功を成す。民苦みて其作事も早く損すれば、大分の御費多し。又後の考なく、當時よきやうにのみ被成候へば、後は必ず禍ありて、俄に御行き當り、前功ことゞくすたり、御費も亦多し。

一萬の大小事共に、只御利得の行く樣にのみ被成、臣下萬民の苦しみを御構不被成、又御國中並に他國の外聞を御構ひ不被成候。

一天の物を生ずる、兩ながら全き事不能、羽有る物は足のみ有て手なく、鳥の類是也。角ある物は上齒なく、牛羊の類なり。花よき物實惡し。櫻、梅、海棠、山茶、菊、牡丹、芍藥、千葉石榴、異葉の類なり。實よき木は華惡し。柿、栗、椎、蜜橘、久年母、銀杏の類是也。士は君の祿を取る故、農人、商人の利を奪はず。耕作をし、商賈をせず。昔唐土晉の國の家老公儀休と云ひし者、其園に野菜を植たる事を見て引捨させ、又家にはたをおる女ありしを見て追出せり。いかんとなれば、士は君の祿を受て、農商と利を不可爭、我家に絹を織り、野菜を植ゑば、末々の野菜を作りて賣る者、絹を織りて賣る者のため迷惑なるべしと云へり。若士として君の祿を受けながら、商賈をし利を取り、田畠を作りて利を取るは、是羽あるものゝ手を求め、角あるものゝ牙を求むるが如し。兩ともに得をする事甚天意に背けり。花も好く實もよくする事は、天道も被成難し。人として天力を奪ふは、天の咎あり。小身の士といへども祿を取るものゝ、商人と利を爭ふはひけふなり。

一人民の上たる人は、民の父母と申候て、萬民を御救助被成との定まりたる御職分にて御座候。近年の御政道は、唯一向下民の財を御貪ひ取り被成る御工夫迄にて、更に下民を御惠み被成候御事は無御座候。御國用不足に付、御自由にて萬民に厚く御施與被成候事こそ不被爲成候とも、非道を不被成御仕置は、何卒御工夫可有御座事の樣に奉存候。只御國用不足に付、御參詣不被爲成候樣有之候ては御大事にて候故、非道なる事をも被成候はでは、御急用達し不申との御僉議にて、近年御家中の痛も、民百姓の苦をも御構不被成、御仕置の由來々の風聞仕候。是は乍憚御了簡違にても有御座間敷候哉。かやうに御難儀の時節に至る程、兎角道理に御順ひ、すぢめの如くに被成候てこそ、御儉約も行はれ、御勝手も御直可被成候。無理を被成候て、御勝手繕ひ申す御計ひは立申間敷候。萬事に付道理に背きてよきと申す手立は御座有間敷候。道理に背き申したる事は、一旦利を得申候ても、やがて衰れ申者にて、災を早く招き申すにて御座候。殊更國家の財用を生候には、計略更大切御座候。たとへば古き俗語にも、池を乾して漁どる時は、魚を得る事多しといへども、明年に魚なし。林を焼きて獵すれば、獸を得る事多しといへども、來年に獸なしと申し候如く、當時利を貪り取り候ては、必後の禍來り申候。人民痛み候ては、國家の可立樣無御座候。古語にも、民是國の本、本固邦安しとこそ見え申候。

一天道は善に福し惡に禍すと御座候。天罰程可畏事無御座候。人を多く殺したる者、必子孫絶滅仕候。又人を殺し不申候ても、人民の物をせたげ取候て、上に集め申候へは、必天の責御座候。此道理をよく御心得可被成候。人の命程大切なる物無御座候。一人を非道なる事にて殺候も大なる惡事にて、此段は不及申候。然れども萬民の財を奪取候て、

下民困窮仕候へば、饑死にも及可申候。また父子夫婦兄弟一處に居申こそ、人間の樂にて御座候。年貢重く、其外納物多く、夫仕繁く御座候ては、民困窮仕、妻子を賣、弟を賣、下人を賣不申候はでは、はすに合不申候故、迷惑至極ながら賣放し申候へば、妻子下人一處に居申候事ならず、耕作朝夕のいとなみもなりがたく、此萬民の苦は、いかばかりなる難儀と被思召候哉。是はよく諸民の心に御成替り被成、御了簡被成候て可然奉存候。此處に御心付御仁心さへ發り候はゞ、いかやうにも御工夫出來可申候。

一凡天道は萬民を生じ給ひ、我も人も凡天下國家の人民は、皆天子の子にて、本は我と兄弟にて御座候。天地は人民萬物の父母にて御座候故、人物を御惠み被成候御心深く御座候。又人は天地の子にて御座候へば、人間の一生の勤は天地に奉レ仕が人間の職分にて御座候。たとへば人の子たる者は、親の家に居申候ては、父母に仕へ申すが子の職分にて御座候。如レ此天地に生れ候者は、兎角平生天道に背き申さず、天地に御奉公申す勤め肝要にて御座候。其天地に御奉公と申せば別に無御座候。天地の子をあはれみそだて申すが、天地の御奉公此外に無御座候。末々の下民さへ人倫をあはれみ申す筈の事に御座候。況んや國家を治め、數萬の人民を御預り被成、御位は猶又天道より其人に諸民を御預け被成たる御事にて、萬民を御あはれみ不被成候ては、職分に叶はざるにて御座候。天道は人間の如く、言語は無御座候へども、道理と申す者立ち居り申候て、直に其人御口上に被仰付たると同事に候。民を御預り被成候へば、國家を預り申す人は天道の御代官にて、民を治め申す役人にて御座候。然るに其治惡しく、天道に背き人望にも不叶申候ては、天道の御怒御座候間、禍出來申す事和漢古今同事に御座候。道理に背き民をせたげ候ては、天道

に背き、天道の御咎御座候故、天道より御助守り被成置は無御座候。是を世俗には冥加つきたりと申候。天道可恐事にて御座候。

一天道は萬民の親にて御座候故、人をあはれみそだて候へば御悦被成候。たとへば人の子をあはれみ、迷惑不仕様に養候へば、其父母甚悦候て、心力の及申程厚く禮を致候。又人を苦め候へば、天道の御怒御座候。たとへば人の子を痛め候へば、其親殊の外恨み怒候て、其返報を仕、あだをなし申候。是眼前に見え申す程の明白なる道理にて、疑無御座候。然者天道の冥加を御祈被成候て、人民を御あはれみ被成候程のよき御祈禱は無御座候。又人を苦め申程の、天に背き罰出來、天罰に當り可申事は無御座候。人の幸も禍も皆天道より御下し被成事にて、其外に財を費し、祈禱仕候ても、天道に背候ては益に立不申、孔子の語にも、罪を天に得れば禱るに處なしとも御座候。其餘の祈禱を頼みに仕候て、天道に背候ては、いかに金銀多く費候て、神佛にへつらひ候ても、無詮事にて御座候上、却て天罰可恐事にて御座候。然れども神社をおろそかに仕候がよきと申すにては聊も無御座候。可敬神は成程敬ひ申すが、道理に叶ひ申すかと見え申候。但し神に祈申すにも、定りたる禮と道理御座候て、道理なき事を祈り、非禮の祭を致候はゞ、神は正直聰明故に、御受不被成と見え申候。

一大風大雨地震等の天災は、いかなる政道正敷御世にも御座候。然れども政道のよきには左様の變少く、惡きには災變多く御座候。天理に背きては、目に見え不申處に大なる損失多きものにて御座候。此道理古來和漢とも多きためしにて御座候。私式凡夫は目に見え申處にて考へ申候。目に見え不申處に禍も幸も出來候。無理非道なる事を以て民を苦しめ候へば、其取申したる貪分よりは、天道の冥加つき候て、大なる損失も有之物にて御座候。

昔唐土にて東海の太守、罪なき孝婦を、讒を信じて殺し候へば、其所三年ひでり仕候。其讒仕りたる者を得て、大守是を殺し、孝婦の塚を祭り候へば、即時に雨降り申候。かやうの道理は無疑事にて、ためし多く御座候。

一芝居物見物事など、國家ゆたかに人民も財寶じゆんたくに御座候上にては、國家の賑ひと申す人も可有御座候。只今上下困窮の時節、下民の漸く餓死をまぬがれ候は、幸に候時節にて御座候に、かやうの類の慰物は、時節不相應にて、他國よりもあざけり申す由風聞仕候。殊に淫樂などはやり、諸人の風俗も惡しくなり申す事と聞申候。

一凡國家は其國家を始めて興し申したる人の法式仕置を其儘にて守り、其法式を替不申候へば、いつ迄も國家は長久仕るものゝ由相見え申候。其故は國家を初めて保ち申す程の人は、抜群に人に勝れたる才智無御御座候はでは、大國大家を始めて起し申す事は成不申候故、其先祖の仕置きたる事は、其身若年より艱難を經候て、よく〳〵鍛錬工夫仕りたる法式を立て置き候故、後代に子孫其先祖の法式の儘に行ひ候て背き不申候へば、いつ迄も國家は亂亡仕る事は無御座候。其子孫に至り其先祖の法式に背き、新法を出し候へば、必國家亂亡仕候。御當家も如水公長政公は御勝れ被成たる一代の英雄にて、古來を考へ見申すに、御兩君の樣なる明君は、世に稀に御座候樣乍恐奉存候。御子孫御代々如水公長政公の御仕置に從ひ被成、御仕替不被成候はゞ、いつまでも御國は長久目出度御事たるべく候。此御心得も亦御肝要と奉存候。

一乍憚申上候。殿樣御仁愛深く、御結構成御生付にて被爲成御座、乍恐世上類すくなき御仁君と奉存候次に、各樣御心持其儘上の御心を御一同被成、御結構なる御心毛頭も無御座候。御結構なる御生付と乍憚奉存候。此儀日本諸神へ奉掛候追從は決して不

申上候。私一人斯樣に存じたる事にては勿論無御座候。諸人ともに斯樣に奉存と聞え申候。然ども近年御不勝手故、御家中萬民の迷惑仕候事、諸人の憂歎き不大方候。君も臣も右申上候樣に御慈悲深く御座候て、下にては大に違申候は、如何仕たる事にて御座候哉と諸人も申候。御國中の萬民苦み申のみならず、他國の批判以ての外不宜、誹謗仕事甚敷由聞え申候。只今御諫を被仰上、如古法之急度御改被成候事は難成御事、此段は無餘儀御事に御座候。諸人も同前に可奉存候。然其各樣の御心得を以て、只今の御時節にも、筋目能く道理立候て、世人の御光と奉存樣に、難成御事とも不遺存候。是又世上の人々申所と同前と聞え申候。日月は明に御座候ても、下に浮雲覆候ては、日月の光地上には移り不申候。如其いかに殿樣御慈悲深く、各樣御同意に被爲成御座候ても、下の事を執行處申役人中の心に、仁義の理を捨、偏に利慾とのみ被成候樣の御仕置にては、君上の御心は下に行はれ申間敷候。凡國の政治は用人と用財と此二つにて御座候。

一長政公の御時の事は、人覺え不申候へども、承り傳に知り申候。忠之公、光之公、當御代、此四代の内、時の成行にて御國中の臣下萬民、今程困窮迷惑仕る事無御座候由諸人申候。然ば其御時節に御家老職御務め、殊に御權勢第一無双の御事に御座候へは、御慎御勤の御心得可有御座候事にて御座候事。

一不慈不忠奉由明章云々、其國を始めて領する程の人は、諸人に勝れたる人なり。殊に微賤より起り、艱難をへて立身仕りたる人なれば、世上の事民間の事まで、能く鍛練したる人にて、其人の立置たる仕置法度萬の事、大方は能き手本にて、如其に從ひ行へば、渡世難ても國の仕置不亂、國家長久す。若子孫たる人かしこだてして、先祖の仕置法

度に背て、新法を立て、或は不善人を用ひて、新法樣々作り出し、民の憂、國の衰微を不顧、當時當時利得有る事を工夫し出して、先祖の法を破れば、必國人の迷惑と成り、國家の亂となる事、唐土も日本も、古も今も同事なり。御先祖の法に從へば國も天下も何十代をへても、亂れ衰ふべき樣なし。

一國は民に保ち、民は信にたもつ。信とは誠なり。一度下知したる事まで相違せぬをば云ふなり。朝に替り夕に替る事は、信を失ふなり。法度仕置を立んとせば、先諸人打寄て詮議し、能々思案工夫し、民の痛み國の費にならぬに極り、いつまでも行ても害なき事ならば下知を出すべし。若下知を出したる事、後日に國の費、民の害に成りて行はれざるは、是其職に有人の恥なりと知るべし。如此儀は國民皆上をあなどり輕しめて、仕置しまらず、他國迄誹をなし、惡名を傳ふなり。

一凡學問と申者は、勿論身を治、殊に人を治、國を治申稽古にて、有用の學を申候。有用とは用に立申事にて御座候。用に立と申は、右の如く身を治、人を治、國を治申事にて御座候。如此用に立申學問を、又は經濟の學とも申候。經濟とは治救と讀、世を治、人を救學問にて御座候。此外の事を學び候は、皆徒事にて、殊に害に成申事にて御座候。

一世間の批判に、只今の時節御家中上ヶ米仕、百姓より五歩の免御取過被成、町人より諸運上御取被成、萬民憂苦申時節にて御座候。左候へば各樣御職分にては、朝夕御勝手御直り、諸人の貧困に苦み不申樣に、朝暮御工夫可被成儀に御座候處、各樣左程に不被思召上候哉。上方より相撲、歌舞妓等被召寄御見物被成、左樣の御慰のみにて御仕置方の御工夫は無御座こと見え申由と聞申候。其上左樣の慰事、御國中ゆたかに御座候ての上にては、賑ひと申事も可有御座候。是程萬民困窮仕候時節、諸

侍下々百姓町人迄、大分の財を費し、大事の隙を費し、上方より遊物を呼下し、其上榎敷芝居錢を出し、數日の隙を費し候事、殊外時節不相應の由、他國にても誹謗仕候。是又世上の沙汰承候。

一油薪等しめ買しめ賣運上の事、公儀の御利得又は町人等一兩人得利候故、御國中萬民の迷惑、並秋月直方近國迄難儀仕候由、是又世上に風聞沙汰仕候。

一父祖より祿を受來し人々に替り、一かど施救なくしては諸人の望叶難し。

一君大夫の困窮は、其身の飢寒の憂なく、奢華を極る事不自由なるのみなり。我身の俸養に於てはかかる事なし。下民の困窮は衣食乏しくして飢寒に及ぶ、あはれむべし。同じ人に生れて其苦樂の違如此。君大夫たる人、すこしこゝに心をとゞめ給ふべし。

一父祖より高祿を御取候人々には御替り、御一代に御大祿御拜領被成御座候へば、御中間僚の御衆に御越、一應御忠義無御座候ては不叶儀の由申候へば、其御覺悟可被成御事に奉存候。

一天道好遂と申候て、善を行候へば天道より其返報御座候。惡を行候へば天道より其返報御座候て、災難出來申候。末々の者は惡事行候ても、差而諸人の迷惑に及申程の事は仕出し不申候。上より被成候事は、少々惡事にても諸人の迷惑仕候事にて候へば、末々の者より上々には別而御恐愼被成、天道の御災難を御下し不被成候樣に可仕御事に奉存候。天道の罰も災と申事も、當時々々てきめんにしるし見え不申候故、諸人古來油斷仕不恐候得共、何の故となく、必其善惡の報御座候故、天道好遂と申候。大隅守樣御病氣御大切にて、御難儀の御事御座候。當年怡土志摩、其外諸郡風損などは、御國計りの損亡の樣申候。かやうの事は御利得のみの御仕置、民の害申儀多御座候へば、其天道の

御たゝりにても可有御座候。
一御家中に大分の拜領を御捨被下候故、上ヶ米上候ても痛不申と說御座候。夫は大分拜借を其儘拜領の衆は、一應勝手能可有御座候。左も無御座衆中は、痛不申と申事は御座有間敷候。又百姓も有付居申候故、五歩差上候ても、差て痛不申と申說御座候。是は皆上の御氣に合申事故、左樣に申儀と可被思召候。近年次第々々に御家中並町人在々迄、困窮仕事一言御尋不被成候て、只御推量の上にても御合點可被遊候。御家中小身末々迄、常々の如く御知行御切米拜領仕、在々百姓常の如く、作德を取候てさへ續き兼候。上ヶ米仕候て痛不申道理無御座候。縱令御家中百姓痛不申とも、此儀無理成事にて、少も下々の財を御奪ひ取可被成筈にて無御座候。御勝手不如意に被成御座候て、獨道理有御仕置を以、御勝手御續き被成候樣にこそ本法にて御座候。惣て諸事定たる本法をくづしては、當分利を得候とも、後に至り必有災、難儀眼前の道理不及申上候。

一主人慈悲深く、次宰臣家老善人にて御座候ても、其末々の役人の心得違不仁に御座候て、上の惠み下に下り不申、萬民迷惑仕候て、上の慈悲も大臣の善心も用に立不申候。夫は主君並大臣の惡行にては無御座候へども、萬民迷惑仕候へば、畢竟下の恨上一人に歸し申事に御座候へば、惣ての政は先其役人を撰申が大切成事の由相見え申候。役人の才人品を撰申候は勿論、不才覺にては用に立不申候得共、才覺斗にて不德に御座候ては、君の爲民の爲不可然候。我身の爲を差置、君の御奉公專一に存、扨民の爲を歎き申が役人の第一の心得と見え申候。昔より君の爲と申候て、民より物をしぼり取候て、忠節に仕候人をば、聚歛の臣あらんよりは盜臣有之が增の由有之候。盜臣は君の物を盜申迄にて、民の恨は無御座候。聚歛の臣御座候へ

ば、萬民の憬出來、國家の災に成申候。

一上座、下座、夜須三郡より毎年豆、粟、ひえ、紙、茶、莩、煙草其外の者共持出候て、博多へ宿を借り、右の物を代替歸候時は、宿賃にも右の物を置、鹽を買歸申候。去年以來鹽運上被召上候て、鹽高直に成候故、右の品々持出不申候故、博多の者難儀仕候。鹽と申物は、日用の物にて兎角買申させては難儀御座候に付、御國の鹽高直に御座候故、筑後、肥前、他國に右の品々を持行賣候て、鹽を買罷歸候。他國の鹽を買候は、御法度と以被仰出候得共、貧成下々、高直成鹽を買申儀不勝手故、御制禁に成候ても立申間敷候。若強て御制禁被成候はゞ、罪人多く出來、御仕置の妨に成、御慈悲も行れ申間敷候。

一長政公御代は、御代官衆へ皆濟狀をも御直に御出し被成候。御國より江戸へ送金候少々の物も、受取被成候ての御直判にて御座候。其外の儀萬皆御直の御仕置にて御座候。忠之公御代迄も執權役と申は、即三左衛門殿、平右衛門殿、六右衛門殿なと被成候て、別に執權と申役は無御座候故、何事も御老中御さばきにて、下より伺申事も、御家老中へ尋埒明申候。又何事も御老中の御裁判にて埒明申候。今時は、各様御合點被成候ても、下の役人同心無御座候ては埒明不申、上の御威勢輕被爲成候由、各様御詮議の上にて、善惡を御定被成、御下知を被加事は無御座候て、役人衆次第にて、諸人の心に合申事のみ多出沙汰仕候。今の分にては、各様は御役人衆へ御隨ひ被成、上は下に御成、下が上に成候て、さかさまの趣諸人申候事。實にて御座候哉。末々にて申上候。近年御仕置、殿樣には御家中並在々、かやうに難儀仕候事御存知不被成、只御家中差して痛不申、在々は在付居申とばかり御聞被遊候。御慈悲成殿樣にて御座候間、是程萬民難儀仕候事御聞被遊候て、何卒被仰付樣も

可有御座候得共、只御大名故委細の事御存知不被成候故、御心にも不被掛候て可有御座と申、次は各様萬事御國の御仕置悪敷と申者、諸役人を初末末は猶以第一慮外と存、又御氣にも御快不被思召儀にて御座候へば、左様に委細に申上者無御座候故、御家中萬民に至迄、近年難儀仕事、御存知不被成候て可有御座候。若委細御存知被成候て被掛御心、何卒被成様も可有御座候に、下の儀上に不通にて、可有御座候由申候事。

一近年御國の御仕置非道成儀と、御家中は不及申上、肥前、筑後、五島、平戸其外にも専沙汰仕候由、御國に居申候とても、拙者式の様成世間にうとき者は、御國の事不及聞儀多御座候。他國の者は却而委細承候て沙汰仕候。御國の者こそ遠慮を仕り、上を恐憚申候。他國の者は其恐無御座候に付、何の遠慮もなく、御國の事御仕置、非道成由誹申由聞申候。甘木など上座下座邊、西は怡土郡東は嘉摩、遠賀などは、公領他領に續き、近所の儀にて朝夕通路仕候へば、御國中よりは能知れ申由聞申候。かやうの儀各様には申上る人も稀に可有御座候へど、委細には御聞被遊間敷候。此儀日本の神大小の神祇を奉掛候。非虚言候故、私式とは乍申、笑止千萬奉存候事。

一令出惟行云々、惣て御法度御下知都て何事を被仰出候も、兼て能々御詮議被成下候上に御尋被成、末々迄勝手能立、安く被行可申に極たる事被仰出候て、後迄御仕置御法度不相變様に被成候て、諸人御尤に奉存、御法度能立可申候。當分御德用のみ御考、又は役人の贔屓により、諸人迷惑仕候無構へ筋に、能様にのみ被申上候へば、各様は下々委細の利害御尋不被成、一向能事とのみ被思召候て、被仰付候て可有御座候。

一近年御家中諸士、衣服、諸道具、飲食饗應、家居、逐年華美に成居申候。殊に内證に奢年々倍申候。

大猷様御代上ヶ米不被召上、殊京銀望次第御借被成候時は、中々只今程には奢不申、華美成儀不仕候。其上其時節は衣服の御制禁強被行、小身成る者は皆木綿を着申候。今は衣服心次第に被仰付候故、我勝手にきれいに仕り申候。大隅守様御年若に被成御座候へば、御召仕候諸士も、衣服等きらよきを御好被成候へども、左程に奇麗を盡し候へとは、不被仰付候得共、御部屋中成行にて、衣服奇麗に不仕候ては、御首尾も悪敷様心得、我勝にと奇麗に仕候。かやうに年々に奇麗に成候ては、後年に至り候ては、御勤奉公申上兼可申候。

一今時御家中の風俗は、自分の倹約を仕、身上相續き申覺悟は不仕候て、偏に町人の米銀を、手立を以て借取仕、買掛仕候て、不埒手立を仕り、自分の仕方は身上よりはるかに奢、不入事に財を遣費申候。かやう御座候ては、諸侍町人共に段々の難儀に罷存候。諸侍中風俗年々に不宜成、人の物を取道候儀を手柄の様に心得申候。夫を見習下々百姓に至迄、年々に、ふりちきに成行申候。

一寛猛と申候は、國政の緩急、のべちゞめの加減にて御座候。寛はゆるやかに讀申候。民のくつろぎ申様に、遂政不仕様に仕候事にて候。猛とはたけしと讀申候。民の奢を戒め放逸をゆるし不申、手強くきびしく仕候て、手を見せ不申事にて御座候。寛は仁愛より出申候故、内心には成程民をあはれみ養ひ申様、柔か成心持にて民に對し候へば、表向成程柔和故、民の油斷不仕様に、假初にも不義非禮成候不仕様に、物柔かならざるは猛にて御座候。表向柔にてハ民怠り申候て、非義無道を仕申候。内心温和に無御座候て、不仁にては民其處を得不申候。昔鄭子産と申賢人、(以下略)

一御算用所の吟味、山奉行の吟味など、皆反古に成、虚無に成候へば、向後諸人公儀の命令を無頼可存候。上方などにて、役人共御外様御用聞間、付

たる抔も、御破り被成候。何事も御倚多御家の樣に可存候。

一凡御法度は一度出て又變候得ば、諸人御下知を信向不仕候。凡法度を立候て、民の爲國の爲宜敷、後後迄何の無障を兼て能撰立候得ば、いつ迄も其法度立申候。若頓て破れ候樣に有之候ては、民あなどりとかくて、上の威光も輕成申候。一度立候法度は、後々迄堅守候樣に仕、若法度に背者を、たちまち嚴科に行候樣有之候はゞ、法度被行申候。朝夕替り候樣成法度は、兼て不立が能御座候。夫は小兒の戯の樣に諸人存候て、あなどり申候。

一五拾石百石取の小身者、子供數人有て、女子も其內に二三人有、今時のならはしにて女子を有付るには、殊外物入候へば、いかに小身とても其まねかたをせざれば不成、其用意にとて僅成祿の內飯米をもへらし、萬の遣ひ用を差置、艱難をこらへ、女子婚禮の時の爲にとて、蟻の塔を組上申如く、少づゝのけ置候て、扨其銀を催合に入れ置て、年々の利付能頃に成、女子有付候時、一臺たりにも成申候時、御家中一同に催合を被召上候故、手と身との樣に成、女子有付可申手立も無御座候。かやうの人々の恨は皆上に歸し可申候得ば、御冥加の御爲不可然事に奉存候。凡かやうの末々數萬人の憂苦みを、各樣へは能御詩聞被成て不叶事に御座候。

一先其國に初て被封候主君は、其國を取申程の智惠にて御座候故、諸人に勝れたる御事にて御座候。其先祖の成置候仕置法度の如くに仕、少も破り不申候得ば、天下も國もいつ迄も長久仕候て、亂亡と申事は無御座候。後代に至、かしこだてを仕候て、先祖の仕置を改替候て破り候へば、天下國家の政亂、國天下滅亡仕候由古書にも見え申候。光政公御立置被成候御仕置、近年は彼是御破り被成候由世上にて申候。凡古きを改候事は、十倍の好事にて無御座候ては、改替不申ものゝ由見え申候。

一國政は無亂などいへども、無亂有備をなすべし。臣民疲勞しては軍事に備難く、且臣背民恨ては戰をなし難し。

一五歩上の儀公儀彌重候。公役に出候ては宿所にて食中諸物給候事不成候。

一鶴一羽に付、代貳匁づゝに豐後境に行買求候。大分に鶴入申候事、公役の外諸郡に薪大分入申事。

一暴歛困窮なれば、當時民の利を奪ひて財を得れ共、人恨天怒て、必災禍起り年凶なり。仁厚にして民を愛すれば、當時上に利益なしといへども、民悦、天の惠有て災無之年豐なり。

一唐土にても、君も臣も我儘にて、人の諫不聞人は必亡申候。諫を能用候人の亡たる例し無御座候。君も臣も家の亡身の亡る事を（此間數字缺落ある歟）ひたもの亡候樣になるを仕、夫を好候人は必亡申候。人亡しか申候時は、天道より被亡候。

一初て國を御取被成候御人は、御武功は御勝れ被成たるのみならず、御智慮も御勝れ、其上若き御時より御老年迄、久敷世間の萬事に御なれ、御功入たる御事にて、其仕置御法度などは、皆能御心得被成候て、御子孫の爲、臣下の爲、民の爲に宜敷事にて御座候故、御子孫其御仕置御法度に御順被成候て、御開被成候得は、幾代も御續き被成、御長久御國目出度事に御座候由、かしこだてを仕臣下など出來、御意に應候て、其人の申儘に被成候得ば、必其國は亡申事の由古傳に相見え申候。

益軒先生與宰臣書終

克明抄

人君爲學之要

一人君の御學問は、必書籍を御よみ文字を御覺え被成にとゞまり申事にて無御座候。先御身を修め次に人を治め候が、大人の學問の大法にて、此二つの大法に外れ候ては、人君の職分を失ふ故、たとひ萬事にかしこく、諸藝に達し、博學にて文才すぐれ、世間の見聞よくしても、皆末の事にて、用に不立事にて候。平生の思案も勤も、此二つの外他の儀有間敷候。此二事に付て至極の道理有之、たとへば弓を射申に的を立るが如く、身を修め人を治るには、至極の道理を目あてにすべし。此目あてに不外樣に志す事肝要なり。此目あても亦一ヶ條にて、右合せて三ヶ條、大學之道に三綱領と云は此儀なり。第一身修まらずしては、其本亂て末治まらず。人君は國土萬民の主にて、萬民を御治め候が職分にて候へば、唯御身に一つを御修め候迄にては、事不濟故、人を治め候が又大切なる儀にて候。末々の者の如く、書を讀み文字を覺え申つとめは、大人の學問にあらず。一文不通にても、只身を修め人を治めたまふが、誠に人君の學問なり。

一家康公は御文才もなく諸藝萬事御不調法なりしかども、善道を被聞召事を御好み、智仁勇の御德義おはしまして、人を治め給ふ事御器用なりし故、天下の萬民悉く思付、古今無双の明君なりしなり。信長公の子息織田常眞は、天下の藝七つありて、萬事器用なりしかども、智仁勇の德なくして、人の主君に御なり候事不器用なりし故、國天下を御失ひ、笑止なる成行なり。末々の物よみ申者さへ、書物文字の末ばかりに心を用ひて、學問の根本を忘れ、道理を好まず候得へば、是俗學と名づけ、儒者の學とは不申候。此故に書をよむ者は世上に多けれども、道を知りたる者は、百人に一人も無之、殊更人君の

御學問は書物をお讀なくとも、只萬事の道理を御吟味被成候御心を正しく私なくして、其正しく私なき御心を以て人の理非を御正し、萬民安堵し、國土治まり候樣被成候事誠の學問也。然ば學問とは、身を修め人を治め申事古の儀にて、書物は只其事の覺え書にて候。世上に學問の本意を取失ひ、只文字の沙汰又は名聞備の爲計りに書を讀が故、身を修め人を治め申大法に外れ申候て、學問は用に不立物に成行申候。古の學問は左やうにては無之候。

一身を修るには、先心を正しくするが本にて御座候。心は身のあるじにて候へば、不正候ては身をさまり不申候。心正しきと申は、私欲にまよはず、諸人に對し依估贔屓の私曲なく、喜怒愛憎のかたおち不申樣に心をつくべし。其上我身のまじはる所の父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の五倫に對し、道をあつく行ひ候が身を修る工夫なり。

一人を治るは、國土の臣下萬民廣大なる儀に候得ば、尤をさまりがたき筈にては候得共、君の御心さへ正しく御座候得は、能治り申候よし。民の心元來すなほなるもの故、上さへ正しく候へば、おのづから夫に從ひ正敷なり申候。論語にも君子の德は風なり、小人の德は草なり、草に風をくはふれば必ふすと見え申候。萬民の治りて上に付申も、亂れてそむき申候も、只上のみ一人の御心一つによる事なれば、大人の御心持は極て大事なる御事なり。國土を御治め被成、御職分殊外おもき事に候得は、人君は常に此儀を御心に懸られ、朝夕御工夫被成、御あやまりなき樣、暫時も御失念なく、御つとめ被遊儀第一の御事にて候。惣て古より、大人は多分御身の慰事はかりを被遊御心たるまでにて、身を修め人を治る工夫に不被入御念候故、いかに御生付よく、御才智御座候ても、大人の職分においては、疎略なる儀多く御座候。是を以て、古より亂れたる國は多く、治りたる國はすくなきは右の故な

り。人を治る次第は、親戚家老を先として、次に諸士末々の奉公人、百姓町人に至る迄、其位の品により、厚薄はかはり申候得共、御恵被成、御心は依怙贔屓なくおほやけにあまねくして、善人を用、小人を遠ざけ、賞罰を明かにし、善悪をわかち、國土臣下萬民の安堵仕、たのしみ申候て、悉く上上に思付き、一人も上々をうらみ不申樣に被成候が目あてにて御座候。何程御慈悲に御座候ても、若萬民辱不存、上々をうらみ候て、思付不申候はば、いか樣上よりのしかけ悪敷、めぐみ不足か、又諸役人愚にして是非にくらきか、或は私曲有て、正直に無之かと思召候て、民を御とがめ不被成、御身をうたがひ、萬民のおもひつき申樣に御勤候が宜道理なるべし。行て不得事あれば皆かへつておのれにもとむとて、人のいまだをさまらざるも、おもひ付ざるも、我身のとがと思召、幾重にも御身をとがめ、御工夫を被成候が、人を治め候工夫にて御座候。不及申事なれども、人の思付樣にとて、一旦の手立才覺を以、諸人のほめ申樣に仕かけ候は、寔の道にあらず。如斯すれば却ておもひ付ざるもの多く出來申候。譽を求るは却て毀の本になり申候て、何の益もなき事に御座候。只何となく誠の道さへ行ひ候得ば、名聞を求めずしても、其誠おのづから顯れ、人も思付、譽も求ずして來るものにて、何事も求ずして來候が誠有しるしなり。扨民の思付申道は仁なり。第一仁とは慈悲の心なり。臣下萬民はいやしく候得共、根本は天地の氣をうけ申所、君と一體のものなり。殊更君子は民の父母にて候得ば、御あはれみ深く、萬民を子の如く御不便に思召道理にて御座候。然る時は萬民もまた君を父母の如く奉仰候が、自然の道理にて御座候。民に仁をほどこすには、恕し申候て、我心にこのむ事きらふ事を以て、臣下萬民の心の内の寸尺を取見候。必萬民の心も我心に少しもちがは

す候故、我のこのむ事を人にほどこし、きらふ事を人に仕かけ不申候へば、諸人の心に應じ候故、萬民皆思付申候。人ごとに金銀俸祿をあたへ申事は難成候へば、それは仁とは申さず候。只人の迷惑せざる樣に行つて、人を御すくひ候はゞ不及申、御すくひを蒙らざる者も御情を感じ申候。亦人君は民の心に御成りかはり候て御察なく候へば、民のうれひよろこびを能御存知なくては、仁の德下におよびがたく候。

爲學之工夫

一人君の、身を修め、人を治る學問のつとめに、知行とて二の條目あり。知とは、身を修め、人を治る道を知る事なり。行とは其知りたる道を身に行ふ事なり。先道を不知しては、善惡にまよひ、行ふ事あやまり多きものなれば、道をしらずしては行ひがたし。亦知りても身に行はざれば、知りたる事用にたゝずして、知らざるに同じ。此二ツは車の兩輪、鳥の兩翼の如く、一方かけてはなり難し。此二ケ條にはづれ、道をも不知身にも不行學問は、誠の學問にあらず。用にも不立いたずら事成べし。

一人君の道理を御存知被成候學問致知の工夫は、廣く古今天下の道理ある事を尋聞、何事によらずあさき事近き儀にも、道理ある事に心を用ひ、能聞屆、又我身に立かへり、心に思案し、善惡を分ち、善を用惡を捨候て、萬事の道理をきはめ我智慧をみがき候が致知の工夫にて候。何程利根聰明にて、才智他に勝たる生付にても、一分の智慧を用候ては、其存候事せばく、智慧廣まり不申候て、智慧萬事に通じ不申候故、身の行にもあやまり多し。我身に自滿し、我一人の智慧はかり用候ては、却て其智慧害に成し故、すなはにして愚なるにおとるものなり。一人の智慧は限有るものにて、萬事

の道理は窮なき事に候故、古人聖人とても一人の智慧にて、國天下の萬民を治め、萬事に通じ申事不成儀に思召し、先我智慧を差置、廣く諸人にものを申させ、事を尋問、末々の申事まで御聞屆候て御心に思案被成、よきをば御取用、あしきをば御すて候て、世上の人の智慧を集て、我一人の智慧に被成候故、大智に御座候。古語にも、問ことを好めば、則ゆたかに、自用れば、少しきなりといへり。此意は人に物を問事を好めば、諸人の智慧を取用申候故、我智慧廣くなり、我智慧ばかりを用て、人の智慧を不用れば智慧せばしと云事にて候。萬事萬物の道理は根本一なりといへども、其事により、其物により、或は其時其位によりて、道理の品替れり。主君は父母と共に大切なる道理なれ共、君には忠を主とし、親には孝を主とする道なれば、いつも定りたる道理なれども、夏は葛衣を着、冬は綿入を着る、時によりてよろしき道理かはれり。斯樣の事は誰も知りたる事にて云に不及候得共、常に不知儀、遠き事、又は六ヶ敷こまか成事に成候ては、うたがはしくまぎれやすき事多きを、我ひとりの智慧にて分ち候へばあやまり多し。世間の萬事、我一人にて難知候事なれば、夫々の事を能く知たる者に委しく尋聞て、其事に立入、其理を不知候て、只上かたよりひとへに推量仕候ては、必道理に當らざる事多くして、國家の政法萬事の上にあやまり出來るものなり。兎角我智慧をかくし候て、あらはし不申、我心に自滿なく、諸人の申所を詳に聞、用人に詞を申盡させて、其上にて善惡を靜に了簡仕候へば、道理ちがひ不申候。我智慧を先立、人の申事を承屆不申候ては、心得そこなひ多く、道理違ひあやまり申候。然故に人君の御學問は、御智慧を御用不被成、只御智慧を御廣め被成候が、宜儀に御座候。智慧を用申とは、我智慧をひとへに賴み、自滿仕、諸事

皆我智慧にて濟申樣に存、事の善悪を我一人の心を以てはやくきはめ、申事に何程よき道理御座候ても用不申、只我智慧ばかりを立申候故、よき事を承り候ても役に立不申候。又臣下の申事を取上不申候ては、主君の御爲を存寄申者も申上候事なりがたく、善言下に埋れ申候。下の義滯りなく上に達し、末々の者迄存寄候儀を、申上能樣に被成候得ば、何程も主君の御爲によき儀多可有御座候。總て大人は微元かく、御生付に付て御才智もかしこく、御生付被成候か、又御幼少より結構なる事を御見聞被成候故に、末々の者よりかしこく御座候へとも、世話に燈臺本くらしと申如く、上より下を御存被成候事は、暗く御座候てが下の儀委細上へ達しかね、下の患へ苦みをも御存不被成事共ほく御座候。燈臺の下を御てらし被成御工夫可有御座候儀御座候。智慧をひろめ申とは、御取出し不被成、御心底に深く御納め置き、廣く人に物を申させ、其能事を御聞用候へば、御智慧自然に廣大に明かに成り申候。是道理を御究被成、御智慧を御極め被成候御學問の御工夫にて御座候。

一身を修め、人を治め申學問のつとめ、第一ヶ條は、行をつとむるにて御座候。存候ても行不申候ては、存たる儀用に立不申候故、行ひ申事おもき儀にて御座候。行ひ初のつとめは、先我心に善しと存たる儀をば、必好みてつとめ行ひ、又悪と存たる儀をば、あしき匂ひをきらひ申樣に、眞實に嫌ひて、必やめ申事が眞實の道理にて、是を心を誠にすると申候。近き譬にて申候へば、病氣にたゝり申食物と存ながら、口の欲にひかれ、旨き味を好みて、御毒になり申物をもたべ申候。是自欺と申して、御を不實儀にて御座候。善と存ながら行不申、悪と存ながらやめ不申は自欺にて御座候。如此自欺くをいましめ申が誠意の工夫にて、我心に存寄る樣

に眞實に善を行ひ、惡をやめ申が誠意と申候て、行のはじめにて候。誠意の上には、心を正しく、身を修め、家を齊へ、國を治申が行の勤にて御座候。

改過

一古人の詞に、人聖人にあらず、誰かあやまちなかんや、過て能あらたむ、善是より大なるはなしと御座候。然ば過は必ず人々有之ものにては御座候。只過を知つて改申が肝要に御座候。必ならずあやまり申が、力及ばずといへども、過と知りて改不申は、たくみて惡を行ひ申にて候へば、只過と申にては無之、即惡と申ものにて御座候。但人の上の過をば能見付申候得ども、我身には贔屓に御座候故、我あやまり惡事を存候事はかたく御座候。我身過を人に申させて、改申候は肝要にて御座候。たとへばいかに目の能見え申者も、我面を見申事はなり不申候故、鏡を以て我面の影を見申如く、よき光も我身あやまりを見付がたく候故、智慧ありてへつらひなき正直なる人を鏡に仕り、我身のあやまり惡事を見せ、過惡を改め候へと古人の語にも御座候。身の過を不存ほど暗き事御座なく候。又明鏡も其うらはくらく御座候へば、心にも明かなる所も暗き所も御座候て、あやまちは必其暗き所より出來申候間、我身をみづから省み、過を改可申儀に御座候故、諫をきく事を悦、我過を人の告申事を好み申をば、古人も至て能事に仕候。人をほめ申候へば氣に入、人のあやまりを告げ申候へば、氣に不入ものと誰も存居申候故、人をほめ申事は易く、人をいさめ申事は同輩下輩の者にも申がたき事にて御座候、殊更主君へ對し候ては、諫を申上、其過を告申儀は極てかたき事にて、古來戰場にて一命を捨申者は多く候へども、主君に諫をつよく申者はまれに御座候。たとひ諫を申と

ても、主君の威を恐れ候て、言を強くしひ申事成がたく候故、惣じて大人は御身の御あやまりをば御聞被成候儀成がたく候。然ば大人は御身のあやまりを御聞被成候儀を御好み被成、御身近く被召仕候者、其外末々の者迄、存寄たる儀を申上よき様に被遊候て、御過を御聞被成候が何より能御學問にて候。たとへば酒食は人の好み申ものと存候故、人の辭儀仕候をもかへりみず、誰も人にしひ申候。若諫を眞實に好む人御座候はゞ、酒食をしひ申様に、いさめをつよく申者も多く可有御座候由、古人の言にも御座候。又古人の詞に、上にある人下のいさめをきかず、耳ふさがり候へば、下にある者いさめを不申候て、口をとぢ、おしに成申候。耳きかざる人と、物を申さゞるおしと出合候て、國家を治めんとするとも得べからずと御座候。

知人

一人君は被召仕候人の善惡を御存知被成候が御肝要なる儀にて御座候。人を御存不被成候ては、善惡邪正皆有所ちがひ、諸役人皆職分にかなひ不申候故、國土も治りがたきよしに御座候。正路にて智慧も御座候人は國家の寶にて御座候、其次は惡心なくして才覺ある者を諸役人の位に置き候へば、萬事よく治り申候。國を治申は第一主君の御心、次に家老次に諸役人さへ正しく御座候へば、自治り易く御座候。然ば國の治亂は人を用るの善惡により申候故、人君は人を能御えらみ被成候事肝要の由に御座候。惣じて人を知ると申事、古人も成がたき事に御座候。其故は人の心中見え難き物にて御座候故、朝夕心安く交り申者も善惡存がたき儀に御座候。誠に主君の御前、次に家老の前に出申候ては、誰しもつゝしみ申、いかに惡人小人にても

其惡をかくしいつはり、善人の樣に仕候故、惡敷者ほど左樣の外をかざり申事に、わるがしこく御座候へば、却て能者の樣に見え申事にて御座候。然ばいかに智慧明かなる御人にても、上より下を御目利被成候事、傍輩を見申より見えがたく、見損じも多く御座有べき儀に御座候へば、人君はたやすく人の善惡を御きはめ不被成候て、諸人のほめそしりを委細に御聞被成、其上にて能御吟味被成候へば、目利はづれ不申よし、古書にも見え申候。たとへば小堀遠江殿よく茶湯道具の目利を被仕候が、先燒物師夫々のもの〻上手を召集められ、其者に御見せ、其者共の申說を御用候故、目利の名を得られしよしに御座候。人の目利も又如此に、諸人の目利を取て用ひ候が、目利の上手にて御座候。人を用候には、才と德と共に備りたるがよく御座候、才とはりはつの事、德とは心だて道にかなひ、正直なる事にて御座候。才德共に釣合候て

能人は、上品の人にて世上にはまれに御座候。才のはたらきりはつ過たる者は、必こゝろだて惡敷不德に御座候。又德御座候て眞實なるものは必才すぐれ不申、不調法なる者に御座候。花見事に御座候へば、必實用に立不申、實のよき物は必花わしく御座候。花も實もよき物は稀に御座候。如此何事も二ッながら備り不申が自然の道理にて御座候。才覺ばかりはたらき候ても、不德にて心だて惡き者は小人と申候。大に人の害に成申候。古より天下國家をくつがへし申たる者は、一向愚鈍なる者にては無御座候。皆利口なる小人にて御座候。小人にて才覺御座候へば、たとへば虎に翼御座候て、飛かけり、人をそこなひ申候如く、人の害に成る事甚だしき事に御座候。此故に人を用ひ申すれば先心だての正しき所を見付、其上に才覺も備はり候を求め候が宜しく御座候。孔子の語にも、弓調へて後つよきを求め、馬服して後良を求め、

士必誠有て後才能を求む。若まことあらずして能あるは、是を豺狼にたとふ。近づくべからずと御座候。才徳備はりたる者無御座候へば、才不足候とも心立よき者を用申候へば、大なる害出來不申候。不才なる者は物馴功入候へば、才も出來、間に合申候。生付邪にて私多き者は、いかに戒め候ても終に改まり不申候間、功入申程惡しくなり申候。惣じて辯口にて人にへつらひ、手立有者は惡き者もよき樣に成行申す事、古來多き事にて御座候。かやうの者時めき申す樣に成りゆき申す時代は、其家の諸侍の風俗心立きたなくなりゆき、正直忠義の心薄く成申す故、武勇も弱く成申由に御座候。又人の生付には得申したる所と不得手なる所と御座候。是を見分候て、得手なる所を取用ひ、其事をつとめさせ候へば、すたり申者無御座候。是明君の徳にて御座候。たとへば良工の材木を用ひ、良醫の藥を用ひ申す如く、それ〳〵の能を存じ候て用ひ申候へば、一材一物もすたり不申候。不得手なる事に人を用ひ候へば、必仕損じ申候て、人の害に成申候。附子砒霜の如くなるつよき毒藥も、良醫に用ひさせ候へば、其毒を制し、其病症に應じたる事に用ひ候て、一段功をなし申候へども、常々の養生藥には、人參甘草などの上藥を用ひ、元氣を補ひ申す如く、國家を治め、萬民をたすけ、その次には人の鏡にもなり申し、役人は才勝れたりとて小人を難用、おとなしき智慧も備りたる者を用不申候ては用に立不申候。總じて人を見申すには、明と公との二にて知り申す由に御座候。明とは人を見付申す智慧にて御座候。公とは依怙贔屓の私なく相口不相口によらず、又人の取成し讒言とに迷ひ不申を公と申し候。此二の事は人を知り申す鏡のよし見え申候。人の心の善惡邪正は、其者の眼目の明らかなると暗きとにてしれ申す由、孟子に御座候。其ほか猶も委細なる見樣も有之よし

に御座候。又才の外にかゞやきすぐれてはたらき申す者は、心の內は必暗く御座候。是は才有て智慧少き者にて御座候。外のはたらきにぶき者に、却て心の內明らかなる者御座候よし、是は智慧ありて才なき者にて御座候。內外共に釣合候て、よき者は多くは無御座候。水は內明かに外暗く、火は外明かにて內暗き如くにて御座候。刀、脇差、茶の湯道具抔にさへ目利き申候へば、用に立ち申候。大人は人の目利を常に被懸御心、御工夫候て、御覽じ不被損樣に被成候が、何より重寶なる御事にて御座候。

賞罰

一賞とは忠節ある者に、賞をあたへ申す儀にて御座候。人君、一人の忠功有る者を御賞翫被成候へば、萬民忠にすゝみ申候。善人を一人御擧用相成候へば、萬民善にすゝみ申候。忠節有る者善なる者、埋居申候ては、諸人の善心忠義の心おこたり申候。賞するに功不レ過レ時とも御座候。罰とはとがある者を罰し候へば、萬民法度をおそれ愼み、惡事をやめ申候。又依估贔屓により、或は不吟味により、とがある者をゆるし申候はゞ、萬民法をおそれ不申、惡を仕る者多く成り申候故に、賞罰は人君の御心、次には家老役人にも私御座候へば、忠なきに賞を與へ、罰有る者をゆるし申候て、賞罰道理に當り不申候。凡國の政道は、善をそだて惡をおさへ申すが大法にて御座候に、賞罰不正候ては、善惡混雜仕、善人は不仕合にて、惡人幸を得申候故、國法破れ、道理すたり申候。然る時は人君の御威光も薄く成り、萬民上の御恩をも感じ不申、上をかろしめ申すやうに成り申す儀に御座候へば、人君御念入らるべき事の由見え申候。萬民、上の御情を感じ奉り、上の御威光をおそれ申候てこそ國政は行はれ申す事に御座候。一人の功なき者に

賞を與へ、一人の科なき者に罰を行ひ候へば、萬民いかり恨んで思付不申候、又賞を先にし、罰を行ひ候次第にて御座候二一年も春夏の陽は先にて、秋冬の陰は後にて御座候。役人の人を察し候にも善悪共に聞候て、上にも告申候が宜敷事のよしに御座候、惡斗り聞出し、惡を罰し申したるまでにて、善をあげ不申候は、かた落なる儀に御座候。善にすすみ不申候。又法度を立申すには、信と申す事、人君の寶にて御座候。信とはまことゝ讀み申候。一度申出でたる言の首尾をちがへざる儀に御座候。一度法度を出し候ては、必其法を守らせ、法度のやぶれざるやうにきびしく立て、若法度に背き申す者は必刑罰に行ひ、始終不相替、幾久しく立申すが信にて御座候。法度に背き申すをゆるし申候ては、萬民上の下知を信じ不申、上の威勢よわくなり、上を恐れ不申候故、法度出し申候ても無益の事に成可申候。愼乃出令〻出惟行惟不、背と御座候も、此意にて御座候。法度を出し候を大事に仕り、念を入れ吟味を致し候て後法を出し、既に法を出し候ては、必其法を守らせ、そむかざる樣に仕候へとの事にて御座候。かやうに信御座候へば、萬民上を恐れ候て、うたがひ不申候故、法を必守り申すに付て、信は人君の寶にて御座候。法度を立て申すにかぎらず、惣じて下に對して信を不失樣に仕候がよきと見え申候。一旦法度を立て申候て、やがて破れ申すやうに御座候ては、萬民上を疑ひ、重ねて出し申す法度も行はれ不申候。是信を失ひ申すにて御座候。又立つまじき法度にて御座候へば、兼てより立てざるがよく御座候。是信を失ひ申すまじき故にて御座候。法度多く御座候へばせはしくなり、數々守り申す事なりがたく、頓て破れ易く立ちかね申候。それを無理に立申べしと仕候へは、とがへ多く成申候。此故に法を立て申すには輕々敷不仕、かねて衆議を詳に仕

り、個條を少々立てゝ守り易く立て易きやうに仕候へば、諸人も尤と存候て、法度やぶれ不申候。若破り申す者を誰にてもつよく罰を行ひゆるし不申、必後々まで不相替其法を立て申候へば、上の御威光もつよく、萬民上を恐れ申候て心正しく成り、とがを不仕候て、民もくつろぎ、上にも御事少く成り申候。

明人倫

一凡人倫の道と申すは、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫に對し候て、行ひ申す道にて候。此五倫の外に道を立て申候をば、異端と申候て、聖人の道にあらず候。學問と申候も、此五倫の道を知りて身に行ひ申す稽古の儀にて、差當り毎日勤申人の所作の上の事なり。此五倫の道を知らず、身に行ひ不申候は、たとひ書を千萬卷よみ申候ても眞の學問とは不被申、眞の儒者にて無御座候。五倫の道を行申すには、知仁勇の三德と申候て、三心法有り。知は心の明なる事、知を以ては此道を知り、仁は心に私なき事、仁を以ては此道を行ひ、勇とは心のつよき事にて、勇を以ては此道を知る事も行ふ事も、つよく勤め申す事にて候。明ならずしては道を知る事成りがたく、心に私有りては道行はれ不申、心につよみ無御座候ては、道を知る事も行ひ申す事もおこたりて成り難く、此三德無之候ては五倫の道行はれ不申候。三德を心に得て、五倫を身に行ひ申すが、君子の勤にて御座候。又此智仁勇の三德も不實にては、誠の智仁勇にあらず候故、實を肝要に仕候。五倫の中にて殊に主君父母につかへ申す儀、おもき事にて候故、忠孝の二の道をおいて、誠をつくし申すが人道の大節にて候。就中父母は我身の根本にて御座候故、孝を行ひ申儀を人倫の根本に仕候。君子は本をつとむ。本立つて道ありと論語にも見え申候。たとへば木の根

堅固なれば枝葉さかえ、水の源深ければ流遠きが如く、根本の孝の道立ち候へば、萬事皆行はれ、萬の善も是より出で申候故、孝は百行の本、萬善の首とも申候。孝の心を根本とし、それを以て君につかへ申せば忠となり、臣下萬民を治め申すも孝より出で申候故、孝心ふかき人は必君に忠ありて、臣民にも恵ふかく御座候。古語に忠臣は孝子の門に求むと御座候も、親に孝ある人は必君にも忠ありと申す意にて御座候。いにしへの聖主賢君の孝を以て國天下を御治め候も、孝の心をおし廣めて、家を齊へ、家より國に及び、國より天下に及ぼし候も、皆是一つの孝心より出申候て、國天下もたやすく治り申候。およそ人君は萬民の手本に御成り候故、孝心深く無之候ては、國土に亂臣どこし致成候道の根本立不申、又萬民の手本に仕候日當無之候て、國土の敎も立不申候。

一孝の道には愛敬の二の德御座候。愛は親を大切に存候て、いつくしみ申す事にて、敬は親をたつとみうやまひ恐れ申す儀にて御座候。愛ばかりにて敬無御座候へば、心やす過ぎ候て、親をかろしめ申す樣になり申候。敬ばかり行ひて愛御座なくいんぎん過ぎ候ては、父子の間したしみなく、隔意出來申候。此二つ備り申候が孝にて御座候。

一孝の字には耂の字の下に子の字を書候。耂は父母にて御座候。子の親にしたがひて、親と一體に成り、つかへ申す體をかたどりて、作りたる字にて御座候。子たる者は、父母の心を以て我心に仕、父母の心と我心とふたつなく、ちがはざる樣に仕るが孝にて御座候。父母にさからひて別の心を立て申すが孝にて無御座候。勿論又時宜にもより申候へども、とかく子は親に和順なるが、是まづ孝の大法にて御座候。人心の同じからざる事、其面の如しと申候如く、人の心生付めん〲にちがひ申候へば、親と子のかた氣、各別に違ひたる人多く御座候。

人の親と成候て、我子を惡み申心は無御座候へども、子のかた氣、我心にかはり申時は、親の心にうらめしく思ひ、氣に合ひ不申候て、怒も出來申候故、不慈悲になり申候。又人の子となり候人も、親に背き可申と存ずる心は元來無御座候へども、親のかた氣我にかはり、親の氣に合ひ不申候へば、子の心に怨み出來候て不順に成申候故、互に違却仕、和睦もうすく成り申候。親は子のかた氣を知り、我かた氣の樣に無之を無理にせめ不申、子は親のかた氣を知りて背かざる樣に仕、彼孝の字の心のごとくに、父子一體になり候へば、親かならず悅び、父子和睦仕候て、父は慈父となり、子は孝子と成り申候。人の親は子の孝行なるを何より悅び、人の子は親の氣に入申を何より悅び申は、世上の萬民貴も賤も同じ心にて御座候故、親も子も互に其心を知りて、孝慈を行ふべき事にて候。

一曾子曰、父母これを愛せば喜んで不忘、父母過あらば、諫てさかはざれと御座候。此語の意は、父母の寵愛をうけ候時、よろこんで忘れず。父母のにくみをうけ申時は、おそれて父母をうらみず。父母にあやまり御座候へば、父母の氣にさからはざる樣に、能くいさめ申せとの教にて御座候。右に申す愛敬の心、法の孝は、天下の萬民皆同事にて御座候へども、位の高下に付て孝行の品かはり申候。國大名の孝行は、位の高きにおごらずして、人をあなどらず。祿あつきにおごらずして、みだりに法に過ぐる無用のおごりをなさず。如此して其國を保ち、其臣下萬民をやはらげなづけ、國民の思ひ付き申が、國大名の孝行と孝經にも御座候。孝は親につかへ申が初にて御座候。君につかへ申も、國を治め申も、皆孝行の内にて御座候。我身の行を愼み、我名をあげ、親先祖の名をもあらはし申が、大なる孝のよしに御座候。親に仕へ申ばかりが孝にては無御座候。

一國を領て御取被成候御先祖は、わかき御時より莫大の御苦身被成候て、十死一生のあやふき事にも、度々御逢、其忠節により國を御拜領被成候。御一代の御樂は、わづかの御事にて御座候へども、其御子孫に、長く其國を御傳へ讓り可被成ための御志にて御座候。其御先祖の御苦勞により、御幼少より生れながらの御大名にて、結構なる御位にて、大なる御樂にて御座候。其結構なる御樂は、是ひとへに御先祖の御苦勞被成たる故にて御座候。其御恩を常々思召不被忘候て、御身を御慎み、第一天下への御忠節を大事に御つとめ、扨御拜領の國の仕置に被入御念、萬民に御仁心ふかく、一人も民うゑこゞえ不仕候樣被成、萬民安堵仕、國を安穩に御保ち被成、いよ／＼其末を長く御うけ被成候て、御子孫へ御相續被成候か、御先祖の御志願に御叶ひ被成候故、何よりの御孝行にて御座候よし、古き書にも見え申候。

天和二年十一月二十一日

貝原篤信敬書

克明抄 終

書學答書

書學御執心に付、遠路御出被成候て、老拙へ御相談可被成候段恐入候得共、誠御奇特之御志感心仕候間、及承候事共荒増書しるし得御意候。御年少之御儀、御出精被成候はゞ、御昇進之程御賴母敷奉存候。乍去暫時之御逗留にては、迚も思召通に御究難被成候。殘念存候。書法之事は、一時に御覺悟被成候樣之傳授口傳などゝ申事決して無之、御精習被成候より外早き仕樣も無之候。只々御心長く御會得被成候御事御座候。何分にも歸國之上、是迄御賴被成候老先生へ御就被成候て、自然と御合點可參事と存候。其上は自己之御了簡御立被成、御一家之流を御建立被成候事御專一奉存候。尤最初は御學被成候導は師に御就被成候て、御聞被成候事御座候得共、いつ迄も師の手本にて御習ひ被成候ては、其師の上へは出候事あたはざるものに御座候。勿論人心の同じからず、面目の替るごとくにて、同じ樣にはいかぬものに御座候。此事を能々御分別可被成候。ひたすら古法帖に廣く目をさらし、自分の面白きと思ふ法帖の書風を精熟致し候事に御座候。右撰し我師と定、精力專らにして一つの法帖を數百篇うつし候へば、運筆漸々にこなれ、字形も法帖のごとくに成候て、似たるを成就と致し申候。返々も師に就て學び、其師の書たる字ばかり寫し候故、成就するに及びても、其師程に成候が正載にて、其師の上に出ることあたはず候。中華にては何人の流と云事なく、古法帖を博く學び候內に、我流出て自己の形なるを一家と申候。鍾王より以下千餘年、鍾王を學ばざる人なく候へども、鍾王に似たる人は一人も無之候は、人心の同じからざる故にて御座候。御考へ可被成候。

一法帖御取あつかひ被成候には、先魏晉を初とし、唐宋元明迄の諸名家の法帖、其中にて御心に叶候墨本を我師と御定め被成候て宜く候。古き所を好候

人も近きあたりを好候人も、昔面々好にまかせ候事宜く候。しかし近世の書風を好候とも、古にさかのぼり、歴代の書風を分別して、古き所よりちかき所まで段々に習ひさがり候て可然存候。まづ近き所と申せば、明朝の書風などにて御座候。明朝の名家も古き所にさかのぼりて、明の書風起り候事に御座候。古へにさかのぼりて、淵源を探とは、魏鍾繇、晉王羲之、王獻之、此の書法を習ひ、根元の所を究候には、尚書宣示帖、力命表、黄庭經、樂毅論、晉楷にて御座候。行書は蘭亭帖、草書は十七帖、此外數多く有之候得ば、ことごとくは記し不申、專用の分のみ記候。尤魏晉の書と申は餘り高邁候て、取付がたき事に候へば、是へ唐朝大家の法帖をくはへ候得ば、筆力の益大きに成申事に御座候。唐朝にては虞世南、歐陽詢、褚遂良、薛稷等の墨本を助として、楷行とも御精熟可被成候。草書は孫過庭書譜御習可被成候。歐、虞、褚、薛の書は、實に六朝の書風にて御座候。何れも魏晉の流にて、各魏晉を法とし出ぬ人は無之、皆魏晉の遺風にて御座候。唐人專ら法則を尊稱し、實に唐人の書風と申は、顏魯公、柳公權、李邕、徐浩等にて御座候。宋朝と成候ては專らに法則を離れ、自分の氣象を書して、魏晉の風一變致し候。宋朝にては蔡君謨、米元章、蘇東坡、黄山谷を四大家と申て、名家にて御座候。元朝にては又一變、宋の氣象のみに落候所をため直し候處、是又軟弱に落て、氣象とぼしく成申候。元にては趙子昂、鮮于樞など、名家にて御座候。又明朝に至て宋元の風を一變し候へ共、漸に時代下りて明の一風立申候。祝枝山、文徵明、董其昌、皆明の名家にて御座候。魏晉より明までの諸名家法帖墨跡を御選被成、御心に叶候書風を我師と御定、御精學可被成候。併古へにさかのぼりて學び候方宜敷と存候は、近き書風にても皆古き所より出不申書は無之候。趙子昂は羲之

の形神ともに得たりと申内、唐李邕を專ら學びし事必定見え申候。古人も此邊にて候得ば御疑ひなく、唐以上の書風を摸候は勿論、其後の書風を御學候とも。古人にさかのぼりて習候事、御考御加點可被成候、古人は淵源より所一々有之、こゝに略す。

一書法の書、是又追々御熟覽可被成候。古人の論書數多有之候て、結構間架挫衂沈着等の事、又世上誰も申、永字八法等は別て唐人法則を尊稱し、世話をやきて有之候。併近來俗學者の沙汰なりとて、不取用も有之候へども、一槩に捨るにもなく、一槩に用ゆるには無之候哉と存候。追々書論譜御熟覽の上、いつとなく相分り候ものに御座候。

一中華にては、書を嗜候は皆學者士君子にて、此方ごとき書ばかりを習候事無御座候。仍て書學御精學の中に、御學問御專一奉存候。書學の事は出家のみにあらず、博識好事の人に便り御聞可被成候。

一古人の法帖を學び候に、摹寫臨寫するのみにて、一遍ごとにあたらしき紙へ、字の大小、行の疎密、法帖に少しも違はぬ樣に寫し、二遍も三遍も前のごとく寫し候也。托筆は一定の法有之候。運筆は字によつて替りたるを、師に向ひ善書の寫意、字を見て其如くする迄にて候。其餘はさのみ一々師の敎授をまたず、精力專らにして、一つの法帖を精熟すれば、字形の法帖に類したるを成就といひたし候。墨帖にては、筆意の所分明なりがたし。結體を取までとはいへども、凡精神の所趣を得べし。只々華人の眞跡、何によらず、沈着等の所、心を留て考べきなり。

一寫字の間、字々に意をとゞめ、筆力輕重、點畫、長短、疎密、偏旁、左右の均停を詳に考候へば、終には似たることを得候也。

一法帖善本は得がたきものにて、他より借覽などせば、薄紙をもて双鉤又は摹寫して、我藏本となすべし。薄樣紙の類、裏より木の實油綿へしめし置

一面にひとしく引なり。其上紙一枚ごとに、反古を以てはさみ、半日或は一日、重き物にて押をかける時は、油氣は古へ移り、油氣を除く爲めなり。取出し猪の牙にてすれば、いよ〳〵薄くなり、紙害になりて、摩寫するにも法帖に墨移らず。用□して益あるものなり。

一諸法帖目ろく荒増左へしるし申候。厚く御心懸御覽可被成候。

一李斯書　繹山碑。　唐李陽氷書　三墳碑。

　以上小篆

一後漢蔡邕書　曹全碑　夏承碑。

　以上八分書

一索靖書　月儀帖。

　以上章草

一鍾繇書　薦季直表　戎路表　力命表　宣示帖。

　以上小楷

一王羲之書　黄庭經　樂毅論　曹娥碑　東方朔畫贊　王獻之書　洛神賦。

　以上小楷

一唐虞世南書　夫子廟堂碑。　歐陽詢書　九成宮皇甫府君碑。　褚遂良書　同州聖教序。　薛稷書　杳冥君

　以上中楷書

一瘞鶴銘　顏魯公書　元次山碑　家廟碑　中興頌。　柳公權書　萬安橋

　以上大楷書

一王羲之書　蘭亭帖。　王獻之書　辭中令帖　二王帖。　虞世南書　汝南公主墓誌。　褚遂良書　枯樹賦　哀冊文　趙模書　千字文。　陸柬之書　五言蘭亭詩。　孫綽書　蘭亭後序。　懷仁書　聖教序。　明皇書　批答帖。大行書

　以上行書

一王羲之書　十七帖。　二王帖　懷素書　千字文。　李懷琳書　絕交書。　孫過庭書譜　趙

子昻、千字文。

一大部の法帖は玉烟堂、戲鴻堂法帖、停雲館帖、星鳳樓帖等の大部法帖中に、右へ出候目錄の法帖多分載有之候。宋元明の法帖は數〻有之候へば、爰にしるし不申候。

右書學の事、老拙へ達て御尋ねに付き、難默止存候て、存じ寄り候まゝを書記し、聊か御爲にもなれかしと、前後の所は御察見可被下候。猶期再會の時候。恐惶謹白。

返々も寒候御自愛御專一奉祈候

上妻折太郎樣

書學答書終

心畫軌範

書論

貝原篤信 編輯

初學記曰。易曰。上古結繩以治。後世聖人易之以書契。蓋取諸夬。又帝王紀曰。黃帝垂衣裳。著造文字。然後書契始作。則其始也。案說文。蒼頡依類象形謂之文。形聲相益謂之字。著於竹帛謂之書。書有六義焉。一曰指事。二曰象形。三曰諧聲。四曰會意。五曰轉注。六曰假借。古者子生六歲而教數與方名。十歲入小學。學六甲書計之事。則文字之謂也。自黃帝至三代。其文不改。秦焚燒先典。乃廢古文。更用八體。一曰大篆。周宣王時史籀所作也。二曰小篆。始皇時李斯趙高胡毋敬所作也。大小篆並簡冊所用也。三曰刻符。施於符傳也。四曰摹印。屈曲填密施於印璽也。五曰蟲書。爲蟲鳥之形。施於幡信也。六曰署書。門題所用也。七曰殳書。銘於戈戟也。八曰隸書。始皇時程邈所定。六行公府也。漢氏因之。至王莽居攝。使甄豐刊定六體。一曰古文。二曰奇字。三曰篆書。四曰隸書。五曰繆篆。六曰蟲書。當代以教學童焉。又衛恒四體書勢曰。漢興又有草書。不知作者。蓋南漢銘中雜以古文篆及八分爲之。魏晉以還。隸文遂[illegible]。蕭子良古今篆隸文體。有[illegible]書。楷書。蓬書。懸鍼書。垂露書。飛白書。填書。[illegible]書。鳥書。虎爪書。偃波書。鶴頭書。象形篆。尚方。大篆。鳳鳥書。科斗蟲書。龍虎書。仙人書。芝英書。十二時書。倒薤書。龜書。[illegible]書。金錯書。[illegible]書。凡數十種。皆出於六義八體之書。而因事生變者也。

許氏說文敍衞恒曰。漢興而有草書。不知作者姓名。

宋張懷瓘書斷曰。【古文】按古文者。黃帝史蒼頡所造也。頡首有四目。通於神明。仰觀奎星圜曲之勢。

俯察龜文鳥跡之象、博采衆美、合而爲字、是曰古文。孝經援神契云、奎主文章、蒼頡倣象、是也。[大篆]按大篆者周宣王太史史籀所作也。或曰柱下史始變古文、或同或異、謂之爲篆。篆者傳也。傳其物理、施之無窮。甄酆定六書、三曰篆書。八體書法。一曰大篆。又漢書藝文志、史籀十五篇並是也。以史官製之。用以教授。謂之史書。凡九千字。[籀文]周太史史籀所作也。與古文大篆小異。後人以名稱書。謂之籀文。七略曰。史籀者周時史官。教學童書也。與孔氏壁中古文體異。甄酆定六書。二曰奇字。是也。[小篆]小篆者。秦丞相李斯所作也。增損大篆、異同籀文。謂之小篆。亦曰秦篆。[八分]按八分者。秦羽人上谷王次仲所作也。王愔云。王次仲始以古書方廣少波勢。建初中以隷艸作楷法字。爲八分。言有楷模。始皇得次仲文。簡略趣急疾之用。甚喜。遣召之。三徵不至。云云[隷書]按隷書者。秦下邽人程邈字元岑。始爲縣吏、得罪。始皇幽繫雲陽獄中。覃思十年。益小大篆方圓而爲隷書三千字。奏之。始皇善之。用爲御史。以奏事煩多篆字難成。乃用隷字以爲隷人佐書。故曰隷書。[章艸]按章艸。漢黄門令史游所作也。衛恒李誕並云。漢初而有艸法。不知其誰。蕭子良云。章艸者漢齊相杜操始變藁法。非也。王愔云。漢元帝時。史游作急就章。解散隷體麤書之。漢俗簡惰。漸以行之。是也。[行書]按行書者。後漢潁川劉德升所造也。行書即正書之小僞。務從簡易。相間流行。故謂之行書。王愔云。晉世以來。工書者多。以行書著名。鍾元常善行書是也。爾後。王羲之獻之並造其極焉。[飛白]按飛白書者。後漢左中郎蔡邕所造也。王隱王愔並云。飛白楷制也。本是宮殿題署。勢旣勁。文字宜輕微不滿。名爲飛白。王僧虔曰。飛白八分之輕者。邕在鴻都門。見匠人施堊帚。遂意爲之。[艸書]按

艸書者、後漢徴士張伯英所造也。梁武帝艸書狀曰、蔡邕云。昔秦之時、諸侯爭長、羽檄相傳、望烽走驛。以篆隸難不能救急。遂作赴急之書。今之艸書也。

宋景濂曰。書史會要天台陶九成宗儀。自少年精究六書之法、備知字文相生之原、乃辨析古文篆籀八分隸行書諸家異同、並載其人而附見焉。先之以帝王、次之以名臣、又次之以材士大夫、起自三皇迄於國朝。凡名一善書者悉具錄之。其事核、其論確而有徴。昔編採史傳及刪修所著書、不復以其識參乎其間也。史以記事、此書記歷代之善書者、故名書史。（宋學士集）

自小篆散而八分生。八分覆而隸書出。隸書悖而行書作。隸書作而艸書興。自此以下吾不欲觀。（郭忠恕）

漢興有艸書、不知作者姓名。至章帝時、有杜伯度者善之、皆稱工。杜度字伯度。爲[illegible]章帝愛之、令上表亦作艸字。謂之章艸。（書斷）

釋亞棲善艸書。自云。凡書通即變。王變子雲體、歐變右軍體、柳變歐陽體、知永禪遂良顏眞卿李邕虞世南等並得書中法。後皆自變其體、俱得傳名。若執法不變、號爲書奴。

唐太宗。自眞艸書屏風、以示群臣。筆力遒勁、爲一時絶。嘗謂朝臣曰。書小道。雖非急務、時或留心。猶勝棄日。凡諸藝業未有學而不得者也。（集古錄敘書法）

六一居士筆說曰。學書當自成一家之體。其摹倣他人、謂之奴書。

顔字直行。梵書右行。佉盧書左行。（[illegible]之橫行）

書不須精。顔之推家訓云。此藝不須過精。爲人所役。王逸少風流才士。蕭散名人。擧世惟知其書。書章偏將道戒、法有以也。

唐徐浩書多謂筆、謂筆粘焦墨也。在書家爲[illegible]。（楊慎 王湟）

飛白　飛白字之名。書家例知ㇾ之。但不ㇾ曉ㇾ作㆓何狀㆒。予按。王隱云。飛白變㆓楷制㆒也。本是宮殿題署。勢旣遒勁。文字宜㆓輕微不ㇾ滿。名爲㆓飛白㆒。據ㇾ此則如今篆書之渴筆。俗所謂沙筆是也。唐人好ㇾ奇。或作㆓禽鳥花竹之像㆒。順陵碑略有㆓數字㆒。今絕無㆓作ㇾ之者㆒。惟方外道流書㆓酒肆壁㆒。作㆓竹節雀頭形㆒。俗可ㇾ憎矣。楊升菴外集

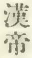
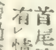
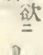
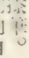
蘇子美嘗言。明牕淨几。筆硯紙墨。皆極㆓精良㆒。亦自是人生一樂。能得㆓此樂㆒者甚稀。

歐陽公試筆曰。學ㇾ書費ㇾ紙。猶勝㆓飲ㇾ酒費㆒ㇾ錢。

趙孟頫跋㆓東坡醉翁亭記書㆒云。夫有ㇾ志㆓於法書㆒者。心力已竭而不ㇾ能ㇾ進者。見㆓古名書㆒則長一倍。余見ㇾ此豈止一倍而已。

許氏說文徐鉉序曰。漢興有㆓艸書㆒。註徐鍇曰。案㆓書傳㆒。多云。張並作ㇾ艸。又云。齊相杜操作。據㆓說文㆒。則張並之前已有矣。

書法

漢帝論㆓書法㆒曰。 首尾欲ㇾ有ㇾ情。 把落欲㆓相顧㆒。 偃鋒者不ㇾ可ㇾ使㆓其筆正㆒。 正鋒者。不ㇾ可ㇾ使㆓其筆偏㆒。 蹲過處當ㇾ審㆓於輕重㆒。 槍脈處必㆓著力㆒。 折筆 搭筆。折鋒搭鋒。爲㆓下ㇾ筆之始㆒。 揭筆。蹲筆揭筆。爲㆓收殺之權㆒。 捺筆。筆捺則向自圓圓。 筆提則筋有㆓餘力㆒。 爲ㇾ骨之法。懸㆓指骨之提縱㆒。 左爲ㇾ撇。 右爲ㇾ捺。自ㇾ是以下。至㆓黃山谷㆒論ㇾ書。凡十數條。並出㆓于內閣字府㆒。

凡學ㇾ書者。把ㇾ筆虛ㇾ掌實ㇾ指。執ㇾ筆欲ㇾ直。點畫波撇屈曲。皆進㆓一身之力㆒而送ㇾ之。初學先㆓大書㆒。不ㇾ得ㇾ從ㇾ小。要意前筆後者勝。意後筆前者敗。善㆓筆力㆒者多ㇾ骨。不ㇾ善㆓筆力㆒者多ㇾ肉。多ㇾ骨微ㇾ肉者。謂㆓之筋書㆒。多ㇾ肉微ㇾ骨者。謂㆓之墨猪㆒。魏太傅論ㇾ書

不ㇾ可ㇾ忙。忙則失ㇾ勢。不ㇾ可ㇾ緩。緩則骨癡。不ㇾ可ㇾ瘦。瘦則形枯。不ㇾ可ㇾ肥。肥則質濁。鍾繇

初學之際宜ㇾ先㆓筋骨㆒。筋骨不ㇾ立。肉何所附。用ㇾ筆之勢。特須ㇾ藏ㇾ鋒。若不ㇾ藏字則有ㇾ病。小寬令ㇾ大。大促令ㇾ小。疎肥令ㇾ密。密瘦令ㇾ疎。斯其大經矣。

蔡襄

執筆之法。實指虛拳。運筆之法。意在筆前。又曰臨倣古帖。毫髮精研。王羲之

得之於心。應之於手。初則謹於是寫形。然後決要寫神則可。晉衛

太緩無筋。太急無肉。側筆則鈍漫而多肉。直鋒則乾枯而露骨。一點一畫之內。各有當緩則緩當急則急。成字之中自然有也。董子實

凡寫字處。其中畫爲主。云云 橫貫乎清纖。竪貫乎渴粗。分開布白。遠近宜均。上下得所。自然平穩壯觀。歐陽詢

墨淡則傷神彩。太濃則滯鋒毫。陳繹曾

畫畫要求活法。字字要取生動。大字要於結密而無間。小字要於寬綽而有餘。小心布置。大膽落筆。張旭

大凡畫多者宜疏。畫少者宜肥。蘇東坡

點者字之眉目也。橫畫者字之肩背也。直畫者字之體骨。撇捺者字之手足。剔乚挑亅者字之步履。轉摺亅者方圓之法。云云 [illegible]

用筆不欲太肥。太肥則形濁。不欲太瘦。太瘦則形枯。多露鋒鋩則意不持重。深藏圭角則體不精神。不欲上小下大。勿令左高右低。一起一倒一晦一明。而神奇出焉。常欲筆鋒在畫中。則左右皆無病矣。米元章

遲以取妍。速以取勁。專事遲則無神氣。若專事速又多失勢。李陽冰

虛紙用強筆。強紙用弱筆。凡用筆著墨。不過三分。不得深浸。黃庭堅

寫字訣云。凡字橫畫宜細。竪畫宜粗。畫少者宜粗。畫多字宜密。凡字勾宜短。凡字點宜圓。[illegible]

王逸少工書。十五年中偏工永字。以其八法之勢。能通一切字也。永字八畫也。禁經

王右軍題衛夫人筆陣圖

夫紙者陣也。筆者刀稍也。墨者鍪甲也。水硯者城池也。本領者將帥也。心意者副將也。結構者謀略也。颺筆者吉凶之兆也。出入者號令也。屈折者殺戮也。若欲レ書先乾ニ研墨一。凝レ神靜レ慮。預想ニ字形大小一。偃仰平直振動。令ニ筋骨相連一。意在ニ筆前一。然後作レ字。若平直相似。狀如ニ算子一。上下方整。前後齊平。便不ニ是書一。但得ニ其點畫一耳。昔宋翼嘗作ニ此書一。翼師鍾繇叱レ之。翼三年不ニ敢見一。潛レ心改レ迹。每レ作ニ一波一。常三過折レ筆。每レ作ニ一點一。常隱レ鋒爲レ之。予少學ニ衛夫人之書一。謂ニ大能一。及レ渡レ江。北游ニ名山一。見ニ李斯曹喜等書一。之ニ許下一見ニ鍾繇、梁鴻書一。洛下見ニ蔡邕石經三體書一。從兄洽處見ニ張昶華岳碑一。始知學ニ衛夫人書一。徒費ニ年月一。遂改ニ本師一。於ニ衆碑一學習焉。時年五十有三。恐ニ風燭奄及一。聊遺ニ敎於子孫一耳。衛夫人者。李充母也。

王右軍書說

書レ字貴ニ乎平穩一。用レ筆須ニ有レ偃有レ仰有レ欹有レ斜或小或大或短或長一。欲レ書先構ニ筋力一。然後裝束。更在ニ注レ意詳雅一。起發綿密。疎密相間。每レ作ニ一點一懸レ管爲レ之。每レ作ニ一波一抑而復起。一字須ニ數體俱入一。一紙須ニ字字意殊一。書弱紙強。筆強紙弱、筆強弱不レ等則蹉跌不レ入。凡書之時貴ニ乎沈靜一。令下意在ニ筆前一字居中心後上。未レ作之始。結レ思須レ成。下レ筆宜レ遲。管是將軍。故須ニ遲重一。心不レ宜レ遲。心是箭鋒。遲則中レ物不レ入。每レ書貴ニ十遲五急十曲五直十藏五出十起五伏一。若遲筆急牽裹。此暫視似レ書。久味無レ力。仍須ニ用レ筆著レ墨不レ過ニ三分一。不レ得ニ深浸一。則毫弱無レ力。墨用ニ松節一同研。久久不レ動彌佳矣。

王右軍論レ書

凡書務以ニ平穩一爲レ本。分レ間布レ白。上下齊平。均ニ其體制一。大字促令レ小。小字展令レ大。自然寬猛。

得所不失其宜。横如長舟之截小渚。竪如春筆之抽寒谷。作點必須磊磊如大石之當衢。或如蹲鴟。如科斗。如瓜瓣。如栗子。如鵲口。如鼠屎。如此之類各稟其儀。爲文之法。落筆巉巖。如長松之倚溪谷。若欲倒也。復似百鈞之弩初張。處其戈意妙理難窮。放似弓張箭發。收如虎鬪龍驤。直如勒松之臨谷。曲類懸鉤之釣水。屈腳之點。寛彎如角弓之張。見鳥爲烏之頭是。立人之形。如宿鳥之在柱。仁信任使之類是也。寛腳要如壯士屈臂。鳳飛凡氣之類是也。流腳稍斡上際下撥。遂始折轉悉合和韻。勿使蜂腰鶴膝。其縱宜從其氣力。作右邊折角疾牽下微開。左畔斡轉中取登對。勿使腰中傷慢。視筆取勢直截而下。凡字處中畫之法。皆不得倒其左右。横貫乎纖。竪貫乎直。分間布白遠近宜均。上下得所自然平穩。當須遞相掩蓋。不可孤露形影。作字之勢。在乎精思熟察。然後下筆。ノ不宜遲。丶不宜緩。脚不宜斜。腹不宜促。又不宜除。角不宜鋭。不宜作稜角。一字合爲一體。並不宜濶。重不宜長。單不宜小。複不宜大。密勝乎疎。短勝乎長。作字之體。須遵正法。字之形勢。不得上寛下窄。不宜密。密則似痾瘵纏身。不宜疎。疎則似溺水之禽。不宜長。長則似死蛇掛樹。不宜短。短則似踏水死蝦蟇。此乃大忌。不可不愼。莫以字小易而忙行。筆勢莫以字大難而慢展。毫頭如是則筋力不等。生死相混。倘一點失所。若美人之病一目。一畫失節。如壯士之折一肱。勿以難學而自惰焉。

張長史十二意筆法記 名旭

顔　魯　公

予罷秩醴泉。特詣京洛。訪金吾長史張公。請

筆法。長史於時在裴儆宅憩止。有群衆師張公求筆法。或有得者。皆曰。神妙。僕頃在長安二年。師事張公。皆大笑而已。即對以艸書。或三紙五紙皆乘興而散。不復有得其言者。僕自再於洛下相見。眷然不替。僕因問裴儆。足下師張長史。有何所得。曰但書得絹屏素數十軸。亦嘗論諸筆法。惟言倍加功學臨寫。書法當自悟耳。僕自停裴家月餘日。因與裴儆從長史言話。散却迴京師。前請曰。既承兄大弊論。日月滋深。夙夜工勤。溺於翰墨。儻得聞筆法要訣。終爲師學以冀至於能妙。豈任感戴之誠也。長史良久不言。乃左右盼視拂然而起。僕乃從行歸東竹林院小堂。張公乃當堂踞牀而坐。命僕居於小榻而曰。筆法玄妙難妄傳授。非志士高人。詎可與言要妙也。書之求能且攻眞卿。今以授之。可須思妙。乃曰。夫平謂橫。子知之乎。僕思以對之曰。常聞長史示。

令每爲一平畫。皆須令縱橫有象。此豈非其謂乎。長史乃笑曰。大乘令茂密。所以爲稱乎。長史曰。子言頗皆近之矣。夫書道之妙。煥乎其有旨焉。字外之奇言。所不能畫。世之書者。宗二王元常逸跡。曾不睥睨筆法之妙。遂爾雷同。獻之謂之古肥。旭謂之今瘦。古今既殊。肥瘦頗反。如自省覽有異衆說。芝鍾巧趣精細殆同。如自機神。肥瘦古今豈易致意。眞跡雖少可得而推。逸少至於學鍾。勢巧形容。及其獨運。意疎字緩。譬猶楚音習夏不能無楚。過言不悟。未爲篤論。又子敬之不逮逸少。猶逸少之不逮元常。學子敬者畫虎也。學元常者畫龍也。予雖不習久。得其道不問之言必慕之歟。倘有巧思思盈半矣。子其勉之。工精勤悉自當妙矣。眞卿前請曰。幸蒙長史傳授筆法。敢問工書之妙。如何得齊於古人。張公曰。妙在執筆。令其圓轉。勿使拘攣。其次諸法須口傳

手授之訣。勿使無度。所謂筆法也。其次敍理緩潔。在於布置。不慢不越。巧使合宜。其次紙筆精佳。其次諸變適懷。縱合規矩。然而又問曰。直謂縱。子知之乎。曰。豈不謂直者從不令邪曲之謂乎。曰。均謂間。子知之乎。曰。嘗蒙示。以間不容光之謂乎。曰。密謂際。子知之乎。曰。豈不謂築鋒下筆。皆令完成。不令其疏之謂乎。曰。鋒為末。子知之乎。曰。豈不謂以未成畫。使其鋒健之謂乎。曰。力謂骨體。子知之乎。曰。豈不謂趯筆則點畫皆有筋骨。字畫自然雄媚之謂乎。曰。輕謂曲折。子知之乎。曰。豈不謂鉤筆轉角折鋒輕過。亦謂轉角為暗過之謂乎。曰。決謂牽製。子知之乎。曰。豈不謂為牽為製。決意挫鋒。使不怯滯。令險峻而成。以謂之決乎。曰。補謂不足。子知之乎。曰。豈不謂結點畫或有失趣者。則以別點畫旁救之謂乎。曰。損謂有餘。子知之乎。曰。豈不謂趣長筆短。常使意勢有餘。點畫若不足之謂乎。曰。巧謂布置。子知之。曰。豈不謂欲書先預想字形布置。令其平穩。或意外字體令有異勢。是謂之巧乎。曰。稱謂大小。子知之乎。曰。豈不謂大字蹙之令小。小字展之為大。五者備矣。然後齊於古人矣。敢問。執筆之理頗得。長史曰。予傳授筆法之長舅。彥遠曰。吾聞昔日說書者。若有工而跡不至。後聞於褚河南曰。用筆當須如印印泥。悟。思所以謂。後於江島。遇見沙地平淨。令人意悅欲書。乃偶以利鋒畫。其勁險之狀。明利媚好。乃悟用筆如錐畫沙。使其藏鋒。畫乃沈著。當其用鋒。常欲使其透過紙背。此功成之極矣。真草用筆。悉如畫沙。則其道至矣。是乃其迹可久。自然齊於古人矣。但思此理以專想工用。故其點畫不得妄動。子其書紳。予遂銘

謝再拜。逡巡而退。自此得攻書之術。於茲有年。眞歸自知可成矣。叙書法詳悉。而文特奇古。其句法嚴峻險峭。細玩之當有所得不可置也。萬金論

黄眞直論用筆之法。學書欲先知用筆。用筆之法。欲雙鈎迴腕。掌虚指實。以無名倚筆則有力。古人學書。不盡臨摹。張古人書於壁間。觀之入神則下筆。時筆隨人意。大抵書字如三人有精神。細觀則部位皆中度耳。

書法初見筆陣圖。至孫過庭姜白石盡矣。大抵拘則乏天趣。縱則失矩度。如之矜持。又生俗氣。不可觀。右停雲法帖、明朝顧璘書手祝允明之書後

張旭學艸書。見擔夫與公主爭道。及公孫大娘舞劍。而悟筆法。是心常思念。至此而感發否。程子曰。然。須是思。方有感悟處。若不思怎生得如此。篤信案。杜工部集。有觀公孫大娘弟子舞劍器行。蓋公孫大娘者。玄宗時宮女。爲公孫氏能舞曲

韓退之送高閑上人序曰。夫外慕徙業者。皆不造其堂。不嚌其胾者也。往時張旭善艸書。不治他伎。喜怒窘窮憂悲愉佚怨恨思慕酣醉無聊不平。有動於心。必於艸書焉發之。觀於物見山水崖谷鳥獸蟲魚艸木之花實日月列星風雨水火雷霆霹靂歌舞戰鬪天地事物之變可喜可愕。一寓於書。故旭書變動。猶鬼神不可端倪。以此終其身而名後世。

學書字。先學執筆。若眞書。去筆頭一寸一分。若行艸書。去筆頭三寸一分。云云。多力豐筋者聖。無力無筋者病。一一從其消息而用之。衛夫人筆陣圖

讀書譜云。畫多者宜痩。畫少者宜肥。又曰。眞書以平正爲善。此世俗之論。唐人之失也。古今眞書之妙。無出鍾元常。其次則王逸少。今觀二家之書。皆瀟洒縱横。何拘平正。又曰。不得中行。與其工也寧拙。與其弱也寧勁。與其鈍也寧速。又曰。[illegible]之欲[illegible]。遲之欲活。不

可以指運筆。當以腕運筆。腕之在手。手
不主運。運之在腕。腕不主執。又曰。作楷
墨欲乾。然不可太燥。行草則燥潤相雜。潤以取
姸。燥以取險。墨濃則筆滯。燥則筆枯。筆欲鋒長
勁而圓。長則含墨。可以運動。勁則有力。圓則
姸美。又曰。點如口在左者。皆須上齊。須啄雖
啄等是也。在右者皆欲與下齊。和扣等是也。方
圓者眞草之體用。眞貴方。草貴圓。方者參之
以圓。圓者參之以方。斯爲妙矣。運以取姸。
運以取勁。必至能運。然後爲運。
米元章論書者曰。凡大字要如小字。小字要如大字。
小大成形 而小字大字各字自有體也。[illegible]
[illegible]
小大 書法曰。大
字促令小。小字放令大。自然寬猛得宜。譬如
口字之小。與國字同大。如一字二字之疎。
亦欲字畫與密者相間。必當思所以位置排
布。令相映帶。然後爲上。或曰。謂上小

下大。上大下小。欲其相稱。亦一說也。**左小右大**
此一節乃字之病。左右大小欲其相停。人之結字。
易於左小而右大。故此與下二節。皆字之病也。
左高右低 **左短右長** 此二節皆字之病。不可左
高右低。是爲單肩。左短右長。八訣所謂勿令
左短右長是也。**各自成形** 凡寫字。欲其合而爲
一。亦好。分而異體亦好。由其能各自成形故
也。至於疎密小大長短闊狹亦然。要當消詳也。
相管領 欲其彼此顧盼。不失位置。上欲覆下。
下欲承上。左右亦然。**應接** 字之點畫。欲其互相
應接。兩點者如小八。自相應接。三點者如系。
則左朝右。中朝上。右朝左。四點如然無二字。
則兩旁二點相應。中間相接。又作心亦相應接。至
於ノ乙本木州無之類亦然。已上皆言其大略。又
在學者能以意消詳。觸類而長之可也。[illegible]
明道先生作字甚敬。嘗謂人曰。非欲字好。卽
此是學。朱子曰。此亦可以收放心。

朱子書字銘曰。握管濡毫。伸紙行墨。一在其中。點點畫畫。放意則荒。取姸則惑。必有事焉。神明厥德。

江南徐鉉善小篆。映日視之。畫之中心有一縷濃墨。正當其中。至於屈折處。亦當中無有偏側處。乃筆鋒直下不倒側。故鋒常在畫中。此用筆之法也。（夢溪筆談）

朱子曰。寫字不要好時卻好。

居家必備云。左邊短少。必與上齊。（如鳴字之類）右邊畫少。必與下齊。（如知字之類）大字高懸手。小字則以左手枕右手書。書不入木。不如不學。（下筆重也。）

山谷曰。欲學艸書。須精眞書。知下筆向背。則識艸書法。

山谷題跋曰。王氏書法以爲如錐畫沙。如印印泥。蓋言鋒藏筆中。意在筆前耳。承學之人。更用蘭亭永字。以開字中眼目。能使學家多拘忌。成一種俗氣。要之右軍二言。羣言之長也。

姜白石云。眞貴方。艸貴圓。方者參之以圓。圓者參之以方。斯爲妙矣。山谷云。心能轉腕。手能轉筆。書字便如人意。又曰。大字難於結密而無間。小字難於寬綽而有餘。又曰。肥字須要有骨。瘦字須要有肉。

學字有四法。（出于遵生八牋典籍賞鑒）臨（謂置紙在傍。觀其大小濃淡形勢而學之。若臨淵之臨。）摹（謂以薄紙覆上。隨其曲折婉轉而用筆。）硬黃（謂置紙熱熨斗上。以黃蠟塗勻。儼如枕角。毫釐必見。）響搨（謂以紙加碑帖上。向明處以遊絲筆圈却字畫。塡以濃墨。謂之響搨。然圓隱隱猶存。其字亦無精彩。）

唐大宗筆意曰。夫學書者。先須知有王右軍絕妙得意處。眞書樂毅論。行書蘭亭。艸書十帖云。學書之難。神彩爲上。形質次之。○東坡曰。眞書利於瓢揭。艸書難於嚴重。○只學一家書。學成不過爲人作奴婢。集衆長歸于我。斯爲大成。○行書非艸非眞。兼眞謂之眞行。帶艸謂之行艸。○左邊起筆。不要有嘴。右邊轉角。不要露肩。古人謂之暗過。

續文獻通考百八十八解縉書法曰。學書之法非口得

心授。不得其精。大要須臨古人墨蹟。布置間架。臨碑後書碑紙方有工夫。張芝臨池學書。池水盡黑。鍾繇入抱犢山十年。木石盡黑。趙子昂十年不下樓。夔子山每日坐衙。寫盡一千字。纔進膳。唐太宗硎馬上簡版書字。夜半秉燭。學蘭亭大字。須要識間架。古人以帚濡水。學書於砌。或書於几。凡石皆陷。故自羲獻而下。世無善書者。惟智永能悟家法。書學中興至唐而盛。宋家三百年。惟蘇米庶幾。元惟趙子昂一人。皆師資之所以絕出流輩。吾亦稍聞筆法於章而元。惜乎工夫未逮。鄉卿度時。竊自愧赧耳。

曲禮全經書法纂要第四云。一執筆作書之法。要在執筆如用筆之方。然後可以語法度而布位置矣。凡執筆。真書當去筆頭一寸二分。行草書當去筆頭三寸一分。虞世南云。筆長不過六寸。真一行二草三。指實掌虛。即其法也。管非

有雙鉤單鉤二法。韓方明云。雙鉤以食指包管。亦當五指共執。要在實指虛掌。鉤擫訐送。若以單指包之。則力不足而無神氣。此所謂雙鉤之勝單鉤也。若寫大字。則多用單鉤。取其圓直有準也。張懷瓘云。執筆淺而輕。則牽打勁利。掣三寸而一寸著紙。勢則有餘。若執筆深而束牽。三寸而一寸著紙。勢已盡矣。其故何也。筆在指端。則掌虛運動適意。騰躍頓挫。生意在焉。若筆居半則掌實如樞不轉。掣豈自由。轉運不能迴旋。乃成稜角。筆既死矣。寧望字之生動乎。古人有撥鐙法。曰擫壓鉤揭。抵導拒送。擫者。擫大指骨上節下端用力欲直。如持千鈞。壓者。捺食指著中節旁。此二指主力。鉤者鉤中指著指尖。鉤筆令向下。揭者揭名指。著指外爪肉之際。揭筆令向上。抵者名指揭筆。中指抵住。拒者中指鉤筆。名指拒定。此二指主運轉。導者小指引名指過右。送

者。小指送名指過左。此二指主來往。謂之撥鐙者。猶馬鐙也。蓋以筆管著中指名指尖。令圓活易轉。動筆管直。則虎口間空圓如馬鐙也。足踏馬鐙淺則易轉運。手執筆管亦如其淺。則易於撥動矣。又當識腕法。腕法有三。有枕腕。有提腕。有懸腕。枕腕者。以左手枕右手腕而書。提腕者。肘著案虛提手腕而書之。懸腕者。懸著空中而書之。枕腕以書小字。提腕以書中等字。懸腕以書大字。張敬玄云。楷書把筆妙在虛掌運腕。不宜把筆苦緊。即轉腕不得。既腕不轉。則字體或麤或細。上下不均。雖多用力而無益也。又云。楷書只虛掌轉腕。不要懸臂。則氣力有限。行艸書即須懸腕。懸腕則筆勢無限。否則拘而難運矣。又有撮管握管之法。撮管者用撥鐙法撮管頭。握管者。以五指共握其管頭。掉筆急疾。二法皆宜用以書擘窠大幅屏障。以上皆執筆之法也。又曰。位置。其法右軍云。凝神靜慮。豫想字形。大小偃仰筋骨相連。意在筆前。然後作字。分間布白。上下齊平。大字促之令小。小字寬之令大。又不宜平直相似。狀如算子。則不成書。但得其點畫耳。凡字腹不宜促。腳不宜賒。單不宜小。複不宜大。不得上寬下窄。不宜傷密。密似疴瘵纏身。不宜傷疏。疏似溺水之禽。不宜傷長。長則似死蛇掛樹。不宜傷短。短則似壓死蝦蟆。勿以字小易而忙行筆勢。勿以字大難而畏展毫頭。又曰。張懷瓘云。夫馬筋多肉少爲上。肉多筋少爲下。書亦如之。皆欲骨肉相稱。若筋骨不任其脂肉。在馬爲駑駘。在書爲墨豬。惟題署及八分則肥密可也。又曰。孫過庭云。初學之際。但求平正。既知平正。務追險絕。既能險絕。復歸平正。又曰。唐太宗筆法云。攻書之時。當收視反聽。絕慮怡神。心正氣和則契於玄妙。心神不正字則

欹邪。心志不和字則傾仄。如魯廟之器也。又曰。筆要章云。筆正則鋒藏。筆偃則鋒出。常欲筆鋒在畫中。則左右皆無病。又曰。心正則筆正。意在筆前。字居心後。皆名言也。極須淘洗俗姿。則妙處自見。大要執之欲緊。運之欲活。不可以指運筆。當以腕運筆。執之在手。手不主運。運在腕。腕不知執。又曰。翰林禁經有九生法云。一用生筆。久置復用。則軟而又健。二用生紙。新出篋笥。則受墨而易書。三用生硯。洗滌乾而後用。不可浸潤。四用生水。新汲不可久停。五用生墨。隨要施研。否則泥鈍。六用生手。適過捐執有勞。則腕無準。七用生神。凝神靜思。不可煩燥。八用生目。寢息適悟光明分明。九用生景。天氣清明。人心舒悅。乃可言書。

居家必用小兒寫字法曰。寫字不得惜紙。須令大寫。長後寫得大字。若寫小字。則拘定手腕。長後稍大字。則寫不得。予親有此弊也。寫字時先寫上大二三日不得過南字。南字端正方可換字。若貪字多。必筆畫老硬。寫得不好。寫得好時便放歸。午後亦可上學。

學範曰。大凡學書。指欲實。掌欲虛。管欲直。心欲圓。水太漬則肉散。太燥則肉枯。乾研墨濕點筆。濕研墨乾點筆。墨太濃則肉滯。太淡則肉薄。初學須用佳紙。令後不怯。須用惡筆。令後不擇筆。又曰。書不得自磨墨。令手顫筋骨不強。是大忌也。凡磨墨不得用硯池中水。令墨滯筆泣。須以水滴汲新水。臨時斟酌之。

王陽明嘗論運筆之法。運肘爲上。運腕次之。運指又次之。

程明道行字甚敬。曰。只此是學。薛文清讀書錄曰。蓋事有大小。理無大小。大事謹而小事不謹。則天理即有欠缺間斷。故作字雖小事。必敬者。所

以存天理也。又曰。天理流行。隨處充滿。無少欠缺。故程子作字時甚敬。曰。只此是學。

避暑錄云。磨墨者。用力太過而疾。則兩剛相拒。必熱而沫起。俗言磨墨如病兒。把筆如壯夫。又云。磨墨如病風手。皆貴其輕也。

陳眉公曰。硯宜頻易新水去塵。墨宜頻易故囊去濕。

書評

唐太宗歷評晉人之書。而以王逸少為盡善盡美。先翰林蘇公嘗評唐人之書。謂極於顏眞卿。又論近代之書。以蔡君謨為第一。議者謂。顏書本出於王。而蔡乃法顏而變者。（王梅溪集）

王羲之自稱。我書比鍾繇當抗衡。比張芝艸猶當雁行。

王羲之。永和九年三月三日。嘗遊山陰。與大原孫綽。廣漢王彬之。幷逸少。凝。徽。操之等四十有一人。修祓禊之禮。揮毫製序。而書用蠶繭紙鼠鬚筆。遒媚勁健。絶代更無。凡二十八行。三百二十四字。字有重者。皆構別體。就中之字最多。乃有二十許箇。變轉悉異。遂無同者。其時適有神助。及醒後。他日更書數百千本。終無如祓禊所書之者。右軍亦自珍愛寶重。

王獻之七八歲時學書。羲之密從後掣其筆不得。歎曰。此兒後當復有大名。

書斷曰。晉帝時祭北郊。更祝版。工人削之。筆入木三分。（王羲之書也。○篤信謂。倭俗稱筆法為入木。蓋本乎此也。）

褚遂良非精筆佳墨未嘗書。嘗問虞世南曰。吾書孰與詢。答曰。吾聞詢不擇紙筆。皆得如志。君豈得比。（歐陽詢傳）

題唐氏六家書後　蘇軾

求禪師（智永）書。骨氣深穩。體兼衆妙。精能之至。反造疏淡。如觀陶彭澤（淵明）詩。初如散緩不收。反復

不已乃識其奇趣。今法帖中有云不具。釋智永白者誤收在逸少(王羲之)部中。然亦非禪師書也。云謹此代申。此唐末五代流俗之語耳。而書亦不工。歐陽率更(名詢)書。妍緊拔群。尤工於小楷。高麗遣使購其書。高祖歎曰。觀其書以為魁梧奇偉之人也。此非知書者。凡書象其為人。率更貌。寒寢(寢字)敏悟絕人。今觀其書。勁險刻厲。正稱其貌耳。褚河南(名遂良)書。清遠蕭散。微雜隸體。古之論書者。兼論其平生。苟非其人。雖工不貴也。河南固忠臣。但有譖殺劉洎一事。使人怏怏。然余嘗考其實。恐劉洎末年褊忿。實有伊霍之語。非譖也。若不然馬周明其無此語。太宗獨(上作)詰洎。而不問周何哉。此殆天后朝許李所誣。而史官不能辨也。張長史(名旭)草書頹然天放。略有點畫處。而意態自足。號稱神逸。今世稱善草書者。或不能真行。此大妄也。真生行。行生草。真如立。行如行。草如走。未有未能行立而能走者也。今長安猶有長史真書郎中(一作官)石柱記。作字簡遠。如晉宋間人。顏魯公(名真卿)書雄秀獨出。一變古法。如杜子美(名甫)詩。格力天縱。奄有漢魏晉宋以來風流。後之作者殆難復措手。柳少師(名公權)書。本出於顏。而能自出新意。一字百金。非虛語也。其言心正則筆正者。非獨諷諫。理固然也。世之小人書字雖工。而其神情終有睢盱(小人書)側媚之態。不知人情隨想而見。如列子所謂竊斧者乎。抑其爾也。然至使人見其書而猶憎之。則其人可知矣。余謫居黃州。唐林夫自湖口以書遺余云。吾家有此六人書。子為我略評之而書其後。林夫之書過我遠矣。而反求於余何哉。此又未可曉也。

朱文公(名熹)跋韓魏公與歐陽文忠公帖曰。張敬夫嘗言。平生所見王荊公書。皆如大忙中寫。不知公安得有許忙事。此雖戲言。然實切中其病。今觀此卷。因省平日得見韓公書蹟。雖與親戚

卑幼。亦若端嚴謹重。略與此同。未嘗一筆作行草勢。蓋其胸中安靜詳密。雍容和豫。故無頃刻忙時。亦無纖芥忙意。與荊公之躁擾急迫正相反也。書札細事。而於人之德性。其關有如此者。栗於是竊有警焉。因識其語於左方。

張南軒跋荊公書云。金陵王丞相書。初若不經意。細觀其間。乃有晉宋間人用筆佳處。但與人書帖。例多匆匆草草。此數紙及余所藏者皆然。丞相平生何有許忙迫時邪。

朱子曰。本朝如蔡忠惠以前。皆有典則。及至米元章黃魯直諸人出來。便不肯恁地。要之這便是世態衰下。其爲人亦然。

又曰。山谷不甚理會得字。米老理會得。又云。字被蘇黃寫壞了。近見蔡君謨一帖。字字有法度。如端人正士。方是字。可爲定論矣。餘冬序錄

山谷題跋米元章書曰。余嘗評。米元章書。如快劍斫陣。強弩射千里。所當穿徹。書家筆勢亦窮於此。然似仲由未見孔子時風氣耳。

右軍得意書。眞書樂毅論。行書蘭亭記。艸書十七帖。典籍便覽

東坡曰。歐陽公書。筆勢險勁。字體新麗。自成一家。然公墨迹自當爲世所寶。不待筆畫之工也。

又曰。魯直學吾書。輒以書名於時。好事者爭以精紙妙墨求之。

善書爲難。而題額尤爲難。以趙子昂之筆法。其題額則推讓於李雪菴。況不及於子昂者乎。朝鮮慵齋叢話

國朝書法。當以祝希哲爲上。文徵仲。王履吉。宋仲溫。宋中珩次之。陸子淵。豐道生。沈華亭。徐元王。李貞伯。吳原博又次之。餘似未入品。弇州集

翰墨志云。衞夫人名鑠。字茂漪。晉汝陰大守李矩妻。善鍾法。能正。書入妙。王逸少師之。西溪叢語云。夫人廷尉展之弟。恆之從妹。中書郞李充之母。

（驪將錄）
書畫題評云。天下法書歸ㇾ吳。而允明爲ㇾ最。文徵明。王寵次ㇾ之。

宋張懷瓘書斷云。逸少善ニ艸隸八分飛白章行一。備精ニ諸體一。自成ニ一家法一。千變萬化得ニ之神功一。逸少隸行艸章飛白五體俱入ㇾ神。八分入ㇾ妙。妻郗氏甚工ㇾ書。有ニ七子一。獻之最知ㇾ名。玄之。凝之。徽之。操之。並工ㇾ艸。

法帖刊誤曰。逸少十七帖。首帖有ニ十七日字一。故諸帖卿總謂ニ之十七帖一耳。非ニ帖數一也。（百川學海）

又曰。淳化法帖 淳化三年刻版。禁中藏爲ニ十卷一。是爲ニ歷代法帖之祖一。（同上）

草書百韻歌。乃宋人編成。以示ニ初學者一。託ニ名于羲之一。（楊升菴外集）

心畫軌範 終

諺草序

われさきに、わらはべの、をのこ文字しるたよりにもなれかしとて、和爾雅といふふみをつゞりて、既に梓人にさづけ侍る。されども、かの書はもはら、眞名にかたよりたれば、女文字ならでは、解がたき言語などをば、皆是をもらしぬ。故に今又世俗にとなふる諺、兒女のいふ詞どもの、からの、やまとの文どもに本づきたる、出所正しきをゑらびて、これをしるし。ちかき人の、あつめおけるかんな文ともに、和語をとけるものあるをも、ひろひとりて、册子となし侍り。もとより、つたなきことわざなれば、よし見る人もあらじと、おもひ侍れど、かねてよく〳〵心を用ひし事、今更かいやりすてんも、本意なければ、吾家の弊帚にかへ侍りぬ。門類のはじめに、名づけて諺草といふ。先諺を擧たれば、誠に無益のわざながら、ひねもす心を用ひざらんより、これをするは、猶やむにまさらんかも。

諺草凡例

一此編にしるせる言語の差を分つ事、童蒙の耳なれて、見やすければ、いろはの文字を門にたてゝ、其下に、まづ諺の出所あるをしるし、次に俗語をしるし、次にあやまり唱ふ詞をしるす。明魏法師が、かく文字づかひをやぶりて、いゐ、をお、えゑの類、一つに書べしといひしは、あまりにかたひがみなる事に覺え侍れば、今明魏法師にならへるにはあらねど、簡易にして考るに便よからんがため、いゐ、おを、えゑ、など皆混じて、一つにあつめ侍る。

一近きころ、世諺の出所をしるし、其ことわりを解る文、やうやく刊刻して、おほく世に行はる。おの〳〵得失詳略なきにあらず。今愚見をもつて、是をとり非を捨侍る。且かの文どもに記せし事の、猶本書にちがへる事あるをも、よく其本文を正して、これをしるしぬ。又彼等の文になくて、みづから考加たるをば、其條下の側に、新考と細書す。博覽の人の眼には、考索のおろそかなる、さこそをかしからめど、狹陋の才なれば、たゞわがかつて記せし事を書つけ侍る。

一世俗にとなふる諺、猶許多なりといへども、あまりにつたなくて、出所もなきはもらしぬ。出所詳かならざるも又しかり。

一都鄙にいふ俗語、もろこしの文に出たるあり。吾國の詞あり。又佛書に出たるも多し。是皆前輩のあつめおきしをひろひとり、みづからの考得たるをまじへて、あとさきのついでをえらばず、各其門にあつめ侍る。又俗にいふ詞などの、ひたすら意義もなく、出所もなきをば、皆是をしるさず、且時勢風俗よりおこりたる鄙語の、文字出所なきも多し。それをみだりに理を付、文をひき、しひて本語をもとめ、文字をつくるは、かへりて人を

まどはすわざなるべし。殊民生の日用にいふ言語は、きはまりなくして、こと〴〵くしるしがたければ、こゝにはたゞ、據ある言語をのみ擧侍る。誠にこれを、達識の人の見もし聞もせば、鄧林の一枝をよおだる、笑をまねくべしといへども、數十の訓詁は、數十の疑をとくべければ、童蒙の俗字をしるに、小補なきにしもあらじ。

一兒女のいひあやまれる片言、都鄙ともに少からず。さきに都の人、片言とかやいふ書を作り、それより後も、なほ辨正を加たる書も出來ぬ。誠に諸人のあやまり來て、正音正訓にかなはざるものは、のがれがたきかた言なれば、尤これを正すべければ、士大夫、すこし文しれる人は、さのみに片言をばいはず。兒女下賤の云片言は、習て常となれば、今俄には變じがたく、こと〴〵くをしへがたし。いはんや、かたことのおのづから熟語となれるもあり。又五音相かよひてとなふる詞も多し。又和音のならひ、引をひかざるもあり。引ぬを引もあり。略してみじかきあり。益してながきあり。是をかたことゝ思ひて、盡く正さんとせば、かへりて和音をしらざるものならし。故に此書には、大にあやまれるかた言を擧て、これをしるし、童蒙の詞を正す助とするのみ。

諺艸巻之一

貝原好古纂輯

第一　伊

〔諺〕一字千金　漢書韋賢傳云。諺云。遺二子黄金滿籯一。不レ如二一經一。是一字千金の意也。琅琊代醉編二十六。晋朱伺曰。不レ貴レ勇而貴レ忍。此真一字千金兵法也。好古云。史記呂不韋傳云。呂氏春秋布二咸陽市門一。懸二千金其上一。延二諸侯游士賓客一。有下能增二損一字一者上予二千金一。一字千金と云事は本こゝに出たり。揚雄賦。呂氏漫陽字值二千金一。

伊勢や日向の物がたり　俗諺に、あなたこなたの一方ならぬ物語をいへり。神代に天鈿女命、猿田彦大神に問て曰、汝は何處に到りまさんや。皇孫何處に到りまさんや。對曰、天神の御子は、則當に筑紫日向の高千穗槵觸の峯にいたりますべし。吾は則伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべし。神代巻下。是より起る詞也。好古

石のものいふ世のならひ　左傳昭公八年曰。石言二于晋魏楡一。又晋劉曜傳云。石言二於陝一。日本紀曰。葦原中國者。磐根木株。草葉猶能言語。千はやぶる神代には、石にかぎらざるべし。

いはぬはいふにまさる　風雅集雜部に、前左兵衛督惟方、使の別當になりて侍ける比、なげく事ありけるを、とぶらはず侍りければ、申遣しける。

よみ人しらず

なげきをもとはぬつらさはつらけれど
うれしき事はうれしとぞきく

返し　前左兵衛督惟方

いふよりもいはでおもふはまさるとて
とはぬもとふにおとりやはせし

山谷詩云。萬言萬當不レ如二一默一。是もいはぬはいふに増る也。

一を以萬をしる　荀子非相篇云。以レ近知レ遠。以レ一知レ萬。以レ微知レ明。

いくさ見て矢をはぐ　素問四氣調神大論云。夫病已成後藥レ之。亂已成而後治レ之。譬猶下渴而穿レ井。鬪而鑄上レ兵。不二亦晩一乎。又說苑雜言篇云。越石父曰。人勿レ言也。譬レ之猶下渴而穿レ井。臨レ難而鑄上兵。雖二疾從一而不レ及也。此二說。異言同意なり。

石を抱て淵に入る　韓詩外傳云。申徒狄非二其世一。抱レ石而沈二于河一。新考　二程全書曰。釋氏其實是愛レ身放不レ得。故說許多。譬二抱レ石沈一レ河。以二其重一愈沈。終不レ道レ放二下石頭一。惟嫌レ重也。

井の中の蛙大海をしらず。　莊子曰。井蛙不レ可三以語二於海一。拘二於虛一也。後漢書馬援傳。馬援謂二隗囂一曰。子陽井底蛙耳。

野猪武者　梶原景時、源義經の事をさして、野猪武者といへり。これ進事をしりて。退事をしらずと云喩也。なべて進退の法をしらず。徒に勇る者を野猪武者と云。前漢書食貨志曰。匈奴侵寇甚。莽大募二天下囚徒人奴一。名曰二豬突豨勇一。服虔注云。豬性觸二突人一。故取以喩。是も野猪武者といふ意と同じ。

犬の年よりたる如し　徒に年よりて、無才無能なるを云。前漢書貢禹傳云。犬馬之齒八十一。是諺の意に同じ。又杜子美が詩に、空催二犬馬年一と云句あり。新考

命は寶の寶　寶の中の寶といふ事也。　大智度論曰。設滿二世間一寶。無レ有レ直二身命一。

犬子　司馬相如がいとけなき時、其親相如を寵愛して、犬子といひける事、史記に見えたり。日本にては小兒麗たる時、犬子〳〵とよぶ事とせり。

市の中の隱者　文選。晋王康琚反招隱詩云。小隱隱二陵藪一。大隱隱二朝市一。

陰德あれば陽報あり　淮南子曰。有二陰德一者。必有二陽報一。有二陰行一者。必有二昭名一。新考

色を見て惡を察す　是は劉向が列女傳に出たり。齊桓公の夫人、衛姬の故事より起れる諺なりと云へあり。さもあらんかし。列女傳に記せしは、齊桓

公伯道を行はれしに、諸侯皆來朝せり。衞侯ひとり至らず。桓公怒て管仲と謀て、衞を伐んとす、評議事をはりて、桓公は閨に入らる。衞姬、桓公を望見て、堂を下て再拜して曰、願くは衞侯の罪をゆるし給へ。桓公是を聞て曰、吾衞侯を伐べき心なし、何をか請ふや。衞姬の曰、妾聞、人君に三道あり。酒食の念、中にあれば、其色顯然として喜樂し、容貌淫樂なり。喪禍の思、中にあれば、其色寂然として清靜に、意氣沉抑せり。攻伐の念、中にあれば、其色忿然として充滿し、手足矜動す。今妾、君を望むに、趾を擧る事高く、色厲く、意揚せり。これ衞を伐んとおもひ給へる故なり。故に衞の罪を請と云。桓公聞て、衞侯の罪をゆるし給へりとかや。是色を見て、悪を察する也。俗に、女の汁をさすと心得ぬるは、ひが事なり。

痛なき腹をとられな　此諺の意は、萬の事に就て、人の疑のたゝぬやうにせよと云事也。文選君子行曰、君子防二未然一、不レ處二嫌疑間一、瓜田不レ納レ履、李下不レ正レ冠。是俗諺に、相類せる語也。歌にも

後拾　　公任

山里の紅葉見るとやおもふらん
ちりはてゝこそとふべかりけれ

海鰮の頭も信心から　この諺に似たる事、風俗通に載たり。云、汝南鮦陽有二於レ田得レ麏者一、其主未二往取一也。商車十餘乘經二澤中一行、望見二此麏著一レ繩。因持去、念二其不事一、持二一鮑魚一置二其處一。有レ頃其主往不レ見二所レ得、反見二鮑魚一、澤中非二人道路一、怪二其如一レ是、大以爲レ神、轉相告語、治レ病求レ福、多有二效驗一、因爲起二祀舍一、衆巫數十、帷帳鐘鼓、方數百里、皆來祷祀。號二鮑君神一、其後數年鮑魚主來歷二祠下一、尋二問其故一、曰、此我魚也、當レ有二何神一、上レ堂取レ之。遂從レ此壞。傳曰、物之所レ聚斯有レ神、言二其聚一レ之耳。右の意は、乾魚を神なりと信仰して、病を治し福を得しと也。いわしの頭を信心からとい

ふも、これと同意なり。

一葉落て天下の秋　事々物々の端、微にして、人其勢の盛なるを知ざる也。臣弑其君子弑其父も、一朝一夕の故にあらず。其所由來者久し。其端を早く辨べきもの也。諺の意も、其始の小なるを見て、其終の大なるを察せよと也。淮南子曰。以小明大。見一葉落而知歳之將暮。睹瓶中之氷而知天下之寒。これ世話の據なるべし。

石臼藝　人の藝能多けれども、精からざる者は、石臼の物として、碾ざるはなけれども、其器貴からざるが如き故、世話に、石臼藝といへり。周易正義引蔡邕勸學篇云。碩鼠五能不成一技。注云。能飛不能上屋。能緣不能窮木。能游不能度谷。能穴不能藏身。能走不能先人。これ世に、石臼藝と云類也。荀子云。梧鼠五技而窮。又俗に、少の才能あれ共、精からずして用に立ぬを、石鼠才と云も、是より出たる諺也。石鼠、碩鼠、梧鼠、共に螻蛄の異名なり。

石に花咲　あるまじき事の喩なり。然れども、石上の花と云ものあり。代醉編云。慈利縣武口寨石上有花。如堆心牡丹。枝葉繚繞。雖精於畫者莫能及。或以物擊破其花拂拭之。其花復見。

一寸の地獄　俗に、船に乘て水行するを、一寸の地獄と云。風波の難はかりがたく、至て危き事なれば也。朝野僉載云。乘船走馬去死一寸。諺こゝに出るにや。新考

一樹のかげ一河のながれ　一樹の蔭にやどり、一河の流を汲も、皆是他生の緣といふ事、昔白拍子のうたひたる謠なり。他生とは、今生を過て未來の生の時を云と、太平記抄に見えたり。新考

いそがばまはれ　古歌に

もののゝふの矢ばせのわたりちかくとも
いそがばまはれせたの長はし

沙長して巖となる　古今和歌集眞序曰。沙長爲巖之

頭。洋々滿ゝ耳。

一物あれば一累をそふ　經鉏堂雜志云。頃年畜ニ兩鶴ニ、既ニ之ニ專ス人看飼ニ朝放暮收。不ゝ免ゝ關ゝ心。又恐ゝ爲ニ高困ノ所ノ竟見ル。羽翩再完。一旦飛去。自ゝ是遂省ニ一事。以ゝ此知有ニ一物ニ、須ニ一累ゝ也。新考

今參二十日　俗に、奴婢の始て來り仕るものを、今參といふ。源氏物語東屋卷にも、いまゝゐり口をしからぬ事なめりとあり。俗諺の意は、奴婢のはじめて來り仕るもの、よく言行をつゝしみて、その主人に忠を盡すも、わづか二十日ばかりの間にして、其久しきに及ては、かならず懈怠せざるはなしといふ事なり。說苑敬愼篇云。官怠ニ於宦成ニ。是異語同旨なり。奴婢のみにかぎらず。士大夫たる人の君に事るにも、始につとめて、終におこたらざる者少し。よく心を用て、終をつゝしむ事始のごとくせば、此變なかるべし。

一人虛をつたふれば萬人實を傳ふ　古諺云。一犬吠ゝ形千犬吠ゝ聲。一人傳ゝ虛萬人傳ゝ實。

[俗語] 髣髴　史記司馬相如傳に出たり。韻會云。髣髴ニ委曲貌ニ。通作ニ髣髴ニしかれば、物に委細なる事をいふ也。今俗に、隔心なる事をいへるは誤也。

依稀　俗に、人の面影の能似たるを、いきじやといふは、則此字なり。さもにたりとよむ也。本作ニ依稀ニ韻會云。猶ゝ言ニ髣髴ニ也。

依々　俗に、物を打歎て依々といふ。詩經云。楊柳依々。文選李陵答ニ蘇武ニ書曰。能不ニ依々ニ。注云。戀思也。古詩曰。依々。

因果　華嚴經云。舉ゝ果知ゝ因。譬如ニ蓮花ニ方ニ其吐ニ花ニ。而果具ニ蓮中ニ。俚諺の說に、木の根本あるものは、必其實を結ぶ。彼に因て此に來るの謂なり。たとへば、こゝに人ありて、昨日人の物を盜て、今日害せらるゝ如き、昨日はこれ因にして、今日は則果なり。因果とは、善惡に應ずる詞なり。よきも因果、あしきも因果也。しかるに、今はあしき事にのみ心得ぬるは、あやまりなり。

因縁 法華經如レ是因。如レ是緣。名義集云。尼陀那。此曰二因緣一。生曰。因謂下先無二其事一而從レ彼生上也。緣謂下素有二其分一而從レ彼起上也。故因親而緣疎。

威儀 左傳北宮文子云。有レ威而可レ畏。謂二之威一。有レ儀可レ象。謂二之儀一。

安忍 左傳隱公傳云、安レ忍無レ親。神代卷に、安忍をいぶりと訓せり。

不審 此字は、韓詩外傳に出たり。いぶかしと和訓せり。萬葉集には、鬱悒の字を、いぶかしとよめり。

悒憤 萬葉集の讀なり。

早晚 鄭谷江際詩云。兵革未レ息年華促。早晚閑吟向二滻川一。

印可 小藝を極るもの、其師褒美の書を與ふるを印可と云。此字佛書に出たり。維摩經曰。若能如レ是宴坐者。佛所二印可一。

陰謀 ひそかにはかる也。李德裕紀功碑云。公密賂二其丁一。盡得二其陰謀一。

否應 人の云事を受用ざるを否といふ。諾をば應と云。後撰集の詞書には、おやのまもりける女を、いなともおともいひはなたでとあり。

遺恨 杜子美詩。老妻無二遺恨一。朱子文集云。無三復有二遺恨一。

逸興 杜子美詩。掾曹乘二逸興一。鞍馬去相尋。俗に、事の常に違たる事を、逸興なる事と云。

隱居 論語に、隱居以求二其志一。今俗に、家祿を子に讓て致仕するを、隱居と云。

石木 伊勢物語に、いはきにしあらねば、心くるしとやおもひけんとあり。（ほの字、の部、木石の條下にくはし。）

時勢粧 野槌曰、白氏文集新樂府に、時勢粧と書て、今やうすがたとよめり。

田舍 俗に邊鄙の事を田舍と云。柳宗元詩云。皇恩若許レ歸二田土一。晚歲當レ爲二田舍翁一。南史に、宋武帝大修二宮室一。袁顗盛稱二高祖儉素一。帝曰。田舍翁得レ此已過矣。田舍翁は、今いふゐなかもの也。然れば邊

鄙を田舎と云べし。

委細（いさい）　唐書。委細參問。

色（いろ）　俗に、女の事をさして色と云。毛詩序疏曰。女有二美色一男子悅レ之。故經文通女曰レ色。佛祖三經曰。佛曰。愛欲莫レ甚二於色一。色之爲レ欲。其大無レ外。

家苞（いへづと）　萬葉集に、梅の花先さく枝を手折ては、裹（つと）と名づけてよそへてんかも。又土產の字をも、つととよめり。又都產（つと）の字をも用ふ。

いく　行（ゆく）をいくと云事、萬葉集に多し。立田の山をいつか越いかんなどゝよめり。

いね　歸る事を云。適の字也。日本紀神代卷に見えたり。

いかけ　水などを人にかくるをいかけと云。沃懸（いかけ）の字なるべし。淸少納言枕草子に、白き水いかけさせよとあり。源氏眞木柱卷にも、火取をさといかけと見えたり。

一門（いちもん）　一族の事を一門と云。後漢書蘇章傳に出たり。

いやし　俗に、飲食をこのむ者をいやしと云。孟子曰。飲食之人者人賤レ之。此其據（よりどころ）ならん。

不搖子（いしなご）　めのわらはのするあそび事也。拾遺集の詞書にも、いしな取とあり。赤染右衞門家集に、女院のひめ君と聞えさせし頃、いしな取の石めすを參らすとて云々。小大君家集に、おほんいしな取の心をつゝませ給けるに、三十一ありつればとあり。

家集　　西　行

石なこの玉のおちくるほとなきに
過る月日はかはりやはする

異口同音（いくどうおん）　首楞嚴經五卷に出たり。

一人當千　李陵答二蘇武一書云。疲兵再戰一以當千○涅槃經云。人王有二大力士一。其力當レ千。故此人稱二一人當千一。

以前（いぜん）　史記趙世家。今三世以前○已前。集二呂秦文一序。秦漢已前。

以後　宦者傳論。自二明帝一以後○已後。史記三皇本紀。人皇已後。

以上　內則。凡自二七十一以上。

以下　孟子滕以下。曲禮。自二世婦一以下○已下。孝經云。自二天下一已下。

以來　孟子。自レ有二生民一以來。禮記檀弓。自二周公一以來○已來。史記三皇本紀。三皇已來（是は前より今迄の事を云。）秦本紀。自レ今已來（是は今より後の事を云。）これを以見れば、已來は前後の事に通用すべし。

一一　才子傳。不レ能二一々盡一レ之（山谷詩。言行一一無レ可レ揀。）

一宿　莊子。止可二一宿一而不レ可二以久處一。

一旦　史記蕭何傳に出たり。

一由旬　圓覺經に出たり。注云。一由旬則四十里。一云十六里。

一向　語錄解義云。一向正一直向也。

一般　又云。一般一樣也。

一概　楚辭卷之四曰。一概而相量。注云。概平二斗斛一木也。斗斛に大小あれば、概も大小あるべし。一概にしては量りがたし。今も物の片おちなる事を一概と云。

一體　莊子知北遊篇。皆有レ所二一體一。口義云。一體猶二一本一也。即一理也。

一匹　前漢書藝文志云。布帛廣二尺二寸爲レ幅。長四丈爲レ匹。六書正譌云。馬影四丈亦借用曰レ匹。別用レ疋非。藝文類聚云。馬光景一疋長故曰レ疋。事文類聚後集云。顏回望二吳門一馬見二一疋練一。孔子曰。馬也。然則馬之光景一疋長耳。故後人號レ馬爲二一疋一或曰。馬夜行則目明照レ前四丈。故曰二一疋一。或曰。春秋左氏說。諸侯相二贈乘馬束帛一。爲レ疋與レ馬相疋耳。今俗に、牛羊犬豕の類をも、一疋二疋なと數るは、其義を知らざる故也。疋とは、馬に限ていふべき詞也。牛をば幾頭、鹿猪をば幾首、鳥をば幾羽、魚をば幾喉と云べし。

一通　俗に、書狀一封を一通と云。曹子建與二楊德祖一

書云。辭賦一通。字彙云、書首未全曰レ通。後漢崔寔。政論一通。置二座側一。

一切(せつ) 史記李斯傳。一切逐レ客。索隱云。一切猶二一例一。言二皆整一之也。言レ切者。譬若二利刀之割一。運レ斤無レ不レ斷者上解。漢書者。以二一切一爲二權時義一。亦未レ爲レ得也。○大學蒙引云。一切一齊也。韻會屑韻。切千結切。大概曰二一切一。又霽韻七計切。一切大凡也。是を以て見れば、切の字、せつとよみ、さいと讀む。共に意同じ。

一齊(さい) 俗に、物のひとしき事を云。莊子秋水篇云。萬物一齊。孰短孰長。

一劫(こふ) 增韻云。梵書以二一世一爲二一劫一。又人壽は、百年を以て期とす。老少これを以準(もつてじゆん)とする故。人の一世を一期と云。

一幅(ぷく) 文選盧子諒詩。爲達一幅。

一同(どう) 左傳云。列國一同。是は百里を一同と云へり。魏書云。一同之意。是今一同といふ詞の如し。

一念(ねん) 宋史陽漢傳。一念之敬。

一往(わう) 溫公通鑑漢獻帝紀にあり。

一過(くわ) 俗に、かりそめなる事を一過と云。邵康節云
四時風花雪月一二過乎眼一。

一袞(こん) 程子遺書云。中庸之書。不レ分二精粗一。一袞說了。

一點(てん) 倩貫休題二東林寺一詩。田地更無二塵一點一。又時(じ)更(かう)のうつるを、一點二點と云。辰の一點(てん)などゝ云是也。

一段(だん) 杜子美詩。羽如二一段清水出二萬壑一。一段は一きは也。今俗に、物の嘉事(よきこと)を、一段と云はあしゝ。一段能(よし)とは云べし。一段を則よき事とすべからず。

一筆(ぴつ) 山谷詩。董狐南史一筆無。

音信(いんしん) 山谷詩。故國信音斷。音信はおとづれ也。俗(ぞく)に、人に物を贈るのみ、音信とおもへるは誤也。
小補韻會云。古者明レ使曰レ信也。而今之遣信。
某以通二書言一。謂爲信。故別之書信手信一。

違背(いはい) 類經附翼云。三千年來無二敢違背一。

違犯(いはん) 周禮全經云。違二犯命令一。

違却　物のちがひたる事也。却は助字にして、忘却、消却、失却などと云が如し。違格の字を用るは誤也。

意趣　小學。程伊川曰。教レ人未レ見二意趣一。必不レ樂レ學　陳選云。趣指趣也。

員數　晉書云。備二其員數一而已。

醫驗　醫者は必自媒して、其術の功驗を人に衒賣る。故に俗に、みづから我功能に矜事を醫驗と云。醫師の功驗を衒が如しといふ事也。醫術といはんもしからん。

色色　唐書云。輕薄敦厚色色有レ之。

幾何　史記趙世家。年幾何矣。字彙云。幾何問二多少一之辭。又未二多時一。物無レ多。俱曰レ無レ幾。

亡幾　歎逝賦。惜二年時一其亡幾。註亡幾無レ多也。

石戰　俗に、印地打と云。そのかみ五月五日に、京都白川邊にて、童男よりあつまり、隊伍を分ち、石礫を投て戰鬪をなし、勝負を決しける。是古昔陣法を習練有りし遺風なり。近世に至て、大人も出合、刀戟を携へ、互に殺傷に及ぶもの有しかば、制禁ありて其事やみぬ。鄙にも、此事所々にありしとかや。朝鮮にも、此事ありしとかや。東國通鑑曰。國俗於二端午時一。市井無頼之徒。群二聚通衢一。分二左右隊一。手二瓦礫一相撃。或雜以二短梃一以決二勝負一。謂二之石戰一。

挑戰　漢書、項羽挑戰。通鑑凡例云。將レ戰必先使二勇力之士以犯一レ敵。謂二之挑戰一。

一大事　法華經云。世尊以二一大事因緣一。故出二現於世一。

意地　心根のあしきを意地惡と云。俗に、もつはら怒つよきを、意地惡と云はあしゝ。又意智字。出二于鮮卑傳一。（困學紀聞）

鎮齋　神を祟る事也。萬葉集の訓なり。

【正譌】石壁（いしがき）いしがけは誤。忌（いみ）ゆみは誤。倚子（いす）ゆすは誤。忽諸（いるかせ）ゆるかせは誤。早晩（いつ）いつゝもは誤。海鰮（いわし）うわしは誤。晩鐘（いりあひ）いりやひは誤。煩悶（いきだはし）いきとだしは誤。否（いな）いにや、いんにやは誤。

いかい　いかめしいといふを、略していかいと云。いつかいと云は誤。　云甲斐なし　ふがいなしと云は、上の略なるべし。けれ共、きこえず。今土　きつと、しつと、豊に誤。　江豚　いるか　ゆるゝは誤。　努力　ゆめゆめ　いけすむは誤。
何時　萬葉集の訓也。俗に、いつ、何時と云は、之を云なり。

第二呂

【諺】論語讀の論語よまず　此諺、學者の病痛に當れり。吾儕論語を讀まざるはなしといへども、其中の一言も、これを身に行ふ事をしらず。誠に聖門の罪人ならし。程子曰、讀論語、有讀了全然無事者。是諺の意なり。

籠鳥雲を戀ふ　陶淵明詩云。籠中之鳥空窺不出。東坡詩云。馬因不出悲。馬繫常念馳。是此諺の意と同じ。白樂天詩云。籠養飛鳥、繫閉走獸。爲其昔羈羈可化、吾耳目爲我所業。今使聽之山林、得自在。何異罪因得戮辱。一身自戮。則一家必不戮。一家不戮。則一郷漸效之新。

六具をしむる　六具とは、甲、冑、頬當、籠手、佩楯、脛當なり。諺の意は、六具のうち一具闕ても、軍用に利あらず。六具をしめて後、戰場に赴くべし。凡人も、思慮を胸中にしめて、事をさばく事、武士の六具をしめて、戰場にのぞむが如くする時は。事に臨て、缺る事なく、動する事なくして、堅固なりと云心にて、胸中に六具をしめよと云事か。

論するものは中からとる　史記に、卞莊子と云し者、よく虎を刺事を得たり。或時、兩虎あるを見て、卞莊子これを刺んとせしかば、館の豎子是をとゞめて云、兩虎今まさに牛を食はんとす。牛うまくんば、必あらそひうばはん。しからば、つよき虎はきずをかうふり、弱虎はたゝかひ死ん。其時にのぞみてこれを刺ば、一度に二の虎を得んと云。卞莊子げにもと思ひて、その如くせしかば、果して兩の虎を得たり（戰國策に見たり）。世に、此故事を以て、右の諺の出所とす。されども穩當ならず。諺の意は、凡事を論ず

るには、過不及なく、中を執といふ事なるべし。

【俗語】羅齋　僧の外に出て、乞食するを云ふ。冷齋夜話にいへるは、僧の惠洪といひし者、臨川と云所の景德寺に行て、友と共に閣上に上り、禪月が畫く所の、十八羅漢の甚あやしきを見る。第五の尊をうしなふ。惠洪詩を作て云、不レ知何處羅齋去。不レ見二雲堂第五尊一。

路次　文選棗道彥雜詩。路次限二關梁一。王右軍集。吾欲二路次見一レ之。

露見　あらはれあらはらるゝ也　金史朮虎高琪傳。形迹露見。不レ可二盡言一。又露顯と書もよし。

魯鈍　杜子美詩。小臣魯鈍無二所能一。

第三　波

【諺】薄氷をふむごとし　危き事の喩也。詩經小旻篇云。戰戰兢兢。如レ臨二深淵一。如レ履二薄氷一。傳云。戰々恐也。兢々戒也。

馬耳東風　東坡集十二。世間馬耳射二東風一。注。李白詩云。世人聞レ此皆掉レ頭。有レ如二東風射二馬耳一。又むの字の部に見えたり。

旁若無人　史記荊軻傳に出たり。新考

花は根にかへる　老子云。夫物芸々。各歸二其根一。歌に、新考

千載　崇德院

花は根に鳥はふるすに歸るなり
春のとまりを知る人ぞなき

萬事は夢　菅丞相、太宰府に左遷せられ玉ひし時の詩に、離レ家三四月。落淚百千行。萬事皆如レ夢。時々仰二彼蒼一。

海鰻鱺も一期鰕魚も一期　杜詩に、孔丘盜跖共塵埃といへり。俗の諺と意同じ。

法師がにくければ袈裟まで憎し　六韜云。武王登二夏臺一以臨二殷民一。周公旦曰。臣聞レ之。愛二其人一。及二其屋上烏一。憎二其人一者。憎二其餘胥一。この語、言異

にして旨同じき意也。

八十の三歳兒　漢書文帝紀曰。七八十翁。嬉戯如ニ小兒ー。これ異域同譚なり。老て再び兒となると云も同事也。

俗語 無墓　寢覺記に云、むかしの人は、父母の墓をいみじくかざゆるを孝養とす。報恩の志なき愚者を、はかなしと云そめて、今もおろかなる人をはかなしといへり。

方外　荘子大宗師篇。彼遊ニ方之外ー者也。是は禮法の外に居ると云意なれば、俗に、おろかに淺ましき人を、方外と云も據有。

母御　俗に、人の母をさして母御と云。本朝文粹第一卷。菅公詩に。明卷稱ニ嬢御ー。注云。俗謂ニ貴女ー爲レ御。蓋取ニ夫人女御之儀ー也。此意にて、母御と云も皆同也。子の字を用るは誤也。貴女を御とすれば、父御、兒御などゝは云べからず。

法式　荘子天下篇に出たり。

早穗　神祇に奉る物を云。三代實錄に見えたり。是稻の早穗をば、先神に手向る物なる故、かくはいふなるべし。三代實錄に、新鑄錢を神に奉るとして、所ニ鑄作ー之早穗十五文とあり。然れば何によらず神に奉るものは、早穗と云ならし。

はたはり　幅張と書べきにや

芝々集　親教僧都

水うみに秋の山べのうつれるは
はたはりひろきにしきとや見ん

馬鹿　史記秦始皇本紀。二世皇帝三年八月己亥。趙高欲レ爲レ亂。恐ニ群臣不ーレ聽。乃先設レ驗。持レ鹿獻ニ於二世ー曰。馬也。二世笑曰。丞相誤邪。謂レ鹿爲レ馬。問ニ左右ー。左右或默。或言レ馬以阿ニ從趙高ー。或言レ鹿者。高因陰中ニ諸言レ鹿者ー以レ法。後群臣皆畏レ高。是に本づきて、人を誑惑するを馬鹿とすとは云傳へたり。又人のおろかなるを、はかと云は、破家の字なるべし。

拾遺
　鹿をさして馬といふ人ありければ
　　かもをもおしとおもふなりけり

小端　はしの少見ゆる也。和名抄に、兩節間の三字を、よと讀が如し。萬葉集に、
　此山のもみぢの下の花をわが
　　はづ／＼に見てかへる戀しも

呫　韻會曰。說文呫相謂也。从ニ口出レ聲。相謂とは、彼是互に言義也。

擤　文字集略云。以レ手去ニ鼻洟一也（和名抄）

𦨣　船の行をはしると云、此字也。五音集韻に、舟行也とあり。

褫　奪事を云。盜の衣をはぐなどゝ云、此字也。

嚏　古今集俳諧歌に、
　出てゆかん人をとゞめんよしなきに
　　となりのかたにはなもひぬかな
　　　　　　　よみ人しらず
顯昭云、はなひる事、いかにもよからぬ事也。年始にもはなひりつれば、祝事をいひて祝ふ也。去れば人の所へゆかんする初にも、隣の人のはなひかんを聞ても、くせ／＼しからん人は、立留るべきなり。猶かの部にくはし。

放埒　人の法度にしたがはざる事、馬などの埒を放れ出るにたとへて、放埒とは云なるべし。埒とは、世說。晉王濟馬埒。謂下於レ外作ニ短垣一繞上レ之也。

潑　水などを、ばつと捨ると云、此字なり。字彙ニ注曰レ澆。散曰レ潑。總曰レ灌レ水。

狹間　物の間也。西行法師歌に、
　はるかなる岩のはざまに獨居て
　　人めおもはでものおもはゞや

這入　門の口を云なり。後撰集に、かよひすみ侍ける人の、家のまへなる柳をおもひやりて、
　　　　　　　　躬恒
　いもが家のはひ入にたてる青柳に
　　今やなくらん鶯のこゑ

繁華（はなやか） うつくしき心也。河海云、白氏文集に、繁華をはなやかとよめり。

映（はえ） はゆるとも、はえなしとも、花の夕ばえなど、此字也。又物をのぶる事をはへると云は、延の字也。萬葉集に打延（はへて）とあり。

蔓（はびこる） 日本紀には、被をはびこれりと訓せり。

莫大（ばくたい） 易繫辭云。法象莫レ大二乎天地一。前漢書賈誼傳。莫大諸侯。師古註云、莫大謂下無レ有二大二於其國一者上。言最大也。莫大とは、これより大なる事莫（なし）と云の義也。

破顏（はがん） 釋迦靑蓮目をめぐらして、破顏微笑すといふ事、禪の語錄に見えたり。顏をやはらげて、すこし笑事を、破顏といふなり。白樂天詩。一放狂歌。一破顏。

法度（はつと） 尚書大禹謨に出たり。注云。法度。法則制度也。國家に限らず、大小事共に、法則制度ある故に、何も道にて法度と云。俗に、法度の事を、はつせきといふ。據なき事なり。

囃（はやす） 字彙。七合切。助レ舞聲。俗に、うたひものを囃（はやす）と云。

腹立（はらたつる） 俗に、怒（いか）る事を腹立と云。人の七情皆心腹につゝむ故、吉田兼好は、おぼしき事いはぬは、腹ふくるゝと云（いひ）、眉山蘇氏、忍レ事腹如レ囊と作れり。されば據なき詞にもあらず。しかれ共、和歌の詞などには見えず。

方便（はうべん） 佛經に、下根（げこん）の衆生の機を調て、一實に歸せしむべきために、さま〴〵の權教（ごんげう）を設て、疑を置（おか）しむるを方便と云。方は方法也。巧に諸法を用て、機（き）にしたがひ物を利する義也。維摩經云。維摩詰。以二無量方便一饒二益衆生一。

破志（はし） 俗に、言行法（はふ）に背て、我ために益なき者を破志者と云。尤意義あり。しとは心の趣き向ふ所也。心の正面まつすぐに、其志す所のめあてに行向ふを云。今一人來て、邪僻の行をなさば、中人以下は、遂に彼に浸淫（しんいん）せられて、德義を銷刻（せうこく）し、志を

破るの端とならん。これを破志の友と云べし。

徘徊　呉都賦云。徘徊徜徉。註。徘徊不レ安也。字彙云。徘徊不レ進之貌。蓬窓日錄云。徘徊二字。始ニ於漢人ノ高后紀ノ徘徊往來ノ思玄賦。馬倚レ輈而徘徊。息夫躬辭。[illegible]徘徊兮。註。不レ得ニ其所一也。

白狀　漢書丙吉傳に出たり。

敗北　通鑑集覽。服虔云。人好レ陽而惡レ陰。北方幽陰之地。故軍敗曰レ北。猶下にくはし。

拜見　漢書郊祀志に出たり。

拜受　玉藻。大夫親賜レ士。士拜受。論語。康子饋レ藥。拜而受レ之。

拜領　朱子文集に多く出たり。類書纂要云。拜而領ニ人之禮一曰ニ拜領一。

繁榮　閑居賦に出たり。

繁昌　潘安仁楊荊州誄云。昭穆繁昌。

俳諧　韻府。鄭谷詩語多ニ俳諧一。今俗に、連歌に似て、戯慢の言多きものを俳諧と云。

萬端　史記信陵君傳云。賓客辯士。說レ王萬端。又陸機歌云。道雖ニ一致一。塗有ニ萬端一。

萬方　書經湯誥云。朕躬有レ罪。無レ以ニ萬方一。

匍匐　詩經生民篇云。誕實匍匐。注。兒以レ手行也。史記范雎傳に、蒲伏とあり。蘇秦傳には、蒲服とかけり。漢書霍光傳、扶服とあるも、並に匍匐に同じ。

拔群　陸士衡謝ニ平原內史一表。擢レ自ニ群萃一。注。向曰。言レ拔ニ於群聚之中一。人にぬきんでたりと云事也。

破滅　陳孔璋檄ニ呉將校部曲一文云。破ニ滅彊敵一。

末葉　漢書徐樂上レ書曰。何謂ニ土崩一。秦之末葉是也。文選辨亡論註。良曰。葉代也。

末孫　漢書劉向傳。雖レ有ニ湯武之德一。不レ能レ訓ニ末孫之桀紂一。

沛艾　張平子東京賦に出たり。注。良曰。馬行貌。今俗に、警蹕時に、はいくと云は、馬子の詞に人をのけんとて沛艾と云を、はいくと云あやま

わるにや。蒲芟は、馬のあとより行と云意なるべし。これより、馬ならねど、先をはらふを、はいはいといふにや。

半死半生　朱子文集。豈非所謂半生半死之蟲哉。

腐學　元史葛良嗣傳。人多腐學。

はふれる　源氏東屋卷に出たり。仙源抄に、流離の字をはふれると訓せり。流離の字は、詩經に出たり。註云。流離漂散也。

果行　俗に、事功の成をはかゆくと云は、果行と云意なるべし。果行の字は、易に出たり。蒙卦象云。君子以果行育德。

半塗　中庸云。君子遵道而行。半塗而廢。吾弗能已矣。

破落離　此類の俗語多し。飛落離、不落離、不破離などと是也。昔もろこしの文には見及ばず。

走書　俗に、早くものかく事を、走書と云。東坡文集云。眞生行。行生草。眞如立。行如行。草如走。未有不能立能行而能走者也。

博弈　論語に出たり。註。博局戲也。弈圍棊也。今俗に、賭の勝負事を、すべて博弈と云は、誤なり。

【正誤】光組は誤。ほうこうへはおたい、はなや思ひ物いふ時、嘗のあらはるゝ事なり。はなめくと云は誤。隼人には誤。母者人は誤。母者人たゞ母と云てよし。者人はいらぬもの也。

第四　仁

【諺】人間萬事塞翁馬　東坡詩。人間萬事塞翁馬。推枕軒中聽雨眠。諺こゝに出たり。此諺の意は、淮南子に云。むかし塞上にて、北の胡の國に近き所に、一人の翁あり。其人馬を失へり。人皆これをとぶらふ。翁が曰。これも又さいはひたらざる事をしらんや。月を經て此馬、すぐれたる馬一疋をつれて歸る。人皆これを祝ふ。翁が曰、これも又禍たらざる事をしらんや。案の如く、其子この馬に乘事を好しが、或時馬よりおちて、其髀ををる。人又是をとぶらふ。翁が曰、是も又福なる事をし

らんや。後一年ばかりして、秦の始皇帝、胡をふせがんために、蒙恬を遣して、萬里の長城を築しむ。其時生つき健なる者は、皆公役にかゝりて、死するもの多し。たゞ翁父子のみ、年老い、臂の折たる故、公役をゆるされて、死ざる事を得たりとかや。誠に禍福のはかりがたき事、今の世もかくの如し。又俗に、北叟頭巾と云、北叟笑などいへるも、この翁の事より起れる事也。

人面獸心　人として、仁義忠孝の心なく、邪慾放肆なるは、人の面形ありといへども、心は禽獸に同じと云事也。班固漢書贊云。夷狄之人。被髮左衽。人面獸心新考

雞寒して木にのぼり、かも寒して水に入る　老學菴筆記曰。淮南諺曰。雞寒上樹。鴨寒下水。驗之皆不然。有一媼曰。雞寒上距。鴨寒下嘴。上距。謂足縮一。下嘴。謂其咮於翼間。新考

にくきものはいけて見よ　菅家の御歌に、新考
御集
いのちがないきの松原いきてなは
心づくしの人のはて見ん

にくまれ子世にいづる　五代史諺云。偏愛子不保業。是今の諺と、言異にして意同じ。新考

俗語　忍辱　金剛經に出たり。註云。能降嗔怒。これ忿を止て、和ぎ悅ぶ意也。

人數　史記五宗傳。不以長子梲爲人數。

苦手　靈樞云。爪苦手毒。爲事善傷者。可使按積抑痹。手毒者。可使試按龜。置龜於器下而按其上。五十日而死矣。これ世にいふ苦手也。此者芋の莖を折に其味苦し。又腹の痛を抑て効あり。又蛇を捕るに、蟠りてうごかず。俗に蛇たましと云。是苦手也。

甚多　俗に、人などの多く集りたるを、にえると云。日本紀景行帝紀に、甚多を、にえさなりと訓せり。是より出たる詞なるべし。

香 俗に、匂の字をにほふとよめり。誤也。字書に、匂を薫香とするの義なし。藤原敦光對庭花詩曰。當レ戸濃匂合レ霜媚。入レ簾落蕊帶レ風斜。濃匂を落蕊に對す。是も又薫香の義とせり。如此の類、官家先儒の詩文に多し。皆習て察せざるの誤也。

北 漢書高帝紀註。師古云。北陰幽之處。故謂二退敗奔走者一爲レ北。又後漢書臧宮傳註。人好レ陽而惡レ陰。北方幽陰之地。故軍敗者謂二之北一。

荏弱 物のよわき事を云。楚辭に出たり。註云。荏亦弱也。

偐 字彙云。僞物也。贋亦同。物の眞にあらずして、僞る物を云。俗にいふにせもの也。

第五 保

[諺] ほまれあらんよりそしりなかれ 韓文送二李愿歸一盤谷一序云。與二其譽一於前。孰下若無上毀二於其後一。これより出たる諺也。新考

譽るはそしるもとゐ 莊子曰。好面譽レ人者。亦好背毀レ之。吉田兼好がつれ〲草に、ほまれは又そしりの本なり。身の後の名殘りて、更に益なしとかけり。

[俗語] 褒美 漢書鄧禹傳。帝數賜レ書褒美。

鋒起 本作二蠭起一。史記項羽紀に出たり。註。如淳曰。蠭起猶レ言二蠭午一也。衆蠭飛起交横若レ午。言二其多一也。又漢書高祖紀。盜賊鋒起。註。或作二蜂起一。後漢書光武紀。寇盜鋒起。注。言二賊鋒銳競起一。或作レ蜂。喩レ多也。

噬レ臍 物の及ぬ事に喩ふ。後悔するを云。左傳莊公六年云。若不二早圖一。後君噬レ臍。杜注。若レ嚙二腹臍一。喩レ不レ可レ及。

折レ骨 左傳哀公二年に、折レ骨の字出たり。是は軍する時、敵を討とも、骨を折までには至らじと云事也。後漢書李固傳云。昔昌邑之立。昏亂日滋。霍光憂懼發レ憤。悔レ之折レ骨。是は後悔の事にいへり。

倭俗には、苦勞する事を骨折と云。

新六帖　　　行　家

さりともとさせる事なきつぶれ笠
ほねをりてぞ君につかへし

本(ほん)　書籍を本と云。後漢書獎宏傳。宏所レ上便宜及言二得失一。輙手自書寫毀二削草本一。

渤(ほとびる)　史記に出たり。

勃谿(ぼつけい)　莊子外物篇云。婦姑勃谿。註。勃谿爭鬪也。今俗に、怒る事を、ぼつかうおこすと云は、勃谿の云あやまり也。

北叟顏(ほくそかほ)　俗に、憂喜心にとゞめず、いつも悦ばしき顏を北叟顏と云。又北叟笑と云。塞翁が故事也。已に前に見たり。班固幽通賦。北叟頗識二其倚伏一。又頭に被る(かぶる)を、北叟頭巾と云。

木石(ぼくせき)　文選司馬遷書。身非二木石一。獨與二法吏一爲レ伍。鮑昭行路難云。心非二木石一豈無レ感。白氏文集。人非二木石一皆有レ情。不レ如レ不レ遇二傾城色一。伊勢物語にいはきにしあらねば、心ぐるしとやおもひけん。源氏東屋に、いは木ならねば、おもほしゝる。

煩惱(ぼんのう)　大論云。煩惱者。能令二心煩作一レ惱。故名二煩惱一。又曰。屬レ婬屬レ瞋屬レ癡是名二煩惱一。婬瞋癡皆心の惱(なやみ)をなす、故に煩惱と云。俗に、たゞ婬慾の事のみを、惱煩と心得ぬるはあしゝ。又下賤(げす)の詞に、慾垢煩惱(よくあかぼんのう)と云つゞく。法華經。諸苦所レ因。貪慾爲レ本。又曰。衆生垢重。是等によりて見れば、據なき詞にあらず。

凡夫(ぼんぶ)　文選曹冏六代論。委二天之重於凡夫之手一。廣雅。凡輕也。今人鄙レ人爲二凡夫一。輕賤之稱也。

衡黒(ほくろみ)　孟津抄に訓せり。

颶母(ほでる)　舟人のいふ詞也。風の吹んとする時、海のおもて、沖のかたひかる事也。嶺表志云。南海秋風雲有レ暈如レ虹曰二颶母一。必有二颶風一。和歌にもよめり。

新六帖　　　衣笠内大臣

山の端にはでりせぬ夜は寒い浦に
　あすはひよりといづる舟人

はろゝうつ　雉子の鳴事也。
古今　春の野のしげき草葉のつまごひに
　　飛たつきじのほろゝとぞなく

ほれる　老にほるゝと云時は、老耄とも、老悖とも書べし。老たるのみに非ず。心の明ならぬを云時は、恍の字也。王逸楚辭註。恍失意也。又男女の色に迷入を、ほれると云は、溺の字也。

暴虐　孟子に出たり。

奔走　詩經清廟篇云。對越在天。駿奔走在廟。今俗に、人を招て、あるじまふけするを、馳走と云、奔走と云は、奔り走て、掃除をなさしめ、又饗の用意をすると云意にや。

褒貶　左傳序。春秋以一字爲褒貶。

本性　上嵩政治疏。陛下明吉凶之分。通人道之正。使不喪其本性者也。

反故紙　北齊史、韓軌云、安能作刀筆吏披反故紙。源氏橋姫卷に、さゝやかに押まきたるほぐどもの、かびくさくとあり。故をくとよむは、五音通ずれば也。

側聞　列子。吾側聞之。

芃々　詩經。芃々其麥。說文。草盛貌。今俗にも、草の盛なるを、ぼうぼうと云。此字也。

鬅鬙　山谷詩云。午過未蘇髮鬅鬙。注。切韻云。鬅鬙被髮也。字彙云。鬅鬙髮亂也。俗に、髮の亂れたるを、ぼうぼうと云は、鬅鬙なるべし。

保養　温公通鑑唐大宗紀。疾未全平。欲專保養。

本望　隋書云。深乖本望。

矛盾　物のすりちがひたる事を云。俗に、むじゆんとも讀む。韓非子云。人有鬻矛與楯者。譽其楯之堅物無能陷也。俄而有譽其矛曰。吾矛之利物無不陷也。人應之曰。以子之矛陷子之楯何如。其人弗能應也。是より出たる詞也。

[illegible]　楚辭註。朱子曰。狹而長也。亦作レ㮰。

[illegible]　字彙云。口滿レ食。俗に、頰張と云。是也。

彷彿　楚辭遠遊篇云。時彷彿以遙見。朱子註云。見不レ定也。亦作二髣髴一。

本末　大學曰。物有二本末一。

[正譌]　行器（ほかい）ほつかいは誤。木履（ぼくり）ぶくりは誤。綻（ほころびる）ふくろびるは誤。頰（ほゝ）ほゝげたと云は、甚いやし。疹（ほろし）そろせは誤。放下（ほうかす）ほかすは誤。

第六　反

[諺]　蛇に足なし魚に耳なし　淮南子云。兎絲無レ根而生。蛇無レ足而行。魚無レ耳而聽。蟬無レ口而鳴。○代醉編三十九。朱翌云。畫レ蛇著レ足無二用處一。爲レ蛇畫レ足。見二戰國策與二史記一。按本草蝮蛇陶隱居注云。蛇皆有レ足。燒レ地令レ熱。以レ酒沃レ之。置レ中足出。酉陽雜俎云。蛇以二桑柴一燒レ之則見二足出一。曲江老兵。捕二一蛇一燒レ之。四足垂出如二鷄足狀一。この說の如なれば、蛇に足なきにもあらず。

辯舌水の流るゝが如し　是は晋郭象が故事より出たる事也。晋書列傳二十。郭象字子玄。少有二才理一。好二老莊一能二淸言一。大尉王衍毎云。聽二象語一如二懸河瀉一レ水。注而不レ竭。新考

[俗語]　折　俗に、物を分ち奪ふを、へつると云。此字なるべし。日本紀十九卷に、折の字を、へづれりと訓せり。是分つ意なるべし。

平生　論語に出たり。朱子曰。平生平日也。

辟易　漢書項籍傳に出たり。師古云。辟易謂三開張而易二其舊處一。又通鑑集覽云。辟易驚却貌。

偏傍　文字の偏傍也。晋書云。王右軍書。多不レ講二偏傍一。

偏頗　書經洪範。毋レ偏毋レ頗。遵二王之義一。○孟郊詩。君看土中宅。富貴無二偏頗一。史記註。偏不レ平。頗不レ正。

下手　下手上手と云詞は、碁の手より出たる字也。碁に限ていふ詞なれども、今は諸藝に通じて云。手を以するわざなれば、それもひが事と云まじきにや。

良將を國手と云が如し。

辯口 俗に、口才有ものを云。史記范睢傳。齊襄王。聞二睢辯口一。又朱建傳云。爲レ人辯有レ口。

辯說 宋史云。辯說之士。

變化 易係辭云。擬議以成二其變化一。

表裏 北史。宋世軌爲二延尉少卿一。蘇軫之爲二正寺中一。語曰。決二定嫌疑一蘇軫之。視レ表見レ裏宋世軌。今俗に、人の僞りがちにて、事の決定せぬを、表裏ものと云も、これに同じき詞也。

偏參 傳燈錄玄沙傳。雪峰召曰。備頭陀。何不二偏參去一。

別紙 朱子文集云。別紙示及。

辯辯 莊子。顏淵曰。夫子辯亦辯也。夫子馳亦馳也。俗に、無用の說話をなして、時をうつすを、辯々と云。

【正誤】 原本門 偏綴は誤。偏は誤。變改がへん 平等とは誤。遍事とは誤。下手へたの皮と云は、書いやし。

第七十

【詞】ときさゝぬ御代 史記云。子產爲レ相三年。門不レ閉。道不レ拾レ遺。 新考

同氣相求む 易文言曰。同聲相應。同氣相求。吳越春秋云。同病相憐。同憂相收。 新考

時にあはず 孔子の大聖すら、七十餘國を經めぐりて、終に世に用られ給はず、時にあはさゞる也。又萬の所作の、時にあはぬと云事あり。孫臏子曰。鄭之鄙人學レ爲レ蓋。三年蓋成而大旱。蓋無レ所レ用。乃棄而爲二桔槹一。又三年桔槹成而大雨。桔槹無レ所レ用。則又還爲レ蓋焉。未レ幾而盜起。民盡改二袞服一。鮮下有レ用レ蓋者上。欲レ學レ爲レ兵則老矣。

時に遇ば鼠も虎となる 漢書東方朔傳云。用レ之則爲レ虎。不レ用則爲レ鼠。この意を歌に、

宗尊親王

虎とのみ用られしはむかしにて

今は鼠のあなう世のなか

老人の子は影なし　風俗通云。老人子無レ影。

とふにつらさのまさる

西院皇后宮

續古今題不知
わすれてもあるべきものを中々に
とふにつらさをおもひ出ける

入道前右大臣

同山家秋風
吹風もとふにつらさのまさるかな
なぐさめかぬる秋の山さと

富ては驕り貧ければ諂論語。子貢曰。貧而無レ諂。富而無レ驕何如。子曰。可也。未レ若ニ貧而樂富好レ禮者一也。

燈滅んとして光をます　列子仲尼篇口義云。燈將レ滅者必大明。

遠目ばかりのはゝきゞ

六帖
そのはらやふせ屋におふるはゝきゞの　坂上是則
ありとは見えてあはぬ君かな

順和名云、はゝきゞとは、信濃國そのはらふせ屋と云所に森あり。其森よそにて見れば、庭はく帚に似たる木の枝あるを、立よりて見れば、其木も見えずとなん申傳へたり。よりてかくはよめりといへり。この意を取て、世話に、目にばかり見て手にとられぬ事を、遠目ばかりのはゝきゞと云。

問は一旦の恥問はぬは一期の恥　諺の意は、凡人必先覺の人に順て、審に問、明に辨ぜずんば、なんぞよく道をしらんや。しかれ共、小人は一旦問事を恥て、一生の恥を抱くと也。中庸。子曰。舜其大知也與。舜好レ問而好察ニ邇言一。論語云。子入ニ大廟一毎レ事問。注。尹氏云。禮者敬而已矣。雖レ知亦問。謹之至也。かく大聖の舜、孔子さへ、問事を恥給はず。後生晩進なんぞ、問事を恥べきや。

泥の中の蓮　維摩經云。卑濕淤泥。乃生ニ蓮華一。周茂叔愛レ蓮說曰。予獨愛下蓮之出ニ淤泥一而不レ染。濯ニ

清漣而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭々淨植。可遠觀而不可褻翫焉。新考

僧正遍昭

古今
はちす葉のにごりにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

虎うそぶけば風さはぐ　易文言云。風從虎。淮南子云。虎嘯而谷風至。龍擧而景雲屬。王子淵聖主得賢臣頌。虎嘯而風冽。新考

虎の尾をふむが如し　書經君牙云。心之憂危若踏虎尾。新考

月清集
もののふのさげはく太刀のしりさやの
とらの尾ふみておそろしの世や

鳶が鷹うむ　詩小毖傳。古語云。鷦鷯生鵰。是鳶が鷹うむと云に同意也。

若鳥は風吹　曲禮曰。前有塵埃。則載鳴鳶。註云。鳶鳴則將風。

鳥なき里の蝙蝠

和泉式部

夫木集
人もなく鳥のなからん島にては
このかはほりも君を尋ん

【俗語】

常石堅石　古事記に出たり。

同行　俗に、神社に參詣する人、伴ひ行友を呼て、同行と云。按ずるに、韓退之詩。同行二十人と作れり。

塗炭　書經仲虺之誥云。有夏昏德。民墜塗炭。註云。夏桀昏亂不恤下民。民之危險。若陷泥墜火無救之者。

貪欲　法華經云。諸苦所因。貪欲爲本。張平子東京賦。豈徒饕餮之貪欲。

得々　僧貫休詩云。一鉢一杖垂々老。萬水千山得得來。東坡詩云。知是多情得得來。今俗に、物のゆるやかなる事に、とくと云、とくとくなどゝ云は、此字なるべし。又すみやかなる事に、とくと云時は、疾の字なるべし。得は音を用、疾は訓を用ふ。

獨身　史記司馬遷報ニ任少卿一書。獨身孤立。又伍子胥傳に出たり。

としぎり　くだものゝ、なりならずなどするを、としぎり、又としぎれと云。年饉の字を用べきか。

後撰　贈太政大臣

今までは何かは花のさかずして
よそとせあまりとしぎれはする

大和物語

いかでかくとしぎりもせぬたねもがな
あれ行にはのかげとたのまん

徒然　字彙云。徒但也。俗に、閑寂にして、なす事なきを徒然と云。つれ〴〵と訓せり。李白詩所レ向非ニ徒然一。

兎角　なき事の喩に云詞也。楞嚴經。佛告ニ阿難一。世間虚空水陸飛行諸所物象名爲ニ一切一。汝不レ著者爲レ在。爲レ無。無則同ニ於龜毛兎角一。云何不著。名義集云。大虚水月並喩ニ體空一。兎角龜毛皆況ニ名假一。六祖檀經云。離レ世覓ニ菩提一。恰如レ求ニ兎角一。智度論卷一云。如ニ兎角龜毛常無一。和語に、とやせん、かくやせんといへるは兎角にあらず。

取捨　日本紀の訓なり。萬葉集には、左右の字を、ともかくもとよめり。

等閑　錢起歸雁詩。瀟湘何事等閑歸。と作れり。疎略なる意也。今俗に、ねんごろなる事を、等閑と云は誤なり。等閑なくするとは云べし。

歷問　日本紀に出たり。

響　萬葉集に出たり。又動の字をも、どよむと訓せり。

鼕々　鼓の聲也。

嘈々　字彙云。歌聲。又多言。俗に、多く物いひ、或歌聲のさはがしきなどを、嘈々と云。

無レ動　源氏帚木卷にあり。どうてんせぬ事なり。

とゞろ　歌林良材云。動の字也。

古今　讀人不知

天の原ふみとゞろかしなる神も
おもふ中をばさくるものかは

遯世 中庸。遯レ世不レ見レ知而不レ悔。
等輩 後漢書賈復傳。陵ニ折等輩ー。
同姓 詩經杕杜篇。豈無ニ他人ー、不レ如ニ我同ー姓。
棟梁 易大過云。棟梁之責。
同心 易繫辭云。二人同レ心。其利斷レ金。
貪著 法華經。貪ニ著利養ー。又俗に、とんじいると云も、貪人なるべし。
同列 史記伍子胥傳に出たり。
東西 鶴林玉露云、世に仙道をいふもの蓬萊と云。佛を云ものは、天竺と云。蓬萊は東也。天竺は西也。抱朴子に、青州より日出處に至て、號して太平地と云。佛經に、西方を云て、極樂世界とす。太平極樂、ひとり東西を稱す。古より戰爭只南北にありて、東西を云事希也。或人農氏が意を述て云、俗に相撲物見場の騷動を下知する時、東西〱と云て、南北をいはぬも、戰爭の方を避るなり。自然の理なり。

宿直 文選謝靈運詩註。直は禁中に宿して、非常に備るを云とあり。世俗には、御番と云。
徇 漢書高帝紀云。斬以徇。注。師古云。徇行示也。司馬法曰。斬以徇。言使レ人將行徧示ニ衆士ー以爲レ戒。俗に、觸廻すと云は、則徇也。(徇ふの部にくはし。)
逗遛 漢書元后傳。提橋逗遛。又逗留の字は、後漢書に出たり。陸宣公集云。逗留未レ進。
失圖 左傳昭公七年云。悼レ心失レ圖。俗に、とほうを失ふと云も、圖謀を失也。
闘 孟子註。闘諍。
唁 說文云。弔レ生也。公羊傳云。弔レ失レ國曰レ唁。(又作レ吊。又作レ弔。)
弔 說文云。从ニ人持レ弓。徐云。弔レ喪當レ有レ助。故从ニ人持ニ弓。六書正譌云。別作ニ吊弔ー並非。生るをとぶらひ、死せるをとぶらふ、おの〱別也。混じて、弔の字を用べからず。
[illegible]

[illegible]十[illegible]

諺草卷之一終

諺草卷之二

貝原好古纂輯

第八　知

【諺】塵積て山となる　說苑曰。土積成山則豫樟生焉。學積成聖則富貴尊顯至焉。大戴禮云。積土成山風雨興焉。積水成川蛟龍生焉。新考　古今集の序に云、高き山も、ふもとのちりひぢよりなり、あまぐもたなびくまでおひのぼる。

長者富にあらず　韓詩外傳云。貪物而不知止者雖有天下不富。新考　遺教經云。不知足者雖富而貧。

智慧の鏡もくもる　朝野僉載曰。人貧知短馬瘦毛長。又古諺曰。福至心靈。禍來神昧。新考

智者も千慮に一失あり　史記韓信傳廣武君云。智者千慮必有一失。愚者千慮必有一得。故狂夫之言聖人擇焉。新考

忠が不忠になる　漢書鄒陽曰。玉人獻ジ寶楚王誅レ之。
李斯竭シ忠胡亥極レ刑　この類、和漢ためし多し。
今かぞふるに遑あらず。

忠臣二君につかへず　王蠋曰。忠臣不レ事ニ二君一。
王蠋は齊國の人、其事實史記列傳にくはし

血にて血を洗ふ　唐書源休傳云。可汗使ニ謂レ休曰。汝國已殺ニ突董等一。吾又殺レ汝猶ニ以レ血洗一レ血。汚益甚爾。突董は可汗は回紇王也。源休は唐の使者なり。突董は可汗が叔父也。唐にて殺せり。

中流に船をうしなへば一瓠も千金　鶡冠子云。中流失レ船。一壺千金。新考

竹馬の友　幼き時の友を、竹馬の友と云。世說云。晉殷浩既廢。桓溫語ニ諸人一曰。小時與レ之共騎ニ竹馬一。我弃去。己輒取レ之。故當レ出ニ我下一。新考　又後漢郭伋、并州の刺史になりて、部を行て河東に到る時、あまたの小兒、各竹馬に乘て來迎事、本傳に見えたり。書叙指南曰。七歳之戲曰ニ竹馬之戲一

長者の千燈より貧女の一燈　阿闍世王受決經に、貧女一燈。長者萬燈と云事あり。是據とすべし。

地獄もすみか　荀子云。越人安レ越。楚人安レ楚。これも、人おの〳〵其住所を安んずる事をいへり。諺の意と同じ。新考

丁子頭　俗に、燈花を丁子頭と云。丁子に似たるによりて也。丁子頭たてば、吉瑞也とて悦ぶ。事文類聚云。樊噲問ニ陸賈一曰。自レ古人君受ニ命於天一云レ有ニ瑞應一。豈有レ是乎。賈云。目瞤得ニ酒食一。燈花得ニ錢財一。乾鵲噪而行人至。蜘蛛集而百事喜。小既有レ徵。大亦宜レ然。又丁子頭たてば旱し、百草霜に火點すれば雨晴と云。蘇子瞻秋陽賦云。釜星之雜出。又燈花之雙懸。婢喜而告レ予曰。此雨止之祥也。

【俗語】重寶　戰國策云。懷ニ重寶一者。不レ以レ夜行。又史記周本紀にも、重寶の字出たり。

珍重　朱子感興詩云。珍重無極翁。性理大全注。珍重貴美之詞とあり。又伯史略云。陳去病曰ニ珍重一者何。此則相見既畢。情意已通。囑曰ニ珍重一者。言善

加ニ保重一也。

張本　これは、前に切要の事を云て、後にいふべき事の基をなす也。左傳隱公五年傳注に見えたり。書言故事云。豫爲ニ後地一曰ニ張本一。

停止　梁書云。便可ニ自レ今停止一。

中絶　朱子文集云。中絶不レ聞ニ此等語一。

近者　曹子建が七啓に出たり。○間者（同）　漢書文帝紀に出たり。○適者　漢書昭帝紀に出たり。○乃者（同）　漢書成帝紀に出たり。○頃者（同）　報ニ孫會宗一書に出たり。

遲速　左傳云。剛柔遲速高下出入。

恥辱　論語に出たり。心にはづるを恥と云。人にはづかしめらるゝを辱と云。

中間　俗に、しもべを中間と云。古今著聞に、御中間になされにけりとあれば、むかしより、下部の事を中間と云しにや。

畜生　俗に、無禮不義の者を貶して、畜生と云。禮記云。鸚鵡能言不レ離ニ飛鳥一。猩猩能言不レ離ニ禽獸一。今人而無レ禮。雖ニ能言一不ニ亦禽獸之心一乎。史記秦本紀云。人頭畜鳴。正義曰。胡亥人身有ニ頭面目一。能言語。不レ辨ニ好惡一者ニ六畜之鳴一。○涅槃經云。身雖ニ大夫一行同ニ畜生一。是皆俗語の據也。又通鑑に、隋文帝煬帝の淫逆を責て、畜生といへり。

知音　親しき友を知音と云。列子曰。伯牙鼓レ琴。鍾子期善聽。伯牙鼓レ琴。志在レ登ニ高山一。鍾子期曰。善哉峩々兮若ニ泰山一。志在ニ流水一。鍾子期曰。善哉洋々兮若ニ江河一。伯牙所レ念鍾子期必得レ之云々。呂氏春秋曰。鍾子期死。伯牙破レ琴絶レ弦終レ身不ニ復鼓一レ琴。以爲レ無下足ニ爲鼓一者上。誠に伯牙と鍾子期は、知音の友也。今の俗、男女密通の事を知音と云。同心の謂なれば、義通ずべきか。

古今
琴の音をきゝしる人のなきうへに
今ぞ立いでゝをゝをもたつべき

地形　史記秦本紀に出たり。

蕞爾（ちいさし）　日本紀に訓せり。少小の字なども、ちいさしとよむべし。

逐電（ちくてん）　王子淵聖主得二賢臣一頌。追二奔電一逐二遺風一とあるは、馬の駿足なるを云共、人のにげはしりて跡なきをも、逐電と云て、通ずべし。

智慧（ちゑ）　孟子公孫丑云。齊人有レ言。雖レ有二知慧一不レ如レ乘レ勢。老子經云。智慧出有二大僞一。王介甫註云。智者知也。慧者察也。又名不集華法師云。決定審レ理謂二之智一。造レ心分別謂二之慧一。（顧瑞云。慧通二作惠一。）

地主（ぢしゆ）　國語越語に出たり。

持（ぢ）　歌合の時など、兩方同じくして、勝負なきを、ぢになると云。此字也。

重半（ちようはん）　奇偶の數の事也。

重疊（ちようでふ）　宋玉高唐賦。重疊增益。又翟方進傳に出たり。重疊かさねかさぬる也。俗に物の嘉事を、重疊よしなどいへり。それをあしく心得て、重疊をよき事とおもへるは誤也。

長技（ちやうぎ）　前漢書晁錯傳。匈奴之長技三。中原之長技五。廣韻。技藝也。又方術也。俗に、物を謀り定るを、てうぎと云は、調議の字也。

瞥（ちよつと）　說文云。過レ目也。

中央（ちうあう）　詩經蒹葭篇。宛在二水中央一。

遲々（ちゝ）　俗に、事ののびのびになるを、遲々すると云。孟子云。孔子去レ魯曰。遲々吾行也。去二父母國一之道也。

中途（ちうと）　晉左思詩。出レ門無二通路一。枳棘塞二中途一。

智略（ちりやく）　史記田叔傳。褚先生曰。今取二富人子一。又無二智略一。文選。王元長策二秀才一文。湊二其智略一。

中興（ちうこう）　漁隱叢話云。藝苑云。凡王室中微而復興。謂二之中興一。宋史全斷云中興者謂下中二於理一而復上レ興也。今皆作二平聲一誤矣。中興の中字、なりごろとよみ、あたるとよむの兩義あり、あたるとよむ時は、去聲也。なりごろとよむ時は、平聲也。

昵近（ちつきん）　韓非子云。伊尹身執二鼎俎一爲二庖宰一昵近習親。

遲鈍　前漢書翟方進傳。遲鈍不レ及レ事。

聽聞　書經仲虺之誥に出たり。

齷齪　埃嚢抄に、ちゝくるとよめり。字彙云。急促局陿貌。

［正誤］蟄居　物のちいさきを云。ちつくり、ちよつこと云は、並誤。細刀　ちしや刀、ちさ刀、並誤。地黃煎　ちなせん、ぎわうせん、並誤。

第九　利

［諺］綸言如レ汗　綸言とは、天子の勅を云。禮記緇衣篇云。王言如レ系。其出如レ綸。王言如レ綸。其出如レ綍。綸言の二字こゝに出たり。如レ汗とは、綸言下りて再かへらざる事、汗の出てかへらざるが如しとなり。漢書劉向傳曰。號令如ニ汗之出而不一レ返者也。是諺の意に同じ。

兩を聞て下知をなせ　訟を聞、是非を糺に、兩方の口を聞て、下知せよと也。周官。以ニ兩造一聽ニ民訟一とあり。兩造とは、爭をなす者、兩方共に皆至る也。是諺の意に同じ。史記に鄒陽云。偏聽生レ姦。是も兩を聞て、下知をなせとの意也。片口を聞て決すれば、必あやまる也。新考

良藥は口に苦し　說苑正諫篇。孔子曰。良藥苦ニ於口一利ニ於病一。此語家語に出たり。史記張良傳には、毒藥苦ニ於口一利ニ於病一とあり

［俗語］律儀　是は佛書に出たる字也。法律ありて、儀則正しきを云。圓覺經に云。不レ令ニ衆生入ニ不律儀一。

利口　書經畢命云。利口惟賢。論語陽貨篇。子曰。惡下利口之覆ニ邦家一者上。利口とは、口きゝて、是を非に云なし、非を是に云なすやうの人を云。今俗に有レ才者をば、すべて利口なりと云て、稱譽の詞とするは、其意違へり。

利根　法華經云。正見。邪見。利根鈍根。今俗の利口といひ、利根と云、各意義有べし。利根とは、才の發したる人を云べし。

陸梁 ○平子西京賦。怪獸陸梁。注。綜曰。陸梁東西ニ倡佯也。○類書纂要云。陸梁猶ニ強梁一也。嶺南人多處ニ山陸一其心強梁。故曰ニ陸梁一。今俗に、怒を含める時の顔を、陸梁と云も、強梁の意にや。

六義 詩歌其に義あり。風賦比興雅頌是なり。俗に、物の分明ならざるを青義を分たずと云。

離別 陸龜蒙詩云。丈夫非レ無レ涙。不レ灑ニ離別間一。字彙云。近曰レ離。遠曰レ別。今俗に、妻を屏を、離別と云は誤也。

臨終 死する時を云。文選。晉歐陽堅。臨終詩あり。鶴林玉露云。歐陽公問ニ一僧一云。古之高僧有ニ去來脩然者一。何今世之鮮。僧云。古人念々在ニ定慧一。臨レ終安得而亂。今人念々在ニ散亂一。臨レ終安得而定。公深然レ之。

理窟 晉書劉惔傳。[illegible]爲ニ理窟一。唐包融詩。一談入ニ理窟一。而[illegible]ニ儒禮一。文選任彥升齊竟陵文宣王行狀。非意相干每爲レ理屈。是も今いふ理屈の意也。

流涕 史記商君傳。秦國男女流涕。是泣事を云。俗に、流涕こがれてなくと云は、重言なり。

流行 易云。品物流行。

利息 史記孟嘗君傳。貸レ錢者。多不レ能レ與ニ其息一。索隱云。息猶レ利也。今俗に、借物の利息と云は、重言なるべし。息と云てしかるべし。

臨時 一切の公事、皆恒例ありて亂るべからず。恒例の外、時にのぞみてなすを、臨時と云なり。源氏帚木の卷にも、りんじのもてあそびものとあり。

慮外 韓子詩云。雖レ曰ニ天時一亦人事。誰仰慮外失ニ良金一。

離散 孟子云。兄弟妻子離散。

[正俗] 利運[illegible]呂律のまはらぬを、俗に、呂律わるいと云て、ろれつがわるいと云は誤。

第十 奴

齎ニ盜糧一 盜人に力を付るの謂也。戰國策。[illegible]雖

説秦王曰。此所謂藉寇兵而齎盜食者也。しかれば、盜に糧といはゞ、古語によく叶べし。

【俗語】温　俗に、人性の爽利ならぬ者をさして、温と云。温湯と云と、同じ意なり。（右の字部、温湯の條下考見るべし。）

泥滑　雨の後、道うるほひて、泥のふかきなり。濘の字を用べし。唐書。武后時。水滲閉坊門。楊再思入朝。車陷濘。叱牛不前。人の氣の優なるを、ぬかると云も、泥の如くやはらかにして、堅固ならざる氣をたとへて云ならし。

【正誤】布　ぬのゝは誤。

第十一　留

【諺】類を以てあつまる　善惡おの〳〵其類を以てあつまると云事也。易繫辭云。方以類聚。（新考）

【俗語】流浪　陶淵明集。祭從弟敬遠文。流浪無成。

留守　史記呂后本紀。呂后年長常留守。希見上。留守の字こゝに出たり。書言故事云。守舊京者曰留守。唐制車駕不在京則置留守。唐李晦爲西京留守。裴度留守東都。宋朝紹興八年。召呂頤浩付以建康也。（建康今南京是。又云金陵）知建康者。曰建康留守。これによりて見れば、もろこしにては、天子出御の御跡を留り守る者をさして云。今俗に、貴賤にかぎらず、主人の家に在ざるを、すべて留守と云は、借上の詞なるべし。

第十二　遠

諺　驕者久しからず　平家物語に、をごるもの久しからずとかけり。老子曰。自放者不長。希逸註云。不長。不可久也。

老ては子に從ふ　儀禮曰。婦人有三從之義。無專一之道。故未嫁從父。既嫁從夫。夫死從長子。故父者子之天也。夫者妻之天也。（禮記穀梁傳の語、禮大に同して小異也。）是と老ひては子に從ふと云ふ諺、こゝに出たり。是母

の事にして、父の專子に從ふと云義なし。

思ひ内にあれば色外にあらはる。大學云。誠ニ於中一形ニ於外一。新考 淳于髡曰。有ニ於内一必形ニ於外一。孟子 又和歌に、

拾遺

忍ぶれど色に出にけりわが戀は　平兼盛
ものやおもふと人のとふまで

恩を受て恩をしらぬは鬼畜の如し　說苑。荀子曰。唯賢者爲ニ能報一恩。不肖者不レ能。この語、俗の諺の意に同じ。鳥獸だも本に報ずる事をしれば、恩を受て報る心なき人は、誠に鳥獸にもおとれる事也。新考

老たるを父とせよ　曲禮云。年長以倍則父ニ事之一。俗語こゝに出たり。新考

女に家なし　女以ニ夫家一爲家。故にみづからの家なし。又老ては子に從ふといふ諺と同意也。新考

女見のいふ事用べからず　史記陳平世家曰。鄙語曰。兒婦人口不レ可レ用。誠に和漢同談也。

御鬚の塵を取　是は媚諂て追從するものを云諺也。事文類聚云。魂萊公爲レ相。丁晉公參知政事。嘗會ニ飮都堂一。塵染ニ公鬚一。謂起拂レ之。公正レ色曰。身爲ニ執政一。親爲ニ宰相一拂レ鬚耶。謂慙。この事世話によく叶へり。謂は、丁晉公が名なり。

御前追從するものは必陰にて誹る　莊子曰。好面擧レ人者。亦好背而毀レ之。

思ふ子に旅させよ　人の子たる者、家にのみ在て、父母の愛育を恃で、世間の人情の險惡なる事をしらざれば、身を立る事かたし。故に愛寵ふかき子ほど、旅に出して、銳氣をくじけと云諺也。尤故ある詞也。程子曰。在レ旅之時。謙降柔和。乃可ニ自保一。而過剛自高。失ニ其所一レ宜。安矣。

狼に衣きせたる如し　人の惡性なるは、狼の衣着たる如、人の形を學ぶといへども、心は禽獸にもおとれると云喩也。史記曰。齊王田家騶釣。墨尿虎

而冠者也。是諺の意の如し。

重荷に小付　後撰集賀部に、今上梅壺におはしまし
し時、薪こらせて奉り給ける、

山人のこれる薪は君がため
多くの年をつまんとぞおもふ

御返し　　　御　　　製

年の數つむとするなる重荷には
いとゞ小付をこりもそへなん

陰陽師身の上しらず　顏氏家訓云。世傳云。解二陰陽一者爲二鬼所一レ嫉。坎壈貧窮多レ不レ稱レ泰。吾觀二近古一以來尤精妙者。唯京房管輅郭璞耳。皆無二官位一。多或罹レ災。此言令二人益信一。新考

おもふ人はほだしとなる

古今　　　物　部　良　名

世のうきめ見えぬ山路にいらんには
おもふ人こそほだしなりけれ

鬼に瘤とらるゝ　宇治拾遺物語にいへるは、むかし或人山路に行暮て、側なる朽樹に一夜をあかせり。夜半ばかりに鬼のやうなる人、大勢集り來れり。かの人これを見て、甚だおそろしき事におもひけり。しばらく有て、鬼ども酒宴をはじめてうたひ舞。かの人おもしろくおもひて、おそろしき事を打わすれ、酒宴の座にまじはりて、鬼とともに舞うたふ。夜もやう〳〵明がたになりければ、鬼ども、かの人に向て曰、なんぢかさねてこゝに來りあそぶべし。約束をたがゆる事なかれとて、かの人の額に有ける瘤を、質にとりてさりぬ。かの人よろこび家に歸り、しか〴〵の事をはなしければ人々聞て、年久しく有し瘤をとられし事、仕合なりとよろこびあへりけり。かの人の隣に、瘤ある人この事を聞て、うらやましくおもひ、くだんの朽木の中をたづねゆき、一夜をあかしければ、あんのごとく夜半ばかりに、又鬼ども來り、はじめのごとく酒宴し、うたひ舞ける。となりの人、その

中にうちまじりておそびければ、鬼ども見て、よろこびていはく、汝約束をたがへずして来れり。定て質物を取返さんためなるべし。今汝にかへすぞとて、ふところより瘤を取出し、隣の人の額になげ付ければ、瘤のうへにこぶをかさねて、なくなく家に帰りけるとぞ。是誠に、世の人の富貴利達をうらやみ、其身にうまれ付ぬ幸をねがふものゝ戒となるべし。誠に此事ありとおもひなば、諸人の面前に瘤を置也、

落武者は芒の穂におづる　是は落武者になりては、臆病心まして、草木までも人と見なして、恐るゝと云事也。晋の謝玄といふ人、軍立して、賊の大勢を討やぶりて是をおふ。賊の兵のがれさり、程へだゝりて後、八公山の草木のうごくを見て、謝玄が軍兵追来るとて、おそれし事あり。又日本にて、平家の軍勢は、水鳥の羽音に驚て、敗北せしなど、皆此の意の如し。

俗説　後漢書訓詁子傳に出たり。

恩借　通鑑漢相帝紀云。皆加恩借。

侵　左傳僖公二十九年云。凡師無鐘鼓曰侵。

襲　又云。凡師掩其不備曰襲。

誘　日本紀の訓なり。

温湯　明田藝衡留青日札云。今人以人性不爽利者曰温暾湯。蓋言不冷不熱也。日本にては、ただ温湯といへり。

おれ　俗に、我身をさしておれと云。わと、おと通ず。われと云事也。又日本紀神武紀、爾をおれと訓せり。注、爾此云於例とあり。おのれと云中略也。

大息　莊子天運篇云。豈直大息而言仁孝乎。史記蘇秦傳云。仰天大息。索隱云。大息謂久蓄氣而大呼也。類書纂要云。大聲嘆曰大息。言人憤嘆則息大而長。故云長大息。後人作太息誤。

御臺　俗に、飯を御臺と云。此詞皆榮花物語などにもあり。臺上に飯を置て食すれば、上つがたの

きこしめす御飯をば、御臺といふにや。

面白　天照大神天窟より出給ひし時、高天原及葦原中國、おのづから照明なる事を得たり。衆の面、明に白し。是によりて、おもしろといへり。此事舊事紀、古語拾遺に出たり。

哭　神代卷に、哭の字をおらぶと訓せり。哀鳴する事也。萬葉集第九にも、叫哭とあり。俗に高聲に物いふをのみ、おらぶと云は誤也。

御前　人をうやまひて、おまへといふ事、枕草紙にあり。れいのはいぶしにならひ給へるおまへたちなればとあり。

緩帶　俗に、何の氣遣もなきを、帶をゆるうすと云。此事漢書匈奴傳に出たり。

おほのか　八雲御抄に、おほのかは、ゆたかにしづかなりと云意也とあり。俗に、迫らずして、大やうなる體を、おほのさと云は、おほのかの轉せる也。和語雜々抄には。おほとかとあり。穩の字なり。

靜なる體なりといへり。

落魄　史記酈食其傳云。家貧落魄。無以爲衣食業。註、應劭曰、落魄志行衰惡之貌。評林云。貧而無家業也。音拓云。落薄落託義同。

想像　楚辭曰。思舊故而想像。東坡詩。想像賦高唐。

小兒　俗に、始に食ふ事を小兒と云は、正月元日に、天子屠蘇白散を、童女の未嫁せざるになめそめさせて、其後きこしめす也。是より起る詞也。後に食ふを後取と云も。此義也。

越度　居家必用註。越度謂關不由門津不由濟者。

夥　韻會。齊謂多爲夥。方言。凡物盛而多。齊宋之郊謂之夥。

悒　日本紀應神帝紀に見えたり。字彙云。音揖不安也。萬葉集には、鬱の字を、おぼつかなしとよめり。

應　陳選云。應謂應尊長之呼。今俗に、人の物いひ

かけたるに、おうと返詞するは、此字也。

おわし　俗に、錢をおわしと云。又料足と云も同意也。晉書、魯褒著二錢神論一其略云、無レ翼而飛、無レ足而走。これを以て見れば、錢をおわしと云も、故なきにあらず。白玉蟾集賞錢歌云。初到二家山一錢二骨肉一。腰下有二錢三百足一。

汚面　俗に、恥辱を蒙りながら、それとなき顔する者を、汚面ぬふりすると云。この字なるべし。

鳴呼　俗に、をこのもの、をこがましなどいひて、人を嘲り笑ふに云事也。徒然草に、をこがましく、よもあらしなど云も、ぜんなければ。源氏蓬生巻に、人たがへしては、をこならんとのたまふ。野槌に云、をこ、鳴呼とかけり。をかしきと云義也。又世俗に、しれものならんと云義也。或説に云、鳴呼は、本烏滸の字也。烏滸は、國の名也。其俗愚にして、通變なき故に、おのれが父兄、人に殺さるれば、其仇を報んとて、其ころされたる所に行く、他人にても、其所を過る者を打殺也。是より道理にくらく勇めるものを、烏滸の者と云とかや。好古按するに、此說非也。日本紀第十、仁德天皇の御歌に、于古とあれば、本邦上代よりのやまと詞也。烏滸の國の事を取て、詞にするにはあらず。

穏便　朱子文集。未レ爲二穏便一。

卸　增韻。舟人出レ載亦曰卸。荷物をおろすと云是也。

餕餘　曲禮云。餕餘不祭。

大宰　史記平準書に出たり。

送越　おくりこす也。菅家の御歌に、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ

土佐日記にも、物をおこせたりとあり。

[illegible]　御主わこせ、わぬし、[illegible]、遠近あちこち、己おどれ、御前おまへ、[illegible]しは、御乳人おちのひと、狼おほかみ、[illegible]、數おすへろ、[illegible]、叫、[illegible]

わめく、は、誤。自 おのづと云は誤。僞引すびく、は誤。重 おもたき、おほたい、並誤。

第十三　和

【諺】禍は口よりおこる　傅玄口銘曰。從レ口入。禍從レ口出。孔子家語云。口是何傷レ禍之門一也　楊子雲曰。言輕則招レ憂。文中子曰。禍莫レ大二於多一レ言。

禍を招く　左傳曰。禍福無レ門。惟人所レ召。わざはひも、さいはひのはひとなる。老子云。禍兮福所レ倚。福兮禍所レ伏。

綿に鍼をつゝむ　小人の交、外にはねんごろの樣をあらはし、內には怨敵の心をいだくと云諺也。孟郊詩云。結二口頭交一。肚裏生二荊棘一。綿に鍼をつゝむと云、同意なり。

和光同塵　老子經曰。和二其光一同二其塵一。我智惠の光を、ふかく隱くして、顯はさゞるを和光と云ふ。世に隨ひ、塵俗の中に混じて、時を知るを同塵と云ふ。

わが身をつんで人のいたさをしれ　論語曰。己所レ不レ欲。勿レ施二於人一。俗の諺と、言意同じ。新考

わが身の事は人にとへ　韓子曰。古之人。目短二于自見一。故以レ鏡觀レ面。智短二于自知一。故以レ道正レ己。是も諺と言異にして、意同じ。新考

我物顏　歌に、

夫木

夏の夜は光すゞしくすむ月を
　わがものがほにうちはとぞ見る
山めぐる時雨のやどかはゝそはら
　わがものがほにいろの見ゆらん

和歌に師匠なし　詠歌大概に云、和歌に師匠なし、たゞ古歌を以師とす。

わらふ所に福來る　氣致レ祥乖氣致レ異。新考

【俗語】わぬし　野槌に云、汝也、吾之字をわとよむ也。人をさして吾子と云。

和合　韓詩外傳。天施地化。陰陽和合。

和睦　孝經云。民用和睦。

私　韻府。賤私某也。儀禮家臣稱レ私。

若　韻會云。今人謂レ弱爲レ若。按曲禮。二十曰レ弱。

割符　韻會云。說文。符信也。漢制。以二竹長六寸一分而相合。从二竹付聲一。司馬遷云。讀之先。非下有二割レ符丹青之功上。これによる時は、割符と書て然るべし。符とは、竹を兩にわり、各一を取、事有時は、互によせ合て證據とする也。漢文帝二年、郡國守にあたへて、銅虎符、竹使符を作らしめて、京師の事に備ふ。これを各半を分て、右は京師にとゞめ、左は郡守に與ふる也。史記漢書にあり。帛に書て裂て分をも、符と云。漢書終軍傳註にあり。俗に、割符と云も、是等の事より起れる詞也。

往悲　悲辭。余往悖兮。王逸注。往。失レ志貌。

横道　孟子離婁篇云。其待レ我以二横逆一。

横道　理にもとりて邪なるを、俗に、横道と云。韻會云。横不レ順レ理也。

枉惑　俗に、人を賊き惑かしなどする者を、わやくる者と云。此字也。

汪洋　俗に、人性の拘泥さるをわうやうと云。此字にや。汪洋は、廣大の貌。

移徙　司馬長卿。難二蜀父老一書。氐人升降移徙。

往還　李白詩。才高多二感慨一。道直無二往還一。

往來　曲禮云。禮尙二往來一。

吾儕　左傳宣公傳。吾儕小人。

正誤　横道わうちやくは誤。私わたしは誤。蕨心わらすほは誤。童子わる、又わらうと云。並誤也。

第十四　加

諺　風枝をならさぬ御代　西京雜記。董仲舒云。太平之世。風不レ搖レ條。◎新考王充論衡曰。太平之世。五日一風。十日一雨。風不レ鳴レ條。雨不レ破レ塊。この心を歌に、

千載　崇德院

ふく風も木々の枝をばならさねど

山は久しき聲ぞきこゆる

上を學ぶ下　孟子曰。上有二好者一。下必有下甚レ焉者上矣。左傳。臧武仲云。夫上之所レ爲。民之歸也。後漢書云。吳王好二劍客一。百姓多二瘡瘢一。楚王好二細腰一。宮中多二餓死一。淮南子云。靈王好二細腰一。而民有二殺レ食自飢一。越王好レ勇。而民皆處レ危爭レ死。河上公云。上行下必隨。

壁に耳あり　詩經小雅小弁之篇。君子無二易由一レ言。耳屬二于垣一。事文類聚後集。載二姚元崇口箴一。其略云。多言多レ失。多事多レ害。聲繁則淫。音希則大。室本無レ暗。垣亦有レ耳。管子云。古者有二二言一。墻有レ耳。伏寇在レ側。新考

渇にのぞみて俄に井をほる　素問四氣調神大論云。譬猶二渇而穿一レ井。又說苑雜言篇。譬レ之猶二渇而穿一レ井。此二語、已に詳に、いの部に、いくさ見て矢はぐの條に見えたり。

烏の頭の白くなるまで　太史公曰。世言。荊軻其稱二太子丹之命一。天雨レ粟。馬生レ角也。太過。索隱曰。燕丹求レ歸。秦王曰。烏頭白。馬生レ角乃許耳。丹乃仰レ天歎。烏頭即白。馬亦生レ角。風俗通及論衡皆有二此說一。事文類聚別集還鄕門引二燕丹子一云。燕太子丹。爲レ質二於秦一。秦不レ禮。乃求レ歸。秦曰。待二烏頭白馬生一レ角。當レ使二子歸一。太子仰レ天哭。感得二烏頭白馬生一レ角。秦王大驚遣二丹歸一。應劭風俗通云。據二史記一爲レ之。鄕里俗說。其實無二此事一。原下其所三以有二茲語一者上。丹寔好レ士。無レ所レ愛恡也。故閭閻小論飾二成之一耳。又和歌に、太子丹が事を、

後撰

山がらすかしらも白くなりにけり
わがかへるべき時やきぬらん

河だちは河ではつる　俗に、よく水を游ぐものを、川だちと云。淮南子曰。夫善游者溺。善騎者墜。各以二其所一レ好。反自爲レ禍。

河中にはたてど人中に立れず　白氏文集大行路云。巫峽水能覆レ舟。若比二人心一是安流。この意に通ふべきか。

片口聞て理をつけな　是は人の爭論裁斷も、片口ばかり聞ては、是非を定るなと云事也。前漢書。鄒陽曰。偏聽生姦。獨任成亂。魏徵曰。兼聽則明。偏信則暗。是皆諺の意に通せり。新考

痒所に手の屆が如し　杜牧之詩云。杜詩韓集愁來讀。似倩麻姑癢所抓。

かせぐに追付貧乏なし　左傳云。民生在勤。勤則不匱。匱、謂貧乏也。是諺と意同じ。新考

郷に入ては郷にしたがへ　曲禮云。禮從宜。使從俗。又云。入竟而問禁。入國而問俗。是等の語、諺に郷に入ては、郷に從ふ意なるべし。前漢書王吉傳。百里不同風。千里不同俗。とありしなれば風俗、土地によりて異なれば、郷に入ては其鄕の俗にそはざらめやは。新考

神は正直の首にやどり給ふ　倭姫世記云。天照大神託宣。正直…天…◯詩經小明篇云。嗟爾君子。無恒安息。靖共爾位。好是正直。神之聽之。介爾景福。新考

葭の穴から天をのぞく　莊子云。用管窺天。用錐指地。不亦小乎。說苑云、以管窺天。以錐刺地。所窺者甚大。所見者甚少。是諺の意に同じ。

陰言いはれてはなひる　詩經邶風終風篇云。寤言不寐。願言則嚏。注云。我其憂悼而不能寐。汝思我心如是我則嚏。今俗人云。人道我。此古之遺語也◯野客叢書曰。蘇東坡曰。今人嚏噴不止者。必嚏祝云。有人說我。婦人尤甚。按詩寤言不寐。願言則嚏。注。汝思我心則嚏也。今俗人嚏云。人道我。此古之遺語。余觀。…風篇…有此語。又為風所…則有…

好事門をいでず惡事千里を行　北夢瑣言云。好事不出門。惡事行千里。

好事もなきにはしかじ　陳眉公十書ニ、多少饒云。好事不レ如レ無。新考

顔に似ぬこゝろ　家語ニ、孔子曰。以レ貌取レ人。吾失ニ之子羽ニ 子羽澹臺滅明也。貌あしくて、行よかりし故、かく宣へり。又班固漢書賛に、人面獸心と云事をかけり。是は小人姦吏は、顔は人ながら、心は獸の如しと云事也。伏羲は蛇身人首、神農は人身牛首と、古き文に記せり。是は、形は人の備具らねども、共に大聖人なり。是みな顔に似ぬ心といふものなるべし。新考

蟹は甲に似せて穴ほる　此諺の意は、人の爲事、願事大小廣狹、皆己が分ほどなると云事也。これに類せる事あり。事文類聚後集曰。有レ客相從各言レ所レ志。或願レ爲ニ楊州刺史ニ。或願レ多ニ貲財ニ。或願レ騎レ鶴上昇ニ。其一人曰。腰纏ニ十萬貫ニ。騎レ鶴上ニ楊州ニ。欲レ兼ニ三者ニ矣。

顔のあつきもの　不義不善をなしても、恥る事を知らざるものを云。開元遺事に、楊光遠　其身の醜惡を恥ざる事を、時の人そしりて、楊光の慚顔はあつき事、十重の鐵甲の如しと云し事あり。諺に相類せる意也。

偕老同穴の契　詩經擊鼓篇云。死生契濶。與レ子成レ說。執ニ子之手ニ。與レ子偕老。又君子偕老、朱傳にいへるは、君子は夫なり。偕老は、共に生、共に死ぬるを云。女子の道、一たび身を以て夫に事る時は、これと同じく生、同死ぬべし。故に夫死しては、婦人自稱して未亡人と云。再他人にまみゆべき理なし。それを偕老の契と云也。老は生死の界なる故、偕老といへば、生死を偕にするの義也。詩經大車篇　穀則異レ室。死則同レ穴。朱傳にいへるは、穴は壙也。これは男女婬奔の志遂ず、相ともにかたらひちかふ詩也。生る時は奔行て室家を同せず共、死なば必合せ葬られて、壙を同せんと也。前の偕老は、貞女の道也。此同穴は、淫奔の詩なり。

諺に、偕老同穴とつゞくるは相應せす。
烏鳴　俗に、烏の鳴を凶事として、忌事とす。容齋隨筆云。北人以ニ烏聲一爲レ喜。鵲聲爲レ悲。南人聞ニ鵲噪一則喜。聞ニ烏聲一則唾而逐レ之。至ニ於弦レ弩挾レ彈擊使ニ遠去一。

[俗語] 可愛　人をいとをしむに云詞也。神代卷に、妍哉可愛乙女にあひぬと見えぬ。この詞より、男の女にあふを、ことになへて、可愛といふを、あやまりてかはゆきと云也。

かひなし　竹取物語に、石上師高、赫夜姫の事によりて、燕のもてる、子やす貝をとらんとて、つばくらめの巣に、手を入ければ、ひらめなるものありけるを、にぎりすまして、しえたりと悦び、手をひらきて見たれば、つばくらめのまりおけるふるくそ也。それを見て、あなかひなのわざやといひしより、思ふにたがふ事を、かひなしと云けるとあり。いと覺束なし。誠に此説の如くならば、無レ貝と云べきにや。

我慢　法華經。云我慢自矜高。

覺悟　史記項羽傳。尙不ニ悟覺一。

合戰　史記高祖紀。旦日合戰。

整頓　史記陳餘傳。整ニ頓其士一。

改易　漢書宣帝紀。至ニ于子孫一終不ニ改易一。

瑕瑾　史記魯仲連傳出。亦作ニ瑕瑾一

降服　左傳僖公傳云。降服而囚。杜注云。去ニ上服一自拘束以謝レ之。

家財　史記匈奴傳に出たり。

形見　饒速日尊、其妻御炊屋姫に敎て云、汝子吾が如く形見物とせよとて、則天璽瑞寶を授くと云事、舊事紀にあり。遊仙窟に、記念をかたみとよめり。又信の字をもかたみとよむ。白氏文集にあり。

勘當　俗に、君父の怒に逢て、閉居するを、勘當に逢たると云。是は其罪の科を勘て、輕重の律に當

る意なるべし。唐書。軍中不レ暇ニ勸當一とあり。

神保(かみほろし)　詩經楚茨篇云。先祖是皇。神保是饗。傳云。楚辭所レ謂靈保。亦以レ巫降レ神之稱也。

看病(かんびやう)　日本紀神功皇后紀に出たり。

江帥(がうそつ)　野槌に、大江匡房卿、太宰帥となる。故に江帥と云。江家次第、江談など云書も、皆匡房の作也。物しりにて口きゝなる故に、世にがうそつなりと云詞も、江帥の字也と云ならはせりとあり。今がさつものと云は、がうそつの轉ぜる也。又苛察の字を用るも然るべし。下に見えたり。

苛察(がさつ)　漢書文帝紀云。文帝詔云。以レ苛爲レ察以レ刻爲レ明。令ニ亡レ罪者失ニ職。

肝心(かんじん)　五臟の中、心の臟は神をかくし、肝は魂をかくす。故にこの二をあげて、肝要の義にとれり。隋史。文帝謂。陳叔寶全無ニ心肝一。これも、大切の事缺(かけ)たるたとへ也。

渇々(かつ〳〵)　字彙。渇口乾欲レ飲之義。俗に、貧(まづしう)して物なき事を、渇々と云。

毫末(がうまつ)　老子云。合抱之木。生ニ于毫末一。

簡略(かんりやく)　韋應物初爲ニ尙書郎一別ニ集福精舍一詩云。簡略非ニ世器一。委レ身同ニ草木一。逍遙精舍居。飲レ水自爲レ足。書言故事

行跡(かうせき)　宋書潘綜傳。陳ニ其行跡一。

開闢(かいびやく)　楊子法言。開闢以來。

荷擔(かたん)　法華經云。爲ニ如來肩所ニ荷擔一。俗に、人に黨するを荷擔と云。

岩乘(がんぜう)　俗に、馬の強健(きやうけん)なるを、岩乘と云。惡所岩石も乘に堪たる義也。又かり用て、物の健(すこやか)なるを皆岩乘と云。一說、強盛(がんじやう)、強の字、強盜(がんだう)と讀類(るゐ)なるか。

搔レ首(かくかうべを)　詩經靜女篇。愛而不レ見。搔レ首踟躕。今俗にも、物の心にかなはぬを、あたまかきすると云も、ここに出たり。

合點(がつてん)　俗に、ものを云やりて、其事を肯(うけが)ふを合點と

云。唐史云。屈突通仕二隋文帝一。與二漢王諒一約。若璽書召驗二敕字一。加レ點則就レ道。帝立召レ諒。無レ驗。諒覺レ變。是今いふ合點の意なれば、加點といはんがしからん。

乞兒（かたい）　源順和名抄に、乞兒を、かたいとよめり。伊勢物語に、かたい翁。土佐日記に、このかぢとりは、日もえはからはぬ、かたいなりとあり。皆人を罵詞に用ゆ。すべて乞丐人を云べし。今俗に、癩病人を呼て、かたいと云はあやまり也。

渇仰（かつがう）　口乾て水を思ふが如く、高山をば仰が如く、慕ふ事を、俗に渇仰と云。圍繞渇仰は、かこみめぐりて慕ふ也。

蔭（かげ）　晉書陸玩傳。莫レ不レ蔭二其德宇一。又先祖の功勞によりて、爵を賜を蔭襲と云。俗に、人を頼む事を蔭を頼と云也　源氏若菜卷に、たれをたのむかげにて、ものし給はんとすらん。河海抄に、
わび人のわきて立よるこのもとは
たのむかげなくもみぢしにけり

欠（けつ）　物を算用する時、本數にかくる事有を欠と云。居家必用註二短欠一謂二正數不一レ足也。又曰。折欠謂二物料虧短者一。

加減（かげん）　酒を暖むるをかんと云は、加減の中略也。藥を煎する者、薪を加るを武火とし、減するを文火とす。一切の物を煎るに、皆此加減あり。加減適中すれば、寒暖ひとしき故に、中略してかんと云。爐に香をたき、釜に茶を煎る時は、火加減、水加減と云によりて、人あやしまず。酒の加減のみ、中略せる故に、疑ありて、閑の字、間の字など用ると云臆説あり。共に當らず。

勘（かん）　物を考る事をかんと云は、此字なり。說文云。勘校也。

馯（かん）　馬突也。馬のかんのつよきと云は、此字なり。

我他彼是（かたひし）　人の多くあつまる聲なり。彼是めくも、かれこれあつまるけはひ推量する也。物の鳴をか

たく\/と云も、我他の字也。鳴に大小剛柔有故、呼音を以て響を象る。我他倶作は、われひと倶に走作するなり。かた\/は、堅きものゝなる也。こと\/は、響て鳴也。ごと\/は、おもくにごるものの鳴也。かつたり、がつたりなど云は、或は小きもの、或おもきものゝ、俄に落る也。かさかさは、蟹蛛などのはふ音也。こそ\/は、鼠の行音なり。がた\/、がさ\/、こそ\/、五音相通より轉じ來る。以上共に我他の字なり。文字限ありて、稱呼盡さざる故、響を以て象れり。

合期　本朝文粹。大江匡衡文云。撫レ民治レ國。致ニ合期之勤一。東鑑云。進退未ニ合期一。

假寐　詩經小辨云。假寐永嘆。又左傳宣公十四年に出たり。

比レ肩　漢書路温舒傳。被レ刑之徒。比レ肩而立。又文心雕龍十卷才略篇云。傅毅崔駰光采比レ肩。又併レ肩の字は史記田儋傳にあり。

旱魃　詩經雲漢篇云。滌々山川。旱魃爲レ虐。朱傳云。魃旱神也。今俗にも旱する事を、旱魃と云。

愷樂　軍勝之樂。周禮大司馬。王師大獻則令レ奏ニ愷樂一。司馬法曰。得レ意則愷樂。

艱難　書經無逸云。稼穡艱難。

豪傑　孟子滕文公篇云。彼所レ謂豪傑之士也。註。豪傑才德出レ衆之稱。○淮南子云。智過ニ百人一謂ニ之豪一。白虎通云。賢ニ萬人一曰レ傑。

埴廓　楊升菴外集云。六朝人尚ニ字學一。摹臨特盛。其曰ニ埴廓一者。卽今之雙鈎。

荷負　左傳曰。古人有レ言。曰。其父折レ薪。其子弗レ克ニ負荷一。此語より、父の業、師の教を傳ふるを、負荷と云。今俗に、代々續き來る家を、荷負の人、荷負の家などゝ云。

邊鄙　張平子西京賦に出たり。注。杜預左氏傳注云。鄙邊邑也。

仲　正

夏くればしづの麻ぎぬときあへる
かたゐなかこそ心やすけれ

高聲　韓退之詩。爲我高聲嘔。
可畏　日本紀出たり。
苟且　韻會云。草率也。
開基　魏何晏賦。擘天地開基。並列宿而作制。
俗に、寺堂を創建するを開基といふ。
嗄、字彙云。聲破也。老子云。終日號而不嗄。
涸、水の盡る也。月令。仲秋水始涸。
閑居　孝經云。仲尼閑居。潘安仁。有閑居賦。文中子云。樂閑居。
高位　孟子云。仁者宜在高位。
巧者　俗に、物に巧なるを巧者と云。自稱して拙者と云に對せり。
雜　張平子西京賦云。瞻良雜苦。雜を古來かてゝと讀來れり。物をまじへたる事也。又上林賦には、糅の字をかてるとよませたり。

萬葉　長忌寸意吉麿
醬酢にひるつきかてゝたい願ふ
われにな見せそなぎのあつもの

考問　史記伍子胥傳に出たり。又拷問とも書。居家必用に。拷掠。漢法。謂榜笞而問也。字彙。拷打也。罪の疑きを捶擊して問を、拷掠とも、拷問とも云。
寒心　史記荊軻傳。足爲寒心。索隱曰。凡人寒甚則心戰。恐懼亦戰。今以懼譬寒。言可爲心戰。
軻遇　神代卷云。次生火神軻遇突智。時伊弉冊尊爲軻遇突智所焦而終矣。火神を軻遇突智と云。俗に、物のこがれくさきを、かぐくさきとは、軻遇臭也。
加持　野槌に曰、加とは佛の三密也。持とは行者の三業也。かの三密を、此三業に持たるを、加持と云也。
堪忍　佛經に、娑婆世界を堪忍土と云。言は。此土

剛强にして、たへしのびがたき故なり。事について名を立たり。

かたはらいたし　源氏帚木巻にあり。花鳥餘情にもはづかしきものをいふとあり。今俗にもよく云詞也。偏腹痛の字を用べし。

任二雅意一　埃嚢抄に、雅は素也。我思ひ設たるひが事なれ共、雅の心に任する義なりとあり。我意に任するといはんもしからん。

閑素　何氏語林云。慕二其閑素一。

厚恩　魏書云。蒙二國厚恩一。

海道　元史納麟傳云。由二海道一入レ朝至二黒水一。今俗に陸路を海道と云はあしゝ。街道といはんが然らん。

感悦　宋史趙雄傳云。諸蠻感悦。

遐邈　はるかにはるか也とよめり。俗に、物の大にちがひたる事を、かはくな事と云。此字なり。

篝火　史記陳渉傳。夜篝レ火。註。篝籠也。

櫟　史記楚元王世家云。爲レ羹盡櫟レ釜。索隱云。晉歷。謂下以レ杓歷二釜旁一使上レ爲レ聲。漢書作レ轢。

間暇　孟子云。今國家間暇。

簡要　晉書鍾會云。王戎簡要。

啓行　詩經公劉篇に出たり。

幸甚　史記晉世家。二子頓首曰。幸甚幸甚。文選李陵答二蘇武一書曰。榮問休暢幸甚幸甚。

檢校　日本紀の訓なり。

正譌　角角此二字、たゞ一點のちがひにて、甚相似たり。故に物の似たるを角角と云。相似ぬを角角せぬと云。俗に、かけろくと云は、誤也。構まへて、かんまいて、並誤。かんかつて、かつつて、背は誤。水虎郎は、太郎は誤。頑者のかたくなのは誤。かたくはもかはなそ川うそか獺は誤。了髱はおろかむろかは誤。剃刀はかみそりは誤。蟹はかにがは誤。又かにかつかうあだかもよしとよむ。物のよき事を恰好したる並誤。恰好とは云べし。恰好のよきと云は、重言なり。

諺草巻之二終

諺草卷之三

貝原好古纂輯

第十五　與

諺 婦が姑になる　學範。古詩云。人命百年能幾何。後來新婦今爲レ婆。

世はもとしのび　歌に、

新古今　ながらへば又このごろやしのばれん
　うしと見し世ぞ今は戀しき　清輔

家集　何事もふるき世のみぞしたはしき
　おもひわはするけふぞかなしき　爲家

新古今　行末は我をもしのぶ人やあらん
　むかしをおもふ心ならひに　俊成

世みじかく意多し　鶴林玉露曰。古詩云。人生不レ滿百。常懷二千歳憂一。而淵明以二五字一盡レ之曰。世短意常多。是也。東坡云。意長日月促。倒二用兩詩一。

用心は臆病にせよ　諺の意は、兼て備へ置事は、ねんごろすぐる程にせよと云事也。鄒離子云。早思二其易一。熟思二其難一。天下之名言也。是も用心は、臆病にせよと云意と同じ。新參

俗語 餘慶　易經坤文言曰。積レ善之家有二餘慶一。今俗に、物の多きを餘慶あると云は、心ちがへり。餘計と書てしからんかし。

結婚　俗に、夜、男の淫行するを結婚と云。萬葉に云、他國爾結婚爾行而太刀之緒毛未レ解者左夜曾明家流。

よさり　夕の事を云。枕草子などに出たり。

俑　孟子。仲尼曰。始作レ俑者。其無レ後乎。爲二其象一人用一レ之。書言故事云。倡レ端不レ善。謂レ作レ俑。今俗にも、俑がましなど云詞こゝに起れり。

時常　類書纂要。舊レ曰二庸常一。又詳二、しの字部に見

えたり。

容儀　文選。陸士衡樂府詩云。窈窕多ニ容儀一。

用心　潘安仁藉田賦。展ニ三時之弘務一。致ニ倉廩於盈溢一。固堯湯之用心。而存救之要術也。俗に、かねてしおく事を、用心と云。

慾欲　埃嚢抄に、下郎の物を貪る事を、よくぼると云。此字なるべし。萬葉集に、短き命を長く欲する。

餘黨　後漢書羊續傳に出たり。

黄泉　萬葉集に、黄泉之界とあり。神代卷には、黄泉をよもつくにと訓せり。

綸　詩經註云。理レ絲曰レ綸。

幼少　漢書王莽傳。成王幼少。

[正譌] 餘饒　物の多きを云ふ、よんにようと云は誤。

第十六　太

[諺] 大名は大耳　東方朔答客難云。冕而前旒。所ニ以蔽一レ明。黈纊充レ耳。所ニ以塞一レ聰。張平子東京賦。夫君レ人者。黈纊塞レ耳。薛綜註云。言以ニ黄綿大丸一。懸ニ冠兩邊一當レ耳。不レ欲ニ妄聞ニ不急之言一也。愼子云。（愼到所レ著）不レ聰不レ明。不レ能レ爲レ王。不レ瞽不レ聾。不レ能レ爲レ公。是皆大名は、大耳と云意也。

新考 大行不レ顧ニ細謹一　史記項羽紀。樊噲曰。大行不レ顧ニ細謹一。大禮不レ辭ニ小讓一。

多分につけ　尙書曰。三人占則從ニ二人之言一。左傳欒武子云。善鈞從レ衆。新攷

玉みがゝざれば光なし　學記曰。玉不レ琢不レ成レ器。人不レ學不レ知レ道。

大海を手にてせく　前漢書何武傳曰。以ニ一簣一障ニ江河一。用沒ニ其身一。又東坡詩集註曰。譬者側レ手障ニ黄河一之語。類書纂要云。張德云。以ニ一掌一壅ニ江河一。

樂は哀のもとゐ　史記淳于髡云。樂極則悲。漢武帝秋風辭曰。歡樂極兮哀情多。文中子云。易レ樂者必多レ哀。新攷

寶の山に入てむなしく歸る　蔡虛齋四書蒙引曰。所レ

猶入二寶山一空レ手回者也　此本據あるべし。未レ考得一〇新考

螳螂が斧を以隆車に向ふ　これは、己が分際をしらざる喩にいふ諺也。莊子曰。猶二螳螂之怒レ臂以當一車轍一則必不レ勝レ任矣。淮南子曰。齊莊公出獵。有二螳螂一擧レ足將レ搏二其輪一。（下略）文選四十四曰。欲下以二螳螂之斧一禦中隆車之隧上。註云。前有二兩足一擧レ之如二斧一、斧之象二。又史記にも、運二螳螂之斧一と云語あり。是皆世諺の出所也。

大物ははつりとり　この諺は、萬の事、功を積、久を經て成就すべし。速には成がたしといはんために、大なるもの、少づゝはつりとれとは云也。枚乘書曰。泰山霤穿レ石。殫極之綆斷レ幹。水非二石之鑽一、索非二木之鋸一。漸靡使二之然一也。是も久しく積て、自然になるの喩也。

大山は塵をえらばず　戰國策云。大山不レ讓二土壤一。故能成二其大一。河海不レ擇二細流一。故能就二其深一。

立鳥跡をけがさず　史記。樂毅曰。古之君子。交絶不レ出二惡聲一。忠臣去レ國不レ潔二其名一。是諺の意と同じ、新考

鷹は死ねど穗をつまず　つむとは、食事也。枕草子に、椎つみたるとかけり。此諺の意は、義を守る武士は、たとひ飢に及共、不義の俸祿をば受ずと也。李白詩曰。鳳飢不レ啄レ粟。所レ食唯琅玕。焉能與二群雞一刺促爭二一餐一。世諺よく似たり。

薪を抱て火を救ふ　戰國策魏孫臣曰。抱レ薪而救レ火也。薪不レ盡則火不レ正。

たのむ木のもとに雨もる　太平記云、主上笠置を御沒落の時、梢をはらふ松の風を、雨のふるかと聞しめして、木の陰に立よらせ給たれは、下露のはらはらと、御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さして行笠置の山を出しより
天が下にはかくれ家もなし

藤房卿なみだを押へて

いかにせんたのむ蔭とて立よれば
　猶袖ぬらす松の下つゆ

たとふ雀人おそれず　顏氏家訓云。窮鳥入懷。仁人所憫（諺、こゝに本づき來るか。）

蓼くふむし　晉左思魏都賦。蓼蟲忘辛。新考白氏文集自詠詩云。何異食蓼蟲。不知苦是苦。　五車韻瑞云。孔叢子。有蓼蟲賦。言是蟲幼長斯蓼。不以爲辛。

大富長者　俗に、大に富る人を云。諸國に長者屋敷の址とてあり、是昔富農大賈の徒の居たりし宅址ならし。神相全編云。手似如甒瓦。必作大富長者。（天竺にて、大富人を長者といふ。佛書に見えたり。）

【俗語】

鍛鍊　前漢書。路溫舒上疏曰。鍛鍊而周內之。後漢書韋彪傳。鍛鍊之吏。注云。鍛鍊猶成熟也。猶工冶陶鑄鍛鍊使之成熟也。今いふ鍛鍊、字義よく當れり。

退屈　圓覺經云。無令惡魔及諸外道惱其身心。令生退屈。

退轉　涅槃經云。心無退轉。即便前進。圓覺經云。晨夕守護。令不退轉。

稻麻竹葦の如し　法華經に出たり。

大半　史記項羽紀に出たり。注。韋昭云。凡數三分有二爲大半。一爲少半。

大悅　孟子に出たり。史記龜策傳に、大悅而喜。とあり。

大分　漢書百官表。故略表擧大分。是は大略の意に用たり。今俗に、多き事を大分と云は意違へり。

大槩　助語辭云。如大槩則用槩於斗斛之面。坦然一平。

大魁　五車韻瑞に、大魁と連用たる字あり。今俗に、物の夥事を大魁と云。

端的　史記魏世家注に出たり。今いふ俗語の意也。

邂逅　詩經鄭風。邂逅相遇適我願兮。朱傳云。邂逅不期而會也とあり。和訓の意に叶へり。

打成一片　朱子曰。如二金石絲竹匏土革木一雖レ是有二許多一。却打二成一片一。云々。今いふ俗語の意に通ずべし。

膽斗　蒙求。姜維膽斗とあり。蜀志云。世語曰。維死時。見レ剖膽如二斗大一。今俗に、物の多き事を膽斗と云。大なる事をいはゞ可ならんかし。

大膽　俗に、勇氣のかちたるものを大膽者と云。靈樞論勇篇云。勇士者其肝大以堅。其膽滿以傍。又千金方。孫思邈云。心欲レ小膽欲レ大。是等により見れば、俗語の意よく叶へり。

田作　田を耕事を田作ると云。中華にも此言あり。前漢書龔遂傳云、齊俗奢侈好二末技一。不二田作一。凡田と云に、田圃に通じて言事もあり。易蒙引云。西北方可レ種二五谷一之地皆謂二之田一。南方之人。指レ有二水種一稻者一爲レ田也。

淫氣　色に耽りては、恥をもしらず成行は、俗に、おろかに淺ましきを淫氣と云。

斷絕　史記蘇秦傳に出たり。李白詩。寄レ君郢中歌。曲罷心斷絕。

脆弱　前漢書江充傳。御史大夫賈延。脆弱不レ任レ職。

廷　詩經揚水人實廷レ女。

大老　孟子云。二老者天下之大老也。

無賴　史記高祖紀に出たり。無聊も又たのもしげなしと訓す。李陵答二蘇武一書にあり。注に、賈逵國語注に、聊賴也。

檀那　善覺要覽云。梵語。陀那鉢底。唐言二世主一。稱二檀那一者即訛レ陀爲レ檀。去二鉢底一故曰二檀那一。今俗に、主君の事を檀那と云も、世主と云意より起れるにや。始は主君を檀那と云事、いまはしき事にせしが、今は習て俗となれり。されば其心ある人は云まじき事也。

對揚　詩經云。對二揚王休一。

大畧　孟子滕文公篇云。此其大畧也。

大體　史記貨殖傳云。大體如レ此。

大抵　史記莊子傳に出たり。索隱云。大抵猶言大略也。又大氐とも書く。史記秦本紀に出たり。註。猶略也。

大要　小學句讀。大要猶言大抵。

容易　東方朔傳に出たり。

大慶　易經履象に出たり。

盤桓　易經屯云。初九盤桓。註。難進之貌。

躊躇　字彙。住足也。文選謝希逸誄註。躊躇行止貌。

踟蹰　詩經。愛而不見。搔首踟蹰。註。行不進也。

踉蹌　字彙云。行不正貌。

無旦暮　俗に、家を治るに、儉約なきものをためなしと云。旦は暮をはからず、暮は旦を勘る事なく、愚なるの甚き也。又旦暮勘と云も、是より出る詞也。

他界　和俗に、死ぬる事を云。東鑑十五云。稲毛三郎重成妻。於武藏國他界。

慥　萬葉集の訓也。中庸章句。慥々篤實貌。言行相かへり見て、正しく誠あるを慥にと云。俗語のたしかと云も、此義に通せり。

方便　佛書に出たる字也。はの字部にくはし。

譫語　醫書に、多くしるせり。字彙云。譫多言也。たはことゝ訓ずるは、多話言なるべし。

墮落　稍落るをだら〳〵と云、既に落はなれたるをば、墮落離と云。又どろ〳〵、どろりなど云も、舌音相通より轉じ來る。

丹青　畫采をほどこすを、だみると云は、此字なるべし。

對面　後漢書蔡邕傳。相見無期。惟是書疏可以對面。

阿那　文選南都賦注。善曰。柔弱之貌。

達者　文選阮元瑜爲曹公與孫權書曰。達者所規。規於未兆。注。向曰。達謂達理者。仲長統

樂志論。與二達者數子一論レ道講レ書。是ち道に通達する者をいへり。今俗に、人の健なるを達者と云は、意義ちがへり。

大造（たいざう） 左傳。呂相曰。我有二大-造于西一也。杜預曰。造成也。文選陳孔璋檄文云。有二大-造於操一注。濟曰。造恩也。有二大恩一謂レ救レ之。今俗に、人の恵を受て、大造の事と云は、大恩の意なるべし。又物の大なるを云ハ、時に、大造の字なら未詳。

帶佩（たいはい） 身に佩るものは、皆帶佩と云べし。俗に、太刀、刀を常に帶る故、太刀、刀の恰好を、帶佩と稱す。

直人（たゞびと） 詩經定之方中箋云。匪二直也人一よのつねの人にすぐれたるを云。源氏若菜に、たゞ人の中には有がたし。或凡人をたゞうどゝよめり

段々（だん〳〵） 趙小山蟻制詩。杯酒陽關段々愁。

對談（たいだん） 休文錄云。維摩與二文殊一對二談何事一。

怠慢（たいまん） 漢書申屠嘉傳に出たり。

滔滔（たう〳〵） 水大貌。書經に出たり。

專々（せん〳〵） 水流貌。書經に出たり。

退散（たいさん） 梁書云。各退散。

談議（だんぎ） 宋史劉湛傳云。不レ喜二談議一

大力（たいりき） 南史蕭摩訶傳云。大力十餘人。俗に、力者を大力と云、據あり。

代代（だい〳〵） 陸宣公集。代々爲二國勳臣一とあり。

借使（たとひ） 史記秦本紀。鄉使上同 向使記史同 籍使上同 縱使上同 假令同 借令古觀 設 假如 文選 第令史記 假設傳 藉第 ○縱

正誤 大略は誤。探索物を求る事を云。俗に、誰、たれ、と、たゞ唯、たつた、たのみ、無二大事一ない、たいじ、兼帶、權那は誤。大根は誤。擔は誤。耕は誤。試、誰奴は誤。大布は重云なり。

第十七 禮

【諺】遼來〱　魏志曰、張遼字文遠。鴈門馬邑人。武力過レ人。數有二戰功一、累轉二前將軍一。裴註曰、江東小兒啼。怖レ之曰二遼來遼來一。無二不レ止者一。日本にも此言傳りて、小兒を怖すかすとて、遼來〱と云きたれり。

龍吟すれば雲起る　易文言曰。雲從レ龍。淮南子云。龍擧而景雲屬。王子淵聖主得二賢臣一頌。龍興而致レ雲。

【俗語】零落　楚辭離騷曰。惟草木之零落。朱子注曰。草曰レ零木曰レ落（朱子の注如レ此といへども、落字草勾に書時は、草の衰るをも落と云べし。字彙の注に見えたり。）俗に、人のおちぶるゝことを、零落すると云。琵琶行。門前零落鞍馬稀。元遺山詩。常敎三零落在二蒿萊一。又人の死したるをも、零落と云。白樂天詩。舊友零落半歸レ泉。

靈驗　遊二天台山一賦。覩二靈驗一而遂徂。

聊爾　山谷詩。且然聊爾耳。薛文清五友詩。紉レ香聊爾意徘徊。詩箋云。聊且略之辭。聊爾とは、かりそめになすを云、爾は助字なり。土佐日記に、いさゝかなる事をえせでとあり。今いふれうじの意也。

料理　晉書桓伊傳に出たり。はかりをさむる意也。今俗に、食物を割烹する事を稱して料理と云。居家必用に、草蒻を製するを以て、料理するとあり。しかればもろこしにも、此詞あるにや。

料簡　後漢書に出たり。通鑑集覽云。料度也。簡選也。又俗に、了簡の字を用ゆ。字彙。了曉也。簡道也。道理をさとりえらぶ意あれば、此字を用て然るべし。

鍊磨　ねりみがく也。臨濟錄。體究鍊磨。

歷々　韻會云。爾雅注。歷々數也。一々かぞへあぐべき事を歷々と云。楞嚴經。此歷々地聽者。臨濟錄。是儞目前歷々底。

領掌　うけつかさどる也。領承とも書。字彙云。領統理也。承レ上令レ下謂二之領一。

頷解　心に頷掌して解釋する也。其丁簡のたがひめあるを、俗に、頷解違と云。
禮儀　中庸。禮儀三百。
廉直　後漢書。嚴助祖爲二大傳一廉直不レ事二權貴一。
【正誤】蠻等れいてんぐはあやまり。

第十八　曾

【國】孫は笛ふく　此諺は、其先祖笛を吹ば、其子孫亦必笛ふく者あり。是祖先の遺敎に係る也。國史纂異云。唐開立本。見二張僧繇畫一曰。名下定無二虛士一。是異言同意のみ。

蘇民將來子孫　今俗、符章に記し、又諺の如くもいふ事也。[illegible]時代直指抄に神代外錄を引て云、素戔嗚尊根の國に降り給ふ時、雨にあひ、風にふかれ、辛勞甚し。依て宿をもとめ給ふに、其諸神ゆるされず。此にかの國に蘇民將來巨旦將來といへる兄弟の者あり。蘇民は家貧しけれども心情愛惠なり。巨旦は家富けれども心情不仁なり。素戔嗚尊先宿をこたんにかり給へり。こたんかし奉らず。蘇民にかり給ひしかば、かし奉りぬ。且又奉養饗奔走分の及ところをつくせり。素戔嗚尊いといたうよろこびおはしまし、いかにしてか恩を謝せんとおぼしめす。其夜あさわの國より暴疫鬼來りて、國民を亡さんとす。尊あらかじめ其事をしろしめして、蘇民に告て宣く、此夜此所に惡神來るべし。ふれんもの亡敗すべし。我其禍を除く方しれり。汝等及家の內の者等茅輪を帶べし。しからば禍も染着する事あたはじ。蘇民命に隨ふ。其夜果して暴風過りぬ。明旦、所の人民盡く病臥して、或死或は病み、獨蘇民に告て宣く、後世疫氣流行せん時、汝が子孫も家門に題して蘇民將來子孫宿と書し。且茅輪を門楣にかくべし。然らば疫氣の禍をまぬがるべしと。世俗今に門楣に蘇民將來子孫處とかくは、此故事也。[illegible]

せたり。備後國風土記より出たる事なれば古よ云つたへたる事と見えたり。新考

粟散邊土（そくさんへんど）　小國を粟散邊地と云事佛書にあり。楞嚴經會解溫陵曰。粟散即小國の主、天下に散する事、粟の多が如し。

俗語

疎遠（そゑん）　史記晉世家に出たり。

率爾（そつじ）　論語先進篇に出たり。註。率爾也。未ㇾ定之辭。

若干（そこばく）　曲禮に出たり。註。若如也。未ㇾ定之辭。數始二於一一。成二於十一。干字從ㇾ一從ㇾ十。故言二若干一。謂二或如ㇾ一或如ㇾ十。凡數之未ㇾ定者皆可ㇾ言。漢書食貨志註。師古云。若干且設ㇾ數之言也。干猶ㇾ箇也。謂ㇾ當二如ㇾ此箇數一耳。これは何ほどにても、其數を如此と云詞也。俗にただ多き事を若干と心得ぬるは惡し。

背向（そがひ）　すぢかひの意也。萬葉集に、つくばねのそがひに見ゆるあしを山とよめり。

そやつ　下郎の詞に、人を賤稱（いやしめせう）してそ、やつきやつなど云。源氏玉かづらの巻に、すやつばらとあり。枕草子に、かやつとかけり。宇治拾遺に、くやつと云る皆同じ詞也。そやつは其奴（そのやつこ）といふ轉語なるべし。

そのけに　又下郎のいやしき詞に、その故と云事をそのけと云。是も又意義あり。日本紀に故の字をかれと訓す。故曰とかきて、かれにいはくとよめり。かれの二字を反せば、けの字になる。しかれば、そのけとは、その故と云事なり。源氏ものがたりにも故、をけといへり。

孫（そん）　其人の苗裔と云事を、其人の孫と俗にいへり。ただに子の子をいふにあらず。遠孫の事也。按ずるに左傳哀公十五年傳、子周公之孫也とあり。是公孫成を指て云。公孫成は周公の孫にあらず。遠孫と云事なれば俗語據なきに非ず。

粗糙（そざう）　類書纂要云。物不二精細一。

啐啄（そつたく）　禪林寶訓音義云。啐啄如二鷄抱一ㇾ卵。小鷄欲ㇾ出以ㇾ嘴吮聲曰ㇾ啐。母鷄憶ㇾ出以ㇾ嘴嚙ㇾ之曰ㇾ啄。作家機緣相投而解亦猶ㇾ是矣。

聰明（そう）　書經泰誓上に出たり。

倉卒　いそがはしき事を云。漢書平帝紀に出たり。

些　娑も同し。楚辭に出たり。今關東の人の詞の終にそれさ、なにさ、など丶、さの字を付て云は、此些の字の音也。もろこしの詞にも意義なし。たゞ語の終に云事也。

薩嚩訶　沙婆訶　共に沈存中筆談に出たり。是梵語の終に云所にして、意義なし。此三字右に云し些の字にかへる。

騒　歌林良材云、騒の字を萬葉に、ぞめきとかけり。さはがしき心なり。

萬十一

ますらをはとものぞめきになぐさむる
心もあらん我ぞくしるき

坐　文選陸士衡長歌行云。體澤坐自捐。李善註云。無故自捐曰坐也。坐とは、心ならずと云事也。すゞろと云も同じ。

屬託　漢書尹翁歸傳云。翁歸拜東海大守。廷尉于定國欲屬託邑子。不敢曰。此賢將不可干以私。後漢書竇融傳云。屬託郡縣干亂政事。俗に金銀を賞料に極めて、罪人を募求むるを屬託と云。町の辻に其與ふべき金銀を、あらはにかゝげ置事あり。是を屬託をかくると云。是は其人に金銀を屬託して、罪人を搜出す也。しかるに、其金銀の事を屬託といふと。俗におもへるはうるさし。

總領　詩經烝民篇註。外則總領諸侯。内則輔養君德。今俗に。嫡子の事を總領と云。群子弟を惣領する意ならん。

齟齬　廣韻云。齟齬不相値也。俗に、物のすり違ひたる事を、齟齬はぬといふ。たゞ齟齬と云て然んし

彷彿　楚詞遠遊篇云。時彷彿以遙見。朱子註云。見不定也。（彷彿に二義あり。さの字の部考るべし。）

庶幾　爾雅。庶幾尚也。疏云。尚謂心所希望也。俗語の庶幾も、希望の義也。

抑　韻會。反語辭。又亦然之辭。又發語之辭。又疑辭にも用ふ。左傳の注に見えたり。本邦には、專發語の詞に用ふ。

藏六　祖庭事苑曰。雜阿含經云。有レ龜被二野干所一レ得。藏レ六不レ出。野干怒而捨去。佛告二諸比丘一。汝當レ如二龜藏一レ六。自藏二六根一。魔不レ得レ便。野干は狐の類也。六を藏すとは、頭尾兩手足を、甲に引入て藏を云。今俗、頭を縮て手足を引こみ、安座して坐禪するを藏六、つくると云は、これに本づけり。東坡詩。得レ如二虎挾一レ一。失若二龜藏一レ六。

宗匠　宋會要云。慶曆二年。富弼上言。南省主レ文者四五人。皆兩制宗匠。今其藝の達人を宗匠と云。

怱々　又忩々とも書。晉書衛恒傳。忩々不レ暇レ草。廣韻。遽也。又速也。杜詩。告レ別莫二怱々一。今書札の往來に、いそがはしくて、心緒を述盡ざる時、早早と書。忩々と書てしからん。

疎略　漢書司馬遷傳。疎略甚多。

贓物　下學集に、贓物は、盜物也。字彙云。贓吏受レ賄也。凡非二理所一レ得者賄皆曰レ贓。此注による時は、盜物に限べからず。

奏　もろこしにては、天子にもの申を、奏と云。奏聞、傳奏など云が如し。日本にても同じ。俗に、奏者とて、國君郡主などへ、ものいふ人をいへるは、いかゞにや。樂を奏すと云は、くるしからず。

某　祖庭事苑曰。某如二甘在二木上一。指二其實一也。然猶未レ足三以定二其名一。某と云字は、いまだ主の名を知ざるものと、其名をあらはしがたき者との稱皆用べし。今の俗、或自稱して某と云。禮記。孝王某。孔安國註。某名也。臣諱レ君故曰レ某。凡不レ知レ名者皆曰レ某。又後人、其人をおもんじて、其名を不レ稱して、某と書かへたる事、書の中に多し。自稱レ某にはあらず。

存命　魏書云。僅得二存命一。

粗末　藥を製するに。麁末 細末の法あり。是より起りて、事の精細ならざるを、粗末と云。

撩　山谷水仙花詩。暗香靜色撩二詩句一。註。王介甫詩。物華撩レ我有二詩句一。

【正誤】六借に、じやうろくと云は誤なり。ゆるやかに進するを云。前に詳也。即時（そくじ）ちやくじ、又ちやくと讀は誤。其様（そのやう）そのやうにそんな事と云は誤。存外（ぞんぐわい）ぞんざいと云は誤。續飯（そくいひ）そつくひは誤。夫々（それ〴〵）そりや〳〵は誤。其方（そなた）すなたは誤。

第十九　津

月盈（みつ）れば缺（かく）　易豐象傳云。日中則昃。月盈則食。史記。蔡澤云。日中則移。月滿則虧。釋名云。月缺也。滿則缺。和歌に、

おもへたゞみつればやがてかく月の
　いざよふ空や人の世の中

【證】角（つの）直すとて牛ころす　是は少の躍（きず）を去んとて、戇（なまじい）にいらへば、大なる害を求る喩也。孫臏子曰。夷門之瘦人頭沒於下脣而瘦代爲之元。口耳鼻耳俱不能爲用。鄙封人嗜而爲之割之。人曰。瘦不可割也。弗聽。卒割之。信宿而死。國人尤焉。辭曰。吾知去其害耳。今瘦死瘦亦亡矣。國人掩口而退。是角直すとて、牛ころす類也。

【俗語】措（つむる）　笮も又同じ。漢書文五王傳。爭門措指。注。師古云。音壯客反。謂爲門戶所笮。

強顏（つれなし）　漢書司馬遷傳云。言不辱者所謂強顏耳。通鑑第四十九集覽云。強顏猶言顏厚也。今俗に、つれなしと訓して、安忍の事とせり。

無恙（なしつゝが）　事物紀原曰。演義曰。時人以無憂疾謂之無恙。戰國策曰。歲無恙耶。王亦無恙耶。是無恙の字の出所也。史記刺客傳曰。爲老母幸無恙。妾未嫁。索隱曰。爾雅曰。恙憂也。楚詞云。還及吾君之無恙。風俗通云。恙病也。易傳云。上古之時。草居露宿。恙齧蟲也。善食人心。俗悉患之。故相勞云。無恙。恙非病。神異經曰。北方有獸曰㺊。㺊恙也。常近人村落入人屋室。人皆患之。黃帝殺之。由是此方人得無憂疾。謂之無恙。此其始也。廣韻には、㺊と、恙とは各別也とす。無恙の說紛々たりといへども。爾雅の說により、憂なしと云を可とすべし。白樂天無恙

說あり。考見るべし。又無宅と書て、つゝがなしとよむ。說文に出。

刓(つゞろ、) 史記黥布傳。印刓とあり。

一二(つまびらか) 文選。司馬遷報任少卿書。事未易一二爲俗人言也。註。翰曰。一二謂委曲也。

通達(つうだつ) 禮樂記。知類通達。

露拂(つゆはらひ) 埃囊抄に云、蹴鞠の最初にするを、卑下する心に露拂と云は、禁裡に蹴鞠の御會の有時、かならず賀茂人參りて、出御以前に、先蹴て、懸りの露を落す。是を露拂と云也。源氏蓬生に、御先(みさき)の露を、馬の鞭して拂ひつゝとあり。しかれば、貴人の前驅をも、露拂と云べし。

熟(つらく) 和俗に、倩の字を、つらつらとよむ。され共、倩は、雁と同字にて、賃を以て人を使ふ事なれば、意義甚ちがへり。源時綱詩。倩看新艶嬌宮月。是を以て見れば、誤り來る事已に久し。つくづくと云も熟と同じ。和歌にもよめり。

追從(ついせう) 下學集に、追從は、媚諂の義なり。おひしたがふとよめり。源氏帚木卷に、このまゝはゝのありさまを、あたらしきものにおもひて、ついじやうしよるとあり。

通路(つうろ) 宋史王韶傳。斷夏國通路。

噍(つやしろ) 司馬相如大人賦。噍瓊華。註。噍食也。說文。噍小食也。源氏帚木卷にも、つゞしると云詞あり。

結(つまとる) 詩經註。以衣貯之。而執其衽也。

襭(つまはさむ) 又云。以衣貯之。而扱(さしはさむ)其衽於帶間也。

正誤 頭巾(づきん)は誤。づつきん　冷(つめたし)たい、つめたい、共に誤。終(つひに)か、つひど、つひし、共に誤。綴衣(つゞれ)(つりきぬ)は誤。

第二十　禰

諺 念力(ねんりき)岩を通(とほ)す　韓詩外傳曰。楚熊渠子夜行。見寢石以爲伏虎射之。沒金飲羽。視之石也。因復(また)射石。矢摧無迹。漢書云。李廣守北平出獵。見草中石以爲虎射之。中沒鏃。視之石也。明日復射之。石不能入矣。後周書曰。李

遠嘗校獵涉柵中。見石叢薄中以爲伏虎。射而中之。鏃入寸餘就見乃石也。是皆、至誠心の一念力を以て、岩を通す事かくの如し。劉向曰。誠之至也金石爲之開。况人乎。程子曰。陽氣發處金石亦透。精神一到何事不成。

鼠とる猫は爪かくす　說苑云。君子愛口。虎豹愛爪。古諺云。將飛者。翼伏。將噬者。爪縮。

【俗語】

[illegible]　髮結曰[illegible]。

涅槃　心經注。涅槃乃不生不死之地。一切修行之所。世人誤以爲死大非也。

年紀　宋之問詩。幽淺忘年紀。

狙　史記張良傳云。良與客狙。註。伏伺也。謂狙之伺物必伏而候之。故今云狙候是也。

【正誤】

鐃鈸　みやうはちと云は誤。且鐃と鈸と二物也。今一物なりとおもへるはあしゝ。

第二十一　奈

【諺】

長居は恐れあり　禮記云。侍坐於君子。君子欠伸撰杖屨。視日蚤莫。侍坐者請出矣。新考

七たび尋て人をうたがへ　この諺の意は、物をうしなひたる時は、靜にこれを尋求て、漫に人を疑なかれと也。列子曰。人有亡鐵者。意其隣之子。視其行步竊鐵也。顏色竊鐵也。言語竊鐵也。作動態度。無爲而不竊鐵也。俄而扫其谷而得其鐵。他日復見其隣人之子。動作態度無似竊鐵者。これ人を疑ふ時は、する程の事皆盜せしやうに見ゆ。諺に、疑心生暗鬼とは、此事なるべしと列子の註にあり。

名の下空しからず　國史纂異云。閻立本。見張僧繇畫曰。名下無虛士。

ながれをくみてみなもとをしる　荀子云。君子養源。源淸則流淸。新考 是諺と、語異にして、意同し。

名のりすさは木の丸　淸輔奥儀抄に云、天智天皇世につゝみ給ふことありて、筑前國上座郡朝倉山と云所に、山中に黒木の屋を作りて、おはしましけ

るを、木の丸殿と云。丸木にて作れる故なり。用心をし給ひければ、入くる人、とはぬになのりをしつゝ入りけるなり。新考

奥儀抄　天智天皇

朝くらや木の丸殿にわれをれば
名のりをしつゝゆくはたが子ぞ

媒口（なかたちぐち）　俗に、言（ことば）の相違多きを、媒口といふ。宋袁采世範云。古人謂。周人惡レ媒。以ニ其言語反覆一。紿ニ女家一則曰ニ男富一。紿ニ男家一則曰ニ女美一。近世尤甚。新考

俗語　納受（なうじゆ）　法華經化城喩品に見えたり。

難問（なんもん）　俗に、疑問の事を稱して、難ずると云。白氏文集云。其間有レ所レ疑。即請更難。この意も又和語にひとし。後漢丁鴻傳。使ニ中郎將承レ制問難一。

形（なり）　枕草子に、かたちよく、なりなどつねによくてあらんは、ましてよからんかしとあり。

直會（なふらい）　日本紀持統天皇紀に、嘗の字を、なふらひたてまつるとよめり。

無禮（なめげ）　枕草子に、ふみことばのなめぎとあり。是も文體無禮に、かろ〴〵しき意なり。今俗に、なめすぎると云も、なめん隋落（だら）と云も、無禮の過る意也。

波餘（なごり）　左傳。晉重耳對ニ楚子一曰。其波及晉者。君之餘也。なごりと訓せしも、なみのこりの中略なるべし。

なみにおもふ　歌林良材云、なみにおもふとは、人なみにおもふ也。

萬葉　わかゆつる松浦の川の河浪の
なみにおもはゞ我戀めやは

古今　みよしのゝ大川のべのふぢなみの
なみにおもはゞわがこひめやは

中々（なかなか）　俗語の中々は、領承したる詞なり。和語に、中々とつゞくるは、かへりてといふ詞に通ず。此五文字、歌によみおほせかたきよしなり。中々と云出して、始終云つめされば、龍頭蛇尾の病あれ

ば也。

靡（なびき）、漢書張揖之傳。天下隨レ風而靡。

謎（なぞ）、隱語也。拾遺集に、なぞ〳〵かたりの事とあり。

風俗（ならはし） 字義。ふの字の部にくはし。

乍（ながら） 韻會[illegible]篇。乍兩辭也。禮運註疏。祭二百神一曰レ蠟。陸佃云。蟪蛄曰レ乍。一有一無爲レ乍。物之生死老少。一有一無。何有二窮已一是之謂レ乍。俗に、ながらといひ、つゝと云も、辭を兩にする時に用ふ。譬（たとへ）ば惡としりてせぬはよき也。惡としりつゝなすと云は、心と行と、一有一無なり。人の苦勞をいとはゞ招かざるがよき也。苦勞ながら出給へと云は兩辭也。此類は俗文字を用るの妙也。

勿（なかれ） 俗に、人を戒とゞむる時に、なしそ、なみそと云、なと云は勿の字の義也。朱子曰。勿者禁止之詞。これわらざるやうにと戒る時に用ふ。萬葉集に、勿降を、なふりそとよみ。日本紀に、勿視をなみそとよめり。

濟（なす） 爾雅。成也。又すの字部にくはし。

[正誤] 中々（なか〳〵）は誤。なつ〳〵 不斜（なゝめならず）は誤。なのめならぬ 地震（なゐふる）は誤。なへのい

諺草卷之三終

諺草卷之四

貝原好古纂輯

第二十二　羅

諺 落花枝に歸らず　落花難レ上レ枝。破鏡不二重照一。五燈會元十三卷にみえたり。新考

落花狼藉　後江相公詩曰。落花狼籍風狂後。啼鳥龍鍾雨打時。朗詠 落花狼藉とは、風吹たる後に、花のちりぐ\になりて、地に打みだれたるは、蹈ちらしたるやうに狼藉なると也。

俗語　濫觴　物の始を云。家語曰。江始出二岷山一。其源可二以濫一レ觴。及レ至二江津一也。不レ舫レ楫不レ可二以涉一。山谷詩云。岷江初濫レ觴。入レ楚乃無レ底。

狼藉　史記淳于髠傳に出たり。蘇鶚通鑑演義云。狼藉レ草而臥。去則雜亂。故物之縱橫敗亂者。謂二之狼藉一。藉は踏也。狼のものをふみちらしたるごとく、みだりがはしき義なり。俗に、誤て藉を籍に書はわろし。

埒明　埒は、竹を並べ立て、結たるものなり。今埒明と云詞は、古き詞なり。南都にて、春日大明神祭禮の時一夜神輿を外にうつす。其まはりに、埒を結て人の猥に近づき觸ん事を警む。其翌朝、今春氏の猿樂、幣を持來て、始て獨神輿の前に詣て埒を發て祝言をよむ。是より諸人共に入る。此故に物の屈塞の開たるを埒明と云來れり。

臈次　俗に、物の次第なきを、らつしもなきといへり。野槌に云、臈は出家する者、髮をそり授戒してより、一夏九旬の間、勤行するを、臈と云。僧臈戒臈是也。僧の位は、戒律の前後によりて、次第するなり。是より事の次第するを、臈次と云。職原に、極臈とあるも、位階の名也。然は、上臈下臈は上位下位といはんが如し。

老弱　孟子梁惠王篇云。老弱轉二乎溝壑一。今俗には、老若と書て、らうにやくと唱ふ。

耄　前漢書武帝紀。哀ニ夫老耄ー。

濫吹　文選江文通雜體詩。濫吹乖ニ名實ー。韓非子曰。齊宣王好レ竽。必三百人齊吹。南郭先生不レ善レ竽。而濫ニ於三百人之中ー以食レ祿。宣王薨。湣王立。欲ニ一一吹ー之。先生乃逃。南郭が濫吹レ竽故事により、今もまぎれものをば、濫吹と云來れり。或濫竽とも云なり。

落居　人の家居をしめて、聚り居所を、村落屯落離落など云。俗に、事の騷動なく本所に安んずるを落居すると云は、其所に安堵する義也。

禮拜　唐書云。燒レ香禮拜。

來儀　書經益稷篇云。簫韶九成。鳳凰來儀。注。來儀者來舞而有ニ容儀ー也。今俗に、人の來るを來儀といふ。文選王巾頭陀寺碑文云。金粟來儀。注。維摩經曰。金粟佛名也。來儀取レ見ニ於世ー。此注のごとくなれば、人の來るを來儀と云もしからん。

老氣　老病也。勞氣とも書。源氏夢浮橋卷に、はしのおきのらうけ、にはかにおこりてとあり。

正誤　無ニ詞次ー　字義、前に見えたり、らつしよもないといふはわろし。

第二十三　武

諺　六日の菖蒲　用に立ぬと云事を、諺に、六日の菖蒲と云。菖蒲は、五月五日に用る物なれば、六日に至ては、無用の物となる也。歌に、

夫木　衣笠内大臣

いかにせん今は六日のあやめ草
ひく人もなき我身なりけり

馬の耳に風　東坡が六言詩に、青山自是絶世。無レ人誰與爲レ容。說向ニ市朝公子ー。何殊ニ馬耳東風ー。

馬に道まかする　韓非子云。管仲從ニ桓公ー伐ニ孤竹ー。春往冬還。迷惑失レ道。管仲曰。老馬之智可レ用也。仍放ニ老馬ー而隨レ之。遂得レ道。又朗詠の詩に。雪中放レ馬朝尋レ跡。歌に、

夕されば道も見えねどふるさとは

もときし駒にまかせてぞ行

生れぬさきの襁褓さだめ　莊子云。見レ卵而求レ時レ夜。見レ彈而求ニ鴞炙一者乎。是今の諺と、意相近し。

馬をしか　波の部、馬鹿の條下にくはし。

蒙古高勾麗い鬼　後宇多院弘安四年の秋、蒙古國より六萬艘の兵船をうかべて日本を攻、高勾麗の者案内者となり、筑前國博多まで着船す。八月一日俄に神風夥く吹て、蒙古の六萬艘の兵船悉く破損す。是を世にむくりこくりの鬼とて、おそろしき事に云ならはせり。蒙古は元朝の本の名なり。高勾麗は高麗の事也。康富記にこくりと訓せり。國裏と書は誤なり。新考

馬には騎て見よ人には傍て見よ　史記曰。相レ馬失ニ之瘦一。相レ士失ニ之貧一。是俗諺と、語勢相似たり。

【俗語】如レ馬　俗に、物の大なる事を、馬の如しと云。按ずるに、本草綱目卷之十四、香薷の條下に、時珍曰。俗稱ニ物之大者一爲レ馬也。

發憤　大和物語に出たり。枕草子にもあり。恚て泣事也。今俗には、たゞ泣事をむつかると云。是ちがへり。

六借　わづらはしき事を六借と云。字儀詳ならず。源氏物語などにも所々にあり。古歌に、

おもふ事一つかなへば又一つ
三つ四つ五つむつかしの世や

無方　禮記經解云。不レ隆レ禮不レ由レ義。謂ニ之無方民一。又史記禮書曰。禮者人道之極也。然而不レ法レ禮者。不レ足レ禮。謂ニ之無方之民一。註。鄭玄曰。方猶レ道也。俗に、道理に昧く、禮義をもしらぬ愚人を、無方者と云。據有詞なり。

無能　史記魏世家に出たり。

矛楯　みつからいふ事の相違するを、矛楯と云。韓非子曰。人有下鬻ニ矛與レ楯者上。譽ニ其楯之堅一。物無ニ能陷一也。俄而有レ譽ニ其矛一曰。吾矛之利。物無レ不レ

陷也。人應之曰。以子之矛陷子之楯何如。其人弗能應也。（古俗呼諸鐵）是より起りし言也。又中のあしき事をする者を矛楯と云。是は矛は、人をつきさらんとし、楯は人をふせがんとする意なり。

夢想 後漢黃霸傳。夢想賢士。唐李白詩。日夕懸猿愁。懷寶盈夢想。

無常 名義集云。阿迦那。此云無常。釋氏要覽。祐法師序。生滅輪迴是を無常と云。色心幻是を苦本とす。故に涅槃に、是を大河に喩へ、法華に、是を火宅と云り。浮居氏。世の轉變をさして無常と云ハ、儒家の說に異なり。

謀反 史記張良傳に出たり。通鑑凡例云。有謀未發者曰謀反。

無下 淮南子云。淫無下。

無慙 何の事をしすごしたるを、むさいと云。此字なり。食物の味能を、むさいといふ。是此字を用ゆべし。

無緣 涅槃經云。修諸菩薩無緣之慈。

向火 日本武尊、東夷を征し給ひし時、駿河國の賊徒、野を燒しに、劒十握劒を拔て草を刈給ひ、向火たかれし事、日本紀に見えたり。俗に、事もなき事を云つのりて、人を怒らする事を、火をたくと云、向火つくると云は、此故也。源氏眞木柱卷に、我も向火つくりて有べきを、竹川に、いとうしろめたき御心なりけりと、向火つくれば、花鳥餘情に、火の付たるに、此方より又火を付れば、向の火は必消るを、向火と云。そのごとく、人の腹を立るに、此方より又腹を立てかくれば、人の腹は立やむなり。

胸潰 俗に、驚事をむねつぶれると云。源氏若菜卷に出たり。

【正誤】無差た、むつさ、むつた、むたく、むくら、もくら、むめはし、むめぼう、むたは、雜は誤。乾梅は誤。無性いと云は誤。無體いと云は誤。無義道は誤。

第二十四　宇

【諺】牛の前にしらぶる琴　野客叢書曰。對レ牛彈レ琴。
諺是に本づけり。

うつればかはる

新古今
袖の露もあらぬ色にぞきえかへる
うつればかはるながめせしまに

うたふも舞も法の聲

後拾遺　遊女宮木
津の國のなにはのことかのりならぬ
あそびたはふれまでとこそきけ

拾玉　慈圓
いつくにもわがのりならぬ法やあると
空ふく風にとへどこたへず

優曇華　希にして、遇がたき事の喩也。佛家に專いふ事也。今世話に、常に喩事とす、楞伽經疏曰。優曇華ニ於ニ世間中一。无ニ人曾見者一。依ニ中國一此樹直從レ條出レ葉。其大如レ捲。其爲ニ香美而也ニ華故。過去未來无ニ見者一。法華經云。其人甚希有。過ニ於優曇華一。疏云。鉢名ニ瑞應一。三千年一現則金輪王出。歌に、

源氏若菜卷
うどんげの花よりえたる心地して
みやまざくらにめこそうつらね　安藝

久安百首
玉椿ひかりをみがく君が代に
もゝかへりさくうどんげの花

榮花物語三十七云。女院の御さゝげ物うどんげを作たり。東鑑云、日本にては、芭蕉の花を、うどんげと云。新考

有想無想　俗に、取まじへたる事を云。法華經。世界六趣四生。衆生。卵生。胎生。濕生。化生。若有形。無形。有想。無想。非有想非無想。無足。二足。四足。多足。

【俗語】鬱陶　書經五子之歌。鬱陶乎予心。孟子離婁

篇云。爵罔思レ君尉。註。思之甚而氣不レ得レ伸也。

稚稚（ういしういし） 神代卷上。國稚地稚。口訣に、國字伊志。地字伊志也。稚幼也とあり。未人とならぬと云意と同じ。うい〳〵しと云も、未物の定らぬ事也。

憍 いやなる事也。又なやましき意也。俗說に云、醍醐帝の御時、菅公と時平、左右の大臣たり。時平の讒によりて、菅公は太宰權帥にうつされ、配所にてはて給ひぬ。其靈、時平をなやまして、程なく左大臣も死せり。是を右流左死（うるさし）と書て、かれこれよからぬ事を、うるさしとは、是より云傳へたり。此說非也。菅公より前の歌に、うるさしと云詞多ければ、菅公より後に、此詞出たるに非ず。

疼（うづく） 腫物などのたゞ痛（いたむ）を、うづくと云。此字也。

迂闊（うかつ） まはりさかるとよめり。まはり遠き事を云。史記孟子傳に。迂遠而闊於事情。是より出たる字也。漢書王吉傳。其言迂闊。

打忘（うちわする） 俗に、打の字を付て云事多し。其中に用てよきあり。又よからぬあり。よく心を付べし。中華にも此事あるにや。歐陽公文集百二十七。歸田錄卷三曰。今世俗言語之訛。而舉レ世君子小人皆同ニ其謬一者。惟打字爾。打丁雅反 其義本謂ニ考擊一。故人相毆。以レ物相擊。皆謂ニ之打一。而工造ニ金銀一亦謂ニ之打一可矣。蓋有ニ槌撾作擊之義一也。至下於造ニ舟車一者上曰ニ打レ船打レ車。網レ魚曰レ打レ魚。汲レ水曰レ打レ水。役夫餉レ飯曰レ打レ飯。兵士給ニ衣糧一曰レ打ニ衣糧一。從者執レ傘曰レ打レ傘。以レ糊黏レ紙曰レ打レ黏。以ニ丈尺一量レ地曰レ打レ量。舉レ手試ニ眼之昏明一曰ニ打試一。至ニ於名儒碩學一語皆如レ此。觸レ事皆謂ニ之打一。而徧檢ニ字書一。了無ニ此字一。丁雅反者 其義主ニ考擊之打一。自音謫耿。以ニ字學一言レ之。打字從レ手從レ丁。丁又擊レ物之聲。故音謫耿爲レ是。不レ知因レ何轉爲ニ丁雅一也。小補韻會云。項氏家說曰。俗間助語。多與ニ本辭一相反。其於ニ打字一用レ之尤多。凡打疊打聽打請打量打睡。無ニ非ニ打者一。不ニ但擊打之義而已一。是を以見

れば、和漢訛を同するものなり。

云云（うんく／しかく）　史記汲黯傳。上曰。吾欲二云云一。漢書註。師古曰。云云。猶レ言二如レ此如レ此一也。文選四十二。阮元瑜書。其言云云。註。銑曰。云云。謂二辭多略不一レ能レ載也。長き詞を擧て、下の語を略する時、云云と書也。

うんじはつる　倦果（うんじはつる）也。退屈したる體を云。

雲泥（うんでい）　雲は天に屬し、泥は地にあり。故に隔る事に喩ふ。俗に、雲天と云は誤也。白樂天詩。會面隔二雲泥一。橘正通詩。花月一窗交昔睦。雲泥萬里眼今窮。

兎毛の末（うのけのすゑ）　物の細なる事に喩て云詞なり。孟子梁惠王篇云。明足三以察二秋毫之末一。朱註云。秋毫之末。毛至レ秋而末銳小而難レ見也。是も小き事の喩にいへり。

優劣（うれつ）　文選。任彦升奏レ彈二曹景宗一云。優劣若レ是。居家必用考功曰。居レ上曰レ優。居レ下曰レ劣。韻會。劣弱也。从二力少一。廣韻。鄙也。

噂（うはさ）　詩經十月之交篇。噂沓背憎。朱傳云。噂噂沓沓多言以相說。而背則相憎。小註　永嘉陳氏曰。噂聚談也。今いふ、うはさの意に通せり。

率爾（うちつけ）　字義。音の字部に見えたり。

影護（うしろめたし）　河海抄に、影護をうしろめたしとよめり。

憂悲（うひ）　苦惱を云時は、此字なり。又下郎のけなげなるを譽るは、有意奴（うゐやつ）也。

迂詐（うそ）　俗に、僞をうそと云は、迂詐字也。中華の書に、迂誕と云に同じ。

胡亂（うろん）　伊洛淵源錄等に、胡亂の字出たり。うろんは唐音也。又胡說亂道は、もと中華の俗語なり。みだりがはしき事を云。

容裔（うねる）　文選南都賦註。向曰。船行貌。うねると和訓せり。

寫（うつす）　韻會云。轉レ本曰レ寫。又幕畫曰レ寫。又器を例にして、中にある物を、他器に傳ふるをも寫と云。

曲禮曰。器之漑者不ㇾ寫。其餘皆寫。

諾　孟津抄に、諾をうけはると訓せり。又承諾の字をも用ゆ。

本居　風土記に、尾州葉栗郡若栗鄉に、宇夫須那社あり。廬入姫、誕生産尾の地なる故、此名ありとかや。（廬入姫は、景行帝の時の人。）又かながら神の心なくとも、只所ㇾ生の地をも、うぶすなと云。日本紀に、本居とかけり。

正誤　烏兎は鳥は日也、兎は月也。日入て月来ル由を、[illegible]と云は誤り。雲泥は天也。泥は地なり。天地懸隔と云[illegible]。[illegible]と云は誤。[illegible]と云は誤。[illegible]は誤。影護ないは誤。容裔は誤。[illegible]は誤。

第二十五　乃

通　農民の息が天に上る　人事下にたがへば、天變上にあらはると、古語にいふが如し。萬葉集の歌に、大野山きり立わたるわがなげくおきその風にきり立わたる。是民のいき、天に上るなり。[illegible]の息が天に上ると云は誤也。農民の息が天に上るとは、たとへば、堯舜の御代には、一夫も其所を得ざる事を憂給ふ故、萬民感化して、父母のごとく仰ぎ奉るにより、おのづから祥瑞多く、雨塊をやぶらず。風枝をならさぬ太平の世なりし也。桀紂が時には、下をしへたげなやます故、農民憂ひ苦んで、共に亡ん事を願ふ。其氣天に通じて、天下に凶災多く、終には滅亡におよべり。代々からうやうの驗へ少からず。是農民の息、天に上るにあらずや。史記[illegible]食其曰。王者以ㇾ民人ㇾ爲ㇾ天。是も俗諺の意に通せり。

俗通　能　俗に、材藝あるものを、能ありと云。書經大禹謨云。汝惟不ㇾ矜。天下莫ㇾ與ㇾ汝爭ㇾ能。又漢書高帝紀云。能[illegible]。註。師古云。能謂ㇾ材也。能本獸名。形似ㇾ熊。足似ㇾ鹿。爲ㇾ物堅中而强力。故人之有ㇾ賢材ㇾ者。皆謂ㇾ之能。今俗に、少の藝をも能と云。又猿樂のわざまでを、能と云は、心得ず。

狼煙（のろし）　酉陽雜俎云。狼糞煙直上。烽火用レ之。

のら　萬葉集には、草の字をのらと訓せり。たゞ野原の事也。又今俗に、何の所業もなく、あそびありく者を、のら者と云は、うつけたるものは、野原に草のはへて、いたづらにびやう／＼として、何の景（けい）もなきがごとくなるにたとへたり。

古今　僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや
庭もまがきも秋ののらなる

長閑（のどか）　東坡詩。仙家日月本長閑。

【正誤】野風俗（のふうぞく）いやしき事を野と云。野風俗は、風俗のいやしき事也。のふうずと云は誤。

第二十六　久

【諺】履新（くつあたらし）といへども冠（かうぶり）とせず　是は貴賤上下の差（しな）を亂るべからずと云喩也。史記儒林傳云。黄生曰。冠雖レ敝必加二於首一。履雖レ新必關二於足一。漢書註。師古云。語見二大公六韜一。又說苑本□篇云。冠雖レ敝宜レ加二其上一。履雖レ新宜レ居二其下一。

口猶（なほ）乳くさし　漢書高祖紀。口尚乳臭。註　師古云。乳臭言二其幼少一。○新考

くらげも骨にあふ　博物志曰。東海有レ物。狀如二凝血一。從廣數尺。方員名曰二鮓魚一。無二頭目處所一。內無二藏一。衆蝦附レ之隨二其東西一。人煮食レ之。是□らげなるべし。今いふ諺の意は、天性□得ざる幸にあふは、ほねなきくらげの、骨にあふとひとしといへる意なるべし。○新考

夫木　仲正

我戀は海の月をぞ待わたる
くらげのほねにあふ世ありやと

是は、俗に、海月と書て、くらげとよむによりてかくはよめる也。

増賀上人

みつわさす八十あまりの老の波
くらげのほねにあひにける哉

愚人夏のむし飛で火に入　後魏史崔浩云。慕容垂人歸レ之。若二夜蛾之赴一レ火。事文類聚續集曰。愚人貪レ財。如二蛾赴一レ火〇心地觀經云。心如三飛蛾愛二燈色一。（字彙云。拂二燈火一謂二之飛蛾一。）歌に、

古今　躬恒

夏蟲をなにかいひけん心から
われもおもひにもえぬべらなり

黑犬にくはれて灰の和澤に怯る　唐傳奕曰。懲二沸羹一者。吹二冷齏一。傷レ弓之鳥。驚二曲木一。是異言同旨の語なり。

會稽の恥をすゝぐ　史記貨殖傳云。勾踐十年。國富遂報二強吳一。刷二會稽之恥一。（新考〇越王勾踐の事、世の人よくしれゝば、こゝに略す。）

朽繩にとり付が如し　書經曰。予臨二兆民一。凛乎若三朽索之馭二六馬一。諺と叶へり

唇薄きものはよくものいふ　靈樞逆順肥痩篇曰。岐伯曰。瘦人者皮薄色少。肉廉廉然。唇薄輕レ言。

鞍掛馬　戰國策曰。趙曰。以レ書爲レ御者。不レ盡二馬情一。これくらかけ馬と云と。異域同譚なるものなり。

光陰矢の如し　山谷詩云。日月過二箭疾一。邵子詩云。歲華如レ箭上堪レ吁。顏氏家訓云。光陰可レ惜。譬二諸逝水一。是も光陰矢の如しと云と、おなじ意なり。

新考

古今　躬恒

あづさ弓春立しより年月の
いるがごとくもおもほゆる哉

管の穴から天をのぞく　史記扁鵲傳云。若三以レ管窺レ天。以レ郄視レ文。又史記云。少見之人。如下從二管中一闚上レ天。前漢書東方朔傳云。以レ筦闚レ天。以レ蠡測レ海。（又加の字の無にくはし。）

蝸牛の角の爭ひ　世のはかなきわざに喩ふ。莊子云。有下國二于蝸之左角一者上曰二觸氏一。有二國于蝸之右角一者曰二蠻氏一。時相與爭レ地而戰。伏レ尸數萬。逐レ北旬有五日後反。白樂天詩云。蝸牛角上爭二何事一。

藥人を殺さず醫師人を殺す　東坡文集云。蜀諺曰。

學レ書者紙費。學レ醫者人費。是諺の意に通ぜり。新考

勸學院の雀は蒙求を囀る　勸學院は、藤原氏の人學問する所の名なり。日本後紀を考るに、天長三年三月に、藤原冬嗣始て立らる。拾芥抄に、勸學院は三條の北、壬生の西に在とす。今其遺址を雀森と云。そのかみ勸學院にて、盛に學問の行れし時は、其近林にある雀までも、蒙求を囀りしと云事なり。是たゞ學問の甚盛に行れし事をいはんために云諺也。雀と云は僕隷の名なり。又蒙求の呂望非熊と云事を、黄鳥の囀りしなどゝ云は、皆鑿説なり。もろこしにも、是に似たる戯説あり。雀讀二論語一と云事、笑苑千金にあり。紫燕讀二論語一百舌教レ之と云事、笑海にあり。又此事、八幡愚童記に見えたり。

愚者の一得　史記淮陰侯傳。廣武君曰。智者千慮。必有二一失一。愚者千慮必有二一得一。

【俗語】供養　禮記月令に出たり。陳註。供養膳服之具也。今俗に、先祖を祭り、佛に供する事などを、専供養と心得ぬるは、當らず。日本紀には、いたはりやしなふと訓せり。

過半　易係辭。思過レ半矣。又史記平原君傳に出たり。

過當　史記匈奴傳に出たり。司馬遷報二任安一書。所レ殺過當。文章軌範註。所レ殺匈奴倍多。故曰二過當一。是あたりまへより過たると云事なり。

寛大　漢書宣帝紀に、宣帝詔云。務行二寛大一。順二民所一疾苦一。是寛仁大度の事なるべし。俗に、ゆるがせにおこたりがましき人を、くわんたいものと云は、緩怠の字なり。又寛怠の字をも用べし。魏書云。在レ州寛怠。

勸請　法華經化城喩品に出たり。

勸進　文選に、劉越石勸進表あり。是瑯邪王睿に、天子になり給へと、すゝめし表なり。然れば、すすめすゝむると云意なり。今俗に、乞食するを、勸進すると云は、意違へり。

濶達　史記貨殖傳に出たり。又後漢書馬武傳。濶達

敢言。註。大度也とあり。又前漢書高祖紀。豁達大度。

倔強　左太沖魏都賦に出たり。通鑑集覽云。倔通作屈。屈強者。謂梁梗戻不柔服也。文選註。李周翰云。屈強不順貌。（文選四十四卷には、彊強の字を用たり。）

株守　人の愚に惑ふ事を、株をとると云。韓非子曰。宋人有耕田者。田中有株。兎走觸株折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兎。兎不可復得而身爲宋國笑。

轘　左傳に出たり。又史記商鞅傳には、車裂の字を用。

吻黄　俗に、年少の人を吻黄なりと云。世說。晉僧謙公云。黄吻年少。又陳後山詩。不探黄兒。

火急　六祖壇經云。火急速去。又東坡集十六卷云。燎頭火急問征祥。

口傳　孔安國書經序曰。濟南伏生年過九十。失其本經。口以傳授。韓文三十八。進順宗皇帝表云。今之所以知古不可口傳。必憑諸史。

口說　前漢書劉向傳に出たり。

口舌　史記蘇秦傳。周俗逐什二以爲務。今子釋本而事口舌。

癖　增韻。嗜好之病。又偏癖病也。

公役　荀悦申鑒。有公役無私使。

劬勞　詩經蓼莪篇云。哀哀父母。生我劬勞。劬字彙疲勞也とあり。今俗には、苦勞の字を用ゆ。

桓桓　書經牧誓云。勗哉夫子。尙桓桓。註。威也。

山谷詩云。群陰彫品物。松栢尙桓々。

光明　詩經敬之篇に出たり。

旋踵　漢書相如傳。計不旋踵。

愚癡　癡。說文云。不慧也。

愚鈍　朱子文集。自少愚鈍。

愚蒙　杜子美詩。此語亦足爲愚蒙。又愚朦とも書べし。文選揚子幼書。足下哀其愚朦。註。朦瞑也。

屈服　左傳云。屈二服于楚一。

活計　俗に、產業恒ありて樂む事を、活計と云。詩格三白樂天詩云。莫レ厭家貧活計微一。註。活計。猶レ言二生生之計一也。又東坡集十六。開レ眼此心新活計。

苦集　俗に、なづみくるしむ事を云。琅琊代醉編曰。龍舒心經註。苦謂二一切生老病死之類一。集謂二一切聚集骨肉財帛之類一。滅謂二壞滅一。道謂二修行一。此名二四諦一。經云。見レ苦斷レ集。因レ滅修レ道。俗に、苦集を、くずととなふ。

工夫　日々人にやとはれて、賃を取匹夫の事を云。大工人夫諸職人の類皆これなり。王肅傳、功夫ともかけり。學者も、終日心を養ひ道を脩る事を勤るを、此工夫の二字を借用。今俗に、思慮する事を、工夫と心得るはあしゝ。工夫とは、たゞ勤る事なり。

欵狀　野槌曰、禁中に、官位を望み、或訴訟を申上る時の狀を、欵狀と云へり。くはじやうとよむべし。くはんとは、よまざるなり。韻會云。說文欵意有レ所レ欲也。徐曰。意有レ所レ欲。而猶ニ塞欵欵然一。

公事　公事の字は、論語に出たり。又禁中一切の政務を、公事と云。居家必用曰。無レ私曰レ公。有レ所ニ作爲一曰レ事。邊鄙の民相論じて、上に訴る事を公事と云。後漢書趙典傳。公事去レ官。是も訟の事にいへり。

果報　法華經。如レ是因。如レ是緣。如レ是果。如レ是報。

頑子　田舍の俗、人を罵て頑子と云。左傳云。心不レ則二德義之經一爲レ頑。

荒涼　韓退之詩。家居率荒涼。李賀詩。獨出月荒涼。涼は冷義なり。俗に、過言の義に用ゆ。平家物語に、荒涼の申樣とあり。

件　韻會曰。說文作分也。旁に牛をかくは、牛は物の大なるものにして、分やすき故なり。今箇條を分つを件と云。

苦痛（くつう）　宋史。不ㇾ堪ニ苦痛ー。

懐妊（くわいにん）　宋史。詔ニ諸懐妊者ー賜ニ胎養穀ー人三斗。

養（やしなへ）、　物を與ふる事を云。神代巻に出たり。

齟齬（くひちがふ）　齒の字の部に見えたり。

寵（くつろぐ）　左氏昭公傳。小者不ㇾ寵。

草臥（くたびれる）　俗に、憊勞する事を草臥と云。是山臥の入峯修行より起れる詞にして、今は平人の事にもいへり。

掛ニ口端ー（かゝるくちのはに）　口のはしにかゝると云事なり。齒にあらず。

後撰

あはれてふ事こそつねの口のはに

かゝるや人をおもふなるらん

華麗（はなやか）　文選張平子西京賦に出たり。はなやかにうるはしきなり。

回祿（くわいろく）　俗に、火災にあふを、回祿と云。春秋昭公十八年傳云。鄭子産禳ニ火於玄冥回祿ー。註。玄冥水神。回祿火神也。

元興寺（ぐわんこうじ）（グワンゴゼ）　都良香道場法師傳に云、法師は、尾張國阿育郡人也。年十ばかりの時、甚力つよし。童子たりし時、元興寺の僧に師としつかふ。時に寺の鐘堂に鬼ありて、毎夜鐘をつく者を殺す。童子僧に請て、鐘堂に行、其夜鬼來りあらはれ見ゆ。童子則鬼の頭をとる。鬼と、童子と力を爭て相攝す。鬼は引て外に出んとし、童子は引て内へ入れんとす。曉に及て鬼甚脱去んとす。童子急に鬼の髮をにぎる。鬼の髮剝落て、皮宍あり。鬼則のがれさる。童子、僧となりて、道場法師と號す。今按するに、此説不經なり。信するに足ず。鬼とは、其時強力の人ありしをいへるならし。今世小兒を賺恐すに、目をいからかし口を開て、みづから呼て元興寺と云は、是元興寺にむかし鬼ありしいはれなり。

灑浄（いさきよし）　日本紀の訓なり。分明ならざるなり。

頽唇（くちつぶる）　源氏桐壺に、くちをしうおもひくづをる。河海抄に、頽唇とかけり。さりともおもふ心の退屈

するは、頬おつるがごとし。

火事　山谷詩。昨者火事幾焚レ巣。註。維摩經曰。火事如レ故而不レ爲レ害。

諄　誨言重複也。詩經に出たり。

拔河之戯　今いふ頸引也。留靑日札に見えたり。

［正誤］踵くびすきびすは誤。霍亂くわくらんはくらんは誤。櫪くぬぎくのぎは誤。關白くわんぱくかんばくは誤。

諺草卷之四終

諺草卷之五

貝原好古纂輯

第二十七　也

［諺］柳の枝に雪をれはなし　淮南子曰。木强則折。革固則裂。齒堅ニ於舌一而先レ之敝。口義云。木强則折。如レ藤如レ柳則難レ折云云。

闇夜のにしき　無用なる事の喩なり。漢書云。富貴不レ歸ニ故郷一。如ニ衣レ錦夜行一。蘇武書。語曰。夜行被レ繡不レ足レ爲レ榮。又古の字の部にくはし。新考。

貫之

見る人のなくてちりぬるおく山の
もみぢは夜のにしきなりけり

病なほりて醫忘る　說苑曰。病加ニ於少愈一。是諺の意に同じ。

養由に弓をいふ　淮南子曰。養由基楚將。善射。去ニ楊葉一百歩射レ之。百發百中。楚恭王獵。見ニ百猿遶避レ

箭。王命ニ由基ニ射レ之。由基始調レ弓矯レ矢未レ發。乃抱レ樹而號。俗諺の起こゝに出たり。かゝる射術の達人に對して、弓の事を云は、却て笑を取の媒也。世の人、曲藝小技あれば、精妙の術を備し、雲泥の隔ある事をしらず。誠に養由に對して弓をいふの類なり。

俗語 約束（やくそく） 史記曹參世家に出たり。漢書高帝紀註。約要也。謂ニ言契一也。小補韻會曰。言語要結。戒令檢束。皆曰ニ約束一。約又音要。束又商遇切。字義同。約束とは、詞を以て互にくゝりたるごとく、かたむる意なり。歌の詞にもあり。

やくそくもたがはざらめや桐の葉を
きざみし事も有世なりせば

良久（やゝひさし） 史記韓信傳に出たり。又後漢書張湛傳。良久歎息。註。良猶レ甚也。

野心（やしん） 左傳昭公二十八年傳云。與子野心。文選丘希範書。北狄野心。註。翰曰。野心謂レ如ニ野獸之心一。財狼の人に馴ざるごとく、人臣の君に背て、纂奪の心あるをも、野心と云なり。

寡（やもめ） 小爾雅云。凡無レ妻無レ夫。通謂ニ之寡一。今俗、妻なき夫を寡と云も、又據なきにはあらず。

樣（やう） 廣韻。式樣。今俗に、鄙樣（ゐなかやう）、京樣（きやうやう）など云。是はり。もろこしにも、此詞あり元和樣、宮樣など云是也。俗に、樣を用るは非也。樣は橡の字に同じ。柞實也。

役夫（やくふ） 左氏文公傳。江芊怒曰。呼ニ役夫一。註。賤者之稱。

瘦骸（やせさらぼふ） 骸の字は、莊子に出たり。

夫木　　俊頼

山影にやせさらぼへる犬ざくら
おひはなたれて引人もなし

瘦通（やせとほる） 歌に、

新續古今

大原に行とはなしに戀すれば
やせとほりぬるものにぞありける

是瘦とほると云と、八瀬通と云を、かよはして讀るものなり。

罹厄會　文選班叔皮王命論に出たり。

約諾　字彙。諾承領之辭也。又以レ言許レ人曰レ諾。うけはるとよめり。

無二藥袋一　或説に、荊軻が、秦始皇を刺んとせし時、群臣の殿上に侍りし者は、秦法にて、手に尺寸の兵器も持ざれば、せんすべなし。侍醫夏無且、其持所の藥囊を以て、荊軻に投たり。其事、史記にくはし。此時夏無且、藥袋にても手に持し故、わづかに荊軻に手むかひせり。藥袋もなくんば、一向に手を空しくすべし。故に物の詮なき事を、藥袋もなしといへり。牽合の説にや。

[正誤]　矢張　其まゝと云事なやはりと云。やつばり、やつばし、やつぼし、やつばしかいて、などゝ云。並謬也。

流鏑　やぐさみ、やぐさめ、並謬。　炙　やいとやいひは、やいとうわろし。　瘦　やせるは、やせかわすと云は、いやしき詞也。

第二十八　未

[諺]　盲龜の浮木　法華經。佛難レ得レ値。如二優曇波羅華一。又如三一眼之龜値二浮木孔一。猶科注にくはし。又涅槃經。及雜阿含經に詳なり。

曲らねば世に立れず　世説曰。王光祿。如二屏風一。屈曲從レ俗。能蔽二風露一。王光祿が傳は、南史にあり。是諺の意と同じ。

蒔ぬ種は生ぬ　山谷顧軒詩曰。深流不レ濁レ渭。種レ桃無二李實一。註。俗諺曰。種レ李不レ成レ桃。種レ禾不レ生レ豆。異域同談なり。

[俗語]　罷歸　史記公孫弘傳に出たり。又漢書。宣帝甘露三年二月。單于罷歸。又高祖紀。兵皆罷歸レ家。註。禮記少儀云。燕遊曰レ歸。師役曰レ罷。陳註。師役勞苦爲レ甚。故於二其還一曰レ罷。以二其疲一故也。是を以て見れば、罷歸ると云は、軍行の歸る時に云詞ならし。され共史記に出たるは、軍行の歸を云にあらず。今は、つねに云詞となれり。罷出と云はいふまじき事にや。されどむかしよりあやまりて云きたれば、今更改がたし。萬葉集には、退出

の字を用たり。退の字を用ひば、あやまりにあらず。〈今道の字を付て云事多し。能吟て云べし。〉

萬葉集

もゝしきの大宮人のまかり出て
あそぶ今夜の月のさやけさ

萬劫 楞嚴經。曾爾生情。萬劫羅鏁。

萬分一 莊子云。其存之閒也。無萬分之一。

毎毎 莊子胠篋篇。天下毎毎大亂。註。毎毎常常也。

物體 以手囘物也。禮記云。勿摶飯。

まだき 歌林良材に云、はやき意、速の字をかく。

古今 讀人不知

わが袖にまだき時雨のふりぬるは
君が心に秋やきぬらん

枚 韻會曰。說文徐曰。條自枝而出也。枚自條而出也。枝曰條。幹曰枚。王氏曰。凡數物曰枚。數事曰條。俗に、紙革の類を二枚三枚と云は、物を數るなり。下知法度を條々と云は、事をかぞふる也。〈[illegible]〉出たり。〈[illegible]七枚と云事、韻府にあり。是を以て見れば、何にても、物を數ふる數の名なり。〉歌書にて、一枚二枚を、ひとひら二ひらとよむ。日本紀神武紀にも、八十枚とあり。地の名の枚方枚岡なども、枚の字なり。今誤て牧の字を用ゆ。

參 廣韻。覲也。日本紀に、遠自來參。禪家には、諸人をあつめて開示するを參と云。是聖凡僧侶相まじはる義をとれり。

申 居家必用。申伸也。明也。謂所告諄切。

迄 至の義也。

隨意 萬葉集の訓なり。意にまかする義也。中華の詩にも、隨意琖花寂寞開。庭脚無人隨意綠。等の句多し。

儘 五侯鯖字海第七卷盡字部。有儘字。註云。音燼。可有也。願也。詩格註。極也。皆也。字彙。與盡同。又小補韻會盡字註。極也。又皆也。一云。任也。縱令也。

毎事 論語。子入大廟毎事問。

禁厭　日本紀の訓なり。

饗　藻鹽草に訓せり。人をもてなす事也。俗に、賄の字を用るは非なり。

[正譌]　捲物のは誤。松脂れは誤。羞明い並にあしゝ。跨はだかるは誤。斗格けは誤。淪滑るは誤。眞向うは誤。

第二十九　計

[諺]　毛を吹て疵を求　漢書武帝紀。推二抑諸侯王一。奏二其過惡一。吹レ毛求レ疵。應劭曰。求索多端曰二吹レ毛求一レ疵。劉子新論傷讒篇。洗レ垢求レ痕。吹レ毛覓レ瑕。

新考　後撰　　　　高津內親王

直き木にまがれる枝も有ものを
毛を吹ききずをいふがわりなき

藝は身をたすくる　韓退之進學解云。名二一藝一者。無レ不レ庸。是世話の意に同じ。

獸、雲にほゆる　事文類聚云。淮南王安。臨二仙去一。餘藥在二鼎中一。雞犬舐レ之並得二飛昇一。故雞鳴二雲中一。犬吠二天上一。此説もと神仙傳に出たり。詳かの書にくはし。

刑鞭蒲朽　小野國風詩。刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓苔深鳥不レ驚。是は劉寬が蒲鞭の故事を用て、無爲にして治る事を作れり。或云。大江朝綱詩也。

けふは人の上明日は我身の上　惡源太義平、死に臨て、平家の士に對して云たる詞なり。平家物語にあり。

新古　　　　加賀少納言

なき人をしのぶることもいつまでぞ
けふのあはれはあすの我身を

碩鼠才　伊の字の部、石臼藝の條下にくはし。

螢雪の功をつむ　檀道鸞晉陽春秋云。車胤字武子。學而不レ倦。貧而不二常得一レ油。夏月則練囊盛二數十螢火一。以レ夜繼レ日焉。孫氏世錄云。孫康家貧無レ油。常映レ雪讀レ書。この二人の故事によりて、勤苦して學問するを、螢雪の功をつむと云ならはせり。

けふかあすか　人の老境に及で、殘齡のほどなきを

云諺なり。新考

家集　　　　　　　　朝忠

人の世の老をはてにしせましかば

けふかあすかもなげかざらまし

俗語 權輿　詩經秦風に、權輿篇あり。朱子註云。權輿始也。華谷嚴氏曰。造衡自權始。作車自輿始。今俗に、始もなく不圖出來たる事を、けんよもなきといへるは、此字なり。

諠譁　文選左太沖蜀都賦に、諠譁鼎沸とあり。是物のかしがましき事を云。今俗に、鬪爭するを、諠譁と云は、物いひあらそひて、かまびすしき故にや。

權柄　前漢書劉向傳。大臣操權柄持國政。權は秤の錘也。柄は斧の柄也。專要の所なれば、上にある人を喩て云也。

逆鱗　天子の怒を逆鱗と云。今俗、平人の怒るをも、逆鱗をおこすと云は誤なり。韓非子曰。夫龍之爲蟲也。可擾狎而騎也。然其喉下有逆鱗徑尺。人有嬰之則必殺人。人主亦有逆鱗。說之者能無嬰人主之逆鱗則幾矣。

懸隔　漢書高祖紀に出たり。はるかにへだゝることなり。

澆季　文選任彦升王文憲集序。百王澆季。註。李周翰曰。謂末世浮薄也。

業業　詩經に出たり。註云。業業大也。俗に、物の多き事を、げふ〳〵しきといふは、此字なり。

下子　枕草子に、すさ〳〵しからん下子などゝあり。いやしきものゝ事を云。

げしう　俗に、いやしきものゝ事を云。げしうはあらぬと、源氏帚木卷にあり。不下習と書。下手しくあらぬなり。又怪敷と書て、あやしむ心もあり。

敎訓　詩經旣醉篇に出たり。又曲禮云。敎訓正俗。非禮不備。

嚴密　蘇易簡翰林志。今二京尊長院。並在樞密之北。蓋表其深溝嚴密焉。

儉約　儉約の字、論語に本づくといへども、二字つづきてはなし。史記龔遂傳。遂爲渤海大守、躬率以儉約。

輕薄　後漢書馬援傳。援戒其子姪曰。效杜季良不得。陷爲天下輕薄子。杜子美貧交行。紛紛輕薄何須數。今俗に、威儀かろがろしく、德うすき者を輕薄者と云。

嗾　使犬聲。左傳云。公嗾夫獒焉。

權勢　史記始皇本紀に出たり。杜子美詩。兄將富貴等浮雲。竊竊功名好權勢。

謙退　史記云。君子以謙退爲禮。

下輩　史記灌夫傳。夫稠人廣衆。荐寵下輩。

輕重　禮記王制云。剛柔輕重遲速異齊。

嚴重　後漢袁安傳。爲人嚴重有威。

堅强　老子云。天下柔弱莫過于水。而攻堅强者。莫知能勝。

下劣　法華經云。志意下劣。

稽古　此字、書經堯典に出たり。俗に、物を講習することを稽古と云。後漢書桓榮傳、今日所蒙稽古之力也。是は學問の事にいへり。しかれば、今云俗語に同じ。

慳貪　法華經云。衆生垢重。慳貪嫉妬。

化生　莊子曰。已化生。又化死。

褻晴　野槌に云。褻は、なれたる義也。晴は法禮の義なり。私公とも書べし。常にきるものを、けごろもと云。朝服禮服を、はれぎぬと云。詩經葛覃朱傳。私燕服也。衣禮服也。私を、けのころもとよみ、衣を、はれぎぬとよめり。韻會云。說文。褻私服。又衣の破たる餘をも褻と云。衣服にかぎらず、公界を晴と云、私事を褻のことゝ云なり。職原抄、晴時雖下藹著之。

形勢　野槌に曰、日本紀に、形勢を、けはひとよめり。新猿樂記に、景氣とかけり。

恠瑕　俗に、思ひ設ずして、疵を被るを恠瑕と云。

見解　字彙云、解釋也。曉也。道理を見て、さとる所を見解と云。鶴林玉露云。晉賢之見解。顏子之工夫。

家禮　下學集に、家禮の字を用。家禮は家人の禮也。視房重職原抄に、家禮と云は、子の父を敬ふ事なり。他人なれども、子に准じて禮を致すをば、今の世にも家禮と云來れり。又家令とも書べし。史記高祖紀。太公家令。說二大公一云々。是亦家人の事なれば、家令と云もしからん。

飢渇　田舍の庶民、飢饉する事を、けかちのいくと云は、此字なり。飢渇の字は、孟子に出たり。

啓上　通鑑宋武帝紀。驗使啓上。

結構　文選靈光殿賦。觀二其結構一規矩應レ天。註。善曰。高誘呂氏春秋註曰。結交也。構架也。構の字。手に从は非なり。結構とは、むすびかまゆるとよめり。今俗に、物の善事を、結構と云はあやまりなり。結構のよきあしきとは云べし。直に結構をさして、物のよき事とはすべからず。

懈怠　類書纂要。懈懶也。怠惰也。怠不敬。書唐本行經云。夫懈怠者。衆行之累。

見在　史記齊悼惠王世家。於レ今見在。文選劉子駿文。今其書見在。

驗　史記秦二世紀。趙高欲レ爲レ亂。恐二群臣不一レ聽。乃先設レ驗。持レ鹿獻二于二世一曰馬也。今俗、驗のあると云。此字なり。伊勢物語闕疑抄に、驗の字をけちめと讀せり。又諸日、撝日などゝも書

凝滯　源氏帚木の巻にあり。楚辭云。聖人不レ凝二滯於物一。能與レ世推移。

權門　文選陳孔璋檄云。輸二貨權門一。註。濟曰。權勢也。

撿見　俗に、秋、農監の人、年の上下を見て、斂法を定むるを撿見と云。もろこしにも、上代より此法あり。周禮。司稼。掌巡二邦野之稼一而辨二穜稑之種一。周知二其名與二其所一レ宜地一。以爲レ法而縣二于邑閭一。巡レ野觀レ稼。以二年之上下一出二斂法一。掌レ均二萬

民食。而賙ニ其給ー。而平ニ其與一。

顯證(けんしよう)　居家必用曰。顯證謂下知ニ見爭端ー之人上也。又陳遵云。左旁知レ狀謂ニ之見證ー。今も、鞠などの時、旁にて見る證人を、顯證と云。

外道(げだう)　釋氏、佛書を內典とし、儒書を外典とす。與鐵と云書には、儒書を改て內典とし、佛書を外典とすといへり。故に、佛道の外をば、推て外道と號するなり。一人の私言(しげん)より出て、閭巷の兒輩も、忌憚事をしれり。然れ共、堯舜孔子の道にあらざるは、異端なり。邪說也。故に、楊維禎は、釋氏を以て外道とす。是誠に天下の公言也。

險阻(けんそ)　左傳僖公傳云。險阻艱難備嘗レ之矣。朱子曰。險與レ阻不レ同。險是自レ上視レ下。阻是自レ下觀レ上。又韻書に、山の巘(いひ)を險と云、水の隔るを阻と云。若ひろくいはゞ、山水皆通用すべし。大行の路、巫峽の水も、人心の反覆の中に在故に、人の心の常なきをも、或險阻といへるなるべし。

藝(げい)　韻會云。藝種也。又才能也。漢書註。師古云。六經而謂ニ之六藝ー。藝猶レ種也。學者用ニ功於六經ー。猶ニ農者用ニ功於種藝ー。技能を藝と云も、農夫の力を藝種に用る如く、事に鍛煉する意なるべし。

結句(けつく)　俗に、言を多くむすびもてゆく時に、結句と云。詩の結句には、前の句の意を云合故に、却てと云義に通ずる也。

兼約(けんやく)　文選東征賦。無レ怠思ニ兼約ー。

怪事(けじ)　俗に、非常の事をけちと云。此字也。

決定(けつぢやう)　圓覺經云。生ニ決定信ー。

［正誤］鷄頭花(けいとうげ)けとき、並誤。懸魚(けいげんぎよ)げんぎやは誤。玄關(げんくわん)げんくわは誤。結句(けつく)けしてけかは誤。怪瑕(かあやまち)過ちは誤。慳貪(けんどん)誤也。痃癖(けんぺき)誤也。又肩の痛をけんへきと心得ぬるはあしゝ。肩の痛は肩痛也。潔白(けつぱく)物の淨き事也。てきつぱりと云。今誤なし。無ニ懸念ー(けんねん)思ひ懸なき也。けんにもないは誤。

第三十　不

［諺］舷(ふなばた)をきざむ　呂氏春秋曰。楚人劍自ニ舟中ー墜レ水。遽契ニ其舟ー曰。是吾劍所ニ從墜ー也。舟已行而劍不レ

行。不二亦惑一乎。

普天の下率土の濱 詩經北山篇云。溥天之下。莫レ非二王土一。率土之濱。莫レ非二王臣一。新考

ふるきをたづねて新きを知る 論語曰。温レ故而知レ新。可二以爲一レ師矣。

蜉蝣の一期 世のはかなき事に喩ていへり。大戴禮夏小正曰。蜉蝣朝生而暮死。爾雅云。蜉蝣。渠略。郭註云。似二蛣蜣一身狹而長。有レ角黄黒色。叢二生糞土中一。朝生夕死。毛詩義疏曰。通謂二之渠略一。似二甲蟲一。有レ角大如レ指。長三四寸。甲下有レ翅能飛。夏月陰雨地中出。白樂天詩云。長生無二得者一。擧レ世如二蜉蝣一。

[illegible] 法華方便品の偈也。

[俗語] 粉骨 文獻通考二十九卷。唐革卓與二將士一盟文曰。粉レ骨碎レ軀。決無レ所レ顧。今功勞あるを、粉骨を碎くと云、たゞ粉骨と云てしかるべし。

分別 法華經云。思量分別之所二能解一。

不肖 中庸云。夫婦之不肖。可二以能行一焉。前漢書武帝紀云。所レ任不肖。師古曰。肖似也。不肖者。言レ無レ所二象類一。謂二不才之人一也。文選四十一。不肖之才力。註云。不肖謂二不才一也。善云。禮記云。某之子不肖。應劭風俗通云。生レ子不レ似二父母一曰二不肖一。今も、身の人にしかざる事を、不肖と云也。

觸、 俗に、人々に行て、事を告るを、觸と云。觸狀、觸事など云是也。しかれ共、觸は突犯の義にして、行示の意義なし。しかれば、行示の事を、觸と云べからず。徇と云べし。徇字。史記に出たり。漢書高祖紀註。師古云。徇行示也。司馬法曰。徇以徇。言使二人將行徇示二衆士一以爲レ戒。

武士 漢書惠帝紀に出たり。註。武士力士也。

不便 漢書高后紀に出たり。

不祥 古事記の調也。不祥の字は老子經に出たり。

公然 左傳桓公五年傳に出たり。

輻輳 史記張儀傳。四通輻輳。前漢書賈誼傳。輻輳並進。小補韻會云。輻輳競聚。

不日　詩經に出たり。

不臆　しの字部に詳也。

布施　國語周語に出たり。

普請　普請の字、三國志呂蒙傳に出たり。家造るを普請と云は、沙門の語なり。普く諸人を招請、其多力を得て、事をなす義なり。敕修淸規云。普請之法。蓋上上均レ力也。分ニ付堂司行者一。報レ衆掛ニ普請牌一。仍用ニ小片紙一。書貼ニ牌上一云。某時某處。

不快氣　輟耕錄第十一云。世謂レ有レ疾。曰ニ不快一。陳壽作ニ華陀傳一亦然。俗に、病あるを不快氣と云も、據なきにあらず。

風景　晉祖逖傳。晉過レ江。人士新亭飲宴。周顗嘆曰。風景不レ殊。舉レ目有ニ山河之異一。

富有　易繫辭云。富有之謂ニ大業一。

浮沈　史記游俠傳云。豈若下早論齊レ俗與レ世浮沈而取中榮名上哉。

不斷　漢書元帝贊云。優游不レ斷。是は決斷のなき事を云。今俗に、平日の事を不斷と云。

風聽　國語晉語。風ニ聽臚言於市一。註。風采也とあり。臚言は上より語を傳て、下に告るを云也。其意が下に通ずるやと、采聞なるべし。今俗に、物を褒る意を、ふいてうと云は、風聽の云誤なり。

扶持　內則に出たり。又孟子云。疾病相扶持。

啗　史記高祖紀。多以レ金啗ニ豨將一。啖亦噉、昭曰。餌レ之也、

武功　詩經七月篇云。載纘ニ武功一。

不德　左氏僖公傳。不穀不德。得ニ罪于母一。

風情　東坡詩。消磨未レ盡只風情。

文莫　下學集云。文莫無智之義也。今按述而篇。子曰。文莫ニ吾猶レ人也。何晏集解。莫無也。文無者。凡言下文皆不上勝ニ於人一。文莫を無智の義とするは、古註の意なり。

步艱　人の行步に堪ざるを、ぶかんと云は此字なり。
あゆみなやむとよむべし。

夫　字彙云。庶人往レ役曰レ夫。往レ役とは、公役につ

かはれて、はたらく者なり。

無骨　源氏螢に、骨なくも、きこえおとして。橋姫に、けはいいやしく、詞だみて、骨なげにものなれたる。細流抄に、無骨なり。俗に、思やりなきことを、無骨なると云ならはし侍り。文選潘安仁西征賦。入屈二節於廉公一若二四體之無一骨。無骨の字は、こゝに出たり。

毿毿　字書。毿毿散毛貌。獸などの毛をふるひちらすは、ふくだむと云べし。源氏紅葉賀に、しどけなく打ふくだみ給へる鬢茎。又幻巻に、少ふくだみ髮のかゝり。

擧動　韻會。擧立也。動也。今振舞とかくは、擧動のよみを借て用ふ。

封袋　物を封じつゝみたる袋を、封袋と云。中にさせる事なくして、無用の所に結構するを、俗に封袋といへり。

風味　宋書何尚之傳。温雅有二風味一。

風流　漢書趙充國傳に出たり。世をのがれ、時をうかゞひて、清潔の風、各條流あるを風流と云と、後漢高士傳の註に見えたり。或輕俊少年をさす事もあり。萬葉集に、風流士をたはれをとよめり。下學集に、風流は風情の義也。日本の俗、拍子物を呼て、風流といふとあり。山谷集註。風流字。或美。或惡。隨二所一用之。意何如耳。

不道　左傳成公十五年傳に出たり。

無道　論語に出たり。

公明　漢書薛宣傳に出たり。註。師古云。分明謂下考問使レ知二清白一也。

分際　漢書儒林傳に出たり。

無朝榜　埃嚢抄に云。六條内府有房卿說に曰、上古は、蒔繪鋼細工等、皆朝家より被レ下レ榜、不堪之者は無レ榜。故に世間に非細工なるものを、無朝榜と云なり。榜は、禁中より下さるゝ題榜なるべし。

分外　困學記聞云。出二魏程曉上疏一。

風俗(ふうぞく)　孝經云。移レ風易レ俗。莫レ善ニ於樂一。呉臨川曰。風者上之化所レ及。俗者下之習所レ成。漢書地理志云。人有ニ剛柔緩急一。音聲不レ同。繫ニ水土之風氣一。故謂ニ之風一。好惡取舍動靜嗜欲。故謂ニ之俗一。

風聞(ふうぶん)　文選。沈休文奏レ彈ニ王源一云。風聞。註。善曰。漢書。尉佗曰。風聞老夫父母墳墓已壞削。賈逵國語註曰。風采也。采ニ聽商旅之言一也。此註の如くなれば、風聞と云は、とりきくと云意なり。

無雙(ぶさう)　ならびなき也。東方朔答客難云。海内無雙。此外天下無双。殿中無双。江夏無双等の語。史漢に多し。

風儀(ふうぎ)　王仲寶褚淵碑文云。風儀與ニ秋月一齊レ明。

不敵(ふてき)　史記高祖本紀。力不敵。

不性(ぶしやう)　佛家には、作用是性とする故に、手足を動すに懶(ものうき)ものを、不性者と云。

諷誦(ふうじゆ)　周禮春官。大司樂諷誦ニ註一。背レ文曰レ諷。以レ聲節レ之曰レ誦。

蹂躙(ふみにじる)　漢書王商傳に出たり。註。師古云。蹂践也。躙轢也。

都(ふと)　神代の卷訓也。

不圖(ふと)　論語。不レ圖爲レ樂之至ニ於斯一。

不意(ふい)　史記荊軻傳。卒起ニ不意一。盡失ニ其度一。

奉行(ぶぎやう)　宋史。臣下ニ奉行一。

不審(ふしん)　韓詩外傳に出たり。

[正誤]　風毒腫(ふうどくしゆ)ほうどくしゆは誤。　眸(ふけらかす)ひけらかすは誤。　文匣(ぶんかう)ぶんこはあやまり。　福祿壽(ふくろくじゆ)ふくろくじゆは誤。　褌(ふどし)ふんどしは誤。　跋(ふんばたかる)ふんばたかるは誤。　風聰　　は誤。　薫籠(ふせご)ふせごうはあやまり。

第三十一　古

[諺]　子ゆゑの闇(やみ)にまよふ　大學云。諺有レ之。曰。人莫レ知ニ其子之惡一。新考是諺ニ意に同じ。歌に、

後撰

人の親の心は闇にあらねども
子をおもふ道にまよひぬるかな

子捨る藪あれども身捨る藪なし　金葉集に、すて子を見てよめる歌、

身にまさるものなかりけりみどりこは
やらんかたなく悲しけれども

琥珀塵をすへど穢るを吸ず　磁石針をすへど曲れるを吸ず。三國志云。琥珀不取腐芥。磁石不受曲針。

柱に膠する　史記藺相如云。王以名使括。若膠柱而鼓瑟耳。括徒能讀其父書傳。不知合變也。

辭多ければ品少し　源氏河海抄に、辭多品少とあり。品とは、威儀の品節なり。凡詞多く、急に輕々しくものいふ者は、品節少しと云事なり。易大傳云。

吉人之辭寡。躁人之辭多。

蹊なくて人を呼ぶ　史記李廣傳。桃李不言。下自成蹊。是徳ある人は、言説をからずして、人おのづから歸服する喩也。諺こゝに本づけり。

故郷忘じ難し　檀弓曰。君子樂。樂其所自生。禮不忘其本。古之人有言。狐死正丘首仁也。諺の意と同じ。

氷を鏤め水に畫く　山谷詩。鏤氷文章費工巧。註。鹽鐵論曰。內無其質而外學其文。若畫脂鏤氷。費日損功。

氷は水より出て水より寒し　荀子曰。學不可已。青出於藍而青於藍。氷生於水而寒於水。新増

胡馬北風にいばふ　文選二十九。古詩云。胡馬依北風。越鳥巣南枝。是は、胡馬は北狄の馬なれば、北風をしたひ、越鳥は、南國の禽なれば、南枝に巣ふ。皆其本を忘れざる喩也。新増

胡椒丸呑　朱子曰。大凡讀書須是熟讀。熟讀了自精熟。精熟後理自見得。如喫果子一般。劈頭方咬開未見滋味。便喫了須是細嚼教爛。則滋味自出方始識得這箇是甜。是苦。是辛。始爲知味。語類是果を喫する事を喩にして、義理を咬碎て味を知べしとなり。誠に世話の胡椒丸のみと云事故有哉。

言語道斷　法華經に出たり。朱子。陸象山の事を稱して、言語道斷。心思路絕。といへり。新攷

故鄉には錦を飾る　史記項羽本紀云。項羽曰。富貴不レ歸ニ故鄉一。如ニ衣レ繡夜行一。誰知レ之者。漢書。繡作レ錦。師古曰。無ニ人見レ之。不ニ榮顯一矣。後漢景丹傳亦有ニ此語一。南史劉之遴傳。令ニ卿衣レ錦還レ鄉。又唐魏元忠傳。有ニ衣レ錦晝遊之語一。歌に、

後撰　讀人不明

紅葉をばわけつゝ行ば錦着て
家に歸ると人や見るらん

心の師とはなれ心を師とせざれ　涅槃經第二十八卷云願作ニ心師一。不レ師ニ於心一。新考

後悔さきにたゝず

古今　閑院

さきにだゝぬくいのやちたびかなしきは
ながるゝ水のかへりこぬなり

奥儀抄曰。うせにし人にさきだゝぬを、後悔さきにたゝぬによせて、くいたるなり。新考

心の鬼が身を責る　佛說正法念經云。閻羅獄卒。非ニ實有情一。以ニ衆生妄業力一故見レ之。佛已演說なり。地獄も、天宮も、鬼畜も、修羅も、皆是一心の所爲也。

蝴蝶の夢　莊子逍遙遊篇云。莊周夢爲ニ蝴蝶一。栩栩然不レ知。周之夢爲ニ蝴蝶一。蝴蝶之夢爲レ周。新考

堀川百首

百とせは花にやどりてすごしてき
この世はてふの夢にぞありける

功なり名とげて身退くは天の道　老子經云。功成名遂。身退天之道。新考

狐狼野干　四字連續。法華經に出たり。野干と、狐と同じからず。野干は形小尾大也。能木に登る。狐は形大にして木に登る事あたはず。祖庭事苑云。野干梵云ニ悉迦羅一。又名ニ夜干一。或名ニ射干一。聲如レ狼。

［俗語］建立　俗に、宮寺など營作するを建立と云。此

字國語晋語に出たり。又漢書郊祀志云。建立社稷。

故實　國語に出たり。註。韋昭云。故實。故事之是者。

入骨髓　史記秦本紀に出たり。

故老　困學紀聞云。出書無逸註。

事託　事物を以て、人に託して遣を、事託といふ。

言傳　言を傳へて、我思を人にいひやるを言傳と云。事託、言傳、混じて一にすべからず。文選高唐賦。傳言羽獵。魏文帝與鍾大理書。傳言未審。是みな言傳の意也。

榜　船をやる事也。字彙云。進船也。

こうずる　俗に、病などのつのるを、こうずると云。枕草子に、ものゝけにこうじにけるにやとあり。困の字也。くるしむ心也。

混亂　又こた〳〵と云も、此字也。字彙。混水雜貌。俗に、物の混亂してまじはる事を云。

手本　貼を借に云詞也。韓文柳氏墓誌にあり。

後悔　詩經江有汜云。之子于歸不我以。其後也悔。

巨細　張茂先鷦鷯賦。巨細舛錯。朱子大學序云。詳略相因。巨細畢擧。

今朝　詩經白駒篇云。以永今朝。

困窮　書經舜典云。四海困窮。天祿永終。

勉旃　漢書楊惲傳に出たり。師古云。旃之也。

故迹　唐大宗詩。沈沙無故迹。

狐疑　楚辭。猶豫而狐疑兮。韻府曰。述征記。河氷合。須狐聽而行。又漢書文帝紀註。師古云。狐之爲獸。其性多疑。每渡氷河。且聽且渡。故言疑者而稱狐疑。今下郎の詞に、物の價を疑事を、こぎると云。狐疑の字也。

牛角　物の相並で優劣なき事を牛角と云。法華經譬喩品。首如牛頭。科註に、我見に依て邊見を起す、牛頭の兩角の如きのみ。牛角と云事、是を證とすべし。

劫を歷　梵書。以一世爲一劫。俗に、時を歷と云

は、世を歷也。又碁の詞に、劫をつむと云事あり。韻會曰。說文。劫人欲ㇾ去。以ㇾ力脅止曰ㇾ劫。人のいたむべき事を云のゝしるなどを劫に取といふも、碁の手よりいへり。源氏末摘花に、おもき劫に、御心の中におぼしいづ。

無ㇾ越（なごし）　野槌に云、八雲抄に、事の外なりとあり。河海には、無越とも、閑雅ともかけり。かぎりもなしと云義なり。閑雅は、迷玄の義に通ずべし。

沽却（こきやく）　却はつけ字也。破却。滅却。忘却などゝ云が如し。物をうる事を云なり。下郎の詞に、うり沽却すと云ば、重言なり。

興行（こうぎやう）　潘元茂九錫文。俾二民興行一。

扈從（こせう）　司馬長卿上林賦云。扈從橫行。師古云。扈從隨侍之義。又留靑日札云。言下隨二從天子一逐ㇾ獸橫行上也。

御前（ごぜん）　蔡邕獨斷云。天子所ㇾ在曰二御前一。今俗に、我より位高き人に對しては、なべて御前などゝ云は、借上の詞にて、尤誤なるべし。中華にては、天子の服を御服と云、書を御書と云。皆四海を統御する義を取て、天子ならねば、御の字を不用。

虎口（ここう／こち）　莊子盜跖篇。孔子曰。疾走料二虎頭一、編二虎鬚一。幾不ㇾ脫二虎口一哉。今俗に、危場に臨を、虎口に臨と云。又軍壘を虎口と云。

口才（こうさい）　世說云。大叔廣長二口才一。

滑稽（こつけい）　下學集に、滑稽は、利口の義也といへり。史記樗里子傳。滑稽多ㇾ智。索隱云。滑音骨。稽音雞。鄒誕解曰。滑亂也。稽同也。謂下辨捷之人。言ㇾ非若ㇾ是。言ㇾ是若ㇾ非。謂三能亂二同異一也。又崔浩は酒器也と註し、姚察は俳諧の義にとれり。並に史記本注に詳也。されども、同異を亂ると云注しからんかし。今俗に、誤て滑稽をこつへいと唱ふ。

黑甜（こくてん）　靑箱記云。晝寢爲二黑甜一。東坡詩云。三杯軟飽後。一枕黑甜餘。

齁齁（とうく）　寢て鼻息の高きを云。東坡詩。鼻息齁齁自成ㇾ曲。

懇志 陸宣公集。難レ逢二懇志一。

後使 朱子文集。以俟二後使一。

間者 漢書文帝紀。廼者帝紀。乃者帝紀。近者七啓。頃者宗一書。

浚 字彙云。水調粉麪也。

〔正誤〕是許ばつかり、是ばかり、並無二虚空一いは誤。混雜や、こや、並誤。是程わろし。御覽有ろしやる、並誤。皁偏ござるへんは、大に誤也。御料人ごう、並誤。曆あやまり。是奴いつめは誤。拳は誤。牛蒡ばう、並誤。強飯やまり。特牛ていのうしは誤。

第三十二 江

〔註〕猿猴が月をとらん 愚人のおろかなるにまかせて、身の分に及ぬ事をなして、却て己が禍となる喩なり。僧祇律云。佛告二諸比丘一。過去世時。波羅奈城。有二五百獼猴一見二樹下一有レ井。井中見レ月。共執二樹枝一手尾相接。入レ井取レ月。枝折一時死。この心を歌に、

夫木 土御門院

月かげに命をかふる猿よりも
しづみはてぬる我身なりけり

笑の中の劒 唐書云。李義府貌足恭與レ人言嬉怡微笑。而陰賊褊忌著二于心一凡忤二其意一者皆中二傷之一。時號二義甫笑中有レ刀。諺これより出たり。新考

夫木 衣笠内大臣

何事をおもひけりともしられじな
ゑみのうちにもかたなやはなき

同 公朝

手にとれば人をさすてふいかくりの
ゑみのうちなるかたなおそろし

枝をならさぬ御代 加の字の部にくはし。

鉛刀一割 此語、後漢書に出たり。又文選。左大冲詠史詩。鉛刀貴二一割一。註。東觀漢記。班超上疏曰。臣乘二聖漢威神一冀俲二鉛刀一割之用一。註。[illegible]曰。只[illegible]鉛爲レ刀。只可二一割一不レ可二再用一。

【俗語】緣起(えんぎ)　神社佛寺の故實を記せるを、俗に緣起と云。緣て起れる事を記せる故にや。緣起の字は佛書に出たり。楞伽經第二に、佛說二緣起一とあり。梁任昉文章緣起一卷を作る。秦漢より以來、文章名目の始を記せり。

悅喜(えつき)　韓文。民皆悅喜。漢書皇天說喜。

遠慮(えんりよ)　論語云。人無二遠慮一。必有二近憂一。

榮西(えいさい)　俗に傳ふ、建仁寺の榮西、後鳥羽院文治三年四月、宋朝に赴き、同建久二年四月、宋より歸て禪宗を弘む。土御門院朝に、平政子、鎌倉の壽福寺を立て居しむ。同建仁二年六月、建仁寺を立て禪宗を弘めんとす。上梁の日に臨で、大なる材木上らざりければ、此僧、人夫に下知して、我名を呼て引あぐべしと云ければ、虹梁故なく引上たり。これよりおもきものを引時、えいさい〱と唱ふる詞始る。此說、元亨釋書にのせず、其外の書記にも見えずと云とも、俗傳如レ此。

鹽梅(えんばい)　書經說命に出たり。羹を和するには、必鹽と梅とを用るなり。是を鹽梅といふ。今俗あやまりて、あんばいといふ。說命の意は、鹽梅適中して羹を調ることく、臣下の君に事るには、剛柔可否相濟て、其德を成に喩ふ。

依估(えこ)　よりたのむとよめり。佛經に多し。

會釋(えしやく)　心に會得して、解釋するなり。

榮耀(えいよう)　文選。曹子建雜詩。榮耀難二久恃一。註。邊讓章華臺賦。榮耀二春華一。

榮華(えいぐわ)　班孟堅答賓戲云。朝爲二榮華一。夕爲二顦顇一。

會得(ゑとく)　邵子詩云。此景分明誰會得。

【正誤】夷(えびす)えべすは誤。穢多(ゑた)ゑつたは誤。烏帽子(えぼし)よぼしは誤。淵底(えんてい)ゑんてんはあやまり。

第三十三　天

【諺】天(てん)の與(あた)ふるをとらざれば、却て其とがをうく。

史記陳餘傳。天與不レ取。反受二其咎一。索隱云。此辭出二國語一。說苑云。天與不レ取。反受二其咎一。時至不レ迎。反受二其殃一。天地無レ親。常與二善人一。逸周書云。天與不レ取。反受二其咎一。當レ斷不レ斷。反招二其亂一。新考

手のうらをかへす　輕く變改する事を云。孟子曰。以齊王由反手。註云。反手言易也。新考

天にあらば比翼の鳥地にあらば連理枝　白氏文集長恨歌曰。在天願作比翼鳥。在地願爲連理枝。これ唐玄宗の楊貴妃と、ちかひをなせし事を作れる詞也。

天知地知　後漢書曰。楊震爲東萊大守。道經昌邑。震所擧荊州茂才王密。密時爲昌邑令。謁見至夜懷金十斤以遺震。震曰。故人知君。君不知故人何也。密曰。暮夜無知者。震曰。天知。神知。子知。我知。何謂無知。密愧而去。氏族排韻大全に、天知、地知、子知、我知とす。俗語こゝに本づけるにや。

貞女兩夫にまみえず　說苑。王歜曰。忠臣不事二君。貞女不更二夫。王歜の事、說苑に詳なり。今こゝに略す。

鳥雀枝の深きにあつまる　杜子美詩。鳥雀聚枝深。

新考

鄭家の奴は詩をうたふ　事文類聚後集云。鄭玄家。奴婢皆讀書。一婢不稱意。使人拽著泥中。須臾一婢來問曰。胡爲乎泥中。詩經邶風式微篇の詞也。答云。薄言往愬。逢彼之怒。柏舟篇の詞なり。諺こゝに出たり。鄭玄は、後漢の大儒にして、所著の書多し。委くは、本傳に見えたり。

天長地久　老子經の文なり。

【俗語】

丁寧　漢書谷永傳云。以丁寧陛下。師古云。丁寧謂再三告示也。字彙云。丁寧屬付諄複也。周伯溫曰。俗作叮嚀非。杜子美詩云。舊語太丁寧。邵康節丁寧吟云。人無忽略。事貴丁寧。忽略近薄。丁寧近誠。

天罰　書經泰誓云。恭行天罰。

手　俗に、手跡を手と云。漢書郊祀志。天子識其手。註。師古云。手謂所書手跡。是を以て見れば、もろこしにもかくいへるなり。

覿面　儀禮聘禮。於君謂之覿。於卿謂之面。爾雅釋詁。覿見也。疏云。覿謂覿者下見上也。今はた

だ、直にまみゆるを覿面と云。

頂戴　法華經に出たり。

天魔外道　佛經ニ天魔外道。恐怖毛竪。

てゝご　父をてゝごと云。大鏡に此詞あり。てはちと通す。ごは御也。父御と云意なり。

天性　漢書賈誼傳。少成若ニ天性ー。又俗に、天性自然と連稱す。王子淵洞簫賦。因ニ天性之自然ー。

天然　漢書谷永傳云。陛下天然之性。

天變　漢書劉向傳。天變見ニ于上ー。

調度　野槌に云、調度とは、烏帽子懸のやうなるものを云と云人あれ共、只一切の手廻の道具を云なるべし。源順和名抄にも、調度部を立て、諸の道具を載たり。然ば、一切の道具を、皆調度と云と心得べし。顏師古が漢書注、蓄ニ調度ーと云も、一切の器也。徒然草に、からのやまとのえならぬ調度、源氏橋姫に、御調度などうるはしくして多かりけり。

打擲　字書。打擊也。擲拋也。法華經。衆人或以ニ杖木瓦石ー而打ニ擲之ー。杖木には打と云。瓦石には擲と云。今はたゞ打事をのみ打擲とせり。

條　韻會云。說文。條小枝也。師古曰。凡言レ條者。一一而疏ニ舉之ー。若ニ木條ー焉。一々事をしるしあぐる事、木の枝あり。小枝あるが如くなれば、條々と云也。

梃　韻會曰。說文。梃一枚也。徐曰。梃獨也。梃然勁直之貌。集韻。木片也。今墨蠟などを數ふる時、一梃二梃と云。

者　中華俗語。稱ニ此箇ー爲ニ者箇ー。稱ニ此裏ー爲ニ者裏ー。並皆さす所あるの辭なり。又改用ニ這字ー。祖庭苑曰。這當レ作レ者。指レ事之辭也。俗に、者と云も事を指の辭なるべし。ていればとは、といへればと云意を略せり。もろこしの書の內、天子の勅詔に、多く者の字を用ゆ。上の文をうけたり。近代日本の俗、まなびそこなひて、下の句の上にかけり。あ

やまりなり。

出葉（てには） 卜部兼倶神代巻抄に云、てにはとは、出葉と書也。葉なき時は、何の木何の草といふ事を辨へず。葉出る時に至て、其名を知か如し。漢字の解し難きに、倭字の出葉を付れは、其葉あらはれやすし。たとへば、葉出て萬木の名を知が如し。

展轉（てんく） 詩經に出たり。漢書師古註。展轉謂二移二動其心一。

喋喋（てふく） 俗に、多言なる者を喋々と云。史記張釋之傳。豈斅二此嗇夫喋喋一利口捷給哉。○索隱云。漢書作二喋喋一。多言也。

遞代（てつだい） 人に代て事を助る也。

田父（でんぷ） 高啓詩。誼語不レ過二農夫田父之客一今俗に、物の健なるを田父と云。

朝議 孫復仁聞中詩。朝議恒嫌。今俗に、人の善惡によりて、朝議のよいあしきなど云は、此字なるべし。

方便（てだて） 波の字の部にくはし。

調伏（てうぶく） 唐文粹。身口意三業二調伏一。

傳受（でんじゆ） 元史李俊民傳。得二河南程氏傳受之學一。

正誤 [illegible]、手鼓糸綿引、的弓で[illegible]と、逆で[illegible]出来は[illegible]傀儡[illegible]田楽[illegible]啄木鳥に[illegible]鐵橋に[illegible]

諺草巻之五終

諺草卷之六

貝原好古纂輯

第三十四　安

諺　麻につるゝ蓬　荀子勸學篇曰。蓬生麻中不扶而直。孟子滕文公下篇正義云。諺云白沙在泥不染自黑。蓬生麻中不扶自直。○大戴禮云。蓬生麻中不扶自直。白沙在泥與之皆黑。史記三王世家亦有此語。歌に、新考

家集　家隆

しかりとて直き心も世にたゝず
まじるよもぎのあさましの世や

夫木　俊成

直しとて麻のよもぎはなにならず
みだれてもあれ野邊のかるかや

新勅　平泰時

世の中の麻はあとなくなりにけり
心のまゝのよもぎのみして

惡事千里　北夢瑣言曰。好事不出門。惡事傳千里。

惡事身にとまる　春秋傳云。善善長惡惡短。惡惡止其身。善善及子孫。新考

怨は恩で報ぜよ　老子經云。報怨以德。諺これに本づけり。

仰で唾はく　四十二章經曰。惡人欲害賢者。仰天而唾。唾不汚天。還汚己面。諺こゝに出たり。

青きは藍より出て藍より青し　古の字の部にくはし。

家集　西行

鶯のふるすよりたつほとゝぎす
あゐよりもこき聲の色かな

網なくて淵な望そ　抱朴子曰。夫不學而求知。猶願魚而無網焉。心雖勤而無獲矣。漢書曰。臨淵而羨魚。不如退而結網。是等諺の出所也。

飴ねぶらする　是は内心には、人を害せんとして、口には甘言を以て交る事の喩なり。大學衍義日。

憎以二甘言一而陰陷レ之。俗語の意に叶へり。

わふは別の始　佛書に會者定離の説あり。是より出たる諺なり　白氏文集曰 合者離之始 樂兮憂所レ伏

家隆

壬生二品集

いつのまに年月のこととおもふらん
あふはひとよのけさのわかれを

頭剃より心をそれ　六道講式云。適剃レ頂不レ剃レ心。染レ衣不レ染レ心。可二恥恥一。

慈鎭

何ゆゑにすてける身ぞと折々は
すがたにはおよすみぞめのそで

秋茄子嫁にくはするな　歌に、

夫木

秋なすびわさゝのかすにつけまぜて
よめにはくれじたなにおくとも

鼬の目に鼠ゐまらず　歌に、

散木集　俊頼

思はんとたのめし事はあみのめに
たまらぬ風の心なりけり

俗語

天晴　舊事紀に出たり。天照大神天窟より出座の時、高天原及葦原中國おのづから照明なる事を得たり。この時に當て天初て晴。因て阿波禮と云。注に意は天晴也。今に天晴といふ詞あるは、是より出たり。古語拾遺にも、天晴といふ事を記せり。是と同じ。

阿那　舊事紀の注に、古語に事の甚切なるを皆阿那と稱すとあり。

阿痛　俗に痛む事のつよきをあいたと云。此字なるべし。漢書東方朔傳註。師古云。今人痛甚則稱レ阿。又東方朔傳。不レ勝レ痛呼レ謈。集字師古註。自冤痛之聲也。

難レ有　法華經。文殊師利白レ佛言。世尊是諸菩薩甚爲レ難レ有。俗に忝事を難有と云。然れども官家には此詞をつかはれず。勅語をも忝とは云。難有とはいはず。

阿房（あばう）　漢書曰。楚起二章花之臺一而黎民散。秦興二阿房之殿一而天下亂。或説に、秦始皇阿房宮の大殿を作て、民をなやまし、終には天下をも失ふ。是至愚のわざなれば、日本にて、人のおろかなるをあはうと云は、こゝに起れりと云。さもあらんかし。

あふさきるさ　縦横と書、左様右様也。又八雲御抄に、とするもかくするも也。

春はたゞ山路を行も野を行も
花ぞにほへるあふさきるさに

あゆる　物の落る事を俗にあゆると云。枕草子に、すゞろにあせあゆるこゝちぞしけるとあり。あせのながるゝ事なれば、むかしよりかくいへるなり。

あすこ　俗に、かしこの事をあすこと云は誤なるべし。あしこと云べし。枕草子に、あしこまでもゆきつかざるらめとあり。あしこはかしこなり。

唉（あい）　字彙云、音哀。慢譍聲。今俗、人のよぶに、あいと答るは此字ならん。

あたり　邊の字にて、ほとりの事也。

神垣のあたりとおもふにゆふだすき
おもひもかけぬかねの音哉　　和泉式部

安穩（あんをん）　魏志云、海内安穩。

甘言（あまいこと）　俗に、人を僞り欺く言を甘言と云。詩經云。盗言孔甘。左傳云。幣重而言甘誘レ我也。これを以て見れば、もろこしにもかくいへり。

穴賢（あなかしこ）　下學集に曰、上代は倭漢共に家作る事をしらず。人々穴の中に居故に、恙蟲人をさす。故に本朝書札往來相遂めて穴賢と云。居所の穴かしこくふさいで、恙をふせぐべしと云意なり。恙とは、宅の事を云。説文に見えたり。野槌に云、恙と云字は、戰國策に出たり。何事もなきかと祝する詞なり。然れば世俗の消息の末に、穴賢とかくは、其無事なるを、めでたしと云意なるべし。書翰の終に、自嗇保嗇自愛至祝珍重などゝ書が如し。又所によりて、穴かまへ

てと云義も有べし。女文のをはりに、かしくとかくも、穴かしこの略語なり。今按ずるに、舊事紀云、古語に、事の甚切なるをあなと云。又日本紀に、可畏の字をかしこと訓せり。あなかしこと云は、甚可レ畏と云事にて、今書札の終に、恐惶とかくと同意ならん。穴賢と云は鑿説なるべし。

安堵（あんど）　史記高祖紀。諸吏人皆案レ堵如レ故。通鑑集覧應劭云、堵牆也。人皆安然如二墻堵之不一レ遷動一也。漢書作二按堵一。師古云。言レ不二遷動一也。

周章（あはつる）　文選靈光殿賦。俯仰顧眄。東西周章。註。顧瞻周章言三驚視一也。孔子家語五儀篇。周章遠望。字彙。周章惶懼也。不レ安之貌。法華經云。周障惶怖。是等の說によれば、あはつる義なり。

愛敬（あいきやう）　俗語にいふ愛敬は、佛者の言に本づけり。儒家の說に異なり。

求食（あさる）　萬葉集の訓也。文選司馬遷書。搖レ尾而求レ食。法華經處處求レ食。下學集に曰、鳥の食を求るを求食と云。蓋日本の俗の世話也。

夫木　　定家

春はたゞみなれぬ草もなかりけり
さわらびあさる山のたよりに

能因が歌枕に、海人のかいつものとるをば、あさりすと云。徒然草に、ほらぬ所もなく山をあされども、なかりけりとあり。山にても海にても、食ふべきものを求るをば、鳥にかぎらず、求食と云べきにや。下郎の詞にあづると云。あせると云は、求食なるべし。

荒増（あらまし）　又曰、有増とも書。粗と云意なり。倭の俗語也。

淺増（あさまし）　是又倭の俗語なり。古歌に、

あさましや日かずゆくともおもほえて
春もこよひになりにける哉

愛立（あいだて）　俗に、思念の心なきを、愛立なしと云。書經。伊訓立レ愛惟親。立レ敬惟長。始二于家邦一終二于四海一。愛敬の立事、家より始りて如此ほどこし行時は、

四海皆同胞なり。不仁にして愛相なきを、愛立のなきと云事、故なきにあらず。源氏螢の巻に、愛たてなき御事どもとあり。

無二安倍一　物の脆き事なり。竹取物語に、安倍多と云もの、赫夜姫にめでゝ火鼠の皮を求けるに、試んとて火の中に入けるに、めら〳〵ともえけるより、安倍なしとはいひそめけるとあり。源氏繪合巻に、安倍多がちゞのこがねをすてゝ、火鼠のおもひ片時きゝたるもいとあへなし。抄に、このあへなしも安倍なしなり。河海に無敢字を用ゆ。

安否　禮記文王世子に出たり。

安排　莊子曰。仲尼謂二顏回一曰。安排而去。化乃入二於寥天一一。郭象曰。安二於推移一而與レ化俱去。故乃入二於寂寥一而與レ天惟一也。類書纂要云。安排字出二國語一。排定也。人生窮達禍福已皆定矣。我但安二其所一レ排。隨二造化一而去也。

踠　班固東都賦。馬踠二餘足一。註。踠屈也。古來あがくと訓せり。

相對　王文考靈光殿賦。跽而相對。

無狀　史記夏本紀。鯀之治レ水無レ狀。索隱云。言レ無二功狀一。

分野　下學集に、分野は有樣の義なり。日本天台宗の讀習也。弘決第一。其地分野とよめり。文選魏都賦、列宿分二其野一二十八宿。四方に配して九州おのおの司る星紀あり。是を分野と云。分野をありさまとも讀べし。

浮岩　古今集の歌に、

素性法師

いつまでか野邊に心のあくがれむ
花しちらずば千代もへぬべし

榮雅抄に云、あくがるゝは、おちこちゆくなり。浮岩とかく。

あどうつ　俗に、雷同するを、あどうつと云。

さぞといはゞ誠にさぞとあどうちて

なやそやといふ人だにもなし

【正誤】饒　きやうあんは、あまあすふあにあにきとは、兄君と云事なれば、りは兄に通ず。兄人に同じ。云は意外也。又兄君人と云も同にくし。たゞ見にてしかるべし。西風東風　こちら、こつち、あちら、彼方、こちら此方と同意、彼君とは誤。あたりはし　邊の字をあたりとよむ、又とりともよめば重言なり。集　又あつまるまつふるあたあ　姉には誤。いは　あにこたまるあきほきにつまあとげつと云ふ。あはさかり　隠には　汗衛には誤。跡　月は同にくし。隘は誤。行　あるく　は誤。

第三十五　左

【謎】三年三月　俗説に、應神天皇は三年三月にして誕生ましく〳〵ける故、三年三月と云世話ありといへり、此說非なり。日本紀に據て考ふるに、仲哀天皇八年己卯のとし、天皇神功皇后と共に筑紫に幸ましく〳〵ける。九年庚辰のとし二月、天皇忽になやみ給ふ事ありて、翌日にかくれましぬ。そのとし神功皇后は、御懷姙ながら、天皇の仇をむくいせ給はんため三韓を征し給ふ。物ごと御心のまゝにて、三韓も降服せしかば、御歸朝ましく〳〵て、十二月十四日應神天皇を筑紫の蚊田にてうみまし給へり。あくる辰巳のとし春二月、神后皇子と共に京に上らんとし給ふ時、皇子の庶兄麛坂王忍熊王など軍を起して、神后皇子を害せんとせられしが共、終に打負て皆死せり。かゝりしかば、神后皇子共に難なく京に上り給ふ。則このとしを神功皇后の元年とす。二年壬午のとしの冬、仲哀天皇を河內國長野陵に葬り奉らる。かく三韓の大敵を攻したがへ、邦內の逆徒を打亡し、天下を掌に治め給ひしかば、あくる三年癸未のとし正月三日、譽田皇子を立て太子とし給ふ。譽田皇子は即應神天皇の御事にして、神とあらはれ給ひし後は、八幡大神と申奉る是也。されば譽田皇子は己卯としの正月より、神后の胎內にやどらせ給ひ、そのとし生れ給ふといへども、實に天下の主と定り給ふ事は、癸未のとしの正月三日なれば、これを三年三月と

云。庚辰のとしより壬午のとしまで三年、癸未の年は春立て三日なれば也。これを云あやまりて三年三月といひ、殊に前後三年三月にして譽田皇子うまれ給ふと云。皆不稽の誤なり。新考

去者は日々にうとし　文選古詩云。去者日以疎。生者日以親。去とは死者也。生とはながらへある人なり。

寒き時にきたなき物なし　饑時に味なき物なし。史記秦本紀。寒者利二短褐一。而饑者甘二糟粕一。諺と同考なり。

猿に烏帽子　是は形は人にして衣冠も正しけれど、心は畜の如くに無道なると云喩也。史記項羽紀曰。說者曰。人言楚人沐猴而冠耳。諺に相似たり。

猿も木から落つる　淮南子云。猨狖顚蹶而失二木枝一。新考史記云。智者千慮必有二一失一。是猿も木から落ると云こと也。

櫻は花にあらはるゝ

金葉　源　頼　政

深山木のそのこずゑとも見えざりし
さくらは花にあらはれにけり

三界無安　法華經。三界無安。猶如二火宅一。

俗語

瑣尾　浪人のさびたるなどゝいふは此字なり
詩經旄丘云。瑣兮尾兮流離之子。註云。瑣細尾末也。

騷動　漢書元帝紀。元元騷動。

才枉　枕草子に、物がたりなどするに、さし出て我ひとりさいまぐるものとあり。我才覺をあらはして、人を云まぐる事也。

左遷　史記韓信傳に出たり。漢書張蒼傳註。師古云。是時尊レ右而卑レ左。故貶レ秩爲二左遷一。

在所　漢書平帝紀に出たり。

掃除　周禮夏官に出たり。除なぢの音によむ事よろしからず。

沙汰　杜子美上二韋左相一詩。沙二汰江河濁一。集註云。沙汰以レ篩貯レ沙。去二其細一而存二其大一。曰二沙汰一。この意は、理非分明に辨る事沙を汰て細なるを去、大なるをさむる如くにする事也。無沙汰と云

も理非を辨ぬ體也。俗に流説を以て沙汰とするは誤れり。

流石　晉孫楚隱居せんと欲して、王濟に謂て、當に石に枕し流に漱んとすといはんとして、誤て石に漱て流に枕せんとすといへり。王濟が曰、流は枕にすべからず、石は漱べからず。孫楚が云、流に枕するは其耳を洗はんとす。石に漱は其齒を厲んと欲す。〇蒙求に孫楚漱石とあり。本晉書に出たり。是誠にやさしき答なり。こゝを以て志のいみじき事を、さすがと云と或説にいへり。さすがは和語なり。流石を用て、さすがの本字とするは能牽合せり。

不祥　日本紀に、不祥の字を、さがなしと訓せり。是は幸なき事を云。又惡の字を、さがなしとよませたり。世の中のさがなき、人のさがなきなど云は惡の字也。

澤女澤女啼　神代に、啼澤女命あり。口訣に云、凶禪也。澤多也。直指抄に云、今の人泣涕するを、さめ〴〵となくと云。

在在處處　劉禹錫詩。在在處處神物護持。

催促　杜子美詩。走卒亂世相催促。

三千世界　法華經云。三千世界。

彷彿　楚辭悲回風篇云。存彷彿而不見。朱子註。謂形似也。

前驅　詩經。伯也執殳爲王前驅。又先驅の字をも用。史記司馬相如傳。相如至蜀。縣令負弩矢先驅。

相違　左傳云。非相違也而相從也。陶淵明集。世與我而相違。杜詩。嬾朝眞與世相違。

三從　儀禮喪服篇云。婦人有三從之義無專用之道。故未嫁從父。既嫁從夫。夫死從子。從とは其敎令に從ふ也。源氏藤袴に、女は三に從ふものにこそあなれ。俗に五障三從と云つゞく。然れ共五と云事は、法華經に出て、異端の意なれば、是と同じからず。

鑽仰　論語子罕篇云。顏淵喟然嘆曰。仰之彌高。鑽

彌堅。鑽仰と云事、これに本づけり。

三昧　名義集曰。三昧此曰二調直定一。又云二正定一。遠法師曰。夫稱二三昧一者何。專レ思寂レ想之謂也。眞挪代醉編曰。道家云二貞一一。儒者云二致一一。釋氏云二三昧一。其義通也。類書纂要云。得二妙處一曰レ得二三昧一。國史曰。長沙僧懷素自言得二草書三昧一。俗に他念なき事をいへり。

相好　佛氏三十二相。八十種好の說あり。法苑珠林千佛篇にも現相部を立たり。

三業　佛氏身口意の三を三業と云。俗に、さんでふひそむと云は、潜二三業一也。

三寶　孟子讀侯之寶三。土地人民政事。是儒家の三寶なり。老子我有二三寶一。一曰慈。二曰儉。三曰不レ爲二天下先一。慈故能勇。儉故能廣。不三敢爲二天下先一。故能成レ器長。是道家の三寶なり。六韜云。大農大工大商是謂二三寶一。是兵家の三寶なり。佛家には、佛法僧を以て三寶とす。三寶の說各異なりといへ共、土地人民政事なくんば、人世一日も立がたければ、是ぞ誠の三寶なるべき。

創草　論語。子曰爲レ命裨二諶草二創之一。註、草略也、創造也。謂レ造二爲草藁一也。今物の始の事を草創と云。

左道　禮記王制に出たり。註。左道謂二邪道一。漢書王商傳註。左道僻左之道謂レ不レ正也。人道は右を尙ぶ故、正しからぬ術をば左道と云。俗に邪なる事を左道と云も、尤據ある詞なり。

左禮　俗に、禮に違たる戲を左禮と云。左道左遷など云が如し。左を賤んずるの義也。然れ共官途に左を上とするは、古來の通義也。源氏帚木に、ざればみとあるも左禮也。

嘸　俗に、さぞと云は、尤と領承する意也。字書に、此字ありて此義なし。尤と同心して異儀なき時に、さぞと答る故、從二口無一義をとれり。

候　釋名。候護也。伺二候諸事一也。俗書に、事の末に必候字を用ゆ。うかゞひまもる意なるべし。埃嚢抄に、消息にも人の詞にも、事にふれてはなに〳〵

と候とかくは禮なり。人にしたがひて、命をそむくまじき心がまへを常にする也。云たる事の人の氣にあふや否と待意也。はんべると云も、侍の字にて、候と同じ。是は候を待義とす。

草稾 史記屈原傳及漢書孔光傳に出たり。日本にて草子と云も、草稾の義をとれり。韻會 文稾曰レ草。草刱之本也。

皆悉 萬葉集の讀なり。さながらは、そのまゝと云意なれば、悉と云字を用て然らん。

定 家

さればこそとはじと思ひし古郷に
さける朝がほ花もさながら

耳語 萬葉の讀なり。耳語も又さゝめくとよむべし。韓信傳に出たり。

相場 賣買の貴賤を相場と云。相は、かんがへ見る義也。場は市場也。市場の利日々相易る故、其場を料簡して價を定むるを相場と云。

算考 俗に、物をはかり考ふるを、さんがうすると云。此字也。

作法 左氏襄公傳云。君子在レ位可レ畏。施舍可レ愛。進退可レ度。周旋可レ則。容止可レ觀。作事可レ法。

才幹 晉書云。有二當世才幹一。

早世 後漢書。先帝早世。

再三 易經に出たり。

造作 蜀都賦。造作者以爲レ程。是造り作の意也。今俗に、人の惠贶に預る事などを、造作になると云は、意義聞えず。

參會 漢書韓持國傳に出たり。師古云。三人相遇故曰二參會一。今俗には、まじはりあふと云義を用て、人に出會するを參會と云。

懺悔 圓覺經疏具云。懺悔此言二悔過一。梁武帝詩。蘭湯浴二身垢一。懺悔淨二心靈一。

肴 廣韻云。凡非レ穀而食者曰レ肴。或作レ餚。通作レ殽。今俗には、海味の事をのみ肴と云とおもへり。

廣韻の說の如くなれば、獸魚菜蔬共に肴と云べし。

さかなと和訓せしは、さけのなかだちの中略にや。

相應　嵇康養生論云。凡所レ食之氣。蒸レ性染レ身。莫レ不二相應一。

慚愧　增一阿含經云。佛告二諸比丘一。世有二二妙法一。擁二護世間一。所レ謂有レ慚有レ愧也。諸比丘若無二此二法一。世間則不レ別二父母兄弟妻子知識尊長大小一。即與二畜類一同等也。是故比丘當二習有レ慚有一レ愧。

鬆　物のもろき事を、さくなと云は此字也。損軒云。字書髮亂貌。今案群書之中稱二輕鬆一者多矣。如二土地輕鬆食品輕鬆木理輕鬆一是也。蓋輕軟易二分決一之意。今倭語所レ謂裂是也。

[正誤]　座興　しやけうは誤。一座の興と云事也。　草履　じやうりは誤。　閑寂　さみしいは誤。　下墨　物を評論して見る事を下墨て見ると云。番匠が直を見るとて、墨斗の糸をさげて見るにたとへたり。さげしみて見る、又さげすみて見る、並に誤。　左禮言　左禮といふ事は前に見えたり。じやれこと、又あしやらと云。共にあしゝ。　珊瑚樹　さんごじは誤。　鮭　しやけは誤。　雜喉　じやこは誤。　貲布　さいみは誤。　左義長　さきつちやうはあやまり。　豇豆　さゝぎは誤。　三絃　しやみせんは誤。

第三十六　諺

[諺]　金言耳に逆ふ　說苑正諫篇。孔子曰。良藥苦二於口一利二於病一。忠言逆二於耳一利二於行一。家語六。本篇亦有二此語一。

兄弟は兩の手の如し　後漢書云。語曰兄弟左右手也。又晉書郤續傳云。兄弟如二左右手一。

君は舟臣は水　荀子曰。君者舟也。庶人者水也。水則載レ舟。水則覆レ舟。孔子家語曰。夫君者舟也。庶人者水也。水所二以載一レ舟。亦所二以覆一レ舟。

槿花一日の榮　東方朔與二公孫弘一書云。木槿夕死朝榮。士亦不二長貧一也。白樂天詩。槿花一日自爲レ榮。

狂人走れば不狂人も走る　淮南子曰。狂者東走逐者東走。東走則同。所二以東走一則異。

騏驎も老ぬれば駑馬におとる　騏驎は駿馬の事を云。戰國策云。蘇子說二齊閔王一曰。語曰騏驎之衰也駑馬先レ之。又燕田光曰。臣聞騏驥盛壯之時。一日而

馳千里至其處也。駑馬先之。

九牛の一毛　前漢書司馬遷傳云。假令僕伏法受誅。若九牛亡一毛。

狐が虎の威をかる　戰國策云。荊宣王問群臣曰。吾聞北方之畏昭奚恤也。果誠何如。群臣莫對。江乙對曰。虎求百獸而食之。得狐。狐曰。子無敢食我也。天帝使我長百獸。今子食我。是逆天帝命也。子以我爲不信。吾爲子先行。子隨我後觀。百獸之見我而敢不走乎。虎以爲然。故遂與之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也。以爲畏狐也。今王之地方五千里。帶甲百萬。而專屬之昭奚恤。故北方之畏奚恤也。其實畏王之甲兵也。猶百獸之畏虎也。

錐はふくろをとほす　史記平原君傳云。平原君令從于楚。得食客十九人。毛遂自薦曰。臣得如錐之處囊中。乃脫穎而去。非特其末見而已。

急急如律令　資暇錄云。符祝之類。末句云急急如律令者。人以爲如飲酒之律令。速去不得滯也。一說。漢朝每下行之書。皆云如律令。言非律非令之文書行下。當亦如律令。故符祝行如律令之言。按律令之令。宜平聲讀爲零。律令是雷邊捷鬼。此鬼善走與雷相疾速。故云如此鬼之疾走也。事文類聚。今日本にも巫覡の符章によく書事也。○新考○四文門十一卷祭祀

文書牙文等の末に、急急如律令の文字を用ゆ。

巍巍蕩蕩　論語泰伯篇に出たり。註。巍々高大之貌。蕩々廣遠之稱也。今俗に、物の高大なるを巍々蕩々と云。いやしきもの〻詞に、きたうだんと云は誤なり。

きのふはけふのむかし

新勅撰　源光行

あすもあらば今日をもかくや思ひ出ん
きのふの暮ぞむかしなりける

新後拾　惟宗光吉朝臣

別にし月日やなにの隔にて
きのふは人のむかしなるらん

【俗語】議定　漢書高后紀に出たり。

規模　規は圓なる物を作るぶんまはしなり。模は形ある物を作るいがた也。何にても標準とする事を規模と云也。俗に、詮なき體を規模なしと云は、意通ずべきか。唐王勃詩。蓬闕盛二規模一。

器量　晉書孫綽傳。器量宏曠。文選蔡邕郭有道碑文云。器量弘深。胡雲峰云。材之所レ成爲レ器。德之所レ充爲レ量。

饑饉　論語先進篇に出たり。註。穀不レ熟曰レ饑。菜不レ熟曰レ饉。（餓飢字異にして義同じ。飢饉の字は、漢書元帝紀に出たり。）

奇麗　漢書禮樂志云。綽奇麗。又文選班固東都賦。賤二奇麗一而不レ珍。又吳都賦註。奇異美麗之事。

顒　俗に、物の大なる事を顒と云。此字也。詩經。其大有レ顒。註。顒大也。

譏嫌　首楞嚴經云誹二謗比丘一。罵二詈徒衆一。訐二露人事一。不レ避二譏嫌一。又法苑珠林三十四。如下憍梵鉢提比丘善護二譏嫌一。藏二身天上一。涅槃經曰。具二足智惠一。預見二譏嫌一。俗に、譏の字機となせり。是も經釋に出たる字也とかや。人の譏嫌を知とは、人のそしりきらふべき事は、いひもし爲もせぬがよき也。今專人の動止を機嫌とのみ心得ぬるは、意義ちがへり。

驕奢　左傳云。驕奢淫佚。俗に轉じて、きやしやとよむはわろし。今いふ驕奢は、いらぬ事に費をして身を飾るを云。やさしき事にいふは誤也。

きし〳〵　枕草子に、にくきもの、すみのなかに石こもりて、きし〳〵ときしみたるとあり。

肝大　俗に廣量なる者を肝の大者と云。靈樞論勇篇。勇士其心端直其肝大。是に本づける詞なるべし。又肝の大者といふ事を、箆大箭上壇ものと云はいやしき詞なるべし。又膽欲レ大。姜維膽斗の事あり。

京風　俗に、物のみやびかなる事を京風と云。詞の章あるを京談と云。總てものゝよき事には京と云。もろこしにもかくいへるにや。字彙云。天子所レ居

輦轂之下。聲名文物之所ㇾ聚。故其士女雍容閑雅之態生。今諺云二京樣一即古之所ㇾ謂都。相如傳。車從甚都是也。

邪許　詩經伐木篇朱傳云。淮南子曰。舉二大木一者呼二邪許一。蓋舉二重勸ㇾ力之歌也。日本にも、大石大木などを持運時、歌をうたひ戲言を吐て人をいさましむる事あり。是邪許の遺風也。

行列　禮記。行二其綴兆一。要二其節奏一。行列得ㇾ正焉。進退得ㇾ齊焉。杜子美詩。簡々紫宸廟。南面欲二行列一。

禁密　宋高元裕傳。兄弟迭處二禁密一。時人榮ㇾ之。

氣槩　杜子美詩。交親氣槩中。類書纂要云。志氣節槩也。

吉祥　杜子美詩。安時歌二吉祥一。

氣散　杜子美詩。溪行衣自濕。亭午氣始散。是は濕氣の亭午に至て散せし事を云。今俗に、心に快き事を、氣さんじな事と云。

吉凶　易云。定二天下之吉凶一。

蓄縮　漢書江充傳。丞相王嘉健而蓄縮不ㇾ可ㇾ用。註。謂ㇾ不ㇾ勇二于事一也。今いふ蓄縮の意に同じ。

記憶　廣韻。憶思也。念也。增韻。記也。北齊書。陳元康能記憶。

奇怪　非常のふるまひする者を、俗に、きつくわいもの と云は奇怪者なり。

奇特　華嚴經云。海有二奇特殊勝法一。言行錄云。可ㇾ謂二奇特之士一。

儀式　儀則法式也。法華經。三世諸佛說法之儀式。

糺明　周禮小宰糾禁。註。糾猶ㇾ割也。察也。疏曰。糾二擧其非一。事已發者依二法斷一割之。事未ㇾ發者審二察之一。糾と糺は同じ。罪あれば其非を正し擧て、事あらはるゝ時は、法令に任てこれをことはり、事あらはれざれば、審に察するを糺と云。糺明と云も、糺察の義也。

氣根　佛書に多く出たる字也。

端正　萬葉の讀なり。野槌に云、きらくしは、美麗

の義なり。

泥山　物の高大なるを泥山と云。山にたとふとよめり。韻會云。泥猶擬也。

起請　徒然草に云、起請文と云事、法曹には其沙汰なし。いにしへの聖代すべて起請文につきて行る政はなきを、近代此事流布したる也。野槌に曰、起請文と云事、もろこしに盟誓をたてゝ牛馬の血をすゝり、其詞をしるして土にうづみ、約する所もし背かば、此牛のごとく、きり屠らるゝ罪にあたらんと諸神に誓ふ也。周禮左傳等に委くしるせり。日本にては、天照大神素戔嗚尊と誓ひましませば、神代にもありける也。始は盟誓といひしを、人代の末に至りて、白川鳥羽の御時も、起請文と云事有よし、貞永式目起請の裏書にあり。武内宿禰の甘美内と探湯し、允恭帝の時、氏族のみだれを定んとて、湯を探らせ、斧を焼て握らせらる。これを後世に、火起請湯起請の始なりとす。日本紀に、誓約字をうけひとよめり。起請の字、是訓によりてうけをたつると云にや、猶おぼつかなし。好古案ずるに、後漢書劉盆子傳云、其餘不知書者起請之。註云。請其書己名也。起請の字はこゝに出たり。

急難　詩經棠棣篇云。兄弟急難。

斷　木の斷など此字を用べし。莊子云。百年之木破而爲犧樽。青黄而文之。其斷在溝中。比犧樽於溝中之斷。則美惡有間矣。

禁斷　朱子文集曰。更監禁斷。

境界　朱子文集云。自家境界。

臄々　廣韻云。臄々大笑也。字彙。極虐切。音噱。俗に、大笑する事をきつ〳〵と云は、臄々の云あやまり也。

休息　詩經周南及月令に出たり。又休足の字は、後漢書杜詩傳にあり。

汚穢　神代卷に出たり。

聞瀆　太平記に、此字を用たり。

新晴　張平子思玄賦。濯體以新晴。
勤役　袁陽源詩。勤役未云已。壯年徒爲空。
禁當　杜子美春水生詩。一夜水高二尺強。數日不可更禁當。注云。禁當蜀之俗語。この禁當と云は、たへあたると云意也。今俗に物のきびしき事をきんたうと云は、禁盜の字を用ゆべきにや。
禁固　文選曹子建求通親親表に出たり。注。善曰。左氏傳。申公巫臣奔晉。子反請以重幣錮之。杜預曰。禁固勿仕也。仕錮與固通。漢書武帝紀。諸禁錮及有過者。咸蒙重棄。後漢書黨錮傳。禁錮終身。
氣色　文選謝惠連詩。蕭條洲渚際。氣色少諧和。
龜鑑　祖庭事苑云。龜所以決疑。鏡所以辨物。龜は灼て疑を決するものなり。鏡は照して物を辨るものなり。人の手本定規として迷を明すべき事を、龜鏡とも龜鑑とも云也。
器用　左傳に出たり。定公九年傳注。器用者謂物之成器可爲人用者也。王子淵得賢臣頌。夫賢者國家之器用也。人を器に比する事は、論語公冶長篇に見えたり。何にても用ある成器を器と云。人も用べき才あるを、器用と云也。
較量　較は音かう、今誤てきやうとよむ。たくらべはかるとよめり。邵子詩云。豈待較量然後見。

【正誤】奇特　きつくわいはわろし。昨日より遠に着。着物は誤り。金襴　[illegible]　吉相　[illegible]　吉相など云べし。行住坐臥　[illegible]

第三十七　由

【謎】弓を袋に納む　詩經周頌曰。明昭有周。式序在位。載戢干戈。載櫜弓矢。是より出たる謎也。
弓折矢盡　弔古戰場文云。鼓衰兮力盡。矢竭兮弦絕。

【俗語】遺言　左傳哀公三年傳に出たり。
由來　易繫辭に出たり。
猶與　曲禮に出たり。疏曰。說文猶獸名。與亦獸名。

二物皆進退多レ疑。人之多二疑惑一者似レ之。故謂二之猶與一。楚辭には猶豫の字を用ゆ。漢書呂后紀注師古云。猶獸名。爾雅曰猶如レ麂善登レ木。此獸性多二疑慮一。常居二山中一。忽聞レ有レ聲卽恐レ有二人且來害一レ之。每豫上レ樹。久之無レ人然後敢下。須臾又上如レ此非レ一。故不レ決者稱二猶豫一焉。

唯一（ゆいいつ）　首楞嚴經云。丁阿二陳習一唯一精眞也。

油斷（ゆだん）　涅槃經第二十二云。譬如（たとへば）世間有二諸大衆一滿二二十五里一。王敕二一臣一持二一油鉢一經由過。莫レ令二傾覆一。若棄二一滴一當レ斷二汝命一。復遣二一人一拔レ刀在レ後隨而怖レ之。臣受二王敎一盡レ心堅持。或人の云、此油鉢の喩より油斷の字出たるならん。

遊觀（いうくわん）　文選云。遊二觀道德之域一。

優長（いうちやう）　韓琬傳。文藝優長。

遊民（いうみん）　家業なく、徒に食する者を遊民と云。曲禮云。無二曠土一無二遊民一。

融々（ゆう）　左傳隱公傳云。其樂也融々。融和也長也。

悠々（いう）　詩經黍離篇。悠々蒼天。注。遠貌。李白詩。極レ目心悠悠。韻會。悠々閑暇貌。俗に、何心なくゆるやか成事を悠々と云。

有餘不足（いうよふそく）　老子云。天之道損二有餘一而補二不足一。

有識（いうしよく）　文選桓元子薦二譙元彦一表云。有識之所レ悼レ心。ものしる事なりとよめり。萬に心得て、故實をしり、すべをしるものを有識と云。俗に禁中の公事まつりの事をよく識者を有識といへども、必しも然るにあらず。

由緒（ゆうしよ）　首楞嚴經云。其各命由緒。字書緒絲端也。其由（よる）所ありてたえざる事、絲端を抽如くなれば、由緒と云也。

勇健（ゆうけん）　唐書曰勇健非レ常。通鑑宋文帝紀云。兄弟勇健。これ皆いさみ武（たけ）き事をいへり。今俗康寧（かうねい）なる事を勇健といへり。

遊山（ゆさん）　晉の郭文、少より山水を愛し、名山に遊び、老に至て終に廬を山中に結で住り。是を蒙求に、郭文遊山とするせり。今俗に遊樂する事を遊山といふ。

郭文ノ遊山とは、興味甚異なり。

勇士　孟子、勇士不忘喪其元。

不意　盛衰記に、ゆくりなしとよめり。心ならず思ひがけなき義也。源氏夕顔にいざよふ月にゆくりなく。若葉にゆくりなうものふかきおましの所。水原抄に、ゆくりなきはとりあへぬ意なり。下郎のゆくりもなきと云は、ゆくりなきの轉ずるなるべし。用意なきを云。

餘裕　孟子公孫丑篇に、餘裕とあり。今俗に物の餘有事をゆうと云は、此字也。

蒲夢　山谷詩、春夢小南湖。注。南唐近事馮延巳進士。有餘文、能蒲夢。或作滿夢

第三十八　女

【國】命世　世にすぐれて稀し。後漢書黃瓊傳云、情爲恩使。命錄、黃瓊の傳に出たり。

咎人は人をとがむ　許令曹云。君子省己、胡遑

毀人乎哉。

目わたる鳥　物の早き事に喩へたり。文選東陽雜詩云、人生譬海内。忽若鳥過目。古歌に

よしあしにこゝろひかれて朝夕の
めわたる鳥のゆくへしらずも

家集　俊頼

たまさかにくるとはすれど目をわたる
鳥のはやくもかへりぬる哉

盲目の杖を失ふが如し　陳同甫集。別去惘然。若盲者失杖。論考

盲者蛇におぢず　古歌に

ふみあてばめくらもへびにおづべきが
しらねばやすき和歌の道かな

【俗語】面目　史記項羽本紀。羽云江東父兄憐而王我。我何面目見之。今云面目もないと云と同じ意也。

迷惑　史記范雎傳に出たり。韓文云。聞迷惑之旨。

面縛　左傳僖公六年傳に出たり。註、縛兩手於後。

惟見二其面一。

目巧(めき)　禮記仲尼燕居に出たり。注。目巧謂下不レ用二規矩繩墨一。但據二目力一相視之巧上也。

名譽(めいよ)　韓文。行レ身陷二不義一。況望レ多二名譽一。

滅亡(めつぼう)　管子曰。禮義廉恥謂二之四維一。四維不レ張國乃滅亡。

牒(めやす)　訟辭也。又目案とも云。居家必用注に、文驗を考察するを案と云。目は事目也。今俗案を以て安とし、和訓を加て目安と云也。

面談(めんだん)　通鑑唐高祖紀。雖レ隔二千里一。皆如二面談一。

希見(めづらし)　日本紀神功皇后紀に見えたり。

眴(めくはせ)　史記項羽本紀。須臾梁眴レ籍。（梁項梁。籍項籍。）師古云。眴面舜一動レ目而使レ之也。眣亦同。以レ目使レ人也。公羊傳文公七年。眣二晉大夫一。

目成(めくはせ)　楚辭九歌云。滿堂兮美人。忽獨與レ余兮目成。王逸註云。獨與レ我睨而相視成二爲親々一也。

めでたし　俗説に、天照大神窟戸の間より御目を出してみそなはし給ふ時に、諸神是を見て甚悦べり。今幸なる事をめでたしとは、是其緣也といへり。是附會の説なり。古今集の歌に

よみ人しらず

殘なくちるぞめでたきさくら花
ありて世中はてのうければ

榮雅抄に、世中はありてすみはつまじければ、花の殘なくちるぞ愛したきといふ。はてのうければといへる心、尤人のおもふべき所也とあり。この説の如くなれば、めでたきは愛したきといふ意にて、めづると云意なるべし。

第三十九　美

［諺］水に畫が如し(みづにゑかくごとし)　觀經序分義云。縱發二清心一猶如レ畫レ水。　又この字の部、氷にちりばむるの條下考見るべし。

古今　よみ人不知

行水にかずかくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふなりけり

水は方圓の器にしたがふ　孟子疏荀卿曰。表正則影正。槃圓則水圓。盂方則水方。韓非子云。爲二人君一者猶レ盂也。民猶レ水也。盂方水方。盂圓水圓。白樂天詩。無レ情水隨二方圓器一。不レ繫舟任二去住風一。

身にあまるうれしさ

新勅撰
うれしさをむかしは袖につゝみけり
　こよひは身にもあまりぬる哉　よみ人不知

身はならはし

家集
手枕のすき間の風も寒かりき
　身はならはしのものにぞ有ける　小町

里はあれぬむなしき床のあたりまで
　身はならはしの秋風ぞふく　寂蓮法師

身さへ心に任せぬ　無住法師曰、萬事世間運に任て有べき心地の述懐に、

我身猶わがおもふにもかなはぬに
　人をこゝろにまかすべしやは
よしさらばものをこゝろにまかせしよ
　心をものにうちまかせつゝ

耳垂珠　俗に富貴貧賤は、耳垂珠にありと云。陳希夷神相全編云。耳厚而堅。聳而長。皆壽相也。輪廓分明聰悟。垂珠朝口者主二財壽一。貼レ肉者富足。耳薄如レ紙貧窮無レ倚。事文類聚別集云。節度李忠臣因二奏對一徳宗謔曰。卿耳長大貴人也。忠臣曰。臣聞驢耳甚大。龍耳卽小。臣耳雖レ大乃驢耳也。上悦レ之。

俗語　御方　敵御方の字、此字よし。味方又阿等の字を用は非也。古事記仲哀紀の末に、太子御方とあり。

身じろき　身動とかく。源氏玉かづらの巻にあり。枕草子にも、うち身じろきくつろきてとあり。身をうごかす事也。俗にあやまりて、むしろぎと云。

みじ〳〵　大鏡にあり。俗に蟲などの死かゝりて、

未死なぬをむし〳〵と云は、みし〳〵の云誤なり。未死々々の字にや。

微細(みさい)　理閑典引。昭ニ明好惡一不ㇾ遺ニ微細一。

微塵(みぢん)　法華經云。譬如下有ニ經卷一寫中三千大千世界事上。全在ニ微塵中一。

未練(みれん)　徒然草に、未練の孤ばけ損じけりとあり。俗語の未練は、事に果斷なきをいふ。

冥加(みやうが)　神明の加護を云。或說に、冥とは幽暗の義なり。冥慮冥感等皆同じ。幽暗の地他人は未知に及ばず、神の格度べからず。己陰德あれば必其報あるを冥加と云。神代口決。天照大神の託宣云。冥加以ニ正直一爲ㇾ本。又或曰、冥加は佛語にして、梵網經に出たり。

名利(みやうり)　莊子盜跖篇。子正爲ㇾ名。我正爲ㇾ利。名利之實不ㇾ順ニ於理一不ㇾ監ニ於道一。法華經。有ニ一人一。號曰ニ求名一。貪ニ著利養一。

【正】美作に作、みまさか、いまさか。みそさゝい、いみそさゝいあやまり。眉目みめ、めゝ誤。みさご、みしやこは誤。

第四十　之

【諺】知ざるをしらずとせよ　論語曰。知ㇾ之爲ㇾ知ㇾ之。不ㇾ知爲ㇾ不ㇾ知。是知也。

積善(しやくぜん)の家(いへ)には餘慶(よけい)あり　易繫辭云。積善之家必有ニ餘慶一。

下として上をはからふ事なかれ　論語子曰。不ㇾ在ニ其位一不ㇾ謀ニ其政一。諺こゝに出たり。新考。

仁者に敵(てき)なし　孟子梁惠王の篇云。仁者無ㇾ敵。註。蓋古語也。

朱(しゆ)にまじれば赤(あか)くなる　家語曰。丹之所ㇾ藏者赤。漆之所ㇾ藏者黑。是以君子必愼ニ其所ニ與處一。野客叢書曰。近ㇾ朱赤。近ㇾ墨黑。見ニ傳玄太子箴一。

十分は覆(こぼ)るゝ　家語三恕篇云。孔子觀ニ於魯桓公之廟一有ニ欹(かたぶく)器一焉。夫子問ニ於守ㇾ廟者一曰。此謂ニ何器一。對曰。此蓋爲ニ宥坐之器一。孔子曰。吾聞宥坐之器虛則欹。中則正。滿則覆。明君以爲ニ至誡一。故常置ニ之於坐側一。顧謂ニ弟子一曰。試注ㇾ水焉。乃注ㇾ之。水中

則正。濁則覆。夫子喟然嘆曰。嗚呼夫物惡有滿而不覆哉。俗に、十盃は覆ると云物なり。是十分以覆ゑゝの警なり。

慈悲は上よりくだる　顔氏家訓云。夫風化自上而行於下者也。自先而施後者也。是以父不慈則子不孝。兄不友則弟不恭。夫不義則婦不順也。是諺の意に同じ。然れ共、此事父兄夫に對しては云べし。子弟婦の義には云がたし。諺考

十遍よまんより一遍うつせ　鶴林玉露云。唐張參手寫九經。毎言讀書不如寫書。高宗親灑宸翰遍寫九經。又言御書光武紀賜燕欽融。謂曰。朕聞光武紀親思讀十遍不如寫一遍。

舌は禍の根　老子經云。夫舌禍福之門。

舌三寸の囀にて五尺の身を損す　此諺は、一言輕しく發すれば驛馬も追難きと云意にて、言語を謹べき戒とせり。三寸の舌と云は、前漢書張良傳以三寸舌爲帝王師。又酈食其傳。掉三寸舌下齊七十餘城戰國策楊惲傳にも舌長とす。これなり五尺の身とは、孟子滕文公篇五尺童子是は童子の事にて、大人の尺にあらず周禮考工記。人身長八尺。陸經本義張衡序。七尺之軀。此數説によりて按ずるに、人身長八尺を以て大法とする事定説也。之周尺にて考たれば、今五尺の軀といふは、周尺の八尺を日本の鐵尺につもり替たる名なり。周尺の一尺は、日本の曲尺六寸四分弱に當る故に、周尺の八尺は、日本の曲尺五尺一寸餘に當る

鹿を追ものは山を見ず　淮南子曰。逐獸者目不見太山。嗜欲在外則明所蔽矣。又云。逐鹿者不顧兎。

上戸本性をあらはす　文選傳武仲舞賦云。漫既醉其樂。康嚴顔和而怡懌兮。幽情形而外揚。文人不能懷其藻兮。武毅不能隱其剛。注。翰曰。懷藏。藻文藻也。文人之醉不能藏其辭藻也。武毅之人醉則不能隱其剛勇。諺考

芝蘭の交　家語に出たり。ひとの字の事、人は芝蘭の友にまじると云條下にあり

麝香もかげば臍にはいる　瑣碎録云。鹿麝合肉香切不可就鼻聞。蓋有微蟲。

七尺去て師の影をふまず　此諺佛書に出たり。當に七尺去らず師の影をふまずと云べし。善見論云。弟子從レ師行。不レ得二遠レ師七尺一。沙彌威儀經云。弟子從レ師行。不レ得三以レ足踏二師影一。新考

知てしらされ　老子曰。知不レ知上。新考

職敵　素書曰。同藝相規。異域同譚なるものなり。

俗語 斟酌　出二于國語一。註云。斟取也。酌行也。韻會云。取レ善而行曰レ酌。山谷詩。斟二酌古今一來活レ國。班固典引。斟二酌道德之淵源一。四書通義仁山金氏曰。斟酌俗語也。如三以レ勺取レ酒以入レ器而酌二其淺深一也。是斟はかるの意也。俗に辭退の心に用るは義にそむけり。又或參酌の字をも用べきか。後漢書張奮傳。參二酌秦法一。字彙云。參酌審擇量度也。

子々孫々　書經梓材篇に出たり。

鹽らし　俗に人のみやびやかなるをしほらしと云。みにくゝいやしきをぶしほと云。居家必備釋常談云。女人醜陋謂二之無鹽一。齊有二醜女一云々。見二于下一。○劉向新序云。齊有二婦人一。極醜無レ雙。號曰二無鹽女一。其爲レ人也。臼頭深目。長壯大節。卬鼻結喉。肥項少髮。折腰出胸。皮膚如レ漆。又列女傳に見ゆ。是故事に據て、日本にも無鹽、塩らしなど云俗語あるにや。

信向　後漢書伏湛傳に出たり。

精進　漢書敍傳云。召二屬縣長吏一選二精進掾史一。註。師古云。精明而進趨也。又佛書にも此字多し。弘決云。無レ雜故精。無レ間故進。是は其事を勤て他事なきを云。今潔齊する事を精進と云。佛書によりて、勤行精一にしこ進脩する意をとれり。智度論云。有二二精進一。一身精進爲レ小。二心精進爲レ大。精進の字いもいと和訓せり。

紖　丁度集韻云。克夜切以レ繩維二持之一也。

失念　遺敎經云。若失念者則失二諸功德一。注云。失念謂二有レ始無レ終也。圓覺經云。得念失念無レ非二解脫一。

初心　首楞嚴經云。有二無量辟支無學并其初心一。同來二佛所一。俗に初學の人を初心と云。これによれり。

成就　史記呂后本紀に出たり。

殿　論語子曰。孟之反不伐奔而殿。註。軍後曰殿。漢書注。師古云、殿之言鎮也。言鎮軍後以扞敵。倭俗に、後殿と云是也。

巻舌　漢書の揚雄傳云。禮官博士巻其舌而不談。

舌長　詩大雅曰。婦有長舌維厲之階。朱傳云。長舌能多言者也。是言多者をいへり。俗には下として上を論ものをのみ舌長といへるは誤れり。

助成　書經酒誥に出たり。

自滿　書經仲虺之誥云。志自滿九族乃離。

主君　左傳昭公二十九年に出たり。

臣下　伊訓曰。臣下不匡。

親父　父を親父と云事、莊子の寓言に出たり。

親屬　前漢書馮野王傳。上曰吾用野王為三公後世必謂我私後宮親屬。

[illegible]　[illegible]を司るものを云。史記高祖紀に出たり。

洒落者　山谷云、春陵周茂叔人品甚高。胸中洒落如光風霽月。これ誠に賢者の氣象をよく云形れり。今俗に人に馴て世情を心得たる人をしやれものと云は、甚當らぬ言なるべし。

上聞　漢書武帝紀。積行之君子雍於上聞也。師古云。言見壅遏不得聞達於天子也。

伺候　六韜云。雖犬其伺候。韓退之送李愿歸盤谷序。伺候於公卿之門。

自賛　史記平原君傳に出たり。

指南　古今註。越裳氏來貢。歸忘其路。周公與指南車。至其國轄鐵銷盡。指南車とは、今世の磁針の類なり。こゝによりて萬の教を受る事、指南車の方角を知するが如しと云義也。東京賦。幸見指南於吾子。是人の指教を謝するに云詞也。

如在　論語八佾の篇に出たり。俗に人に疎略するを如在すると云は、頗意義ある也。論に據には、音聲形色の見聞すべきなし。これを祭て如在するは誠の至なり。人に交るに及ては、其人實に見在す。如

字を付べからず。今見在するを如レ在にするは、疎略の義知ぬべし。此類人道神道同じからず。

子細　物のこまかなる事也。楊升菴文集卷之四十七云。北史源思禮傳云。爲レ政當レ舉二大綱一。何必太子細也。杜詩、野橋分二子細一。俗語本レ此。好古云。杜詩亦云。醉把二茱萸一子細看。

爾來　孔明出師表に出たり。

入木　和俗に筆法を謂て入木と云。宋張懷瓘書斷云。晉帝時祭二北郊一。更祝版工人削レ之。筆入レ木三分。これ王羲之が事也。これによりて、筆法を入木と云なるべし。

時服　西京賦云。製爲二時服一以適二寒暑一。大學衍義補云。五代舊制每歲諸臣皆賜二時服一。

自由　後漢書五行志に出たり。

自在　杜詩。恰々嬌鶯自在飛。又自由自在と連用る字、朱子文集にあり。

邪魔外道　朱子文集に連用たり。

四百四病　人の病四百四病あると云事、世に云事也。千金方八十二卷調氣法曰。百病不レ離二五臟一。共有二八十一種疾一。冷熱風氣計成二四百四病一。八十一卷道林養生第二云。將知四百四病。身手自造。本非レ由レ天。

十死一生　漢書の外戚傳に出たり。

柔弱　文子。柔弱者生之幹也。

濁穢　史李尋傳。盪二滌濁穢一。

鄙吝　漢書黃憲傳に出たり。

生涯　杜子美詩。爛醉是生涯。

上根　傳燈錄六祖云。汝師戒定慧勸二小根小智一。吾戒定慧勸二上根上智人一。

神妙　易係辭云。神也者妙二萬物一而爲レ言者也。俗に功勞をなし、或禮儀正しき人などをほめて、神妙なる事と云は、過譽の詞なればよろしからず。

時宜　俗に禮を時宜と云。曲禮云。禮從レ宜。又云。禮時爲レ大。漢書元帝紀不レ達二時宜一。

色代　代は易る也。人を禮して、顏色を變易するは

饗の至也。俗に人に饗することを色代と云。

白鬚　左傳成公傳云。周子有兄而無慧。注。所謂白癡。

失墜　左傳。弗敢失墜。今俗に費の多き事を失墜と云。

神異　家語云。高辛生而神異。

瞬息　杜詩云。得失瞬息間。

自然　老子云。道法自然。

縱横　史記蘇秦傳には、從衡とあり。杜詩。群盗尚縱横。

質木　漢書地理志。民俗質木。又古云。質木者無文飾。如木石然。

醜物　俗に、げすしう健なる者をしこぶつと云。日本紀神代巻に葦原醜男あり。此神怒れる形健に運。故名すく。しかればしこぶつは醜物也。如此類を、俗に湯桶讀と云。又江州朽木の地主神を、色帯大明神と云。此神は神仙なりと云。世に堅固なるものをしこぶつと云は、此字ならんか。

上戸　野史に云、酒を飲ものを大戸と云。不飲者を小戸と云事、白氏文集に見えたり。日本にては、上戸下戸と云。韻府曰。白樂天詩。猶嫌小戸長先醒。又曰。戸大嫌甜酒。才高笑小詩。注。唐人飲多者為大戸。小者為小戸。小補韻會云。人能飲不能飲有大小戸之稱。唐宋酒令詩話言之多矣。蓋呉志孫皓毎饗宴饗人以七升為限。小戸雖不入並澆灌取盡。是三國以前事既載者已有此品目也。

○江家次第、正月三朝定御樂後取並用高戸者。これによれば、上戸を高戸とも云てし。

無四度解　延喜式を按ずるに、勘解由使は諸國諸司諸寺等の未進解由せざれば勘検する職也。たとへば諸國より貢物を奉る時には、帳面に記して勘解由使に送る。判官主典勘定して目録を作り、長官次官に白す。長官次官直に奏聞せしむ。如此一年に四度解由を得る也。解由明らかならざれば、公廨官院手を下所なり。是を四度解なしと云体へなり。

家集　しどけなきねみだれがみを見せじとや
はたかくれたるけさの朝がほ　　小町

疵瑕(しが)　春秋左公傳云。申侯有レ寵二於楚一。文王曰。予取予取。不二汝疵瑕一也。杜子美詩。此道難二疵瑕一。山谷詩。愛レ我不二疵瑕一。人に難をいひて疵つくる事を、京童の詞に疵瑕と云也。人の罪惡を敵ひかくす事などをしがのしれぬ様にすといふ。

疵面(じめん)　蒙求舊註云。晉趙孟字長衍。爲二尙書令史一善二淸談一。面有二疵點一。時人曰。諸事不レ決問二疵面一。今俗に人の過惡を云あらはすを疵面と云。

車軸(しやぢく)　雨滴(てき)の大なる事を車軸と云。法苑珠林劫量篇云。時起二大重雲一乃至遍二覆梵天世界一。旣遍覆已注二大洪雨一。其滴甚麤(あらし)。或如二車軸一或復如レ杵。祖庭事苑淚如二車軸一。

習氣(しつけ)　慣ひしみたるくせを習氣と云。東坡集六。氣固多レ習獨此偏。註。習氣字出二佛書一。首楞嚴經。歷劫因緣恩愛習氣。又曰。九品習氣俱時滅盡。

丈夫(じやうぶ)　韻會曰。周制以二八寸一爲レ尺。十尺爲二丈人一。長八尺故曰二丈夫一。詩甫田註疏。夫有二傳相之德一而可二倚仗一。謂二之丈夫一。俗に男子の健なるをも丈夫と云。これによりて、事物の堅固なるをも丈夫と云。

邪見(じやけん)　佛書に、父母に孝行なく、沙門を敬せざるたぐひを、邪見と云。佛の正見に對して云也。法華經。愍(みん)二念邪見衆生一令レ住二正見一。又曰。正見邪見利根鈍根。

常住(じやうぢう)　佛書に、常住常住。十方常住。現前常住。十方現前常住の目あり。

首尾　居家必用曰。首者始也。尾者終也。始あり終ある事を、首尾すると云也。

習禮(しふらい)　何にても、禮式ある事を兼日より習(ならは)し稽古するを、習禮と云。

失禮(しつらい)　何にても、物に滯有事を失禮といふ。萬禮儀に叶ぬれば、進退周旋(せん)滯る事なしといへども、少も禮儀にたがひぬる事あれば、其間にそこばくの失

識有也。俗に病するをも、しつらいと云はあたらず。

止動　俗に、馬をつかふ詞也。うごかすを止といひ。とゞむるを動と云。

序　序文は書物の巻頭にある故、俗に、物の始を序と云。疱瘡の始に煩を序病と云類也。又音樂を奏するに、序破急の三節あり。

性體　法華經。所謂諸法如是相如是性如是體。

書札　漢書司馬相如傳注。師古云。札木簡之薄小者也。時未多用紙。故給札以書。今紙を用ても書札と云は、古名を改めざる也。簡編殺青など云が如し。

辭退　司馬長卿辭蜀父老云。遷延而辭退。韻會曰。說文辭訟也。又云。辭不受也。今人辭訟之字作詞。言詞之字作辭。又以辭爲辭受之辭。又以辭爲文辭之辭。循用既久今不廢。昔より如此誤り來る故。今皆通用すといへども、辭退と書が本字也。

狀　書札を狀と云。居家必用注。演繁曰。狀貌也。以貌寫情於紙墨也。

失却　却は語助辭也。忘却破却など云が如し。

愚人　萬葉集九。詠浦島子歌。世間之愚人之吾妹兒爾。俗に事に不堪ものをしらふとゝ云は、愚人の轉せる也。又白徒の字をも用べし。管子に出たり。

差是　河海に云、白氏文集に、差是をしなやかとよめり。

鹽垂、　神事式の忌詞に泣事を鹽たるゝと云。源氏須磨巻にいたくしほたれ給ふとあり。涙にてぬれたる絹を、鹽たれ衣と云也。

取次　東坡集五。莫遣兒曹取次知。同十五。欲放扁舟取次行。釋氏要覽五。部衣得取次著否。取次は次第なき義也。源氏梅枝巻に、しどろもどろにおいきやうづきとあり。下學集に取次而已とかけり。一說、取次は容易の義なり。

云云　日本紀に、云々をしかしかとよめり。河海抄に、いろいろのいひごとゝ云義也。又然々と書て

しかじかとよむ事もあり。これは如此くくと云義也。萬葉に、云々をかにかくにと訓せり。云々の字義猶うの字の部にくばし。

進退　詩經大雅桑柔篇。進退維谷。源氏槇柱の卷に、ともかくももとよりしたいならぬ人の御事なれば。河海に、不進退とかけり。まゝならぬ義也。俗にしんまいならぬと云も、進退ならぬの轉語なるべし。

心外　禮記禮運篇に出たり。

正直　詩經小明篇に出たり。

無術　俗に、衆苦に逼迫せらるゝ事を、術なしと云。のがれ避べき謀なき義也。大鏡などにも此詞あり。

赤脚　韓退之詩云。一婢赤脚老無齒。今俗に、物のかすかに弱き事を赤脚と云。又俗に、さんきやくと云あやまれり。又杜詩。赤脚。

尋常　國語云。八尺爲尋。倍尋爲常。史記李斯傳。布帛尋常庸人不釋。索隱云。尋常以言其少也。今俗に、人物の細美なるを尋常と云も、意義なきにあらず。

裝束　柳州集。即日裝束上道。

受用　文山集。一生受用忘非是。

屍骸　蜀志。葬其屍骸。

掉舌　唐書。掉舌以爲不可。今俗にも、物を肯ぬに舌を掉事あり。

赦免　宋史。遇赦免。

差別　朱子文集云。固無差別。

社壇　元史張養浩傳。復禱于社壇。

進獻　元史安南傳。當進獻。

生々世々　南史王敬則傳。唯願後身生々世々不復天。生々世々は、佛家の輪廻の說より起て云詞也。

執權　權柄を執ると云事也。南史載法興傳。執權日久。

宿老　北史源賀傳。宿老元臣。

宗旨　佛家の法門也。五燈會元。親受宗旨。

自餘　[illegible]康節詩云。飽食高眠外、自餘無レ所レ求。通鑑青和帝紀。自餘家財。

殊勝　華嚴經。游行二奇特殊勝法一。

白　楊升菴云。白字異訓。日光之白曰レ皛。月光之白。曰レ皎。男子之白曰レ皙。女子之白曰レ皉。老人之白曰レ皤。草華之白曰レ皅。雪霜之白曰レ皚。鳥羽之白曰レ翯。

所詮　楞嚴經序。考二其所一レ詮。韻會詮字註。晉書詮論。謂レ具説二事理一也。一曰。擇レ言。一曰解喩也。

始終　左傳云。君子之謀也始衷終皆舉レ之。今も初中後と云。是始衷終と同詞也。衷は中と同じ。

旨趣　稽康琴賦序。覽二其旨趣一。注。善云。趣意也。

至極　成公綏嘯賦。音聲之至極。注。翰曰。至極謂二極妙一也。

嫉妬　楚辭。各興レ心而嫉妬。王逸注云。害レ賢爲レ嫉。害レ色爲レ妬。今は混じて、只ゝ女の物ねたみする事を、嫉妬といへり。

潤澤　司馬長卿封禪文云。非二唯雨一レ之又潤二澤之一。註。銑曰。此非二唯雨一也。則君之恵化所レ爲二潤澤一也。又劉孝標廣絶交論。蒙二潤屋之微澤一。孟子曰。若二夫潤二澤之一。則在二君與二子矣。今俗に物の多き事を潤澤と云も、潤屋の澤と云意ならし。

修理　文選。任彦升爲二卞彬一謝レ脩二卞忠貞墓一啓に出たり。

失火　史記二齊悼恵王世家に出たり。

強　酒をしいると云。此字也。孟子離婁篇云。是猶二惡レ醉而強一レ酒。

修羅　佛經に、阿脩羅帝釋と權を爭て、修羅負る時は、手に日月を捉て、藕絲孔中にかくれ、帝釋負る時は、天宮十三重の網中にかくるゝ等の説あり。天臺文句疏記、及名義集にみえたり。俗に、石引車を修羅と云。大石、帝釋、音相似たり。阿修羅、帝釋を動す義をとれり。

神變　佛書に本づいていへる詞也。内に天の心ありて、外に變動の相あるを[illegible]變と云。

自墮落　志堅固ならずして、自棄する人を、俗に、自墮落と云ふ、釋氏要覽。學者爲二四事一墮落する目あり。下賤の僧の淫するを墮と云も、此義によれり。

衆生　釋氏要覽。祐法師云。衆共生レ世。故名二衆生一。禮記祭義。衆生必死。

娑婆世界　釋氏要覽云。正云二索訶一。又自誓三昧經云。沙訶漢曰レ忍。或云二堪忍一。此土剛强難レ忍。故即レ事立レ名也。

之遶　四書正解曰。道字从レ辵省作レ辶。凡之遶放レ此。埃嚢抄に、四遶とするは誤なり。

試筆　俗に、歳初に詩を作り、字を書すを、試筆と云。按ずるに、歐陽永叔、范文正公など、試筆の詩ありといへども、歳首の作にあらず。遯菴詩集に、丙午試筆詩あり。睹有園稿第七にも、試筆の詩あり。共に歳首の作也。然れば明儒の所爲ならん。

順逆　杜子美詩云。人生半二哀樂一。天地有二順逆一。

賞味　南史謝覽傳。武帝目送良久。自レ此仍被二賞味一。

正誤　震動雷電今は轉じて、したうなきしゆりけんし　無術は誤。手裏劍りけんしやは誤。赤脚はあやまり。退すさるはあやまり。失却はあやまり。觸髏はあやまり。尿瓶しゆびんわろし、溲瓶とも、しびんはくるしからず。棕櫚とは、歌にもよめり。儒者わろし。居士はいたゝしりこぶ　皆は誤なり。撞木は誤。純熟は誤。旨趣云は誤。慈石くは誤

諺草卷之六終

諺草巻之七

貝原好古纂輯

第四十一 比

諺 貧の盗人　潜夫論曰。禮義生ニ於富足一。盗竊起ニ於貧窮一。漢書曰。民貧則姦邪生。

人は死て名を留め虎は死て毛を留む　埤雅云。語曰。人死留レ名豹死留レ皮。故君子疾ニ歿レ世而名不一レ稱焉。新考

人の口おそろし　國語云。諺云衆心成レ城。衆口鑠レ金。史記鄒陽傳云。衆口鑠レ金。積毀銷レ骨。荀子云。傷レ人之言甚ニ於矛戟一。況形ニ紙筆一乎。新考

夫木

世中は虎狼も何ならず
人の口こそ猶まさりけれ　後京極

人に操らるゝ　史記封禪書註。秦皇漢武爲ニ諸燕迂恠之士一所ニ欺弄之一。若ニ偶然一。諺の意に同じ。偶は人形の事也

人は一代名は末代　白氏文集云。遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋レ骨不レ埋レ名。歐陽公本論云。不下同ニ乎萬物一生死而復歸ニ於無物一者上。暫聚之形。不下與ニ萬物一共盡上。而卓然不レ朽者。後世之名。本朝文粋云。夫形者百年之旅館也。名者萬代之嘉賓也。是等より起れる諺也。

人の故を見て我身をおもへ　論語。子曰。見レ賢思レ齊焉。見ニ不賢一而内自省也。諺こゝに本づけるなるべし。

人に一癖（くせ）　晉書曰。王濟有ニ馬癖一。和嶠有ニ錢癖一。杜預有ニ左傳癖一。又王福畤は兒を譽る癖あり。黄魯直に香癖あり。李[illegible]に地癖あり。李渉に竹の癖ありしと也。歌に

人ごとに一のくせはあるものを
我にはゆるせしき島の道　慈鎭

人至てかしこければ友なし　家語曰。水至清則無レ魚。

魚。人至察則無レ徒。

人は名ををしみ虎は毛を惜む　前の人は死して名を留むと云に下に同じ。

人は善惡の友による　家語曰。與二善人一居如レ入二芝蘭之室一。久而不レ聞二其香一。即與レ之化矣。與二不善人一居如レ入二鮑魚之肆一。久而不レ聞二其臭一。亦與レ之化矣。是以君子謹二其所一レ與處。是諺の意に相同じ。新考

人食馬にも合口　此諺の意は、馬の蹄嚙なるといへども、能これに馴るゝ者あり。放逸無道の人といへども、能其氣に合者有に喩たり。呂氏春秋曰。人有レ臭者。其親戚兄弟妻妾無二能與一レ焉。自苦而居。海上人有下悅二其臭一者上。晝夜隨而不レ去。これ異言意同旨の譚也。

人を鏡とせよ　墨子曰。君子不レ鏡二於水一。而鏡二于人一。鏡二於水一則見二容之面一。鏡二於人一則知二其吉凶一。唐書曰。魏徵薨。太宗臨レ朝歎曰。以レ銅爲レ鑑可レ正二衣冠一。以レ古爲レ鑑可レ知二興替一。以レ人爲レ鑑可レ明二得失一。朕常保二此三鑑一。內防二己過一。今魏徵逝一鑑亡矣。

人事いはゞ目代おけ　龍城錄柳宗元著云。俗諺云。白日無レ談レ人。談レ人則害生。昏夜無レ談レ鬼。談レ鬼則怪至。是諺の意に同じ。誠に漫に人の失を語りたらんは、禍の至る事掌をさすが如し。さりとて又いふたびに、目代おかんもいかゞなれば、畢竟いはずともありなん。しかのみならず人々おのが惡をばせめずして、人のあやまちをあるぐは、其人の心ばへおしけかられてあさまし。下郞の詞に人事いはゞむしろしけと云は、目代おけと云のあやまりにあまりにつたなし。

日に三たび身をかへりみる

新葉　　　　　　　　　　入道前右大臣

日に三たびおろかなる身をかへり見て
　　つかふる道も我君のため

是は論語學而篇の、曾子の三省を取て、忠臣の情を詠せり。然れ共、論語の意は、日に三たび省るにあらず。たゞ三事を以て其身を省る也。歌の意とちがへり。

日暮道遠し　史記伍子胥曰。吾日暮塗遠。故倒行逆施

之。晝子 白居易傳云。日暮道遠。吾生已蹉跎。

比翼連理の裏 ての字の部に出たり。

羊のあゆみ 涅槃經偈云。譬如旃陀羅驅牛羊至屠所。步々近二死地一人命復過レ是。屠所とは牛羊を屠り殺所也。羊を殺さんとて屠所に引て行に、一步〳〵と進む程に、死する事の近づく也。人の命も屠所におもむく羊の如しと云事也。

赤染右衛門

後拾

けふも又午の貝こそ吹つなれ

ひつじのあゆみ近づきにけり

白駒 史記魏豹傳。人生二一世間一如二白駒過一レ隙耳。索隱曰。莊子曰。無三異二騏驥之馳過一レ隙則而馬也。小顏曰。白駒謂二日影一也。隙壁隙也。以言二速疾若一日影過二壁隙一也。莊子知北遊篇。如二白駒過一レ郤。文選劉孝標書。隙駟不レ留。李善曰。墨子人之生二乎地上一無二幾何一也。譬レ之猶二駟馳而過一レ郤。郤古隙字也。李周翰曰。隙穴也。駟馬馳而過レ穴。喩レ速也。

堀川百首

ひるすぐる駒よりもときかげらふの

いそしの森にあひにける哉

ひくき所に水たまる 論語子貢云。紂之不善不レ如二是之甚一也。是以君子惡レ居二下流一。天下之惡皆歸焉。是諺の意也。

秘事は睫の如し 睫は目の側にあれ共、見えざるごとく、世に秘傳と云事も、聞ては安き事ながら、習ざれば知得ざると云意なり。韓非子曰。知如レ睫也。能見二百步之外一而不レ自見二其睫一。是諺と語勢相似たり。新考

貧は病より苦し 文選曹顏遠詩云。富貴他人合。貧賤親戚離。

晝生るゝ子は父に似る夜生るゝ子は母に似る 大戴禮云。晝生者類レ父。夜生者類レ母。孔子家語亦有二此語一。○新考

美女は惡女之仇 說苑尊賢篇。鄒陽主語曰。夫美女者醜婦之仇也。盛德之士亂世所レ疎也。正直之行邪枉所レ憎也。史記扁鵲先生曰。女無二美惡一入レ室見レ

妬。士無二賢不肖一入レ朝見レ嫉。美女者惡女之仇豈不レ然哉。

美人の終は猿になる　太平廣記に、唐代宗の廣德年中に孫恪といふもの、洛陽に遊びて、はからざるに袁氏の女の形うるはしきを見て、娶て妻とせり。十餘年そひて二人の子をまうく。其後孫恪官につかへて、長安に行に、妻の袁氏もつれ行けるが、端州と云所にて、袁氏云けるは、此邊の江の滸に峽山寺といふ寺あり。其寺の僧と相馴るゝ事久し、この度かの寺にゆかんと云。孫恪則かの寺につれ行ければ、袁氏悅びて老僧の房にゆくに、導者なけれども、よく案内をしるもののごとし。袁氏やがて碧玉環を取出し、僧に授て、これは此寺の舊物なりと云。僧これをさとらず。飯齋すぐる時、數十の猿臂をつらねて、松にくだり鳴さけぶ。袁氏哀む色ありて、筆を取て詩を作り、壁にしるす。その詩に云、無レ端變化幾湮沉。剛被三恩情役二此心一。不レ如三逐レ伴歸二山去一。長嘯一聲烟霧深。と書終て、孫恪に向ひ、是より長く別ると云て、着たる衣裳を引さき。忽に老猿となりて、木の上におどりさる。孫恪驚きなげきて魂を失ふ。しばらくありて、老僧にとふ。老僧むかしを思ひ出して語りけるは、愚僧沙彌の時、此猿をかふ。玄宗の開元年中に高力士此寺に來り、猿のさかしきを見て、絹を以て猿にかへて京に歸り、玄宗に奉る。玄宗これを上陽宮にかひなづけしむ。其後安祿山の亂に猿の行先をしらずと聞しに、今日ふたゝびその猿にあひてあやしき事を見けり。此碧玉環は猿のくびに懸置し物なりと云。孫恪いよ／＼かなしみて、船を艤してなく／＼歸りけるとなん。續世說にも此事あり。日本にもこの怪事を傳聞て、俗の口すさびにする事なり。

【俗語】披露　後漢書蔡邕傳云。披二露失得一。首楞嚴經。生滅根元從レ此披露。今いふ詞は、狀など取次て、人に見する時にいへり。ひらきあらはすとよ

めば、さも有べし。誤て、口上にて物を云つぐをも披露と云は違へり。

尾籠(びろう) 埃嚢抄に、尾籠と云詞は、應神天皇は龍神の御末にて侍りし故、龍の尾ましませしが、これをかくし給はんため、御裝束に裙といふものを作りて、これを引て、かの尾をかくし給ふ。或時出御ありしに、内侍いまだ裙の内におわりしをしらで、障子に立こめたりければ、天皇尾籠なりと宣ひしより、尾籠と云詞始れりとあり。此説、怪妄不經論ずるにたらず。誠に噴笑するに堪たり。日本紀第十に、仁德天皇の御歌に、于古と云詞あり。是は俗に、をこなもの、をこがましなどゝ、今の世まで云詞の意なり。于古を、釋日本紀に尾籠也と有。それを音にとなへて、びろうと云なり。

贔屓 文選張平子西京賦。巨靈贔屓。注、薛綜云。作レ力之貌。又向日。用レ力之貌。集韻。壯士作レ力貌。屓亦作レ贔。俗に、人をひいきすると云は、力を作して一味する意にや。俗にひきを求、又ひいきのよいなどゝ云、贔屓の字なりと

新千　源仲綱
ひき〳〵に人は高瀬ののぼりふね
　つなでこさるゝ身をいかにせん

百死一生 通鑑綱目第三十九卷に在。

一撮 漢書律曆志に出たり。注、撮二三指一撮レ之也。

卑下 漢書云。卑二下士卒一。

便宜 史記蕭何傳に出たり。

秘藏 漢書司散傳。陳二受秘藏一。圓覺經云。爲二諸菩薩一開二秘密藏一。涅槃經云。愚人不レ解二明之秘藏一。智者了達。則不レ名レ藏。

憑虛 東坡赤壁賦。憑レ虛御レ風。今俗に、實のなき事を、ひよこ〳〵と云は此字なり。

畢竟 范魯公戒二從子一奠詩。小學善行篇之註出于吳支鑑 云。勢位難二久居一畢竟何足レ恃。陳選注云。畢竟終也。今いふ、畢竟の意に同じ。

百一物 釋氏要覽曰。百一物大衆之需也。智度多論。百物各可レ畜二一也。

被官　職原抄に、附屬の官を被官と云。其人に付て官職を被るの義也。武家の相子與力の如し。八省各被官あり。

彼是　俗に、物を賴事を彼是と賴と云は、かれこれ共に賴義也。埃囊抄曰。人を賴をひしと賴と云は、靡恃の字也。千字文靡レ恃ニ己長一と云を引て證とす。されど其字義聞えず。彼をも是をも賴故に彼是と云なるべし。

一入　周禮考工記。三入爲レ纁。五入爲レ緅。七入爲レ緇。善相公意見封事云。染油一入二入之紅。

一花　俗に、始ありて終なき事を、一花と云。源氏寄木に。花心におはする宮なればとあり。今一花とひふ俗語の意なり。

非愛　俗に、危際に臨て、稍其難を逃るゝ事を非愛と云。或曰、諸天命終んとする時、五の死相を現す。是を天人の五衰と云。倶舍舉ニ小五衰大五衰之別一曰。一衣服嚴具出ニ非愛聲一と云は、小五衰の始也。此時死相あらはるゝといへども、善縁に逢は、轉ずる事を得たり。大五衰に至ては必定死する也。非愛聲は、死相の始也。善縁にあへば、轉ずる事を得、逢ざれば死す。非愛字倶舍に本づくといへり。又かなしむ時は悲哀の字也。

卑怯（ひけふ）　字書。怯畏儒也。膽病なる事を云。

白衣　或曰、佛氏俗服をすべて白衣と云。初出家する時、四句の偈を說終て、俗服をぬぎさり、香湯を以て洗浴して、白衣の氣度を除く。是より後、時も僧衣を脫で、白衣になるをば無禮とする也。僧を緇と云、俗を素と云。白衣黑衣の義也。然其先王の禮服を製する事、袞龍より以下卿大夫士に至るまで、皆五采を以て、貴賤尊卑の位を定む。白衣にして、市に入事を戒るは、禮服を着せざるを云也。日本にても、大小初位の白布を除て外は、淺縹（あさはなだ）より深紫（こきむらさき）に至るまで、色によりて尊卑の品あり。禮服を脫去（ぬぎさる）時は、僧俗皆白衣也。

貧窮　月令に出たり。皇氏曰。長無曰二貧窮一。

貧乏　月令。賜二貧窮一振二乏絶一。皇氏曰。暫無曰レ乏絶一。今いふ貧乏は、今も後も無故合て、貧乏と云なるべし。

慓悍（へうかん）　漢書高祖紀云。項羽為レ人慓悍。師古云。慓疾也。悍勇也。俗に、人の進疾（すゝどき）をひようかんと云。此字なるべし。

若而人（ひとそこばく）　左傳襄公十一年に見えたり。註。言不二敢斥一。不二敢斥一。但云二若如人一也。

璺（ひゞ）　器物の破かゝりて、未離ざるを云。玉篇云。器破而未レ離也。又璺の字も同じ。字彙云。璺器破而未レ離也。火入の事なり。

縁坐（ゑんくわい）　親戚の罪によりて、禍に罹（かゝ）るを。俗に、ひつくわいと云。通鑑などには、縁坐とかけり。

跽（ひざまづく）　説文曰。長跪也。

[illegible]　謝靈運擬二鄴中一詩。遭迨太元始。韻會に、[illegible]。既遭沙論云。[illegible]迨往轉逢若相。

第四十二　毛

諺　燃る火に薪　帝範云。悪二火之燃一添レ薪望レ止二其燄一。これ諺の意に通せり。

門にいらば笠をぬげ　神代巻云。諸神嘖二素戔嗚尊一曰。汝所行甚無頼。故不レ可レ住二於天上一。亦不レ可レ居二於葦原中國一。宜急適二於底根之國一。乃共逐降去。于レ時霖也。素戔嗚尊結二束青草一以為二笠蓑一。而乞二宿於衆神一。衆神曰。汝是躬行濁悪而見二逐謫一者。如何乞二宿於我一。遂同距レ之。是以風雨雖レ甚不レ得二留休一而辛苦降矣。自レ爾以來。世諱下著二笠蓑一以入中他人屋内上。又諱下負二束草一以入中他人家内上。有二犯レ此者一必債二解除一。此太古之遺法也。新考

門前市をなす　漢書鄭崇傳。上責レ崇曰。君門如レ市人。何以欲レ禁二切主上一。崇曰。臣門如レ市臣心如レ水。

もろこし四百餘州　使用全書第一云。光武中興。仍併省郡國十縣道。後國四百餘所。千歳[illegible]詩云。行盡支那四百州。此中偏稱道人遊。新考

紅葉の媒　太平廣記云。廣宗の時、于祐と云もの御溝（禁中の溝川也。）の下流に遊んで、一の紅葉をひろふ。詩の書付て有けるを見るに云、流水何甚急。深宮盡日閑。慇懃謝紅葉。好去到人間。于祐別に又一の紅葉に題して云、曾聞葉上題二紅怨一。葉上題レ詩寄二阿誰一。是を以て、御溝の水上に行て流す。宮女韓夫人これをひろふ。後に于祐は、韓泳と云人を頼て、其門下にをる。年を經て、帝あまたの宮女を追放たれけるに、韓夫人も其中なれば、韓泳同姓のよしみを以て、終に于祐に妻す。婚禮の時に至て、各かの紅葉を取出して示せしに、互に詠せし詩也。韓泳是を見て、于祐夫婦に謂て云、今日媒人をもてなすべし。韓夫人笑て詩作りて云、一聯佳句隨流水。十載幽思滿素懷。今日卻成鸞鳳友。方知紅葉是良媒。紅葉の媒と云事は、この故事より起れり。この事を歌に、

年中行事　女房

なかれての名にや立なんくれなゐの
一葉をうけし水ぐきのあと

もとの木阿彌（もくあみ）　筒井陽舜坊順昭（大和國郡山城主。信長と同時の人）二十八歳にて病死す。此時其子伊賀守定次（後號順慶）わづかに一歳也。順昭遺言して、三年の間は、卒去をかくし置べしとありければ、木阿彌と云盲人、其體順昭に似たる故、他國より使者來る時は、かの盲人をほのぐらき所におき、順昭は病中の體にもてなし、相見せしむ。定次三歳の時、始て喪を發す。（順昭の墓は、南都圓證寺にあり。）こゝに至て、木阿彌なりし事を諸人しれり。今俗の諺に、もとの木阿彌と云事、是よりおこれり。新考

【俗語】目論（もくろみ）　史記越世家に出たり。又文選頭陀寺碑文云。順レ非辨レ僞者比二微言目論一。註。目論即目見二毫毛一而不下自見中其睫上之論也（論をろみとよむは、燈心をとうしみと云がごとし、唇音相通す。）

門徒　後漢書鄭玄傳。孔融門徒四百餘人。

罔絕（もだえ） 法華經信解品。罔絕躄地。罔絕はもだえたゆるなり。

勿體（もつたい） 下學集云。軆体體三字皆同字。勿無也。勿体二字即無正体義也。倭俗書狀云無二勿体一。大失二正理一子細可レ思レ之。此說是に似て非也。六書正譌に、事物の物。本勿の字也。後人加レ牛以別レ之。然る時は、物勿本同字也。俗語の勿躰は、則物躰也。人物のすべよきを、物躰のあると云。君父を蔑にし、神明を侮る等は、人物の正躰にあらざる故に、これを物躰なしと云事、却て文理有に似たり。

沐浴（もくよく） 字書。沐濯レ髮也。浴洗レ身也。かみあらひゆあぶるとよめり。死者生者共に用べし。俗誤て、屍を洗ふを沐浴と云。常に湯をひくを行水と云。行水は屍を洗ふ水なるべし。大藏一覽入滅品。持妙香水灌洗既已。

物怪（もつけ） 俗に非常の凶事を物怪と云。今俗に、人の大に怒る事を、もつけうおこすと云は、物怪おこす也。

熟（もどく） 萬葉集の訓也。己が熟したる故、人の上を直下（みおろす）意にや。

萬葉

あやにくにさかしらずとて酒のまで
人をもどくは見ざるかも似る

顯　輔

よそにしてもどきし物をいつしかと
そでのしづくをとはるべきかな

勿論（もちろん） 俗に、異論なき事を勿論と云。源氏橋姫卷に、ろなう物の用にすばかりとあり。ろなうは勿レ論也。今いふ勿論の意と同じ。

目禮（もくれい） 書簡指南曰。顧二視其人一曰二以目禮一焉。

牟（もう） 牛聲。說文。牛鳴象二其聲氣从レ口出一也。韓愈詩。椎肥牛呼レ牟。

問訊（もんじん） 僧祇律云。禮拜不レ得レ如二瘂羊一當二相問訊一。僧史略云。如三比丘相見云二不審一謂二之問訊一。僧の相逢て、互に起居を問を、問訊と云。

第四十三　世

諺一　聖人に夢なし　淮南子曰。夫聖人用心杖レ性依レ神。相扶而得二終始一。是故其寐不レ夢。其覺不レ憂。諺こゝに出たるならん。莊子曰。古之眞人。其寢不レ夢。其覺無レ憂。新考

千日の勤學より一日の名匠　楊子法言曰。務レ學不レ如二務求一レ師。師者人之模範也。桓譚新論云。三歲學不レ如三三歲擇二師矣。諺、是等の說より出たるものか。

善惡は友を見よ　史記云。馮唐傳語曰。不レ知二其人一視二其友一。是善惡は友を見よと云意なり。

千里の馬はあれども一人の伯樂はなし　韓退之雜說云。世有二伯樂一然後有二千里馬一。千里馬常有而伯樂不二常有一。

前車の覆は後車の戒　史記賈誼傳。前車覆後車戒。

千石萬石も食一杯　韓詩外傳曰。北郭先生妻曰。結駟列騎所レ安不レ過レ容レ膝。食前方丈所レ甘不レ過二一肉之味一。德清老子經解曰。諺語有レ之。羅綺千箱不レ過二一暖一。食前方丈不レ過二一飽一。亘清獻公座右銘云。良田萬頃。日食二升。大廈千間。夜臥八尺是等前諺の意と同じ。

小利大損　說苑。敬愼篇云。小利大利之殘也。論語。見二小利一則大事不レ成。

［俗語］穿鑿　漢書禮樂志に出たり。東坡文集。王荊公之學穿鑿至レ此。字彙に、穿委曲入也。鑿穿レ孔也。道理其まゝ聞えたる事を、さまぐ\丁寧して、注釋のすぎたるをも、穿鑿の學と云。

刹那（せつな）　倶舍論云。時之極少。名曰二刹那一。

專一　史記、孝文本紀に出たり。

憔悴（せうすゐ）　孟子、公孫丑上篇に出たり。

成人　人の生長するを、成人と云事、漢書孔光傳にあり。

饒（ぜう）　俗に、物の多き事を、ぜうにと云は、此字なり。說文云。飽也。一云多也。或穰字をも用べし。古歌に、

大和なるうちの郡の戶たて山

せうにおりたるかぎわらびかな

切磋琢磨（せつさたくま） 詩經に出たり。骨角を治るものは、既刀鋸を以て切て復、鑢鐋を以てこれを磋く。玉石を治るものは、椎鑿を以てこれを琢て、沙石を以てこれを磨く。皆これを治る事、緒有て、益其精を致す事をいへり。

折角（せつかく） 前漢書、五鹿充宗傳に出たり。朱雲と五鹿充宗と、易を論じて、頻に五鹿を云つめたり。これを時の人、朱雲、五鹿が角を折といひしより、折角と云詞出たり。

折檻（せつかん） 漢書朱雲傳に出たり。朱雲つよく成帝を諫ければ、成帝怒て、殿上より朱雲をおひ下させられしに、朱雲御殿の檻に取付ておりず。終に檻折たり。これより人を諫る事を、折檻とは云也。又切諫の字をも用ゆ。漢書王嘉傳、明主不レ惡二切諫一。

消息（せうそく） 易經剝卦云、君子尚二消息盈虚一。天地盈虚、與レ時消息。註。消息二字、禮記月令消息註云、陽生爲レ息、陰死爲レ消。廣韻云、消息音信也。文選李善注云、消言レ往也、息言レ來也。使二者所一レ求、故曰レ息也。今書札を消息と云も、往來の意にて、又音信の義も有故なるべし。又書札のみに限らず、使者往來するも消息と云べし。

先日 史記鄒陽傳。吾先日欲レ獻二愚計一。

濟々（せい〳〵） 詩經大雅、濟々多士。注、多貌。

善根 彌陀經。不レ可下以二少善根一。

逍遥 詩經、白駒篇云、所謂伊人於レ焉逍遥。

盛衰（せいすい） 漢書韓安國傳。夫盛之有レ衰。猶二朝之必暮一也。

戰功（せんこう） 周禮地官云。戰功曰レ多。

鷹匠 後冷泉院の御宇、源頼義は鷹飼の達人なり。源頼義に從て奥州に往、雪中に鷹を放て、鳥を捕しめ、軍中の勞を慰む。此人常に鷹を袖して、何國の産なる事を知、掌中に毛をさぐりても、其出所をしれり。是故に、鷹に無二なる事を悟て、自これを禁止せしが、鳥を見ては、猶其禁を

忘れしとかや。我國鷹狩を嗜もの、其飼養の法、放摎の技、齊頼を師とせざるはなし。俗の諺に、放鷹にかぎらず、すべて一藝を極得たるものを、彼は其藝の齊頼也、此は某技の齊頼なり、といへるは、もとこの源齊頼の放鷹の妙術を得しより起れる詞也。

正截　風俗通曰。千生萬。萬生億。億生兆。兆生京。京生秭。秭生垓。垓生壤。壤生溝。溝生澗。澗生正。正生截。截地所不能截也。算法つもりて正截に至時は、地も截る事あたはず。俗に、十分至極する事を、正截と云。又成材ともかく。

世智便　下學集。世智便世俗㥧惜之義也。沙石集に、洛陽に或女房世間さかしく、世智便聴なるありし。此字、佛書に出たり。所謂偏智權智小智世智便聴なり。眞實の智は、圓鏡、平等、觀察、成作、これを佛心の四智と云。

僉議　居家必用註。謀之於衆曰議。又曰僉議謂咸共定議也。書傳云。議皆言衆人集之也。もろもろあつまりて、事をえらびはかるを、僉議と云。字彙。僉皆也。咸也。衆共言之也。議謀也。評也。定事之宜也。又詮議の字をも用べし。詮字彙評論事理也。

籍々　漢書江都王建傳に出たり。師古云。籍々諠聒之意。

無詮　志の字の部、所詮の條下にくはし。

漸々　法華經。漸々積功德。韻會。漸進也。事之端先覩之始也。增韻。事之由來也。俗に、事のやうやくすゝみ來るを、漸々と云。又冉々とも書べし。楚辭に出たり。注。漸也。

全盛　宋之問詩。寄言全盛紅顏子。須憐半死白頭翁。

先達　文選庾元規讓中書令表。位超先達。註。先進之人。今俗、山臥の長者を先達と云。

拙者　潘安仁、閑居賦序に出たり。朱子文集に自稱

して拙者といへり。今俗、自稱して拙者と云。據なきに非ず。

靜謐　嵇康琴賦に出たり。注。善曰爾雅曰。謐靜也。

世界　四方上下の界、畔あるよりいへば、世界と云。へだてわかれたる間差よりいへば、世間と云なり。

成敗　國を治る政道を、成敗と云。成は助成也。敗は覆敗也。善事をば助成、惡事をば覆敗るにより、成敗とは云也。今とがある人を殺すを、成敗と云はあやまれり。

制度　史記酷吏傳云。明立二文法一練二習制度一。

第四十四　寸

[國] 過たるは猶不レ及が如し　論語先進篇。子曰過猶レ不レ及。

水魚のおもひをなす　三國志諸葛亮傳云。先主遂詣レ亮。凡三往乃見。因屏レ人曰計レ事善レ之。於レ是情好日密。關羽張飛等不レ悅。先主曰。孤之有二孔明一。猶二魚之有一レ水也。願勿二復言一。及レ稱二尊號一以レ亮爲二丞相一。此故事により、今も人の交むつまじきを、水魚の思をなすと云。

雀の千聲鶴の一聲　漢書鄒陽傳曰。鷙鳥累レ百不レ如二一鶚一。孟康曰。鶚大鵰也。如淳曰。鷙鳥比二諸侯一。一鶚比二天子一。師古曰。鷙擊之鳥。鶚鵰之屬也。諺、此語より出たるならん。

[俗語] 產業　史記蘇秦傳に出たり。漢書高祖紀云。不レ能レ治二產業一。

吹噓　書言故事云。求二薦舉一曰。尚借二吹噓之力一。杜詩。願借二吹噓一送二上天一。俗に、推舉の字を用ゆ。

赤　漢志。赤地千里。南史。其家赤貧。字彙云。空盡無レ物曰レ赤。俗に、すきとく云詞是也。

徒跣　禮記。喪則徒跣。

數奇　史記李廣傳云。大將軍陰受二上誡一。以爲李廣老數奇。毋レ令レ當二單于一。唐高適詩。丈夫窮達未レ可レ知。看君不レ合二長數奇一。物二ありて對するを偶と云。一あるを奇と云。數は命數也。李廣が命數奇にして偶合せず。時に過ざるを云。俗に、偏愛を數奇

と云。この義をとれり。源氏物語に、いとゞかゝるすきごとゝあり。皆天性の偏癖を云也。

樞機（すうき） 易係辭云。言行君子之樞機。

縋（すがる） 說文云。以ㇾ繩有ㇾ所ㇾ懸也。或作ㇾ䋏。左傳夜縋納ㇾ師。

垂迹（すゐじやく） 肇法師。維摩經序曰。非ㇾ本無二以垂一ㇾ迹。非ㇾ迹無二以顯一ㇾ本。本迹雖ㇾ殊而不思議一也。叡山の傳敎、高野の弘法等、弘法を以て神道に合せ、胎藏金剛の兩界を陰陽に配して、神佛一體、水波の別とす。本地垂迹の僻說こゝにはじまる。肇法師所謂、本にあらされば、迹を垂事なし。迹にあらざれば、本を現す事なしと云に同じ。

匹如（するすみ） 野槌曰。白氏文集偶吟詩。眼下有ㇾ衣兼有ㇾ食。心中無ㇾ喜亦無ㇾ憂。匹如身後有二何事一。應向人間無ㇾ所ㇾ求。靜念二道經一深閉ㇾ目。閑迎二禪客一小低ㇾ頭。猶殘二少許雲泉興一。一歲龍門數度遊。沙石集第四に、此詩を載曰、匹如とは人の一物も、手にもたで行貌也。下郞はすつすみと云也。應向は、足ふみたてぬと云事也。所住なくして、杖つくほどの地も持ぬと云が如し。一物も貯へず、少地をも持ずして、すてはてぬる身は、萬の世間の事なくして、佛道修行しつべし。匹夫は匹夫の義にて、無一物の獨身なるを云とあり。今はすつすみと云をも、云轉じてすつへと云。すつへの皮ももたぬと云。世くだりぬれば、俗語もいやしくなるにや。

諺草卷之七大尾

家訓

凡人となる者は、人の道を知らずんば有べからず。人の道をしらんとならば、聖人の敎をたふとみて、其道を學ぶべし。故に孟子に、人の道あるや、食にあき、衣を暖にし、居をやすくして、敎なければ禽獸に近し、聖人是をうれふる事有て、敎ふるに人倫を以てすといへり。道を學ぶには先志を立べし。志立ざれば學成就せず。古人も志ては學の半なりといへり。故に學文はまづ志を立つるを基とす。志を立つることは勇猛にして、一度君子とならん事を思ひ、常に心に掛けて念に忘れず、心を專一にして外物に移らず、一日片時も此志怠るべからず。志の字に力有り、饑ゑて、食を求め、かわきて飲を求むるがごとくなるべし。徒に悠々たれば志立たず。其學問の法、知行の二つを題目とす。知る事明かならざれば行はれず。行ふ事厚からざれば知る事體ならず。たとへば道路を行くものゝ、目に見て足に行くが如く、二つの物をかくべからず。知の工夫は、書を讀、古を考へ、審に問ふ事を好み、愼みて好く思ひ、我身に高滿せずにへりくだり、人の敎をよく聞、人の諫を悦び用ひ、常に我をかへりみて、我不善なる事を知り、我道行る事を知て、其知を開くべし。學文は我身の惡敷事を知て改め、たらざる所を知て勤る道なれば、我身をだに愛して、我を善と思はゞ、學ぶ事を用ふべからず。人聖人にあらず、何ぞ自から是とし、自から足れりとすべけんや。況聖人すら學問を好み、自から是とし給はず、衆人はいかでか其非をしらざるべき。扨行の工夫、まづ眞實に善を好み、惡を嫌ふべし。其條目は言を忠信にし、行をあつく愼み、いかりをこらし、慾をふさぎ、善に移り、過を改むべし。其大綱は、身を修め、五倫を厚くするにあり。古語にいはく、人聖人にあらず、誰か

あやまちなからん。過て能改るは、善是より大なるはなしといへり。君子の過は日月の食の如し。あやまてば人みな是を見る。更れば人皆仰レ之。小人の過は必かざる。過を恥ておほひかくすは、小人の心なり。甚いやし。君子の心は青天白日のごとく、洒落にして蔽昧なければ、過をおほひ隱さず、ただちに我過とす。かりにも我を知有とし、善にほこる心有べからず。人をおろかにし譏るべからず。諫をふせぎ、我を是とすべからず。己が不善を捨て人の善に隨ひ、人の善をとりて我身に行ふべし。我を知ありとする者は必ず愚人なり。我を善なりとする者は必ず惡人なり。自らいましめ恥べき事なり。其愚を知るものは大愚に非ず。其過を知る者に大なる過なし。故に高滿にして己をゆるすものは必ず愚人なり。いかんとなれば、自から知るの明なく、知をひらき善に進むの基なくして、終に愚にして終る物なり。人を慢る者は必ず天のとがめ有、人の責あり。我に學問知慧藝能有とても、必ず自滿して人をあなどるべからず。古の君子は聰明睿智なれども、守レ之以レ愚、況末世の凡夫、纔なる知能才藝にほこるは甚愚なり。其善にほこれば其の善を失ひ、其能にほこれば其能を失ふ。自滿するを矜といふ。矜はほこると讀む。矜なれば其心自からみち、自先として我に過惡有る事をしらざる故に、過を改め善に移る事不能。故に惡日日に長じて善日々に滿ず。しかれば縱令聖人と同居し、朝夕敎を受るとも、其身において益なし。勤て書を誦、學問すとも、却つて邪知を益し、才能にほこりて、大なる害あり。是以矜天下の惡德のよし、古人の戒め明也。學問するもの第一是をいましむべし。文盲なる人の言葉に、學問すれば人品あしくなるといふは、世上に個樣の人有を見て其樣を守り、其上元より我學問を嫌ふ故に、妄に言ふ事なり。己が身を修めん爲眞實に道を學ばゝ、

豈益なからんや。又我身をへりくだり、人にたかぶらざるを謙といふ。謙なれば我過惡不能を知て、我身をほこらず、知を以て愚に問ひ、多を以て少きに問ひ、好で人の諫を聞て、我過を改るときは、知をひらき善に移る事極りなし。此故に古人謙を以て天下の善德とす。又我身を忘れて人をそしるべからず。專我惡を責めて人の不善を責べからず。人の善を見て、我も又此善あらん事を思ひ、人の不善を見ては、我身にも此不善有やと、自らかへりみて改むべし。口にあらはすべからず。凡學問はひとへに己が爲にして、人の爲にすべからず。己が爲にすとは、身を脩めん事をおもふなり。人の爲にすとは、人に知られん事を求むるなり。己が爲にする學問とは、たとへば飢たる人の食するは、ひとへに我飢を助けん爲にして、人のしられん事を求めざるがごとく成べし。學問は必先右に言がごとく、眞實に我身の爲にして、教を受るの基なり。心得べし。

一凡小兒をそだつるに、義方の教をなすべし。姑息の愛をなすべからず。氣隨をゆるし、私慾を長ずべからず。愛を過せば奢出來て、其子の爲大なるわざはひとなる。又美食に飽しめず、衣服にて暖め過すべからず。小兒は少飢ゑ少し冷すをよしとす。是古への養生の教なり。幼時より人をあざむき僞り、かたましき事あらば、早く戒むべし。又此方よりも幼子をあざむきて僞を教ふべからず。此方より僞れば小兒是に習ものなり。又利慾を教へしらしむべからず。萬にさかしくとも、僞て物を貪るは、小人の生れ付なれば、是を戒むべし。

一幼時の教は事繁くすべからず。事しげくして煩勞なれば、學問をうとんじ嫌ふ心出來るものなり。故に簡要を選び教ふべし。むづかしくして其氣を屈すべからず。又怠を免す事なかれ。

一士は事しげき物なれば、一藝一能に長せるのみに

ては用に立ず。次第を以て廣く學ぶべし。藝能は和禮、書法、騎射、算數、謠、劍術、鎗、拳法、鳥銃等なり。就中和禮、書法、騎射は常に用ふる事なれば尤習熟すべし。又餘力あらば和歌の道、本朝の故實、典故をも兼て學ぶべし。兵術は將と士と貴賤の位によりて、廣狹の用異なり。其位に切なる事を先づ學ぶべし。主將たる人はいふに及ばず。士卒の長となり、又士卒となる者も、軍法を知らざれば、節制に應じがたく、勿論匹夫の働をも學ぶべき事なり。亦醫藥養生の術をも學び知るべし。其身の爲に益あり。人の身をも救ふ事多し。

一六歲の正月、初數の名と方の名とを敎ふべし。和字を習はしむ。伊呂波は益なし。アイウエオの五十字を敎ふべし。和語に通ずる益あり。

一七歲、初めて孝弟忠信禮義廉恥の字義を敎ふるなり。又三綱、五常、三德、五倫、五敎、三事、四端、七情。五行、四時、五味、五色、十幹、十二枝、四書、五經等の名目を多く敎へしむべし。一時に多く敎ふべからず。少宛熟讀せしむべし。

一八歲、古人小學に入し年なり。初めて孝經、論語を讀ませ、幼者に相應の禮儀を敎へ、辭讓の法をしらしめ、不禮不遜を戒むべし。又和禮を敎へ、立居ふるまひ、物いひ、いらへ、こたへの法、給仕、拜禮等を習はしめ、物書事を習はしむべし。凡そ和字眞草共に、初學より必古の書法正しき能書の跡を手本とすべし。手本惡ければくせつきて直らず。一生手跡拙し。能書の手蹟にても、必體樣の正しからざるを學ぶべからず。又文盲なる人は、眞を早く學べば、手蹟すゝみ滯るといへり。是は書をしらざる人のいふ事なり。眞書は本なり。草は末なり。たとへば人の立がごとく、行は行くがごとく、草は走るがごとし。いまだ立ことゆかずして走る者はあらじと東坡もいへり。眞書でざれば草書も正しからず、誤多きものなり。故に中華には眞

書を習はしむ。但初學のときに細書をかけば、手すくむもの故に、眞草共に大に書しむべし。時を逐て次第に細書をも習はすべし。

一十歳、小學の書を讀ませ、略其義理の簡易にして、さとしやすく切要なる所を說聞すべし。是より後漸く文武の藝術を習はしむべし。又此頃より餘力ある時は、古歌をもよましむべし。百人一首、古今、新古今等の秀歌を先づ覺えてよし。

一十一歳、是より漸く次第に隨て、四書五經等を讀むべし。

一十五歳、古人大學に入りし年なり。是より專義理を學び、己を修め、人を治むる道を知るべし。生質遲鈍なりとも、是より二十歳の間に、小學四書等の大義に通すべし。若聰明ならば、博く學び多く知るべし。又史書は往古の跡を考へ、來今の鑑とする事なれば、經書を學ぶいとまに、倭唐の古今の記錄を見るべし。

一二十歳、古唐土には、二十にして冠を着て、成人の道是より備はりぬ。是より幼少なる時の心を捨て、成人の德に隨ひ、博く學び厚く行ふべし。其歳に應じて、德行備はらん事を思ひ愼むべし。

一學問は知惠をひらく道なれば、博く聞多く見て、我心に才智の自ら開くるを待べし。助て長じ、かしこだてをし、我才智を先立用ゆべからず。人の才智を選み取用ゆべし。弱年より老年に至るまで斯くすべし。

一幼よりして勤學には寸陰を惜むべし。悠々として時日を空しくつひやすべからず。時節は流るゝが如くなれば、年若きを賴みて時を失ふべからず。人の世に有る、萬の勤多くして、物學ぶ際は少なし。其少なき際を惜まず、怠て空しく過ぎ、或は不益の事をなして時をつひやさば、學ぶ事終に成就すべからず。今年今日二度得がたき事を思ひて、かりにも徒に時をわたるべからず。是一生の間用

心すべき事なり。夫れ人の至つて大なる寶はいとまに過ぎたるはなし。いかんとなれば、君子の學問を勤め、國家を治め、諸藝を學び、農の田を作り、商人のひさぎ、工の器物を作り、婦女の布帛を織る、皆是いとまを用てなし出す業なれば、人尤もおもんじ惜むべき事なり。隙を惜まざる人は、學ぶ事も勤る事もなくて、必ず智惠もなく徳行もなく、才智もなきものなり。しからば天地の間に人と生れたるかひなくして、無用の人と成べし。豈ふかく思ひ、是を耻恨みざらんや。且隙を惜まざれば、君子は身を修め、衆をとゝのふる事不能、農工商は其家業を失ひて、貧窮饑寒をまぬかれず。學士隙を惜まざれば、必ず粗學にして且つ無藝なり。醫師は隙を惜まざれば、必ず淺工なり。萬の工も隙を惜まざれば、必ず下手なり。是隙は人生の寶にして可惜故なり。就中年少の時は事少く隙多く、精力強く記憶つよくして、一度見聞て覺えし事は身を終るまでわすれず。此時勤學へば其功多し。中年已後萬の勤多くなりて、暇少く、精力漸くよわくなり、覺えも年に隨つて衰へぬれば、力を多く用ひて忘れやすくして功少し。年少なる人は是をよくさとりて、若き時隙を惜み、よく學文を勤むべし。誠に一生の寶と成べし。淵明が詩にも、盛年かさねて來らず。一日再び晨なりがたし。時に及で勵ますべし。歲月は人を待ず。又古語に少壯にして努力せざれば、老大にして徒に傷愁すといへり。若き時勤めずして、年老て後悔すとも益なかるべし。是を能くかへり見て後悔なきやうにすべし。

一凡そ君子の學問は、智仁勇の徳を本とし、五倫を道とすべし。智仁勇は五倫を行ふ徳なり。智仁は是を體し、勇は是を勤む。五倫は君臣、父子、夫婦兄弟、朋友なり。其道は父は子をいつくしみ、子は親に孝し、君は臣を禮し、臣は君に忠、夫は義あり、婦は順あり、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ひ、朋友

は互に眞實にして表裏なかるべし。學問の次第は大學の綱目、朱子の學規を以て法則とすべし。必ず天地人倫の道に背き、異敎に隨ふべからず。若子孫異なる敎に隨ふ者あるは、父祖の遺訓に背き、不孝の罪におち入のみならず、人倫の道を捨て、天地の內にありながら、天地の道に背きぬれば、可恐事なり。

一凡平生の心法眞實にして僞なく、仁愛有て刻薄ならず。義理をかたく守り、正直にして私曲なかるべし。此こゝろを以つて五倫の道を厚くし、就中忠孝を重んじ、君父をたふとみ、身をゆだね、力をつくし、是につかふべし。

一心は灑落にして、青天白日のごとく、明白なるべし。心の中に物をたくはへ、おほひくらますべからず。慮は深遠精密にして、輕卒淺躁なるべからず。事をなすには思案を好して、事をあやまつべからず。十分の道理を求むべし。人の我に不義不禮なるをいかり恨むべからず。我身をかへりみて不義不禮なるを自らせむべし。人の不足なるを堪忍せざれば、物に爭て世に立がたし。思案と堪忍との二字は、應レ事接レ物の心の法なり。

一凡天道の善に福ひし、惡に禍ひして、其報應ある事、影の形に應じ、ひゞきの音に應ずるが如し。此故に不仁の人は、必天の責め身に報ひ、子孫に報ふ事たがはず。可恐事甚し。夫れ人は天の子なり。天地は人の大父母なり。天の子を愛すれば天是を悅び給ひ、天の子をそこなへば天是をいかり給ふ。たとへば人の子を愛すれば、其父母是を悅び、人の子をにくめば、其父母是をいかるが如し。然れば人を博く愛すれば、天の心に叶ふ道なれば、みだりに道なくて神佛に祈り、無益の功力をなして福を求めんよりは、貧苦困窮の人を多く惠み愛するは、何より能き祈禱なるべし。凡そ人は貴き賤きも、皆天の子なる事を知り、又天下の人は皆我兄

弟の理有て、本は一體なることを知り、よく我心を以て人の心を推量り、聊か人の憂へ苦む事をなすべからず。かりにも人に妨なく、害なきやうに心を用ゆべし。人の難儀を救ひ、人の爲にはかりて忠有べし。疎略にすべからず。少にても施す力あらば、貧窮を救ひ、鰥寡孤獨を憐むべし。吝嗇成べからず。吝嗇とは人に物を施さゞる事なり。天地の人を富貴にし給ふは、其一人を厚くし給ふにはあらず。人をもよく惠ましめん爲なれば、天心にたがひて吝嗇なるべからず。吝嗇なれば仁義の道行れず。況んや天の心に背きて我財の滿を好むゆゑに。後には心身の禍となる。次に禽獸、蟲魚、草木に至るまで、廣く憐むべし。此等は天地の内にて兄弟の列にはあらざれども、同じく天地の内に生ずる物なれば、みだりにそこなふべからず。但人に妨ある物をば除くべし。物を愛するの次第は、親、兄弟、親類、家人より朋友衆民に至り、其次は禽獸を愛し、其次は草木なるべし。孔子曰、一樹を伐り一獸をころすに、其時を以てせざるは孝にあらず。されば禽獸も草木も、皆天地の生ずる物なれば、みだりに是をそこなふは、天地への不孝なりと知るべし。

一常に天道を恐れ敬ふべし。必ずおろそかにあなどるべからず。人の一生の勤は、唯天に仕へ奉る道なり。天につかふる道は能く學問して可レ知也。

一神道は清潔正直にして、易簡なる道なれば、本邦の風土に宜しき理あり。よく心得べし。神道をよく知れる人稀なり。敎へあしく學びやうあしければ、却つてまどひとなる。又直正神明恐れ敬ふべし。なれ近づくべからず。神をへつらひけがして、みだりに福を祈る事なかれ。神は非禮を受けたまはねば、道なくて福を祈るに必印なし。人義を勤めずして神に求むるは、神の御心にちがひ、利生なくして罰あり。是迷へるなり。殊に道理なき邪說

を信じ福を祈るは、迷の上の迷なり。いかんとなれば、人の吉凶、禍福は皆天の命ずる所にして、本より定まれる事也。道なくしてみだりに神佛に祈りへつらひて福を得、禍をさくべき理なし。此理をよく辨へ知り、妖妄を信ずる事なかれ。又婦人女子は愚にして、邪妄を信ずる者なれば、よく此理を常に教へさとすべし。身に行ひても妻子に行はざれば、家を正しくするにあらず。

一凡そ先祖父母に孝するの道は、奉養祭祀にかぎらず、聖學を知り、仁義の道を行、能其家業を勤め、其名を揚げ、父母先祖をあらはす。以て孝業大なる道とすべし。喪祭の禮は終を愼み、遠きをおふの道なれば、おろそかにすべからず。しかれども國法に背くべからず。先祖は子孫の根本なり。年紀隔り遠しといへども、思ひ慕ひて尊敬すべし。時節の祭祀厚くし、本に報ずるのこゝろ怠るべからず。又子孫は先祖の枝葉なり。嫡庶の分を正しくし、疎遠といふとも本族を尤も厚く親むべし。一族の内にまどしきものあらば、我力に隨ひて救ふべし。是又先祖への孝なり。本族とは三族、厚薄の次第は妻族より母族を厚くし、父族を厚くすべし。其次第輕重ある事を可知。

一我家の先祖より代々の系譜を記し傳へ、其名と一生の履歴行實を詳に僞りなく記すべし。私して名譽を過すべからず。子孫各家々にも系譜を記し置て、先祖よりの統紀を永く斷絶すべからず。

一士はさぶらいと訓ず、君に仕へて近くさぶらふ故なり。さぶらふとは、はんべるに同じ。伺候すると云なり。故に倭俗にも、侍の字をも用ゆ。されども四民の名の時は、士の字を用ゆべし。漢志には、學以居位曰士、六書精蘊には、學古入官者也とあり。されば文武の道を學んで、官位に居る者を士とす。文武の道を知らずしては、士の職分闕る故、士の名有て其實なし。士は武勇なくしては無用

の者也。其故は士は四民の上に居て四民を守り、其害をふせぐ故なり。されども文武を知らずしては、人を修むるの道なくして、其上武勇の道も正しからず。いかんとなれば、何の道をも知らざる賤しき農人奴僕にも、けなげなる者多し。夫をよき武士とはいふべからず。義理正しくして、文武の道知れる人をよき士とはいふなり。私云、勇の字たけなげと訓せり。

一忠信を主として、義理を守り、主君への仕へを二心なく勤め、父母兄弟に厚く、朋友に直實にして僞なく、人にたのもしげふかく、利につき勢にはしらず、一度約諾したる事は、後まで背かざるを良士とすべし。

一士の字从十从一、十は數の多きなり。一は一心なり。農工商は家業一筋にて事少なし。士は事多きものにて、天地の間の事、皆我職分の内の事なれば、其務むる事の多きを以て十を上にし、其多き事の理は一心を以てつとむる如く、故に一を下にせりと古書に見えたり。士の字の義理をよくかへり見て、家業を勤め身を守るべし。

一孟子曰、志士は溝壑にあるに忘れず。勇士は其かうべを失ふに忘れず。いふ意は、義理に志ある士はたとひ我身不幸にして、溝壑にふしまろび、死ぬるとも、其時までは義理を忘れず。又義理に勇む士は縦ひ人と戰て、我かうべを失ふ時に至るといへども、義理を忘れずとなり。凡そ士たるものは、必此語を常に服膺して失ふべからずと古人もいへり。生死の大なるにのぞんですら、義理を忘れざる事如斯。況んや名利、財寶、衣食等はみな外物の輕き物なれば何ぞ是に執着して道義を失はんや。夫れ人の欲は富貴を極むるに有。然れども國天下にも換がたきは命なり。命はかほど重き物なれども、義理に當ては命をも輕く捨つる事、聖賢はいふに及ばず。凡夫も能するは是人の本心なり。然れば義理程重きものはなしと知るべし。かほどに一命より

甚だ重き義理を捨て、命よりも極めて輕き財利を貪るは、本心を失へるなり。誠に愚なりといふべし。

一士は文武の家業をよく勤め、其子孫にも必ず教ふべし。人生の主要は莫レ若レ教レ子と、古き文にも見え侍る。子を教ふるに明師良朋をたつとび求め近付け、自から辛身するをわするべからず。財寶を惜むべからず。子弟を教ふるに、自から辛身せずしては、教へ行はれざるものなり。人の父兄たる者は、能く心を用ゆべし。

一凡武士となるものは、忠孝義理の志なくしては、武勇おろそかに節義闕て、奉公の道立たず。又武士の家に生れ、兵術武藝を知らず、武具を備へず、軍用に乏しくては、縱令心たけくとも武勇の勤め成るべからず。故に武士の道、内には忠孝、義理を以て本とし、外には軍法武藝を習ひ、武備乏しからざるを以て助とす。武士として忠孝義理の道を知らず、軍法武藝疎く、武備なくしては、武士の業を本末内外共に失ひ、君をあざむき忠を忘れ、君の祿をはむで、其職に怠る者なれば、可恥事なるべし。武備あらかじめ定むべし。軍法に不限、匹夫の武勇の働きをも、其位に應じて學ぶべし、平生無事の時心を用ひ、其分限に應じて、人馬、武具、馬具、金銀、米錢等まで、兼て備置き、帳に記し不足なく用意すべし。出陣の時に臨みては、兼て定めの制法に隨ひ、何の用意もなく、何時も即時に出立樣にすべし。

一言を愼むは德を養ひ、身をたもつの道なり。言多ければ口の過多し。人をそしれば我身に益なくして人に害あり。是不仁の甚だしきと謂つべし。又却つて我身の禍ひとなる。必ず戒むべし。君の事はいふに不及、凡そ我上にある人を必ず誹謗すべからず、其そしる所其實にたがはずとも、忠孝の道にあらず。況んや其そしり理に當らざるをや。古語

に、其國に居ては、其大夫をだも誹らずといへり。我身其位に居ずんば、國政の是非を評議する事なかれ。又人の善惡を好んで評議すべからず。若やむ事を得ざる事ありて、人の善惡を評論せば、其實否をよく聞定め、其善惡をよくこゝろみ知りて、毀譽すべし。若し輕々しく人の言を信じ、我耳目と喜怒にまかせて、みだりに人を誹り人を譽れば、必ず善惡をあやまつ事あり。愼むべし。人の譽誹りを聞くもまた然り。偏聽生レ姦とて、片々ばかりを聞て夫を信じ、輕く善惡を決すれば、必ず人にあざむかれ、是非を聞違へてあやまつものなり。又先入の言主となれば、是非を聞あやまるものなり。必ず夫に迷ふべからず。凡人を知る事は至りて難きことなれば、人の口と我心とにまかせて、妄りに人の善惡を決しがたし。然る故に譽もそしるも妄りにすべからず、歲月を待つべし。一時に人を譽めそしれば、必ずあやまつて後悔あり。すべて人を是非するはかろ〲しくすべからず。愼むべし。あやまつべからず。一言理に不レ當不知と成。可恥の甚しきなり。

一士として財利を貪り求め、吝嗇にして廉恥の志なく、貧窮をめぐまず、禮儀を勤めざるは、君子の賤む處なり。自らかへり見て、いたく是を戒むべし。人の吝なるは誹りて、我きたなきを忘るゝ事なかれ。返す〲吝嗇にしては、仁義禮智ともに闕るものなり。又財を多く貯へて人に施さざれば、禍ひ出來るものなり。滿れば闕る理あり。恐るべし。古人多く藏れば、厚く失ふといへり。我采地の民は我養ふべきものなれば、年凶にして饑饉に及ばゞ、力に隨つて救ふべし。一人も餓死せしむる事なかれ。

一平生財用の節なく、奢費する事多ければ財不足して、人を貪り取る心覺えずして出來、廉恥の心もおのづから薄く成て、勤むべき禮儀を失ひ、貧窮

を救ふ事ならずして不仁と成り、軍用乏しくして不忠となるものなり。常に身に俸する事儉約にして、財用を節にし、漸餘財を存して、是を用ひて困窮を救ひ、不虞に備へ、軍用を助くべし。古人は三年耕して一年の食あり。是古人財を制するの法なり。

一財用の節を制し、入る事をはかりて、出す事をすれば、財不足せず、且俸計有て變に備ふるは古の良法なり。俸祿の多少に隨つて節儉をなし、其分限の內にて不足なきやうにすべし。必ず人の財をみだりに借りて用ゆべからず。若水旱凶變にあひ、親族子弟多くして財用乏しき時、やむ事を得ずして人の財をからば、我身に俸する事を節儉にして、奢りをなす事をせず、少しにても餘財出來なば、貯へ集めて借る物を早くつぐのふべし。返さんといひし約期を背くべからず。約期を背けば信を失ひ、可恥事なり。人の財をかりて返さゞるは不義の至りなり。心に掛けて速に返すべし。少しも人に損失をなさしむる事なかれ、財用にかぎらず、すべて人の物を好みて借るべからず。若止む事を得ずして借り用ひば、そこのふべからず。用ひ終らばはやく返すべし。おろそかにすべからず。又買たる物の代りを早くつかはすべし。緩慢にして遲滯すべからず。大樣は代りの財なくば、物を買はざるがよし。凡人の財寶、器物、書籍等をかり、又物買て其代りを返さず、おろそかにして忘れ、或は怠りて返さゞる事、甚しき不義なりと思ひ、心に掛くべし。人の方より返さん事を乞を待べからず。是士君子の殊に心を用ゆべき事なり。萬にうるはしくとも、かやうの事惡ければ、むげに人に思ひ下さるゝものなり。又人と交はるに、人の貴を費さしむべからず。偏に己を利せんとすれば必ず人に害あり。

一親戚朋友奴僕に對し、交際の時、又財の遣り取り

の間、すべて我財の損せざるやうに、我理運のごとくせんとすれば、必ず人にさかひて心よからざる事出來るものなり。少しく我財を損失すれば、何事もなく我も人も互に心よし、我得分にする道理なくとも、少しの財を爭ひて、親戚、朋友、下人の心を失ふ事多し。世俗に所謂小欲大損の類なるべし。

一己貧にして、君の恩惠を貪り求むべからず。況や朋友におけるをや、賤むべき事なり。凡人の恩を受けば、心に銘じて忘るべからず。必ず報はん事をおもふべし。かりにも人の惠みをく受れば、必其つぐのひをなすべし。司馬温公も、人の恩を受けて背くに忍びざる者は、其人必ず忠孝ならんといへり。忠孝も君父の恩を不忘道なり。俗語に、恩を知らざるは木石にひとしといへり。實にさる事ぞかし。能く省察すべき事なり。

一人の富貴貧賤の大小厚薄は、皆天より命ずる處にして、其分量自然に定まれり。白樂天の詩に、青松高き事百尺、綠蕙ひきゝこと數寸にして、大塊の間に生じて長短各別あり、長きもの退くべからず。短き物進むべからず、若し此理を用ひて推さば、窮通二つながら悶なけんといへるがごとし。唯我官祿の分限の內にて心をやすむべし。官祿にあらずして、我に至つて貴く、至富なるものあり。是を求むべし。是我に有る物を求むる故に得ずといふ事なし。官祿は外にある者なれば、求めて得がたし。若し官祿を貪り求めて得る者は、其分內の福を得るなり。貪り求めたる故にあらずと知るべし。天命の元來定まる分ある事を知らざれば、分外の求めありて心閙しく、樂なくして天命をやすんぜざるは、君子とするに足らず。求めて益なき事を知らざるは愚なりといふべし。況んや不義にして求むるをや。

一四民の內士を以て長とす。故に士と生るゝは大な

る幸なり。文武の道を學び、身を立て道を行ひ、其家を起し、先祖よりの家業を謹敬み保ち守るべし。若し文武の道を捨て、義理を知らずして、利欲ふかく心賤しくば、是者は武士にして奴僕にひとしかるべし。我子孫是を戒むべし。

右の說我愚蒙の妄言にあらず。古人の意又若レ斯。我子孫たらん人、此遺訓を愼みて受用ひ、常に心に持ち守り行ふべし。違背すべからず。

各其子年十五に及ばゝ、此法を相傳すべし。若し幼少にして父を喪ふ者あらは、其兄及び一族の內の長たるもの、其孤を敎へて此法を傳へ、妄に他人に露見すべからず。各其子に傳へて、百世に至るまでながく廢すべからず。若し此法に背く者あらば大不孝成べし。子孫たらん者は、愼みおもひてゆるかせにすべからず。

貝原篤信書之

貞享四年六月十五日

家訓終

明治四十四年三月九日印刷
明治四十四年三月十五日發行

益軒會編纂

益軒全集卷之三專用

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
發行者 草村松雄

東京市京橋區弓町廿四番地
印刷者 金子久太郎

東京市京橋區弓町廿四番地
印刷所 三協印刷株式會社

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地（隆文館内）
發行所 益軒全集刊行部
振替貯金口座東京一七二〇番
電話新橋二五八六・同四三三一・四九六九